中国古典文学大系
22

大唐西域記

玄奘 著
水谷真成 訳

平凡社

監修

入矢義高

倉石武四郎

松枝茂夫

小野忍

増田渉

装幀　原弘

目次

垔醯掣呾羅国　毗羅删拏国　劫比他国

大唐西域記

玄奘訳
辯機撰
水谷真成訳

凡例

一、本文は通読に便利なように、原文にない段落を設け、番号とタイトルを付した。

一、難読漢字にはルビを付したが、その原則は以下のとおりである。

1、仏教用語は慣用に従い平がな—須弥山（しゅみせん）、伽藍（がらん）、弥勒菩薩（みろくぼさつ）

2、固有名詞のうち、慣用されているものは慣用に従い片カナ—颯秣建国（サマルカンド）、信度河（インダス）、殑伽河（ガンジス）

3、漢字で表記された原語もしくは原地音（梵語ほか）は、以下の基準により片カナでルビを付したが、あくまでも便宜的なものであるから、必ず注を参照されたい。
c = *ch*, *ḍ* = *d*, *dh*, *ḍh* = *d*（子音の前ではド）、*e* = 通例は長音、*gh* = *g*, *jh* = *j*（子音の前ではジ）、*kh* = *k*, *ḷ* = *l*, *m* = *m*, *b*, *r* の前では *n* ン、*ṃ* = *n*, *ñ* = 子音の前では *n*, 母音の前では *ny*, *ṅ*, *ṇ* = *n*, *ng* = 撥音、*o* = 通例は長音、*ṛ* = *r*（子音の前ではリ）、*ś* = *sh*（子音の前ではシ）、*ṣ* = *sh*, *ṭ* = *t*, *ṭh* = *t*.

4、漢字表記から原語を探り得ないものにはルビを付さないから、注を参照されたい。

一、注の原語略記　Skt. = サンスクリット語、Pa. = パーリ語、Pkt. = プラークリット語、Pers. = ペルシア語、Khot. = コータン語、Toch. = トカラ語、Türk. = チュルク語。

一、注の音標文字に＊を付したもののうち漢字音は上古音を、それ以外の言語においては、玄奘自身が耳にしたと推測される音を、漢字音から音標化したものであり、そういう表記が実在したことを意味するわけではない。

一、本文の注に引用した参考文献については、略記も含めて、巻末に付した「主要参考文献一覧」を参照されたい。

大唐西域記 序

思うに天地の広大なること、人類の種族の相違等については、『談天』(注一)もその極限を窮めず、『括地』(注二)もその始まりを明らかにしているとは言えません。それ故、方志の伝えていない地域、中国の政治の及んでいない方面についてのことを、どうして言い尽くすことができましょう。

考えてみますに、印度と言う国はその来歴に久しいものがあります。聖賢はその数甚だ多く、仁義は国の習俗となっていました。しかし、それは遙か古代のことであり、中国から遠く隔たった土地のことでありますから、『山海経』(注三)にも記しておらず、『王会』(注四)にも書いてありません。漢代に博望侯張騫(注五)は西域への道を開通させましたが、蜀地の経営に意を用いるだけでありましたし、武帝は昆明の土民による通行妨害のため、その平定のための訓練に力を尽くすばかりでありました(注六)。かくして、古くは釈迦誕生の祥瑞を星の運行に現わして、不思議な兆を千載の古えの周代に示したり(注七)、近くは白日の光を佩びた仏の姿を明帝の夢に現わして、神々しい仏の光を万里の遠き中国に通じさせたりしました(注八)。そこで蔡愔が西域を訪問し、摩騰を伴って洛陽に帰りましてより(注九)、始めて経典が蘭台の石室に納められましたが、竜宮の奥にあるものを尽くすわけではなく、仏像を涼台に画かれましたものの、とても霊鷲山の美を極めるものではありませんでした(注一〇)。

その後は時局多端となり、宦官が権勢に乗じて対立しあい国都を混乱に陥れ、鄧后は朝廷に不和を生じさせ国政の機能を破壊させました(注一一)ので、国家の秩序は洛陽・長安でさえ維持されず、国境では日夜外敵侵入を告げる烽火があがるようになりました。四方にはこのため砦が多く設けられて交通は困難となり、まして印度のような絶域へはなかなか行けるものではありませんでした。けれども、まま幸運に恵まれて出かけた人があり、いささか記録を残してはおりますが土地柄を正確に伝えてはおらず、ただ経典を将来しただけで真理の奥旨を究めることはありませんでした。

隋朝は天下統一の後、境域の拡大に努めはしましたが、やはり西海(注一二)を顧みては力不足を長大息し、東洛(注一三)を遙か望んでは思いを千々に乱すのみでありました。旗を玉門関の外に揚げた者は実に多数ではありますが、葱嶺の河源まで跋渉した人は記すに足るほどもありませんでした。まして雪山を目指して遠く旅立ち、竜池(注一四)を望みつつ疲れをいやす者などいようはずもありません。これも隋朝の徳が万物を覆わず、その威信が遠方へ及ばなかったが故であります。

我が大唐が天下を領有するや、天子は宇内を闢いて帝王のはかりごとを建て、障害を一掃して国家の前途を安泰にされました。その功績は天地に匹敵するほど偉大であり、その光輝は日月の光の如くに明らかであります。人々を豺狼の危険から救出して生きかえらせ、どの家をも陰険な人の魔手から解放して寿命を全うすることを得せしめました。また異民族の居住区を長安の藁街(注一五)に一括し、辺境の蛮夷の地をも支配下に収められました。かくて十洲(注一六)を庭とし、四海を池の如くになされましたが、それは五帝の功業をもなお小とし、上古の帝王の足跡をさえも見下ろすほどのものでありました。

さて、玄奘法師は、幼くして仏門に入ってより、祇園精舎の地を訪れるものがいないことを慨き、長じて後も釈迦の足跡を慕って、鹿



行脚僧の姿を偲ばせる宝勝如来像
敦煌（ペリオ将来絹本，ギメ東洋博物館蔵）

野園のかなたを仰いでは心を翹けらせていました。仏跡への旅行は、実に法師の念願でありました。折しも大唐の徳化が西へ拡がり、辺塞地方も東方へ帰服することになったので、貞観三年に錫杖を手にして出発いたしました。天子の恩徳を蒙り外国へ旅立ったので、険阻な道も平地を行くが如く、また神仏の助けを得て難路に臨んだので、敢えて危険を冒しても無事に通ることができました。途中気候がしばしば変わり転々としたあげくやっと到達いたしました。真理を探求して見難き実相を空と有との間に見、精妙な理法を考察して聞き難き正法を生と滅との間に聞くことができたので、多くの疑問を深い考究によって解決し、正しい理解によって迷いを解消する道を得たのでありました。そこで大量の経典を片言残らず吟味し、あらゆる仏跡を一物も余さず調べあげ、各地を経巡ること多年、ようやく帰途につき、十九年正月、長安に立ち戻りました。手に入れた経論は六百五十七部(注一七)、法師は詔勅を受けてこれを翻訳いたしました。

親践した国は一百一十国、伝聞した国は二十八国(注一八)で、前代の書物に見える国もあり、今代に始めて聞く国名もあります。何れの国も今や、松の実を食べ沢の水を飲む苦労(注一九)を重ね、礼を尽くして我が大唐に帰服せんとし、役人に通訳を頼み、険しい山道を越えて贈り物を奉って来ており、宮庭に列席することを栄誉として手を拍ち、正装を身につけて集まらないものはありません。

さて各国の産物風土の差異や習俗地形の相違は、遠きは書籍に照らし、近きは故老に正すこともできます。しかし法師は、遙かな諸外国の様子をそのままなお目のあたりに描くことができるのであります。それも今から記録する要はなく、すでに書物としてまとめられ、名を『大唐西域記』とし、一帙十二巻にされています。

思うにこの私の序は、ことのあらましに触れたに過ぎず、ほんの一端を記したに過ぎません。至らぬ言葉ばかり故、どうか遺漏を補っていただきたく存じます。

秘書著作佐郎の敬播(注二〇)が、この序を作りかくは申します(注二一)。

注

一　『談天』　戦国時代に斉の鄒衍が著わしたという古代天文書。

二　『括地』　禹が得たという古代地理書『括地象図』を指す。

三　『山海経』　禹王の撰とも伯益の撰ともいうが、後人の偽作。しかし、先秦の地理書であることは確実。

四　『王会』　周公が諸公を会同し、法を後世に垂れんとして作った書の名。

五　博望侯張騫は……蜀地の経営に意を用いるだけ　張騫が西域遠征をして大夏に居た時、蜀布・邛竹杖（四川省産の竹杖）を見たので来由を尋ねたところ、インド経由で渡来したものであることを知り、大夏が蜀を去ること遠からざるものと思いこみ、ただ蜀への道のみに心を用いたとの意『史記』西南夷伝。

六 武帝は……　漢の武帝がインドに通じようとしたが雲南の昆明夷に妨げられたので、これを伐つ準備のため、雲南の昆明池に象った周囲四十里の昆明池を陝西省長安県の西南に掘り、水戦の演習をした故事［『漢書』武帝紀］を指す。

七 釈迦誕生の祥瑞を……　周の昭王二十四年甲寅四月八日、宮殿震動し井泉溢れ、その夜は恒星が現われなかった。太史の蘇繇が「西方に聖人が生まれたのである」と占った。『論衡』に見ゆと［『陔余叢考』四］。このことからして、西周の時からすでに聖人釈迦のあることを知っていたとする。

八 白日の光を佩びた仏の……　『魏書』釈老志に「孝明帝、夜、金人の頂白光あり、殿庭に飛行するを夢む。乃ち群臣に問う。傅毅始めて仏を以て対う。帝、郎中蔡愔・博士弟子秦景等を遣わして天竺に使いし、浮屠の遺範を写さしむ」とある。

九 摩騰を伴って……　郎中蔡愔が明帝の命を受け大月氏に至り、迦葉摩騰・竺法蘭の両名と白馬・経典を伴い帰り、長安に白馬寺を建てた［『魏書』釈老志］という故事を指す。

一〇 経典が蘭台の石室に……仏像を涼台に……　石室・涼台は『魏書』釈老志に「愔また仏経四十二章および釈迦立像を得。明帝、画工をして仏像を図せしめ、清涼台および顕節陵上に置き、経は蘭台の石室に緘す」とあるによる。竜宮は『蓮華面経』下に「仏、阿難に言げたまわく、この閻浮提および余の十方所有の仏鉢および仏舎利は、みな婆伽羅竜王の宮中に在り、と」の文意に依ろう。

一一 宦官が権勢に乗じて……鄧后は朝廷に不和を……　『後漢書』八六に「和熹（鄧皇后）女后を以て制に臨みてより、公卿に接せず、すなわち奄人（宦官）を以て常侍となし、小黄門、命を両宮に通じ、権は人主を傾け、天下をして窮困せしむ」とある状況を指す。

一二 西海　『隋書』地理志に「西海郡は古えの伏俟城（青海省青海の西岸）に置く。即ち吐谷渾国なり」とあるを指そう。隋初の外患に、北は突厥、東は高麗、西は吐谷渾が最も甚だしかった。

一三 東洛　東洛は通常洛陽を指すが、それでは文意にそぐわない。異本には東離に作る。東離ならば漢代の西域の国名。『後漢書』西域伝に「天竺の東南三千余里に在り。大国なり」とある（ただし、この『後漢書』の東離国も実は車離 Cola 国の誤りであろう）。ここは或いは遠方という意からこの『後漢書』の「東離」を意識したものかも知れない。

一四 雪山・竜池　雪山とは時によりヒマラヤ、ヒンドゥークシュ、葱嶺等を指すが、ここは大雪山即ちヒマラヤを意味しよう。竜池は雪山の北にある阿那婆答多池（無熱悩池）のこと。共に第一巻の序参照。

一五 長安の藁街　漢代、長安城南門内においた諸夷の住する邸宅街名。

一六 十洲　仙人の住むという島々［『海内十洲記』］。

一七 経論は六百五十七部　この内訳は、本書の巻十二の讃中および『慈恩伝』六に詳しい。

一八 親践した国……伝聞した国　このそれぞれの国名は、本書の巻十二讃にも言う「行と書けるは親践なり、至と挙ぐるは伝聞の記なり」をたよりに、『慈恩伝』を併せ用いることによりほぼ明らかにすることができる。

一九 松の実を食べ……水を飲む苦労　沈約「善館碑」に「達人独往の事は志して易く立つるものに非ず、餐松 飲澗の情は理として軽がるしく樹て難し」とある文に依ろう。京大本に「餐和飲沢」とあるのは勿論松の誤り。

二〇 秘書著作佐郎の敬播　秘書著作佐郎は文書を掌る秘書省著作郎の属官。敬播は貞観の進士。『隋書』『晋書』の編纂に預かり、また、顔師古の『漢書注』を削繁して四十篇にした。後に事に坐して左遷、安州刺史を以て卒した。『唐書』一九八、『旧唐書』一八九を参照。

二一 この敬播の序は板本中、高麗蔵本以外には見えず、宋蔵本その他には燕国公張説の序を付している。今は高麗蔵本に従ったためと、一つには敬播の序に未だ訳注作業の前例がないために、ことさらに張説序を採らずに敬播序についた。張説序はその正誤当否を問わなければ、従来の版本や読み下し文で容易に見ることができる。



大唐三蔵玄奘法師取経路綫図
中華民国三十三年法師示寂一千二百八十一年紀念碑

大唐西域記　巻第一　三十四国

三蔵法師玄奘奉　詔訳
大捴持寺沙門辯機撰

阿耆尼国　屈支国　跋禄迦国　笯（奴故反）赤建国
赭時国　怖（敷發反）捍国　窣（蘇没反）堵利瑟那国
颯秣建国　弭秣賀国　劫布呾那国　屈霜（去声）你伽国
喝捍国　捕喝国　伐地国　貨利習弥伽国
羯霜（去声）那国　呾密国　赤鄂衍那国　忽露摩国
愉（色倶反）漫国　鞠和衍那国　鑁沙国　珂咄羅国
拘謎（莫閉反）陁国　縛伽浪国　紇露悉泯健国　忽懔国
縛喝国　鋭秣陁国　胡寔健国　呾刺健国
掲職国　梵衍那国　迦畢試国

序

あまねく帝王の道を数え調べ、上古の天子の記録を紐いてみますと、はじめ太昊伏羲氏(注一)が東方に即位され、黄帝軒轅氏(注二)が天下に君臨されたのは、百姓を撫育せんがためであり、また天下を区分せんがためであります。そのご帝堯が天命を受けて即位されますと威光は四方におよび、帝舜が益地の図を受納して(注三)からは徳化は九州に広められました。しかしこれより後は、人々は聖人君子の記録を空しく伝承し、或いは前賢の言葉も単に過去の事実として耳にするばかりで、かつての有道の時代、無為泰平の気運には比較しようもなくなりました。

さて我が大唐の御代、天子は天を手本として皇位に即き、時運に乗じて政治の中枢を握り、天の下を一にして四方を徳化し、上古の三皇に肩を並べるほどりっぱに天下を治めておられます。威大な感化は四方におよび瑞風は遠方へそよいで、天地が万物を覆うのと同じく、また風雨が自然の恩恵を与えるのと同じであります。かの東夷が入貢し、西戎が秩序に服し、かく国の基礎を定めて子孫に伝え、乱世を治め正しき世に反した業績は、言うまでもなく前代の帝王を遙かに越え、前世の事績をすべて包含するほどのものであります。天下の統一を成就された神業の如きこの功績については、書を著わさなければその大きな猷を讃美できませんし、一いち明言する以外にはその大事業を称揚することはできないでしょう。

玄奘はひたすら西域諸国遊歴のままに、それぞれの風土について書きとめました。まだ諸国の風俗を十分に弁別してはおりませんが、それらの地へは三皇五帝の時以上に天子の恩恵がおよんでおり、生きとし生けるもの悉く恩沢を被り、何れの民族も天子の功績を称讃しております。中国から遙か天竺に至るまで、辺境の異民族、絶域の国々でさえ、すべて大唐の暦を戴きみな徳化に潤って、唐朝の武功の数々を語り草とし、文徳の盛大を讃美し第一の話題としています。このことは、書物を仔細に調べましても前代未聞のことであり、上古の地理歴史に照らしてみても何一つ類するものがありません。今ここに叙述しておかなければ、唐朝の教化の盛大さを伝えることはできないでしょう。そこで見聞の事実によって、ここに一部始終を記述する次第であります。

注

一　太昊伏羲氏　上古の帝王の名。民に佃漁牧畜を教え、犠牲を養い庖厨の用に充て、始めて八卦を画し書契を造ったといい、その聖徳を日月の明に象り太昊と称す。陳に都して在位一百五十年であったという。

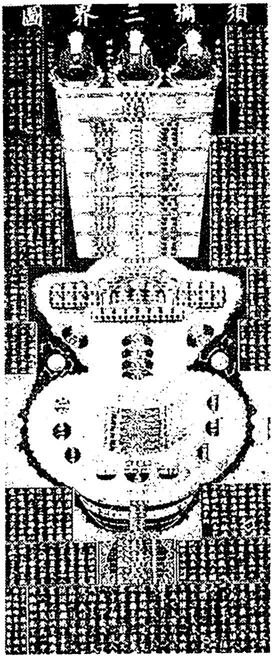
二　黄帝軒轅氏　上古の帝王の黄帝は、河南省新鄭県の軒轅の丘に居た故、軒轅氏という。一説に車の軒・轅を整え、衣冠を制したから、軒轅氏というと。

三　帝舜が益地の図を受納し　『帝王世紀』［『開元占経』一一三に見ゆ」に「舜の時……崑崙の北に玉山の神あり…… 名づけて西王母と曰う。舜の徳を慕い、来たりて白環を献じ及び益地の図を貢ず」とある。

一　古代印度の世界像（須弥山説）

さて、索訶世界（原注　旧に娑婆世界という。また娑訶世界ともいう。みな訛なり(注一)）の三千大千国土(注二)は一仏が教化摂受せられているのである。いま、一日月が照臨している四天下(注三)は三千大千世界の中に位しており、諸仏世尊はみなこの世界に教化を垂れ、生を現わし滅を現わし、聖を導き凡を導いておられる。［この世界の中央に立つ］蘇迷盧山（原注　唐に妙高山という。旧に須弥といい、また須弥婁ともいう。みな訛略なり(注四)）は四宝(注五)から作られており、大海の中にあって、金輪(注六)の上に位置している。日月が照らしめぐり、諸天人が遊び舎まるところである。［その周囲を］七つの山と七つの海とが環のように峙ち環のように列なり、山［と山］の間の海水は八功徳(注七)を具え、七つの金山の外側は鹹海である。［鹹］海中の人が住まうことができるところはおよそ四洲ある。東は毘提訶洲（原注　旧に弗婆提という。また弗于逮ともいう。訛なり(注八)）、南は贍部洲（原注　旧に閻浮提洲という。また剡浮洲ともいう。訛なり）、西は瞿陁尼洲（原注　旧に瞿耶尼という。また劬伽尼ともいう。訛なり(注一〇)）、北は拘盧洲（原注　旧に欝単越という。また鳩楼ともいう。訛なり(注一一)）である。金輪王はその教化四天下を被い、銀輪王はその政治北拘盧をのぞき、銅輪王は北拘盧および西瞿陁尼をのぞき、鉄輪王は唯贍部洲だけを治める。いったい、輪王(注一二)というものは、その大位に即こうとするや、その福徳の感ずるところに随って大きな輪宝が空に浮かび相応ずるものであって、その感得する輪宝に金・銀・銅・鉄の差異があり、それにつれその統治する境域にも四・三・二・一の差異がでる。即位に当たっての瑞祥によりその称号とするのである。

さて、贍部洲の中央は阿那婆答多池（原注　唐に無熱悩という。旧に阿耨達池という。訛なり(注一三)）である。香山の南、大雪山の北(注一四)にあって周囲が八百里ある。金・銀・琉璃(注一五)・頗胝(注一六)でその岸を飾っている。金の沙は一面にひろがり、清らかな波は明らかなること鏡のごとくである。八地の菩薩(注一七)がその願行の力の故に竜王と化してこの池中に潜み住み、清冷な水を流出して贍部洲に供給している。そこで池の東面の銀牛の口からは殑伽河（原注　巨勝反 °g'iwo + śiəng°→ g'iəng°）旧に恒河といい、また恒伽ともいう。訛なり(注一八)）が流れ出て、池を繞ること一匝の後、東南の海に入る。池の南面の金象の口からは信度河（原注　旧に辛頭河という。訛なり(注一九)）が流れ出て、池を繞ること一匝の後、西南の海に入る。池の西面の琉璃馬の口からは縛芻河（原注　旧に博叉河という。訛なり(注二〇)）が流れ出て、池を繞ること一匝の後、西北の海に入る。池の北面の頗胝師子の口からは徙多河（原注　旧に私陁河という。訛なり(注二一)）が流れ出て、池を繞ること一匝の後、東北の海に入る。或いは地下に潜流して積石山(注二二)に出るのが徙多河であり、中国の黄河の源であるともいう。





須弥山図
下　東大寺大仏の蓮弁に毛彫されたもので，古く原始的なかたち
左　近江泉福寺蔵，崇禎4年刻石で，新しく整ったかたち

注

一 索訶世界（原注 ……）「索訶世界」と旧訳の「娑訶世界」はともに Skt. *sahā-lokadhātu* [*Mvy.* 3066] に対応する語で「忍土」と訳す。現世界の意で、三千大千世界の総名である。旧訳の「娑婆」は Skt. *sabhā* [*Mvy.* 7613]「雑会、集会」に対応する語である。もともとは同源の語で *sabhā*>*sahā* の変化をしたものの如くである [Turner: *C.D.*, 13167] が、仏教学者の中では別語として扱うもの、同語として扱うもの定まらない。『玄応音義』巻三に「沙訶　また娑訶楼陀ともいい、或いは娑婆ともいう。みな訛なり。正しくは索訶という。これに能忍といい、或いは堪忍といい、一に雑会世界ともいう」とある。「索訶」*sâk*。-。*hâ* を正とし「娑訶」。*sâ*-。*hâ* を訛とする所以は、両表記の漢字の母音に異がない点よりみて、Skt. *hā* の子音は [-h-] よりもむしろ [-kh-] にちかい調音をするものであったが故であると解されよう。

二 三千大千国土　三千大千世界とも三千世界ともいい、一仏が衆生を摂受化益する境域である。一世界が千個で小千世界とし、小千世界が千個で中千世界とし、中千世界が千個で大千世界とし、これを総称した宇宙の呼び方である。

三 四天下　次下にあげてある須弥山の四方にある四大洲をいう。

四 蘇迷盧山（……） Skt. *sumeru* [*Mvy.* 4159]。旧訳の須弥（＊*si̯ug-mi̯er*→。*si̯u*-。*mjiẹ*）婁（＊*lu̯g*→。*lə̯u*）を訛とするのは、上古音より変化の過程にある六朝音によった旧訳の用字が、唐初にはすでに変化して原語の音声に対応しなくなったためである。ここでは主母音の変化が最も大きな差である。なお、インド的世界観たる「須弥山説」については、簡単には、岩波写真文庫四二『仏像――イコノグラフィー』四〇ページ参照。

五 四宝　黄金・白銀・琉璃・頗瓈をいう。

六 金輪　また金剛輪とも、鉄囲ともいい、Skt. *cakravāḍa* 斫迦娑羅の訳。

七 八功徳を具えた海水　甘・冷・輭・軽・清浄・不臭・飲時不損喉・飲已不傷腹の八種の功徳を具えた水をいう。

八 東は毘提訶洲（……） 漢訳は東勝身洲。毘提訶 。*b'ji*-。*d'iei*-。*χâ*, Skt. *pūrvavideha* [*Mvy.* 3047], Pa. *pubbavideha*, Pkt. *puvvavideha* [R. Pischel: *Pkt. Gr.*, § 156], *pūrva* は「東」の意。同音異化現象として *puvva(vi)de(ha)* の形も考えられる [cf. M.A. Mehendale: *Hist. Gr. of Insc. Pkt.*, § 399, 401]。旧訳の弗婆提、弗于逮の六朝音はこの Pkt. 語形に近いものに対応しよう。

九 南は贍部洲（……） 漢訳は勝金洲・好金土洲。贍部 *źi̯äm*°-°*b'uo*, Skt.

jambudvīpa [*Mvy.* 3050], Pa. *jambudīpa*, Pkt. *jaṁbudīpa* [Turner: *C.D.*, 5131, 6691], *dvīpa* は「島洲」の意。この Skt. の語頭の *ja-* は方言においては摩擦性を弱めて *ya-* となるものもある [Pischel: *Pkt. Gr.*, § 236]。旧訳の閻浮提、剡浮の六朝音（閻・剡 *dįäm→įäm*）はこのインド原音における変化に並行した推移を示しているといえよう。

一〇 西は瞿陁尼洲（……） 漢訳は牛貨洲。瞿陁尼 ₒ*g'įu-*ₒ*d'â-*ₒ*ṇi*, Skt. *godāniya* [荻原：『梵和』437a], Pa. *goyāniya*, *goyāna* [水野：『南伝索引』]。旧訳の瞿耶尼については対応語・出典共に未検出。『慧琳音義』巻一には瞿嚩抳という正音表記もみえる。

一一 北は拘盧洲（……）『玄応音義』一二に「正しくは欝怛羅究瑠という」とある。漢訳は高上・勝処・高勝。拘盧 ₒ*kįu-*ₒ*luo*, Skt. *kuru* [*Mvy.* 3057], Pa. *kuru*, 旧訳の鳩楼 **kįŏg-lŭg*→ₒ*kįəu-*ₒ*ləu* はすでに主母音に変化をみせているため「訛」としたものであろう。欝単越は Skt. *uttara-vastu*, Pa. Pkt. *uttara-vatthu* ?, *uttara-vat* ? [cf. Turner: *C.D.*, 11449;『大正蔵経索引』二本縁部] のような語形に対応するものであろう。

一二 輪王 また転輪王 Skt. *cakravarti-rāja* ともいい、身には三十二相を具し、その輪宝を転じて四方を降伏するがために名がでた。金・銀・銅・鉄の称号の相違は即位にあたっておこった瑞祥によるとされる。

一三 阿那婆答多池（……） 阿那婆答多 ₒ*'â-*ₒ*nâ-*ₒ*b'uâ-tập*ₒ*-*ₒ*tâ*, Skt. *anavatapta*, Pa. *anotatta* [Edgerton: *BHSD*, 216]。旧訳の阿耨達は Pa. 語形のようなものに対応するものである。

一四 香山・大雪山 香山はまた香酔山・香積山とも訳す。Skt. *gandha-mādana-giri*, 今のヒマラヤ山中 Mānasa 湖の北岸に聳えるカイラーサ山を指すもののようである。大雪山はここではヒマラヤ山のこと。

一五 琉璃 また毗琉瑠ともいう。Skt. *vāiḍūrya* [*Mvy.* 5943], Pkt. *vēruliа*, *vēluria*, *vēlulia* [Turner: *C.D.*, 12138], Soghd. *virūlya* [Pelliot: *Un fragment du Suvarṇaprabhāsasūtra*, 1913, p. 26].

一六 頗胝 玉、水晶と訳す。Skt. *sphaṭika* [*Mvy.* 5973], Pa. *phalika*, Pkt. *phaḍi(g)a* [Turner: *C.D.*, 13818].

一七 八地の菩薩 菩薩修行の位次を五十二に分け、その第四十一位から五十位までを十地といい、八地はその八番目の高い位次である。

一八 殑伽河（……） 今のガンジス河のこと。Skt. *gaṅgā* [*Mvy.* 3304], Pa. *gaṅgā*, Pkt. *gaṁgā* [Turner: *C.D.*, 3952]、旧訳の恒河、恒伽の「恒」は摩擦音 **γəng*→ₒ*γəng* であり梵語に対応しないが、コータン語では摩擦音表記 Khot. *ggaṁgā* [Konow: *PSK*, p. 101, (Khot. *gg*=*γ*)] とする。

一九 信度河（……） インダス河のこと。信度 *sįĕn*°-*d'uo*°, Skt. *sindhu*, Pa. *sindhu*, Pkt. *siṁdhu* [Turner: *C.D.*, 13415]、旧訳の辛頭 **sįĕn-d'ug*→ₒ*sįĕn-*ₒ*dəu* を訛とするのは主として第二音節の韻母の変化によろう。

二〇 縛芻河（……） 今のアム・ダリヤのこと。縛芻 *b'įwak*ₒ*-*ₒ*tș'įu*, Altiran. *waxšu*, Ind. *čakṣu* (in *Purāṇa*), *sučakṣu* (in *Rāmāyana*), *waṅkṣu* (in *Mahābhārata*) [Markwart: *Wehrot*, § 24], 旧訳の博叉 **pwâk-ts'a*→*pwâk*ₒ*-*ₒ*tș'a* は *wakhsh-āb* を表記したものであろうか?

二一 徙多河（……） 今のヤルカンド河のこと。巻十二烏鎩国の条に、その都城は南は徙多河に臨むとあり、同商弥国の条に、波謎羅川中の大竜池より出づる東流の一大河は、佉沙国の西界に至りて徙多河に合して東流すとあり、同斫句迦国の条に、佉沙国より東南五百余里を行き、徙多河を済り、大沙嶺を越えて斫句迦国に至るというによる。『玄応音義』二四に「徙多河 これに冷河という」とあるから、徙多 °*șįę-*ₒ*tâ*, Skt. *śīta*, Pa. *sīta*, Pkt. *sīa* [Turner: *C.D.*, 12485, 'cold'] とあるをみれば、徙多と梵語と、旧訳の私陁と俗語形との対応が考えられる。

二二 積石山 青海省のアムネ・マチン山脈であるといわれる [周振鶴：『青海』二二ページ]。黄河の河源は『山海経』等では崑崙とし、張騫は于闐河であると考えたようであり、唐代では『玄応音義』二四、『慧琳音義』三九等には徙多河を河源とする説を採っている。

二 贍部洲の四主

時によって転輪王の時運に応ることなく、世に出てこない場合は、贍部洲の地には四人の君主がでる。南は象主で、暑熱の地は象に都合

よく、西は宝主で、海に臨み宝に盈ちている。北は馬主で、寒さ勁しく馬に都合よく、東は人主で、温和で人が多い。それで象主の国は烈しい気性で学問に熱心であり、特に異術を閑する。服装は巾を横ざまに巻きつけ右肩ぬぎをし、頭髪は髻を頭の上にむすび余は四方に垂れている。同一の種族は部落をつくって集まり、家やかたは数階の閣をなしている。宝主の郷は礼儀なく財貨を重んじる。服は短く左襟前にし、髪をきり髭をのばしている。城郭をそなえた居所をつくり、殖貨の利につとめる。馬主の習俗は天性あらあらしく人情は殺戮を意に介しない。毛織の張に穹廬住まいで、鳥のごとく此所かしこと居を移し、草をおい牧畜をしている。人主の地は機敏で仁義は世に明らかである。服装は冠をかぶり紳帯をつけ右襟前で、車や服の制には序列がある。故郷に安んじ離れるのをいやがり、仕事にはそれぞれ区分がある。［南・西・北］三主の国のならいとして東方を最上とし、その居室は東の方に戸を開き、日の出には東方に向かって礼拝をする。［東方］人主の地では南面を最尊とする。土地によるならい異なった風習については、これがその概略である。君臣上下の礼、法度典章・文字車軌のとりきめに至っては、人主の地はもはや加うるものがないほどである。心を清くし欲を去る訓し、生死の悩みをはなれ悟りを得る教えは、象主の国がその道理にもっとも優れている。このようなことはみなこれを典籍について明らかにし、これを土地の言い伝えについて問いただし、博く今古にたずね、詳しく見聞について考えてみた。ところで仏陀は西方に興り、仏法は東国に伝わったが、通訳の音を訛り、方言の語を謬ることもあった。音が訛れば義を失い、語が謬れば理に乖くこととなる。故に「必ずや名を正さんか」（『論語』子路篇の語）というのは誤謬のないことを貴ぶからである。

三　諸国の異俗

一体、人には剛柔性を異にし、言語音声を同じくしない点がある。これは風土のおもむきによるものであるが、また習俗の致すところでもある。山川物産の異なりや風俗性質の差とあれば、人主の地は国史に詳しく記されている。馬主の［国の］ならわし、宝主の郷のおくにぶりは、歴史につぶさに記載されていていてほぼ言うことができる。象主の国に至っては従来不明瞭であり、或いはその土地は甚だ暑く湿気多しと書いてあったり、或いはその俗は仁慈を好むと記してあったり、よく地方志に載せてはあるものの、詳細に述べることはできない。道につかわれたりつかわれなかったりする道理があろうか。これはもとより世に推移の命運がある故である。そこで、規則を望みみて帰化したり、沢に水を飲みにやってくる人たち、重険を越えて玉門関に欵を通じたり、諸方の珍奇な産物を貢げて王宮の朱門に跪拝する者たちは、おもうにしかとは数えにくいことが分かる。こういうわけで道を訪いたずね遠く旅をし、教えを請うひまひまに諸方の風土を書きとめ記した次第である。

四　胡人の習俗

黒嶺（注一）よりこのかたは胡風の習俗でないものはなく、未開人であると

いう点は一体であるけれども、その族類ごとに群れをなして分かれ、領土の境界を画しておおむね土地に居ついている。その性質は財貨を重んじ、その習俗は仁義を軽んじ、結婚に定まった礼もなく、尊卑の秩序もない。婦人の言葉が力をもち、男の地位は下におる。死ねばその遺骸を焚き、服喪の期日とて定まったものはない。顔面を傷つけ耳を截り、髪を断ち裳を裂き、多くの家畜を屠殺して死者の魂をまつる。吉事には素い服をつけ、凶事には皂い衣をつける。以上は風俗を同似にする点をほぼ筋道をつけて挙げたものである。政治を異にし制度を殊にする点は、その土地土地に随って別に述べよう。印度の風俗については、その話は後述の如くである。高昌[注二]の故地を出て近いものから始めれば、まず阿耆尼国（原注　旧に焉耆という）である。

注

一　黒嶺　巻一の梵衍那より迦畢試に至る際に越える山、即ちアフガニスタンの中央部を東西に走る山脈で、東北東でヒンドゥークシュに連なる。古代ギリシア文献の Paropamisos であろう。これより以北は胡族であり、これより以南はインドに入る、その境界となっている。黒嶺とは夏季雪を戴かざる訓であると［高田：『国訳伝』四四ページ、注一〇五］。

二　高昌　今の新疆省吐魯番 Turfan 東南東の喀喇和卓 Kara-khoja である。「高昌」の名称は後漢時代より見える。高昌 *kɔ̂g-t'i̯ang→◦kâu-◦t'i̯ang, 玄奘当時の呼び名は新疆出土のトルコ文書中に見える語形 *Qočo*, *Khočo* に近いものであったろう。「昌」の語末鼻音がこの地方の当時の文献で多く消えていることについては、［羅常培：『唐五代西北方音』］参見。高昌国王麴氏は玄奘の往路に訪問せしあと、貞観十四年（六四〇）太宗に滅ぼされた。ここに「故地」という所以である。なお、高昌は古来漢人・漢文化の勢力圏であったから、玄奘は『大唐西域記』の記述をまず当地に最も近い所から始めたわけである。長安より高昌に至る間の道中記録は『慈恩伝』に詳しい。

五　阿耆尼国

阿耆尼国[注一]は東西六百余里、南北四百余里ある。国の大都城[注二]は周囲六、七里あり、四方は山に囲まれ、道は険しく守り易い所である。泉の流れが互いにまじわり、水を引いて田としている。土地は穈黍・宿麦・香棗・蒲萄・梨・柰などのなりものに適している。気候は温和、風俗は質実である。文字は手本を印度にとり、少しく増減している。衣服は木綿[注三]・毛織物を身につけ、髪は短くして頭巾は用いない。貨幣は金銭・銀銭・小銅銭を使用している。王[注四]はこの国の人である。勇敢ではあるが兵略にうとく、自ら兵を挙げることを好んでいる。国に規律なく、法も整備されていない。伽藍は十余ヵ所、僧徒は三千余人で、小乗教の説一切有部[注五]を学習している。教義の規準は印度にしたがっているのであるから、学習するものたちは印度の原文について玩味[注六]している。戒行の規準は清潔に勤勉であるが、食事は三種の浄肉を口にすることを許し漸教[注七]にとどまっている。これより西南へ行くこと二百余里で一小山を踰え、二大河を越えると、西は平坦な地となり、行くこと七百余里で屈（原注　居勿反 ◦*ki̯wo*+*mi̯uat*◦→*ki̯uat*◦）支国（原注　旧に亀茲という）に至る。

注

一　阿耆尼国　今のカラシャール地方、天山より流れる海都河 Yulduz-gol が Bagrash-kul に入る地帯をしめる。阿耆尼 ◦*ʔâ*-◦*g'ji*-◦*ńji*, Saka Khot. *Argiña*, Maralbaši Saka *Agńe*, Niya Doc. *Argiya*; Toch. **Arkeñe*, *ārśi* [W.B. Henning: *Argi and the "Tokharians"*, BSOS, IX (1938).

545-72]、「旧言」焉耆 *ˑian-g'ied→ˑjän-g'ji は Argi, Ārgi に対応するものであろう (cf. 安息 *ˑân-sjək=Aršak)。「阿耆尼」の意味は Toch. *akeñc ypoy*「地の果ての国、境の国」とする説と Skt. *agni*「火」よりくるとする説とがある。

二　大都城　阿耆尼国の首都はA・スタインによりカラシャール南方の Bag-dād-shahr に比定されている。

三　木綿　原文は麗本「氈」、他本「氎」とする。「氎」は「けおりもの」であるが、「氎」は「もめん」である。『南史』高昌伝「高昌国に草実の繭の如きものあり、繭中の糸は細纑の如し。名づけて白氎子という。国人取りて織り以て布をつくる、甚だ軟白なり」とあり、現にカラシャールより発掘した木乃伊の顔面には木綿が使用してあったことからも、ここは「氎」の可能性は十分ある。

四　王　阿耆尼国王の姓氏は「竜」という。

五　説一切有部　Sarvāstivādin, 小乗二十部の一で、また薩婆多部・説因部・有部ともいう。根本上座部より分派した。根本上座部が経・律を主とするに対し、これは論を主とし、大毘婆沙・六足・発智・倶舎の諸論による教義をとる。

六　三種の浄肉　小乗の戒律で比丘が食するを許す肉で、その一は自分のために殺すのを見ないもの、二は自分のために殺すと聞かないもの、三は自分のために殺したのではないかという疑いのないもの、この三種である。

七　漸教　大乗頓教（華厳教等の教え）に対して、次第に段階を経て悟りに至る小乗教の教えをいう。

六　屈支国

屈支国(注一)は東西千余里、南北六百余里ある。国の大都城(注二)は周囲十七、八里ある。穈・麦に適し、粳稲を産し葡萄・石榴を出し、梨・柰・桃・杏が多い。土地は金・銅・鉄・鉛・錫を産する。(注三)気候はおだやかで風俗はすなおである。文字は則を印度にとり、少しく改変している。管弦伎楽(注四)は特に諸国に名高い。衣服は錦(注五)や毛織物を用い、髪は短くし頭巾をかぶる。貨幣には金銭・銀銭・小銅銭を使用している。国王(注六)は屈支種族である。智略とぼしく強力な家臣におさえられている。その習慣として子供を生むと、木で頭をおさえ匾平しようとする。(注七)伽藍は百余ヵ所(注八)、僧徒は五千余人で、小乗教の説一切有部を学習している。教義の基準は則を印度にとり、その読みならうものは印度文である。きようかいまだに漸教にとどまり、食は三種の浄肉をまじえている。きよらかにたのしみつとめ、人々は功徳を積むことを競っている。

注

一　屈支国　今の庫車 Kuchā 地方。また亀茲・丘茲・屈茲・屈茨・邱茲・苦叉・苦先・曲先・倶支嚢などと書かれる。屈支 *kʻi̯uət-tsiĕ*, 漢・唐間は kūči と呼ばれたようであり [P. Pelliot: *À propos des Comans*, J. A., 1920, p. 181]、唐代の梵語では Kuci と記されている [F. Lüders: *Zur Geschichte und Geographie Ostturkestans*, Sitz. Berich. Preuß. Akad. Wiss., 1922, s. 246]。

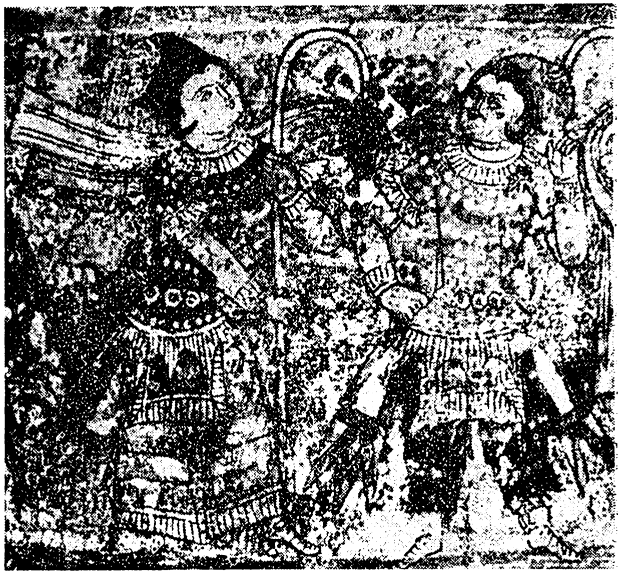
二　国の大都城　王城は漢代より南北朝にかけて「延城」と称し、唐代には「伊邏盧城」といった。

三　土地は……　当地の豊富な農・鉱産物については、『魏書』亀茲伝に駝鳥・孔雀に至るまでの畜産の詳細な記事があり、また『水経注』には石炭まで産出することを記している。

四　管弦伎楽　亀茲の楽舞は「亀茲楽」といい、唐代礼楽の一に数えられる名高いものであり、庫車近辺より出土する絵画や伎楽面によってもその一斑が推測され得る。

五　錦　当地の錦の詳細については、竜村謙「大谷探険隊将来の古代錦綾類」(『西域文化研究』六所収)、および竜村平蔵『錦とボロの話』参照。

六　国王　亀茲王は漢代以来、唐の貞観二十一年（六四七）に唐に滅ぼされるま



スバシ出土の舎利器に描かれた舞楽図

で、「白」姓をもって呼ばれた。

七 木で頭をおさえ…… 今日庫車付近から発掘された壁画・塑像等からはこのような奇風のあとは見出だせない。これに類するものに、古く中央アジアに起源し紀元前よりカスピ海北方に遊牧生活を送った Sarmatae の一族 Alān 人（『史記』『後漢書』に見える「阿蘭」といわれる）の今日発掘されている墳墓から出土する頭蓋骨は、この屈支国の条にあげられる奇風のような変形を加えられているものが約八割もあるとのことである［『世界考古学大系』九、一一三ページ］。しかし、この屈支と Alān 両者の間の関係は今のところ考えられない。巻十二の二〇参照。

八 伽藍は百余ヵ所 庫車周辺の石窟寺群は多数ある。その主たるものだけを見ても、庫車西南二十五キロのクムトゥラ Kumtura 千仏洞、その西方約三十六キロの Muzart 河畔のキジル Qyzil 千仏洞、庫車の北方約二十キロのスバシ Subashi 寺院址、庫車の東北約二十キロの Kiriš 寺院址、その南の Ačïr-Ilak 千仏洞、Kiriš の北方五キロ余の Simsim 千仏洞などで、そのうち最も大規模で代表的なものがキジルである。

六・一 竜池 国の東辺にある城(注一)の北の天祠(注二)の前に、大きな竜池がある。諸竜が形を変えて牝馬にまじわり、竜駒を生ませた。多悪で馭しにくく、竜駒の子になってやっと馴らして乗ることができた。それでこの国には善馬を多く産出するのである。これを先達の話にきけば(注三)、「近いころ金花と号する王(注四)があり、政教に明敏な人であった。竜を感服させて乗り物にしていた。王がまさに死なんとするとき、鞭が竜の耳に触れるや、竜はたちどころにもぐりかくれてしまい、今に至っている」

とのことであった。城中には井戸がなくその池の水をとっている。そこで竜は人に姿を変え婦人達と会した。婦人達の生んだ子供は勇敢で、脚の速さは奔馬に追いつくほどであった。このようにして次第に染まり人々はみな竜種となり、力をたのみ威をふるい、王の命令に服さないようになった。そこで王は突厥を引き入れてこの城の人を殺した。老若みな殺しにしてほとんど生き残るものはなかった。城は今は荒れはてて、人煙もとだえてしまった。

注

一 国の東辺にある城 この城は次節の文頭にいう「荒城」に当たろう。と

すれば、「昭怙釐二伽藍」の「南」にあたるわけで、地理の点より見て、今の庫車よりやや東に位置することとなる。

二　天祠　本書における「天祠」とは摩醯首伐羅 Maheśvara 即ち大自在天を祀るほこらを指すのが普通で、あとのインド境域内ではしばしば出てくるものである。しかし、『唐書』西域伝に于闐が「祆神に事え仏教を崇ぶ」といい、祆教（ゾロアスター教・拝火教）が流行したことを述べているし、高昌・焉耆も『魏書』西域伝では「俗、天神に事え、兼ねて仏法を信ず」と記すことからみれば、この屈支の「天祠」もインド的なものではなく拝火教のものであったろう。

三　これを先達の話にきけば　原文は「聞諸先志」となっているが、「聞諸耆旧」とするテキストもある。一方、他の場所で「聞諸土俗」という文も見る。彼此考え併せ、「先志」を「歴史」の意にはとらず、「耆旧」即ち「もの知りの故老」の意とした。

四　金花と号する王　『唐書』亀茲伝に唐の太宗と同時代の亀茲王「蘇伐畳」（六一八—三〇の間に即位、六四四—四七の間に没）の父に「蘇伐勃駃」という王があったことをのせる。P・ペリオが庫車近辺で発見した Brahmi 文字の木簡と対比するに、この蘇伐畳はSuvarṇate, 蘇伐勃駃はSuvarṇapuṣpa (Suvarṇa=金, puṣpa=花) であろうという [S. Lévi: *Le "Tokharien B" langue de Koutcha, J.A.*, 1913；馮承鈞訳：『吐火羅語考』一九五七]。玄奘のいう突厥を引き入れた暗愚な王はすなわち蘇伐畳であり、金花王はすなわちその父王蘇伐勃駃のことである。なお、亀茲王が神力をもって竜を服し乗り物とした話が粉飾されて『酉陽雑俎』前集巻一四に見えるが、そこでは王の名は「阿主児」となっている。

六・二　昭怙釐伽藍

荒城の北四十余里のところ、山の入りこみに接し一つの河をへだてて二つの伽藍がある。同じく昭怙釐(注一)と名づけ、東「昭怙釐」・西「昭怙釐」と位置に従って称している。仏像の荘厳はほとんど人工とは思えないほどである。僧徒は持戒甚だ清く、まことによく精励している。東昭怙釐の仏堂中に玉の面の広さ二尺余、色は黄白をおび、蛤のような形をしたものがある。その上には仏陀の足うらの跡(注二)があり、長さ一尺八寸、広さ六寸に余るものである。斎日に光明を照らし輝かすことがある。

注

一　昭怙釐　この伽藍は、現在の庫車の北北東約二十キロの蘇巴什 Subashi 近辺、銅廠河の東西両岸にある寺跡とされている [A. Stein: *Innermost Asia*, p. 806]。昭怙釐 *tśjäu-ɣuo-lji* は『梁高僧伝』巻二鳩摩羅什の条の「雀梨大寺」、『水経注』巻二所引『釈氏西域記』の「雀離大清浄」である。ガンダーラの Puruṣapura（ペシャワル）にあった「カニシカ大塔」（『宋雲行紀』にいう「雀離浮図」）と、中国名では同じである。玄奘はこの寺名に対して何の説明も行なっていないが、P・ペリオは迦膩色迦王が小月氏の人であることから、これらの寺名を吐火羅 Tochara 語で解し、「雀離」*cäkri*, 「昭怙釐」*cöɣuri* のような音声を考えている。意味は「塔・寺院」である。現在も Yagnobi, Ormuri 等のパミール方言では、「寺院」に当たる語は *Cakka, Cuki, Sakek* などとよばれているようである [P. Pelliot: *Tokharien et koutchéen, J.A.*, 1934；G. Morgenstierne: *Indo-Iranian Frontier Languages*, II, Index]。

二　仏陀の足うらの跡　いわゆる「仏足石」である。釈尊の蹠形を石に刻し、千輻輪相等の瑞紋をあらわしたものをいう。釈迦が遊行し法輪を転じたことをあらわすものとして、仏像出現以前より尊崇された。本書中、那掲羅曷国、烏仗那国、摩掲陀国、伊爛拏鉢伐多国の項にも記されている。

六・三　無遮会と行像

大城の西門の外の路の左右には、おのおの立仏の像の高さ九十余尺のものがある。この像の前に五年一大会(注一)の会場を建てる。毎年秋分の数十日間は国中の僧徒はみなここへ集まってくる。上は君王より下は兵士・庶民に至るまで、俗務をとりやめ斎戒をまもり、経を受け説法を聴き、日を尽くしてなお疲れを忘れるほど

である。多くの僧伽藍の荘厳された仏像は珍宝で光り輝かし錦綺で飾り、これを輦輿にのせてひく。これを「行像」[注二]といい、どうかすると千をもって数えるほども会場に雲のごとく集まる。普段は月の十五日と晦日に、国王・大臣は国事を相談し、高僧を訪ねてはかり、その後はじめて宣布する。

注

一　五年一大会　Skt. *pañca-pariṣad, pañca-varṣika-pariṣad.* 般闍于瑟・般遮婆瑟・般遮越師・無遮会ともいう。五年ごとに道俗貴賤を論ぜず、大衆を供養する斎会。この「大施会」の詳細は、巻五「鉢羅耶伽国」の条に見える。

二　行像　仏像を安置する輦輿や山車を引いて多くの人の目に見せて、人々の罪悪を除く功徳を与える行事である「行像」は、生前の仏陀が歩む姿を目にすることができる人々は、過去千劫の極重の悪業の罪をも除くことができるという考えを敷衍した『観仏三昧海経』巻六によるものであろう。通常仏誕の日に行なわれる。中国北魏時代におけるこの行事の盛況は『洛陽伽藍記』中に詳しい。『法顕伝』にはインドの行事として中インド摩竭国巴連弗城の行事、西域のものとして于闐国の盛儀を詳述する。小杉一雄：「行像——ベゼクリクの行像壁画?」『仏教芸術』一九所載参照。

六・四　阿奢理貳伽藍　会場の西北で河を渡り阿奢理貳伽藍（原注　唐に奇特という）[注一]に至る。庭・建物は広々として、仏像は巧みに荘厳されている。僧徒は厳粛に精励して怠ることがない。何れも長老有徳で、学深く才高き人々である。遠方の俊才たちも義をしたって留学している。国王・大臣より士民・豪族に至るまで、四事の供養[注二]をし、時につれていよいよ尊敬している。先達の話によれば、次のようであった。

「先ごろこの国の先王は深く三宝[注三]を敬っておりましたが、おりしも遠く出かけて仏陀の聖跡を参拝しようと思いたちました。そこで同腹の弟にあとのことを取り仕切るように命じました。その弟は命を受けるや、ひそかに自分の手で男根を断ち切りました。ことの起こらない前に予防しようとしてでありました。これを金の函に緘封し王にたてまつりました。王は、

『これはどういう意味なのか』

とたずねますと、弟は、

『お帰りの日になったらお開けください』

とお答えしました。そこですぐさま執事に手渡し、兵隊に守護させました。王が帰ってまいりますと、はたして讒言して、

『王が国を取り締まらせましたのに、[王弟は]中宮の風紀を乱しました』

と申すものがありました。王は聞くや激怒し、厳刑に処しようとしました。弟は、

『責めを逃れようというのではありませんが、どうか金函をお開けください』

と申します。王は弟の言葉のまま開けてよくよく見ますと、なんと切断した男根でした。王は、

『これは何の異物か？　何を明らかにしようとするのか？』

といいますと、弟は、

『王が先ごろ遠方へ行かれますとき、あとのことを取り仕切るように命じられました。私は讒言を受けることもあろうかと思い、男根を切断し、自ら証明しようといたしました。いま、予想どおり兆があらわれてきました。どうか御照覧を垂れ賜わらんことを』

と、お答えしました。王はことの意外に非常に驚き、兄弟の愛情がいよいよあつくなりました。かくて、奥御殿に出入りしてもさまたげられることはなくなりました。王の弟は、そののち、道である男が五百頭の牛をつれているのに出会いました。去勢しようとしているのでした。弟はこれを見て自らの過去を思い浮かべ、同様のわざわいを受けるあわれみを増し、

『私がいま身体をそこなっているのは、必ずや前世の宿業であろう』

と考え、すぐさま財貨をはらいこの牛の群れを贖いとりました。この慈善の力で、男根が次第にもとのごとくなりました。男根がもとのようになりましたがため、奥御殿にも入らないようになりました。王はいぶかって問いただしましたので、ことの次第を申し上げますと、王は奇特なことだと思われました。そこで伽藍を建てて美事を表彰し、美談をのちの世に伝えられたのであります(注四)」

と。これより西へ行くこと六百余里、小さな沙漠を通り跋禄迦国（原注 旧に姑墨といい、また亟墨ともいう）に至る。

注

一 阿奢理貳伽藍（……） この伽藍は庫木土拉 Kumtura の対岸にある Duldur-Aqur と今よばれる廃址に比定されている。P・ペリオはここで「書庫」を発掘し、大量の Brahmi 文書その他（漢字のものはない）を収集し、西トカラ語 (Tocharian B) すなわち庫車語 Kuchean 解明の端緒となったところである。玄奘の述べている庭宇の広く堂々とした様子と華麗な荘飾とは、焼けおちた廃址からも窺えるという[秋山光和：「ペリオ調査団の中央アジア旅程とその考古学的成果」下『仏教芸術』二〇、一九五三]。阿奢理貳伽藍 ˳ʼâ-˳śia-°lji-ńźi。は梵語の庫車語形を表記したものである。Skt. āścarya > Toch. B. aśari [Sieg, Siegling & Schulze : *Toch. Gram.*, § 92；拙稿：「唐代における中国語語頭鼻音の Denasalization 進行過程」『東洋学報』三九、三六一ページ]。Skt. *āścarya* の意味はまさしく「唐言奇特」にあたる [*Mvy.* 7165]。

二 四事の供養 衣服・臥具・飲食・湯薬を供給するを「四事供養」という。

三 三宝 一切の仏陀 Buddha を「仏宝」といい、仏陀の説いた教法 Dharma を「法宝」といい、その教法に従って修行するもの Samgha を「僧宝」といい、この三者を合わせて「三宝」という。

四 先達の話 これと似た「男根再現」の話は、『雑宝蔵経』巻二「内官犍せられんとする牛を贖い男根を得る縁」に乾陀衛 Gandhara における物語として出ている。

七 跋禄迦国

跋禄迦国(注一)は東西六百余里、南北三百余里ある。国の大都城は周囲五、六里である。産物・気候(注二)・人情・風俗・文字の法則は屈支国と同じであるが、言語は少しく異なっている(注三)。細糸の毛氈(注四)・細糸の毛織物は隣国に重んぜられている。伽藍は数十ヵ所、僧徒は千余人おり、小乗の説一切有部を学習している。

注

一 跋禄迦国 跋禄迦 *b'uât˳-luk˳-˳ka.* 旧称の姑墨 **kâg-muək→˳kuo-muək˳*, 亟墨 **kjək-muək→kiək˳-muək˳* は漢代より見えている古名で、この原名はトルコ語の *kum* という形よりも、*kumak, kumaq, kumag* のような尾音のあるものが考えられる[白鳥：「西域史上の新研究」『西域史研究』上二四四ページ：Ramstead: *Kalmück. Wörterb.*, 196b]。「砂・砂塵」の意である（漢代の天山南道にトルコ族が進出していた様子は、白鳥：同書に詳しい）。もし、然りとすれば、「砂」の意の梵語は *bāluka, vāluka* [M-W. *Skt.-Eng. Dict.*, 946 c] であり、まさしく本書の「跋禄迦」に対応する（跋禄迦の国名は『西域記』以外に見ない）。なお、『新

唐書』に「撥換」とあるのは「跋禄迦」のアラビア語形 *bakhouan* に対するものとされている［P. Pelliot : *La Ville de Bakhouan dans la Géographie d'Idriçi*, *T.P.*, 1906, pp. 553-6］が、この比定にはなお地理的に問題があるようである［Minorsky : *Ḥ.-'Ā.*, p. 294, n.2］。跋禄迦国の首都の位置については、今の阿克蘇 Aq-su とする説［V. de St. Martin, T. Watters, V.A. Smith, P. Pelliot 等］、今の拝城とする説［徐松：『西域水道記』等］、今の哈拉玉爾滾 Qara-yurgen とする説［『欽定新疆図志』等］、雅卡阿里克 Yaka-aryk とする説（E. Chavannes : *Documents* 等）など多くの異説がある。何れも古えの烽燧 Watch-Tower の点在する道筋で、今日も公道として使用されている路辺を考えている。さらに地表採集ではあるが、実際に行なった考古学的観察から、今の公道より北方で Yaka-aryk の西北二十三キロ、天山南麓の哈拉巴克 Qarabag の古城址を漢・唐間の都城址とする説［黄文弼：『塔里木盆地考古記』四〇ページ］もあり、決定はなお将来に俟たれる［cf. A. Stein : *Serindia*, p. 1297］。

二　産物・気候　この地方一帯は多くの小河川が合して阿克蘇河となって塔里木河に注ぐ位置にあり、従って土地は肥沃で、農業・牧畜も盛んである。『通典』によれば、銅・鉄・硫黄などの鉱産物もあり、かつ気候も温和で、省内屈指の裕福な地方である。

三　文字の法則は……　文字は亀茲と同じくいわゆる Slanting Brahmi Script であり、言語も西トカラ語（Tokharian B）であるが、亀茲に比しやや方言的差異があったものとみえる。

四　細糸の毛氈　姑墨が亀茲に服属していた六朝期の「亀茲伝」にも、「細氈」を産出する記事がある。細毛をもって作る毛氈であろう。今日も庫車・阿克蘇地方は、和闐からカラシャールにかけての地方と共に、優秀な細毛種の牧羊が行なわれている。なお、キジルから氈の現物の断片が発見されているが、それは麻布の地に毛絨で刺繍されたものであり［黄文弼：同上書、図版六六、図二一、解説九二ページ］、今日も同じ製法をしている［『新修支那省別全誌』八巻四九一ページ］。

七・一　凌山　この国の西北へ行くこと三百余里、石の多い砂漠をすぎ、凌山(注一)についた。これが葱嶺（パミール）の北のはじまり(注二)であり、水は多く東へ流れている。山や谷の積もった雪は春や夏も凍結していて、時に融けることがあってもまたすぐに結氷してしまう。道筋は険阻(注三)で寒風はすさまじく、乱暴な竜の難に出くわすことも多く、旅人を困らしている。この道によるものは、決して赭い上衣をつけ瓠をもち大声をあげてわめいてはいけない。少しでもこれに違うことがあれば、災禍はたちどころにあらわれ、暴風がふきまくり、砂は飛び石は雨のごとく、遭遇するものは命を亡くすこともあり、生命を全うし難い。

注

一　凌山　「氷山」の意。今日の阿克蘇北方に聳える天山山脈の主峰、Khan-Tengri 峰（『西域同文志』四、東洋文庫本、二三一ページ作「汗騰格里鄂拉」）六千九百九十五メートル、Pobeda 峰七千四百三十九メートル等、常に氷雪をいただき大氷河をもつ山脈を指すことは明らかであるが、これを何処で越えたかについては異論がある。阿克蘇近辺よりこの山嶺を越える通路の古来著名なものに二ヵ所ある。その一は、阿克蘇北方の山間を通る Muzart Dawan（俗に氷達阪路という）三千六百三十メートルである。途中、白竜・黒竜二山の間の氷結路を通る乱石甚だしい険路であり［『新修支那省別全誌』八巻六一五ページ］、近くは G. Merzbacher（一九〇二―〇三、一九〇七―〇八）が通り、詳細を報告している［G. Merzbacher : *The Central Tien-shan Mountains*; J. A. Dabbs : *History of the Discovery and Exploration of Chinese Turkestan*, pp. 120 ff.］。もう一つの南北縦断路は、阿克蘇の西方八十キロにある烏什 Uch-Turfan 近辺より西北へ山路をとる Bedel 峠（Pereval Bedel, 四千二百八十四メートル）であり、古来抜達嶺［『新唐書』地理志下、『賈耽入四夷道』］、勃達嶺［杜環：『経行記』］の名でその険路をうたわれている。この道も今世紀に入り地質学者 P. Gröber（一九〇八―〇九）が実地踏査の報告をしている［*Geogr. Journ.*, London, 1910］。玄奘の通路を Muzart Dawan とする説をとるものに V. de St. Martin［*Mém.*, II, p. 266］, S. Beal

[*Records*, I, p. 25], T. Watters [*On Y. Ch.*, I, p. 66]、足立『研究』上三五ページ」等、Bedel 峠とする説は堀『解説』五三ページ」、高田『国訳伝』三五ページ（一二）」等。

二 葱嶺の北のはじまり　原文は「此れ則ち葱嶺の北原なり」とあり、『慈恩伝』は「凌山に至る、即ち葱嶺の北隅なり」となっている。いま、「北源」の意に解した。

三 道筋は険阻で　凌山の状況とその登攀の困難については『慈恩伝』に詳細に記されている。

七・二　大清池　山を行くこと四百余里で[注一]大清池（原注　或いは熱海と名づけ、また鹹海ともいう[注二]）についた。周囲は千余里あり[注三]、東西は長く、南北は狭い。四面は山に囲まれ、多くの河川の水流がここに集まっている。色は青黒みを帯び、味は塩からくもあり苦くもある。大きな波がはてしなく、荒い波は沫だっている。竜も魚もともに雑居し、不思議なことがおりおりおこることがある。それで往来する旅びとは供えものをして福を祈るのである。魚類は多いが、敢えて漁をし捕獲するものもない[注四]。

注

一 山を行くこと四百余里　この四百余里の険阻な山路を玄奘は「七日の後、方始て山を出る。徒侶の中、殍凍て死するもの十に三、四、牛馬いよいよ甚だし」『慈恩伝』と記している。

二 大清池（……）　いまのイシク・クル湖を指す。天山山脈の北側にあり、北に Kungey Chlatau, 南に Cherskey Alatau 両山脈にはさまれた地域にある。標高千六百九メートルの高所の深さ七百二メートル、周囲約五百キロあり、約八十の小河川が流入するはけ口のない塩湖である。イシク・クルとは「あたたかい湖」の意のキルギズ語で、また Tuz-kul「塩湖」ともよばれている。漢籍では古く闐池（闐 **d'ien → d'ien*。＝Türk. *tengis*「大きい」の意）と書かれている『漢書』陳湯伝」。なお、タクラマカン砂漠より Muzart 越えをして「清池」に到着したというなれば、今日の Przheval'sk あたりに出るわけで、ここは古来東西交通路上の要衝となっているところである。もし Bedel 峠を通ったならば今日の Pokorovka (Pokorovskoye. Przheval'sk より西にあたる湖南の町) あたりに出たわけである。

三 周囲は千余里　『慈恩伝』には「千四、五百里」に作る。

四 敢えて漁をし捕獲するものもない　現在は、この周辺の住民は漁業に従事している。何時ごろから漁を始めたかは、いま詳かにしない。

窣利

七・三　素葉水城　清池の西北に行くこと[注一]五百余里で素葉水城[注二]に至る。城の周囲は六、七里で、諸国の商胡[注三]（商業に従事する胡人）が雑居している。土地は糜・麦・葡萄によく、木立ちはまばらで気候は風寒く、人々は氈（細毛の織物）や褐（粗い毛織物）をきている。

注

一 清池の西北に行く　『慈恩伝』には「海に循い西北に行くこと五百余里」とある。玄奘がイシク・クル湖畔の南北何れの道を通ったかは明瞭でない。堀氏らは Bedel 峠を通ったものと想定するため、湖の南岸を通ったとする。しかし、湖の北岸を通ったとする説は古くジュリアン氏のみならず、この湖水を実地調査した最近の人にもある［ボリス・ジューコフ著加藤九祚訳：『湖底に消えた都、イッシク・クル湖探検記』五〇ページ］。

二 素葉水城　『慈恩伝』には「素葉城」とある。この城市は Frunze の東方約四十キロの地点にあるオアシス都市トクマク近辺に比定されている。十世紀にも二万人の戦士があるといわれるほどの大きな部落である［V. Minorsky : *H.-'Ā.*, §17. 2, & p. 303]。素葉 *suo-iäp*。は『隋書』『新唐

書』の康国伝に砕葉 *suâi°-iäp°* と表記されているもので、素葉・砕葉は *süyāb* [*H.-'Ā.*] に対応し、Süy 河の意 (*āb* はトルコ語「河」) で、『元朝秘史』の垂河 (*.tś'uei*) は現在の河名 Chu との中間の形を示すものといえよう。玄奘往訪当時、突厥の葉護可汗 Yabgu Qaghan (六一七—六二八) は亀茲北方の Yulduz 渓谷よりこの地方にその王庭を移した。その勢力甚だ盛んで中央アジアを広く領有し、南辺は迦畢試国まで圏内にあった。玄奘がタリム盆地より直ちにパミール越えをして入竺せずに、ことさら迂路をとった一因は、この可汗のもとにおいて西域諸国の旅程の安全を求めるためであったと考えられる。ただし、この可汗は玄奘相見の直後に殺され、西突厥そのものもやがて唐の高宗に討滅された (六五七) [E. Chavannes: *Documents*, p. 26, 195]。『慈恩伝』には、玄奘相見の儀、人物穹廬の詳細をえがき、漢語および諸国語に通ずる少年を選び、迦畢試国まで玄奘を送らせたことを記す。

三　諸国の商胡　次項に見えるソグド人を中心とした商人群を指す。当地は、天山北路を Semirechye を通過して西へ行く商業路、西方から蒙古など東へ行く商業路、中国から玄奘が通ってきた商業路の交会点にあり、国際的な商業都市であったことは *H.-'Ā.* からも読みとれるし、西突厥の王庭が天山の北より当地へ西遷したのもそのためであったろう。

七・四　窣利総記　素葉より西に数十の孤城があり、城ごとに長を立てている。命令を稟けているのではないが、みな突厥に隷属している。素葉城から羯霜那国に(注一)至るまで、土地は窣利(注二)と名づけ、人も[窣利人と]いう。文字・言語(注三)もその名称に随って[窣利文字・窣利語と]称している。字のなりたちは簡略で、もと二十余文字であるが、それが組み合わさって[語彙が]でき、その方法が次第にひろがって[文を記して]いる。ほぼ記録があり、その文を竪に読んでいる。そのやり方を順次に伝授して、師匠も弟子もかえることがない。氈や褐を身につけ、皮や氎(木綿織物)を着ている。裳も服もせまく(注四)[身にぴったりと]し、頭髪をととのえて頭頂を出しているか、或いは全く剃り、繒彩を額にまく。体つきは大きいが、性格は(注五)臆病であり、風俗は軽薄で、詭詐がまかり通っている。おおむね欲ばりで、父子ともに利殖をはかっている。財産の多いものを貴しとなし、[身分の]良いもの賤しいものという区別がない。たとえ富が巨万であっても、衣食は粗悪である。力田と逐利が半ばしている。

注

一　羯霜那国　本巻一・三〇に詳記した。

二　窣利　窣利 *suət°-lji°* は、古く粟弋[『後漢書』西域伝]、粟特[『北史』西域伝]等と記され、唐代においては速利[『南海寄帰内法伝』第三師資之道]、蘇哩[『梵語雑名』「胡」の挟注]、孫鄰[『梵語千字文』「胡」に対する梵語]等。東洋史上有名なソグディアナ Soghdiana である。Soghd. *surδia*, Avesta *surda*, Elam. *šu-ug-da*, Akkad. *su-ug-du*, Greek *Sogdiānē*, *Sogdoi* [R. Gauthiot et E. Benveniste: *Essai de Gram. Sogdienne*; R.G. Kent: *Old Pers. Gram.*] などペルセポリスのダリウス碑文以来頻見する語である。Soghd. *surδia* の γ および δ は摩擦音であり、従って容易に [su?li], [sūli] のような形が考えられよう。ところで、この「窣利」sūli という名称の来源には異説がある。(一)sūlik の語形を考え、中期イラン語 Pehlevi の Soghd とするE・シャヴァンヌの説 [*Documents*, p. 217 (2)]、(二)sūli として同じく Soghd とする白鳥説 [「粟特国考」『西域史研究』下一五〇ページ]、(三)sūliq として Türk 語と見るワッターズ説 [*On Y. Ch.*, I, p. 71-2] (所説の根拠はそれぞれの書に詳見)。通常 Sughd, Soghdiana といわれるのは Oxus (アム・ダリヤ) と Jaxartes (シル・ダリヤ) の両大河に挟まれた地域で、ブハラ、サマルカンドを河岸にもつソグド (Zaravshan) 河と、Kish, Nasaf をもつ Kashka darya (この両河はいずれも砂漠中に消えている) によって潤されている地方を指すのである [Le Strange: *The Lands*, p. 460] が、この遙か東北の素葉城まで含めて玄奘が窣利の地としているのは、前項注三に述べたような当時の商業貿易路にあたるので、ソグ

ド人が多くの商業殖民地を形成していた状況によるものであろう。

三　窣利人の文字・言語　ソグド人はイラン系の民族で、九世紀に最盛に達し、東トルキスタンから蒙古、中国本土にまで居住するもの多く、その言語は一種の国際語にまでなっていたようであるが、やがて十三世紀のはじめチンギス・ハンの侵入によりほとんど根絶するに至り、わずかに露領 Tadjikstan の Yagnob 河流域地方に逃げのびたものの子孫だけが今日まで残存している。その Yagnōbi 語はソグド語の後影といわれている。ソグド文字はシリアのアラム文字を基にした文字であり、このソグド文字からウイグル文字が案出された。通常横書きされるが、玄奘のいう「その文を竪読みする」書き方もあった（補注参照）。字数は本書に二十余言（明本には「三十余言」とする）とあるが、語中・語尾の特別な異体字の数え方如何で総数も変わり、I. Gershevitch は二十九文字を数えている［*A Gram. of Mani. Sogdian*］。ソグド文書は永く不明であったが、今日は敦煌発見のもの、ピャンジケントの Mug 山出土のもの等多数あり、敦煌将来のものには最古の四世紀に属する書翰がある。

四　裘も服もせまく　ソグド人の服装・服飾については、最近ソヴェト学者の手によってなされた八世紀の古都ピャンジケント（現在のサマルカンドの東方約六十八キロの Zaravshan 渓谷にある）および同時期の Mug 山城（ピャンジケントのさらに東方、サマルカンドより約二百キロ、ザラフシャン川の支流に臨む北岸）の両遺址から発掘された壁画・織物などからほぼ推測できる。それによれば東トルキスタンのキジル壁画に見られる服装と酷似し、まさに玄奘の「裘服褊急」の語にあたるものである。頭髪は辮髪をしているが、その剃り方についてはよく分からない［T.T. Rice：*Ancient Arts of Central Asia*, 75-122；ヤクボーフスキー著加藤九祚訳：『西域の秘宝を求めて』一六一―一六三ページ］。しかし、イシク・クール近辺に見る古代石人は「その頭髪は玄奘のいうように剃られており、頭頂部に一部残っているだけである」と A. H. Bernshtam は言っている［ボリス・ジューコフ著 加藤九祚訳：『湖底に消えた都』八三ページ］とのことである。さらに Chu 河にそう Novotroitskiy に流れる Sukluk 河岸の五世紀ごろの集落址から発見された人形壺の顔はソグド人の特徴をよく表わすものだというが、その額部は模様のある鉢巻のようなものを巻いている。これが玄奘のいう「繒彩絡額」に当たろうか［香山陽坪：『砂漠と草原の遺宝』一〇九ページ］。中国の古籍には「康国（ソグド）は、……丈夫は髪を剪りあるいは辮髪す。その王は氈帽を冠り、飾るに金宝を以てす。婦人は盤髻し、幪（ひたいをおおう）に皂巾（黒色の頭巾）を以てし、飾るに金花を以てす」［『冊府元亀』巻九六一］とある。

五　性格　ソグド人の性格と営利は有名で、『唐会要』巻九九には、「深目高鼻にして、鬚髯多し。子を生めば必ず蜜を口中に食わせ、膠を手内に置く。その成長して口に甘言を嘗み、銭を持つこと膠の物を粘するが如きを欲すればなり。商賈を善くすることを習い、分銖の利を争う。男子は二十となれば、即ち之を他国に送る。中国にも来過し、利の在る所、所として至らざるはなし」とある。中国の諸書がどちらかと言えばあまり好感をもたない書きぶりであるのに対して、西方の書、たとえば著者未詳ながら同じイラン人の *Hudūd 'Al-Ālam* [Minorsky, p. 113] には「ソグドの住民は客をよくもてなし社交的である。そこは快適と繁栄に満ち、温和で信心深い人が多い」と好意的であるのは面白い対照である。

七・五　千泉　素葉城の西へ行くこと四百余里で千泉(注一)に至る。千泉は地が方二百余里である。南は雪山に面し、三方は平地である。土地は水ゆたかに林の樹々は枝を茂らし、春の終わりの月には咲く花は入りまじり、まるで綺のようである。泉や池が千所もあるのでこの名がある。突厥の可汗は毎年避暑にやってくる。ここには群れなす鹿がおり、多くは鈴をつけた首輪で飾っている。人になれていて驚き走るようなことはあまりない。可汗はこれを可愛がり、家来たちに殺害を加えるようなことがあれば、誅罰を受けることがあっても、決して赦免されることはないと命令してあるので、この群れなす鹿はその寿命を全うすることができるのである。

注

一　千泉　『慈恩伝』に「此より西行すること四百余里にして屏聿に至る。此に千泉という。地は方数百里なり。既に池沼多く、又奇木に豊み、森沈として涼潤なり。即ち可汗避暑の地なり」とある。屏聿 .b'ieng-iuĕt. は「千泉」に対応する古代トルコ語、あるいはその方言音を表わしたものであろう。ワッターズ氏はトルコ語の *bing gyul* という形を想定している[*On Y. Ch.*, I, p. 73]。これはあたかも「屏聿」の中古音に対応するものの如くであるが、この *gyul* はあるいは Mongol. *goul*, Kalmück. *gol*, Alttürk. Uigur. Čagatai *gol* を意図したものではなかろうか。もし、然りとすれば、この語は古代トルコ語では「水流のない渓谷」の意であるから「千泉」には当たらないであろう[G.J. Ramstead : *Kalmück. Wörterb.*, 149-50]。いま『西域同文志』巻五（東洋文庫本三六二ページa）を見るに、「明布拉克　回語。明は千数なり。その地泉眼衆多なり、故に名づく。即ち唐の千泉なり。『唐書』西域伝に、素葉城の西四百里、千泉に至るとあり」として、Kalmyk *ming bulaq* ; Uigur *ming bulak* をあげている。一方、漢字「聿」は本来「筆」と同義で、唐代にも「筆牘」を「聿牘」と書いた例があるようである（『康熙字典』によれば柳宗元の文にあるようであるが、『柳河東集』巻三六「上裴晋公度啓」に「筆牘」となっている以外の例は検出できなかった）。もし、「聿」を「筆」（『爾雅』釈器注「蜀人は筆を呼んで不律となす」、安南漢字音 *biut*）のごとく読むことがあったとすれば、「屏聿」はまさしく *ming bulaq* の古代トルコ語・キルギズ語 *byng ʔbul* [Ramstead : *ibid.*, p. 59, 263] に対応するであろう。専家の指教を俟つ。ところで、この「千泉」は今の Kirgizskiy（アレクサンドロフスキー）山脈の北麓、Frunze の西方約百二十キロの Merke（イスラム地理書の Mirki, Bārki）を指す点には異論はなく、また玄奘の記述にもあてはまる。同地は今日でもキルギズ人にとって Chu 河とシル・ダリヤの間における最高の避暑地であり、優秀な牧草と多くの美しい泉がある所である [Beal : *Records*, I, p. 27 (88)]。

七・六　呾邏私城と中国人居留地

千泉の西へ行くこと百四、五十里で呾邏私城(注一)に至る。城の周囲は八、九里で、諸国の商胡が雑居している。産物・気候はおおむね素葉と同じである。南へ行くこと十余里で、小さなはなれ城の三百余戸のものがある。もともとは中国の人(注二)たちである。むかし突厥にさらわれて、のちそのまま一つ国に集まり、いっしょにこの城を維持しているのである。この城の中では、住居・衣服・去就はそのまま突厥と同じになってしまったが、言葉や礼儀は今もなお本国［の様子］を残している。

注

一　呾邏私　呾邏私 *tât.-lâ°.si*（『慈恩伝』は「私」を「斯 .*sie*」に作る）は、『前漢書』陳湯伝の都頼 **tag-lad* で、今の Talas 河の屈曲点にある Dzhambul（一九三三年以前は Aulie-ata とよばれた）の近辺にその廃址がある。唐の天宝十載（七五一）高仙芝が大食と戦い敗績したところである（現在 Talas とよばれている都市はこの Talas 河上流の Dzhambul より東南東約八十キロの地点にある）。イスラム時代に最も繁栄した [Le Strange : *The Lands*, pp. 486 ff.]。当地もソグドの殖民地で、最近一九三六、三八の両年、ソヴェトの手により考古学的調査がなされた [A. L. Mongait : *Archaeology in the U.S.S.R.*, pp. 258-9]。

二　中国の人　呾邏私城の近くに居住する中国人については、『資治通鑑』巻一九三唐紀、太宗貞観五年（六三一）の条に「隋末、中国人多く突厥に歿す。突厥降るに及び、上使をして金帛を以て之を贖わしむ。五月乙丑、有司奏す、凡て男女八万口を得たり」とある。呾邏私近辺の中国人もこれに含まれていたであろう。『慈恩伝』巻二の、玄奘が素葉城で突厥可汗に相見した条に、「更に漢使および高昌の使人を引き、入って国書および信物を通ず。可汗自ら之を目にして甚だ悦ぶ」とあるのは、この捕虜回収のための一段階であったのではないか。

七・七　白水城

これより西南に行くこと二百余里で白水城(注一)に至る。

城の周囲は六、七里である。土地の産物・気候の具合は遙かに咀邏私城より勝れている。

注

一　白水城　咀邏私（Dzhambul）より南南西約百七十キロでチムケント市に至る。白水城をこの近辺に比定するのであるが、十一世紀初頭の書 Mahmūd Al-Kāshgharī のトルコ語辞典をはじめ、近来の多くの人はチムケントの東方約十五キロにある Sayram をあてている。Sayram（元『経世大典』西北地理図の賽蘭）は、中世イスラム時代は Isfidjab あるいは Ispījāb（「白水」の意のアラビア語）とよばれていて、蒙古侵入後に Sayram と名称を変えたという［Minorsky: *H.-'Ā.*, p. 118, 357-8; Le Strange: *The Lands*, p. 483-4; 白鳥:「西域史上の新研究」『西域史研究』上九〇ページ］。これに対してチムケントの東北約二十六キロにある Mankent が一に Ak-su（「白水」の意のトルコ語）とよばれる故、玄奘のいう白水城をこの Mankent にあてる方をよしとする説［Watters: *On Y. Ch.*, I, p. 84］もあるが、この Mankent を Ak-su とよぶ根拠を知らない。いま *AMS*, NK42 (1950) の百万分の一の地図によるにAk-su という地名は Mankent の西北約二十六キロの地点に見える小部落にあてられている。中世の Isfidjab という名称は都市名と同時に、五十余の部落がある同地方の総称としても使われていた。都市としての Isfidjab はすこぶる盛大で、Shāsh（本書の赭時、今のタシュケント）の三分の一ほどの大きさで、都市の建造物も整い、特に木綿商人の市場で知られていたという［*H.-'Ā.*; Le Strange: *ibid.*］。

七・八　恭御城　西南へ行くこと二百余里で(注一)恭御城(注二)に至る。城の周囲は五、六里、土地は原隰（高低があり、ほどよい）で、林樹は繁茂している。これより南へ行くこと四、五十里で笯赤建国（原注　奴故反 。*nuo* + *kuo*° → *nuo*°）に至る。

注

一　西南へ行くこと二百余里　この地帯における玄奘の示す距離と図上（*AMS*, NK42）の直線距離との間には大きな矛盾がある（図上における公道は、一地より次の一地に至る間は多少の屈折はあるが、ほぼ直線に近い）。いま、この関係を次に直線的に図示する（『慈恩伝』にも差異はない）。

玄奘の方位・距離	図上の方位・距離
◎ 素葉城 Tokmak	
西行四百余里	西行約 170km
○ 千泉 Merke	
西行百四五十里	西行約 150km
◎ 咀邏私城 Dzhambul	
西南行二百余里	南南西行約150km
○ 白水城 Sayram	
○Chimkent	
西南行二百余里	
○ 恭御城	南行約 120km
南行四五十里	
○ 笯赤建国	
西行二百余里	
◎ 赭時国 Tashkent	

従って、もし玄奘の示す方位と距離を重視し、かつ咀邏私城 Dzhambul と赭時国 Tashkent の比定が動かないものとするならば、その間の三地点（白水城・恭御城・笯赤建国）は何れも図上に比定することはできない。また咀邏私城より玄奘の方位と距離をたどるならば、赭時国は現在の実位置よりも遙か西方、シル・ダリヤを越えた砂漠地帯に置かなければならない。この矛盾を如何に解するかについては諸種の企てがある［Beal: *Records*, I, p. 29 (93); 足立:『研究』四四ページ等］が、いまは矛盾を指摘するにとどめ、細説しない。

二　恭御城　恭御 。*kiwong-ngiwo*° の原地名を詳かにしないが、巻十の一〇に見える「恭御陀」の国名は Koṅgoda（この名は碑銘にも現われる確実なものである）である点から考えるに、当面の「恭御」も Koṅgo

に近い発音であったことは間違いない。しかし、この地方一帯は非常に多く城郭都市があり、その一つ一つが現在の何れに当たるかは到底比定し得ない（Le Strange: *The Lands*, pp. 483-4 参照)。

八　笯赤建国

笯赤建国（ヌージカンド）[注一]は周囲が千余里ある。土地はよく肥え農業を十分に営み、草木は繁茂し、華（はな）や果（なりもの）は非常によくできる。葡萄（ぶどう）が多く、これも貴（とうと）ばれている。城（まち）や邑（むら）は百もあり、それぞれ主君を別にしていて、進退往来はお互いに指図をうけていない。土地を画して区分はしているものの、全体を笯赤建国と総称しているのである。これより西へ行くこと二百余里で赭時国（タシュケント）（原注　唐に石国という）に至る。

注

一　笯赤建国　*nuo°-tsʹiäk。-kịon*。は、はっきりと断定し難いが、恐らく中世のイスラム文献に見えるNūjkath, Nūjakath,＊Nūjkand [Minorsky: *Ḥ.-'Ā.*, p. 118, 357; Barthold: *Turkestan down &c.*, p. 174] であろう。もし、然りとすればシル・ダリヤに注ぐ Chirchik 河の上流で、多くの細流を分出する地点の Chirchik (以前の Kosh kurgan) のことであり、タシュケントの北東約三十キロの要地である。土地の条件は玄奘の記述によく合う。ただし、注一にも記したように、方位・距離の点に疑問がある。

九　赭時国

赭時国（タシュケント）[注一]は周囲千余里で、西は葉河[注二]に臨んでいる。東西は狭く、南北が長い。産物・気候[注三]は笯赤建国と同じである。城や邑は数十あるが、それぞれ主君を別にいただいている。［赭時国］全体の君主もなく、突厥に隷属している。[注四]これより東南のかた千余里で怖[注五]（フェル）（原注　敷發反 °*pʹiu*＋*pịwɒt*。→*pʹịwɒt*。）捍（ガナ）国に至る。

注

一　赭時国　赭時 °*tśịa*-。*źi*（「赭」は『慧琳音義』巻八二「之夜反」、巻八三「遮夜反」によれば、去声 *tśịa*°に読む。*Ḥ.-'Ā.*, p. 118 には *chāj* と綴る)。古くは者舌［『魏書』西域伝]、隋・唐の間には柘支とも書く。Middle Pers. *chāch* (Arab. *shāsh*) 即ち「石」の義に対する。玄奘の唐言で「石国」とする所以（ゆえん）。元代には「察赤」とも書いた。中世イスラム文献には地方名にも都市名（一般には Binkath ともいう）にも用いられた。都市名としては、今のタシュケント Tashkent (<*chāch*＋*kand*; cf. Alttürk. Uigur. *taš* は「石」の意)。中世においては Yaxartes（シル・ダリヤ）以北、最大の都市という［*Ḥ.-'Ā.*, p. 118, 357; Le Strange: *The Lands*, p. 480]。国都は隋代には「方十余里」であった［『隋書』石国伝]。

二　葉河　葉 *iäp*。河は、また薬殺水［『隋書』『新唐書』地理志]・葉葉川［『慈恩伝』、ただし「葉葉」の畳字の正か誤かはなお検討を必要とする］とも書かれる。この河川名は Strabon [7,4] 等の古地理書にも現われる Iaxartēs, Yaxartes [J. Markwart: *Wehrot*, s. 29 (3); *Ḥ.-'Ā.*, p. 210]; Soghd. *yaxs-art* (*art*＝「真に貴い」, *yaxš*＝「真珠」の意) という [Markwart: *ibid.*]。これから『新唐書』の「真珠川」の意訳が出たという。

しかし、語源的には Markwart 自身さらに改訂を意図し、なお未確定である [do: *A Catalogue of the Provincial Capital of Ērānshahr*, p. 35; cf. *Ḥ.-'Ā.*, p. 210]。この西方名の第一音節に対応する漢字表記である。

三　産物・気候　十世紀の *Ḥudūd al-'Ālam*, § 25, No. 79 には地方名としての *Chāch* をあげ、「大きく且つ繁栄している地方である。土地は快適で、多くの木材を産出する」と記している。『隋書』石国伝には「粟・麦・良馬」を産することが記されている。

四　突厥に隷属している　熱海の突厥王庭に近い国でも自治が許されているのに、遠方のこの石国が突厥に役属する所以は、隋代に反乱があったからであろう。『隋書』石国伝に「曽つて突厥に弐き、射匱可汗兵を興し之を滅ぼし、特勒（勤の誤り、Tegin, 官職名）甸職をしてその国事を摂らしむ」とあるのはその経緯を示すものである。

五　これより東南のかた千余里で　ある一本が「従此東南行千余里」とあるを除き、麗本・宋本その他一致して、「従此東南千余里」に作る。諸国の記事で玄奘自ら往訪したところは、文中に「行」の字を用いている。従って、この「行」字を使わぬ用字法は、単に伝聞を記したのみで、親践国ではないとされている [S. Beal: *Records*, I, p. 31 (98)]。これは『慈恩伝』の行程にこの国が記されていないことからも確認できる。次下の伝聞国の際にも、この原則はおおむねあてはまる。

一〇　怖捍国

怖捍国(注一)は周囲四千余里あり、山が四辺をめぐっている。土地は肥沃に(注二)、農業は盛んである。花や果が多く、羊や馬に適している。気候は風寒く、人の性質は剛勇である。言語は諸国と異なり、顔かたちは醜くおとっている。(注三)ここ数十年来、大君主はなく力のある豪族が競いあっていて、互いに服従しようとしない。(注四)川に依り険に拠り、土地を画し首都を別にしている。これより西へ行くこと千余里(注五)で窣堵利瑟那国に至る。

注

一　怖捍国　怖捍 *p'iwət.-γân*。（『考異』に敗發反の「發」字を「異本宋本明本ともに並びに廢に作る」とあるが、『慧琳音義』巻八二『西域記』の条に、「怖捍国　番發反、下音旱、亦名跋賀那国」とあるを証として、いま「廢」を誤字と見て採らない）は、また破洛那・抜汗那［ともに『魏書』］、沛汗［『隋書』］、跋賀那［『慧超伝』『慧琳音義』］、鏺汗［『新唐書』］とも書かれる。西方文献にフェルガナ Ferghāna, Farghāna, Pharghāna と見えるものに対応する [V. Minorsky: *Ḥ.-'Ā.*, p.116, 354; W. Barthold: *Turkestan down &c.*, pp. 155ff.; J. Markwart: *Wehrot*]。古くは大宛国［『史記』『漢書』『晋書』］というが、「大宛」という名称には諸種の解釈があり、なお定論たるべきものはない［桑原：「大宛国の貴山城について」『東西交通史論叢』一一八ページ；白鳥：「大宛国考」『西域史研究』上二八九ページ以下；B. Laufer: *Sino-Iranica*, p.211 (4) 参照］。唐代には寧遠国、明・清には霍罕 Khokand 国といった。

二　土地は肥沃に　土地の状況については、古く『史記』大宛伝に、「その俗、土著し田を耕し、稲麦を田る。葡萄酒あり、善馬多し。馬、血を汗す。その先、天馬の子なり。城郭居室あり。その属邑大小七十余城、人のおおきこと数十万ばかりなり」と漢の武帝の熱望した汗血馬を記し、また唐代の杜環『経行記』には、「抜汗那国は怛邏斯の南千里にあり。東は山を隔て、疏勒を去ること二千余里、西は本国を去ること千余里なり。城は数十、兵は数万あり。大唐天宝十年（七五一）、義和公主をこの国に嫁せしむ。国土に波羅林あり、林下に毬場あり。また野鼠あり、山谷に遍し。土は葡萄・䤬羅果・香棗・桃・李に宜し。この国より西海に至る［間は］尽く土室に居り、羊皮・疊布を衣る。男子婦人ともにみな鞾を著く。婦人は金粉もて飾らず、青黛を以て眼に塗るのみ」と詳しい。その殷盛な様子は西方文献にも詳記されている [Minorsky: *Ḥ.-'Ā.*, p.115, 354: Le Strange: *The Lands*, pp. 477 ff.]。なお、当地に

は紀元前一〇〇〇年代の馬と山羊の岩壁画が発見されていて、太古より牧畜が盛んであったことを物語っている［香山陽坪：『砂漠と草原の遺宝』八八ページ］。

三　言語は諸国と異なり……　玄奘の伝聞に過ぎない言葉であろうから、深く詮議するに当たらないが、フェルガナは元来イラン系民族が住んでいたらしい。アレクサンドロス大王も当地には侵入していない。ただクシャン王朝は当地を併呑したが、人種的にはほぼ同系と見られるから大きな変化を見せたとは思えない。漢代の記事ではあるが、「大宛より以西安息に至る［間は］、国ごとに頗る言を異にすと雖も、然れども大いに俗を同じくし、相に言を知る。その人はみな深眼にして鬚髯多く、市買を善くし分銖を争う。俗として女子を貴び、女子の言うところにして丈夫は乃ち正を決す」とある。

四　ここ数十年来、大君主はなく……　『新唐書』寧遠国伝によれば、「魏・晋より王統の絶えることなく」統一されていたようであるが、唐の太宗貞観年間に王の契苾が西突厥の莫賀咄 Bayatur（官名）の瞰に殺されてより、呼悶城と渇塞城に分立するようになりシル・ダリヤの北に「大城六、小城百」というような姿になった。

五　これより西へ行くこと千余里　『慈恩伝』に、赭時国に続けて「又西することと千余里にして窣堵利瑟那国に至る」とある。窣堵利瑟那国は次節に述べるように Ura-tyube, 或いはその付近であるとすれば、赭時国の南、怖捍国の西方に当たるわけであるから、行程を記した『慈恩伝』の方位は「南」と訂正しなければならぬわけである。

一一　窣堵利瑟那国

窣堵利瑟那国(注一)は周囲千四、五百里あり、東は葉河に臨んでいる。葉河は葱嶺の北のはし（原文「北原」に作る。いま北源・北隅の意にとる）から出て(注二)、西北に向かって流れている。はてしない水は濁り、荒い波は勢いが疾い。産物・風俗は赭時国と同様である。自らは王をいただき、突厥に隷属している。これより西北に向かい、大砂磧に入る(注三)。ここは全く水も草もなく、行手ははてしなくひろがり、国の境もしかとは認め難い。大きな山を遥かに望み遺骨をたずねあてて、方向を知り経路を見つけるのである。行くこと五百余里で颯秣建国（原注　唐に康国という）に至る。

注

一　窣堵利瑟那国　窣（巻頭目録に「蘇没反　*suo*＋*muat*→*suat*」とある）堵利瑟那 *suat*-*tuo*-*lji*-*ṣiet*-*nâ* は Skt. *sutṛṣṇa*（「乾燥」の意）の表記と見られている［V. de St. Martin: *Mém.*, II, 278; S. Beal: *Records*, I, p. 31 (99); T. Watters: *On Y. Ch.*, I, p. 89］。『新唐書』西域伝に、ここは「或いは率都沙那・蘇対沙那・劫布呾那・蘇都識匿ともいう」とある。アラビア文献に Usrūshana, Surūshna, Sutrūshna と見えるもの［Le Strange: *The Lands*, p. 474; *H.-Ā.*, p. 354］であり、*surūshna というイラ語名が再構成されている［Minorsky: *ibid.*］。この地方の首都を Būnjikath（＜Panjikath, Būmič-kath = "Haupt-land"）と称した。今の Ura-tyube の南西十六マイルの地点にある Shahristan とされる［W. Barthold: *Turkestan down &c.*, p. 166; J. Markwart: *Wehrot*, s. 81, 162］が、また今の Ura-tyube そのものとする説もある［Barthold: *ibid.*; Le Strange: *The Lands*, p. 474］。

二　葉河は葱嶺の北のはしから出て……　アラビア地理家によれば、Usrūshna は Jaxartes と Sughd（Zaravshan）両河の中間地帯であり、余り急流はなく運河が発達している。Jaxartes の河源はパミールにあるとする［Le Strange: *ibid.*］。

三　これより西北に向かい、大砂磧に入る　この大砂漠は Jaxartes（シル・ダリヤ）と Oxus（アム・ダリヤ）の両河の間にひろがる Kizil Kum（「赤い砂」の意）砂漠である。玄奘の通路はトルキスタン山脈の北麓にそう地帯を行ったものであろう。玄奘の記述より見て、おそらく今日の公道の Ura-tyube より北北西に向かい Ursat'yevskaya を通り、道を南

西に転じ、Dzizak——Samarkand と通ずる道を進んだようである。しかし、中世イスラム期の交通路は、もっと南の山寄りを Ura-tyube——Sabat——*Zamin* を経由し、*Dzizak* を通らずにサマルカンドに達したもののようである [Le Strange: *The Lands*, p. 433 (map); *AMS Map*, NJ42, NK42]。

一二 颯秣建国

颯秣建(サマルカンド)国[注一]は周囲が千六、七百里あり、東西が長く、南北が狭い。国の大都城[注二]は周囲二十余里である。非常に堅固で住民は多く、諸国の貴重な産物[注三]がこの国にたくさんあつまる。土地は肥沃で農業が十分行きとどき、木立ちはこんもりとし花・果(なりもの)はよくしげっている。良馬を多く産する。機織の技は特に諸国よりすぐれている。気候は温和で、風俗は激烈である。すべての胡国はここをその中心としている。進退礼儀は遠近の諸国ともに、ここにその手本をとるのである。ここの王は豪勇の人で[注四]、隣国はその命を承(う)けている。兵馬は強盛で、多くは赭(チャ)羯(カル)である。赭羯[注五]の人は、その性質が勇烈であり、死を視(み)ること帰するがごとく、戦って前に[打ち向かう]敵がないほどである。これより東すると弭秣賀(マーイムルグ)国(原注　唐に米国という)に至る。

注

一　颯秣建国　颯秣建 *sâp*。*-muât*。*-kịɒn*。は、古くアレクサンドロス大王によって占領破壊され(前三九)、ギリシア・ローマの地誌には「ソグディアナの一部の首都 Maracanda」[*Arrian*, III. XXX. 6.] の名で伝えられたが、その後五世紀ごろまでは史書に名を出さない。漢籍には、悉萬斤[『魏書』]・薩末鞬 [『新唐書』] とも書かれ、また康国 (康=kand) [『隋書』『新唐書』」とも略称された。サマルカンドの "samar-" の意義はいまなお不明である [J. Markwart: *A Catalogue*, pp. 26 ff.]。

二　国の大都城　現在のサマルカンドの北郊アフラシャブ Afrasiab とよばれる廃址が、前五世紀より一二二〇年に蒙古軍により破壊されるまでの古代首都があったところであり、ソグド文化全盛期の六―八世紀をふくむものである [A. L. Mongait: *Archaeology in the U. S. S. R.*, p. 246-8; V.A. Shyshkin 稿加藤九祚訳:「古代文化の宝蔵——アフラシャブ」『西域の秘宝を求めて』所収に詳しい]。アフラシャブは、東西・南北ともに一・五キロの三角形をなし、二百十八・九ヘクタールの面積がある [香山陽坪:『砂漠と草原の遺宝』九一ページ]。遺址のプランは、A. L.Mongait,『世界考古学大系』九、加藤九祚訳書に見える。

三　諸国の貴重な産物……　サマルカンドの気候・風土・産物・風俗等に関する玄奘の文を補足し裏付けるような資料としては、まず、アフラシャブから発掘された七世紀の住居・壁画があり、文献としては『隋書』『唐書』の康国伝、『通典』所収の「韋節西蕃記」がある。イスラム期の記事にも参考となるものが多い、即ち Le Strange: *The Lands*, pp. 463-4; Minorsky: *Ḥ.-'Ā.*, p. 113; Barthold: *Turkestan down &c.*, pp. 83-92; Markwart: *Catalogue*, pp. 26 ff. 等である。なお『慈恩伝』によれば、当時のサマルカンドは拝火教が盛行し、仏教寺院にも僧の居ることがないほどであったが、玄奘は王に仏の福利を説き、授戒帰依せしめたことの一部始終を詳記している。

四　王は豪勇の人で　いわゆる「九姓昭武 Cub 氏」の本幹の家柄で、『唐書』康国伝等には「もと月氏の人」とトルコ系のごとく記し、その王の姓は「温」と言ったとある。人民はイラン系のソグド人である [白鳥:「粟特国考」『西域史研究』下一〇一ページ]。隋代に突厥に臣属したが、西突厥の滅亡後の貞観五年 (六三一) には唐に入貢している。

五　赭羯　従来、地名のごとく解する説 [S. Beal: *Records*, I, p. 33 (103); T. Watters: *On Y. Ch.*, I, p. 94] もあるが、この語は『新唐書』西域伝安国 Bukhara の条に、「勇健なる者を募り柘羯となす。柘羯とは中国に戦士と言うことときものなり」とある「柘羯」と同語である。赭羯 °*tśịa-kịɒt*。は Čagatai, Osman, Kumück., Mong. *čaqar*; Kirg. *šaqar*; Kalmück. *tsaχar*; Sogd. *čaqar* < per. (neupers. *čākar*) と同語で、「従

者」の原意から「勇敢な戦士」の意に転用されたものらしい [Ramstead: *Kalmück. Wörterb.*, s. 420 a; Chavannes: *Documents*, p. 313]。後代のアラビア地理家が、*chākir, shākir* とよんでいる貴族の子弟によって構成された名誉ある近侍・親衛隊（西洋中世の宮廷における騎士の子弟のようなもの）の原初的なものであったろう [Barthold: *Turkestan down &c.*, p. 180]。

一三　弭秣賀国

弭秣賀(マーイムルグ)国(注一)は周囲が四、五百里あり、川の中に拠っている。(注二) 東西は狭く、南北は長い。物産・風俗は颯秣建国と同じである。これより北すると劫布呾那(カブータナ)国（原注　唐に曹国という）に至る。

注

一　弭秣賀国　この名は『慈恩伝』に記載されていない。伝聞国である。弭秣賀 °*mjię-muât*。*-γâ*° は西方文献に見える *māymurgh* [Le Strange: *The Lands*, p. 465（サマルカンドより約一リーグ（約三キロ）の地点とする）; Barthold: *Turkestan down &c.*, pp. 92-3], *māimurgh* [Markwart: *Wehrot*, s. 162] である。「米国」の「米」はその第一音節にあたる。

二　川の中に拠っている　Māymurgh は Zaravshan 河がサマルカンドの東南六十八キロのピャンジケントを過ぎて西北に流れるあたりより、多くの河川に分流するその三角州中にある小地域であり、従って玄奘の記すような地形となっている。サマルカンドの衛星都市十二城のうち、南方六城の一である [Barthold: *ibid.*]。ちなみに、ピャンジケント Piandzhikent (or Pendjikent, 土名 Panca, Med. Pers. *Panje-kath* < Soghd. *Panca-kanth*「五つの都邑」[Markwart: *Catalogue*, p. 26; G. Morgenstierne: *An Etymological Vocabulary of Pashto*, No. 168]）およびサマルカンドの東方約二百キロの Mug 山城市は八世紀にアラビア人に殲(せん)滅された遺址であるが、最近ソ連の考古学的発掘が行なわれ、ソグド語・アラビア語・中国語の文書やその他多くの日常生活用品を含む遺物が発見され、報告された [A.L. Mongait: *ibid.*, p. 250 ff.;『世界考古学大系』九、七九―八〇ページ; 加藤九祚訳:「古代ピャンジケント」『西域の秘宝を求めて』所収]。

一四　劫布呾那国

劫布呾那(カブータナ)国(注一)は周囲が千四、五百里あり、東西は長く、南北は狭い。(注二) 物産・風俗は颯秣建(サマルカンド)国と同じである。この国より(注三)西へ行くこと三百余里で屈(ク)（原注　居勿反 °*kịwo*＋*mịuət*。→*kịuət*。）霜(シャー)（原注　去声 *sịang*°）你迦(ニーヤ)国（原注　唐に何国という）に至る。

注

一　劫布呾那国　この国も『慈恩伝』の旅程に出ていない。従って前項末の「これより北すると」の「これより」と方向を示す起点は、サマルカンドを意味するものと見るべきであろうか？　一般に、このような点については、『西域記』の記述は明確でない。劫布呾那 *kịәp*。*-puo*°*-tât*。*-*。*nâ* は「アラビヤ人の所謂 Kapūtāna に当る。Samarkand から西北に Kodym Tau 山脈の麓、Bulanghyr 河の流域に今 Gubdan, Gubdun と呼ぶ処がある。古の Kapūtāna の遺跡であろう」[Tomaschek: *Centralasiatische Studien*, 1, p. 149, 今は白鳥:「粟特国考」『西域史研究』下一〇七ページによる] とあるものであろう。Tomaschek のいう Kapūtāna の出所をいま検出し得ないが、同じく西方文献に見えるサマルカンドの衛星都市十二城のうち北方六城の一である Kabūdhanjakath [Le Strange: *The Lands*, p. 466;（サマルカンドより二リーグ＝約六キロの地点とする）; W. Barthold: *Turkestan down &c.*, p. 92] と同一都市を指すのであろ

う。Kara-dar'ya の東方三十七、八キロの Mitan 地方にあてられている [Watters: *On Y. Ch.*, I, p. 97]。劫布呾那はまた伽不単とも書かれ、古く『魏書』西域伝に「伽不単国は伽不単城に都す。悉萬斤（サマルカンド）の西北にあり」と見えている。また別名「曹国」とは、正しくは東・西・中の三曹国に分けられるなかの「中曹国」である。東曹国は率堵利瑟那国、すなわち今の Ura-tyube, 西曹国は瑟底痕城［『唐書』］、すなわちアラビア文献の Ištiχăng である［白鳥：同上書一〇六－七ページ］。

二　東西は長く、南北は狭い　Zaravshan 河の多くの分流が西流する河間にあり、地勢上玄奘の記述のような形となっている。

三　この国『慈恩伝』に颯秣建国より「西のかた三百余里で屈霜你迦国に至る」とあるより見れば、ここにいう「この国」とは颯秣建国を指すものと見るべきであろう。『西域記』記述の一般例に相違した書き方である。颯秣建国およびその近辺は、当時仏教はほとんど終熄（そく）し拝火教のみ盛行していた故か、近隣の衛星都市も玄奘は伝聞を記すのみで前途を急いだものと見える。

一五　屈霜你迦国

屈霜你迦（クシャーニーャ）国（注一）は周囲が千四、五百里あり、東西は狭く、南北は長い。（注二）物産・風俗は颯秣建国と同じである。この国より西へ行くこと（注三）二百余里で喝捍（カリガーンカト）国（原注　唐に東安国という）に至る。

注

一　屈霜你迦国　屈霜你迦 *kiuət*。*-siang*°。*-°ni-*。*ka* は、また貴霜匿［『唐書』康国伝］とも書かれる。「唐言何国」の「何」は略称であろうが、よくは分からない［白鳥：「粟特国考」『西域史研究』下一一五ページ］。西方文献の Kushāniya, Kushāni [Le Strange: *The Lands*, p. 466; Barthold: *Turkestan down &c.*, p. 95; 白鳥：同上書一一五ページ] のことで、サマルカンドの西北約十四リーグ（約四十キロ）余の地点と考えられている [Le Strange: *ibid.*]。またサマルカンドの西北約百キロの Panj-shamba 地方なりともいわれる [T. Watters: *On Y. Ch.*, I, p. 97]。kushāniya の梵語形か。

二　東西は狭く、南北は長い　Maqdisi（九八二年）によれば、Kushāniya の幅は「一日行程」、縦は僅かに「二駅」に過ぎないといわれる [Barthold: *Turkestan down &c.*, p. 96]。

三　この国より西へ行くこと　「古本」のみが「西行二百余里」とあり、他のテキストには「行」字なく、あたかも伝聞国かと思われる記述であるが、当地は『慈恩伝』の行程にも見えるもの故、いまは「行」字を補い、親践国として訳した。

一六　喝捍国

喝捍（カリガーンカト）国（注一）は周囲が千余里あり、物産・風俗は颯秣建国と同じである。この国より西へ行くこと（注二）四百余里で捕喝（ブハラ）国（原注　唐に中安国という）に至る。

注

一　喝捍国　喝捍 *χât*。*-γân*°。は『唐書』西域伝に「東安あるいは小国といい、喝汗という。那密水（Iran. *namidh*「栄滋」の意、Zaravshan 河をさす）の陽（きた）にあり。東は河を隔たること二百里ばかり、西南は大安に至る四百里。喝汗城を治む。また襪斤ともいう。大城二十、小堡百あり」と指す九姓昭武の一である。西方文献に見える Kharghānkath をさすことに諸家ともに異論はないが、今の Kermine なりとする説 [Julien: *Mém.*, ii, p. 282] と、Kermine の北方約八、九キロの Kalkan-ata とする説 [Tomashek: *Sogdiana* (Barthold: *Turkestan down &c.*, p. 98 による)] とがある。いまに流布する土地の伝説から考えるに、後者の方に信憑（しんぴょう）

性があるようである。「東安国」については次項の注一参照。

二　この国より西へ行くこと　諸本ともに「行」の字がなく、伝聞国かと思わせる記述であるが、『慈恩伝』の旅程にも見えるもの故、いま「行」字を補い親践国として訳した。

一七　捕喝国

捕喝国（フハラ）(注一)は周囲が千六、七百里で、東西が長く、南北が狭い。物産・風俗は颯秣建国と同じである。この国より西へ行くこと(注二)四百余里(注三)で伐地国（原注　唐に西安国という）に至る。

注

一　捕喝国　捕喝 *b'uo°-χât*。は、魏代の古名を忸密『唐書』Nūmijkath（しばしば誤って Būmijkath とも）といい、また副貨『魏書』『北史』、布豁『唐書』とも書かれ、「その東北は東安国（喝捍国 Kharghānkath）と境を接し、西南は畢（*Pat-kand, Paikand）に至り、西は烏滸水（Oxus＝アム・ダリヤ）にのぞむ。大城は四十、小堡は千余あり」『唐書』西域伝」とある。Türk. *Buqaraq*, neupers. *Buchārā* と記録され、七世紀初頭に Buchārā の名があらわれる（古代名は Būmič-kath, 五世紀には Nōk-mēthan といわれた）。中安国・東安国・西安国の「安」は、「安国は漢時の安息国 Aršak なり」『隋書』西域伝」とあるように、古名の省略形である［Le Strange：*The Lands*, p. 460；Barthold：*Turkestan down &c.*；Minorsky：*H.-'Ā.*, p.352；R.N. Frye：*History of Buchara*；W. Henning：*BSOS*, 9, p.549］。九姓昭武の一。一体にブハラ Buchara 周辺の都市名および位置には、イスラム期においても疑わしいものが多くて、その決定には困難を感じる［Barthold：*ibid.*, p. 113］。古代ブハラの遺址は今の都城の西北数マイルの河岸にあり、Riyāmithan の名でよばれている。Maqdisi によればすこぶる盛栄したようである［Le Strange：*ibid.*, p. 462］。V. A. Shyshkin によるソヴェトの調査隊（一九三七―三九、一九四七―五三）は、今のブハラの西方約三十五キロの砂漠中にイスラム侵攻以前の、特にその全盛期である六世紀以後の当地の支配者の宮殿―Varakhsha の遺址―を発掘したが、そこで玄奘通過当時の見事な壁画も発見された［A. L. Mongait：*Archaeology*, p. 249；T.T. Rice：*Ancient Arts of Central Asia*, pp. 96 ff.；『世界考古学大系』九、八〇ページ：香山陽坪：『砂漠と草原の遺宝』一三一―一三八ページ］。

二　この国より西へ行くこと　石山本に「行」の字があるほか他本にはないが、『慈恩伝』の旅程にも見えるもの故、「行」字を補い親践国として訳した。

三　四百余里　『慈恩伝』には「百余里」とし、両者大差がある。

一八　伐地国

伐地国(注一)は周囲が四百余里ある。物産・風俗は颯秣建国と同じである。これより西南へ行くこと(注二)五百余里で貨利習弥（クワーリズム）伽国に至る。

注

一　伐地国　原名・位置ともに未詳。伐地はまた戊地［異本・音釈・『唐書』火尋国の条］・戍地［『唐書』康国の条］の異文がある。従来は伐地 *b'i-wɒt°-d'i*。をアム・ダリヤ沿岸の Bētik なりとしたり［Julien：*Mém.* II, 283；Beal：*Records*, I, p. 35 (114)］、『隋書』康国伝・『文献通考』巻三三八に出せる烏那曷国」なりとした［堀：『解説』七〇ページ］。また、『魏書』西域伝に「牟知国は牟知城に都す。忸密（Nūmijkath＝ブハラ）の西南にあり」とある牟知国が方位・距離ともに戊地・戍地・伐地とはほとんど同じであり、音声的には戊地と酷似するという理由から「戊地」をとる説［白鳥：「粟特国考」『西域史研究』下一二四ページ以下］もある

が、現在の何所を指すかは未確定である。いずれにしても、ブハラより西南行する唯一の公道上にあり、現在のアム・ダリヤ河岸の要地 Char-dzhou の近辺であろう。「西安国」については、前項「捕喝国」の注一参照。

二　これより西南へ行くこと　諸本ともに「行」の字はないが、『慈恩伝』の旅程に見えるから、いま「行」字を補い親践国として訳した。また「西南」の二字は、『慈恩伝』には「西」一字に作り、『唐書』の記事には「西北」に作る。地理的には『慈恩伝』の記述が正しい。

一九　貨利習弥伽国

貨利習弥伽国(クワーリズム)[注一]は縛芻河(アム・ダリヤ)の両岸に順(そ)い、東西二、三十里、南北五百余里ある。物産・風俗は伐地国と同じであるが、言語[注二]は少しく異なる。颯秣建国より西南へ行く[注三]こと三百余里で羯霜(原注　去声 siang°)那国（原注　唐に史国という）に至る。

注

一　貨利習弥伽国　貨利習弥伽 *χuâ°-lji°-ziəp°-°mjię-°g'ia* は西方文献に見える Chōrasmia [*Arrian*, IV. 15. 4.], *χvārazm*, Khwārizm [Minorsky: *Ḥ.-'Ā.*, p. 370; Barthold: *Turkestan down &c.*, p.142 ff.; Markwart: *Catalogue*, §10, p.34; W.W.Tarn: *The Greeks in Bactria and India*, pp. 478-80 (Appendix II, *Chorasmia*)] である。呼似密〔『魏書』〕・火辞弥〔『新唐書』波斯伝〕・火尋・貨利習弥・過利〔『新唐書』康国伝〕。今の Khiva（アム・ダリヤの西岸）なりとする説 [Watters: *On Y. Ch.*, I, p.99] がある。当地方は、元来、ペルシア側の Jurjāniyah (Gurgānj, Urgench) とトルコ側の Kath との両地区に分けられるが、十世紀ころまでは Kath の方が中心となっていた [Le Strange: *The Lands*, pp. 446 ff.; Barthold: *Turkestan down &c.*, pp.144 ff.]。この地方の古代文化の遺址は一九三〇年代より調査が行なわれ、Toprak-kala, Janbas-kala, Teshik-kala などの四世紀から七世紀にわたる古代ホレズム文字による文書を含む遺物が出土紹介された [A. L. Mongait: *Archaeology*, p. 235-44; T.T.Rice: *Ancient Arts*, pp. 115 ff.; 加藤九祚訳:『西域の秘宝を求めて』八七―一六〇ページ; S・P・トルストフ著大串純夫・梶川温彦訳:「ソヴィエト領中央アジアの古代壁画――トプラク・カラ発掘について」『仏教芸術』二〇、八一―九五ページ]。

二　言語　七世紀の貨利習弥伽国の言語は Khwārizm 語といい、中期イラン語の東部語群に属し、ソグド語や東トルキスタンの Saka-Khotanese などと近縁関係にある。今に伝わる資料は多くはないが、ソヴェトの調査隊が相当多数の木および紙に書かれた経済関係文書を収集した [Mittel-iranisch, in *Handbuch der Orientalistik*, Band IV: Iranistik, I. Linguistik]。

三　颯秣建国より西南へ行く　『慈恩伝』の旅程によれば、貨利習弥伽国より一度颯秣建国へ帰り、そこから羯霜那国へ行ったように読みとれる。

二〇　羯霜那国

羯霜那国[注一]は周囲が千四、五百里ある。物産・風俗[注二]は颯秣建国と同じである。

注

一　羯霜那国　羯霜那 *kiɒt*。*-siang*°-。*nâ*、アラビア資料の Kaṣṣārin, Kaṣṣābin, ペルシア資料の Kazurān, Kaṣṣābān [Barthold: *Turkestan down &c.*, p. 134 (2)]。「アラビヤ人の所謂 Kaššāna, Kaššāniya」とするものもある [白鳥:「粟特国考」『西域史研究』下一二九ページ] が、その出所を詳かにしない。また羯霜那を梵語 Kasanna の訳音とする説もある [張星烺:『中西交通資料滙篇』五、一三四ページ (三八)]。乞史・佉沙 [『唐

書』西域伝]。十三世紀のアラビア資料によるとまた Kish（正確には Kishsh であるが、土地の発音では Kiss)、新しい綴りでは Kesh とも書かれる。現在の地名は Shahr-i-sabz, Shakhr-i-syabz (="Green City", 土地の発音では Shaar-sabiz, この名は十四世紀に始めて現われるという）といい、サマルカンドの南南西約六十五キロ、二日行程といわれる地点にあり、Kashka darya (Kaska rūd) にそう城市である。「史国」は Kesh, Kish の末音を表わすものであろう [Barthold: *ibid.*, p. 134 (5); Le Strange: *ibid.*, pp. 441-3; E. Bretschneider: *Med. Res.*, II p. 273 (1088)]。九姓昭武の一。

二　物産・風俗　当地の物産・風俗および城市の状況については前掲の Minorsky, Le Strange, Barthold の書に詳しい。

二〇・一　**鉄門**　これより西南に行くこと二百余里で山に入る。(注一)山路は険しく、谿の径もあぶない。人の住む里もなく、水草にも乏しい。東南へ山を行くこと三百余里で鉄門に入る。(注二)鉄門(注三)というのは左右に山を帯びていて、その山はきわめてけわしい。狭い道があるとはいうものの、狭いだけではなくあぶなっかしいものである。両側には石が壁のようにそばだち、その色は鉄のようである。門がしつらえてあり、鉄で扉が作られている。(注四)たくさんの鉄の鈴があり、これを扉にかけてある。その険固なことにちなんで「鉄門という」名とした。

注

一　行くこと二百余里で山に入る　羯霜那国 Kesh (今の Shahr-i-sabz) から西南へ約七十キロの地点にある Guzar から東南に折れ、Guzar darya の渓谷に入る。

二　行くこと三百余里で鉄門に入る　「Kesh より三日の行程で Kandak（恐らく Kichi-uru-darya 渓谷にある）に着く。Kandak より一日行程で鉄門に着く。鉄門を通って Tirmidh へは三日の行程で到着する」[Barthold: *Turkestan down &c.*, p. 138]。

三　鉄門　鉄門は Türk. *Tämir qapïγ* [小野川秀美:『突厥碑文訳注』四六・一七一ページ], Mong. *Timūr-kahaka, Kohlūgha, Kalugah* [Yule & Cordier: *Marco Polo*, I. p.54n.; Beal: *Records*, I, p.36 (119)], Arab. *Bāb-al-Hadīd* [Le Strange: *The Lands*, pp.441-2], Pers. *Dar-i-Āhanīn*, 現在その地では *Buzgala* とよばれている [Barthold: *ibid.*, p. 138]。今の Derbent (Darband) 西方十数キロの地点、長さ三キロにわたるという [Barthold: *ibid.*]。

四　鉄で扉が作られている　鉄門の状況は『唐書』西域伝康国の条、『慈恩伝』にも見えるが、おくれて十五世紀のクラビーホの記事も詳細である [山田信夫訳:『チムール帝国紀行』一八四―六ページ]。それによれば、「人々の話では、むかしは実際に鉄でおおわれた大きな関所の戸があり、その絶壁の間の道は閉めきられていて、誰も許可なしには通れなかったという」とある。鉄門の状況に関する史上最初の記事はこの『西域記』のようである。

覩貨邏

二〇・二　**覩貨邏国総記**　鉄門を出て覩貨邏国（原注　旧に吐火羅国という。訛なり）(注一)に至る。その地は(注二)南北千余里、東西三千余里ある。東は葱嶺にせまり、西は波剌斯に接し、南は大雪山あり、北は鉄門に拠っている。縛芻(注三)の大河が国の中ほどを西へ流れている。ここ数百年来、王族は嗣をたち、豪族力をきそいあい、おのおの君主をほしいままに立てている。川に依り険に拠り、二十七国(注四)に分かれ、野を画って区分しているものの、全体としては突厥に隷属している。気候も温く、疫病も多い。冬の終わり春の初めには、霖雨がひき続く。それ故、この地域より南、濫波(注五)より北は、その国々の風土は何れも熱病が

多い。そこで僧徒たちは、十二月十六日をもって安居(注六)に入り、三月十五日をもって安居を解くのであるが、これはすなわちその多雨の故であり、これもまた教えを設けるのに適当な時に随ったものである。人人のありようは性格臆病に顔貌はいやしい。ほぼ信義は心得ており、あまり人を欺いたりはしない。言語(注七)進退はやや諸国に異なっている。字のなりたちは二十五言あり、［それが組み合わさって］次第に［語彙・文章が］でき、これを用いて必要に備えている。書は横読みをし、左から右に向かう。記録も漸く多く、窣利よりもはるかに広まっている。㲲（木綿織物）を衣ること多く、褐を服ることは少ない。通貨は金・銀などの銭を用い、模様は諸国とは異なっている。縛芻河の北に順って流れを下り呾蜜国に至る。



クシャン王の塑像頭部，ハルチヤン出土

注

一　覩貨邏国（……）　覩貨邏 °*tuo-χuâ°-lâ*°（「邏」字は『慈恩伝』に「羅°*lâ*」に作る)。古く漢籍には、兜佉勒［道安『増一阿含経』］、兜呿羅［羅什『大智度論』］、兜沙羅［求那跋陀羅『雑阿含経』］、吐呼羅［『魏書』］、吐火羅［『隋書』『北史』『唐書』］、土豁羅［『新唐書』］。梵語文献には、*Tukhāra, Tuṣāra* [*Mahābhārata, Rāmāyana*]、チベット語文献には、*Tho-kar, Tho-gar, Thod-kar, Thod-dkar, Thod-gar* [F. W. Thomas: *Tibetan Literary Texts & Documents concerning Chinese Turkestan*, IV]. ソグド語文献には *'trw'rk* [atχua:rak] [W. B. Henning: *Agri and the "Tokharians"*, *BSOS*, 9 (1938)]. ギリシア語文献には、*Tochari, Tocharoi* [Tarn: *Greeks in Bactria & India*, pp. 515 ff.]. 玄奘の覩貨邏（羅）と、誤りとする旧訳の吐火羅との用字の差異は、主として原語の長母音である第二音節にあたる漢字の声調の点にあろう。

二　その地は　覩貨邏国の領域は、玄奘に従えば今日のアフガニスタンの北部、東は葱嶺（パミール）、西は波剌斯（ペルシア）、北は鉄門（デルベントの北西）、南は大雪山（ヒンドゥークシュ）となるが、この範囲は決して一般的なものではなく、諸家の理解は必ずしも一定しているわけではない［Le Strange: *The Lands*, pp. 427-8; Barthold: *Turkestan down &c.*, pp. 66-8; Minorsky: *Ḥ.-'Ā.*, p. 337］。

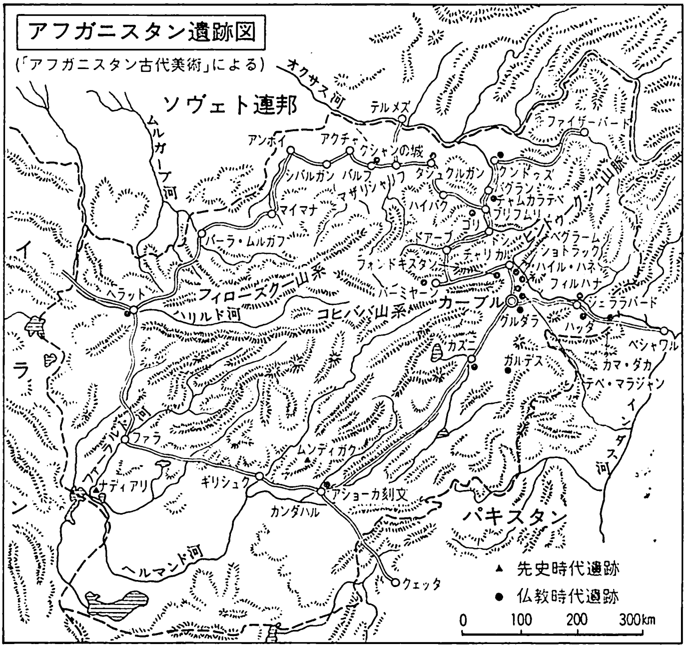
三　ここ数百年来、王族は嗣をたち　この地方は、漢の張騫往訪時のバクトリア（大夏）王国以来、原住民のイラン族は大月氏、貴霜帝国、嚈噠族、突厥等、ひきつづき異民族により征服支配をうけた。

四　二十七国　覩貨邏二十七国の内容は正確には分からないが、『西域記』によるに、巻一の呾蜜国より掲職国までの十六国が「覩貨邏国」、巻十二の安呾邏縛国より達摩悉鉄帝国までの十三国が「覩貨邏国故地」、両者併せて二十九国となる。『新唐書』吐火羅伝によれば、「顕慶中（六五六—六〇）、その阿緩城 Kunduz をもって月氏都督府となし、小城を析きて二十四州となす」とある。

五　濫波　濫波国については巻二の二参照。

六　安居　安居については巻二の一・四参照。

七　言語　この覩貨邏国の言語は、タリム盆地の天山山脈南麓で行なわれたいわゆる「トカラ語 Tokharian」とは関係がない。当地の言語はイラン語に属するものである。この地方では、グレコ・バクトリア期以来ギリシア語・ギリシア文字が行なわれていて、貴霜王朝ではクシャン語もギ



リシア文字で書かれていた。この地方のギリシア語は早く使われないようになったが、ギリシア文字は広い地域にわたり厭噠期までその貨幣の文字に見られる。そこでは、通常のギリシア・アルファベット二十四文字と sh の音価をもつと思われる特別の一文字を合わせて、計二十五文字が見られる。玄奘の指しているものはこれであろう〔Tarn : *Greeks in Bactria & India*, p.305, 508 ; H. Humbach : *Baktrische Sprachdenkmäler*. 2 Bde., 1967〕。

二　呾蜜国

呾蜜(テルメズ)国(注一)は東西六百余里、南北四百余里ある。国の大都城は周囲二十余里である。東西は長く、南北は狭い。伽藍(がらん)(注二)は十余ヵ所、僧徒は千余人いる。多くの窣堵波(ストゥーパ)(原注　即ち旧にいわゆる「浮図」なり、また「鍮婆」ともいい、また「塔婆」ともいい、また「私鍮簸」ともいい、また「薮斗波」ともいう。みな訛なり)(注三)および仏の尊像は神異(ふしぎ)なことが多く、霊鑒(ごりやく)がある。東すれば赤鄂衍那(チャガヤーナ)国に至る。

注

一　呾蜜国　呾蜜 *tat*。-*mjĕt*。，即ち今の地図上のテルメズ Termez, Tirmid である。今日のソヴェト国境に位置し、アム・ダリヤを南に越えればアフガニスタン領である。この地方の土語では今日も Tarmidh と発音されている〔Barthold : *Turkestan down &c.*, pp.74-5〕。また怛満・怛没〔『新唐書』大食伝〕。この町は当地方における交通の要衝にあたる最も重要な都城であり、厳重な城廓で取り巻かれていたとイスラム地理学者は伝えている。蒙古軍の破壊後の新市街は旧市街の北方二マイルに作られた〔Le Strange : *The Lands*, p.440〕。玄奘はアム・ダリヤをテルメズ付近の渡船場 Patta-kesar で渡った〔フシェ：「アフガニスタンに於

ける玄奘三蔵旅程の註解」『仏教美術研究』一〇九ページ、（以後「フシェ『註解』」と略称する）」ものか、あるいはアム・ダリヤの北岸をさらに東進し、Takht-i-Quwwa にて渡河、クンドゥズ Kunduz 河沿いに南進してクンドゥズに至ったものであろう。渡河点および渡河の状況・進路については『慈恩伝』にも明記はない。なお、呾蜜国より忽懔（クム）国（一・三二）までは『慈恩伝』の行程には見えず、ために親践国には非ずして、伝聞国であると見なした。敦煌本（S二六五九）に「唐に笂国と言う」の挟注あるも、意味不明。

二　伽藍　この地方の仏教寺院はソヴェトの考古学調査隊により調査報告されている。それによれば、テルメズ付近に一世紀ごろの岩窟寺院が、またテルメズから十八キロ上流の Airtam からは同じく一世紀ごろの仏寺の彫刻が発見されている［Mongait: *Archaeology*, pp. 244-6; Rice: *Ancient Arts*, pp.130-1；香山陽坪：『砂漠と草原の遺宝』七一・八〇ページ］。

三　窣堵波（……）　窣堵波 *suət。-°tuo-。puâ* は Skt. *stūpa*, Pa. *thūpa*, Pkt. *thūva*, Aśok. Ins. *thube*, Khar. Ins. *thuba*, *thuva* [Turner: *Comp. Dict.*, no. 13710]. 浮図 **b'i̯ŏg-d'âg* → 。*b'i̯əu-*。*d'uo* は **bud'-thū* <Pkt. *buddha-thūva* か。鍮婆・塔婆は俗語に対し、私鍮簸・藪斗波は正梵音を意図したものであろうが、玄奘当時の中古音の場では、すでに音声的に十分な表記とは言えなくなったものである。

二二　赤鄂衍那国

赤鄂衍那（チャガヤーナ）国(注一)は東西四百余里、南北五百余里ある。国の大都城は周囲十余里ある。伽藍は五ヵ所で、僧徒は少ない。東すれば忽露摩国に至る。

注

一　赤鄂衍那国　伝聞国である。赤鄂衍那 *tśi̯äk。-ngâk。-i̯än°-。nâ* は Altpers. *čaranijān*, Mit. pers. **čakānikān*, Arab. *ṣaghāniyān* [Markwart: *Wehrot*, s. 36; Le Strange: *The Lands*, p.20] の梵語形 **cagayāna* のようなものを意図したのであろう。かつて Kafirnihan 河の上流の Hissar, Hisar (Stalinābād すなわち以前のドゥシャンベ Dushambe の西南約二十キロ）に比定された [Beal: *Records*, I, p.39 (126)] が、今は Surkhan darya の上流の Denau（= Dih-i-naw, "new village"）に当てられている [Barthold: *Turkestan down &c.*, p.72-3; Minorsky: *Ḥ.-'Ā.*, p.353]。

二三　忽露摩国

忽露摩国(注一)は東西百余里、南北三百余里ある。国の大都城は周囲十余里ある。その王は奚素突厥(注二)である。伽藍は二ヵ所、僧徒は百余人いる。東すれば愉（シュ）（原注　朔倶反(注三) *sâk。+。ki̯u→。si̯u*）漫（マン）国に至る。

注

一　忽露摩国　伝聞国である。忽露摩 *χuət。-luo°-。muâ*, かつては Wakhsh ab (Surkh ab) の上流にある Garm, Garma にあてられた [Beal: *Records*, I, p.39 (127)] が、近くは Denau 即ち古えの赤鄂衍那（チャガニャーナ）国とスタリナバード（ドゥシャンベ）の間にあてられ、その原音を中世の Kharūn, Ākharūn とされている [Chavannes: *Documents*, p.195; Barthold: *Turkestan down &c.*, p.74]。

二　奚素突厥　奚素 。*riei-suo°*, 原音未詳。突厥の種族名とするのみで何の説明も見られない [Beal: *Records*, I, p.40; Chavannes: *Documents*, p. 195, 276]。或いは『唐書』巻二一九奚伝にいう「庫莫奚」族（東胡種、隋代より単に「奚」と略称する）のものであろうか。後考を俟つ。

三　朔倶反　巻頭目録に「色倶反 *si̯ək。+。ki̯u* → 。*si̯u*」に作る。帰するところの音声には変わりはない。

二四　愉漫国

愉漫国(シュマン)(注一)は東西四百余里、南北百余里ある。国の大都城は周囲十六、七里である。その王は奚素突厥である。伽藍は二ヵ所、僧徒は少ない。西南して縛芻河に臨めば鞠和衍那(クワーヤーナ)国に至る。

注

一　愉漫国　伝聞国である。愉漫 ₒśịu-muân° はイスラム地理学者の Shumân, Shūmān [Beal: *Records*, I, p.40 (128); Le Strange: *The Lands*, pp. 439-40; Barthold: *Turkestan down &c.*, p.74; Minorsky: *Ḥ.-'Ā.*, p. 353] であり、タジク共和国の首都スタリナバード（以前のドゥシャンベ）に比定されている [Minorsky: *ibid.*]。

二五　鞠和衍那国

鞠和衍那(クワーヤーナ)(注一)国は東西二百余里、南北三百余里ある。国の大都城は周囲十余里である。伽藍は三ヵ所、僧徒は百余人いる。東すれば鑊沙(ワクシュ)国に至る。

注

一　鞠和衍那国　伝聞国である。鞠和衍那 *kịukₒ-ruâ°-°ịän-ₒnâ*, 今の Kafirnihan darya と Wakhsh āb (Surkh āb) の河間にある Kabadian（アム・ダリヤの南のタシュクルガン Tashkurgan より北北東九十二キロの地点）に比定される [Beal: *Records*, I, p.40 (128)]。Altpers. *Kawādijān*, Mit. pers. **Kawātikān*, イスラム地理学者の *Kubādhiyān*, *Kuwādhiyān* [Le Strange: *The Lands*, p.439; Barthold: *Turkestan down &c.*, p.71; Markwart: *Wehrot*, s.36] であり、この梵語形 **Kuvāyāna* を想定したものであろう。一・三「赤鄂衍那国」の条参照。

二六　鑊沙国

鑊沙(ワクシュ)国(注一)は東西三百余里、南北五百余里ある。国の大都城は周囲十六、七里である。東すれば珂咄羅(クッタル)国に至る。

注

一　鑊沙国　伝聞国である。鑊沙 *rwâkₒ-ₒșa*, Wakhsh āb の流域 Kurgantyube の平地にある Wakhsh 国。イスラム地理家の Baxšu で、今の Halāward に当たるという [Le Strange: *The Lands*, p.434; Barthold: *Turkestan down &c.*, p.69; Markwart: *Wehrot*, s. 31; Minorsky: *Ḥ.-'Ā.*, p.120, 209]。

二七　珂咄羅国

珂咄羅(クッタル)国(注一)は東西千余里、南北千余里ある。国の大都城(注二)は周囲二十余里である。東して葱嶺に接(ちか)づけば拘謎(クマー)（原注　莫閉反　*mâkₒ* + *piei°* → *miei°*）牠(ド)国に至る。

注

一　珂咄羅国　伝聞国である。珂咄羅 ₒk'â-tuât₀-ₒlâ. Wakhsh āb と Panj 河（アム・ダリヤの上流）の間の地方。Khuttal, Khuttalān とよばれている [Beal : *Records*, I, p.40 (130) ; Barthold : *Turkestan down &c.*, p.69 ; Minorsky : *Ḥ.-'Ā.*, p.359]。

二　大都城　Khuttal の首都はアム・ダリヤ河畔の Hulbuk であった [Le Strange : *ibid.*, p.435 ; Barthold : *ibid.*]。

二八　拘謎陁国

拘謎陁国(注一)は東西二千余里、南北二百余里あり、大葱嶺（パミール）の中に拠っている。国の大都城(注二)は周囲二十余里である。西南は縛芻河に隣りし、南は尸棄尼国(注三)に接している。南して縛芻河を渡れば達摩悉鉄帝国・鉢鐸創那国・淫薄健国・屈浪拏国・呬（原注　火利反 °χuâ+lji°→χji°）摩呾羅国・鉢利曷国・訖栗瑟摩国・曷邏胡国・阿利尼国・瞢健国に至る。活国より東南すれば闍悉多国・安呾羅縛国に至る(注四)。事は廻記(注五)に記してある。活国(注六)より西南すれば縛伽浪国に至る。

注

一　拘謎陁国　伝聞国である。拘謎陁 ₒkịu-miei°-ₒd'â. この国は Ptolemy の地理書 [vi. c. 12, 3.] に記されている Komēdōn oreinē であり、古代絹貿易通商路の重要地点であった。イスラム地理学者の Kumādh である。今の Panj āb（アム・ダリヤの上流）の Darwāz 地方にあたる [S. Beal : *Records*, I, p.41 (131) ; Barthold : *Turkestan down &c.*, p.70]。

二　大都城　Darwāz 地方の中心都市は Āb-i-Panj 沿いの Kala-i-khum である [Beal : *ibid.*, p.41 (132)]。

三　尸棄尼国　この国については巻十二の一六に説明した。

四　南して縛芻河を渡れば……安呾羅縛国に至る　この達摩悉鉄帝国以下、安呾羅縛国までの十三国については、巻十二に再びあげて多少の説明をしている。何れも「覩貨邏国故地」である。巻十二参照。

五　廻記　この語は耳に熟しないものである。『西域記』の古本には傍注して「慈恩伝也」とあるようであるが [『考異』による]、『西域記』撰述時に未出の『慈恩伝』を引き合いに出すとも思えず、これはやはり「帰途の記事」の意と取るべきであろう [S. Beal : *Records*, I, p.43 ; T. Watters : *On Y. Ch.*, I, p.106]。

六　活国　今の Kunduz である。巻十二の五参照。

二九　縛伽浪国

縛伽浪国(注一)は東西五十余里、南北二百余里ある。国の大都城は周囲十余里である。南すれば紇露悉泯健国に至る。

注

一　縛伽浪国　伝聞国である。縛伽浪 b'uâ°-ₒg'ịa-lâng°. 今のクンドゥズの西南約六十キロの地点、クンドゥズ河 (Surkh āb) の河谷中に Bāghlān, Baghlān という一邑があり、この名称はまたその地方名にも使われている。これを指そう [Beal : *Records*, I, p. 43 (147) ; Le Strange : *The Lands*, p. 427 ; Minorsky : *Ḥ.-'Ā.*, p.109, 339 (map)]。

三〇　紇露悉泯健国

紇露悉泯健(ルーシミンガーン)[注一]国は周囲千余里あり、国の大都城[注二]は周囲十四、五里である。西北して忽懍(クルム)国に至る。

注

一　紇露悉泯健国　伝聞国である。この国に関しては、諸書に適切な説明を見出だせない。この国名は、あるいは、紇露国と悉泯健国との二名を伝聞のまま、玄奘が一国として記したか、または二国名を一国名として併称する呼称法があったのではなかろうか。かく推測をする根拠の一は、『慧琳音義』巻八二に「紇露　上字は根字の入声 rət。即ち是なり」と、この二字だけを切り離して標字とし掲げていることである（通常標字として掲げる場合、一語彙を分割することはしない）。いま一つの根拠は、Khulm, Tashkurgan から東南へヒンドゥークシュに入る重要路たる Khulm 河峡谷中の今の Haibak は、古くは Simingān, Siminjān とよばれ、さらに同河谷を南上した今の Ruy, Rui は古くは Rūb とよばれていた [Le Strange: *The Lands*, p. 427; Barthold: *Turkestan down &c.*, p. 67, 248; Minorsky: *Ḥ.-'Ā.*, p. 338, 342] が、この地方の事情にも詳しい *Ḥudūd al-'Ālam* の著者も二地を分記しているにも拘わらず、イスラム地理家には同一地方としてまとめて Haibak (Siminjān) と記述するものもあったようである [Le Strange: *ibid.*]。このように玄奘の標字は、実は二国名の合名であると考えれば、紇露 rət。-luo。（紇は中国語にない音声 [r] の入りわたりを示す文字、曷邏闍 rât。-。lâ-。ẑia: Skt. *rāja* の曷の用法と同じ）は Rū に対し、悉泯健 siĕt。-。miĕn-g'iɒn。は *Simingān* に対応すると見られよう [Beal: *Records*, I, p.43 (148); 樋口隆康:「バクトラよりタキシラまで――インド古代交通路の研究――」『仏教芸術』一五（一九五二）九三ページ。（以下樋口:『研究』と略称)]。

二　大都城　注一のように二国の合名と考えれば、この二地方の主都たるものは今日の Haibak, 昔の Simingān, Siminjān である。

三一　忽懍国

忽懍(クルム)[注一]国は周囲八百余里あり、国の大都城は周囲五、六里である。伽藍は十余ヵ所、僧徒は五百余人いる。西して縛喝(バルク)国に至る。

注

一　忽懍国　『慈恩伝』に見えない。あたかも伝聞国のごとくであるが、当地は玄奘の行程の活国クンドゥズから縛喝国バルクへ通ずる中間にあり、当然この地を通過しているはずである。『慈恩伝』に見えない点は理解に苦しむところである。忽懍 χuət。-°liəm. 今日の Tashkurgan（今の町は十九世紀にできた）の北郊にある廃址が古えの Khulm である [Barthold: *Turkestan down &c.*, p.67; Minorsky: *Ḥ.-'Ā.*, p.337]。

三二　縛喝国

縛喝(ハルク)[注一]国は東西八百余里、南北四百余里あり、北は縛芻河に臨んでいる。国の大都城[注二]は二十余里ある。人々はみな小王舎城[注三]といっている。その城は堅固ではあるが、住民は甚だ少ない。土地の産出する品物[注四]の種類は非常に多い。水生・陸生のいろいろな花は一いち挙げきれないほどである。伽藍は百余ヵ所、僧徒は三千余人[注五]で、みな小乗の教義を

学習している。

注

一　縛喝国　縛喝 *b'uâ°* (or *b'i̯ak.*)-*χât.* 古代のバクトリア Bactria, 今のBalkh である [Le Strange : *The Lands*, p.420 ; Barthold : *Turkestan down &c.*, p. 77 ; Minorsky : *Ḥ.-'Ā.*, p.337]。漢籍に古来、抜底延・縛底延・縛底耶・薄提・縛叱などと書かれている。西方文献には、Bāxtri (Cuneiform), bāxdi (Avesta), Bākhal, Bākhli (Pehlevi), Balkh (Mahomedan) などと見えている [Hübschman, H. : *Persische Studien.* Strassburg, 1895. s. 194 ; Kent, R. G. : *Old Persian Gram.*, 1950, p. 199 ; Rawlinson, H. G. : *Bactria*, p.1]。一方、チベット文献には *bag-la* [H. W. Bailey : *Ttaugara*, *BSOS*, 8 (1937), 887] の形が見えている。玄奘当時の呼称をきめ得ないようであるが、『正法念処経』(三三九)には「婆佉羅」、『西域求法高僧伝』(六九) には「縛渇羅」と書かれていることより考えれば、玄奘も、あるいは、Bākhal [a] のような音声を意図したものかとも思える。なお、『慈恩伝』によれば、玄奘は縛芻河を渡ってまず活国 Kunduz に至った。活国は突厥の葉護可汗の長子の呾度設 (設は官名) が居るところで、これが高昌王の妹婿であり、玄奘はこれに高昌王の書を伝達した。ついで呾度設は死に、新しい設のすすめで玄奘は縛喝国を訪問することにしたのであった。

二　大都城　縛喝 Balkh の考古学的調査の概要は、樋口 :『研究』八七ページ以下参照。

三　小王舎城　インド摩伽陀 Magadha 国の王舎城に比した語。巻九参照。

四　土地の産出する品物　この土地の産物・花果については十世紀の書であるが、*Ḥudūd al-'Ālam* [Minorsky, p.108] に詳しい。

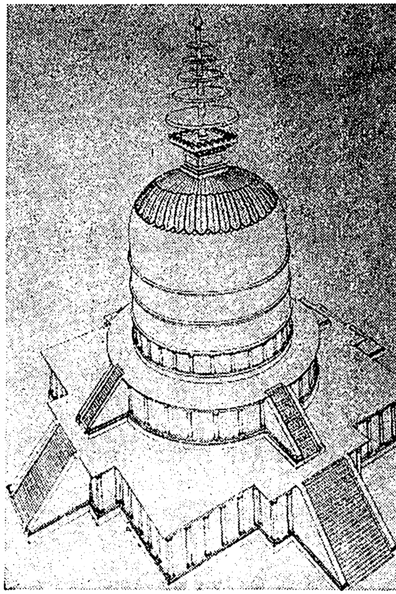
五　伽藍は百余ヵ所、僧徒は三千余人　縛喝国における仏教は、西紀前三世紀のアショーカ王に始まり、後二世紀のカニシカ王により盛行した [羽渓 :『西域之仏教』六三一六九ページ ; 堀 :『解説』八〇ページ]。

三二・一　納縛僧伽藍

城外の西南に納縛(原注　唐に新という)僧伽藍がある。(注一) この国の先の王の建てたものである。大雪山 (ヒンドゥークシュ) 以北の作論の諸師は、(注二) この伽藍においてだけすぐれた業績がすたれずに行なわれている。その仏像は(注三)りっぱな珍で瑩かれ、その堂宇は奇しい宝で飾られている。だから諸国の君主たちはこれを手に入れようとして攻めおびやかしている。この伽藍にはもとから毘沙門天の(注四)像があり、その御利益はあらたかで、冥々のうちに守護が加えられている。近ごろ、突厥の葉護可汗の子の肆葉護可汗が(注五)その部落の力を傾け、その軍隊を率い伽藍を急襲し珍宝を奪おうとして、ここを去ること遠からざる所で軍を駐め野営した。その夜、毘沙門天が、「汝はどのような力があり、伽藍を破壊しようとするのか」と言って、長い戟で胸から背へ突き通す夢を見た。可汗は驚いて目がさめ、甚だ心を痛めた。そこで家来たちに夢に見た咎の徴をはなし使を馳らせ僧徒たちに頼み、懺悔し謝罪を申し述べさせようとしたが、その返命もまだ届かないうちにはや命を殞し死没してしまった。(注六) 伽藍内の南の仏堂に仏の澡罐が(注七)ある。量は一斗余りほどで、さまざまな色をまじえ光り燿き、金とも石とも名づけ難いものである。また仏の歯牙もある。その長さ一寸余り、広さ八、九分で、色は黄白に、質は光浄である。また仏の掃箒もある。迦奢草で(注八)作られている。長さは二尺に余り、周囲七寸ばかりである。その把手はいろいろな宝で飾ってある。この三点のものは六斎に(注九)なるごとに、出家も俗人もことごとく集まり、並べて供養をする。真心の感ずるところ、或いは時に光明を放つことがある。

伽藍の北に窣堵波の(注一〇)高さ二百余尺のものがある。金剛泥で塗り、多くの宝をまじえ飾ってある。その中に舎利があり、時にあっては霊妙な光を燭かすことがある。

伽藍の西南に一精廬 (精舎、寺) がある。建立以来多く年数がたっている。遠方から人がつどいやってきて、才高き人々が類をもって集


納縛僧伽藍の塔と推定されるトープ・イ・ルスタムの復原図（A. フシェによる）

まった。四果（注一一）を證った人は詳さに挙げ難いほどである。それで羅漢達（注一二）は涅槃（注一三）に入ろうとするにあたり神通をあらわし、人々に知られていろいろな窣堵波を建立するものがあったのである。その基盤は相連なり数百以上もある。聖果を證ったとはいえ、ついに神変を示すことがなかったものは、おもうにまた千をもって数えるほどもあるが封記（塔）は樹てていない。今は僧徒が百人余りで、朝夕懈ることなく勤めているが、その凡と聖とは推測し難い。

注

一　納縛（……）僧伽藍　納縛僧伽藍 *nâp*。-*b'uâ*°-。*səng*-。*g'ia*-。*lâm*: Skt. *nava-saṁghārāma*, 即ち新寺院の義。『西域求法高僧伝』に納婆毗訶羅 Skt. *nava-vihāra* とある。イスラム地理書にもこの寺院を nau-vihār (Nū-bahār) といい、その遺址および仏像について述べている [Barthold: *Turkestan down &c.*, p.77, 102; Minorsky: *Ḥ.-'Ā.*, p.108, 337]。この寺址のものとおぼしい窣堵波 Tōp-i-Rustam がA・フシェによって発掘されている [樋口:『研究』九一ページ（復原図あり）]。

二　作論の諸師　仏教の義理を深く考究した論書を作る諸学者のことで、『慈恩伝』によれば、玄奘往訪時、かれは小乗学者般若羯羅 Prajñākara その他と質義応答したという。

三　その仏像　Ibn al-Faqīh（九〇三）によれば、かれの当時も多くの巡礼者がこの仏像を参拝にきたという [Barthold: *ibid.*, p.77]。

四　毘沙門天　Skt. *vaiśravaṇa-deva*, インドの国土守護神、四天王の一。

五　突厥の葉護可汗の子の肆葉護可汗　葉護可汗は『旧唐書』の「統葉護可汗」のこと。肆葉護可汗はその子の咥利特勤のこと [E. Chavannes: *Documents*, p.26; 馮承鈞訳本二四ページ; 岑仲勉:『西突厥史料補闕及考證』一二五ページ]。

六　肆葉護可汗が……死没してしまった　『旧唐書』巻一九四下によれば、肆葉護可汗は、その性質疑い深く、人の讒言を信じ易い人で、統御の才もなかったため部下の謀殺に遭い、康居に逃れ、ついで死んだという。

七　澡罐　澡瓶ともいう。梵名「軍持」Skt. *kuṇḍikā* [*Mvy.* no. 8962]。『玄応音義』巻一四に「君持　此に瓶という。双口の澡灌なり」とある。弥勒菩薩の左手に提げる水瓶がそれで、比丘の随物（用物）の一 [H. Ingholt: *Gandharan Art in Pakistan*, pl. 288-91]。

八　迦奢草　Skt. *kāśa*. 学名 Saccharum Spontaneum,「ますすき」の類で、坐具等に使用する [Ingholt: *ibid.*, pl. 59, 60]。

九　六斎　毎月の八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日の六回の斎日をいう。巻四秣菟羅国の条参照。

一〇　伽藍の北に窣堵波　この塔と思われるものが、Tōp-i-Rustam である。注一参照。

一一　四果　小乗教における四位の證果をいう。正智をもって仏道の諦理を見出だして以後の四段階、下位より須陀洹果、次に斯陀含果、三に阿那含果といい、四に阿羅漢果はあらゆる思惑を断じ、涅槃をさとり、さらに学ぶべきもののなき境に入れるものであるから「無学」とも訳す。

一二　羅漢　阿羅漢 Skt. *arhan*, *arhant*, Pa. *arahant* のこと。注一一の阿羅漢果を證得した人で、修学の成就したものをいう。

一三　涅槃　Skt. *nirvāṇa*, Pa. *nibbāna*. 一切の煩悩を度脱した悟道の境地を

いう。

三二・二 **提謂城と波利城** 大城の西北五十余里で提謂城(注一)に至る。城の北四十余里に波利城がある(注二)。城にはそれぞれ一窣堵波の高さが三丈に余るものがある。むかし如来がはじめて仏果(注三)を證し、菩提樹の下より起ち、鹿園(注四)にやってきた。おりしも二人の長者がおり、如来の威光にふれ、その持っている旅行のたくわえのままに麨蜜(注五)をささげた。世尊は二人のために人間界と天上界との福を説き、二人は第一番に五戒・十善(注六)を聞くことができたのである。法誨を聞きおわり、供養するところのものをいただきたいむねお願いした。如来は請われるままに頭髪と爪とを授けた。二人の長者はその本国に帰ろうとして、供養礼敬するしかたをおたずねした。如来は、僧伽胝(原注 旧に僧伽梨という。訛なり(注七))を四角にたたんで下にしき、次に欝多羅僧(注八)、その次に僧却崎(原注 旧に僧祇支という。訛なり(注九))とおき、さらに鉢をふせ錫杖をたてた。このような順序で窣堵波をつくった(注一〇)。二人は命を承り、それぞれ自分の城に帰り、聖旨のごとくしようとしてりっぱに建立を行なった。これがすなわち釈迦の教えにおける最初の窣堵波である。

城の西七十余里に窣堵波の高さ二丈に余るものがある。むかし迦葉波仏(注一一)の時に建てたものである。[縛喝国の] 大城より西南して雪山の山峡に入り、鋭秣陁国に至る。

注

一 提謂城……波利城がある 提謂・波利ともに旧来の用字であり、玄奘の新訳ではない。ともに人名である。提謂はまた、離謂・帝梨富娑・帝履富娑・多婆富娑とも書かれる。Skt. *Trapusa, Trapuśa*, Pa. *Tapassu, Tapussa*. 波利はまた、跋梨・跋梨迦・跋梨迦などとも書かれる。Skt. *Bhallika, Bhalluka*, Pa. *Bhalliya*. なお、この窣堵波は「Rāngun における有名な Shwè-dagun であるといわれている」とのことである [Beal: *Records*, I, p.47 (163)]、が図上に確認し得ない。

二 城にはそれぞれ一窣堵波 『慈恩伝』によれば、「波利城の城中に二窣堵波あり」となっている。

三 仏果 修行によって達した仏の位を仏果という。

四 鹿園 婆羅奈斯城の鹿野園のこと。巻七の一参照。

五 麨蜜 麨とは穀類を粉末とした食物。梵名「怛鉢那」、Skt. *tarpaṇa*, Pa. *tappaṇa*,「乳粥」とも訳す。「蜜」は蜂蜜・石蜜などのこと。

六 五戒・十善 五戒とは、殺生・偸盗・邪淫・妄語・飲酒の五を避けることを説いた在家人の保つべき戒。十善とは、不殺生・不偸盗・不邪淫・不妄語・不両舌・不悪口・不綺語・不貪欲・不瞋恚・不邪見の十をいう。

七 僧伽胝（……） 袈裟・大衣のこと。僧伽胝 *˳sәng-˳gʻia-˳ti*: Skt. *saṃghāṭi* [*Mvy*. no. 8933], Pkt. *saṃghāḍi* [Turner: *Comp. Dict.*, no. 12861]。

八 欝多羅僧 上衣のこと。欝多羅僧 *ʼiuәt˳-˳tâ-˳lâ-˳sәng*: Skt. Pa. *uttarāsaṅga*.

九 僧却崎（……） 腋を掩う肌衣。僧却崎 *˳sәng-kʻiak˳-˳kʼjię*: Skt. *saṃkakṣikā*, Pa. *saṃkacchika*.

一〇 このような順序で窣堵波をつくった 造塔法の詳細については、高田修：『印度・南海の仏教美術』一五一—一八ページ；同：「インドの仏塔と舎利安置法」『仏教芸術』一一、六七—九三ページ、および『仏教美術史論考』三二一—六二ページの諸書を参照。

一一 迦葉波仏 過去七仏の第六、飲光仏ともいう。迦葉波 *˳ka-śiäp˳-˳puâ*: Skt. *kāśyapa*.

三三　鋭秣陁国

鋭秣陁国(注一)は東西五、六十里、南北百余里で、国の大都城は周囲十余里である。西南して(注二)胡寔健(グーズガーン)国に至る。

注

一　鋭秣陁国　秣字を『慈恩伝』には「末」に作るが、秣・末両字は音声に変わりはない。鋭秣陁 *i̯wäi°-muât。-。d'â* の原音は不明である。あるいは Yumadha のごときものかと想像されている [Beal : *Records*, I, p.48 (164) ; Watters : *On Y. Ch.*, I, p.113]。今の Balkh の西南約百キロ、Āb-i-Safid 河沿いの Sar-i-pul がこれに当たるとされる [Beal : *ibid.*]。Sar-i-pul はイスラム期より今日に至るまでこの地方の重要な町で、領主の冬期居住地でもあった。当地はイスラム資料に Anbār, Anbēr, Anbir の名でよばれている [Le Strange : *The Lands*, p.426 ; Minorsky : *Ḥ.-'Ā.*, p.107, 335]。『慈恩伝』によれば、玄奘ははじめ、当地と次条の胡寔健国往訪の意図はなかったが、両国王の懇請辞しきれず訪問したものである。

二　西南して　『釈迦方志』によれば「西南して行くこと三百里」とある。

三四　胡寔健国

胡寔健(クーズガーン)(注一)国は東西五百余里、南北千余里あり、国の大都城は周囲二十余里である。山や川が多く善馬を産する。西北して呾剌健(ターラカーン)国に至る。

注

一　胡寔健国　胡寔健 *。γuo-źi̯ək。-g'i̯ɒn°* : Mit. pers. *Gūzgān, Gūzgānān* [Minorsky : *Ḥ.-'Ā.*, p.328, 329 (map), 330]. アラビア文献には、口蓋(がい)化して *Jūzjān, Jūzjānān* として出ている [Le Strange : *The Lands*, p. 423]。この地方の生まれと思われる *Ḥudūd al-'Ālam* の著者は、Gūzgān は都市名ではなく、Balkh より Merv にわたる地方名として記している [Minorsky : *ibid.*, § 23, no. 46]。前条の鋭秣陁国、注一中の Anbār がこの地方の主都であった。玄奘のいう胡寔健国の首都が何所を指したかは未詳。

三五　呾剌健国

呾剌健(ターラカーン)(注一)国は東西五百余里、南北五、六十里で、国の大都城は周囲十余里ある。西は波剌斯(ペルシア)国の境と接している。縛喝(バルク)国より南へ行くこと百余里で掲職(ガチ)国に至る(注二)。

注

一　呾剌健国　『慈恩伝』には見えず、伝聞国であろう。呾剌健 *tât。-lât。-g'i̯ɒn°* : Mit. pers. *Ṭālaqān* [Minorsky : *Ḥ.-'Ā.*, §23, no. 52]。イスラム文献の Ṭālaqān, Ṭāliqān は、今日すでに図上には見当たらないが、今の Maimana の近辺の Chāchaktū 近くにある遺址がそれであると言い [Le Strange : *The Lands*, p.423]、或いは Qal'a-Vali であると言う [Minorsky : *ibid.*, p.335]。当地は通常、Kunduz 東方約六十五キロにある Taliqan を「トルキスタンの Talaqan」とよぶのに対して、「Khurāsān

の Talaqan」とよぶ。

二　縛喝国より……掲職国に至る　『慈恩伝』の旅程によれば、玄奘は鋭秣陀国・胡寔健国の両国を訪問してのち、再び縛喝国へ返り、それより掲職国へ行ったこととなる。

三六　掲職国（覩貨邏国南境）

掲職国(注一)は東西五百余里、南北三百余里で、国の大都城は周囲四、五里である。土地は石が多く痩せていて、大小の丘陵が連なっている。花・果は少なく、菽・麦が多い。気候は寒烈で、風俗は剛猛である。伽藍は十余ヵ所、僧徒は三百余人いる。みな小乗教の説一切有部を学んでいる。東南して大雪山（ヒンドゥークシュ）に入る(注二)。山は高く谷は深く、尾根や巌石はあぶなっかしい。風と雪とはあいひき続き、盛夏にも凍ったままである。雪は積もり谷にみち、渓川の細道も渡渉しにくい。山の主や妖怪が祟をほしいままにしている。山賊は横行し、殺害を仕事としている。行くこと六百余里で、覩貨邏国の境を出て梵衍那国に至る。

注

一　掲職国　掲職 *g'i̯ɒt.-tśi̯ək.* この原語は Gachi あるいは Gaz (Ghaz), 今の Darrah Gaz 即ち Tamaris 渓谷であるという [Beal: *Records*, I, p.48 (166); Watters: *On Y. Ch.*, I, p.115; A・フシェ:『註解』一〇九ページ]。即ち、Balkh より直ちに南し、Darrah Yusuf 渓谷をさかのぼり、やがて Haibak から南下する道と、標高二千八百四十四メートルの Kara Kotal 峠で出会う道筋をとったと思われる。

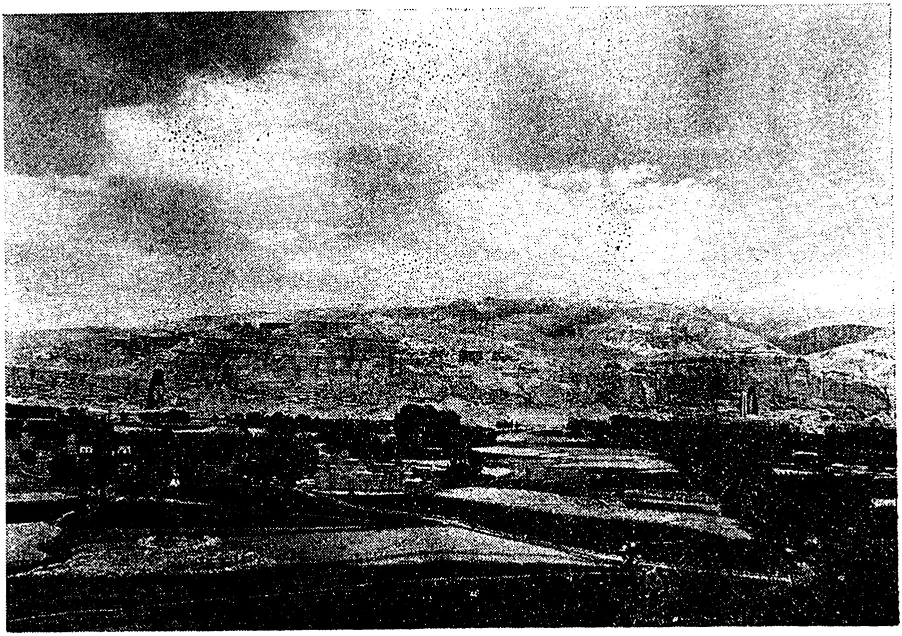
二　東南して大雪山に入る　玄奘のヒンドゥークシュ越えは、Kāmard と Saighān の両渓谷を通って行ったものであろう。この道は Dandān Shikan Kotal（「歯折り峠」の意）など多くの険阻な難処を過ぎ、それより四千三百四十九メートルの高峠の西裾を通り、Aq Ribat のやや南を東へ折れてバーミヤーンの峡谷に出る [A・フシェ:『註解』一一〇ページ・GSGS, NI-42 の地図による]。

三七　梵衍那国

梵衍那国(注一)は東西二千余里、南北三百余里で、雪山の中にある(注二)。人は山や谷を利用し、その地勢のままに住居している(注三)。国の大都城(注四)は崖に拠り谷に跨がっている。長さは六、七里あり、北は高い岩山を背にしている。宿麦はあるが、花・果は少ない。牧畜によく羊・馬が多い(注五)。気候は寒烈であり、風俗は剛獷である。皮や褐を着るものが多いのも(注六)、ちょうど合っている。文字・教化と貨幣の用法は覩貨邏国と同じである(注七)。言語は少しく異なるが、儀貌はおおむね同じである。信仰に諄い(注八)心はことに隣国より甚だしい。上は三宝より下は百神に至るまで真心をいたさないことはなく、心を尽くして敬っている。商人の往来するものにも、天神は徴祥をあらわし、祟変を示し、福徳を求めさせる。伽藍は数十ヵ所、僧徒は数千人で、小乗の説出世部(注九)を学習している。

注

一　梵衍那国　梵衍那 *b'i̯wɒm°-°i̯än-°nâ*: Skt. form *bāmiyana. 『慈恩伝』に「梵衍国・梵衍王」とするは、*bāmiyan に対するものとしてであろう（イラン語の梵語形化については、赤鄂衍那・鞠和衍那の条参照）。また、范陽［『魏書』『北史』］、范延［『隋書』］、犯引［『慧超伝』］、帆延・



バーミヤーン谷にのこる仏教遺跡全景

望衍 [『新唐書』]。Mit. pers. *bāmikān*, Spätmit. pers. **bāmigān*, Neu pers. *bāmiyān* [Markwart: *Wehrot*, s. 36]。

二　梵衍那国は……雪山の中にある　バーミヤーンはヒンドゥークシュと Kōh-i-Bābā の両山脈の間の東西に細長い渓谷中にあり、古くより東西交通の要路にあたっていた [Le Strange: *The Lands*, p.418; Minorsky: *H.-'Ā.*, §23, no. 78]。

三　人は山や谷を利用し……住居している　『唐書』に「地は寒く、人は穴ほりて居る」とし、『慧超伝』にも「土地は雪あり極めて寒く、住は多く山による」とある。

四　大都城　「Bāmiyān の国都は Al-Lahūm という」[Muqaddasī (A. D. 985) in Le Strange: *ibid.*, p.418] とあるが、この Al-Lahūm は、恐らく、『唐書』にいうバーミヤーンの王都「羅爛城」に当たるものであろう。

五　牧畜によく羊・馬が多い　『慧超伝』に「土地は羊馬・畳布を出し、甚だ蒲萄に足る」とある。

六　皮や褐を着るものが多い　『慧超伝』に「氎布の衫・皮毬・氈衫等の類をきる」とある。

七　覩貨邏国と同じである　バーミヤーンは距離からみて近いカーブル Kābul よりも、むしろ遠方の Balkh (バクトリア) や Khulm の覩貨邏諸国と古くより深い関係があった。これは月氏とよばれる血縁関係と地理的環境によるものであった。「類トカラ」とよぶ所以である。

八　上は三宝より下は百神に至るまで　当地における雑信の状況は、三十五メートル石仏の仏龕頂上の太陽神 (Sūrya) がイラン要素のものであり、古典的なササン美術直系のものであることからも見てとれよう。

九　小乗の説出世部　説出世部 Lokottara-vādin は小乗二十部の一で、大衆部の分裂最初のものとみられる。世間法も出世間法も仮名 (虚妄) で実体なしと唱えたのが根本大衆部である。しかし、涅槃などの出世間法が仮名であるというのはおかしいと反対し、道および道の果の出世間法は実有であると主張したのが説出世部である。この派は中インドより西北インドにかけて盛行した。なお、慧超 (七二七) が往訪した当時のバーミヤーンは「大小乗の法が行なわる」とある。

三七・一　**大石仏**　王城の東北の山の阿(くま)に立仏の石像の高さ百四、五十尺のものがある。(注一)金色にかがやき、宝飾がきらきらしている。東に伽藍がある。この国の先の王が建てたものである。伽藍の東に鍮石(とうせき)の釈迦仏の立像の高さ百尺余のものがある。(注二)身を部分に分けて別に鋳造し、合わせてできあがっている。

注

一　立仏の石像の高さ百四、五十尺のものがある　五十三メートル仏である。現在の仏像の諸所に穴があいているのは、杭をさして衣襞(ひだ)のストゥコのささえとしたものとみられ、このストゥコの上に玄奘が見たような「金色晃曜、宝飾煥爛」とした彩色がなされていたものであろう。



バーミヤーンの35m大仏像
仏龕天井には太陽神が描かれている

二　鍮石の釈迦仏の立像の高さ百尺余のもの　三十五メートル仏のことである。五十三メートル仏とは約四百メートルの距離がある。鍮石とは『格古要論』に、「自然銅の精なるものなり。崔昉(さいほう)曰く、銅一斤、爐甘石(ろかんせき)一斤、之(これ)を煉(ね)りて鍮石をつくる」と。また『演繁露』に「世に鍮石なるものあり、質は、実は銅なるに、色は黄金の如し」とある。一種の真鍮(しんちゅう)であろう。鋳造の外皮か玄奘の見誤りかは断じ難いが、この三十五メートル仏は「元は赤く塗って金をおいたのである」[A・フシェ：『仏教美術研究』七三ページ] ともいわれる。なおイスラム期には、この二大石仏の一は「赤像 Surkh-but」、他の一は「白像 Khing-but」とよばれていた [Minorsky: *H.-'A.*, §23, no. 78]。

三七・二　**大涅槃像**　城の東二、三里(注一)の伽藍の中に仏の入涅槃の長さ千余尺ある臥像(注二)がある。この国の王はここに無遮大会(むしゃだいえ)(注三)を設けるごとに、上は妻子より下は国家の珍宝に至るまで「寄捨し」、役所の倉庫が空になるとさらに自分の身をば布施する。役人の上から下までのものたちは金品を出して僧から買いもどす。このようなことをば自分たちのつとめと考えているのである。

注

一　城の東二、三里　宋本は「十二、三里」に作る。A・フシェによれば、東方ではなく「町の西方十二里の地に」「鉱泉の湯垢(ゆあか)に染んで灰色になった岩石脈の頭部が奇怪な形で露出している処」があり、それは「南面して長さ三百米突(メートル)、仏陀涅槃の像と同じような自然像が存在し」ていて、その「聖跡の東北に当る高地には今でも古代の寺跡があり、それから一段低くなって稍(やや)稍広い高地では定期的に無遮会が行われた」[『註解』一一二ページ] として伝来の本文を訂正して読むこと



バーミヤーンH洞仏龕に描かれた麗わしの天人散華

を示唆している。なお、樋口：『研究』九四ページ参照。

二　仏の入涅槃の…臥像　入滅時の仏の横臥の姿を模した像。

三　無遮大会　前出六「屈支国」、三「無遮会と行像」注一参照。

三七・三　三賢聖の遺物を収蔵する伽藍　臥像伽藍の東南に行くこと二百余里、大雪山をこえ、東して小さな川沢に至る。泉池は鏡の如く澄み、林の樹々は青々としている。僧伽藍があり(注一)、中に仏の歯と劫初(注二)の時の独覚(注三)の歯の長さ五寸に余り、広さ四寸に足らないものがある。さらに金輪王(注四)の歯の長さ三寸、広さ二寸のもの、商諾迦縛娑（原注　旧に商那和修という。訛なり(注五)）大阿羅漢がもっていた鉄鉢の量は八、九升ほどのものがある。すべてこの三賢聖の遺物はみな黄金で緘封してある。さらに商諾迦縛娑の九条の僧伽胝衣(注六)がある。深紅の設諾迦草(注七)の皮を績いで作ったものである。商諾迦縛娑という人は阿難の弟子である。さきの世において設諾迦草の衣を安居を解く日に僧達に布施した。この福力によって五百生のあいだ中陰にも生陰(注八)にも何時もこの衣を身につけており、最後に生まれるとき、胎内から［衣と］倶に出てきた。身体が次第に大きくなると、衣もそれにつれて広くなり、阿難が度して出家するにおよぶや、その衣は変じて法服となった。具戒(注九)を受けるにおよんで、さらに変じて九条の僧伽胝となった。寂滅をさとり辺際定(注一〇)に入ろうとするとき、智願(注一一)の力を発しこの袈裟を残して釈迦の遺された法を尽くそう、法が尽きたときはじめて［この衣は］朽ちてしまうようにと願った。今は、はや少しく傷んできている。またことにあらたかなことである。これより東行して雪山に入り、黒嶺を越えて、迦畢試国(注一二)に至る。

注

一　僧伽藍があり　この伽藍の位置は今のところ不明である。一説には、方向を原文の文字どおり東南にとり、大雪山を Kōh-i-Bābā として Helmand 河上流のほぼ Gardan-Dival あたりとする説、また一説には、東方へ Gorband 河にそって進み、Shibar Kotal を越え、Gorband 河の一支谷にある Fondukistan の仏教遺址をあてる説もある［樋口：『研究』九五ページ］。

二　劫初　インド伝説におけるこの世界の成立のはじめをいう。

三　独覚　この世界にまだ仏の出世することなきとき、師友の教導もなく自然に悟りを得たものをいう。辟支仏 Pratyeka-Buddha の訳。

四　金輪王　四天下の支配者 Suvarṇa-cakra-vartin の訳。巻一の一の注三参照。

五　商諾迦縛娑（……）　商諾迦縛娑 *˳śi̯ang-nâk˳-˳ka-b'i̯uâ°-˳sâ* : Skt. **śāṇakavāsa* ＜ *śāṇakavāsa, śāṇakavāsi*. Pa. *sāṇavāsi*. 商那和修［『付法蔵因縁伝』（四七二訳）］・舎那婆私・舎那婆斯など。また三浮陀 Sambhūta,

三菩伽 Sambhoga［巻七の三「吠舎釐国」の条］。印度法蔵の第三祖である。中インド王舎城の長者で、釈尊の滅後に阿難の弟子となり、秣菟羅・梵衍那・罽賓等の諸地に巡化し、門人鄔波毱多 Upagupta に付法した。

六　僧伽胝衣　巻一の三二・三注七参照。

七　設諾迦草　設諾迦 *śįät˳-nâk˳-˳ka*：Skt. **śāṇaka* < *śāṇaka*. Pa. Pkt. *sāṇa*. 大麻と訳す。奢那・舎那・娑那とも。『仏阿毘曇経』巻下に「奢那樹は麻に似たり。皮をとりて、織りて衣となす」とある。

八　中陰にも生陰にも　現世と来世の中間の存在を「中陰」といい、来世に生まれる刹那を「生陰」という。

九　具戒　詳かには具足戒という。比丘（二百五十戒）・比丘尼（三百四十八戒）の受持する戒。この戒を保てば、無量の徳を身に具足することができるところからきた。

一〇　辺際定　辺際とはものの窮極をいい、定とは心を一境に集注し動かさないことをいう。これより辺際定とは、もっとも優れた定のことをいう。

一一　智願　深い智恵で建てた誓願のことで、大悲の弘願のこと。

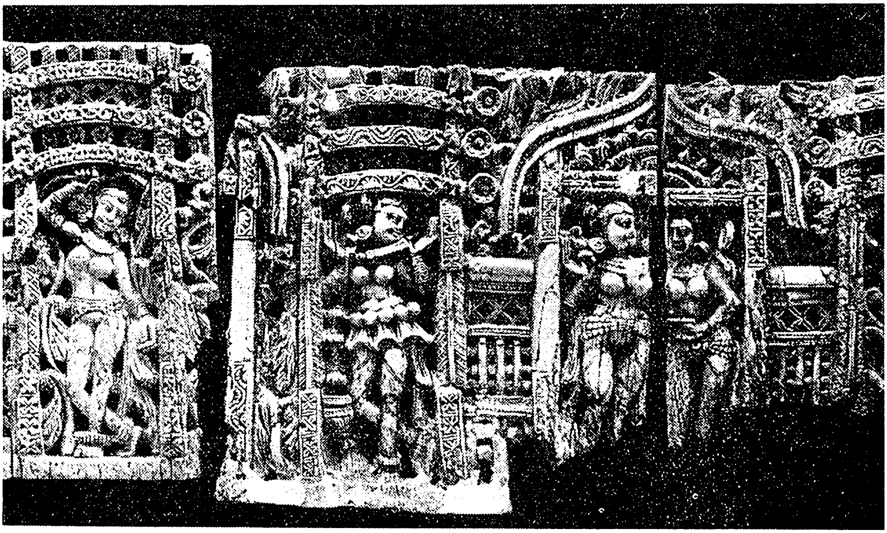
一二　これより東行して……迦畢試国に至る　『慈恩伝』によれば、バーミヤーンの王都より「かくの如くして十五日を経て梵衍を出る。二日にして雪に逢い、迷いて道を失う。一小沙嶺に至り、猟（猟）人に遇いて道を示さる。黒山を度りて迦畢試の境に至る」とある。バーミヤーンから Gorband 河沿いに東進したもので、「黒嶺・黒山」は「夏期は雪を頂かざる山」［高田：『国訳伝』四七ページ（一〇六）］の意であり、Shibar 峠のあたりを指すものであろう［A・フシェ：『註解』一一七ページ；樋口：『研究』九五ページ］。梵衍那国より迦畢試国までは、標高二—三千メートルの高所を登降する道であり、直線距離にて GSGS, NI.42 の図上では約百三十キロほどである。

三八　迦畢試国

迦畢試国(注一)は周囲四千余里あり、北は雪山を背にし、三方は黒嶺が境をしている。国の大都城(注二)は周囲十余里ある。あらゆる穀物によく、果も多い(注三)。善馬と鬱金香(注四)を産出する。諸国の珍しい品物が、この国に多く集まってくる。気候は風寒く、人の性質はあらあらしい。言葉使いはいやしく、婚姻はみだれている。文字は大体覩貨邏国と同じであるが、習慣・言語と教化は非常に異なっている。服は毛氈を用い、毛皮や褐もきる。貨幣は金銭・銀銭および小銅銭をも使用し、規矩模様は諸国とは異なっている(注五)。王は刹利種(注六)である。智略あり、性質は勇敢で、威光は隣国をも懾れしたがわせており、十余国を統べている(注七)。人民を愛撫し、三宝を敬っている。歳ごとに一丈八尺の銀の仏像を造り、かねて無遮大会を催し、貧民に周く給与し、鰥寡に恵み施している。伽藍は百余ヵ所、僧徒は六千余人いる。多くのものは大乗教を学習している。窣堵波・僧伽藍はたけ高く大きく、ひろびろとしてきよらかである。天祠は数十ヵ所、異道(注八)は千余人いる。あるものは露形(注九)であり、あるものは塗灰(注一〇)であり、［あるものは］髑髏をつらねて冠の鬘（たれかざり）にしている(注一一)。

注

一　迦畢試国　カーブルの北東約七十二キロにある Charikār からほど遠くない所、Panjshir 河と Gorband 河の合流点にあり、北はヒンドゥークシュ、西は Paghmān 山脈、南・東も低い山にかこまれた盆地。迦畢試 *˳ka-piĕt˳-śi˳* はまた迦臂施・迦毘施・迦卑試とも書かれる。インド文献



ベグラーム出土の象牙細工（カーブル博物館蔵）

には古く紀元前四—五世紀に Kāpiśī [Pāṇini, iv. 2. 99] と出ている。*Kapiśaya [『梵語雑名』劫比舎也] の形も中国には伝えられている。西方史料としては、古く紀元前の Eucratides の方形銅貨の一面にカロシュティー文字で、"*Kaviśiye nagara devata*"＝The city God of Kāpiśa [A. K. Narain ; *The Indo-Greeks*, 1957, pl. IV. 8] とあるほか、Kāpisa [Ptolemy : *Geog.*, vi. 18, 4], Capissa [Pliny : *N. H.*, vi. 23, 25] と出ている [CHI, p.501]。

二　大都城　今日のベグラーム Bēgrām（＝Bāgh-i-Alam, "The Ruins of Old City"）で、かつて迦膩色迦王の夏の都として栄えたところである。前世紀来グレコ・バクトリア時代からクシャン時代およびその後の多量の貨幣が出土し報告されていたが、今世紀に入り一九二三年以来フランスの考古学者によって広範囲な発掘調査が行なわれ、クシャン王の宮殿であったと思われる建物の跡から驚くべき宝物の数々、それは西はローマ帝国、東は漢帝国に至る間の一世紀から五世紀にわたる、いわば世界中の美術工芸品の精粋を発見し、多数の報告論著で世に紹介された。その品々は玄奘の「異方の奇貨、多くこの国に聚まる」の語が決して誇張でないことを物語っている。

三　あらゆる穀物によく、果も多い　当地は標高約千六百メートルほどで、気候も幾分温和であり、果樹五穀の栽培に申し分なく、扁桃（アマンド）・乾杏子・葡萄などインド方面に多量輸出している。唯一つの欠点は玄奘も言う如く、しばしば猛烈な北風に襲われることである [A・フシェ：『註解』一二〇ページ]。

四　欝金香　サフランのこと。Skt. Pa. *kuṅkuma*, Pkt. *kuṁkuma* [*Mvy.* no. 6259 ; Turner : *C. D.*, no. 3214]. 学名 Crocus Sativus. 『玄応音義』第二五に「欝金は是れ樹の名、罽賓に出づ。その花は黄色なり。花を取りて一処に安置し、爛するを待ち圧して汁を取り、物を以て之に和して香となす。花粕もなお香気あり。亦用て香となす」とあり、巻二の一・六「印度の衣食」の条に、インド人が身にこれを塗ることを記す [白鳥：『西域史研究』上三九九ページ以下 ; B. Laufer : *Sino-Iranica*, p. 309 ff.]。

五　貨幣は……諸国とは異なっている　Bēgrām より出土する貨幣を見るに、方形あり円形あり、人物動物像・記号のほか、ギリシア文字あり、カロ

シュティー文字あり、すこぶる多種多様である。

六　王は刹利種である　刹利種とは、いわゆる四姓の一であり、アーリヤ人種であることをいったものであろう（巻二の一・九「族姓」の項参照）。『慈恩伝』によれば、玄奘の往路には、突厥勢力の南界は当国にまで達していたことを知るが、なおその王は突厥種ではなかったわけである。しかし、慧超（七三三）の時には、すでに、「この国（罽賓国、すなわち玄奘の迦畢試国）の土人は胡（イラン種）、王および兵馬は突厥なり。衣著・言音・食飲は吐火羅国と大同小異」と事態は変化していた。なお、一本に「刹利」を「窣利」に作るが、恐らく考え過ぎた誤りであろう。

七　王は……十余国を統べている　巻二に迦畢試国に役属する国として、濫波・那掲羅曷・健駄邏のインド彊域内の三ヵ国を挙げている。

八　異道　いわゆる「外道」で、仏教以外の諸教学をする人々をいう。

九　露形　露行外道のこと。露行はもとインド外道修行法の一であった。インド教は白衣派 Śvetāmbara（尼犍子 Nirgrantha）と空衣派 Digambara（露形）の二派を生じた。巻三の四・四参照。

一〇　塗灰　塗灰外道のこと。Skt. *bhasman* の訳。あるいは獣主（自在天）外道 pāśupata ともいう。大自在天（湿婆神）を万物の創造神とし、身に灰を塗り苦行して昇天を求める一派。

一一　髑髏をつらねて……いる　塗灰外道と同じく湿婆神を信仰し、湿婆神が髑髏を瓔珞とせるに擬せるもの。

三八・一　**質子伽藍とその周辺**　大城の東方三、四里の北山の下に大伽藍がある。(注一)僧徒は三百余人、みな小乗の教義を学んでいる。先達の話に聞けば、

「むかし健陀邏国の迦膩色迦王(注二)は、その威光は隣国を被い、教化は遠方にまであまねく、軍備を治め領地を広げて葱嶺（パミール）の東にまで至った。黄河より西の外国人たちは、威をおそれ人質を送ってきた。迦膩色迦王は質子を得たので、特に礼遇を加え寒暑につけて住居を変えさせた。冬は印度諸国におり、夏は迦畢試国に還り、春秋は健駄邏国にとどまった。それで質子の［冬・夏・春秋の］三時の住処にそれぞれ伽藍を建てた。いまのこの伽藍はすなわち夏の住居に建てたものである。それゆえにどの部屋の壁にも質子が画いてある。その容貌服飾はほとんど中国と同じである。その後［質子は］本国に還ることができたが、心はもとの住処にかけ、山川に阻てられてはいるけれども供養を怠らなかった。こういうわけで、今の僧徒も入安居・解安居のときになるごとに法会をさかんに興し、質子たちのために福を祈り善を行ない、引き続き絶ゆることなく今に至っている」

とのことである。

注

一　大城の東方……に大伽藍がある　この寺院があったと思われる場所は、いま土地の人が Kōh-i-bacha（小山）とよび、Ch. Masson が Kōh-i-Pahlvan（力士の山）と名づけ、また塔があるため Kōh-i-Tōp といわれている丘であるが、どれが大伽藍かは明らかでない。なお、この丘の北麓にある三個の遺址の一つがショトラク Shotorak 寺で、片岩製のガンダーラ式仏像彫刻が出土したところである［樋口：『研究』九六ページ；『アフガニスタンの古代美術』図版五、九七—九］。『慈恩伝』によれば、この寺院は「沙落迦」という名であったことが知られる。「沙落迦」とは「沙勒、疏勒」、すなわちカシュガル Kāshgar のことで、「河西の質子」とはカシュガルより送られてきたものであったろう。『後漢書』によるに、元初年中（一一四—二〇）、疏勒王安国、その舅の臣磐を罪あるの故に大月氏に送る。後、王死して大月氏は臣磐を疏勒王となせりと。このことと「河西の質子」とは結局同一事を指すのであろう［高田：『国訳伝』四六ページ（九七、九八）；羽渓：『西域之仏教』一一九、三九三ページ］。

二　健駄邏国の迦膩色迦王　巻二の四「健駄邏国」の条参照。



スルフ・コタール出土のカニシカ王彫像
（カーブル博物館蔵）

伽藍の仏院の東門の南に大神王像がある。(注一) その右足の下には地を掘って宝が蔵されている。質子が蔵めたものである。それゆえ、その銘には「伽藍が朽ちて壊れた時には、取り出して修繕せよ」とある。近ごろある辺地の貪婪で凶暴な王が、この伽藍が珍宝を多く蔵していることを耳にし、僧徒を追いはらい、まさに発掘に従事しようとした。[ところが] 神王の冠についている鸚鵡の鳥像が、なんと羽をバタバタさせて驚いて鳴きだし、大地はそのために震動した。王と軍人とは辟易して倒れ仆してしまい、しばらくしてやっと起き上がることができ、咎を陳謝し帰っていった。(注二)

注

一　伽藍の……大神王像がある　この神王像を、宝物の守護神である毘沙門 Vaiśravaṇa とする説 [Beal: *Records*, I, p. 59 (207)] もある。鳳凰を頂く毘沙門はあるが、鸚鵡を頂く例は知らない。

二　王と軍人とは……陳謝し帰っていった　『慈恩伝』によるに、玄奘はここへ来たとき、香を焚き加護を祈り人に掘らせたところが、何の患もなく、地下七、八尺の所から黄金数百斤・明珠数十顆も入っている一大銅器を得たという。

伽藍の北の山上にいくつかの石室がある。質子が坐禅をしたところである。その中には種々の宝を多く蔵めてあり、その側に「薬叉が守衛する」(注一) という銘がある。あばいて中の宝物を取ろうとするものがあれば、この薬叉は不思議な変わり方をして異様な形をあらわす。あるいは師子（獅子）となり、あるいは蟒蛇・猛獣・毒虫となり、ただならぬ形相で大いに怒るのである。こういうわけで誰も敢えて発こうとする人もない。

注

一　薬叉　Skt. *yakṣa*. また夜叉・夜乞叉・閲叉とも。能噉鬼・捷疾鬼などと訳される「八部鬼衆」の一。人を傷害したり噉うなど暴悪を事とするという。

石室の西二、三里にある大きな山の嶺に観自在菩薩の像がある。もし人が至誠をこめて見ることを願えば、菩薩はその像から妙なる色の身を出して行者をなぐさめることがある。

三八・二　**曷邏怙羅僧伽藍**　大城の東南三十余里で曷邏怙羅僧伽藍(注一)に至る。傍に窣堵波(注二)の高さ百余尺のものがある。斎日となると時に光明を燭かし、覆鉢の勢の上の石の隙間から黒い香油を流出することがあり、静かな夜には時に音楽のおとを聞くことがある。これを先達

の話に聞けば次のようである。むかしこの国の大臣の曷邏怙羅が建てたものである。作業がすでに完成し、夜、夢の中で、

「汝の建立した窣堵波はまだ舍利[注三]がない。明朝献上するものがあるから王にお願いしなさい」

と言うものがあった。朝になり王のところへ行って、

「自らの庸昧(おろか)なこともはからずに、敢えて頂きたくお願いしたいものがあります」

と申し上げた。王がいうには、

「一体何が欲しいのか」

と。対(こた)えていうには、

「今日第一番に献上されるものがありますれば、どうか恩賜を垂れたまわるようお願い申し上げます」

と。王は「よろしい」といった。曷邏怙羅は宮門にたたずみ、やってくるものを遙かに望み見ていた。すると一人の舍利瓶をもってくるものがあった。大臣はたずねていうには、

「何を献上しようとするのか」

「仏の舍利です」

と答えた。大臣がいうには、

「私はお前のために［仏舍利瓶を］守ってあげよう。まず王に申し上げよう」

と。曷邏怙羅は王が舍利を珍重して、さきの恩賜するといったことを後悔するのではないかと心配し、急いで伽藍に行き窣堵波に登った。真心の感ずるところ、その石の覆鉢は自然に開いた。舍利を安置しおわって急ぎ出たが、［覆鉢は閉じて］衣の襟(えり)をはさまれた。王の使者は大臣を追いかけたが、石はすでに閉ざしてしまっていた。だからその［襟をはさまれた］隙間から黒い香油が流れ出るのである、と。

注

一　曷邏怙羅　人名。曷邏怙羅 *rât*。-*lâ*°-°*ruo*-。*lâ*: Skt. *rāhula*. 巻四の七「秣菟羅国」の条には、また正梵語として「羅怙羅 Skt. *lāhula*」の表記も見える。なお、旧訳では羅雲・羅芸・羅呼；羅睺羅等と書かれ、十世紀末初には羅護羅と書かれた。詳しくは拙稿：「暁・匣両声母の対音」『東洋学報』四〇・四、七八ページ以下参照。なお、この伽藍址とおぼしきものに、ベグラームの東南に玄奘のいう方位・距離と一致する遺址 Kafir Qaleh (「異教徒の城」の意) があり、塔址もある［樋口：『研究』九六ページ］。

二　覆鉢の勢　覆鉢 Skt. *aṇḍa*, *garbha* は鉢を伏せたような半球形の塔身をいい、基壇の上に通常「甎(せん)(煉瓦)」または石を積み上げて築かれる。「覆鉢の勢」の「勢」という語は諸書［小野：『仏教美術概論』五五、六五ページ；逸見：『印度仏教美術考・建築篇』四九ページ（勢とカナをつける）］に見受け、術語のようであるが何も説明がない。思うに「様子、かたち」の意か。塔の構造については、高田：『印度・南海の仏教美術』一五ページ以下；同：『仏教美術史論考』三二―六二ページなど参照。玄奘の聞いたこの伝説によれば、舍利は覆鉢の下面内部に安置したものであると理解していたといえよう。

三　舍利　Skt. *śarīra*, Pa. *sarira*. 体・身・身骨・遺身と訳す。遺骨のこと。『玄応音義』第六に、「舍利は正しくは設利羅といい、訳して身骨という」とある。仏の遺骨を身（骨）舍利、遺法を法（頌）舍利という。なお、近年発見された舍利容器から褐色の香油の存在を検出した例がある［高田：『仏教美術史論考』五八―九ページ］のは、この伝説と彼此参考となろう。

三八・三　霫蔽多伐剌祠城と阿路猱山　城の南四十余里で霫（原注　耳立反[注一] *tsiəp*。(or *ts'iəp*。)+*liəp*。→*tsiəp*。(or *ts'iəp*。)）蔽多伐剌祠城[注二]に至る。地面が大いに震動し、山や崖(がけ)が崩れ落ちるようなときも、この城

をめぐる境域は動揺することがない。

注

一　瞿（原注　咠立反）　瞿は切韻系韻書では *siəp*。, *śiəp*。であるが、特に反切注音してある。咠は石山本および『随函録』には葺 *tsiəp*。に作っている。恐らく、瞿も *ts'iəp*。と読ませようとしたものであろう。

二　瞿薩多伐刺祠城　瞿薩多伐刺祠 *tsiəp*。(or *ts'iəp*。)-*piäi*°-。*tâ-b'iwnt*。-*lât*。-。*zi* に対する原語を Sphitavaras [Julien : *Mém.*, I,46], Śvetavāras [St. Martin : in *Mém.*, II, 300 ; Beal : *Records*, I, 61 (215)], Saptavarśa or Sattavasa (in the inscription of Darius ; Sattagudai of Herodotus) [Cunningham : *A. G. I.*, 30] とする諸説がある。また、「祠」の字を「寺院」の意とみて、「瞿薇多伐刺寺のある城」であるとし、瞿薇多伐 Śvetavat, すなわち白い śveta 象に乗れる神、つまり因陀羅 Indra であると考え、因陀羅を祠る寺がある町＝瞿薇多伐刺 Śvetavatālaya とする説 [Watters : *On Y. Ch.*, I, 126] がある。『西域記』中に「祠」字を音訳字として使用した例は他になく、Watters 説が優れているようであるが、「瞿」字の語頭子音にも問題があり、なお検討の要がある。なお、現在のベグラームの南方約十二キロの地に、今も Tatarānzar の dasht (岩石) の散在する遺址があり、ここに比定されている［A・フシェ：『註解』一二五ページ］。

瞿薇多伐刺祠城の南三十余里で阿路猱（原注　奴高反　。*nuo*＋。*kâo*→。*nâo*）山(注一)に至る。崖や嶺はけわしく、巌ぶかい谷はどこまでも暗い。その峰は毎年高さを数百尺増加し、漕矩吒国(注二)の𥞩（原注　士句反、以下同じ）那呬羅山(注三)とはるかに互いに見えるようになると崩れ落ちる。これを土地の言い伝えに聞くに、はじめ𥞩那天神(注四)が遠方からやってきて、この山に止まろうと思った。山の神は大いに怒り、渓谷を揺り動かした。天神が言うには、

「ここに止まるのを望まないのでこのように動くのであろう。しばらくの間私を客として遇してくれれば、きっと財宝をいっぱいにして上げようものを。私はいま漕矩吒国の𥞩那呬羅山に行きます。毎年私が国王や大臣のまつりのささげ物を受ける時になれば、目をこらしてよく見なさい」

と。それで阿路猱山は高さをまし、ついで崩れ落ちるのである、と。

注

一　阿路猱山　阿路猱 。*'â-luo*°-。*nâo* : Skt. *aruṇo* (-*daya* ? ＝*aruṇa-udaya*「黎明」の意)。Skt. *aruṇa* は「赤色・太陽」を意味する。また、阿楼那・阿盧那［『翻訳名義集』第三］。Aruṇa 山はカイラーサ Kailāsa 山の西にあり、常に雪を頂き登攀不能であるという [*Matsya Purāṇa*, *Brahmāṇḍa Purāṇa* ; *Alberuni's India*, II, 143]。なお、白鳥：「罽賓国考」『西域史研究』上四五二ページ以下参照。

二　漕矩吒国　漕矩吒 Jāguḍa については巻十二の一を参照。

三　𥞩那呬羅山　この原注の反切「士句反」に従えば、°*dẑ'i̯i*＋。*kəu*→。*dẑ'i̯əu* となるであろうが、巻十二の一に見える「𥞩那天」の「𥞩」字には「錫句反」*siek*。＋。*kəu*→。*s*(*i̯*)*əu* or 。*śi̯əu* としている。どちらも外国語音を表記したものであり、反切としては甚だ無理なものであり、なお検討を要しよう。𥞩那天および𥞩那呬羅は、おそらく草木育成の神 Skt. *śūnā-śīra* [M. Williams : *Skt.-Eng. Dict.*, 1082 c] であろう。この梵語からは容易に *śunā-hīra* の形は生まれよう [Grierson : *BSOS*, I, 3, 80 : do : *ZDMG.*, 1896, 18]。もし、この語を原語とするならば、巻一の反切「士句反」よりも巻十二の「錫句反」を正しいものとして採りたいわけであるが、両所の距離から方音差の可能性の存在をも考慮に入れるならば、速断は許されないであろう。

四　𥞩那天神　注三参照。

三八・四　大雪山頂にある竜池の伝説

王城の西北二百余里で大雪

山に至る。山頂には池がある。雨を請い晴を祈れば求むる所に随って願いをかなえられる。これを先達の話に聞けば次のようである。

むかし健駄邏国に阿羅漢があり、常にこの池の竜王の供養を受けていた。中食になるごとに神通力で坐している縄牀もろともに虚空を淩いで出かけるのである。侍者の沙弥（小僧）が縄牀の下にひそみ、すがりつきかくれていた。そして阿羅漢が時間になり竜宮に出かけて行き、そこではじめて沙弥を見つけた。竜王はそれで留まり食事するように頼んだ。竜王は天の甘露をば阿羅漢に食べさせ、人間界の味つけで沙弥に食事を供した。阿羅漢は食事をしおわり、竜王のためにもろもろの法の要旨を説いた。沙弥はいつものように師のために食器を洗った。食器に残りの粒がついていて、その香味におどろき、たちまちに悪願を起こし師を恨み竜に忿り、

「もろもろの身にもてる福徳の力が今ことごとく現われて、この竜の命を絶ち、私が自ら王となりますように」

と願った。沙弥がこの願いを起こすや、その時竜王ははやくも頭痛を覚えた。羅漢は説法して誨えさとし、竜王は自らの咎をわび躬らを責めた。沙弥は忿りを懐き悔いわびることをせず、伽藍に還ってからも心をこめて願いをしたところ、福力の致すところその夜に命を終え大竜王となった。威力すさまじく願いのごとくやってきて池に入り、竜王を殺し竜宮に住みつき、竜王の家来を手に入れその統師を一手にした。前世の願いのごとく暴風雨をおこし樹木を抜きくだき、伽藍を破壊しようとした。おりしも迦膩色迦王は怪しんで仔細を問うた。かの阿羅漢が委細を王に申し上げた。王はすぐさま竜の為に雪山のふもとに僧伽藍を立て、窣堵波の高さ百余尺のものを建てた。竜は宿怨を懐くがまま風雨をおこした。王は衆生済度を心とし、竜は憎悪に乗じて乱暴を働いたのである。僧伽藍・窣堵波は六たび壊され七たび作られた。迦膩色迦王は志の成らざるを恥じ、竜池を塡めその住居をつぶしてしまおうと思い、すぐさま軍隊を動かし雪山のふもとにやってきた。そのときかの竜王は深く懼れをいだき、年老いた婆羅門に身を変え王の象をひきとめて言うには、

「大王は前世に善根を殖えられ、勝れた因縁を種えられ、人界の王となることができ、思うようにならないことはありません。今日何故に竜と争いを交えられるのですか。おもうに、竜というものは畜生であります。卑しい悪類であります。しかし大きな威力をもっており、力で相手になることはできないものです。雲に乗り風を馭し、虚空を踏み水を履み、人の力で制することのできないものです。王の心が怒られる相手でありましょうか。王はいま国を挙げて兵をおこし、一匹の竜と戦っておられます。王が勝たれますならば、王には遠方を服従させる威光がないことになります。敗けられたならば、王にはかなわないものがあるという恥をもつことになりましょう。王のために計りますならば、よろしく兵を引き上げるべきでありましょう」

と。迦膩色迦王はこの言葉に従わなかった。竜はすぐさま池に還り、声を震わすこと雷の如く、暴風は木を抜き、沙石は雨の如く、雲霧たちこめ日も真っ暗にした。軍馬は驚いてしまった。王はやむなく三宝に帰命して加護のあらんことを請い、

「前世に福徳を殖え人界の王となることができ、威は強敵をも懾れさせ贍部洲を統一いたしました。しかるに今、畜生の竜に屈服させられますことは、まことに私の福徳の薄いことであります。願わくばもろもろの福徳の力を唯今眼のあたりにあらわしたまわんことを」

と述べた。たちどころに王の両肩に大きな煙と炎がたちおこり、竜は退き風は静まり、霧は巻き雲は開けた。王は兵たちに人ごとに石一個をかつがせ、それで竜池を塡めようとした。竜王はまた婆羅門の姿

となり、重ねて王に、

「私はあの池の竜王でありますが、王の威光に懼れて帰順いたします。唯ただ王は愍れみを垂れたまいて吾が前過をお赦しあらんことを。王は愛育の心をもって生きとし生けるものを覆いそだてられています。私にはどうでしょう、ただ悪害を加えられるばかりです。王がもし私を殺されたならば、私と王とは倶に悪道に堕ち、王は命を断つという罪があることとなり、私は怨懟の心を懐くこととなります。業報ははっきりしていますし、善悪は明らかであります」

とお願いした。王はそこで竜とはっきりと約束をさだめ、このあと再び犯すことがあれば必ず赦さないこととした。竜が言うには、

「私は悪業のために身を受けて竜となりました。竜は性質が猛悪で、自ら制することができません。瞋りの心がもしも起こったならば、きっと制することを忘れてしまうでしょう。王は今ふたたび伽藍を建立されましても、決してうち壊したりはいたしません、いつもひとりの人に山の嶺を見張りさせ、黒い雲がもしもたち起こったならば、急いで揵槌を撃たせてください。私はその音を聞いたならば悪心はきっと息むでしょう」

と。王はそこで再び伽藍を修築し窣堵波を建て、(注一)雲の気配を見張らせ今に至るまで絶えない、ということである。

先達の話によれば、窣堵波の中には如来の骨肉舎利(注二)が一升余ほどあり、不思議な事跡は一いち述べ難いほどである。ある時、窣堵波の中に突然煙がたちのぼり、しばらくすると猛炎をだした。当時の人は窣堵波はもう燃え尽くしてしまったと思った。仰ぎ見ることしばしで火はしずまり煙は消えた。すると舎利がまるで白い珠で飾った幡のように表柱(注三)（はたざお）をめぐりぐるぐると上がり、空高い雲の際までのぼり、またぐるぐると下がってくるのが見えた、ということである。

注

一　王は……伽藍を修築し窣堵波を建て　この迦膩色迦王の建立したという伽藍・窣堵波は、現在のベグラームの西十二キロ、Paghmān (or Pamghān) 山麓の小都市 Charikar の近く、山のとりつきの斜面にある Top-Darrah の谷間にある大塔址がそれであるらしい。ただし、方角は「西北」ではなく「西」にあたる点が異なる［A・フシェ…『註解』一二六ページ…樋口…『研究』九七ページ…平凡社…『世界美術全集』一一、八ページ（插図一八七）］。

二　骨肉舎利　既出三八・二の注三参照。

三　表柱　標柱・旗竿のことで、窣堵波においては覆鉢 aṇḍa 上の平頭（方龕）harmikā 内にたてられる傘蓋 chattra を支える柱、すなわち傘竿 yaṣṭi を指すのであろう。

三八・五　旧王伽藍　王城の西北の大きな河(注一)の南岸に旧王の伽藍(注二)がある。中に釈迦菩薩の幼いおりの乳歯の長さ一寸に余るものがある。その伽藍の東南に一つの伽藍(注三)があり、これも「旧王」と名づけている。その中に如来の頂骨一片、面の広さ一寸余のものがある。その色は黄白で、髪の孔もはっきり分かる。また如来の頭髪がある。髪の色は青紺（濃紺）で、ひねりは右巻き(注四)、引っ張れば長さ一尺余、巻けば五分ほどである。この三つのものは六斎(注五)の日になるごとに、王および大臣が散花し供養をする。

注

一　王城の西北の大きな河　王城の北方で、Gorband 河と Panjshir 河とが合流する。西北とあれば Gorband 河を指すことは当時においても変わりなかろう。

二　旧王の伽藍　ベグラームの遺跡図［平凡社『世界美術全集』一一、八四

ページ参照」を見るに、古代市街地の北端に南北百メートル、東西二百メートルの矩形の Burdj-i-Abdallah とよばれる生煉瓦の高い城壁で囲まれた地域があり、A・フシェはこれを「旧都城」とよんでいる。旧王伽藍があったのはこの地域である。J. Hackin が発見した西方ローマと東方漢代の大量の美術品は、市街地南端の「新都城」の旧王宮址からである。

三 一つの伽藍 この如来の頂骨を安置する伽藍は、唐の玄照法師も訪れている。『西域求法高僧伝』巻上に、「漸く迦畢試国に至り、如来の頂骨を礼し、香華具さに設け、その印文を取り、来世の善悪を観る」と。

四 髪の色は青紺で、ひねりは右巻き インド人の好む人相に三十二の好相(三十二大人相という)があり、仏に限らずすべての大人長者にとって理想の姿とされる。『無量義経』に、「……十七に旋髪紺青、……二十三に毛右に旋る……」とある。

五 六斎 既出の三二・一注九参照。

三八・六 **旧王妃伽藍** 頂骨伽藍の西南に旧王妃の伽藍がある。中に金銅の窣堵波の高さ百余尺のものがある。土地の言い伝えに聞けば、「その窣堵波の中には仏舎利が一升余あり、毎月の十五日、その夜になると円光を放ち、露盤(注一)を光らせ輝きつづけて夜明けに至り、その光はようやく斂り窣堵波の中に入る」とのことである。

注

一 露盤 また承露盤・相輪・輪蓋・盤蓋ともいう。傘蓋 chattra のこと。

三八・七 **象堅窣堵波と鞞鐸佉伽藍** 城の西南に比羅娑洛山(原注 唐に象堅という(注一))がある。山神が象の形をしているから象堅というのである。むかし如来が存世のとき、象堅神が世尊と千二百人の大阿羅漢をおまねきしたことがある。山の頂に大きな堅い岩があり、如来はそこに座をされて神の供養を受けられた。その後、無憂王(注二)がその磐石の上に窣堵波の高さ百余尺のものをたてた。今の人はこれを象堅窣堵波といっている。ここも中に如来の舎利が一升余ほどもあるということである。

注

一 比羅娑洛山(……) 比羅娑洛 *pji°-˳lâ-˳sâ-lâk˳*。訳語の「象堅」よりすれば梵語形は *pilu-sāra* である。玄奘の通常の表記法ならば、比楼娑羅 *pi°-˳lau-˳sâ-˳lâ* (Skt. *bimbisāra*)(頻毗娑羅「唐に影堅という」巻八の二・二参照)とでもあるべきところである。あるいは梵語の方言的発音を表記したものであろうか。後考を俟つ。この山は Panjshir 河に注ぐ Koh-Daman 川の南側に各々孤立した三小丘が東西に並んでおり、その東端の丘は見方によっては水辺に蹲る象の形をしており、頭部にあたるところには石を積んだ標示があり、背骨を現わす部分には古代の建物があったことは確実であるという[A・フシェ:『註解』一二五ページ;樋口:『研究』九七ページ]。

二 無憂王 阿輸迦王のこと。巻八の二・二参照。

象堅窣堵波の北の山の巌の下に一つの竜泉がある。ここは如来が神の[供養の]食事を受けおわり、阿羅漢とこの泉で口を漱ぎ楊枝を嚼んだところである。それにちなんで根を植えたが、今は茂った林となっている。後の人がここに伽藍を建て鞞鐸佉(原注 唐に楊枝を嚼むという(注二))と名づけた。これより東に行くこと六百余里、山や谷があいつづき、峰の巌石もけわしい。黒嶺を越えて北印度の境に入り、濫波国(原注 北印度の境)に至る(注三)。

注

一　𨷲鐸佉（……）　インドにおける歯牙清掃のための材料は多く竭地羅木 Khadira（樒木と訳す。学名 Acacia Catechu）を用い、その一端をゆっくりと噛み、ブラシ状になるに至って清掃がおのずからできるわけで、歯の清掃後これを二つにさき、その一で舌面をこする、この木片を楊枝・牙杖 Skt. *danta-kāṣṭha*, Pa. *danta-kaṭṭha* という。𨷲鐸佉は音釈（四部叢刊影宋抄本）によれば、「𨷲の音は皮 *b'jię* なり。佉は丘迦反 *k'a* なり」とある。すなわち *b'jię-d'āk-k'a* である。これに対する原語はジュリアンによれば Skt. *vaitraka*（「葦」の意）、ビールは Skt. *vidala*（「葉のない木」の意か）としているが、ワッターズは Skt. *piṇḍaka*（「林・林園」の意）を当て、玄奘が「嚼楊枝」の訳語をあてていることを斥ける［*On Y. Ch.*, I, 130］。ワッターズ説が最も真相に近いようであるが、なお検討を必要とする点が多々ある。

二　濫波国に至る　ベグラームより Kābul を通らずに、Ālāsai 峠を通り Langhān 地方、すなわち古代の濫波国に出たわけである。この峠を境界として気候・風土・産物等すべての様子が変わってくるのである。バーブル大帝も「新世界の入口」といい、近くは「印度の門」（T.H. Holdich）ともよばれている所以である。

大唐西域記　巻第一

大唐西域記　巻第二　三国

三蔵法師玄奘奉　詔訳

大捴持寺沙門辯機撰

一　印度総説

濫波国　那掲羅曷国　健駄邏国

一・一　印度の名称

一・一　印度の名称　天竺の名称を調べてみるに異議さまざまである。(注一)旧くは「身毒」ともいい、あるいは「賢豆」ともいったが、今は正音に従って印度というべきである。(注二)印度の人はその地方地方に随ってそれぞれの国号をとなえているが、遠方の外国では遙かより全体の名をつかい、その美しとするものを口にして印度といっている。この「印度」とは、唐で「月」ということである。月には多くのよび方があるが、「印度」というのはその一称である。その意味は、もろもろの生あるものは輪廻［転生］してとどまることがなく、その無明の長夜には晨を告げることもない。(注三)それはあたかも、白日が隠れてしまうと宵のともし火が光をひきつぐようなもので、たとえ星の光が照らすことはあっても、どうしてはっきりした月の明るさにおよぼうか。まことにこのような道理により、これにちなんで月にたとえたのである。実にその地の聖賢が遺法を受け継ぎ、凡人を導き、物を治めるあり方は、ちょうど月が天下を照らすようなものであり、この意味からこの地を

印度というのである。印度は種姓・族類(注四)が集団をなして分かれているが、婆羅門は特に清く貴いものとされている。その雅称に従い言い伝えて一般のならいとし、地の境界の区別をいうことなく全体をひっくるめて「婆羅門国(注五)」といっている。

注

一 天竺の名称……さまざまである　インドの呼称の詳細については、堀：『解説』一〇七ページ以下；杉本直治郎：「天竺名中国伝来経路考」『東南アジア史研究』I、六三七ページ以下；中村元：『インド古代史』上 六ページ以下；B. C. Law: *H. G. A. I.*, pp. 8 ff. を参照。

二 旧くは……というべきである　身毒 **śiĕn-d'ŏk*→ₒ*śiĕn-d'uok*。は Skt. *sindhu* に対するもので、『史記』大宛伝に初見。賢豆 **γien-d'ŭg*→ₒ*γien-d'əu*。は Skt. *sindhu* のイラン語化した形 *hiñd'u*, *heñdu* のようなものに対するもので、唐・道宣の『続高僧伝』第二闍那崛多伝に見える［杉本：同前書］もの故、唐以前のものであろうが、初出書を詳かにしない。印度 *·iĕn°-d'uo°*。は Skt. *indu* に対する語で、「月」の意であるという説は、玄奘以来、義浄およびそれ以後、中国でひろく行なわれるようになったが、この説はインドの原典には見えず、おそらくインドの俗語ではそれに近い音で表示することが行なわれていたのであろう［中村：同前書］という。

三 もろもろの……告げることもない　煩悩の惑いに智眼をおおわれ光明を見ることができず、生死に流転することをいう。

四 種姓・族類　いわゆる「四姓」をさす。後出一・九「族姓」の項参照。

五 婆羅門国　『慈恩伝』高昌国の条にも「法師は是れ奴の弟なり。法を婆羅門国に求めんと欲す」とあり、『南海寄帰内法伝』にも「是の五天の地はみな婆羅門国という」とある。恐らく Brahmaṇa-deśa のような別称があったのであろう。

一・二 印度の疆域　印度の境界の区域はおおむね言うことができる。五印度(注一)の境域は周囲九万余里ある。三方は大海で、北は雪山を背にしている。北は広く南は狭く、形は半月のようである。野を区画して七十余国に分けている。気候は特に暑熱で、地には泉池や湿地が多い。北は山岳連なり丘陵は砂石が多い。東は川野が湿潤で畑は肥沃である。南方は草木生い茂り、西方は土地石多く痩せている。これが大体である。まずはこう言えよう。

注

一 五印度　また五天竺・五印・五天ともいう。古代インド人は早くよりインドの形や広さについて非常に正確な知識をもっていた。九区に分ける考えは *Purāṇa* の作者にも見られ、五区に分かつ伝統的な考えも非常に古くより見える。*Purāṇa* や *Kāvyamimaṃsā* の五区分は、㈠Madhyadeśa 中インド、㈡Udīcya or Uttarāpatha 北インド、㈢Prācya 東インド、㈣Dakṣiṇāpatha 南インド、㈤Aparānta 西インドである［Law: *H.G.A.I.*, pp. 11 ff.; S. M. Ali: *The Geography of the Purāṇas*］。

一・三 印度の数量　そもそも数量の［基準の］よび方は踰繕那（原注　旧に由旬ともいい、また踰闍那ともいい、また由延ともいう。みな訛略なり(注一)）という。踰繕那というのは古えから聖王の一日の軍隊行程である。旧伝では一踰繕那は四十里である。ところが印度の通常は三十里であり、聖典に記載してあるものは唯の十六里である。窮微の数量は一踰繕那を分けて八拘盧舎とする。拘盧舎(注二)とは大きな牛の鳴き声が聞こえる限りのものをば拘盧舎と称している。一拘盧舎を分けて五百弓とし、一弓を分けて四肘とし、一肘を分けて二十四指とし、一指節を分けて七宿麦とし、それより虱・蟣・隙塵・牛毛・羊毛・兎毫(注三)・金水と次第に七分して細塵に至る。細塵は七分して極細塵とする。

極細塵はもはや分割することはできない。分割すれば空（無）に帰してしまう。それで極微ともいうのである。

注

一　踰繕那（……）　踰繕那 ˳iu-źi̯än°-˳nâ は Skt. Pa. *yōjana* (Aśok. Ins. *yojana*, Pkt. *jōaṇa*) [Turner: *C. D.*, no. 10530] に対する語である。一程・駅などと訳す。計測の基礎が不安定でもあり、諸種の異説がある。J. Fleet はインドの一肘を半ヤードとして計算した。これによると本晳の聖教所載の摩掲陀 Magadha 由旬では、一由旬十六里＝一万六千肘＝四・五四マイル。国俗の一由旬三十里＝三万二千肘＝九・〇九マイル、旧伝の一由旬四十里＝十二・一二マイルとした。特に旧伝の説を最も原本的なものとし、二頭の牡牛が満載せる車輌を牽引しうる距離であるとし、かつこの一由旬は玄奘の百里に相当するとした［Yojana and li: *J. R. A. S.*, 1903］。なお、Cunningham: *A. G. I.*, 1924, Appendix B を参照。

二　拘盧舍　拘盧舍 ˳ki̯u-˳luo-°śi̯a は Skt. *krōśa* (Pa. Pkt. *kōsa*) [Turner: *C. D.*, no. 3611] に対する語で、声・鳴喚と訳す。これの実距離も必ずしも一定していない。

三　一弓……極細塵　この用語の原語は、弓 *dhanu*, 肘 *hasta*, 指 *aṅguli*, 指節 *aṅguli-parva*, 宿麦 *yava*, 虱 *yūka*（虱の卵）, 蟣 *likṣā*, 隙塵 *vātāyanaraja*, 牛毛 *gōlōma*, 羊毛 *avilōma*, 兎毫 *śaśorṇa*, 金水（宋本などに「銅水」に作る）*tāmrāpa* ?, 細塵 *aṇu*, 極細塵 *paramāṇu* である。

一・四　**印度の時間と暦日**　さて陰陽の暦運（星辰の運行）、日月の次序は呼び方こそ異なってはいるが、時候に異なりはなく、［二十八宿の］星宿[注一]に随って月の名をつけている。時間のごく短いものを刹那（ts̍ʻat˳-˳nâ: Skt. *kṣaṇa*）という。百二十刹那を一呾刹那（tât˳-tṣʻ-at˳-˳nâ: Skt. *tatkṣaṇa*）とする。六十呾刹那を一臘縛（lâp˳-bʻuâ°: Skt. *lava*）とする。三十臘縛を一牟呼栗多（˳mi̯əu-˳χuo-li̯ĕt˳-˳tâ: Skt. *muhūrta*）とする。五牟呼栗多を一時（Skt. *kāla*）とする。六時があつまって一日一夜（原注　昼が三、夜が三）となるのである。通俗には日夜は分けて八時[注二]（原注　昼は四、夜は四、一いちの時におのおの四分あり）とする。月が盈ちはじめてから満月に至る間を白分（Skt. *śukla-pakṣa*）といい、月が虧けはじめてから晦（すっかりかくれる）までの間を黒分（Skt. *kṛṣṇa-pakṣa*）という。黒分に或いは十四日のこともあり十五日のこともある。月に大小があるからである。黒分からはじめ白分がつづき、合わせて一と月（Skt. *māsa*）とする。六ヵ月が合わさって一行（Skt. *ayana*）となる。太陽の運行が［赤道の］内北にあり［冬至からはじまる六ヵ月が］北行（Skt. *uttarāyana*）である。太陽の運行が［赤道の］外南にあり［夏至からはじまる六ヵ月が］南行（Skt. *dakṣināyana*）である。この二行をひっくるめ、合わせて一年（Skt. *vatsara*）とする。

また一年を分けて六時[注三]（Skt. *ṛitu* 季）とする。正月十六日から三月十五日に至るまでは漸熱（春 Skt. *vasanta*）である。三月十六日から五月十五日に至るまでは盛熱（夏 Skt. *grīṣma*）である。五月十六日から七月十五日に至るまでは雨時（雨 Skt. *varṣa*）である。七月十六日から九月十五日までは茂時（秋 Skt. *śarad*）である。九月十六日から十一月十五日までは漸寒（冬 Skt. *hemanta*）である。十一月十六日から正月十五日までは盛寒（冬尽 Skt. *śiśira*）である。如来の聖教は一年を三時としている。正月十六日から五月十五日までは熱時（夏 Skt. *grīṣma*）である。五月十六日から九月十五日までは雨時（雨 Skt. *varṣa*）である。九月十六日から正月十五日までは寒時（冬 Skt. *hemanta*）である。あるいは四時に分ける。春夏秋冬である。春の三ヵ月を制呾羅（tśi̯äi°-tât˳-˳lâ: Skt. *caitra*）月（一月）・吠舍

佉 (b'i̯wɒi°-°si̯a-ₒk'i̯a : Skt. *vaiśākha*) 月 (二月)・逝瑟吒 (*źi̯äi°-si̯ĕtₒ-ṭa°* : Skt. *jyeṣṭha*) 月 (三月) という。唐の正月十六日から四月十五日までにあたる。夏の三ヵ月を頞沙荼 (*ʼâtₒ-ₒṣa-ₒḍ'a* : Skt. *āṣāḍha*) 月 (四月)・室羅伐拏 (*śi̯ĕtₒ-ₒlâ-b'i̯wɒtₒ-ₒńa* : Skt. *śrāvaṇa*) 月 (五月)・婆達羅鉢陁 (*ₒb'uâ-d'âtₒ-ₒlâ-puâtₒ-ₒd'â* : Skt. *bhādrapada*) 月 (六月) という。唐の四月十六日から七月十五日までにあたる。秋の三ヵ月を頞湿縛庾闍 (*ʼâtₒ-śi̯əpₒ-b'uâ°-°i̯u-ₒźi̯a* : Skt. *aśvayuja*) 月 (七月)・迦剌底迦 (*ₒka-lâtₒ-°tiei-ₒka* : Skt. *kārttika*) 月 (八月)・末伽始羅 (*muâtₒ-ₒg'i̯a-°śi-ₒlâ* : Skt. *mārgaśira*) 月 (九月) という。唐の七月十六日から十月十五日までにあたる。冬の三ヵ月を報沙 (*pâu°-ₒṣa* : Skt. *pauṣa*) 月 (十月)・磨祛 (*muâ°-k'i̯wo* : Skt. *māgha*)月(十一月。祛は佉 *ₒk'i̯a* の誤りか)・頗勒窶拏 (*ₒp'uâ°-ləkₒ-°g'i̯u-ₒńa* : Skt. *phālguna*) 月 (十二月) という。唐の十月十六日から正月十五日までにあたる。

むかしより印度の僧徒は仏の聖教にしたがって雨安居に坐するが、[その期日は] 或いは前の三ヵ月であったり、或いは後の三ヵ月であったりする。前の三ヵ月は唐の五月十六日より八月十五日までにあたり、後の三ヵ月は唐の六月十六日から九月十五日までにあたる。従前の経律を翻訳するものは、或いは坐夏といったり、或いは坐臘といったりしているが、これはみな辺地の国ぶりを異にする人々であり、中国 (中インド) の正音に通達しなかったり、或いは方言がよく分からなかったりして伝訳に謬りがあるものである。さらに如来の入胎・誕生・出家・成仏・涅槃などの日月を推定するのにみなさまざまである。この話は後の記述にある。

注

一 星宿 インドの天文法。また宿曜ともいう。日月の運行を区画するために日ごろ目に見る星を標準にして天を分野したもので、その総数が二十八であるのは、後出の白月一日より黒月の終わりまでにあてたものといわれる。なお、この節全般については、小野玄妙：『仏教神話』第六章；L.D.Barnett: *Antiquities of India*, § VI; A.L. Basham: *The Wonder that was India*, Appendices, 2, 3; B. Walker: *Hindu World*, "Calendar" の諸書に詳しい。

二 通俗には……八時 義浄の『南海寄帰内法伝』巻三によれば、那爛陀寺の漏法 (時刻表) も八時であった。

三 一年を分けて六時 一年間を区分する方法に十二ヵ月区分のほか、本書には二行・三時・四時・六時が記されているが、義浄の『寄帰伝』巻三によれば五時もある。

一・五 市邑と住居 さて町村部落は囲いがあり広く高い。大通り小路はうねうねとまがりくねっている。町の門は道に面し、料理屋は路をさしはさんでいる。屠殺・漁師・俳優・魁膾 (行刑者)・除糞業のものたちはその住居に標識をつけ、村の外に住み、道路の往来には道の左にさける。[注一] 住宅の[注二]構造・垣根囲壁の作り方に至っては、地勢が低湿であるので城には多く塼が畳んである。垣根や壁におよんでは、あるものは竹や木で編んである。室宇や台観は板作りで平面の屋根にし、石灰を塗り甎 (焼成した瓦) や墼 (日乾し瓦) で覆ってある。いろいろな大きな建物の作り方は中華と同じで、茅をふいたり草をふいたり、或いは塼にし、或いは板にしている。壁は石灰で飾り、地は牛糞を塗り清浄にし、時節の花をまき散らす、このような点が異なっているところである。もろもろの僧伽藍は非常に変わった作り方で、隅楼は四すみに立ち、重閣は[注三]三層になっており、垂木・庇・棟・梁などは珍しい形の彫刻がしてあり、戸・窓・垣牆などは色とりどりの画がかいてあ

る。庶民の住居は中はりっぱに外はつつましく、奥部屋や母屋の高さや広さはいろいろで、層台や家の階層の作り方はその形もやり方も一定ではない。門は東に戸を開き、君主は東面して座をしめる。坐る場合にはみな縄ばりの椅子(注四)を用いる。王族・大官・士庶・豪族などのものは、装飾にちがいはあるが、形状に異なりはない。君王の玉座は一層高くもあり広くもあり、宝石をちりばめていて、師子牀といい、細い毛の織物を敷物とし宝をちりばめた几を踏み台としている。一般の人民や役人たちは好むところに随ってさまざまの物を彫刻し珍しい宝で飾ってある。

注

一　屠殺……左にさける　いわゆる「四姓」外の不可触賤民（旃陀羅 caṇḍāla, Paria）といわれる人々である。魁膾は、『慧琳音義』第一に「魁膾とは兇悪を屠殺するの師なり」とあり、第七十には「人を殺すを主るものなり」とある。

二　住宅　インドの古代都市・村落については、中村元：『インド古代史』上一七九、五二五、下二六五ページなどを参照。

三　僧伽藍は……彫刻がしてあり　義浄の『西域求法高僧伝』新羅慧輪法師伝中の那爛陀についての記事の一節に、「重閣三層、層は高さ丈余、寺上の四すみに各々塼堂をつくり、多聞の大徳ここに住す。寺門は西に向かい、飛閣は虚を凌ぎ、彫刻は奇形にして、妙に工飾を尽くす」とあり、また『慧超伝』に「寺および王の宅は並びにみな三重に楼を作る。下より第一重は庫となし、上二重は人住む。諸大首領等もまた然り。屋はみな平頭にして、塼・木の造るところ、自外の人は並びにみな草屋なり」とある。なお、「僧院」の建築については、逸見梅栄：『印度仏教美術考・建築篇』一八七ページ以下参照。

四　縄ばりの椅子　「縄床」の種類・形式については、望月：『辞典』二五四五ページ以下、小野玄妙：『仏教美術』九五ページ以下を参照。

一・六　印度の衣食　衣裳服飾(注一)は裁縫して作ることはなく、鮮白を貴び色ものを軽んずる。男は腰にめぐらし腋にまとい、巾を横ざまにして［左肩にかけ］右肩をぬぐ。女は襜衣（膝もおおう長い衣）を下まで垂れ両肩をみな覆ってしまう。頭には小さな髻をつくり、余った髪は垂れ下げる。或いは髭を剪り、ことさらに珍しいさまをすることもある。頭には花鬘（花の下げ飾り）をかぶり、身には瓔珞（首飾り）をおびる。

その着ているものは、いわゆる憍奢耶衣や氎布などである。憍奢耶衣(注二)というのは野蚕の糸で［織ったもので］ある。［二に］菆麻衣(注三)。麻の類である。［三に］頷（原注　墟厳反 k'iwo + ˳ngiəm → ˳k'iəm）鉢羅衣(注四)。細い羊毛を織ったものである。［四に］褐刺縭衣(注五)。野獣の毛を織ったものである。獣毛は細くて軟かく、績ぐことができる。それで珍重されて着用にあてられるのである。北印度は風土寒さ烈しく、短く仕立てた身にぴったりした衣類であり、胡服に似ている(注六)。

外道の服飾はごたごたして変わった仕立てである。あるものは孔雀の羽根を衣たり(注七)、あるものは髑髏の瓔珞を飾ったり(注八)、あるものは衣服をつけず露形であったり(注九)、あるものは草や板で体を掩ったり、あるものは髪を抜き髭を切ったり(注一〇)、あるものは鬢をばさばさにし椎髻にしたり、衣裳に定めもなく、赤白不定である。

沙門の法服は、ただ三衣(注一一)と僧却崎・泥縛些（原注　桑箇反 ˳sâng + kâ˳ → sâ˳）那があるだけである。三衣の仕立て方は部派により不同で、或いは縁に広狭［の違いが］あり、或いは葉（折り目）に大小がある。僧却崎（原注　唐に掩腋という。旧に僧祇支というは訛なり）は左肩をおおい両腋をおおいかくすもので（左肩へゆく）、左側が開け（右腋を

かくす）右側が合わさっており、長い仕立てであり腰をすぎる。[注二] 泥縛些那（原注　唐に裙という。旧に涅槃僧というは訛なり）は帯紐がついていないから、着ようとするときには衣をひき集めてひだをつくり、組み紐でまきとめる。[注三] ひだは部派によりそれぞれ色を異にし、黄・赤など不同である。

刹帝利 *kṣatriya*・婆羅門 *brāhmaṇa* はさっぱりとし質素で、清らかにつつましやかである。国王・大臣の服飾は非常に違っていて、花の髪飾りや宝冠を頭部の飾りとし、腕輪・肘巻きや瓔珞などで身の飾りをしている。[注四] 富商大賈のなかにはただ肘巻きだけをしているものもある。はだしの人が多く、履物をはくものは少ない。歯を染めて、或いは赤く或いは黒くしている。[注五] 髪はととのえ耳には穿をあけ［飾りをつけ］、長い鼻に大きな眼、これがその容貌である。

おもうに、かれらが清潔に自らを持しているのは、それぞれの気持ちを曲げているのではない。おおよそ食事に際しては必ず手を洗い、残りものは二度と供することはしない。食器は継続使用することはせず、瓦や木の器は使用すれば必ず廃棄する。[注六] 金銀銅鉄［の器具］はつねに研磨が加えられている。食事が終われば楊枝をかんで歯の掃除をする。[注七] 口を洗いすすいだあとでなければお互いに触れあうことがない。つねに用便をすませば必ず身を水洗いする。身には諸種の香料を塗る。いわゆる旃檀・欝金［というような香料］である。君王が湯浴しようとするときには楽器をかなで歌をうたい、祭祀にあたり参詣をするには沐浴しきよめるのである。

注

一　衣裳服飾　この時代における男女の風俗は Bāgh Cave（アジャンターの北北西百五十マイル、Mandū の西三十マイルの地点にある）の絵画によく描かれている［平凡社『世界美術全集』一一、六六ページ］。大まかに言って今日とほとんど変わりがない。なお、この節全体については、V. Upadhyay: *The Socio-religious Condition of North India, 700-1200 A. D.*, p. 159 ff. が参考になる。

二　憍奢耶衣　憍奢耶 ˳kįäu-˳śįa-˳ia: Skt. *kauśeya* は「絹」の意。野蚕とは天蚕の意で、中国のような桑蚕による長い繊維のものではない。

三　菆麻衣　菆麻 *ts'įu˚-˳ma*: Skt. *kṣauma* は「麻」の意。

四　顉鉢羅衣　顉鉢羅 ˳*kįɒm-puât˳-˳lâ*: Skt. *kambala* は「羊毛の織物」。

五　褐刺縭衣　褐刺縭 *γât˳-lât˳-˳ljię* については、ジュリアン、ビール、ワッターズの諸氏も適当な梵語を与えていない。ただワッターズは「褐」字を入りわたりの字と考え、「山羊の毛」を意味する西蔵語 *ral* を考えている［*On Y. Ch.*, p.149］。堀氏は『慈恩伝』巻五の玄奘が鳩摩羅王に辞する条に「鳩摩羅王もまた衆珍を施す。法師並びに皆納めず。唯鳩摩羅王の曷刺釐帔（原注　即ち麤毛の下の細なるものにて作る所）を受く。途にあって雨を防ぐに擬す」とある「曷刺釐帔」と同じとみている［『解説』一二三ページ。なお高田：『国訳伝』一三〇ページ注（三〇）も同じ］。いま適解を得ないまま将来の問題として残す。

六　北印度は……似ている　北インドのカシミール以北は胡人のようにシャツとズボンを着用することは義浄の『寄帰伝』巻二、㈩衣食所須の条に見える。すなわち「羯湿弥羅よりすでに去り速利 Sughd・諸胡・土蕃 Tibet・突厥 Türküt に及ぶ、大途相似て、敢曼（玄奘の顉鉢羅 kambala）を着ず、氈・裘を是れ務む。少しく劫貝 karpāsa（木綿）有り、時に著るものあり。その寒地を以て、衫袴は是れ常なり」とある。

七　孔雀の羽根を衣たり　孔雀行者（Māyūravartin）とよばれる外道教派。

八　髑髏の瓔珞を飾ったり　巻第一の三八「迦畢試国」注二を参照。

九　あるものは……露形であったり　同前「迦畢試国」注九を参照。

一〇　あるものは髪を抜き　ジャイナ教の一派に捋髪者 Keśolluñcana とよぶものがある。

一一　三衣　僧の必ず被着すべき三種の衣服の意で、㈠僧伽胝（巻一の三二・三既出。防寒用で袷であるから複衣とも、正式の衣の故に大衣ともいう）、㈡欝多羅僧（同上条に既出。安陀衣の上に着る故に上衣とも、七条に切り仕立てられる故に七条衣ともいう）、㈢安陀衣（安多羅婆娑 *antara-vāsaka* という。下にきる故に下衣・内衣とも、雑務作業時にはこの一

衣だけで可なる故に雑作衣ともいう）の三種である。

一二　僧却崎……腰をすぎる　巻一の三二・二に既出。前注の三衣をいわゆる偏袒右肩に被着するから右腋が露出するわけで、この右腋と胸をかくすため、右腋より左肩へかける長方形のものをいう。掩腋の訳語のある所以。実際には汗除けのものらしい。三衣についで重要な比丘の用物。

一三　泥縛些那……まきとめる　泥縛些那 *niei-b'uâ°-sâ°-nâ*: Skt. *nivāsana* は比丘の腰部をまとうもので、俗にいう腰衣（東南アジアのサロン）、裙ともも訳す。もと帯を用いず、あたかも湯上がりタオルを腰にまくがごとく腹上で挾みとめていたが、落ち易いので紐 Skt. *kāyabandhana*（繋腰・腰帯と訳す）で泥縛些那の上に巻きとめるようになった。なお、法衣については、『寄帰伝』第二、衣食所須、著衣法式の両条に詳しい。

一四　国王・大臣の服飾……している　本項注一の諸書を参照。

一五　歯を染めて……している　この歯を赤くするというのは、現在もインドおよび東南アジア一帯で行なわれているビンロウ樹の葉を樟脳や香料・生石灰と混じ口中に嚙むために赤くなる風習をさすものであろう。この葉は耽歩羅 Skt. *tāmbūla*（蒟醤、蒟醤の葉の意）といわれるもので、マルコ・ポーロも Tembul と記している [Yule and Cordier, II, p.371, 374]。のちの西洋人のインド紀行中に Betel という語であらわれるのは、Malayālam 語からきた同意語である [Yule and Burnell: *Hobson-Jobson*, p.89]。

一六　食器は……必ず廃棄する　『寄帰伝』第一、受斎赴請の条に「器はすなわち唯銅一色にして、須く灰末を以て浄く揩くべし。若しそれ瓦器は、曾て未だ用いざるものを、一度のみ用う。かくのごとくして過なしとなす。既に用いられ訖らば、之を坑塹に棄つ。その触を受くるがために、重ねて収むべからず。故に西国の路傍に義食を設くる処、残る器山の若し」とある。

一七　食事が終われば……掃除をする　巻一の三八・七参照。なお飲食料品については本巻一・一五参照。

一・七　**印度の言語・文字と教育**　印度の文字を調べてみるに、梵天（Brahma-deva, 娑婆世界を支配する神）が作ったもので、はじめに手本を示し四十七言とした。[注一] 物に出遇って［語を］合成し、事に随って転々運用するうちに、流れがのび枝が派生し、その領域は次第に広まった。地により人に随って少しく改変をうけたが、その大体を言うならば本源とは異なっていない。しかし、中印度は特に詳細正確で、言葉の調子も温和で正しく［梵］天［の言語］と同じで、ひびきは清らにはっきりし人の手本となっている。[注二] 隣境や外国はまちがったものを習い法則とし、競って軽薄な風潮にはしり正しいあり方を守ろうとはしない。[注三]

言葉を記し事跡を書く［記録の］点に至っては、それぞれ役人がある。記録文書を総称して尼羅蔽茶（原注　唐に青蔵という）[注四] といい、善悪ともにつぶさに記し、災害吉祥ともに詳しく書いてある。

［子供の］蒙を開き指導をするには、まず［悉曇］十二章からはじめ、[注五] 七歳以後ようやく五明の大論を授ける。[注六] ［五明とは］一に声明という。語を釈き字を訓み、目を詮かにし区別を分類する。[注七] 二に工巧明。技術・工芸・陰陽・暦数である。[注八] 三に医方明。禁呪をし邪悪をふせぎ、薬物・治療法・針・灸の術である。[注九] 四に因明という。正邪を考え定め、真偽をきわめしらべる。[注一〇] 五に内明という。五乗の因果の妙理を研究する。[注一一]

婆羅門（Brāhmaṇa）は四吠陀論（原注　旧に毘陀という。訛なり）[注一二] を学ぶ。一に寿という。生を養い性を善くするをいう。[注一三] 二に祠という。祭祀を行ない祈祷をするをいう。[注一四] 三に平という。礼儀・占卜・兵法・軍陣をいう。[注一五] 四に術という。特殊技能・技術数学・禁呪・医学をいう。[注一六]

師たるものは必ず微細な点にまで博く研究し、奥底までもきわめ尽くし、これを概論に示し、微妙な言葉で導き、後進のものをよく指導し、才うすきものをはげますのである。もし見識才能明敏にして隠遁を願うものがあれば、とらえておき部屋の外から鍵をかけておき、学行成就してのちはじめて自由にする。年齢まさに三十にして志立ち学成るときは、はや俸禄をうけ官位についているから、第一番に師の恩徳に酬いる。風雅をこのみ世を遁れ行ない正しく、世俗の外に身をまかせ世事の外に志を遊ばせるものは、世の批評にも心を驚かすことなく、評判にも耳をかすことなく、君王が賞讃してもまねきよせることはできない。その上、国家は聡敏の人を重んじ世間は才高く眼のある人を貴ぶから、賞め讃えることが高ければ礼遇もまた手厚い。であるから［人々は］志を強くし学問にはげみ、疲れを忘れて学芸に心を遊ばせ、道をもとめて仁者にたより千里の道を遠しとしない。家はたとい富豪であっても志は旅におると同じく、口腹を満たすもとでは人にもとめてすます。道を知るを貴ぶことあるも、財のとぼしいことを恥じることはない。遊びほうけて仕事をおこたり、美食をたのしみ衣服におごることは、美徳でもなければ時世のならわしでもなく、おのが心の恥ずかしさと世間からの辱しめはともに身に至り悪評は高くなる。

注

一 印度の文字……とした　インド文字は通常「梵字」brāhmī (brāhmī-lipi) といわれるように、梵王天帝 Brahma-deva の作るものと伝説されている。今日は Semitic 系の文字に起源し西紀前五〇〇年ごろに四十七字母を完成したものであろうといわれている［G. Bühler: *Indische Palaeographie*］。字体については、六十四種の多きを数えるもの［『方広大荘厳経』第四示書品］もあるが、古代文字流行のあと北方では紀元後四―五世紀にグプタ文字（近時西域発見の文書に見られる字体）が発達し、六世紀には中国・日本でいう悉曇文字 siddhamātṛkā があらわれ、七世紀にはナーガリー文字（今日一般に使われる Deva-nāgarī 文字はこれにもとづく）が起こった。玄奘訪印当時のインドは悉曇文字期であるが、北・西部はナーガリー文字が流行しはじめていた［V. Upadhyay: *Socio-religious Condition*, pp. 138 ff.］。この梵字四十七字母を伝統的な文字の順序でかつ調音部位に従ってローマ字により分類表記すると次表のようになる［W.S. Allen: *Phonetics in Ancient India*, p.20］。

子音			声門音	軟口蓋音	硬口蓋音	ソリ舌音	歯音	唇音
破裂音	無声音	無気音		k	c	ṭ	t	p
		有気音		kh	ch	ṭh	th	ph
	有声音	無気音		g	j	ḍ	d	b
		有気音		gh	jh	ḍh	dh	bh
鼻音(1)				ng	ñ	ṇ	n	m
半母音					y	r	l	v
摩擦音		無声音	(2)		ś	ṣ	s	
		有声音	h					
母音								
短母音			a		i	ṛ	ḷ	u
長母音			ā		ī	ṝ	ḹ	ū
二重母音					e,ai			o,au

注　この他に，(1)anusvāra ṃ, (2)visarga ḥ とがあるが，47字母には入れない。

二 中印度は……手本となっている　『慈恩伝』巻三によると、玄奘は梵字梵語を中インド那爛陀で学習している。そのもとづく書は元来は毗耶羯剌諵 *vyākaraṇa* といい、声明記論と訳し百万頌あったものを帝釈天が十万頌となし、さらに健駄邏国のパーニニ Pāṇini（前五―前三世紀の人）が八千頌に略したものである。その著の *Ashṭādhyāyī*「八章」の書は今日に至るまで古典梵語文典の最高権威書である。

三 隣境や……しない　『慈恩伝』巻三の前注の文に続き、「近く又南印度の婆羅門、南印度の王のために復た略して二千五百頌となす。辺鄙の諸国に多く盛んに流行す。印度の博学の人の遵い習わざる所なり」とある。なお、本項注一の V. Upadhyay の書 p.138 ff. に詳しい。

四 尼羅蔽茶（……）　尼羅蔽茶 ˳nji-˳lâ-pi̯äi°-˳d'a : Skt. *nila-piṭa*（*nila* は「青」、*piṭa* は「蔵」、麗本の「清蔵」は誤り）、「記録および王の勅命の集録」の意で、いわゆる Blue Annals である。

五 蒙を開き……はじめる　梵字の母音字・子音字を配合綴字する方法を「悉曇章」といい、児童に教授するものであった。義浄の『寄帰伝』は四十九字母でこれを十八章に分かつが、「一には則ち創学悉曇章なり。亦た悉地羅窣覩 siddhir-astu と名づく。斯れ乃ち小学標章の称なり。……もと四十九字あり、共に相乗転して一十八章をなす。総て一万余字あり、合わせて三百余頌なり。……六歳の童子これを学び、六月にして方めておわる」とある。玄奘のいう十二章は、義浄の十八章よりさらに簡略なものであったろう。

六 五明の大論　五明とは Skt. *pañca vidyāsthānāni* の訳で、五種の学芸の意である。

七 一に声明……する　声明とは Skt. *śabda-vidyā* の訳、声に関する学術の意。『瑜伽師地論』第三十八に、「詁訓言音文句の差別に悟入し、一義の中の種々の品類殊音において随って説く」とあるを見れば、文字音韻および語法の学を指すことがわかる。

八 二に工巧明……である　工巧明とは Skt. *śilpakarmasthāna-vidyā* の訳で、工芸・音楽・美術・書算・占相・呪術などから、平常の衣食住にいたるまでのすべての学術技芸を網羅したものである。

九 三に医方明……である　医方明とは Skt. *cikitsā-vidyā* の訳。『寄帰伝』第三の二十七先体病源の項に「西方の五明論中のその医明に曰く……」と詳細な説明が見える。

一〇 四に因明……しらべる　因明とは Skt. *hetu-vidyā* の訳。言語の適否、思考の正邪を論究し、他人に自己の正しき主義主張を悟らせることを目的とする。

一一 五に内明……研究する　内明とは Skt. *adhyātma-vidyā* の訳。他の四明が形而下的学芸であるに対し、これは五乗（人・天・声聞・縁覚・菩薩）の因果の理を示す諸仏の言語を研究する形而上的思索をいう。ここの四言二句は『智度論』の「内明は五乗の因果の妙理を究暢す」という句をそのまま引用したもので、他の四明の句とは内部構造を異にしている。

一二 四吠陀論（……）　吠陀 b'i̯wi°-˳d'â : Skt. *veda*（旧訳は毘陀 *b'i̯ed-d'â → ˳b'ji-d'â）。婆羅門の聖典で、その古き部分は太古にアーリヤ人種がインドの五河 Panjab 地方に移住したころ（前一五〇〇年―前一〇〇〇年）のものを含む自然崇拝の讃歌で、世界最古の文学である。一に梨倶吠陀 *ṛg-veda*, 二に三摩吠陀 *sāma-veda*, 三に夜柔吠陀 *yajur-veda*, 四に阿闥婆吠陀 *atharva-veda* の四種あり、各吠陀にはそれぞれの副吠陀 *upa-veda* がある。次下に玄奘があげる四吠陀は、実は、この吠陀と副吠陀を混淆して列挙しているようである。この混淆は中国では決して玄奘一人のみではない。

一三 一に寿……をいう　梨倶吠陀そのものではなく、これの副吠陀、Skt. *āyur-veda* のことで、寿・寿命論と訳される医書である。

一四 二に祠……をいう　夜柔吠陀そのものである。祠・祭祠などと訳され、供犠行祭の際に唱える呪文とその注釈を集めたもの。

一五 三に平……をいう　平とは三摩吠陀のことである。平・等・歌詠明倫などと訳される。祭祀に唱える讃歌とその歌曲を集めたものである。ところが、この内容についての玄奘の説明に「占卜・兵法・軍陣」を含めている。これは、おそらく、阿闥婆吠陀（呪術はこれに含まれる）とその副吠陀 *śastra-śāstra*（武器論）とを混同したものであろう。

一六 四に術……をいう　術とは阿闥婆吠陀の訳語の一で、また呪・呪術・穰災・異能護方智論とも訳す。ところが、この説明中に玄奘は医方をもあげている。医学は注一三にあげた梨倶吠陀の副吠陀に含まれている。これも混同したものか。

一・八　仏教界の状況　如来の教理は［聞く人のそれぞれの］もち分に随って理解を得るものであり、［その上今日は］如来の時代を去ることすでにはるかで、如来の正法の伝わり方に純なるものとさほど純でないものとがある。それぞれ見知る心のままにいずれも聞き知った悟りを得、部派は対峙し議論は沸騰している。学ぶところを異にし一科の学をもっぱらにし、進む道こそ異なるが帰するところは同じであるのに、十八の部派がおのおの鋒先をほしいままにしている。(注一) 大乗と小乗の二派はあり方がそれぞれまちまちで、坐して沈思黙考するもの、行動して修行するものなどあるが、心の落ちつけ方・智恵のあり方には大きなへだたりがあり、さわがしいもの・静かなものなどまことに差がある。

それぞれの集団に随っておのおの規則をきめている。律論を云々することはないが、その大すじは仏の経典である。一部［の経典］を講義し宣布し得るものは僧の知事(注二)を免ぜられ、二部のものは上等の房舎臥具を加えられ、三部のものは侍者をつけて仕事をさせ、四部のものは浄人（寺に入ってはいるが、まだ出家していないもの）をつけて使役させ、五部のものは外出に象や輿に乗り、六部のものはさらに前後に衛士(注三)を従えるというように、徳行が高ければ、その待遇もまた異なるのである。

時おり、集まって論議をし、僧たちの優劣を考えて、［論の］善いものと悪いものとをはっきり分け、魯鈍なるものをしりぞけ明敏なるものをひきあげるようにする。もし如来の微妙な言葉を考定しすぐれた道理を宣揚し、その言辞もうるわしく弁舌もさわやかであれば、宝で飾った象に乗り先導・従者が林のように多数ならぶ［ほどの栄誉を得る］。もし教義の内容にむなしく言葉が腰折れしたり、理が少ないのに言辞のみ多く、道理が矛盾しているのに言葉ばかりよどみなく話すものは、いきおいのまま顔には赤土をぬられ体は土でよごされて、曠野に追われ谿谷に棄てられてしまう。善いものも悪いものもはっきりさせるし、賢者も愚者もつつみかくさないのである。

人々は道を楽しむことを心得て、家ごとに学問につとめるが、出家するか在俗するかは、それぞれの好むところに従っている。咎をこうむり戒律を犯せば、僧は処罰に該当することとなり、軽いものでは人はその責めをいましめる、次の段階はさらに人は共に話をしない、重いものでは人は住居を共にしない。共に住めないものは排斥されて共にはならべず、きまった住所を出て身をおくに所もないこととなり、旅に苦労をするか或いは還俗するのである。

注

一　十八の部派……ほしいままにしている　小乗十八部のこと。上座・大衆の根本二部より生じた十八部のことで、また本末合わせて二十部派ともいう。北伝系統の『異部宗輪論』所伝によれば、大衆部よりは、一説部・説出世部・鶏胤部・多聞部・説仮部・制多山部・西山住部・北山住部の八を派出し、上座部よりは、説一切有部・犢子部・法上部・賢冑部・正量部・密林山住部・化地部・法蔵部・飲光部・経量部の十を派出したという。南伝系統のものは平松友嗣訳『マハーヴンサ』（冨山房百科文庫）六九ページ以下参照。なお、玄奘訪印時のインドにおける仏教全般については、L. Joshi: *Studies in the Buddhistic Culture of India, during the 7th and 8th Centuries A.D.* に、またインドの僧侶・僧院については、S. Dutt: *Buddhist Monks and Monasteries of India* に詳しい。本書巻末の補注も参照されたい。

二　僧の知事　知事 Skt. *karma-dāna* はまた維那・知院事とも称せられ、寺中において衆僧の雑事庶務を掌握する役名である。義浄は授事と訳し、維那の語を梵漢混合の故をもって排している［『寄帰伝』第四］。

三　徳行が高ければ、その待遇もまた異なる『寄帰伝』第二衣食所須の条に、「また多聞の大徳、或いは一蔵の精研をよくするものを見るに、衆は上房を給し、亦（また）浄人を与えて供使せしむ。講説の尋常なるものも僧事を放免せらる。出づるに多く輿に乗り、畜に鞍（くら）しては騎らず」と待遇の差を述べている。

一・九　族姓（四姓）　さて族姓（種族の姓）の異なるものに四流（四姓）（注一）がある。その一を婆羅門（ブラーフマナ）という。浄行である。道を守って行ない正しく、その節操を潔白にしているものである。（注二）二を刹帝利（クシャトリヤ）（原注　旧に刹利という。略なり）という。王の種族である。代々君臨して仁愛を心としているものである。（注三）三を吠奢（ヴァイシャ）（原注　旧に毗舎という。訛なり）という。商人である。彼我の有無を取引きし遠近に利をおうものである。（注四）四を戍陀羅（シュードラ）（原注　旧に首陀という。訛なり）という。農夫である。力を田畑に尽くし身を農事につとめるものである。（注五）一体この四姓は清濁流れを異にして［混ずることなく］、結婚は同姓の間で通じ（注六）往来には路（みち）を別にし、一族の内外の宗枝（主カーストとそれより分派した亜カースト）ともに婚姻は［他姓と］雑えて乱すことはない。婦人は一たび嫁入りすれば二夫にまみえることはしない。（注七）四姓以外の雑姓は、（注八）その種族が非常に多く、（注九）それぞれ類をもって集まり、（注一〇）詳しくは記しがたいほどである。

注

一　四流（四姓）　Skt. *catvāro varṇā* の訳で、インドにおける四種の社会階級をいう。その起源は甚だ古く、征服者であるアーリヤ人種と被征服者の有色人種の間の差別から始まったもののようで、その特徴は、血縁関係を基礎とする排他的感情、下降することはあっても向上することのない不平等な権利のともなう階級的組織、個人の才能あるいは選択の自由の全くない職業の世襲の三点であろう。今日はこのあり方をカースト Caste（ポルトガル語の casta からきた）とよんでいる。Baines, J. A.: *Ethnography, Castes and Tribes*: 岩本裕:『印度文化史の課題』一九四七: 中村元:『インド古代史』上八五ページ以下参照。

二　その一を婆羅門……ものである　婆羅門という語は旧訳であって、玄奘の新訳ではない。『玄応音義』第一八に、「婆羅門　この言は訛略なり。応（まさ）に婆羅賀摩拏といふべし」とある。Skt. *brāhmaṇa.* 浄行とはこの語の訳語で、また浄志・静志・梵志という。四姓中最上位にあり、多く僧侶・学者となる。『慧琳音義』第二九に、「婆羅門……みな博学多知、志を守ること貞白に、文儒雅操、道を高くして仕えず、その中の聡俊（そうしゅん）穎達（えいたつ）なるものは多く王者の師となり、封邑（ほうゆう）を受けて自ら居る。最も上等となす」とある。田辺繁子訳:『マヌの法典』（岩波文庫）一・八八には「バラモンには［ヴェーダ］教授と学習、自己又は他人のための行祭、布施を与え、又受くことを定めたり」とある。

三　刹帝利……である　刹帝利 *tṣ'at˳-tiei°-lji°*: Skt. *kṣatriya,* Pa. *khattiya,* Pkt. *khattia*; Panjab. *khattri, chatri* [R. L. Turner: C.D., no. 3649; L.H. Gray: *Ind.-Iran. Phonology,* § 485]。『玄応音義』第一八に、「刹利　応（まさ）に刹帝利といふべし。これに訳して土田主といふ。王族貴種をいふ」とある。四姓の第二位で王族および武士の階級であり、政治・軍事を掌（つかさど）る。『マヌの法典』一・八九には、「クシャトリヤには、人民の保護、施与、供犠、［ヴェーダの］学習、及び感覚的対象に対する無執著を指定せり」とある。ただし仏典中では多くこれを第一の階級としている。

四　吠奢……である　吠奢 *b'ịwi°-˳śịa*: Skt. *vaiśya.* 旧訳は毗舎 **b'ịed-śịăg → ˳b'ji-°śịa.* 『玄応音義』第一八に、「鞞舎……これに坐估という。案ずるに天竺（てんじく）の土俗、多く宝貨を重んず。これらのひと積財を営求して巨億なり、坐して出納す。故をもって名づく」とある。また居士・田家・工師種ともいう。四姓の第三位で、農牧工商に従事する。『マヌの法典』一・九〇には、「ヴァイシャには、牧畜、施与、供犠、［ヴェーダの］学習、商業、金銭の貸与、及び土地の耕作を指定せり」とある。婆羅門・刹帝利・吠奢の三姓は「再生族」と称する特権をもったアーリヤ人種であったが、戍陀羅は「一生族」とよばれる非アーリヤ人種であった

ようである。

五 戍陀羅……である　戍陀羅 *śiu°.d'a.la*: Skt. *śūdra.* また田農種・田家種ともいい、吠奢と区別がはっきりしないが、『マヌの法典』一・九一には「されど主宰神は、これらの（他の）三種姓に甘んじて奉仕すべき唯一の職能を、シュードラに命じたり」として、シュードラを奴隷と見ている。これがおそらく被征服民族であったのであろう。

六 結婚　族姓の結婚については、『マヌの法典』三・四以下に詳細に規定している。なお、K・M・カパディア著・山折哲雄訳：『インドの婚姻と家族』のヒンドゥーの部分参照。

七 婦人は……しない　『マヌの法典』五・一五七に「夫の死後は、婦人は随意に、花・根及び果実にて生き、その肉体を痩せ衰えしむべし」、五・一六二に「貞節なる婦人には、如何なる場合にも、第二の夫は許されざるなり」とある。

八 四姓以外の雑姓　雑種階級については、『マヌの法典』一〇・五以下に詳細に規定している。かれらは旃陀羅 caṇḍāla とよばれる賤民である。『法顕伝』に「旃荼羅は名づけて悪人となす。人と居を別にし、もし城市に入らば則ち木を撃ちて以て自ら異にす。人則ち識りて之を避け、相搪揬することなし。国中に猪雞を養わず、生口を売らず。市に屠店および酒を沽るものなく、貨易には則ち貝歯を用う。唯旃荼羅、漁猟師あり肉を売るのみ」とある。また、中村元：同上書、上八七ページ以下に古代の状況について詳しい。なお、本巻一・一三注三〇を参照。

九 種族が非常に多く　玄奘訪印当時における族姓の総数を詳かにしないが、族姓は分岐を重ねて、今日では全カースト約三千に分かれ、それはさらに二万五千以上の亜カースト subcastes に分かれるという。このうち雑種階級は最も多い。

一〇 それぞれ類をもって集まり　城外に各カーストごとに区分を保って群居するのは注八の法顕の当時も今日も余り変わりはない。

一・一〇　兵制　君王は代々ただ刹帝利だけがなる。君位をうばい王を殺すことも時にはおこり、異姓のものが王の尊位を称することがある。国の戦士は勇敢なものをことごとく選んで、父子その仕事を世襲し武術をきわめるようにし、平時には宮城の守護にあたり、戦時には衆をふるいはげまし先鋒となる。およそ歩・馬・車・象の四兵種がある。(注一) 象兵隊は［象に］堅牢な甲をきせ牙には鋭い爪をつけ、一人の士官が騎乗して指図をし、二人の兵隊が左右におり象の操縦をする。車兵隊は四頭の馬を車につなぎ指揮官がそれに乗り、兵隊たちは周囲を囲み輪をまもり轂をたすける。騎兵隊は離れて敵を防ぎ、逃げる敵を懸命に追いかける。歩兵隊は身軽で強く勇敢なものを選にあて、大きな楯をにない長い戟を手にするか、あるいは刀剣をもって前進行軍する。これらの諸兵器は鋭利ならざるはない。いわゆる矛楯・弓矢・刀剣・鉞斧・戈殳・長矟・輪索などの類はみな代々習熟している。

注

一 歩・馬・車・象の四兵種がある　玄奘訪印時の兵備については未詳であるが、前三世紀のマウリヤ Maurya 王朝の創始者チャンドラグプタ Candragupta 王の宰相カウティリヤ Kauṭilya の名が冠せられる『カウティリヤ実利論 *Kauṭilīya-arthaśāstra*』（おそらく、後三世紀ごろに婆羅門学者の手により編纂されたものといわれる。いま、一九四四年中野義照訳本による）は、政治・外交・軍事の指南書としてインドで最も有名なものである。その第一〇巻「戦闘に就いて」、特に第四章「戦場・歩兵騎兵車兵象兵の任務」、第五章「軍勢に依る両翼両側前衛の陣形区分・精鋭軍劣弱軍の区分・歩兵騎兵戦車象兵との戦闘」の項は具体的かつ詳細であり、玄奘の記述を補うに足るものである。なお、中村元：『インド古代史』上五三八ページ以下：B. Walker: *Hindu World.* 'Army' 'Warfare' 'Weapons' の諸項参照。また、インドにおける兵器の具体的な図象はアジャンター Ajaṇṭā Cave の壁画について見得る。

一・二　民族性と刑法　さて、そのならいたるや、性質は気短ではあるが、その心ばえは非常に正しく素直で、金銭においては得べからざるものを手に入れるということもなく、義においては人を思いやる心がある。冥界で受ける罪をおそれ、この世のことには執著せず、嘘いつわりをすることなく約束を信ずる。

政教はまっすぐで風俗は穏和である。凶悪な小人たちが時に国法を犯すことがある。君主を害しようと計画すれば、その事実がはっきりしている場合は牢獄に幽閉して処刑することはせず、その生死のままにまかせて人々の仲間にいれない。礼義をそこない忠孝にもとる場合には、［その程度に応じて］鼻をそいだり耳を切ったり、手を切断したり足の筋を切ったり、あるいは国を追い出したり、あるいは遠方に追放する。その他の犯罪は金銭を出して罪をあがなうのである。

裁判を行なうには言葉を判断し笞や杖でたたくことはなく、質問に随って正直に答えれば、事実によって公平に罰を科する。犯したことを否認したり、過失を恥じて自らの非をつくろおうとするものがあり、事実をはっきりさせようとして取り調べを行なうやり方に、すべてで水・火・称・毒の四種類がある。水というのは、罪人と石とを繋いだ袋に入れてこれを深い水流に沈めてその真偽をしらべる。人が沈んで石が浮けば犯行があったとし、人が浮かんで石が沈めば隠していることはないとするのである。火というのは、鉄を焼き罪人をその上にすわらせ、さらに足でふませ、手のひらでなでさせ、その上で舌でなめさせる。無実であれば損傷することはなく、事実であれば傷をうける。気の弱いものは炎のはげしさに辛抱できないので、まだ開かない花を手にもたせ、これを散きながら炎の方に行かせる。無実であれば花は開き、事実であれば花は焦げる。称というのは、人と石と平均をとって秤にかけ、その軽重により証拠をしらべるのである。無実であれば人は下がり石があがり、事実であれば石が重く人が軽い。毒というのは、一匹の牝羊をつかいその右股を切りひらき、訴えられているものが食べる分量［の多少］に随い、これに毒薬をまぜて右股の中におく。事実であれば毒は効き目をあらわして死に、無実であれば毒はとまって蘇生する。この四種類のやり方をつぎつぎに行なって万一の誤審を防ぐ方法としている。(注二)

注

一　この一節は、玄奘の見聞に従ってインドの寛刑と立証法とを述べているわけである。この寛刑については、五世紀前半の法顕も「王治は刑斬を用いず、罪あるものはただその銭を罰とし、事の軽重に随う。復た悪逆を謀るといえども右手を截るに過ぎざるのみ」といい、八世紀前半の慧超も「五天の国法、枷棒牢獄あることなし。罪あるの者は軽重によりて銭を罰とし、亦刑戮なし」と述べている。また、六世紀後半のグプタ王朝末期には、国家の祝日や祭日には罪人を自由にしてやることもあったようで、戒日王 Harṣavardhana の誕生にあたって「長いよごれたあご髭で毛むくじゃらの顔をした、泥まみれの真っ黒な体をしている自由にされた無秩序な人なみが歩み去る」状況が描かれている［*The Harṣa-Carita of Bāṇa*. transl. by E.B. Cowell and F.W. Thomas, p.111］。これも寛刑の一証であろう。これはマウリヤ王朝のチャンドラグプタ王の厳刑やアショーカ王の寛刑［中村元：『インド古代史』上四九五ページ以下参照］に比しても大きな相違であり、厳刑を見なれた中国僧にとっては、驚くべきことであったろう。なお、玄奘のあげている処刑法は『マヌの法典』以来、インドで通常行なわれるものの一部である。次に玄奘の述べている裁判における立証法に正確に該当する条例は未詳であるが、古代の立証法に「秤誓は先ず秤に上り次に起誓して再び秤に上り前より軽ければその人の言が真なりと認められるものである。火誓は赫熱せる火の玉を一定距離の間持って歩み焼けざる時は清浄とせられるも

の。水誓とは一定時水に沈み得ること、毒誓とは一定の微毒を飲みて害なかりし時、聖水誓は聖水を飲みて二週間災害なき時、皆清浄なりと認めらるるが如き方法である。尚その他諸種の方法が用いられる」［中野義照：「法制思想」『東洋思潮』所収、七三ページ］というような方法があったとのことであり、玄奘の文と彼此照応しよう。なお Alberuni: *India.* II, pp. 158-60 にも似た記事が見えている。

一・三 敬礼[注一]

敬意を表わすやり方には、その方法に九等ある。[注二] 一は言葉をかけて慰問する。二は首を垂れて敬意を示す。三は手を高くあげてこまねく。四は合掌して平らに［普通の胸の高さに］こまねく。五は膝を屈して［腰をかがめ］行なう。六は膝を［地につけて］うずくまる。七は手も膝も地につけてうずくまる。八は五輪（五体、即ち両膝・両肱・前額）をともにかがめる。九は五体を地につける。およそこの九等の礼はただ一拝するだけで、[注三] ひざまずいて相手の徳を讃美する。およそこれを敬を尽くすという。遠ければ額を地につけ手を合わせて拝し、近ければ足を舐り踵をなでる。およそ言葉を出し命を受けるには、裳をからげて長跪（膝をつき腰をのばす）する。目上の者は拝を受けたならば必ず慰めの言葉をかけ、その項をなでてやったり、その背中を軽くたたいて、ねんごろな言葉で教訓をたれ、もって親密の情を示す。出家沙門は敬礼を受けてもただ善願を加えるだけで跪拝しているのを止めはしない。[注四] 自分が尊敬し仕えている人に随ってその人の周囲をまわりめぐることをよくやり、あるいはただ一回だけしたり、あるいはかさねて三回する。かねての願いで特別に頼むことのある場合、その回数は自分の心のままに行なう。[注五]

注

一 敬礼　インドにおける挨拶・敬礼は、元来、下級者が上級者に対して行なうべきものであり、例えば婆羅門が識らずに下級のカーストのものに対して挨拶をするがごときことあれば、かれは沐浴し身を浄めねばならないとさえ定められている。またその挨拶・敬礼のやり方も、種々のカーストにおいて異なり、「婆羅門は右手を耳の高さに前方にさし出し、刹帝利は胸の高さに、吠奢は腰の高さにする。戍陀羅は合わせた手を低くささえて身を前方に屈める」［*Āpastamba Dharmasūtra*］とされている。玄奘のここの記述はかれの見聞に従って種々の方法を総合して述べたものであろう。

二 その方法に九等ある　敬礼に玄奘のごとく細密に分類した例は他に見ない。『大智度論』第十には、「下中上の礼あり。下とは揖、中とは跪、上とは稽首なり。頭面礼足は上供養なり」とし、他書に見えるものもこの程度の分類である。

三 この九等の礼はただ一拝するだけで　中国においては三拝・九拝などの風習があるが、インドにおいては一拝するのが法である。『寄帰伝』第三師資之道の項に、「慇懃に敬を致さばかくのごとく三たびに至るも、必ずや尋常には一礼にしてすなわちやみ、中間に更に立つの義なし。西国の人は三拝をなすを見なば人みな之を怪しまん」と、両国風習の差を述べている。

四 出家沙門は……止めはしない　法臘（戒を受けて比丘・比丘尼となってからの年数）の上下間の敬礼について、玄奘は上臘が下臘に「ただ善願を加えるのみ」と述べている。善願という言葉は聴きなれないものであるが、おそらく「よく……ならんことを願う」の意の呪願の言であろう。『寄帰伝』第三礼不相扶の条に「小なるものは大なるものを見ば、おもむろに須く敬を伸べ、畔睇（Skt. *vande*, また和南 *vandana* ともいう、「敬礼」の意）を唱えて之を礼すべし。大なるものは小なるものの礼を受けなば、自ら端拱して痾嚕祇（原注　近也切→ °g'ia, 是れ彼に病なからしむるを呪願する意のみ）。（Skt. *ārogya*「無病長寿」の意）という。もしそれいわざれば、彼此愆を招かん」とあるこの情景にあたろう。

五 自分が尊敬し……行なう　経にいう「右遶三匝」という行為である。インドにおける致敬の一方法で、通常は仏または塔などに向かいまず礼

をしてから行なうものであるが、王または特に敬意をもっている人に対しても時に行なうことがある。行道・旋右ともいう。『寄帰伝』第三旋右観時の項に、「旋右というは、梵に鉢喇特欲拏 *pradakṣina* という」とあるもので、受礼者の右辺、すなわち礼者の左方からはじめて受礼者の周囲を旋回する礼である。

一・三　療病と葬儀　さて病気にかかると七日間絶食する。この期間のうちに治癒してしまうことが多い。(注一) どうにもなおらないときに始めて薬をのむ。薬の性質・種類・名称は(注二)［中国とは］同じでなく、医者の技術・診断法にも違いがある。

死没して喪に服することとなると、声をあげてみな泣き、裳を裂き髪をむしり、額を打ち胸をたたいて［悲しむ］。喪服の制度は耳にしたことはなく、服喪の期間もきまった日数とてない。(注三) 死者を送り葬儀を行なうには、そのやり方に三種ある。一を火葬といい、薪を積んで焼く。二を水葬といい、流れに沈めて水に散らしてしまう。三を野葬という。林に棄てて獣に食わせるのである。(注四)

国王の崩御にあたっては、それに先だち後継者を立てて、(注五) 葬儀を主宰させ、［序列の］上下を定める。生まれたときに徳号がつけてあるから、死没にあたり謚号を議することはない。不幸のあった家へ、人は食事に行くことはないが、葬儀のすんだあとは、普段と同じく諱むところはない。死者を葬送した人々は不浄であると考え、みなかこいの外で沐浴してから中へ入る。(注六) 高年長寿で死期がまさに至ろうとするもの、大病にかかり生涯が終わりになることを恐れるもの、俗塵をいとい人間界を棄てることを願うもの、生死を軽んじ世間より遠ざかることを願うものなどは、故旧親友の人たちが音楽を奏し別れの会を催し、舟をうかべ殑伽河を渡り、中流で自ら水に溺れ死に天に生まれることができると思っている。(注七) ［このようなことは］十に一例はあるのことであるが、まだ実際には目にする機を得ていない。

出家した僧たちは制度として死者を泣き悲しむというものはなく、父母の死にあえば心に思い浮かべては恩に酬いんことを思い、葬儀を丁重にすることはまことに冥福の一助となることである。(注八)

注

一　病気にかかると……多い　病気の原因の一つに多食が考えられているから、治療法の第一に断食が普通に行なわれている。『寄帰伝』第三進薬方法の条に、「凡そ病源を候うには、旦朝自ら察せよ。もし四候乖舛（四大の違和）を覚えなば、即ち絶粒を以て先となす。たとえ大いに渇するも漿水を進むことなかれ。斯れその極禁なり。或いは一日二日、或いは四朝五朝、差ゆるを以て期となせ。義に膠柱なし（絶対誤りはない）」と述べているのも同断であろう。

二　薬の性質・種類・名称　医薬の種類・処法等に関する概略は前注『寄帰伝』の後文にも見えているが、なお詳細には義浄訳『根本説一切有部毘奈耶薬事』を参照。

三　喪服の制度……ない　玄奘は喪制に一定のものはないと記しているが、マヌ以下の婆羅門の法典には規定がある。中野義照：『法制思想』三八ページ「浄潔法」によれば、「人死すれば先づ郊外に火葬場を設け、死者を浄めて運び出し荼毘に附する。それより近親は十日間喪に服する、十一日目又は十三日十五日目に拾骨式即ち埋葬式をするが、埋葬式までが不浄である。逝いた霊位からすれば一年間は一霊祭（Ekoddiṣṭa）を受け、後合霊（Sapiṇḍikaraṇa）に依って祖霊位に昇る。近親でない者の死又は小児の死する時、只葬場に列した場合の如きは一日乃至三日の後に浄められる。服喪者の戒は塩断ちすること肉食しないこと交接しないことである。忌が明けた時に誦ずる聖典も定まっている。以上は婆羅門族に対する規定であるが、刹帝利族は十二日、吠舎族は十五日、首陀羅族は一月間不浄である。政務上王は喪に服することがない。また王の清浄を欲する人々、宗教上の誓戒に従事している者にも不浄は存しない」

とのことである。

四 死者を送り……ある 火葬・水葬・野葬（林葬・棄葬もこれと同法であろう）のほか土葬もある『四分律行事鈔』巻下」。しかし、「火葬最も広く行われ法典家庭経の儀軌は皆火葬を型とする」［中野義照：同上書、三八ページ］という。これらの葬法は今日といえども変わりはない。

五 国王の崩御……後継者を立てて インドの王家は多くの夫人と多くの子供があるのが普通であり、従って対外的にも対内的にも国王の崩御には種々の準備が必要であった。『カウティリヤ実利論』五・六を見るに、「王の崩御による不幸に対して、大臣は……崩御による損害の恐怖ある遙か以前に、王に愛せられ利益をなしたる者と議定して」さまざまの方策を立て、時には「副王に順次国治の重責を負わしめたる後に王の崩御を公宣すべきである」という秘密策まで考えていた。

六 死者を葬送……中へ入る 死亡による不浄は遠近の親族・死体に触れたもののみならず、同僚の学生にまでおよび、それぞれに定められた期間の後に潔斎する。その方法は「浄めらるべきものは、土および水により て浄めらる」と定められている『マヌの法典』第五章］。これは僧尼においてもほぼ同様で、『寄帰伝』第二尼衣喪制の条に「仏教によるに、苾芻亡くなれば決して死せるを観知し、当日興ぎて焼処に向かい、尋いで即ち火を以て之を焚く。……然る後無常を念じ住処に還帰し、寺外の池内に衣を連ねて並び浴す。それ池なき処は井に就き身を洗う。みな故衣を用いて新服を損せず。別に乾けるものを著て然る後房に帰り、地は牛糞をもって浄塗す」と具詳である。

七 高年長寿……思っている 殑伽河への入水往生の記事は、巻四の九「窣禄勤那国」、巻五の四「鉢邏耶伽国」の両条に詳細である。

八 出家した僧たち……である 義浄の『寄帰伝』第二尼衣喪制の条によれば当時の出家の葬儀服喪は度が過ぎたものがあった状を記し、続いて「理としては応にその亡きもののために浄く一房を飾り、或いは時に随って権に蓋幔を施し、読経念仏、具に香華を設くべし。亡魂をして善処に託生せしめんことを冀い、方めて孝子となり、始めて是れ恩に報いん」とあるべき姿を説いている。

一・四 行政と租税

政教も寛大であり、機構も亦簡単である。(注一) 戸籍は書冊に書くこともなく、人民に労役を課することもない。王領内の田を大きく四つに分類する。一は国費と祭祀の費用に充てられる。二は輔佐の役の大臣たちを封ずる。三は聡明な大学者や才能ある人々に賞とする。四は供養をする田とし、もろもろの宗教の人たちに布施をするものである。(注二) 徴税は薄く労役は少ないので、人々は仕事に安んじ割当ての田を小作する。王の田を借りると、六にその一（六分の一）を税として納める。(注三) 商人は利を逐って往来し貿易をする。港や道路の税関で軽い税金を払って通る。(注四) 国家の事業には人民の労役を只働きさせず、その仕事のでき具合で賃金を報酬としている。兵役や出征、御殿の営造などには、仕事の量を計り人を募集し懸賞を出して人を遇する。輔佐の大臣や上下の百官たちは、それぞれ分けられた土地を所有しその封禄で生活している。

注

一 政教も……簡単である 古代における行政組織は『マヌの法典』七・一一三「王国統治に関しては、常に以下の諸規則を守るべし」以下に詳細に規定してある。なお、諸種の法典を総合したインドの行政組織は中野義照：『法制思想』五五ページ以下に要を得た説明が見える。五世紀初葉の法顕も、「人民殷楽し戸籍の官法なく、唯王の地を耕すもののみ乃ち地の利を輸す。去らんと欲すれば便ち去り、住まらんと欲すれば便ち住まる」と玄奘と同様の口吻でのべている。

二 王領内の田を……ある 玄奘訪印時のハルシャ王の収税と支出については、玄奘の記録以上には知り得ないようである［R.K.Mookerji: *Harsha*, p.102］。『カウティリヤ実利論』二・六の支出の条には、「天神祖霊への供養・布施物・祝祭費・内宮費・大膳寮費・使臣の経費・糧食庫・武器

庫・商品庫・資料庫・製造工場・賦役・歩騎車象［四］兵の維持・牧牝・家畜鳥類食獣の保護所・薪及び秣の貯蔵庫」と詳細に具体的内容が挙げてある。学識者の保護については『マヌの法典』七・一三五参照。玄奘の記事は王治の寛大に重点をおいたものと見るべきであろう。

三 徴税は……納める　徴税については、『マヌの法典』七・一二八に「王は彼自ら、及び働く者も共に、適正なる報酬を受くる様適当に熟慮し、常にその王国内に於て租税を査定すべし」、七・一二九「蛭、犢、蜜蜂がその食物を漸次に摂取するが如く、王もその王国より適度の年賦を徴収すべきなり」、七・一三〇「家畜及び金は、その利得の五十分の一を、又穀物はその収獲の八分の一、六分の一、或は十二分の一を王は徴収すべし」、七・一三一「更に王は木、肉、蜜、酥油、香料、薬草、食物の調味料、花、根、及び果実の六分の一は徴収すべし」、七・一三二「葉、野菜、草、籐の製品、皮革、土器、石にて造られたるすべての物品も同様なり」と詳細に規定している。

四 商人は……税金を払って通る　『カウティリヤ実利論』二・二二「税関下にある取引とは、外国に対すると国内に於けるとの交換である。輸出に対しても輸入に対しても関税がかかるのである」、二・二一「税関長官は大門の傍に税関及び国旗を東面又は北面して建てしむべきである」、「四人又は五人の関税徴集者は隊商をなして到着せる商人に言う、汝等は誰人であるか、何処より来たれるか、幾何の商品を有するや、何処にて認知又は捺印を受けたるやと」、「商人は国旗の下に置かれた商品の量と価格とを言う、これこれの量でこれこれの価格であるが、誰かこの商品を買うやと。三度び述べたる時に、そを欲する人に売り与える。買い手の中に競争がある時は、その価格の増加と関税とは王庫に入る」。

一・一五 物産[注一]　風土が違えば地の利もまた殊なり、花・草・果・木など種類もさまざまで名称も異なっている。いわゆる菴没羅果[注二]・菴弭羅果[注三]・末杜迦果[注四]・跋達羅果[注五]・劫比他果[注六]・阿末羅果[注七]・鎮杜迦果[注八]・烏曇跋羅果[注九]・茂遮果[注一〇]・那利薊羅果[注一一]・般椓娑果[注一二]などこういう種類のものは詳しくは記載し難いほどであるが、世に珍しがられているものはここにはほぼ挙げた。棗・栗・椑・柿は印度に「あるとは」聞いたことがなく、梨・柰・桃・杏・葡萄などの果実は迦湿弥羅国よりこちら（北方）では往々まれに植えており、石榴・甘橘などはいずれの国でもみな樹えている。

田をつくる野良仕事、植え付け・刈り入れ、耕し・草取り、種まき・植樹などの作業はその時節に随って行ない、各自の働きに応ずるが、土地から採れるものは稲や麦がもっとも多い。蔬菜類には薑・芥・瓜・瓠・葷陀菜[注一四]などあり、葱・蒜は少ないけれども食べるものも多くはなく、家にこれを食べるものがあると「香を嫌い[注一六]」町の囲いから追い出してしまう。乳酪・膏酥[注一五]・砂糖・石蜜・芥子油[注一七]・いろいろな餅麨[注一八]は普段食膳に供するものである。

魚・羊・麞・鹿は時には切り身にしてすすめるが、牛・驢馬・象・馬・豕・犬・狐・狼・師子（獅子）・猴猨など、およそこの毛のはえた生きものは口にするものがないのが普通であり、口にするものは鄙しめられて人々に穢れたものとして嫌われ、町の外に去って住まい、人中に出ることは稀である。[注一九]

さて酒類には種々あり、味わいも違っている。[注二〇]葡萄や甘蔗「から造った酒」は刹帝利が飲むものである。麴蘖を使った醸造酒は吠奢たちが飲むものである。沙門や婆羅門は葡萄や甘蔗の漿を飲むが、これは酒類というものではない。雑姓の卑しいやからは「その飲みものに」区別するところはない。しかし、その使う器には細工材質の差があり、常用の器具は必要に随い不足はない。釜・鑊は使用するが甑を使うことは知らない。食器は土器を多く使い、赤銅のものも少し使用する。[注二一]食事は一つの器でいろいろな調味料をまぜて、手の指で塩梅して、[注二二]まず匙や箸を使うことはなく、老人や病人だけが銅の匙を使う。

金・銀・鍮石・白玉(注三四)・火珠(注三五)などは、この土地の産物として非常に多い。珍しいもの・さまざまな宝は種類もいろいろで名称も異なり、海のはてからとれるものも交換し貿易しようとするが、その商品の有無を交流させるには金銭・銀銭・真珠・小珠をつかう(注三六)。

印度の土地の境界は大体示し、風土の差異はおおむねこんなことである。その共通点をほぼ述べたわけであり、政治を異にし風俗を殊にする点はその国ごとに説明しよう。

注

一 物産 本項の物産・食品の全般については、Balfour, E.: *The Cyclopaedia of India and of Eastern and Southern Asia. Commercial, Industrial and Scientific; Products of the Mineral, Vegetable and Animal Kingdoms, Useful Arts and Manufactures*, 3Vols.; Watt, G.: *The Commercial Products of India*, being an *Abridgement of "The Dictionary of the Economic Products of India"* などが有用である。

二 菴没羅果 菴没羅 ₒ*ʾâm-muət*ₒ-ₒ*lâ*: Skt. *āmra*; Pa. *amba*; Pkt. *aṁba* [Turner: *C. D.*, no. 1268]、南洋の果実の中で最も有名なものの一つであるマンゴー (Portugese *manga* ＜Tamil *mān-gāy*) [*Hobson-Jobson*, 553b]。また菴羅・菴摩羅・菴婆羅・阿摩勒などと書かれる。『玄応音義』巻八「菴羅 或いは菴婆羅という、果名なり。案ずるに此の果は花多くて結子甚だ少なし。其の葉柳に似て長さ一尺余、広さ三指ばかり、果形は梨に似て底は鉤曲す。彼の国に名づけて王樹となす、謂うこころは王城に之を種うればなり。経中の生熟知り難きものとは即ち此れなり。旧訳に柰というはまさに誤りなるべし。正しくは菴没羅という。これ菴没羅女園をもって仏に施せしもの、因って以て名とす」とある。

三 菴弭羅果 菴弭羅 ₒ*ʾâm*-°*mjię*-ₒ*lâ*: Skt. *amla*; Pa. *ambila*; Pkt. *aṁbila* [Turner: *C. D.*, no. 579; cf. B. Laufer: *Sino-Iranica*, p.581; *Hobson-Jobson*, p.894]. タマリンド、酸性飲料をとる果実。

四 末杜迦果 末杜迦 *muât*ₒ-°*d'uo*-ₒ*ka*: Skt. *madhūka*, 学名 Bassia latifolia は、その花・花実より酒を作る [Turner: *C.D.*, no. 9801]。『玄応音義』第二五に「末度迦果 旧に摩頭という。これに美果という」とあるもの。Skt. *madhuka* は「甘草」であり、当たらない。

五 跋達羅果 跋達羅 *b'uât*ₒ-*d'ât*ₒ-ₒ*lâ*: Skt. *badara*, 学名 Zizyphus jujuba, なつめの一種で食用果実。酸棗と漢訳する。

六 劫比他果 劫比他 *kịɒp*ₒ-°*pji*-ₒ*t'â*: Skt. *kapittha*, 学名 Feronia elephantum, この樹の果実で、wood-apple とよぶものこと [Turner: *C.D.*, no. 2749]。また劫彼陀・劫畢他。

七 阿末羅果 阿末羅 ₒ*ʾâ-muât*ₒ-ₒ*lâ*: Skt. *āmalaka*, 学名 Emblica myrobalan, or Emblica Officinalis, or Phyllanthus emblica.『玄応音義』第二一に「阿末羅 其の葉は小棗に似て花も亦白く小に、果は胡桃の如し。其の味は酸にして且つ甜く、薬分に入るべし。経中に掌中に観る如し(原文のまま、或いは掌中観音の誤りか)と言うものなり」、『有部毘奈耶雑事』第一に「余甘子は広州に出づ。髮を沐うに堪う。西方に菴摩洛迦果と名づく」、「梵に菴摩洛迦と言い、此に余甘子という。……是れ掌中観音なり」とある。既出の菴没羅果とは別のものであるが、中国ではよく混同されていたようである。

八 鎮杜迦果 鎮杜迦 *ṭịĕn*°-°*d'uo*-ₒ*ka*: Skt. *tinduka*, **tēnduka*; Pa. *tinduka*; Pkt. *tiṁduya*, *teṁdu*; Hindī *ṭiṇḍā*; Panjabī *ṭendu*, *teṁḍua*. 学名 Diospyros embryopteris, また丁士迦とも書く。この樹の果実である。『梵語雑名』に「柿 底孕覩迦」、*Mvy*. no. 6210 に「tinduka 柿木」、『本草綱目』第三〇の柿の項にも「胡に鎮頭迦と名づく」と、共に「柿」と訳すのは『慧琳音義』第二〇の「状この方の柿子の類に同じ」とある形状の相似より混同したもので、玄奘の以下の記述より見て誤りというべきであろう。この樹は樹幹は船材・建築用材とし、果実は粘質の果汁を含むため船の塗料・漁網の浸液にも用いるという。

九 烏曇跋羅果 烏曇跋羅 ₒ*ʾuo*-ₒ*d'âm-b'uât*ₒ-ₒ*la*: Skt. Pa. *udumbara*; Pkt. *uduṁbara* [Turner: *C. D.*, no. 1942], 学名 Ficus glomerata. また優頭跋羅・烏暫婆羅、或いは優曇鉢・優曇などに作り、瑞応・霊瑞などと訳す。『玄応音義』第二一に「烏曇跋羅花 旧に優曇波羅花といい、或いは優曇婆羅花に作る。此の葉は梨に似て、果の大きさ拳の如く、その味甘し。花なくして子を結ぶ。亦花あれども値い難きが故に、経中に希有

なるものに喩う」とある。果実は食べられるがあまり美味ではないという。

一〇　茂遮果　茂遮 *məu°-˳tśi̯a*: Skt. Pa. *mōca*; Pkt. *mōā* [Turner: *C.D.*, no. 10348], 学名 Musa sapientum. バナナである [*Hobson-Jobson*, p.56, 715]。

一一　那利蓟羅果　那利蓟羅 *˳nâ-lji°-kiei°-˳lâ*: Skt. *nārikēla*, BHSkt. *nārikēla* [Turner: *C.D.*, no. 7075], 椰子の実。巻十の五「迦摩縷波国」・一の項には那羅雞羅果と書く。

一二　般橠娑果　般橠娑 *˳puân-°nâ-˳sâ*: Skt. *panasa*. 学名 Artocarpus integrifolia. パンの木の実。形状などについては巻十の四「奔那伐弾那国」・一の項に詳しく記されている。

一三　梨・桃　巻四の二「至那僕底国」・二の条に「此の境より已往、諸印度におよぶまで土に梨・桃なし、質子の植うるところ」と、もと中国より伝来したものとする話をのせる。

一四　莙陀菜　或いは Kaṇḍu ? [Beal: *Records*, I, p.88] とし、或いは Kunda (properly the olibanum tree) [Watters: *On Y. Ch.*, I, p.178] とするが如何であろうか。『慧琳音義』第八二（西域記の条）に「莙陀菜　即ち人間の軍達菜なり」とあるが、「軍達菜」という語も未詳である。野菜として食用に供するもので、かつこの音声に近いものに Kumuda(蓮華)があり、古く Caraka Saṃhitā より見える [Prakash: *Food and Drinks in Ancient India*, p.150, 275] が、これを中国で「軍達菜」といった話も聞かない。何れにしても不明、後考を俟つ次第である。B.Laufer: *Sino-Iranica*, p. 304 参照。

一五　乳酪・膏酥　ミルク・乳製品（バターの類）。インド人はヴェーダ時代より牛・水牛・山羊の乳を飲用していた。鮮乳・煮沸した乳・クリーム・凝乳・バター等の乳製品は多数ある。特にバターの一種ギー ghee (<Skt. *ghṛta*) は日常必需品である。ここの膏酥は恐らくこれを指そう [O. Prakash: *Food and Drinks*, p. 12 ff. (Dairy Products) の各条を参照]。

一六　砂糖・石蜜　砂糖きびから作られるものを一般に Skt. *śarkarā* とよび、甘味料として広範囲に使用されていた。玄奘訪印時の *Harṣa-carita* には、*pāṭala śarkarā*（赤砂糖）・*karka śarkarā*（白砂糖）の二種が見えている。石蜜という漢語には、糖霜（白砂糖の凝結したもの、氷砂糖）と蜂糖の二義がある。ビール、ワッターズ両氏ともに sugar candy 即ち氷砂糖の意に解している。蜂蜜はインドでは古代より使用され、食用にも祭祀用にも供されたことが文献に見えているが、砂糖の普及につれ次第に使用は範囲が狭まってきた。一方、氷砂糖（Skt. *matsyaṇḍikā*）も使用され、ギリシア人の眼にはアラビア砂糖よりも上等に映じたようである [Pliny: *N. H.*, Mc Crindle, p. 122; Megasthenes, X; Strabo XV. 703]。ここはやはり氷砂糖と解すべきであろう。

一七　芥子油　からしの実をしぼって作った油、Skt. *sarṣapa-taila* (*Mvy.* no. 5786 には Kaṭuka-taila)。『寄帰伝』第一受斎赴請の条に「然れども子に黒白あり、比来訳して芥子となす。油を圧して食に充つ、諸国咸く然り。其の菜は之を食すれば味は神州の蔓菁と別なし。其の根は堅鞕にして復蔓菁と同じからず。結実は粒麤にして復芥子に非ず。其れ猶お枳橘の地に因りて形を遷すがごときか」とある。揚げ物の用に一般にとって古来必需品となっている。

一八　餅麨　小麦粉で作った乾燥食品。麨はむぎこがしのこと。玄奘はインドの概括的記述をしているが、義浄は『寄帰伝』第一受斎赴請の条に「あらゆる噉嚼は奇巧一にあらず。北方は麺に足り、西辺は麨に豊む。摩揭陀国は麺少なく米多し。南裔・東垂は摩揭陀と一類なり」と区分し詳細である。今日最も普通に作られるパンのような小麦色の大きい厚みのある chapāthi と、薄手の phulkā は玄奘の記述にあたろう。

一九　この食料品に関する一段については、すでに上注に引用してきた義浄の『南海寄帰内法伝』第一の受斎赴請の条に、他になお参考となる資料を含んでいるが、今は省略する。参照されたい。

二〇　およそ……ある　ここにあげてある屠殺および漁を職とするものは、いわゆる「雑種族」であり、『マヌの法典』第十章に詳細にその種類をあげ、かれらの「住居は村の外たるべし」（五一）、「彼等は夜、村をも町中をも歩くべからず」（五四）、「昼は、彼等の仕事のために、王の命令による標識を付けて歩くべし」（五五）と規定されている人々である。

二一　酒類には……いる　この時代（グプタ王朝期）には、酒類は非常に好まれ、男子のみならず婦人も飲用していた。五世紀初頭の法顕は中インドの風俗を記し、「国を挙げての人民は悉く殺生をせず、飲酒せず、葱

蒜を食わず。唯旃荼羅を除く」としているのは信じ難い記述である。

二二 食器は……使用する　すべて器具類については、金持ちは金銀器を、中流はそれ以外の金属器を、貧民は土器を使用するのが普通であった〔O. Prakash: *ibid.,* p.190〕。『寄帰伝』第一の受斎赴請の条には、木の葉を縫い合わせたものを飯器とすることを記している。

二三 食事は……塩梅して　食事のしかたについては『寄帰伝』第一の受斎赴請の条に、「次に乾した秔の飯と濃い豆の羹を授く。澆ぐに熱酥(熱いバター・ミルク・ギー ghee の類)を以てし、手もて攪して和せしめ、これに助味を投ず。食するには右手を用い、纔に半腹なるべし。まさに餅果を行ない、後乳酪および砂糖をもってす。渇すれば冷水を飲み、冬夏を問うなし。これ衆僧の常食にして、并に斎供を設くるも大略みなしかり」とある。なお当時の食事作法の詳細については Prakash: *ibid.,* pp. 190 ff. 参照。

二四 白玉　仏典に見える白珂(白瑪瑙)のことであろうか。

二五 火珠　水晶のことであろう。『唐書』南蛮伝に「婆利は 環王の 東南にあたり火珠多し。大なるものは雞卵の如く、円白にして数尺を照らす。日中に艾を以て珠に藉けば、輒ち火出づ」とある。

二六 商品の交換には古くは牛・米等を用いたが、西紀後一世紀ごろのローマとの通商には、Plinius (XXXIV 17) によれば、「インドには銅も錫もなく、自分達の宝石や真珠とこれらとを交換」したようである。しかし、実際は、金銀銅の産出は古くより豊富で、今日も紀元前三世紀以後のマウリヤ王朝のいわゆる Punch-marked Coins が多量に発見されるが、インド本土での鋳造法にあまり進展がなく好い品がないため、ローマ貨幣が大量にインドに導入されたようで、この傾向は特に西北インドで顕著であったようである〔B. Walker: *Hindu World,* 'Numismatics'; E.J. Rapson: *C. H. I.,* (Ind. Ed.) pp. 192 ff.; B. Srivastava: *Trade and Commerce in Ancient India.* pp. 156 ff.; 村川堅太郎訳・『エリュトゥラー海案内記』・秀村欣二「ローマ帝国とインド」『古代史講座』一三所収等の諸論著参照〕。なお、貝珠は「子安貝」。小珠とは真珠を指すものであろうか。

北印度

二　濫波国（北印度の境(注一)）

濫波国は周囲が千余里あり、北は雪山を背にし、三方は黒嶺を境としている。(注二) 国の大都城は周囲十余里ある。(注三) ここ数百年、王族は嗣を絶ち、豪傑が競いあっていて大君主はなかった。近ごろになって迦畢試国に隷属したのである。〔土地は〕粳稲によく甘蔗が多い。林樹は多いけれども、果実は意外に少ない。気候は次第に温かく、霜は少なく雪はない。国ぶりは物が豊かに民は楽しみ、人々は歌を唱うことが好きである。性格は臆病で心は詐をいだき、お互いに欺し誚り、相手を第一に推すということをしない。顔貌はいやしく小さく、動作は落ちつきがない。多くは白い氈を衣るが、その身につけるものは鮮やかに飾っている。伽藍は十余ヵ所で、僧徒は少なく、みな大乗の教えを学習している。天祠は数十で、異道が甚だ多い。

これより東南に行くこと百余里、大嶺を踰え大河を済り、那揭羅曷国（原注　北印度の境）に至る。

注

一　北印度の境　個別的な地理的記事としてはこの濫波国の条から北インドに入る。玄奘の言う「北印度」は巻四の五「設多図盧国」までの境域である。この北インドのうち、インダス河以西を「西北インド」と呼ぶ。インド的風土とはいうが、昔も今も言語風俗ともに特殊な趣を存する民族が居るので有名である。玄奘も、巻三の八「曷邏闍補羅国」の条に

「濫波国より此の土に至るまでは、形貌は麁弊に情性は猥暴、語言は庸鄙に礼儀は軽薄、印度の正境に非ずして乃ち辺裔の曲俗なり」とし、また『慈恩伝』巻二「礫迦国」の条にも「濫波より此の土に至るまでは、その俗既に辺荒に住めば、儀服語言稍々印度に殊なり鄙薄の風あり」と述べている。アフガニスタンの迦畢試国の山岳地帯を過ぎ濫波国の平地に入ると、気候風土産物も一変する。古くアレクサンドロス大王も当地でインド攻略の陣容を再編成し幸先を神に祈り、バーブル帝もここを「新世界の入口」と称しているほど別世界の観を呈している。

二　濫波国は……いる　濫波 *lâm°-°puâ* はまた藍婆・覧波・嵐婆とも書く。ギリシア文献には Lampatai, Lampāgai [Ptolemy, vii. 1. § 42 (W. Smith: *Dictionary of Greek and Roman Geography*, II, p.118)], Lambatai [McCrindle: *Ancient India as described by Ptolemy*, p. 104, 106] とある。今の Langhān (or Laghmān) 地方に当てられる。Skt. *lampāka*, *lampaṭa* [M. Williams: *S.-E.Dict.*, 897a] とされるが、またインド語に非ずという説 [T. Watters: *On Y. Ch.*, I, p.181] もある。国名の起源に関する説話については望月:『仏教大辞典』四九五八ページ参照。なお、八世紀の慧超のころには「また此の建駄羅国より西行、山に入ること七日にして、覧波国に至る。此の国は王なく大首領あり、亦建駄羅国の所管に属す。衣著言音は建駄羅国と相似たり。亦寺あり僧あり、三宝を敬信し大乗の法を行なう」と、突厥侵入後の状況を記している。

三　国の大都城は……ある　濫波国の首都が何所にあったかは分かっていない。あるいはカーブルの東南十キロの Logar 河畔にあるベグラーム（首都とか都市とかとの意）ではなかろうかといわれる［水野清一:「ヒンドゥ・クシュ南北の仏教遺跡」『文明の十字路』一三四ページ］。

三　那掲羅曷国（北印度の境）

三・一　概観

那掲羅曷国は東西六百余里、南北二百五、六十里あり、山が四辺を周り、嶮岨な山にへだてられている。[注一] 国の大都城は周囲が二十余里ある。[注二] 命令する大君主はなく、迦畢試国に隷属している。穀物が豊かに花や果が多い。気候は暑熱に、風俗は質実である。勇猛果敢で、財貨を軽んじ学を好む。仏法を篤く敬い、異道を信ずるものは少ない。伽藍は多いけれども、僧徒は僅かである。もろもろの窣堵波は荒れはてて壊れている。[注三] 天祠は五ヵ所、異道のもの百余人である。

注

一　那掲羅曷国は……いる　那掲羅曷 *°nâ-g'i̯ɒt°-°lâ-γât°* の曷は『慈恩伝』には喝 *χât°* に作るが、喝を是としよう。諸書に梵名 *nagarahāra* としているが、いま *nagarahar*[*a*] をとりたい。その故は、六世紀の『宋雲行紀』に那迦羅訶に作り、十世紀には *ninhar* (*ningrahar*, *nungnihar* の転訛) に作り [Minorsky: *H.-'Ā.*, p.91, 252]、十一世紀には *nagarkoṭ* [Sachau: *Alberuni's India*, II, p. 11] に作っているからである。なお『法顕伝』には那竭に作る。現在のジェララバード Jelālābād を中心とするカーブル河流域南部の地に当たろう。この地域は遺跡が豊富にあるので著名である。[Cunningham: A. G. *I.*, p.51, 674; B.C. Law: *H. G. I.*, p.112; 水野:「仏教遺跡」『文明の十字路』一三三ページ; 樋口:「バクトリヤよりタキシラまで」九九ページ以下参照]。

二　国の大都城は……ある　東流するカーブル河の南岸にあるジェララバード市の西南 Chahār-bāgh に近い Dasht-i-Begrām と呼ばれているところに比定されている。『慈恩伝』には燃燈仏伝説に因み「燃燈城」Dipavatī と呼んでいる。

三　伽藍は……壊れている　遺跡は今のジェララバード市より約八キロの南方および西方、カーブル河の南岸に多く、いずれも相当の規模であり位置も接近しているから、その比定は困難である［樋口:同上書、九九ページ;J. Barthoux: *Les Fouilles de Hadda*, I, pp. 1-12］。ジェララバード近辺の塔でマッソンにより調査され記録されているものは三十七の多数にのぼる。その中、発掘の成果が大であったものはハッダにあるも

のであった［Masson : *Ariana Antiqua*, p.109］。

三・二　燃燈仏の遺跡

城の東方二里(注一)のところに窣堵波の三百余尺のものがある。無憂王（阿輸迦王）が建てたものである。石を畳んで非常に高く、彫刻をしてりっぱに作ってある。(注二)［むかし］釈迦菩薩が然燈仏にお会いしたとき、鹿皮の衣を地に敷き、髪の毛を敷きひろげて［然燈仏の通路の］泥を掩い、受記（未来に仏となるという豫言）を得たところである。(注三)日月は［すでに］壊劫(注四)の長きを経たけれども、この遺跡は滅びることはなかった。時には斎日にあたり天より種々の花を雨とふらし、群衆は心よりきそって供養を行なうこともある。その西の伽藍には少しく僧徒が居る。その南の小さな窣堵波はむかし［釈迦が髪の毛で］泥を掩った地であり、無憂王が大通りを避けて側に建てたものである。


燃燈仏受記の説話，ショトラク出土の浮彫

城内に大きな窣堵波の基礎の跡がある。これを先達たちの話に聞けば、むかしは仏の歯が収納されていて高くもあり広くもありりっぱなものであった、ということである。(注五)今はすでに歯はなく唯基礎の跡が残っているだけである。その側に窣堵波の高さ三十余尺のものがある。人々の言い伝えによれば何時のころからとも知らないとのことで、空から下りてきてここに高く基礎したという。人間の造ったものとも思われず、まことに霊瑞が多い。

城の西南十余里に窣堵波がある。［むかし］如来が中印度から虚空を凌いで遊行教化し、この国に遺跡をのこした。人々はそのあとを慕ってこのありがたい塔を建てたのである。その東、遠からざるところに窣堵波がある。釈迦菩薩がむかし然燈仏にお会いし、ここで花を買っ［て然燈仏に供養し］たところである。(注六)

注

一　城の東方二里　「東」は『慈恩伝』に「東南」に作る。「二里」は宋本に「三里」に作る。

二　無憂王……作ってある　この塔と思われるものは、ジェララバードの「旧都の東方に Ahin-Pōsh という巨大な半球状の塔があり、アソカの法王塔を思わせる。一八七九年シンプソンが発掘し、舎利容器の中から初期クシャナ貨幣と共にドミチヤヌスやトラヤヌスの貨幣を出したので、後二世紀に改造されたことが判る。しかしそのインド初期の塔形や断崖上の位置や大きさ、周七五米の基底をもつドーム等を見てもその重要さがわかる」［樋口：同上書、一〇〇ページ］とあるものであろうか。この塔の発掘については、Wm. Simpson の貴重な報告が *Transaction of the Royal Institute of British Architects*, pp. 37-64 に見える。

三　釈迦菩薩が……ところである　然燈仏 Skt. *dīpaṃkara* はまた燃燈・定光・錠光とも書き、過去に出現したある仏の称号である［『増一阿含経』第一三、『四分律』第三一、『修行本起経』上］。釈迦がその前身の儒童であったとき然燈仏に遇い、一婆羅門女より五茎の蓮華を購入して然燈仏に供養し、自らの髪の毛で泥土を掩い通路とした。然燈仏は「汝、来世

において成道して釈迦牟尼仏となり、普く衆生を救うべし」と受記（豫言）した伝説は、仏教彫刻の好題材として古くはサーンチーの塔門に図出されて以来、ことにガンダーラ彫刻に頻見するものである。

四　壊劫　インドの時間区分法。一世界の成立から次の世界が成立するまでの大きな時間を、成・住・壊・空の四劫 kalpa の等量時間に分かつ。壊劫はこの第三期、世界の破壊に向かう時期である。

五　城内に大きな……跡が残っているだけである　『法顕伝』に「城中に亦仏歯の塔あり、供養すること頂骨の法の如し」とあるを見れば、法顕の往訪時にはなお存していたものとみえる。なお『法顕伝』には、このほかに錫杖精舎、僧伽梨精舎等が存したことを記している。いまはみな何れの故址とも比定できない。

六　釈迦菩薩がむかし……である　注三参照。

三・三　仏影窟　城の西南二十余里で小さな岩山に至る。伽藍があり、高く何階にもなったお堂や楼閣は石を積んで造ってある。庭や建物はひっそりとし、絶えて僧侶はいない。その中に窣堵波の高さ二百余尺のものがある。無憂王が建てたものである。

伽藍の西南には深い谷川が峻しく、滝のしぶきは飛び散り、切り立った崖は壁のようである。東の崖の石壁に大きな洞穴がある。瞿波羅竜の住処（注一）である。入り口の道は狭く小さく、洞窟の中は真っ暗で、崖の石には水がしたたり、細い道に流れを造っている。その昔、仏の形影があり、はっきりとして本当の容姿のようで、仏の相好をことごとく具え、儼然として目前に居られるようであった。（注二）近ごろになってからは、人は誰でも見たてまつるとは限らず、よしんば見たてまつるとしてもぼんやりとしているだけであった。心をこめて祈ると、仏の加護を受けるものは、暫くの間は明瞭に見えるがやはり永くはできなくなった。むかし如来がこの世におられた時、この竜は牛飼いの男であり、王に牛乳をさし上げていたが、その奉り方がよろしきを失し、罪を獲て心に恨みをいだいた。そこで金銭をもって花を買い受記窣堵波を供養し、悪竜となり国を破り王を害しようと願った。そして石壁に向かって身を投じて死に、そのままこの洞窟に居ついて大竜王となった。そこで穴を出てもともとの悪願をやりとげようと思った。ちょうどこの心を起こしたとき、如来はこれを観察され、この国の人民が竜に害されるのを哀れに思われて、神通力をめぐらし中印度からやって来られた。竜は如来を見たてまつり、悪心はそのままおさまり不殺戒を受け、［そこで］正法を守護しようと願った。それで如来に、何時もこの洞窟に居られて諸のお弟子たちは常に私の供養を受けてくださるようにとお頼みした。如来は告げて言われるには、

「私はもうすぐこの世を去るであろうから汝のために我が影を留め、五人の羅漢に常に汝の供養を受けさせよう。たとえ正しい教えがこの世から隠れ無くなろうとも、このことはやめることのないように。汝がもし悪心が荒れ怒ったならば、私がここに留める影を観よ。そうすれば我が慈善の心により汝の悪心はおさまるであろう。賢劫のうちに出世される世尊方（注三）も汝を哀れみ、必ずやみな影像を留めらるべし」とのことであった。（注四）

注

一　瞿波羅竜の住処　瞿波羅 ∘g'iu-∘puâ-∘la: Skt. *gopāla* は已に梁・僧伽婆羅訳『孔雀王咒経』および『洛陽伽藍記』に見える語で、玄奘の新訳語ではない。牛飼いの義である。この洞窟の在り場所は、ジェララバードの「南方の絶壁に沿った Chahār-bāgh 村の南にあたる Syāh-sang（黒い石）の岩間までにあった筈である。ただし留影窟自体がどれかは、現在の地貌が侵蝕の為、凹凸甚しいのでわからないが、附近五〇〇米の範囲に、五六個の寺院と、それに倍する塔があって、この地が聖地であ

ったことを物語っている」[樋口：同上書、一〇〇ページ]。

二　その昔……あった　仏影窟のことは『法顕伝』に、「那竭城の南、半由延（yojana）にして石室あり、山を搏りて西南に向かう。仏、影をこの中に留む。去ること十余歩にして之を観れば仏の真形の如く、金色の相好は光明炳として著わる。転た近づけば転た微にして、髣髴として有るが如し。諸方の国王、工画師をして模写せしむるも能く及ぶなし。彼の国人伝えて言う。千仏尽くまさにここに影を留むべし」とあり、また『宋雲行紀』に「瞿波羅竜の窟に至り仏影を見る。山窟に入り、去ること十五歩、西南して戸に向かいて遙かに望めば、則ち衆相炳然たり。近づきて看れば則ち瞑然として見えず、手を以て之を摩すれば唯石壁有るのみ。漸漸に却き行けば始めてその相を見る。容顔挺特し、世の稀有とする所」と詳細である。

三　賢劫のうちに出世される世尊方　過去・現在・未来のうち、現在の住劫の間に千体の仏が出世されるといわれる。このため、現在の住劫を称讃して賢劫という。

四　仏が毒竜を降伏し、竜王の請により竜窟中に仏影を留めたという伝説は、東晋・仏陀跋陀羅訳『観仏三昧海経』七に出ている。

三・四　仏足石および仏塔

仏影窟の門の外に二つの四角の石がある。その一つの石の上に如来の足の裏の迹があり、輪相が微かに見えている。(注一) 光明が時に輝くことがある。仏影窟の左右に石室がたくさんある。みな如来のお弟子たちが入定(注二)したところである。仏影窟の西北隅に窣堵波がある。如来が経行(注三)されたところである。その側の窣堵波には如来の髪や爪がある。(注四) これに並んで遠くない所に窣堵波がある。如来が真実の教えを明瞭に述べられ、蘊界処(注五)を説明された所である。仏影窟の西方に大きな平らな石がある。如来がむかしその上で袈裟を洗濯されたところで、その文様のあとが微かに見える。(注六)

注

一　如来の足の裏の迹があり……見えている　巻一の六・二注三参照。

二　入定　禅定に入ること。禅定とは心身ともに静寂にして能く思惟観察することであり、いわゆる坐禅をすること。

三　経行　散策のこと。『寄帰伝』第三経行少病の条に「五天の地、道俗多く経行をなす。直ちに去り直ちに来たり、唯一路に遊うのみ。時に随い性に適わせ、閙がしき処に居ることなかれ。一は則ち病を痊し、二は能く食を消せばなり。……必ず若し能く此の事を行なえば、実に身を資け道を長ずべし。故に鷲山覚樹の下、鹿園王城の内、および余の聖跡みな世尊の経行の基あり」とある。

四　その側の……髪や爪がある　『法顕伝』に「影の西百歩ばかりに、仏の在時に髪を剃り爪を剪り、仏自ら諸弟子と共に塔を造る。高さ七、八丈、以て将来の塔法となす。今なお在り」とあり、『宋雲行紀』には「那竭城中に仏牙・仏髪あり、並びに宝函を作りて之を盛り、朝夕供養す」と城中にある旨を記すは本書に記すものと別物であろうか。

五　蘊界処　五蘊・十二処・十八界の「三科」を略して言ったもので、一切の存在の理法を把握説明する分類体系。五蘊とは Skt. *pañca skandha*「五つの集まり」の訳。肉体のような物質的現象の「色」と、精神作用の「受（感覚）・想（表象）・行（意志）・識（知識）」の五者によりあらゆる存在が成り立っていると説明する。十二処とは Skt. *dvādaśa-āyatanāni*「十二の感覚の領域」の訳。眼・耳・鼻・舌・身・意の「六根」と、色・声・香・味・触・法の「六境」とを合わせたもの。十八界とは Skt. *aṣṭādaśa-dhātava*「十八の成分」の訳。上の十二処のそれぞれを「界」(*dhātu*) とし、これに「眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識」の「六識」を加えたもの。

六　仏足石近辺の遺跡については『宋雲行紀』に他に見えない記事も見える。「窟前に方石あり、石上に仏跡あり。窟の西南百歩に仏の衣を浣ぎし処あり。窟の北一里に目連の窟あり。窟の北に山あり、山の下に六仏の手ずから作れる浮図あり、高さ十丈。この浮図、地に陥入せば仏法まさに滅ぶべしという。并びに七塔をつくる。七塔の南に石の銘あり。如来の手ずから書けるものという、胡字分明にして、今に識るべし」と。

三・五　醯羅城　城の東南方三十四里で醯羅城(注一)に至る。周囲は四、五里でけわしく険固である。花咲く林に池や沼は光も鮮かに鏡のごとく澄んでいる。城中の住人は質朴で正法を信じている。ここにも二階建ての閣があり、彩画の棟に丹朱の楹である。第二層には七宝の小さな窣堵波があり、如来の頂骨(注二)が安置してある。骨は周囲一尺二寸。毛孔は明瞭で、色は黄白。宝函に入れて窣堵波中に安置してある。運の善悪の相を知ろうと思うものは、香の粉抹を泥とまぜ頂骨の印を取れば(注三)、その福運の程度に随って文様がはっきりと出る。さらに七宝の小さな窣堵波があり、如来の髑髏の骨をおさめてある。形は荷の葉のようで、色は頂骨と同じ。これも宝函に入れ緘封して安置してある。さらに七宝の小さな窣堵波があり、如来の眼睛がいれてある。眼睛は大きな柰ほどで、光清らかに内外に照り映えている。これも宝函に入れ、緘封して安置してある。如来の僧伽胝袈裟の細い㲲で作ったものがある。その色は黄赤で、宝函の中に安置してある。歳月はすでに遠く、微しく損傷している。如来の錫杖(注四)がある。白鉄（錫）で鐶を作り、栴檀で杖が作ってある。宝筒に入れてある。近ごろある国王がこのもろもろの宝物はみな如来が昔時親しく用いられたものであることを耳にし、その威力を恃み脅迫して持ち帰った。本国に帰ると自らが住む御殿に安置した。十二日間（原文　浹辰）もたたないうちに、これを求めたがもう失くなっていた。そこでさらに尋ね求めると、すでにもとの所に還っていた。この五ヵ所の聖跡は霊験あらたかである。迦畢試王は五人の浄行(注五)に香花を供養させている。拝観礼拝する人々が引き続き絶えない。浄行の人たちは静寂ならんことを願い、財物は人が重んずるものであるから、権に規則を作り騒々しいのを止めようと思った。その規則の大要は、如来の頂骨を拝観しようと思うものは、金銭一枚を納める。もし印を取ろうとするものは、金銭五枚を納める。その他の段階は順序に従い規則した。規則は重いが、拝観礼拝する人はいよいよ多い。

二階建ての閣の西北に窣堵波があるが、これも非常に高大で(注六)、霊験もあらたかである。人が指で触れると、たちまち揺れ動く。基礎までも傾動して、鈴鐸はそれにつれて鳴り出す(注七)。

これより東南へ山谷の中を行くこと五百余里で健駄邏国（原注　旧に乾陀衛という。訛なり。北印度の境）に至る。

注

一　醯羅城　醯羅 ₒxiei-ₒlâ: *hidda* or *hedda* <Skt. *hadda*, "bone" [Cunningham: A. G. I., p.52; M. Williams: *Skt.-Eng. D.*, p. 1300 c; S. Konow: *Kharoṣṭhi Inscriptions*, p.157]。ジェララバード南方約八キロにあるハッダの小村で、いまは全く木も生えていない荒涼たる状態の地である。付近には Teppe Kalan など多くの遺跡があり、アフガニスタンで最も有名な仏教遺跡である。フランスの考古学調査隊の J. Barthoux が発掘を行ない、多数の収穫があり、今は主としてカーブルの博物館に収蔵されている。ガンダーラと同一系統のものでありながら、趣を異にしている。当地は四―五世紀に栄え、間もなく嚈噠 Ephtalite の破壊に遭い痛手を蒙った [J. Barthoux: *Les Fouilles de Hadda*.・吉川逸治：「ハッダの彫刻」『美術研究』・B. Rowland：「ハッダ」『アフガニスタンの古代美術』所収]。

二　如来の頂骨　『法顕伝』に「那竭国界の醯羅城に至る。城中に仏頂骨精舎あり、尽く金薄・七宝を以て校飾す。国王、頂骨を敬重し人の抄奪を慮り、乃ち国中の豪姓八人を取り、人ごとに一印を持ち印封守護せしむ。清晨に八人倶に到り、各々その印を視て然る後に戸を開く。戸を開き已り、香汁を以て手を洗い、仏の頂骨を出だして精舎の外の高座上に置き、七宝の円碪（台）を以て下に碪し、琉璃鐘もて上に覆う。皆珠璣もて校飾す。骨は黄白色、方円四寸にしてその上は隆起す。毎日出だせし後、

精舎の人則ち高楼に登り、大鼓を撃ち螺を吹き銅鈸を敲く。王聞き已れば則ち精舎に詣で香華を以て供養す。供養し已れば、次第に頂戴して去る。東門より入り、西門より出づ。王朝な朝な是の如く供養礼拝し、然る後に国政を聴く。居士長者も亦供養を先にし乃ち家事を修む。日々是の如くし初より懈惓なし。供養都て訖れば乃ち頂骨を精舎に還す。中に七宝の解脱塔あり、或いは開き或いは閉ず、高さ五尺許り以て之を盛る。精舎門前、朝な朝な恒に華香を売る人あり。凡そ供養せんと欲する者は種々これを買う。諸国の王も亦恒に使を遣わし供養す。精舎の処は方四十歩、復天震い地動くと雖も此処は動かず」とある。また五世紀前半の法勇(曇無竭 Dharma-vikrama)も「西して月氏国に入り仏の肉髻・骨を礼拝す」(『出三蔵記集』巻一五、『梁高僧伝』巻三)と記し、六世紀の『宋雲行紀』にも「那迦羅訶国に至る。仏の頂骨あり、方円四寸、黄白色にして下に孔あり人の手指を受くべく、閟然として[多く]蜂窠を仰ぐが似し」とある。古くより著名な遺跡として信仰されていたことがわかる。

三 頂骨の印を取る　如来の頂骨の印文をとることは、『大唐西域求法高僧伝』巻上、玄照法師の条にも「漸く迦畢試国に至り如来の頂骨を礼す。香華具さに設け、其の印文を取り、来世の善悪を観る」と、あながち醯羅城のみにおける行事でないことを記す。

四 如来の僧伽胝袈裟……如来の錫杖がある　『法顕伝』には「那竭国城に到る……城の東北一由延にして一谷口に到る。仏の錫杖あり、亦精舎を起こして供養す。牛頭栴檀もて作り、長さ丈六、七許り、木筒を以て之を盛る。正に復百千人にて挙ぐるも移す能わず。谷口に入りて西行す。仏の僧伽梨精舎有り、供養す。彼の国土の俗、亢旱の時、国人相率い衣を出して礼拝供養すれば天即ち大いに雨降る」とある。安置する場所も玄奘の時とは異なり、しかも二宝物を別置していたようである。『宋雲行紀』には「那迦羅訶国に至る……耆賀濫寺(E. Chavannes は Skt. *khakkhara*「比丘が行乞の時にもつ杖、錫杖」の意とする)に至る。仏の袈裟の十三条なるあり、尺を以て之を量るに、或るときは短く或るときは長し。復錫杖あり、長さ丈七、木筩を以て之を盛り、金箔もて其の上に貼す。此の杖、軽重定まらず、重さある時に値えば百人も挙がらず、軽さある時に値えば一人も之に勝う」とある。この六世紀にはすでに玄奘の時と同様な安置場所、方法であったようである。

五 浄行　浄行とは通常「婆羅門」の訳語であるが、ここは或いは巻二の一・八に見える「浄人」(寺には入っているがまだ出家していない人)と同意のものか。

六 これも非常に高大で　原文「亦甚高大」であるが、宋本等は「不甚高大」(あまり高大ではない)に作る。いまは麗本により訳した。

七 仏塔に指で触れると傾動鳴応するという表現は『宋雲行紀』の雀離浮図近辺の石塔についても見える。

四 健駄邏国(北印度の境)

四・一 概観　健駄邏国(注一)は東西千余里、南北八百余里あり、東は信度河に臨んでいる。国の大都城は布路沙布邏(注二)といい、周囲四十余里ある。王族は嗣を絶ち、迦畢試国に隷属している。邑里は荒れはて、住人は稀で、宮城の一隅に千余戸あるだけである。農業は盛んで、花・果はよくなり、甘蔗が多く、石蜜(注三)を産出する。気候は暖かく、おおむね霜や雪は降らぬ。人民の性質は臆病で、好んで学芸を習っている。多くのものは異道を敬い、正法を信ずるものは少ない。古えよりこのかた、印度の地には作論の師が多く(注四)、那羅延天(注五)・無著菩薩・世親菩薩・法救・如意・脇の諸尊者たち(注六)の本生の所である(注七)。僧伽藍は千余ヵ所あるが(注八)、壊され荒れはてて草は生え放題でひっそりとしている。多くの窣堵波もすっかり崩れ落ちている。天祠は百をもって数えるほどで、異道の人が雑居している。

注

一　健駄邏国　健駄邏 g'i̯ɒn°-d'â°-lâ°、ただし邏は『慈恩伝』に羅 .lâ に作る。乾陀羅とも。Skt. gāndhāra (-ā) に当たる。旧訳の乾陀衛・健陀越は Skt. *gandhavati*(香行国・香遍国と訳す) に当たる。ギリシア文献には *Gandarae* [Ptolemy : *Geogr.*, vi. c. 1, 7], *Gandarii* [Herodotus, III. c. 91], *Gandaritis* [Strabo : *Geogr.*, xv. c. 1, 26] 等と見え、またペルシア文献には *Gadāra* としてダリウス王 (前五二二—前四八六) の Behistun 碑文以下に見えている。インド文献にもヴェーダの時代から *Gandhāra* の語があらわれ [*Ṛgv.* I. 126. 7]、アショーカ王の磨崖詔勅第五章にも見える。古い碑文では *gaṃdhāra* の形である。カーブル河の下流、アフガニスタン領の Kunar 河 (ギリシア文献の Khoaspes) とパキスタンのインダス河の間の地で、おおむね今のペシャワル Peshāwar 県に当たる。前四世紀のアレクサンドロス大王の東征以来、ギリシア人・ペルシア人の来住者多く、塞種貴霜王朝 Kuṣan の時にはその中心地となり、四世紀に小月氏、五世紀には嚈噠 Ephtalite, White Hun の侵入下にあり、七世紀唐初には本書によれば迦畢試国の治下にあり、八世紀の慧超訪印時には突厥の隷下に入っていた [Cunningham : *A.G.I.*, p. 54 ; B.C. Law : *H.G.A.I.*, p.76 ; Beal : *Records*, p.97 (54)]。

二　布路沙布邏　*puo°-luo°-.ṣa-puo°-lâ°*、ただし邏は『慈恩伝』に羅 .lâ に作る。『法顕伝』に弗楼沙。また富婁沙富羅・富留沙富邏・不流沙。Skt. *puruṣapura*, 丈夫土・丈夫城と訳す。貴霜朝時代の建設である。カーブル河の南岸にある (ガンダーラの古代都市善見城 Puṣkarāvatī は北岸にある) 今のペシャワルである。古書に見える表記は Purshaur [c. 1001A. D., Al-Utbi], Parsháwar [c. 1020, Al-Birūni], Farshābūr [c. 1220, Yakūt], Pershāwer [1519, Baber], Peshour [1783, G. Forster], Peshāwar [1863, Cunningham] 等である [*Hobson-Jobson*, 700 a]。カニシカ王の本城のあった所と伝えられる。ジェララバード (濫波国) より途中カイバー Khyber 峠を通り約八十マイル、『慧超伝』に「この健駄羅国より西行して山に入ること七日にして覧波国に至る」とある。

三　石蜜　本巻一・一五の注一六参照。

四　印度の地には作論の師が多く　『慈恩伝』に「国に賢聖多く、古来作論の諸師、那羅延天・無著菩薩・世親菩薩・法救・如意・脇尊者等、皆此の所出なり」とある。後段に見える人々である。

五　那羅延天　Skt. *nārāyaṇadeva* は毗湿笯 (牟紐・毗紐) の権化であるとする。玄奘往訪時のガンダーラ地方は、湿婆 śiva (大自在天) に事える塗灰外道があり、那羅延天祠は中インド戦主国にある旨巻七に見えている。或いは同名の学者のことか。無著以下の説明は本書に出てくるが、この那羅延天についての記載は何もない。

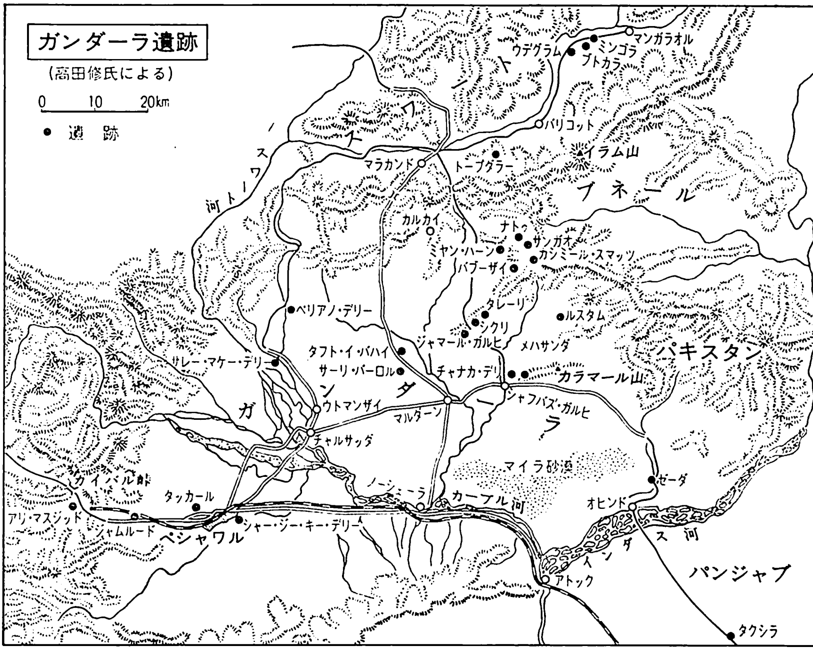
六　無著・世親・法救・如意・脇の諸尊者たち　無著・世親については巻五の二「阿踰陀国」の条に、以下の三人については本巻の中に出てくる。

七　本生　注四に見た如く、これらの人はこのガンダーラ出身であるを言う。ただし「本生」という語は、この世に生を受け衆生のために種々の苦労をすることをいうのであり、単なる出世の意ではない。

八　僧伽藍は千余ヵ所ある　いまのペシャワル県から、その東隣のタクシラ地方、北隣のスワート県南部、さらにアフガニスタンの一部にかけての古代ガンダーラ国とその隣接地域には、仏教の栄えたことを物語る仏塔や僧院の遺跡が数多く散在している [髙田修 :『仏像の起源』六九ページ]。一八四九年パンジャブ州が英領に帰して以後、その多くは宝探しの人の手により荒掠された。ガンダーラの遺構と美術とについて初めて学問的に論じたのは J. Fergusson であった [*Hist. of Ind. and East. Arch.* この発掘史・研究史の概観は髙田修 :「印度仏教美術研究の成果」『仏教芸術』一 (一九四八) ; 平凡社『世界美術全集』一一参照]。

四・二　仏鉢および卑鉢羅樹　王城内の東北方に[注一]一つの基礎の跡がある。昔、仏鉢が [安置して] あった宝台である。如来が亡くなられたあと、鉢はこの国に流れてきて、数百年間は丁重に供養していた。[その後] 諸国を流転して [今は] 波剌斯国[注二]にある。

城外の東南方八、九里に卑鉢羅樹[注三]の高さ百余尺のものがある。枝葉は繁茂し、蔭影はこんもりとしている。過去四仏[注四]がその下に坐られた所で、今もなお現に四仏の坐像がある。賢劫のうちに出世される九百九十六仏[注五]は、みな此所に坐られるはずである。仏の御加護で守られ御



利益でひそかに覆われている［所である］。釈迦如来はこの木の下で南面して坐られ、阿難に告げて「私が世を去った後四百年、一世に秀でた王が出て迦膩色迦(注六)と名のり、ここより南方遠くない所に窣堵波を起てるであろう。(注七)私の体のあらゆる骨肉舎利は、ここに多く集まるであろう」と言われた。

注

一 王城内の東北方　ジュリアンは西北方と読んでいる。或いは現在市の西方にある遺跡 Takkāl を考えてのことであろうか。

二 仏鉢云々　釈迦生前持用の鉢器は摩掲陀国華氏城に伝えられていたが、北天竺小月氏国王が華氏城を攻めて仏鉢および馬鳴菩薩とを得た［『馬鳴菩薩伝』、『付法蔵因縁伝』第五］という。恐らくカニシカ王またはそれ以前に北インドに伝わったものであろう。『法顕伝』弗楼沙国の条に、昔時月氏王がこの国を降し仏鉢を持ち去ろうとしたが、大象・四輪車をもってするも動かすことができなかった。そこで大いに愧じ、ここに塔および僧伽藍を建て供養したという伝説を記し、その状「雑色にして而も黒多く、四際分明なり。厚さ二分ばかり、甚だ光沢あり」と当時ここに仏鉢がなお存し目睹したことを述べている。その後諸方を展転し、ここに見えるようにペルシア国に移ったという。なお巻第十一の二〇「波剌斯国」の条に「釈迦の仏鉢、此の王宮に在り」と記す。

三 卑鉢羅樹　『慈恩伝』に畢鉢羅樹に作る。卑（畢）鉢羅 *.pjię* (*pjet.*)-*puât.-.lâ*: Skt. *pippala*, Pa. *pipphala*, Pkt. *pippala*, 学名 Ficus Religiosa. 釈迦がこの木の下で正覚を成じた故に菩提樹 Bodhi-druma ともいう。また庳鉢羅・必鉢羅とも書く。『宋雲行紀』には、迦膩色迦大塔を最初覆っていた万金に値いする真珠の網を、後人に略奪されるのを恐れ、塔の西北一百歩の所に埋めて、その上に樹を植えた。それが菩提樹であると異説を述べている。

四 過去四仏　釈尊以前に出世した仏の、㈠毘婆尸仏 Vipaśyin, ㈡尸棄仏 Sikhin, ㈢毘舎浮仏 Vishabhū, ㈣拘留孫仏 Krakucchanda, ㈤拘那含牟尼仏 Kanakamuni, ㈥迦葉仏 Kāśyapa, ㈦釈迦牟尼仏 Śākyamuni を過去七仏といい、この中の前三仏を過去荘厳の三仏といい、後の四仏

を現在賢劫の四仏という。

五　賢劫のうちに出世される九百九十六仏　賢劫は本巻三・三注三参照。賢劫の間には千体の仏が出世されるはずであり、そのうちすでに四仏が出世されているのであるから、これから出世される仏は九百九十六体である。

六　迦膩色迦　次項注三参照。

七　仏滅後四百年で迦膩色迦王が世に出るという伝説　『宋雲行記』には、「如来在世の時、弟子と此の土に游化し、城の東を指して曰く、我涅槃に入るの後二百年（三百年とするテキストもある）、国王の迦尼色迦と名のる有り、此の処に浮図を起てん、と」と本書とは異なる年代を記している。迦膩色迦王については次項参照。

四・三　迦膩色迦大塔　卑鉢羅樹の南に窣堵波がある。(注一)迦膩色迦王(注二)が建てたものである。迦膩色迦王は如来入滅の後四百年目に、(注三)天下に君臨し運に乗じて贍部洲を一統した。[王は] 罪福を信ぜず、仏の教えを侮った。草野に出猟して白兎に出会ったところ、王は自ら追いかけて、ここ [塔のある所] までやってきたが、ふと見えなくなった。牛飼いの子供が林の中で小さな窣堵波―その高さは三尺のもの―を作っているのが目に入った。王は、

「お前は何をしているのか」

というと、牧童は、

「昔、釈迦牟尼仏が聖明なる智恵をもって『きっとある国王がこのすぐれた土地に窣堵波を建てるであろう。我が身の舎利は多くその中に集まるであろう』と予言をされました。大王はすぐれた徳を前世に殖えられ、お名前も昔の [釈迦の] 予言にぴったりあっています。りっぱな手柄とすぐれた福運とで、うまくこの時期にお会いなされました。それで私は今まずお知らせしようとしたのです」

と答えた。この言葉を言いおわるや、忽然として見えなくなった。

王はこの言葉を聞き大いに喜び、自分の名が聖人の予言にあうことを誇り、それが縁で正しい信仰を発し深く仏の教えを敬うようになった。小窣堵波を周って更に石の窣堵波を建てたが、功徳の力で小窣堵波を覆いかぶせようと願った。ところが石窣堵波の大きさが増加するにつれて、小窣堵波も大きくなり常に三尺は出ていた。このようにしてだんだんと高くなり四百尺を越え、その基礎が立っているところは周囲一里半、基壇は五階で高さ百五十尺になり、やっと小窣堵波を覆うことができた。(注四)そこで王は喜び、さらにその上に二十五層の金銅の相輪をたて、(注五)如来の舎利一斛（十斗）をその中に安置し供養を修した。工事がやっとおわり、見ると小窣堵波は大きな基壇の東南隅の下に横にその半分を出していた。王は心穏やかならず、すぐさま作業をとりやめてしまったので、そのまま窣堵波の二段目の石基の中ほどに小窣堵波が半分顔を出したままになってしまった。その上もとの所にもう一つ小窣堵波が出てきた。それで王は元気を落としがっかりして、

「ああ、人の仕事は迷い易く、仏のなさることは掩い尽くし難い。み仏が扶助されること、どんなに腹を立てたところで追いつき得ようや」

と言い、すっかり恥じいり自分の咎を詫びて帰った。その二つの窣堵波は(注六)今もなお現在している。病気にかかり平癒するよう祈ろうと願う者は、香を塗り花をまき、真心こめて帰依すれば全治の御利益を蒙ることが多い。

大窣堵波の東側、石段の南に二つの窣堵波が掘りつけてある。一つは高さ三尺、一つは高さ五尺。作りと形は大窣堵波のようにしてある。また二体の仏像が作ってある。一つは高さ四尺、一つは高さ六尺。菩提樹の下に結跏趺坐する姿を模した像である。日の光が照らすと金色に輝き、日の影がだんだんに移ると石の文様が青紺になってゆく。こ

れを老人たちの話に聞けば、

「数百年前に石の基壇の隙間(すきま)に金色の蟻(あり)がいた。大きいのは指ほど、小さいのは麦粒ほどであった。同類の仲間がひき続きこの石壁を齧(かじ)った。その文様はまるで彫刻して金の砂子をまぜたようになり、この像を作りあげた」

ということである。今もなお現に存している。

注

一 卑鉢羅樹の南に……がある　これが有名なペシャワルの東南一キロにある Shāh-ji-ki-Dheri（大王塚）の迦膩色迦大塔で、いわゆる「雀離浮図」とはこの塔を指すといわれる。今も塔址が存しているが、この上に如何なる建造物があったかは今日なお問題が残っていて決定し難い。一九〇八—〇九年にわたり D.B. Spooner により発掘され、その成果が報告された [*Excavation at Shāh-ji-ki-Dheri, Archaeological Survey of India, Annual Report, 1909-10*]。それによれば、この塔は四方に突出部のある、四隅に円形の小塔がついた、一辺が八十七メートルの方形のものであり、地下からは高さ十九・七センチ、直径十二・七センチの銅製の、蓋(ふた)に三尊仏がついている円筒形舎利容器を得た。この容器の中から小骨片三個をいれた小さな六角形の水晶容器とカニシカ王の貨幣とが見出だされた。この銅の容器には点刻のカロシュティー文字で、カニシカ大王の一年にカニシカ寺 *kaniṣka-vihāra* に奉献したものであり、作者は工事監督者の奴隷 Agiśala であることが記してあった。この容器は今ペシャワル博物館に所蔵されており、歴史上、美術上種々の問題を提起する有名なものである [逸見梅栄：『印度仏教美術考・建築篇』一七二ページ以下；高田修：『印度・南海の仏教美術』四〇ページ；同：「印度仏教美術研究の成果」『仏教芸術』一、一二〇ページ；S. Konow : *Kharosthi Inscriptions*, p.137]。



シャー・ジー・キー・デリーの
カニシカ大塔より出土した舎利器

二 迦膩色迦王　迦膩色迦 ◦*ka-nji°-sjək◦-◦ka* : *kaniṣka*. この表記には多くの異形がある。㊀*kaniṣka* は本書の他に『宋雲行紀』の迦尼色迦に当たり、*Rājataraṅgiṇi*, I 168, Tāranātha の『印度仏教史』、Sārnāth の刻文（*Epigraphia Indica*, 8. 166, I. 381）に見える。㊁*kaneṣka* の形は Manikyāla の刻文に出る（*J.R.A.S.*, XII, 260）。㊂*kaneṣki* の形は王が鋳造した金貨・銅貨に見える。㊃*kanika* の形は『法顕伝』の罽膩伽、『慧超伝』の葛諾歌に対応する。㊄*kanik* の形は *Alberuni's India* (II. 11) に見える。㊅*kani* の形は罽膩に対する。㊆*kaniṣha* (*Rājataraṅgiṇi*) の形は迦膩瑟吒に対する。㊇*kaniṭa* の形は羅什訳『大荘厳論経』の罽呢吒に当たるという [堀謙徳：『解説西域記』一七六—七ページ]。

三 迦膩色迦王は如来入滅の後四百年目に　迦膩色迦王の出世年代には種々異論がある。最も長い時間をとるものは仏滅（前四八六）後七百年とする『僧伽羅刹所集経』序・『雑宝蔵経』第七。最も短くは三百年（あるテキストは二百年）とする『宋雲行紀』。今日の研究では仏滅後約六百年とし、西暦後七八年説、後一二八年説、後一四四年説などが有力である [高田修：『仏像の起源』一六二ページ以下]。この問題は仏教史上のみならず、東洋史・美術史にも関わる所が大であるため、一九六〇年四月に欧米の諸学者がロンドンに集まり研究発表を行ない討議し、その報告書が一九六八年 A.L.Basham (ed.) : *Papers on the Date of Kaniṣka* として出版された。なおカニシカ王の事歴については前掲の高田著一五

八ページ以下に詳しい。

四　迦膩色迦大塔造建の伝説は、『法顕伝』にも見え、『宋雲行紀』には詳細である。

五　二十五層の金銅の相輪をたて　玄奘の記述によればこの窣堵波は石造であり、さらに小窣堵波を中に覆いこめると読めば、この大窣堵波は覆鉢であったろうと想像される。しかし、『宋雲行紀』に記す雀離浮図（建造の伝説は玄奘と同様であり、迦膩色迦大塔と同一と解し得る）は、木造の十三級の重層建築であるとするのみならず、その金盤は十三重（同紀中に引く『道栄伝』は十五重とする）とし、しかもこの建造物は三度天火にあい焼けていると記している。この相違は同一の建造物であると解する限りは甚だ不審である。

六　その二つの窣堵波　現在大塔の塔基の東に大塔基と同一設計の小塔の塔基がある［逸見梅栄：『印度仏教美術考・建築篇』一七五ページに写真あり］。

四・四　仏像画　大窣堵波の石段の南側に画いた仏像の高さ一丈六尺のものがある。胸から上は分かれて二つの体となっており、胸から下は合して一体となっている。これを先達の話に聞けば、

「初め貧乏な人がおり力仕事をして世過ぎとしておりましたが、一金銭を手に入れましたので仏像を造ろうと願いました。窣堵波の所に行き画師に、

『私は今、如来のりっぱなお姿を図にして欲しいと思っています。一金銭をもっておりますが、仕事に酬いるにはなお少ないでしょう。私はもとから貧乏にせまられて［願が成就しないことを］心に病んでおります』

と申しました。その時、その画師は依頼者の真心を見てとり、値段を言うことなく仕上げることを引き受けました。さらにもう一人のものがあり、事情は前述の人と同様で、一金銭を携え、仏像を画くよう求めました。画師はこの時二人の銭を受けとり、りっぱな絵具を買い求め、合わせて一つの像を画きました。二人は同日にいっしょにやって来て挨拶をしました。そこで画師はともに一像を指してその二人に示し、

『これがあなた方が作られた仏像です』

と申しました。二人はお互いに見合って何か心に思う所があるようでした。画師は心にその疑念をさとり、二人に、

『何を長い間考えこんでいるのですか。あなた方から受けとりましたお金は、少しも余してはおりません。私のこの言葉に誤謬がなければ、この像は必ずや神変を現わしましょう』

と申しました。その声音がまだ静まらないうちに像は霊異を現わし、体を分離し影を入れまじえ光がお互いを照らし合いました。二人は画師の言葉のとおりであると心から信じて喜びました」

とのことである。

四・五　白石の仏像　大窣堵波の西南百余歩の所に白石の仏像の高さ一丈八尺のものが北面して立っている。不思議なことが多く、しばしば光明を放つことがある。折々仏像が夜の散策（原文「行」即ち経行のこと）に出かけ、大窣堵波を回り歩いているのを見た人がある。近ごろ群盗が押し込んで盗みを働こうとしたところ、像が盗人を出迎えたので盗人たちは怖れて逃げた。群盗はこれがもとで過ちを改め自ら更新し、邑里に出かけて行って詳しく遠近の人にこの話をした。

大窣堵波の左右に小窣堵波が魚の鱗のように百余りもある。仏像の

荘厳は巧妙をきわめ、よい香や不思議な音を時に鼻にし耳にすることがある。霊力ある仙人や徳高き賢人が折に経回っているのを見ることがある。この窣堵波は「七度焼けて七度建ったならば、仏の教えは尽きるであろう」と如来が予言（原文　懸記）されたものである。先賢の記録に「完成し破壊されること已に三度なり」とある。初めこの国にやって来たとき折しも大火に出遭った。営造されるはずであるが、まだ完成はしていない。

四・六　迦膩色迦伽藍と脇尊者　大窣堵波の西に古い伽藍がある。迦膩色迦王が建てたものである。(注一) 何階もの家・連なる樹・高殿・奥深い部屋があり、高僧を招待してそのりっぱな徳を顕彰したものである。壊れてはおるものの、やはりりっぱな細工と言える。僧徒は減ってはいるが、みな小乗を学んでいる。伽藍を建ててからこの方、優れた人が間々出て、論を作った師僧や悟りを得た人々のりっぱな影響はなお強く、高徳は泯ることもない。第三番目の重閣(注二)には波栗湿縛（原注　唐に脇という）尊者(注三)の部屋がある。大分以前から壊れてはいるが、今なお表彰している。初め尊者は梵志（婆羅門）の師であった。年八十になんなんとしてから家を捨て衣を染め［出家し］た。城中の少年たちはいれかわり譏り、

「愚かな男の年よりが何と浅はかなことか。一体、出家には二つの仕事があるものだ。一つは定（心を専念させ動かさぬ）を習うことであり、二つには経を誦むことである。だのに今この老いぼれは何の進歩もなく、折角の清流を濁してしまうようなもので、ただ腹いっぱい食うことを覚えるだけだ」

と言った。その折、脇尊者はこのような悪口を耳にしたので、人々に謝り、かつは自ら誓い、

「私がもし三蔵（経律論）の理に通ぜず、三界(注四)の欲を断ち切れず、六神通(注五)を得ず、八解脱(注六)を具足することができなければ、最後まで脇を席に著け［横になら］ない」

と言った。これより以後は、日も足らないように歩いてはものを考え、坐禅しては思索にふけり、昼は教理を研究し、夜は静かに思いを凝らした。三年を経て、学は三蔵に通じ、三界の欲を断ち、三明(注七)の智を得て、時の人に尊敬され、脇尊者と呼ばれることとはなった。

注

一　迦膩色迦王が建てたものである　いわゆる迦膩色迦伽藍である（本巻四・三注二中の容器の銘に見える寺名）。『慧超伝』には「葛諾迦寺」とし、建造者の王名をとって寺に名づけた旨記している。また *Alberuni's India* (II, 11) には王の名により *Kanik-caitya* と呼んでいることを記す。現在のペシャワル市の東北隅に聳える古い建築物の Ghor Khattri はかつては仏教寺院として、続いてヒンドゥー寺院として栄えたものであるが、これがカニシカ寺址であろうとされる［Watters: *On Y. Ch.*, I, p.208］。

二　第三番目の重閣　本巻一・五注三参照。

三　波栗湿縛（……）尊者　波栗湿縛 *。puâ-lịĕt。-śịəp。-b'uâ°*: Skt. *pārśva*, Pa. *passa*, Pkt. *passa*, *pāsa*. また波奢（『鞞婆沙論』）とも。説一切有部の論師で、付法蔵の第九祖、禅宗伝法の第十祖である。本書にはプルシャプラの人とするが、禅宗系統の書には中インドの人とするものもある。中インド摩掲陀国華氏城の馬鳴を屈伏し弟子とし、迦膩色迦王の命によりカシミールで五百の賢聖と共に『大毘婆沙論』を編纂した。

四　三界　一切の衆生が生死輪廻する三種の世界、即ち㈠欲界（淫欲・食欲の二欲を有するものの住む世界）、㈡色界（前の二欲を離れたものが住む世界）、㈢無色界（物質を超えた世界）、の三をいう。

五　六神通　六種の神通力。すなわち、天眼（自分や他人の未来における在り方を知る能力）・天耳（普通人の聞き得ない音声を聞く能力）・他心

（他人の考えを知る能力）・宿命（自分や他人の過去世における在り方を知る能力）・神足（自由に欲する所に現われることのできる能力）・漏尽（煩悩を取り去ることのできる能力）の六で、このうち天眼・宿命・漏尽の三を「三明」と呼ぶ。

六 八解脱 八種の定により煩悩に縛られている状態から脱して心を自由にすること。詳細はいま略す。

七 三明 注五「六神通」を参照。

四・七 世親菩薩の遺跡 脇尊者の部屋の東に古い部屋がある。世親菩薩(注一)がここで『阿毘達磨倶舎論』(注二)を著作した。人の菩薩を尊敬するものが、部屋に封をしてこの由来を書いている。

注

一 世親菩薩 巻五の二「阿踰陀国」の条参照。

二 『阿毘達磨倶舎論』 Skt. *abhidharma-kośa.* 小乗論部の書で三十巻ある。世親菩薩造、唐・玄奘訳。略して『倶舎論』といい、訳して『対法蔵』という。有部に基礎をおき広く諸部派の説を批評的に集成しているため、仏教の基礎学の研究書としてインドはもとより広く中国・日本でも研究され今日に及んでいる。

四・八 如意論師の遺跡 世親の部屋の南方五十余歩の所に第二の重閣がある。末笯曷剌他（原注 唐に如意という）論師(注一)がここで『毘婆沙論』(注二)を作ったのである。論師は仏涅槃（釈尊の入滅）の後の一千年の間(注三)によい具合に生まれた。若い時から好学で弁才があり、その評判は遠くにまでおよび、道俗ともに心を寄せていた。折しも室羅伐悉底(注四)国の毘訖羅摩阿迭多王（原注 唐に超日という）(注五)は、威風遠く洽く、諸印度を臣としていて、一日に五億の金銭をば貧乏人や孤独な人に恵んでいた。大蔵大臣は国費が欠乏するのを心配した。そこで思いきって王を遠まわしに諫めて、

「大王の威光は異民族をも被い、恩沢は昆虫にまで及んでおります。どうか五億の金銭を増加して天下の貧窮しているものを賑わしてください。役所の倉庫はすでに空ですから、もっと国土に税をかけましょう。取りたてが引き続けば怨みの声が揚がるでしょう。そうなれば君主は上に立って天下にあまねく恵むという恩徳をもたれ、家来は下にあって職務に不忠実であるという責任を受けましょう」

と申し上げた。王は〔この諷諫にも拘わらず〕、

「税の集める量には余りがあるほどだが、施す量にはまだ不足がある。苟も我がために国費を浪費しているのではない」

といって、〔大蔵大臣の言葉どおり〕そのまま五億の金銭を増加して貧乏人たちに恵んだ。その後狩猟に出かけ猪を追いかけて見失った。逃げた所を見つけ出したものがあったので、一億の金銭を褒美にとらせた。〔一方〕如意論師は、一度、人に髪を剃らせて、たちどころに一億の金銭を与えた。その国の史臣（記録係の家来）はすぐさまそのことを記録に書いた。王は〔如意論師の賞金の方を〕高いと見られるのを恥ずかしく思い、心中常に楽しまなかった。如意論師を多数の人の中で辱しめようと思い、異学（外道）の徳業の高深なる人を百人招き集めようとして、

「〔現象界に〕視聴をむけることをやめ、真実の境地に入ろうと願うが、諸説紛々として心を寄せるにも寄り所がない。今、〔諸説の〕優劣を考えて専心遵奉したい」

と命令を下した。論議に参集するにおよび、重ねて命令を下して、

「外道の論師たちはみな秀才たちである。沙門に信者たちは信奉する

教義を十分に述べよ。勝てば仏の教えを崇拝しよう。負けたならば僧徒を死刑に処す」

と言った。そこで如意は外道たちと論戦し、九十九人は敗退してしまった。下座に残る一人は如意を見ること蔑むがごとくであった。そこでこれとはげしく議論し、論は「火と煙」に及んだ。王と外道はともに大声で、

「如意論師の語義に間違いがある。一体、煙が先で、その後に火に言及する、これが事の道理の常だ」

と叫んだ。如意は非難を釈き明かそうと思ったけれども、耳をかしよく考えようとするものもなく、衆人の中に辱しめられたのを恥じ、その舌をかみ切り、門人の世親を戒めて、

「多数をたのむ群衆とは真理を争うことなかれ。迷える人々の中では正論を弁ずることなかれ」

と書きとらせた。言葉が終わるや死んでしまった。それから間もなく超日王は国を失った。興国の王が運にあたり［王位にあれば］英賢は表彰されるものである。世親菩薩はさきの恥をそそごうと思い、やって来て王に、(注六)

「大王は聖徳をもち天下に君臨され、衆生の寿命を主っておられます。わが先師如意は、その学深奥を窮めましたが、前王の宿怨を買い、衆人にその高名を挫かれました。私は御指導を受けまして先の怨みを復したく思います」

と申し上げた。かの王は如意が哲人であることを知っており、世親のりっぱな志を讃美した。そこで如意と論議をした外道の人たちを召集し、世親は重ねて以前の（火と煙の）論理を述べた。外道は屈服し敗退した。

注

一 末笯曷剌他（……）論師 末笯曷剌他 *muâ-nuo-ɣât-lât-t'a*：Skt. *mano-ratha*. ただし剌は宋・元・明本に利に作り、これに対してジュリアンは *manor-hita* の原音を当て［『仏訳慈恩伝』四〇五ページ］、ワッターズは *manorddha* を善しとする［*On Y. Ch.*, I, p. 212］。陳・親諦訳『婆藪槃豆法師伝』に「摩㝹羅他、訳して心願となす」とある故、*manoratha* ［*Mvy.* no. 6334］を当てるべきであろう。後出の毗訖羅摩阿迭多王と同時代の人というから、四世紀後半から五世紀の初葉まで存世した人である。これは仏滅後一千年中の人という語にも妥当する。

二 『毗婆沙論』 通常『毗婆沙論』という書は、仏滅後四百年にカニシカ王が五百人の阿羅漢をカシミールに集め三蔵の注解をなさしめたという第四結集（巻三の六「迦湿弥羅国」参照）の際に編纂された『阿毘達磨大毘婆沙論』Abhidharma-mahāvibhāṣa-śāstra 二百巻（玄奘訳あり）をさす。有部の教理を中心とした諸部派の研究書である。この如意の『毗婆沙論』という書は今日梵・蔵・漢ともに伝わらぬから詳細不明であるが、或いは前書の注解でもあろうか。

三 仏涅槃の後の一千年の間 仏の入滅後に教法が行なわれる時期を、正法・像法・末法の三期に分ける、これを正像末三時という。その各期の時間にはおおむね四説ある。正法五百年像法一千年、正法一千年像法五百年、正・像各五百年、正・像各一千年の四説で、末法は正・像の後一万年とする。いまは文意より考えるに正法一千年の説によるようである。「如意は幸運にも仏の正法が行なわれている間に生まれた人である」の意。

四 室羅伐悉底国 *śi̯ět-la-b'i̯wɐt-si̯ět-tiei*（宋本は羅を邏 *la* に作る）：Skt. *Śrāvastī*. 詳しくは巻六の一参照。

五 毗訖羅摩阿迭多王（……） *b'ji-ki̯ət-la-muâ-â-d'iet-ta*: Skt. *vikrama-āditya*. 『婆藪槃豆伝』に謚柯羅摩阿祑多に作り、正勤日と訳す。西暦四、五世紀のころ中インドに起こった崛多 Gupta 王朝には Vikramāditya の名の王が数名あるが、ここにいう王は多分王朝三代目のチャンドラグプタ Candra-gupta 二世（三八〇以前に即位、四一三—一四に死亡、その子クマーラグプタ Kumāra-gupta 一世、幼日王即位）であろう。かれは東南インド・西北インドを征服して全インドを統べ、欧州とも交通し、

グプタ紀元を立て、いわゆるグプタ文化の盛大を来たした人である[Smith: *E.H.I.*, p.306 ff.; H. Raychaudhuri: *P.H.A.I.* p.553 ff.]。なお法顕の入竺は三九九—四一二年であり、まさに超日王の在位中であった。

六 王　この王は超日王の子のクマーラグプタ一世、即ち幼日王で、四一四年即位、四十年以上の長期にわたり王位にあった。

四・九　布色羯邏伐底城　迦膩色迦伽藍から東北へ行くこと五十余里、(注一) 大きな河(注二)を渡り布色羯邏伐底（プシカラーヴァティー）(注三)城に至る。周囲は十四、五里ある。住民は多く、家並は連なっている。城の西門の外に一つの天祠がある。[大自在]天の像は威厳があり、不思議なことが引き続き常に起こっている。

注

一 東北へ行くこと五十余里　『慈恩伝』には「百余里」に作る。

二 大きな河　スワート Swāt 河である。

三 布色羯邏伐底城　布色羯邏伐底 *puo°-ṣịək̥-kịɐt̥-lâ°-b'ịɐt̥-tiei°*: Skt. *puṣkalāvati, puṣkarāvati,* Pkt. *pukkalavadi,* 意味は blue lotus. 今のスワート河とカーブル河の接合点より少し上流のスワート河左岸にあるChārsadda (Chārsada) である。ペシャワルより十七マイルの距離。アレクサンドロス大王侵入時から法顕の訪印時にもガンダーラの首都であった。ギリシア文献には Peukelaōtis [Arrian: *Anab.*, iv. 22, *Ind.*, 4], Peukolattis [Strab. xv; Pliny. vi. 17], Peukaleis [*Dionysius Periegetes*, 1142] とある [Smith: *Dictionary of Greek & Roman Geography*, II, 585 による]。『漢書』に見える罽賓国の首都「循鮮城」、『唐書』の「修鮮城」はペルシア領有時代の古名 *sūsen, sūsan にあたり、意味はまさしく puṣkarāvati と同じく blue lotus であるという [白鳥:「罽賓国考」『西域史研究』上四一六ページ]。第二次大戦後、英国の考古学者 M.Wheeler とパキスタン考古局により発掘が行なわれ、報告書 *Charsada. A Metropolis of the North-West Frontier, being a Report of the Excavation of 1958* が前者の名を冠し出版され、ペシャワル大学の A. H. Dani も案内書 *Pushkalavati, the Lotus City* を刊行した。土器・土偶・メナンドロス（ミリンダ王）の銀貨などが発掘されたが、古代ペルシア領有時代の歴史に大きく寄与するのではないかとの期待には余りそえないものであった。なお、Cunningham: *A. G. I.*, pp. 56 ff.; B.C. Law: *H.G.A.I.*, p.119; M.Wheeler: *Civilizations of the Indus Valley and beyond*, pp. 104 ff.;『世界考古学大系』八、九三ページ等参照。

四・一〇　世友と法救　城の東に窣堵波がある。無憂（アショーカ）王(注一)が建てたものである。ここが過去四仏(注二)の説法された所である。古えの聖賢のうち、中印度から降臨し衆生を導かれた事跡は、この土地にはまことに多い。[例えば] 伐蘇蜜呾羅（ヴァスミトラ）(注三)（原注　唐に世友という。旧に和須蜜多というは訛なり）論師はここで『衆事分阿毘達磨論』(注四)を製作されたのである。

城の北方四、五里の所に古い伽藍がある。庭・建物は荒れはてている。僧徒は少ないが、みな小乗の教理を遵奉学習している。達磨呾邏多（ダルマトラータ）(注五)（原注　唐に法救という。旧に達磨多羅というは訛なり）論師がここで『雑阿毘達磨論』(注六)を作製されたのである。

注

一 無憂王　巻八の二・三参照。

二 過去四仏　本巻四・三注四参照。

三 伐蘇蜜呾羅（……）論師　伐蘇蜜呾羅 *b'ịɐt̥-suo-mịĕt̥-tât̥-lâ*: Skt. *vasumitra,* Pa. *vasumitta.* また筏蘇蜜多羅・婆蜜多・婆修蜜多・和須蜜多・婆須蜜・和須蜜とも書き、天友とも訳す。説一切有部の一祖で、婆沙論の四大論師の随一といわれる。カシミールのいわゆる第四結集の指導者。巻三の六参照 [赤沼:『辞典』七四三ページ]。

四 『衆事分阿毘達磨論』　論書名。Skt. *abhidharma-prakaraṇa-pāda-śā-*

stra. 十二巻。劉宋・求那跋陀羅・菩提耶舎共訳は標記の書名であり、旧訳とされる。玄奘にも翻訳あり、『阿毘達磨品類足論』十八巻と名づけられ、新訳といわれる。小乗論部の書で、有部の説にもとづく。問答分別を主とし、『阿毘達磨六足論』中の最も総合的著作である。

五 達磨呾邏多（……）論師 達磨呾邏多 *d'ât.-.muâ-tât.-lâ°-.tâ* : Skt. *dharmatrāta*, Pa. *dhammatāta*. また達磨怛邏多・達磨多羅・曇摩多羅とも。説一切有部の論師で、次注に出る法勝の門葉に属する人らしい。

六 『雑阿毘達磨論』 論書名。Skt. *saṃyukta-abhidharma-hṛdaya-śāstra.* 十一巻。通例『雑阿毘曇心論』略して『雑心論』といわれるものであろう。この『雑心論』は劉宋・僧伽跋摩等の訳。法勝 Skt. *dharmaśreṣthi*, Pa. *dhammaseṭṭhi* の『阿毘曇心論』を続補し、説一切有部の教義を説明したもので、繁簡宜しきを得たために各地で大いに行なわれた。

四・二 千生捨眼塔 伽藍の側に窣堵波の高さ数百尺のものがある。(注一) 無憂王が建てたものである。木の彫り、石の文は人工のものとはすこぶる異なっている。これは釈迦仏が昔時国王となり菩薩行(注二)を修行した折に、衆生に請われるがままに施しをして倦むことなく、まるで自分の身体をなくしてもなお残っているかの如く［施しに務められ］、この国に千度生まれて王となられた所である。この聖地が千生捨眼(注三)の所である。

捨眼から東方遠からざる所に二つの石造の窣堵波がある。各々高さ百余尺ある。右側が梵王（大梵天 Mahābrahman）が建てたもので、左側は天帝（帝釈天 Śakra devānāṁ Indra）(注四)が建てたものである。珍宝で飾ったが、如来が寂滅されると宝は変じて石になってしまった。塔基は崩れ傾いているが、今なお高々としている。

注

一 伽藍の側に……ある 『慈恩伝』には「伽藍の内に窣堵波の高さ二百尺のものあり」としている。

二 菩薩行 仏となるため菩薩の因位にある間にする六波羅蜜などの多くの修行。

三 千生捨眼 因位修業中の菩薩が自分の眼目までも施与するというのは、忍辱の菩薩行をいうのである。この眼目を施すという仏教説話は経典中に頻見し、*Jātaka* 499, Śivi; *Jātakamālā* 2, Śivi; 『仏本行集経』巻五、妙目王本生・・『賢愚経』三二、快目王本生・・『方広大荘厳経』巻五、普目王本生・・『悲華経』巻九、普目王本生・・『大悲分陀利経』巻四、普目王本生・・『弥勒菩薩所問本願経』等に出ている［干潟龍祥・・『本生経類の思想史的研究』その他による］。『法顕伝』にも「以眼施人」とし、『宋雲行紀』にも「挑眼施人の処」として訪問の記事をのせている。またこの説話は絵画にも描かれている。新疆省庫車のキジル窟院壁画には普目王本生を［干潟龍祥・・『ジャータカ概観』五八・一〇九・一四四ページ］、西インドのアジャンター窟院第十七洞壁画には画中王の玉座に Śivi 王の記銘がある［J. Griffiths: *The Paintings in the Buddhist Cave-Temples of Ajaṇṭā*, p. 38 & pl. 76］。

四 梵王・天帝 梵天王は天界を支配し、帝釈天は人界を支配する。共に仏陀と仏法を守護するという。

四・三 化鬼子母の遺跡 梵釈（梵王と帝釈天即ち天帝）の窣堵波から西北へ行くこと五十余里、窣堵波がある。釈迦如来がここで鬼子母(注一)を教化し人を害しないようにされた所である。それでこの国の俗としてて祭って後嗣を願うのである。

注

一 鬼子母 Skt. *hārītī.* 訶利帝・訶利底・訶梨帝・哥利底・呵利帝・呵利陀・可梨陀とも。また訶利帝母とも。青色・黄色・青衣などと訳す。薬

叉女神の名。歓喜母・愛子母・天母・功徳天の称がある。『雑宝蔵経』第九によれば、「鬼子母は老鬼神王般闍迦 Pañcika の妻で子供は一万人あり、その最少子を嬪伽羅 Skt. *priyaṅkara*, Pa. *piyaṅkara*, *Piṅgala* といった。この鬼子母は他人の子を食べるので人々は困りはて仏に助けを求めた。仏は嬪伽羅を鉢の底にかくしたので、鬼子母は狂気のごとく探し求めたが見つからず、仏の一切智に頼りに来た。仏は子供一万をもっているに拘わらず唯一子を見失ったことを悩むことと、世間の数人しか子をもたぬ親がその子を食べられてしまうことと対比して、世の親の心を説き遂に教化された」とある。『寄帰伝』受斎赴請の条に「西方の諸寺毎に門屋の処に、或いは食厨の辺に在りて母形の一児子を抱き、其の膝下に或いは五、或いは三なるを塑画し、以て其の（訶利底母）像を表わし、毎日前に供養を盛陳す。其の母乃至四天王の衆、大豊勢力あり。其の疾病ありて児息なき者、食を饗し之に薦むれば、咸く皆願を遂ぐ」とある。日本の寺院にても食堂に鬼子母神を安置することがあるのはこの遺風か。この鬼子母が子を抱き膝のあたりに集めている状は仏教美術の好素材となっている [H. Ingholt: *The Buddhist Madonna*, in *The Beginnings of Buddhist Art*, pp. 271 ff.; A. Foucher: *Gandharan Art in Pakistan*, pls. No. 340-4;]。



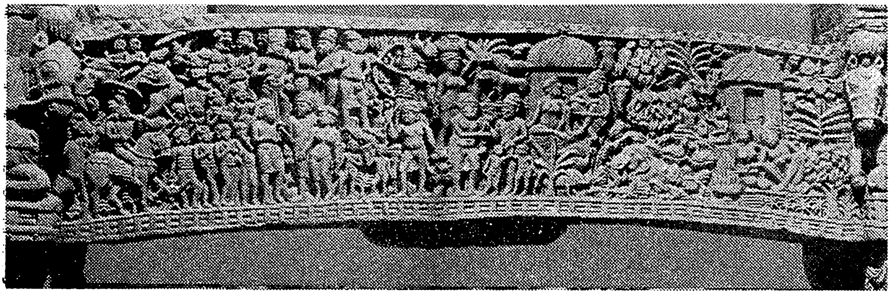
シクリー出土の
ハーリティー(鬼子母)像

四・一三　商莫迦本生地　化鬼子母［の窣堵波］から北へ行くこと五十余里の所に窣堵波がある。これが商莫迦菩薩（原注　旧に睒摩菩薩という。訛なり）(注一) が心をこめて親孝行をし、盲いた父母に侍いた所である。［かれが］果物を採っていた所、王の遊猟に出遭い毒矢が誤って命中したが、［商莫迦の親に対する］真心に感応して天帝が薬を与えた。徳が明聖［なる天帝］を動かし、たちどころに蘇生したのである。

注

一　商莫迦菩薩（……）　商莫迦 ◦śi̯ang-mâk◦-◦ka: Skt. śyāmaka, śyāma, Pa. *sāma* [Edgerton: *BHSD.*, 534 a]. 旧訳の睒摩 *śi̯am-muâ→◦śi̯äm-◦muâ は母音と語尾に問題ありとしたものであろう。また睒摩迦とも作り、善と訳す。この本生譚は『六度集経』第五、『雑宝蔵経』第一、『僧伽羅刹所集経』巻上、『善見律毘婆沙』第六、『菩薩睒子経』、『睒子経』等に出ている。商莫迦の父母が毒蛇の害に遭い失明した。商莫迦は樹果を集め孝養を尽くした。父母が水を求めたので、かれは鹿皮の衣を被り水を汲みに出かけたところ迦尸国王に鹿と見誤られ胸を射られた。天帝はかれの孝心に感じ、盲父母をかれに会わせると、商莫迦の傷も癒え、父母も開眼した。国王はこれを見て仏法に帰依した、というのがその大略である。この本生譚も彫刻の題材としてよく見るものである。[干潟:『ジャータカ概観』五九・一二七ページ; 小野玄妙:『仏教美術講話』一六七ページ; H. Ingholt: *Gandharan Art in Pakistan*, pl. 5]。

四・一四　跋虜沙城　商莫迦菩薩の被害地から東南に行くこと二百余里で跋虜沙城(注一)に至る。城の北に窣堵波(注二)がある。これは蘇達拏太子(注三)（原注　唐に善牙という）が父王の大象を婆羅門に施したため、叱られ擯



蘇達拏本生図，サーンチー塔門

けられたので、人々に挨拶をし、郭(とりで)の門を出てからここで別れを告げたところである。(注四)その側の伽藍には五十余人の僧がおり、みな小乗の学をしている。昔時、伊湿伐邏(イーシヴァラ)（原注　唐に自在という）論師(注五)がここで『阿毗達磨明燈論(注六)』を作製したのである。

跋虜沙の東門の外に一伽藍がある。僧徒は五十余人おり、みな大乗の学をしている。窣堵波がある。(注七)無憂王が建てたものである。昔、蘇達拏太子が擯けられて弾多落迦山(ダンダローカ)（原注　旧に檀特山という。訛なり）(注八)にいたとき、婆羅門が太子の男女［の二子］を乞い求め、ここで［二子を］売った。

注

一　跋虜沙城　跋虜沙*b'uât*。-°*luo*-°*ṣa*. この原音を古くは Varoucha [Julien], Palusha [Watters], Paluṣa［堀：『解説』一九四ページ］を、近くは Varuṣa, Varuṣapura [A. H. Dani : *Shahbaz Garhi*. Univ. of Peshawar, Archaeological Guide Series, No.2. p.2] を考えている。『宋雲行紀』には仏沙伏に作る。仏沙は本書の跋虜沙に当たり、伏は梵文 pura に当たるとする（Varṣapura）[E. Chavannes:『宋雲行紀箋注』]。ペシャワルの東北東六十五キロの三方を山に囲まれた今の Shahbaz Garhi であるとされる [A. Foucher (translated by H. Hargreaves) : *Notes on the Ancient Geography of Gandhāra*, Archaeol. Survey of India, pp. 21 ff.]。今でこそ毎週市場の立つ地方村落に過ぎないが、かつては Purṣapura と並ぶガンダーラの大都市で、交通の要衝として繁栄した。インドより中央アジア・西アジアへの通過地点でもあり [B. Srivastava : *Trade and Commerce in Ancient India*, p.95] 今に残る南郊の丘にある二個の大石に刻されたカロシュティー文字の阿育(アショーカ)王碑文や近辺の寺址も、或いはその美景を讃えたパーブル の物語もその往時を物語るものである。

二　城の北に窣堵波　これをA・フシェはシャフバズ・ガルヒの北方二十キロにある Chanaka Dheṛi (Kanaka Chaitya) に比定した。ここには平地にある珍しい寺院址と思われていたものがあり、一九五九年以来、京大の調査隊が発掘をした結果、これは寺院址ではなく、クシャン期の王宮の遺址であったという。

三　蘇達拏太子　蘇達拏 °*suo-d'ât*。-°*ńa*. この原音をジュリアン、ビール、ワッターズ、堀の諸氏は何れも Sudāna（su は善、dāna は施・與の義）とし、原注の善牙の牙字は與の略体「与」の誤写と見る人もある［堀：『解説』一九五ページ］。しかし、玄奘は Skt. *dāna* に対しては柁那 °*d'â*-°*nâ* の字をあて［『大菩薩蔵経』第二巻］、達拏 *d'ât*。-°*ńa* のごとき用字法はしていない。これに対し、漢語の牙にあたる語は Skt. **dāṃṣtra*, Pa. *dāṭhā*, M.I.A. **dāṭhā, dāṭha, dāḍha* [Turner : *C.D.*, no. 6250] であり、本書の善牙即ち蘇達拏はこの中期インド語の *sudāḍha* に対するとする説［『荻原雲来文集』八四六ページ以下］がある。語義の点よりは正に適切であろう。もし然りとすれば、音韻史の観点からみて玄奘の時期にすでに拏 °*ńa*→°*ña*→°*ⁿda* となる denasalization を起こしていたこととなろう。ところで、この蘇達拏太子は古くは須大拏と書かれていた［西晋・聖賢訳『太子須大拏経』一巻］ことは、Sudāna 即ち善施・善與の義と解していたと思われ、玄奘の釈義とは異なろう。『玄応音義』

第五に「須大拏　女加反→˳ña。或いは須達拏と言い、或いは蘇陁沙拏 Skt. *sudakṣiṇa* ? と言う。此に訳して善與と言い、亦善施と言う」とあるのも、師の玄奘の解とは異なる。しかし、この蘇達拏太子の仏教説話に見える事跡そのものはまさしく善施・善與の語に当たるものである。

四　蘇達拏太子の事跡　この説話は Skt. *Viśvantara-Jātaka* (Pa. *Vessantara-Jātaka*) といい、漢訳は『六度集経』二、『太子須太拏経』、『菩薩本縁経』上、『有部毘奈耶薬事』一四その他に見える。大要は次の如くである。須大拏は尸毘国の太子で布施を好む人であった。敵国に父王が宝にしていた白い大象を乞われるままに与え、父の怒りを蒙り妃および二子と共に追放された。然るになお布施の行を怠らず、婆羅門に乞われるまま妃を与え、さらに二子をも檀特山で施してしまった。婆羅門はその二子を売ろうとしたことが機となり、遂に太子夫妻は二子と共に王に迎えられて帰った。太子は布施行が成満した、という話である。この説話も仏教美術の好材料となり、中国・敦煌・中央アジア・インドの諸地に或いは絵画に、或いは彫刻に表わされている［干潟：『ジャータカ概観』七四・七五・一三五ページ；小野：『仏教美術講話』一八九ページ；H. Ingholt: *Gandharan Art in Pakistan.* No.6］。

五　伊湿伐邏（……）論師　伊湿伐邏　˳*ʔi-śiəp˳-b'i̯wɐt˳-lâ˳* : Skt. *iśvara.* 邏は羅の誤写であろう（巻三に阿縛盧枳低湿伐羅、分かちて書けば阿縛盧枳多・伊湿伐羅とある。『慈恩伝』巻二も羅に作る）。伊湿伐羅論師については分からない。

六　『阿毘達磨明燈論』　この書は現存蔵経中に見当たらず、如何なるものか著者のことと共に不明である。

七　窣堵波がある　婆羅門が蘇達拏太子の二子を売ろうとした場所は、Shahbaz Garhi より東門を出て数キロ、Hund へ行く道の南側に現在 But Shahri と呼ばれる所に比定されている［A・フシェ：前掲書］。

八　弾多落迦山（……）　次項注一参照。

四・一五　**檀特山の修行**　跋虜沙城より東北へ二十余里で弾多落迦山(注一)に至る。山嶺上には窣堵波がある。無憂王が建てたものである。蘇達拏太子はここで隠棲した。その側、遠からざる所に窣堵波がある。太子がここで男女［の二子］を婆羅門に施し、婆羅門がその男女を鞭うち、流血が地を染めた。今も草木はなお赤色をしている。巌石の間の石室(注二)は太子と妃が坐禅をした場所であり谷間の林の木立ちは枝を垂れて帷のようで、これらはみな昔太子が散策された所(注三)である。その側、遠からざる所に一つの石の廬がある。これが古えの仙人が住んでいた所(注四)である。

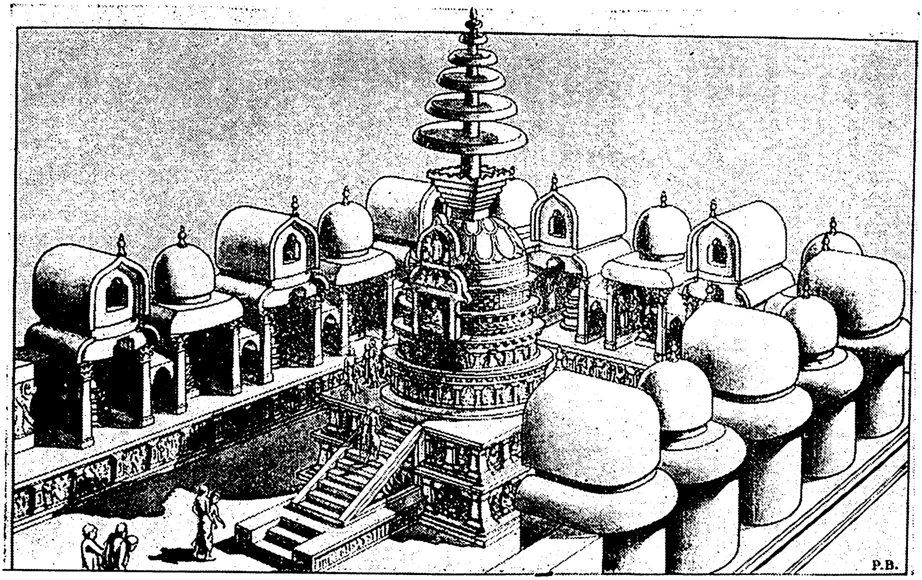
注

一　弾多落迦山　弾多落迦 ˳*d'ân-˳tâ-lwâk˳-˳ka* : **danta-loka* < Skt. *daṇḍa-loka.* 刑罰処の意。旧訳の檀特は **dantak* < Skt. *daṇḍaka* にあたる。A・フシェはこの位置を Shahbaz-Garhi より東北にのびる丘陵の北端 Mekha-Sanda（< Skt. *mahiṣi-saṇḍa.*「雌雄の水牛」の意）に比定した。一九六二―六七年にわたり、この塔院・僧院群を京都大学の調査隊が発掘調査を行ない、報告書を刊行した［『メハサンダ―パキスタンにおける仏教寺院の調査』京大イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊報告第四冊、一九六九年］。

二　巌石の間の石室　今も Mekha-Sanda の丘上には巌石を掘って造った洞窟が二つある。『宋雲行紀』に「山頂の東南に太子の石室あり、一口にして両房あり。太子の室前十歩、大方石あり、太子常にその上に坐すという。阿育王塔を起て之を記す」とある。

三　太子が散策された所　前注の『宋雲行紀』の文に続いて、「塔の南一里、太子の草菴の処あり」とある。

四　古えの仙人が住んでいた所　太子が師として従事した人。『太子須大拏経』によるに、檀特山に至るに山中に道人の阿州陀 Skt. *acyta,* Pa. *accuta* 久しく山に居りて玄妙の徳あり、太子はその教えに従い修業した、とある。『宋雲行紀』には阿周陀窟と記している。



タフト・イ・バハイの仏教寺院復原図（P. ブラウンによる）

四・一六　独角仙人　仙人の廬から西北へ行くこと百余里、一つの小さな山を越えて大きな山に至る。山の南に伽藍がある。僧徒は僅少でみな大乗を学んでいる。その側の窣堵波は無憂王が建てたものである。むかし独角仙人がいた所で、仙人は淫女に誘惑されて神通力を失った。淫女はそこで仙人に肩ぐるまして町に還(かえ)ってきた(注一)。

注

一　独角仙人とはまた一角仙人ともいう。Skt. *ekaśṛṅga*, *ṛṣyaśṛṅga*, Pa. *ekasiṅga*, *isisiṅga*. 鹿の角の意。この説話は *Mahābhārata*, 南伝 *Jātaka* V, *Mahāvastu* III,『仏本行集経』一六、『仏所行讃』一、『大智度論』一七の羅睺(らご)羅母本生経その他に見え、わが国の謡曲「一角仙人」もこれに取材している。ただし誘惑を退けたことになっているものが多い。いま『大智度論』によりその大略を記す。むかし婆羅痆斯国に鹿より生まれ頭に一角がある人があり偶然神通を現わし、雨を降らせないようにした。国王は賞金をかけ降雨の法を広く問うた。その時扇多(シャーンター) śāntā という淫女が五百の美女を伴い、独角仙の近くに行き住んだ。一日仙人に薬酒を飲ませて誘惑し、仙人の神通力を失わせることに成功し、七日七夜雨が降り続いた。扇多は仙人と共に婆羅痆斯城に出かけたが、途中で詐(いつわ)って病気のふりをしたところ、仙人は病と信じ扇多を肩に乗せて城内に来た、という。この説話の舞台を玄奘は健駄邏(ガンダーラ)にしたわけである。この説話も仏教彫刻の好素材となっている［干潟：『ジャータカ概観』八八・八九・一三一ページ；H. Ingholt: *Gandharan Art in Pakistan*, No. 333］。

四・一七　毗摩天女像　跋虜沙城から東北へ五十余里で高い山(注一)に至る。山には青石の大自在天婦像がある。毗摩(ビーマ)天女(注二)である。土地の話によれ

ばこの［自在］天［婦］像は自然のものだとのことである。霊験も多く、祈祷する人も衆い。印度の諸国から福を求めて願をかけ、貴賤ともに多く来たり遠近を問わずみな集まってくる。天神の姿を見たてまつろうと願うものが、心をこめて一心に絶食すること七日すれば、或いは見たてまつることがある。願をかけるものは多く聴きとどけられる。山の下には大自在天祠があり、塗灰外道（注三）がおまつりをしている。

注

一　高い山　Shahbaz-Garhi より東北東に高い丘陵がある。Karamar（立っている蛇の意の土語）とよばれている。この山に比定されている。

二　毗摩天女　毗摩 。b'ji-。muâ: Skt. *bhima*. 大自在天（Maheśvara）即ち湿婆 Śiva 神の妻の女神。宋本に毗摩羅 Skt. *bhimala* に作るは同義。巻十二の二二・三に媲摩 p'iei°-。muâ に作る。参照されたい。

三　塗灰外道　巻一の三八注一〇を参照。

四・一八　烏鐸迦漢荼城　毗摩天祠から東南へ行くこと百五十里で烏鐸迦漢荼城（注一）に至る。周囲二十余里で南は信度（インダス）河に臨んでいる。住民は富裕で宝貨に満ち、諸方の珍しいものは多くここに集まってくる。

注

一　烏鐸迦漢荼城　烏鐸迦漢荼 。'uo-d'âk。-。ka-χân°-。d'a. 後世のインダス河とカーブル河の合流点の東北、Attock より十六マイル上流の Ohind, Hund, Uṇḍ のこと。従来 Udakhand [St. Martin: in Julien, *Mém.*, II 311], Uta-khand or Utkhand [Cunningham: A. G. I., 62], Udakhaṇḍa [N. L. Dey: *Geographical Dictionary of Ancient and Medieval India.* 208] などと再構成されていた。この都名は十二世紀の Kalhaṇa: *Rājataraṅgiṇī* [ed. by Stein, II, pp. 336 ff.] に Udabhāṇḍapura として挙げられている。これを考え合わせると玄奘の表記は *Udakahāṇḍa < Udakabhāṇḍa（水瓶の意）のような梵語化した雅語を記したものと思われる［拙稿：「暁匣両声母の対音」『東洋学報』四〇（一九五八）、四六ページ参照］。当地におけるインダス河渡河点の状況は、巻三の二「鉢露羅国」の条に見える。古くはアレクサンドロス大王の大軍が三十日の大休止をし、その後インダス河を渡河したのもここであり、迦畢試王の副都がおかれたのも、また後にトルコ及びアラビアの圧迫を受けて迦畢試より遷都したのもここである［Smith: *Early History of India*, p.63; D. C. Sircar: *Studies in the Geography of Ancient and Medieval India*, pp. 231-5, §19, Udabhāṇḍa］。

四・一九　波你尼仙　烏鐸迦漢荼城から西北へ行くこと二十余里で娑羅覩邏（ラートゥラ）村（注一）に至る。ここは『声明論』（注二）を作った波你尼（パーニニ）仙（注三）が生まれた所である。太古の昔は文字は非常に多かったが、長い時間が経つ間（原文　劫壊を経る）に世界は空しく荒廃した。長寿を保っている諸天人は霊を降して世俗の人を導かれた。これより以後は字源が泛れ濫れたのである。こういうわけで文書が生じたのであり、梵王・天帝は法則を作り時節の必要に随った。異道の諸仙人たちはそれぞれ文字を作製し、人々はそれぞれその文字を祖述し、伝来する文字を競って学習したが、学習者は勤めてもその功は虚しく、なかなか詳しく究めることは困難であった。人寿百歳（注四）の時に波你尼仙が世に出た。生まれながらにして知はあらゆる物におよび、世の浅薄なことに心を痛めた。文字の誤ったものを削り繁雑な点を整理しようと思い、諸方に遊んで方法を問うていたところ自在天に出会った。そこで編纂の意志を申し述べたところ、自在天は「りっぱなことである。私もお前を手助けしよう」と言った。仙人は教えを受けて退出した。そこで精しく調べ深く考え多くの言葉を採集して字書（注五）を作りあげた。全部で千頌あり、一頌ごとに三十二言

である。(注六) 古今を極め文字・語彙をすべて包括したものである。これを封緘して献上したところ、王は非常に珍重し、国中に命令を下してあまねく伝習させ、暗誦活用できるものがあれば千金の銭を賞とした。それで師弟伝授して当時に盛んに行なわれた。こういうわけでこの村の婆羅門たちは学深く才高く、知はあらゆる物におよび物覚えがよいのである。

注

一 娑羅覩邏村　娑羅覩邏 。sâ-。la-°tuo-lâ°: *salaturā < Skt. śalātura [Pāṇini's *Gram.*, IV. 3. 94]。カニンガムは今の Ohind の近隣の Lahor, Lavor (< *śalātura*) に比定した [*A.G.I.*, p. 66]。

二 『声明論』『慈恩伝』巻三に「正しくは応に『毗耶羯剌諵（原注 音女咸反→ṇam°）』vyākaraṇam と云うべし。此に翻し名づけて『声明記論』となす。其の広く諸法の能詮を記すを以ての故に『声明記論』と名づく」とある。

三 波你尼　波你尼 。puâ-°ṅi-。ṇi: Skt. *pāṇini*.『慈恩伝』には你字を膩 ṇi° に作る。かれの作った文典 *Aṣṭādhyāyī*（八章より成る書）は古典梵語文法書の集大成であり、また世界最古の完全な文典といわれる。大約紀元前四世紀の人であるが、かれの伝記については余り判明しない [V.S. Agrawala: *India as known to Pāṇini*. §I. Pāṇini: his Life and Work 参照]。

四 人寿百歳　人寿八万四千歳（八万四千という数はインドで大数をいう場合の常数）が百年毎に一歳を減ずるというように勘定して人寿が百歳になったときというのである。

五 字書　言語文字に関する書、すなわち注三にあげた書のこと。

六 全部で千頌あり、一頌ごとに三十二言である　頌とは Skt. *śloka* のことであり、インド詩学における韻律法の一で、一句八音節 syllable のものが四句即ち三十二音節で構成される。『慈恩伝』巻三に、「昔、成劫の初め梵王先ず説いて百万頌を具う。後住劫の初めに至って帝釈また略して十万頌となす。其の後北印度健馱羅国婆羅門［娑羅］覩羅邑の波膩尼仙また略して八千頌となす。即ち今印度に現に行なわるもの是れなり。近く又南印度の婆羅門、南印度の王のために復略して二千五百頌となす。辺鄙の諸国に多く盛んに流行す。印度の博学の人の遵い習わざる所なり。此は並びに西域の音字の本なり。其の支分相助くるものに復『記論略経』有りて一千頌あり」とある。なお、この内容の詳細は上引『慈恩伝』の以下の文と義浄の『寄帰伝』第四西方学法の条を参照。

四・三〇 一羅漢が波你尼仙の後進を教化せる話

娑羅覩邏村の中に窣堵波がある。羅漢が波你尼仙の後進を教化した所である。如来が世を去られて五百年に垂んとする時のこと、ある大阿羅漢が迦湿弥羅国から遊化してここへやってきたところ、梵志（婆羅門）が子供を鞭うち教育しているのに出会った。その時阿羅漢は梵志に、

「どうしてこの子を苦しめているのか」

とたずねた。梵志は、

「『声明論』を学ばせようとするのですが、学業が一向に進まないのです」

と答えた。阿羅漢は和やかに笑をうかべた。梵志が言うには、

「一体、沙門の方は慈悲を心とされ万物を愍れむものですのに、あなたが今笑われたのはどういうことなのですか、お聞かせいただきたい」

と。阿羅漢は、

「ことは簡単ではなく、疑問をまねく心配がある。あなたはかつて波你尼仙が『声明論』を作られて世に教訓を垂れられた話を耳にしたことはないか」

と。婆羅門は、

「この村の子弟は後輩として徳を仰ぎ、その像は安置されて今もあります」

と答えた。阿羅漢は、

「今あなたのこの子供はとりもなおさずあの仙人なのです。今も物覚えよく世間の書物を学習しているが、ただ異論を口にするばかりで真理を究めてはおりません。神妙なる智恵は空しく棄てられ転々として落ちつかないが、なお前世の余善によりあなたの愛子となったのである。そうとすれば世間の書籍の文辞はただ徒らに苦労をするばかりのことである。如来のお教えの福徳智恵ともに深奥で豊富なことには及びもつかないであろう。先ごろ、南海の浜に一本の枯れた樹があり、五百匹の蝙蝠が樹の中に穴を作り住んでいた。ある商人たちがこの樹の下に留まったが、折しも風の寒い時で人々はみな凍えそうになった。薪木を積んで樹の下で燃やしていたところ、炎は次第に烈しくなり枯れた樹はとうとう燃えてしまった。その時、商人たちの中にいたある人が、夜半以後、阿毗達磨（経・律・論三蔵のうちの論蔵のこと）の経文を誦えていたが、その蝙蝠たちは火に困らされてはいたものの、法の声音を好み辛抱して立ち去らず、そこで命を落としてしまった。［蝙蝠たちは］もてる罪福に随って生を受け、みな人身となることができ、家を捨て学問をしたが、法を誦える声音を耳にしたお蔭で頭も聡く智恵もまわり、そろって悟りを得て世に福をもたらす聖者となった。近ごろ、迦膩色迦王が脇尊者（四・六の注三参照）と共に五百人の賢聖を迦湿弥羅に招集して『毘婆沙論』を作ったが、(注一)これらの賢聖はみな枯れ樹の中にいた五百匹の蝙蝠［の後身］であったのです。私は不肖ではあるがその一人でした。この人たちには優劣の差があり、世に現われるか現われないかも違いはある［が、みなりっぱな聖者なのだ］。あなたは今可愛い子供に出家となるのを許すべきでしょう。出家する功徳は言葉では述べ尽くすことはできません」

と告げた。その時、阿羅漢はこの語を言い終わるや神通を示して忽ちに見えなくなった。婆羅門は深く尊敬の念を生じ、しばらくの間歓喜にひたっていたが、詳しく隣近所に一部始終を物語り、阿羅漢の言葉どおりに子供を手放し出家し修行させた。自分もそれを機とし信仰に進み［仏法僧の］三宝を尊重し、村の人々もそれに従い帰依し今に至るまでますます信仰を厚くしている。

烏鐸迦漢荼城より北して山を越え川を渉り行くこと六百余里で烏仗那国（原注　唐に苑と言う。昔輪王の苑囿なり。旧に烏場と言い、或いは烏荼と曰うは皆訛なり。北印度の境）に至る。

注

一　迦膩色迦王が脇尊者と共に五百人の賢聖を招集し……　この事跡がいわゆるカニシカ王の第四結集といわれるものである。ことの詳細は巻三の六「迦湿弥羅国」の条に見える。また「五百蝙蝠」の説話が単なる当地の伝説であるのか、或いはまた何か基づく所のあるものかについては、従来の諸研究書ともに説明なく、今判明しない。後考を俟つ。

大唐西域記　巻第二

大唐西域記 巻第三 八国

三蔵法師玄奘奉 詔訳
大捴持寺沙門辯機撰

烏仗那国　鉢露羅国　呾叉始羅国　僧訶補羅国
烏剌尸国　迦湿弥羅国　半笯(奴故反)蹉国　曷羅
闍補羅国

一 烏仗那国

一・一 概観　烏仗那(注一)国は周囲五千余里ある。山や谷がひき続き川や沢が野に連なっている。穀物は播いてはいるが地味は豊かではない。(注二)葡萄が多く甘蔗は少ない。土地は金・鉄を産出し鬱金香に適している。樹木はよく茂り、花・果は豊富である。寒暑は適切で風雨は気節によく合っている。人の性質は臆病で人柄は嘘偽りが多い。学問は好きであるが余りつとめず、禁咒を学んでいる。白氈を着るものが多く、少しくその他のものを衣ている。言語(注三)は異なっているが、おおむね印度と同じである。文字・礼義は互いに非常に関係がある。

仏法を尊重し大乗を信仰する。蘇婆伐窣堵河(注四)を挾んでもと一千四百の伽藍があったが、多くは已に荒廃している。昔は僧徒が一万八千人いたが、今は次第に減少した。みな大乗を学び禅定を事としている。善く経文を誦えはするが、余り深くは意義を究めてはいない。持戒・修行は清潔で特に禁咒をよくする。(注五)律の儀範の伝来する教訓に五部ある。第一に法密部、第二に化地部、第三に飲光部、第四に説一切有部、第五に大衆部である。(注六)天祠は十余ヵ所あり異道が雑居している。堅固な城が四、五ヵ所あるが、この国の王は多くの場合は瞢掲釐城(注七)で治めている。瞢掲釐城は周囲十六、七里で、住民は繁栄している。

注

一　烏仗那国　烏仗那 。·uo-d͡ʼi̯ang°-。nâ: Skt. *uḍḍiyāna, oḍiyāna, oḍḍiyāna, udyāna* [M. Williams: *S.-E. Dict.*, 175a, 191a; Edgerton: *BHSD.*, 120a, 159a], Pa. *uyyāna* [*PTSD.*, 155a]、庭園の意。なお前巻末の国名における原注に「昔輪王の苑囿なり」とあるものは、『慈恩伝』には「阿輸迦王の苑囿なり」としている。漢籍には『法顕伝』・『魏書』に烏萇、『宋雲行紀』に烏萇・烏場、『慈恩伝』巻五、『西域求法高僧伝』に烏長那、『新唐書』康国伝に烏萇、吐火羅伝に越底延、『開元釈教録』に鄔荼、『梵語雑名』に烏儞也曩などに作る。今のスワート河の流域地方。ガンダーラ地方とは一条の山脈で距てられ、Malakand, Karakar の二つの峠で通じているのみであり、隣国との隷属関係も余りなく閉鎖的であった。この地方については、A. Stein: *On Alexander's Track to the Indus*; D. Faccena: *A Guide to the Excavation in Swat (Pakistan) 1956–1962* に詳しく、イタリアの G. Tucci の主宰する調査隊が引き続き詳報を刊行している。

二　地味は豊かではない　『魏書』巻一二〇には「土には林果多く、水を引き、田に灌ぎ稲麦多し」とし、また『宋雲行紀』にも「土地は肥美に、人物は豊饒、五穀尽く登り、百果繁熟す」とあり、玄奘の記事と相違がある。

三　言語　『法顕伝』には「烏萇国……尽く中天竺語を作す。中天竺とは所謂中国なり。俗人の衣服飲食も亦中国と同じ」とあり、『慧超伝』には「烏長国……衣著飲食人風は健駄羅国と相似るも、言音は同じからず」とする。なおこのスワート河近辺の Swāt Kohistan は近隣の Gilgit, Kashmir, Chitral, Kafristan と共に Dardistan と呼ばれ、その方言は Dardic 語派の名で言語上分類されている。これは古来孤立的な状況な

から常に西隣のイラン語と交渉をもってきた本質的にはインド・アーリヤ語に属する言語である [G. A. Grierson: *The Linguistic Survey of India.* Vol. I, Part I. Introductory. pp. 108 ff., Vol. VIII, Part II. Dardic.; do: *Tōrwāli, an Account of a Dardic Language of the Swat Kohistan, based on Materials collected by Sir Aurel Stein*]。

四　蘇婆伐窣堵河　蘇婆伐窣堵 *ₒsuo-bʼuâ-bʼi̯wɐt-suatₒ-°tuo*: **subhavastu* ＜Skt. *śubhavastu.*『慈恩伝』には蘇婆薩堵 Skt. *suvāstu* (*Ṛg-Veda, Mahābhārata* に見える）に作る。今の河名スワートは suvastu のイラン語形であるという [Stein: *On Alexander's Track,* p.48]。『法顕伝』には宿呵多に、『慧超伝』には西業者多に作る。何れも Skt. *suvastu,* or Pkt. *suvattu* に当たり浄水の意であるという［白鳥：「罽賓国考」『西域史研究』上四三三ページ］。ギリシア文献には Soastos [Arrian: *Indica,* iv 11], Souastos [*Ptolemy,* vii. c. 1, 42] と書かれている。ヒンドゥークシュ東部南面の Kalam 地方に発し Panjkora 河を併せ Charsada の南でカーブル河と合する今のスワート河である。

五　烏仗那国の仏教　四世紀東晋の『法顕伝』烏萇国の条には「仏法甚だ盛んにして……凡て五百の僧伽藍あり、皆小乗の学なり」とある。八世紀の『慧超伝』には「専ら大乗の法を行なう」とある。なお烏仗那の僧が禁呪即ち陀羅尼 Dhārani をよくすると述べているのは注目すべきことで、玄奘の遊歴した国で陀羅尼を誦すと記してあるのは当国だけである［堀：『解説』二〇七ページ］。

六　律の儀範の……大衆部である　仏滅後直ちに教団を統一する必要上、仏陀の教法をまとめる会議、いわゆる第一結集が行なわれたが、この長老たちの保守派に慊らない進歩派が仏滅百年の阿育王の時、対立分裂した。これを根本分裂といい、保守派を上座部、進歩派を大衆部と呼ぶ。さらに約百年の後、この両派は細部の分裂を起こしいわゆる小乗二十部となった。これを枝末分裂という。いま本書に挙げる五部のみを系統別に掲げると下段の如くになる。なお、詳しくは本書巻末の補注参照。またこの五部の伝承は宮本正尊：『大乗と小乗』四九二ページ参照。

義浄の『寄帰伝』序に「西国の相承は大綱は唯四のみ……分かって五部となすは西国には聞かず」とあるのは、後続の文に「摩竭陀は則ち四部通習す」とある如く、かれの滞在したナーランダーにおける状況を言ったもので、さらに後続の箇所に「北方は皆全く有部にして、時に大衆に逢う」とするのは、ナーランダーにおける見聞に過ぎないものと解すべきであろう。

- Theravāda 上座部
  - Mahīśāsaka 化地部
    - Sarvāstivādin 説一切有部
      - Kāśyapīya 飲光部
    - Dharmaguptaka 法密部（法蔵部）
- Mahāsaṃghika 大衆部

七　瞢揭釐城　瞢揭釐 *ₒmɑng-gʼi̯ɐt-ₒlji* は従来今の Mangalaor (Mangawar, in Stein's Map) とされていた [Cunningham: *A. G. I.,* p. 94-5; 堀：『解説』二〇八ページ；Stein: *On Alexander's Track,* p.50] が、最近のイタリア調査隊によれば Mangalaor の西南西約五マイルにある Mingora (Mingaora, in Stein's Map) に比定すべきもののようである。この町は現在も当地方で最も栄えているが、その南郊に都市遺跡があり、仏教寺院址である Butkara を発掘した。当地は古くより西蔵人にとっての聖地であったが、また出土品から見てここもガンダーラ美術圏の重要な一中心地であることが判明した [D.Faccena: *A Guide,* pp. 24 ff.; 水野：「ヒンドゥ・クシュ南北の仏教遺跡」『文明の十字路』一二九ページ以下；高田：『仏像の起源』六九—七〇ページ]。

一・二　瞢揭釐城と忍辱仙人　瞢揭釐城の東四、五里に窣堵波がある。極めて霊験が多い。これは仏が昔、忍辱仙人となってここで羯利王（原注　唐に闘諍という。旧に哥利というは訛なり）(注一)に肢体を切断されたところである。(注二)

注

一　羯利王（……）　羯利 *kiɐtₒ-ljiº*: Skt. Pa. Pkt. *kali* [Turner: *C.D.,*

no. 29331]. 意味は玄奘のいう如く闘諍である。旧訳の哥利は、他の旧訳の歌利・迦利などと共に何れも玄奘当時は ₒkâ-ljiₒ であったろうから、玄奘の正訛の指示は恐らく流子音 l の前の母音は l の前行同化で狭いものになることを意味したものであろう。

二　忍辱仙人が肢体を切断された　忍辱仙人はその名を羼提波梨 Skt. kṣāntivādin といい、弟子と共に山林で忍辱を修行していたところ、婆羅棕国の羯梨王が大臣・夫人・宮女と共に野遊びにやってきた。王の休憩中、宮女は仙人のもとにきて教えを聞いていた。王は宮女の所在を探し仙人の所に至り、諸の大事を尋ねたが仙人は返答せず、王は大いに怒った。仙人が忍辱行を修していることを聞き、怒りの余り次々に両手・両脚・耳・鼻などを切断したが、傷は忽ち癒えた。王は大いに驚いて改心して謝罪した。仙人は王に、「汝、女色を以て刀もて我が形を截る。吾が忍は地の如し。我後に成仏せば、先ず恵刀を以て汝が三毒を断たん」と告げた、という。以上は『賢愚経』巻二による忍辱仙人本生譚であるが、*Jātaka*, III. No. 313; *Jātakamālā*, No. 28,『中本起経』上、『僧伽羅剎所集経』上、『出曜経』二三などにも見える。

一・三　阿波邏羅竜の調伏

瞢揭釐城より東北へ行くこと二百五、六十里で大きな山に入り、阿波邏羅竜泉(注一)に至る。これが蘇婆伐窣堵河の源(注二)である。別に西南に流れる河があり、春も夏も凍結している。朝夕雪を飛ばしており、雪は五彩に飛び散り、光は四方を照らして流れている。この竜は迦葉波仏の時(注三)、人間界に生まれていて名を殑祇(注四)といった。甚だ呪術をよくし、悪竜を制御して豪雨が降らないようにしたので、国民はこのお蔭により余分の食糧を蓄えることができた。住民たちはこぞって恩に感じ徳を懐かしみ、家ごとに一斗の穀物を税として出しあって贈り物とした。幾歳月を経ると滞納するものも出てきた。殑祇は怒りをいだき、毒竜となって暴風雨をおこし農作物を損傷することを願いとした。命が果てた後にこの池の竜となり、泉は白い水を流し地味を損傷した。釈迦如来は大慈悲をもって世に臨まれ、この国民だけがこういう災難に遭うことを愍れみ、ここへ降神して暴竜を教化しようと思われた。執金剛神(注五)は杵で山の崖を撃ったところ、竜王は恐れ戦き出てきて仏に帰依した。仏の説法を聞いて心は清浄に疑いもなく悟りを得た。如来はそこで竜を制して農作物を損傷することのないようにとされた。竜は、

「私が食糧を得ますのは人々の田の収穫物に頼っております。今ありがたいお教えをいただきましたが、［そのようにしますと］生きて行けないのではないかと心配いたします。どうか十二年に一度だけ糧食を収納させてください」

といった。如来は意を呑み込まれ、哀れに思われてお許しになった。それで今十二年に一度は白水の災に遭うのである(注六)。

注

一　阿波邏羅竜泉　阿波邏羅 ₒ'â-ₒpuâ-lâ°-ₒla: Skt. Pa. *apalāla*. 訳して無稲芉・無苗という［赤沼:『辞典』五一ページ; Edgerton: *BHSD*, 45b］。阿波邏羅竜の伝説は、『菩薩本行経』、『有部毗奈耶薬事』四にも同類の話が見えるが場所は摩掲陀国のこととし、『仏所行讃』四、『大智度論』九には北天竺月氏国のこととする［高田:『国訳伝』五三ページ（一一五）］。

二　蘇婆伐窣堵河の源　現在はこのスワート河の河源は遙か上流の Swāt Kohistan の Kalam 地方であることが判っている。そこでは Utrōt と Ushu の二渓が合会してスワート河源となっている［Stein: *On Alexander's Track*, p. 96, pl. 61（河源の写真）］。この文は『慈恩伝』には「阿波邏羅竜泉に至る。即ち蘇婆河の上源なり。西南に流る。其の地寒冷にして春夏も恒に凍り、暮るれば即ち雪飛び、仍って五色を含み、霏霏として繽乱すること雑華の如し」とし、文意一層明白である。

三　迦葉波仏の時　巻一の三二・二注二および巻二の四・二注四参照。

四　殑祇　g'ieng°-ₒg'jię: Skt. *gaṅgi* (*gāṅgi*?). この人名についてはシュ



アパラーラ竜王調伏の伝説，サンガオ出土

リアン以後の諸書に説明なし。未詳。

五 執金剛神 Skt. Pa. *vajra-pāṇi.* 金剛を手にするものの意味で、金剛力士・密迹金剛などともいう。常に釈尊の左右に衛護し、非法のものがあればその金剛杵で破砕するという。Ingholt: *Gandharan Art in Pakistan,* pl. 163 (B) にこの情景を描写したパネルがある。

六 悪竜教化伝説の場所と白水の災について 悪竜教化の伝説は『水経注』所引の『釈氏西域記』、『法顕伝』『慧超伝』などにも見えるが、前二書ではこの場所を次条の濯衣石と同所にし、『慧超伝』では濯衣石の西に位置させている。これより見て教化伝説の場所は古い時代ほど下流で行なわれ、時代が降るほど上流に舞台を移すと見る説がある [L. Petech: *Northern India according to the Shui-Ching-Chu,* p. 61]。また、白水の災は十一世紀の書に「スワート地方の五十三の水流が集まる渓谷では、七月の二十六、七の両日には大自在天が川で清めるために川の水が白くなると人々は信じている」[*Alberuni's India,* II, p. 182], と毎年定期に濁水することを述べている。

一・四 仏足石と濯衣石 阿波邏羅竜泉から西南へ三十余里、白水北岸の大きな岩の上に如来の足が履まれた跡がある。見る人のもっている福徳の力に応じて足跡の大きさは短くも見え長くも見える。これは如来がこの竜を降伏されてから、跡を残して去られたものである。(注一) 後に人々はその石の上に石を積み上げて部屋を作った。遠近の人はみな出かけて花や香を供養している。流れに順って下ること三十余里で如来の濯衣石に至る。袈裟の文様ははっきりと彫りつけたようである。(注二)

注

一 仏足石 スワートの仏足石は前世紀の終わりに H. Deane により発見され拓本がもたらされ、一九二六年にはA・スタインが自ら探訪した。場所はスワート河上流の西岸 Tirāt 村である。石は高さ1×幅0.87×厚さ1.3メートルあり、その上に足指を下にした足跡が彫られている。足跡の下部には十一のカロシュティー文字で「釈迦牟尼仏の足跡」の意味が刻してある [Stein: *On Alexander's Track,* p.86, pl. 47; S. Konow: *Kharoṣṭhī Inscriptions,* p.8, pl. I. 5; 水野:「ヒンドゥ・クシュ南北の仏教遺跡」『文明の十字路』一三一ページ (ただしこの写真は上下反対になっている)]。この仏足石は『法顕伝』に「仏、足跡を此に遺す。跡或いは長く或いは短く人の心念に在り。今に至るも猶お爾り」とあり、『宋雲行紀』には「王城の北八十里に如来履石の跡あり、塔を起てて之を籠う。履石の処は水泥を践めるが若く、之を量るに定まらず、或いは長く或いは短し。今は寺を立つ、七十余僧ばかり」とある。

二 濯衣石 この石の由来については、『宋雲行紀』に「水の東に仏の晒衣

処あり。初め如来烏場国に在りて行化するに、竜王瞋怒して大風雨を興し、仏の僧迦梨の表裏ともに通湿す。雨止み、仏石下の東面に在りて坐し袈裟を晒す。年歳既に久しけれど彪炳として新しきが若し。直に条縫の明見するのみならず細縷に至るも亦彰らかなり。乍ち行いて之を観れば未だ徹せざるが如くなるも、仮令刮削するも其の文転た明らかなり。仏の坐処及び晒衣処は並びに塔記あり」とあり、また『法顕伝』にも「曬衣石・悪竜を度せる処に及ぶも亦悉く現在す。石の高さ丈四、長さ二丈ばかり、一辺は平らかなり」と見えている。この石もスタインによって発見された。スワート河の下流よりTirāt へ向かう道筋の右岸にあった。幅10×高さ4×厚さ6メートル、その南側の平滑な面は梵字やアラビア文字の刻文に覆われていたが、梵字はほとんど読み得なくなっていた。その中にカロシュティー文字らしいものも混っている。アラビア文字はイスラムに関するもので中世初期にまで遡れるようである。アラビ仏の衣紋らしきものは残っていなかった。この石は今日に至るも地方民の尊敬を受けている [Stein : *ibid.*, pp. 86-7, pl. 48 (濯衣石の写真) ; Konow : *ibid.*, p.9]。

一・五　醯羅山

昔掲釐城から南へ四百余里で醯羅山（注一）に至る。谷の水は西へ流れ、流れに逆らって東に上る。さまざまな花や珍しい果が澗の縁の崖を被い、峯の巌は危なっかしく谿谷はうねりくねっている。或いは諠しい話し声を聞くようでもあり、或いは音楽の響きを聞くようでもある。（注二）四角い石の榻のようなものがあり、まるで人が造ったようである。幾つも連なって崖縁に接している。（注三）如来が昔、半頌(原注　旧に偈というは梵文の略なり。或いは偈陀というは梵音の訛なり。今は正音に従って宜しく伽他というべし。伽他とは唐に頌という。頌は三十二言なり（注四））の法を聞くためにここで身命を捨てられたのである。（注五）

注

一　醯羅山　醯羅 。xiei-。lâ の用字は巻二の三・五「醯羅 *hiḍḍa* or *heḍḍa* < Skt. *haḍḍa* ("bone") 城」の場合と同じである。この山は Mingaora の南方約十五マイルにある現在 Ilām というイラン語化した名をもつ九千二百五十フィートの高山に比定されている [Stein : *ibid.*, pp. 168 ff.]。醯羅山或いは Ilām の名称の由来・意義を諸書ともに詳かにしていない故、醯羅城即ち法顕の仏頂骨と同義なりや否やは今断言の限りではない。唯一つ推測の限りでは、『宋雲行紀』に「王城を去りて東南し山行すること八日、如来苦行して身を投じ餓虎を飼う処あり。高山巃嵸ち危岫雲に入る。嘉木霊芝其の上に叢生す。林泉は婉麗にして花綵は目に曜く。……山に収骨寺あり、三百余僧あり」とあるものは、本生譚の本書のものに異なることを除き、情景など本書の醯羅山に当たらないことはない。もし然りとすれば、この収骨寺に因む山名と醯羅山とを関係づけることもできようか。後考を俟つ。

二　登山の径路も実情のとおりであり、その後に続く情景が山頂の様子を描写したものであることも、スタインの前掲書の文や写真 pl. 95 から判断される。

三　四角い石の榻のようなものが……接している　スタインの実地踏査によれば山頂より二百フィートほど下った所に、正しく玄奘の描写しているような大きな平板な岩が一列に並んでいる [*ibid.*, p.171, pl. 97]。

四　半頌（……）　正音の伽他 。g'ia-。tâ は Skt. *gāthā* に当たる。頌と訳す（巻二の四・一九注六参照）。偈は梵語の第一音節に当たり、偈陀 *g'iat-d'â→g'iät。-。d'â* はすでに梵語に当たらないものとなったものである。

五　聞半頌本生譚は北本『大般涅槃経』に見える。その大要は、雪山に住む婆羅門が仏の教えを聞きたく願っていたので、帝釈が羅刹となって偈の前半「諸行無常、是生滅法」の二句を唱えたところ、婆羅門は歓喜し後半も聞くために吾が身を羅刹に与えることを約束した。「生滅滅已、寂滅為楽」の後半を聞くや、樹上にのぼり身を投じ与えんとした。すると諸天が来てその身を受けとめ傷つかないようにした。先の羅刹はもとの帝釈となり礼拝した、という。

一・六 薩縛達多王本生譚 瞢揭釐城より南すること二百余里、大きな山の側の所で、摩訶伐那(原注 唐に大林という)伽藍[注一]に至る。如来が昔に菩薩行を修せられ、薩縛達多王(原注 唐に一切施という)[注二]と号しておられたとき、敵[と戦い争うこと]を避けて国を棄て身を潜めてここまで来られた。貧しい婆羅門がちょうど物乞いにやって来るのに出遭われたが、王位も失くし施すものとてもなきまま、縛らせて禽にし敵の王の所に行って褒美を戴くよう願い、それをそっくり施物とされたところである。[注三]

注

一 摩訶伐那(……)伽藍 摩訶伐那 ₒ*muâ-ₒxâ-b'ịwɒtₒ-ₒnâ*: Skt. *mahā-vana*. 大きな林の意。「醯羅山がイラム山だとすると、半分の距離しかない摩訶伐那伽藍は、その途中のククレ Kukrai にあるシナーシ Shinãsi ストゥパにあててもよさそうだ。これはわりによく残っているストゥパである」[水野:「ヒンドゥ・クシュ南北の仏教遺跡」『文明の十字路』一三〇ページ]。

二 薩縛達多王(……) 京大本原文は薩縛達之王とし、『考異』に石山本が薩縛達達とする旨を記す。思うに、一切施にあたる梵語は sarvadatta であり、Skt. *datta* を表わす漢字を含む語彙を本書の中に求めると、巻六の一に蘇達多(唐に善施という): Skt. *sudatta*, 同巻同所に提婆達多(唐に天授という): Skt. *devadatta* がある。即ち本書では Skt. *datta* は達多で表わされるものと言えようから、本文では薩縛達多と改訂して標した。ただし、ここに引く用例の二語彙は標準梵語が行なわれる中インドのものであり、一方当面の語彙は西北インド方言のものであるため、分離して考えるべきものかどうかという点は更に考究を要しよう[G. V. Tagare: *Historical Grammar of Apabhraṁśa*, §18; Grierson: *Tōrwā-li*, p.16, p.21 note 1]。しかし、当面の薩縛達之、薩縛達達の表記は誤写であるという点は間違いないようで、薩縛達多をとるか、薩縛達(羅什訳『智度論』には薩婆達という)と語末表記をしないものをとるかの点が問題として残るわけである。

三 薩縛達多王本生譚 己れを縛らせて敵国に行ったところ、敵王は仔細を尋ね真相を知り、自らの非を悟り薩縛達多王の国を復し、後は親交したというこの話は『大智度論』一二、『六度集経』二に見える。なお、この本生譚の場所は、摩訶伐那伽藍即ちシナーシ・ストゥーパより少し上方のミアーナ Miãna の廃墟に考えられている[水野:『文明の十字路』所収文一三〇ページ]。

一・七 摩愉伽藍 摩訶伐那伽藍より西北へ山を下ること三、四十里で摩愉(原注 唐に豆という)伽藍[注一]に至る。窣堵波の高さ百余尺のものがある。その側の大きな四角い石の上に如来の足が蹈まれた跡がある。仏が昔、この石を蹈み拘胝[注二]の光明を放たれ摩訶伐那伽藍を照らして、人々のために本生譚を説かれたところである。その窣堵波の基壇の下に石の色が黄白を帯びているものがあり、常に濡れたように滑である。如来が昔菩薩行を修していられるとき、正法を聞くためにここで骨を砕いて経典を書かれたところである。[注三]

注

一 摩愉(……)伽藍 摩愉 ₒ*muâ-ₒi̯u*. 愉は通常『広韻』に「羊朱切」ₒ*i̯u* とあるため、ₒ*muâ-ₒi̯u*: Skt. *mayū* [*kha*] の対応を考え伽藍を照らした「光明」の義とし、玄奘の注「豆」を排する説[Watters: *On Y. Ch.*, I, p.233; 堀:『解説』二一五ページ]がある。しかし、本書における愉字の音声の指示はすでに巻一の二六において「愉(朔倶反→ₒ*şi̯u*)漫国」とされている。この指示をここへ適用するならば摩愉 ₒ*muâ-ₒşi̯u* と読むこととなる。一方、豆の義に当たる語は、Skt. Pkt. *masūra*, Shiṇa, Gilgit Dialects. *mazur*, Kohistan *mōzar* [Turner: *C. D.*, no. 9924]

で、ジュリアンはこの Skt. *masūra* に当てている。ビールもジュリアンの語釈をそのまま引用している。イラン語の系統の豆に当たる語は Pers. *māš*, この地方のイラン語方言でも多くは *maš* 或いはこれに近い形である [G. Morgenstierne : *Indo-Iranian Frontier Language*, I, p. 275 ; do : II. Index, p.7 ; do : III. Vocabulary, p.126; W. Lentz : *Pamir-Dialekte*, I. s. 182 ; H. Sköld : *Materialen zu den iranischen Pamirsprachen*, s. 268]。玄奘の用字は或いはこのイラン語形に当たるものではなかろうか。この場所は『宋雲行紀』には摩休国としている。この摩休 **muâ-xiŏg* → *。muâ-。xiəu* も恐らく摩愉と同語義を意図したものであろう。寺名を豆と称した所以を詳かにしないのは遺憾である。さて、この場所の比定は「方位よりすればゴグ・ダラ Gōg-dara の塔がふさわしい」[水野 :『文明の十字路』所収文 一三一ページ]。なお Stein : *On Alexander's Track*, p.62 参照。

二　拘胝　Skt. *koṭi* で億の義。巻九の二・三参照。

三　析骨書写経典の本生譚　仏陀が前世において自らの骨を折って写経をしたという本生譚は、『賢愚経』一、『智度論』一六・四九、『菩薩本行経』下などに見える。今『賢愚経』によりその大要を記せば、過去に波羅棕国の仙人師の爵多羅というものが常に正法を得ようと思い諸方に修学したが得られなかった。たまたま一婆羅門が我に正法ありとて「汝今若しよく皮を剝ぎて紙となし、骨を析きて筆となし、血用て墨に和し吾が法を写さば、乃ち汝がために説かん」と言った。仙人は婆羅門の命ずるがままにしてその説く偈を写し、それより一切の人民がその偈を誦読修行するようになったというものである。この本生譚は『宋雲行紀』に「王城の南一百余里、如来昔摩休国に在りて皮を剝ぎて紙となし、骨を析きて筆となせし処あり。阿育王塔を起てて之を籠む。挙げて高さ十丈なり。析骨の処は髄流れて石に着く。其の脂色を観るに肥膩なること新しきが若し」とある。

一・八　尸毗王本生譚　摩愉伽藍より西へ六、七十里で窣堵波に至る。無憂王の建てたものである。如来が昔菩薩行を修せられ、尸毗迦王（原注　唐に與という。旧に尸毗王というは略なり）(注一)と号しておられた時、仏果を求めるためにここで我が身を割き、鷹に従って鴿に代わられた所である。(注二)



シビカ王本生図，ガンダーラ浮彫

注

一　尸毘迦王（……）　尸毘迦 ˳śi-˳b'ji-˳ka : Skt. *śibika, śivika.* 通常尸毘 Skt. *śibi, śivi,* Pa. *sivi* と書かれ、尸毘迦と書いた例は他に見ない。『慧琳音義』第二六に「尸毘王　古音に亦湿椑と名づくという」とある。ワッターズ氏は玄奘の尸毘を略とし、與を義とする校訂注解には必ずしも従うべきではないとしている [*On Y. Ch.,* I. 234]。なお次項の一・九注一参照。

二　尸毘王本生譚　最も有名な本生譚の一つであり、『菩薩本行経』下、『菩薩本生鬘論』一、『大宝積経』八〇、『師子素駄娑王断肉経』、『護国尊者所問大乗経』二など、また *Jātaka,* No. 499, *Jātakamālā,* No.2 などに見える。今『賢愚経』一によるに「提婆抜提城の尸毘王が菩薩行を修めていた。その実を知らんとして帝釈は鷹となり、毘首羯摩は鴿となって来たり試みた。尸毘王は鴿の代わりにその全身を鷹に与えた」という。この本生譚と本生地往訪の記事は法顕・宋雲・慧超のそれぞれの行紀にも見える。現在の何処に比定するかは未詳。また、この本生譚に材をとった仏教美術も多い [髙田 : 『仏像の起源』 二一四—五、四三二—三ページ ; 小野 : 『仏教美術講話』 一七五ページ以下]。

一・九　薩裒殺地寺本生譚　代鴿［本生譚の地］より、西北へ二百余里、珊尼羅闍川（サニラージャ）(注一)［の河谷］に入り薩裒殺地（サルバオーシャディ）（原注　唐に蛇薬という）僧伽藍(注二)に至る。窣堵波の高さ八十余尺のものがある。如来が昔帝釈であられたころ、折しも飢饉で疫病が流行する［状況］に出くわされた。医療も効なく道に死者がひき続いた。帝釈はこれを憐れみ救済する術（すべ）もがなと思い、そこでその姿を変え大きな蟒（うわばみ）となり、その屍（しかばね）を谷に横たえ空中からみなの人にその旨を告げた。声を耳にしたものは感喜し引き連れ走って行き、割（さ）いて食べるにつれ元気になり飢えも癒（い）え病も瘵（い）えたところがここである(注三)。

その側、遠からざる所に蘇摩（スーマ）大窣堵波がある。如来が昔帝釈であったころ、世に疫病がはやっていたので衆生を憐れみ、その身を蘇摩蛇(注四)に変えられたところ、およそこれを口にするもので元気にならないものはなかった。

珊尼羅闍川の北の石崖のあたりに窣堵波がある。病人がやって来て願えば多く治癒を蒙（こうむ）る。如来が昔孔雀（くじゃく）の王であったころ、その仲間とここへ来られた。みなは喉（のど）が喝（かわ）いてたまらなくなり、水を求めたが得られなかった。孔雀の王は嘴（くちばし）で崕（がけ）を啄（ついば）むと涌泉（ゆうせん）が流れ出てきた。今もそのまま池になっており飲めば病気が治る。石の上には今もなお孔雀の足跡がある(注五)。

注

一　珊尼羅闍川　珊尼羅闍 ˳sân-˳nji-˳lâ-˳źia : Skt. *sani-rāja. sani* は贈り物・返礼、*rāja* は王の意。ビール氏によれば、前項の尸毘迦王の原注に見える「唐に與という」の訳語はこの条の *sani* に対するものたるべし、とのことである [*Records,* I. 125 (21)]。この川は Chakdara でスワート河から入る Adinzai 峡谷にあたり、そこには今もって Suma という名で人に知られている大きな塔があるとのことである [H. Deane : *Notes on Udyāna and Gandhāra* (*JRAS,* 1896) ; Watters : *On Y. Ch.,* I. 235]。

二　薩裒殺地（……）僧伽藍　薩裒殺地 sât˳-˳b'əu-sat˳-˳d'i° : Skt. *sarpa-auṣadhi* (ōṣadhi). *sarpa* は蛇、*auṣadhi* (ōṣadhi) は薬草の義で、原注の蛇薬にあたる。

三　如来前世において蟒となり身を与えた本生譚　『賢愚経』七、『菩薩本行経』下などに同類の本生譚があるが、蟒とせず大魚とする。この大魚の本生譚は『宋雲行紀』烏場国の条に、辛頭大河西岸上の話として出ている。

四　蘇摩蛇　蘇摩 ˳suo-˳muâ. この蛇名の解釈については異論がある。一は Skt. *sūma*（水の意）に対し水蛇という普通名詞とみる [Julien : *Mém.,* I. 137] もの、二は Skt. *soma*（意味は記さず）である [Watters : *On Y. Ch.,* I. 235 ; 堀 : 『解説』 二一九ページ] とするもの、三は Skt.

sima に対するものではあるが、これを固有名詞と見る、即ち「仏陀に改宗された蛇と非常に関係が深い Sumana 天」だとする説[Beal: *Records*, I. 126 (22)] である。このうち第二説は恐らく『大宝積経』菩薩蔵会に見える話、即ち仏が昔菩薩として帝釈であったとき、倶盧大城で蘇摩という大魚を得て、人々にこれを食べさせ疫病を治したというものを指すのであろう。第三説も説明不足でよく判らないが、或いは *Jātaka* [I. p.34] の竜王 Atula 本生譚の Sumana 仏授記の物語を指すものであろうか。ともあれ、蘇摩は音声的には Soma よりも Suma を採るべく、物語の筋としては第二のワッターズ説がもっとも穏当のようである。

五 孔雀本生譚 本書の話そのままのものは未検出であるが、*Jātaka*, No. 159, 491 の孔雀 Mora 本生、『旧雑譬喩経』上、『六度集経』第三などに孔雀に関する本生譚が見える。その大要は、昔菩薩が孔雀であったときその国の王妃が病床に孔雀の肉を薬にするとよいという夢を見た。王は賞を懸けて孔雀を獲ようとしたので、一猟師が孔雀王を捕えて王に差し出した。孔雀は王に呪術で水を薬にしようと言い、王がこれを許したところ孔雀が呪術を施した水で王妃は全快した。国民もこれを得ようと王に願ったので、孔雀は王の許しを得て大湖に身を投じ、その水に呪術をかけ薬水とし、国人の病気はすべて治癒した、という。

一・10 上軍王塔 瞢掲釐城より西南へ行くこと六、七十里、大河の東に窣堵波の高さ六十余尺のものがある。上軍王が建てたものである。(注一) 昔如来がまさに入滅されようとする時、人々に「私が涅槃に入った後に、烏仗那(ウッディヤーナ)国の上軍王にも宜しく舎利の分け前を与えるべし」と告げられた。[仏の入滅後] 諸王将が同量に分けようとするところに及んで上軍王が後れてやって来たので、辺鄙(び)の王を軽んずる論が出た。この時、天人たちは如来の御遺言を重ねてはっきり言ったので事なく同量の分け前に与(あずか)り、本国に持ち帰り丁重にこの塔を建て祠(まつ)った。(注二)

窣堵波の側、大河の河原に大きな石の象の格構をしたものがある。昔上軍王が大きな白象に舎利を負わせてここまで帰って来たところ、象は躓(つまず)き倒れて死に、そのまま石になった。(注三) そこでその側に窣堵波を建てた。

注

一 六十余尺の上軍王塔 この塔は Mingaora より約二十キロ南下したスワート河東岸の Shankardar の小高い丘の麓の路傍に現存する。胴部直径約四十二フィート、高さ約九十フィートの石積みである [Stein: *On Alexander's Track*, pp. 49-50, pl. 21 (写真)；水野：『文明の十字路』所収文一二九ページ]。

二 舎利分配の伝説については、本巻一・一五および巻六の四の各条参照。

三 白象が化したという象の格構をした大きな石は、先の上軍王塔より半マイル足らず上流の Ghalagai 村近辺にある。近寄って見ると象の頭部と鼻によく似た形だという。この岩にはクシャン貨幣に見る仏像そっくりの彫刻がある [Stein: *ibid.*, pp. 50-1, pl. 22 (写真)；水野：同上書]。

一・二 慈力本生譚 瞢掲釐城より西へ五十余里、大河を渡り盧醯(ローヒ)呾迦(タカ)(原注 唐に赤という) 窣堵波(注一)に至る。高さ五十余尺、無憂(アショーカ)王が建てたものである。昔如来が菩薩行を修めておられた時、大国王となり慈力と号された。ここで我が身を刺し血を出して五人の薬叉(ヤクシャ)(原注 旧に夜叉(やしゃ)という。訛なり(注二)) に飲まされたのである。(注三)

注

一 盧醯呾迦（……）窣堵波 盧醯呾迦 *luo-xiei-tât-ka*: Skt. *rohitaka*. 意味は原注の如く「赤」で地名 [M. Williams: *S.-E. Dict.*, 890 c; Edgerton: *BHSD*, 458 a]。この塔のある村は今 Hazara と呼ばれており、その塔は今なお存しているという [H. Deane: *Notes on Udyāna and Gandhāra*, *JRAS.*, 1896, p.660; Watters: *On Y. Ch.*, I. 237]。

「高さ五十余尺」を『慈恩伝』は「十余尺」に作る。

二　薬叉（……）　薬叉 *iak.-.tṣʻa*: Skt. *yakṣa*. 旧訳の夜叉の夜は *dịăg→ dịăg→ịa の変化をしたと思われ、従って夜叉と表記した六朝期は恐らく ịăg-tṣʻa のような音であり唐代の薬叉 *iak.-.tṣʻa* と近かったろう。ここに注意を要することは、Skt. *kṣa* の発音は [kṣa] ではなく Dardic 語系のような西北方言では [ca] の如く [Turner: *C.D.*, no. 10395] し、玄奘のように中インドで標準梵語を習ったものも [kça or ᵏça] のように発音したことである [W.S. Allen: *Phonetics in Ancient India*, pp. 78-9]。もし発音が [yakṣa] であったならば、玄奘は当然「薬沙・薬娑」と表記したことであろう。

三　慈力王本生譚　この話は *Jātakamālā*, No. 8,『賢愚経』二、『菩薩本生鬘論』三に見える。大要は、昔慈力 Maitribala という一大国王があった。慈悲深く国土は泰平であったが、この領内に五夜叉あり、常に人血を食としていた。ところが人民はみな十善の行をして浄身であったためこれを食することができず国王に哀訴した。王は我が身に剣を刺し五ヵ所の傷を作り、五夜叉にその血を受けて飲ませたという。

一・一三　遏部多石塔　瞢掲釐城より東北へ三十余里で遏部多（アドブタ）（原注　唐に奇特という）石窣堵波[注一]に至る。高さ四十余尺ある。昔如来が人間や天人に仏法を説き教導しておられたが、如来が去られた後地より飛び出したものである[注二]。人々は尊敬し、香や花は絶えることがない。

注

一　遏部多（……）石窣堵波　遏部多 *ʼat.-°bʻuo-.tâ*: Skt. *adbhuta*. 意は「希有（けう）な、奇特な」。高さ「四十余尺」は『慈恩伝』に「三十余尺」に作る。この塔は「H. Deane は今なお存在するというが、疑わしい」ということである [Watters: *On Y. Ch.*, I. 238]。

二　石塔踊出に関する伝記の出所、或いはその類型については未検出。

一・一三　観自在寺　石窣堵波より西して大河を渡り三、四十里で[注一]一つの精舎（しょうじゃ）に至る。中に阿縛盧枳低湿伐羅（アヴァローキテーシヴァラ）菩薩像（原注　唐に観自在という。字（複合語）を綴り合わせ連声して発音すれば梵語は上の如くなる。文（単語）を分けて一つずつ発音すれば、即ち阿縛盧枳多（アヴァローキタ）―訳して観という―、伊湿伐羅（イーシヴァラ）―訳して自在という―である。旧に訳して光世音となし、或いは観世音、或いは観世自在というはみな訛なり[注二]）。その威霊はひそかに被（おお）っているが、神妙な事跡は世に明らかであり、道俗ともに出かけて行き供養は廃（すた）れることがない。

注

一　三、四十里『慈恩伝』は「三、四里」とする。

二　阿縛盧枳低湿伐羅菩薩像（……）　阿縛盧枳低湿伐羅 *.ʼâ-bʻuâ°-.luo-.kjię-.tiei-.ʼi-śịəp.-bʻịwɒt.-.lâ*: Skt. *avalokiteśvara*. これを分解すれば阿縛盧枳多（-.*ta*）: Skt. *avalokita*, 伊（.*ʼi*）湿伐羅: Skt. *iśvara*. この訳語の詳細については本田義英:「観音古名考」「観音訳語考」『仏典の内相と外相』所収、および同:『法華経論』二八二ページ以下参照。

一・一四　烏仗那国の王統と釈迦種族　観自在菩薩像より西北へ百五十里、藍勃盧山[注一]に至る。山の頂上に竜池がある。周囲三十余里。澄んだ波は広々と、清い流れは明鏡のようである。その昔、毗盧択迦（ヴィルーダカ）王[注二]は軍を前（すす）め諸釈迦族を伐った。四人の抵抗したものは一族もろとも放逐せられ、それぞれ分かれて分散した。そのうちの一釈種のものは国都を出てから、山川を歩きまわり疲れ切って途中で休んだ。ちょうどその時、一羽の鴈（かり）がその前に飛んできたが、よく馴れているので直ぐさ

まこれに乗った。その鴈は空を飛んで行きこの池の側に下りた。釈種の人は空を翔け遠く外国に出たため、道も分からず木陰に仮り寝した。池に住む竜の娘が水辺に散策していたところ、ふと釈種の人を見付けたが、［竜では］不釣合ではないかと恐れ人間の姿に変わって釈種を揺り起こした。釈種は驚いて目が覚め、挨拶して、

「私は旅の疲れ切ったものですのに、どうして親切にしてくださるのか」

と言い、そのまま懇になり無理に野合を遂げた。娘が言うには、

「父母の教訓を受け謹んで違えることのないようにしております。今お情けを受けましたが、まだ両親の承諾を承けておりません」

と。釈種は、

「こんなに山や谷の奥深いのに、お前の家は何所にあるのか」

と。娘は、

「私はこの池の竜の娘です。あなた方御一族が流浪し難を逃れていられることを耳にしておりましたが、折よく散歩しておりましたためお疲れをお慰めすることができました。回り合わせで睦まじくはなりましたものの、まだ父母のお言いつけは承っておりません。まして積もれる禍でこのように竜の身を受けております。人間と畜生は自ら途が違い、こんな話は聞いたことがございません」

と。釈種は、

「その一言で真心が見えた。かねての心（宿心＝宿怨？）はもはや解けた」

と。竜女は、

「謹んでお言葉を承りました。さあ参りましょう」

と言った。釈種はそこで心に誓って言うには、

「およそ我が持てる福徳の力もてこの竜女を全身人間としよう」

と。福力の感ずる所、竜はそのまま人間に形を改めた。娘は人間の体となることができたので、心から深く喜んで釈種に礼をいって言うには、

「私は悪運が積もり悪い境遇に流転しておりましたが、幸いにも御厚情を蒙りあなたの福力のお蔭で、長い間のこのいやな体が一朝にして人身に変わることができました。この御恩に報いたいと思いますが、身を粉にするほど務めてもなお感謝の意を現わせません。お側近くお仕えしたく思いますが、そんなことをすれば世の論議を引き起こしましょう。父母に話をしてから、その後でちゃんと礼を整えたく存じます」

と。竜女は池にたち戻り父母に話して言うには、

「先ごろ、散歩をしておりましたところ、ふと釈種の人に出逢い、その方の福力の感応で私は人間の姿となりました。心情が合っての事です。敢えて事実を申し上げます」

と。竜王はその心に人間界のものとなることを欣び、気持ちに神聖釈種一族を尊重していたので娘の願いのままに従った。そこで池から出て釈種に礼をのべ、

「異類のものだからとて見棄てず、尊位から降りて卑きについていただきました。どうか私の家においでください。御接待申し上げたい」

と言った。釈種は竜王の招請を受け入れてその住居に往った。そこで竜宮の中では歓迎して礼を整え、婚姻の宴会をし歓楽を極めた。釈種の人は竜の姿を目にしていると、心は始終恐怖嫌悪の情を覚えるので辞去しようと思った。竜王は止めて言うには、

「どうか遠くに住まわれることなく、この住宅の近くに住まれるよう。必ずこの彊城にたて籠り王の大号を称し、臣民を統括し王朝が何時までも続くようにしましょう」

と。釈種は礼を申し、
「このようなお言葉は思ってもいませんでした」
と言った。竜王は宝剣を篋（くしげ）の中におき、りっぱな白氎（もめん）でその上を覆い、釈種に言うには、
「どうかこの氎を持参されて国王に献ぜられよ。王は必ずや遠来の人の貢ぎ物を親しく自分で受け取られるであろう。その時こそその王を殺害すべきです。そしてその国に拠るのも素晴らしいではありませんか」
と。釈種は竜の指図を受けて直ぐさま出かけて往き烏仗那（ウッディヤーナ）王に献上した。王が親（みずか）らその氎を取り上げると釈種はその袂（たもと）を執（と）えて刺した。側にいた家臣や衛兵は上を下への大騒ぎであった。釈種は剣でさし招き、
「私が杖（つえ）つく剣は神竜に授けられたものである。これで後れて降伏するものは誅罰（ちゅうばつ）し、臣従しないものは斬り棄てるであろう」
と言った。みなのものは神のような武勇に畏懼（いく）し王の大位に推した。ここにおいて制に沿い政治を立て、賢良を表彰し不幸なものを恤（あわれ）んだ。かくして人々を動かし鹵簿（ろぼ）を整え竜宮に趣き報告し、竜女を迎えて都に帰還した。竜女は宿世よりの業がなお尽きず、残りの業報（むくい）がなおあり、常に睦まじくするころになると首の所に九つの竜の首が出てきた。釈種は恐（こわ）くもあり嫌（いや）でもあったがどうしたらよいか分からず、竜女が寝ているのをうかがい鋭利な刃物で切ってしまった。竜女が驚いて目を覚まし、
「これは後嗣ぎのために良くはありません。私の命に少しく差し障りがあるだけではなく、あなたの子孫はきっと頭痛に苦しむに違いありません」
と言った。それでこの国の人々は常にこの頭痛を病んでいるのである。引き続くというのではないにしても、時に起こることがある。釈種が死没し、その子が位を嗣いだ。これが嗢呾羅犀那（ウッタラセーナー）王（原注　唐に上軍という）（注三）である。

注

一　藍勃盧山　藍勃盧 ˳lâm-b'uət˳-˳luo. この対応原語は Lamboura [Julien], Lanpolu [Beal, Watters], Rabora [堀] などかと推測するが不明。場所は Darora に近い Panjkora 河に流入する Aushiri 渓谷の頂上であるとし、そこには大きな湖水があるという [H. Deane, in Watters, *On Y. Ch.*, I. 238]。

二　毗盧択迦王　コーサラ国の王 Virūḍhaka のこと。ヒマラヤ山麓のシャカ族を攻め滅ぼしたことは史実であるが、そのシャカ族が烏仗那国に遁入したことは伝説に過ぎないようである。巻六の一・三参照。

三　嗢呾羅犀那王（……）　嗢呾羅犀那 *·uət˳-tât˳-˳lâ-˳siei-˳nâ* : Skt. *uttarasenā. uttara* は無上・上の意、*senā* は部・軍の意。伝説上の人物の故か、他書には未検出。

一・一五　上軍王の母および仏舎利分配伝説

上軍王が位を嗣いだ後にその母の眼が見えなくなった。如来が阿波邏羅（アパラーラ）竜を降伏（注一）して還られる際に空からその［上軍王の］御殿に下りられたが、上軍王はたまたま猟に出かけていた。如来はそれでその母のために仏法の要点を略説された。聖人に遇い仏法を聞いたのでまた眼が見えるようになった。如来が尋ねて、
「汝の子供は私の一族である。今何処（どこ）におるのか」
と言われると、母の言うには、
「今朝猟に出かけましたが、もう帰って参りましょう」
と。如来は人々と共に直ぐに出発されようとした。母は、

「私はひとえに幸せなめぐり合わせで神聖な種族の子を養育いたし、如来は慈悲深くさらに親しくお出でくださいました。私の子はもう帰って参りましょう。どうかしばらくお待ちください」

　と申し上げると、世尊は、

「そのものは私の族(はらから)である。教えを聞いたら本当の悟りを得るであろう。親しく教誨(かい)しなくとも発心しよう。私は出かけよう。息子が帰還したならば『如来はここから拘尸(クシ)(注二)城の娑(さ)羅樹の中に往き涅槃に入るから、舎利を取ってきて自ら供養をなせ』と伝えよ」

　と言われた。如来は人々と虚空を淩(しの)いで去られた。上軍王は折しも猟をしていて遠く御殿を見ると、光明があかあかと照り輝いていて、火災ではないかと思った。猟を中止して返ってみると母がまた眼が見えるようになっているのを見て、喜んで尋ねて、

「私が出かけてどれ程の時間がたち、こんなめでたいことがあり、母上の眼をまた元どおりにされたのですか」

　と言うと、母は、

「お前が出ていった後で如来がここにお出でになった。仏の説法を聞くと眼が元どおりになった。如来はここから拘尸城の娑羅樹の中にお出でになり涅槃に入られるとのことです。お前が早く行って舎利を分配してもらうようにとのことでした」

　と答えた。王はその話を聞きおわるや、泣き号(さけ)び崩れ倒れたが暫(しばら)くして気を取り戻し、車を命じて馳(は)せ参じ双樹の所へ行った。仏はすでに涅槃に入られた後であった。その時、諸国の王たちは上軍王が辺鄙の地の王であることを軽んじ、舎利を宝として重く見て分け与えようとはしなかった。この時天人たちは仏のみ心を重ねて宣(の)べたので、諸王は承知して元のように等分に分け与えたのである。(注三)

注

一　阿波邏羅竜を降伏　本巻の一・三参照。

二　拘尸城　拘尸那揭羅(クシナガラ)城のこと。巻六の四参照。

三　烏仗那王が仏舎利分配に与(あず)った伝説　舎利分配の伝説は巻六の四の条に詳しい。烏仗那王もこれに与ったという話（本巻一・一〇参照）は諸書見えない。単にこの地方で作られた伝説であろう。

一・一六　達麗羅の険路　瞢揭釐城から東北して山を踰(こ)え谷を越え信(イン)度(ダス)河を遡(さかのぼ)る。通路は危険で山や谷は薄暗い。或いは大綱を履(ふ)み或いは鉄鎖を手繰(たぐ)る。桟道(かけはし)は空にかかり、宙にかけた橋は高々としている。杙(くい)を攀(よ)じ登り、階段を踏(ふ)み登る。このようにして行くこと千里、達麗(ダ)羅(ラ)川(注一)に至る。これが烏仗那国の旧都(注二)である。黄金(注三)と鬱金香(注四)を多く産出する。達麗羅川の中の大伽藍の側に木に刻んだ慈氏菩薩の像(注五)がある。金色かがやき霊験ひそかに通ずるものがある。高さ百余尺。末田底(マディヤーンティ)迦(カ)（原注　旧に末田地という。訛略なり）阿羅漢(注六)が造ったものである。羅漢は神通力をもって彫師を引き連れ覩史多天(トシタ)(注七)（原注　旧に兜率陀といい、また兜術他という。訛なり）に昇り、親しく仏の妙相を観察すること三返の後にこの仕事が完成した。この像ができて以後仏法の流れが東方にも分かれたのである。(注八)

　これより東行して嶺を踰え谷を越えて信度河を遡る。宙にかかった橋や桟道など危い場所を履み険阻な地点を渉(わた)り、五百里を経て鉢露羅国（原注　北印度の境）に至る。

注

一　達麗羅川　達麗羅 *d'ât.-liei°.-lâ*: *dareḍa < Skt. *darada*. 非アーリヤ語的起源の語と思われ、M. Mayrhofer によればドラヴィダ語に基づくと考えられている語彙である［Turner: *C. D.*, no. 6191］。数ある語義

の中に「山」の意あり、この地名の義に当たるものであろうとされる[McCrindle: *Ptolemy*, p.107]。現在のこの地方名 Dardistan, Darel の由来もこの古名 Darada に起源している。古来著名な地名で古くより東西の書に現われている。『法顕伝』には「嶺を度り已りて北天竺に到り、始めてその境に入る。一小国あり、陀歴と名づく。亦衆僧あり、皆小乗の学なり……嶺に順い西南行すること十五日、其の道は艱岨、崖岸は嶮絶なり。其の山は唯石のみにして壁立すること千仭なり。之に臨めば目も眩み、進まんと欲すれば則ち足を投ずるに所なし。下に水あり、新頭河と名づく。昔人の石を鑿ち路を通じ傍梯を施すものあり。凡そ度ること七百、梯を度り已り懸絙を躡み河を過ぐ。河の両岸相去ること減八十歩なり。九訳も絶する所、漢の張騫・甘英も皆到らず」とある。『正法念処経』には陀羅陀、『孔雀王経』には達利陀、『阿毗達磨大毗婆沙論』には達剌陀、『方広大荘厳経』には達羅陀とあり、また『漢書』西域伝には「其の（烏秅国）西は則ち懸度あり……懸度は石山なり。谿谷は不通にして縄索相索きて渡る」とある。西籍には Dadikai [*Herodotus*, 3. 97], Derdai [*Strabo*, XV. 1.44], Dardae [*Pliny*, VI, 21], Dardanoi [*Dionys. Periêg.* V. 1138] と記されている。インドでは Darad [*Pāṇini*, IV. 3. 93], Darada [*Mahābhārata*, *Rājataraṅgiṇī* (also Darad, Dārada)] などである。

二　烏仗那国の旧都　旧都 Daratpuri は今日の Gurez（地図上の Goorais）に比定されている [Stein: *A Chronicle of the Kings of Kashmir*, Vol. II. 435]。

三　黄金　当地の産金は古来有名で、「犬よりは小さいが狐よりは大きいほどの蟻が棲息して」「この蟻は砂を掻き上げては地下に巣を作り」「この蟻の掘り上げた砂が金を含んでいるのである。インド人はこの砂を目当てに無人地帯にでかける」[松平千秋訳『ヘロドトス』三・一〇二（一五九ページ）]とギリシア史書に見える。

四　欝金香　巻一の三八 注四参照。『阿育王伝』四、『有部毗奈耶雑事』四には末田地が悪竜を教化し、住民の生活を助けるために香山より欝金香を移植したとしている。

五　木に刻んだ慈氏菩薩の像　慈氏菩薩とは弥勒 Maitreya のことである。この菩薩像については法顕・宝雲・法盛[『名僧伝抄』所見]等が記しているが、金薄といい、牛頭栴檀といい外容定まらず、その大きさもまちまちである。

六　末田底迦（……）阿羅漢　末田底迦 *muât*。-。*d'ien*-°*tiei*-。*ka*: Skt. *madhyāntika*, Pa. *majjhantika*. 旧訳は末田地の地は **d'ieg → d'i*。付法蔵の第三祖、阿難の弟子と伝えられ阿育王と同時代の人である。カシミール・ガンダーラ地方に至り竜王を伏して仏法を宣布したから同国仏教の祖と仰がれるようになった［羽溪：『西域之仏教』六一―七八、四二五ページ以下］。慈氏菩薩像の作者をここには仏滅二百年ごろの末田地迦とするが『法顕伝』には仏滅三百年ごろの作とし作者の名を出さず、『名僧伝抄』の法盛の条所引の『外国伝』には仏滅四八〇年呵利難陀の作とする。

七　覩史多天（……）覩史多 °*tuo*-°*śi*-。*tâ*: Skt. *tuṣita*, Pa. *tusita*. 欲界に属する六天の下から第四番目の天であり、将来仏となる菩薩の住む場所、現在弥勒菩薩がここで説法しているという。釈尊もかつてここで修行したといわれる所である。兜率陀 。*tąu*-*ṣiuet*。-。*d'a*, 兜術他 。*tąu*-*dź'iuĕt*。-。*t'â* は唐代ではすでに音声的にそぐわなくなっている。

八　この像ができて以後仏法……ある　『法顕伝』に「衆僧、法顕に問う、『仏法の東過、其の始め知るべきや』と。顕云く、『彼の土人に訪問するに皆云く、〃古老の相伝う、弥勒菩薩の像立ちてより後、便ち天竺の沙門、経律を齎し、此の河を過ぎるものあり〃』」とある。

二　鉢露羅国

二・一　概観　鉢露羅国(注一)は周囲四千余里ある。大雪山の間にあって東西は長く南北は狭い。麦・豆が多く金銀(注二)を産出する。金を利用するお蔭で国家の財政は豊かである。気候は唯寒さ烈しく人の性質は粗暴である。仁義に薄く礼節については耳にしたこともない。容貌は醜く毛皮・毛織物を着ている。文字はおおむね印度と同じであるが、言語(注三)

は諸国と異なっている。伽藍は数百ヵ所、僧徒は数千人いる。学ぶところは専ら何［派］ということもなく、戒行は多く濫れている。

注

一 鉢露羅国 鉢露羅 *puât₀-luo°-₀lâ*: **balūra* or **balōra*. 今日のバルティスタンに当たる。西蔵文書には Sbal-ti (ti は「地方」の意の接尾辞、バルティ族の住む地方の意)・Bru-śa, Bru-śal, Bru-ża (ギルギット地方) として現われる [Thomas: *Tibetan Literary Texts and Documents*, I, 175 ff.]。鉢露羅は『宋雲行紀』・『魏書』西域伝の鉢盧勒、『唐書』西域伝の鉢露、Bultai [*Ptolemy*, vi. 13, 3], Bolor [*Ḥ.-'Ā.*, § 26. 19; Yule and Cordier: *Marco Polo*, I (1903), 172], Bulur [*Ḥ.-'Ā.*, § 26. 19] と同系の語である。また、『魏書』西域伝の波路、『唐書』西域伝の布露・勃律は Bru-śa の Bru に当たる [佐藤長:『古代チベット史研究』上二〇三ページ] といわれる。鉢露羅国は巻十二の一七・三に再出する。『慈恩伝』には巻五に帰途における伝聞国の如く記す。『西域記』の当面のこの記述も伝聞と解するものと、「これより東行し」とする前巻末尾の文字から親践と解するものとがある。恐らく伝聞であろう。

二 金 前項 (一・一六) 注三参照。

三 言語 当地の言語はチベット語であり、今日も甚だ古い形を保存していると言われている [Grierson: *Linguistic Survey of India*, Vol. I, Pt. I, p.55; A.F.C. Read: *Balti Grammar*]。

二・二 **鉢露羅国より呾叉始羅国まで** ここから復び烏鐸迦漢茶城(注一)に還り、南して信度河を渡る。河は広さ三、四里で西南へ流れている。清く澄み鏡のようで、急流はただよい流れている。毒竜・悪獣がその河の中に穴をつくり住んでいて、もし宝物や珍しい花・果の種子および仏舎利を所持して渡ろうとするものがあれば、その船は多くの場合沈没してしまう。(注二) 河を渡って呾叉始羅国(原注 北印度の境)に至る。

注

一 烏鐸迦漢茶城 巻二の四・一八にもどる。

二 もし宝物や……沈没してしまう 玄奘の帰路にインダス河を渡った時の災難を『慈恩伝』巻五に、「信度大河に至る。河は広さ五、六里。経像及び同侶の人並びに船に坐して進み、法師は象に乗って渉渡す。時に一人をして船に在って経及び印度の諸の異果の種を看守せしむ。将に中流に至らんとするに忽然として風波乱起し、船舫を揺動して数々将に覆没せんとす。経を守るもの惶懼して水に堕つ。衆人共に救いて出だすことを得たるも、遂に五十夾の経本及び花果の種等を失う。自余は僅かに保全することを得たり」と述べている。なお河幅を『西域記』は三、四里とし、『慈恩伝』は五、六里とするも渡河点はほぼ同一地点らしい。

三 呾叉始羅国

* 当地全般については、J. Marshall: *Taxila*, Vol. I-III. 1951; do: *A Guide to Taxila* が有用である。

三・一 **概観** 呾叉始羅国(注一)は周囲二千余里あり、国の大都城(注二)は周囲十余里である。豪族たちが力を競いあい、王族は後継者が絶えている。以前は迦畢試国に隷属していたが、(注三) 最近はまた迦湿弥羅国に臣従している。(注四) 地味は肥えており農業は盛んである。涌泉・河流が多く花・果が繁茂している。気候は温和で、風俗は身のこなし軽く勇敢で、篤く三宝を敬っている。伽藍は多いけれども荒廃はすでに甚だしい。僧徒は少なく、みな大乗を学んでいる。



タクシラ，シルカップの遺跡

注

一　呾叉始羅国　呾叉始羅 *tât。-。tṣ'a-°śi-。lâ*: Skt. *takṣaśilā*. Pa. Pkt. *takkasilā*. 梵語の *kṣa* に対して漢字 *-t*＋*tṣ'a* をあてていることについては本巻の一・二注二を参照。もし文字どおり [ta-kṣa-] を表記するならば、玄奘の用字は鍱沙・鍱娑と書かれたはずであり、また、もし、薬叉の用法に従って正梵音を表わすならば鍱叉始羅と書かれるべきであるのに、呾叉始羅と表わされた所以（ゆえん）は或いは土地の発音に忠実であったからであろうか。『賢愚経』一には特叉尸利、『蓱沙王五願経』には徳差伊羅、『阿育王伝』三には得叉始羅、『阿育王経』一〇には徳叉尸羅（盤石）、『法顕伝』には竺刹尸羅（截頭）、『仏本行集経』三八には特叉尸羅（削石）とする。この地名の由来については、往昔この地に君臨したタクシャ Takṣa 王の名に基づくとする説 [*Rāmāyaṇa*]、昔時この地は賢石城 Bhadraśilā と言い、仏の前身の月光王 Candraprabhā が一婆羅門のため自ら首を断ち施してより、その居城を Takṣaśilā 即ち截頭（takṣa は断、śilā ＜śiras は頭の義）と呼ぶようになったという説 [『法顕伝』] などがあるが、諸所に見える月光王本生譚にはこの地名についての説明はない。また、細石・磐石・削石などの訳語は梵語 *śilā* に石の意があるからで、『出曜経』一二に石室とするのは意訳によろう。ギリシア文献には Taxila [Arrian: *Anab.*, V. 8], Taxiala [*Ptolemy*, vii. 1. §45] とある。タクシラは古来インドと中央アジア・西アジアとを結ぶ商業・交通上の要地として諸方に聞こえていた。アレクサンドロス大王東征時には東方における最大の都市の一つとして著名であり、また北インドにおける最高の学術都市としても有名であった。その後マウリヤ王朝に属し、阿輸迦王が即位前に一時総督として当地に駐在したのは当地の重要性の故である。西紀前二世紀にはいわゆる Indo-Greeks, 引き続き塞 Saka, 安息 Parthia, 貴霜（クシャン） Kushan 等の治下に入ったが、この時期にガンダーラ美術の一中心地となっていた。五世紀に白フン (Hephtalites) の侵入破壊以後は史上に現われなくなった。当地は前世紀にカニンガムによって多少発掘も行なわれたが、一九一二年以降 J. Marshall が発掘を主宰し、三つの都城址と多数の仏跡とを合わせて八十ヵ所に近い遺址を明らかにし、貴重な出土品を収集した。

二　国の大都城　今の Rāwalpindi より北西二十一マイルにあるタクシラ Taxila（＜Takṣaśilā, 土名 Sarai-kala）である。時代的に前後して続く三つの都市遺跡が発掘されている。タクシラ駅の直ぐ東側山麓には Bhir Mound（ビール丘）があり、これは三都のうち最古のもので、発掘の結果四つの層位が確認された。最下の第四層は前五―六世紀のペルシア・アケメネス朝期、第三層は前四世紀アレクサンドロス東征期、第二層は前三世紀マウリヤ時代、最上にあたる第一層は前二世紀およびそれ以後のである。組織的な都市計画はなく、不規則な建物が並んでいた。ビール丘より東北約一キロのシルカップ Sirkap は、前二世紀の初めに Bactrian Greeks によりビール丘から移ってきて作られた都市で、それ以後シャカ・パルティア・クシャンの諸族に占拠され後一世紀の V'ima Kadphises まで続き、次の都市に移った。シルカップはギリシア風に直交する道路によって方形の街区に分かれるもので、王宮も発見されている。第三の都市はシルカップよりさらに北北東一・六キロにある Syrsukh である。シルスクは後一世紀の V'ima Kadphises 以後に作られたもので、やや不規則な1400×1100メートルの長方形の都城である。現在も住民が居住し農耕しているため、発掘は最も遅れている。玄奘が訪問した国都

はこのシルスクである。

三 以前は迦畢試国に隷属していた　恐らく五世紀中葉のエフタルの侵入以後のことであろう。なお巻四の一のエフタルについての説明参照。

四 最近はまた迦湿弥羅国に臣従している　玄奘訪印時におけるカシミールの王は恐らくKārkoṭa王朝（七世紀初—（六二七））の始祖 Durlabhavardhana であり、この王の時期にその勢力が近隣四周に伸びたようである。『慈恩伝』巻五の玄奘帰途に際しインダス河を渡り烏鐸迦漢荼城において迦畢試王の接待を受けているときに、このカシミール王も「亦遠きを忘れて躬ら来たって参拝し、日を累ねて方に帰」った。しかし、この王の名は『記』『伝』ともに出さない［Stein : *Karhaṇa's Rājataraṅgiṇī*, I. 87; Smith : *Early History of India*, 386］。

三・二　醫羅鉢呾羅竜王池　大城の西北七十余里に醫羅鉢呾羅竜王（注一）の池がある。周囲百余歩。その水は澄んで清く、いろいろな色の蓮の花がいっしょに珍しい色どりに咲いている。この竜は昔、迦葉波仏の時に醫羅鉢呾羅樹（注二）を損壊した苾芻（注三）（比丘）である（注四）。
それ故、今この土地では雨を請い晴を祈るには必ず沙門と共ども池の所に来るのである。弾指（注五）して慰問すればその願いに随って必ず願いが果たされる。

注

一 醫羅鉢呾羅竜王　醫羅鉢呾羅 ˳ˑi-˳la-puât˳-tât˳-˳la : Skt. *elāpattra*, Pa. *erāpatha*. 本書において醫字はこのほか巻六の四の醫那鉢呾羅に見えるのみであるが、この那は羅の誤字であるため、結局醫字はこの語彙のみ三例あるだけである。ところでこの醫字は他の古いテキストに翳・瑿など ˑiei˳ の音の字を当てているものがある。この方が梵語音に対して一層適当である。これより見れば或いは高麗本の醫字は翳・瑿などの字の誤字やも知れない。旧訳には伊羅鉢多羅など伊 *ˑiəd→˳ˑi を使用するものが多い。醫羅は臭気を伴う薬用樹、鉢呾羅は樹葉の義。香葉・蓰香葉と訳す。この池は故都の西北十マイル余の今 Bābā-Wali 或いは Panja-Sahib といい、Hasan Abdal の一丘陵の麓に寺院跡に囲まれて残っている。

二 醫羅鉢呾羅樹　古いテキストに樹は樹葉に作っている。

三 苾芻　b'iet˳-˳tṣ'įu : Skt. *bhikṣu*, Pa. *bhikkhu*. 旧訳は比丘。Skt. -*kṣ*- : Chin. -*t-tṣ'* の対応については本巻の一・二注三および三・一注一参照。

四 醫羅鉢呾羅竜王の説話　『福蓋正行所集経』一一によれば、過去の迦葉仏の時、この比丘は伊羅樹を摘切、午後に乞食吃食した二罪によって永く竜身を受け、その七頭の上に伊羅樹を生じ、常に膿血流れ、蛆虫が巣食い苦痛に堪えなかった。時に仏が嚩囉拏城においてこの竜を教化し、弥勒出世の時には竜身を免れるであろうと説いた。この竜王の首は嚩囉拏城にあり、竜尾は怛叉尸羅国にあったという。竜王伝説は殊に北インドに多く諸種の経典に諸種の話がある。バールフット Bharhut 塔西門の隅柱の浮彫も伊羅葉竜王の説話によるものであるが、これは『仏本行集経』三七によるものである。

五 弾指　『世説新語』など中国の書にも見える語。『慧琳音義』三六に「弾指 拳をなし、頭指を屈し大指をもって捻り弾き声をなさしむ」とある。もとインドの国俗で諸種の場合に行なうが、ここは歓喜・随喜して行なう動作。

三・三　四大宝蔵　竜池から東南に行くこと三十余里で二つの山の間に入る。窣堵波がある。無憂王が建てたものである。高さ百余尺（注一）。釈迦如来が、将来慈氏世尊（弥勒仏）が世に出られた時に自然に四大宝蔵（注二）が「地中より」出るであろうと豫言されたが、この名所こそがその一ヵ所なのである。先達たちの話によれば、ある時、地震があり山々はみな震動したが、この蔵を周る百歩のうちは動揺することがなかった。愚かな者たちが考えもなく発掘したところ、大地は震動して人々は皆躓き倒れてしまった、ということである。傍に伽藍があるが破損

は已に甚だしい。

注

一　窣堵波がある……高さ百余尺　この窣堵波は現在 Baoti Pind 上方にある嶺の壊れた塔であるとされている。

二　四大宝蔵　『増一阿含経』四九に、給孤独長者は弥勒仏の世に生まれて善宝のいう典蔵人となり、四つの大竜王が捧げる大宝蔵の宝を受け、これを転輪聖王に奉ずるであろうと述べている。その一は乾陀衛国の伊羅鉢竜の大宝蔵、二は蜜締羅国 Mithila の斑稠 Pāṇḍuka 大宝蔵、三は須頼吒国 Surāṭa の賓伽羅 Piṅgala 大宝蔵、四は婆羅捺国 Vārāṇasī の蠰佉 Saṅkha 大宝蔵という。

三・四　捨頭窣堵波と月光王本生譚

城の北十二、三里に窣堵波(注一)がある。無憂王が建てたものである。或いは斎日になると時に光明を放ち神花が降り天楽が聞こえることがあり、これを見たり聞いたりしたものがある。先達たちの話によれば、以前ある婦人が身に悪質の癩病にかかり、こっそりと窣堵波にやって来て躬らの行ないを責め礼拝懺悔していた。そのまわりの庭に糞・汚物があるのが目に入ったので、それを取り除き清掃し香を塗り花をまき、さらに青蓮華を採集し地面に敷きつめた。すると悪病は治癒し見目形も一層美しくなり、体からはよい香を出し青蓮華と同じように芳しかった、ということである。(注二) この名所は如来が昔菩薩行を修めておられ、大国王となり戦達羅鉢刺婆（原注　唐に月光という）(注三)と号しておられた時、悟りを求めようとして自らの頭を断ち切り施しをされたが、このように捨身をされて凡て千生を歴られた所である。(注四)

注

一　窣堵波　この捨頭窣堵波はタクシラ地区の最北部にある。タクシラ駅から約八マイルの地点にある Sarda 丘上の西端の Bhallar Stūpa に比定されているが、現存する塔は中世初期のものである [Marshall: *Guide*. p.178, pl. xxii (写真)]。

二　悪癩にかかった婦人が信仰をもって仏塔を掃除し、香華を供養した功徳により悪疾が全治したという伝説は『大毘婆沙論』一一四に見える。

三　戦達羅鉢刺婆（……）　戦達羅鉢刺婆 *tśiän°-d'ât。-。lâ-puât。-lât。-。b'uâ*: Skt. *candraprabha*, Pa. *candapabha*. また『賢愚経』六に「旃陀婆羅脾、晋に月光」という とある。

四　月光本生譚　『賢愚経』六によるに、昔、跋陀耆婆城に月光王あり、正法をもって統治し名声が聞こえた。辺地の一小国の毗摩斯那という王が心に嫉妬を懐き、婆羅門を遣わして王の頭を乞わせた。月光王は、自分は過去以来九百九十九頭を布施し、今この頭を布施すれば千となり満行するといって、自らの頭を寄捨した。その時の月光王は釈尊であったという。Takṣaśilā を法顕が截頭と訳す所以である。また『菩薩本縁経』中、『月光菩薩経』、『大方便仏報恩経』五、『六度集経』一、『大宝積経』八〇、*Divyāvadāna* などに出ているが、『月光菩薩経』と *Divyāvadāna* は事を北インドとする。この本生譚は仏教美術の素材としてもよくとられ、アジャンター窟院第一洞の壁画、山城金胎寺蔵の銭弘俶八万四千塔の一基にも見られる。

三・五　拘摩羅邏多論師

捨頭窣堵波の側に僧伽藍がある。(注一) 庭・建物は荒れはて僧徒も少ない。昔、経部(注二)に属する拘摩羅邏多（原注　唐に童受という）(注三)論師がここで諸種の論書を作製されたところである。(注四)

注

一　捨頭窣堵波の側に僧伽藍がある　捨頭窣堵波に比定されている今の Bhallar Stūpa がある庭には、塔をめぐって現在も多くの建物の遺址がある

[Marshall: *ibid.*, pp. 178-9]。

二 経部　また経量部 Sautrāntika と言い、小乗二十部の一で上座部に属す。説一切有部が論を重んずるのに対し、経を重んずる立場をとる。

三 拘摩羅邏多（……）論師　『慈恩伝』には「拘摩邏多（唐に童寿という）」とある。拘摩羅邏多 ˳*kįu*-˳*muâ*-˳*lâ*-*lâ*˚-˳*tâ*: Skt. *kumārarāta*, *kumāra-lāta*. 訳して童受。また童首・童寿・童豪とも訳す。漢字表記も究摩羅羅陀・鳩摩邏羅多・鳩摩邏多・矩摩邏多・究摩羅大など諸種ある。付法蔵の第十八祖（或いは第十九祖）といわれ、三世紀ごろの人。なおこの論師は巻十二の一八・三に再出。従来馬鳴作・羅什訳と伝えられていた『大荘厳経論』の梵文断片を Le Coq が入手したところ、この著者を Kumāralāta としていることから学界の論争をひき起こしている［山田龍城：『梵語仏典の諸文献』七一ページ］。

四 諸種の論書を作製された　著書すこぶる多く、或いは数十部あるともいい、或いは五百の論を作るとも伝えられるが、漢訳されたものは一書もない。

三・六　阿輸迦王の太子拘拏浪の伝説

城外の東南、南山の北に窣堵波の高さ百余尺のものがある。無憂王の太子拘拏浪(注一)が継母(注二)に讒言され目を抉られた処であり、無憂王が建てたものである(注三)。盲人が祈願するとまた眼が見えるようになることが多い。この太子は正室の皇后(注四)が生んだ人である。顔形麗わしく慈悲心のあついことが早くから知られていた。正后が亡くなってから継室は我儘に淫奔で、その愚かさをほしいままにし密かに太子に近づいた。太子は涙を流し責めを受け、退いて詫びたが、継母は己れの意に違うのを見て一層怒りを増し、王の手隙を待ってごく自然に、

「呾叉始羅国は国の要地です。血の繋がった子弟でなかったならば任せることはできないでしょう。今、太子の仁慈孝行は天下に聞こえていますが、賢人に親しまれますが故に世上の取り沙汰はこの点にあります」

と言った。王は惑いをもって話を聞いたので、すっかりこの悪だくみを喜ばれ、直ぐさま太子に命令を下し、注意をされ、

「私は御先祖の後を承け、引き続き仕事をしてきた。唯失敗をして先王を辱しめるのではないかと懸念している。呾叉始羅国は国家の要害の地である。私は今、汝にかの国を鎮守することを命ずる。国事は重大で人情はあやまりがちである。進退を妄りにして国家の大本を傷つけることのないようにせよ。およそ命令があれば、私の歯形の印を験べよ。印璽は私の口にあるのだから間違いを来たすことがあろうか」

と告げた。そこで太子は命を受けやって来て鎮守した。歳月は長くたったけれども継母はいよいよ怒った。詐って命令書を出し紫泥で封緘し、王が眠っているのをうかがい、そっと歯形の印をつけ、使者を急走させ問責書を授けた。お傍の家来が跪いて読んだが、なす術も知らなかった。太子が、

「何を悲しんでいるのか」

と尋ねると、

「大王が命令を下され、手紙に太子を責めておられます。太子の両眼を抉り取り山谷に放逐し、太子夫妻の生死は時に任せよとあります。このような命令ではありますが、なお信用はできません。どうか重ねておたずねし、縛して罪を待ちましょう」

と答えた。太子は、

「父上にして死を賜わるならば、辞退することができようか。歯形で封がしてあるからには、真実間違いはない」

と言い、旃荼羅(注五)に言いつけてその眼を抉り取らせた。眼が見えないのであるから物乞い(注七)をしながら生活をし、あちらこちら流浪して父の都城(注六)にまで行った。妻は太子に告げて、

「ここは王城です。ああ、飢えや寒さはまことに苦しいものです。昔は王子、今は乞食です。どうか大王のお耳に入れて、重ねて先般の責めを申し述べることができるように願いましょう」

と言った。そこで謀り事を用いて王の厩舎に入り、夜半に泣きながらそよ風に向かい、声を長く引き悲しく歌をうたい箜篌や鼓で伴奏をした。王は高楼に居られてそのきれいな歌を耳にされたが、その歌詞が非常に怨むがごとく物悲しかったので、不思議に思い、

「箜篌や歌声は我が子に似ている。今どうしてここへ来たのであろうか」

と問われた。直ぐさま厩舎に誰が歌を唱っていたのであるかと尋ねてやると、盲人を引き連れて来てお尋ねに対えた。王は太子を見るや悲しみをこめ問うて、

「誰がお前の体を傷つけてこのような災難に遭わせたのか。愛する我が子が失明しているのを覚らないでは、すべての人民たちをどうして明察することができようか。天なるかな、天なるかな。何と私の徳の衰えたことか」

と言った。太子は泣きながら謝罪し王に対えて、

「まことに不孝の故に責めを天に負い、某年某月某日に突然御命令を受けましたが、お断わりするに由なく責めを逃れることはいたしませんでした」

と申し上げた。王は継室の陰謀であることを心に悟ったが、究明する術もないまま直ちに処罰を加えた。当時、菩提樹伽藍(注八)に瞿沙（原注　唐に妙音という）(注九)大阿羅漢という人がおられ、四辯は無礙(注一〇)であり三明は具足(注一一)している方であった。王は盲目の子を連れて行き事の次第を話して、唯慈悲をもってまた眼が見えるようにしていただきたいと願った。その時かの羅漢は王の願いを聞き入れて、直ぐにその日、国中の人に、

「私は近く仏の妙理を説法しようと思う。人々は器一個を持ってここへ来て法を聴き涙を受けるように」

と宣布した。そこで遠近の人は走り集まり、男も女も雲のように集まってきた。この時阿羅漢は十二因縁(注一二)を説法した。およそその説法を聞くもので泣きむせばないものはなく、持っている器でその流れる涙を受けた。［羅漢は］説法が終わると人々の涙を全部集めて金盤に入れ、自ら誓って、

「私が説きましたことは諸仏の至極の理にして、その理がもし真実でなく、説法に誤りがありますならば、これは何とも致しかたありません。もしもそうでなければ、願わくば人々の涙であの盲目になった眼を洗い、眼がまた見えるようになり、その良く見えること昔のごとくならしめたまえ」

と言った。その言葉を口にし人々の涙をとって眼を洗うと、眼はそのままた見えるようになった。王はそこで太子のお傍の家来を責め下々の役人を詰問し、或いは免官し或いは追放し、或いは左遷し或いは死刑にした(注一三)。［事に関係した］諸豪族たちは雪山の東北の砂漠の中に移住した(注一四)。

これより東南していろいろな山や谷を越えて行くこと七百余里で僧訶補羅国（原注　北印度の境）に至る。

注

一　無憂王の太子拘拏浪　『記』の諸本みな拘浪拏 。*kiu-lâng°-。na* に作る。アショーカ王の太子は名を拘那羅［『阿育王伝』三］・鳩那羅［『阿育王経』四］: Skt. *kuṇāla* と言うが故に、今改めて拘拏浪 。*kiu-。na-lâng°* とした。しかしこの諸本の拘浪拏とする表記は恐らく誤記ではなく、本来このように書かれていたものと思われる。何故なら、玄奘はもし Skt. *ku-*

ŋāla を表記しようとするならば、かれの用字法では当然に拘拏羅 ˳*kịu*˳*na*-˳*lâ* 或いは拘痆羅 ˳*kịu-nat*˳-˳*lâ* などとして、最後の音節に鼻音語尾を伴う「浪 lâng°」字を用いることはなかったであろうからである。玄奘自身か或いは筆記者の音声記憶の倒置（metathesis）に起因するものと思われる例である。*n*〜*l* の間にはよく見るものである。さて、Skt. *kuṇāla* はもと鳥の名であり、太子の眼の澄めるさまがこの鳥のようであることから太子の別名となる。本名 Skt. *dharmavardhana* 法増、或いは Skt. *dharmavivardhana* 法益という。『法顕伝』にも見える。

二　継母　名を帝舎羅叉 Skt. *tiṣyarakṣitā* 光護という。

三　無憂王が建てたものである　このクナーラ太子塔は、現在のシルカップの南方から東北に延びる Hathiāl 丘陵の西端北斜面の上にあり、その傍にはクナーラ寺がある [Marshall: *Guide*, p.150-1] とする説があるが、原文の「城外の東南」の「城」は玄奘の場合はシルカップではなくシルスクである故、マーシャル説には異論も出る［例えば山本智教:『仏教研究』一九四〇年］。

四　正室の皇后　太子の実母の正后は鉢摩婆底 Skt. *padmavatī* 有芙蓉華（うふようげ）という。

五　旃茶羅　旃茶羅 ˳*tśi̯än*-˳*ḓ'a*-˳*lâ*: Skt. Pa. *caṇḍāla*, *cāṇḍāla*. また旃陀羅・旋陀羅・真陀羅とも書き、屠家・主殺人・魁膾・下賤種などと訳す。インドの種姓の一で戍陀羅（巻二の一・九参照）の下に位する最も下賤な階級。『マヌの法典』第十章十二に「ヴァイシャ、クシャトリヤ及びバラモンの女によりてシュードラより［それぞれ］アーヨガヴァ、クシャットリ及び、人の最下級のものたるチャーンダーラ生る」とあり、混種のものの一であることを知る。

六　父の都城　アショーカ王の都城はマガダ Magadha の「花の都」波吒釐子城 Pāṭaliputra（巻八の二・一参照）であった。

七　妻　クナーラの妻の名は千遮那摩羅 Skt. *kāñcanamālā*, 訳して金鬘（まん）という。

八　菩提樹伽藍　史実として時代を考えれば仏陀伽耶（ブッダガヤ）の菩提樹の東側にアショーカ王が建立した一小精舎のことを指すのであろう。仏陀伽耶大塔（巻八の六・四参照）・摩訶菩提僧伽藍（巻八の六・三〇参照）は何れも後世の建立であるが、玄奘の意識でははたしてどうであろうか。

九　瞿沙（……）　瞿沙 ˳*g'i̯u*-˳*ṣa*: Skt. *ghoṣa*. 音・声・響・妙音・語などと訳す。同名異人が数人いる。即ち『出三蔵記集』第一二所載薩婆多部記目録師宗相承五十三祖中の第十四瞿沙菩薩、第二十瞿沙羅漢、同仏大跋陀羅所伝相承五十四祖中の第十瞿沙菩薩、第十五巨沙、ターラナータ『印度仏教史』第十三章に見える有部の論師でカニシカ王時代の北インドの人である瞿沙など［望月『辞典』四七八〇］。玄奘の伝える話中の人が、史実上或いは伝説上誰を指すかは不明。

一〇　四辯は無礙　四無礙解・四無礙智ともいう。一に法無礙、教法に通じ滞ることのないこと。二に義無礙、教義に通じ滞ることのないこと。三に辞無礙、諸方の言語に通達自在なること。四に辯説無礙、正理の辯説に無滞自在なること。この四項を兼備するをいう。

一一　三明は具足　三明とは、一に宿命明、自他の宿世におけるあり方を知る能力。二に天眼明、自他の未来世のあり方を知る能力。三に漏尽明、現在の苦を通して一切の煩悩を断ずる能力。この三者を兼備するをいう。

一二　十二因縁　十二縁起とも。衆生が過現未の三世にわたり無常変遷する原因次第を説いたもの。一に無明、過去世以来の煩悩。二に行、過去世以来の煩悩から起こる善悪の行業。三に識、過去世の業により受けた現世の受胎の初一念。四に名色、母胎中で心身の発育する位。五に六処、眼・耳・鼻・舌・身・意の六根が具（そな）わり将（まさ）に母胎を出ようとする位。六に触、二、三歳のころに苦楽を識別することなく物に触れる位。七に受、六、七歳ごろから苦楽を識別し感受する位。八に愛、十四、五歳以後いろいろの愛欲を生ずる位。九に取、成人以後に欲望に執着する位。十に有、愛取の煩悩で種々の業を作り未来の果が定まる位。十一に生、現在の業により未来に生を受ける位。十二に老死、来世において老い死ぬ位。このうち、一・二は過去世の因、三―七は現世の果、八―十は現世の因、十一・十二は未来世の果であり、この三世にわたる因果関係を系列化したもの。

一三　クナーラ太子失明の伝説は、『雑阿含経』二三、『阿育王経』四、『阿育王伝』三、『阿育王息壊目因縁経』等に見える。また、この伝説とギリシア神話における Hippolytus と Phaedra の伝説 [*Oxford Classical Dict.*, p.431] の類似から西北インドにおける Indo-Greeks の交流を考えるむきもある [Marshall: *Guide*, p. 151]。

一四 諸家族たちは雪山の東北の砂漠の中に移住した　巻十二の二一・二のコータン建国伝説の中にこの話が再出されている。

四 僧訶補羅国

四・一 概観 僧訶補羅国(注一)は周囲三千五、六百里あり西は信度河に臨んでいる。国の大都城(注二)は周囲十四、五里ある。［この国は］山により嶺をたよりにして地理険峻に堅固である。農務は労すること少なくして地利は収穫が多い。気候は寒く人の性質は猛しい。国俗として勇悍なることを尊ぶが、一方では詐偽も多い。国には君主首領というものはなく迦湿弥羅国に隷属している(注三)。

注

一 僧訶補羅国　僧訶補羅 *˳sәng-˳χâ-˚puo-˳lâ*: Skt. *siṁhapura* (*singhapura*). 今の Salt Range の北にあたり、Jhelam 河北岸の Pind Dādan Khan から十六マイルにある Ketāksh (Khetās とも。32°43′N., 72°59′ E.) である。この地名は玄奘が次項に示す「白衣外道」即ち Skt. *śvetavāsa* の転化した語（この地方では *śv* > *kh* は頻見）である。ここは神聖なプールや寺院もあり、毎年インドの各地よりこの聖池に浴しようとする群れなす参拝者が今も集まるという［Cunningham: *A. G. I.*, 142 ff., 682］。

二 国の大都城　四・三の「城の東南四、五十里」とあるのを「四、五里」と読み改めることにより、Khetās の町を見下ろすような丘陵上にある Kotera という廃城をこの国の首都と認める［Cunningham : *A. G. I.*, 145, 682-3］。

三 迦湿弥羅国に隷属している　本巻の三・一注四参照。

四・二 城南の塔と伽藍 城の南、遠からざるところに窣堵波がある。無憂王の建てたものである。装飾に損傷しているところはあるが、霊験は引き続いている。傍に伽藍があるが、僧侶はいない(注一)。

注

一 窣堵波と伽藍　首都と思われる Kotera の町のある丘陵の麓に、恐らく仏塔と思われる大きな基壇の跡があり、その前面には九―十四世紀ごろのカシミール風の寺院跡がある［Majumdar's Note, in *A.G.I.*, p.682］。

四・三 城の東南の塔と池沼 城の東南四、五十里(注一)に石造の窣堵波がある。無憂王が建てたものである。高さ二百余尺。池や沼が十数ヵ所あり左右の景を映している。彫刻した石で岸をつくり、その形式は類を異にしている。激しい水は清らかに、泡立つ急流が流れこみ、竜や魚などの水に住む生物が、穴に住まいし水深く泳いでいる。四色の蓮の花は清らかな池いっぱいに咲いており、種々の果物はいっぱい木になり、同じように異色を飾っている。林と沼とはこもごも照り映え、まことに遊楽するにふさわしい。

注

一 城の東南四、五十里　四・一注二に記したごとく、カニンガム氏はこれを「四、五里」と読み改め、この条の塔や池沼のある所を Ketās に比定した。ここは古いころよりジャイナ教の聖地とあがめられ、美しい泉池もある。二千フィートの高所で今も名所となっている［Murray's *Handbook for Travellers*, p.497］。

四・四　白衣外道　傍に伽藍があるが久しく僧侶はいない。窣堵波の側の遠からざる所に白衣外道の開祖が(注一)希求する理法を悟り初めて説法をした処がある。現在封をしたしるしがあり、傍に天祠を建てている。その修行者は昼夜精勤し休むに遑のないほどである。開祖が説いた法は多く仏典の義理を剽窃して(注二)おり、部類に随って法を設け軌範を定めている。年長のものは苾蒭といい、年少のものは沙弥という。威儀戒律は概ね僧のあり方と同じであるが、ただ少し頭髪を残し、それに露形である［点が異なる］。衣服をつけているものもあるが、白色である点が異なっている。このやり方によって［同宗教とはいうものの］少しく区分されている。(注三)その祠る天師の像は［仏教の］如来をまねており、衣服に差はあるが、相好には異なるところがない。

注

一　白衣外道の開祖　玄奘の記述は白衣外道の中に露形派と白衣派の二つがあるような記述をしているが、これはジャイナ教 Jainism の二派と解すべきである。ジャイナ教の開祖はマハーヴィーラ Mahāvīra である。釈尊と同地方の人で前四七〇年前後に七十二歳で死亡した。かれは西北インドへは行っていないから、この Khetās の聖跡もガンダーラを中心とする仏跡同様に後世の付会した伝説である。ジャイナ教は宇宙は無始無終の実在であり、この世界における輪廻転生を信じ、苦行で業を浄化する法を説いた。この宗教については、金倉圓照：『印度古代精神史』；平凡社『アジア歴史事典』；B. Walker : *Hindu World* などのジャイナ教の項参照。

二　仏典の義理を剽窃　ジャイナ教は仏教とほぼ同時代に起こったもので、仏教・ジャイナ教ともにインド教の一派と認めるべきであり、何れが何れを模倣したというべきものではない。その教典は Ardha-māgadhi といわれる一種の方言で書かれている。

三　白衣と露形　白衣派 svetāmbara は初めマガダ地方に始まり、後北インドに弘まった。婦人も教会員たることを認め、着衣の宗祖像を礼拝する。その教典は Valabhi で結集（四五三ごろ）したものを使用する。露形（空衣）派 Digambara は中インドより南方に移った宗派で、今日も主として南インドで盛んである。その僧侶は完全に裸体であり、信者も色衣を避しているが食事時には裸形となる。婦人は現世最大の誘惑者であり、あらゆる悪行の因であるとして卑しめ、寺院に出入りすることを許されないし、婦人の解脱得道の可能性をも否定する。この宗派は宗祖マハーヴィーラがかつて結婚したという事実をも否認する。教典をもたず、宗祖マハーヴィーラ本来の教典はすでに散失したとして白衣派の教典を認めない。

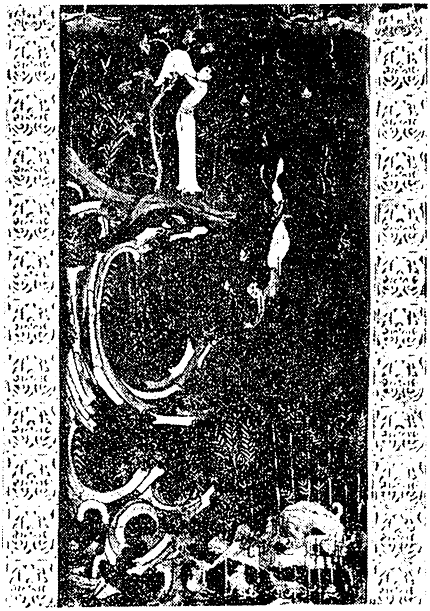
四・五　摩訶薩埵本生譚　ここから復吒叉始羅国の北界に還り、信度河を渡り、南東に行くこと二百余里で大石門を度る。(注一)

昔、摩訶薩埵(注二)王子がここで身を投げだし、餓えた烏檡（原注　音は徒なり）(注三)に食べさせたのである。

その南、百四、五十歩の所に石窣堵波がある。摩訶薩埵が飢えた獣が力をなくしているのを愍れんだ所である。ここまでやって来て枯れた竹で自分の体を刺し、血を獣に飲ませた。すると獣はなんと王子を食べてしまったのである。ここの土地は草木にいたるまで少し赤色を帯び、ちょうど血に染まったようである。その地を履む人は棘に刺されたように感じる。疑うものも信ずるものも、悲愴な気持ちにならないものはない。

注

一　ここから復……大石門を度る　カニンガムは吒叉始羅国の「北界」の語



法隆寺玉虫厨子に描かれた摩訶薩埵王子本生図

を読み落としたためか、南東へ二百余里を計算する起点を今のタクシラそのものに置いた。従ってタクシラより南東に二百余里とすれば、「信度河」とある語を Sohān (Süān) 河と読み変え、次項の捨身石塔を Manikiāla に比定することとなった (Manikiāla は一八〇九年、M. Elphinstone により注意されて以後、諸家の発掘によって有名になった仏塔の所在地であるが、かつて中国僧は誰一人として当地の記録を残してはいない)。今日ではこのカニンガムの説は採られない。呾叉始羅国の北界は明確には指定できないが、恐らく今日の Hazara 地区近辺にも及ぶであろう。従って信度河を東より西へ渡り、南東(正確には南であろう)へ二百余里行ったものと解せられる。『慈恩伝』にはこの箇所を「又呾叉始羅の北界より信度河を渡り、東南に行くこと二百余里、大石門を経」たとある。この行程を採れば問題の捨身石塔の位置は Buner 地方 Mahaban 支脈の Banj 山 (おおむね 72° 40′ E., 34° 20′ N. の地点) であろうとされている [S.N. Majumdar's Note, in *A.G.I.*, 682; L. Petech: *Northern India according to the Shui-ching-chu*, p.58; E. Chavannes: *Voyage de Son Yun. BEFEO*. III. 3 (1903)]。この山でスタインは古代の古い井戸を発見した。この井戸が恐らく H. Deane がもたらした「Vajrastūpa に井戸の寄進」と記したカロシュティー文字のある石板が出た所と思われる [S. Konow: *Kharoṣṭhi Inscriptions*, pp. 55-7; 高田修:『仏像の起源』付表二ページ・No. 16]。文中の「大石門」については未詳。

二　摩訶薩埵王子　摩訶薩埵 *ₒmuâ-ₒχâ-sât ₒ-°tuâ*: Skt. *mahāsattva*, Pa. *mahāsatta*. 摩訶薩とも書き、大士と訳す。摩訶薩埵本生譚は『菩薩本生鬘論』一、『金光明経』一〇、『賢愚経』巻一、『菩薩投身飼餓虎起塔因縁経』、『六度集経』一、*Jātakamālā*, 1 等に見える。その大要は、ある国王に三人の王子あり第三子を摩訶薩埵といった。一日王夫妻・王子・諸臣共に山林に遊んだが、三王子は一匹の虎が子供を生んだものの飢えのため子を食べようとしているのを見た。二兄は共にその場を去ったが、摩訶薩埵は布施行を成満するために虎に身を与えることを決意し高き石崖より身を虎の前に投じた。しかし虎は飢えて動けなかったので、まず乾竹で身を刺して血を出し、それを飲ませ、やや力を回復したのち身を食べさせた。父王・母后・二兄は遺骨に慟哭したが、摩訶薩埵は功徳により天に生まれ父王以下に諸行の無常を説いた、という。

三　烏檡 (……)　宋本には烏䖘に、元・明本は烏菟に作る。ジュリアンは虎と訳すのみで説明はなく、ビールは恐らく Skt. *ōtu* で猫の意ならんとし、ワッターズは漢・揚雄『方言』巻八「江淮南楚の間に……之を於䖘と謂う」とある文により、中支の古言における牝虎のことであろうとする。今、『方言』前条の連文を見るに、「関よりして東西、或いは之を伯都という」とあり、『漢書』叙伝に「虎を於檡という」の顔師古の注に「檡、或いは菟に作る、並びに音は塗」とある。烏檡(徒・菟・塗・䖘) **'âg-d'âg*, 伯都 **pwăk-tâg* は、或いは同語であるやも知れない。朱駿声『説文通訓定声』に「於䖘の合音は虎であり、伯都は於䖘の転声である」と畳韻転声をもって説明しようとしているが如何なものであろうか。チベット語において虎は、*stag*, Lhasapron. [ta (k)], East-Tib. pron. [htax] [江実: *An Eastern Tibetan Dictionary*, 1954, No. 1254] である。梵語よりもこの面との関係を考えるべきであろう。専家の指教を俟つ。

四・六　捨身地北側の石塔　捨身の北に石窣堵波(注一)の高さ二百余尺のものがある。無憂王が建てたものである。彫刻は珍しい作りで、時に不思議な光を輝かすことがある。小窣堵波や石の龕（厨子）は、ともすれば百をもって数えるほどもあり、この兆域をとりまいている。病気があれば、この地を回ると愈えることが多い。

石窣堵波の東に伽藍(注二)がある。僧徒は百余人、みな大乗の教えを学んでいる。

注

一　捨身の北の石窣堵波　今は有無未詳。前述の如くカニンガムはこの塔をマニキヤーラの塔に比定しているが、マニキヤーラ所在のものは後一―二世紀ごろのガンダーラ美術に属するものである。玄奘のいわゆる「彫刻奇製」が具体的にどのようなものを指すかは知り得ぬ。

二　石窣堵波の東の伽藍　これも現在未詳。ただし、北涼の高昌国沙門の法盛が訳した『菩薩投身飼餓虎起塔因縁経』の巻末には、かれが当所を往訪した際の状況に触れ、「是処に大塔を起立し、名づけて菩薩投身餓虎塔となす。今に現在す。塔の東面山下に僧房・講堂・精舎有り、常に五千の衆僧有りて四時供養す」とし、以下病人の焼香・燃燈するものの絶えないことを記す。法顕・宋雲もここを往訪している。『法顕伝』には「此れ（ガンダーラ）より東行すること七日、国あり竺刹尸羅と名づく。竺刹尸羅とは漢に截頭と言うなり。仏、菩薩たりし時、此処において頭を以て人に施す、故に因って以て名となす。復東行すること二日、身を投じ餓虎を餧いし処に至る。此の二処も亦大塔を起つ。皆、衆宝もて校餝す。諸国王臣民競いて供養を興にし、散華・然（燃）燈相継いで絶えず。上の二塔（巻二の四「二千生捨眼塔」、本巻一・八「割身代鴿塔」）を通じ、彼の方の人、亦名づけて四大塔となす」とある。『宋雲行紀』には「[烏場国]王城を去りて東南し山行すること八日、如来の苦行投身餓虎を飼うの処に至る。高山は巃嵸として危岫雲に入る。嘉木霊芝その上に叢生す。林泉は婉麗にして花綵目に曜く。宋雲は恵生と与に行資を割捨し山頂に浮図一所を造り、石に隷書を刻し魏の功徳を銘す。山に収骨寺あり、三百余僧あり」とある。僧徒が法顕のころより宋雲の時期を通じ玄奘のころまで次第に減じているのがわかる。

四・七　孤山中の伽藍　これより東行すること五十余里で一つの孤山（離れ山）に至る。山中に伽藍があり、僧徒は二百余人で、みな大乗の教えを学んでいる。花や果はよく茂り、泉や池は鏡のように澄んでいる。傍に窣堵波の高さ二百余尺のものがある。これは如来が昔ここで悪薬叉を教化された(注一)所である。今に至るまで［ここでは］肉を食べない。

これより東南に行く(注二)こと五百余里で烏剌尸国（原注　北印度の境）に至る。

注

一　悪薬叉を教化された　如来が悪薬叉を教化し、以後薬叉が生き物の肉を食わなくなり、それに因み当地では肉類を口にしない、という故事が何によるか詳かにしない。場所も未詳。

二　東南に行く　宋本および『慈恩伝』は「東南に山行す」に作る。

五　烏剌尸国

烏剌尸(注一)国は周囲二千余里ある。山や阜が引き続き田畑は狭隘である。国の大都城は周囲七、八里ある。大君主はなく迦湿弥羅国に隷属している(注二)。農業によく花・果は少ない。気候は温和で微く霜雪がある。

風俗は礼義なく、人の性質は勇猛である。嘘詐をするものが多く、仏の教えを信ずるものは少ない。

大城の西南四、五里に窣堵波の高さ二百余尺のものがある。無憂王が建てたものである。傍に伽藍がある。僧徒は少なく、みな大乗の教えを学んでいる。(注三)

これより東南して、山に登り険路を履み越え鉄橋を度って行くこと千余里で、迦湿弥羅国（原注　旧に罽賓という。訛なり。北印度の境に至る。

注

一　烏剌尸国　『慈恩伝』高麗本は「烏剌叉」に作る。烏剌尸（叉）。*'uo-lât*。-*śi*（。*tṣ'a*）: Skt. *uraśa* [Pāṇini, IV. 3. 93], *uragā* [*Mahābhārata*, ii. 1027], *uraśa* [Stein: *Rājat.*, V. 217]。今の Hazara 地方にあたる。ギリシア文献の Arsa [Ptolemy, vii. 1. 45] にあたるという。また、その首都は Haripur であるという [Watters: *On Y. Ch.*, I. 256]。

二　迦湿弥羅国に隷属している　本巻の三・一注四参照。

三　無憂王塔と伽藍　この塔と伽藍について関説する書未見。

六　迦湿弥羅国

* 当地の全般については M. A. Stein: *Kalhaṇa's Rājataraṅgiṇī, A Chronicle of the Kings of Kaśmir*, 2 Vols. 特に第二冊の *Ancient Geography of Kaśmir.*；白鳥庫吉：「罽賓国考」『西域史研究』上所収を参照。

六・一　概観　迦湿弥羅国(注一)は周囲七千余里ある。四方は山を背負っており、その山は極めて険しい。入る道があるとはいうものの、それも狭隘である。(注二)古えから隣国もこの国を征服できないでいる。国の大都城(注三)は、西は大河に臨み、(注四)南北十二、三里、東西四、五里ある。農業によく花や果が多い。竜種の馬や欝金香・火珠(注五)・薬草を産出する。気候は寒さ勁しく雪多く風は少ない。毛褐を着し白氎を身につける。(注六)土地がら身のこなし軽く臆病なものが多い。国は竜に護られるまま隣国に雄覇した。顔容は美しく、心情は嘘詐がある。学問を好みよく勉強し、邪教も正法もともに信じている。伽藍は百余ヵ所、僧徒は五千余人いる。四つの窣堵波があり、みな無憂王が建てたものである。それぞれに如来の舎利が一升余入っている。(注七)

注

一　迦湿弥羅国　迦湿弥羅　。*ka-śiəp*。-。*mjię*-。*la*: Skt. *kaśmira* [Pāṇini, IV. 2. 133, 3. 93], *kāśmira*, Pa. *kasmira*, Pkt. *kamhira*, *kamhāra*, *kaṃibhāra*, *kaṃbhūra*, *kasamira*, *kasumirā* [Turner: *C. D.*, no. 2968]. *kaśvira* と書かれるが、今日この地域の住民自身は *kaśir* と言っている [Stein: *Rājat.*, II. p. 386]。ギリシア文献には Kaspeiria（地域名）[Ptol., vii. 1. 42], Kaspeiraioi（住民名）[Ptol., vii. 1., 47] と記されている。漢籍において Kashmir にあたる表記は唐代から現われるようで、本書以外には義浄の羯湿弥羅、『慧超伝』の伽葉弥羅、『新唐書』西域伝の箇失蜜などがある。玄奘が訛とする罽賓 **kjad-pjen* → *kjäi*°-。*pjen* は唐以前に頻見するもので、これの原音については諸説ある。古くは『貞元新定釈経目録』一七には迦畢試国に対し「罽賓と言うは訛略なり」と注し、『梵語雑名』には罽賓に劫比舎也 Karpiśaya と注し、『慧琳音義』四一には「罽賓　或いは罽溼弥羅と名づけ、或いは箇溼蜜と名づく。皆古訳にして訛略なり。正梵音は羯溼弭羅という」とあり、みな罽賓は Kashmira の表記であるが唯正確ではないとする。近くは A. Rèmusat はカーブル河の古名 Kophes 或いは Kophen の音写なりとし、E. Cha-

vannes, S. Lévi は Kashmira の古称 Kaspira（＜Kaśvira）の対音であるとしたが、最近では漢・晋間の罽賓はガンダーラを中心としたカーブル河の下流域を指し、Ka-pun と音じ、ペルシア語 Khwaś-bū̆i の対音、塞民族の用語である、五世紀以後東晋・南北朝の罽賓はカシミールを指す、しかし隋・唐代の罽賓という地名は、さらに転じて迦畢試およびガズニー地方を指すものとなった［白鳥：「罽賓国考」『西域史研究』上所収］という。なお、W. W. Tarn: *Greeks in Bactria and India*, Appendix 9, *Ki-pin* (*Kophen*) *and* ʻ*Arachosia*ʼ 参照。また『希麟音義』一に、国人が阿羅漢の建国を賞讃し「聖僧に因らされば阿誰か敢えて入らん」と言ったというので、この国を「阿誰入」と訳すとある。前項末尾の「山に登り険を履み、鉄橋を渡り千余里を行く」という記事は、Muzaffarābād より Jhelum 河に沿い東行した路程をいうものであろう。

二　迦湿弥羅の地勢　八世紀末貞元年間の円照撰『悟空入竺記』に「其の国（カシミール）四周の山は外郭をなし、総じて三路を開き以て関防を設く。東は吐蕃 Tibet に接し、北は勃律 Baltistan に通じ、西門の一路は乾陀羅に通ず。別に一途あり、常時は禁断す。天軍の行幸には方に暫く開くことを得」とある。『慈恩伝』によれば玄奘は西門より入った（次注参照）。カシミールへの現在の進入路とほぼ同じであろう［Murray's *Handbook*, pp. 520 ff.; Stein: *Rājat.*, II. pp. 361 ff. に詳細］。

三　国の大都城　当時のカシミールの首都は今のスリナガル Śrinagara で、*addhishtān*＜Skt. *adhiṣṭhāna*（"the capital, the chief town"）と呼ばれていた［Stein: *Rājat.*, II. 362, 439; Cunningham: *A. G. I.*, 107］。この都は六世紀の始めに当時の王 Pravarasena I によって創始されたものであった［Stein: *Rājat.*, II. 440］。それ以前の旧都については本巻六・六参照。玄奘入国当時の王は Kārkoṭa 王朝の始祖 Durlabhavardhana 王（六三五—六六一、一説に五九八年創始）であった。玄奘はこの王の即位間もなく入国（カニンガム、スミスは 六三一年、劉汝霖は六二八年とする）し大歓迎を受けた。『慈恩伝』に「法師初めて其の境に入り石門に至る、彼の国の西門なり」とあるのは、今のスリナガル西方三十二マイルにある Bārāmūla（＜Varāhamūla）であり、ここで峡谷は終わり平地に入り、川も屋形船を浮かべる別天地になる。ここでかれは王の母弟の出迎えを受け護瑟迦羅寺 Huṣkara（＜Huviṣkapura）に泊まり、数日後に王城に進み、王および群臣・衆僧・住民の歓迎裏に闍耶因陀羅寺 Jaya-indra に入った。この地における二年間の研学は『伝』に詳しい。

四　西は大河に臨み　大河とは Jhelum 河。現在は河の両岸にスリナガル市街があるが、やはり東岸が主たる街区である［当市の地図は Stein: *Rājat.* 巻末付図、Murray's *Handbook*, p.522 の折込み地図参照］。

五　火珠　本書の中に火珠を産する国は迦湿弥羅国と屈露多国（巻四の四）の二国のみで、二国ともに山岳地帯にある。漢籍に見える火珠は、また火斉珠ともいい、水晶に類する海産の貝珠のようであり、本書の二国には不適当である。ジュリアンはガラス玉、ワッターズは水晶玉、Skt. *dahanopala* であるというが如何なものであろうか。或いはこれはカシミール山地 Zanskar の高山の谿谷中に産する宝石ルビーとする［大谷光瑞：『印度地誌』二八六ページ］ものもある。後考を俟つ。

六　産物と衣服　『慧超伝』に「人民極めて衆く、貧多く富めるものも少なし。王及び首領・諸の富有なるものは、衣著中天と殊ならず。自外の百姓は悉く毛毯を被て其の形醜を覆う。土地は銅鉄・氎布毛毯・牛羊を出だし、象小馬・粳米葡萄の類あり。土地極めて寒く、已前の諸国と同じからず。秋は霜、冬は雪、夏は霜（霖？）雨に足る。百卉瓦青葉彫（この句は誤字のためか読めない）、冬は草悉く枯る」とある。

七　迦湿弥羅の仏教　玄奘より一世紀遅れて当地を訪れた悟空の時には、「此の国の伽藍は三百余所、霊塔瑞像その数頗る多し。或いは阿育王及び五百阿羅漢の建立する所なり」とある［円照撰『悟空入竺記』］。

六・二　末田底迦の開教と建国伝説

この国の歴史には次のように言っている。この国の土地は元は竜池であった（注一）。昔、仏世尊が烏仗那国から悪神を降伏しおわり、中国（中インド）に帰ろうと思われ虚空に乗じてこの国の上まで来られたとき、阿難に、

「私が入滅した後に、末田底迦阿羅漢（注二）がきっとこの地に国を建て、人民を安んじ仏法を弘通するであろう」

と言われた。如来の寂滅の後第五十年目に（注三）、阿難の弟子の末田底迦

羅漢という人は六神通を得、八解脱を具え（注四）ていたが、仏の懸記を聞き心に大いに喜び、すぐさまここへやって来た。大きな山の嶺で林中に坐禅をくみ大神変を現じた。竜はこれを見て深く信心し望みのことを何でもしようと請うた。阿羅漢は、

「どうか池の中で私の膝を容れるほどの場所をください」

と言った。竜王はそこで水を縮めて場所を奉施した。羅漢は神通力で身体を広くしたので、竜王は力を出して水を縮めたところ、池は空になり水はなくなってしまった。竜はそこで反対に自分の地を与えられるように頼んだ。阿羅漢はこの地の西北に竜王のために一つの池の周囲百余里ほどのものを残した。その他の眷族のものたちは別に小さな池に居を定めた。竜王は、

「池の土地は全部布施いたしました。どうか今後いつも供養を受けてください」

と言った。末田底迦は、

「私はもう間もなく無余涅槃（注五）に入ります。そなたの願いを受けようと思っても、どうしてできようか」

と答えた。竜王は重ねて、

「五百羅漢（注六）が常に私の供養を受けていただいたならば法尽（注七）に至りましょう。法尽になりました後は、この国を取りもどして住まいの池としましょう」

と請うた。末田底迦は竜王の頼みに従った。時に、阿羅漢はその土地を得たので、大神通力を運らし五百の伽藍を建て、諸外国から賤人を買い使役に充て、僧たちに供給した。末田底迦が寂滅に入った後に、その賤人たちは自分たちで君主を立てた。隣境の諸国はかれらが賤種であることを鄙しみ親しく交わることをせず、これを訖利多（原注　唐に買得という）（注八）と言った。近ごろは泉池の水はもう氾濫することが多い（注九）。

注

一　この国の歴史には……この国の土地は　麗本は「国志日国地本竜池也」とあるが、諸他の本を見るに、或いは「昔此国本竜池也」とある方が読みがよく通るようである。

二　末田底迦阿羅漢　本巻の一・一六注六参照。

三　如来の寂滅の後第五十年目　末田底迦の迦湿弥羅開教の時期については諸説がある。『阿育王伝』四には阿難の遺命とし、『善見律毘婆沙』二、*Mahāvaṃsa,* xii などには阿育王第三結集の後のこととする。『阿育王伝』三、『有部毘奈耶雑事』四〇などに師の出世を仏滅百年とするのは、北方所伝の仏滅百年阿育王出世の説と一致させ同時代の人とする意である。従って阿難の遺命によるとする説よりは根拠のあるものと言えよう。本書が仏滅第五十年、阿難の弟子とするのは独自の説である。これは迦湿弥羅が後に説一切有部の栄えた土地であるので、その部の人が自派の伝承を権威あらしめるために、同国仏教の祖たる師をば年代を無視して阿難の弟子としたものであろう［望月：『辞典』四七四三ページ］。

四　六神通を得、八解脱を具え　巻二の四・六注一五および注六参照。

五　無余涅槃　煩悩も肉体もともに滅無に帰した真の悟り。煩悩を断じたが肉体がなお残存する涅槃を有余涅槃というに対する語。

六　五百羅漢　仏在世中に随従した羅漢も五百といい、王舎城第一結集の際に来集したのも五百羅漢といい、次項の阿育王の時に摩掲陁から大挙移住した上座部の僧も五百羅漢といい、下記の迦膩色迦王の婆沙結集の際にも五百羅漢が集会したという。常語である。

七　法尽　正像末の三時をすぎて仏法が全く滅尽することをいう。

八　訖利多（……）　訖利多 *kiət。-ljiº-。tâ*: Skt. *krita* (＜*krī*)。「買われる……」の意。この種族は通常 Kritya と書かれる [Ch. Lassen, S. Julien]。カシミールの一所に移殖したといわれる Kiras の種族名をもつ賤種かともいわれる [Cunningham: *A. G. I.,* 107] が、何の証跡もない [Stein: *Rājat.,* II. 430]。また訖利多をカシミールの王朝名に関係づけて Karkoṭa, Karkoṭaka とする説もある［高田：『国訳伝』一二

七ページ（一八）」。なお、迦湿弥羅の建国に関する諸説は望月『辞典』四二六ページ以下に詳しい。

九　近ごろは……多い　仏法の滅尽する時期が次第に近づきつつあるをいう。

六・三　大天の難と根本分裂

摩揭陀国の無憂王は、如来が涅槃に入られた後第一百年に、（注一）一世に秀で天下に君臨し、その威光は異民族をも被うほどであった。仏法僧の三宝を深く信じ四生を愛撫された。当時五百の羅漢僧と五百の凡夫僧とがおり、（注二）王はともに尊敬し供養するところに差はなかった。凡夫僧に摩訶提波（原注　唐に大天という）（注三）という人があり、博学多聞で幽に名実（名目と実体）の理を求め、深く考え論を作ったが、その理は聖教に相違するものがあった。これを聞き知ったものたちは群れをなしてその異論に従った。無憂王は凡と聖と［の区別］を弁えず、感情の好むところにより親しいものを身びいきして、僧徒を召集し殑伽河に出かけ、深流に沈めて［羅漢僧を］みな殺しにしようと思った。その時羅漢たちは自らの生命に危険が迫ったので、咸く神通力を運らし空高く虚空を履み、この国にやって来て山に住家を作り谷に隠れた。（注四）そこで無憂王はこのことを耳にして後悔し、自ら出かけて来て自分の間違いを詫び、本国（摩揭陀）へ立ち戻られるよう頼んだが、かの羅漢たちは頑として命に従わなかった。そこで無憂王は羅漢たちのために五百の僧伽藍を建て、この国をあげて衆僧に布施したのである。（注五）

注

一　無憂王が仏滅後第一百年に出世　これは北方伝による年数。巻八の二・三に詳説。

二　羅漢僧と凡夫僧　僧のこのような二種の区分は他に見ない。ここでは羅漢僧は後に上座部に、凡夫僧は後に大衆部に属するものたちになる。

三　大天　Skt. *mahādeva*.　中インド秣菟羅 Mathura 国の人とされる。

四　羅漢僧が迦湿弥羅へ遁れたこと　羅漢僧（上座部）が凡夫僧（大衆部）と分離したことは、いわゆる根本分裂といわれる教団の分裂である。保守派（上座部）の戒律偏重に対して、進歩派（大衆部）が軽律は無視しようとしたことに起因し、少数派である保守派は迦湿弥羅国に遁れ上座部を結成し、多数派である進歩派は摩揭陀国に留まり大衆部と称せられることになった（『大毘婆沙論』九九・『異部宗輪論』）。これは北方伝による説明であるが、今日では大天なる人物は全く虚構であるといわれる。

五　無憂王はこのことを耳にし……衆僧に布施した　この話も北方伝による伝説で、前注中の書および玄奘の弟子窺基撰『異部宗輪論述記』に見える。

六・四　迦膩色迦王の第四結集

健駄邏国の迦膩色迦王（注一）は如来涅槃の後第四百年に、期に応じ運にしたがっ［て王位につい］た。王の徳化は遠方をも被い、異民族も心従してきた。政務の余暇にいつも仏経を習い、日ごとに一僧に依頼し宮殿に来て説法してもらった。ところがいろいろな異なった議論があり従う部派も同じでなく、王は深い疑問をもち疑惑を取り去ることができなかった。その時、脇尊者（注二）は、

「如来がこの世を去られ歳月はすでに遙かです。弟子たちの部派、師弟の異論は、それぞれ見聞したところを根拠とし互いに矛盾しています」

と言った。王はそれを聞くや非常に心を痛め悲嘆することしばしばであったが、尊者に言うには、

「過分にも前世の余福のままに祖先の遺業を受け嗣ぎました。如来の滅後時間はたちましたが、まだ［遺法を聞く］幸いがあるというもの

です。私は自らの凡庸なことも忘れて仏法を興隆したいと思います。自らの部派に随って詳細に経律論の三蔵を注釈せよ」

と告げた。脇尊者は、

「大王は前世に善根を殖えられ大変に福運を受けておられます。お心を仏法に留められることは私の願うところです」

と言った。王はそこで遠近に命令を出し学行の優れた人を召集した。ここにおいて四方より群れをなし集まり、遠方から逸速く馳せ参じ、賢人は悉く集まり、聖者もみな参集した。七日間にわたり四事の供養(注三)をし、さて法の議論をしようと思ったが、混乱するのではないかと心配し、そこで王はよくよく考えて僧衆に告げて、

「悟りを得たものは留まれ。なお煩悩の残るものは還れ」

と言った。このようにしてもなお人が多すぎた。また重ねて命令して、

「学び尽くし［羅漢果を得］たものは留まれ。なお学ぶべきことの残れる［有学の］ものは還れ」

と言った。それでもなお人が多すぎた。またさらに命を下して、

「三明を具え六通を備える(注四)ものは留まれ、その他のものはそれぞれの本国に還れ」

と言った。しかしまだ多すぎた。またさらに命を下して、

「内学は三蔵を窮め外学は五明(注五)に通達するものは留まれ。その他のものはそれぞれの本国に還れ」

と言った。かくして四百九十九人を得た。王はその本国（健駄邏国）で事を行なおうと考えたが、その暑熱と湿気を心配して、また［第一結集の会場である］王舎城の大迦葉結集の石室(注六)でしょうと思った。脇尊者らが相談して、

「いけません。あそこは外道が多く異論が紛糾するでしょう。受け答えに暇がないようではどうして論を作る好結果が得られましょうか。ここへ集まりました精神はこの国に心をかけてのことです。この国（迦湿弥羅国）は四周の山は堅固で薬叉が守衛しています。土地は肥沃で物産は豊富です。聖賢が往来する所であり、仙人が逍遙する場所です。みなの意見もここだとすることでしょう」

と言うと、悉くの人は、

「まことに結構です」

と答えた。王はそこで諸羅漢と共に健駄邏国から迦湿弥羅国へやって来て伽藍を建立し、三蔵を結集し、ここで『毘婆沙論』(注七)を作ろうと思った。

この時尊者世友は戸外にあって納衣(注八)をきていた。諸阿羅漢が世友に、

「煩悩がまだ除かれざるものは議論に誤謬をきたすこともあろう。汝はここより遠ざかるべきであり、ここに居てはいけない」

と言うと、世友は、

「みなさんは法に疑問もなく仏になり代わり教化を施そうとし、いま重大な道理を結集し、そこで正論を作製しようとしておられます。私は不敏ではありますが、ほぼ仏の微妙な言葉に通達し、経律論三蔵の深奥な文、五明の至極の理も、いささか研究してその旨趣を心得ております」

と答えた。羅漢たちは、

「言葉はそのよう［に不遜］であってはいけない。汝は家に戸を立て勉学し、少しも速く学ぶべきもののないこと（羅漢果）を證してから、ここへ集会しても、なお時は晩くはないであろう」

と言うと、世友は、

「私は無学［の羅漢果］を見ること、まるで涕や唾のように［小さなものと］思っております。仏果（仏となること）を志し求めており、小

径は走りません。この襤褸の丸を拋り上げて、(注九)まだ地面に落ちないうちに、必ず無学の聖果を證得しましょう」

と言った。その時羅漢たちは重ねて世友を咎めて、

「増上慢の人というのはこういう人のことだ。無学果というものは諸仏が賞讃されるほどのものである。汝は早速それを証明して人々の疑いをはっきりさせるべきだ」

と言った。ここにおいて世友は直ぐさま襤褸の丸を空中に拋げ上げると、［空中の］天人たちはこの襤褸の丸を手で受けとめ、申し上げて言うには、

「今世で仏果を證し、来世で慈氏（弥勒）の後を嗣がれ、三界でとりわけ尊く、四生(注一〇)みな依り所とするような方が、どうしていまこんな［無学のような］小果を證しようとされるのですか」

と。この時羅漢たちはこのでき事を見て、自分たちの咎を謝りその徳を推して頼んで上座（議長）となってもらい、およそ疑議があればみな決裁してもらった。

この五百人の賢聖がまず十万頌の『鄔波第鑠論（原注　旧に優波提舎論という。訛なり）(注一一)』を造り『素呾纜蔵（原注　旧に修多羅蔵という。訛なり）(注一二)』を注釈した。次に十万頌の『毘奈耶毘婆沙論』(注一三)を造り『毘奈耶蔵（原注　旧に毗那耶蔵という。訛なり）(注一四)』を注釈した。終わりに十万頌の『阿毘達磨毘婆沙論』(注一五)を造り『阿毘達磨蔵（原注　或いは阿毗曇蔵という。略なり）(注一六)』を注釈した。全三十万頌、九百六十万言(注一七)である。詳細に三蔵を注釈し、これを千古の後世に示した。その枝葉までもつきとめ、その浅深をもはっきりさせないではおかなかった。かくて仏法の大義は重ねて明らかになり、微妙な言葉も再びはっきりし、世に広く流布され後進のものはこれを頼りにすることになったのである。迦膩色迦王はそこで赤銅で板金を作り、論の文を鏤りつけさせ石函に緘封し、窣堵波を建ててその中にしまわせた。(注一八)薬叉神に命じてこの国を取り巻き守護させ、異学のものにこの論を持ち出させないようにさせ、学習をしたいと思うものはこの中で業を受けさせた。このようにして仕事は成就し、軍を本国の都に帰還させることにした。この国の西門(注一九)の外に出て東に向かって跪き、［無憂王と同じく］復びこの国をば挙げて僧徒に布施したのである。

注

一　迦膩色迦王　巻二の四・三注三および注三を参照。

二　脇尊者　巻二の四・六注三参照。

三　四事の供養　飲食・衣服・臥具・湯薬の四種の供養。

四　三明を具え六通を備える　巻二の四・六の注五参照。

五　五明　巻二の一・七注六―一二を参照。

六　王舎城の大迦葉結集の石室　巻九の二・一六を参照。

七　『毘婆沙論』　巻二の四・八注三を参照。

八　納衣　衲衣または糞掃衣ともいう。隋・慧遠『大乗義章』一五に「納衣というは、朽枯破弊を縫納して身に供し、好衣を著けず。何故に然るものを須うるや、若し好衣を求めば悩みを生じ罪を致し、功を費やして道を廃す。是がために著けず」と。

九　この襤褸の丸を拋り上げて　世友（伐蘇蜜呾羅）のこの話と同様な伝説が『惟日雑難経』に「积須蜜（伐蘇蜜呾羅）言く、我石を取りて跳ち、一石未だ地に堕ちざるに阿羅漢を得んと」とある。ここは恐らく着用していた納衣を丸めたのであろう。

一〇　四生　仏教における生物の生まれ方の分類法。一に胎生、母胎で体を形成し出生するもの、人間や獣類。二に卵生、鳥のように卵殻内で体を形成して後に出生するもの。三に湿生、虫の如く湿気のあるところから生まれるもの。四に化生、依るところなく過去よりの業力によって自然に成生するもの、例えば天人・地獄・最初の人類など。

一一　『鄔波第鑠論（……）』　旧訳に玄奘標出のもののほか、優波替舎・優婆題舎などあり、何れも梵語の語幹 *upadeśa* を意図したものであるに対

し、玄奘は鄔波第鑠論を正とする。『玄応音義』二三に「鄔波第鑠　烏古反（°·uo）、下は尸薬反（śi̯ak。）、旧に優波提舎という。此に論義という」とある。新訳にはまた烏波第鑠・鄔波題鑠などあり、鄔波第鑠°·uo-°puâ°-d'iei°-śi̯ak。のように何れも語末を入声字にしている。このことは、旧来、通常は語幹のままに Skt. *upadeśa* を意図してきたのに対し、玄奘およびかれ以後は *upadeśaḥ* を正梵語として採る意であろうか。なお次注参照。

一二 『素呾纜蔵（……）』『玄応音義』二三に「素怛纜　力暫反（lâm°）。此に訳して綫という。旧に修多羅といい、或いは修妬路という。皆訛なり」とある。通常、「経」と訳している語。旧訳が語幹のまま Skt. *sūtra* を意図するのとは異なり、玄奘およびかれ以後は素呾(怛)纜 suo°-tât。-lâm°、即ち Skt. *sūtrām* or *sūtrām* を正梵語として採ろうとするものと解せられる。ところで前注に見る語とこの語において、何故に一般の場合と異なり、特異な語尾を付しているかについては、玄奘自身にも旧来の諸研究書にも何の説明もなく、理解に苦しむ。専家の指教を俟つ。

一三 『毘奈耶毘婆沙論』　毘奈耶毘婆沙 。b'ji-nâi°-。i̯a-。b'ji-。b'uâ-。ṣa: Skt. *vinayavibhāṣa*. 従ってこの論は、通常 *vinayavibhāṣa-śāstra*「律の注釈書」。

一四 『毘奈耶蔵（……）』　毘奈耶は前注参照。旧訳との相違は奈 nâi°。か那。na かにある（一本にある邪は耶と同音）。本書における奈字を使用した語はこの毘奈耶のみで他に例を見ない。しかも、nâi の音をもつ字は去声のみで他の平上二声にはなく、この奈字が最も人目に奇異に映じないものであった。玄奘はこの奈字をもって *vinaya* の *naya* を [nâi-i̯a] と連接する方が、那字をもってする [nâ-i̯a] の連接よりも一層原音に近いものを実現し得ると判断したものであろう。毘奈耶蔵は通常 Skt. *vinaya-piṭaka*,「律蔵」の意。

一五 『阿毘達磨毘婆沙論』　阿毘達磨は巻二の四・七、毘婆沙論は同じく四・八に既出。通常 Skt. *abhidharma-mahāvibhāṣa-śāstra* とよばれる。巻二の四・八注三参照。

一六 『阿毘達磨蔵（……）』　Skt. *abhidharma-piṭaka*. 対法蔵と訳す。旧訳の阿毘曇は Pa. *abhidhamma* のような俗語に対応するものであろう。これを『記』には略とし、『伝』には訛とする。

一七 九百六十万言　『慈恩伝』には九十六万言とし、明蔵には六百六十万言とする。もちろん九百六十万言が正しい。

一八 迦膩色迦王治下の迦湿弥羅におけるいわゆる第四結集　この迦膩色迦王の結集事業を第四結集という（第一結集は本書巻九に、第二結集は巻七に、第三結集は南方伝のみに見える）。本書によれば経・律二蔵の注釈も行なったとあるが、今日は疑うもの多く、主体は小乗仏教のあらゆる問題を網羅した有部の『大毘婆沙論』編纂事業であったと言えよう。しかし、これも今日では、迦膩色迦王以後のものであり、権威あらしめるために迦膩色迦王に結びつけたものと言われる。

一九 この国の西　本巻の六・一注三参照。

六・五　雪山下王の迦湿弥羅征討　迦膩色迦王が已に死んだ後に、訖利多種はまた自ら王号を称し、僧徒を追放し仏法を破壊した。覩貨羅国の呬摩呾羅（原注　唐に雪山下と言う）[注一] はその先祖は釈種であった。如来の涅槃の後第六百年に大いに彊域を保持し王業を継承し、心を菩提にかけ仏法を聞くことを心がけていた。訖利多が仏法を壊滅したことを耳にし、国中の勇敢な武士を招集したところ三千人を得たので、旅商になりすましたくさん財宝をもち、兵器を隠し持ってこの国へやって来た。この国の君主は特に礼遇を加えてもてなした。旅商の中からまたさらに選択募集して、五百人の勇猛にして智謀あるものを得たので、銘々は鋭利な刃物を袖の中に入れそれといっしょに重宝を手にもち、自分たちで捧げもち献上した。その時、雪山下王はその冠りものを取り去りその座に即いた。訖利多王は驚き恐れなす術もなかった。［雪山下王は］そのままかれの首を斬り家来たちに命令して、「自分は覩貨羅国の雪山下王である。この賤種が残虐な政治を行なったのを怒ったのである。故に今は罪あるものは誅罰するが、一般の人々はその咎はない」

と告げた。しかし国政に参与した家臣は外国に遷流した。この国を平定したので僧徒を召し集め、伽藍を建て以前どおりに安堵させた。そこでまたこの国の西門の外で東へ向かい跪き僧たちに布施をした。この訖利多種は僧徒が自分たちの宗教を覆し祭祀を廃滅させたので、代々その怨みを積もらせ仏法を憎悪していた。歳月すでに経ち復自ら王号を称している。それ故今のこの国は余り正法を信ぜず、外道・天祠に特に心をかけている。(注二)

注

一　覩貨羅国の呬摩呾羅(……)　Himatala. 巻十二の一一に詳記。

二　今のこの国は……心をかけている　玄奘はこのように述べているが、『慈恩伝』によれば、かれの到着時王室を挙げて歓迎、手厚くもてなし、「是の如く停留すること首尾二年、諸の経論を学し聖跡を礼し已って乃ち辞出す」とあるを見れば、なお注意に値いすることがわかる。なお、雪山下王のこの伝説の真偽を判断する他の資料は未見。『慈恩伝』巻五に同じく雪山下王征討の記事があり、一層詳細である。

六・六　仏牙伝来の説話　新城の東南十余里、旧城の北の大きな山の南側に僧伽藍がある。(注一) 僧徒は三百余人。その窣堵波の中には仏の歯牙(注二)がある。長さ一寸半ほど、その色は黄白である。或いは斎日に至ると時に光明を放つことがある。昔、訖利多種が仏法を壊滅するや、僧徒は解散しそれぞれ都合のよい場所に居ついた。ある沙門は印度の諸地を遊歴し、聖跡を参拝して信仰を披瀝していたが、その後、本国が平定したということを耳にし、直ぐさま帰途を急いだ。途中で象の群れが草原いっぱいに走りまわり吼えたてているのに出遭った。沙門はそれを見るや樹に登り難を避けようとした。すると群象は集まり走ってやって来て、争って池の水を吸い上げ樹の根を水漬けにし、力を併せて掘ったので樹は倒れてしまった。[象は]沙門を捕えたので背中に乗せて進み、大きな林の中まで行くと病気の象がいた。瘡を受けて横になっており、この僧の手を引くので苦しんでいる所へ手をやると、枯れた竹が刺さっているのであった。沙門はそこで竹を抜き薬をつけ、着ている裳を裂いてその足を包んでやった。すると別の大きな象が金函を捧げて病気の象に与えた。象は受けとると、さらに沙門に授けた。沙門が函を開けてみると、なんと仏の歯牙であった。象の群れがとり囲み、僧はそこから出る術もなかった。あくる日の食事時に、象たちは珍しい果物を持ってきて中食とした。食べ終わると僧を背に載せ、林を出ること数百里の外まで来てはじめて僧を下ろし、それぞれ跪いて挨拶をして立ち去った。沙門はその国の西の境まで行き、流れの速い河を渡ることになった。河の中流まで渡ると船が転覆しそうになった。いっしょに舟に乗っている人々は、互いに、

「今この船は転覆しそうだが、禍因は僧である。きっと如来の舎利をもっておるに相違なく、竜たちはこれを手に入れようとしておるのだ」

と言いあった。船頭が験べてみると、はたして仏の歯牙を見つけだした。そこで沙門は仏の歯牙を捧げもち下に向かって竜に、

「私は今汝に手渡すが、久しからずして来て取りもどすであろう」

と言い、[仏牙を手渡し]そのまま河を渡らず船を引き返して去った。河をふり返り見て、

「私には止める術もなく竜のような畜生に欺き取られた」

と嘆き、再び印度へ行き禁竜の法を勉強した。三年の後、再び本国へ帰ろうとて河の岸までやって来て、法のごとく壇場を設けた。竜はそこで仏牙の函を捧持して沙門に授けた。沙門は持ち帰りこの伽藍で

供養を修したのである。(注三)

注

一　新城の東南……僧伽藍がある　新城は今のスリナガル（六・一注三）であり、その南に Takht-i-Sulaiman ("Throne of Solomon") と呼ばれる眺望絶好の山がある。その東南二マイルに Pāndrēthān（＜Skt. *purāṇādhiṣṭhāna*, "the old chief city"）と呼ばれる旧都の遺址がある [Cunningham: A. G. I., 108; Beal: *Records*, I. 158 (125)]。この僧伽藍は今となっては寺名・場所ともに不明であるが、或いは有名な現在のヒンドゥーの石造寺院 Shankar Acharya のある場所あたりか。

二　仏の歯牙　『慈恩伝』巻五によれば、この仏牙は玄奘の帰国間近いころには、すでに羯若鞠闍国の戒日王に奪い去られ、戒日王の行宮の西の伽藍中に奉安されていたという。

三　仏牙伝来の説話は『慈恩伝』巻五にも出ている。文字にやや出入りがあるが、参照されたい。

六・七　旧都近辺の小伽藍　伽藍の南十四、五里に小伽藍がある。(注一) 中に観自在菩薩の立像がある。断食をし死ぬまでもと誓って菩薩を見たてまつろうと願うものがあれば、像中から妙色の姿を出す。

注

一　伽藍の南……小伽藍がある　仏牙伽藍の南十四、五里といえばまさに旧都の近辺である。このあたりはカシミール風独特の小伽藍（多くは九―十世紀のものであるが）の完全なものや遺址が多い [Fergusson: *History of Indian and Eastern Architecture*, Vol. I. 267 ff.; Murray's *Handbook*, p.523 (1965 Ed.), p.395 (1929 Ed.)]。

六・八　衆賢論師の遺跡　小伽藍の東南三十余里で大山に至る。(注一) 故い伽藍がある。形や造りは宏壮であるが、荒れかたはまことに甚だしい。今は唯一隅に小さな重閣を建てているだけである。僧徒は三十余人、みな大乗の教えを学習している。昔、僧伽跋陀羅（原注　唐に衆賢という）論師が、(注二) ここで『順正理論』(注三) を作製したのである。伽藍の左右に多くの窣堵波がある。大阿羅漢の舎利はここにある。野獣や山猨が花を採り供養しており、年中やめることなくまるで命令を受けているようである。しかし、この山中の多くの霊跡、例えば石壁が横に裂けていたり、峯に馬の足跡が残っていたりする、およそこういう類のものは、そのありようは譎詭である。これらは羅漢や沙弥が連れだって遊歩し、手指で画いたり馬に乗り往来したものである。遺跡のこんなふうのものは詳しく述べることは難しい。

注

一　小伽藍の……大山に至る　観自在菩薩の小伽藍の東南三十余里（約六マイル）といえば、ほぼ今の Avantipur (Avantivarman 王、(八五五―八八三) の首都) の近辺に当たろう。この王の建てた二つの寺院は、一九一四年に発掘されたが、王以前の建造物については不明 [Fergusson: *Hist. of Ind. & East. Arch.*, I. 264 ff.; Murray's *Handbook*, p. 524 (1965 Ed.)]。

二　僧伽跋陀羅（……）論師　僧伽跋陀羅 *sang-g'ia-b'uât-d'â-lâ*: Skt. *Saṃghabhadra*. 衆賢または僧賢とも訳す。この論師については巻四の一〇秣底補羅国の条に詳しい。

三　『順正理論』　この書の製作由来・内容については巻四に詳しい。

六・九　悟入論師の遺跡と大食羅漢　仏牙伽藍の東十余里、北山の崖の間に小伽藍がある。(注一)昔、索建地羅(スカンディラ)大論師(注二)がここで『衆事分毗婆沙論』(注三)を作ったところである。

小伽藍の中に石窣堵波の高さ五十余尺のものがある。阿羅漢の遺身舎利［を納めた塔］である。以前羅漢の体の非常に大きなものがおり、飲食する量は象と同じほどであった。当時の人は譏(そし)って、

「ただ腹いっぱい食べるばかりで、どうして［法の］是非を知ろうか」

と言っていた。羅漢がまさに寂滅に入ろうとするや、人々に告げて、

「私は今、間もなく無余涅槃(注四)を取ります。私自身が證(さと)った妙法を説きましょう」

と言った。人々はこれを聞き嘲(あざけ)り笑いあったが、悉くやって来て集まり、共々に羅漢の話の得失を聴(き)こうとした。その時、阿羅漢は人々に告げて、

「私は今、みなのために事の由来を話しましょう。この身の前身は果として象の体を受けていて、東印度の王の象舎におりました。その時この迦湿弥羅国に一沙門がおり、遠く印度に遊び、仏の教えの経典を尋ね歩いていました。そこで王は私をば沙門に布施し、経典を負載してここまでやって来ました。その後久しからずして命を終えました。経を負った功徳の力のお蔭で人に生まれることができ、さらに余徳のお蔭で早く染衣を着て［出家し］、解脱を求めて休む暇もありませんでした。六神通(注五)を得、三界の欲を断ち(注六)ましたが、その食事の習慣はやはり元どおりでした。常に自ら身をつつしみ、三分の一を食べていました」

と言った。このように話をしても人はまだ信じなかったので、羅漢は虚空に昇天し火光定(注七)に入り、体から煙や炎を出して寂滅に入った。その屍(しかばね)は地上に墜(お)ち、窣堵波を立てたのである。(注八)

注

一　仏牙伽藍の東……小伽藍がある　仏牙伽藍はスリナガル市東南隅、今の Takht-i-Sulaiman 山の南斜面にあったから、従ってそこから東十余里（約二マイル余）の地点とすれば、今の Palace Hotel の南にある山（六千七百フィート）の東北にある谷間のあたりにほぼ当たろう［Murray's *Handbook*, p. 522, Map of Śrinagar 参照］。しかし、このあたりについての考古学的調査報告は未見。

二　索建地羅大論師　索建地羅 *sâk。-kįɒn°-d'i°-。lâ* : **skāndhila* <Skt. *skandhila* [Turner : *C.D.*, no. 13627 ; Gray : *Ind.-Iran. Phonology*, § 654]。また塞建陀・塞建陀羅・塞建地羅に作る。悟入と訳す。迦湿弥羅国の人。説一切有部の学匠で衆賢の師。世親も師に就き毘婆沙を学んだ。その著『入阿毗達磨論』二巻（玄奘訳。これには塞建陀羅とする）は入門書として行なわれている。

三　『衆事分毗婆沙論』　諸経録類に見当たらず、漢訳されたことはないらしい。『衆事分阿毗達磨論』Skt. *abhidharma-prakarana-prakaraṇa-pāda-śāstra* から類推してジュリアンは梵名を *vibhāṣā-prakaraṇa-pāda-śāstra* かとしている。前注の『入阿毗達磨論』二巻と同一書と見る説もある［羽溪：『西域之仏教』四六二ページ］。

四　無余涅槃　本巻の六・三注五参照。

五　六神通　巻二の四・六注五参照。

六　三界の欲を断つ　巻二の四・六注四参照。

七　火光定　身体より種々の光の火炎を出して入る定（三昧(さんまい)）。また火光三昧・火界定などともいう。『摩訶僧祇律』三二に、「神足を以て虚空に上昇し、火光三昧に入り、以て自ら闍維(だび)（荼毘）して般涅槃に入る」とある状と同じで、ここでは自ら荼毘に付するのをいうのであろう。

八　大食羅漢の説話　『大毗婆沙論』四二にも、仏舎利を迦湿弥羅に運んだ象がその功徳で人界に生まれ、仏門に入り羅漢果を得たが、やはり大食であったという話を載せている。

六・一〇　**商林伽藍と円満論師**　［迦湿弥羅国の］王城より西北へ行くこと二百余里で商林伽藍(注一)に至る。布剌拏(プールナ)（原注　唐に円満という）論師(注二)がここで『釈毗婆沙論』(注三)を作ったのである。

注

一　商林伽藍　ジュリアンは買林 *mai-lin* と読み、Skt. *vikritavana* か、と推定する。ビールもテキストに商林とあるのは買林の誤りであろうとして、ジュリアンの推定梵語を採っている。ワッターズは商林は「商人の林」の意としている。しかし、何れも現在の何処であるかは説明していない。未詳として残す。

二　布剌拏（……）論師　布剌拏 *puo°-lât。-。na* : Skt. *pūrṇa*. 旧訳に富楼(る)那(な)・富婁那・分耨とし、新訳に富囉拏とも。原注のごとく円満と訳す。この論師については他書に未見。詳細不明。

三　『釈毗婆沙論』　この書名も経録に見当たらない。漢訳はないようである。ビール、ワッターズ共に『毗婆沙論』の注釈というまでのこととして、固有の書名とは見ない。未詳。

六・一一　**仏地羅論師**　［王］城より西へ行くこと百四、五十里、大河の北、山の南に接するところで、大衆部の伽藍に至る(注一)。僧徒は百余人。昔、仏地羅(ブッディラ)（原注　覚取）論師(注二)がここで『大衆部集真論』(注三)を作った。

これより西南して山を踰(こ)え険処を渉(わた)り、行くこと七百余里で半笯(パルノー)（原注　奴故反 *nuo°*。）蹉(ツァ)国（原注　北印度の境）に至る。

注

一　［王］城より……大衆部の伽藍に至る　新城より百四、五十里（約三十マイル）の大河（Jhelum 河）沿いの地点とすれば、今の Bāramūla から Rāmpur 辺りの地域であろうが、北岸にそれと思われる寺址は報告されていない。有部の勢力を占める迦湿弥羅国には珍しい記事である。

二　仏地羅（……）論師　この原注は麗本にはなく、宋本以下にあるもの。仏地羅 *b'i̯uət。-d'i°。lâ* : Skt. *buddhila*. 意は原注のごとく覚取［『荻原雲来文集』九五六・九五九ページ］。この論師についても何も分からない。

三　『大衆部集真論』　この書も今は伝わっていない。大衆部の『集真論』という読み方の書が多いが、今は六字とも書名とみて読んだ。ジュリアンは集真論の梵名を *tattvasaṃcaya śāstra* か、とする。

七　半笯蹉国

半笯蹉国(パルノーツァ)(注一)は周囲二千余里ある。山や川が多く耕地は狭い。植えつけはその時に従って行なわれ、花や果(なりもの)は繁茂している。甘蔗(かんしゃ)は多いが葡萄(ぶどう)はない。菴没羅(アームラ)果(注二)・烏淡跋羅(ウドゥンバラ)(注三)・茂遮(モーチア)(注四)などの果樹は、家ごとに植えて林をなしており、その味を珍重している。気候は熱く、風俗は勇猛である。衣服の材料は多くは㲲(もめん)布である。人の性格は質直で、篤(あつ)く三宝を信じている。伽藍は五ヵ所あるがほとんど荒れはてている。大君主はおらず迦湿弥羅国に隷属している(注五)。

城の北の伽藍には少しく僧徒がいる。伽藍の北には石窣堵波があり、不思議なことが実に多い。

ここから東南に行くこと四百余里で曷邏闍補羅(ラージャプラ)国（原注　北印度の境）に至る。

注

一 半笯蹉国　髙麗本は半笯嗟に作るが、『慧琳音義』八二に「半笯蹉　音は蹉。梵語、国名なり」とあり、宋本も蹉に作る故、今は蹉字を採る。半笯蹉 *puân°-nuo°-ts'â* : **pānōtsa* < Skt. *parṇotsa* [Stein : *Rājat.*, II. 423 ; 荻原 :『梵和』七六二ページ（ただし出所は不記）]。スリナガルより西進し、Bāramūla, Rāmpur を通り、Uri より約四十キロ程南下したところ、現在のプーンチ Pūnch (Kashmiri form 'Prūnts') のこと [Cunningham : *A.G.I.*, 147]。

二 菴没羅果　巻二の一・一三注三参照。

三 烏淡跋羅　宋本は淡字を談字に作るが、淡・談は同音。また巻二の一・一三に毯に作る。淡・毯は母音の開度にやや広狭があるのみ。恐らく方音の差を示すものではあるまい。巻二の一・一三注九参照。

四 茂遮　巻二の一・一三注一〇参照。

五 迦湿弥羅国に隷属している　本巻の三・一注四参照。

八　曷邏闍補羅国

曷邏闍補羅国（注一）は周囲四千余里ある。国の大都城は周囲十余里ある。極めて険固で山や阜が多い。河原は狭隘で、地利は豊かではない。産物・気候は半笯蹉国と同じである。風俗は烈しく、性質は勇敢である。国には君主はなく、迦湿弥羅国に隷属している。伽藍は十ヵ所、僧徒は少ない。天祠は一ヵ所、外道は非常に多い。

濫波国よりこの地に至るまで、顔容は醜悪で性情も粗暴、言語も野卑で礼義は軽薄である。印度の正しい（注二）［あり方を伝える］境域ではなく、辺鄙な地の正しくないあり方である。

ここから東南して山を下り水を渡り、行くこと七百余里で磔迦国（原注　北印度の境）に至る。（注三）

注

一 曷邏闍補羅国　半笯蹉国 Pūnch より東南四百余里の曷邏闍補羅 *rât-lâ°-źia°-puo-lâ* : Skt. *rājapura* 国は、今の Rajaori である [Cunningham : *A.G.I.*, 148 : Stein : *Rājat.*, II. 433 ; Law : *H.G.A.I.*, p.119]。

二 濫波国より……正しくないあり方である　玄奘のいう北インドの中、インダス河以北のいわゆる西北インドの特徴については、巻二の二注一参照。

三 曷邏闍補羅国より磔迦国へ至る道筋の二日目に闍耶補羅城 Jayapura に宿泊し、翌日そこを出発したが、途中の大林中で玄奘等の一行は五十余人の盗賊に襲われ、身ぐるみ奪われ危うく命までも落とすところであった。この一部始終は『慈恩伝』巻二に詳しい。

大唐西域記　巻第三

大唐西域記 巻第四 十五国

三蔵法師玄奘奉 詔訳
大捴持寺沙門辯機撰

一 磔迦国

一・一 概観 磔迦国(注一)は周囲一万余里ある。東は毗播奢(注二)河に拠り、西は信度河に臨んでいる。(注三)国の大都城(注四)は周囲二十余里ある。粳稲に適し宿麦が多い。金・銀・鍮石・銅・鉄を産する。気候は暑熱で土地にはつむじ風が多い。風俗は粗暴で言辞は野鄙である。衣服は鮮白でいわゆる憍奢耶衣(注五)・朝霞衣(注六)などである。少しく仏法を信じてはいるが、多くは天神に奉事している。伽藍は十ヵ所、天祠は数百ある。この国より先は数多く福舎(注七)があって貧困者を救恤しており、或いは薬を施したり或いは食を施したりし、飲食のたくわえは旅行者にとって心配はない。

注

一 磔迦国 磔迦 *ṭok.-.ka* : Skt. *ṭakka* (-*deśa*) [Stein : *Rājat.*, V. 150 (I, p.205) ; Beal : *Records*, I, 165]。

二 毗播奢河 毗播奢 *.b'ji-puâ°-.śia* : Skt. *vipāśā* [Pāṇini : *Aṣṭādhyāyī*, 4. 2. 74]。今の Biās 河である。西方文献には Hyphasis [Arrian, vi. 8], Hypasis [Pliny, vii. 17. 21], Bibasis [Ptolemy, vii. i. 26, 27], Hypanis [Strabo, XV] などと書かれている [Smith : *Dict. of Gr. and Rom. Geog.*, 1105 ; Law : *H.G.A.I.*, 134]。

三 磔迦国は本書によれば毗播奢河 Vipāśā (Biās) と信度河 Indus の間を占めることになるが、この信度河は今の五河最西のインダス河ではあり得ない。『慈恩伝』に見える旃達羅婆伽河 Candrabhāga 即ち今の Chenāb 河を指したものであろうか。

四 国の大都城 都市名を記さないが、次節に見える都市を「奢羯羅故城」とするのを見れば、或いは「奢羯羅新城」とあるべきものか。

五 憍奢耶衣 巻二の一・六注三参照。

六 朝霞衣 極めて薄い綿布で、あたかも朝霞のごときものとの喩え。『唐書』礼楽志に外国人が歌舞する状を記す中に、「扶南楽は舞者二人、朝霞を以て衣となす」とある［堀：『解説』二八八］。

七 福舎 巻十二の一八・五に「奔穰舎羅 唐に福舎と言う」とある。Skt. *puṇya-śāla*. また『慈恩伝』巻二に「達摩舎羅 唐に福舎と言う。王の教えて立てるところ、行旅を招延し、貧乏に給贍せしむ」とある。

一・二 奢羯羅故城とミヒラクラ王 大城の西南十四、五里で奢羯羅故城(注一)に至る。垣根は壊れているが、基礎はまだしっかりしている。周囲は二十余里ある。その中にさらに小さな城の周囲六、七里のものを築いている。住民は富裕で、ここがこの国の故都である。数百年前に摩醯邏矩羅(原注 唐に大族と言う)(注二)という王がいた。この城に都して治め、諸印度に王となった。才智あり、性質勇敢であり、隣境の諸国は臣伏しないものとてはなかった。政務の余暇に仏教を学ぼうと思い、僧の中から一人の智徳あるものを推薦させた。とこ

ろが、僧徒たちは命に応ずるものはなかった。少欲で自然に人を化するほどのものは聞達を求めようとはせず、博学で明敏な僧も［王の］威厳を懼(おそ)れるところがあった。ちょうどこの時、王家に昔仕えていた僮僕(めしつかい)が出家をしてすでに久しく、弁論さわやかに話に実があり筋の通っているものがいたので、僧たちはいっしょになって推挙して王命に応じた。王は、

「私は仏教を尊敬して遠くにまで名僧を求めたのに、僧たちはこの隷(しもべ)を推挙して私と話をさせようとした。私は常に僧の中には賢明なる人が肩を並べるほど多くいるであろうと思っていた。今になってはっきり分かった。どうして［仏法を］尊敬できようか」

と言った。そこで五印度に令して仏教に関係するものはみなとり壊し、僧徒は放逐して少しも残すところがなかった。

注

一　奢羯羅故城　奢羯羅 ˳śịa-kịpt.˳-˳lâ : Skt. *śākala*, Pa. *sākala*, Pkt. *sāgala* は、また奢掲羅・沙柯羅・沙竭とも書かれる。古代の Madradeśa の首都である［*Mahābhārata*］。古くは sāṅkala［Pāṇini, iv. 2. 75］, saggala［Arrian : *Anab.* v. 22-4］, Sagala, otherwise called Euthymedia［Ptolemy, vii. i, 46］と書かれる都市と同一視されて、カニンガムにより Sāṅglawāla Tiba (Jhang district ; 31° 43′ N., 73° 27′ E.) に比定された［A. G. I., 206］が、今日では Śākala と Sangala は別の都市であるとされ、奢羯羅は今の Śiālkoṭ であるとされる［Law : *H. G. A. I.*, 122 ; Smith : *Early Hist.*, p.78, note 2 ; Majumdar's Note, in *A.G.I.*, p.686 ; Dey : *Geogr. Dict. of Anc. & Med. India*, p.173 (土地の伝説を資料とし有益)］。前二世紀のギリシア系のメナンドロス Menandros (弥蘭陀(ミリンダ) Milinda) がインド僧竜軍(ナーガセーナ) Nāgasena と教理問答をした［*Milinda-pañha* ; 那先比丘経］のは Śiālkoṭ であるともいい、また Bari-Doab であるともいう［中村 :『インド古代史』下六二・四八四ページ］。

二　摩醯邏矩羅（……）　摩醯邏矩羅 ˳muâ-˳xiei-lâ°-°kịu-˳lâ : **maherākula* は、通常白フン（エフタル?）のインドのアッティラ大王と呼ばれている残虐な王 Mihiragula（在位五一五—五四〇?）であるとされているが、今のところ確証はない。碑文や貨幣に見える かれの名は Mihiragula「太陽の花」であり、Mihirakula はその後に梵語化した形で、意味も「太陽の種族」である（*Rājat.*, I, p.43 に見える）。玄奘の訳語「大族」に当たる梵語は Mahākula であり、この原名或いは 梵語化した名には対応しない。玄奘の挙げた音訳字はこれらの原語の転訛したものであろうが、種々の推測をなされているものの、なお 確実なものは 管見に 入らない［*Rājat.*, op. cit. ; Smith : *Early Hist.*, p.335 ; U. Thakur : *The Hūṇas in India*, pp. 132 ff.］。Mihiragula は五一五年に即位し Śiālkoṭ に都したことは確実であるが、玄奘より僅々数十年以前の 事跡を 玄奘が「数百年前」とするのは、如何に「史書なき印度」にしても不審である。漢訳仏典を見るに『付法蔵因縁伝』（四七二年訳）巻六に弥羅掘、『蓮華面経』（五八四年訳）巻下に、寐吱曷羅倶邏なる王が 罽賓で仏法を 破壊したことを記すが、この両書の王は 年代より見て 五一五年に 即位した Mihiragula ではないはずである［羽溪 :『西域之仏教』四七〇ページ ; 堀 :『解説』二九三ページ以下］。或いは玄奘の耳にした伝説に新旧の混同でもあるのであろうか。

一・三　幼日王の征討　摩掲陀(マガダ)(注一)国の婆羅阿迭多(バーラーディティヤ)王（原注　唐に幼日という）(注二)は、仏法を篤(あつ)く敬い人民を愛育していたが、大族王が無法な刑罰や残虐な政治をするので、自ら国境を固め［大族王に］朝貢しなかった。そこで大族王は軍を整え征伐しようとした。幼日王はその噂(うわさ)を知り群臣に、

「今、敵が攻めて来るのを耳にしているが、その兵と戦うには忍びない。どうか役人たちが私の戦わないことを赦(ゆる)し罪しないでほしい。この身さえくれるならば草野に身を潜めよう」

と言った。そのことを言い終わるや宮殿を出て山野に身をゆだねた。国中の人々は国王の恩に感激し国王のあとに従うもの数万余人あり海中の島に身を隠した。大族王は軍隊を弟につけてやり海を渡り征伐させた。幼日王は地の険阻なところを守り身軽な服装の兵士で敵を誘い戦い、金鼓を一打ちするや、思わぬ兵が四方に現われ、大族を生け捕りにし反対に呼びよせて対面することとなった。大族王は道をはずしたことを心に恥じ、衣服で顔面を被い隠していた。幼日王は玉座に坐し群官はその周囲を守護した。そこで家臣に命じ大族に、

「汝はその顔の衣を取れ。私は話したいことがある」

と告げさせると、大族は答えて、

「主従が位置を取り換えても敵同士が向かい合っているのである。友好の間柄でないのにどうして顔を出して話せようか」

と言った。再三告げたが、どうしても従わなかった。そこで命令を宣し大族の罪を責めて、

「三宝の福田は、四生が依り所にするものである。かりそめにも豺狼のごとき意をほしいままにし、りっぱな行業を破壊してしまい、身にそなわった福も汝の身を助けず私に捕われてしまった。罪状は赦免すべきところなく刑罰に従うべきである」

と申し渡した。当時、幼日王の母は博聞強記で占卜に通達していたが、大族を死刑にするということを耳にし、急いで幼日王に、

「私はかねて大族は姿も珍しく智恵もあると聞いていた。一度会って見たい」

と告げさせた。幼日王は大族を引き連れて母の宮殿に行くように命じた。幼日王の母は、

「ああ、大族よ、どうか恥ずかしがらないように。世は無常で名誉と恥辱は世の常です。私はちょうどあなたの母のようなもので、あなたも私の子供のようなものです。どうか顔から衣を取り去り、顔を向け合い話をしましょう」

と言うと、大族は、

「昔は敵国の君主であり、今は生け捕りにされた捕虜であります。帝王の仕事を駄目にし、先祖の祭祀を滅ぼしました。上は祖先の霊に恥じ、下は人民に申し訳ありません。まことに人に合わせる顔もなく、仰いでは天を見、俯しては地に向かい恥ずかしく思っています。自ら命を絶つこともできず、かくは衣を被っております」

と言った。王母は、

「興廃は時により、存亡は運があります。心を以て物を整えるならば得失ともに心から忘れましょうが、物を以て心を斉えるならば譏りと誉れはかわるがわる起こってきます。どうか宿業の報いというものを信じ、時の変化に逆らわないようになさい。被り物を取り去り向かい合って話をされたならば、あるいは身命は全うすることができるかも知れません」

と言うと、大族は礼を述べて、

「かりそめに菲才を以て帝王の仕事を嗣ぎましたが、司法行政ともに道をはずし国の基をつぶしてしまいました。縄目にあっている中にあってもなお旦夕に迫った命を貪っています。お言葉を承り面衣を去り御厚恩にお礼申し上げます」

と言った。そこで被っていた衣を取り去りその顔を出した。王母は、

「あなたは折角自愛なさり、天寿を全うするように」

と言った。そこで幼日王に、

「昔の書物に過を宥し生を好むという教訓があります。(注三)今、大族王は悪業を積むこと久しい間ではありますが、かれの余福はまだ尽きてはおりません。もしもこの人を死刑にするならば、十二年の間は人民

は青菜のような顔を合わせることになりましょう。(注四)とすればあなたに中興の気質があるとしても、結局は大国の王となることはなく、きっと北方に拠って小さな国土を保有するだけでしょう」

と告げた。幼日王は慈母の命を承け国を失った君主を愍れみ、若い女を妻とさせ特別の礼遇で接待した。かれの生き残った兵士を集めさらに護衛をふやしてやった。まだ海中の島から出ないうちに大族王の弟は自国に還り自ら王位に即いた。大族は位を失い、山野に隠れながら北へ行き迦湿弥羅国に身を投じた。迦湿弥羅王は丁重に礼遇をし、国を失ったことを愍れみ土地を封じてやった。歳月がたち、大族は領土の人民を率いて迦湿弥羅王を欺き殺し自らその王位に即いた。その戦勝の威光に乗じ西して健駄邏国を討とうとし、兵を潜め武器を隠してその王を殺してしまい、王族・大臣も根こそぎみな殺しにしてしまった。窣堵波を壊し僧伽藍を廃止させること、凡て一千六百ヵ所であった。殺した兵士の他に九億人もいたが、みな誅罰して一人も残さないようにしようと思った。その時、輔佐の役人たちはみな諫言して、

「大王の威光は強敵をも震えあがらせ、兵士は鋒を交えないほどです。敵の首領は誅罰しても、人民に何の咎がありましょうか。どうかこの私たちでもって代わりに死なせてください」

と言ったが、王は、

「汝らは仏法を信じ冥福を尊重するから、仏果を成じ本生譚にあるような話をまねて、私の悪行を未来世に伝えようと思っているのか。汝らは自分たちの位に立ちもどり二度と言うことなかれ」

と言った。そこで三億の上流の人を信度河の流れに臨んで殺し、三億の中流の人を信度河の流れに沈めて殺し、三億の下流の人を「奴隷として」兵士に分け与えた。そこでその滅亡させた国の財貨を持ち、軍隊を整え「迦湿弥羅に」帰還したところ、まだ年が変わらないうちに早くも命をなくしてしまった。その時、空は雲霧で真っ暗になり大地は震動し強風が吹きまくった。すると證果を得た人々は愍れみ嘆いて、

「罪なきものを不法に殺し仏法を壊滅し、無間地獄(注五)に堕ち流転してなお終わらないのだ(注六)」

と言った。

注

一 摩掲陀国 Magadha 国、巻八参照。

二 婆羅阿迭多王（……） 婆羅阿迭多 ◦*buâ*-◦*lâ*-◦*'â-d'iet*-◦*tâ* : **bāla-āditta* (Skt. *bālāditya*, *bāla-āditya*,「昇ったばかりの太陽」、幼日に当たる)。Skt. *bālāditya* の称号をもつ王は何名かいる。その中で、当面の王は Narasiṁha Gupta であるとする説と Bhānu Gupta とする説がある。系譜関係も出てくる巻九の三・三を参照。

三 昔の書物に……があります 原文の「先典に訓あり、過を宥し生を好むと」は、『書経』大禹謨の「過を宥すに大とするなく、故を刑するに小とするなし。罪の疑わしきは惟れ軽くし、功の疑わしきは惟れ重くす。其の不辜を殺すよりは、寧ろ不経に失せん。生を好むの徳、民心に洽し」の文による。

四 十二年の間は……になりましょう この文は『礼記』王制の「三年耕せば必ず一年の食あり。九年耕せば必ず三年の食あり……凶旱水溢ありと雖も、民に菜色なし」による。

五 無間地獄 阿鼻地獄ともいう。『涅槃経』一九に「阿とは無を言う。鼻とは間に名づく。間として暫くの楽もなき故に無間と名づく」とあり、苦を受けること間断もないという意。八大地獄の一で地獄の最底にあり、極悪の者が堕ちる所。

六 流転してなお終わらない 生死の海になおあり、彼岸の涅槃に達しないこと。

一・四　奢羯羅故城近辺の遺跡　奢羯羅故城中に一つの伽藍がある。僧徒は百余人、みな小乗の法を学んでいる。世親菩薩が、昔この中で『勝義諦論』を作製された。(注一)その側の窣堵波の高さ二百余尺のものは、過去四仏(注二)がここで説法された所である。また、四仏が散策された遺跡の所もある。

伽藍の西北五、六里に窣堵波の高さ二百余尺のものがある。無憂王が建てたものである。過去四仏が説法された所である。

新都城の東北十余里で石窣堵波に至る。高さ二百余尺。無憂王が建てたものである。これは如来が北方へ行化して途中で止まられた処である。『印度記』(注三)に「窣堵波中にたくさん舎利がある。斎日に時によっては光明を放つことがある」と言っている。

ここから東へ行くこと五百余里で至那僕底国（原注　北印度の境）に至る。

注

一　世親菩薩が……作製された　世親菩薩については巻五の二参照。『勝義諦論』という書は今日漢訳蔵経中には見当たらない。梵名 Paramārtha-satya Śastra と還元している [Julien, Beal]。

二　過去四仏　巻二の四・三参照。

三　『印度記』　これを『先賢記』とする日本の伝本もあるが、中国刊本は『印度記』とする。今日はもちろん存しないものである。

二　至那僕底国

二・一　概観　至那僕底国(注一)は周囲二千余里ある。国の大都城は周囲十四、五里ある。農作物は繁茂し、果樹はあまりない。人々は業に安んじ、国の資財は豊富である。気候は暑く、人々は気力がない。学問は真・俗ともに学び、信仰は邪・正兼ね信じている。伽藍は十ヵ所、天祠は八ヵ所ある。(注二)

注

一　至那僕底国　至那僕底 *tśi°-ₒna-b'uk-ₒ°tiei* : Skt. *cīnabhukti*. 至那は支那・脂那と同様な音訳漢字である。漢人所領の意。古くは Chinapati を表わすとされた [Julien, Cunningham]。アムリツァー Amritsar から Siālkot（奢羯羅）へ行く途中の Chiniyari に当たろう [Mirza Muhammad Beg] とされている [Sastri's Note, in *C.A.G.I.*, 687]。これも以前は Patti [Cunningham : *A.G.I.*], Ferozpore [Smith's Appendix, in *On Y. Ch.*] などに比定された。

二　『慈恩伝』巻二によれば、玄奘は至那僕底国の突舎薩那寺 (Skt. *tosasana-vihāra*, 楽授寺) で毘膩多鉢臘婆 (Skt. *vinitaprabha*, 調伏光) につき阿毘達磨・因明等を十四ヵ月にわたり学んだ。

二・二　国号の由来　昔、迦膩色迦王が天下を統治するや、その評判は隣国にまで鳴りひびき、威光は外国をも被った。河西の外国人たちは威を恐れて人質を送った。迦膩色迦王は質子を得たので手厚くもてなし、［冬・夏・春秋の］三時期に住処を変え、［歩・馬・車・象の］

四兵で警護させた。[注一] この国は冬の住処であった。それで至那僕底（原注　唐に漢封と言う）という。質子が居たのに因んで国号としたのである。この境域より先の諸印度に及ぶまで、土地には梨・桃がなかったが、質子が植えたので、それに因み桃を至那你（原注　唐に漢持来──漢より持ち来たれるもの──と言う）[注二]といい、梨を至那羅闍弗呾羅（原注　唐に漢王子と言う）[注三]と言っている。こういうわけでこの国の人は東土（中国）を尊敬し、かわるがわる［玄奘を］指して「私たちの先王の本国の人だ」と語りあっていた。

注

一　迦膩色迦王の時代の河西の質子については、巻一の三八・一参照。

二　至那你（……）　至那你 *tśi°-ₒnâ-°ni*：Skt. *cīnani*.

三　至那羅闍弗呾羅（……）　弗呾羅の羅字は諸本ともに邏に作るが、布剌拏梅呾麗衍尼弗呾羅（本巻の七・三）・慎那弗呾羅（巻十一の十七）を正しきものと見て、今訂正した。至那羅闍弗呾羅 *tśi°-ₒnâ-ₒlâ-źia-pi̯uət-ₒla*：Skt. *cīna-rājaputra*. 今日もこの地方で栽培する梨に Chinishaftārū と呼ぶものがある［Cunningham：*A. G. I.*, 222］ということである。

二・三　迦多衍那の遺跡

大城より東南へ行くこと五十余里[注一]で答秣蘇伐那僧伽藍（原注　唐に闇林と言う）[注二]に至る。僧徒は三百余人、説一切有部を学んでいる。人々の威儀は慎み深く穏やかで、徳は高く行ないも清らかである。小乗の学を特に博く研究している。賢劫の千仏[注三]はみなこの土地で天人たちを集めて甚深の妙法を説かれたのである。釈迦如来が涅槃に入られた後の第三百年代に、迦多衍那（原注　旧に迦旃延と言う。訛なり）[注四]論師はここで『発智論』[注五]を作製せられた。

闇林伽藍中に窣堵波の高さ二百余尺のものがある。無憂王が建てたものである。その側には過去四仏が坐られた処と散策された遺跡の場所がある。小窣堵波と大きな石室の数々は、魚の鱗のように次々と目に入り、その数をはっきりと知り得ないほどである。これらはみな、劫初以来、多くの證果を得た聖人たちのもので、ここで入滅された人は一いち挙げ得られないほどであり、その歯や骨は今もなおある。山を繞る伽藍は周囲二十里ほどで、仏の舎利を収めた窣堵波は数百千カ所もあり、その隅を連ね影を接するほどである。

ここから東北へ行くこと百四、五十里で闍爛達羅国（原注　北印度の境）に至る。

注

一　五十余里　諸本ともに五百余里に作るが、『慈恩伝』に従い五十余里とした。周囲二千余里の国における首都からの距離としては、五百余里は大きに過ぎようからである。

二　答秣蘇伐那僧伽藍（……）　答秣蘇伐那 *tập-muât-ₒ-suo-b'i̯wɐt-ₒ-ₒnâ*：*tamasu-vana*, 原注の語義「闇林」に当たる梵語は *tamasā-vana*［Edgerton：*BHSD*, 250 a］或いは *tāmasa-vana* である。カニンガムは今のアムリツァーの南南東約五十キロにある Sultānpur に当てている［Beal：*Records*, I, 174 (27)；Dey：*Geog. Dict. of Anc. and Med. Ind.*, 258；Law：*H. G. A. I.*, 131］。この語の原形は Skt. *tapo-vana*「苦行林」であろう［L. Joshi：*Studies in the Buddh. Culture of India*, pp. 27-8］とするのは何によるのであろうか。

三　賢劫の千仏　巻二の三・三の注三参照。

四　迦多衍那（……）論師　迦多衍那 *ₒka-ₒtâ-°i̯äṅ-ₒnâ*：**kātāyana*（Skt. *kātyāyana*, Pa. *kaccāyana*）［Edgerton：*BHSD*, 176 b］。旧訳の迦旃延は **kātyayan*, **kāccyāyan* のごとき形に当たろう。また迦底耶夜那・迦陀衍那とも。婆羅門十姓の一でインド貴族の名。今、ここの迦多衍那は西北インドの仏教を宣揚した大論師として著名であるが、出世年代については諸書に異論がある。大約西紀前後の人である。

五　『発智論』『阿毘達磨発智論』二十巻のこと。説一切有部の体系を記し

たもので、巻三の六・四に見える迦湿弥羅における五百大阿羅漢による いわゆる第四結集の成果『大毗婆沙論』二百巻は、この書に対する注解である。

三　闍爛達羅国

闍爛達羅国(注一)は東西千余里、南北八百余里ある。国の大都城は周囲十二、三里ある。農業によく粳稲が多い。林樹は枝をひろげ花・果は繁茂している。気候は暑熱で風俗は剛猛である。容貌は鄙しいが、人々は富裕である。伽藍は五十余ヵ所、僧徒は二千余人いる。大小の二乗ともに行なわれ、[人々はそれぞれその一を] 専門に学習している。天祠は三ヵ所、外道は五百余人おり、みな塗灰外道の人である。この国の先王は外道を崇敬していたが、その後、羅漢に出遇い正法を聞き信仰するようになった。それで中印度王はかれの信仰が篤いのを理解し、五印度国の三宝のことは一切かれに総監させた。王は人を区別することなく愛憎を忘れ、僧徒を監督視察したが、上手に善悪を見きわめた。こういうわけで道徳のすぐれた人は真心を尽くして尊敬し、戒行を犯すものは深く責任を問い罰を加えた。また聖跡のある所はいずれも表彰造営した。窣堵波あり、僧伽藍あり、印度国内、手の行き届かないところはなかった。

ここから東北して峻しい山を踰え渓谷を越え、危なっかしい道を過ぎ険しい路を通り(注二)、行くこと七百余里で屈（原注　居勿反 *kiuət*。）露多国（原注　北印度の境）に至る。

注

一　闍爛達羅国　闍爛達羅 *ʑia-lan°-d'at.-.la*：Skt. *jālaṃdhara*. 今のアムリツァーの東南東にある Jullundur (Jalandhar) に当たる。また惹爛陀羅・左爛陀羅とも。『慈恩伝』によるに、玄奘は那伽羅駄那寺 Nagaradhana に至り、そこの学僧旃達羅伐摩（月冑）Candravarman のもとで四ヵ月間『衆事分毘婆沙』(『阿毗達磨品類足論』) を学んだ。また玄奘はその帰途にもこの国の王烏地多 Udita の優遇を受けた。

二　ここから東北……険しい路を通り　今の Beas 河の上流、ヒマラヤ山麓の屈曲した道を辿った状況を述べたものであろう。

四　屈露多国

屈露多国(注一)は周囲三千余里あり、山が四方をとりまいている。国の大都城(注二)は周囲十四、五里ある。土地は肥沃で農業は適切な時に植えつけをし、花や果は繁茂し草木はよく滋っている。雪山に境を接しているので珍しい薬が多く、金・銀・赤銅や火珠・雨石(注三)を産出する。気候は次第に寒く、霜や雪が少し降る。人の容貌は醜く、頸にこぶがあったり脛がはれたりしている。性質は剛猛で勇気を尚ぶ。伽藍は二十余ヵ所、僧徒は千余人いる。多くは大乗を学び、少しく[少乗の] 諸部を習っているものがある。天祠は十五ヵ所あり、異道の人々が雑居している。巌石によりかかり山嶺を拠りどころにし、石室はお互いに距てて住んでいる。羅漢が居る所もあり、仙人が住む所もある。この国には窣堵波がある。無憂王が建てたものである。昔、如来はかつてこの国に来られ、説法し人を済度されたことがある。遺跡には記がある。

ここから北路千八、九百里、道路は危険な所を通り、山を踰え谷を越えると洛護羅国(注四)に至る。［また］この北二千余里、道は困難に、風は寒く雪が飛ぶ［所を通り］秣邏娑国（原注　また三波訶国と謂う(注五)）に至る。

屈露多国より南へ行くこと七百余里、大きな山を越え大きな河を渡り、設多図盧国（原注　北印度の境）に至る。

注

一　屈露多国　屈露多 *kịuət˳-luo°-˳tâ*; **kuluta*. Beas 河の上流、今の Kangra の Kulū 地方、古くは Kuṇidas という地方であり、ブラーフミー文字貨幣・カロシュティー文字貨幣共に出土している [Law: *H.G.A.I.*, 101; D.C. Sircar: *Geography of Ancient and Medieval India*, p.24, Note 3; E.J. Rapson: *Indian Coins*, p.12]。

二　国の大都城　この地方の今日の首都は Sultānpur であるが、旧都は今日もなお Nagar（都市・都城）と呼ばれているという [Cunningham: *A. G. I.*, 163]。

三　雨石　諸書に鍮石と同じ義に解しているが、その依る所を知らない。或いは隕石ともいう（『南斉書』祥瑞志「天、石を雨ふらして地に墜つ」）。未詳。

四　洛護羅国　洛護羅 *lâk˳-γuo°-˳lâ*. 従来の研究者はこれを西蔵人の言う Lho-yul 即ち Kulū およびその近辺の人々が称する地名 Lāhul であるとしている [Beal: *Records*, I, 177 (32); Cunningham: *A.G.I.*, 164, 684]。これに対して西蔵語学者の Jäschke は、これはインド人の称呼で、西蔵人自身は Gár-ža と言っていると反対している [*Tib.-Eng. D.*, 676]。称呼の何れかは別として、古名に Lāhul があるとすれば、玄奘はこれを Lahūla のような形としたものと見られよう。疑問として残したい。

五　秣邏娑国（……）　秣邏娑 *muât˳-lâ°-˳sâ*: Tib. *mar-sa*. 即ち Tib. *mar-yul*（低地、Ladak の古今にわたる通名）[Sastri's Note, in Cunningham: *A. G. I.*, 684] とするが、これには異論もある［佐藤・『古代チベット史研究』上一九九ページ］。原注中の三波訶についても定説はない［佐藤・同上書一五〇ページ以下、一九九ページ］。

五　設多図盧国

設多図盧国(注一)は周囲二千余里あり、西は大河に臨んでいる。国の大都城(注二)は周囲十七、八里ある。農業は盛大で、果実は繁茂している。金・銀が多く、宝石を産する。服は真っ白なものを用い、裳は派手なものを身につける。気候は暑熱で、風俗は温和である。人々の性格は善良で、上下の間には秩序がある。篤く仏法を信じ、真心をもって一心に尊敬している。王城の内外には伽藍が十ヵ所あるが、庭・建物は荒れはて僧徒も少ない。城の東南三、四里の所に窣堵波の高さ二百余尺のものがある。無憂王が建てたものである。その側に過去四仏の座所および散策された遺跡の所在地がある。

さらにここから西南して行くこと八百余里で波理夜呾羅国（原注　中印度の境）に至る。

注

一　設多図盧国　設多図盧 *śi̯ät˳-˳tâ-˳d'uo-˳luo*: Skt. *śatadru* ("flowing in a hundred branches", also called *śutudri, śutudru, śitadru*) [M. M. Williams: *S.-E. Dict.*, 1049 b]。今の Sutlej, Satlej 河の古名。前項末の「大山を越え大河を済る」はヒマラヤ山塊の西南突出部を越え、Sutlej 河を東南に渡ることを意味する。西方文献の Hesidrus (or Hesudrus?) [Pliny, vi. 17, 21], Zaradros or Zadadrēs [Ptolemy, vii, I, 27. 42] として現われている。

二　国の大都城　今の Sarhind ("frontier of Hind") であろうとされている [Cunningham: *A.G.I.*, 167]。

* Purāṇa などに見えるいわゆる「五印度」区分の中印度 Madhyadeśa にこれより入る。

中印度境

六　波理夜呾羅国

波理夜呾羅国(注一)は周囲三千余里ある。国の大都城(注二)は周囲十四、五里ある。農業に適し宿麦が豊富である。珍しい種類の稲(注三)があり、種子を播いてから六十日で穫り入れる。牛・羊は多いが、花・果は少ない。気候は暑熱で風俗は剛猛である(注四)。学芸を重んぜず、外道を信奉している。王は吠奢種であり、性質勇敢に武略に富んでいる。伽藍(注五)は八ヵ所あるが損壊が甚だしい。僧徒は少なく、小乗を学習している。天祠は十余ヵ所あり、異道の人は千余人いる。

これより東へ行くこと五百余里で秣菟羅国（原注　中印度の境）に至る。

注

一　波理夜呾羅国　波理夜呾羅　*◦puâ-°lji-ia°-tât◦-◦lâ*: Skt. *pāriyātra*. 今のデリーの西南百五マイル、ジャイプルの北四十一マイルの地点にあるバイラート Bairāt, Virāṭa に当たる。古代のマツヤ Matsya 国。

二　国の大都城　バイラートである。低い赤土の丘に囲まれた円い谷の真中に今の町がある。銅山があることで長く知られている。現在の市街は遺址の堆土の上に作られたもので、周囲の野には遺物が多い。この町の東北一マイルのところにある山の岩にアショーカ王の小磨崖詔勅があり、また町の西南一マイルの丘の上で発見された詔勅は現在カルカッタの博物館に収蔵されている。当地の遺址の発掘によりギリシア貨幣、インド・グリーク貨幣や、後一世紀ころのものと思われる布地の類を発見した [D. R. Sahni: *Archaeological Remains and Excavations at Bairāt, Jaipur State*, 1937]。

三　珍しい種類の稲　早稲の特殊なものであろう。交趾支那種の陸稲かと言われる [Julien: *Mém.*, p. 206 (3)]。

四　風俗は剛猛である　この地方の住民は古くより勇敢であったと見え、『マヌの法典』(七の一九三) に合戦の先陣に立つものの一に数えられている。

五　伽藍　町の西南一マイルの Calcutta-Bairāt 詔勅が発見された丘の上には、今も仏教寺院の遺跡がある。

七　秣菟羅国

七・一　**概観**　秣菟羅国(注一)は周囲五千余里ある。国の大都城は周囲二十余里ある。土地は肥沃で農業に努力している。菴没羅果(注二)は家ごとに植えていて林をなしている。同一名ではあるけれども二種類あり、小さい方は若いときは青く熟すると黄色になり、大きな方は終始青色である。細い斑の入った氈と黄金を産出する。気候は暑熱で風俗は善良である。来世によかれと行ないをよくし、徳を重んじ学問を尊敬する。伽藍は二十余ヵ所、僧徒は二千余人いる。大小二乗があり、両方兼ねて学習している。天祠は五ヵ所、異道の人々が雑居している。

注

一　秣菟羅国　菟字を『慈恩伝』に兎に作る。ただし、菟・兎は同音。秣菟羅 *muât°-t'uo°-°lâ*; Skt. *mathurā*; Pa. *madhurā*; Pkt. *madhurā*; *madra* [Pāṇini, IV. 2. 131]; *māhūra*, *mahura* [Al-Biruni]. また摩偸羅・摩鍮羅・摩頭羅・摩突羅・摩度羅に作り、密善・美蜜或いは孔雀などと訳す。西方文献には Methora [Arrian: *Ind.*, 8; Pliny: *N. H.*, 6. 22], Madoura [Ptolemy, vii. 1. 49] と出ている。今のヤムナ河西南一帯の地、マトゥラー Mathura (Muttra) 県に当たり、首都は同名の街である。この国はいわゆる仏陀時代インドの十六大国 Solasa Mahājanapada の一たる Śūrasena であり、西方との通商路上の重要地点であった。仏は在世中しばしば遊化されたと伝説し、前二世紀の Śuṅga 王朝期には仏教・ジャイナ教共に栄えた。後一世紀ころより貴霜朝がここを占拠したがインドの宗教は保護盛行した。四世紀のグプタ朝期に来遊した法顕は二十の僧伽藍、三千の僧ありと記しているが、玄奘以後の状況はほとんど判明しない。当地はクリシュナ Kṛṣna の生誕地として婆羅門の聖地でもある。今の市街の南に旧城があった。この地は主としてクシャン王朝からグプタ朝にわたるいわゆるマトゥラー美術の中心地であり、The Curzon Museum of Archaeology（一九三三年開設）は当地方出土品の豊富な収蔵を以て有名である。なお当地については、高田修：『仏像の起源』二八五ページ以下に詳しい。

二　菴没羅果　巻二の一・一五注三参照。



ヴィシュヌ神像
マトゥラー出土

七・二　仏弟子像の供養

三つの窣堵波があり、みな無憂王が建てたものである。過去四仏の遺跡が非常に多い。釈迦如来の多くの聖弟子の遺身の窣堵波、例えば舎利子（原注　旧に舎梨子といい、また舎利弗という。訛略なり）(注一)・没特伽羅子（原注　旧に目乾連という。訛略なり）(注二)・布刺拏梅呾麗衍尼弗呾羅（原注　唐に満慈子という。旧に弥多羅尼子という。訛略なり）(注三)・鄔波釐(注四)・阿難陀(注五)・羅怙羅（原注　旧に羅睺羅という。また羅云という。みな訛略なり）(注六)・曼殊室利（原注　唐に妙吉という。旧に濡首という。また文殊師利といい、或いは曼殊尸利といい、訳して妙徳という。みな訛なり）(注七)の諸菩薩の窣堵波などがある。年の三長および月の六斎(注八)になるごとに、僧徒は相争って仲間を引き連れ、供養の品をもたらし珍しいものをたくさんつくり、自分の信ずるところに随って像をつくる。(注九)例えば、阿毗達磨［を学ぶ］衆は舎利子を供養し、禅定［を学ぶ所］の徒は没特伽羅子を供養し、経を誦持するものは満慈子を供養し、毗奈耶を学ぶ衆は鄔波釐を供養し、苾芻尼（比丘尼）たちは阿難を供養し、まだ具足戒を受けていない(注一〇)ものは羅怙羅を供養する。また大乗を学ぶものは諸菩薩を供養する。この日になると多くの窣堵波を競って供養を奉修し、りっぱな旛を並べ立て宝で飾った傘を両側に連ねる。香煙は雲の如く花の散るさまは雨のよう。日月をも覆いかくすほどの人出で、谷々も震うほどの雑踏である。国王や大臣も善行を修することに務めている。(注一一)

注

一　舎利子（……）　舎利 *°śia-ljiº*: Skt. *śāri-putra*. 旧訳の舎梨は声調の相違のみ。『玄応音義』二〇によれば正しくは奢利富多羅とするとある。仏の十大弟子の随一で智恵第一と言われる人 [*Mvy.* 八、十大弟子篇参

照、以下同じ」。

二　没特伽羅子（……）　没特伽羅 muât。-d'ək。-。g'ia-。lâ: *mudgala (Skt. māudgalyāyana), 旧に大目犍連。仏の十大弟子の一で神通第一と言われる人。

三　布剌拏梅呾麗衍尼弗呾羅（……）　puo°-lât。-。na-。muậi-tât。-liei°-°ịän-。nji-pịuət。-tât。-。lâ: Skt. pūrṇa-maitrāyaṇī-putra. 仏の十大弟子の一で説法第一と言われる人。

四　鄔波釐　鄔波釐 ·ịuo°-。puâ-。lji: Skt. Pa. upāli. 仏の十大弟子の一で持律第一と言われる人。また優波釐とも。

五　阿難陀　阿難陀 。·â-。nân-。d'â: Skt. Pa. ānanda. 仏の十大弟子の一で多聞第一と言われる人。釈迦の従弟。

六　羅怙羅（……）　羅怙羅 。lâ-°γuo-。lâ: Skt. rāhula. 旧訳の羅睺羅・羅云などの諸訳の詳細は拙稿「暁匣両声母の対音」『東洋学報』一九六五・四、七八ページ以下参照。釈迦の実子で十大弟子の一、密行第一と言われる人。

七　曼殊室利（……）　曼殊室利 。muân-。źịu-śịět。-lji°: Skt. mañj-śrī. 旧訳の濡首は梵語音の首尾を省略したもの。文殊師利・曼殊尸利は音声上に微細な差異があるのみ。mañj は「妙なる・美麗なる」という形容詞、śrī は「徳・吉祥」という名詞であるが、玄奘は妙吉祥を正とし、妙徳を訛略としている。『玄応音義』三には濡首をも旧い義訳としているが、如何なものであろうか。

八　年の三長および月の六斎　三長とは一月・五月・九月、六斎とは八・十四・十五・二十三・二十九・三十の六日で、斎戒修福の月日とする。

九　信ずるところに随って像をつくる　原文は「其の宗とする所に随い像設を致す」であり、明・嘉興蔵本（文学古籍刊行社本）は像と設の間に句読を施し設字を下文に連ねている。「……像に致る。設ば……」と読む意か。

一〇　具足戒　比丘の保つべき二百五十戒、比丘尼の保つべき五百戒の授戒をいう。

一一　インドにおける諸弟子諸菩薩供養の状況は、『法顕伝』には燃燈・伎楽にもふれ詳細に記されていて、『西域記』の文と彼此参照するに足る。『慈恩伝』の文は簡潔。なお文頭の三阿育王塔その他現存するものが多いという。

七・三　鄔波毱多の旧跡　城の東へ行くこと五、六里で一つの山の伽藍(注一)に至る。崖に穴をあけて住居とし谷をつかって門としている。鄔波毱多（原注　唐に近護という(注二)）が建てたものである。その中には如来の手指の爪の窣堵波がある。

伽藍の北の巌石の間に石室がある。高さ二十余尺、広さ三十余尺。四寸の細い籌がその中にうず高く積もっている(注三)。尊者近護が説法し夫妻を教化指導して、その夫妻がともに羅漢果を證ったものは、はじめて一本の籌を投げ落とすのである。家族を異にし種族を別とする場合は證を得ても記録しない(注四)。

注

一　城の東……一つの山の伽藍　『阿育王伝』三の優留曼陀山 Skt. urumaṇda. また優楼漫陀・烏盧門荼に作り、大醍醐山と訳す。伽藍は『雑阿含経』二五の那吒跋置迦 Skt. naṭabhaṭika. また那羅抜利・那哆婆哆に作る。摩菟羅の長者那哆 naṭa と婆哆 bhaṭa が建てたものという。カニンガムはマトゥラー市西郊の Katra 丘にある寺院を比定し、F.S.Growse は市の西南 Kankālī Ṭīlā なりと指定し、後説に従う人が多いが、ここは玄奘の示す方向とも異なり、さらにジャイナ教の遺址である。現代のマトゥラー市（27° 30′ N., 77° 41′ E.）は河水の浸蝕のため次第に北に移ったもので、古代の位置そのままの位置にあるものではなく［Majumdar's Note, in C.A.G.I., 706］、今日となっては比定すべくもなかろう。

二　鄔波毱多（……）　鄔波毱多 ·ịuo°-。puâ-g'ịuk。-。tâ: Skt. upagupta. 鄔字は『慈恩伝』に烏。·uo に作る。本書も巻十一の一五・一には烏波毱多に作る。また優波崛多・優波笈多・優波屈とも。近護・近密などと訳す。摩菟羅の商人の子で商那和修 Śānakavāsin の弟子。阿育王に聘せられ華氏城に赴き、王と仏跡を参拝する。付法蔵の第四祖或いは第五祖と

される。『阿育王伝』五・六、『阿育王経』七―一〇、『付法蔵因縁伝』二―五その他に出ている。

三　伽藍の北の……積もっている　籌を投げ入れる実例は『阿育王経』九・一〇に数多くあげられている。その一例をあげれば「時に優波笈多其の人のために説法す。彼勤めて精進し即ち阿羅漢果を得。優波笈多語りて言く、汝一籌を取りて石窟中に著け、と」。その数は一万八千人に及んだという。

四　「夫妻を化導す」るということが誰を指すのか、或いは『慈恩伝』の「単己」一人ものは記録しないとあるから、単に夫婦単位の意であるかは、諸伝に実例も見当たらず、よく分からない。「異室別族、證すると雖も記さず」も不明。いまは仮りに訳しておいた。

七・四　獼猴献蜜の伝説　石室の東南二十四、五里で大きな涸池に至る。傍に窣堵波がある。昔、如来がここを通られた。その時獼猴が蜜を手に持ち仏に奉った。仏は水で薄めさせて人々に行きわたるようにさせられた。獼猴は喜んで躍り上がったところ、坑に落ちて死んでしまったが、この福徳の力で人間界に生まれることができた。(注一)

注

一　獼猴献蜜の説話は『賢愚経』一二、『仏五百弟子自説本起経』、『有部薬事』一七、『有部破僧事』一二その他に見える。この説話は仏教彫刻の画材にも使われる。例えばサーンチー北門右柱浮彫では仏陀は菩提樹で象徴され、それに向かって猿が仏鉢を奉じている状況が描写されている。

七・五　仏陀の旧跡　池の北遠からざる大きな林の中に過去四仏が散策された遺跡がある。その側に舎利子・没特伽羅子ら千二百五十人の大阿羅漢が禅定を修めた所があり、みな窣堵波を建て遺跡を記している。如来は在世中にしばしばこの国に遊化されたが、(注一)その説法の場所には何所も記をした樹が立っている。

ここから東北へ行くこと五百余里で薩他泥湿伐羅国（原注　中印度の境）に至る。

注

一　如来は……遊化された　仏陀が秣菟羅に遊化されたことは『雑阿含経』二四にも見えているが、全般的に文献の記載するものは少ない。

八　薩他泥湿伐羅国

八・一　概観　薩他泥湿伐羅国(注一)は周囲七千余里ある。国の大都城は周囲二十余里ある。土地は肥沃で農業は盛んである。気候は暑く風俗は人情に薄い。家々は富裕で贅沢を競っている。幻術を非常によくし、特異な才能を尊重する。利を逐うもの（商人）が多く、農務に携わるものは少ない。諸方の珍奇な品物が多くこの国に集まって来ている。伽藍は三ヵ所、僧徒は七百余人、みな小乗の教えを学んでいる。天祠は百余ヵ所、異道は甚だ多い。(注二)

注

一　薩他泥湿伐羅国　薩他泥湿伐羅　*sât-ₒt'â-ₒniei-śi̯əp-b'i̯wɒt-ₒlâ*: Skt. *sthāneśvara* < *sthāna* "aboding place" + *īśvara*. 今の Thānesar（マトゥラーより北北西、デリー―アンバラ間の幹線上にあり）に当たる。前項末尾に玄奘が秣菟羅より東北とする（『慈恩伝』も東北とする）は誤りであろう。当地は詩史上有名な戦場（次項参照）でありクル族の郷土

(Kuru-kṣetra) としての聖地でもあった。玄奘往訪時の Kanauj の戒日王 Harshavardhana の先王 Pushabhukti が都した所、婆羅門の聖地で中インド Madhyadeśa の西境でもあった [Cunningham: *A.G.I.*, 376, 701; Law: *H.G.A.I.*, 129; Smith: *E.H.I.*, 348-9]。

二　天祠は……異道は甚だ多い　十一世紀のころに Thānesar の北方半マイルにある天祠を訪れる多数の巡礼者があったという [*Alberuni's India*. II, 147]。

八・二　古戦場　大城の四周二百里以内は、その土地の人が福地[注一]と呼んでいる。先達の話によれば次の如くである。昔、五印度の国々は二人の王が分けて治めていた。国境をお互いに侵しあい戦争が止まなかった。そこで両王が合議して決戦をして、雌雄を定め人民を安んじようと思った。人民たちはみなこれを怨みに思い君命に従わなかった。王は、人民というものは事の始めには共に相談しにくいものである、神秘は物を動かし得ようし、権道（常に非ざる方法）は功を立て得よう、と考えた。折しも梵志（婆羅門）の才能の高いことをよく知られているものがあった。王は密かに贈り物をもたらし、奥御殿に入ってくるよう命じ、法書（定めの書）を作らせこれを巌窟に隠させた。歳月がたち樹々が［その巌窟を］とり巻いてしまった。王は朝廷で臣下に、

「私は不徳にもかかわらず王位を忝くしている。天帝は照覧あり夢に霊書を賜わった。今さる山のさる嶺に隠してあるとのことである」

と告げた。そこで命令を下し探し求めたところ山林の所で書を見つけた。群官は慶賀すべきことと言い、人民は心から喜んだ。遠近にその旨を宣布しみなのものに知りわたらせた。その大要は、

「一体、生死は果ないものであり、流転は極まりないものである。人間はこれに沈み溺れて自ら救う方法もない。私は奇策をもってもろもろの苦しみから離脱させよう。今のこの王城の周囲二百里の地は古代の帝王の時代には福利のある土地であった。歳月は非常に古いことで記録も堙滅してしまった。人々はこれに気付かざるがまま苦海に沈み、溺れて救われることもないのは、一体どうしたことなのであろうか。汝ら人民たちよ、敵に臨んで戦死するならば人間界に再生することができるのである。罪なき人を多く殺しても天の福楽を受ける。孝子・孝孫が老人を扶けてこの地を通るならば福を受けること極まりない。功少なくして福は多い。どうしてこの機会を逸してよかろうか。人は一度死んで人身を失えば三途の冥闇に迷うものである。かかる次第であるから生きとし生けるものは、各自務めて己が仕事に精を出すようにせよ」

と。かくて人々は戦闘を習い、死を見ること帰するがごとくであった。そこで王は令を下し勇敢な兵士を募集した。両国は合戦し、屍を積むこと雑草のごとくであった。今日に至るまで遺骸は野原にいっぱいである。時ははや昔のことであるが、人の死骸というものは偉大な[注二]ものであり、この国の言い伝えでここを福地と言っているのである。

注

一　福地　福徳を生ずる地域という義で、通常は寺院を呼ぶに使う語。

二　ここに言う二王間の戦闘とはインド詩史 *Mahābhārata* に見える Kuru 族と Pāṇḍu 族の間におけるものである。この有名な古戦場は今も Thānesar の近郊にその伝説地があり、屍骸の山をなした所「屍骸の町」Asthipur は Thānesar の西郊にありとされている [Cunningham: *A.G.I.*, 376, 701; Beal: *Records*, I, 186 (61)]。

八・三　**仏舎利塔**　城の西北四、五里の所に窣堵波の高さ二百余尺のものがある。無憂(アショーカ)王が建てたものである。甎(れんが)はみな黄赤色で光沢は清浄である。中に如来の舎利が一斗あり、光明を時に照らし出すことがあり、不思議な事跡がいろいろとある。

八・四　**倶昏荼僧伽藍**　城の南へ行くこと百余里で倶昏（原注　去声）荼僧伽藍(注一)に至る。重閣は甍(いらか)を連ね、層台は道をはさみ向かい合っている。僧徒は行ない良く威儀は上品である。

ここから東北へ行くこと四百余里で窣禄勤那(スルグナ)国（原注　中印度の境）に至る。

注

一　倶昏（……）荼僧伽藍　倶昏荼 *.kịu-χuən°-.d'a*: **ku-khāṇḍa*? 原義・原語ともに不明であるが、**khāṇḍa* は或いは *kurukṣetra*. クル族の土地にある林 khāṇḍava [荻原：『梵和大辞典』四〇六左] に関係があるのではなかろうか。従来の諸家は Gominda [Julien: *Mém.*, II, 215], Gokaṇṭha [Cunningham: *A. G. I.*, 395], Gōkaṇṭha? Gōvinda [Beal: *Records*, I, 186 (62)], Govinda [Watters: *On Y. Ch.*, I, 316] とまちまちである。後考を俟つ。

九　窣禄勤那国

九・一　**概観**　窣禄勤那(スルグナ)国(注一)は周囲六千余里あり、東は殑伽(ガンジス)河に臨み、北は大山(ヒマラヤ)を背にしている。閻牟那(ヤムナ)河(注二)が境域の中を流れている。国の大都城(注三)は周囲二十余里あり、東は閻牟那河に臨んでいる。荒廃ぶりは甚だしいが、基礎はまだしっかりしている。土地の産物・気候の状況は薩他泥湿伐羅(スターネーシヴァラ)国と同様である。人の性質は淳朴(じゅんぼく)で外道を信仰しており、学芸を貴び福徳・智恵を大事にしている。伽藍は五ヵ所、僧徒は千余人おり、小乗を学ぶものが多く、その他の部派を習うものは少ない。仏の微妙な教えをはっきりさせ、深奥な点を論じており、諸方の俊秀たちが質問し議論し疑問の点を考えている。天祠は百ヵ所、異道は非常に多い(注四)。

注

一　窣禄勤那国　窣禄勤那 *suət.-luk.-.g'ịən-.nâ*: Skt. *srughna*. 今の Dehra Dun 地方の Kālsi (30° 32′ N., 77° 53′ E.) に近い Sugh (<srughna) である [Cunningham: *A.G.I.*, 396, 703]。Srughna は Pāṇini (i. 3, 25; ii. 1. 14) 等の古籍にも見える [Beal: *Records*, I, 186 (64)]。

二　閻牟那河　閻牟那 *.iäm-.mịəu-.nâ*: Skt. *yamunā*. また Jumnā ともいい、インド五大河の一。耶蒲那・遙扶那・閻摩那・焔牟とも。西方文献の Isamus [Strabo: *Geogr.*, XI. 11. 1] は恐らくこの河を指すものであろうとされる [R. C. Majumdar: *The Classical Accounts of India*, p.287; Law: *H.G.A.I.*, 135]。

三　国の大都城　注一の Sugh であろう。

四　『慈恩伝』によるに、玄奘は当国で闍耶毱多という学僧につき一冬半春

の間、経部の注釈の講義を聴聞した。

九・二　仏塔と羅漢塔　大城の東南、閻牟那河の西にある大伽藍の東門の外に窣堵波がある。無憂王が建てたものである。(注一) 如来が昔、かつてここで説法し人を済度された。その側のいま一つの窣堵波の中には如来の髪や爪がある。舎利子・没特伽羅らの諸阿羅漢の髪・爪の窣堵波がその左右を取り巻いて数十余ヵ所ある。如来が寂滅された後、この国は諸外道にまどわされてしまった。邪法を信仰し正法を廃止してしまったのである。現在五つの伽藍があるのは、外国の論師が諸外道や婆羅門を招いて論議をして勝った所で、これに因んで建てたものである。

注

一　無憂王塔　この塔は現在知るよしもないが、いわゆる Kalsi の阿育王十四章磨崖詔勅と言われるものは、この大城から余り遠くない所であったろう。この詔勅は一八六〇年に Forrest によりヤムナ河右岸の所で発見された [Smith: *Asoka*, 128, 168; R. K. Mookerji: *Asoka*, X, 13, etc.]。

九・三　殑伽河の上流　閻牟那河より東して行くこと八百余里で殑伽河の河源(注一)に至る。広さ三、四里。東南に流れて海に流入する所は広さ十余里ある。水の色は青々と、流れは広々としている。魔物は多いけれども害を加えることはない。その味は甘美であり、細かい沙は流れに随い広がっている。この地方の通俗的な記録にはこの河を福水(注二)と言い、罪咎が山と積もっても、この河で沐浴すれば除かれ、命を軽く見て自ら水中に沈むものは天に生まれて福を受ける。死ぬと遺骸をこの河に投入すれば地獄に堕ちることはなく、泡立つ波、逆巻く流れにより亡き魂は済度されることを得ると言う。

注

一　殑伽河の河源　殑伽河については巻一の一参照。ここに言う河源とはヒマラヤ山脈中の水源地を指すのではなく、ヒマラヤより下る二水系 Bhāgirathi 河と Alaknanda 河の水が合流しガンジス河となる Deva-prayag (78° 37′ E., 30° 08′ N., 標高四千五百メートル) から平原に入る所のダムがある今の Hardwār (標高五百八十三メートル) 近辺を言うものであろう。本巻の一〇・五参照。

二　福水　Skt. *mahābhadra* 大徳の意 [Beal: *Records*, I, 188 (68)] とも、Skt. *punyodaka* 福徳のある水の義 [髙田：『国訳伝』六四ページ、注三一] とも。

九・四　提婆の誘化　その昔、執師子国の提婆菩薩(注一)は深く実相（真実のすがた）に通達し、種々の法性（万有の本体）を得ており、凡夫たちを愍れみここへ来て教化していた。この当時、男女悉く来会し、老若みな集まって来て、河浜で［沐浴し］波を揚げ流れを激しくしていた。提婆菩薩は世間の人と同じように水に入ったものの、首をうなだれ流れに逆らうだけで、様子がみなとは変わっていた。ある外道が、

「あなたはどうして人と異なっているのか」

とたずねると、提婆菩薩は、

「私の父母や親族は執師子国に居ります。或いは飢渇に苦しんでいるのではないかと心配し、この遠方から無事であれかしと祈念しています」

と答えた。外道たちは、

「あなたは間違いをしています。妄りにこんなことをしているのをど

うしてよく考えないのか。故郷は遠く山川が遙かに距てているのに、この川の波を揚げて遠方の人の飢餓を救おうとするのは、後ろ向きに歩いているのに前進するのを求めるようなもので、今まで耳にしたこともない」

と言った。提婆菩薩は、

「幽冥界の罪咎のある人もこの水のお蔭を蒙ると言うのに、山川が距てていても［この世の人が］どうして救えない道理がありましょうか」

と答えた。そこで外道たちは論難の真なることを理解して謝罪し、邪見を捨てて正法を受け、過を改め自ら心を新しくし、教導を受けたいと頼んだ。

河の東岸に渡り秣底補羅国（原注　中印度の境）に至る。

注

一　執師子国の提婆菩薩　執師子国は僧伽羅国即ち錫蘭のこと。巻十一の一参照。提婆菩薩は以後数ヵ所に見えるが、巻十の一二・三で説明する。

一〇　秣底補羅国

一〇・一　概観　秣底補羅国(注一)は周囲六千余里ある。国の大都城は周囲二十余里ある。穀物に適し、花・果が多い。気候は温和で風俗は淳朴である。学芸を尊重し呪術をよくする。王は戍陀羅種(注二)である。邪見・正法を信ずるもの、その徒は相半ばしている。伽藍は十余ヵ所、僧徒は八百余人いる。小乗教の説一切有部を学んでいるものが多い。天祠は五十余ヵ所、異道の人人が雑居している。(注三)

注

一　秣底補羅国　秣底補羅 *muât̥-°tiei-°puo-̥lâ*: **matepura* or *matipura*. 玄奘の記事に従えば窣禄勤那より東へ進みガンジス河を渡った対岸一帯の地を指す。しかし、これを排して今の Rohilkhand の Bijnor 北方約八マイルの Mandāwar (Madāvar, Mandore, 29° 29′ N., 78° 08′ E.) を採る説がある [Cunningham: A. G. I., 399; St. Martin, in Julien's *Mém.*, II, 342; Law: *H.G.A.I.*, 104]。カニンガムによれば Mandāwar の周辺には旧跡が多く玄奘の記事によく合うと言う。

二　戍陀羅種　Sūdra, 巻二の一・九参照。

三　『慈恩伝』によれば、当地に蜜多斯那 Mitrasena という九十になる学僧がいた。徳光の弟子である。玄奘はこれにつき半春一夏にわたり『辯真論』『発智論』等の小乗論書を学んだ。

一〇・二　徳光についての古伝　大城より南四、五里で小伽藍に至る。僧徒が五十余人いる。昔、瞿拏鉢剌婆（原注　唐に徳光と言う）論師(注一)がここで『辯真論』(注二)などの論書を全部で百余部作った。論師は若くして秀才、長じて明敏、知識は博く記憶力あり、碩学博聞であった。本もと大乗を学んだが、まだその深奥を窮めないうちに『毘婆沙論』に目を通したために、大乗をやめ小乗を学び、数十部の論書を作り大乗の体系を論破し、小乗の見解を完成した。さらに通俗書を数十余部も作って先賢が作った論著を排斥した。経典を深く考察したがなお十数ヵ条の判明しないことがあり、研究すること久しきに及んだが疑問は除かれなかった。その当時、提婆犀那（原注　唐に天軍と言う）羅漢(注三)という人があり、覩史多天(注四)へ往来していた。徳光は慈氏（弥勒菩薩）

にお目にかかり疑問を解決したいと願って、天軍に神通力で天宮に伴い上ってもらうように頼んだ。かくて慈氏にお会いしたけれども手を拱いて挨拶はしたものの礼拝はしなかった。天軍は、
「慈氏菩薩は次の代に仏の位を嗣がれる方ですのに、どうして自ら高くとまり丁重な敬意を表しないのですか。お教えを受けようと思うのに、どうして傲慢なのか」
と尋ねると、徳光は答えて、
「尊者のこのお言葉は御尤もな御注意ではありますが、私は具戒の苾芻であり、出家の弟子です。慈氏菩薩は天上界の福楽を受けておられる方で、出家の仲間ではありません。それなのに礼拝しようとすれば、或いは適当ではないのではないかと懸念します」
と言った。[慈氏]菩薩は徳光が高慢心あり、本もと法を聞く器ではないことを悟っていた。徳光は往来すること三返でもなお疑問を解決することはできなかったので、さらに天軍にもう一度お目にかかりたいと頼んだ。天軍は徳光の高慢心を嫌悪し、軽蔑して対手にしなかった。徳光は望みを遂げることができなかったので怨み心を起こし、直ちに山林に出かけて発通定(注五)を修行したが、高慢心が除かれていないので證果を得ることがなかった。

注

一 瞿拏鉢剌婆(……)論師 瞿拏鉢剌婆 。g'iu-。na-puât。-lât。-。b'uâ: Skt. *guṇaprabha.* 巻十一の一七に北インドの鉢伐多国の人として再出する。Burnouf は Guṇamati (徳慧、巻八の四・三に見ゆ)と同一人と見る。なお望月『仏教大辞典』三九三五ページに詳しい。

二 『辯真論』『慈恩伝』に「薩婆多部 (Sabbatthavāda, 説一切有部のこと) の『怛埵三弟鑠論』(原注 これに『辯真論』と言う。二万五千頌。徳光の造る所なり)」とある。梵名を Tattva-vibhaṅga Śāstra [Julien: *Mém.*, I, 220 (2)], Tattva-satya Śāstra [Eitel: *Handbook*, p.61] と還元している。

三 提婆犀那(……)羅漢 提婆犀那 。d'iei-。b'uâ-。siei-。nâ: Skt. *devasena.* 未詳。

四 覩史多天 巻三の一・一六注七参照。

五 発通定 通とは神通の略にも使用されること故、神通力を発する禅定の意か。

一〇・三 衆賢と世親

徳光伽藍の北三、四里に大伽藍がある。僧徒は二百余人、みな小乗の教義を学んでいる。衆賢論師(注一)が寿命を終えた所である。論師は迦湿弥羅国の人であった。聡明にして博学、幼にして誉れ高き評判が広まった。特に説一切有部の『毘婆沙論』を深く研究していた。当時、世親菩薩(注二)が心を仏道一筋にし、言外の真理を理解しようとしていたが、毘婆沙師(注三)の所論を説破して『阿毘達磨倶舎論』(注四)を作った。語義は巧みに、理論は高雅であった。衆賢はついて見るや心に思う所のものがあった。そこで研究に沈潜すること十有二年、『倶舎雹論』(注五)を作った。二万五千頌、凡て八十万言であった。言辞深遠にして幽微な点までも窮明しているものである。門人に告げて、
「私の逸才をもって私の正論を所持し、世親を放逐しその鋭鋒を挫き、あの老爺に第一の名誉を独占させることのないようにしよう」
と言った。そこで衆賢が、就いて学ぶ三、四人の俊才と共に作った論を持ち世親を訪問した。世親はこの時、磔迦国の奢羯羅城(注六)にあり、遠く衆賢がまさにやって来るとの噂を伝え聞いた。世親は噂を耳にするや、直ぐさま旅装を整えた。門人は訝り世親の前に出て忠告し、
「大師のその徳は先哲よりも高く、名声を現在にほしいままにしておられます。遠近の学徒は推服しないものがありません。今、衆賢の名を耳にするだけでどうしてそんなに慌てられるのですか。とても及ば

ない所があるというのなれば私たちは恥をかきます」

と言うと、世親は、

「私が今、遠遊するのは、この若者を避けようと言うのではない。この国中を見まわすに練達の人は少しもいない。衆賢は後輩ではあるが、その詭弁は流るるごときものがあり、私は老衰していて議論を持続することはできないであろう。一言でもってその異論を説破しようと思うから、中印度に連れて行って、りっぱな人たちの前で真偽を明らかにし、得失をはっきりさせようとするのだ」

と言い、直ぐさま供に命じて笈を負い遠遊に出かけた。衆賢論師は後るること一日でこの伽藍に至り、[世親の遠遊するを聞き]急に気力が衰えるのを覚えた。そこで手紙を書き世親に詫びをして、

「如来が寂滅されてより弟子たちは部派に執着し、自分の奉ずる学を伝えそれぞれが自分の門戸をほしいままにしており、仲間を組んでは異なった部派を憎んでおります。私は不敏ではありますが、柄にもなく伝来する仏の教えを受け、あなたの作られました『阿毗達磨倶舎論』が毗婆沙師の要義を論破していられるのを拝見いたしました。そこで自らの力をも量らず研究に沈潜し、年をかさねてこの論を作り[説一切有部の]宗学を宣揚しようといたしました。智力は小であるのに計画は大きく、[しかのみならず]私の死期はまさに至ろうとしております。菩薩（世親を指して言う）は仏の微妙な言葉を明らかにし、至極の道理を宣揚されています。もし私の所論を壊すことなくこの文章を残していただけますならば、まことに幸いであります。死んでも何を悔いましょうや」

と述べた。そこで広く門人のうちから弁舌のたつものを選び出し、

「私は後輩にも拘らず軽々しく先輩を侮った。運命はどうしようもなく、ここに死んで行く。お前たちはこの手書と私の作った論とを持ち、かの世親菩薩に御挨拶をして私の代わりに過誤を詫びるように」

と言いつけた。言葉を授け終わるや、にわかに亡くなった。門人は手紙を奉持して世親の所に至り、挨拶をして、

「私たちの師の衆賢ははや寿命を終えましたが、手紙を届けるように遺言し、自らを責めて咎を謝罪しております。衆賢の名声を失墜させないようにすることが望む所ではありません」

と言った。世親菩薩は手紙に目を通し論を詳しく見て、沈吟すること暫しで門人に、

「衆賢論師は聡明な後輩です。理論に足らない所はありますが、言辞には余りあるものがあります。私が今、衆賢の論を破ろうと思うならばこれを掌に指すがごとく[容易]でありますが、臨終に際しての付託を考え、難題を察知しての言葉を重んじて、[毗婆沙師の]大義が伝えられている理由で衆賢の宿願を果たすことにしましょう。ましてこの論では我が宗旨を発明する点があるにおいておや」

と言って、題を改めて『[阿毗達磨]順正理論』(注七)とした。門人は諫めて、

「衆賢がまだ亡くならないうちに大師は遠く離れられました。その論を入手してからさらに題を改めようとされます。一体、衆賢の門人たちはどんな顔をしてこんな辱しめを受け入れましょうか」

と言った。世親菩薩は人々の疑問を除こうと思い、頌を口にして、

「師子王が豕を避けて遠く跡をくらますようなもの。二者の力の勝ち負けは、智者こそ必ず解るべし」

と言った。衆賢は死んで、屍を焼き、骨を伽藍の西北二百余歩の菴没羅林の中に収容して窣堵波を建てた。今もなお現存している。

注

一　衆賢論師　巻三の六・八に僧伽跋陀羅、唐に衆賢という、とある人。『西域記』の記事のほか、『婆薮槃豆法師伝』および Tāranātha の『印度仏教史』には異説が見える。
二　世親菩薩　巻五の二に詳説。
三　毗婆沙師　『毗婆沙論』を執持する学者の意。Vaibhāṣika.
四　『阿毗達磨倶舎論』 Skt. *abhidharmakośa bhāṣya.* 有部の教学体系によりながらも他部派の説をも引用したため、大・小乗の学徒に仏教の基礎学研究書として珍重され、その玄奘による漢訳三十巻本は中国のみならず日本においても今日まで盛んに研究されている。
五　『倶舎雹論』 Skt. *kośakarakā śāstra* or *kośaśilā śāstra* と還元されている [Beal: *Records,* I, 193 (84)]。
六　磔迦国の奢羯羅城　本巻の一参照。
七　『[阿毗達磨]順正理論』 Skt. *abhidharma-nyāyanusāri-śāstra.* 『倶舎論』の組織をそのまま遵用し有部の正統性を顕揚せんとした書。玄奘漢訳の八十巻本あり。巻三の六・八参照。

一〇・四　無垢友の故事　菴没羅林の側に窣堵波がある。毗末羅密多羅（原注　唐に無垢友と言う）論師(注一)の遺骸の塔である。論師は迦湿弥羅国の人である。説一切有部について出家した。多数の経典を博く見て異論を研究し、五印度の国々に遊歴し三蔵の玄奥な文義を学び、名立ち業成りまさに本国に帰ろうとして、途中に衆賢論師の窣堵波に立ち寄った。塔を撫でて嘆き、
「思うに論師は人柄も高邁、大義を宣揚して、まさに異なった部派を挫き自宗の義を立てようとされたのであった。如何せん、年を受けること永くはなかった。私、無垢友はおこがましくも末学に列し、時を異にしていますが師の義を慕い、代はかけ離れていますが師の徳を懐しく思っております。世親は死没してしまっていますが、その宗学は今も伝わっております。私の学問を尽くして諸種の論書を作り、贍部洲の諸学者に大乗という称え方を絶やし、世親の名を滅ぼしてしまいましょう。かくて不朽のものとしてかねての気持ちを遂げましょう」
と言った。この言葉が終わるや、精神は狂乱を発し、五舌(注二)重なり出、熱血が溢れ流れた。命がもう終わることを悟り手紙を書き、
「一体、大乗の教えというものは仏法の中の最上至極の説であります。[よしんば] 名目が滅びることがあった [としても] 真理は幽玄で [無限のもので] す。軽々しく愚鈍の身でありながら先輩を弁駁しました。この報いは明瞭で身を滅ぼすのも当然のことです。敢えて学者たちに忠告します。その良い手本はここにあります。それぞれ自らの志を慎み疑いを懐くというようなことがないようにされたい」
と後悔を述べた。大地もこのために震動し、命はそのまま絶えた。その死んだ場所は地面が落ち窪み坑となった。仲間たちは屍体を火葬にしその遺骸を収容し旌を建てた。その折、ある羅漢がその状を目にし嘆息して、
「悲しいことよ、苦しいことよ。今、この論師は感情に任せて邪見に執着し、大乗を悪しざまに謗ったために無間地獄に堕ちたのだ」
と言った。

注
一　毗末羅密多羅（……）論師　毗末羅密多羅　*ₒb'ji-muâtₒ-ₒlâ-miḙtₒ-ₒtâ-ₒlâ:* Skt. *vimalamitra.* 無垢友と訳す。『慈恩伝』の訳語「無垢称」は「毘摩羅詰」Vimala-kīrti（巻七の三の維摩詰）のことで誤りである。この人についての詳細は不明。
二　五舌　『大乗法教』三十三（七八七ページ）に「五舌」の語を挙げ仏・法・慧・天・肉に対する語を出す舌と図示するが、ここに適しそうもない。『慈恩伝』も同じく五舌としている。未詳。

一〇・五　摩裕羅城　国の西北境、殑伽河の東岸に摩裕羅城(注一)がある。住民は盛んで、清流がめぐっている。鍮石・水精・宝器を産出する。城から遠くない殑伽河に臨む所に大きな天祠がある。霊験が甚だ多い。その中に池があり、石を編んで岸を作り、殑伽河の水を引き入れて運河としている。(注二)五印度の人はこれを殑伽河門と言って、福を生じ罪を消滅する所としている。常に遠方から数百千の人々がここに集まり水浴びをしている。善行を楽う王たちは福舎(注三)を建立し、御馳走を準備し医薬を蓄えておき、連れ合いのない男女に施しをし、身寄りのないものに供給している。

これより北して行くこと三百余里、婆羅吸摩補羅国（原注　北印度の境(注四)）に至る。

注

一　摩裕羅城　摩裕羅 ₒmuâ-ịu°-ₒlâ: Skt. *mayūra.* インド文献の Gaṅgā-dvāra, Māyāpuri で、ヴィシュヌ Viṣṇu 神を祠る聖地。今の Hardwar（"Door of Hari or Viṣṇu"）である（付近に旧市の遺跡あり）。カニンガムによればこの近辺に孔雀が多かった故に Mayūrapura「孔雀の町」と呼ばれたという。当地でガンジス河は多くの運河に分かれるといい、今もその運河は残っている [Cunningham: *A.G.I.*, 402; Law: *H.G.A.I.*, 81; Murray's *Handbook*, p.277b]。本巻の九・三参照。当地は玄奘の親践地ではなく伝聞かと言われる [堀:『解説』三三〇ページ] が、『慈恩伝』巻二の窣禄勤那国の条によればガンジス河の「河源」（水源に非ざること九・三に説明）にまで「行った」ことを記している。何れとも断定し難い。

二　殑伽河の水を……としている　原文「殑伽河の水を引きて補となす」とあり、宋本等は「……浦となす」とする。今、仮りに実情に応じ「運河」と訳す。

三　福舎　Skt. *puṇyaśālā.* 本巻の一・一注七参照。

四　北印度の境　『慈恩伝』には「中印度の境」に作る。『伝』の方が正しかろう。

一一　婆羅吸摩補羅国

一一・一　概観　婆羅吸摩補羅国(注一)は周囲四千余里あり、山が四境を取り巻いている。国の大都城(注二)は周囲二十余里あり、住民は盛大で家々は富裕である。土地は肥沃で農業はその折々に行なっている。鍮石・水精を産出する。気候はやや寒く風俗は勇敢である。学芸［を好むもの］少なく、利を逐うもの（商人）が多い。人々の性質は粗野乱暴で、邪見・正法を雑え信じている。伽藍は五ヵ所、僧徒は少ない。天祠は十余ヵ所、異道の人々が雑居している。

注

一　婆羅吸摩補羅国　婆羅吸摩補羅 ₒb'uâ-ₒlâ-xịəp-ₒmuâ-°puo-ₒlâ: Skt. *brahmapura.*「北に行く」とあるのを「東北に行く」と訂正し、今の Alakananda 河流域地方 Garwāl に比定されている [Cunningham: *A.G.I.*, 407; Watters: *On Y. Ch.*, II, 338; Law: *H.G.A.I.*, 72]。この地方には古いジャイナ教の建造物がある [Law: *ibid.*]。

二　国の大都城　今のスリナガル（Hardwar の東北七十キロ、30°14′N., 78°37′E.）に比定される。

一一・二　東女国　この国の国境の北の大雪山(だいせつせん)中に蘇伐剌拏瞿呾羅(スヴァルナゴートラ)国（原注　唐に金氏と言う(注一)）がある。上質の黄金を産出するので名とした。東西は長く、南北が狭い。これが東女国(注二)である。世々女で国を名づけている(注三)。夫も王となることがあるが、政治をとることはない。男はただ戦争をしたり田を耕すだけである。土地は宿麦(むぎ)(注四)に適し、羊や馬を多く飼っている。気候は寒さ烈しく、人の性質は粗暴である。東は吐蕃国(チベット)(注五)に接し、北は于闐国(コータン)(注六)に接し、西は三波訶国(注七)に接している。

秣底補羅国より東南に行くこと四百余里で瞿毗霜那国（原注　中印度の境）に至る。

注

一　蘇伐剌拏瞿呾羅国（……）　蘇伐剌拏 *ₒsuo-b'i̯wɐt̚ₒ-lât̚ₒ-ₒna* : Skt. *suvarṇa* は金、瞿呾羅 *g'i̯u°-tât̚ₒ-ₒlâ* : Skt. *gotra* は氏。ヒマラヤ山中にある国であるが、『慧超伝』にも「又一と月、雪山を過ぎ東に一小国あり、蘇跋那具怛羅と名づく。土蕃国の所管に属す。衣著言音北天と相似たるも言音は即ち別なり。土地極めて寒し」と見え、『続高僧伝』玄奘の条に「尼波羅の北界は即ち東女国なり」とある。かつては伝説上の国として実在しないものと見られたが、次注の『唐書』の記事も併せ(あわ)見るに、実在国であったことは疑いなかろう。ただし、玄奘が親践した国ではない。

二　東女国　国名の由来は玄奘も記すごとく女政をもっての故であるが、「東」を冠するのは巻十一の二〇・一にある「西女国」に対するためである。『唐書』二二一上、東女伝に「東女は亦(また)蘇伐剌拏瞿呾羅という。羌(きょう)の別種なり。西海に亦女ありて自ら王となる。故に東と称して之を別つ。東は吐蕃党項の茂州と接し、西は三波訶に属す。北は于闐に距てられ、東南は雅州の羅女蛮・白狼夷に属す」とある。この国の位置を一部は Hunza-Nagar と一致すると見る説もある [F. W. Thomas : *Tib. Lit. Texts and Doc.*, I, 153] が、異論もある [佐藤：『古代チベット史研究』上一二九ページ以下]。

三　世々女で国を名づけている　原文は「世以女称国」とある。石山本などには「女を以て王となす、因って女を以て国を称す」とあり、意は一層よく通じる。

四　宿麦　明・嘉興蔵本には宿を粟の誤りと注している。根拠・理由については説明がない。

五　吐蕃国　吐蕃 *°t'uo-ₒb'i̯wɐn* : **tuban.* 当時における原音は未詳。中国人がチベットを七―十四世紀にかけて吐蕃と呼ぶのは地域的名称として存続したものである。チベット人自身は自らを八世紀以来 Bod と呼んでいた。この称呼・原語の詳細は、王忠：『新唐書吐蕃伝箋證』二ページ；佐藤長稿：『アジア歴史事典』六、一五七ページ「チベット」、七、一四二ページ「吐蕃」の諸項に見える。

六　于闐国　西域南道の Khotan. 巻十二の二二参照。

七　三波訶国　本巻の四注五参照。

一二　瞿毗霜那国

＊本書の記事より見れば、秣底補羅国→婆羅吸摩補羅国→秣底補羅国→瞿毗霜那国→至醯掣呾羅国の道順のようだが、『慈恩伝』には婆羅吸摩補羅国より至醯掣呾羅国へ直行したるごとく記し、瞿毗霜那国は現われない。

瞿毗霜那国(注一)は周囲二千余里ある。国の大都城は周囲十四、五里あり、位置は高く険固であり、住民は盛大である。花咲く林や池・沼が処々に交錯している。気候・産物は秣底補羅国と同じである。風俗は淳朴で学問に勤め福(さいわい)を好む。多くは外道を信じ現世の楽を求めている。

伽藍は二ヵ所、僧徒は百余人おり、みな小乗の教えを学習している。天祠は三十余ヵ所、異道の人々が雑居している。

大城の側の故い伽藍の中に窣堵波がある。無憂王が建てたものである。高さ二百余尺。如来が昔、ここで一ヵ月の間、諸法の要義を説かれた。傍に過去四仏の座所および散策された遺跡の場所がある。その側に如来の髪や爪を収めた二窣堵波がある。おのおの高さ一丈余りある。

これより東南して行くこと四百余里で垩醯掣呾羅(アヒチャットラ)国（原注　中印度の境）に至る。

注

一　瞿毗霜那国　瞿毗霜那 ₒg'iu-ₒb'ji-ₒṣiang-ₒnâ : *goviṣana or goviṣāna. 従来、Goviśana [Julien : *Mém.*, I, 233 ; Beal : *Records*, I, 199 (103)], Goviśāna [St. Martin, in Julien : *Mém.*, II, 348], Govisanna [Watters : *On Y. Ch.*, I, 331], Govisanā [Law : *H. G. A. I.*, 80] と原音の推定はまちまちである。現在の Kāshipur or Kashipur (29°13′E., 78°57′N.) の東一マイルの地点にある廃址がその首都に比定されている [Cunningham : *A.G.I.*, 409]。

一三　垩醯掣呾羅国

垩醯掣呾羅(アヒチャットラ)国[注一]は周囲三千余里ある。大都城[注二]は周囲十七、八里あり、険固な地勢に拠っている。穀物に適し林泉が多い。気候は温和で風俗は淳朴である。道を好み学問に熱心であり、多才にして博識である。伽藍は十余ヵ所、僧徒は千余人おり、小乗の正量部[注三]の教えを学習している。天祠は九ヵ所、異道の人々は三百余人おる。自在天[注四]に仕える塗灰［外道］の仲間である。

城外の竜池の側に窣堵波がある。無憂王が建てたものである。如来が昔、竜王のために七日間ここで説法された所である。その側には四つの小さな窣堵波がある。過去四仏の座所および散策された遺跡の場所である。

ここから南へ[注五]行くこと二百六、七十里、殑伽河を渡り、西南して[注六]毗羅刪拏国[注七]（原注　中印度の境）に至る。

注

一　垩醯掣呾羅国　『慈恩伝』には「垩」字なし。「羅」字は『西域記』に「邏」字に作るが、今『伝』その他に従い「羅」とする。垩醯掣呾羅 ˙ak.-ₒχiei-tś'iäi°-tât.ₒ-ₒlâ : *ahe-chetra（＜Skt. ahi-chattra）.『孔雀王経』に阿喜制掣多羅（僧伽婆羅訳）と音訳し、蛇蓋国（義浄訳）と義訳する。意はまさに Skt. *ahi-chattra* (*ahi* は蛇・竜、*chattra* は傘・蓋の意）に当たる。インドの古籍 [*Mahābhārata*, i. 5515, 6348 ; Pāṇini, iii. 1. 7] に現われる国名（碑文には *adhiccatra* と見える）。現にデリーの東方 Rohilkhand 地方の東に Ahicchattra と呼ぶ地がある [Cunningham : *A.G.I.*, 412] という。

二　大都城　Bareilly の西方三十キロにある Rāmnagar に比定されている。当地の古跡については B.C. Law : *H.G.A.I.*, 64 に詳しい。

三　正量部　小乗二十部の一。上座部に属する派。梵名は三弥底 Sammitiya.『異部宗輪論述記』に「此の部所立の甚深の法義は、刊定するに邪なければ目して正量と称す」とある。玄奘入竺当時、当部は説一切有部に次いで広く諸インドに行なわれ、殊に中・南・西インドに多く、東インドにも少しく行なわれたようである。

四　自在天　大自在天とも。摩醯湿伐羅(マヘーシヴァラ) Mahe-śvara. 湿婆(シヴァ) śiva とも。三千界の主。

五　ここから南　麗本『西域記』に「南」字は「東」字に作る。今、宋本および『慈恩伝』に従い「南」字を採る。

六 西南して　麗本『記』には「南」に作る。今、宋本および『伝』に従い「西南」とする。

七 毘羅删拏国　麗本の『記』『伝』ともに「删」字を「那」字に作る。今、宋本その他に従い「删」字を採る。

一四　毘羅删拏国

毘羅删拏国(注一)は周囲二千余里ある。国の大都城は周囲十余里ある。気候・産物は堊醯掣呾羅国と同じである。風俗は乱暴ではあるが、人々は学芸を理解している。外道を信仰し、仏法を敬うものは少ない。伽藍は二ヵ所、僧徒は三百余人、みな大乗の教えを学習している。天祠は五ヵ所、異道の人々が雑居している。大城中の故い伽藍の内に窣堵波がある。基礎は傾き崩れているが、それでも百余尺ある。無憂王が建てたものである。如来が昔、ここで七日間『蘊界処経』(注二)を説かれた所である。その側には過去四仏の座所および散策された遺跡がここにある。

ここから東南に行くこと二百余里で劫比他国（原注　旧に僧迦舎国と謂う。中印度の境）に至る。

注

一 毘羅删拏国　毘羅删拏 ◦b'ji-◦lâ-◦san-◦na : **virasaṇa* or *bhirasaṇa*. 従来は Virāśāna [Julien : *Mém.*, II, 235], Virasana [Beal : *Records*, I, 201 (107)], Vilaśāṇa or Bhilasana [Watters : *On Y. Ch.*, I, 332] などと原音を推定した。今の Etah 県の Bilsar であるという [Cunningham : *A. G. I.*, 417 ; Law : *H.G.A.I.*, 72 (Bilsad, Bilasand)]。

二 『蘊界処経』　このような名の経典はなく不明である。従来はこれを一経典名として諸氏ともに Skt. *skandha-dhātu-upasthāna sūtra* としている。『釈迦方志』によれば「仏、曽て此において七日、蘊界の法を説く」として、経典名とはしない。

一五　劫比他国

一五・一　概観　劫比他国(注一)は周囲二千余里ある。国の大都城は周囲二十余里ある。気候・産物は毘羅删拏国に同じである。風俗は温和で、人々は学芸を多く［嗜んでいる］。伽藍は四ヵ所、僧徒は千余人おり、みな小乗の正量部の教えを学んでいる(注二)。天祠は十ヵ所、異道の人々が雑居して同じく大自在天に奉事している。

注

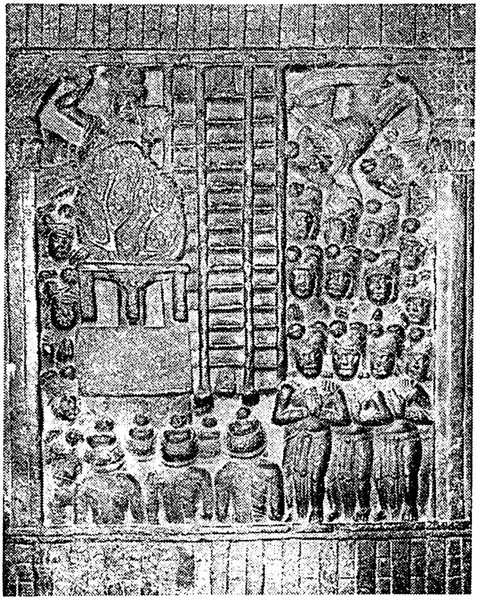
一 劫比他国　劫比他 *kịpp.-°pji-◦t'a* : **kapitha* (< Skt. *kapitthikā*, *kapitthaka*). Kapitha という形はインド文献には見当たらない [Cunningham : *A.G.I.*, 423, Majumdar's Note, p. 705]。旧名の僧迦舎 Skt. *saṃkāśya* (Pa. *saṃkassa*) はまた僧伽舎・僧迦尸・僧伽施・僧柯奢とも。八世紀中葉の『悟空入竺記』(『大日本仏教全書』遊方伝叢書一所収、七七ページ) には泥嚩韈多 Devavatāra 城とする。現在の Farrukhābād 近辺の Sankisa という村に比定されている [Law : *H. G. A. I.*, 120]。ここから次項に見える阿育王の石柱が発見された。

二 みな小乗の正量部の教えを学んでいる　『法顕伝』によれば、当時は「大小乗の学を雑う」とある。

一五・二　仏陀上天の伝説（三道の宝階）　城の東二十余里に大伽藍がある。規模は広大に、仕事は彫刻［の精］を窮め、仏の姿の尊像は荘厳の限りを尽くしている。数万人の浄人(注一)が寺の側に住んでいる。僧徒は数百人、正量部の教えを学んでいる。

伽藍の境内に三つの宝階が南北に列び、東に向かって下っている。如来が三十三天から降って還られたものである。昔、如来が勝林（祇園）から天宮に上り、善法堂で母のために説法された。三ヵ月が過ぎ去り降ろうとされると、天帝釈は神通力を発揮し宝階を建立した。真中の階段が黄金、左が水精、右が白銀であった。如来は善法堂に起ち、諸天衆を従えられ中階を履んで下られた。大梵王は白い払子を手に執り銀階を履んで右側に侍した。天帝釈は宝蓋（傘）を持ち水精階を履んで左側に侍した。諸天衆は虚空を飛んで花を散らし徳を讃えた。(注二)数百年前まではまだ階段があったが今日はもはや崩れ落ちてなくなってしまった。諸国の王たちは自ら宝階を見ることのできないことを悲しみ、煉瓦や石で築き、珍宝で飾り、もとの場所に昔の宝階に擬した。その高さは七十余尺、その上に精舎を建てた。中に石造の仏像があり、左右の階段には帝釈・梵天の像がある。形を最初のものに擬え、やはり下りてくる姿勢である。(注三)

傍に石柱の高さ七十余尺のものがある。無憂王が建てたものである。紺色で光沢あり、質は堅くきめは細かい。上に師子を作り、蹲り階段の方を向いている。珍しい形の彫刻がその四面を取り巻いている。［ここに至る］人の罪福［の差］に随い、影が柱の中に現われる。(注四)



三道宝階降下の伝説，バールフット浮彫

注

一　浄人　巻二の一・八注三参照。

二　仏陀三十三天（忉利天）に上り、母の摩耶夫人に説法して後、三道の宝階を下ったという説話は、『摩訶摩耶経』、『仏昇忉利天為母説法経』、『道神足無極変化経』、『雑阿含』一九、『雑一阿含』二八、『義足経』下、『撰集百縁経』九、『有部毘奈耶雑事』二九、*Jataka*, No. 483 その他に見える。これに材をとった彫刻はバールフット、サーンチー、ガンダーラ等に見える［小野玄妙：『仏教美術講話』八七ページ以下：『仏陀の生涯』岩波写真文庫第一八一冊］。なお、三十三天とは、須弥山の頂上にあり、中央に帝釈天の居城たる善見城があり、四方に各八城あり、計三十三城あるためにこの名があるという。

三　宝階の模造と精舎　『法顕伝』には「仏既に下り、三階倶に地に没し、余りて七級の現ずるあり。後、阿育王その根際を知らんと欲し、人をして掘り看しむるに、下は黄泉に至り、根は猶お尽きず。王益々信敬し、即ち階上に精舎を建て、中階に当たりて丈六の立像を作る」とある。

『慧超伝』にも簡単ながら同様な記事がある。

四　無憂王の石柱　玄奘の見た師子頭の石柱は『法顕伝』に「精舎の後に石柱を立つ、高さ三十肘、上に師子を作る。柱内の四辺に仏像あり、内外に暎徹し、浄きこと琉璃の如し。外道の論師あり、沙門と此の住処を諍う。時に沙門の理屈す。是において共に誓を立てて言く、『若し是れ沙門の住処たらば、今当に霊験あるべし』と。是の言をなし已るや、柱頭の師子、乃ち大いに鳴吼し證を見わす。是において外道慴怖し、心服して退く」とある。しかるに劫比他国都に比定される Sankisa からカニンガムが発見した柱頭の彫刻は、顔は欠けているが明らかに一頭の象の立像であった。従ってカニンガムは法顕・玄奘の誤認とみなした。これに対して V. A. Smith は、玄奘も師子の踡跼した像と言っているからには、カニンガムのこの柱頭発見も一つの根拠とする劫比他国 Sankisa 比定説には従えないとし、自らは Etah 地方の東北の Pitāli 付近に比定した [Watters: *On Y. Ch.*, II, p.338]。なおこの象頭石柱については R. K. Mookerji: *Asoka*, p.83 ff. 参照。

一五・三　諸仏塔　宝階の側の遠くない所に窣堵波がある。過去四仏の座所および散策された遺跡の場所である。その側の窣堵波は如来が昔ここで沐浴された所である。その側の精舎は如来が禅定に入られた所である。精舎の側に大きな石がある。基底の長さ五十歩、高さ七尺。如来が散策された所で、足の履まれた跡はみな蓮華の文がある。基底の左右にそれぞれ小さな窣堵波がある。帝釈・梵王が建てたものである。

一五・四　蓮華色尼と蘇部底　釈梵窣堵波の前は蓮華色苾芻尼(注一)が第一番に仏を見たてまつろうとして転輪王の身なりをした所である。如来が天宮から贍部洲に還ろうとされるや、折しも蘇部底（原注　唐に善現と言う。旧に須扶提と曰い、或いは須菩提と曰い、訳して善吉と曰う。みな訛なり）(注二)は石室で宴坐（坐禅）していたが、自ら考えるに「今、仏が還り下って来られるにあたり人天（人間界のものと天上界のもの）がお供をして来る。私のごときものは、今何所へ行ったらよかろうか」と思案した。かつて仏の教えを聞き、諸法は空である（諸現象は実体がない）ことを理解し、諸法の性（実相）を体得していたので、そこで智恵の眼で仏の法身（真の身姿）を観察した。その時、蓮華色苾芻尼は最初に仏を見たてまつろうとして転輪王の身なりをし、七宝(注三)はお供をし［歩・馬・車・象の］四兵が警衛して、世尊の所についてからまたもとの苾芻尼の姿に返った。如来は「汝が最初に私を見るのではない。善現（蘇部底）は諸法の空なることを観じて［私の］法身を［最初に］見たのだ」と告げられた。聖跡の境内は霊験が相継いで起こっている。その大窣堵婆の東南に一つの池があり、竜が常に聖跡を守護している。陰ながらの守護があるので、軽々しく聖跡を犯すことはない。年久しく自然に壊れて来てはいるが、人の毀損することはない。

ここから東南(注四)して行くこと二百里足らずで羯若鞠闍国（原注　唐に曲女城国と言う。中印度の境）に至る。

注

一　蓮華色苾芻尼　蓮華色は Skt. *utpalavarṇā*, Pa. *uppalavaṇṇā* の訳。また蓮華鮮・専華色・華色とも訳す。或いは梵・漢併挙して優鉢羅色・嗢鉢羅色・優婆羅華ともいう。苾芻尼は Skt. *bhikṣuṇī*, Pa. *bhikkhunī*. 旧訳の比丘尼。もと爵禅国（鄔闍衍那城）の人。自己の境遇より破倫の極みなるを観じ、舎衛城に往きて仏陀の許しを得て比丘尼となり、遂に阿羅漢果を得て比丘尼の長老となる。

二　蘇部底（……）　蘇部底 *˳suo-˚b'uo-˚tiei* : Skt. Pa. *subhūti*. 旧訳の表記漢字はすでに唐代においては音変化により適合せず、訳語は *su-bhūti* の *bhūti* を「存在・出現」の意と解するか（玄奘）、「幸福・富」と

解する（旧訳）かの差である。後秦・僧肇は善吉、隋・達磨笈多は善実、唐・義浄は妙生と訳す。

三 七宝　通常言う金・銀・瑠璃・玻璃（はり）等七種の宝ではなく、『長阿含経』六によれば、転輪王は即位の時に天より感得する金輪宝の他に、白象宝・紺馬宝・神珠宝・玉女宝・居士宝・主兵宝の六種、合わせて七宝と勇健雄猛な千子を率いるという。

四 東南　宋・元・明本及び『慈恩伝』には「西北」に作るが、『法顕伝』等他の遊記によれば「東南」を正しとする。

大唐西域記　巻第四

大唐西域記　巻第五　六国

三蔵法師玄奘奉　詔訳
大捴持寺沙門辯機撰

羯若鞠闍国　阿踰陀国　阿耶穆佉国　鉢邏耶伽国
憍賞弥国　鞞索（山格反）迦国

一　羯若鞠闍国

一・一　概観　羯若鞠闍（カーニヤクブジャ）国[注一]は周囲四千余里ある。国の大都城[注二]は西に殑伽（ガンジス）河に臨み、その長さ二十余里、幅は四、五里、城郭・城池は堅固で高壮な家々は相列（つら）なり、花咲く林や池は光鮮かで鏡のごとく澄んでいる。諸方の珍しい品物が多くここに集まって来ている。住民は生活を楽しみ家々は富裕である。花・果（なりもの）は繁茂し農業は気節に応じて行なわれている。気候は温和に風俗は質朴、容貌（ぼう）は上品に服飾は綺麗（きれい）である。学芸は熱心に修め、談論は高尚である。邪信・正法二つながら行なわれ、信者は相半ばしている。伽藍（がらん）は百余ヵ所、僧徒は［一］万余人おり、大小二乗を兼ね学習している。[注三] 天祠は二百余ヵ所、異道の人々は数千人余りいる。

注

一 羯若鞠闍国　羯若鞠闍 *kjɒt*。-。*ńźja-kjuk*。-。*źja* : Skt. *kānyakubja*, Pa. *kaṇ-*

ṇakubja, kannakubja. また葛那及・罽饒夷・葛那鳩闍・葛那究撥闍・迦那鳩闍・伽那慰闍とも。曲女・妙童女と訳す。或いは『続高僧伝』二達磨笈多伝に羯拏究撥闍 *karṇakubja* とし耳出と訳す。

二　国の大都城　今の Kanauj, Kanoj (<Skt. *kānyakubja*)。西方文献に Kanogiza と見える [Ptolemy : *Geogr.*, vii. 2. 22]。ガンジス河の支流カーリー Kāli 河の東岸にある。玄奘の「西は殑伽河に臨む」と言うのはこの支流を指すのであろう [Cunningham : *A.G.I.* ; Law : *H. G. A. I.*, 93]。なお、当地方の歴史全般については、R. S. Tripathi : *History of Kanauj* に詳しい。ただし、イスラム勢力による破壊の徹底度は考古学者の努力も何の収穫ももたらさないほどで、当地の歴史は文献以外からはほとんど得る所がなく、その文献の主たるものも入竺僧の記録を中心とする中国資料である。

三　伽藍は……いる　五世紀初期の『法顕伝』には「二僧伽藍あり、尽く小乗の学なり」とあり、十世紀後半の『継業西域行程』には「大曲女城に至る。南は閻牟河に臨み、北は恒河を背う。塔廟甚だ多きも僧尼なし」とある。七世紀前半の玄奘の入竺前後が最盛期であったらしい。『慈恩伝』によれば玄奘は当地で「跋達羅毗訶羅寺 Bhadra-vihāra（賢人精舎）に到り住まること三月、毗離耶犀那三蔵 Viryasena に依り仏使 Buddha-dāsa の毗婆沙 Vibhāṣa（釈論）を読む、冑毗婆沙 Varma-vibhāṣa と曰えるものなり」と修学の状況を述べている。この論書は現存しない。仏使は本巻の三に見える仏陀駄娑（覚使）という説一切有部の論師のこと。

一・二　国号の由来

羯若鞠闍国は［太古の］人がまだ長寿であった時、(注一) その旧王城を拘蘇摩補羅（原注　唐に花宮と言う）(注二) と号した。王は梵授(注三) と号し、福智を宿世に受け文武兼備で、その威光は贍部洲を慴れさせ名声は隣国を震え上がらせていた。千人の子供をもちみな智勇ともにたくましく、さらに百人の娘をもちみな物腰容貌ともにあでやかであった。その当時、ある仙人が殑伽河の側で精神をこらし禅定に入って、数万年を経て、姿は枯れ木のごとくなり、鳥が群がり遊び、尼拘律樹(注四) の果実を仙人の肩の上に残して行った。夏過ぎ冬来たり垂れこめる木蔭はこんもりと生い繁った。長い年月が経ち禅定より立ち上がり、その木を取り除こうと思ったが鳥の巣をひっくり返すのではないかと心配した。当時の人々は仙人の徳を賞讃して大樹仙人と名づけた。仙人は河辺に目をやり林や草むらを見わたすと、王の娘たちが遊びたわむれているのが目に入り、欲界(注五) の愛情が起こり執着心が生じてきた。そこで花宮に出かけ請い受けようとした。王は仙人の到来を聞き自ら出迎え慰問して、

「大仙は心を物外にとめておられますのに何とて軽々しくお出かけになりましたか」

と言うと、仙人は、

「私は林藪に止まること長い歳月を重ねました。禅定より出て見わたしまして、王の娘御たちが目に入り、愛着の心が生じ遠方からお願いに来ました」

と答えた。王は仙人の話を聞き、よい智恵も浮かばず、仙人に、

「今はお宅にお帰りになり、良い時期をお待ちください」

と言った。仙人は王の命を聞き、そのまま林に帰った。王はやむなく次々に娘たちに尋ねたが、嫁に行こうと言うものはなかった。王は仙人の威力を懼れ、心配でやつれてしまった。王の幼い女の子が王の公事の余暇を見て、もの静かに、

「父上は千子がそろい万国が慕って来ていますのに、何故に心配なさりようがまるで懼れることがあるようなのですか」

と尋ねると、王は、

「大樹仙人が結婚したいと頼んできたが、お前たちは言いつけに従おうとはしない。仙人は威力をもち災も福もおこす力がある。もし思い

どおりにならなければ、きっと激怒して国を滅ぼし、祖先の祀りを根絶し恥は先王に及ぶことになろう。このような災禍を深く考えると本当に恐ろしいことである」

と答えた。幼女は詫びを言い、

「大変な御心配をおかけしましたことは私たちの罪です。どうか、つたないこの私の体で、国運を延ばしてくださるようにお願いします」

と述べた。王はこの言葉を聞いて心から喜び、駕を命じて送り嫁がせた。仙人の盧に至ると、仙人に謝って、

「大仙は出世間の方の気持ちを伏せ、世間の人の感情をおかけになりました。この幼女を差し上げてお身の廻りの役に立てましょう」

と言った。仙人は見たが「幼女であるので」喜ばず、王に、

「私が老人であるのを軽んじて、このみめ好からざる女を当てがおうとするのか」

と言うと、王は、

「娘たちにみな尋ねましたが、言いつけを聞こうとはしません。この幼女だけがお仕えしようと願ったのです」

と答えた。仙人は心中大いに怒り、すぐさま呪いをかけて、

「九十九人の娘は一度に腰が曲がり、容姿が醜くなり、一生結婚することがないようになれ」

と言った。王が見にやらせると、言葉どおりにもう背中は曲がってしまっていた。これから後、曲女城と名を改めた。(注六)

注

一　人がまだ長寿であった時　太古、賢劫の始めのころという意。賢劫においては人は無量歳の寿命より百年毎に一歳を減少し、かくして人寿十歳に至る。それより逆に百年毎に一歳を増し人寿八万歳に至る。このように一下一上し、最初の減劫と中間十八回の増減と最後の増劫とを合わせて賢劫の二十増減と言う。なお巻二の四・一九および巻八の二・一をも参照。

二　拘蘇摩補羅（……）　原本には拘蘇磨補邏に作るが、巻八の二・一にも見える同語の表記に改め標示した。方言音の差とも思えないためである。拘蘇摩補羅 ₒ*kiu-suo-ₒmuâ-°puo-ₒlâ* : Skt. *kusuma-pura*.「花の都市」の意。

三　梵授　Skt. *brahmadatta*.

四　尼拘律樹　巻六の二および三に見える尼拘盧陀と同義。Skt. *nyagrodha*, Pa. *nigrodha*. 学名 Ficus indica. 榕樹に類した桑科植物で、四方に伸ばす枝から根を生じ、次第に延蔓して広い地を覆ってしまう。本文の「蔭を垂れ拱を合す」とはこの状を言う。インド・セイロンに多い。

五　欲界　欲界・色界・無色界を三界と言い、欲界は淫・食の二欲をもつ人間界。色界はこの二欲を離れた世界。無色界は禅定に在るものが住む世界で色界の上位にある世界。

六　曲女城の伝説　この伝説の原型と思われるものは、*Rāmāyana*, I ; *Bhagavata-purāṇa* 等に見える［Dowson : *Classical Dictionary of Hindu Mythology*, p.344］。

一・三　戒日王およびその祖先　今の王は吠奢種（Vaiśya）(注一)の出身である。字は曷利沙伐弾那（原注　唐に喜増と言う）(注二)、この土地に君臨すること二世三王である。父の字は波羅羯羅伐弾那（原注　唐に光増と言う）(注三)、兄の字は曷邏闍伐弾那（原注　唐に王増と言う）(注四)。王増は年長であるので位を嗣ぎ徳を以て政治をした。当時、東印度の羯羅拏蘇伐剌那（原注　唐に金耳と言う）(注五)国の設賞迦王（原注　唐に月と言う）(注六)は常に家臣に、

「隣国に賢主がいるのはこの国の禍［のもと］である」

と言っていた。そこで招待をして会合し、王増を殺害してしまった。その主君を失ったので国家も荒れ乱れた。その時、大臣の婆尼（原注

唐に辯了と言う(注七)は見識人望共に厚く、役人たちに、
「国の大計は今日に定めよう。先王の子で亡君の弟［たる喜増］は仁慈の天性をもち孝敬の念を心からもち、親族賢者は心より望みをかけ王位に即けたいと思っているが、この事如何であろうか」
と言った。役人たちはそれぞれ考えを述べたが、人々はみな喜増の徳をたたえ異論をとなえるものはなかった。そこで輔佐の臣下や執事はそろって勧めて、
「王子よ、良くお聞きください。先王は功を積み徳をかさね国運を隆昌にされました。王増が嗣がれ天寿を全うされるようにと思いましたが、輔佐に良臣なく敵の手に亡くなられましたことは、国家の大きな恥であり家来たちの罪であります。世間の噂や巷間のはやり歌も王子の明徳に帰一しています。大いに天下に臨み、りっぱに身内の敵討ちをし、国の恥を雪辱し父祖の業を完成すれば、功績これより大なるはないでありましょう。どうか辞退なさらないでください」
と言うと、王子は、
「国家の跡目の重大なことは、今も昔も難事とされている。人々の君主たるべき地位であるからその冊立は十分審議すべきである。私は徳も薄く、父兄も重きをおかれることはなかった。君主の大位を嗣いだとしても、その任を果たし得るであろうか。世間の噂が私を適任だと言うのは、私の浅薄なことを忘れてのことであろう。今、殑伽河の岸辺に観自在菩薩の像があり、霊験も多いと言うことであるから、行ってお言葉を賜わるようお願いしてみよう」
と答えた。そこで直ぐさま菩薩の像の前に行き、断食して祈った。菩薩はその真心に感じて姿を現わし、
「汝は何の願うところあって、このように慇懃なのか」
と問われると、王子は、
「私は罪深く慈父は死亡し、さらにひどい罰を受けて兄は殺されました。自らは徳の薄きを思いますのに、国民は推して君主の大位を嗣がせ、父祖の業を完成させようとします。私は愚昧にして［なすべきを］知らず、敢えてお言葉を頂きたく願っています」
と答えた。菩薩は、
「汝は前世にこの林中で練若苾蒭(注八)となり精励して懈らず、その福徳の力でここに王子となったのである。金耳国の王が仏法を破壊したからには、汝は王位を嗣いで再び興隆させるべきである。慈悲を志として哀愍を心としたならば、久しからずして五印度に王となるであろう。国運を伸長しようと思うならば、私の教示に従いなさい。暗に加護を加えられ、隣国にして敵対する強国はないであろう。［みだりに］師子（獅子）の座に昇ることなく、大王を号することなかれ」
と告げられた。かくて［喜増は］示教を受けて帰り、直ちに王位に即き、自らは王子と称し、尸羅阿迭多（原注　唐に戒日と言う(注九)）と号した。そこで臣下に、
「兄の敵討ちはまだしておらず、隣国は臣服してはいない。かくてはついに右手で［常に武器を執るばかりであって］食を進める期はなかろう。役人たち全員は心を同じくし力を合わせて努力せよ」
と言った。そこで国中の兵士を一手に統率し戦士を訓練した。象軍五千、馬軍二万、歩軍五万であった。西から東へ出かけ、従わざるものを征伐し、象は鞍を解かず人は甲を脱がず、六年の間に五印度を臣従させた。その領土も広め軍隊も増加し、象軍六万、馬兵十万となった。三十年になんなんとして、兵乱は起こらず政情は平和に、倹約に努め福徳を行ない慈善を施した。五印度中に令して肉を食べることを禁じ、もし生命を断つものがあれば誅罰を受けることがあっても赦されることはなかった。殑伽河のほとりに数千の窣堵波の高さ百余尺

のものを建立した。五印度の城邑村落の人通りの多い町筋や四つ角には精廬を建てて、飲食物を貯え医薬品をおき、貧しいものたちに施し、あまねく供給して怠らなかった。仏陀の聖跡のある所には、どこも伽藍を建てた。五年に一度無遮大会（注一〇）を行ない、国庫を傾けて群衆に施しをしたが、兵器だけは残しておいて寄捨には充てなかった。年に一度諸国の沙門を集め、三七日（二十一日）の間、四事（飲食・衣服・臥具・湯薬）の供養をし、法座を荘厳し、議論の席を広く飾り、互いに論議をさせて、その優劣を比べさせ、成績良好のものは褒賞し劣悪のものは退けた。もし戒行を守ること固く、徳行の著しきものは師子の座に昇らせ、王も自ら教えを受けた。持戒は清浄であっても学問のないものは、ただ敬意を表わし尊敬する点をもっていることを示すだけであった。戒律威儀もでたらめで悪徳のはっきりしているものは、国境より追い出して耳にし目にすることも望まなかった。隣国の小王や輔佐の大臣たちの、福徳を行なって怠ることなく、善を求めて疲れも忘れるほどのものは、すぐさま手を取り合い同座したが、これを「善友」と言っていた。このような「善友」でないものは、面と向かって話をすることもなく、事の奏聞し審議する要のある場合は、使をやって往復させるだけであった。その上、地方を巡幸し民の在り方を観察し、その居所を定めず、到る所に止まり、廬を作り宿とした。ただ雨期の三ヵ月間は雨が多いので出かけず、常に行宮において、日々珍しい御馳走を作り異学の人々にふるまった。僧衆は一千人、婆羅門は五百人であった。何時も一日をば三つの時間に区分し、一部の時間は政務を処理し、他の二部の時間は福を営み善を修め、孜々として倦むことなく、日を竭くしてなお足りないほどであった。

注

一　吠奢種（……）　巻二の一・九参照。

二　曷利沙伐弾那（……）　曷利沙伐弾那 *γât*$_{\circ}$-*ljĭ*°-$_{\circ}$*şa*-*b'ïwɒt*$_{\circ}$-$_{\circ}$*d'ân*-$_{\circ}$*nâ* : Skt. *harṣa-vardhana.* 喜増と訳す。注九の尸羅阿迭多 $_{\circ}$*śi*-$_{\circ}$*lâ*-$_{\circ}$*'â*-*d'iet*$_{\circ}$-$_{\circ}$*tâ* : **śilāditta*（＜Skt. *śilāditya*）即ち戒日王のこと。その遠祖 Puṣyabhūti or Puṣpabhūti は北方の Thānesvar（巻四の八「薩他泥湿伐羅国」参照）に都し、喜増に及んで曲女城に都を移した。かれの祖父 Āditya-vardhana（五五〇年ごろの生まれ）は戒日王第一世と呼ばれる。父の波羅羯羅伐弾那（波羅婆羯羅伐弾那の誤りか。Julien, Eitel は婆字を頗字とする。その依る所を詳かにしない）Prabhākara-vardhana（光増、五八〇年ごろ在位）の代に隆盛に赴いたが、摩臘婆国 Mālava（巻十一の五参照）と戦って敗れた。その子にして喜増の兄の曷邏闍伐弾那 Rāja-vardhana（王増、六〇五年ごろ即位）は摩臘婆国を攻めその王を害したが、後に本文に見える如く設賞迦王に殺された。後継者である弟の喜増の即位は六〇六―一二年ごろらしく、この王家の第六代に当たる。当年十七歳という。かれの代に五印度に覇をとなえ、曲女城に進出し、グプタ朝崩壊後の分裂状況を統一する偉業を完成したのである。没年は明瞭ではないが、『唐書』天竺伝に「貞観二十二年、王玄策を遣わしてその国に使いせしむるに、未だ至らざるに尸羅阿迭多死す」とあるから、六四七―四八年ごろであろうか。かれの没後は、インドはまた争乱分国の時代に入るから、史家はかれの没年をもってインド古代の終末とする。かれはまた学芸・宗教の擁護者でもあり、玄奘との交渉庇護は著しく、また自らNāgānanda（竜王の喜び）・Ratnāvali（宝珠の胸飾り）・Priyadarśikā（清容婦人）・Aṣṭamahāśricaitya-stotra（八大霊塔梵讃）等の戯曲や仏教讃歌を作っている。かれの宮廷には彼の知遇を得た作家 Bāṇa も出入りし、その作品の *Harṣacarita*（『ハルシャ王行伝』）は文学的に高い評価を得ているだけでなく、ハルシャ王を中心とするこの時代の資料として珍重されている。本書のテキストに P.V.Kane : *The Harṣacarita of Bāṇabhaṭṭa*, 英訳に E.B.Cowell & F.W.Thomas : *The Harṣacarita of Bāṇa* がある。なおハルシャ王とその周辺の研究書に前述の R. S. Tripathi の書の他に、R.K.Mookerji : *Harsha* がある。

三　波羅羯羅伐弾那（……）　注二参照。恐らく、波羅婆羯羅伐弾那 $_{\circ}$*puâ*-$_{\circ}$*lâ*-$_{\circ}$*b'uâ*-*kįɒt*$_{\circ}$-$_{\circ}$*lâ*-*b'ïwɒt*$_{\circ}$-$_{\circ}$*d'ân*-$_{\circ}$*nâ* : Skt. *prabhākara-vardhana* の

婆（或いは頗 ₒ$p'u\grave{a}$）の誤脱であろう。

四　曷邏闍伐弾那（……）　注三参照。曷邏闍伐弾那 *rât*ₒ*-lâ*°*-*ₒ*źia-b'i̯wɒt*ₒ*-*ₒ*d'ân-*ₒ*nâ* : Skt. *rāja-vardhana.*

五　羯羅拏蘇伐剌那　巻十の八参照。羯羅拏蘇伐剌那 *ki̯ɒt*ₒ*-*ₒ*lâ-*ₒ*na-*ₒ*suo-b'i̯wɒt*ₒ*-lât*ₒ*-*ₒ*na* : Skt. *karṇasuvarṇa.* 金耳の意。

六　設賞迦王（……）　設賞迦 *śi̯ät*ₒ*-*°*śi̯ang-*ₒ*ka* : Skt. *śaśāṅka.* 訳して月という。ベンガルにおける最初の王であるが、かれの出自およびグプタ王朝との関係は不明である。六〇六年以前に王位に即き、西方はマガダ地方、南方はオリッサ地方まで力を伸ばした。摩臘婆王の Deva-gupta と結び王増を苦しめたが、戒日王に滅ぼされることとなった。かれの出した金貨の裏面には自分の名と月の図と湿婆神の像があることより見て、湿婆教を奉じたことを知る。かれの仏法破壊の状は、本書巻六の四「拘尸那掲羅国」、巻八の二・四、六・三、六・四等の諸所に見えている。

七　婆尼（……）　婆尼 ₒ*b'uâ-*ₒ*nji* : **bhaṇi.* この大臣の婆尼は恐らく *Harṣacarita* にしばしば名の現われるハルシャ王のやや年長の従兄であり友人である Bhaṇḍi のことであろうが、この表記漢字「尼」は波你尼仙 Pāṇini その他に見られるごとく玄奘の当時は鼻音 ṇi であり、ṇḍi とはなっていないと思われる。後考を俟つ。

八　練若苾芻　Skt. *āraṇya-bhikṣu.* 山林に住む比丘の意。

九　尸羅阿迭多（……）　注三参照。

一〇　五年に一度無遮大会　巻一の六・三、三七・二等を参照。

一・四　戒日王との会見　初め［私、玄奘は］拘摩羅王の招待を受けて、摩掲陀国から迦摩縷波国へ出かけていた。(注一) 折しも戒日王は巡幸してちょうど羯朱嗢祇邏国(注二)に居た。拘摩羅王に命じて、

「那爛陀の遠来の沙門と共々に速かにやって来て会に参集されたい」

と言ってきた。そこで命のまま拘摩羅王共々往って会見した。戒日王は労をねぎらってから、

「何れの国よりやって来られたのですか。何をしようとてか」

と尋ねた。

「大唐国からやって来ました。仏法を請来しようとしてです」

と答えた。王は、

「大唐国とはどの方向にありますか。通られた道は？　ここから遠いですか」

と言うと、答えて、

「ここから東北数万余里にあたります。印度で言う摩訶至那国(注三)がそれです」

と答えた。王は、

「私はかつて摩訶至那国には秦王という天子が居られると聞きました。若くして不思議な能力をもち、長じては勇武の人であると。前代に動乱が生じ天下は分散し、戦乱が諸方に起こって人々は苦しんでいた。ところが、秦王天子は早くより遠大な計略をもち大慈悲を興し、衆生を救済して海内を平定され、その教化は遙かまで及び恩沢は遠くまで潤っていて、諸外国も徳化を慕って臣と称し従い、人民たちはその撫育を受けて、ことごとくの人が秦王破陣楽(注四)を歌っているとのことである。その風雅な舞楽の話を耳にすること、今日まで久しいものであります。りっぱな徳の名誉はまことにこのようなものでありましょう。大唐国というのはこの国のことですか」

と尋ねたので、［玄奘は、］

「そうです。至那とは以前の王の時の国号で、大唐というのは我が王朝の国号です。以前まだ即位されない時には秦王と言い、今はすでに王統を継がれて天子と称しています。前代の命運が終わりましたころ、国民は君主を戴くことなく、兵乱が引き続き起こり、人々を殺害しました。秦王は生まれつき広大な徳をもたれ、心に慈悲の気持ちを起こされ、威風は四方に及び凶賊たちは滅び、国の四方八方は平穏になり、

万国は朝貢しております。人々を愛撫し三宝を尊敬し、課税を薄くし刑罰を簡略にされました。そこで国費に余裕が出て人民に悪者はなくなり、道徳は大いに教化されたことは、一いち挙げ難いほどです」

と答えた。戒日王は、

「実にりっぱなことです。かの国の人民たちは聖王を戴くことを幸福に思っているでしょう」

と言った。

注

一 初め……いた 巻十の五・二参照。東印度の迦摩縷波国（今の Assam）の王の拘摩羅 Kumāra が、玄奘の那爛陀 Nālanda（巻九の三参照）滞在を知り、招き法を聞いた。

二 羯朱嗢祇邏国 巻十の三参照。

三 摩訶至那国 摩訶至那 ˳muâ-˳χâ-tśi˚-˳nâ : Skt. mahā-cīna.「秦」の音訳と言われる［Yule & Cordier, 東亜史研究会訳編『東西交渉史』第一章］。

四 秦王破陣楽 『唐書』二一礼楽志に「七徳舞は本(もと)秦王破陣楽と名づく。太宗（李世民(りせいみん)）秦王たりしとき劉武周(りゅうぶしゅう)を破り、軍中相与(とも)に秦王破陣楽曲を作る。即位するに及び、宴会には必ず之(これ)を奏す」とある。

一・五 無遮大会(注一) 折しも戒日王はちょうど曲女城に帰り、法会を取り行なおうとしていた。［王は］数十万の群衆を従え殑伽河の南岸にあり、拘摩羅王は数万の群衆を従えて北岸に居り、河の中流で［左右に］分かれて水陸並び進んだ。二王は先導し、［象・車・騎・歩の］四兵が厳重に護衛した。あるものは舟に乗り、あるものは象に乗り、鼓(つづみ)をうち螺(ほらがい)を鳴らし、弦をひき管を奏し、九十日を経て曲女城に至った。［城は］殑伽河の西の花咲く大きな林の中にあった。この時、諸国の二十余王は先に命令を奉じて、それぞれ自分の国の傑出した沙門や婆羅門・役人・兵士と共に大会に参集して来ていた。王はまず河の西に大きな伽藍を建て、伽藍の東に宝台の高さ百余尺のものを作り、中には金の仏像の大きさが王の身長ほどのものを安置した。台の南に宝壇を作り、仏像を浴(ゆあみ)する処とした。ここから東北十四、五里の所に、別に行宮を築いた。この時は仲春の月（吠舎佉月(ヴァイシャーカ)）であった。初日から珍しい御馳走を沙門や婆羅門たちに供し、［三七］二十一日目になると行宮から伽藍まで、道を挟(はさ)んで閣(たかどの)を作り種々の飾りを尽くし、楽人は移動することなく次々に楽を奏する。王は行宮から一体の金像を引き出す。虚空にくっきり浮かび上がる(注二)。その高さ三尺余り、大象に載(の)せりっぱな帯を張りめぐらす。戒日王は帝釈天(たいしゃくてん)の服をつけ宝蓋(がい)を手に執り左に侍し、拘摩羅王は梵天王(ぼんてんのう)の威儀を整え白い払子(ほっす)を手に執り右に侍す。それぞれ五百の象軍が鎧(よろい)をつけ、仏像の前後を取り巻き護衛する。それぞれ百の大象は楽人が乗って音楽をかき鳴らす。戒日王は真珠・とりどりの宝や金銀［で作った模造］の花を歩むにつれて四方に撒(ま)き、三宝に供養をする。まず宝壇に昇り香水を仏像に注ぎ、王自ら背に負って西の台の上に送り届け(注三)、種々の珍しい宝や憍奢耶衣(コーシャヤ)(注四)など数十百千をば供養とする。この際にはただ沙門二十余人のみ扈従し、諸国王は護衛をする。食を進め終わるといろいろの異学の人を集めて、教義の微意を論定し妙理を宣揚し、日がまさに暮れようとする時［はじめて］行宮に引き返すのである(注五)。

注

一 無遮大会 巻一の六・三参照。

二 虚空にくっきり浮かび上がる 原文は「虚中隠起」とある。未詳のまま、

今は仮りに訳す。

三　宝壇に昇り……西の台の上に送り　前文の構築位置の関係からすれば、宝台は宝壇の「北」になる。

四　憍奢耶衣　巻二の一・六参照。

五　曲女城の無遮大会の状況は、『慈恩伝』巻五に具体的に詳述する。『記』の文とは出入異同がある。長文のため繁冗を避けて引用しないが、参照されたい。

一・六　伽藍の火災　このようにして日々金像を送り届け、扈従すること初めのようにして、終日に至った。［その日］その大台は突然火を発し、伽藍や門楼は火煙を出して燃えさかった。王は、

「国財を尽くして先王の追善をなさんとて、この伽藍を建て仏の威業を世に明らかにしようとしたのに、我が身の徳薄くして天に祐けられることなく、このような災難を蒙った。［仏の］お咎めの徴がこのようであれば、どうして生きておられようか」

と言い、香を焚き礼拝し、

「幸いにして前世の善業のため、諸印度に王となることができました。どうか私の福徳の力をもって火災を消滅せしめ給え。もしお聞き入れなければ、今この時より命を亡くします」

と自ら誓い、すぐさま身を躍らせ門の閫の上に跳び乗った。［すると］たたき消すかのように火は尽き煙は消えた。諸国の王たちはこの変異を目のあたりに見て一層恐懼をつのらせた。［戒日王は］はや顔色に変わりなく、言葉ももとのように諸王に、

「突然にこの災難に会い、竣功したものを焼き尽くしてしまった。［それぞれの］心に懐く所の考えは一体どうであるか」

と言うと、諸王は顔を伏せて悲しみにくれ、

「仏を奉ずる所を竣功させ後世に伝えようと願ったのに、瞬時にして灰燼となってしまい、どう考えたらよいのでしょうか。それなのに諸外道は心から喜んでおりますとは」

と述べた。王は、

「このでき事から見れば如来のお言葉は真実である。外道・異学のものたちは常住と法を固執するが、ただ我が大師（仏陀）のみは無常と教えておられた。ところが、私の寄捨がすでに満ち念願が遂げられたのに、この変事に出会って、いよいよ如来の真実の教えを理解した。このことは大いに喜ぶべきことであり、深く悲しむべきことではない」

と言った。

一・七　戒日王暗殺の陰謀　そこで諸王を従えて東して大窣堵波に上り、高所より観覧して、まさに階段を下ろうとすると、突然、異様な人物が刃を手にして王に迫って来た。王はその時身に迫られたが、臆せず前に出て階段を進み、下向きにこの犯人を捕えて役人たちに手渡した。この際、役人たちは慌てふためき、進み出て王を救ける術も知らなかったのであった。諸王は悉くこの犯人を死刑にしようとしたが、戒日王は特別怒った様子もなく、おし止めて殺させなかった。王はよく見て、

「私が汝に何の責めがあって、このような暴挙を行なうのか」

と尋ねると、

「大王の恩沢は依怙贔屓なく、世のすべてのものが浴しております。それなのに私は愚かにも王のりっぱなお仕事をも考えず、外道たちの一言の感化を受け、直ちに刺客となって逆殺を企てました」

と答えた。王は、

「外道は何故にこのような悪心を起こしたのか」

と尋ねると、

「大王が諸国［の王や人民］を集め、国庫を傾けて沙門を供養し仏像を鋳造しておられますのに、諸外道の人々は遠くから召集されても、御下問を受けず心に恥ずかしく思い、そこでこの愚かな私に敢えて悪計を行なわせたのです」

と答えた。そこで外道の従者たちを究問すると、五百の婆羅門や才高き人たちが王の命に応じて召集して来たが、沙門たちが王から手厚くもてなされるのを嫉み、そこで火箭を射かけて宝台を焼き、消火にことよせ人々を混乱に陥れ、この時に大王を殺害しようと願ったのであったが、つけ入る隙もないまま、この人物を雇い入れて隘路を走り寄り刺殺させようとしたのであった。この時、諸王や大臣たちは外道を誅殺するよう請うたが、王はその張本人だけを罰してその他のものは罪せず、五百の婆羅門を遷して印度の国境から追い出した。このようにしてはじめて都に帰還したのであった。(注一)

注

一 前項の伽藍の火災と本項の暗殺計画とに関する記事は、『慈恩伝』に見えない。

一・八 曲女城付近の仏跡 城の西北の窣堵波は無憂王が建てたものである。如来が昔、ここで七日の間諸種の深妙の法を説かれた。その側には過去四仏の座所および散策された遺跡の所がある。さらに如来の髪や爪［を納めた所］の小窣堵波がある。

説法窣堵波の南、殑伽河に臨んで三つの伽藍があり、同じ垣中にあり門を別々にしている。仏像は荘厳、僧は謹厳で、使役する浄人は数千余戸ある。精舎の宝函の中には仏の［歯］牙の長さ一寸半に余るものがあり、妙なる光、珍しい色をし、朝な夕なに色が変わる。遠近のものは互いに連れだち、士人も庶民も悉く集まって来て、礼拝敬仰するもの日々に百人千人というように多い。これを監守しているものはその喧噪なのをうるさがり、仮りに重い［拝観］税を取り立てることにし、遠近の人に仏牙を拝観しようとするものは大金銭を出さねばならないと告げた。それでも参拝の人々はその仲間を増すばかりで、金銭の支払いは喜んで争って出している。斎日になるごとに、［仏牙を］出してきて高座に安置する。数百数千の群衆は焼香し散花をする。花はいっぱいに積もっても牙函は埋没してしまうことがない。伽藍の前の左右には、それぞれ精舎がある。高さは百余尺で、石の基壇に煉瓦造りの家であり、その中の仏像は多くの宝で飾られている。或いは金銀で鋳造したものあり、或いは鍮石を鎔かしたものありである。二精舎の前にはそれぞれ小伽藍がある。

伽藍の東南、遠からざる所に大精舎がある。石の基壇、煉瓦の造り、高さ二百余尺の建物である。中に如来の立像の高さ三十余尺のものがある。鍮石で鋳造され、諸種のりっぱな宝物で飾られている。精舎の四周の石の壁の上には、如来が菩薩行を修めていられる時に経験された事跡が彫り画かれているが、非常に詳細に彫刻を尽くしている。

石の精舎の南、遠からざる所に日天祠（スーリヤ Sūrya 神を祀った祠）があり、その祠の南、遠からざる所に大自在天祠がある。何れも青石を磨きあげたもので、共に彫刻の精を極めている。様式・大きさは仏の精舎と同じである。［浄人は］それぞれ千戸あり、その清掃の用に充てている。大鼓を打ち弦をひく音楽は昼夜やむことがない。

大城の東南六、七里、殑伽河の南に窣堵波の高さ二百余尺のものがある。無憂王が建てたものである。昔、如来がここで身の無常・苦・空・不浄［の理］を説かれた。(注一)その側には過去四仏の座所および散策された遺跡の所がある。また如来の髪・爪［を納めた所］の小窣堵波がある。病気にかかっている人が心をこめて旋繞すれば、必ず全快することができ仏の福徳を蒙るのである。

注

一　仏が無常・苦・空・不浄を説かれた旧跡は、本書には「大城の東南六、七里、殑伽河の南」とあるが、『法顕伝』には「城を去りて西すること六、七里、恒水の北岸、仏の諸弟子のために説法せし処なり。伝え言う、無常・苦・空を説き、身は泡沫に等しと説くと。此の処に塔を起て猶在り」とある。

一・九　納縛提婆矩羅城付近の仏跡　大城より東南へ行くこと百余里で納縛提婆矩羅城(注一)に至る。殑伽河の東岸に拠り、周囲二十余里あり、花咲く林と清らかな池は互いに影を映し照りはえている。

納縛提婆矩羅城の西北、殑伽河の東に一つの天祠がある。重層建築の閣や何層もの台は工夫をこらした珍しい造りである。

城の東五里に三つの伽藍があり、一つ垣の内にあり門を別にしている。僧徒は五百余人、みな小乗の説一切有部を学んでいる。伽藍の前、二百余歩のところに窣堵波がある。無憂王が建てたものである。基礎は壊れ傾いているが、それでもなお高さ百余尺ある。如来が昔、ここで七日間説法された処である。中に舎利があり、時ありては光明を放つことがある。その側には過去四仏の座所および散策された遺跡の所がある。

伽藍の北三、四里、殑伽河の岸に臨んで窣堵波の高さ二百余尺のものがある。無憂王が建てたものである。昔、如来がここで七日間説法された。その時、五百の餓鬼が仏の所にやって来て、法を聞き悟りを得て鬼性を捨て天に生まれた。(注二)

説法窣堵波の側に、過去四仏の座所および散策された遺跡の場所がある。その側に、ここにも如来の髪や爪の窣堵波がある。

ここから東南に行くこと六百余里、殑伽河を渡り南して阿踰陀国(原注　中印度の境)に至る。

注

一　納縛提婆矩羅城　納縛提婆矩羅 *nâp°-b'uâ°-°d'iei-°b'uâ-°kiu-°lâ*: Skt. *nava-deva-kula.* 新天寺の意。今の Nohbatgang である [St. Martin, in Julien: *Mém.*, II, 350; Cunningham: *A.G.I.*, 438] とされているが、また今の Kanauj の東南三十五キロの Bangarmau のやや北にある Newal (当地にはクシャン貨幣が発見された旧跡がある) であるともされている [Majumdar's Note, in *C.A.G.I.*, 708]。『釈迦方志』にも納縛提縛城として現われている。

二　五百の餓鬼が……天に生まれた　この説話は『有部毘奈耶薬事』巻二に見える。

二　阿踰陀国

二・一　概観　阿踰陀国(注一)は周囲五千余里ある。国の大都城は周囲二十余里ある。農業は盛大で花・果は繁茂している。気候は温和で風俗は善良である。福業を行なうことを好み学芸に勤めている。伽藍は百有余ヵ所、僧徒は三千余人いる。大乗も小乗も兼ねて学習している。

天祠は十ヵ所、異道の人々は少ない。

注

一 阿踰陀国 阿踰陀 ◦ʼâ-i̯u-◦dʼâ : Skt. *ayudhā*. また *ayodhyā* とも。Pa. *ayojjhā, ayujjhā*. 阿踰闍・阿踰遮とも。難勝・不可戦と訳す。この国の位置については異説がある。一は *Rāmāyaṇa* 等に見える Ayodhyā であるとし、今の Oudh にあてる [St. Martin, in Julien : *Mém.*, II, 351]。二は実際の地理上より方位・距離の訂正を行ない、今の Kākupur なりとする [Cunningham : *A.G.I.*, 439 ff.]。三は『記』の殑伽河は必ずしも殑伽の本流に限るわけではなく、支流も殑伽河と称することがあるとして、『記』の殑伽河を今の Gumti 河であると判断し、この都を今の Oudh であるとする [Watters : *On Y. Ch.*, I, 354-5]。四は阿踰陀の境域をおおむね今の Fatepur 地方にあて、その首都を Fatepur の東南二十九マイルにある Aphui なりとする [Führer : *Monumental Antiquities of Northwestern Provinces and Oudh*, p. 157]。行程よりすれば第四説が最も当たれるようである。さらに碑文からすれば殑伽河の支流 Sarayū 河（今の Ghagrā or Gogra 河）に臨み、Fyzabad 駅より約六マイルの地点であるとする [*Corpus Inscriptionum Indicarum*, III] 説等多様である [Law : H.G.A.I., 67 ff. ; B.N. Puri : *Cities of Ancient India*, pp. 12-5 ; 堀：『解説』三六八ページ]。

二・二 世親の遺跡 大城の中に古い伽藍がある。伐蘇畔度菩薩（原注 唐に世親と言う。旧に婆薮盤豆と曰い、訳して天親と曰う。訛謬なり）（注一）が数十年の間、ここで大小乗の諸種の異論を製作した所である。その側の古い建物の跡は世親菩薩が諸国王や四方の英才・沙門・婆羅門たちに講義し説法した堂［の跡］である。

注

一 伐蘇畔度菩薩（……） 伐蘇畔度 *bʼi̯wɐt-◦suo-bʼuân◦-dʼuo◦* : **vasubān-dhu* (Skt. *vasubandhu*). 旧訳の婆薮盤豆は、その第二・四音節の字が玄奘のころにはすでに不適当な音に変化していた。天親の訳語を誤りとする説の詳細は、玄奘の訳場に列した神泰の『倶舎論疏』第一に見える。要は陳・真諦の訳場における録文者の誤謬によるとする。世親は巻二の四「健駄邏国」にも見える如く、健駄邏国布路沙布邏城の人で無著の弟。始め有部を学び『倶舎論』を作ったが、後に無著につき大乗に転じ、多数の書を著わし、阿踰陀国に没した。陳・真諦訳『婆薮盤豆法師伝』一巻あり。

二・三 城北の伽藍と勝受の遺跡 城の北四、五里、殑伽河の岸に臨む大伽藍の中に、窣堵波の高さ二百余尺のものがある。無憂王が建てたものである。如来が天人衆のためにここで三月の間、諸種の妙法を説かれた所である。その側の窣堵波は、過去四仏の座所および散策された遺跡の場所である。

伽藍の西四、五里に、如来の髪・爪［を納めた所］の窣堵波がある。髪爪窣堵波の北に伽藍の［壊れ］残った跡がある。昔、経部の室利邏多（原注 唐に勝受と言う）論師（注一）がここで経部の毘婆沙論（注解）を製作した。

注

一 室利邏多（……）論師 室利邏多 *śi̯ĕt◦-lji◦-lâ◦-◦tâ* : Skt. *śrīrāta*. 勝受と訳す。また *śrīlabdha* とするものもある [Julien, Beal, Watters]。西インドの人で、鳩摩羅邏多（巻三の三・五参照）の弟子。経部の学匠。東天の馬鳴・南天の提婆・北天の鳩摩羅邏多・中天の竜樹に対し、西天の室利邏多と称せられ、五大論師の一に数えられる。その著の経部の毘婆沙論というものは今伝わらぬ。

二・四　無著の講堂と慈氏菩薩　城の西南五、六里、大きな菴没羅(注一)林の中に古い伽藍がある。阿僧伽（原注　唐に無著と言う）菩薩が教えを請い凡人を導かれた処である。無著菩薩は夜間に天宮に昇り、慈氏菩薩の所で『瑜伽師地論』(注二)『荘厳大乗経論』(注三)『中辺分別論』(注四)等を受け、昼には大衆のために妙理を講説宣布した。

菴没羅林の西北百余歩に如来の髪・爪［を納めた所］の窣堵波がある。その側の古い建物の跡は、世親菩薩が覩史多天(注五)から降りて来て無著菩薩に会った所である。無著菩薩は健駄邏国の人である。仏が世を去られた後の［正法が行なわれている］一千年中に運よく生まれ、仏の余風を承けて道を悟り、弥沙塞部(注六)に従って出家修学し、暫くしてから大乗に改宗した。その弟の世親菩薩は説一切有部で出家受業し、博聞強記で学問に通達し機微を研究した。無著の弟子の仏陀僧訶（原注　唐に師子覚と言う）(注七)と言う人は、細部の行ないまで心得ている持戒は測り知れないほどの人で、才高きことは有名であった。二、三人の徳者が常に互いに、

「およそ修行をするのは慈氏菩薩にお会いしたいと願ってのことである。もし先に寿命を捨ててかねての願いを遂げることができたならば、きっとお互いに知らせあい、行きついた先［の様子］を通知しよう」

と言っていた。その後、師子覚が寿命を捨てたが、三年たっても知らせてこなかった。世親菩薩も続いてまた寿命を捨てたが、六ヵ月を経ても何のたよりもなかった。そこでもろもろの異学の人々は、みなそろって悪口を言い、世親菩薩と師子覚とは地獄に流転して、照覧を受けることがなかったのだと話していた。その後、無著菩薩が初夜（昼夜を六時に分ける夜の初め）に、まさに門人のために禅定の法を教授している時、燈火が突然に暗くなり、空中が非常に明るくなって、一人の仙人が虚空より降りて来るや、庭の階段に進みより無著に挨拶をした。無著は、

「お前のやって来るのはどうして［こんなに］遅いのか。今の名は何と言うのか」

と尋ねると、

「この世から寿命を捨て覩史多天に行き、慈氏菩薩の内弟子となり蓮花の中に生まれました。蓮花が花を開くや、慈氏菩薩は『ようこそ広慧、ようこそ広慧』と讃嘆されました。［菩薩を礼してそのまわりを］旋繞し終わると、直ちにやって来て報告したのです」

と答えた。無著菩薩は、

「師子覚は今どこにいるのか」

と尋ねると、

「私が旋繞しているとき、師子覚は俗衆(注八)の中におるのが見え、欲楽にふけり他を顧みる暇もないような様子でしたから、どうして報告に来られましょうか」

と答えた。無著菩薩は、

「さりとはやんぬるかな（如何ともしがたい）。慈氏菩薩はどのような御相好か。如何なる法を説かれているのか」

と尋ねると、

「慈氏菩薩の御相好は何とも言葉では述べようもありません。説かれている妙法は、義理については此土（現在）と変わりはありません。しかし、菩薩の微妙なお声は清らかに暢びのびとまことに品よく、聞くものは倦むことを忘れ、教えを受くるに嫌うものはありません」

と答えた。

注

一　阿僧伽（……）菩薩　阿僧伽　˳'â-˳səng-˳g'â : Skt. *asaṅga*.「執著しない、束縛のない」の意で、無著と訳す。健駄邏国、五世紀の人。弥勒仏（慈氏）信仰家で大乗の顕揚に勉めた。著書も多い。

二　『瑜伽師地論』　梵名 *yogācāryabhūmi-śāstra*. 玄奘訳百巻現存。原著は世親作とす。

三　『荘厳大乗経論』　梵名 *mahāyāna-sūtrālaṃkāra*. 漢訳に唐・波羅頗蜜多羅訳『大乗荘厳経論』十三巻現存。世親原著とす。

四　『中辺分別論』　梵名 *madhyāntavibhāga-śāstra*. 漢訳に陳・真諦訳『中辺分別論』二巻、唐・玄奘訳『辯中辺論』三巻現存。原著は世親作とする。

五　覩史多天　巻三の一・一六注七参照。

六　弥沙塞部　『玄応音義』第二三「化地部」の注に「梵に磨醯奢沙迦と言う。……旧に弥沙塞と名づくるは訛なり」とある。Skt. *mahīśāsaka*, Pa. *mahiṃsāsaka*. 訳して化地・正地・教地等という。小乗二十部の一で、仏滅第三百年のころ、薩婆多より分派したものと伝えられる。巻十二の讃によれば玄奘はこの部の書を二十二部将来した。

七　仏陀僧訶（……）仏陀僧訶 *b'iuət˳-˳d'â-˳səng-˳χâ* : Skt. *buddha-siṃha*. 無著の『阿毘達磨集論』を注釈した人といい、現存の『大乗阿毘達磨雑集論』十六巻はかれの釈論に手を入れたものといわれる。

八　俗衆　原文は「外衆」とある。前の慈氏菩薩の「内弟子」と訳した語の原語が「内衆」であるのと対する。「内衆」という語は通常、俗人に対する出家の意に用いる。

二・五　世親の大乗への改宗

無著の講堂の建物の跡から、西北四十余里で古い伽藍に至る。北は殑伽河に臨み、中に煉瓦造りの窣堵波の百余尺のものがある。世親菩薩が初めて大乗の心を発した処である。世親菩薩が北印度からここへ着くや、ちょうど無著菩薩は自分の門人に命じて出迎えさせ、この伽藍にやって来て出あい見えた。無著の弟子は窓の外にいたが、夜半過ぎに『十地経』(注一)を暗誦していた。世親はこれを耳にするや、忽ち悟り後悔した。［このような］甚深の妙法は今まで聞いたこともない。［大乗を］悪く言った咎は舌から出ているのだ。舌が罪の本であるから、今直ちに切り取ってしまうべきだ、と。そこですぐさま鋭い刀を手にし、自ら舌を切ろうとした。すると意外にも無著が立っているのが目に入った。［無著は、］

「一体、大乗教というものは至真の道理である。諸仏も讃えられ、諸聖者たちも宗とされるものである。私は汝に教えようと思ったが、汝は今自ら悟った。今こそ悟りを得るにまさしく適した時である。これ以上よいことがあろうや。諸仏の聖教は舌を切ったとて悔い改めることはできない。もと舌で大乗を謗ったのであるから、今は舌で大乗を讃えるならば、過ちをつぐない自ら改めることとなり、これもりっぱなことである。口を閉ざしものを言わなければ、その利は一体どこにあるのか」

と告げた。この言葉を言い終わるや、ふとまた見えなくなった。世親は［無著の］命に服して舌を切らなかった。朝になり無著の所に行き、大乗につき教えを受けた。(注二)そこで研究思索して大乗の論書を作った。全部で百余部、みな盛んに世に行なわれている。

これより東へ行くこと三百余里、殑伽河を渡り、北して阿耶穆佉国（原注　中印度の境）に至る。(注三)

注

一　『十地経』『華厳経』に含まれる『十地品』であり、独立経典としては『十住経』『十地経』と言われる。梵名 *daśabhūmika-sūtra*. 後秦・鳩摩羅什訳『十住経』四巻が現存する。世親造、後魏・菩提流支等訳の『十地経論』十二巻はこの経の釈論である。

二　世親の大乗への改宗についての説話は、世親の伝記『婆藪盤豆伝』にも

同様な話が載っているが、ターラナータの『印度仏教史』には異説が見える。世親の著の漢訳の今日に伝存するものは多数ある。

三　『慈恩伝』巻三によれば、玄奘は阿踰陀国より船で八十余人の同行と殑伽河を下り阿耶穆佉国に向かったのであるが、行くこと百余里ばかりの所で十余船の賊に遭い、全員財宝はもとより衣服までも奪い取られ、あまつさえ玄奘は「質状端美」の故を以て突伽天 Durgā（湿婆神の妃）への犠牲にされるところであったが、奇跡により助かったばかりでなく、賊群を教化帰依させた插話が詳細に描写されている。

三　阿耶穆佉国

阿耶穆佉国(注一)は周囲二千四、五百里ある。国の大都城は殑伽河に臨み、周囲二十余里ある。その気候・産物は阿踰陀国と同じである。人は淳朴で俗は質実であり、学芸に勤め福業を好んでいる。伽藍は五ヵ所、僧徒は千余人おり、小乗の正量部の法を学習している。天祠は十余ヵ所、異道の人たちは雑居している。

城の東南遠からざる所、殑伽河の岸に臨んで窣堵波がある。無憂王が建てたものである。高さ二百余尺。如来が昔ここで三ヵ月の間説法をされた所である。その側には過去四仏の座所および散策された遺跡の場所がある。さらに如来の髪・爪［を納めた所の］青石造りの窣堵波がある。その側の伽藍は僧徒が二百余人おる。仏像は荘厳され、その威厳はまさにいますが如くである。台観楼閣は宏壮に珍しい造りで高々と立っている。昔、仏陀駄娑（原注　唐に覚使と言う）論師(注二)がここで説一切有部の『大毗婆沙論』を作った所である。

これより東南して行くこと七百余里、殑伽河を渡り南し、閻牟那河の北に鉢羅耶伽国（原注　中印度の境）に至る。

注

一　阿耶穆佉国　阿耶穆佉　ʔâ-i̯a-mi̯uk-k'i̯a.　この原語は Ayamukha, Hayamukha "Horse-face" [Julien], Ayomukha "Iron-face" [Cunningham] 等と推測されている。正確な位置と共に不明である。パーニニの文典の Kāsikā の注の中に Ayomukhi という地名が見えるが、これであろうともいう [Majumdar's Note, in *C.A.G.I.*, 708]。大体の位置は今の Allahabad の西北 Rae Bareilly, Pratapgarh の地方であろう。

二　仏陀駄娑（……）論師　諸本ともに仏陀駄婆に作るが、訳語「覚使」より見て今娑字に改め標示した。仏陀駄娑 b'i̯uət-d'â-d'â-sâ : Skt. *buddha-dāsa.* かれの作ったという有部の毗婆沙論、即ち注解は、『慈恩伝』巻二に曲女城の跋達羅毘訶羅寺で「住まること三月、毘離耶犀那三蔵に依り、仏使の毘婆沙の『冑毘婆沙記』Varma-vibhāśa と曰えるものを読む」とあるものを指そう [Watters : *On Y. Ch.*, I, 360]。

四　鉢羅耶伽国

四・一　概観　鉢羅耶伽国(注一)は周囲五千余里ある。国の大都城は二つの河の交点に拠り、周囲二十余里ある(注二)。稼作物は盛大で、果樹は繁茂している。気候は温和で、風俗は善良である。学芸を好み、外道を信じている。伽藍は二ヵ所、僧徒は少なく、みな小乗の教えを学習している。天祠は数百ヵ所、異道の人は甚だ多い。

注

一　鉢羅耶伽国　羅字を『記』の諸本何れも邏字に作るが、今は『慈恩伝』

に従い羅字を採る。鉢羅耶伽 *puât。-。lâ-。ia-。g'ia* : Skt. *prayāga.* この国名は *Rāmāyana, Mahābhārata* 等以下の古籍にも著名な聖地として記されている。

二　国の大都城は……ある　二つの河の交点とは、ガンジス河とヤムナ河の合流点のことで、現在の Allahabad を指す（Allahabad は十六世紀の Akbar の建造した堡塁 Llāhābās の名に由来する）[Law : *H. G. A. I.*, 117 ; Puri : *Cities of Ancient India*, 87]。

四・二　仏陀および提婆の旧跡　大城の西南の瞻博迦花(注一)の林の中に窣堵波がある。無憂王が建てたものである。基壇は壊れ傾いているが、なお百余尺ある。昔、如来がここで外道を降伏された。その側には[如来の]髪・爪の窣堵波と散策された遺跡がある。髪爪窣堵波の側に古い伽藍がある。提婆（原注　唐に天と言う）菩薩(注二)が『広百論』を作り、小乗を挫き外道を説伏された処である。初め提婆菩薩が南印度からこの伽藍に来られた時、城中に外道の婆羅門がいた。高い見識をもち博聞で、弁舌の才あり滞ることがなく、名称に従って話を進め実質を追究し、実質をひっくり返して言葉をつまらしてしまう[という]やり方の人であった]。提婆が玄奥を窮めた人であることを以前から知っていたので、提婆の鋭鋒を挫こうと思い、名称に従って質問をし、

「汝は何と言う名であるか」

と尋ねると、提婆は、

「天と言う」

と答える。外道が、

「天は誰か」

と尋ねると、提婆は、

「『私』だ」

と答える。外道が、

「『私』は誰か」

と尋ねると、提婆は、

「狗だ」

と答える。外道が、

「狗は誰か」

と尋ねると、提婆は、

「汝だ」

と答える。外道が、

「『汝』は誰か」

と尋ねると、提婆は、

「天だ」

と答える。外道が、

「天は誰か」

と尋ねると、提婆は、

「『私』だ」

と答える。外道が、

「『私』は誰か」

と尋ねると、提婆は、

「狗だ」

と答える。外道が、

「誰が狗か」

と尋ねると、提婆は、

「汝だ」

と答える。外道が、

「『汝』は誰か」

と尋ねると、提婆は、
「天だ」
と答える。このように循環し［た論法をされたので］外道ははじめて［自らの非を］悟り、これより以後は深く仏の道を尊敬するようになった。

注
一　瞻博迦花　瞻博迦 *tśi̯äm-pâk.-ka*：Skt. *campaka*. また瞻波迦・占博迦・旃簸迦・瞻衒伽など諸種の表記をされ、訳して金色花といわれる。黄色の芳香ある花をつける樹。学名 Michelia champaka.
二　提婆（……）菩薩　麗本・宋本等は「唐に天受と言う」とあるが、提婆 *d'iei-b'uâ*：Skt. *deva* の訳語としては、元・明本の如く「天」を当てるべきで、今は訂正標示した。提婆は聖提婆（Ārya-deva）、聖天とも言われる。南印度の婆羅門の子とも、或いは本書巻四の九・四の如く錫蘭の人とも言う。三世紀ごろの人。竜樹について出家し（巻十の一二・三）、外道を論破し（巻八の三・三）、那爛陀寺に住したが、邪道のために殺されたという。付法蔵の第十四祖。著書はここに出す『広百論本』一巻（唐・玄奘訳）・『百論』二巻（姚秦・鳩摩羅什訳）その他が伝わる。

四・三　天祠と食人鬼の迷信　城中に天祠がある。美々しく飾った壮大な建築は霊験が甚だ多い。ものの書物によれば、ここは衆生が福徳を植える勝れた土地である。この祠に一銭を寄捨するならば、その功徳は他所に千金を寄付するにまさり、さらに自らの生命を軽んじて、この祠の中で命を断つものは、天の福楽を受け［天界に生まれ］、永劫に生き永らえる、という。

天祠堂の前に一本の大きな樹がある。[注一] 枝葉は密生し、木影はみっしりと覆っており、食人鬼がこの樹に住んでいる。それ故その樹の近辺にはたくさんに遺骸がある。もし人がこの祠の中に入るならば、身命を亡くしてしまわないものはない。怪しげな言葉に誘われるともいい、また神の誘いともする。昔から今日に至るまで、この迷信に変わりはない。近ごろ婆羅門がいた。族姓子（大族の男子）[注二] であった。心は広く智恵あり、明敏で才高き人で、祠へやって来て人々に、
「邪な習慣やつまらない考えの人は指導しにくいものだ。私は今、そのような人たちと同じことを行ない、その後に教化しよう」
と告げた。樹に登って行ってから、下に向かって友人に、
「私は今まさに死ぬでしょう。以前はでたらめだと思っていたが、今は真実であることを体験しました。天仙たちが伎楽を奏し、空から私を出迎えてくれています。今、この霊験あらたかな所から、このつまらない身を捐てます」
と言い、ついで身を投じ自ら命を絶とうとした。親友たちは思い止まるよう諫めたが、その気持ちを変えなかったので、［友人たちは］衣服を地に布きつめ樹下の周辺をとり巻いた。［それで］身を投じたけれども、体も命も救うことができた。暫くして蘇醒すると、
「ただ空中に天仙たちが招いているのが目に入るだけであったが、これはきっと邪神に引かれていたのであって、天界の音楽を聞くことができたのではなかったのだ」
と語った。

注
一　天祠堂の前に……樹がある　この樹は今も Allahabad 市の河に近い天祠の中にあるガジュマル（榕樹）の何代か前のものであるといわれ、人人の尊崇を受けている［Cunningham：A.G.I., 445, 708-9］。この南に阿育王の石柱詔勅が現存する。この石柱については玄奘は何ら関説していない。カニンガムは後世に他所からこの地点に移したものと推測し

たが、近年になり最初からここに建てられていたものであることが論証された［中村：『インド古代史』下三四六ページ注（10）］。

二　族姓子（……）　また族姓男とも。梵名は矩羅補囉 *kula-putra*. 四姓中の随一のものをいう。一般には良家に生まれたものをいい、善男子と同義。

四・四　大施場　大城の東の［殑伽河と閻牟那河の］二つの河の交点[注一]は広さ十余里あり、土地は高燥で細かい砂がひろびろとしている。昔から今に至るまで、諸王や豪族たちは施しをすることがある場合、ここへやって来ないものはない。その施しの分量はとても計り切れないほどであり、ここを大施場とよんでいる。当時、戒日王は前代の事業を引き継ぎ、心をこめて施しをしていた。五年間財を蓄え、一朝にしてこの施場で寄捨してしまう。珍しい品々をたくさん集め、第一日目には大きな仏像の多くの宝で飾ったものを安置し、そこで最上の珍しい品物を持参して奉納する。第二日は［当地に］常住する僧、第三日は目前の僧衆。第四日は才高く学識ある人や、博い知識と多能な人。第五日は外道の学徒や俗世から遁れた隠者。第六日は連れ合いのない人・身寄りのない人や貧乏人や物乞いをする人など。珍しい品物を残らず取りそろえ、りっぱな御馳走の限りを尽くす。このように順序次第をつけ、施しの行きわたらないものはないようにする。国庫が空になり服飾品を施し尽くしてしまうと、髻につけてある宝珠や身につけているいろいろな瓔珞を、次第に施していって初めて思い残すことがない。すっかり寄捨し終わると、感をこめて、「楽しいことである。私の持ち物はみなもう金剛石の如く堅固な蔵に入れたのだ」と言う。かくして後、諸国の君主たちはそれぞれ珍しい服などを献上し、何時も十日も経たない間に役所の倉庫はまたいっぱいになるのであった。

注

一　大城の東の……交点　北から流れてくる幅一マイル半の泥色をしたガンジス河と西から流入する幅半マイルほどの綺麗なヤムナ河の合流点は Tribeni Ghat と呼ばれ、今も聖地として人々が集まって来る［Murray's *Handbook*, p.40］。

四・五　戒日王の大施と外道の苦行　大施場の東の合流口では、日ごとに数百人の人が自ら溺れて死ぬ。かの国の土俗の言い伝えに、天に生まれることを求めようと思えば、ここで絶食して河中に身を沈め［溺死す］ればよく、中流で沐浴すれば罪障は消滅するとのことである。[注一]こういうわけで、外国や遠方から人々がやって来て集まり止まり、七日間断食をし、その後、命を絶つのである。山に住む猿や野に住む鹿は水辺に群れをなしてたわむれ、あるものは流れに水浴びをして返って行くもの、あるものは絶食して死ぬものなどがある。ちょうど戒日王の大施の時に、一匹の猿が河岸で、群れから離れて、樹の下でじっとして食を絶ち、数日経た後に自ら飢えて死んでしまった。[注二]こういうわけで外道たちの苦行を修するものは、河中に高い柱を立て、日が昇ろうとすると直ちに柱に昇り、片手片足で柱の端をつかみ傍の杙に乗せ、［もう一方の］片手片足はただ外方に伸ばし空中で曲げない。頸を延ばし目を見開き日を見つめ［日の移動するにつれて］右へまわる。日が暮れかかるころになって始めて降りてくる。こんなふうのものがその仲間数十人もおる。このように苦行を勧め、生死の境から解脱しようとし、あるものは数十年もの間、いまだかつて懈怠したことはない。

ここから西南して大きな林の中に入る。猛獣や野象が群れをなして旅行者に乱暴をし、旅人はたくさんの人で集団を組まなければ通るこ

とはむずかしい。行くこと五百余里で憍賞弥（コーシャーンビー）国（原注　旧に拘睒弥国と曰うは訛なり。中印度の境）に至る。

注

一　殑伽河における投水自殺するこの風習は、義浄の『寄帰伝』第三九、傍人獲罪の条にも「恒河の内、日に幾人か殺す。伽耶 Buddha-gayā 山辺、自ら殞すこと一に非ず。或いは餓うるも食わず、或いは樹に上りて身を投ず。斯れ等の迷途は、世尊判じて外道となす」と、他地方にも古くからあったことを記している。

二　一匹の猿が……死んでしまった　この猿はここで断食して死んだために天界の福楽を得たと、人々に信じられたものであろう。

五　憍賞弥国

＊　憍賞弥国は古代インドの十六大国の一に数えられ、また、六大都市の一にも挙げられ［『大般涅槃経』巻中］ている。この国についての研究書の主なるものを挙げれば、N. N. Ghosh : *Early History of Kauśāmbi* ; B.C.Law : *Kauśambi in Ancient Literature*, Memoirs of the Archaeological Survey of India No. 6 ; G. R. Sharma : *Excavations at Kauśāmbi* ; 樋口隆康「コーサームビー国都考」関西大学『東西学術研究所論叢』第三六号（1960）所収などであるが、大略は平凡社『世界考古学大系』八、九四—五ページで知り得る。

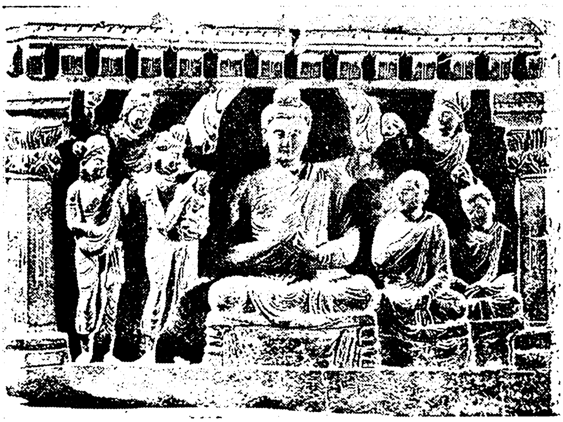
五・一　概観　憍賞弥（コーシャーンビー）国(注一)は周囲六千余里ある。国の大都城は周囲三十余里ある。土地は肥沃なことで有名で、地利は豊かである。粳（うるち）稲が多く、甘蔗（かんしゃ）がよく茂っている。気候は暑熱で、風俗は剛勇である。学芸をよく勉強し、福徳善業を行なうことを心懸けている。伽藍は十余ヵ所あるが、崩れ倒れ荒廃している。僧徒は三百余人、小乗の教えを学んでいる。天祠は五十余ヵ所、外道の人々は甚だ多い。

注

一　憍賞弥国　憍賞弥 *˳kiäu-˚śiang-˳mjię* : **kauśāmmi* (Skt. *kauśāmbi*, *kosambiya* [阿育王石柱])。この漢字は、通常、梵語正音を表記するものと見られているが如何なものであろうか。『法顕伝』には拘睒弥とあるが、諸訳のなかには倶舎弥・拘尸弥などの *-mi* 系統の用字と、憍閃毗・倶参毗・拘睒鞞などの *-bi* 系統の用字とが早いころより混在している。弥の字音が Denasalization（非鼻音化現象、例えば馬 *ma→mba*）を起こして *mbi* のような音になるのは、一般的に見て、玄奘よりよほど後の時代である。従って、玄奘の時代をも含めてそれ以前の表記は、梵語音 *-mbi* をそのまま表記したと見るよりは、*-mi*, *-bi* の何れかに傾斜したものと見るべきであろう。この国の位置については従来紛々としていた。その故は、鉢羅耶伽（プラヤーガ）国より西南し大林中を五百里行きて当国に達するという前項末の記事（『伝』巻三も同じ）と、『慈恩伝』巻五に「鉢羅耶伽国を発し、西南のかた大林野の中を行くこと七日にして憍賞弥国に至る」とある記事の、五百里と言い、七日という文字から相当遠方の地点を考えたことによる。近年 G.R. Sharma の考古学的調査により、憍賞弥は Allahabad よりヤムナ河沿いに西方約六十キロの北岸にある Kausam, Kosam がこれに当たることが確証された。最古期の城壁は前七世紀に溯（さかのぼ）ると考えられ、後六世紀の白フン族の首領 Toramāṇa の侵略により破壊されたもののようである。城内に柱頭の欠けた阿育王の石柱（詔勅の刻文はない）が発見された。

五・二　鄔陀衍那王刻檀の仏像　城内の故（もと）の御殿の中に大精舎の高さ六十余尺のものがある。［そこに］栴檀（せんだん）を刻して作った仏像があり、上に石の蓋（かさ）が懸（か）けてある。鄔陀衍那（ウダヤナ）王（原注　唐に出愛と言う。訛なり）(注二)が作ったものである。不思議なでき事がまま起こり、神妙な光を時に照らし出すことがある。諸国の君主たちは、

自らの力を恃んで持ち去ろうとして、多人数で行なうが移転させることはできなかった。それで供養を計画し［模写の像を作り］みなこの像の真影を得たと言っている。この像の由来を語れば［次の如くである］、即ちこの像たるや、初め如来が正覚を成じ［悟りを得］られ、天宮に昇り母のために法を説かれて、三月の間還って来られなかった。かの王は如来を思慕し如来のお姿を像に刻むことを願った。そこで尊者没特伽羅子(注二)に頼み、神通力で工人を伴い天宮に上り、親しく仏の妙相を観察して栴檀に彫り刻んだ(注三)。如来が天宮から還られるや、刻檀の像は起ち上がり世尊をお迎えした。世尊は「［大衆を］教化されることと御苦労です。末世まで教導してくださることが私の願いです」と慰労された、という(注四)。



鄔陀衍那王の仏像製作，サーリ・バーロル出土

精舎の東、百余歩に、過去四仏の座所および散策された遺跡の場所がある。その側、遠くない所に如来の井戸および浴室がある。井戸はなお水を汲み上げるに十分なほどであるが、浴室は崩れ壊れてしまっている。

注

一　鄔陀衍那王（……）　鄔陀衍那　*ꞈiwo°-ₒd'â-°ꞈiän-ₒnâ* : Skt. *udayana* (*udayana-vatsa-rāja.* 漢訳の出愛はこれに当たる[cf. *Mvy.* No.3650])。旧訳の優塡 ₒ*ꞈiəu-ₒd'ien* は Pa. *udena* (*-vaccha-rāja*) に当たるという。仏陀時代に仏教を信奉した王［『優塡王経』『大乗白子王所問経』・*Dhamma-pada* 等に出づ］。

二　尊者没特伽羅子　巻四の七・二参照。

三　刻檀の仏像の説話は、『増一阿含経』二八、『観仏三昧海経』五などに見える。巻十二の二二・三「媲摩城」の項にこの仏像が飛来して行った話が出ている［高田：『仏像の起源』一〇ページ以下］。

四　仏陀が憍賞弥国に遊化された話は、『摩訶僧祇律』二八などに見える。

五・三　**具史羅長者の遺跡と仏跡**　城内の東南隅に古い家の廃址がある。具史羅（原注　旧に瞿師羅と言う。訛なり）長者(注一)の旧宅である。中に仏［のおられた］精舎と髪・爪の窣堵波がある。さらに建物の址がある。如来の浴室である。

城の東南遠からざる所に古い伽藍がある。具史羅長者の旧園である。中に窣堵波がある。無憂王が建てたもので、高さ二百余尺ある。如来はここで数年の間、説法された。その側には過去四仏の座所および散策された遺跡の場所がある。さらに如来の髪・爪の窣堵波がある。

注

一　具史羅（……）長者　具史羅 *g'iu°-°şi-ₒlâ* : Skt. *ghoṣila.* 旧訳の瞿師羅 ₒ*g'iu-ₒşi-ₒlâ* は声調にだけ差異がある。この語彙は『慈恩伝』には巻三に瞿史羅 ₒ*g'iu-°şi-ₒlâ* とし、巻五に劬師羅 ₒ*g'iu-ₒşi-ₒlâ*（瞿師羅と同音）とする。原語より察するに、恐らく具史羅が最も良く当たるものかと思われるが、この四種何れも大差はなく、「訛なり」と断ずる程の異を認め難い。この語は「美音」と訳す。憍賞弥の長者で、仏に帰依し、

園林を献じ、寺院を建立した。仏陀はここに住したことは諸経に見えるが、玄奘の言うごとく「数年」滞在したかどうかは明証がない。なお、この具史羅長者の旧宅と思われる僧院が、現在の Kosam の旧土塁の東門の北に発見されている［平凡社『世界考古学大系』八、九四―五ページ］。

五・四　世親および無著の作論の旧跡　伽藍の東南の重閣の上に古い煉瓦造りの室がある。世親菩薩が昔、ここに住んで『唯識論』(注一)を作り、小乗を論破しもろもろの外道を論難された。

伽藍の東の菴没羅林の中に、建物の廃址がある。無著菩薩がここで『顕揚聖教論』(注二)を作られた所である。

注

一　『唯識論』　梵名 Vijñaptimātratāsiddhi. 梵本も現存する。漢訳に三本あり、魏・菩提流支訳『大乗楞伽経唯識論』一巻、陳・真諦訳『大乗唯識論』一巻、唐・玄奘訳『唯識二十論』一巻。世親の『唯識三十頌』と共に世親の代表的著作である。小乗・外道の立場からの批評・疑問に答える形式で唯識説の正しい意味を表わした書である。

二　『顕揚聖教論』　無著が『瑜伽論』の要義を取って聖教を顕揚しようとした『顕揚聖教論頌』（唐・玄奘訳一巻）であろう。『顕揚聖教論』と言う書は、無著の『論頌』と世親の釈文とを合わせた二十巻の書（唐・玄奘訳）のことであるが、ここは前書を指すものであろう。

五・五　毒竜降伏と仏法滅尽の伝説　城の西南八、九里に毒竜石窟がある。昔、如来がこの毒竜を降伏せしめられたのである。(注一)［石窟の］中に影を留む、と伝記にはあるけれども、今は見られない。その側に窣堵波がある。無憂王が建てたものである。高さ二百余尺。傍に如来の散策された遺跡と髪・爪の窣堵波がある。病に苦しむものが祈願すれば治癒することが多い。釈迦の教えが絶滅するのはこの国を最後とする［という仏陀の予言がある］ので、上は君主から下は庶民におよぶまで、この国の境に入ると自ら心が傷み、涙を流し悲しんで帰らないものはない。(注二)

注

一　毒竜降伏の伝説　この伝説は『摩訶僧祇律』巻二〇に見えるが、仏陀ではなく善来比丘 Svāgata が憍賞弥で菴婆羅 Anvala という悪竜を降伏させたことになっている。

二　釈迦教法滅尽の伝説　如来の予言として、仏滅後千五百年、俱睒弥国の説法をよくする三蔵の弟子が清浄戒を説く羅漢に怨みを懐き、羅漢を殺す。悪魔および外道はこれを喜び、塔寺を破壊し比丘を殺害し、経典は阿耨達王が持ち去り、かくして仏法は滅尽するであろうと［『摩訶摩耶経』巻下、『雑阿含経』巻二五、『法苑珠林』巻九八］。

五・六　迦奢布羅城における護法　竜窟より東北して大林中を、行くこと七百余里、殑伽河を渡り、北して迦奢布羅城(注一)に至る。周囲十余里あり、住民は富裕である。城の傍に古い伽藍があるが、ただ基礎が残っているだけである。昔、護法菩薩(注二)が外道を降された所である。この国の先王が邪説にまどわされ、仏教を廃して外道を尊敬しようとし、外道の衆の中から一論師の、賢明にして見識あり、深奥に通達するものを召し出し、邪宗の書千頌、凡て三万二千言のものを作らせ、仏教を非難し、自らの宗を盛大にしようとした。そこで僧たちを召集し外道と議論させ、外道が勝てば仏教を廃し、僧たちが負けることがなければ［外道が］舌を切り謝ることとした。この時に当たり、僧徒は敗退することを恐れ、集まって、

「慧日（仏を譬う）すでに沈み、［人を彼岸に渡らせる］法の橋はまさに崩れようとしている。王は外道と仲間になっているからには敵することができようか。事態がこのようであれば、計画はどのようにすべきであろうか」

と相談した。人々はみな黙して献議するものはなかった。護法菩薩はまだ年は幼かったが、弁もたち博聞であり、人物も大きかった。［そのかれが］大衆の中で大きな声で発言し、

「私は不敏ではありますが、計画を述べさせていただきたい。私に王の命に直ぐに応じさせるのが一番良いでしょう。りっぱに議論して勝つことができれば、これは仏の御加護でしょう。議論に敗退したとしても、年少です。とすれば勝っても負けても理由が立ち、仏法も僧衆も何の責任もかからないでしょう」

と言うと、みなの衆は、

「まことにそのとおりだ」

と言い、その計りごとのように、そのまま王の命に応じた。そこで論議の座に昇ると、外道はその大綱を或いは進め或いは止め、論理を或いは抑え或いは揚げて、自ら採る所［の宗旨］を弁じ、相手の反論を待った。護法菩薩は相手の言葉を受け入れて笑を浮かべ、

「私は勝った。今、言葉の中の真意を弁じましょうか。それとも大意を弁じましょうか」

と言うと、外道は不愉快げに、

「あまり自惚れなさるな。言葉を十分に領会するならば、それは勝ちである。当方の文を順序に受けて、その後にその意義を解釈せよ」

と言った。護法はそこで外道の声音のとおりにその文の意義を述べたところ、論理に誤りもなく、趣にも何の違いもなかった。このようなわけで、外道は聞き終わると、自ら舌を断ち切ろうとしたが、護法は、

「舌を切ったとて謝罪することにはなりますまい。自ら執る宗義を改めてこそ、前非をさとったことになりましょう」

と言った。そこでかれらのために説法をしたところ、心底から信仰するようになった。王も邪道を捨て正法に従い敬った。

護法が外道を伏した所の側に窣堵波がある。無憂王が建てたものである。基礎は崩れ傾いているが、なお二百余尺ある。如来が昔、ここで六ヵ月の間説法された所である。傍に散策された跡と髪・爪の窣堵波がある。

これより北へ行くこと百七、八十里で(注三)鞞索（原注　山格反──→ṣak。）迦国（原注　中印度の境）に至る。

注

一　迦奢布羅城　本書には玄奘親践の地のごとく記すが、『慈恩伝』に当地の記事不見。疑問として残す。迦奢布羅 。*ka*-。*śia*-*puo*°-。*la*：**kaśapura*. その位置に関しては異説があったが、おおむねガンジス河の一支流 Gomati or Gumuti 河畔の Sultānpur と推定される。当市の古名は Kuśabhavanapura, 或いは略して Kuśapura と言われるという［Cunningham: *A.G.I.*, 456］。Kaśa と Kuśa との差異は、或いは伝聞の故か。

二　護法菩薩　達磨波羅 Dharmapāla のこと。巻十の一六・二参照。

三　これより北へ行くこと百七、八十里　『慈恩伝』には迦奢布羅城の記事を出さず、憍賞弥国具史羅長者の記事に続け、「此れより東に行くこと五百余里、鞞索迦国に至る」とする。

六 鞞索迦国

六・一 概観 鞞索迦国[注一]は周囲四千余里ある。国の大都城は周囲十六里ある。農業は盛んで、花・果は繁茂している。気候は温和で、風俗は淳朴(じゅんぼく)である。学芸を好み、福楽を求めて［信仰篤(あつ)く］心を変えることがない。伽藍は二十余ヵ所、僧徒は三千余人おり、みな小乗の正量部の教えを学んでいる。天祠は五十余ヵ所、外道は甚だ多い。

注

一 鞞索迦国 鞞索（山格反）迦 ₒ*biei-sakₒ-ₒka*. 『慧琳(えりん)音義』巻七七（『釈迦方志』の条）には「鞞索迦 上は婢粄反、次は生核反、梵語なり」とₒ*b'jię-sakₒ-ₒka* としている。**viśaka, viśāka* のような原音と思える。この位置については諸説あり、一致しない。カニンガムは法顕の沙祇 Sāketa と同じとし、Ayodhyā 即ち Oudh とする [A. G. *I*., 459]。St. Martin は今の Biseipur である [Julien : *Mém*., II. 356] とする。Smith は Gomati 河畔の聖地 Nimkhar (Sitapur の南二十マイル、27°20′N., 80°35′E.) とする [Watters : *On Y. Ch*, II. 339]。何れを是とするか不明。後考を俟つ。

六・二 大城付近の旧跡 城の南（『伝』は「東南」に作る）道の左に大伽藍がある。昔、提婆設摩(デーヴァシャルマ)阿羅漢がここで『識身論』を作り[注一]、我と人と［実在すること］無しと説き、瞿波(ゴーパ)阿羅漢は『聖教要実論』を作り[注二]、我と人と有り（実在す）と説いた。この法の主張により根深い論争となった。また護法菩薩がここで七日間にわたり小乗の百人の論師を屈伏した所である。伽藍の側に窣堵波の高さ二百余尺のものがある。無憂王が建てたものである。如来が昔日、六年の間ここで法を説き人人を教化された。説法［窣堵波］の側に珍しい樹の高さ六、七尺[注三]のものがある。年月は移り代わっても少しも増減しない。如来が昔、歯を掃除されたあとその残りの枝を棄てられ、それから根が生えたもので、繁茂して今日に至っている[注四]。邪見の人や外道の人たちが争ってやって来て伐採するが、すぐにもとのように生える。その側、遠くない所に過去四仏の座所と散策された遺跡の場所がある。さらに如来の髪・爪の窣堵波がある。窣堵波の基礎は隅を連ね、林と沼とは互いに照らしあっている。

ここから東北へ行くこと五百余里、室羅伐悉底(シラーヴァスティー)国(原注 旧に舎衛(しゃえ)国と曰う。訛なり。中印度の境)に至る。

注

一 提婆設摩阿羅漢が……作り 提婆設摩 ₒ*diei-ₒb'uâ-śįät-ₒ-ₒmuâ* : Skt. *devaśarma*. 天寂或いは賢寂と訳す。説一切有部の師。『六足論』の一たる『阿毗達磨識身足論』十六巻を撰した。

二 瞿波阿羅漢は……作り 瞿波 ₒ*g'įu-ₒpuâ* : Skt. *gopa*. この人については『記』の文以上のことは知られていない。また『聖教要実論』も伝存しない。

三 高さ六、七尺 『慈恩伝』『釈迦方志』には「七十尺」とある。

四 如来が昔、歯を……至っている この歯木 *danta-kāṣṭha* から生長した奇樹の記事は、『法顕伝』では沙祇 Sāketa の条に述べている。カニンガムが鞞索迦と沙祇を同一視する所以である。

大唐西域記 巻第五

大唐西域記　巻第六　四国

三蔵法師玄奘奉　詔訳
大捴持寺沙門辯機撰

室羅伐悉底国　劫比羅伐窣堵国　藍摩国　拘尸那掲羅国

一　室羅伐悉底国

一・一　概観　室羅伐悉底国(注一)は周囲六千余里ある。都城は荒廃し、境界もはっきりしない。宮城の建物の跡は周囲二十余里ある。荒廃は甚だしいけれども、なお住民がいる。農作は豊かで、気候は穏やかである。風俗は淳朴で、学芸に熱心で福業を好んでいる。伽藍は数百あるが、倒壊したものが非常に多い。僧徒は少なく(注二)(『伝』に「数十」)正量部を学んでいる。天祠は百ヵ所、外道の人々は甚だ多い。

注

一　室羅伐悉底国　巻二の四・八に既出。羅字を宋本は邏に作る。邏の方がよかろう。室邏伐悉底 *śịĕt˳-lâ°-bʼịwɒt˳-sịĕt˳-°tiei* : Skt. *śrāvastī*, Pa. *sāvatthi*. 旧訳の舎衛 **śịăg-ịwäd → śịa°-jịwäi°* の六朝音は **śavat* のような音を意図したものであろう。旧訳には他にも室羅伐・舎婆提のようなものがある。室羅伐悉底は古代インドにおいて、Sāketa（沙祇）・Ayodhyā（阿踰陀）と共に、十六大国の一である憍薩羅 Kosala 国の重要都市であった（玄奘が国名とするのは「都市」の意）。その位置は現在のネパールに近い Bahraich 県と Gonda 県との境界、Rāpti 河の南岸にある Saheṭh-Māheṭh という二つの姉妹村にまたがって遺跡が存する。前世紀末以来カニンガム、マーシャルの考古学的調査により、建造物の遺址および彫刻（大部分は仏教彫刻、ジャイナ教と婆羅門のものも多少あり）、さらに碑銘［静谷正雄：『インド仏教碑銘目録』No.759-62］も発見された。当地の出土品の多くは今日ラクノー Lucknow 博物館に収蔵されている。当地は宗教上、文化上に重要なるのみならず、古代交易路の要点でもあった［Cunningham : *A.G.I.*, 467 ; Law : *H.G.A.I.*, 124-6 ; V. Pathak : *History of Kośala* 参照］。原始仏教聖典の七、八割は当地で説かれたものであり、釈尊はその後半生の多くを当地を中心として送った［中村：『インド古代史』上二四七ページ］。

二　伽藍は数百あるが……僧徒は少なく　当地は古代に仏教盛大であったことは言うまでもないが、五世紀の『法顕伝』にも「祇洹精舎を繞り九十八（麗本「十八」とする）僧伽藍あり、尽く僧の住するあり、唯一処のみ空なり」となお盛んであったことを記している。

一・二　勝軍王　これこそ如来在世の時、鉢羅犀那恃多王（原注　唐に勝軍と言う。旧に波斯匿と曰う。訛略なり）(注一)が治めていた国都である。旧宮城内に古い建物の址がある。勝軍王の御殿の址である。次に、東遠からざる所に一つの建物の址があり、上に小さな窣堵波が建っている。昔、勝軍王が如来のために建てた大法堂［の址］である。

注

一　鉢羅犀那恃多王（……）　鉢羅犀那恃多。羅字を『記』には邏に作るが、今は『伝』により羅字を採る。犀字は『伝』に斯に作る。鉢羅犀那恃多 *puât˳-˳lâ-˳siei-˳nâ-°źi-˳tâ* : Skt. *prasenajit*. 勝軍・勝光と訳す。旧訳波斯匿 **puâ-sieg-nịək→˳puâ-˳sịę-nịək˳* は Pa. *pasenadi, pasenaji*［Lüder's *List.*, No. 751］のような音に対する表記であろう。釈迦と同時代の人

で、仏教に帰依したことは『中本起経』下、『中阿含』五九、『雑阿含』四二、『出曜経』八等に見える。摩掲陀国王の阿闍世と戦い、後に子の毗琉離(Skt. *virūdhaka, vidūdabha*)に位を奪われた。ヴィドゥーダバは変死をし、憍薩羅国はやがて摩掲陀国に併合された。勝軍王の多くの妃の中で、末利（Mallikā 即ち勝鬘夫人）が有名である［中村：『インド古代史』上二六九ページ］。

一・三　**指鬘改悔の所**　法堂の側、遠からざる古い建物の址の上に窣堵波がある。仏の母方の叔母の鉢邏闍鉢底(原注　唐に生主と言う。旧に波闍波提と云う。訛なり)(注一)苾芻尼(比丘尼)の精舎で、勝軍王が建立したものである。東隣の窣堵波は蘇達多（原注　唐に善施と言う。旧に須達と曰う。訛なり）(注二)のもとの宅［の址］である。

善施長者の宅の側に大きな窣堵波がある。鴦窶利摩羅（原注　唐に指鬘と言う。旧に央掘摩羅と曰う。訛なり）(注三)が邪心を捨てた所である。鴦窶利摩羅は室羅伐悉底の悪人であった。人々に害をしたり、都城に乱暴をしたりした。人を殺して指を取り、首に飾って鬘とした。母を殺して指の数を充たそうとしたので、世尊は哀れみ行って教化しようとされた。［鴦窶利摩羅は］遠くに世尊の姿を見て、しめたと喜び、

「私は天に生まれるであろうことは、もうきまった。亡き師に教えがあり、その遺言はここにある。仏を害し母を殺せば、必ず梵天［王］に生まれると」

と思い、その母に、

「年よりはしばらく待っていてください。まずあの大沙門を殺しましょう」

と言い、すぐさま剣を手にし世尊に立ち向かった。如来はそこで落ちついた様子で進んだり退いたりした。悪人の指鬘は追いかけまわしたが及ばなかった。世尊は、

「どうしてつまらない考えを持ち続け、善根を捨てて悪の種ばかりに励むのか」

と言われた。そこで指鬘は教誨を聞き、自分のやっていることの非を悟り、それですぐさま仏に帰依し、弟子に加えられるよう願った。懸命に努めて怠ることなく、羅漢果を證した。

注

一　鉢羅闍鉢底（……）　羅字を『記』は邏に作る。今、『伝』に従い羅をとる。鉢羅闍鉢底 *puât。-。lâ-。źja-puât。-°tiei* : Skt. *prajā-pati*, Pa. *pajā-pati*. 大愛道・生主と訳す。旧訳はパーリ語のような音に対しよう。また摩訶波闍波提とも言う。釈迦の生母摩耶夫人の妹で、生母の死後、浄飯王の妃となる。後に仏陀に帰依し比丘尼となり、比丘尼の長老として統べた。

二　蘇達多（……）　蘇達多 *。suo-d'ât。-。tâ* : Skt. Pa. *sudatta*. 善施・楽施と訳す。旧訳の須達の須 **siug*→*。siu* は不適当であろう。室羅伐悉底の長者で、貧窮孤独のものへ常に施しをするため給孤独（阿那邠邸 Anāthapiṇḍika）と言った。仏陀に帰依し、布教に尽力したことは、この後に出る。

三　鴦窶利摩羅（……）　鴦窶利摩羅 *。ʔiang-°g'iu-lji°-。muâ-。la* : Skt. Pa. *aṅgulimāla*. 憍薩羅国勝軍王の宰相の子で無悩 Ahiṁsaka と言い、才智豪雄の人であった。父母は無悩の教育を婆羅門に託したが、婆羅門の妻は夫の不在に乗じ、かれに迫った。無悩は却ってこれを諭したので、婆羅門の妻は恥じかつ怒り、夫に誣告した。婆羅門は無悩の父の宰相を憚り、一計を画し、梵天に生まれる秘法として人を殺すごとに一指を切り、千人となららば成就せんと教えたが、最後に仏陀の教誨を受け帰依したと言う。『賢愚経』一一、『増一阿含』三〇、『雑阿含』三八、『鴦崛摩経』、『鴦崛髻経』、『鴦掘摩羅経』その他に出づ。

一・四　祇園精舎　城の南五、六里に逝多林（原注　唐に勝林と言う。旧に祇陀と曰う。訛なり）(注一)がある。給孤独園であり、勝軍王の大臣の善施が仏のために精舎を建てた［所である］。昔は伽藍であったが、今はもう荒廃している。東門の左右にそれぞれ石柱の高さ七十余尺のものを建てている。(注二)左の柱は輪相をその端に彫み、右の柱は牛の姿をその上に刻んである。ともに無憂王が建てたものである。建物は崩壊してしまい、ただその跡があるだけである。ただ一つの煉瓦造りの家だけが堅固にひとり残っている。その中に仏像がある。昔、如来が三十三天に昇り母のために説法された後に、勝軍王は出愛王が栴檀の仏像を刻んだということを耳にして、この像を造ったのである。(注三)

善施長者は情け深く聡明な人で、財を蓄積もするが十分に散らしもし、貧乏人を救済し、孤老の人を哀れみ労った。当時その徳を讃美して給孤独と言った。仏の功徳を耳にし、深く尊敬の念を生じ、精舎を建てたいと思い、仏のお出ましを願った。世尊は舎利子に命じて、いっしょに測量させられた。ところが太子の逝多が所有する園地のみが高燥で［適当で］あった。そこで太子を訪ねて、詳しく事情を話した。太子は戯れに、

「金を［土地］いっぱいに布いたら売ろう」

と言った。善施はこれを聞き、［不安の］心が開けた。そこで直ちに持っている金を出し、言葉どおりに地面に布きつめたところ、少しく不足する所があった。太子は止めるように願い、

「仏は誠に良い田［のような方］で、善根を植えるべき［お人］です。直ちに空地に精舎を建てよう」

と言った。世尊はここへ来られて、阿難に、

「園地は善施が買ったものであり、林樹は逝多が布施したもので、二人が心を同じくしてりっぱな仕事をやり遂げたのである。これから以後、この地を『逝多林給孤独園』(注四)と言ったらよかろう」

と言われた。



祇園布施の図，バールフットの浮彫

注

一　逝多林（……）　逝多 *źjäi°-tâ* : Skt. Pa. *jeta* < *jetr*（勝者）。逝多林 *jetavana* は勝林と訳す。旧訳の祇陀の祇の切韻音は *g'jię* のみのようであるが、漢・唐間には口蓋化した *g'* の音もあったようであり［『経典釈文』『集韻』］、祇陀もかつては *jeta* をほぼ表わし得たものであろう。逝多は鉢羅犀那恃多王の王子であり、逝多林は逝多の所有する林園の義である。後出のごとく仏陀に「逝多林給孤独園」と名づけられ、給孤独園とも呼ばれた。

二　東門の左右に……建てている　この阿育王の石柱は、『法顕伝』拘薩羅国の条に「城の南門を出でて千二百歩、道の西に長者須達が起てし精舎あり、精舎は東に向きて門を開き、門戸の両辺に二の石柱あり。左の柱

の上には輪形を作り、右の柱の上には牛形を作る」とある。これに続けて「池流清浄、林木尚茂り、衆華色を異にし、蔚然として観るべし。即ち所謂祇洹精舎なり」と、当時はなお景況の整備せられていた状を記す。

三 勝軍王は……造ったのである 『増一阿含経』二八に、優塡王の造像のことを聞いて黄金の仏像を作ったことを記す［高田・『国訳伝』七四ページ注三］。

四 逝多林給孤独園 Skt. *jetavana-anāthapiṇḍikārāma.* また祇樹給孤独園・祇園阿難邠坻阿藍・祇園精舎とも。

一・五 仏陀の病比丘の看病 給孤独園の東北に窣堵波がある。如来が病気の苾芻［の体］を洗われた処である。昔、如来が在世された時、病気の苾芻が苦しみながら唯一人住んでいた。世尊が目にされて、

「汝はどうして苦しんでいるのか。汝はどうして一人で居るのか」

と問われると、

「私は生まれつき怠けもので、［他人を］看病するに耐えられませんでした。それで今、病気にかかっても看病してくれる人がありません」

と答えた。如来はこの時、哀れに思われて、

「善男子よ。私が今、汝を看よう」

と告げられ、手で摩ると病苦はすっかり癒えた。戸外に手助けして連れ出し、敷布団を取り替え、如来が親ら体を洗ってやり、新しい衣に着替えさせた。仏は苾芻に、

「自ら勤め励みなさい」

と話された。この教えを聞き恩に感じ、心も身も喜びにあふれた。(注一)

注

一 仏陀が病比丘を看病された話は、『四分律』二八、『増一阿含』四〇、『大毘婆沙論』一一、『生経』三等に出ている。

一・六 舎利弗と目連の神通 給孤独園の西北に小窣堵波がある。没特伽羅子（巻四の七・二参照）が、神通力を運らして舎利子の帯を持ち上げようとしたけれども動かなかった処である。昔、仏が無熱悩池（巻一の一参照）に人界のものも天界のものもみな集められたが、唯舎利子だけがその折、会に集まらなかった。仏は没特伽羅に命じ、出かけて［舎利子が］来集するように言いつけられた。没特伽羅は命を承り出かけた。舎利子は折しも［舎衛城で］法衣を修理していた。没特伽羅は、

「世尊は唯今、無熱悩池におられ、私にあなたを召し連れるように命じられました」

と言うと、舎利子は、

「暫くの間待ってください。私が修理し終わったら、あなたといっしょに行きましょう」

と答えた。没特伽羅は、

「もしすぐに行かないのなら、神通力を運らして、あなたの石室を持ち上げて大会の場所に行きましょう」

と言った。舎利子はそこで衣帯を解き地に置き、

「もしこの帯を持ち上げたならば、私の体は或いは動くこともありましょう」

と言った。そこで没特伽羅は大神通を運らし、帯を持ち上げようとしたけれども動かず、地面はこのため震動した。それで神足で［馳せて］仏の所に帰りつくと、舎利子はもう会場に坐しているのが目に入

った。没特伽羅は首をたれ嘆いて、
「始めて今、神通の力は智恵の力に及ばないことを知りました」
と言った。(注一)

注
一　仏の十大弟子中、智恵第一の舎利弗と神通第一の目連についてのこの話は、『増一阿含』二九、『大智度論』四五に見える。

一・七　諸仏跡と外道による淫女の謀殺　挙帯窣堵波より遠からざる所に井戸がある。如来の在世中、汲んで仏の用に当てたものである。その側に窣堵波がある。無憂王が建てたものである。中に如来の舎利が入っている。散策の跡、説法の跡、それぞれ印を立てて窣堵波が建ててある。冥界の神が警衛し、霊瑞が折々起きて、或いは天楽を奏し、或いは神妙な香が薫ってくることがある。大きな福徳の徴については、詳しくは述べ難い。

伽藍の後方、遠からざる所に、外道の梵志(婆羅門)が淫女を殺して仏を誹謗した処がある。如来は十力と四無所畏(注一)とをもたれ、その智恵は一切の教えを知り尽くされ(原文　一切種智)、人界のものも天界のものも敬仰し、聖人・賢者も教えを奉ずるほどの方である。そのころ、外道たちは共に相談して、
「詭策を行なって衆人の中で［仏を］謗り辱しめるのがよかろう」
ということになり、淫女を口説き雇い入れ、心にもなく仏の説法を聴聞させ、人々に知られるようにしてから、密にこの女を殺して、その屍体を樹の側に埋め、怨みを言いたて王に告訴した。王が捜索を命じたところ、逝多園で淫女の屍体が見つかった。そこで外道は声高らかに、
「喬答摩大沙門(釈迦のこと。本巻の四・七注三参照)は常に戒律を持し忍辱［にして怒り恨みのない人］であると讃えられているが、このようにこの女と通じ、殺して口を蓋していた。邪淫をもし、殺生をもする、何の戒、何の忍があろうか」
とロをそろえて言いたてた。［すると］諸天人が空中で、外道の声につれて、
「外道の悪人こそが、この誹謗をするのだ」
と唱えた。(注二)

注
一　十力と四無所畏　十力とは如来のみが具える十種の智力。(一)処非処智力(はっきりと理と非理を知る力)、(二)業異熟智力(はっきりと過現未三世の業とその報との因果関係を知る力)、(三)静慮解脱等持等至智力(はっきりと禅定や三昧の順序・深浅を知る力)、(四)根上下智力(はっきりと衆生の能力、性質の優劣を知る力)、(五)種種勝解智力(はっきりと衆生の知解を知る力)、(六)種種界智力(はっきりと衆生の素性・素質やその行為などを知る力)、(七)遍趣行智力(はっきりと人天等の行因の至る所を知る力)、(八)宿住随念智力(はっきりと衆生の過去世における業縁を見る力)、(九)死生智力(衆生の宿命を知り、未来を知る力)、(十)漏尽智力(自ら煩悩が尽きて後有を受けないことを知り、他のものが煩悩を断ずることを謬りなく知る力)とである。四無所畏とは、仏の他を教化するに畏れることのない自信のことで、これに四種ある。(一)一切智無所畏(大衆の中において自分は一切正智の人なりとの畏れなき自信)、(二)漏尽無所畏(大衆の中において我は一切の煩悩を断じ尽くしたとはっきり言える自信)、(三)説障道無所畏(大衆の中において仏道の障害となる法をはっきり言える自信)、(四)説尽苦道無所畏(大衆の中において苦界を出て解脱へ入る道をはっきり言える自信)とである。
二　外道が淫女を殺して仏陀を誹謗した話は、『修行本起経』一、『六度集経』、*Jātaka*, No. 285 等に見える。

一・八　提婆達多の悪逆と瞿伽梨の誹謗　伽藍の東、百余歩の所に大きな深い坑がある。提婆達多が毒薬で仏を害しようと思い、生身で地獄に陥ち込んだ処である。提婆達多（原注　唐に天授と言う）は斛飯王の子である（注一）。精勤すること十二年、すでに八万の法蔵（注二）を暗誦していた。後に、［自らの］利のために神通を学ぼうとし、悪友と親しく交わり、共に「私の相は三十であり仏［の三十二相］より不足することさほどでもないのに、大衆の［帰依し］取り巻くあり方がどうして如来と異なるのであろうか」と話し合った。考えがここに至り、仏の僧団を破壊分裂することを企てた。舎利子と没特伽羅子は仏のお指図を奉じ、仏の御威勢を受け、仏の教えを説き教え諭したところ、僧たちは再び仏の僧団と和合することとなった。提婆達多は悪心去りやらず、猛毒の薬を指の爪の中に入れ、［仏足を］礼する際に仏を傷害しようと思った。まさにこの計画を実行しようとして遠くからやって来て、ここまで来るや、地は坼けてしまった。生きながら地獄に陥ちたのである（注三）。

その南にもう一つ大きな坑がある。瞿伽梨苾芻（注四）が如来を誹謗し、生身のまま地獄に陥ち込んだ所である。

注

一　提婆達多（……）は斛飯王の子　提婆達多 ₒ*d'iei-ₒb'uâ-d'âtₒ-ₒtâ* : Skt. Pa. *deva-datta*. 天授・天与と訳す。旧訳に調達 **d'iog-d'ât* → ₒ*d'ieu-d'ât*. がある。釈迦の父浄飯王 Śuddho-dana の弟斛飯王 Droṇo-dana の子、即ち釈迦と従兄弟の関係の人。

二　八万の法蔵　詳しくは八万四千の法蔵と言う。衆生に八万四千の煩悩あるが故に、仏はこれを癒やすため八万四千の経を説くと言う。八万四千、或いは八万とは大数を表わすインドの常語。

三　提婆達多が教団分裂を企てた話は、諸律典に見えるほか、『出曜経』一六、『増一阿含』四七、*Jataka* の諸所に見える。

四　瞿伽梨苾芻　瞿伽梨は旧訳の語彙である。梵語 *kokālika*. 義浄訳『有部破僧事』等の新訳では、高迦離迦・孤迦梨迦・孤迦利迦等と書かれている。提婆達多の親友で共に破僧事を企てた。

一・九　戦遮の中傷　瞿伽梨が陥ちた坑の南、八百余歩の所に大きな深い坑がある。戦遮婆羅門女（注一）が如来を誹謗して、生身のまま地獄に陥ちた所である。仏が人界のものと天界のもののために諸法の要義を説いておられた。ある外道の弟子が遙かに世尊の姿を目したところ、大衆が恭々しく尊敬しているので、

「どうでも今日こそ、喬答摩を辱しめて、その名誉を傷つけ、私の師が名声を一人占めされるようにしよう」

と念じた。そこで懐の中に木の椀を結びつけて給孤独園に出かけ、大衆の中で大声を揚げて、

「この説法をしている人は私と私通した。お腹の中の子は釈種です」

と叫んだ。邪見の人で信じない人はなかったが、信仰の正しく固い人は誹謗であることを知っていた。折しも、帝釈天は人々の疑惑を除こうと思われたがため、身を変えて白鼠となり木椀の糸を嚙み切った。糸が切れる音が［大きく］、大衆の中に響きわたった。［その場で］見聞していたすべての人々は、［事の仔細がはっきりしたので］心から大いに喜んだ。群衆の中の一人が起ち上がり木の椀を手にしてかの女に示し、

「これが女の子供か」

と言った。その瞬間、地面が自然に坼けて、［かの女は］体ごと墜

落して、無間地獄に落ちてありとあらゆる報いを受けた。この三つの坑は底なし洞穴で、秋夏の霖雨で溝や池が溢れても、この深い坑だけは一度として水が溜り残ったことはない。

注
一　戦遮婆羅門女　戦遮 tsjän°-.tsja : Skt. Pa. *ciñcā*. また、梅闍・梅遮とも。詳しくは梅遮摩那 Ciñcā Mānavikā. この話は『生経』一、『有部薬事』一六、*Jātaka*, No. 472 ; *Dhammapada* 等に見える。

一・一〇　**影覆精舎**　伽藍の東六、七十歩の所に一つの精舎の高さ六十余尺のものがある。中に仏像があり、東に向いて坐っている。如来が昔、ここで諸外道と論議された。東隣に天祠があり、大きさは精舎に等しい。日が出て光を流すとき天祠の影は精舎を覆わないが、日が落ちようとするときは精舎の陰がそのまま天祠を覆いかぶせてしまう。

一・一一　**舎利弗、外道降伏の旧跡**　影覆精舎の東三、四里に窣堵波がある。尊者舎利子が外道と論議された処である。初め善施長者が逝多太子の園を買い、如来のために精舎を建立しようとした。そこで、尊者舎利子が長者に随って測量された。外道の六師(注一)は神通力を比較するよう求めた。舎利子は［相手の］事につれて教化し、物に応じて降伏させた。

その側の精舎の前に窣堵波が建ててある。如来はここで諸外道を論破された。また［ここで］毘舎佉の母の請いを聴き入れられた(注二)のである。

注
一　外道の六師　六師外道とも言う。釈迦在世当時、中インドに勢力をもった六人の外道。当時社会に行なわれた思想の中で、婆羅門に対する代表的なもの。㈠富蘭那迦葉 Pūraṇa-kāśyapa. 因果を否定し無道徳説を採る。㈡末伽梨拘舎梨子 Maskari-gośāliputra. 宿命論的自然論者。㈢刪闍耶毘羅胝子 Sañjayi-vairaṭiputra. 懐疑論者で人智の普遍妥当性を認めず、実践修行により解脱に至り得るとする。㈣阿耆多翅舎欽婆羅 Ajitakeśa-kambala. 感覚的唯物論者で、快楽説をとる。㈤迦羅鳩駄迦旃延 Kakuda-kātyāyana. 無因論的感覚論者。㈥尼乾陀若提子 Nirgrantha-jñāti-putra. 世界・霊魂の相対的常住を認め、苦行により解脱し得るとする。ジャイナ教の開祖。これらの六師はみな自ら神通を得たと称していた。

二　毘舎佉の母の請いを聴き入れられた　毘舎佉 .b'ji-śja°-.k'ia : Skt. *viśākhā*, Pa. *visākhā*. また毘舎佉鹿子母 *visākhā-migāramātṛ*. 毘舎佉は室羅伐悉底城の長者の母。精舎に置き忘れた自分の晴衣を、上座の手にふれたもの取るべからずとして、売ってその価で寄進しようとしたが、この品を着るほどの者が他になく、遂に自ら価を払い買い戻し、その金で仏の許可を得て精舎を建立した。東園精舎 Pūrvārāma と言う［*Dhammapada*］。

一・一二　**毘盧択迦王**　受請窣堵波の南は毘盧択迦王（原注　旧に毘琉離王と曰う。訛なり）(注一)が軍隊を起こし、釈種を誅戮して、ここまでやって来て仏を見たてまつり、兵を帰した処である。毘盧択迦王は王位を嗣いだ後、以前に受けた恥辱をなお怨みに思い、軍隊を起こし大軍を動かし、部署し終わり命令を出してまさに出発しようとしていた。その折、ある苾芻がこれを耳にし仏に申し上げた。世尊はそこで枯れ樹の下に坐っておられた。毘盧択迦王は遙かに世尊を見て、馬より降り敬礼し、後ずさりして、

「茂った樹が枝葉をこんもりとさせておりますのに、何故にお坐りに

なられず、枯れ樹腐れ株の所にお坐りになられるのですか」

と言うと、世尊は、

「一族というものは枝葉［のようなもの］です。枝葉が危険に瀕しているのに、身を隠す所が何所にありましょうか」

と告げられると、王は、

「世尊は［私の］親属です。［討つわけにはまいりませんから］引き返しましょう」

と言った。かくして、聖者を眼のあたりに見て心に感ずる所あり、軍を還し国に帰った。

還軍［の遺跡］の側に窣堵波がある。釈［迦族の］女がみな殺しにされた処である。毗盧択迦王は釈種を討ち勝利を得て、五百人の女を選び出し後宮に入れようとした。釈女は憤激し怨みの言を口にし負けていず、その王（毗盧択迦王）は下僕の子であると罵った。王はこれを聞き怒りを発し、死罪にするよう命令した。刑吏は王の命を奉じて釈女の手足の筋を切り、釈女たちを塹に投げこんだ。その時、釈女たちは苦しくて仏［のみ名］を称えた。世尊のおめがねはその苦難を照覧あり、苾芻に、衣をかかげて［急ぎ］行き、釈女たちのために甚深微妙の法を説くように言いつけられた。いわゆる「五欲にかかずらえば、三途に流転して、恩愛は別離し、生死は長遠ならん」[注二]と［の教えである］」。かくて釈女たちは仏の教えを聞き、煩悩から離脱し法眼浄（はっきりと真理を見ること）を得て、同時に命切れ、共々に天上界に生まれた。その時、帝釈天は婆羅門［の姿］になり、死骸を集めて火葬にした［とのことである］」。後人がこのことを記している。

誅釈［女］窣堵波の側、遠からざる所に大きな涸れ池がある。毗盧択迦王が身を陥して地獄に入った処である。世尊は釈女を観そなわせられた後、給孤独園に還られて、苾芻たちに、

「毗盧択迦王はこの後、七日にして火に焼かれるであろう」

と告げられた。王は仏の予言を耳にし、甚だ恐怖を懐いた。七日目になったが、安穏で危険もなかった。王は喜んで宮女たちに命じて、池の側に出かけ楽しく宴会をした。それでも火が出るのを心配しながら、清流に棹さしていた。波のまにまに浮かんでいたところ、炎がどっと起こり、乗船は焼け王の体を墜落させ、無間地獄に入り、余すところなくあらゆる苦しみを受けた。

注

一　毗盧択迦王（……）　毗盧択迦　b'ji-luo-d'ək-ka : Skt. *virūḍhaka*. 勝生・増長と訳す。旧訳の毗琉離は、Pa. *viruḷhaka*, *viruḷha*, *viruḷha* のような音声に対したものであろう。憍薩羅国王鉢羅犀那恃多、即ち勝軍王の子。詳細は本巻の後段二・七参照。

二　五欲に……長遠ならん　五欲とは色・声・香・味・触の五境で、人の欲心煩悩を起こすもと。三途はまた三塗とも書き、俗に地獄・餓鬼・畜生の三つの苦境を言う。大意は「五欲にかかずらい執着しているならば、三塗を流転し、父母妻子の恩愛あるものと別れ、生きては死に、死んでは生きる無限の苦しみの世界に居らねばならぬ」ということ。『平家物語』巻十の「流転三界中、恩愛不能断、棄恩入無為、真実報恩者。三界の中に流転するは恩愛を断ずる能わざればなり。恩を棄て無為に入るは真実の報恩者なり」も同様な意味。ただし、この文の所拠は古来不明。

一・三　得眼林　伽藍より西北三、四里で得眼林[注一]に至る。如来が散策された跡、聖者たちが禅定に入られた所がある。みな印が立ててあり、窣堵波を建てている。昔、この国の群盗五百人が村落を横行し都城に跋扈していた。勝軍王が捕えて盗賊たちの眼を抉り捨て、深林に［盗賊たちを］追放した。盗賊たちは苦しさのあまり、哀助を求めて

仏［のみ名］を称えた。その折、如来は逝多精舎におられ、悲しみの声を［遠く］耳にし慈悲の心を起こされた。清らかな風がのどやかに至るや、雪山の薬を(注二)［盗賊たちに］吹きよせ、盗賊たちの眼に充満し、ついで元のように見えるようになった。するとと世尊が自分たちの前に立っていられるのが眼に入った。［そこで］菩提心を発し、喜んで五体投地の礼をし、杖を投げ捨てて立ち去った。その杖が根を生じ［この林となっ］たのである。

注

一　得眼林　昼闇園 Andhavana とも言う［『増一阿含』三三］。

二　雪山の薬　『涅槃経』一四に「過去の世、仏……婆羅門となり、菩薩行を修す。……我その時に雪山に住す。その山は清浄にして流泉浴池あり、樹林薬木その処に充満す」とあり、また「雪山の中に上香薬あり、名づけて沙訶と曰う。人のこれを見ることとあれば寿は無量となり、病苦の難あることとなし」とある。伝説的な霊薬であろう。

一・四　**迦葉仏の本生地**　大城より西北六十余里に古い城がある。賢劫の間(注一)の人寿が二万歳の時に、迦葉波仏(注二)が誕生された城である。城の南に窣堵波がある。［迦葉波仏が］正覚を得られて初めて父に会われた処である。城の北に窣堵波がある。迦葉波仏の全身の舎利が入っている。［これらの窣堵波は］みな無憂王が建てたものである。(注三)

ここから東南へ行くこと五（『伝』八とす）百余里で劫比羅伐窣堵国（原注　旧に迦毗羅衛国と曰う。訛なり。中印度の境）に至る。

注

一　賢劫の間　巻二の三・三注三参照。

二　迦葉波仏　巻一の三二・二に既出。飲光と訳す。過去七仏の第六にして、現在賢劫三仏の第三仏であり、釈迦の前出である。父は婆羅門で、名を梵徳 Brahmadatta と言った。

三　迦葉波仏の本生地　この地を『法顕伝』には「城の西五十里にして一邑に到る。都維と名づく、是れ迦葉仏の本生処なり」とし、また東晋・仏陀跋陀羅共法顕訳『摩訶僧祇律』二三には「都夷聚落」とする。都維 **tâg-diwəd* → *ₒtuo-ₒwi*, 都夷 **tâg-died* → *ₒtuo-ₒji* を Cunningham, Beal, J. Legge は Sahet-Mahet の西九マイルの小村 Tadwa に比定するが、H. A. Giles は Nabhiga（『法顕伝』の那毗伽）としていて、その説明はない［*The Travels of Fa-hsien*, p.36］。百万分の一の *U. S. Army Map Service* の図上には見えない。Watters は Topi のような地名を考えている。

二　劫比羅伐窣堵国

二・一　**概観**　劫比羅伐窣堵国(注一)は周囲四千余里ある。空城（人気のない町）は十数あり、荒廃はすでに甚だしい。王城は頽れ落ちて、周囲の量もさだかでない。その中の宮城は周囲十四、五里ある。煉瓦を積みあげて作ってあり、基礎はなお高く堅固である。荒れはててすでに久しく(注二)、人の住む所も稀である。［国には全体を統治する］大君主はなく、城はそれぞれ首長を立てている。土地は肥沃で、農業(注三)はそれぞれの時期に行なっている。気候に狂いはなく、風俗はのどやかである。伽藍の跡は千余ヵ所ある。宮城の側には一伽藍あり、僧徒は三千余人、小乗の正量部の教えを学んでいる。天祠は二ヵ所、異道の人々が雑居している。

注

一　劫比羅伐窣堵国　劫比羅伐窣堵 *kiɒp.-°pji-.la-b'i̯wɒt.-suɒt.-°tuo*: Skt. *kapilavastu*, Pa. *kapilavatthu*. 旧訳の迦毗羅衛はパーリ語のような音声に対する。この国は経典その他に頻出する故に、表記漢字は甚だ多い。旧訳では迦維羅閲・迦維羅衛・迦惟羅越・迦毗羅抜兜、或いは略して迦毗羅・迦夷羅・迦維など。やや新しくは迦比羅婆修斗・迦尾攞縛娑多など。訳して蒼城・蒼住処・黄赤城・黄頭居城・黄髮仙人住処・赤沢国・妙徳城など。また別に迦毗羅那迦羅 Kapila-Nagara, 迦紬羅竭などとも言う。釈迦誕生の故国として有名。仏陀時代より釈迦族の国であったが、次第に盛んとなり釈迦出世時代には人口約百万、種族は分かれ十城に居り、劫比羅城は種族分布地の北部にあり、釈迦全種族の首長であった。その位置は諸説があったが、一八九五—九六年のころ、Gorakhpur の北方、Uska 停車場の西北三十八マイルの地に、Nigliva 並びに藍毗尼園 Lumbini-vana の阿育王石柱が発見され、その後二年 W. C. Peppé の発掘に係る Piprahvā の古塔と舎利壺とは古代迦毗羅城の位置を確定的なものにした。故城址は藍毗尼園の西北十五マイルの Tilaura-koṭ 付近にあり、今は僅かに倒壊した城壁がジャングル化した雑木林中にある。昭和四十二年より立正大学の調査団が発掘調査に従事している。当地についての関係書に Cunningham : *A.G.I.*, pp. 474 ff., p. 711 ; Law : *H.G.A.I.*, p.89 ; V. Pathak : *History of Kośala* などがある。

二　王城は頽れ落ちて……すでに久しく　四〇〇年ころに入竺、当地を訪れた法顕も「迦維羅衛城に至る。城中都て王民なく、甚だ坵荒す。只衆僧・民戸数十家あるのみ。……迦維羅衛国は大いに空荒し、人民は稀疎なり」とその荒廃の久しいことを記す。『慧超伝』には「塔あるも僧なく、亦百姓なし」といよいよ荒廃の激しきことを記す。

三　稼業　釈迦種族の領土が米作に適していたことは、釈迦の父浄飯王、叔父斛飯王の外、一族に甘露飯・白飯等の名の多くあることからもわかる。

二・二　釈迦の降神と阿私多仙

宮城の中に建物の跡がある。浄飯王(注一)の正殿である。[建物の跡の] 上に精舎が建ててあり、中に王の像が作ってある。その側、遠くない所に建物の跡がある。上に精舎を建て、中に夫人の像が作ってある。その側に精舎がある。釈迦菩薩が母の胎内に降神(注三)(胎内に宿る) された処である。[精舎の] 中に菩薩降神の像が作ってある。上座部 [の言い伝えで] は、菩薩は嗢呾羅頞沙荼月の三十日(注四)の夜、母胎に降神された [と言う]。この (中国の) 五月十五日に当たる。[上座部以外の] 諸部ではこの月の二十三日の夜、母胎に降神された [と言う]。この (中国の) 五月八日に当たる。

菩薩降神 [の精舎] の東北に窣堵波がある。阿私多仙(注五)が [悉陀] 太子を観相 (相貌を占う) した処である。菩薩降誕の日、めでたいきざしが次つぎに起こった。そこで浄飯王は [観] 相師を召し出して、

「この子が生まれた。善か悪か、どうか。十分に心を尽くし、はっきりと答えよ」

と告げると、

「昔の聖者の記録に従い、めでたい現象を考えてみますと、在家の人としては転輪聖王となられましょうし、出家をされたならばきっと等正覚を成ぜられる (悟りをひらく) でしょう」

と言った。ちょうどこの時、阿私多仙が遠方からやって来て、門をたたき謁見を願った。王は非常に悦び親ら出迎えて敬礼し、宝座に就かれるように頼み、

「大仙人様が今日御光来になられようとは思いも及びませんでした」

と言うと、仙人は、

「私は天宮に引き籠り坐禅しておりましたが、天人たちが連れ立ち踊り舞っているのを目にしました。それで私は、

『どうしてこんなに大変悦ぶのか』

と尋ねますと、

『大仙は御存知ないのですか。贍部洲(ジャンブ)の中の、釈種の浄飯王の第一夫人が、唯今太子を産まれました。きっと三菩提(サンボディ)(Saṁbodhi, 等正覚の原語）を證(さと)られ、一切の法を円満に説明されるでしょう』

と答えました。私はこの言葉を聞きましたので、来て仰ぎ礼を尽くしました。ただ悲しいことは私はすでに老いさらばえ、聖人の教化にお遭いできないことです」

と言った。

注

一　浄飯王　悉陀太子釈迦の父、首図駄那(シュツドダナ) *Śuddhodana*, Pa. *Suddhodana* の訳。また白浄王とも。晩年仏法に帰依し、七十九歳（九十七歳とも）まで生きた。

二　摩訶摩耶（……）夫人　摩訶摩耶 ₒ*muâ-ɣâ-ₒmuâ-ₒia*：Skt. *mahā-māyā*. 訳語は *māyā* に「術・不可思議の力」の意あるため大術とする。また *māyā-devī* 摩耶夫人とも。中インド提婆陀訶(デーヴァダハ) Devadaha 城の善覚王 Subhūti の娘、浄飯王の妃で釈迦の生母。産後七日にして崩じ、三十三天（忉利天(とうり)）に生じたので、釈迦は成道後に上天し、母のために説法したという（巻四の一五・二参照）。

三　釈迦菩薩……降神　釈迦降神の伝説は *Jātaka*, I. 50；*Lalita-vistara*, p.63；*Buddha-carita*（平等通昭訳『仏陀の生涯』), I. 20；『普曜経』二；『仏本行集経』七等に見える。前生に兜率天(とそつ)にいた釈迦が、下生の機熟し、六牙の白象に乗り降神し、睡眠中の摩耶夫人の右脇より胎中に入ったという説話は、仏教彫刻の有名な素材でもあり、その一は今カルカッタ博物館蔵の Amarāvatī の欄楯浮彫に見られる。なお釈迦一代の伝説は多数あるが、中村元『ゴータマ・ブッダ』は新しくかつ詳細な研究であり、また簡略な仏伝とその美術作品は、岩波写真文庫一八一『仏陀の生涯』が便利。釈迦降誕の図はこの書の一四—一五ページ参照。

四　嗢呾羅頞沙荼月の三十日　嗢呾羅頞沙荼 ˙*uət*ₒ*-tât*ₒ*-ₒlâ-˙ât*ₒ*-ₒṣa-ₒḍ'a*：Skt. *uttara-āṣāḍha*. 嗢呾羅は鬱多羅（巻一の三一・三参照）と同じ、即ちここでは後の時期の意。頞沙荼は既出（巻二の一・四参照）。頞沙荼月の後半第三十日のことで、唐暦の五月十五日となる。しかし、玄奘も諸部の異説をあげるように、諸説がある（本巻の二・二参照）。

五　阿私多仙　阿私多 ₒ*˙â-ₒsi-*ₒ*tâ*：Skt. *asita*. また阿私陀・阿私哆・阿私吒・阿斯陀など。不白・無比・端厳などと訳す。この仙人は五通を具足し、常に三十三天に出入りしていた大仙である。釈迦降誕時すでに自らは老衰して太子の成道を待ち得ないと悲嘆し、代わりに侍者の那羅童子を出家させ、成道を待たせたという『仏本行集経』七—一〇、『仏所行讃』一、『瑞応本起経』上、その他関係経典多し」。

二・三　釈迦の体力

城の南門に窣堵波がある。太子が釈族［の青年］と角力(すもう)［の競技］をし、象を擲(な)げた処である。［元来］太子は伎(ぎ)芸多能で、独り仲間から抜きんでていた。浄飯大王は嬉しい気持ちで帰城しようと思った。馭者(ぎょ)が象を馭してちょうど城を出ようとした。［そこへ］提婆達多(デーヴァダッタ)、［かれは］もとより強力を自負しているものであるが、城の外から入って来て、馭者に、

「りっぱに整備したこの象は、一体誰が乗ろうとするのか」

と問うと、

「太子がお帰りなさろうとしていられますので、出迎えお乗せして来ます」

と答えた。提婆達多は［競技に負けたあまり］憤怒の心を発し、象を引っぱりその額を打ちその胸を蹴(け)りとばした。［象は］仆(たお)れて死に路(みち)を塞(ふさ)ぎ、道を行く人は通れなくなり、移動させることのできる人もなく［道は］群衆でいっぱいになった。難陀(ナンダ)(注一)は後からやって来て馭者に、

「誰がこの象を殺したのか」

と問うと、

「提婆達多です」

と答えた。［難陀は］すぐさまこれを引っぱって路をよけた。［その後］太子がやって来て、また、

「誰がこんな悪いことをして、この象を殺したのか」

と問うと、

「提婆達多が殺して門を通れなくし、難陀がこれを引っぱって道を開けました」

と答えた。すると太子はなんと象を持ち上げ高々と擲げて、城の堀の向こうへ越させた。その象が地に堕ちると大きな深い坑ができた。地方の言い伝えで、象堕坑と言っている。(注二)その側の精舎の中に太子の像が作ってある。その側にさらに精舎がある。太子の妃の寝宮である。中に耶輸陀羅の(注三)［像が］作ってあり、さらに羅怙羅(注四)の像もある。寝宮の側の精舎は［太子が］学業を受けていられる像が作ってある。太子の学堂の跡である。

注

一　難陀　難陀 ◦nân-◦d'â : Skt. *nanda*. 歓喜と訳す。釈迦の異母弟。後に帰依し諸根の調伏第一と称せられた。

二　釈迦の競技伝説　釈迦の青年時代に釈迦族の青年と弓術・相撲などの技を競ったことは、『過去現在因果経』二、『普曜経』三、『方広大荘厳経』四、『仏本行集経』一三などに出ている。『因果経』によれば、この競技は釈迦十歳の時のこととし、擲象のことも競技前のことで、象も死んだのではなく、提婆達多に打たれ路上に踞っていた象を、難陀は足の指で路傍に蹴り道を開け、釈迦はその象を手で城外に投げ出し、落ちて来る象を再び手で受け、傷つけることなく蘇生させた、という。説話の形式に諸種あり。

三　耶輸陀羅　耶輸陀羅 ◦ia-◦śiu-◦d'â-◦lâ: Skt. *yaśodharā*, Pa. *yasodharā*, *yasodhara* また耶維檀・耶戍達羅とも。訳して名聞・華色・持誉・具称など。拘利城主善覚王の女（一説に迦毘羅城の執杖大臣 Daṇḍapāṇi 梵志の女）。釈迦が太子であった時の正妃で、羅怙羅の生母。釈尊成道後第五年、摩訶波闍波提および五百の釈女と共に比丘尼となる。

四　羅怙羅　Skt. *rāhula*（巻一の三八・二参照）。釈迦出家前に妃の耶輸陀羅との間にできた子。釈尊成道後、故郷の迦毗羅城遊化の際に就いて出家、二十歳にして具足戒を受け、精進修行よく阿羅漢果を成じた。仏十大弟子の一で、密行第一と称せられる。

二・四　釈迦の出家(注一)（太子踰城）

城の東南隅に一つの精舎がある。中に太子が白馬に乗り、虚空を凌ぎ駆けている像がある。踰城の処(注二)である。城の四門の外には、それぞれ精舎がある。中に老・病・死人や沙門の像が作ってある。太子が［四門を］遊観され、人々の姿を眼のあたりに見て感懐を増し、心から煩悩の俗世界を厭われ、ここで悟るところあり馭者に命じて乗り物を引き還すようにされたのである。(注三)

注

一　釈迦の出家　その動機に四段を説く。第一段は幼少の際、迦毗羅城の親耕式に、父王・百官ともに耕作に従事するのを見て人生の苦を初めて知る。第二段は四門の園林に至らんとする際、老・病・死人と僧とを見て、人生の苦と出離の楽を知る。第三段は宮中で美人が酔って眠った醜状を見て感ずる段。第四段は遂に出家を決意し城を出る段である。

二　踰城の処　閨房脱出・太子踰城は前注の第四段の状である。太子の納妃は十七歳（一説に十九歳）、後嗣の羅怙羅もでき、二十九歳にして出家を決意する。一夜醜状を呈して深い眠りにある宮女の姿を見て厭わしさに絶えず、馭者の車匿（Skt. *chandaka*, Pa. *channa*）に命じ愛用の白馬犍陟（Skt. *kaṇṭaka*）に乗り、ひそかに城門を出る。太子が乗馬するや、諸天は馬の四足を捧げ、帝釈天は天蓋を執り従い、城の北門自ら開き、空中の諸天は讃歌もて従った。

三　四門遊観　出家動機の第二段。太子納妃後十年、一日、城の東門より出遊すると、浄居天は太子の出家を成ぜんため老人と化して会う。また一日、南門より出遊すると病者と化して会う。また一日、西門より出遊すると死者と化して会う。また一日、北門より出遊し、老病死苦につき思考する際、浄居天は比丘となり太子と問答の後、神通をもって虚空に去る。太子はここにおいて出家の功徳を悟り、決意したのである。

二・五　過去二仏の本生城　城の南へ行くこと五十余里で故城に至る。窣堵波がある。賢劫中の人寿六万歳の時に迦羅迦村駄(クラクチャング)仏[注一]が誕生された城である。城の南、遠からざる所に窣堵波がある。正覚(さとり)を開かれてから父に会われた処である。城の東南の窣堵波にはその如来の遺身舎利が入っている。前に石柱の高さ三十余尺のものが建っている。上に師子の像が刻んであり、傍に寂滅の事跡が記してある。無憂王が建てたものである。

迦羅迦村駄仏の城より東北へ行くこと三十余里で古い大きな城に至る。中に窣堵波がある。賢劫中の人寿四万歳の時に迦那迦牟尼(カナカムニ)仏[注二]が誕生された城である。東北、遠からざる所に窣堵波がある。正覚を開かれてから父を度（迷を開かせる）された処である。北隣に窣堵波がある。その如来の遺身舎利が入っている。前に石柱の高さ二十余尺のものが建っている。[注三] 上に師子の像を刻し、傍に寂滅の事跡が記してある。無憂王が建てたものである。[注四]

注

一　迦羅迦村駄仏　迦羅迦村駄 ˳ka-˳la-˳ka-˳ts'uən-˳d'â: *krakatsandā [Edgerton: *BHSD*, 196 b], Skt. *kraku(c)chanda*, Pa. *kakusandha*. 旧訳に拘留孫・拘楼秦など。欽持・滅累・成就美妙などと訳す。過去七仏の第四、賢劫千仏の第一仏である。この旧跡については『法顕伝』に、「舎衛城より東南、行くこと十二由延にして一邑に到る。那毘伽(ナビガ) Nabhiga と名づく。是れ拘楼秦仏の生まれたまう処なり。父子相見の処、般泥洹の処も亦皆塔を起つ」とある。

二　迦那迦牟尼仏　迦那迦牟尼。*ka-nâk˳-˳ka-˳miəu-˳ṇi*: Skt. *kanakamuni*. 旧訳に拘那含牟尼など。訳して金寂・金山人など。過去七仏の第五、賢劫千仏の第二仏である。この旧跡については前注引用の『法顕伝』の続文に、「これより北行すること減一由延にして一邑に到る。是れ拘那含牟尼仏の生まれたまう処なり。父子相見の処、般泥洹の処も亦皆塔を起つ。これより東へ行くこと減一由延、迦維羅城に到る」とある。

三　迦那迦牟尼仏本生地の阿育王石柱　この石柱はルンビニー Lumbini 園の西北十三マイルの所にある Niglivā 村の南方一マイルの所の Nigāli Sāgar という池の西岸に立てられているのを、一八九五年に A. Führer により発見された。Hultzsch に従い Nigāli Sāgar Pillar と呼ばれている。碑文は Brāhmi 文字によるプラークリット語 Prakrit で書かれている [Hultzsch: *Corp. Ins. Ind.* I, p.165；宇井伯寿：『印度哲学研究』四、二五五・三一六ページ]。この石柱が、元来ここに建てられていたものか、或いは他から移動されたものかについては議論がある。

四　二仏跡の地名　この二仏跡の地名は諸経により異なる。『仏名経』八には、迦羅迦村駄の古跡を無畏 Abhaya とし、迦那迦牟尼のを荘厳 Śubhavati とし、『雑阿含経』一には前者を安和（Abhaya の音訳）とし、後者を清浄とする。『七仏父母姓字経』には前者を輸訶喇提那(スフリディナ) Suhṛdina, 後者を差摩越度(クシャマヴァアト) Kṣamavat とする [堀：『解説』四三一ページ]。

二・六　瞻部樹下の静思　城の東北四十余里に窣堵波がある。太子が樹陰に坐り田を耕すのを見られた所である。ここで坐禅をして欲を離れることができた。浄飯王は太子が樹陰に坐り禅定に入られ、日の光はすでに廻り［他の場所を］照らしているのに、樹影は移ることがないのが目に入り、心に不思議に感じいよいよ敬愛を深くした。[注一]



贍部樹下で静思する悉多太子
サーリ・バーロル出土

注
一　この樹下静観が『因果経』などによる釈迦出家動機の第一段（本巻の二・四注一参照）である。これが因となり、父王は太子が出家するのを慮り、婚姻を急いだとも言い、一説にこのでき事を婚姻後とも言う。

二・七　毘盧択迦王の釈種攻伐(注一)　大城の西北に数百千の窣堵波がある。釈種の人たちが誅殺された処である。毘盧択迦王はすでに釈種に打ち勝ち、釈氏の一族を九千九百九十万人獲らえ、全部みな殺しにしてしまった。死骸を積むこと深き草叢のごとく、血は流れて池となった。天は人心を警め、死骸を収容して埋葬した。

誅釈［窣堵波］の西南に四つの小さな窣堵波がある。四人の釈種が［毘盧択迦王の］軍勢を拒いだ処である。初め勝軍王（本巻の一・三参照）が即位するや、結婚を釈種に求めた。釈種の人は王が同類の人でないのを鄙しみ、詐わって使用人の女を［釈種の女と称し］礼を厚くして嫁入りさせた。勝軍王はこの女を立てて正后とし、その産んだ男の子が毘盧択迦王であった。毘盧択迦は舅の釈氏に教えを請い学業を受けようと思い、この城の南まで来ると新しい講堂が目に入ったので、すぐに中に入り乗り物を休ませた。釈種たちはこれを聞いて、追い出し罵り、

「卑賤の召使の女が産んだ子が、図々しくもこの家に入って来ようとは。この家は釈種たちが建てたものだ。仏のお住まいにしようとしているのだ」

と言った。

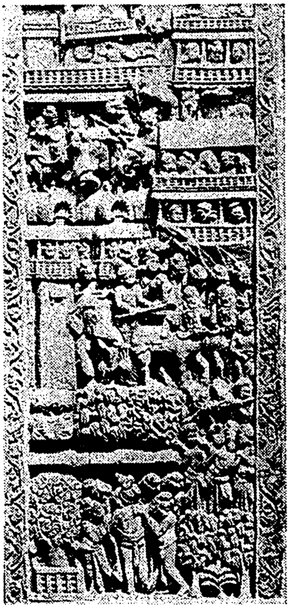
毘盧択迦が即位したのち、先に受けた辱しめを復讐しようとして、すぐさま軍隊を起こしここまで来て止まった。釈種のもの四人が、田を耕していたが、直ちに抗戦し、侵入軍は退散した。［四人が侵入軍を］退散させて城に入って来ると、同族のものたちは、

「［我々釈種は］転輪王の血統を承け、法王（釈尊）の同族である。凶暴な行ないをし、人を殺したりすることにどうして忍び得ようか。［この四人は］一族を辱しめたものだ」

と考えて、縁を切り遠くに追放した。四人は放逐せられ、北方に雪山の方へ行き、一人は烏仗那国（巻三の一参照）の王となり、一人は梵衍那国（巻一の三七参照）の王となり、一人は呬摩呾羅国（巻十二の一参照）の王となり、一人は商弥国（巻十二の一七参照）の王となり、代々王業を伝え、血統は絶えることがない。

注
一　毘盧択迦王の釈種攻伐　毘盧択迦王（本巻の一・三参照）が諸釈を誅殺したことは、『増一阿含経』六、『四分律』四一、『五分律』二一、『毘奈耶雑事』八などに見える。前三経の説はほぼ『西域記』とその大要を同じくするが、後一経は異説を載せる。事の根本は、純血種ではあるが小国の釈種と、異姓の血を混じた雑姓（巻二の一・九参照）たる強大なる憍薩羅国王で室羅伐悉底城主との間に起こった俗姓の相違に起因する争いである。この毘盧択迦王の釈種攻伐を憂えた釈尊が、枯れ樹の下に

坐し王に自らの憂慮を語った（本巻の一・三参照）ところ、王も釈尊の意を解し、兵を引き帰ること再三であった。しかし、最後に王が進攻して来た時には、釈尊もそもそも釈族が先に王を欺き、さらに恥辱を加えた責めの避け難きを考えて樹下に坐することを止め、王の釈種進攻を許すこととなり、本節の農耕していた四釈種との戦闘が起こり、次いで劫比羅城の攻略による釈種のみな殺しという惨状が起こる。



仏陀の帰郷，サーンチー塔門

二・八　仏陀の帰郷　城の南三、四里の尼拘律樹（巻五の一・三参照）の林に窣堵波がある。無憂王が建てたものである。釈迦如来が正覚を開かれて、国に帰り父王に会い説法をされた処である。浄飯王は如来が［誘惑する］魔軍を降伏し（注一）［正覚を成じ］てから、諸方を遊行教化しておられることを知り、お会いしたい気持ちでいっぱいになり、敬礼［を尽くしお迎え］できるようにと願った。そこで使者に命じ如来にお願いして、

「先に仏道を成じた時には、きっと本生地に帰る［とのことでした］。この言葉が今も耳に残っています。然るべき時機にお出でくだされ、お止まりください」

と言わせた。（注二）使者が仏の所に行き詳しく王の思いを申し述べると、如来は、

「この後七日、きっと本生地に帰りましょう」

と言われた。使者は帰還しこの由を王に申し上げた。浄飯王はそこで官民に命じ道路を清掃し、花・香を積み上げ準備させた。［当日は］群臣と城外四十里の所で乗り物を止めお出迎えした。この時、如来は大衆と共に進まれ、八金剛（注三）は周囲を護衛し四天王（注四）が先導し、帝釈天は欲界（注五）の諸天人と左に侍し、梵天王は色界（注五）の諸天人と右に侍し、諸苾芻僧は如来の後に列を組んだ。仏のみは大衆の中にあって、あたかも月が星を照らすごとく、その威容は三界（注五）をも動かすほどで、その光明は七曜（日・月・火・水・木・金・土の七星）にも勝り、虚空を歩んで生国に着かれた。王と従臣は仏を敬礼しおわると、仏は共に国に帰り、尼拘盧陀僧伽藍（注六）に止まられた。（注七）

その側、遠からざる所に窣堵波がある。如来が大きな樹の下で東面して坐し、叔母の金縷の袈裟を受けられた処（注八）である。これに並んだ窣堵波は、如来がここで八人の王子と五百人の釈種とを得度（注九）［し弟子と］された処である。

注

一　魔軍を降伏し　釈迦修行中における諸事象の一。詳しくは巻八に見え、特にこの条は巻八の六・三に出る。

二　使者に命じ……と言わせた　浄飯王の釈尊招請の使者は、優陀夷 Udāyi とも、または迦留陀夷 Kāludāyi とも言う。

三　八金剛　八人の金剛力士。金剛力士は執金剛力士 vajrapāṇi ともいい、手に金剛杵を持ち、常に釈尊の左右に侍して護衛し、非法のものあれば金剛杵を揮ってこれを破砕するという。全部で五百の執金剛ありという『智度論』。

四　四天王　須弥山の中腹にある四王天の主。天下を護る故、護世四天王と言われる。帝釈の外将。東方は持国天、南方は増長天、西方は広目天、北方は多聞天（毘沙門）と言う。

五　欲界・色界・三界　巻五の一・三注五参照。

六　尼拘盧陀　尼拘盧陀 *₀nji-₀kiu-₀luo-₀d'â*: **nikrodha* (Skt. *nyagrodha*, Pa. *nigrodha*). 仏典中に樹名・人名として頻用されるが、その漢字表記の第一音節は「尼・泥」の類が多く（匿瞿提・諾瞿陀もあるが）、純梵語を表わしたものとは思われず、パーリ語形の通用土音を表記したものと考えられる。巻五の一・三注四参照。

七　父子合会・帰郷説法は仏教彫刻の題材としてよく見られるもので、南インドのアマラーヴァティー Amarāvati 大塔欄楯彫刻の合会図や、ロリヤーン・タンガイ Loriyān Tangai 出土の帰郷説法［岩波写真文庫『仏陀の生涯』五一ページ］など多い。

八　叔母の金縷の袈裟を受ける　叔母とは 釈尊の 生母の 妹、鉢羅闍 波底 Skt. *prajāpati*, Pa. *pajāpati* のこと。旧訳家は大愛道と義訳し慣用する。『法顕伝』に「仏、尼拘律樹下にありて東向して坐し、大愛道、仏に僧伽梨を布施せる処、この樹なお在り」と見え、また巻九の一・三にこの袈裟を大迦葉が奉持し、弥勒出世の時に奉るべしと言う記事がある。

九　八人の王子と五百人の釈種とを得度　『四分律』の四によれば、八王子とは八人の釈種、即ち摩訶那摩 Mahānāma, 阿㝹楼陀 Anuruddha, 跋陀利迦 Bhadrika, 提婆達多 Devadatta, 阿難陀 Ānanda, 跋窶 Bhagu, 金毗羅 Kimbila の七人と従者の鄔波離 Upāli とである。五百の釈種とは多数の釈種の意。迦比羅城で得度出家したように記しているが、仏陀が迦比羅城より王舎城に至る途中の阿奴摩 Anomā 河畔の阿菟比耶 Anupiya に追って来てのことであった。

二・九　自在天祠

城の東門内の路の左に窣堵波がある。昔、一切義成太子(注一)がここで諸種の技芸を習われた。

門の外に自在天祠がある。祠中の石造りの自在天の像は姿勢を正し起ち上がらんとする姿である。太子が襁褓の中にある［赤子の］時、浄飯王が臘伐尼園(注二)から太子を迎えて帰る途中に天祠に立ち寄った。王は、

「この天祠は霊験多く、釈種の子供たちが御加護を求めればきっと効がある［と言う］。太子をつれて天祠に行って参拝しよう」

と言った。ちょうど乳母が抱いて祠に入ると、その石の自在天像は起ち上がり太子を出迎え、太子が出ると自在天像はもとの如く坐った。

注

一　一切義成太子　薩婆曷刺他悉陀の義訳。巻七の一・一〇参照。

二　臘伐尼園　臘伐尼 *lâp₀-b'i̯wɒt₀-₀nji*: **labani*. この地名は、Aśoka Ins. *luminini*, Skt. Pa. *lumbini*, 現代名 *rummindei* (< *Lumbini devi*)。漢字では嵐毗・竜毗・流民・隣絆・隆頻・論民、および藍毗尼・竜弭弥・林牟尼・流弥尼などと表記されるが、臘伐尼のごとく第一音節を入声字で当てるものは他に見ない。『慧琳音義』二五（釈雲公撰・慧琳再刪補『大般涅槃経音義』）の「林微尼園」の注に「梵に藍篘尼 *₀lâm-°b'i̯wən-₀nji* と云う」とある。彼此考え合わせるに、玄奘の耳にし表記せんとした音声は **labani* のごときものであったろうか。

二・一〇　釈迦競技の旧跡

城の南門外の路の左に窣堵波がある。太子が釈族の人たちと角技をし、鉄鼓を射た処である。(注一)

ここから東南三十余里に小さな窣堵波がある。その側に泉があり、泉流は鏡のごとく清らかである。太子が釈種の人たちと強弓を引き技能を競った所である。矢は弦を離れ、鉄鼓を突き通し向こう側を貫き、池にまで達し羽を没した。それが原因で清流が涌き出るのである。当時、土地の言い伝えではこれを箭泉と言い、もし病気のものがあれば、飲んだり沐浴すれば治癒するもの多く、遠方の人はその泥を持って帰

り、その苦しむ場所により水でのばして額に塗れば、御加護を蒙り全快するものが多い、とのことである。

注

一　この段の説話は、『因果経』二、『仏本行集経』一三、『方広大荘厳経』四に見える。次のような筋である。釈迦選妃にあたり、迦毗羅城執杖大臣の娘耶輸陀羅が候補にあがり、太子は他の釈種と角技・跳擲・奔走等の競技を行ないすべてに勝ち続け、射芸をしたところ、阿難陀は二拘盧舎の距離で二鉄鼓を、提婆達多は四拘盧舎の距離で四鉄鼓を、孫陀羅難陀は六拘盧舎の距離で六鉄鼓を、執杖大臣は八拘盧舎の距離で八鉄鼓を射通した。太子は先王の廟に祠る何人にも引き得ぬ強弓を取り寄せ、鉄鼓を十拘盧舎の距離に置き、さらに七鉄猪・七鉄多羅樹を十拘盧舎の外に置いて射たところ、その全部を貫通し、箭は地に没して井をなした。時人はこれを箭井 Śarakūpa と言った、と言う。

二・二　仏陀降誕の聖跡

箭泉より東北へ行くこと八、九十里で臘伐尼林(注一)に至る。釈種が水浴する池がある。水は清く鏡のように、とりどりの花は咲き乱れている。その北、二十四、五歩の所に無憂花樹(注二)があるが、今はもう枯れてしまっている。菩薩が降誕された処である。菩薩は吠舎佉月(注三)の後半の八日に生まれられた。この（中国の）三月八日に当たる。上座部では吠舎佉月の後半の十五日であると言う。この（中国の）三月十五日に当たる。(注四)東隣の窣堵波は無憂王が建てたものである。二匹の竜が太子に水浴させた処である。菩薩は生まれられるや、手助けなくして四方に行かれること各七歩されて、自ら、「天上天下、唯我のみ独り尊し。今より以後、私の持ち前の生はもはや尽くした。[これが最後身であり、今後は輪廻転生することはない]」と言われた。足の踏むにつれ大きな蓮の花が出て、二匹の竜が踊り出て来て虚空に止まり、それぞれ水を吐いた。一は冷たく、一は暖かく、その水で太子を浴したてまつったのである。(注五)

浴太子窣堵波の東に二つの清い泉があり、傍に二つの窣堵波が建てである。二匹の竜が地中より踊り出た処である。菩薩が生まれられる



釈迦降誕の諸場面（左　托胎，右　誕生，中央　二竜王の灌水），サールナート出土

や、親族縁者はみな走り廻り水を求めて浴させようとした。[すると]夫人の前に二つの泉が涌き出て来た。一は冷たく、一は暖かかった。それで身を洗われたのである。

その南の窣堵波は、帝釈天が菩薩を捧げ受けた処である。菩薩が初めて胎内を出られるや、帝釈天は微妙な天衣で菩薩を跪き受けた。

その隣に四つの窣堵波がある。四天王が菩薩を抱きまいらせた処である。菩薩が[摩耶夫人の]右脇から生まれるや、四天王は金色の㲲衣で菩薩を捧げ、金机の上に安置し、母の前に進み出て、

「夫人がこの福徳備われるお子様をお生みになりましたことは、誠に慶賀すべきことであります。諸天人も喜んでおります。ましてこの世の人の喜びは言うまでもありません」

と言った。(注六)

注

一　臘伐尼林　Lumbini 園のこと。本巻の二・九注三参照。

二　無憂花樹　また阿輸迦・阿叔迦に作る。Skt. *aśoka.*『因果経』一に、「夫人は彼の園中に一大樹あるを見る。名づけて無憂と言う。花色香鮮、枝葉分布し、極めて茂盛となす。即ち右手を挙げて之を牽摘せんと欲するに、菩薩は漸漸に右脇より出づ」とある。

三　吠舍佉月　巻二の一・四参照。

四　釈尊の生年月日については異説が多い。南方伝により最近の南アジア仏教諸国は西紀前五四四年仏滅とするが、学問的には承認されない。従来は北方伝中の一説により前五六五年降誕、前四八六年仏滅とされてきた。学問的には前四六三年降誕、前三八三年仏滅という一つの推測がされている[望月:『辞典』附録序論・・中村:『インド古代史』下四二九ページ以下]。生誕の日も『西域記』所伝のものの他に、『因果経』一、『仏本行集経』七の二月八日説、『修行本起経』の四月七日説、『太子瑞応本起経』『仏所行讃』の四月八日説などがある。

五　釈迦降誕時の瑞応　本書に記載する瑞相は、『方広大荘厳経』三、『因果経』に記する所とほぼ一致する。

六　釈迦降誕時の状を『因果経』一に「菩薩漸漸に右脇より出づ。時に樹下にも亦七宝七茎の蓮花生ず。大なること車輪のごとし。菩薩即便ち蓮花上に堕ち、扶持する者なくして自ら行くこと七歩、其の右手を挙げて師子吼す。『我は一切の天人の中において最尊最勝なり。無量の生死、今において尽きんとす。此の生は一切の人天を利益せん』と。是の言を説き已るや、時に四天王は即ち天繒を以て太子の身を接け宝机上に置く。釈提桓因は手に宝蓋を執り、大梵天王は又、白払を持ち、左右に侍立す。難陀竜王・優波難陀竜王は虚空中より清浄水を吐くに、一は温、一は涼にして太子の身に灌ぐ」とある。「天上天下、唯我独尊、今茲而往、生分已尽」の師子吼と文末の「母の前に進み出て云々」は『仏本行集経』七、八に見える。

二・三　阿育王石柱および油河　四天王捧太子窣堵波の側、遠からざる所に大きな石柱がある。上に馬の像が作ってある。無憂王が建てたものである。後に悪竜の雷鳴でその柱は中ほどから折れ地に倒れた。(注一)

傍に小さな河の東南に流れるものがある。土地の言い伝えで油河と言っている。摩耶夫人がお産をした時、天がこの地を光美わしい清浄な水にして、夫人にこの水を採り沐浴して汚れを除かせようとした処である。今は[ただの]水になってしまっているが、その水流はなお膩が浮いている。

ここから東へ曠野や荒林の中を行くこと二百余里で、(注二)藍摩国(原注　中印度の境)に至る。

注

一　無憂王所建の石柱　いわゆる Rummindei Pillar である。ネパールの Bithri 地方の Rummindei 村にあるが、土地の人は Rupan-dehi と呼んでいる。一八九七年に A. Führer によって発掘された。今は柱頭の馬

形は存在せず、玄奘の記すごとく二つに折れ、下の部分に阿育王がその即位二十年に親拝し、馬像の柱頭をもつ石柱を仏陀降誕の地に建てる旨記してある。この石柱のすぐ側に阿育王時代の作と推定される釈尊降誕の彫像を祠る堂がある［Hultzsch: *Corp. Ins. Ind.*, I. p.164; R. K. Mookerji: *Asoka*, p.202 ff.; 宇井:『印度哲学研究』四、三一五ページ］。

二　油河　玄奘は土地の説話を載せているが、経典には次のごとくなっている。『方広大荘厳経』巻三には「聖母の右脇、平らかなること故の如く、一井中より三種の泉を出だし菩薩の母を浴せしむ。又池中より妙香油を出し、聖后身に塗る」とあり、『因果経』一には「爾の時、摩耶夫人太子を生み已り、身安らかに快楽にして苦患あることなし。歓喜踊躍して樹下に止る。前後自然に忽ち四井生じ、其の水香潔にして八功徳を具う」とある。

三　二百余里　『慈恩伝』には劫比羅伐窣堵国の都城を起点にして、「此れより東のかた荒林を行くこと五百余里、藍摩国に至る」とする。『釈迦方志』上は『西域記』と同じく、「油河」の記事に続き「東行二百余里」とする。計算するに二百余里を是とする。

三　藍摩国

三・一　国の概観と仏塔

藍摩国(注一)は荒れはてて歳すでに久しい。境域もさだかでなく、城や邑も荒廃し住民も稀である。

故城の東南に煉瓦造りの窣堵波の高さ百尺足らずのものがある。昔、如来が寂滅せられ、この国の先王が舎利を分配(注二)されて手に入れ、本国に持ち帰り丁重に祠ったものである。不思議なことが間々起こり、神妙な光が時により燭くことがある。

窣堵波の側に一つの清らかな池がある。竜が何時も池の外に出かけ蛇の身なりに姿を変え、右廻りにぐるっと窣堵波を回っていた。野象が群れをなして行くにも華を採って散らした。人知れざる加護により初めより変わりすたれることはなかった。昔、無憂王が窣堵波を分割して建てようとするや、七ヵ国が建てたものはみなすでに開き［仏舎利を］発掘した。この国にやって来て作業を始めようとすると、この池の竜は［舎利を］奪い取られることを心配し、婆羅門に身を変えて、王の前に進み象を押え、

「大王は仏法に帰依され広く福田（福徳を生長させること、あたかも田の如き作業）を樹てようとなさっておられますが、どうか駕を枉げて私の家へ御光来ください」

と言うと、王は、

「汝の家は何所か。遠いのか」

と尋ねた。婆羅門は、

「私はこの池の竜王であります。大王が福業を行なおうとしていられることを承り、やって来て拝謁をお願いしました」

と答えた。王は竜の願いを受けて竜の御殿に入った。坐ることしばし、竜は進み出て、

「私は悪業のためにこの竜身を受けました。仏舎利を供養して罪障が消えるようにと願っております。どうか王御自身お出でになって、［仏舎利を］拝観し礼拝なさいますように」

と言った。無憂王は見るや、愕然として、

「あらゆる供養の品々は、とても人間界にあるようなものではない［ほどりっぱである］」

と言うと、竜は、

「もしお言葉のごとくであるならば、願わくば［この窣堵波を］取り壊されませぬように」

と言った。無憂王は自分の力がとても及ぶものではないことを思い

知るがまま、発掘をしなかった。[注三] 王が池を出て来た所に今も記録がしてある。

注

一　藍摩国　藍摩 ˳lâm-˳muâ: Skt. *rāma* (*grāma*). Pa. *rāma* (*gāma*). *grāma*, *gāma* は村・城・小邑の義。首都名を以て玄奘が国名として呼んだものであろう。また羅摩伽・藍莫とも表記する。今のネパールと Gorakhpur との境にある Dharmauri (27° 26′ N., 38° 52′ E.) とも、Basti 県の Rampur Deoriya とも言う。釈迦族と拮抗した拘利 Koliya 族の居住地の一 [Law: *H.G.A.I.*, p.119]。

二　舎利を分配　仏骨八分の際に、藍摩国の拘利族もその一に与かった。本巻の四・一三参照。

三　藍摩国の仏舎利塔に関する伝説　『西域記』の記述のように、竜王の諫めで阿育王が仏塔発掘を中止したとするものに *Divyāvadāna* があり、他方『雑阿含経』二三では阿育王が竜王の請いを斥け仏骨を発掘し、王の八万四千塔建立の用に当てたとする [堀:『解説』四四七ページ]。巻八の二・三参照。なおこの塔を『法顕伝』には「藍莫塔と名づく」としている。由来の大略は『記』と同じ。

三・二　沙弥の伽藍　窣堵波の側、遠からざる所に一つの伽藍がある。僧の数は少ない。行ないは清らかに静かである。ところが沙弥[注一]をば寺務を総括する役にしている。遠方の僧がやって来れば待遇を十分にし、必ず三日間は留めて［衣服・飲食・臥具・湯薬の］四事を供養している。先達の話によれば次のようである。昔、ある苾芻が仲間を集めて、遠方からやって来て窣堵波に参詣した。見ると群れをなす象が行ったり来たりして、あるものは牙で草を取り、あるものは鼻で水をそそぎ、それぞれ珍しい花を持って来ていっしょになって供養していた。ちょうど人々はこの様子を眼にし、いじらしさに痛く心を打たれた。そのうちの一人の苾芻はすぐさま具足戒を捨て、[注二] ここに留まり供養をしたいと願い、人々に別れを告げて、

「私は幸いにも僧の末席を汚しておりましたが、歳月の流れることは速く、私の行ないには何の言うべきものもありませんでした。この窣堵波には仏陀の舎利があり、仏徳は人知れず通じて象たちも掃除にあたっております。この身をこの地に留めて象たちと共にし、余命を終わることができますならば、本当に幸いだと思います」

と言うと、人々は、

「それはりっぱなことです。私たちは煩悩多く、このことには思いもかけませんでした。どうか時節時節には御自愛なされ、お仕事を欠かれませんように」

と告げた。かくして仲間を離れ、重ねて心願を繰り返し、欣然として独り住居をしてこの世を終える心であった。そこで茅をふいて家を作り流れを引いて池を造り、時節の花を採っては供え、塔の境域を掃除し、年月を経ても心に期したことに変わりはなかった。隣国の王たちはこれを耳にし、りっぱなことであると感じ、争って財宝を寄捨し共同して伽藍を建て、それを機に招請して無理に僧務を見てもらった。それから引き続き創始者の功績は滅びることなく、沙弥を以て僧務を掌握させているのである。[注三]

注

一　沙弥　旧訳の語。新訳には室羅摩拏洛迦・室末那伊洛迦など。Skt. *śrāmaṇera*. 出家して十戒は受けたが、なお具足戒を受けるまでに至らぬ男子で、大僧のために勤めて策励されるから勤策男とも訳す。通常、僧衆の雑事庶務を掌握する人を知事・知僧事と言い、八解脱を具する阿羅漢、または須陀洹果などに達した学人を以て当てる。ここに言うような沙弥の身で知事となるのは、他に見ない異例として特筆する次第。

二　具足戒を捨て　具足戒を受け一人前の比丘となっているものが、その身

を一段低くして他僧の雑務を行なう沙弥となることを言う。

三　この沙弥伽藍の由来の大略は『法顕伝』にも見えている。



釈迦の出城（右）と落飾（左），ガンダーラ地方出土

三・三　釈迦落飾の聖跡　沙弥伽藍の東、大林中を行くこと百余里で大きな窣堵波に至る。無憂王が建てたものである。太子が城を踰え出てここまで来て宝衣を脱ぎ、瓔珞を取り去り従者に帰るよう命じた処である。(注一)太子は夜半に城を出て夜明けにここまで来た。すでに宿願がかなえられ、心に、

「これが私が［世間という］籠から出て、［家族という］束縛から離れ、最後に乗り物を捨てる処である」

と言い、天冠の中から末尼宝(注二)をほどき、従者に、

「汝はこの宝を持って、還って父王に『今ここに遠く世から遁れようとするのは、軽々しく父母に背き離れるのではありません。世間の無常を断じ、諸の煩悩を絶とうとしてのことであります』と申し上げよ」

と言った。闡鐸迦（原注　旧に車匿と曰う。訛なり(注三)）は、

「どんな考えで乗り物を空にしてどうして帰れましょうや」

と言ったが、太子は良く喩したので、太子の心を悟り帰った。

廻駕窣堵波の東に贍部樹(注四)がある。枝葉は凋れ落ちてはいるが、枯れ株はまだ残っている。その傍にさらに小窣堵波がある。太子がまだ身に残っている宝衣をば鹿皮の衣と取り換えた処である。太子は髪を切り衣裳を取り換え、瓔珞を取り去ったが、なお天衣（宝衣）が残っていた。

「この服は贅沢すぎる。どうして取り換えたらよかろうか」

と考えていた。その時浄居天(注五)は猟師に身を変え、鹿皮の衣を着て弓を持ち矢を背負った。太子は自分の衣服を取りあげて、

「取り易えたいと思います。どうか御承知ください」

と言うと、猟師は、

「よろしい」

と答えた。太子は自分の上衣を脱ぎ猟師に与えた。猟師は太子の上衣を手にすると復び天人の体になり、手にした上衣を持って虚空を淩いで去った。

太子易衣［窣堵波］の側、遠からざる所に窣堵波がある。無憂王が建てたものである。太子が剃髪した処である。太子は闡鐸迦から刀を取り自分の髪を切った。帝釈天はその髪を受け取り天宮に上り供養をした。その時、浄居天は剃髪人に身を変え、鋭い刀を持ち静かに歩いてやって来た。太子は、

「髪を剃れますか。どうか私のためにきれいにしてください」

と頼んだ。身を変えている天人は、命を受けるがまま太子のために髪を剃った。

踰城出家の日時(注六)もはっきり定まっていない。或いは菩薩の年十九であると言い、或いは二十九であるとも言う。吠舎佉月の後半の八日に踰城出家したと言う。この（唐の）三月八日に当たる。或いは吠舎佉月の後半の十五日であるとも言う。この（唐の）三月十五日に当たる。

注

一　従者に帰るよう命じた処である　この説話は『普曜経』四、『方広大荘厳経』六、*Jātaka*, I. 64 に見えるもので、またこの地点は Maurya, Pa. *moriya* 種族の領土にある阿笯摩 Anomā 河畔、Anupiya 林であると言う［堀：『解説』四五〇ページ］。

二　末尼宝　末尼 *muât˳-˳ṇi*: Skt. Pa. *maṇi* (Niya Doc. *mani*, *mamni*. Pkt. *maṇi*), また摩尼とも。真珠・珠玉・宝石の義。

三　闡鐸迦（……）　闡鐸迦 °*tś'iän-d'âk˳-˳ka*: Skt. *chandaka*, Pa. *channa*, また闡陀・闡那・闡怒とも。旧訳の車匿は **channak* のような音であろうし、闡那などと共に俗語系統のものであろう。楽欲の義［『玄応音義』二三］と言う。太子の乗馬付きの馭者の名。

四　贍部樹　Skt. Pa. *jambu*. また剡浮・琰浮・染部など。インドの到る処に産する喬木で学名 Eugenia jambolana と言う。落葉植物であるが、新葉相続いて出る。果実は雀の卵大で酸味を帯びて甘い。

五　浄居天　Skt. *śuddhāvāsa*, Pa. *suddhāvāsa*. 聖者の居住する天を指すが、ここは浄居天に住む天人の意。欲界の諸惑を断じ、再び欲界に還生することのない聖者。

六　踰城出家の日時　釈迦出家の年齢については、『修行本起経』『瑞応本起経』『因果経』に十九歳とし、『長阿含経』四、『中阿含経』五六、『雑阿含経』三五、『雑一阿含経』三七には二十九歳とする［堀：『解説』四五二ページ］。

三・四　畢鉢羅邑の灰炭塔　太子剃髪窣堵波より東南へ曠野の中を行くこと百八、九十里で尼拘盧陀林(注一)に至る。窣堵波の高さ三十余尺のものがある。昔、如来が寂滅され舎利は分配されてしまって、婆羅門たちは手に入れることができなかった。涅畳般那(注二)（原注　唐に焚焼と言う。旧に闍維と云う。訛なり）の場所で残りの灰・炭を集めて本国に持ち帰り、この霊塔を建てて供養を修したのである(注三)。それより以後、奇跡は引き続き、病気のある人が祈願すると治癒するものが多い。

灰炭窣堵波の側の故い伽藍の中に過去四仏の座所および散策された遺跡の場所がある。故伽藍の左右には数百の窣堵波があるが、その最も大なるものは無憂王が建てたものである。基礎は傾いてはいるが、高さ百尺に余るものである。

ここから東北して大林中を行く。その路は困難で、途中は危険である。山牛・野象・群盗・猟師などが旅行者を待ち受け、害を加えることと絶え間がない。この林を出ると拘尸那掲羅国（原注　中印度の境）に至る。

注

一　尼拘盧陀林　本巻の二・八（注六）参照。

二　涅畳般那（……）　涅畳般那 *niet˳-d'iep˳-˳puân-˳nâ*: **nirdhyāpana*, Skt. *niḥkṣāpana*, Pa. *nijjhāpana*. ［『荻原雲来文集』七九〇・九八二ページ］。旧訳の闍維はまた闍毘・邪維・耶旬とも。『玄応音義』五に「耶旬　或いは闍維といい、或いは闍毘という。同一の義なり。正しくは闍鼻多 *jhāpita* という。義はこれ焚焼なり」とある。日本語中の漢語「荼毘」は Pa. *jhāpeti* の下略形。屍体を焚焼してその遺骨を収蔵する葬法を言う。

三　灰炭窣堵波の由来　釈尊入滅後、仏舎利を八分し八国に分配した（本巻の四・一三参照）。この時、畢鉢羅 Pippalavana 邑の代表の婆羅門は遅れて到着したため分配に与かれず、火葬の灰を収集し本国に持ち帰り供養したと言う。『長阿含経』等に見える説話である。

四　拘尸那掲羅国

四・一　概観　拘尸那掲羅国(注一)は城郭崩れ落ち、村・里はさびれている。故城の煉瓦の基礎は周囲十余里ある。住民は稀少で町は荒れはてている。

注

一　拘尸那掲羅国　拘尸那掲羅　*◦kịu-◦śi-◦nâ-g'ịɐt◦-◦lâ*: Skt. *kuśinagara* (*kuśinagarī, kuśanagara, kuśigrāmaka, kuśinārā*). 拘尸那伽羅・拘夷那竭・拘尸那・倶尸那・拘夷とも。上茅城・香茅城・茅堂城と訳す。拘尸那掲羅の位置については諸説がある。一は今のゴラクプル Gorakhpur 市の東方三十四マイルにある Kasia (Kasaya) とする説 [Cunningham: *A.G.I.*, p.493; Beal: *Records*, II, 31 (85); V. Pathak: *History of Kośala*, pp. 68-9] で、この説は碑文を含む諸種の遺物・遺跡で最も多い支持を得ている。二はネパール領内の Gandak 河の東にあり、Little Rāpti 河が Gandak 河に合流する地点とする説 [Smith: *Early History of India*, p.167 (Note 5)]。その他にも異説がある。Kasia 説の弱点は、玄奘およびかれより二百三十年程以前の法顕も、当時すでに廃墟に近い状態であったと記しているに拘わらず、今の遺構は当時廃墟に近かったとは考えられない考古学的な証跡があるためと言う。今は通説に従い、Kasia 説による。なお、Law: *H.G.A.I.*, 102 ff.; 足立喜六:『大唐西域記の研究』上四八二ページ以降参照。

四・二　准陀の故宅　城内の東北隅に窣堵波がある。無憂王が建てたもので、准陀(チュンダ)（原注　旧に純陀と曰う。訛なり(注一)）の故宅である。屋敷の中に井戸がある。[釈尊に] 供養を捧げようとして掘ったものである。(注二)歳月すでに長く経ってはいるが、水は今でもなお綺麗である。

注

一　准陀（……）　准陀　*◦tśịuĕn-◦d'â*: Skt. *cunda* (*cunda-karmāraputra*, Pa. *cunda-kammāraputta*). また周那・淳陀・純陀・准他・準提・淳瓮とも。略して淳とも。訳して妙義または稚小という。准陀の住所について二説あり、一は *Dīgha Nikāya*, 16;『長阿含経』三等には波婆 Pāvā の鍛工の子で、波婆において釈尊に供饌したとし、二は法顕・覚顕共訳『大般涅槃経』三、曇無讖訳『大般涅槃経』二などに拘尸那掲羅の住とする説で、玄奘はこの第二説を採ったわけである。

二　准陀が釈尊に供養した説話　『長阿含』第三遊行経に「路、末羅より波婆城の闍頭園中に至る。時に工師の子に名づけて周那と曰うあり。……周那は仏の世尊の所に至り、頭面に足を礼して一面に在りて坐す。……周那は仏の説法を聞きて信心歓喜し、即ち世尊に明日舎に食せんことを請う。時に仏黙然として請いを受く。周那仏の許可を知り……其の夜に於て飯食を供設す。明日時至り、世尊は……大衆に囲遶せられて其の舎に往詣し、座に就きて坐す。是の時周那は尋ち飲食を設け、仏および僧に供す。別に栴檀樹耳の世に奇珍とする所のものを煮て独り世尊に奉る。仏周那に此の耳を以て諸比丘に与うる勿れと告ぐ。周那教えを受けて敢えて輙ち与えず。……已りて大衆に囲遶侍従せられて還り、中路に一樹下に止まり、阿難に告げて言く、吾背痛を患う、汝座を敷くべしと」、かくして遂に入滅した。准陀が釈尊に供した食物について学者の間に二説ある。即ち『長阿含』『大般涅槃経』に出る Pa. *sūkara-maddava* の解釈の差で、一は *sūkara* を豕肉、*maddava* を美味と解し、「美味なる豕肉」と訳す説、二は *maddava* < √*mṛd* ('rub, crush') と解し、「豕が土を掘り起こして食うもの」即ち菌と訳す説（漢訳の栴檀樹耳の説）である。通常『長阿含経』に従い菌と解釈する。

四・三　仏陀入滅の聖地　城の西北三、四里で阿恃多伐底（アジタヴァティー）河（原注　唐に無勝と言う。此れ世の共称たるのみ。旧に阿利羅跋提河と言う。訛なり。典（宋本「旧」に作る）言にこれを尸頼拏伐底河と謂う。訳して有金河と曰う）[注一]を渡る。西岸より遠からずして娑羅林（サーラ）[注二]に至る。その樹は槲（かしわ）に類して皮は青白く、葉は甚だ光沢がある。四本の樹が特に高い。如来が寂滅された所である。そこの大きな煉瓦造りの精舎の中に如来の涅槃の像[注三]が作ってある。頭を北にして横臥している。傍に窣堵波がある。無憂王が建てたものである。基壇は崩れ傾いているが、なお高さ二百余尺ある。[注四]前に石柱[注五]が建ててあり、如来寂滅の事跡が記してある。記事の文はあるが、［寂滅の］日月は書いてない。

注

一　阿恃多伐底河（……）　阿恃多伐底　°*â-°źi-°tâ-b'i̯wɒt°-°tiei*: Skt. *ajitavati*. 玄奘によれば、これは世間の通称とのこと。また阿恃多跋底・阿氏多嚩底とも。また略して跋提河とも。旧訳として出す阿利羅跋提は北本『涅槃経』一に見えるものであるが、南本『涅槃経』一には阿夷羅跋提と改め、『四分律』三六には阿夷羅婆提、『五分律』七、八には阿夷羅、『善見律毗婆沙』七には阿寅羅波帝夜、『有部毗奈耶』四〇には阿市羅跋底とする。これらは恐らく Pa. *aciravati* に対するものであろう。また尸頼拏伐底は醯連然鉢底・熙連若婆底・熙連禅・希連禅・醯連とも作るもので、Skt. *hiraṇyavati*, Pa. *hiraññavati* に当たるものであろう。玄奘はこの Ajitavati, Aciravati, Hiraṇyavati の三つの名を同一河川の名と見たわけである。しかし、実地調査の報告によれば、今の Little Rāpti は古く Aciravati と称し、今の Gandak 河は古えの Hiraṇyavati であり、異なる二河であると言う［Majumdar's Note, in C.A.G.I., p.713; Law: H.G.A.I., p. 32］。

二　娑羅林　娑羅　°*sâ-°lâ*: Pa. *sāla* (Skt. *śāla*). この樹名は堅固・高遠と訳される、学名 Shorea robusta, 竜脳香科に属する喬木。高さ三、四十メートルに達するものがある。この阿恃多伐底河畔の樹林を古来、雙樹林・鶴林・四枯四栄樹林と呼ぶ。

三　如来の涅槃の像　今日の Kasia には五世紀の作と見られる、長さ六メートルの大涅槃像がある。一八七六年に発掘修理されたものである。

四　涅槃堂側の窣堵波　今日も涅槃堂の後ろに古い基壇の上にセメント製の窣堵波が立っている。セメントの部分はビルマ仏教徒の手により一九二七年に建てられたものである。

五　石柱　玄奘の見たような石柱は今日全く残存しない。

四・四　仏滅の年月日　［仏滅の年月日を］先代の記録に見てみると、[注一]仏は生年八十で吠舎（ヴァイシャーカ）[注三]佉月の後半十五日に、般涅槃[注二]に入ったと言う。この（唐暦の）三月十五日に当たる。説一切有部では、仏は迦剌底迦（カーリッティカ）[注三]月の後半八日に般涅槃に入ったとする。この（唐暦の）九月八日に当たる。仏の涅槃より［の年代については］諸部に異論があり、或いは千二百余年であると言い、或いは千三百余年であると言い、或いは千五百余年であると言い、或いはすでに九百年は過ぎてはいるが千年には満たないと言う。[注四]

注

一　［仏滅の年月日を］先代の記録に見てみると　原文は「諸を先記に聞く」とあり、『慈恩伝』には「相伝えて云う」とする。

二　般涅槃　旧訳の語でまた泥洹とも、単に涅槃とも。新訳には波利抳縛南・波利涅婆南に作る。Skt. *parinirvāṇa*, Pa. *parinibbāna*. 個体の完全な消滅の意で、一切の煩悩災患が永遠に滅尽する境地を言い、円寂の訳が最も当たるが、滅・寂滅・滅度・度なども訳す。また *mahāparinirvāṇa* 大涅槃とも言う。

三　吠舎佉月・迦剌底迦月　巻二の一・四参照。

四　釈尊の年寿と入滅年代　釈尊の年寿については大略三説ある。『仏般泥

洹経』下、『方等般泥洹経』下等は七十九歳説。『大般涅槃経』『金光明最勝王経』一等は八十歳説。『長阿含経』四、『雑阿含経』三五、『毗奈耶雑事』三八等は八十歳以上説であるが、一般には八十歳説が行なわれる。入滅年代には五十数説あり、一いち論述できないが、大要は本巻の二・二注四に既述。玄奘も典拠を示さないまま諸説を列挙するのみで、その是非を論じていないのは、煩雑を避けたばかりではなかろう。

四・五 雉王本生譚 ［仏入涅槃］精舎の側、遠からざる所に窣堵波がある。如来が菩薩行を修していられる時、群れなす雉の王となり火を消した処である。昔この地に大きな密林があり、獣類や禽類が巣を作り穴を作って住んでいた。この時、突風が四方から起こり猛炎が風で舞い上がった。この時、一羽の雉が哀れを感じ、清流で羽毛を濡らし空を飛び力いっぱいに水をふりかけた。そこで帝釈天は［天界より］下を向いて、

「汝は何故に愚かにも無駄な羽根の努力をしているのか。大火が起こり林も野も焼き尽くそうとしている。どうして汝のような小さな軀で消火することができようか」

と告げられると、雉は、

「そう言う方は誰ですか」

と尋ねた。

「我こそは帝釈天である」

と言うと、雉は、

「帝釈天は大きな福力をもたれ望んでかなえられぬものはなく、災難を救助することはこれを掌に指すがごとくである［はずなのに］、反って役に立たぬと詰られるのは一体落ち度はどちらにあるのでしょうか。猛火は今が盛りです。多言していられません」

と言い、すぐさま繰り返して力をこめて飛び流水の所に行った。そこで帝釈天も水を掬い上げその林にふりそそぎ、火は消え煙も消え生き物は命を全うした。それで今、救火窣堵波と言うのである。(注一)

注

一 雉王救火の説話は『大智度論』一六に出ている。またこれと似た説話が *Jataka*, No. 35 に鶉本生譚として出ている。

四・六 救生鹿本生譚 雉救火［窣堵波］の側、遠からざる所に窣堵波がある。如来が菩薩行を修していられる時、鹿となり生き物を救われた処である。昔むかし、ここに大きな林があった。火炎が野いっぱいにひろがり、鳥獣が困り切っていた。前には急流の危険があり、後ろは猛火の災難で困しみ、水に溺れて身命を失わないものはない［状況であった］。その鹿は哀れに思い心を痛め、自分の身を以て流れに横たえ［生き物を渡し］た。皮は破れ骨は折れたが、よく辛抱して溺れるものを拯った。跛の兎が最後にやって来た時は、疲れ切っているのを耐えて救ってやったが、力はすでに尽きはてて水に溺れて死んでしまった。天人たちは屍骸を収容して窣堵波を建てたのである。(注一)

注

一 この本生譚は『毘奈耶雑事』三八に見える。*Jataka* 中における有無は確認できなかった。専家の教示を乞う。

四・七 梵志善賢 鹿拯溺［窣堵波］の西、遠からざる所に窣堵波

がある。蘇跋陀羅（スバドラ）（原注　唐に善賢と言う。旧に須跋陀羅と曰うは訛なり）(注一)が寂滅に入った処である。善賢はもと梵志（婆羅門）の師であった。年百二十、長命にして多智であった。仏が寂滅されるということを耳にし、［娑羅(さら)］双樹の所に行き、阿難に、

「仏世尊が寂滅せられようとしていられます。私はどうにも解けない疑問を懐いております。どうかお尋ねしたいものです」

　と言うと、阿難は、

「仏は今まさに涅槃に入られようとしていられます。どうか乱すことがないようにしてください」

　と言った。［善賢は、］

「私は仏（一切智者）は世に遇い難く、正法は聞き難いと聞いております。私は深い疑問をもっており、［もし仏が入滅されると、もはや］教えを請う方がないのではないかと心配しております」

　と言った。善賢は願いのままに入り、まず仏に質問して、

「いろいろな別派の衆徒（例えば六師外道のごとき）が自ら師と称して、それぞれ異なった教義を奉じ訓(おしえ)を垂れ人々を導いております。喬答摩(ゴータマ)（原注　旧に瞿曇と曰う。訛略なり）(注二)は尽く御存知でしょうか」

　と言うと、仏は、

「私は全部深く究めました」

　と言い、そこで説いて聞かせた。善賢は聞くや、心はさっぱりとし信じ理解して、仏門に加えられ具足戒を受けたいと願った。如来は、

「汝にできるであろうか。外道の異学のもので梵行（清浄無欲の行）を修めようとするものは、四年間(注三)その行ないをよく観てその性質を察しなければならぬ。作法が物静かに［正しく］言語が誠実であれば、我が仏門に加えてもよろしい。浄(きよ)らかに梵行を修すると言うことは、その人の行ないにこそあるので［人により遅速あり］、何の難しいことがあろうか」

　と告げられると、善賢は、

「世尊はお慈悲が深く、衆生を済度されるのに私心なくされています。私は四年間試みに学び、［身口意の］三業を道に順(したが)うように致しましょう」

　と言うと、仏は、

「私がすでに言った［ごとく］、その人の行ないにこそあるのである」

　と言われた。そこで善賢は出家しすぐさま具足戒を受け、励み修養し身心共に努めた。すでに教えに疑問もなくなり、自ら證(さとり)を得て、その夜余りふけないうちに羅漢果を證し、煩悩はすでに尽き梵行は完成した。仏が大涅槃に入られるのを見るに忍びず、衆徒の中にいて火界定(注四)に入り、神通の事象を現わし仏より先に寂滅した。これが如来の最後の弟子でありながら入滅を先にしたもので、これこそその昔最後に河を渡った跛(びっこ)の兎そのものであった。

注

一　蘇跋陀羅（……）　蘇跋陀羅 *˳suo-b'uât˳-˳d'â-˳lâ*: Skt. *subhadra*, Pa. *subhadda*. 旧訳に須跋陀羅の他、藪婆頭羅・須跋陀・須抜陀・須跋・須抜とも。善賢・快賢と訳す。蘇跋陀羅の帰依入門は、『長阿含経』四、『雑阿含経』三五、『雑一阿含経』三七、『毘奈耶雑事』三八、『大般涅槃経』五、六等に見える。

二　喬答摩（……）　喬答摩 *˳g'iäu-tâp˳-˳muâ*: Skt. *gautama*, Pa. *gotama*. 旧訳の瞿曇 **g'iwag-dəm → ˳g'iu-˳d'ậm* は唐代ではすでに適応しない。喬答摩はインド古代の仙人の名であったが、釈迦族の先祖がこの仙人の弟子であったことから、後人がその子孫であるとの意でその姓として名乗ったと言う。ここは釈尊を呼んで喬答摩と言ったもの。

三　四年間の修学　『四分律』三四、『五分律』一七などに、外道が出家し具足戒を受けるには、まず四ヵ月間の試験的学習をさせ、その実績如何に

よって正式に僧衆に加え、具足戒を授くるや否やを決定した。ここに四年と言うは四月の誤りか［堀：『解説』四六八ページ］。

四　火界定　また火光定とも言う。巻三の六・九注七参照。

四・八　執金剛神の悲慟　善賢寂滅［窣堵波］の側に窣堵波がある。執金剛が地に躃れ悲しんだ処である。大悲世尊（仏陀）が衆生の機根に随い利益され、教化の功が終わり寂滅の安楽に入られ、双樹の間で頭を北にして横臥された。執金剛神と密迹力士（注一）とは、仏の滅度を眼のあたりにして悲しみ慟き声を揚げ、

「如来は私たちを捨てて大涅槃に入られる。［今日よりは］帰依する方もなく守護する方もなくなる。毒箭（煩悩）が深く心に入り愁みの火は盛んに燃える」

と言い、金剛杵を捨てて悶え地に倒れ悲しんだ。しばらくしてからまた起き上がり、悲しみ慕い互いに、

「［辺際のない］生死の大海を、誰が［私たちを乗せ導いていただく］舟を作ってくれるのであろうか。無明の長夜［にも似た生死界に流転する私たちのため］に誰が導きの燈火となっていただけるのか」

と言い交わした（注二）。

注

一　密迹力士　金剛力士の一人。本巻の二・八注三参照。

二　金剛悲慟の話は『仏入涅槃密迹金剛力士哀恋経』に見えるものと大同であり、「玄奘はこの経より文意を節約して『西域記』の記事を成したるに非るかを疑わしむるものあり」［堀：『解説』四七二ページ］と。

四・九　仏陀滅後の七日供養　金剛躃地［窣堵波］の側に窣堵波がある。如来が寂滅されて七日間供養した処である。如来が寂滅されようとするや、光明はあまねく照らし、人界のものも天界のものも悉く集まり、悲しまないものとてはなかった。お互いに、

「大覚世尊（仏）は今まさに寂滅されようとしていられる。衆生の福徳今に尽き、世間の人は身を依せる所がなくなろう」

と話し合った。如来は右脇を下にし師子牀に横臥しておられたが、大衆たちに、

「如来が終に寂滅してしまうと言う勿れ。［肉身は滅するとも仏の本身としての］法身は常住し、もろもろの変易から離れて存在する。汝らは怠慢心を棄てて早く解脱を求めるべきである（注一）」

と告げられた。多くの苾芻たちはすすり泣き悲しんでいた。その時、阿泥律（原注　盧骨反→*luat*。）陀（原注　旧に阿那律と曰う。訛なり（注二））は苾芻たちに、

「止めよ、止めよ、悲しみなさるな。天人の方々がとがめられましょう」

と告げた。折しも末羅［種族の］衆（注三）が供養しおわり、金棺を捧げて涅畳般那（本巻の三・四注三参照）の所へ行こうとした。そこで阿泥律陀は、

「まずはお止めなさい。天人の方々がここへ留めて七日の間供養されようとしています」

と告げた。そこで天人たちは天の美わしい花を手にして虚空を廻り聖徳を讃嘆し、それぞれ真心を尽くしていっしょになり供養を盛んに行なった。



釈尊の入滅とそれを悲しむマッラー族や仏弟子たち，ガンダーラ地方出土

注

一 「如来が終に……である」 この如来の最後の説法の内容が『遺教経』であると言う。玄奘の引文は羅什訳に当たるようである。

二 阿泥律（……） 陀（……） 阿泥律陀 ʔâ-niei-luət-dʼâ: Skt. aniruddha, Pa. anuruddha. 旧訳は阿那律の他に阿㝹楼陀とも。無滅・不滅と訳す。釈尊の従弟にして、十大弟子の一人、天眼第一と称せられた。

三 末羅［種族の］衆 末羅 *muât-la*: Skt. *mallā, malla*, Pa. *malla*. また摩羅・満羅・跋羅とも。力士・壮士と訳す。古代インドの十六大国の一。元来、種族の名称で、Kasia に比定されている Kusinārā (Kusinagara) を首都としていたが、ほかに Pāvā と Bhoganagara という二つの重要都市があった。この国人は深く仏の教えを信奉していたし、この領土内で仏の入滅があったので、仏の葬儀・仏骨の分配等に指導的立場に立ったのである（本巻の四・一三参照）。

四・一〇 摩耶夫人の哭仏 停棺窣堵波の側に窣堵波がある。摩訶摩耶（マハーマーヤー）（本巻の二一・二注三参照）夫人が仏の入滅を慟哭（どうこく）された処である。如来が寂滅され、衣服を着せ入棺し終わった。そこで阿泥律陀（アニルッダ）は天宮に昇り摩耶夫人に、

「大聖法王［の仏陀］は今すでに寂滅されました」

と言った。摩耶は聞くや悲しみで声もつまり、息も絶えんばかりであった。諸天人衆と共々に双樹の間に行くと僧伽胝（サンガーティー）（巻一の三二・二参照）・鉢および錫杖（しゃくじょう）が眼に入った。これにすがりつき声をあげて泣き、息も絶えんばかりであったが、復（ふたた）び声をあげて、

「人界ともに福楽は尽き、世間を見そなわす眼も滅しました。今ここにあるこれらの物は、空しく持ち主とてはこの世にありません」

と言った。如来の聖徳の力で金棺は自（おの）ずと開き、仏は光明を放ち合掌して坐し、慈母が遠来し下降されたのを、

「諸行の法は自（おのずか）らこのようなものです（諸行無常）。どうか深く悲しまれることのないように」

と慰問された。阿難は悲しみをいっぱいにし、仏に、

「後世の人が私に［世尊の寂滅について］尋ねましたら、何と答えたらよろしいでしょうか」

とお尋ねすると、

「仏がすでに涅槃に入ってから、慈母の摩耶夫人が天宮より降下され双樹の間に来られた。如来はもろもろの不孝の衆生のために金棺より起（た）ち上がり、合掌説法した」

と言われた。（注一）

注

一 摩耶夫人哭仏の説話 「この本文は『摩訶摩耶経』下に基きて玄奘が修正せし古伝なり」［堀：『解説』四七六ページ］と。

四・一一 如来の荼毘所 ［拘尸那揭羅（クシナガラ）］城の北、河を渡って三百余

歩に窣堵波がある。(注一) 如来の体を焚焼した処である。地面は今に黄黒、土は灰炭を雑えている。心を籠めて探し求めると、仏舎利を手に入れることがある。如来が寂滅され人天ともに悲しみ、七宝もて棺を作り千氎もて身を包みまいらせ、香華を設け旛蓋を建てた。末羅族の人々が輿を捧じて出発し、人々は先導後従した。北して金河（本巻の四・三参照）を渡り、香油をいっぱいに満たし香木をたくさんに積んで、火を放って焼いた。［ところが］二枚の氎は焼けなかった。一枚は最も身に近く着けているもの、一枚は一番外に覆ってあったもの。［しかし］諸衆生のために［如来の遺身は焼けて］舎利は分散した。ただ、髪と爪とはそのまま残り、儼然として少しも損傷はなかった。

注

一 ［拘尸那掲羅］城の北……ある　荼毘の位置を玄奘は城北とするが、『大般涅槃経後分』下には東門外とし、『般泥洹経』下には西門外とする［堀：『解説』四七八ページ］。金河の対岸となれば、城西のはずではなかろうか。今日の荼毘処跡とされる場所は、涅槃の地より東方約十マイルの地点、広い田畑の真中にある大樹のある小高い丘がそれであるとされている。そこは煉瓦の崩れてできた丘で、中央の大穴は仏骨の埋められた処であると言う［長谷川伝次郎：『仏蹟』図四四］。この荼毘処を『長阿含経』四には天冠寺 Makuta-bandhana caitya と名づけ、『摩訶僧祇律』三一には天冠塔とする。

四・三　大迦葉の伝説

焚身［窣堵波］の側に窣堵波がある。如来を金棺に収めおわり、香木を積んで火をつけたが燃えなかったので、人々はみな驚いた。阿泥律陀は、

「迦葉波を待っておられるからこそ［燃えないの］だ」

と言った。その時、大迦葉波は五百弟子と共に山林より来て拘尸城に着き、阿難に、

「世尊のお体はまだ拝見できますか」

と尋ねると、阿難は、

「千氎もてお包みし、重棺もてお納めし、香木を積みおわり、すぐさま火をつけました」

と答えた。この時、仏は棺内から［迦葉波の］ために双足を現わし出されたが、仏足の［転法］輪相の上に変わった色があるのが見えたので、［迦葉波は］阿難に、

「どうしてこんな色がついているのですか」

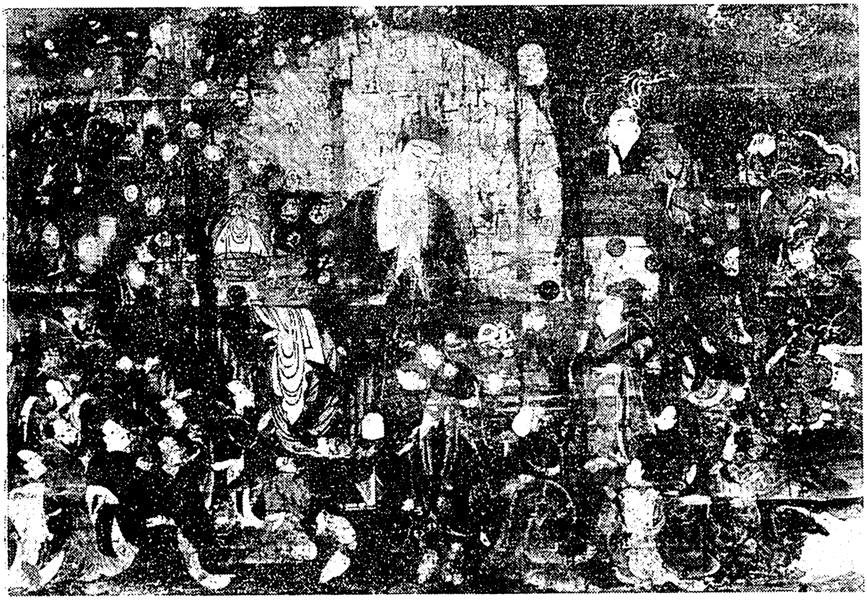
と問うと、

「仏が涅槃に入られると人天ともに嘆き悲しみ、みなの衆の涙が流れて染まり、このような異色となりました」

と答えた。迦葉波は礼拝し、［棺のまわりを］旋繞して讃嘆を盛んに行なった［ところ］、香木は自然に大きく燃えさかった。こういう次第で、如来は寂滅されてから三度棺より出られたわけである。初めは臂を出して(注一)阿難に道路が修理できたかと問われ、次には起きて坐り母に説法され、最後に双足を出して大迦葉波に示されたのである。

注

一 初めは臂を出し　『経律異相』四、現般涅槃五に「如来三たび金棺裏より金色の臂を出し、阿難至れるや、道路を平治し灑掃焼香をなせるやと問わる」とある伝説を指そう。



釈迦金棺出現図（松永記念館蔵）

四・三　仏骨の八分　現足窣堵波の側に窣堵波がある。無憂王が建てたものである。八王(注一)が舎利を分配した処である。前に石柱が建ててあり、その事跡が刻み記してある。仏が涅槃に入られて後、涅畳般那（荼毗）し終わった。八国の王たちは［歩・馬・車・象の］四兵を整えやって来て、直性婆羅門(注二)をやり拘尸［那掲羅］の力士（末羅族、本巻の四・九注三参照）に、

「天界人界の導師［たる如来］がこの国で寂滅されましたので、遠方から舎利の分配を頼みに来ました」

と言わせた。力士は、

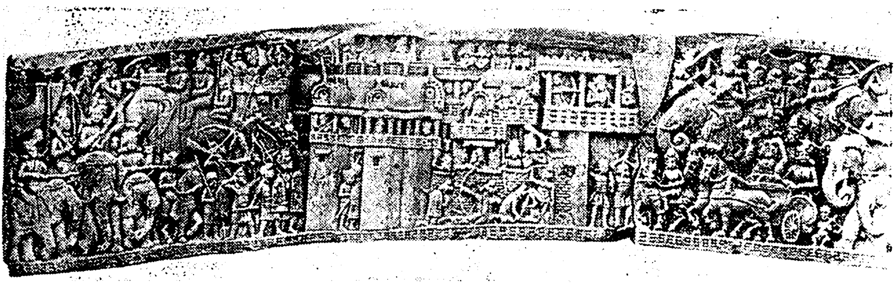
「如来が来臨されましたのは、この［末羅種族の拘尸那掲羅の］土地である。世間のりっぱな導師を失い、衆生の慈父を喪(うしな)いました。如来の舎利は私たちが供養いたしましょう」

と答えた。［王たちは］遠路の来訪も徒労となり結局手に入れることなく、そこで諸大王は辞を低くして求めて許されなかったので、重ねて、

「礼をもって頼んでいるのに従わないならば、私たちの軍隊の威力が及ぶのは遠くはないぞ」

と言った。直性婆羅門は声を高くして、

「よく考えてもごらんなさい。大悲世尊は努めて福善を修め永劫の時間をかけられました。詳しく聞きましたことを思い出してみますに、ここで互いに戦おうとすることは、これは道に適(かな)ったことではありません。今、舎利はここにあります。均等に八つに分け、それぞれが供養し得られるようにすべきです。どうして軍隊を動かすに至るようなことでしょうか」



分舎利の戦争，サーンチー塔門

と言った。力士たちはその言葉どおりにして、すぐさま同量にして八分しようとした。［ところが］帝釈天は王たちに、

「天人にも分配があるべきである。力を恃んで争うことなかれ」

と言い、阿那婆答多竜王（巻一の一参照）・文隣竜王（目支鄰陀竜王、巻八の六・一八参照）・醫羅鉢呾羅竜王（巻三の三・三注二参照）も同様に、

「私たちを残すなかれ。もし力をもってとならば、みなは我が敵ではないぞ」

と相談して来た。直性婆羅門は、

「騒ぎ立てなさるな。いっしょに分配すべきでしょう」

と言い、すぐさま三分した。一は諸天、二は竜衆、三は人間界に留め、八国が［その一を］重ねて分配した。天も竜も人王も、［仏陀の死を］悲しまないものとてはなかった。

注

一　八王　玄奘の文では、事のあった当の拘尸城の他に八国王が仏舎利を要求したように読めるが、諸書を通じて見れば、拘尸城を入れて八国となる。即ち㈠拘尸城の末羅衆、㈡波婆 Pāvā 城の末羅衆、㈢藍摩 Rāma-grāma 邑の拘利 Koli 衆、㈣遮羅頗 Pa. Allakappa城の跋離 Buli 衆、㈤毘留提 Vaiṣṭra-dvīpa 城の婆羅門衆、㈥劫比羅 Kapilavastu 城の釈迦衆、㈦吠舎離 Vaiśālī 城の梨車毗 Licchavi 衆、㈧摩掲陀 Magadha 国の阿闍貰 Ajātaśatru 王の八である。本巻の三・四「畢鉢羅邑の灰炭窣堵波」に見える衆（種族）は遅参したものである。なお諸天諸竜も分配に与った話は、『阿含経』等の『諸経』には見えない［堀：『解説』四八二ページ］が、梁・宝唱等集『経律異相』六、天人竜分舎利起塔一には見え、文章も『記』に甚だ似通う点が多い。

二　直性婆羅門　直性はまた香姓・姓烟とも訳される。Skt. *droṇa*, Pa. *doṇa*（斛量の義）が原語であり、漢訳との関係は未詳（Droṇasama［Rockhill: *The Life of the Buddha*, p.146］)。仏に帰依した婆羅門で、舎利の円満分配の功により分配に使用した瓶を得て塔を立てた（巻七の二・四参照）と言う。舎利八塔・炭塔・瓶塔合わせて十塔、仏教史上の最初の仏塔として有名。

四・一四　羅怙羅の伝説　分舎利窣堵波より西南へ行くこと二百余里で大きな村落に至る。ある婆羅門がいた。土地に並ぶものなき豪族で巨富を有し、［他の諸豪族と］明確に同類ではなかった。学は五明（巻二の一・七参照）を究め、篤く三宝を敬っていた。その住居の側に接して僧坊を建立し、費用を尽くし装飾をこらした。僧たちの道を行くものがあれば、慇懃に留まるよう頼み、心をこめて供養し、或いは一泊から七日までも止めた。その後、設賞迦王が仏教を壊滅し、(注一)僧たちは後を絶った。歳月は速く移り、その婆羅門は常に心より残念に思っていた。散策の途中で、ある一沙門の眉長く白髪で錫杖をついて来るのを目にした。婆羅門は駆けよって出迎え、何所から来られたかと労い、僧坊にお入り願い諸種の供養を供した。朝になると純乳や粥を

進めた。沙門は受けて僅かに一口するや、すぐに鉢を置き沈みこみ長嘆息した。婆羅門は食べものを手に捧げ跪いて、

「大徳（貴僧）は慈悲をもち縁あって幸いにも御来臨いただきましたが、或いは昨夜よくお休みになれなかったのではありませんか。または粥がまずいのではありませんか」

と問うと、沙門は哀れむがごとく、

「私は衆生の福徳が次第に薄くなって行くのを悲しんでいるのです。しかしこの話はまずはさて置き、食事し終わってから話しましょう」

と言った。沙門は食べ終わると衣を整え立ち去ろうとした。婆羅門は、

「先ほどは話すと約束され、今は何も言われません」

と言うと、沙門は、

「私は忘れたのではありません。話すことも容易ではないし、事柄は或いは疑いを招くやもしれませんことです。どうでも聞きたいと思われるならば、簡単にお話ししましょう。私が先ほど嘆息しましたのは、あなたの粥が薄かったからではありません。ここ数百年来、このような味を口にしたこともありません。昔、如来が世にあらせられた時、私は時にお供をして王舎城の竹林精舎で、清流に身を伏せ器物を洗ったり、或いは口を漱ぎ或いは沐浴したりしました。ああ、残念なことには今の純乳でさえも昔の淡水には及びもつきません。これは人天の福徳がなくなり、このようになったのです」

と話すと、婆羅門は、

「とすれば大徳は親しく仏陀を見たてまつったのですか」

と言うのに、沙門は、

「そうです。あなたは聞いたことがありませんか。仏陀の子供の羅怙羅（本巻の二・三参照）と言うもののことを。私こそがそれ（羅怙羅）です。正法を護るために、今なお寂滅に入ってはおりません」

と言った。この言葉を話し終わるや、ふと姿が見えなくなった。婆羅門はそこで［沙門の］宿った部屋を、香を塗り清掃し、像の設え儀礼の厳かさ、その敬いかたはなお在すがごとくにした。

さらに大林中を行くこと五百余里で婆羅痆（原注　女黠反→*nat*。）斯国（原注　旧に波羅奈国と曰う。訛なり。中印度の境）に至る。

注

一　設賞迦王の毀仏　設賞迦 *Śaśāṅka* については巻五の一・三に既出。その廃仏の状況については、巻八の二・四に出る。また、この王の領土の羯羅拏蘇伐剌那国 Karṇa-suvarṇa は巻十の八を参照。この廃仏は玄奘渡印直前のことであり、六一九年にハルシャ王に屈従した。インドにおける廃仏毀仏の概略の様相は、Smith: *Early History of India*, p. 214（一）により知り得る。

大唐西域記　巻第六

大唐西域記 巻第七 五国

三蔵法師玄奘奉 詔訳
大捴持寺沙門辯機撰

婆羅痆(女黠反)斯国　戦主国　吠舎釐国　弗栗恃国　尼波羅国

一 婆羅痆斯国

一・一 概観

婆羅痆斯国は(注一)周囲四千余里ある。国の大都城は西は殑伽河に臨んでおり(注二)、長さ十八、九里、広さ五、六里ある。民家は櫛の歯のごとくならび、住民は盛大に、家ごとに巨万の富を蓄え、部屋ごとに珍しい品物で満ちている。人の性質は温順で、ならいとして学芸に努力することを重んじている。多くは外道を信じ、少数のものが仏法を敬っている。気候は穏和で、農業は盛んである。果樹は枝を交え、茂った草は風になびいている。伽藍は三十余ヵ所、僧徒は三千余人おり、みな小乗の正量部の法を学んでいる(注三)。天祠は百余ヵ所、外道は一万余人おり、みな大自在天を信奉しており、或るものは断髪しており、或るものは髻を高く結う。露形で服を着けぬもの、身に灰を塗るものなど。苦行に精励し、生死の境より出離することを求めている。

大城の中の天祠(注四)は二十ヵ所ある。何層もの台や祠の建物は石を刻み木を飾っている。茂った林はこもごも蔭を作り、清い水は入り交り流れている。鍮石の「大自在」天像は大きさ百尺足らず、その威厳はおごそかで凛凛しく、真に眼前におられるがごとくである。

注

一 婆羅痆斯国　婆羅痆(女黠反 *nat*。)斯 。*b'ua*-。*la*-*nat*。-。*siḙ*: Skt. *bārāṇasī*, *vārāṇasī*, Pa. *bārāṇasī*. 今日のベナレス Benares. この地の古名 Kāśi は今日でも単独に使われたり、或いは Kāśi-Banaras と続けて使われている。『法顕伝』にも「迦尸国波羅㮈城」とある。古代インド十六大国の一で、中インドにおける水陸交通の要衝に当たり、商業貿易の中心地であった。婆羅痆斯の地名は口碑によれば、八、九百年前の当市建設者 Banār 王の名に起源すると言われるが、婆羅門の伝承によれば、当市の東北を流れる Barṇā Nadī と西南の小流 Asī Nala の二河(共にガンジス河に流入する)名を連ねたものに来因するとされる。前巻末の旧訳「波羅奈」はこの前者に当たろうか [Cunningham: *A.G.I.*, 502; Law: *H.G.A.I.*, 94 ff.; do: *Geographical Essays*, I, p.20 ff., 120; 中村:『インド古代史』上二四六ページ; Murray's *Handbook*, p. 70ff. (p. 80, Map of Benares)]。

二 国の大都城は西は殑伽河に臨んでおり　今のベナレスはガンジス河を東にし、その西岸にある。『法顕伝』『慈恩伝』『釈迦方志』『続高僧伝』等の記事によるも、都城が河東に在ったとは考えられないため、里程を考え合わせ前巻末の本文を「復大林中を行き、殑伽河を渡り、五百里にして婆羅痆斯国に至る」の誤脱であるとする説明 [足立:『研究』上五〇七ページ] もある。

三 伽藍は三十余ヵ所……いる　『慈恩伝』三の記事は「伽藍三十余ヵ所、僧二千余人、小乗の説一切有部を学ぶ」と人数・部派を異にしている。

四 大城の中の天祠　『釈迦方志』にこの国の外道のことを記し、「天祠百余、外道万余、多く大自在天根に事う。大城中の天祠二十所、天根の高さ百余尺」とする。玄奘の言う大自在天(湿婆神)とは男根であったようである。なお、当地はヒンドゥー教徒にとって今日も七大霊場の一であり、盛況を極めている。



初転法輪の地，サールナートの遺跡

一・二　阿育王塔と鹿苑　大城の東北、婆羅痆河(注一)の西に窣堵波がある。無憂王が建てたものである。高さ百余尺。前に石柱(注二)が建ててある。碧鮮かなること鏡のごとく、光沢のあること水を凝らしたようで、その中には常に如来の影像が現われている。

婆羅痆河より東北へ行くこと十余里で鹿野伽藍(注三)に至る。区界は八つに分かれ、垣を連ねて周囲に廻らしている。幾層にもした軒、何階にもした閣は、その麗わしき構想を極めたものである。(注四)僧徒は一千五百人、みな小乗の正量部の教えを学んでいる。大きな垣の中に精舎の高さ二百余尺のものがある。上には黄金で彫刻し菴没羅果が作ってある。石で基壇や階段が作ってあり、煉瓦で幾層もの龕（厨子）が作られている。その龕は［建物の］四周を廻らし、その次第（階段）は百をもって数えるほどであり、それぞれみな黄金の仏像が彫ってある。(注五)精舎の中には鍮石の仏像がある。その大きさは如来の身体と等しく、法輪を転ずる（説法）姿勢をしている。

注

一　婆羅痆河　Barṇa 河のこと。『慈恩伝』には婆羅痆斯河に作るが、誤りであろう。

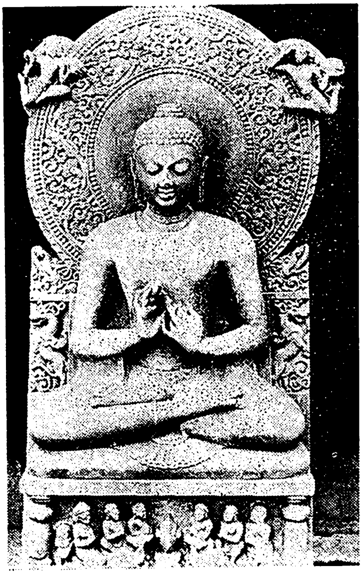
二　阿育王の石柱　今のベナレス市東北の Lat Bhairon に断片になった石柱がある。今は赤く塗られてイスラム教徒の礼拝所の囲いの中にあるが、これが阿育王石柱であることは V.A. Smith により確認されている。一九〇八年の暴動で破壊されたものである [Mookerji: *Asoka*, p.85; Murray's *Handbook*, p.72]。

三　鹿野伽藍　鹿野苑 Skt. *mṛgadāva*, Pa. *migadāya*. は鹿苑・施鹿苑、または仙人住所鹿野苑 Skt. *Ṛsipatna-Mṛgadāva*, Pa. *Isipatna-migadāya* 等異名が多い。今のベナレス北方四マイルの地、サールナート Sārnāth (sāraṅganātha 鹿主の意) である。昔、尼拘律陀が鹿のために施与した所である故にこの名があると言う。今日は Dhāmekh (<Dharma-ikṣa「法眼」?) 塔の外に見るべき大遺構はないが、玄奘の記す二百余尺の大精舎の遺址、仏殿・塔婆・僧院等の跡、優秀な彫刻が多数に発見された。グプタ期仏教美術の一大中心地 [D. R. Sahni and J. Ph.

Vogel: *Catalogue of the Museum of Archaeology at Sārnāth*; B. Majumdar: *A Guide to Sārnāth*』。当地は玄奘当時最も盛況を呈し、十三世紀ごろ回教徒侵入以後廃墟となった。

四 鹿野伽藍の景観 『慈恩伝』には「台観は雲に連なり、長廊は四合す」とある。

五 精舎の景観 『慈恩伝』には「大院の内に精舎あり、高さ百余尺、石階甎甃にして層級は百もて数え、皆黄金の仏像を隠起す」とある。この精舎は当地出土の碑銘 (Lüder's List, No. 1430) により Mūlagandhakuṭī (根本香堂) と言ったことが知られる。『慧超伝』に寺名「達磨斫葛羅」Dharma-cakra 即ち法輪寺と言ったのはここを指すか。この精舎の復原想像図は逸見梅栄:『印度仏教美術考・建築篇』一六一ページに見える。一見 Buddha-gayā 大塔のごときものである。



初転法輪仏像，サールナート出土

一・三 初転法輪の聖地 精舎の西南に石造の窣堵波がある。無憂王が建てたものである。(注一) 基壇は崩れ傾いているが、今も百尺に余るほどである。前に石柱の高さ七十余尺のものが建っている。(注二) 石は玉のような潤いを含み、鏡のように綺麗にものを映す。心をこめて祈念すればいろいろな影像が現われ、[見る人の] 善悪の相も時に現われることがある。如来が正覚を成ぜられ (悟りを開く)、初めて法輪を転じられた処である。その側、遠からざる所に窣堵波がある。阿若憍陳如らが、菩薩が苦行を捨てられたのを見て侍衛するのを止め、ここへやって来て自ら禅定を習した所である。(注三) その傍の窣堵波は五百人の独覚が(注四)同時に涅槃に入った処である。さらに三つの窣堵波がある。過去三仏(注五)の座所および散策された遺跡の所である。

注

一 阿育王塔 精舎西南の阿育王塔とは、今日 Dharmarājika Stūpa (以前は Jagat Singh Stūpa) と言われ、一七九四年に発見されたものである。最初阿育王が建てたものを、後に六回にわたり修理したもので、煉瓦製、径十三・五メートルほどあり、中から石匣に入った大理石の舎利容器が出た [平凡社:『世界考古学大系』八、九五ページ]。

二 阿育王石柱 精舎の西に現在、十八・五メートル、径八十センチの折れた柱がある。もとは高さ四十五・七メートルのものであった。柱頭の四頭の獅子の飾りはサーンチーと同形で、より完全なものである。現在サールナート博物館にある。

三 初転法輪と五人の弟子 これは仏典における最も有名な話の一つで、『雑阿含経』二一、『四分律』三二、『五分律』一五、*Dīgha Nikāya*, I. p. 157, *Mahāvagga*, I. 6. 10. 等に出る。釈迦が尼連禅河畔における六年の苦行も効なきを知り、去って村の女 Sujātā の奉った乳糜を受けたのを見て、浄飯王が釈迦に衛従させた五釈種、憍陳如 Skt. *kauṇḍinya*, Pa. *koṇḍañña* 他四名は釈迦に従うを止め別に修行することとした (本巻の一・一〇参照)。釈迦は成道の後、まずこの五釈種が住する鹿苑に行き最初の説法 (初転法輪) を行なった。いわゆる八正道・四諦の理で、憍陳如がまず悟道に達し、その後他の四人も順次に悟入し釈尊の最初の弟子となる。なお、阿若憍陳如 Skt. *ājñāta-kauṇḍinya*, Pa. *añña-koṇḍañña* (*ājñāta* は「普く知れる」の意で開悟したものの称) は旧訳の語であ

り、新訳では阿慎若憍陳那・阿若多憍陳那など。

四 独覚 Skt. *pratyekabuddha* の訳。辟支仏。師なくして自ら修行し独悟するものの称。また他の縁に由り悟入する故、縁覚とも。

五 過去三仏 過去四仏の中、釈尊以前の三仏、即ち拘留孫仏・拘那含牟尼仏・迦葉波仏を指す。

一・四 慈氏菩薩受記塔 (Dhāmek Stūpa) 三仏経行［窣堵波］の側に窣堵波がある。梅呾麗耶（原注 唐に慈と言う。即ち姓なり。旧に弥勒と曰う。訛略なり）菩薩(注一)が仏となる予言を受けられた処である。昔、如来が王舎城の鷲峯山で苾芻たちに、

「次に来たるべき世においてこの贍部洲が土地平和で正しく、人寿八万歳の時に、婆羅門の子で慈氏と言うものが出て、その身体は真金色に光明はあたりを照らし、出家して正覚を成じ、広く衆生のために三会の説法(注二)を行なうであろう。その済度されるものは、みな私の遺法を受けつぎ福善を衆生の中に植えるものである。その人々は三宝を一心に尊敬し、在家・出家、戒を持するもの・戒を犯すもの［を問わず］、みな教え導きを受け解脱を証するであろう。三会の説法の中で、まず私の遺法を受けつぐ人々が済度され、その後に縁あり私たちと善行を共にする人々が教化されよう(注三)」

と告げられた。この時、慈氏菩薩は仏のこの説法を聞き座席から起ち上がり、仏に、

「願わくば私は今お話しあった慈氏世尊となりたいと思います」

と申し上げると、如来は、

「汝が言うように、必ずこの［成仏の］果を證するであろう。今まで私がした説法は、汝を教化するための次第であったのだ」

と言われた(注四)。

注

一 梅呾麗耶（……）菩薩 梅呾麗耶 °muậi-tât°-liei°-°ja: Skt. *maitreya, maitraka, maitriya, maitrīya*; Pa. *metteya* [Edgerton: BHSD, 440 a]. 弥勒 **mjer-lək* → °*mjię-lək*° は恐らくかつては *maitraka* の俗音に対したものであろうか。釈尊に次いで成仏する菩薩としての意で、当来の菩薩、一生補処の菩薩と言われる。受記の場所を鹿野苑とするのは『長阿含経』六、『大宝積経』四二等であるが、玄奘が本文に「王舎城の鷲峯山」と場所を明示しながら、婆羅痆斯国の条下に出しているのは解し難い。

二 三会の説法 三度の説法の意で、弥勒菩薩三会説法とは、弥勒菩薩が成仏の時に、華林園中の竜華樹下にて三度の法会を開き、一切の衆生を済度すると言う。

三 三会の説法の中で……教化されよう 弥勒衆生済度の順序については、『法顕伝』師子国の条に、「弥勒出世して初めて法輪を転ずるの時、まず釈迦遺法の弟子なる出家の人、および三帰五戒八斎法を受けて三宝を供養せし者を度し、第二・第三次に有縁の者を度す」とある。

四 この弥勒菩薩受記塔が現在する Dhāmekh (Dharma-ikṣa 法眼) 塔であると言う。高さ百余尺、平面は円形で塔身の上層は磚築、下層は石造で周壁に細麗な模様を刻している。当地における現存遺構中最大のものである。

一・五 護明菩薩 慈氏菩薩受記［窣堵波］の西に窣堵波がある。釈迦菩薩が記（予言）を受けられた処である。［過去四仏の現在］賢劫中の人寿二万歳の時に、迦葉波仏が世に出現され、妙法輪を転じて（説法して）衆生を開導され、護明(注一)菩薩に記を授けられ、

「この菩薩は来たるべき世の衆生の寿命が百歳の時に、きっと成仏することができ、釈迦牟尼と号するであろう」

と言われた。

注

一 護明菩薩 護明 Skt. *jyotipāla*, Pa. *jotipāla*. 喜護。*Mahāvastu*, I. p. 319 f. によれば、鞞婆陵耆 Skt. *verudiṅga*, Pa. *vehaliṅga* 婆羅門村に Jyotipāla なる摩納婆あり、迦葉波仏の奉仕者 Ghaṭikāra に誘われて帰仏出家し、迦葉波仏より成道の記を受く、即ち今の釈尊なりと。『中阿含』一二（鞞婆陵耆経）、*Majjhima*, 81 (Ghaṭikāra)、『興起行経』下、『有部破僧事』一一等参照。ただしこれらには受記のことは言わない。なお『仏本行集経』五—七に出づる護明菩薩の物語は今の護明とは別である［高田：『国訳慈恩伝』八一ページ（六九）］と。

一・六 四仏の遺跡と三清池 釈迦菩薩受記［窣堵波］の南、遠からざる所に過去四仏の散策された遺跡がある。長さ五十余歩、高さ七尺ばかり、青石を積み上げ、上に如来が散策される像を作ってある。像形は優れ、威厳はおごそかに、その肉髻の上には髪の毛が突き出ている。不思議な姿は隠れもなく、霊験はあらたかである。その［鹿野伽藍の］垣の中には聖跡が非常に多く、精舎や窣堵波は数百余ヵ所あり、概略二、三を挙げたのみで、詳しく述べることは難しい。

伽藍の垣の西に一つの清らかな池がある。周囲二百余歩。如来がかつて中で沐浴された。その西に大きな池がある。周囲百八十歩。如来がかつて中で器具を洗われた。その北に池がある。周囲百五十歩。如来がかつて中で衣を濯がれた。この三つの池にはどれも竜が住んでいる。その水は深くもあり、その味は甘くもあり、清らかに汚れなく、常に増減することはない。慢心あるものがこの池で濯ぎ物をするならば、金毗羅獣(注一)が害を与えることが多く、もし深く敬意をもってするならば、水を汲んでも何の心配もない。衣を濯いだ池の側の大きな四角い石の上に如来の袈裟の跡がある。その文様は明瞭で、彫りつけたようにはっきりしている。信者たちが常に来て供養をしている。外道や悪人が軽々しくこの石を踏むと、池中の竜王はすぐさま風雨をまきおこす。(注二)

注

一 金毗羅獣 金毗羅 *kjəm-b'ji-lâ*: Skt. *kumbhīra*. 『玄応音義』五に「蛟竜 梵に宮毗羅と言う。音は交。鱗あるを蛟竜と曰う」とある。「金毗羅摩竭魚夜叉大将」の語もあり、恐らく鰐魚の神格化したものを言うのであろう。

二 この釈尊ゆかりの三つの池は、今の Naya, Sarang, Candra の三池であろう。

一・七 六牙象王本生譚(注一) 池の側、遠からざる所に窣堵波がある。如来が菩薩行を修していられる時に、六牙の象王となっていられた。猟師はその牙を手に入れ役立てようとして、詐り袈裟を着し［僧の姿をし］、弧を彎いて象を捕えようとした。象王は袈裟を尊敬するがまま牙を捩り［抜いて］与えた所である。

注

一 六牙象王本生譚は、*Jātaka*, No. 514, Chaddanta, 『六度集経』四、『雑譬喩経』上、『雑宝蔵経』二、『大荘厳論経』一四、『大智度論』一二、『摩訶僧祇律』二、『有部毗奈耶薬事』一五等に出る。仏教美術の題材としても有名で数多くの彫刻がある［岩波写真文庫『仏陀の生涯』六、七ページ：小野玄妙：『仏教美術講話』二〇六—一一二ページ］。

一・八 雉本生譚(注一) 捩牙［窣堵波］の側、遠からざる所に窣堵波がある。如来が菩薩行を修していられる時に、世に礼節がないことを哀

れまれ、教示するために鳥の姿となり、かの［本生譚に出る］獼猴や白象（六牙象王）と、ここで誰が第一番に尼拘律樹を見たかと問い、それぞれが［自分が初めて見たころの樹の大きさなどの］事の次第を話し、それに従い長幼［の序列］を編成したところ、その教化は次第に遠近に及び、人も上下の節度を知ることとなり、出家・在家を問わず、みな帰依している。

注

一　雉本生譚は、*Jātaka*, No. 37, Tittira; *Cullavagga*, VI, 6 (Vinaya, II, p.161)、『四分律』五〇、『五分律』一七、『十誦律』三四、『摩訶僧祇律』二七、『大智度論』一二等に見える。

一・九　鹿王本生譚(注一)　その（雉王窣堵波）側、遠からざる大林中に窣堵波がある。如来が昔、提婆達多と共に鹿の王となり事件を処理した処である。昔、この大林の中に二群の鹿がいた。それぞれ五百余頭いた。当時、この国王は山野に狩猟をした。菩薩の鹿王は王の前に進み出て、

「大王は中原で狩猟をなされ火を放ち矢を飛ばされます。私たちの仲間は命が今日にも尽きて、日ならず腐りお膳に上せるものはなくなるでしょう。どうか次第を定めて一日に一匹の鹿を送り届けるようにお願いします。［そうすれば］王には新鮮な料理の膳があり、私たちは旦夕に迫った命を延ばすことができます」

と言った。王はその言を善しとし、乗り物を引き返して帰った。二群の鹿は交代に［一匹ずつの］命を送り届けた。提婆［鹿王］の群中に懐妊している鹿がおり、順番で死ぬことになった。そこでその王に、

「私の身体は死ぬべき順番ではありますが、［おなかの］子はまだ順には当たっておりません」

と申し上げると、鹿王は怒って、

「誰が命を大事にしないものがあろうか［汝に代わるものがあろうはずはない］」

と言った。雌鹿は悲嘆して、

「我が王は仁慈の方ではない。日ならずしてきっと死なれることであろう」

と言い、そこで緊急事態を菩薩の鹿王に告げた。鹿王は、

「何と悲しいものであるか、慈母の心と言うものは。恩はまだ形をなさない子にまでも及ぶとは。私が今、汝に代わろう」

と言い、そのまま王の門の所に行った。道行く人は声を伝えて大声で、

「あの大きな鹿王が今こちらへ来て町に入って来る」

と叫んだ。都の人は上の人も下の人も馳せより見ないものはなかった。王は耳にするや嘘であろうと思ったが、門番が王にその由を申し上げたので始めて本当にした。王は、

「鹿王はどうして突然来たのか」

と言うと、鹿王は、

「雌鹿が死ぬ番になりましたが、胎の子はまだ産まれません。心に不愍を忍ぶことができず、我が身をもって代えることにしました」

と言った。王はこの言葉を聞き、感嘆して、

「私は人身でありながら鹿［のような心］だ。あなたは鹿身でありながら［本当の］人である」

と言った。そこで悉く鹿を解き放ち、二度と命を送り届けさせることをせず、直ちにその林を鹿たちが住む薮林とし、これに因んで施

鹿林と称した。鹿野の称号はここから起こったのである。

注

一　この本生譚は、*Jataka*, No. 12, Nigrodha-miga,『六度集経』三、『大荘厳論経』一四、*Mahāvastu*, I. p.359;『雑譬喩経』、『出曜経』一四等に出る。この話も仏教美術の好資料としてバールフット、アジャンター等の彫刻・絵画に使われている。

一・一〇　五人の釈種（迎仏塔）　伽藍の西南二、三里に窣堵波の高さ三百余尺のものがある。基壇の大きさは広く高く、装飾も変わった珍しいものである。［基壇の］上に層龕はなくて直ちに覆鉢（塔身）が置かれ、表柱（傘竿）は建てているけれども輪鐸（相輪とそれにつける鈴か）はない。その側に小窣堵波がある。阿若憍陳如ら五人が約束を棄てて仏を奉迎した処である。初め薩婆曷刺他悉陀（原注　唐に一切義成と言う。旧に悉達多と曰う。訛なり）太子[注一]が踰城［出家］の後、山に棲み谷に隠れ、一身を忘れて法に身を挺した。浄飯王はそこで家族三人、母方の伯父二人[注二]に命じて、

「我が子の一切義成は家を捨て修行し、仲間もなく山野を行き、ただ一人森林にいる。故に汝らに、［太子に］随い［太子が］止まっている所を承知しているように命ずる。内の関係では叔父・伯舅（母方の伯父）であり、外の関係では君であり臣である。太子の動静については十分にその進退を知っているべきである」

　と言った。五人は命を受けて互いに見守りながら護衛し、これを機に努力して出離（解脱）を心に期そうとした。常に互いに、

「一体、修道と言うものは、苦しんで證るものか、楽に證るものであるのか」

と話し合っていた。二人のものは、

「安楽が道である」

と言い、三人のものは、

「苦行するのが道である」

と言い、二人の組と三人の組は言い争い、なおはっきりとした点はなかった。ところで太子は至上の真理を思惟し、苦行する外道を屈伏するために粥・飯を節食して身を支えていた。かの二人の組のものはこれを見て、

「太子の行なっているのは真実の法ではない。一体、道と言うものは楽しんで證るものであるのに、今太子は苦行をしているのは我が党のものではない」

　と言い、太子を捨てて遠く遁れ證を得ようと考えた。太子は六年の苦行をしたけれども、なお菩提（悟り）を證することなく、［ここに］苦行は真の法ではないことを考え、［村の女より］乳粥を受けて[注三]［体力を整え］、證を開こうと思った。かの三人の組のものは、これを耳にし落胆して、

「成功は目前にあるのに、今やめてしまった。六年の苦行も一朝にして功を捨ててしまった」

　と言った。そこで連れだち二人の組のものを探し求めた。お互いに出会い座を正し論議し、こもごも、

「昔、太子の一切義成は王宮を出て荒谷に行き、りっぱな服を脱ぎ鹿皮を着て、精励勤勉し、志を一筋に苦行し、甚深の妙法を求め無上の證果を得ようとしていた。ところが今は牧女の乳粥を受け、法の道を破り志を挫けさせてしまった。私たちはよく分かった。太子は何もできない人であることが」

　と［三人の組のものは］言うと、かの二人の組のものは、

「あなたがたは何と分かることが遅かったことか。かれこそは失敗者です。そもそも深宮に育ち高い地位に慣れており、志を静かにし居所を山林の中の遠くにすることのできない人である。転輪王の位を棄てて鄙賤(ひせん)の人の行ないをするなどと言うことが、どうして考えられようか。言えば憂愁を増すだけのことである」

と言った。菩薩は尼連禅(ニランジャナ)(注四)河に沐浴し、菩提樹下に坐して等正覚(さとり)(*samyak-saṃbodhi* 一切法を覚知する)を完成し、天人師(*Devamanuṣya-śāstṛ* 天と人との師)と号した。身を動かすことなく黙然とまず済度すべきものを考察され、

「かの鬱頭藍子(ウドラカラーマプトラ)は非想定を證した(注五)ものなれば、この妙法を受けつぐに十分であろう」

と言うと、空中の諸天は太子の声に応じて、

「鬱頭藍子は命終してから今にすでに七日を経ました」

と知らせた。如来は、

「どうして私に会い妙法に耳をかすことをせず、遠くに変化死没したのか」

と嘆惜された。重ねて世界を観察し人を探し求められると阿藍迦藍(あらん)がいた。無所有処定を得ている(注六)人で、至上の真理を授くべき人であった。すると諸天はまたもや、

「命終してすでに五日になります」

と言った。如来は再び嘆息しその薄幸を愍(あわ)れんだ。またもや改めて誰が教法を受けつぐべきかを明察されると、唯、施鹿林中にいる五人のものだけがまず誘導するに足るものであった。如来はそこで菩提樹下より起ち上がり鹿野園に行かれた。威儀はもの静かに神々しい光はあたりに輝き、白毫(びゃくごう)は玉のような色彩を含み身体は真金色であった。静かに前進しかの五人を導こうとされた。かの五人は遙かに如来を眼にし、互いに、

「一切義成だ、あのやって来るものは。歳月は速くも過ぎ去り、悟脱を證することができず退散を決心したので私たちを尋ねて来たのだ。みな黙っていなさい。起ち上がり礼をもって迎えるな」

と言い合った。如来が近づくにつれ、威厳は物を動かすほどで、五人は制止も忘れ敬礼し出迎え挨拶し、つきそうこと規則どおりであった。如来は循々(じゅんじゅん)と指導し五人に至妙の道理を示され、雨安居(うあんご)(注七)が終わるころ、五人は悟りを得た(注八)。

注

一　薩婆曷剌他悉陀(……)太子　薩婆曷剌他悉陀 *sât˳-˳b'uâ-ɣat˳-lât˳-˳t'â-siĕt˳-˳d'â*: Skt. *sarvārtha-siddha*. 一切義成は訳語。旧訳の悉達多は Skt. *siddhārtha* に対す。

二　家族三人、母方の伯父二人　五人については経論に異同がある。『仏祖統記』二には、憍陳如(コーンディニャ)(此に火器と云う) Kauṇḍinya, 十力迦葉(カーシャパ)(亦婆敷と名づく) Daśabala Kāśyapa の二人が母方のもので楽行説。頞鞞(アシュヴァジット)(此に馬勝と云う) Aśvajit, 跋提(此に小賢と云う) Bhadrika, 摩訶男(マハーナーマ) 倶利(クリ)(斛飯王の子) Mahānāma (-kuli ?) の三人が父方のもので苦行説をとった。この内、頞鞞は劫比(かぴ)羅城の臣下である。

三　[村の女より] 乳粥を受けて　牧牛の女 Sujātā と言うもの。漢訳仏典には多く難陀(歓喜)とする。なお乳粥と訳した原語は乳糜 pāyasa で、乳で米を煮た粥である。

四　尼連禅河　巻九の一に尼連禅那河とあるのが正しい。尼連禅那 *˳ńi-˳li-än-źjän°-˳nâ*: **nirañjāna*, Skt. *nirañjana*, Pa. *nerañjanā*. 仏陀伽耶近辺を流れ、Phalgu 河に流入する。

五　鬱頭藍子は非想定を證した　鬱頭藍は Skt. *udrakarāmaputra* の旧訳。玄奘は『阿毘達磨順正理論』六六に嗢達洛迦曷邏摩と表記し、玄応はこれに極喜と訳語をつけている[『玄応音義』二五]。釈迦が出家後、一時この人について修行した。非想定とは 詳(つまびら)かには非想非非想処定と言う。身は欲界にありながら心に無色界の定心を得るを定無色と名づけ、無色

界に生ずるを生無色と言う。この定に四種あり、四無色定と言う。(一)空無辺処定（空処定とも）は空間は無限大なりと思惟する定、(二)識無辺処定（識処定とも）は識は無限大なりと思惟する定、(三)無所有処定（少処定とも）は何ものもなしと思惟する定、(四)非想非非想処定とは麁想なければ非想と言い、細想なければ非非想と名づけるが、ほとんど無想に近い定であり、行者は愛楽すべきものもなく、清浄無為の状態である。ここに言う欝頭藍子はこの第四の定にあった人である。釈迦がこの仙人に教えを受けたときの問答は、『仏本行集経』二二答羅摩子品に見える。また『慧琳音義』二六に「欝頭藍弗　此に獺戯子と云う。坐ながらにして非想定を得、五神通を得て王宮に飛び入り、遂に通定を失い、途歩もて山に帰る」と見える。

六　阿藍迦藍……無所有処定を得ていた　阿藍迦藍は旧訳の語。玄奘は『大般若経』五九九に阿邏荼迦邏摩 Ārāḍa-kālāma (Pa. Āḷāra-kālāma) とする。釈迦が道を求めて最初についた外道の仙人で、無所有処定を真の悟りと思いついたが、釈迦は真の悟りに非ざるを知り、去って前記の欝頭藍子を訪ねた（『因果経』三、『修行本起経』下などは阿蘭と迦藍との二人とする）。

七　雨安居　巻二の一・四参照。

八　この五人の釈種が釈尊を出迎えた場所の窣堵波と見なされるものは、今の鹿野苑の入口手前、道路の左側にある丘陵のような遺址であると言う。この小丘は三層の方形壇があるため古くは Chaukhandi（四角な丘と言う意）と称されたが、一五八八年にアクバル大帝がこの丘の上に父の Humayun のために建てた八角塔があるから、それ以後 Humayun の塔と呼ばれている。この八角塔の内部にはカニンガムが原塔調査のために発掘した深坑がある。ここで得た石彫の弥勒・観音の二菩薩立像はここの博物館にある。

一・二　救命池の伝説　施鹿林より東へ行くこと二、三里で窣堵波に至る。傍に涸れ池がある。周囲八十余歩。一に救命［池］と名づく。また烈士［池］とも謂う。これを先達の話に聞けば次のとおりである。数百年前に一人の隠士がいた。この池の側に廬を結び世間と交渉を絶ち、博く技術を練習し神通の秘理を究め、瓦礫を宝にしたり、人畜の形を変えることができた。唯、まだ風雲を操御し、仙人の乗り物に陪乗することだけはできなかった。図を閲覧し古えを研究して一層仙術を会得することに努めた。その術書に、

「夫れ神仙と言うものは長生の術である。学習しようと思うものはまずその志を確立し、壇場の周囲一丈余のものを建築し、烈士の勇武顕著なるものに命じ、長刀を手にし壇隅に立たせ、息を殺し言葉を出すことなく、夕方より明け方に至らせる。仙術を求めるものは壇の中ほどに坐し、手には長刀を構え口には神咒を誦し、視力を使わず聴力を使わずにいる。さすれば、明け方には登仙して手にする利刀は変じて宝剣となり、虚を淩ぎ空を履み、諸仙人に王となり、執る所の剣で指図し残らず服従することとなり、衰えることなくたゆることなく、病むことなく死することなからん」

とあった。この人は早や仙術を会得したので、出かけて行って烈士を訪ね求めた。深し求めること何年か、なお心願に諧うものはなかった。その後城中で泣き号びながら道をうろついている人に出会った。隠士はその人相を観て非常に喜び、直ぐさま、

「どうしてこんなに悲しんでいるのか」

と慰めると、

「私は貧乏で力仕事により生活していました。主人に見知られて、特に深く信用され、満五年を期として手厚い賞与をされることになっていました。そこで苦労を忍び困難を忘れて働き、五年がやっと回って来ることになっていました所、一朝の過失で笞刑の辱しめは受けるし、得るものもなくなってしまいました。これが心の重荷になっていますが、悲しんだとて誰が哀れんでくれましょう」

と答えた。隠士はいっしょに草廬にやってくるように言い、術の力で御馳走を作った。池に水浴させ新しい衣服を着せ、さらに五百金の銭を贈って、

「なくなったらまた来て求めなさい。どうか忘れないように」

と言った。この時より以後、何回か多額の贈り物をし、人知れない陰徳を行ないその人の心を感激させた。烈士はたびたび命をもかけて知己に報いたいと申し出た。隠士は、

「私は烈士を求めて永い歳月が経ちますが、幸いにして出会えました。世に珍しい顔立ちはまさに図のとおりです。他に仔細はありません。どうか唯の一晩だけ声を出さないように願いたい」

と言うと、烈士は、

「死すらもなおいといません。ただ息を殺すぐらいのことは何ほどのことがありましょう」

と答えた。そこで壇場を設け仙法を受け、指示のとおりに事を行なった。坐して日の暮れるを待ち、日が暮れてから後、それぞれその任務を行ない、隠士は神咒を誦し、烈士は利刀を構えた。もう夜が明けようとする時、突然［烈士は］叫び声をあげた。その瞬間空から火が降り、煙と炎は雲のごとく立ち昇った。隠士はす早くこの人を引っぱり池に入って難を避けた。それから、

「あなたに声を出さないよう誡めたのに、どうして叫び声をあげたのか」

と尋ねると、烈士は、

「命を受けた後、夜分になるとぼーっとして夢のようになり、変わったことが次々と起こりました。見るともと仕えていた主人が親ら来て謝りましたが、［あなたから受けた］厚恩に感じ言葉を口にしないよう辛えました。その主人は激怒するまま私は殺されてしまいました。［此土より彼土に至る中間の］中陰の身を受け、［自らの］屍を見て嘆惜はしますものの、なおこれから後幾世にわたっても口をきかずに厚徳に報いようと願っていました。それから生を南印度の大婆羅門の家に寄せ、受胎・出産とさまざまに苦難を経ましたが、恩を受け徳を受けたことを思い、一度として声を出したことはありませんでした。学業を受け加冠元服し結婚し、親を亡くし子を儲けましたが、常に前恩を思い出し辛抱して物を言いませんでした。親戚一門のものはみな変わった男だと見ていました。年が六十を過ぎること五年の時、私の妻は、

『あなたは口をきくことができるのでしょう。もし口をきかないならば、あなたの子を殺しましょう』

と言いかけました。私、その時、早や前生から時間もたったことを思い、老衰して唯この子だけがあることを自ら顧みました。そこで妻が子を殺さないように止めました。するとこの声を口にしてしまったのです」

と言った。隠士は、

「私が間違っていたのだ。これは魔物に魅入られていたからこそだ」

と言った。烈士は恩に感じ、事の成就しなかったことを悲しみ、憤って死んでしまった。火災の難を免れたが故に救命［池］と言い、恩に感じて死んだのでまた烈士池とも言うのである。

一・三　兎王本生譚（注二）　烈士池の西に三匹の獣の窣堵波がある。如来が菩薩行を修しておられた時に身体を焼かれた処である。劫初（この世の初まり）のころ、この林野に狐・兎・猨がおり、異類ながら仲良くしていた。その折、帝釈天が菩薩行を修しているものを試験しようと思われ、地上に降り身を変え一人の老夫になられ、三匹の獣に、

「あなた方、二、三のものは元気かね。心配なことはないかね」
と尋ねられると、三匹の獣は、
「豊かな草の中を走りまわり、茂った林の中で遊んでいます。異類のものも仲良くし、安穏でもあり楽しくもあります」
と答えた。老夫は、
「あなた方、二、三の方の情けも細やかに心もぴったりしていられる話を聞き、私の老衰をも意にかけず、ことさらにこのように遠く訪ねて来ました。私は今、腹が減っていますが、何か食物をください」
と言うと、［獣たちは、］
「暫くお待ちください。私たちが自分で行って探して来ましょう」
と言った。そこで［三匹は］心を合わせ無心にそれぞれ道を別にして探し求めた。狐は河辺に沿って行き一匹の新鮮な鯉を口にくわえ、猨は林の樹に昇り珍しい花や果を採り、いっしょにやって来て、共に老夫に進めた。唯兎だけは手ぶらで還って来て、あたりを跳びはね遊んでいた。老夫は、
「私から見ますと、あなた方はまだ本当に仲良くはありません。猨と狐はそれぞれ十分に心使いをしておりますが、唯兎だけは手ぶらで還って来て、かれだけが何の贈り物もしません。このことから言っても、私の言葉の当たっていることが分かりましょう」
と言った。兎は自分に対する悪口を聞き、狐と猨に、
「たくさん薪木を集めてください。今しようと思うことがあります」
と言った。狐と猨は走って行き、草をくわえ木を引っぱって来た。その草木がうず高くなり、激しい炎がまっ盛りになろうとすると、兎は、
「御老人、私の身体は能もなく、探し求めるものも手に入れ難い状況です。どうか私のこの小さな体で一度の食事にお当てください」
と言い、言い終わるや火に飛び込み、すぐに死んでしまった。その時、老夫は帝釈天の体に復し、薪木を取り除き亡骸を収容し、暫しの間嘆息されて、狐と猨に、
「一途にどうしてここまで思い詰めたものか。私はその心根に打たれました。この事跡を泯さないよう、兎を月輪の中に残しておき、後世に伝えましょう」
と言った。それで印度ではみなの人は、月の中の兎はこのことから以後あるのだと言っている。後世の人がここに窣堵波を建てたのである。

ここから殑伽河の流れに順い、東へ行くこと三百余里で戦主国（原注　中印度の境）に至る。

注

一　兎王本生譚　この話は、Jātaka, No. 316, Sasa; *Cariyāpiṭaka*, 10; *Avadāna-śataka*, 37; *Jātakamālā*, 6;『撰集百因縁経』三八、『菩薩本縁経』六、『生経』三一、『旧雑譬喩経』四五、『大智度論』三三、『雑宝蔵経』一一、『菩薩本生鬘論』六等に出ている。諸経の間に内容の広略の差はあるが、大体似た話の筋である。唯、月輪中に兎の姿があると言う話は、支那所伝書中『西域記』以外にはなく、『記』が最もよく印度古譚の旧形を伝えていると言える［堀：『解説』五一三ページ］。なおこの本生譚を題材にした図象の断片が南インド Nāgārjuni Koṇḍa から出ている［*Archaeological Survey of India, Annual Report*, 1929-30, pl. xxxvii］。

二　戦主国

二・一　概観

戦主国（注一）は周囲二千余里ある。都城は殑伽河に臨み、

周囲十余里ある。住民は安楽に、邑里は相接して隣りしている。土地は肥沃で、農業はそれぞれの時期に行なっている。気候は温和、風俗は純朴である。人の性質は激しく、[宗教は]邪正兼ねて信仰している。伽藍は十余ヵ所、僧徒は千人足らず、そろってみな小乗の教えに従い学習している。天祠は二十、異道の人々が雑居している。

注

一　戦主国　この国名は意訳語である。原語を湿婆神の称号 Yuddhapati なりと推定する説 [Watters : *On Y. Ch.*, II. 59] もあるが、Garjapatipura, Garjanapati が聞こえているようである [Cunningham : *A.G.I.*, p.502; Law : *H.G.A.I.*, p.78]。ベナレスの東方五十マイルにある今の Ghāzipur が主都に当たる。現在名は「戦」の意をもつ Garjan に来由するイスラム化した名称である。

二・二　仏舎利塔と不穿耳寺　大城の西北にある伽藍中に窣堵波がある。無憂王が建てたものである。印度記(注一)にはこの中に如来の舎利が一斗あると言っている。昔、世尊がある時ここで七日の間、天人衆のために妙法を説法された所である。その側には過去三仏の座所および散策された遺跡の処がある。これに隣りしてさらに慈氏菩薩の像がある。形は小さいけれども威光はたかく、照鑒は人知れず通じ奇跡がまま起こる。

大城より東へ行くこと二百余里で、阿避陀羯刺拏僧伽藍（原注　唐に不穿耳と言う）(注二)に至る。周囲の垣根は広くはないが、彫刻した飾りは甚だ巧妙である。咲く花と池の水とはお互いに影を交え、台や閣は甍を連ねている。僧徒は穏和で、衆徒の礼儀も長幼の秩序がある。先達の話によれば、昔、大雪山の北の覩貨邏国（巻一の二〇・三参照）に音楽を学ぶ沙門があり、二、三の同志と経文を誦読する余暇に常にお互いに、

「微妙な理論は奥深く、言葉で極め尽くすことのできるものではない。[一方印度における]聖跡は至って昭らかであり、自らの足で履み尋ねることができます。親友と相談し聖跡を親しく参拝いたしましょう」

と言い合った。そこで二、三の友人と錫を杖つき共に周遊に出かけた。印度につき諸伽藍に身を寄せたところ、かれらが辺鄙の地の人であることを軽んじ、宿泊させるものとてはなかった。外は風露の困難に迫られ、内は口腹の飢餓に悩まされ、顔色も疲れ悴れ、姿・形も痩せ衰えてしまった。ちょうどその折、この国の王が近郊に遊びに出かけていたが、他国からの客僧たちを見て訝しく思い、

「何所の乞士（比丘のこと）か。何所から来たのか。耳も[印度風の耳飾りをつける穴を]穿っていないし、衣も汚れ破れている」

と問うと、沙門は答えて、

「私たちは覩貨邏国の人であります。恭しんで仏の遺教を承けつぎ世俗の汚塵を離れ身を清くし、同じ志の友と連れだち聖跡を参拝に来ました。残念なことには我が身の福徳薄く、人々はみな同じように取り合ってくれませず、印度の沙門は旅人を顧みようともしません。本国に帰ろうとは思いますが、巡礼はまだ廻り終わってはおらず、どんなに苦しい目に迫られようとも、心願を遂げて後已むと考えております」

と言った。王はその話を聞いて気の毒な思いを増し、この勝地に伽藍を建立し、白い氈に題字を書き、勅による規制を作り、

「我思うに、尊位は世人の上に居り、貴は人間界を極めているが、これはみな三宝の御加護によるものである。すでに人王となり、仏の御命令を受けている。凡そ染衣の僧は私が布施すべきである。[そこで]

この伽藍を建てて旅僧を招待することとする。これより以後は諸の耳を穿てる「印度の」僧は、我がこの伽藍に止宿する事を得ず(注三)」とした。この事跡に因んでこの寺の名としたのである。

注

一　印度記　諸書多く「印度の古伝に」と訳するが、『印度記』という書名に解するもの [Beal : *Records*, II. p.61 (50)] もある。このような書名をもつものが伝存するわけでもなく、そのまま掲出した。

二　阿避陀羯刺拏僧伽藍（……）　阿避陀羯刺拏　。*'a-b'i̯ie*°.。*d'â-ki̯at*。*-lât*。.。*ńa* : Skt. *aviddha-karṇa.* 貫かれざる耳の意で「不穿耳」に当たる。

三　不穿耳寺の比定　距離と方向から見てこの寺の所在地を現在のガンジス河畔の Baliya, Ballia (Ghāzipur の東約三十三マイル) の近辺にありとし、Ballia の東一マイルの小村 Bikapur (<Bikanpur, Bidkarnpur <Aviddha-karṇapura) を当てる [Cunningham : *A.G.I.*, 503]。

二・三　摩訶娑羅と曠野鬼

阿避陀羯刺拏伽藍より東南へ行くこと百余里、南して殑伽河を渡り摩訶娑羅邑(注一)に至る。[この邑の人は] みな婆羅門種であり、仏法を遵奉していない。しかし、沙門を見ればまず修めている学業につき質問し、強識の人であることが分かると深く尊敬する。

殑伽河の北に那羅延天祠(注二)がある。幾階もの閣・何層もの台はその美麗な装飾を盛んに施し、諸天の像は石を刻んで作ってあり、細工は人工の極みを尽くし霊験は謀り知ることができない。

那羅延天祠より東へ行くこと三十余里の所に窣堵波がある。無憂王が建てたものである(注三)。大半は崩れ落ちてしまっている。前に石柱の高さ二丈に余るものが建ててあり、[柱の] 上には師子の像が作られ、鬼を降伏させた事跡が刻み記してある。昔、ここに曠野鬼(注四)がおり、大きな威力を恃みにして人の血肉を食い、生き物に害をし妖怪の極をほしいままにしていた。如来は衆生がそれぞれの死を全うすることができないことを愍れみ、神通力で鬼たちを教化し、[三宝に] 帰依する尊敬の念で導き、不殺生戒で謹むようにされた。鬼たちは仏の教えを受け、教えを奉じて振舞った。そこで石を持ち上げて来て仏に安坐されるようお願いし、正法を聞き心にとどめて護持したいと思った。その時より以後、信仰のない輩が、鬼が置いた石座を力を合わせて動か



曠野鬼の物語，サーリ・バーロル出土

そうと競うことがあるが、ややもすると千をもって数えるほどの人数をもってしても動かすことはできない。茂った林に清い池はその［窣堵波の］左右を取りまき、人のその側に行くもので心に恐懼の念を懐かないものはない。

伏鬼［窣堵波］の側、遠からざる所に幾つかの伽藍がある。ほとんど崩れ傾いているが、なお僧徒がいる。みな大乗の教法に従い学習している。

注

一　摩訶娑羅邑　摩訶娑羅 ₒmuâ-ₒχâ-ₒsâ-ₒlâ : *mahāsāla (Skt. mahāśāla. 大きな家の所有者・長者の意)。ガンジス河の南、Patna の西方約五十キロにある Arrah の西六マイルにある今の Masār 村に比定されている。当地から出土した碑文に明瞭に Mahāsāla の地名が認められ、また近辺より婆羅門の建築遺構・彫刻が発掘されている［Cunningham : A.G.I., p.504, 716］。

二　那羅延天祠　那羅延天 Nārāyaṇa はヴィシュヌ Viṣṇu 神およびクリシュナ Kṛṣṇa 神と同一視され、またヴィシュヌ神の権化と見なされる神。那羅延は旧訳の語で、新訳では那羅延那 *nārāyana である。この位置については玄奘は明記していないが、Masār (Mahāsāla) の北方十六マイルの地点は、Gogra (Ghōgrā) 河がガンジス河に合流する Revelganj であり、ヒンドゥー教の聖地であり、多くのヒンドゥー寺院建築のある所である。恐らくここを指すのであろう［Cunningham : A.G.I., p.504. 716］。

三　那羅延天祠より……建てたものである　那羅延天祠の所在地と思われる Revelganj より東へ約三十里の地点とすれば、これは恐らく今の Chāpra 近辺を指すと思われるが、今日ではこの地帯の口碑・文物に何の手掛かりも見出だせない［Cunningham : A. G. I., p.505］。阿育王石柱および柱頭の獅子像も発見されていない。

四　曠野鬼の説話　この説話は『大般涅槃経』一五に見える。曠野鬼とは夜叉のことで、Skt. āṭavaka, Pa. āḷavaka の名。漢訳諸経に阿吒嚩迦・阿吒婆拘・阿吒薄倶・阿羅婆迦・阿羅毗などと書かれている。『慧琳音義』一二に「阿吒嚩迦　吒・音摘家反→ₒṭa, 嚩・音無下反→ₒva, 迦・音迦佉反→ₒkia, 梵語なり。曠野の鬼神大将の名なり。或いは遏吒薄倶と名づく。語声の転にして皆一なり。俗に元帥大将と名づくるは非なり。十六大薬叉将の一将なり」とある。

二・四　瓶塔　ここ［伏鬼窣堵波］から東南へ行くこと百余里で一窣堵波に至る。(注一) 基壇はすでに崩れ傾いているが、なお高さ数丈に余る。昔、如来が寂滅された後に、八国の大王が舎利を分配した。舎利［の分量］を量った婆羅門(注二)は蜜をば瓶の内側に塗って諸王に分配した。一方、婆羅門は瓶を手にして帰った。粘りついていた舎利を手に入れたので窣堵波を建て、瓶も共に塔内に安置したので［瓶塔という］この名があるのである。後に無憂王が塔を発掘し舎利と瓶を取り出し、改めて大窣堵波を建てたのである。(注三) 或いは斎日になると、時により光明を燭かすことがある。

ここから東北へ殑伽河を渡り、行くこと百四、五十里で吠舎釐国（原注　旧に毗舎離国と曰う。訛なり。中印度の境）に至る。

注

一　瓶塔　この塔の所在が現在の何処に当たるか、諸種の見解が出されたが、結局今の所比定不能である［Cunningham : A.G.I., p. 507, 716 ; Beal : *Records*, II. p.65 (65)］。

二　舎利［の分量］を量った婆羅門　原文は「量舎利婆羅門」とある。即ち巻六の四・一三注三の直性婆羅門のこと。同所注参照。

三　無憂王が仏舎利を発掘し大窣堵波を建てたこと　巻八の二・三「八万四千塔」の条参照。

三　吠舎釐国

三・一　**概観**　吠舎釐国(注一)は周囲五千余里ある。土地は肥沃で花・果は繁茂し、菴没羅果・茂遮果は多くもあり貴ばれてもいる。気候は温和で風俗は純朴である。福業（福徳を招く行業）を好み学芸を重んじ、邪宗・正法ともに雑信している。伽藍は数百あるが多くは崩壊している。残存しているものは三つ五つ［と甚だ少なく］、僧徒は稀少である。天祠は数十ヵ所、異道の人々が雑居しており、露形［外道］の徒は実にその仲間が多い。

吠舎釐城(注二)は崩壊ぶりすでに甚だしい。その基礎の址は周囲六、七十里ある。宮城の周囲は四、五里。少しく住民がいる。

注

一　吠舎釐国　吠舎釐 *b'i̯wi°-°śi̯a-°lji*: Skt. *vaiśālī*, Pa. *vesālī*. 旧訳は毗舎離 **b'i̯ed-śi̯ăg-li̯a→°b'ji-°śi̯a-°lji̯ę* と音変している。また薜舎離・維耶離・鞞舎隷夜・鞞貰羅・維耶にも作り、広博・広厳と訳す。この地は古代インド十六大国の一で、跋祇 Vṛji 種族の一種の離車 Licchavi 族が共和政治を布いた所である。釈迦在世時代にはすこぶる繁栄し、かつ釈迦自身度々この国都に遊行し人民を教化した。またジャイナ教の開祖マハーヴィーラ Mahāvīra の生地としても有名。

二　吠舎釐城　この位置は現在の Gandak 河の左岸 Hājīpur の北十八マイルにある Muzzaffarpur 地方の Basāṛh である (25°58′ N., 85° 11′ E.)。そこには今も Raja-Bisal-ka-garh (Visala 王の要塞) と呼ばれる廃址がある。その位置・大きさ・名称は玄奘の所伝と甚だよく一致すると言われる [Cunningham : *A.G.I.*, p. 507, 717]。古く一九〇三—〇四、一九一三—一四年に発掘され、前二世紀より後四、五世紀にわたる建築物の遺構が発見され、一九五〇年には Raja Bisal の発掘により多数のグプタ文字の刻印のある封泥 (clay seal) が出土した。その多くは市政に関係ある役人の称号であり、商業貿易に関するものも少数ながら見られる [K. Deva and V. Mishra : *Vaishali Excavations*, 1950]。なお、Law : *H. G. A. I.*, pp. 265-7 参照。

三・二　**『維摩経』の説所**　宮城の西北五、六里で一僧伽藍に至る。僧徒は少なく、小乗の正量部の教法を学習している。傍に窣堵波がある。昔、如来が『毘摩羅詰経』(注一)を説かれ、長者の子宝積(注二)らが宝蓋を献じた処である。その東に窣堵波がある。舎利子らがここで無学(注三)の果を證した。

注

一　『毘摩羅詰経』　毘摩羅詰については本巻の三・六参照。『毘摩羅詰経』と言うこの文字そのままの経典はない。通常略して『維摩経』、詳しくは『維摩詰所説経』(Vimalakīrti-nirdeśa-sūtra) 三巻（姚秦・鳩摩羅什訳）と言われるものである。釈尊直説の経と言うが、仏滅後数百年を経た大乗思想によるもので『般若経』に次ぐ初期大乗経典である。異訳は数種あったが、現存するものは呉・支謙訳『維摩詰経』二巻、羅什訳の前替と玄奘訳の『説無垢称経』六巻等である。注釈も多い。

二　長者の子宝積　長者とは毘摩羅詰（維摩居士）を指す。宝積 Skt. *ratnākāra* は『維摩詰経』巻上には宝事、『維摩詰所説経』巻一には宝積、『説無垢称経』巻一には宝性としている。ここに玄奘は羅什の旧訳語を用いたわけである（『西域記』編纂時にはなお『説無垢称経』は翻訳していない）。『維摩経』巻一によれば、かれも仏法に帰依し、教えを乞うたことを記す。

三　無学の果　阿羅漢果のこと。学道円満して、もはや修学することなき境。

三・三　仏舎利塔(注一)　舎利子(シャーリプトラ)證果［窣堵波］の東南に窣堵波がある。吠舎釐(ヴァイシャーリー)王が建てたものである。仏が涅槃(ねはん)の後にこの国の先王が舎利を分配され手に入れて建造したものである。印度記（本巻二・三注一参照）には、「この中にはもと如来の舎利が一斛(こく)あった。無憂王が発掘(注二)して九斗を取り、唯一斗だけ留め残した。後にある国王がさらに発掘して取り出そうとし、まさに作業を始めようとしたとき、大地が震動したので、そのまま発掘はしなかった」と言う。

注

一　仏舎利塔　仏骨の八分については、巻六の四・一三に既出。吠舎釐城の梨車毘衆もその一分に与かった。

二　無憂王が発掘　阿育王が仏骨舎利を発掘細分割して八万四千塔を建造したことは、巻八の二・三に出る。この仏塔は最近 A. S. Altekar の調査により発見され、阿育王が再埋葬した舎利容器が出土した［平凡社：『世界考古学大系』八、九七ページ（発掘後の塔基と舎利容器の写真掲載）］。

三・四　阿育王塔と石柱　その（仏舎利塔）西北に窣堵波がある。無憂王が建てたものである。傍に石柱がある。高さ五、六十尺、上に師子の像が作ってある。(注一)

注

一　傍に石柱がある……師子の像が作ってある　この阿育王石柱は獅子像がついた原型のまま、ただし下半部は地中に埋まった状況で現存している。この獅子像は現存する獅子柱頭の中で最古の様式のものと言われる。石柱に刻文はない。Bakhra 村に近いという関係から Bakhra Pillar と呼ばれている。しかし、実際はジャイナ教の開祖マハーヴィーラの生地 Kolluha（古代のKollāga）村にあることから考えて、この石柱はマハーヴィーラに関したものであろうし、名も Bakhra Pillar と呼ぶよりは Kolluha Pillar と言うべきであろうとされる［Mookerji : *Asoka*, p.86（写真あり）］。

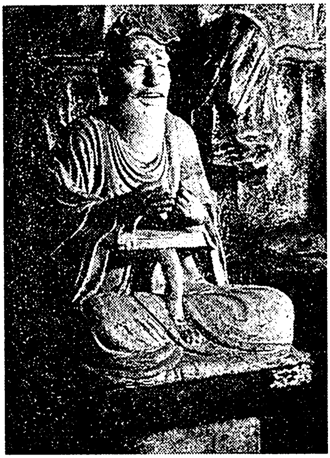
三・五　獼猴の因縁地　石柱の南に池がある。獼猴(さる)の群れが仏のために掘ったものである。昔、如来がかつてここに止まられたことがある。池の西、遠からざる所に窣堵波がある。獼猴たちが如来の鉢を持ち、樹に上って蜜を取った処である。池の南、遠からざる所に窣堵波がある。獼猴たちが仏に蜜を奉った処である。池の西北隅に今も獼猴の形像（取蜜・奉蜜の状を表わした像）がある。(注一)

注

一　パーリ経律には、釈尊が吠舎釐滞在中は多く大林 Mahāvana の重閣講堂に留まったとしている。漢訳『雑阿含経』巻二三には重閣講堂を獼猴池畔にあるとする。獼猴の取蜜・奉蜜の説話は次のようなものである。釈尊が諸比丘と共に遊行中、諸比丘が各自の鉢を露地に置き、釈尊も自らの鉢をそれらの中に置いたが、獼猴は多くの鉢の中から仏鉢を選び娑羅(さら)樹に上り、蜜を採取し鉢に満たし、釈尊に捧げたと言う。釈尊の教化が猿にまで及んだとする例は、すでに巻四の七・四にも出ている。この図象はサーンチー北門右柱浮彫［岩波写真文庫『仏陀の生涯』五七ページ］に見える。

三・六　維摩居住の旧地　伽藍の東北三里（宋本は三、四里）に窣堵波がある。毘摩羅詰(ヴィマラキールティ)（原注　唐に無垢称(むくしょう)と言う。旧に浄名と曰う。

然らば浄は則ち無垢、名は則ち是れ称の義なり。同名を取ると雖も、乃ち異あり。旧に維摩詰と曰う。訛略なり）(注一)の故宅の基礎の址がある。不思議なことが多い。ここを去ること遠からざる所に一つの霊妙な家がある。その状は甎を塁んだようであるが、言い伝えでは石を積んだものだと言うことである。これが無垢称長者が病人の姿となり法を説いた処である。ここを去ること遠からざる所に窣堵波がある。長者の子の宝積（本巻の三・二注三参照）の家の址である。ここを去ること遠からざる所に窣堵波がある。菴没羅女(注二)の家の址である。仏の叔母ら(注三)の苾芻尼（比丘尼）たちが、ここで入涅槃を證した。



維摩像，法隆寺五重塔内

注

一　毗摩羅詰（……）　毗摩羅詰　b'ji-muâ-lâ-k'jet: Skt. vimalakirti. Skt. vimala は「汚点のない・純粋な」の義で、「浄・無垢・清浄」などと訳され、kirti は「名声・名誉」の義で、「名・名称・名聞・称誉・称讃・称」などと訳される。玄奘が義の同一を認めながら、ことさら異訳をしたのは、かれの訳の方が詳実適切と言うのであろうか。しかし、かれの訳場に列した玄応の『経音義』八には、「維摩詰　或いは毗摩羅詰と言い、亦鼻摩羅鶏利帝と言う。此に訳して無垢称と云う。称とは名称なり。或いは浄名と為すものも其の義は一なり」と両々相認める態度を採っている。毗摩羅詰 Vimalakirti は旧訳では維摩詰とするが、通常は略して維摩と言う。在家人であったが仏の教法の理解深く、維摩居士として古来著名である。『維摩経』によれば、吠舎釐城の長者で善根を植え弁才無礙であった。かつて釈尊が吠舎釐城菴没羅樹園にて説法された時、病を以て列しなかった。そこで釈尊は舎利弗その他の諸大弟子および菩薩らにその病を問わせようとしたが、みなその任に堪えざる故を以て辞退し、終に文殊師利に命じ衆もみな随従し訪問させた。両大士間の問答応酬は大乗の甚深の義理を発明するものであり、この筆録が『維摩経』であると伝えている（本巻の三・二注一参照）。維摩詰の故宅のことは『法顕伝』には見えず、『法苑珠林』二九には「大唐顕慶年、勅使衛長史王玄策は印度に向み浄名の宅を過ぎりしに因り、笏を以て基を量るに止十笏あるのみ。故に方丈の室と号するなり」と規模を記し、義浄も『大唐西域求法高僧伝』下の自らの行路を記す条に、「先ず那爛陀に到り……次に遍く聖跡を礼し、方丈を過ぎて拘尸［那竭羅］に届る」とする。また継業の『西域行程』にも「此れより河を渡り、北して毗耶離城に至る。維摩の方丈の故跡あり」と当所を訪問したことを記している。

二　菴没羅女　菴没羅 ·âm-muat-lâ: Skt. āmra, Pa. amba（巻二の一・一五注三参照）。詳名は Skt. āmrapāli, Pa. ambapāli. 漢字で阿梵和利・菴婆婆利・菴婆羅婆利など。訳して菴羅衛（Skt. pāli は「女守護者」の意）・㮈女など。吠舎釐城の娼婦で極めて美貌、釈尊に帰依し自分の所有する菴没羅園を献じて仏の住所とし、後に自らも比丘尼となった。『長阿含経』二、『増一阿含経』一〇、『大般涅槃経』上、『五分律』二〇、『四分律』四〇等に出る。

三　仏の叔母　鉢羅闍鉢底のこと、巻六の一・三注一にすでに説明。叔母らが釈尊に先だち入涅槃したことは『増一阿含経』五〇に見える。

三・七　最後の観城と菴没羅女の献納

［宮城の西北五、六里にある］伽藍の北三、四里に窣堵波がある。如来がまさに拘尸那［掲羅］

国に行き般涅槃に入ろうとされるや、人と非人（天人）とは世尊に随従してここまで来て佇んだ所である。

次に西北の遠からざる所に窣堵波がある。仏がここで最後に吠奢釐城をよくよく観られた所である。[注一]

その南の遠からざる所に精舎がある。前に窣堵波が建ててある。菴没羅女の園で、そっくり仏に布施をしたものである。[注二]

注

一　人と非人とが随従し、仏が最後の観城をされるというこの二段は、法顕訳『大般涅槃経』上の「世尊……諸比丘と乾荼村に往くに、路、毗耶離城を過る。世尊回顧し城に向かいて笑う。阿難即便ち頭頂もて足を礼して仏に問いて言わく、『無上の大尊、因縁なくして妄りに笑うことはあらじ』と。仏即ち答えて言わく『我、今城に向かいて笑う所以は、正に最後に此の城を見るがための故なり』と。如来此の言を説く時に当たり、虚空の中より雲なくして雨ふる。是において阿難復仏に白して言わく、『世尊、甚だ奇特なり。虚空清浄にして気の翳りあることなく、忽然として此の如き密雨を降らす』と。仏、阿難に告ぐるに『汝之を知らずや。虚空の諸天、我が最後に毗耶離城を見ると説言せしを聞き、心大いに懊懊し、悲感涕泣せるを。此れは是れ天涙なり。雨たるに非ず』と」の一段を指すものであろう。巻八の二・四参照。

二　菴没羅女の園……ある　本巻の三・六注三参照。

三・八　仏陀入滅の予言　菴没羅園の側に窣堵波がある。如来が涅槃を告げられた処である。仏が昔ここで阿難に告げて、

「四種の神足[注一]を得たものは寿一劫[注二]を保持するが、如来は今はその寿命幾年であるべきであろうか」

と言われた。このように問うこと再三であったが、阿難は返答しなかった。天魔[注三]が迷わしているからであった。阿難は座より起ち上がり、林中で坐禅した。その折、天魔がやって来て仏に、

「如来はこの世で教化されること已に久しく、流転［輪廻する凡夫］を救済されること、その数は塵沙の如く［無数］であります。寂滅の楽に入られるのは、今正にその時であります」

と言った。世尊はほんの僅かの土を爪の上に置かれて、天魔に、

「大地の土が多いか、爪の土が多いか」

と告げられると、

「大地の土が多いです」

と答えた。仏は、

「私が済度したものは、爪の上の土のようなもので［少なく］、まだ済度しないものは大地の土のようなもので［多数で］ある。この後三月したならば私は入涅槃しましょう」

と言われた。天魔はこの言葉を聞き大喜びで帰って行った。阿難は林の中でふと不思議な夢を感じ、やって来て仏に、

「私は林間におりまして夢に大きな樹を見ました。枝や葉は生い茂り、影もこんもりとしております。［ところが］突風が急に起こり木は折れ葉は散り、余すところがないほどになりました。世尊が寂滅に入られようとしておられるのではありませんか。私は心配に思い、ことさらにお尋ねにまいりました」

と申し上げると、仏は阿難に、

「私は先ほど汝に告げたが、汝は天魔に隔てられて私になおこの世に留まるようにと頼まなかった。魔王は私に早く涅槃に入るようにと勧請したので、もうその時期を約束しました。汝の夢はこのようなことであったのだ」と告げられた。[注四]

注

一　四種の神足　法力によって起こされる神的作用をする四種の定を言う。㈠欲神足、欲の力によって引発され種々の神用を現起する定。㈡念神足、心の力による。㈢勤神足、勤（精進）の力による。㈣観神足、思惟の力による。この四種の定を得ることにより具える通力を言う。

二　寿一劫　劫 Skt. *kalpa* は通常の年月日時をもって算することのできない遠大の時間を区分する称呼。大時・長時と訳す。

三　天魔　第六天の魔王で、その名を波旬 Skt. *pāpīyas, pāpman, Pāpīmā* と言い、無数の眷属を従え、常に仏道を障礙すると言う。

四　この段の説話は『大般涅槃経』巻上に見え、釈尊が自らの入滅の予言をされると、「その時阿難、仏の此の語を聞き、仏の般涅槃に入り勧請すべからざるを決定して知り、心に苦痛を生じ、悶絶懊憹し、泣涕流漣して自ら勝うる能わず」と状している。なお『長阿含経』第二にも記す。

三・九　千子塔（千仏の本生譚）　告涅槃期［窣堵波］の側、遠からざる所に窣堵波がある。昔、ある仙人が巌谷に隠れ住んでいた。仲春の月に清流に船を浮かべている(注一)時、牝鹿が水を飲むや仙人に感じて女子を生んだ。姿貌は人に過ぎていたが、唯脚だけは鹿のようであった。仙人はこれを見て、取り上げ養育した。その後［ある時］言いつけて、火を求めて他の仙人の廬に行かせたところ、足が地を履む迹にはみな蓮の花が生じた。訪問を受けた仙人は見て非常に不思議に思い、その女子に自分の廬を廻らせてから火を与えた。鹿女は命ぜられるとおりにして火を得て帰った。そのころ、梵豫王(注二)は狩猟に出て蓮花を眼にし、その迹を尋ね求め、世にも珍しいことを喜び、鹿女を共に乗り物に載せて引き返した。相師は、

「きっと千人の子を生むでしょう」

と占った。他の宮中の婦人たちはこの話を聞き、［これをはばもうとして］手を尽くさないものはなかった。日月がすでに満ち、［鹿女は］一蓮花を生んだが、花には千の葉があり、葉ごとに一人の子供が坐っていた。他の婦人たちは根もなきことを言い、みな不祥のことだと口々に称え、殑伽河に投げ棄て波のまにまに浮かべ流した。［ちょうどその時］烏耆延王(注三)は殑伽の流れを下り遊覧していたが、黄雲が蓋のように覆ったものが波に乗って流れて来るのを見て、取り上げて開いて見ると、何と千人の子供がいた。養育し成長すると大力の持ち主となった。千人の子をもっているのを恃みにして四方に領域を広げ、兵威は勝ちに乗じてまさに梵豫国に当たろうとした。時に梵豫王はこの話を聞き非常に恐れ戦いたが、兵力は敵せず計略のしようがなかった。この時、鹿女は心に［この千人の敵将は］自分の子であることを悟り、そこで王に、

「今敵軍は国境に迫り、上下みな心を悩ましております。私の真心をもってすれば、強敵を破ることができます」

と言ったが、王はこれを信用せず、憂慮は深まるばかりであった。鹿女はそこで城楼に登り、敵のやって来るのを待ち受けた。千子の将兵が城を囲み取り巻くと、鹿女は、

「順逆を間違えたことをするなかれ。私は汝らの母であり、汝らは私の子供である」

と告げると、千子は、

「何をとりとめもないことを言うか」

と答えた。鹿女は手で両の乳房をもむと、乳汁は千の岐に流出し、天の感ずる所か、みな千人の子供の口々に入った。そこで［千子は］武装を解いて宗家に帰り、軍隊を解散してそれぞれの部族に返らせた。［かくて］両国は誼を結び、人民は安楽となった。(注四)

千子帰宗［窣堵波］の側、遠からざる所に窣堵波がある。如来が散

策された旧跡である。[如来がここを] 指させされて人々に、「昔、私はここで宗族のもとに帰り、親に出会った。千子とは誰かと知りたく思うならば、賢劫間に出生した千仏こそがそれである」と言われた。

注

一　清流に船を浮かべ　原文は麗・宋・元・明本ともに「鼓濯清流」とするが、守山閣叢書本は「櫂」に訂している。今「櫂」を採る。

二　梵豫王　この王の梵名を Brahmanandita ? [Julien], Brahmadatta [Beal], Brahmānanda [堀] と還元している。梵豫王の豫は「與・授」と同義とされているらしい (cf. *Mvy.* No. 3645, Rājā Brahmadatta. 梵授王；赤沼：『辞典』一〇四ページ左)。

三　烏耆延王　烏耆延 。*ʼuo-.gʼ ji-jän*。従来はこれを Ujiyana [Beal], Udyāna [堀], Udyāna or Udjiyāna [Eitel : *Handbook of Chinese Buddhism*, p.184 a] とし、西北インドのスワート Swāt 河畔の国名と同一視しているようである。同国は『記』では烏仗那と書かれている (巻三の一・一注一参照)。烏耆延なる用字は他に見ない。今は疑問として残す。

四　ここに見える千仏本生譚は、ほとんど『雑宝蔵経』一、鹿女夫人縁第九と同筋である。唯、後者における舞台は波羅奈国となっている。また『法顕伝』にも千仏譚が出て、その場所を「放弓仗塔」と名づける。説話の筋は千子出生の経緯に差を見せる。

三・一〇　**重閣講堂**　述本生 [窣堵波] の東に古い基礎がある。その上に窣堵波が建ててある。光明が時に輝くことがあり、祈請すれば願いを遂げられるものがある。如来が『普門陀羅尼』(注一) 等の経を説かれた重閣講堂(注二)の廃址である。

注

一　『普門陀羅尼』　梵語では Samantamukha-dhāraṇi であろうが、如何なる経や判明せず。一に『法華経』の観世音菩薩普門品とするが、説者自身釈尊直説とするには余りに新しすぎることを認めている [Beal : *Records*, II, p.73 (89)]。獼猴池の側の大林重閣講堂における釈尊直説の経は『阿含経』等初期経典中に見るものである。

二　重閣講堂　ここに言うものは獼猴池側重閣講堂である。重閣講堂そのものについては巻二の一・五および逸見梅栄：『印度仏教美術考・建築篇』二一四ページ以下参照。

三・一一　**聖跡の荒廃**　講堂の側、遠からざる所に窣堵波がある。中に阿難の半身の舎利(注一)が入っている。ここを去ること遠からざる所に数百の窣堵波がある。その数をはっきりさせようと思ったもので、まだ明確に知ったものとてはない。千人の独覚(注二)が寂滅に入った処である。

吠舎釐城の内外には堀をめぐり聖跡が非常に多く、一いちは挙げ難い。かつての景勝も廃墟となり、魚の鱗のごとく連なり並んだのも今は距りそびえており、歳月は早く改まり、寒暖は速やかに移って行った。林ははや壊滅し、池も亦、水は涸れ尽くしているが、朽ちた木株が跡を留め、はっきりそこと跡を示している。

注

一　阿難の半身の舎利　本巻の三・一六に詳記。

二　独覚　本巻の一・三注四参照。

三・一二　**離車子が如来に別れた所**　大城より西北へ行くこと五、六十里で大窣堵波に至る。栗呫 (原注　昌葉反→*tsʼiäp*。) 婆子 (原注

旧に離車子と曰う。訛なり(注一)が如来にお別れした処である。如来が吠舎釐城から拘尸那［掲羅］国に行かれる時、栗呫婆子の人々が仏がまさに寂滅に入られようとしていられることを耳にし、お伴をして泣きながら見送った。世尊は人々の哀慕の情はとても言葉でなだめることができないのを見てとられ、神力で［仏と人々との間に］大河を化現された。岸辺は深くそば立ち、河流は急速であった。栗呫婆の人々は悲しみ慟きながら止まった。如来は鉢を留め残して、人々のために追憶の品とされた。(注二)

注

一　栗呫（……）婆子（……）　栗呫婆 *lįĕt₀-ts'ịäp₀-₀b'uâ* : Skt. *licchavu* (*vali*) (=the Licchavis) [E.J. Rapson : *Coins*, p.24, pl. IV. 9 ; B.C. Law : *Some Kṣatriya Tribes*, p.118 ; H. Raychaudhuri : *Political History of Ancient India*, p. 531]。玄奘の栗呫婆子はこのチャンドラグプタ一世の貨幣の碑銘に見えるような、部族を表わす語を意図したものと解されよう。通常は *licchavi*, *litsavi* の形で表記されている原住民的な資質を受けているもので、前六世紀ごろより強大な種族として知られ、跋耆国 Skt. *Vṛji* の一部として毗舎離に都していた [Law : *ibid.*, §I ; 中村 :『インド古代史』上二五六ページ]。玄奘はここでは栗呫婆子という形を正梵語として採っているが、かれの訳した『大般若経』五〇二では栗呫毗王としている。旧訳の離車は訛としているが、語末の省略より言えば「訛略なり」とあるべきところである。

二　釈尊を慕って追従することをやめない離車子の男女を、大河を化現して去らしめる話は、『大般涅槃経』上に『記』に酷似した表現で見える。ただし、鉢を追憶の資として留めた話は『大般涅槃経』上には見えず、『増一阿含経』三六に出る。『法顕伝』には「諸梨車仏の般泥洹を逐わんと欲する処に到る。而して仏は聴さざるも、仏を恋いて去るを肯ぜず。仏、大深塹を化作して渡ることを得ざらしむ。仏、鉢を与えて信と作し還らしむ。其の所に石柱を立つ。上に銘題あり」とする。

三・三　**摩訶提婆の本生譚**　吠舎釐城より西北、二百里足らずの所に古い城がある。(注一)荒廃して歳久しく、住民は稀少である。中に窣堵波がある。仏が昔、菩薩・人天・大衆たちのために［自らの］本生譚を引いて話された所である。［仏が昔］菩薩行を修しておられた時、かつてこの城で転輪王となり、摩訶提婆（原注　唐に大天と言う）と号しておられた。七宝の感応あり四天下に王となられたが、世に衰変（生・病・老・死の変化）の相のあることを眼にし、無常の理を悟り、心を世俗を捨てることにおき、情を国王の大位ということから離し、国を捨て家を出て、染衣をまとい修学されたのであった。(注二)

注

一　古い城がある　地名を記さぬこの古い城は、吠舎釐城に比定される Bisal の北北西三十マイルにある廃墟 Kesariya とされる。この廃址には高い塔があり、土地の人々は Rāja Vena Cakravarti と関係づけている。この Kesariya は交通の要衝に当たっている [Cunningham : *A. G. I.*, 511]。

二　摩訶提婆 Skt. *mahādeva*（この漢字は巻三の六・三に既出。ただし同名異人）の本生譚は *Jātaka*, No. 9, Makhādeva-Jātaka および『増一阿含経』四八、『中阿含経』一四に見える。自らの頭髪に白髪が生じたのを見て老いの至れるを知り、王位を譲り、隠遁修行したという。この話はバールフット Bharhut 仏塔の彫刻に見える [A. Foucher : *The Beginnings of Buddhist Art*, pl. VI. no. 6]。

三・四　**七百結集（第二結集）**(注一)　城より東南に行くこと十四、五里で大窣堵波に至る。七百人の賢聖が重ねて結集した処である。仏涅槃

の後百十年[注三]、吠舎釐城の苾芻たちに仏の教えから遠く離れ、戒律を誤り行なうものがあった。当時、長老の耶舎陀[注四]は憍薩羅国に住み、長老の三菩伽[注五]は秣菟羅国に住み、長老の釐波多[注六]は韓若国に住み、長老の娑羅[注七]は吠舎釐国に住み、長老の富闍蘇弥羅は波羅梨弗国に住んでいた。[注八]大阿羅漢たちは心に自在を得［て悟りに達し］、［経律論の］三蔵を保持し、三明（巻二の四・六注五参照）を会得して、大きな名声をもち、人々によく知られていた。これらの人々はみな尊者阿難の弟子であった。そこで耶舎陀は使を出し、賢聖たちにみな吠舎釐に集まるよう告げた。ところがなお一人欠けて、七百人の数には満たなかった。この時、富闍蘇弥羅は天眼をもって諸大賢聖が集まって仏の教えの事を議する状を見て、神足を運び法会にやって来た。さて三菩伽は大衆の中で袈裟の右肩を脱ぎ（敬意を表わす貌）長跪し（両膝を地に着け腰を挙げた姿勢）声を揚げて、

「人々よ、喧ぐことなかれ。欽みましょう。よく考えてみましょう。昔、大聖法王（釈尊）は善巧の方便にて寂滅されましてより、歳月は経過しましたがそのお言葉は今もなお残っております。［然るに］吠舎釐城の怠慢な苾芻は戒律に誤りを犯し、十事の非法[注九]があり十力[注一〇]の教えに違反しています。今、諸賢者（みなさん）は、戒を持するや戒を犯せるやを、深く明察されますよう。諸賢はみな共に大徳阿難の指教を承けた方であります。どうか仏恩に報ずることを念じ、重ねて仏の聖旨を宣べられんことを」

と言った。時に大衆たちは感激しないものはなく、すぐさま苾芻たちを召集して毘奈耶（律。巻三の六・四注一四）に依拠して叱責し、［非法を］制止し、誤った教えを削除し聖教を宣明した。

注

一　第二結集　仏滅直後の第一結集（巻九の二・一六参照）以後も長老たちの保守派と青壮の進歩派との対立は消えず、遂に教団の根本分裂を起こす事態となった。仏滅後百年（或いは百十年）に跋耆族の吠舎釐城に住する僧の中に、十事の合法を唱えて紛乱が起こり、上座の長老たちが会議を開き十事を非法であると決議し、さらに律蔵を中心とする三蔵の結集を行なったと伝える。これが第二結集である。これに対して、南伝によれば、進歩派の人々は一万の人を集めてかれら自身の結集を行なったと言う。これを大結集と呼んでいる。かくして進歩派は独立して大衆部即ち摩訶僧祇部 Mahāsaṃghika を樹て、長老派の一部を上座部 Theravāda と称し、教団は二大派に分裂するに至った［『五分律』三〇、『四分律』五四、『十誦律』六〇・六一、『善見律毘婆娑』一、『摩訶僧祇律』三〇、『毘奈耶雑事』四〇、『法顕伝』］。*Cullavagga*, VII; *Dīpavaṃsa*, V; *Mahāvaṃsa*, IV 等に諸説あり。なお補注参照。

二　城より東南に行く　第二結集の場所を『記』は城の東南とするが、『法顕伝』では「城の西北三里の千子塔の東三、四里」とする。

三　仏涅槃の後百十年　『五分律』『法顕伝』、*Cullavagga* 等は仏滅後百年とする。

四　耶舎陀　耶舎陀 ˳*ia*-˳*śia*-˳*d'a*: **yaśada* (Skt. *yaśoda, yaśa*. Pa. *yasa*), 名称・名聞と訳す。婆羅門種で出家し仏門に帰依し、阿羅漢果を證し、六神通を得た。十事の非法を唱えたため擯出せられ、西インドの釐波多に走り、遂に第二結集を開く端を作った。

五　三菩伽　三菩伽 ˳*sâm*-˳*b'uo*-˳*g'ia*: Skt. *sambhoga*. 通常、第二結集に参集した人としては三浮陀 Sambhūta Sāṇavāsi（商那和修、巻一の三七・三参照）とされる。王舎城の長者で、仏入滅後阿難につき出家し、悟りを得た。跋耆比丘が十事の非法を唱えたことを耶舎陀より聞き、釐波多と共に結集に参加した。

六　釐波多　釐波多 ˳*lji*-˳*puâ*-˳*tâ*: **ripata* (Skt. Pa. *revata*). また離婆多・梨婆多・隷跋多とも。訳して金と言う［『翻梵語』二］。拘尸那掲羅国の波婆城 Pāvā の上座であった。韓若 ˳*γân*-˳*ńia* 国は本書の他の場所にも見えず（「韓」字の使用はこの一例のみ）、よく分からない。古くジュリアン、ビール、堀、足立の諸氏は或いは疑問をもちながら、或いは自信をもって Kanyākubja（巻五の一「羯若鞠闍国」）に当

てているが、その論拠は示されていない（ワッターズ氏は全く論及していない）。諸経律を見るに、十事の論議された当時䟽波多は、『十誦律』六〇には薩寒若にありとし、『四分律』五四には僧伽賖にありとし、何れも Saṅkassa とする。また『五分律』三〇では拘舎弥 Kauśāmbī にありとする［赤沼：『辞典』五四六ページ左］。Saṅkassa 説がこれに近いようであるが、なお疑問として残す。

七　娑羅　娑羅 ˳sâ-˳lâ: Pa. *sāḷha* (Skt. *sāḷhr* ?). また沙留・遮楼・沙蘭とも。沙訶闍底 Sahājati に住む長老［*Mahāvaṃsa*, IV. 28］とある。

八　富闍蘇弥羅は……に住んでいた　富闍蘇弥羅 *pi̯əu°-˳źi̯a-˳suo-˳mjię-˳lâ*: **pūjasumira* (Skt. *khubja-sobhita*, Pa. *khujja-sobhita*). また級闍蘇弥羅・不闍蘇摩・不闍宗とも。曲安と訳す。波羅梨弗国の波は古本に依る。他本はみな娑に作るは誤りなること、以下の説明により明らかであろう。かれは婆羅門種の人で華子城（波吒釐子城 Pāṭaliputra, 巻八の二・一参照）に生まれる。駝背にして Sobhita がその名なる故に Khujja-Sobhita と呼ばれた。仏滅後阿難により入信す［*Thera Gāthā*, 234-6］。波羅梨弗国は Pāṭaliputra である。

九　十事の非法　従来は非法とされている十ヵ条の行為を、合法として慣行せんとしたもの。所伝の書により差異があるが、*Cullavagga* により列挙すれば、㈠角製の容器に塩を蓄える慣行、㈡正午を太陽の影が二指量経過する間に午餐をとる慣行、㈢他の村に入り再び食をする慣行、㈣同一教区内の寺院で別々に布薩（説戒）会を行なう慣行、㈤来るはずの比丘の同意を予定して定足数に不足のまま羯磨（法事）を行なう慣行、㈥師の常習することに従う慣行、㈦食後に残食でない未攪乳を飲む慣行、㈧未醗酵の椰子汁を飲むことを得る、㈨縁飾りのない（普通の製法に違えた）莫蓙を用いることができる、㈩金銀を受けとることができる。以上の行為は合法 kappati（浄である）と提唱した。最後の金銀浄の問題は教団の経済に関係するもので、両派の対立抗争の中心はここにあったようである。

一〇　十力　如来所有の十力のことで、十力の教えとは即ち如来の教えということ。十力とは、㈠知覚処非処智力、物の道理非道理を知る智力、㈡知三世業報智力、衆生の三世の因果業報を知る智力、㈢知諸禅解脱三昧智力、諸の禅定・解脱・三昧を知る智力、㈣知諸根勝劣智力、衆生の信等の諸根の勝劣差別を知る智力、㈤知種種解智力、衆生の種々の知解を知る智力、㈥知種種界智力、衆生の諸の種姓およびその行ないを知る智力、㈦知一切至所道智力、人天等の諸趣に至る道行の因果を知る智力、㈧知天眼無礙智力、天眼を以て衆生の生死および善悪の業縁を知る智力、㈨知宿命無漏智力、衆生の宿命を知り煩悩なき涅槃を知る智力、㈩知永断習気智力、自らの煩悩尽きて後に生ぜざるを知り、また他の煩悩の尽くるを知る智力。以上の十を如来の十力と言う。

三・一五　湿吠多補羅僧伽藍　七百賢聖結集［大窣堵波］の南へ行くこと八、九十里で湿吠多補羅僧伽藍に至る。(注一) 何層にもなった台は壮大美麗であり、何重にもなった閣は翬の飛ぶがごとく華麗である。僧徒の威儀は清粛に、みな大乗を学んでいる。その側には過去四仏の座所および散策の遺跡の処がある。その側の窣堵波は無憂王が建てたものである。如来が昔、南は摩掲陀国に行かれ、北は吠舎釐城を訪れられる途中で休息された遺跡の処である。

注

一　湿吠多補羅僧伽藍　湿吠多補羅 *śi̯əp˳-b'i̯wɒi°-˳tâ-°puo-˳lâ*: Skt. *śveta pura*. 白城寺の義。『慈恩伝』三によれば「吠舎釐の南境より殑伽河を去ること百余里、湿吠多補羅城に到り、『菩薩蔵経』を得」とあり、殑伽河の北にあった。『菩薩蔵経』とは、『大宝積経』中の玄奘訳『菩薩蔵会』（大菩薩蔵経二十巻）の梵本であろう。

三・一六　阿難分身の伝説　湿吠多補羅伽藍より東南へ行くこと三十余里、殑伽河の南北岸にそれぞれ一つの窣堵波がある。(注一) 尊者阿難陀（巻四の七・三注五参照）が自分の身を分けて二国に与えた処である。阿難

陀と言う人は如来の従弟である。法門を聞くこと多く総て受持し、博学強識であった。仏が世を去られた後は大迦葉［の滅後］を継いで、正法を護持し学習者を指導していた。［ある時］摩掲陀国に滞在し林中で散策している時、一人の沙弥が仏経を諷誦しているのを眼にしたが、章句は錯誤しているし文字も混乱していた。阿難はこれを耳にするや、如来を追慕する心がいや増し、静かに沙弥の所へ行き［誤りの］注意をし指導した。［ところが］沙弥は笑いながら、

「大徳（年少の比丘が老僧を喚ぶ呼称）はもう年老いておられます。おっしゃることは間違っています。私の師は学徳すぐれ年齢もまさに壮んで、親しく指導を受けていて少しも誤るところはありません」

　と答えた。阿難は口をつぐみ、その場を去り慨嘆して、

「私は年老いたりといえども諸衆生のために、永くこの世に留まり正法を護持しようと思っていた。しかし、衆生の煩悩は重く、言葉で教えることは難しい。永くこの世に留まっても利もない、速やかに入滅すべきである」

　と言った。そこで摩掲陀国を去って吠舎釐城に向かい、殑伽河を渡ろうとして舟を中流に浮かべた。［ところが］摩掲陀王は阿難が他所へ行くと聞き、その徳を深く恋い慕い、すぐさま乗り物の準備をし疾駆して追いかけ留まるよう頼もうとした。その数百千の人々は南岸に軍営した。［一方］吠舎釐王は阿難がやって来ることを聞き、［阿難の落胆を］悲しみ［来訪を］喜ぶ気持ちで心がいっぱいになり、王も軍隊を準備し駆け走せ出迎えた。その数百千の人々は北岸に駐屯した。両軍は相対峙し、旗指し物は日を翳らすほどであった。阿難は両軍の兵が互いに殺し合うのを心配し舟から起ち上がり、虚空に上昇し神変を現わし、そのまま入滅し火と化して屍骸を焚焼した。［ところが］骸はさらに中ほどで折れ、一方は南岸に落ち、一方は北岸に落ちた。そこで二王はそれぞれ一分を手に入れることができた。全軍声をあげて泣き悲しみながら、それぞれ本国に帰還し、窣堵波を立てて供養を行なった。

　ここから東北へ行くこと五百余里で弗栗恃国（原注　北人は三伐恃国と謂う。北印度の境）に至る。

注

一　湿吠多補羅……窣堵波がある　この位置を『法顕伝』は、「此れ（七百賢聖結集塔）より東へ行くこと四由延、五河（Gandak, Ghaghara, Ganges, Yamuna, Son の五河）の合口に到る。阿難、摩竭国より毘舎離に向かい……焼身して般泥洹す。……是において各々半身の舎利を得、還帰りて塔を起つ。河を度りて南下すること一由延、摩竭国巴連弗邑に到る」とする。

四　弗栗恃国

四・一　概観　弗栗恃国(注一)は周囲四千余里ある。東西が長く、南北は狭い。土地は肥沃で、花・果は繁茂している。気候はやや寒く、人の性格はせっかちである。多くは外道を尊敬し、仏法を信ずるものは少ない。伽藍は十余ヵ所、僧徒は千人足らず、大・小二乗を共に努力して通じて学んでいる。天祠は数十、外道の人は非常に多い。

国の大都城は占戍拏(注二)と呼び、大部分破壊しているが、元の宮城の中には今も三千余の家があり、或いは村をなし、或いは邑をなしている。大河(注三)の東北に伽藍がある。僧徒は少ないが、学業は清らかでりっぱである。

注

一　弗栗恃国　弗栗恃 *piuat*。*-lịĕt*。*-°zi*：Skt. *vṛji*, Pa. *vajji*. また仏栗氏・毘梨祇、跋耆・抜耆・跋祇・跋闍なども。梵語仏典の *vṛji*, パーリ語仏典の *vajji* 国は、ガンジス河の北にあり、ネパールの丘陵地帯にまで広がっていた。八つの部族よりなっていたが、そのうち毘提訶 Videha と栗呫毘 Licchavi の二部族が最も盛大であった。ここに言う弗栗恃国は遥か北方のネパールに近接した地方で、今の Darbhanga District の北部に当たる。前項末尾の原注中の三伐恃 。*sâm-b'ịwɒt*。*-°zi*：Pa. *sam-vajji*（=United Vajjis）［*The Pali Chronicle of Ceylon* 中に見える語］は有名なかれらの共和制の名残りか［Cunningham：A.G.I., pp. 512-3；中村：『インド古代史』上二五五ページ］。また前項末尾の原注中の「北印度の境」は、正しくは「中印度の境」とあるべきである。この弗栗恃国は本書では親践した国の如く読めるが、『慈恩伝』では吠舎釐より摩掲陀国に直行したように記し、弗栗恃国の名は見えない。

二　占戌拏　戌拏を麗本は戌挐に作る。何れにしても正確な呼称は不明。今、宋本に依る。占戌拏 。*tsịäm-śịu*。*-*。*na*. この原音を *Cañśuna* のようなものと考え、Janakapura かとする説［Julien：*Mém.*, p.368；Beal：*Records*, II. p.78（101）］があったが、近くは Madhubani の北方約十六マイルにある Bāligarh の廃址を当てる説が強い［Watters：*On Y.Ch.*, II. p.340；Majumdar's Note in *C.A.G.I.*, p.718］。

三　大河　今の Kamla 河であろうか。

四・二　漁夫の教化　これ（大河の東北の伽藍）より西へ行くと、河の辺に拠って窣堵波がある。高さ三丈に余り、南に河の長流を帯びている。大悲世尊が漁師を済度された処である。ここで仏在世当時に、五百人の漁師が仲間を集め党を作り魚を捕えていた。この河流で一尾の大きな魚を捕えた。十八の頭をもち、それぞれの頭には両眼があった。漁師たちはこの魚を殺そうと思った。如来は吠舎釐国におられ、天眼をもって見て慈悲の心を起こされ、この時に乗じて教化し、この好機に因って悟りを啓かせようと考えられ、大衆たちに、

「弗栗恃国に大きな魚がいる。私はこの魚を［教］化［指］導することにより、漁師たちを悟らせようと思う。汝らは適切な時機というものを承知すべきである」

と告げられた。そこで大衆は如来を取り囲み神足で虚空を凌ぎ駆け、河辺にやって来て常のように座を敷き、漁師たちに、

「汝ら魚を殺すなかれ」

と告げ、神通力で方便門（真実の道に導くための仮りの法門）を開かれると、その威力は大魚に及び、魚の宿命を知らせ、人の言葉を話すことができ、人の心を理解できるようにされた。その時、如来は事情を知りながらことさらに、

「汝は前身においてどんな罪を犯し、悪い境遇に流転しこのような醜い身を受けたのか」

と問われると、魚は、

「昔（前世）は世の幸運を受けて豪族に生まれました。大婆羅門の劫比他（注二）というのは私がそれです。その族姓の高貴を恃み道徳をないがしろにし、自分の知識の博いことを恃み経法を賤しみ、軽慢心で諸仏を謗り憎み、醜悪な言葉で僧たちを罵り辱しめました。類を引いて比喩しますのに、例えば駱駝と驢馬、象と馬のような醜い形の対のようだと言いました。このような悪業のおかげでこの醜い姿を受けましたが、今なお過去世よりの善業のおかげで生きながら仏の世に出会い、目のあたり貴い教化を見、親しくお教えを受けることができました」

と答えた。そこで心より謝り前世の所業を懺悔した。如来が機に随い摂取教化されること、あたかも道を開いて手引きするのに随うようであった。魚ははや法も聞いたので、そこで命終したが、この福徳の力のおかげで天宮に上り生まれた。そこで自らの身がどういう因縁で

ここに生まれたかを観察し、かくて宿世よりの生命ということを理解し、仏恩に報じようと願い、諸天人衆と共に肩を並べて立ち戻り、前に進み出て如来を礼拝してから右に繞って身を退き立ち、天の宝・香華で如来に供養を行なった。世尊はこれを指し示し、漁師たちに一部始終を話され、漁師たちのために妙法を説かれると、漁師たちは即座に感化を受け非を悟り心から懺悔をして、網を引き裂き舟を焼き、真如に帰依し法を受けた。染衣を衣て出家し至妙の教えをも聞いたので、漁師たちはみな煩悩を離れ揃って聖果を證した。

注

一　劫比他　巻四の一五に見える国名と同語。Skt. *kapitha.*

四・三　聖跡記念の三塔　度漁人［窣堵波］より東北へ行くこと百余里の、古い城の西に窣堵波がある。無憂王が建てたもので、高さ百余尺ある。仏が昔ここで六ヵ月間説法され、諸天人を済度された所である。

これより北へ百四、五十歩に小窣堵波がある。如来が昔ここで苾芻たちのために戒を制定された。

これに並んで西の遠からざる所に、如来の髪・爪窣堵波がある。如来が昔ここにおられた。(注一) 遠近の村人たちが相継いで参詣し、香を焚き花を散き燈火の絶えることがない。

ここから西北千四、五百里、山を踰え谷に入って進むと尼波羅国（原注　中印度の境）に至る。

注

一　如来が昔ここにおられた　この一句は古本や石山本にはない。不自然な挿入の文で、ない方が良かろうが、今は麗・宋本その他に従い訳しておいた。

五　尼波羅国

尼波羅国(注一)は周囲四千余里で、雪山の山中にある。国の大都城は周囲二十余里ある。山と川が相引き続き、農業によく、花・果が多い。赤銅・犛牛（ヤク）・命命鳥(注二)を産出する。貨幣は赤銅銭を使用している。気候は寒さ烈しく、風俗は卑屈で、性質は剛猛、信義は軽薄である。学芸とてはなく、工芸の技がある。容貌は醜悪で、邪教正法を兼ねて信じている。伽藍と天祠とは垣根を接し軒隅を連ねて［密在して］いる。僧徒は二千余人、大小の二乗を兼ねて学習している。外道の異学をするものは、その数が分からない［ほど多い］。王は刹帝利で、栗呫婆種（本巻の三・三参照）である。近い代に鴦輸伐摩（原注　唐に光冑と言う）(注三)と号する王があった。学深く聡明で、自ら声明に関する論著を作った。その学問を重んじ徳者を尊敬することは遠近に著名であった。

都城の東南に小さい池(注四)がある。うっかり火を投げこむと水はたちまち燃え上がり、さらに他の物を投げこむとそれも火となってしまう。(注五)

ここから復び吠舎釐国に立ち還り、南して殑伽河を渡り、摩掲陀国（原注　旧に摩伽陀と曰い、また摩竭提と曰う。みな訛なり。中印度の境）に至る。

注

一　尼波羅国　尼波羅 *ₒnji-ₒpuâ-ₒlâ*: Skt. *nepāla*, Pkt. *nevāla*, Originally *newār*. また泥婆羅・儞波羅・尼八剌とも。この国も『慈恩伝』の行程には見えず、恐らくは親践国ではなかろう。尼波羅は玄奘渡印当時、吐蕃（西蔵）に隷属し、吐蕃と共に中国よりの使節の王玄策を援助して摩掲陀を征めたことがある。尼波羅国の当時の風習については『唐書』巻二二一上、泥婆羅伝、『文献通考』三三五に詳しい。

二　命命鳥　『玄応音義』一に「命命　梵に耆婆耆婆　鳥と言う。此に命命鳥と言う是れなり」とある。Skt. *jīvajīvaka*, また生生鳥とも共命鳥とも訳す。一身両頭という伝説上の鳥である。

三　鴦輸伐摩（……）　鴦輸伐摩 *ₒ·iang-ₒśiu-b'iwɒtₒ-ₒmuâ*: Skt. *aṃśu-varman*. 光冑（光った鎧・甲の意）に当たる。七世紀初頭に出た英主で、六四二年ごろに死亡。Thākuri 王朝の始祖。かれの存命中に西蔵に接近し、かれの娘 Bhṛkuṭi を西蔵国王 Sroṅ-btsan gam-po の妃とし、王を仏教に帰せしめた。中国から六四一年に入蔵した文成公主は第二妃であった。

四　小さい池　『釈迦方志』上には「城の東南遠からざるに水火邨あり。東一里許りに阿耆波沴水なるあり。周二十歩。旱澇にも湛然として流れず、常に沸く。家火もて之に投ずれば遍池に火起こる。烟焔数尺なり。水を以て火に洒げば火は更に熾を増す。土を砕いて以て投ずるも亦然り。尽く投ずるものを問うことなく並びに灰燼となる。釜を水上に架して食を煮れば立ちどころに熟すと云う」とある。なお『唐書』には阿耆婆瀰池とある。Skt. *ajīva* は死を意味するから、死池と訳すべきである。

五　尼波羅国に関する論著で、特にこの時代に参考になるもの数種を挙げる。D. Wright: *History of Nepal*; V. Smith: *Early History of India*, pp. 379 ff.; R.K. Mookerji: *Harsha*, pp.30-1; B.C. Law: *H.G.A.I.*, p.113; 中村:『古代インド史』下二六二ページ]。

大唐西域記　巻第七

大唐西域記　巻第八　一国

三蔵法師玄奘奉　詔訳
大捴持寺沙門辯機撰

摩掲陀国上

一　概　観

摩掲陀国（注一）は周囲五千余里ある。城は住民が少ないが、村には人家が多い。地は肥沃で農業が盛んである。珍しい稲の種類がある。その粒は大きく、香味は殊のほかすぐれ光沢も特に強い。かの地の言いならわしでは、この米を「大人に供する米（注二）」と言っている。土地は低湿で、高原に住居している。夏の初めより以後、仲秋の前までは常に水が流れ、舟を浮かべることができる。風俗は純朴で、気候は暑い。篤く学問を重んじ、深く仏法を尊敬している。伽藍は五十余ヵ所、僧徒は万余人おり、多くは大乗の教法を学習している。天祠は数十で、異道の人は非常に多い。

注

一　摩掲陀国　摩掲陀 *ₒmuâ-g'ịɒtₒ-ₒd'a*: Skt. Pa. *magdha*, Pkt. *māgadha* [Bairāṭ Asoka Edict. (Hultzsch, p.172); Lüder's List, No. 1345]。旧訳の摩伽陀 *ₒmuâ-g'iaₒ-ₒd'â* は、その第二音節を長母音 *gā* に発音される恐れあり、摩竭提 *ₒmuâ-g'ịɒtₒ-ₒdiei* は語尾が不適である (*magadhi*

は、「マガダ方言」その他を意味する)。また摩竭・摩揭・摩訶陀・默竭陀・墨竭提などとも。無害・無悩害・不悪処・致甘露処・善勝・聡恵・天羅などと訳す。古代インド十六大国の一。大体今のビハール Bihār 州の Gayā, Patna 両県を中心とするガンジス河南方地域に当たる。Śiśunāga 王朝(略前六〇〇—前三六〇)の頻毗娑羅 Bimbisāra 王およびその子の阿闍世 Ajātaśatru 王は仏教・ジャイナ教の開祖と同時代であり、両教はその王朝の被護下に発展した。頻毗娑羅王は勢力を伸展し、平原中の連山に囲まれた要害の地王舎城 Rājagṛha に都した。その後さらに勢力が拡張し、この王朝の末期に華氏城 Pāṭaliputra に遷都し、全領土を支配するに便ならしめた。次いでマウリヤ Maurya 王朝(前三二一—前一八五)は摩揭陀を拠点としてインドを支配し、阿育王の極盛時には政治・文化の中心となった。その後 Śuṅga 王朝(前一八五—前七三)・Kaṇva 王朝(前七三—前二八)・Andhra 王朝(前二三〇—後二二五)。この王朝は初め南インドに起こり、遂に Kaṇva 王朝を滅ぼし、摩揭陀は南インド勢力に隷属した)を経て、後三二〇年に華氏城付近に栴達羅笈多 Candragupta が勢力を得てグプタ朝 Gupta Dynasty を開き、六世紀の中葉まで摩揭陀を中心としてインドに君臨し、インド文化の黄金時代を現出し〔『法顕伝』参照〕たが、以後の後グプタ朝 Later Gupta Dynasty は摩揭陀の一小王たるに過ぎなかった。六〇六年戒日王 Harṣavardhana が即位し北インドを統治するや、曲女城 Kānyakubja(巻五の一参照)に都し六四七年まで在世した。玄奘の渡印はこの時期に当たり、摩揭陀地方は以下の記述の如く荒廃に向かっていた。八世紀には Pāla 王朝が出現したが、当時はなお那爛陀寺を中心とする仏教は盛んであった。しかし、十二世紀の回教軍の侵入により Pāla 王朝が滅亡すると共に摩揭陀地方の重要性も減じて行った〔J.N. Samaddar : *The Glories of Magadha*; B.P. Sinha : *The Decline of the Kingdom of Magadha*; Law : *H.G.A.I.*, pp. 232-4〕。

二　大人に供する米　この米については『慈恩伝』三に「供大人米……その米は烏豆(黒大豆)よりも大にして、飯を作れば香は鮮にして余米は及ばず。唯摩揭陀国のみこの秔(粳)米ありて余処には更に無く、独国王及び大徳にのみ供す。故に号して供大人米となす」とある。パトナ Patna の米は現在インドにおいても優良種と称せられている。

二　波吒釐子城

二・一　華氏城の名称　殑伽河の南に故城がある。周囲七十余里。荒廃することすでに久しいが、基礎はなお残っている。昔、人寿無量歳の時(巻五の一・二注一参照)には拘蘇摩補羅城(原注　唐に香花宮城と言う)(注一)と名づけていた。王宮は花が多いから名としたのである。人寿数千歳のころになって波吒釐子城(原注　旧に巴連弗邑と曰う。訛なり)(注二)と名を改めた。昔、婆羅門の高才博学な人がいた。門人数千人が学業を受けていた。学徒たちは互いに連れだち遊覧していたが、ある一人の学生だけが去りやらず悲しげに眺めていたので、友人は、

「一体、何を悩んでいるのか」

と問うと、

「顔色壮んな年ごろより遊学して人に親しみ、歳月は積もるも学業は成就することもなく、これを考えると憂鬱な気持ちがいよいよ激しくなります」

と答えた。そこで友人はたわむれに、

「今、君のために縁組みをして結婚式をしよう」

と言い、そこで仮りに二人を立てて男の父母とし、〔他の〕二人を女の父母として波吒釐樹——〔梵語〕女性名詞の木である——の下に坐り、時節の果実を採り清流を酌んで、結婚の詞を陳べ親密の契りを約束した。その時、仮りの女の父は花の枝を取り上げ書生に授けて、

「これはよい配偶者です。どうか辞退なさるな」

と言った。書生の心は喜びで満足し、日が暮れて帰るころにも恋し

さの心で止まろうとした。友人は、

「先ほどの言葉はたわむれに過ぎない。どうかいっしょに帰ろう。林の中の猛獣が危害を与えることが心配だ」

と言ったが、書生はそのまま往来の樹の側に留まった。日が暮れた後に不思議な光が野を照らし、管弦の音が風雅に流れ幕や帳が張りめぐらされた。すると老翁が杖をつきやって来て挨拶し、さらに一人の老婆が少女を引き連れて来るのが眼に入った。多くの来客は道路いっぱいに、盛装して音楽を奏した。翁は少女を指さし、

「これがあなたの若い奥さんです」

と言った。かくて歌舞宴楽して七日を経た。友人の学生は獣に殺害されたのではないかと思って出かけて探したところ、唯一人樹の木蔭に坐って目上の客に向かい合っているような様子でいるのが見えたので、いっしょに帰ろうと言ったが辞退して言葉に従わなかった。その後、その書生は自分から城に入り親戚知人に会い、事の始終を話した。話を聞いたものは驚き、友人たちといっしょに林中に行ってみると、花樹は一つの大きな邸宅であり、下僕・召使たちが駆けまわっているのが眼に入った。その上かの老翁は落ちついた態度で接待し、御馳走を陳ね音楽を奏し、賓客と主人の礼を尽くした。友人たちは城に還り、詳しく遠近の人々にこの話をした。一年たち男の子が生まれると、その妻に、

「私は今や帰りたいが、なお妻子と離別するに忍びない。もし留まるにしても、何時かはさすらいに身を寄せることであろう」

と言った。その妻は話を聞くと、詳しく父に申し上げた。翁は書生に、

「人生の楽はどうして故郷に限りましょうか。今私が家を建ててあげ[注三]ましょうから、どうかほかのことをお考えになりませんように」

と言った。そこで人々を役使して日ならずしてでき上がった。[注四]香花の旧城からこの町に都を遷した。かの子供のために神霊が城を築いたので、これより以後は因んで波吒釐子城と名づけたのである。

注

一　拘蘇摩補羅城（……）　巻五の一・二に見える語 Skt. *kusuma-pura* と同じ。巻五では「花宮」と訳す。諸経典に「香」*gandha* のついた語は見えず。ここは玄奘が美称として付けたものか。

二　波吒釐子城（……）　波吒釐 *puât*.*-ta*°*.-lji*: Skt. *pāṭali*. 波吒釐子 *pāṭaliputra*. 波吒釐は以下に出るように梵語女姓名詞の語で、学名 Bignonia suaveolens の、淡赤色のラッパ状の花をつける樹名。また波羅利弗多羅・波羅利弗妬路、波羅黎弗都盧、巴羅利弗・巴陵弗・巴隣・波羅梨などとも。旧訳の巴連弗は「訛」とするが、正しくは「訛略」とすべきである。この都市名は西方文献に、Palibothra [Arrian, *Indica*, X; Strabo, XV. 1.36] と書かれている。古えの都市の遺跡は今のパトナ Patna から西北の Dinapore に至る途中にある。最近の考古学的調査により木製の防材による塞壁の発見およびペルセポリスに似た列柱堂などが明るみに出た［平凡社:『世界考古学大系』八、九八ページ; 鹿島出版会:『都市形態の研究——インドにおける文化変化と都市のかたち』（SD、昭和四四年一一月臨時増刊号）所収の丸山次雄「パータリプトラの都市形態」・佐藤良純「パータリプトラのイメージ」は有用な文である］。

三　家　『華厳経疏』には「城」とする。城の方が前後照応して是であるが、今は家のまま『記』の伝承を標記した。

四　人々を役使して　石山本には「畚徒を役使して」とする。この方が説話としてふさわしかろうが、今は伝承版本により訳した。

二・二　阿輸迦王の牢獄

故王宮の北に石柱の高さ数十尺のものがある。無憂王が地獄を作った処である。釈迦如来涅槃の後の第一百年に阿輸迦（原注　唐に無憂と言う。旧に阿育と曰う。訛なり）王と[注一]

言う人があった。頻毗娑羅（原注　唐に影堅と言う。旧に頻婆娑羅と曰う。訛なり）王の曽孫である。（注一）王舎城より都を波吒釐に遷し、外廓を重ねて築造し、もとの城を取り巻いた。年代漸く遠く、今は唯、故の基礎を残すだけになっている。伽藍・天祠および窣堵波の残址は数百基あるが、［もとの如く］存するものは二、三だけである。唯故宮の北、殑伽河に臨む所の小城中に千余家だけがある。初め無憂王は即位の後、行ない甚だ乱暴で、地獄（牢獄）を作り人々を殺害した。周りの垣根は峻しく峙ち、隅の楼は特に高くした。猛炎・洪鑪（大きないろり）、銛鋒（するどいほこ）・利刃など諸種の責め具を用意し、様子を冥途になぞらえ、凶暴な人を募集して獄主（典獄）の役につけた。初めは国中の法を犯した罪人をば、罪の軽重を取り検べることなく、全部を塗炭の苦しみに追い入れたが、後には牢獄を通りあわせるものをあて、次には捕えて来て殺戮した。ここに来るものはみな死んでしまい、そのまま口を緘し［外に漏れることはなかっ］た。ある時、ある沙門が初めて僧衆に入り村里を巡って乞食をしていたが、たまたま牢獄の門の所にやって来た。獄吏の凶暴な人は捕えて殺害しようとした。沙門は恐れ戦き三宝を礼拝し懺悔したいと頼んだ。と見ると、一人の人が縛られて連れて来られ獄にほうり込まれ、手足を切りさいなまれ、体をはりつけ裂かれ、ほんのつかの間に体がバラバラになるのが見えた。沙門はこれを見るや心から深く哀悼の念を増し、無常観（一切の法は生滅流転するものであると言う真理を観達する）を成就し無学果（巻七の三・二注三参照）を證した。獄卒は、

「死ぬことができるか」

と言うと、沙門ははや聖果を證しているので心は生死に動揺することなく、鑊の湯に入ってもあたかも清池に居て、大きな蓮の花が沙門の座となっているようであった。獄主は驚き走って行って王に申し上げると、王も親ら御覧になり心から神仏の加護を讃嘆された。獄主は、

「大王は死ななくてはなりません」

と言うと、王は、

「どうしてか」

と尋ねた。獄主は、

「王は先に命令され刑獄のことを言いつけられましたが、凡そ獄の垣の所に至るものはみな殺害に付すとのことでした。王が入った場合だけは死を免れるとは言ってありません」

と答えた。王は、

「法は一たび定められれば、道理として再変されることはない。私は先に命令を下したが、どうして汝の身だけを除外例としようか。汝が久しい期間生をむさぼっていたのは私の責任である」

と言い、すぐさま獄卒に命じて獄主を洪鑪に投げ込ませた。獄主が死んだので王はそこを出ることができたのであった。そこで垣根や堀割を壊し埋め、獄を廃止し刑罰を寛大にした。（注二）

注

一　阿輸迦（……）王　阿輸迦 ˳ʼâ-˳śi̯u-˳ka : Skt. *aśoka*, Pa. *asoka*. 旧訳の阿育 *ʼâ-dźi̯ǒk→˳ʼâ-i̯uk。はすでに唐代までに大きく音変している。また阿輸伽・阿恕伽・阿戍笴・阿儵とも。無憂と訳し、天愛喜見王 Devānampiya piyadasi の称あり、無憂増 Aśokavardhana, 可畏無憂 Candāśoka とも称せらる。摩掲陀国孔雀 Maurya 王朝第三世。王朝の始祖旃陀掘多 Candragupta 大王の孫で、父は賓頭娑羅 Bindusāra, 母は Subhadrāngi なりと（玄奘が頻毗娑羅の曽孫と言うは誤り）。幼時甚だ狂暴で父王の寵なく、ために呾叉始羅 Takṣaśilā 国の叛乱に征討軍を率いて遠征させられたが、予期に反してこれを平定、威権大いに張った。父王の死を聞き急ぎ華氏城に帰り、王位に即き、後に灌頂即位の式を挙げた。その主権の範囲は西北インドからアフガニスタン、南はアンドラ Andhra に

及ぶ空前のものとなった。即位後約十年にして仏教に帰依し、「法による勝利なるものこそ是れ即ち最上の勝利なれ」（大磨崖法勅第十三章）の信念で宣布統治した。王の刻石法勅は今に存してその統治法を知り得ると共に、その分布の範囲・刻石用語の多様（アフガニスタンのカンダハール地方からギリシア語のものまで発見されている）からかれの用意が分かる。王の年代は大磨崖法勅第十三章に見えるギリシア五王国の各王在位年数より大体決定せられ、その在位は恐らく前二六八—前二三二ごろとされる。また仏滅より王の出世に至るまでの年数は、北方伝の『雑阿含経』二三その他は百年とし、『異部宗輪論』は百有余年、『十八部論』『部執異論』は百十六年とする。南方伝では二百十八年とし大きな差がある［V. A. Smith : *Asoka* ; R.K. Mookerji : *Asoka* ; P. H. L. Eggermont : *The Chronology of the Reign of Asoka Moriya* ; 碑文については、E. Hultzsch : *Inscriptions of Aśoka*. CII. Vol. I ; A. C. Woolner : *Aśoka, Text and Glossary* ; 研究論著の目録は少しく古いが、M. A. Mehendale : *Aśokan Inscriptions in India, A Linguistic Study, together with an exhaustive Bibliography* ; なお最新の紹介は、中村：『インド古代史』下 三二一七ページ 以下第三節の「古代インドの社会的現実——マウリヤ王朝時代研究資料——」に詳しい］。

二 頻毘娑羅（……）王の曽孫　頻毘娑羅 *ₒb'ĭen-ₒb'ji-ₒsâ-ₒlâ* : Skt. Pa. *bimbisāra* また民弥沙羅・瓶沙・萍沙など。訳して影勝・影堅。前注の如く無憂王は賓頭娑羅の子で、王朝の始祖旃陀掘多の孫であり、玄奘の記述は誤りである。頻毘娑羅王は Śiśunāga（Śaiśunāga）王朝第五世（在位略前五八二—前五五三）で仏教・ジャイナ教の祖師と同時代の人であり、摩掲陀国隆盛の功労者。その子阿闍世王 Ajātaśatru に殺された。

三 無憂王の帰仏因縁譚　これに関しては南北の二伝ある。北伝では『雑阿含経』二三、『阿育王伝』一、『阿育王経』一、『分別功徳論』三、*Divyāvadāna* 等。玄奘の所伝は『雑阿含経』によるものらしい。南伝は『善見律毘婆沙』一、*Mahāvaṁsa*, i. 5 ; *Dīpavaṁsa*, 6 等。

二・三　八万四千塔

地獄［石柱］の南、遠からざる所に窣堵波がある。基壇は傾き崩れているが、なお覆鉢の勢を残している。宝石で飾りとし、石で欄楯としている。これが八万四千塔の一（注一）である。無憂王が人の力で御殿に建てたものである。中に如来の舎利が一斗入っており、霊験がまま起こり、神聖な光が時に輝くことがある。無憂王が獄を廃止した後、近護大阿羅漢（巻四の七・三注三参照）に出会った。［羅漢は］方便をもって巧く誘い、時機に随って教化した。王は羅漢に、

「私は幸いにして前世よりの福徳をもって位は人尊を極めましたが、残念なことには障碍多く仏の直接の教化に遭えませんでした。今は如来の遺身舎利があります。重ねて多く窣堵波を修建したいと思います」

と言うと、羅漢は、

「大王が福徳の力で百霊を使役し、弘く衆生を済わんとする誓いの心で三宝を護持されることは、私の願う所であります。今はまさにその時であります」

と言い、これを因として、広く土地献納の由来、如来の予言、仏塔興建の功徳を説いた。無憂王はこれを聞き大いに喜び、鬼神を召集して命令するに、

「法王（仏）が功徳に導かれることは衆生にとって喜びである。私は宿善のおかげで尊さ人間界を極めている。今、如来の遺身舎利をば重ねて供養をしようと思う。そこで汝ら鬼神は力を併せ心を同じくし、土地は贍部洲の涯を極め、家の拘胝（億、巻九の二・三参照）の人口を満たす所には仏舎利で窣堵波を建てよ。この願いは私の心に発したものであるが、この仕事は汝らにより成功するものである。勝れた福徳の利益を独占しようとするのではない。それぞれ工事を行なって後の命令を待て」

と告げた。鬼神は旨を受けて至る所で作業を始めた。工事が竣功

すると、みなやって来て次の命を請うた。無憂王は八国に建ててあった窣堵波（巻六の四・三注一参照）を発掘してあったので、その舎利を分け鬼神に手渡し、羅漢に、

「私の心の願いでは、何所の塔も同時に舎利を収蔵したいと思っています。心にこのように願っておりますが、事はうまく行きそうにもありません」

と言うと、羅漢は、

「王は鬼神に、期日になり日が蔽い隠され、その状況が手で蔽ったようになったならば、その時こそ舎利を収下せよと御命令ください」

と言った。王はこの旨を承知し鬼神に宣告した。期日となり無憂王が天景を観測していると、日が正午となった時、羅漢は神通力で手をさし伸ばして日を蔽った。[諸所の塔を]営造している所では、全部のものが仰ぎ見て、この時を同じくし功績は全く完了した。

注

一　八万四千塔　八万四千とは物の多いことを表わすインドの常数で、必ずしも実数をいうのではない。時に略して八万と言うこともあるも同じ。阿育王が八万四千塔を建てたことは『雑阿含経』二三に見え、日蝕の日に仏舎利収蔵を行なったと言う。なお『阿育王経』一、『阿育王伝』一参照。なお『法顕伝』には「阿育王七塔を壊し八万四千塔を作る。最初作る所の大塔は城の南三里余に在り」とあり、玄奘記述の位置と異なる。また『西域記』に「八塔を開く」とするが藍摩国の塔に竜の願いにより開発しなかったこと、すでに巻六の三・一に見え、法顕の「七塔」が正しいわけである。

二・四　仏足石（注一）

[無憂王] 窣堵波の側、遠からざる所にある精舎に大きな石がある。如来が履まれたもので、両足の跡が今も残っている。その長さは一尺有八寸、広さは六寸に余るものである。両方の足跡はともに輪相があり、十本の指にはみな花の文様を帯びている。魚の文様もはっきり浮かび上がり、光明を時に照らすことがある。昔、如来がまさに寂滅に入ろうとされ、北して拘尸那[掲羅]城に行こうとされるとき、南を向き摩掲陀国を振り返り見られ、この石の上を踏んで阿難に、

「私は今最後にこの足跡を残して寂滅に入ろうと思う。摩掲陀国を見ますに、百年の後に無憂王と言う人があり、天下を統一し君臨して都をこの地に建て、三宝を護持し百神を役使するであろう」

と言われた（巻七の三・七参照）。無憂王が即位するにおよび、都を遷し邑を築き、仏足石を取り囲んでしまった。宮城に近くもあるので、常に親ら供養した。その後、諸国の王は争って石を持ち上げようとしたが、石は大きくもないのに何人かかっても動かすことはできなかった。最近に設賞迦王（注二）が仏法を破壊するがまま、石の所に来て聖跡を隠滅しようとしたが、鑿を入れ終わるとまたもとどおりに平らになり、文様も故どおりであった。そこで殑伽河の流れに棄ててしまったが、すぐに本処に戻った。その側に窣堵波がある。過去四仏の座および散策された遺跡の場所である。

注

一　仏足石　これについてはすでに、巻二の三・四および巻三の一・四に説明した。『慈恩伝』三に「両足の下に千輻輪の相あり、十指の端に万字・花文及び瓶・魚等あり。皎然として明著たり」とある。

二　設賞迦王　巻五の一・三に説明した。なお本巻の六・三も参照。王の国土は巻十の八に出る。

二・五　阿育王石柱刻文残欠　仏足石精舎の側、遠からざる所に大石柱がある。高さ三十余尺、文句は残欠しているが、その大略は「無憂王は信心堅固で、三度贍部洲をば仏法僧に布施し、三度諸の珍宝をもって復び自分で買い戻した」とある。その辞にしかじかと、大略ここにあるようなものである。(注一)

注

一　阿育王石柱　『法顕伝』に「阿育王七塔を壊し八万四千塔を作る。最初作る所の大塔は城の南三里余にあり。此の塔の前に仏脚石あり。精舎を起こすに、戸は北向す。塔の南に一石柱あり、囲は丈四、五、高さ三丈余。上に銘題あり、云く、阿育王は閻浮提を以て四方の僧に布施し、還た銭を以て贖う、是の如くすること三反」とある。この石柱は一九〇三年、L.A. Waddel が鉄道線路の南側 Kumrahar を発掘した際に発見された。石柱は大小さまざまな破片となっている［天沼俊一：『印度旅行記』二七五ページ以下、二九四ページに破片の写真あり；尾高鮮之助：『印度日記』二四〇ページ］。しかし、法顕や玄奘の言及している刻文は何も見ることはできないようである。

二・六　摩醯因陀羅（阿育王の同母弟）　故宮の北に大きな石室がある。外部は高い山のようであり、内部は広さ数丈ある。無憂王が出家した弟のために鬼神を使役して建てたものである。初め無憂王に同母の弟の摩醯因陀羅（原注　唐に大帝と言う）(注二)と名づけるものがいた。貴族の生まれつきであるが、服装は王の制例を犯し、贅沢で乱暴なため、人民たちは怨みを抱いていた。大臣の老臣は王に、

「驕ままな弟御の乱暴のなさり方は、余りにも行き過ぎています。一体、政治がうまく行けば国は治まり、人々が平和であれば君主は安心であるとは古えの明訓であり、その由来は久しいものがあります。願わくば国法をお考えになり、捕えて役人に渡し、法を執行されますように」

と諫言した。無憂王は泣いて弟に、

「私は祖先の基業を承け継ぎ人民を覆護して来ました。まして汝は同母の兄弟であり、どうして愛情を忘れたことがあろうか。しかし指導を先にしなかったばかりに、刑罰に陥ちこむことになってしまった。上は先祖の霊に申し訳なく、下は衆議に迫られている」

と言った。摩醯因陀羅は頭を地につけ謝罪して、

「自ら行ないを謹むことをせず、国家の大法にもとることをしました。しかし、どうか再生の機会を賜わり、後七日だけ御猶予ください」

と言った。そこでかれを幽室に入れ厳重に警戒をし、珍しいさまざまな御馳走を進める点に至らぬことはなかった。警護のものは、

「はや一日過ぎました。あと六日です」

と唱えた。第六日となると、不安も深まるので身心を一層励ましたところ、証果を得て虚空に昇り神通力の迹を示し、それから俗世界を出て遠く巌谷に棲むこととなった。無憂王は自ら出かけて行き、

「もとは国法に捕われ厳刑に処しようとする所であった。世俗を離れて空に昇り、聖果を証るとは思いもかけなかった。もう過去の積もった罪も消えたのであるから国へ帰ろう」

と言うと、弟は、

「昔は愛情の網につながれ、心は音楽や女色に向かっていました。今は危い城を出て山谷を喜ぶ気持ちです。どうか世間を棄てて山岳に身を寄せることをお許しください」

と言うと、王は、

「心境を静かにしようと思うならばとて、必ずしも奥深い巌谷には限るまい。私は汝の気持ちに従ってりっぱに作ってあげよう」

と言った。そこで鬼神に命令し、

「私は後日に御馳走を十分に準備するから、汝らは相連れだって私の会に来集するように。その節は各自大きな石を持って来て銘々で椅子とせよ」

と告げた。鬼神たちは命令を受け、期日となると悉くのものが集まって来た。宴会が終わると王は鬼神たちに、

「石座は縦横不規則であるから、各自積み上げるように。そうすればそのまま苦労せずして積み上がり、石室ができ上がろう」

と告げた。鬼神たちは命令を受け、日ならずしてでき上がった。無憂王は自ら招待に出かけて、この山の廬に弟を居らせた。

注

一　摩醯因陀羅（……）　摩醯因陀羅 ₒmuâ-ₒxiei-ₒ ʼiĕn-ₒd'â-ₒlâ : Skt. *mahendra.* 阿育王の同母弟とするのは北伝であり、『阿育王伝』二、『阿育王経』三、『分別功徳論』三、*Divyāvadāna*, ch. 28. 等に見える。南伝では Pa. *mahinda*（摩哂陀・摩呻提）、阿育王の子とし、セイロン島に仏教を伝えた人とする（『善見律毘婆沙』一―三、*Dīpavaṁsa*, VII ; *Mahāvaṁsa*, V）。なお巻十一の一・四参照。

二・七　石槽と小石山および五仏塔　故宮の北、地獄の南に大きな石の槽がある。無憂王が鬼神に作業を課してこの器を作らせたもので、僧に食を供する時に食を容れている。

故宮の西南に小さな石山があり、巌谷の間を取りまいて数十の石室がある。無憂王が近護（巻四の七・三注三参照）たち諸阿羅漢のために鬼神を使役して建立したものである。傍に故い台があり、基礎の石積みだけが残っている。池や沼は波も清らかに、鏡のごとく澄んでいる。隣国の人や遠国の人はこれを聖水と呼び、飲んだり沐浴したりするものは罪業が消滅すると言っている。

山の西南に五つの窣堵波がある。基壇はもう崩れ落ちているが、遺址は今でもなお高く、遠くから眺めるとこんもりと丘陵のようである。一辺はそれぞれ数百歩ある。後世の人がその上にさらに小さな窣堵波を建てた。『印度記』（巻七の七・三注一参照）に、

「昔、無憂王が八万四千の窣堵波を建てたところ、なお五斗の舎利が余っていたので、別に五つの窣堵波を建立した。その作り方は諸所のものよりも珍しいものであった。不思議なことが時おり起こって、如来の五分の法身（注一）を表現することがある。信仰の薄いやからは密にとかくの評をし、『昔、難陀王（注二）がこの蔵を建てて七宝を貯えたのだ』と言うものもあり、その後、あまり信仰心のない王がこのあやしげな話を耳にし、その貪欲な心のままに軍隊を動かし自ら発掘しようとしたところ、大地は震動し山は傾き、雲は暗く日は翳り、窣堵波の中から大音声が響き渡り、士卒は倒れ象や馬は驚き走った（注三）。このことから以後は、この塔を窺うものとてはない」

と言っている。

「世間の取り沙汰は多いけれども、まだ確実な話はない」

と言うものもあるが、古い時代に書かれた記録に従って、事の真実を知ることができた。

注

一　五分の法身　仏および阿羅漢が具備する五つの功徳、即ち戒身（身・口・意の三業が一切の過非より離れた境地）・定身（真心寂静にして一切の妄念を離れた境地）・慧身（真知円明にして宇宙本有の実性を観達する

境地）・解脱身（身心一切の繋縛を解脱する境地）・解脱知見身（己が真に解脱せるを知る境地）の五種で、この順序に肉体的・精神的な欲望を抑えることから次第に悟境に進むあり方を示したもの。

二　難陀王　マウリヤ朝の前に出たナンダ Nanda 王朝の君主と言う意味か。難陀王朝は巨大な軍事力とそれを維持し得るに足る経済力をもっていたらしい。物語ではナンダ王は九億九千万の金貨をもっていたと伝えられている［中村：『インド古代史』上二八二ページ以下］。

三　『印度記』……　何処までを『印度記』の内容とするかについては在来の諸書一致しない。仏塔の伝来について述べたもの（或いは話）らしく、その点からするならば、今ここに訳したように読むのが最も妥当であろうと思われる。

三　鶏園寺およびその付近

三・一　鶏園寺　故城の東南に屈（原注　居勿反→*kịuət*。）屈吒阿濫摩（原注　唐に鶏園と言う）僧伽藍（注一）がある。無憂王が建てたものである。無憂王は初め仏法を信仰するや、手本どおりに建立し善根を植え、凡夫僧と聖僧（注二）の両方の僧千人を召集し、四事（衣服・飲食・臥具・湯薬）の供養を行ない必要なものを残りなく供給した。伽藍の崩れ壊れることすでに久しいが、基礎は今も残っている。

注

一　屈屈吒阿濫摩（……）僧伽藍　屈屈吒阿濫摩 *kịuət*。*-kịuət*。*-ṭa*°。*-'â-lâm*°-。*muâ*: Skt. *kurkuṭa-ārāma*, Pa. *kukkuṭa-ārāma*. 訳して鶏園・鶏林園・鶏林精舎・鶏雀寺・鶏雀精舎など。また鶏頭摩寺・鶏頭末寺とも。阿含経典によれば阿育王が優波崛多をこの寺に迎え供養礼拝し仏塔を建てた［『雑阿含経』二三］とあるが、この寺を建立したことは見えない。『善見律毘婆沙』二などの上座部系の南伝では阿育僧伽藍 Asokārāma において阿育王の灌頂即位十六年に第三結集を行なったと伝えるが、大衆部系の北伝にはこの結集を伝えず、今日では歴史的にもこの結集は否定されている。

二　凡夫僧と聖僧　凡夫僧とは出家し僧団に入るも、なお断惑證理ないものを言い、聖僧とは聖果を得た僧を言う。

三・二　阿摩落迦塔　伽藍の側に大きな窣堵波があり、阿摩落迦（注一）と名づけている。阿摩落迦と言うのは印度の薬用果実の名である。無憂王が病気にかかり長びき重くなった時、もはや余命の長からざるを知り、珍宝を寄捨して福善を生ずる供養をしようと思った。ところが権力のある家臣や政治にたずさわるものたちは、王の思いどおりにしないようにと誡めた。その後、食事の際に阿摩落果を食べずに残し、これを手中で玩んでいたら半ば形がくずれて来たので、果実を手に握って長大息し、家臣たちに、

「贍部洲の主人は今は誰であるのか」

と問うたところ、家臣たちは、

「唯大王だけです」

と答えた。王は、

「さにあらず。私は今は主ではない。唯この果実の半分だけが思いどおりになるのみだ。ああ、世間の富貴というものは、そのたよりなきこと風前の燈火よりも甚だしい。位は天下の最高に居り、呼び名は大王と高いけれども、臨終において物に乏しく、強力な家臣に押えられている。天下は私のものではなく、半分の果実だけが私のものとしてここにあるのみ」

と言った。そこで側近の家来に命じて、

「この半分の果実を持参し、かの鶏園に行って衆僧に施物として差し出し、
『昔の全贍部洲の主、今は唯半分の阿摩落の王は大徳の僧方の御前に礼拝し、最後の施物をお受け取りくださるようお願い申し上げます。身に持てるあらゆる物はすでになくなり、唯この半果だけが僅かに自由になります。私の貧乏を哀れみ、福徳の資糧を増長せしめられんことを』
と言葉どおりに言うよう」
に言いつけた。[そのようにすると] 僧中の上座の人が、
「無憂大王はつとに弘く天下を済わんと期しておられましたが、疾病は王の身にあり、姦臣は命令を勝手にしており、王の積宝も自由にならず、唯半果のみを施物とされます。王がよこされた命令を謹み承り、あまねく衆僧に施しましょう」
と言葉どおりに言い、直ちに典事(衆僧の雑事を司る役。典座とも言う)を呼び、羹の中で紐で結んで煮させ、(注二) その果核を収蔵して窣堵波を建てた。大王の厚恩を受けているので、大王の言葉のままに遺詔をはっきりと表示した。(注三)

注

一 阿摩落迦 ˳ʔâ-˳muâ-lwâk˳-˳ka : Skt. āmalaka. 巻二の一・一五注七「阿末羅果」と同物。阿摩落とも書いたらしいことが、この後すぐに阿摩落果・阿摩落王とあること、およびこの話のもとと思われる『阿育王経』五に「阿摩勒果」、『大荘厳論経』五に「菴摩勒果」とあることより知れる。本巻の六・四参照。

二 羹の中で……煮させ 原文は「羹中捻煮」とある。捻煮とは見かけぬ語であり、今は仮りの訳をあてた。『阿育王経』五には「砕いて以て末となし、以て羹中に置く」とする。

三 この話は Divyāvadāna. pp. 430-3, 『大荘厳論経』五、『阿育王経』五等に見えるものである。阿育王はその晩年、孫の三波地 Sampadi (具足と訳す) を太子とし自らは仏法を修し政治を委ねていたため、諸大臣が次第に阿育王の権限に制限を加えて行き、十分の布施もできなくなったことを物語っている。阿育王の係累については、中村:『インド古代史』上四二二ページ以後を参照。

三・三 提婆の建揵稚声塔

阿摩落迦窣堵波の西北、故い伽藍の中に窣堵波の建揵稚声(注一)[塔] と呼んでいるものがある。初めこの城内には伽藍が百数ヵ寺あり、僧徒は謹み深く学業も誉れ高く、外道の学者たちも口を緘して論争するものはなかったが、その後 [名のある] 僧徒は相次いで死に、後進のものたちは先輩を継ぐほどのものはなかった。一方、外道の師承は教えを伝えて学芸をりっぱに成就して行った。そこで [外道の人々は] 仲間を召集したところ、千もて計り万もて数えるほど多数がやって来て僧坊に集まり、大声を揚げて、
「揵稚(注二)を撃って学者を招集せよ」
と叫んだ。愚かな僧たちが群れを作り集まり、その中にうっかり揵稚を叩くものがいた。そこで王に申し上げて両者の優劣を比較討論するように願った。[ところが] 外道の諸師は才高く学芸に達した人々であったが、僧徒の方は人数は多いが論辞甚だ浅薄な人たちであった。外道の人々は、
「我々の方の議論が勝ったならば、これより以後はどの僧伽藍も揵稚を叩いて僧衆を召集することはできない」
と [僧徒に対する制裁を] 主張した。王は願いどおりに論議をさせ、[その結果] 先の議論の制約のとおりに [揵稚を叩かないように] させた。僧徒は辱しめを受け、恥を忍んで敗退し、以後十二年間揵稚を叩くことなくして過ぎた。その当時、南印度の那伽閼剌樹那菩薩 (原

注　唐に竜猛（りゅうみょう）と言う。旧訳に竜樹と曰う。非なり（注三）は幼にしてりっぱな誉れを称えられ、長じては高名を十分に馳せていたが、愛欲を捨て出家修行し、深妙な理論を考究して位は初地に登っていた。この人に大弟子の提婆（デーヴァ）（注四）と言うものがいたが、智恵明敏にして機転あり才智が良く働く人であった。この提婆がその師の竜猛に、

「波吒釐（パータリ）城の諸学者たちが外道に屈服して揵稚を撃たないようになってから、日月は早くも移り変わり、もう十二年になります。私は何とかして邪見の山を打ち砕き、正法の炬火（かがりび）を燃やし（注五）たいと思います」

と言うと、竜猛は、

「波吒釐城の外道は博学であり、汝はその相手ではない。私こそ今、行こう」

と答えた。提婆は、

「腐った草をつき落とすのにどうして山を傾ける必要がありましょうか。御指教を承って異学の人たちを退けてまいりましょう。大師（先生）は外道の議論をお立ていただきましたならば、私は文句に随って論破して行き、その優劣をはっきりさせてから後に行くものを相談しましょう」

と言った。竜猛はそこで外道の議論を立て、提婆はその文句に随いその理論を打ち破って行き、七日の後に竜猛は理論の根本を失ってしまった。外道の論議が破られてしまったので竜猛は感嘆して、

「誤った言葉は根本を失い易く、間違った道理は支え難いものである。汝こそ行きなさい。かれを破砕するであろうことはもう決まっている」

と言った。提婆菩薩は早くより高名を馳せておられたから、波吒釐城の外道の人々がこの話を耳にするや、直ちにみなが集まり、走って王に、

「大王は先ごろ聴覧を垂れ給い、沙門たちを制して揵稚を撃たないようにされました。今、願わくば命令を垂れて諸門を見張らせ、隣国の外国僧侶を城に入ることのないようにさせてくださるように。かれらは仲間を組んで軽々に先の制約を改めるのではないかと思ってのことです」

と申し上げると、王はその言を聞き入れ厳重に見張りを加えた。提婆はやって来たが城に入ることができなかった。出されている命令を聞くや、衣服をとり換え、僧伽胝（サンガーティー）（袈裟（けさ）。巻一の三二・二注七参照）を畳んで草の束の中に入れ肩にかつぎ、裳（もすそ）をからげて疾駆して城門を入った。城中に入ってから草を棄て衣を着て、この伽藍にやって来て宿泊を願ったが、知人とてはほとんどなく泊めてくれるものとてはなかったので揵稚の台の上で夜を明かした。朝方になると揵稚を大きな音をさせて撃った。人々はその音を聞き、よく見ると、何と昨日の旅の比丘であった。他の僧伽藍はかの寺の響きに応じて揵稚をならした。王は揵稚の音を聞き問い質（ただ）したが、最初に鳴らしたものが誰か知り得なかった。［使のものが］この伽藍にやって来ると、人々はみな提婆を［重ねて外道と対論することを求めている人であると］推した。提婆は、

「一体、揵稚と言うものはこれを叩いて人々を集めるものであるのに、これがありながら使用しないならば、これを懸（か）けておくのは何のためであるか」

と言うと、王の使は、

「先ごろ僧侶たちが論議して敗退し、僧たちに撃ってはならぬと制してからもう十二年になります」

と知らせた。提婆は、

「それあるからこそです。私が今日、復び法鼓を鳴らしたのは」

と言い、王に、

「外国の沙門が過般の恥を雪ごうと思っています」と報告させた。王はそこで学者たちを召集し制約を定めて、「執るところの論がその論拠を失したならば、身を殺して謝罪すること」

とした。そこで外道の人々は争ってりっぱな陣容を布き、外道の義理を口やかましく談じ、それぞれが弁辞の鋭さをきらめかした。提婆菩薩は論座に昇ると、外道の人々が先に述べる言葉をよく聞き、その義理に随って論破し、十二日（原文は浹辰）も経ない間に諸の異道の人々を打ち摧いた。国王や大臣たちの慶祝しないものはなく、この霊塔を建てて菩薩の至徳を表彰した。

注

一　建揵稚声［塔］　揵稚の音を鳴らした場所を記念する塔の意。

二　揵稚　旧訳の語彙で、Skt. Pa. *ghaṇṭā* に対し、時を報ずる器具の名。『玄応音義』一に「揵稚は打つ所の木なり。或いは檀、或いは桐、此に正翻なし。彼に鐘磬なきを以ての故なり」とあり、もとは木製であったらしく、後には銅製のものもできた。その打つ時期については、『大比丘三千威儀』下に「一には当に会すべし、二には当に会して読経すべし、三には布薩、四には僧を会して飯せしむ、五には一切の非常なり」とある。

三　那伽閼剌樹那菩薩（……）　那伽閼剌樹那 ˳nâ-˳g'ia-'ât˳-lât˳-ẑiu°-˳nâ: Skt. *nāga-arjuna*. 二―三世紀に生存した南インド婆羅門の種で、大乗仏教をインドに盛んにした人。インドでは中観派の祖とされ、また付法蔵の第十三祖、中国および日本では古来八宗の祖として尊崇する。本書の巻十の一二・三に詳しい。その名はまた那伽夷離淳那・那伽曷樹那・那伽阿順那に作り、また竜勝とも訳す。その梵名については唐・法蔵の『十二門論宗致義記』上に「竜樹菩薩……は梵語に名づけて那伽阿順那と作す。那伽は此に竜と云い、阿順那は羅什は翻じて樹となし、慈恩三蔵（玄奘）は翻じて猛となす。並びに適対正翻に非ず。知る所以は近く大原三蔵（地婆訶羅）に問うに云わく、西国の俗尽く説く、前代に猛壮の人あり、阿順那と名づく。翻じて猛となすは但彼の人を指すのみ、正しくその名を訳するに非ず。又西国に一色樹あり、亦阿順那と名づく。此の菩薩は樹下に在りて生まる、因て阿順那と名づく。是の故に翻じて樹となすは亦かの樹を指す、正しく名を翻ずるに非ず」と言っている。

四　提婆　すでに巻四の九・四、巻五の四・二にも見えているが、巻十の一二・三に詳しい。

五　邪見の山を打ち砕き……燃やす　この成語は隋・吉蔵の『三論玄義』の「善巧の説法は正法の炬を燃やし、邪見の幢を滅せん」を襲ったものであろう。

三・四　馬鳴の旧跡

建撃揵稚窣堵波の北に故い基礎がある。昔、鬼弁婆羅門(注一)が居た場所である。当初この城にある婆羅門が家を林中に建て世間と交わらず、鬼神を祀って福を求め魍魎と仲間になり、人と高論劇談するにりっぱな言葉が響きに応じて口から出た。人のこれを論難するものがあると帷を垂れて向かいあった。在来の才高き学者たちもその右に出るものはなく、世人は悉くこの婆羅門を聖人のごとく仰ぎ見ていた。その当時に阿湿婆窶沙（原注　唐に馬鳴と言う）(注二)と言う人がいた。その知識は万物に行きわたり、仏教の修行は三乗(注三)にあまねきものがあった人である。常に人に、

「この婆羅門はその学問に師承もなく技芸に伝統もない。戸を閉ざして独り住まい、高名をほしいままにしている。神鬼と仲間になり、もののけが味方するのでなければ、どうしてこのようにできようか。そもそもその弁舌は鬼神の伝授によるものであり、その言葉は人に向かって出しているものではない。その話は一度は耳にし得ても、二度と繰り返して述べることはできない。私は今かれの所に出かけて、その振舞いを観察しましょう」

と言ってその婆羅門の廬に行き、
「貴殿のりっぱな徳を讃仰することすでに久しいものがあります。どうか帷を上げて面と向かい合い、私のかねての志を申し述べさせていただきますように」
と言ったが、婆羅門は依然として高ぶった態度で、帷を下ろしたまま向かい合い、とうとう顔を合わせて話をしなかった。馬鳴は鬼神・もののけの気持ちが甚だ自ら高く持していることをさとり、話し終わって退出し、人々に、
「私にはもうよく分かった。かれを論破し得ることは必然のことだ」
と言った。ついで王の所に出かけ、
「どうか、かの居士と論議を闘わすことを御許可ください」
と申し上げると、王は聞いて驚き、
「一体あなたはどういう人ですか。三明を證し六通を具え（巻二の四・六注三参照）た人でなければ、どうしてかの婆羅門と対論し得ましょうか」
と言った。「それでも」王は乗り物の支度を命じ、自ら臨幸し対論を仔細に観察することにした。この対論にあたり、馬鳴は三蔵（経・律・論）の微妙な言辞を論じ、五明（巻二の一・七参照）の大義を述べた。その弁舌は縦横に妙を振るい、その議論はまことに高遠なものであった。ところが婆羅門が馬鳴に対し反論を述べ終わるや、馬鳴は、
「私の言葉の本旨を取り違えている。もう一度繰り返して述べていただきたい」
と言った。すると婆羅門は黙然として口を閉ざしたままでいた。馬鳴は叱咤して、
「どうして非難に対する釈明をしないのですか。鬼神やもののけに事えているのだから、速やかに返答を授けてもらいなさい」
と言い、す早く間の帷を引き上げて、怪しげなものに問いたずねているのを見たので、婆羅門は慌てふためき、
「おやめなさい。おやめなさい」
と言った。馬鳴は座をすさって、
「この人は今やその盛大であった名声を失墜してしまいました。虚名は久しく維持し得るものに非ずとは、このことを言うのです」
と言うと、王は、
「りっぱな徳をもつ人でなかったならば、誰が邪道を鑑別し得たであろうか。人を判断する明は空前絶後である。国には定まったおきてがあるのだから、このすぐれた人物を表彰すべきである」
と言った。

注
一 鬼弁婆羅門 後出する「弁を鬼授に資る」が故にこの名ができたもの。
二 阿湿婆窶沙（……） 阿湿婆窶沙 *·â-śiep-b'uâ-g'iu-ṣa* : Skt. *aśvaghoṣa.* 馬鳴或いは功勝とも名づく。出世年代については諸種の異論があるが、迦膩色迦王と同時代の人と推定され、従って仏滅後約六百年即ち西暦二世紀ごろと考えられる。舎衛国娑枳多 Sāketa 城の人で、初め外道に通じ論議を善くしたが、脇尊者（巻二の四・六参照）に論破せられその弟子となり、それより博く三蔵を学び衆に恭敬せられた。著書多く、特に文才あり歌詞を作った。中に『仏所行讃』*Buddha-carita* は有名で、今に梵文を伝えている［鳩摩羅什訳：『馬鳴菩薩伝』一巻：『付法蔵因縁伝』五：金倉圓照：『馬鳴の研究』］。
三 三乗 人の能力に応じて悟りに至らしめる教法を乗り物に喩えたもので、声聞・縁覚・菩薩の三を言う。

三・五 華氏城西南の塔寺

城の西南隅より二百余里のところに伽藍の遺址がある。その傍に窣堵波がある。神々しい光が時に輝くこと

があり、不思議な現象が時々起こることがある。遠近の人々はここに願いごとを祈らないものはない。ここは過去四仏の座所と散策された所である。

四　鞮羅択迦伽藍およびその付近

四・一　鞮羅択迦伽藍　［城の西南隅より二百余里の］故い伽藍より西南へ行くこと百余里で鞮羅択迦（テーラーダカ）伽藍(注一)に至る。庭・建物は四院よりなり、観・閣は三層になっている。高い台は幾尋（ひろ）もあり、幾重にもなった門は大きく開かれている。頻毘娑羅（ビンビサーラ）王（巻八の二・三参照）の末孫が建てたものである。才高き人を表彰し招き、徳高き人を広く呼び、外国の学者や遠方の秀才たちは仲間をなし集まり、追随してやって来た。僧徒は千をもって数えるほど居り、みな大乗を学習している。中門からの道には三つの精舎があり、上には輪相（相輪）を安置し鈴鐸（れいたく）を宙にぶら下げてあり、下には幾層もの基壇を築き欄楯をぐるりに巡（めぐ）らしてある。戸・窓・棟（むね）・梁（はり）や垣根・階段には金銅が刻み込まれ美しさを雑（まじ）えている。中の精舎の仏の立像は高さ三丈あり、左は多羅（ターラー）菩薩(注二)、右は観自在菩薩で、この三像は鍮石（とうせき）を鋳て作ったものである。威厳はおごそかに、人知れざる御利益は遠くにまで及んでいる。精舎の中にはそれぞれ舎利が一升あり、不思議な光が照らすこともあり、珍しい瑞祥が時々起こることがある。(注三)

注

一　鞮羅択迦伽藍　鞮羅択迦 *ₒtiei-ₒlâ-d'ək.ₒ-ₒka* は『慈恩伝』三に低羅磔迦 *ₒtiei-ₒlâ-ṭək.ₒ-ₒka* に作る。Skt. *teläḍhaka* に対する。那爛陀（ナーランダ）の西二十一マイルの現在 Tillāra と称する土地がこれに当たり、この地名もこの寺名の変化したものと考えられる［Cunningham : A. G. *I*., pp. 521-2］。この地方から出土した碑文によりこの Telāḍhaka の名は確認されている［Majumdar's Note, in C.A.G.*I*., p.720］。

二　多羅菩薩　多羅 *ₒtâ-ₒlâ* : Skt. *tārā*. 観世音菩薩の変化身であるから、また多羅観世音とも称する。観自在菩薩の西方に坐する菩薩。インドにおいて盛んに崇拝されたようで、巻九の三・七にも見える。

三　『慈恩伝』三および四によるに、玄奘はこの寺に往路にも立ち寄り、帰路には二ヵ月の間滞在し般若跋陀羅（プラジュニャーバドラ） Prajñā-bhadra（智賢）について有部の三蔵と声明・因明等を学んだ。

四・二　仏陀入定の大山　鞮羅択迦（テーラーダカ）伽藍より西南九十余里で大きな山(注一)に至る。雲や石は奥深く、仙人の居る所である。毒蛇や暴竜がその草むらに穴居し、猛獣猛鳥は林中に巣くっている。山頂には大きな岩があり、その上に窣堵波が建っている。その高さは十余尺ある。仏が入定された処である。昔、如来が下界に降りここに止まり、この磐石（ばんじゃく）の上に坐り滅尽定（聖者が仮りに涅槃に入る想をなして行なう定）に入られた。かくて一夜を過ごされた。諸天人や聖人たちは如来に供養を奉り、天楽を打ちならし天花を降らしたところ如来は定より出られた。天人たちは心より慕って、七宝を以て飾った金銀で窣堵波を建てた。聖代を去ることすでに遙かで、宝は変わって石となってしまった。昔より今に至るまで人の行きついたものはまだなく、遙かに高い山を望むと［禽（きん）獣などの］異類が見える。長蛇・猛獣は群れをなして右旋して敬礼し、天人・聖人は追随して讃え礼拝するのである。

注

一　大きな山　この山はブッダ・ガヤー Buddha Gayā の北方十五、六マイルの Barabar Hill (Skt. *pravaragiri*) に比定されている。この山には窟院があり阿育王の碑文が発見されている [Majumdar's Note, in C.A.G.I., p.720；中村：『インド古代史』下三四二ページ]。

四・三　徳慧対論の伽藍

山の東に窣堵波がある。その昔、如来が佇んで摩掲陀国を観望されるとき足をとめられた処である。

山の西北三十余里、山の入り込んだ所に伽藍がある。嶺を背にして基礎を高くし崖を掘って閣を峙てている。僧徒は五十余人、みな大乗の教えを学習している。瞿那末底（原注　唐に徳慧と言う）菩薩(注一)が外道を説伏せられた処である。初めこの山中に外道の摩沓婆(注二)というものがいた。僧佉(注三)の法を祖述して道を修めていた。学は内外を窮め、言（如来の垂示した教法）は空有の二門(注四)を極め、その名声は先蹤よりも高く、その徳は当時に重んぜられていた。時の君主はこれを珍重し、この人を国の宝であると言っていた。臣民は尊び仰ぎ、人みな家の師であると言っていた。隣国の学者は徳を仰ぎ、この人を先蹤の中に入れているほど真に博達の士であった。食邑（知行所）は二城をもち、環のように境界を作っておること、あたかも封建のごとくであった。その当時南印度の徳慧菩薩は幼少より明敏で、早くから精微に達しているという名声があった。学は三蔵に通じ、理は四諦（苦集滅道の真理）を窮めていた。摩沓婆の論が幽微を極めているということを聞き、その気鋭を打ち挫こうと考え、一門人に命じ手紙を書かせて、

「拝啓、摩沓婆殿、御機嫌如何ですか。労苦を忘れて旧学を精出して勉強なさい。三年の後に汝の名声を打ち破りましょう」

と言わせた。このように二年目、三年目に常に使を出して知らせた。出発しようとする時に、重ねて手紙を書かせて、

「期日はすでに来ました。勉強はどうですか。私は今まいります。御承知おきください」

と言わせた。摩沓婆は非常に恐れを懐き、門人たちおよび村の人たちに触を出し、今後は沙門や異道の人を泊めてはならぬ。お互いに知らせあい、違背することのないようにと注意した。さて、徳慧菩薩が錫杖をつき摩沓婆の村にやって来たが、村の人々は制を守り泊めるものとてはなかった。婆羅門たちは次々に罵って、

「髪を切り変な服を着ているのはどういう変わりものか。さっさと立ち去り、ここに止まることなかれ」

と言った。徳慧菩薩は異道を打ち破ろうと思い、この村に泊まることを願い、そこで心を静め辞を卑くして挨拶をし、

「あなた方は在世間の修行者、私は出世間の修行者です。修行者という点で同じであるのに、どうして拒まれるのですか」

と言ったが、婆羅門たちは制を守り口をきかず、ひたすら追い出すことに努め、村の外に追い出し大きな林の中に追い入れた。林の中の猛獣は群れをなして乱暴をするので、ある浄信者(注五)（清浄の信心をもつもの）が獣に害を加えられるのを心配して、炬火を束ね杖をもち、菩薩に、

「南印度に徳慧菩薩という方がおられ、遙かに噂が伝わりやって来られて論議をされようとしていられるとのことです。それでこの村の主は名声を失墜することを恐れ、繰り返し厳重な制を布き、沙門を泊めないようにしました。危険なために遭われるのではないかと心配して、ことさらやって来てお助けするのです。どうかお進みください。御安心あり、何の心配もなさいますな」

と言うと、徳慧菩薩は、

「信心あるあなたに本当のことを申しましょう。徳慧というのは私が

そうです」
　と言った。浄信は言葉を聞き一層尊敬を深くし、徳慧に、
「真実お話のようであるなら、速くお進みください」
　と言った。そこで直ぐに深林を出て空地に休息した。浄信は火をおこし弓を持ち左右を回って護衛した。夜半も過ぎると徳慧に、
「さあ、お進みください。人が聞き知り、やって来て害をなすやも知れません」
　と言うので、徳慧は礼を述べ、
「御恩は忘れません」
　と言った。そこでそのまま進み王宮に行き、門番に、
「今、沙門が遠方よりやって来ました。どうか王は私と摩沓婆と論議することをお許しくださいますように」
　と言わせた。王はこれを聞いて驚き、
「無茶な人だ」
　と言ったが、すぐさま使に摩沓婆の所に行かせ王の命を伝え、
「外国の沙門がやって来て論議することを求めています。はや議論の会場は清掃し遠近の人々に触を出しました。首を長くしておいでを待っていますから、どうか御光来を願います」
　と言った。摩沓婆は王の使に、
「南印度の徳慧論師ではありませんか」
　と問うので、
「そうです」
　と答えた。摩沓婆はこれを聞き非常に不愉快に思ったが、事は辞退し難く論場にやって来た。国王・大臣から士民・豪族など、悉くみな来集し高論を聴聞しようとしていた。徳慧がまず最初自派の論旨を立て［その弁］夕刻に及んだ。摩沓婆は年も老い分別もおぼつかなく、折り返し返答することを辞退し、自宅に帰り静かに考えてから論難に答えるよう願った。［新しい］論のたびに帰ってからと言った。朝になると論座に昇ったが、結局特別の議論もなく、第六日になると血を吐き死んでしまった。まさに命終わらんとする時、妻を顧みて、
「汝にはりっぱな才能があるのだから、辱しめを受けたことを忘れるなかれ」
　と命じた。妻は、摩沓婆は死んだが、死を隠して喪を発することをせず、綺麗な服に着換えて論場へやって来た。人々はみな口やかましく、
「摩沓婆は自分の才能の高いことを自負し、徳慧ごときに対するのを恥じ、ことさらに妻を来させたので、優劣はすでに明らかだ」
　と言い合った。徳慧菩薩は摩沓婆の妻に、
「汝に勝つことができる人に、私はもう勝っているのだ」
　と言うと、摩沓婆の妻は事の困難を悟り退場してしまった。王は、
「どんな内緒話をしたので、かの女が黙ってしまったのか」
　と問うと、徳慧は、
「惜しいことには摩沓婆は死んでしまいました。その妻が私と対論しようとやって来たのです」
　と答えると、王は、
「どうして分かったのですか。どうか教えてください」
　と言うので、徳慧は、
「摩沓婆の妻がやって来ると、その顔には死喪の色あり、その言葉には哀怨の響きがありました。それで摩沓婆は死んだと悟りました。汝に勝つことができる人とはかの女の夫を言ったのです」
　と答えた。王は使のものを見にやると、はたして話のとおりであった。王はそこで謝罪して、

「仏の教えは奥深いものであり、聖人賢者が後を受け継ぎ、人為を用いずして人の道は守られ、衆生はその徳化に浴することとなります。昔からの国法により徳者を褒めて変わることのないようにしましょう」

と言うと、徳慧は、

「私は愚昧ではありますが、道をば身をもって行ない、正しいことを守り、分に止まることを知り、平等に物を見てまいりました。まさに人々を仏の教えに導かんがために、まず人の傲慢を打ち砕きました。方便をもって衆生を摂化するのは、今がその時です。唯願わくば大王、摩沓婆の村の子孫を永久に常に僧伽藍の用に充てられますように。そうすれば人は訓誡を将来に垂れ、美事を永遠に伝えることでしょう。唯あの浄信は守護をしてくれたものでありますから、受ける幸福は何代にもわたり、食事その他の日用のものは僧と同じ待遇にし、一つには清浄な信心を人に勧め、一つには厚徳を褒めるというふうにしてください」

と言った。そこでこの伽藍を建ててりっぱな事跡を表彰したのである。初め摩沓婆が論敗した後、十数人の浄行（巻二の一・九注三参照、婆羅門のこと）が難を隣国に逃れ、外道の人たちに恥辱を受けたことを告げ、後才を募集し、この国に来て前の恥を雪ごうとした。ところが王は徳慧を尊敬しているので、自ら徳慧の所に出かけて、

「今、外道たちは自ら力を量らず党を結び群れをなし、妄りに論議の鼓を撃とうとしております。願わくば大師は諸異道の人たちを打ち破られますように」

と頼んだので、徳慧は、

「論者を集めてください」

と言った。かくて外道の学者たちは欣然として互いに、

「我々は今日勝つことはすでに決まっている」

と慰めあった。時に外道たちは自らのとる義理を明らかにした。徳慧菩薩は、

「今、外道の人々は難を逃れて遠くへ出かけていた。これを王の先ごろの制から見るならば、みな賤人である。私は今どうしてこのような人々と対論しようか」

と言った。徳慧には坐牀を背負っている少年（注六）がいた。普段から議論のあれこれを耳にし大変仏法の細微に通じ、徳慧の側に侍立していろいろな高談に聞き入っていた。徳慧はその少年のもつ座をたたいて、

「牀に坐って汝が論じなさい」

と言ったので、人々はみな驚き、その命令を奇妙に思った。そこで坐牀を負う少年はすぐさま論難を口より発するに、その深い義理は泉の涌き出るがごとく、清冽な弁舌は響きの声に応ずるがごとくであった。数度往復を繰り返すと外道はその本旨を失し、重ねてその鋭鋒を挫かれ再び羽根を折られてしまった。論を説伏せられてよりこの方、伽藍所領の村となった。

注

一　瞿那末底（……）菩薩　瞿那末底　°g'iu-°na-muât°-°tiei : *guṇa-mati (Skt. guṇa-mati). また窶拏末底・求那摩底とも。南インドの人で唯識十大論師の一。後に那爛陀寺に住し名声が高かった。その著で漢訳のあるものに『随相論』一巻がある。大約五世紀の後半より六世紀の前半にかけての人。

二　摩沓婆　摩沓婆　°muâ-d'âp°-°b'uâ : Skt. mādhava.

三　僧佉の法　僧佉　°sәng-°k'ia : Skt. sāṃkhya. また僧企野とも。数術・数論・制数論とも訳す。数に基づく論の意。二十種外道の一で、迦毘羅 Kapila が唱導した学派。陳・真諦訳『金七十論』はこの学派の書である。

四　空有の二門　一切の存在には実体がないと考えるのを空と言い、これに

対してあると主張するのを有と言う。大乗教では法相宗が有、三論宗が空の立場をとり、対立抗争した。

五　炬火を束ね　原文は「束蒕」とし、一本に「束陷」に作る。今、「束苣・束炬」の意に解した。

六　坐牀を背負っている少年　原文は「負座竪」である。竪は豎（こども）の俗字。座は恐らく縄で作った折り畳み自在で携帯用の坐牀のことであろうから、従って訳文のように仮りにした。

四・四　戒賢対論の伽藍　徳慧伽藍より西南へ二十余里で離れ山に至る。伽藍がある。尸羅跋陀羅（シーラバドラ）（原注　唐に戒賢と言う）論師(注一)が論議をして勝ちを得て［与えられた］村を寄捨して建てたものである。高い峰がそばだっており、ちょうど窣堵波のようで、仏舎利が安置してある。論師は三摩呾吒（サマタタ）国（Samataṭa. 巻十の六参照）の王族で、婆羅門の種姓である。若いときから学問があり、りっぱな志があった。印度の諸地に遊び、優（すぐ）れた学者を尋ね求め、この国の那爛陀僧伽藍（巻九の三参照）にやって来て護法菩薩（巻十の一六・二参照）に出会い、仏法を聞いて眼が開け染衣を着る（出家する）ことを願い、究竟（悟り）の趣を尋ね、解脱の方途を質問した。すでに理論の奥義を窮めもし、仏の微妙な言説をも究め、その名声は当時にはやされ、その声誉は外国にまで高かった。［当時］南印度のある外道は隠れた事理を探し求め、奥深い真理を窮めようとしていたが、護法の高名を耳にし自惚（うぬぼ）れて嫉（しっ）妬（と）し、山川をも物ともせず［来たり］鼓を撃って論議することを求め、

「私は南印度の人です。王の国内に大論師が居られると承りました。私は不敏ではありますがその方と論議させていただくようにお願いします」

と言うと、王は、

「居ります。言われるとおりです」

と答え、使の家臣に言いつけて護法に、

「南印度に外道の人があり、千里を遠しとせずしてやって来て、論議することを求めております。どうか御光来いただき、論議の場に御参集くださいますように」

と頼ませた。護法は聞くや衣をかかげて出かけようとした。門人の戒賢と言うものは後進中の傑出した人であったが、この人が進み出て、

「どうして急いでお出かけになるのですか」

と尋ねると、護法は、

「仏陀がおなくなりになり、伝燈は光がわびしくなって、外道は蟻（あり）のように集まり、異学の徒は蜂（はち）のごとくうるさい。それ故に私は今、かれらの議論を打ち砕こうと思っているのです」

と答えた。戒賢は、

「謹んでいろいろな論を承ってまいりましたから、私が思い切って異道を打ち破りましょう」

と言った。護法は戒賢が俊英の人であることを知っていたのでこれを認め許した。この時戒賢は年齢僅かに三十歳であった。人々はその若すぎる点を軽くみて、唯一人その任に当たることが困難ではないかと心配した。護法は人々の心が不安であることを悟り、その懸念（けねん）を解き、

「才能が高明である点を貴び、年齢の点は言いなさるな。この点より見ますならば、外道を論破するであろうことはすでに決まっています」

と言った。論議の日となると遠近の人は互いに集まり、老いも若きもやって来た。外道は大旨を明瞭に述べ細微な趣を尽くした。戒賢は理路に沿い内容を突き、その論は深く幽玄（ゆうげん）を極めたものであり、外道

は弁辞に窮し恥を受けて敗退した。王はそこでその徳に酬いるためにこの町を与えようとしたが、論師は、

「染衣を着る出家は財貨には足ることを知り、身を清浄に自ら守っております。町をいただいてもどうしましょうか」

と言うと、王は、

「仏がこの世から跡をくらまされてより、「苦海を渡る」智恵の舟もともになくなり、はっきり表彰することをせねば、後学の人を励ますこともできません。正法を弘めるためにどうか受納していただきますように」

と頼んだので、論師はやむを得ずこの町を受領した。そこで伽藍を建て諸様式を尽くし、その町の人々を寄捨して供養を奉修した。

注

一　尸羅跋陀羅（……）論師　尸羅跋陀羅　˳śi-˳la-b'uât-˳d'â-˳la : Skt. *śila-bhadra.*『慈恩伝』によるに玄奘渡印時、那爛陀寺に住し百六歳の高齢であり、衆人は正法蔵と尊称していた。玄奘はかれに那爛陀で『瑜伽論』を学んだ。玄奘がインドを離れて間もなく示寂した。

五　仏陀成道前の史跡

五・一　伽耶城と伽耶山　戒賢伽藍より西南へ行くこと四、五十里、尼連禅(ニランジャナ)河（巻七の一・一〇注四参照）を渡り伽耶(ガヤー)(注一)城に至る。城は甚だ険固である。住民は少なく、唯婆羅門種だけが千余軒いる。大仙人の子孫である。王も臣とせず、人々はみな尊敬している。

城の北三十余里に綺麗な泉がある。印度ではこれを聖水と呼び、飲んだり沐浴したりすれば罪障は消滅すると言い伝えている。

城の西南五、六里で伽耶(ガヤー)山(注二)に至る。渓谷は薄暗く峰の巌も危なっかしい。印度の国俗では霊山と言っている。昔から君王は天下を一統すると、教化の遠方まであまねく徳が前代よりも盛んであるようにと、この山に登り土盛りをし即位を天に報告しないものはない。山頂に石の窣堵波の高さ百余尺のものがある。無憂王が建てたものである。霊験は人知れず覆い、不思議な光が時に輝くことがある。昔、如来がここで『宝雲経』(注三)等を説法された。

注

一　伽耶城　伽耶　˳g'ia-˳ia : Skt. *gayā.* 今日は伽耶城をブラフマ・ガヤー Brahma-Gayā と呼び、仏陀伽耶ブッダ・ガヤー Buddha-Gayā と区別している。この地名の由来を『衆許摩訶帝経』巻六に大仙人伽耶に因んで名づけたとする。*Mahābhārata* および諸 *Purāṇa* に「聖なる都市」として記述され、今日も多くの巡礼が訪れる聖地である。[Law : *H.G.A.I.*, p.219]。当地に着いた巡礼はまず Phalgu 河の聖なる水で沐浴し、町の北方の Ramsila Hill と西北方五マイルの Prestila Hill に供物を捧げるのが習いである [*Murray's Handbook*, p.44]。

二　伽耶山　Skt. *gayā-śīrṣa* (*gayā-śira, gaya-śira*), Pa. *gayā-sisa.* 訳して象頭(ぞうず)山と言い、経典に頻見する。今日は Brahmayoni の名で呼ばれる山である。草木のほとんど生えない石山で、石の階段により山頂に登る。阿育王塔の痕(こん)跡は今日全くなく、頂上にはヒンドゥー教の小祠がある［高楠順次郎：『印度仏跡実写』第十九図］。

三　『宝雲経』　梁・曼陀羅仙訳で七巻の旧訳を指す。この経の唐訳は『宝雨経』十巻と名づけ、達摩流支により六九三年に訳された。両訳ともに現存する。

五・二　三迦葉の塔　伽耶(ガヤー)山の東南に窣堵波がある。迦葉波(カーシャパ)(注一)の生ま

れた村である。その南に二つ窣堵波がある。これが伽耶迦葉波と捺地迦葉波（原注　旧に那提迦葉と曰う。訛なり。諸迦葉に洎ぶまで、例として波字なし。略なり（注二））が火に事えた（注三）処である（注四）。

注

一　迦葉波　三迦葉波と言い、長兄を優婁頻螺迦葉波 Uruvilvā-kāśyapa, 仲を捺地迦葉波 nât。-d'i°-。ka-śiäp。-。puâ : Skt. Nadi-kāśyapa, 季を伽耶迦葉波 Gayā-kāśyapa と言った。釈尊成道後、まず長兄が帰依し五百の弟子と共に仏門に入り、二弟もついで釈尊に従った〔『五分律』一五〕。

二　捺地迦葉波（……）　那提 。nâ-。d'iei はすでに音声的に捺地に及ばず、また旧訳の諸例は何れも迦葉とし、迦葉波とはしていない。kāśyapa に対しては迦葉波がより適当であることを言う。

三　火に事えた　事火外道と言う。『分別善悪報応経』上に「火天及び諸鬼神を祭祀せば、彼の身は決定して梵天に生じ大富楽を受く」とし、その方法としては『方便心論』に「晨朝に礼敬し、殺生して祭祀し、衆くの香木を然じ、諸の油燈を献ず。是の如きの四種を事火外道と名づく」とある。

四　本項の話に関連するものに、本巻の六・三五「三迦葉の帰仏」がある。

五・三　前正覚山　伽耶迦葉波が火に事えた所より東して大河（尼連禅河）を渡り、鉢羅笈菩提山（原注　唐に前正覚山と言う。如来将に正覚を證せんとし、まず此の山に登る。故に前正覚と云う（注一））に至る。如来は修行すること六年におよんだが、まだ悟りを開かなかった。その後、苦行を断念し乳粥を受けた。東北より進みこの山に目をやると幽寂の感あり、ここで悟りを開こうと思った。東北の岡より登って頂上に至ると、大地は震動し山も傾き揺らいだ。山神は恐れて菩薩（成道前の釈迦を指す）に、

「この山は悟りを開く良い地ではありません。もしここで金剛定（注二）に入られるならば、大地は陥没し山も顛覆するでしょう」

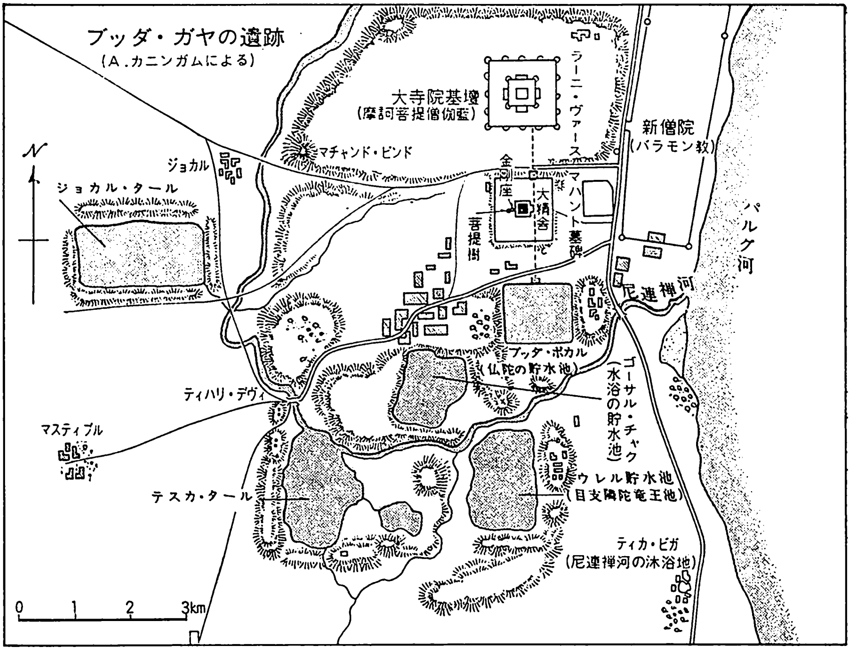
と告げた。菩薩は西南より山を下りた。山の中腹の崖の中に、巌を背にし谷に面して大きな石室があった。菩薩はここに入り脚を組んで坐った。大地はまたもや震動し山も傾いた。その時、浄居天（巻六の三・三注五参照）が空中から声高らかに、



菩提樹下の金剛座，ブッダ・ガヤー

「ここは如来が悟りを開かれる処ではありません。ここから西南十四、五里の所、苦行された処から遠くない場所に卑鉢羅樹（巻二の四・二参照）があり、その下に金剛座があります。過去・未来の諸仏はみなこの座で悟りを開かれます。どうかそこにお坐りになるようお願いします」

と言った。菩薩が立ち上がろうとすると石室の中の竜は、



「この石室は清浄でもありりっぱでもあり、悟りを開かれるによろしい所です。どうかお慈悲で立ち去られることのないようにお願いします」

と言った。菩薩はここが悟りを開く所ではないことを知っておられたが、竜の願いをかなえてやるために、自らの影を残し留めて去られた（原注　影は昔日にあっては賢愚ともに咸観るに、今時に洎ぶに或いは見るを得るもの有り）[注三]。諸天人が前導して菩提樹の所に行かれた。無憂王が興るや、菩薩の登山の際に上下された跡にはみな記念の印をし窣堵波を建てた。大きさには差はあっても霊験には異はなく、或いは花が空中より雨のごとく降ったり、或いは光明が薄暗い谷を照らしたりする。毎年、安居が終わる日には諸方の僧俗ともにこの山に登り、供養を修し二泊して帰る。

注

一　鉢羅笈菩提山（……）　鉢羅笈菩提 *puât-lâ-g'iäp-b'uo-d'iei* : Skt. *prāg-bodhi*. ブッダ・ガヤーの東北約三マイル、尼連禅河の東岸に位する Mora 山であるとする。

二　金剛定　金剛三昧とも。金剛が一切に無礙なるがごとく、一切諸法に通達し得る三昧を言う。

三　前正覚山留影窟　土俗はこれを Durgā-śrī と称している。自在天妃の祠窟である［髙楠：『印度仏跡実写』第六図］。

六　仏陀成道地の史跡

六・一　菩提樹の概観

前正覚山より西南へ行くこと十四、五里で

菩提樹(注一)に至る。周りの垣は甎を畳んだもので、(注二)高く険固である。東西は長く南北は狭く、周囲は五百余歩ある。珍しい樹と綺麗な花は陰影を連ね、細かい砂に他所に見慣れぬ草が生え茂り緑で被っている。正門は東に開いて尼連禅河に向かい、南門は大きな花の池に接し、西は険しい地でふさがれ、北門は大伽藍に通じている。垣の内の境内は聖跡が相続き、或いは窣堵波あり、或いはまた精舎があるというふうである。みな贍部洲の諸国の君王・大臣・豪族が、仏の教えを謹み奉じ、建立して記念としたものである。(注三)

注

一　菩提樹　菩提樹のある地域は、いわゆるブッダ・ガヤー大塔、即ち『西域求法高僧伝』上の莫訶菩提 Mahā-bodhi, 下の大覚寺の域内である。次下の周垣はこの莫訶菩提のいわゆる仏陀伽耶大塔の四周をめぐるものを指す。なおこの付近のプランは Cunningham : *Mahābodhi* およびこれから転載した天沼俊一:『印度仏塔巡礼記』上に見える。

二　周りの垣は甎を畳んだもの　原文の甎は、瓦・煉瓦を意味する漢語であるが、実際の欄楯は暗褐色の砂岩である。もとは大塔の四周をめぐらしていたが、今やや完好なものは南側だけである［髙楠順次郎:『印度仏跡実写』第十四、十五図］。

三　供養塔　君王・大臣・豪族より献納された大小数百基の供養塔は今も現存する［髙楠:前掲書、第十八図］。

六・二　金剛座　菩提樹［を取り巻くところ］の垣の真中に金剛座(注一)がある。昔、賢劫の初めにできたもので、大地と共に出たものである。三千大千世界の中に拠り、下は金輪(注二)に達し、上は地面に表われている。金剛で作られ、周囲は百余歩ある。賢劫中の千仏がここに坐り金剛定に入られたので金剛座と言い、悟りを開かれた所であるので［菩提］道場とも言う。大地が震動しても、ここだけは傾き揺らぐことはない。こういうわけで如来がまさに悟りを開こうとされるや、この四辺を通り過ぎられると大地はみな傾き動いたが、その後でここに来られると静かで傾くこともなかった。世の季となり正法が次第に衰え、沙や土が覆いかぶさり、見ることができなくなってきた。仏が入涅槃された後に、諸国の君王は仏が金剛座の大きさを説かれたのを聞き、二体の観自在菩薩の像で南北の境界の記として、東を向けて安置した。この話を老人に聞くと、

「この菩薩の像の体が埋もれて見えなくなると、仏の教えは滅び尽きるであろう」

と言うことである。今は南隅の菩薩は埋まって胸を過ぎるほどである。

注

一　金剛座　この写真は髙楠:前掲書、第十二図に見える。なお古代における最初の塔は金剛座を中心にしてその後方即ち西に菩提樹があり、建物はその周囲に作られたものであったが、後世に次第に変改されたらしい。

二　金輪　古代インドの宇宙観では世界の最底を風輪と言い宙に浮いており、この風輪の上に水輪あり、水輪の上にさらに金輪があると言う。輪形の金剛より成るから金輪と言い、この金輪の上に山・海の地表があり、これを地輪と言っている。

六・三　**菩提樹の盛衰**　金剛座の上の菩提樹と言うのは畢鉢羅の樹のことである。昔、仏の在世中には高さ数百尺あったが、しばしば伐採されてもなお高さ四、五丈ある。仏はその下に坐り悟りを開かれたので、これを菩提樹と言うのである。幹は黄白色で、枝葉は緑をして

おり、冬も葉の落ちることなく、光沢も変わりがない。毎年如来の涅槃の日になると葉は全部凋(しぼ)んで落ちてしまうが、暫(しばら)くするとまたもとのようになる。この日は諸国の君王や諸方の僧俗など数千万の人人が、召集されなくても集まり、香水や香乳をそそぎかける。そこで音楽を奏し香花を列ね、燈火をつけ夜を日に継いで争って供養をする。如来寂滅の後、無憂王が初め即位した時には邪道を信仰し仏の遺跡を破壊した。軍隊を動かし自ら臨んで菩提樹を伐採し、これを寸断してその西数十歩の所に積み上げ、事火婆羅門にこれを焼いて天を祠(まつ)らせた。煙や炎がまだ静まらないうちに二本の樹が生えだし、猛火の中で葉を茂らせ緑を含ませた。そこでこれを灰菩提樹とよんでいる。無憂王はこの異変を見て自らの過ちを後悔し、香乳を残りの根にそそぎかけたところ、翌朝になると樹はもとのように生えていた。王はこの不思議なでき事を見て重ねて深く喜び、自ら供養を修し、楽しんで帰ることを忘れるほどであった。王妃はもともと外道を信じた人で、こっそり人を遣わし、夜半過ぎに重ねてその樹を切らせた。無憂王は朝方に礼拝しようとすると唯切り株だけであったので非常に悲嘆した。そこで心をこめて祈請し香乳を灌(そそ)ぎかけたところ、日ならずしてもとのように生えてきた。王は深く心を打たれ、石を積み上げて垣を周(めぐ)らした。その高さ十余尺で、今もなお存在している。近ごろ、設賞迦(シャシャーンカ)王(巻五の一・三注六参照)と言う人が外道を信仰し、仏教を排斥し僧伽藍を破壊した。この菩提樹を切り、根もとを掘って水脈の所まで至ったが、根を掘り尽くせなかった。そこで火を放って焼き、甘蔗(かんしゃ)の汁をかけ、その根を爛(ただ)れさせ、残りの芽を根絶してしまおうとした。数ヵ月の後に摩掲陀(マガダ)国の補剌拏伐摩(プールナヴァルマン)王(原注 唐に満冑(まんちゅう)と言う)(注一)が、この人は無憂王の末孫であるが、この話を聞き、

「仏陀がすでにこの世を去られ、唯仏の樹を残すだけであったが、今さらにこの樹も切られてしまったら、衆生は何を見たらよいのであろうか」

と嘆き、体ごと地面に投げ出し悲しんだが、その悲しみの心は物をも感じ動かすほどであった。そこで数千頭の牛の乳をしぼりそそいだところ、一夜過ぎると樹が生え、その高さ一丈余りになっていた。後の人が伐採するのを心配して、周囲を石垣の高さ二丈四尺のもので取り巻いた。それで今の菩提樹は石の壁の中に隠れ、一丈余だけが上に出ているのである。

注

一 補剌拏伐摩王(……) 補剌拏伐摩 °*puo-lât*。-。*na-b'iwɐt*。-。*muâ*: **pūr-na-varma* (Skt. *pūrṇa-varman*). 阿育王のマウリヤ王朝は紀元前二世紀に滅んだが、その末裔は西部インドおよび摩掲陀地方に僅かに存続していたようである。設賞迦王の廃仏は七世紀初頭であり、この王の年代もそのころと推測し得る。

六・四 仏陀伽耶大塔と成道の仏像

菩提樹の東に精舎(しょうじゃ)(注一)がある。高さ百六、七十尺、下の基壇の広さは二十余歩ある。青い甎で畳み、石灰が塗ってある。何層にもなっている龕(がん)にはそれぞれみな金像が入っている。四方の壁は珍しい彫刻がしてあり、或いは珠の形を連ねたようなものあり、或いは天仙の像がある。[精舎の]上には金銅の阿摩落迦果(アーマラカ)(原注 亦宝瓶と謂(い)い、また宝壺と称す)(注二)を置いてある。精舎の東側に接して重閣(注三)が作ってある。庇(ひさし)はことさらに三階に作ってあり、榱(たるき)・柱・棟(むね)・梁(はり)、戸・扉(とびら)・窓・牖(れんじまど)などは金銀の彫刻で飾ってあり、真珠・宝玉をとりまぜ填(う)め込んである。部屋は大きく奥深く、入口は三重になっている。外門の左右にはそれぞれ龕になった部屋があり、

左には観自在菩薩の像が、右には慈氏菩薩の像がある。白銀で鋳造したもので、高さは十余尺ある。

この精舎のもともとの土地には、無憂王がまず小さな精舎を建て、後にある婆羅門がそれを一層広めて［今の］精舎を建てたのである。初め婆羅門は仏法を信じず、大自在天に事えていた。［大自在］天神が雪山の中に居ると伝え聞いて、弟と出かけて願をかけた。天神は、

「人の願いごとというものは、福業があれば必ず報いられるものであり、汝が祈って得られるものでもなく、私が願いごとを遂げさせてやるものでもない」

と言うので、婆羅門は、

「どういう福業を修めたら、私の願いの心が遂げられるのでしょうか」

と尋ねると、天神は、

「善根を植えようと思うならば、まず優れた良い田を求めるべきです。菩提樹は仏が悟りを得られた処です。今すぐ立ち帰り菩提樹の処に行き、大きな精舎を建て大きな池を掘り、諸供養を盛んにしたならば、願いはきっと遂げられるでしょう」

と答えた。婆羅門は天神の言いつけを受け大信心を起こし、連れだって引き返し、兄は精舎を建て弟は池を掘った。そこで広く供養を修し、願いごとが遂げられるよう求めたところ、その後みなそのとおりに遂げられ王の大臣となった。俸禄賞与を得るとみなこれを寄捨した。

精舎が竣功したので、工人を募集して如来が初めて成道した像を造らせようと思ったが、空しく歳月がたつばかりで募集に応ずる人はなかった。よほどの日が過ぎたとき、ある婆羅門がやって来て人々に、

「私はりっぱに如来の妙相を造ることができます」

と言うので、人々は、

「像を造ろうとするのに、何を使いますか」

と問うと、

「香泥だけです。香泥を精舎の中に置いてください。それに私を照らす燈火一つも併せて置いてください。私が中に入ったならば、堅く入口の戸を閉め、六ヵ月の後にはじめて門を開けてください」

と言った。そこで僧衆たちはみなその言いつけのとおりにした。六ヵ月に後四日残す日となり、人々はみな異様に思い門を開いてよく見ると、精舎の中には仏像がりっぱな姿で脚を組み、右足を上に置き、左手をおさめて［股に置き］、右手は垂れて［降魔印の相をなし］東面して坐していた。厳かな様子は真にそこに仏が居られるが如くであった。台座の高さは四尺二寸、広さ一丈二尺五寸、像の高さ一丈一尺五寸、両膝の相去る距離八尺八寸、両肩六尺二寸。相好は円満具足し、慈顔は真に迫るものがあった。唯右乳の上は塗装未完了であったが、すでにそこには人の姿は見えず、まさに霊妙な現象を示していた。人人はみな悲しみ嘆き、懇ろにその作者の何人なるかを知りたいと願った。かねて心の淳朴な一沙門が居たが、かの婆羅門が、

「私は慈氏菩薩である。工人の思慮では仏の聖容を推測し難いであろうと懸念して、私自らがやって来て仏の像を写し出しました。右手を垂れているのは、往時、如来が仏果を證しようとされるや、天魔が来て悩まそうとした。その時、地神は天魔がやって来ることを知らせ、地神の一人がまず出て来て仏の降魔を助けようとした。如来は、

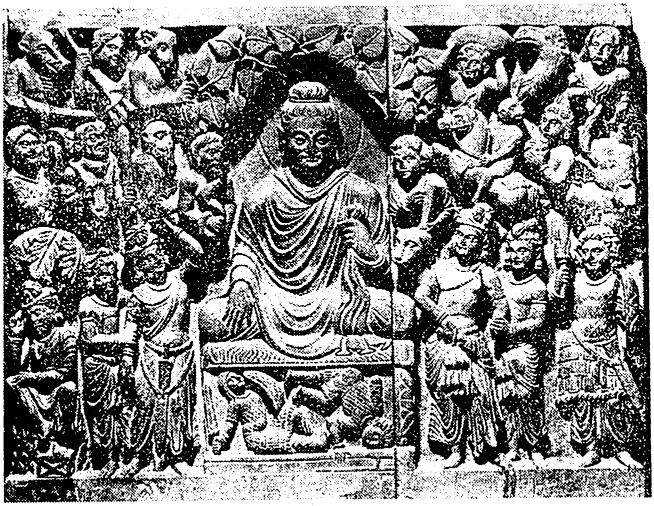
『汝ら憂え心配する必要はありません。私は忍耐力でかれらを降すこと確実である』

と言われた。魔王は、

『誰が証明しますか』

と問うと、如来は手を垂れ地を指し、

『ここに証人がある』
と言われた。この時、第二の地神が躍り出し証明をしました。それで今の像の手は昔垂れられた姿を模しているのである」
と夢に告げるのを見た。人々は霊験ある由来を知り、心を打たれないものはなかった。そこで乳の上の未完の部分をいろいろな宝石をまじえ塡め、珠の瓔珞に宝冠など珍しい宝で飾りたてた。設賞迦王が菩提樹を伐った時に、この像をも破壊しようと思ったが、像の慈悲深い顔容を眼にすると心に不安を感じ、乗り物を引き返し帰ろうとする時、大臣に、



降魔成道図，ガンダーラ地方出土

「この仏像を取り除き、大自在天の形像を安置せよ」
と命じた。大臣は命を受けたが、恐ろしくなり嘆いて、
「仏像を破壊すれば永劫にわたり殃を招くことになり、王の命に違えば身を亡ぼし一族を滅ぼすこととなろう。進退かくの如くなれば何所へ行ったらよかろうか」
と言い、そこで信心あるものを集め労務者とし、仏像の前にそれを遮り隠すように甎の壁を立てたが、真っ暗にしておくことは心が痛むので燈火をつけて置いた。そして甎の壁の前に自在天の像を画いた。作業が完成し王にそのよし報告したが、王はそれを聞くと心に恐れを生じ、体中に発疱し皮膚は引き裂け、間もなく死没してしまった。大臣は駆けもどり障壁を取り壊したところ、随分と日が経っているのに燈火は消えていなかった。像は今もあり、りっぱな細工は損う所がない。奥の部屋に安置してあるので燈火は絶えないように相継いでつけてあるが、慈顔をよく拝しようと思っても詳しく観察することはできない。どうでも朝早く大きな鏡をもち、日光を引き入れ中を照らすと、はじめて霊相を眼のあたりにすることができる。慈顔を眼にすることができたものは、自ら感迫るものがある。

注

一　精舎　これがブッダ・ガヤー大塔であるが、舎利を収めた窣堵波ではなく仏殿である。外観は九層の高塔であるが、中は実際には二階までである。

二　阿摩落迦果（……）　阿摩落迦については本巻の三・三注一参照。果実の名である。この果実の形に似たものが塔上に安置してあるわけで、それはまた水などを入れる瓶にも似ている。

三　精舎の東側に接して重閣　精舎の東側の張り出し部分で、内部は二階作り、外観は三階のごとくにしてあるの意であろう。現在の姿は樋口隆康：『インドの仏跡』第二七図に一部見えるが、これは十四世紀以来数度の修築を経た姿であり、玄奘当時はたしてこのようであったかは厳密には知り得ない。前世紀末葉の改修前の姿は、天沼俊一：『印度仏塔巡礼記』上、第一二一図に見える。

六・五　**仏陀成道の時日**　如来は印度の吠舎佉月（ヴァイシャーカ）（巻二の一・四参照）の後半八日に等正覚（さとり）を開いた。この（唐の）三月八日に当たる。上座部では吠舎佉月の後半十五日に等正覚を成じたとする。（注一）この三月十五日に当たる。この時、如来は年三十であった。或いは年三十五であったと言う。（注二）

注

一　成道の時日　漢訳仏典では二月八日と記すことが多く、日本でも二月八日としている。

二　成道時の年齢　古い伝説では二十九歳出家、七年の修行で年三十六成道とし、新しい伝承では六年間修行、三十五歳成道とする。三十歳説は『長阿含経』『増一阿含経』『出曜経』等。三十五歳説は『梵網経』『普曜経』『瑞応本起経』『因果経』など。

六・六　**成道後経行の処**　菩提樹の北に仏が散策された処がある。（注一）如来は悟りを開かれてからも座より起（た）たれず、七日間妄念を去り禅定に入っておられた。起ち上がられるや、菩提樹の北へ行き七日間散策され東西に往（ゆ）き来された。歩かれた十余歩には珍しい花が足跡に随って十八出た。後の人がここに甎を畳み、高さ三尺に余る基礎を造った。諸先達の話によれば、この聖跡の基礎は人の命の長短を表わす。まず心からの願いを起こして後に測量すれば、寿命の長短に随って長さに増減がある、ということである。

注

一　散策された処がある　この実景写真は樋口：『インドの仏跡』第三一図に見える。

六・七　**仏陀観樹の処**　散策された基礎の北、道の左の磐石上の大精舎の中に仏像がある。目を挙げ上を望み視（み）ている姿である。昔、如来がここで七日間菩提樹を見られ、目を暫くも動かされなかった。樹の恩に報いるために、ここで望み視られたのである。

六・八　**七宝堂と七宝座**　菩提樹の西、遠からざる大精舎の中に鍮石の仏像がある。珍しい宝で飾られ、東面して立っている。前に青石の変わった模様のものがある。昔、如来が初めて悟りを開かれるや、梵王は七宝の堂を建て、帝釈（たいしゃく）は七宝の座を作った。仏はその上で七日間思索されたが、不思議な光を放って菩提樹を照らした。聖代を去ることすでに遙かで、宝は変じて石となってしまっている。

六・九　**刈草人塔**　菩提樹の南、遠からざる所に窣堵波の高さ百余尺のものがある。無憂（アショーカ）王が建てたものである。菩薩が尼連（ニランジャナ）河で身を洗い菩提樹に行かれようとされた時、何を敷物にしようかとひそかに

考えられたが、ついで浄草を使うべきであることに思いつかれた。帝釈天はその身を変え草刈り人になり、［浄草を］荷って道を行かれた。菩薩は、

「荷っている草を少し分けてくれませんか」

と言われると、人に身を変えているその人［帝釈天］はその言いつけを聞き、恭しく草を奉った。菩薩は受けとられ、手に持って［菩提樹の所に］前進された。(注一)

注

一　この説話は『四分律』三一、『五分律』一五等に見える。浄草とは Skt. *kuśa*, 孤沙・固沙、吉祥草と訳す祭式用の草である。岩波写真文庫『仏陀の生涯』三八ページ参照。

六・一〇　青雀・群鹿の祥瑞　受草［窣堵波］の東北、遠からざる所に窣堵波がある。菩薩が仏果を證しようとされた時、青雀・群鹿(注一)が祥瑞を表わした処である。印度の縁起ではこれはめでたい印である。だから浄居天は世間［縁起の話］に随って、群れをなし飛んだり回りを走り、霊妙で神聖なことを表わしたのである。

注

一　青雀・群鹿　青雀は『仏所行讃』三その他にも見えるが、群鹿については諸経典に何も見えない。群鹿を飛びかう鳥の形容と解する説もある［Watters: *On Y. Ch.*, II, pp. 122-3］。

六・一一　魔王・魔女の誘惑　菩提樹の東、大きな道の左右にそれぞれ一基の窣堵波がある。魔王(注一)が菩薩を悩ました処である。菩薩が仏果を證しようとされるや、魔王は［釈迦が］転輪王の位を受け［天下を統治す］るように勧誘し謀りごとをしたが駄目で、がっかりして引き返した。魔王の女たちは自ら買って誘惑に出かけたが、菩薩の威神力によりその美しい姿は老人に変えられ、弱った体に杖をつき助け合いながら敗退した。

注

一　魔王　魔波旬 Skt. *māro pāpimā*. 魔王波旬の誘惑は前後三回あり、ここにはそのうちの二回を出す。後の一回は後段六・二〇「魔王の脅迫」に見える。これらの説話は『増一阿含経』三九、『因果経』三、『仏所行讃』三等に見える。この話も仏教美術の素材として頻用されるものである［岩波写真文庫『仏陀の生涯』四〇、四一ページ参照］。

六・一二　迦葉仏と二地神　菩提樹の西北の精舎の中に迦葉波仏の像がある。霊妙で神聖な像と言われており、時に光明を輝かすことがある。昔の記録によると、人が心をこめて七回旋繞すれば、宿命智(注一)を得ることができると言うことである。

迦葉波仏の精舎の西北に二つの甎で造った房屋があり、それぞれ地神の像がある。昔、如来が悟りを開こうとされた時、一人は魔が来ることを知らせ、一人は仏の証人となった。後の人がその功を記念し、その姿を図しその徳を彰わした。

注

一　宿命智　六通・三明の一。過去世の事実を知る智力。巻二の四・六、巻三の六・四参照。

六・一三　**鬱金香塔**　菩提樹の垣の西、遠からざる所に窣堵波がある。鬱金香［塔］と言い、高さ四十余尺ある。漕矩吒国の商人が建てたものである。昔、漕矩吒国のある大商人が天神に事え福利を求め、仏教を軽蔑して因果を信じなかった。後に商人仲間と品物の有無を貿易し、舟を南海に浮かべていたが、風に遭い路を見失ってしまい、波間に漂っていたところ、すでに三年も過ぎ、食糧も尽きて来て口に入れるものも十分でなくなってきた。同舟の人たちは朝に夕べのことを考える余裕もなく、力を合わせ志を一つにして信心している天神に祈念したが、心はすでに疲れはて御利益も現われなかった。ふと、大きな山が眼に入った。高い崖に嶮しい嶺、二つの太陽が連なり輝き明々と照らしている。そこで商人たちは互いに、

「私たちには幸運があり、この大きな山に出会いました。ここで一服して体を休めて行きましょう」

　と慰め合ったが、かの商人は、

「山ではありません。あれこそ摩竭魚(注一)です。高い崖、嶮しい嶺に見えるのは鬚や鬣です。二つの太陽が連なり輝いているように見えるのは眼光です」

　と言った。声がまだ静まらないうちに、舟や帆は大揺れに揺れた。そこでかの商人は仲間たちに、

「私は観自在菩薩のことを耳にしていますが、もろもろの危険に際して安楽にしていただけるとのことです。みなさん方、心をこめてその名号を称えましょう」

　と教えた。そこですぐさま声をそろえ、菩薩に心を寄せ名号を称えると、高い山も見えなくなり二つの太陽もなくなった。と、見ると、沙門が威儀正しく錫杖をつき、虚空を淩いでやって来て溺れるのを救い、時を越えずしてかれらは本国に帰りついた。これが動機で、信心も固く福徳を求めて心を動かすことなく、窣堵波を建てて供養を修し、鬱金香の香泥ですっかり上下ともに塗った。やがて発心して同志のものを引き連れ、自ら印度の聖跡を巡拝し菩提樹を見たが、帰ろうとの話も出ないまま早くも何ヵ月もたった。仲間の商人たちは互いに、

「山川遙かに隔て故郷は遠くなりました。以前建立しました窣堵波は、私たちがこちらに居る間は誰が掃除をしてくれているのでしょうか」

　と話し合った。言葉終わり、［菩提樹を］旋繞してここまでやって来ると、ふと窣堵波が眼に入った。その出現に驚き、近づいてよく見れば、なんと、本国で建てた窣堵波であった。それで今日印度でも、これに因んで鬱金をば名としているのである。

注

一　摩竭魚　Skt. *makara* の旧訳漢字。新訳は麼迦羅。また摩伽羅とも。伝説上の大魚［『玄応音義』一、『慧苑音義』下］。

六・一四　**梵天勧請**　菩提樹の垣の東南隅にある尼拘律樹の横に窣堵波がある。その傍に精舎があり、中に仏の坐像が作ってある。昔、如来が初めて悟りを開かれた時に、大梵天王がここで妙法輪を転ぜられるようお願いした(注一)。

注

一　梵天が仏陀に説法をお願いしたという説話は、『四分律』三一、『五分律』一五、『方広大荘厳経』一〇、『仏本行集経』三三等に見える。

六・一五　**菩提樹四隅の仏塔**　菩提樹の垣の中の四隅にはそれぞれ大窣堵波がある。昔、如来が吉祥草（浄草。本巻六・九参照）を受け取られて菩提樹の所に行かれた。まず四隅を次々に回られたが大地が震動した。金剛座の所に行かれるとはじめて安静なることを得た。

［菩提］樹の垣の中の聖跡は次々と数多く、とてもすべて挙げ尽くすことは難しい。

六・一六　**牧女の奉糜**　菩提樹の垣の外の西南にある窣堵波は乳糜（ちちがゆ）（本巻の五・三参照）を奉った二牧女(注一)の旧宅である。その側の窣堵波は牧女がここで糜を煮た所である。これにつづく窣堵波は如来が糜を受けられた処である。

注

一　二牧女　奉糜の牧女を一人とする説と二人とする説がある。『仏本行集経』二五には二女の名を難陀（ナンダー）Nandā（隋に喜と言う）と婆羅（バラー）Balā（隋に力と言う）とする［赤沼：『辞典』六四九—五〇ページ］。

六・一七　**南門外の二大池**　菩提樹の南門の外に大きな池がある。周囲七百余歩。清い水は鏡のごとく、竜・魚が棲（す）んでいる。婆羅門の兄弟が大自在天の言葉を承り掘ったものである（本巻の六・四参照）。つづいて南にある池は、昔、如来が初めて悟りを開かれ洗濯（たく）をしようとされた時、帝釈天が仏のために作ったものである。池の西に大きな石がある。仏が衣を洗濯し終えられ乾かそうとされた時、帝釈天が大雪山より持って来たものである。その側の窣堵波は如来がここで古い衣を着られた所である。つづく南の林中にある窣堵波は、如来が貧しい老婆(注一)の古い衣を布施するのを受けられた処である。

注

一　この故衣洗濯の説話は『仏本行集経』三二に見える。成道前に一人の貧しい老婆が故衣を釈尊に布施し、成道後に洗濯し乾かしてから着用されたという筋を、所在の順に記述したものである。

六・一八　**目支鄰陀竜王池**　帝釈天が作った池の東の林の中に目支鄰陀（ムチリン）竜王池(注一)がある。その水は綺麗な黒味がかった色で、その味は美味である。西岸に小さな精舎があり、中に仏像が作ってある。昔、如来が初めて悟りを開かれた時、ここで坐禅し七日間禅定に入られた。その時、この竜王は如来を警護し、その身で仏を取り巻くこと七周し、多くの頭を出して俯（うつむ）き蓋（かさ）とした。故池の東岸にその［如来が坐禅された］家がある。

注

一　目支鄰陀竜王　目支鄰陀 *mi̯uk̥-̥tśię-̥li̯ĕn-̥d'â*: Skt. *mucilinda*, Pa. *mucalinda*. 旧訳に目真・目真隣・目真隣陀など、玄奘以後の宋には母啣鱗那とも。『仏本行集経』三一によるに、仏の成道後目真隣陀竜王の請いを受け、その宮殿に坐禅し解脱の楽を受けておられたところ、大風雨となり七日間降りやむことなく気温も下がった。そこで竜王はその宮殿より出て大きな身をもって七重にとりまき仏を護（まも）り、七頭をもって世尊の上に大きな蓋としたと言う。

六・一九　**苦行林**　目支鄰陀池の東の林中の精舎に、仏の痩（や）せ衰えた姿の像がある。その側には散策された場所がある。長さ七十余歩あり、

南と北にはそれぞれ畢鉢羅樹がある。それで今この土地の習慣として、病気にかかった人たちは、香油を像に塗るが、治癒するものが多い。菩薩が苦行を修しられた処である。如来は外道を伏するために、また一方魔の請いを受けてここで苦行すること六年、日に一麻一麦を食するのみで、顔はやつれ体は痩せこけ、散策往来するにも樹を力としてやっと起ち上がった。(注一)

注

一　苦行六年の話は、『四分律』三一、『因果経』三、『仏本行集経』二四等に見える。苦行中の痩せ衰えた坐禅の相は仏教彫刻の素材とされている［岩波写真文庫『仏陀の生涯』三七ページ］。

六・二〇　**五釈種の住処**　菩薩が苦行された畢鉢羅樹の側に窣堵波がある。阿若憍陳如ら五人の住処である。初め太子が家を捨てられるや、山や野にさまよい林や泉に留まられた。そこで浄飯王は五人に命じ太子と行を共にし顧従させた。太子が苦行を修しているので、憍陳如らも修行した。(注一)

注

一　この段の話については巻七の一・三の記事を参照。

六・二一　**尼連禅那河の沐浴**　憍陳如らの住処の東南に窣堵波がある。菩薩が尼連禅那河に入って沐浴された処である。河の側の遠からざる所は、菩薩がここで乳糜を受けて食された場所である。(注一)

注

一　この話は『四分律』三一、『因果経』三、『仏所行讃』三、『法顕伝』等に見える。

六・二二　**二商主の供養**　その［沐浴窣堵波の］側の窣堵波は、二長者が麨蜜を献じた処である。(注一)仏は樹下で結跏趺坐し、静かに坐禅して解脱の楽を受けておられたが、七日が過ぎて後に初めて禅定より起たれた。折しも二商主が林の外を通りかかったところ、かの林の神は商主たちに、

「釈種の太子が今この中で初めて悟りを開き、心を涅槃の境に凝らしておられ、四十九日の間何も食べておられません。何か持っているものを差し上げるならば大きな福徳を得るでしょう」

と告げた。そこで二商主はそれぞれ携えている麨蜜を差し上げたところ、世尊は受納された。

注

一　二長者が麨蜜を献じた　この話はすでに巻一の三二・二に出ている。話の筋に小異があるが、同源の説話である。『四分律』三一、『五分律』一五参照。

六・二三　**四天王の奉鉢**　長者献麨［窣堵波］の側に窣堵波がある。四天王が鉢を奉った処である。商主が麨蜜を献上したところ、世尊は何の容器で受け取ろうかと思案された。そこへ四天王が四方からやって来て、それぞれ金の鉢を手にして献上したが、世尊は黙って受納されなかった。出家にはこのような器は不適であると考えられたのであ

る。四天王は金の鉢を捨てて銀の鉢を奉った［がこれも受けられず］、このようにして頗胝・琉璃・馬脳・車渠・真珠等の鉢にまでなったが、世尊は金鉢同様にみな受納されなかった。四天王はそれぞれ御殿に帰り、石鉢の紺青に輝くものを奉持し、重ねて献上した。世尊は誰のものを受けとるというような差別をされないので全部受納され、次々に重ねて順次に一つの鉢とされた。それでその外側には四つの縁があるのである。(注一)

注
一　この説話は『五分律』五、*Mahāvagga* に出ているが、金銀等の鉢の記事はなく石鉢のみ記す。

六・三四　摩耶夫人の教化　四天王献鉢［窣堵波］の側、遠からざる所に窣堵波がある。如来が母のために法を説いた処である。如来は悟りを開かれて天人師(注一)と称せられた。その母の摩耶［夫人］は天宮よりここに降りて来た。(注二)世尊はその能力に応じ法を示し教え利益し歓喜させた。

その側の涸れ池の岸に窣堵波がある。昔、如来が種々の神変を現わし有縁の人々を教化された処である。

注
一　天人師　天と人との導師 Śāstā devānāṃ ca manuṣyānāṃ の意。
二　摩耶夫人の降天　如何なる経典による説か、諸書何れも解説せず。出所不明。

六・三五　三迦葉の帰仏　現神変［窣堵波］の側に窣堵波がある。如来が優楼頻螺迦葉波(注一)の三兄弟と、その千人の門人を済度された処である。如来は巧みな指導を施し、人々の機量に応じて降伏させておられた。時に［長兄の］優楼頻螺迦葉波の五百人の門人が仏の教えを受けるよう頼んだ。迦葉波は、

「私も汝らといっしょに迷った路を引き返そう」

と言い、そこで共々に仏の所にやって来た。如来は、

「鹿皮の衣を棄て、火を祭る道具を捨てなさい」

と告げられた。そこで梵志（婆羅門）たちは仏のみ教えを謹んで承け、その着ている服や使う道具を尼連河に投げ捨てた。［仲兄の］捺地迦葉波はいろいろな［火を］祭る道具が流れのままに漂い流れて来るのを見て、その門人たちと兄の動静を候っていた。［兄が］今までの道を改めるのを見て、自分も後に従い衣を染め［出家し］た。［末弟の］伽耶迦葉波とその二百人の門人は、兄たちが従来の［事火外道の］法を捨てたということを耳にするや、かれも仏の所へやって来て梵行（涅槃に至る修行）を修することを願った。(注二)

注
一　優楼頻螺迦葉波　優楼頻螺 *◦ʼi̯əu-◦ləu-◦bʼi̯ĕn-◦luâ*: Skt. *uruvilvā-kāśyapa*. また優為迦葉・優楼頻贏迦葉など、烏盧頻螺迦葉波なども。木瓜林迦葉と訳す。
二　この項の話と関連するものとして、本巻の五・二「三迦葉の塔」の項を参照。また三迦葉の帰仏の説話は、『五分律』一五、『四分律』三二、『普曜経』八等に見える。



迦葉帰仏の物語，ガンダーラ地方出土浮彫

六・二六　如来火竜を伏す　度迦葉波兄弟［窣堵波］の西北の窣堵波は如来が迦葉波の事えていた火竜を調伏された処である。如来がその人を教化しようとされた際に、まず信仰している対象を伏そうとされ、そこで梵志の火竜の室に止宿された。夜半過ぎに竜は煙や炎を吐き出したが、仏は禅定に入っておられもし、［火光定に入り］火光をも起こされたので、その室は明々と猛炎は燃えしきった。梵志たちは火が仏を害うのではないかと心配して、走り集まり声をあげて痛惜しないものはなかった。優楼頻螺迦葉波はその門人たちに、

「この様子から判断するに、必ずしも竜の火ではあるまい。きっと沙門が火竜を調伏していられるに違いない」

と言った。如来は、なんと、火竜をば鉢の中に収容し、朝方に持って来て外道の門人たちに見せられた。

その側の窣堵波は五百人の独覚（巻七の一・三注四参照）が同時に涅槃に入った処である。

六・二七　如来の起雲踏水　目支鄰陀竜池の南の窣堵波は、迦葉波が如来の水に溺れそうなのを救おうとした処である。迦葉（旧訳語槃を使用）兄弟は当時その神通力で推重され、遠近の人々はその徳を仰ぎ諸人は心を依せていた。世尊は道に迷った人たちを導き、仮りの姿で摂取教化するために、密雲を空いっぱいにし豪雨を降らしたが、仏の居る所の周囲はそこだけ水がないようにした。迦葉はこの時この雲や雨を見て門人に、

「沙門の住居も水にやられないではすまないであろう」

と言い、舟を出し救いにやって来た。ところが世尊を見ると水を履むこと地を行くがごとく、河の中流を踏めば水は分かれて砂が現われてきた。迦葉はこれを見て心から伏し戻った。

六・二八　盲竜の開眼　菩提樹の垣の東門から二、三里の所に盲目の

竜の住室がある。この竜は罪業が過去世より積み重なり、その報いとして生まれながらの盲目の身を受けていた。如来は前正覚山から菩提樹の所へ行こうと思われ、途中この竜室の側を通られると竜の眼はたちまち開眼し、菩薩がちょうど仏樹（菩提樹のこと）の所へ行こうとされるのが眼に入った。そこで菩薩に、

「あなたは間もなくきっと悟りを開かれるに違いありません。私の眼が見えないのはすでに長いことであります。仏が世に出られると私の眼は見えるようになります。賢劫の中の過去の三仏が世に出られた時も、眼が見えるようになることができました。あなたが唯今ここまで来られますと私の眼がたちまち開きました。こういうわけできっと成仏されることが分かったのです」

と言った。（注一）

注

一　盲竜開眼の説話は『仏所行讃』三に見える。

六・二九　**魔王の脅迫**　菩提樹の垣の東門の側に窣堵波がある。魔王が菩薩を威した処である。初め魔王は菩薩が正覚を成じられるであろうことを悟るや、誘惑したが成功せず心痛したがなす術もなく、魔神たちを集め魔軍を編成し、軍勢を動かし菩薩を脅迫しようとした。そこで風や雨を吹き降らし雷や電を真っ暗な空に鳴り光らせ、火を縦ち煙をあげ砂をまき揚げ石を飛ばし、矛や楯の武器を整備し弓矢の使用を尽くした。菩薩はそこで大慈悲の心で禅定に入られると、すべての兵器は蓮華に姿を変えてしまったので、魔軍は驚き恐れ走り逃げ退散した。（注一）

その側、遠からざる所に二つ窣堵波がある。帝釈天と梵天王が建てたものである。

注

一　魔王の誘惑・脅迫の記事は、『仏本行集経』二七―二九、魔怖菩薩品に詳しい。

六・三〇　**摩訶菩提僧伽藍**　菩提樹の北門の外に摩訶菩提僧伽藍（注一）がある。初めは僧伽羅（巻十一の一参照）国王が建てたものであった。庭・建物は六つの建造物よりなり、見はらしのきく閣は三階になっている。周囲の垣根は高さ三、四丈あり、人工の妙を極め、色彩による修飾を尽くしている。仏像に至っては金銀で鋳造してあり、その荘厳は珍しい宝石類を散らばしている。諸窣堵波は高くかつ広く綺麗に飾ってあり、中に如来の舎利がある。その骨舎利は大きさ指の節ほどもあり、光沢のある真っ白なもので透き通っている。その肉舎利は大きな真珠ほどもあり、色は紅縹（うすもも）色を帯びている。毎年、如来大神変月満の日（注二）になると取り出して人々に見せる（原注　即ち印度の十二月三十日で、唐の正月十五日に当たる）。この時には或いは光を放ったり、或いは花が雨の如く降ったりすることがある。僧徒は千人足らずで大乗上座部の教えを学習し、規則は厳粛に、行ないは正しくしている。昔、南海に僧伽羅国があり、その王は篤く仏教を信じ、まるで生まれつきのようであった。一族の弟分に当たるあるものが出家し、仏の聖跡を慕い遠く印度に出かけ、諸方の伽藍に泊まったが、何所でも辺鄙のものであることを軽蔑された。そこで本国に立ち返った。王は自ら遠く出迎えたところ、沙門は悲しみで声もつまり言葉も出せな

い有様であった。王は、

「一体どんな心配事があり、そんなに悩んでいるのですか」

　と尋ねると、沙門は、

「我が国の威光を頼みにして遠方に出かけ仏道を問い求めましたところ、外国の旅行は寒暑にも難儀いたしますのに、身を動かせば辱しめに遭い、話をしかければ譏られました。こんな恥辱を受けてどうして心を楽しませることができましょうか」

　と答えた。王は、

「そのようなことは一体どうしてなのですか」

　と問うと、沙門は、

「大王におかれましては、福徳を樹てることを目的として印度の諸地方に伽藍を建ててくださるようお願い申し上げます。一つには聖跡を顕彰することになりましょうし、また王のみ名を高くすることにもなり、先王の追善にもなり、高恩は王の御子孫にも及びましょう」

　と申し上げると、王は、

「それは素晴らしいことです。どうして今まで耳に入れてくれなかったのでしょうか」

　と言い、そこで国中の重宝をば印度の王に献上した。印度王は献上品を嘉納したが、その考えは遠方の国を懐撫することにあり、使臣に、

「さて私はどのようにしてお返しをしましょうか」

　と尋ねた。使臣は、

「僧伽羅王は頓首して印度の大吉祥王に申し上げます。大王はその威徳遠きに及び、その恩沢は遠方をも覆っていられます。私の国の沙門は貴国の風俗教化を敬慕し、貴国に遠遊して聖跡に参拝し、諸方の伽藍に宿泊しようとしましても泊めてくれず、苦労も甚だしい上に恥を受けて帰ってまいります。将来のことを考え手本を今後に残すためには、印度の諸地方に［僧伽羅僧のための］伽藍を建て、印度を訪れる沙門たちが疲れを休める場所を作るならば、お互いの国は仲良く交わり、行き来する人は絶えないことでしょう」

　と言うと、王は、

「如来は人知れず教化をされましたが、その遺風がこのように残っております［とは感激の至りです］。伽藍を建立する聖跡は望む所に任せましょう」

　と言った。使者は印度の王の言葉をそのまま報告し、群臣は［良き返事に］祝いをのべた。そこで沙門たちを集めて伽藍建立の件を評議した。ある沙門は、

「菩提樹の地は過去・未来の諸仏がみなここで悟りを開かれる所です。その他の意見を考え合わせましても、この［菩提樹の地に建立するという］計画に及ぶものはありません」

　と言った。そこで国家の財宝を寄捨してこの伽藍を建て、僧伽羅国の僧に供養をさせた。さらに銅板を刻み記録を作った。その文に、

「そもそもあまねく施与して不公平のないことが諸仏の教えであり、有縁の人々を恵み済うことが先王の教訓であります。今私は王業を継承し、伽藍を建て聖跡を顕彰しました。これは祖先を追善し人々を愛護するがためであります。唯我が国の僧だけが出入り自由ですが、我が国民も僧の場合と同じです。これを後継者に伝えて永世変わることのないように」

　とあった。それでこの伽藍には執師子国(注三)の僧が多いのである。(注四)

注

一　摩訶菩提僧伽藍　摩訶菩提 Mahā-bodhi,『西域求法高僧伝』上には莫訶菩提と表記し、同書下には大覚寺と意訳されている。

二　如来大神変月満の日　通常、神変月とは、また神足月とも言い、正・五・

九の三長斎月（特に一ヵ月の長きにわたり持斎する月の意）のことで、この月には諸仏諸天が神足をもって四天下を巡行し、善悪を具に録すと言う。ここで、唐の正月十五日の意とするのは如来大神変の語を、如来が入涅槃された日の意としたものか。

三　執師子国　執師子とは Siṃhala の訳。siṃha は獅子、la＜lā は執・取と訳す。僧伽羅国の訳語である。

四　ここに玄奘が記した伝説は、ほぼ西暦三六〇年ごろ、グプタ Gupta 王朝の Samudragupta 王とセイロンの Siri Meghavaṇṇa (Skt. *Meghavarṇa*) 王との間になされた事実であるとされた［V.A. Smith : *Early History of India*, p. 303］。六四三―四六年の間に唐・太宗よりインドに遣わされた王玄策の『中天竺行記』（今『法苑珠林』二九に「王玄策行伝」として引用されている）にも、師子国王名は尸迷佉抜摩（唐に功徳雲と云う）と三謨陀羅崛多王との間の交渉とされている。

六・三　安居　菩提樹の南方十余里の間は、聖跡が互いに隣りするように引き続き存在し、一いち挙げることは困難である。毎年比丘が雨安居を終わる時には、四方の僧俗が百千万人と群れをなし、七日七夜の間、香花を持ち音楽を奏し、林中を周遊して［この聖跡を］礼拝供養する［習わしがある］。印度の僧徒は仏の聖教に従って、誰もが室羅伐拏月の前半の第一日に雨安居に入る。唐の五月十六日に当たる。頞湿縛庾闍月の後半の第十五日に雨安居を終わる。唐の八月十五日に当たる。印度の月名は星宿によって設定しており、古今にわたって変わらず、諸部派を通じて違いがないが、まことに言語の相違によく通ぜず伝訳に誤謬があり、時間を区分し月を計算するに当たって誤ってしまった。それで四月十六日に安居に入り、七月十五日に安居を解いているのである［が、これは間違いである］[注一]。

注

一　この項における暦日および安居については、巻二の一・四の記述を参照。

大唐西域記　巻第八

大唐西域記　巻第九　一国

三蔵法師玄奘奉　詔訳
大捴持寺沙門辯機撰

摩掲陀国下

一　尼連禅河東岸の史跡

一・一　香象子の孝養　菩提樹より東して尼連禅那河(注一)を渡る。その大きな林の中に窣堵波があり、その北に池がある。香象(注二)が母に仕えた場所である。如来が昔、菩薩行を修しておられた時に香象の子となり、北の山中に住みこの池の側に遊びに来ていた。香象の母象は盲目であった。[それで香象は母象のために]蓮根を採ったり清水を汲んだりし、親孝行を懸命に努めて年月が経った。ある時、林に遊び路に迷った人があり、あちらこちらさ迷い歩き声をあげて泣き悲しんでいた。象の子はこの泣き声を耳にして哀れに思い、この人を案内して帰路を教えてやった。この人は帰りつくや、王に、

「私は香象が林中にいるのを見つけました。これは世にも珍しい宝です。出かけて行って捕獲すべきでしょう」

と申し上げた。王はその言葉を聞き入れ、兵と共に捕えに出かけた。この人は道案内をして象を指さし王に示したところ、即時に両の臂が落ちてしまい、まるで切り取るものがいるようであった。王はこの不思議なでき事に驚きはしたが、予定どおりに象の子を縛りつれて帰った。象の子は繋がれて時間がたっても水も草も口にしなかったので、象舎の役人はこの由を王に申し上げた。王はそこで自ら子象に理由を問うと、象の子は、

「私の母は目が見えず何日も飢えておりましょう。今私は捕えられてどうして飽食することができましょうや」

と言った。王はその心根を哀れに思ったので、そのまま放してやった。

その側の窣堵波の前に石柱が建っている。昔、迦葉波仏がここで坐禅した処である。その側に過去四仏の座所および散策された遺跡の所がある。

注

一　尼連禅那河　本書には尼連河・尼連禅河・尼連禅那河などの表記が見える。巻七の一・一〇注四参照。

二　香象　『注維摩経』一に香象菩薩につき「[羅]什曰く、青香象なり、身より香気を出だす」とある。香気を出す勇健な象を言う。梵語に gandha-hastin. なお、この香象子の本生譚は、『雑宝蔵経』二、『仏本行集経』五六、*Jātaka*, No. 455, Mātiposaka-Jātaka 象王本生に見える。この香象子の伝説の場所は、今の Bakror にある古塔・石柱のある所とされる [Cunningham : *A.G.I.*, p.562]。

一・二　鬱頭藍子の悪願　四仏の座所から東して莫訶河(注一)を渡り、大林中に至ると石柱がある。外道の人が禅定に入り悪願を発起した処である。昔、外道の鬱頭藍子（巻七の一・一〇注五参照）というものがおり、志は山川に馳せながらその身は草野に留めており、この教えの林

の中で精神を凝らし所在を隠していた。すでに五種の神通力を身に具え、第一の禅定(注二)を習得していた。摩掲陀王は特別に深く尊敬し、何時も昼食時になると、王の御殿で食事してもらっていた。鬱頭藍子は虚空をわたり歩き、行き来することに変わりがなかった。摩掲陀王も時分ごろになると遠くを見やっているが、鬱頭藍子がやって来ると両手で恭しく受けて座に安置した。［ある時］王が地方へ行こうとして後の事を委ねようとし、中宮から人を選び出したが、その仕事の命を承るほどのものはいなかった。王の若い娘がいたが、その態度も慎しやかで礼儀もりっぱであり、身内でもあり徳もある点でその右に出るものはなかった。摩掲陀王は娘を召し出し、

「私は今遠方へ出かけるが、汝に仕事を委任しようと思う。汝はよく心がけ慎んで仕事をりっぱにやりなさい。かの鬱頭藍仙はもとから尊敬している方ですから、時間となり来られて食事される時には、私が謹んで行なっているとおりにするように」

と命じた。王は自ら教えると巡幸に出かけた。少女は王の言いつけどおりに目を遠くに馳せ、待ち受けること作法どおりであった。大仙がやって来ると、両手で捧げ受けて座に安置した。鬱頭藍子は女人に触れたので、欲界の煩悩を起こし神通力を失ってしまった。食事し終わり帰る段になったが、虚空を遊歩することができず、心中に恥じながら詭って娘に、

「私は日ごろ仙人の道を修行し禅定に入って精神を楽しませており、虚空を歩んで往来しほとんど間暇がありません。国民が私を見たいと願っているという話を耳にすることすでに久しいものがあります。しかしながら先聖の方々は、教訓を垂れ万物を利するようにと言っておられます。独善のみを守って人々をも済うことを忘れておりましょうや。今は城門より出て地面を履んで行き、私を目にする人々にみな福利を蒙らせたいと思います」

と言った。王女はこの話を聞くや、遠近に布告した。そこで人々は争って道を掃除し、百千万の人々の群れは佇んで行儀正しくしていた。鬱頭藍子は歩いて王宮より出かけ、かの林にまでやって来て、坐禅して禅定に入り心を外界に走らせたが、心が林に落ちつくと鳥がうるさく鳴き囀り、池に臨めば魚どもがやかましい声をあげ、心は散り散りに乱れ気を取られて禅定を廃止してしまった。かくて心に怒りを発し悪願を起こし、

「願わくば私は来世に暴悪の獣となり、狸（カワウソの類）の体に鳥の翼をつけ、生き物を取って食いますように。体の広さは三千里、両の翼はそれぞれ広さ千五百里、林に行っては鳥どもを食らい、流れに入っては魚どもを食らいますように」

と願った。願いを立てると怒った心も次第におさまり、努力すること暫くにして再びもとのように禅定に入ることができたが、間もなく寿命尽きて第一有天(注三)に生まれた。その寿は八万劫である。如来は、

「天寿が尽きると必ず以前の願いどおりに醜い体となり得て、それから悪道を流転して何時それから脱け出られるか分からない」

と予言していられる。

注

一　莫訶河　莫訶 *mak-xā*: Skt. *mahā*. 旧来は摩訶と表記した。巻一の一に旧来の娑訶を索訶と新表記したと同断。現在の Mohana 河に当たろう。

二　第一の禅定　非想非非想処定のこと。巻七の一・一〇注五参照。

三　第一有天　無色界の最頂第四天である非想非非想処天のことで、俗に言う「有頂天」とはこの天を指す。

一・三　鶏足山の旧跡　莫訶河より東して大林野に入り、行くこと百余里で屈屈（原注　居勿反→*kiuat*。）吒播陀山（原注　唐に鶏足と言う）(注一)に至る。また窶盧播陀山（原注　唐に尊足と言う）(注二)とも言う。高い峯は険しいこと極まりなく、深い谷は底がないかのようにはてしない。山麓の谷川は喬木が谷をうずめ、山の峯々は繁った草が巌石を被っている。三つの峯が峻しく立ち、傍には絶壁がそびえている。気配は天にも接せんばかり、形は雲と同じ様子である。後に尊者大迦葉波がこの山中で寂滅したので、その名を言うのを遠慮してことさらに尊足と言っている。摩訶迦葉波は仏のお声を直接に聞いた弟子である。六神通を得て八解脱（巻二の四・六参照）を身に具えた。(注三)如来がこの世で教化される因縁が終わり、まさに涅槃に入ろうとされるや、迦葉波に、

「私は太古より苦行を修し、衆生のために最上の教えを求めてきました。その昔に願っていたことは、今ははや果たしました。私は今、大涅槃に入ろうとするにあたり、諸法蔵（仏の数々の教え）を汝に依託しようと思う。これを保持宣布して失墜することがないように。叔母（鉢羅闍鉢底、巻六の一・三参照）が献じてくれた金襴の袈裟は、慈氏（弥勒菩薩）が出世するまで汝が留めておいて伝え与えるように。私の遺法に従い修行をする比丘・比丘尼・鄔波索迦（原注　唐に近事男と言う。旧に伊蒲塞と曰い、また優波塞と曰い、また優婆塞と曰う。みな訛なり）(注四)・鄔波斯迦（原注　唐に近事女と言う。旧に優婆斯と曰い、また優婆夷と曰う。みな訛なり）(注五)の人たちをみなまず済度して、流転する輪廻より解脱させるように」

と告げられた。迦葉はお指図に従い正法を護持していたが、結集（本巻の二・一六参照）も終わり二十年目に、世の無常を厭い寂滅に入ろうとした。そこで鶏足山に行き山の北から登り、山を廻って道をとり西南の岡にやって来た。山の峯は険阻で崖の道は塞がっていた。そこで錫杖でたたくと、道が開けることまるで割ったようであった。山道が開けたので道に従って進むと、道はまがりくねり、或いはめぐり或いは斜めに通じていた。山頂に至り、東北の方に出た。三つの峯の真中に入っていたので仏の袈裟を捧げて立つと、願力のために三つの峯は［尊者を］覆ってしまった。それで今もこの山は三つの脊稜が隆起しているのである。未来において慈氏世尊が出世されるや、三会の説法(注六)の後になお甚だしく憍慢な人々がおり、この山に登り迦葉の所に行こうとするであろう。その時、慈氏が弾指すると山の峯は自然に開くであろう。かの人々は迦葉を目にしてなお一層憍慢を増そう。すると、大迦葉は袈裟を慈氏に手渡し、如来の言づてを伝え礼し終わると、我が身は虚空に昇り諸種の神変現象を示し、火を現じ身を焼きそのまま寂滅に入るであろう。そこで人々はこのでき事を仰ぎ見て憍慢な心を取り除き、これが動機となり心に感じてみな聖果を證することとなろう。こういうわけで現在山上に窣堵波を建ててある。静かな夜に遠くから望むと明るい燈火を見ることがあるが、山に登るものがあっても見つけるものはない。

注

一　屈屈吒播陀山（……）　屈屈吒播陀　*kiuat*。-*kiuat*。-*ta*°-*puât*。-。*d'â* : Skt. *kukkuṭapāda*. 旧訳に屈屈吒は究究羅・鳩鳩吒、播陀は跛大・般檀那とも。山嶺が三方に分かれて鶏の足の形に似ている故の名称。その位置については諸説があったが、今はガヤー Gayā の東北東にある Kurkihār の一マイル北にある山とされる［Majumdar's Note, in *C. A. G. I.*, p. 721 ; Law : *H.G.A.I.*, p.230］。

二　窶盧播陀山（……）　窶盧播陀 °g'i̯u-ₒluo-puâtₒ-ₒd'â : Skt. gurupada. guru は「尊敬すべき」の意で、尊・師と訳される。pada は前注にもある足の意。

三　摩訶迦葉波は……身に具えた　摩訶迦葉波 ₒmuâ-ₒxâ-ₒka-śi̯äpₒ-ₒpuâ : Skt. mahā-kāśyapa. 摩訶迦葉・大迦葉とも。釈尊によって出家し、仏弟子中の少欲知足頭陀第一と称せられ、付法の第一祖。本巻の二・一六参照。

四　鄔波索迦（……）　鄔波索迦 ·i̯wo°-ₒpuâ-sâkₒ-ₒka : Skt. Pa. upāsaka. Pkt. uvāsaa (uvāsaka). 召使の意から在家・居士などと訳す。旧訳の伊蒲塞 *·i̯ed-b'wâg-sək→ₒ·i-ₒb'uo-sək。, 優婆塞 *·i̯ŏg-b'wâ-sək→ₒ·i̯əu-ₒb'uâ-sək。は何れ俗語形に対応したものであろうが、唐代ではすでに漢字音は変化してしまって対応しない。

五　鄔波斯迦（……）　鄔波斯迦 ·i̯wo°-ₒpuâ-ₒsi̯ę-ₒka : Skt. Pa. upāsika, Pkt. uvāsia (uvāsika). 近善女・清信女とも訳す。旧訳の優婆斯 *·i̯ŏg-b'wâ-si̯ęg→ₒ·i̯əu-ₒb'uâ-ₒsi̯ę, 優婆夷 *·i̯ŏg-b'wâ-di̯ər→ₒ·i̯əu-ₒb'uâ-ₒi は俗語形に対したものであろうが、唐代ではすでに音変している。

六　慈氏の三会の説法　慈氏（弥勒菩薩）が成仏された時には、華林園の中の竜華樹の下で法会を三度開いて衆生を済度されるという。

二　旧王舎城付近の史跡

二・一　仏陀伐那山

二・一　仏陀伐那山　鶏足山より東北へ行くこと百余里で仏陀伐那山（注一）に至る。峰は嶮しく崖はそびえたっている。岩の間にある石室は、仏がある時ここに止まられたことがあるものである。傍には大きな石がある。帝釈天と梵天王が牛頭栴檀の木（注二）を磨擦して如来の身に塗った所である。今もその石の上には余香が馥郁と香っている。五百羅漢（注三）がここに霊を潜めており、仏恩を思う人々はその姿を見得ることがある。時には沙弥の姿となって村里に入り乞食することもある。或いは眼に見えず或いは眼に見える奇跡の跡は、ほとんど筆舌では述べ難いほどである。

注

一　仏陀伐那山　仏陀伐那 b'i̯uətₒ-ₒd'â-b'i̯wɐtₒ-ₒnâ : Skt. buddha-vana. かっては Kurkihār（鶏足山）の北北東の Buddhain 山に比定された [Cunningham : A.G.I., p.528] が、その後諸関係位置から見て否定された [Majumdar's Note, in C.A.G.I., p.721]。

二　牛頭栴檀の木　牛頭山より出る香木たる栴檀の意。栴檀は香気ある上に久しく腐朽しないから彫刻・建築材として、またその粉末を薬料として、その油は香水の原料として使用される。巻十の一七・三参照。

三　五百羅漢　五百人の羅漢果を證した聖者の意で、諸経典に見える仏在世中に随従した大比丘衆五百人のことも、また第一結集（本巻の二・一六参照）に参集した五百の比丘も、共に五百羅漢という。ここは何れを指すか不明。

二・二　杖林の伝説と勝軍論師

二・二　杖林の伝説と勝軍論師　仏陀伐那山の人気のない谷を東に行くこと三十余里で洩（原注　移結反→iet。）瑟知林（原注　唐に杖林と言う）（注一）に至る。林の竹は丈高く山も谷も被うほど生えている。その昔、婆羅門がおり、釈迦仏の身長が丈六（一丈六尺）であることを聞き、常に疑問とし信じなかった。そこで丈六の竹杖で仏の身長を測量しようとしたが、測るたびに杖の端からなお一丈六尺も身が出ていた。このようにして次第に高さが増加するので、実際の高さをはっきりさせることができず、遂に杖を投げ出してここを去ったので、その杖の根を植えたのである。林の中に大きな窣堵波がある。無憂王が建てたものである。如来が昔ここで七日の間、天人や大衆のために大神通

を現わし甚深の妙法を説かれた。

杖林の中に近ごろ鄔波索迦の闍耶犀那（原注　唐に勝軍と言う）[注二]という人がいる。西印度の刹帝利種（巻二の一・九参照）の人である。その人柄は淡泊で山林に住むことを好み、身は夢幻の世界に住み、心は真理の境に遊ばせていた。内外の典籍をその微妙な点まで極め尽くし、議論は清くかつ高く、その儀容は風雅であった。沙門（仏教者）も婆羅門（浄行者）も、また外道異学のものから、国王大臣・長者豪族のものも、みなこの人の所へ行きお目にかかり、心から教えを受けた。受業の門人は常に十室のうち六室に満ちるほどであった。年齢は早や七十歳になっても研究に倦むことなく、他の一切を廃止して唯仏教の経典を学習し、身心を励まし昼夜を分かたず努力していた。印度の風習に香木の粉末を練って高さ五、六寸の小さな窣堵波を作り、書き写した経文をその中に安置する習慣があり、これを法舎利と言っている。数が次第に殖えると大きな窣堵波を建てて、これをその中にみな集めて常に供養を行なうのである。それで勝軍はその日々の仕事としては、口では甚深の妙法を講義して学生を指導し、手では窣堵波を作って福善を積むことに努めていた。夜も散策・誦経・坐禅・思索と、寝食の暇もないほど昼夜を通じて怠ることがなかった。年齢百歳に至るもその志・業ともに衰えず、この三十年間に凡そ七拘胝（原注　唐に億と言う）[注三]の法舎利窣堵波を作った。一拘胝に満つるごとに大窣堵波を建て、その中に全部安置して盛大に供養を修し、多くの僧を請来して慶祝法要を行なった。その時には不思議な光が輝き、奇跡がはっきり現われた。それ以後時おり光明を放つことがある。

注

一　洩瑟知林（……）　洩瑟知 *iet。-ṣiĕt。-。ṭiḙ* : Skt. *yaṣṭi*, Pa. *yaṭṭhi*, Kharoṣṭhi Insc. *yaṭṭhi*, Pkt. *jaṭṭhi*. 今の Jeshtiban (Jakhtiban に非ず) に比定される。この林との関係位置より、前項の仏陀伐那山の位置についてのカニンガム説が否定された［Majumdar's Note, in *C. A. G. I.*, p. 721］。

二　闍耶犀那（……）　闍耶犀那 *。ẑia-。ia-。siei-。na* : Skt. *jaya-sena*. 西インドの蘇剌佗国（巻十一の一〇参照）の人。刹帝利種の家に生まれ、幼より学を好む。賢愛（巻十一の五・三参照）に因明を、戒賢（巻八の四・四参照）に『瑜伽論』を、安慧（大乗仏教の大学者）に声明および大小乗論を学び、その他四吠陀、天文地理・医方術数にわたった。摩掲陀国の満冑王（巻八の六・三参照）は師を国師として招こうとしたが辞し、戒日王（巻五の一・三参照）の招請をも辞して山林に止まった。玄奘は師につき二年の間に『唯識決択論』『意義理論』『成無畏論』『不住涅槃』『十二因縁論』『荘厳経論』を学び、瑜伽・因明につき質問をした〔『慈恩伝』巻四〕。

三　拘胝（……）　拘胝 *。kiu-。ṭi* : Skt. *koṭi*. 『玄応音義』五に「倶致　或いは倶胝と言う。此に千万と言い、或いは億と言いて甚だしく同じからず。故に本を存す」とある。

二・三　杖林付近の遺跡

杖林の西南十余里にある大きな山の南に、温泉[注一]が二ヵ所ある。その湯は非常に熱い。その昔に如来が法力でこの湯を出し、中で沐浴された。今日も存在しており、清流は減ずることがない。遠近の人はみなやってきて入浴している。長患いや持病でも治癒するものが多い。その傍には窣堵波がある。如来が散策された場所である。

杖林より東南へ行くこと六、七里で大きな山に至る。[注二]東西にのびる嶺の前に石の窣堵波がある。昔、如来が両三ヵ月[注三]の間、天人や大衆のためにここで説法をされた。その時、頻毗娑羅王（巻八の二・三参照）はやって来て説法を聴きたく思い、そこで山を削り石を積み、階段を作

って進んだ。その広さ二十余歩、長さ三、四里ある。

大きな山から北へ三、四里すると離れ山がある。その昔に広博仙人(注四)がここに隠棲した。崖を掘り住居を作った。その残址は今も存している。教えを伝える門人たちがおり、その遺風は今日もなお盛んである。

離れ山の東北四、五里に小さな離れ山(注五)がある。山壁の石室は広々と、千余人が坐れるほどである。如来はその昔にここで三ヵ月間説法をされた。石室の上に大きな岩がある。帝釈天と梵天王が牛頭栴檀を磨って仏の身に塗った。石上の余香は今も馥郁としている。

石室の西南隅に巌石の洞穴がある。印度ではこれを阿素洛（原注旧に阿修羅と曰い、また阿須倫と曰い、また阿蘇羅と曰う。みな訛なり）(注六)宮と言っている。先ごろ、物好きな人でよく咒術をたしなむ人があり、友人を十四人集め、共に事を行なうことを約束しこの巌窟に入った。行くこと三、四十里で広々として明るい所に出た。と見ると城も邑も高殿などみな金・銀・瑠璃であった。この人たちが着くと若い娘たちが門の側に立っており、にこやかに出迎え非常に丁重であった。それから次第に進み内城の門に至ると、二人の召使がそれぞれ金盤を捧げ持ち、花・香をいっぱいに盛り上げて出迎え、人々に、

「池で沐浴し冠に香花を塗り、それから中にお入りになられたならばよろしゅうございましょう。唯この方術をたしなまれる方だけは、直ぐさま中にお進みください」

と言った。他の十三人はそこですぐに沐浴した。池に入るとうっとりとして、何もかも忘れてしまうような心地であった。［ふと気がつくと］何と稲田の中に坐っていたのであったが、そこはこの巌窟から北へ平坦な川筋を行くこと三、四十里の所であった。

石室（前条の巌窟）の側に桟道がある。広さ十余歩、長さ四、五里ある。その昔、頻毘娑羅王が仏の所に行こうと思った。そこで石を切り谷を通じ、崖を削り川を埋め、或いは石を畳み或いは岩を掘って、階段を作って仏の所に行った。

注

一　温泉『雑阿含経』三八に榻補河、『別訳雑阿含経』一一に多跛河とあるもの。『中阿含経』四三「温泉林天経」の温泉林はパーリ本に Tapodārama（温泉精舎）とある。玄奘の指示する方位距離にあたるもので、今日もなお Tapoban と称する温泉があるのがそれであるという [Cunningham : *A.G.I.*, p.528]。

二　杖林東南の大山　この山は Handia 山（千四百六十三フィート）に比定されている [*C.A.G.I.*, p.529]。

三　両三ヵ月　原文の「両三月」は一本にのみ「雨三月（雨安居の間の三ヵ月）」に作る。「両三……」という語法を他に見ない。恐らく「雨三月」が正しかろう。

四　広博仙人　広博は Skt. *vyāsa* の訳。毘耶娑。この語は著作者・編纂者の汎称であるが、通常吠陀の編者の名とする。

五　大山の北三、四里の孤山とその東北四、五里の小孤山　大山の北三、四里の孤山即ち広博仙人の住所は Handia 山の西南にある Pansabda の入り込んだ所に比定された [Majumdar's Note, in *C.A.G.I.*, p.721] が、小孤山の方は不明 [*C.A.G.I.*, p.529]。

六　阿素洛（……）宮　阿素洛 *'a-suo-lak* : Skt. *asura*. 非天・不飲酒などと訳す。『慧琳音義』九に「阿須倫　又阿須羅に作り、或いは阿修羅に作るは皆訛なり。正しくは阿素洛と言う。素洛とは酒を云い、此れに訳して阿と云うは無なり、亦非なり。亦天を云うに、無酒神と名づけ、亦非天と名づけ、経中には亦無善神と名づく」の解と、同書二一（この巻は慧苑撰『新訳華厳経音義』の転載）に「或いは阿素羅と云う。阿は此れに無と云うなり。素は極なり、妙なり。羅は戯なり。言うこころは、此の類の形は天に似たりと雖も天の妙戯なければばなり……旧翻に不酒となすは訳人の謬言なり。謂えらく、梵語の中には窣利 (Skt. *surā*) を酒と名づく、而して素囉 (Skt. *sura*) と声近し。即ち阿字を訓じて不となし、故に不酒と云う。斯れ乃ち失の甚だしきなり。案ずるに梵本中に阿

修羅は是れ多声之を呼び、阿素洛は是れ少声之を呼ぶ。然れども皆同一の称謂なり」の解と併載する。多声・少声の義は恐らく名詞の男性・単数・主格 *asuraḥ* を少声、同じく複数 *asurāḥ* を多声と言ったものであろう。旧訳の阿修羅は音声的に不適であり、阿須倫は恐らく古く中央アジア語を介して訳された語らしく、これも梵語には適当ではない［拙稿：「暁・匣両声母の対音」『東洋学報』四〇巻四号、八三ページ］。阿蘇羅は古本の「須」に作るを除く諸本みな「蘇」とする。阿蘇羅は管見の限り、義浄訳『三転法輪経』に見るを初めとし、玄奘以後の表記であるらしく、ここは古本の如く阿須羅とあるべきであろう。阿素洛宮については『長阿含経』二〇、第四分世紀経阿須倫品第六に、阿須倫宮殿は須弥山の北の大海水底にあり、その厳飾さながら天界の如しとあるより見れば、ここに言うインドの説に云々とあるのは天界の如く至極の住居ではあるが、住人のみは天人と常に闘争する非天の者との意であり、結構ではあるが望むべきに非ざる住居の意か。

二・四　**上茅宮城**（旧王舎城）　ここから大山の中を東へ行くこと六十余里で、矩奢揭羅補羅城（原注　唐に上茅宮城と言う）(注一)に至る。上茅宮城は摩揭陀国の真中にあり、古代の君主が都した所である。特別に上等の吉祥香茅(注二)を産出する。それでここを上茅城と言うのである。高い山が四面をとり巻いており、それを外郭としている。西は渓谷沿いの道に通じ、北は山に向かって門を開いている。東西は長く南北は狭く、周囲は百五十余里ある。内城の遺趾は周囲三十余里ある。羯尼迦樹(注三)がどの谷間の道にもいっぱいで、花は特によい香を含み、［葉の］色は黄金色に輝いており、暮春の月には林は金一色である。

注

一　矩奢揭羅補羅城（……）　矩奢揭羅補羅 ˳kiu-˳śia-g'ịpt˳-˳lâ-°puo-˳lâ：Skt. *kuśāgra-pura*. kuśa は祭式用の敷物とする草で、吉祥草・上茅・香茅と訳す（巻八の六・九注一参照）。学名 Poa cynosuroides. 茅または薄に似た草で、湿地に生じたり、水田に栽培されたりする、二尺余のもの。agra は最上・第一等と訳す。旧名を耆梨跋提 Skt. *girivraja*, Pa. *giribbaja*（山城の意）と言う。これは『慈恩伝』三に言う「王舎旧城」であり、渓谷の中にあって山に囲まれ、山の尾根ぞいに城壁を廻らしている。その一部は今も残っている。新城は旧城の北門を出た山塊地方の平地にあり、王舎城と呼ばれた（本巻の二・一八参照）。

二　吉祥香茅　注一の kuśa 草のこと。

三　羯尼迦樹　羯尼迦 *kịpt˳-˳ṇi-˳ka* は旧訳の語らしいが、今不詳。『慧琳音義』二五に見える釈雲公撰・慧琳再删補の『大般涅槃経音義』には「迦尼迦樹　具には尼迦割羅（迦尼割羅の誤りか）と云う。尼迦は此に耳と云う。割羅はこれに作と云う」とある。Skt. *karṇi-kāra*, Pa. *kaṇi-kāra, kaṇṇikāra*. 樹木の名で学名を Pterospermum acerifolium と言う。『慈恩伝』三に「羯尼迦樹、処々に林を成し蕚を発して開栄し、四時間なく葉は金色の如し」とある。

二・五　**酔象の調伏**　宮城の北門の外に窣堵波がある。ここは提婆達多（巻六の一・八参照）が未生怨王（阿闍世王。本巻の二・一四参照）と親友となり、あろうことか護財という酔象(注一)を解き放して如来を害しようとしたが、如来はその指端から五匹の獅子を出したので、酔象はこの場所でおとなしくなって如来の前に進んだ所である。

注

一　護財という酔象　象の名を護財 Dhanapāla とするのは『雑宝蔵経』八、『説一切有部破僧事』一九等で、また守財と訳すものもある。別系のものに名を Nālāgiri［*Jātaka*, V］ともする。また『増一阿含経』四七、『十誦律』、『五分律』三、『法句譬喩経』三、『仏所行讃』四等に出る。この状況は岩波写真文庫『仏陀の生涯』五五ページにアマラーヴァティー

Amarāvati 出土の浮彫に見える。

二・六　舎利子の開悟　酔象［窣堵波］の東北に窣堵波がある。舎利子（巻四の七・二参照）が阿湿婆恃比丘（原注　唐に馬勝と言う）(注一)の説法を聞いて聖果を開いた処である。初め舎利子がなお在家のころ、その才能高く度量大きく当時に重んぜられ、門生や学徒たちはついて学業を受けていた。ある時、ちょうど王舎大城に入ろうとすると、馬勝比丘もまさに乞食をしていた。その時、舎利子は遙かに馬勝を見て、門生に、

「あそこから来るものは非常に態度がりっぱである。聖果を開いた人でなければどうしてあんなに物静かであろうか、暫くの間立ち止まってあの人の物腰をよく見てみよう」

と言った。馬勝比丘はこの時すでに羅漢果を證して、その心は何のこだわりもなかった。その姿態は穏やかに品よく、錫を振り威儀正しくやって来た。舎利子は、

「長老は御機嫌よろしゅうございますか。どなたを師としてどのような教えを悟られ、このように心楽しげにしておられるのですか」

と問うと、馬勝は、

「御存知ありませんか。浄飯王（巻六の二・二参照）の太子が転輪王の位を捨て、六趣(注二)にある衆生を哀れまれて六年の苦行をされ、三菩提（正覚）を悟り一切智（一切の法を知る智）を身に具えられました。この方が私の師です。一体、法というものは有にもあらず空にもあらざる中道のものであり、詳しく述べることは困難であり、唯仏（釈尊）だけが仏（諸仏）に向かってのみ、はじめて詳しく述べることができる(注三)ものです。どうしてこの愚昧な私の如きものが詳細に論議できましょうか」

と言い、そこで偈頌（韻文の一体）を唱えて仏の教えを称讃した。舎利子は聞くや、直ちに悟りを得ることができた(注四)。



酔象の調伏，アマラーヴァティー出土

注

一　阿湿婆恃比丘（……）　阿湿婆恃　◦ʹa-śiəp◦-◦bʹuâ-◦źi : *aśvaji（Skt. aśvajit, Pa. assaji）。恃の対音については、巻六の一・二「鉢羅犀那恃多王」、同巻四・三「阿恃多伐底河」、巻七の四「弗栗恃国」等を参照すれば、この漢字表記が直ちに正梵音に対するとするに躊躇を覚える。なお、阿湿波誓・阿奢婆耆・阿奢踰時・阿輸波祇などの表記もある。馬勝・馬師・馬星・馬宿・無勝なども。釈尊の初転法輪によって度せられた五比丘の一。

二　六趣　煩悩の境にある衆生が、その持てる業因の差別により行きつく所

に、六ヵ所の異なった先がある。即ち地獄趣・餓鬼趣・畜生趣・修羅趣・人趣・天趣の六で、これを六趣とも六道とも言う。

三 唯仏だけが……詳しく述べることができる　この文は『法華経』方便品の有名な「唯仏と仏とのみ乃ち能く諸法の実相を究め尽くさん」の文による。

四 舎利弗開悟の話は、『五分律』一六、『四分律』三三、『仏本行集経』四八、『因果経』四、『仏所行讃』四、『中本起経』上、『説一切有部出家事』二、*Mahāvagga*, I 等に見える。

二・七　勝密の懺悔　舎利子証果［窣堵波］の北、遠からざる所に大きな深い穴があり、傍に窣堵波が建ててある。これは室利毱多（原注　唐に勝密と言う）(注一)が火坑と毒飯で仏を傷害しようとした処である。勝密という人は外道を篤く信じ、深く邪見を懐いていた。梵志たちは、

「喬答摩（釈尊。巻六の四・七参照）を国民が尊敬し、私たちは頼みにする所がなくなりました。汝はかれを家に招待して宴会をなさい。門には大きな穴を掘り、中いっぱいに火を放ち、穴に渡すに朽ちた木を使い、それを燥いた土で覆いなさい。また、飲食物にはみな毒薬を混ぜなさい。もし火坑を免れることができても、きっと毒の入った食べ物にはかかるでしょう」

と言った。勝密は指図を承知して毒入りの宴会を準備した。城中の人はみな、勝密が世尊に悪害心を起こしていることを知っており、共共に仏がお出かけにならないように請い願った。世尊は、

「心配することはありません。如来の身は何物も傷害することはできません」

と言い、そこで招待を受けて出かけたが、足が門の閾居を踏むと火坑は池となり、清らかな波に水は澄みわたり、蓮花が一面に咲き出た。勝密は見るや、不安でたまらず仲間に、

「術で火を免れたが、まだ毒入りの食物があります」

と言った。世尊は食事し終わるや、かれのために甚深の妙法を説いた。勝密は聞き終わり自分の罪過を謝して帰依した。(注二)

注

一 室利毱多（……）　室利毱多 *śjĕt.-ljiˀ-gʼiuk.-.tā* : **śrigutta* (Skt. *śrigupta*, Pa. *sirigutta*)。また尸利掘・尸利崛多とも。訳は吉護・徳護とも。

二 勝密の火坑毒食の説話は、『増一阿含経』四五、『智度論』三に出る。

二・八　時縛迦大医の旧跡　勝密火坑の東北にあたる山城の山峡に窣堵波がある。時縛迦大医（原注　旧に耆婆と曰う。訛なり）(注一)がここに仏のために説法堂(注二)を建て、垣根を周らし花・果を種えた所である。建物の址、木の株の残りなど、今も遺跡が残っている。如来は在世中、ここに止まることが多かった。その傍にさらに時縛迦の家の址がある。基礎の跡の旧い井戸は、今もその廃址・余坑として残っている。(注三)

注

一 時縛迦大医（……）　時縛迦 *.źi-bʼuâˀ-.ka* : Skt. *jīvaka* (*-komarabhṛtya,-kumārabhūta*), Pa. *jīvaka* (*-komārabhacca*). また侍縛迦・耆婆（童子）とも。活童子・耆旧童子・寿命童子・固活・能活・更活とも訳す。頻毘娑羅王の庶子とも、また頻毘娑羅王の子無畏 Abhaya と娼婦 Salāvatī との間の庶子ともいう。長じて北インドの呾叉始羅国に医方を学ぶこと七年、後に仏陀の病を治療し、この因縁により仏に帰依した。

二 説法堂　『法顕伝』に「城の東北角の曲中に耆婆、菴婆羅園中に精舎を起て、仏及び千二百五十弟子を請じ供養せる処あり。今も故のごとく存す」とある。菴婆羅園は耆旧童子菴婆園 Skt. Pa. *jīvakambavana* という。

三　この説話は *Mahāvagga*, 8；『長阿含経』一七、『四分律』三九、四〇、『善見律』一七等に見える。なお、この遺址は東門のすぐ近くに発見された［平凡社：『世界考古学大系』八、九八ページ、その写真は樋口隆康：『インドの仏跡』第四八図に見える］。

二・九　霊鷲山　宮城より東北へ行くこと十四、五里で姞栗陀羅矩吒山（原注　唐に鷲峯と言う。亦鷲台とも謂う。旧に耆闍崛山と曰う。訛なり）[注一]に至る。北山の南に接して唯一つ特に高い。鷲鳥も棲みついているし、[注二]また高台にもなっており、空と翠と互いに照り映え濃淡に色を分けている。如来の［成道以後］世におられること五十年に垂んとする間、この山に止まられること多く、広く［大衆に］妙法を説かれた。頻毘娑羅王は仏の説法を聞くために人々を多数動員し、山麓から山頂まで谷を跨ぎ巌石を越え、石を畳んで階段を作った。広さ十余歩、長さ五、六里。[注三]道の途中に二つの小さな窣堵波がある。一つを下乗と言う。即ち王がここまで来ると［あとは］徒歩で行くということである。一つは退凡と言う。即ち凡夫を区別し、ここから共に登れないということである。この山の頂は東西が長く、南北は狭い。崖の西辺に煉瓦作りの精舎がある。[注四]高く広く珍しい作りで、東に戸を開いている。如来はその昔にここに止まられて説法されることが多かった。今は説法の像が作ってあるが、その大きさは如来と等身である。



ジーヴァカ園林址（手前）と耆闍崛山

注

一　姞栗陀羅矩吒山（……）　姞栗陀羅矩吒　*g'iĕt-liĕt-d'â-lâ-kiu-ṭa*：Skt. *gṛdhrakūṭa*, Pa. *gijjhakūṭa*. 掲梨駄羅鳩胝山とも。鷲頭・霊鷲とも訳す。この山の写真と詳細な形状の説明は、高楠順次郎：『印度仏跡実写』第四〇図および解説に見える［Cunningham：*A.G.I.*, p.534］。

二　鷲鳥も棲みついているし　この所、『慈恩伝』は「形鷲鳥の如く」となっている。

三　頻毘娑羅王の石道の遺址は、高楠：同前書、第四四図に見え、その解説によれば下乗・退凡二塔の遺磚があるという。

四　山頂の精舎　この精舎については『法顕伝』に「仏の説法堂は已に毀壊し、止塼の壁基のみ在り」とある。玄奘が見たという建物は再建のものか。今日もその基礎のみは残っている［樋口：同前書、第四六図］。

二・一〇　霊鷲山中の聖跡　［霊鷲山頂の］精舎の東に長い石がある。如来が散策する際に歩まれたものである。傍に大きな石がある。高さ一丈四、五尺、周囲三十余歩。提婆達多が遙かより［石を］ぶち当てようとした処である。[注一]その南の崖下に窣堵波がある。その昔、如来はここで『法華経』を説かれた。[注二]

精舎の南の崖の側に大きな石室がある。如来が昔ここで禅定に入られた。仏の石室の西北の石室は前に大きな巌石がある。阿難が悪魔に威嚇された処である。尊者阿難はここで禅定に入っていると、魔王は鷲に化けて黒月（巻二の一・四参照）の夜分にその大きな石にとまり、翼をばたつかせ大きな声で鳴き尊者を嚇した。尊者はこの時驚いてなす術を知らないほどであった。如来は神通力でこれを見通され手を伸ばして安心させようと、石壁をつき通して阿難の頭頂を撫でられ、大慈悲をこめた言葉で阿難に、

「魔物が化けたものだから驚くには当たらない」

と告げられると、阿難は如来の慰撫を蒙って身心ともに安楽となった。石上の鳥の足跡は崖を通して穴となり、歳月久しく過ぎても今日なお存している。(注三)

精舎の側に石室が幾つかある。舎利子らの大阿羅漢たちがここで禅定に入った。舎利子の室の前には大井戸が一つある。涸れて水はないが、その穴跡はなお残っている。

精舎の東北の石の谷間の中に大きな巌石がある。如来が袈裟を日に乾かされた処である。衣の文様は明瞭で、そのあざやかなことは彫刻したようである。その側の石の上に仏の足跡がある。輪相の文様は明瞭ではないが、そのあらかたは推察できる。

北の山の頂に窣堵波がある。如来が摩掲陀城を遠望された所で、ここで七日の間説法をされた。

注

一　提婆達多が……ある　提婆達多が釈尊を殺害しようとして、山径を歩む仏に大石を投下したが、石は粉砕して唯一片だけが仏の足を傷つけ血を出したという。「仏身より血を出す」大罪として『五分律』三、『増一阿含経』四七、『説一切有部破僧事』一九等に見える有名な話。『法顕伝』に「仏、石室の前に在りて東西に経行せるとき、調達が山北の嶮巇の間より横ざまに石を擲ちて仏の足指を傷めし処あり。石猶在り」とある。

二　『法華経』を説かれた　霊鷲山における仏説であると称する大乗経典は多数あるが、言うまでもなくこれらは後世の仮託である。『法顕伝』には「仏は昔ここに於て住み、首楞厳を説く。法顕は生まれながらにして仏に値わず、但遺跡の処所を見るのみ。即ち石窟前に首楞厳を誦す」と『首楞厳三昧経』の説法としている。

三　魔王が阿難を威嚇した説話は『法顕伝』にも見え、その文はほとんど同じ。この阿難の石室と称するもの、仏手を伸べた崖中の通穴、石上の鳥跡と見るべきものは現存している［高楠：同前書、解説二二一ページ上］。

二・二　毗布羅山の古跡　山城の北門の西に毗布羅山がある。(注一) 土地の言い伝えを聞くに、

「山の西南の崖の北に昔は五百の温泉があった。(注二) 今は数十だけである。しかし今も冷泉あり温泉あり、全部が温水というわけではない。その泉の源は雪山の南の無熱悩池（巻一の一参照）に発し、ここまで地中を潜って来るのであり、水は非常に清らかで美しく味も元の池と同じである。泉流は五百の枝に分岐し、小熱地獄の火熱が上に昇ってきてこのように熱くなるのである」(注三)

とのことである。泉流の出口はどれもみな石を彫刻してある。あるものは獅子や白象の首にしてあり、あるものは石の管で流れを出す道にし、下には石を畳んで池としている。諸方の人々はみなここへやって来て入浴する。浴するものは長患いも治るものが多い。温泉の左右には多くの窣堵波や精舎の基址が次々と並んでいる。これらは過去四仏の座所や散策された遺跡の所である。ここは山水が相連なり、仁智の人の居るに適した所であるので、(注四) 世間から跡を隠した人の住んでいるものも多数ある。

温泉の西に卑鉢羅（菩提樹。巻二の四・三参照）石室がある。世尊はその昔いつもこの中に居られた。後の壁にある洞穴は阿素洛宮（本巻の二・三参照）である。(注五)禅定を習う比丘がこの部屋に多く居るが、時には怪異なものや竜蛇・獅子の姿を出だし、これを見るもののうち精神に狂乱を発するものがある。しかしこの勝地は聖人・仙人が居る所であり、その跡を履み気風を慕うものはその災難をも心にとめずにいる。最近ある比丘がいた。戒行ともに正しく清らかで、心より幽寂を楽しみ、この部屋に住んで世間から跡を隠し禅定を修したいと思ったところ、ある人が諫めて、

「あそこへは行きなさるな。あそこは災難が多く、危害を受けることが少なくありません。禅定もし難いし、身を喪う恐れもあります。過去のでき事をよく考えて、後悔を残すことのないように」

と言うと、比丘は、

「いや、私は今、仏果を求め天魔を調伏しようと心にきめています。このような危害は言うにも足りないことです」

と答え、錫杖を振り鳴らして洞穴へ出かけて行った。かくて壇場（曼荼羅の諸尊を安置する場）を設け厄除けの咒文を唱えた。十日の後に穴より少女が出てきて比丘に、

「尊者は染衣を着し戒を守り、衆生が帰依する方であり、智恵を修し禅定を習い、人々を善導されています。それなのに今はここで私たちを恐れさせていられます。如来の教えはこのようなものではないでしょう」

と言うと、比丘は、

「私は浄戒を守り仏の教えに従っていればこそ、世間を離れ山谷に住み雑踏より遠ざかっているのです。それなのにこのように譏られるのは、一体どちらが悪いのでしょうか」

と尋ねた。少女は、

「尊者が咒文を唱え声を出されると、火が外から中へ入ってきて、私たちの居室を焼き私たちの一族を苦しめています。どうか願わくば哀れみを垂れ、二度と咒文を唱えないでください」

と答えた。比丘が、

「咒文を唱えるのは自衛のためであり、他に危害を与えようと思ってではありません。先般、ある修行者がここで禅定を習い聖果を得て、幽塗（地獄・餓鬼・畜生の三悪道）にあるものを済度しようとしていましたが、怪異なものを目にして驚愕し、身命を失ってしまったのは汝の仕業である。［私が咒文を唱えるに］何の差し支えがあろうか」

と言うと、

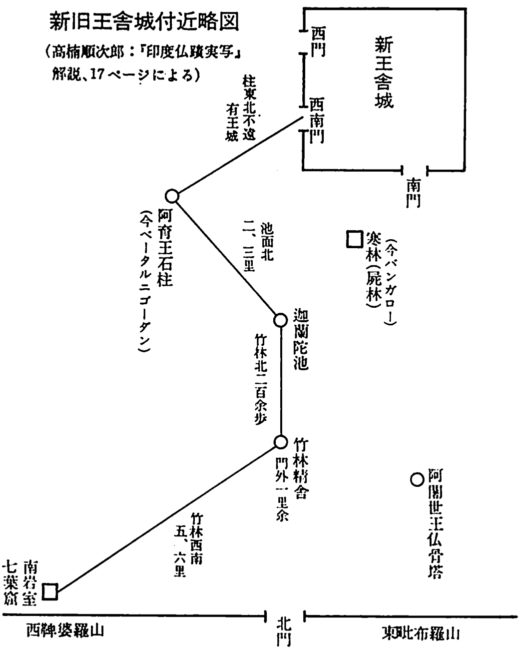
「私たちの罪業は重くもあり、智恵はかくも浅はかです。これより以後は戸を閉ざして中に居り自らの分を守ります。尊者におかれても願わくば神咒を唱えないでください」

と答えた。比丘はそこで［咒文を唱えることをやめ］禅定を修すること初めの如くであったが、安全で危害はなかった。

毗布羅山上に窣堵波がある。昔、如来が説法された処である。今は露形外道（巻一の三八参照）がたくさんここに住み、苦行を修習し日夜怠らず、夜の明け方より日の暮れるまで太陽の運行に従って回転して日輪を観察している（巻五の四・五参照）。

注

一　山城の北門の西に毗布羅山がある　毗布羅 ◦b'ji-puo◦-◦la: Skt. *vipula*, Pa. *vepulla.* また尾布羅・毗浮羅・毗富羅・粺浮羅とも。玄奘は「北門の西」と記しているが、これは東の誤りであるとされている。即ち北門の北へ出て東に Vipula 山、西に Baibhār 山（南山）がある故である［高楠：同前書、解説一七ページ：Cunningham : *A.G.I.*, p.534］。



新旧王舎城付近略図
（高楠順次郎：『印度仏蹟実写』解説、17ページによる）

二　温泉　当所の温泉は前注中の東西二山の山麓の集まる地点に数多くある［C.A.G.I., p.534］。

三　この土俗の言い伝えの文を、何所までとするかということについて、諸家に異がある。S・ビールは「未だ尽くは温ならず」までとする。足立：『研究』は「昔は五百の温泉ありき」までとする。今は土俗の口碑という点を考え、訳文のごとくした。

四　仁智の人　『論語』雍也篇に「智者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ」とある句による。

五　後の壁にある洞穴は阿素洛宮である　高楠：『印度仏跡実写』解説、一八ページに「南山、即ち、ヴイパーラ山。山城北門の西は鞞婆羅山にして（中略）山の北面を西に向って進めば北澗に臨んで一の洞穴あり、奥深く入るを得べし。是れ古代の金鉱の跡なり。玄奘の卑波羅石室と称するものは、この洞穴の前に築きたるに非るか。『後壁洞穴是阿素洛宮』と謂えるは、この鉱坑を指せるものならん。今は窟前至って狭きも、地形の変遷今を以て古を測るべからず」とある。

二・三　比丘の自害　山城の北門より左の南崖の北側を東へ行くこと二、三里で大きな石室に至る。昔、提婆達多がここで入定した。（注一）石室の東遠からざる所の磐石の上には斑な模様があり、あたかも血で染めたようである。傍に窣堵波が建ててある。習定中の比丘が自害して果を證した処である。（注二）昔ある比丘が居た。心身を励まし戸を閉ざして禅定を修していた。歳月多く経るも、聖果を證しなかったので、退いて自らを責め、人知れず溜息をつき、

「無学の果（もはや修学の要なき位。阿羅漢果）を最後まで悟らないかもしれない。このような煩悩の障碍をもつ身は、徒らに生きていても何の益があろうか」

と言い、この石で自らその頸を刺した。この瞬間に阿羅漢果を悟り、虚空に上昇して神変を現わし、火を出し身を焼いて寂滅に入った。そのりっぱな心根を讃美して、この窣堵波を建て記念としたのである。

比丘證果窣堵波の東、石崖の上に石の窣堵波がある。習定中の比丘が崖より身を投じて悟りを開いた処である。昔、仏の在世中に、ある比丘が山林に坐禅し仏果を悟るため修行をしていたが、懸命にすること久しいにもかかわらず悟りを得ず、昼夜を分かたず思念を続けて安静に禅定することを念頭より去らなかった。如来はその比丘の悟りを開くべき能力がまさに発しようとしているのを知り、そこで比丘の所へ行き證果を成就させようとし、竹林園（次節参照）より山の崖下へ行

き、指を鳴らして呼び、立ち止まって待っていられた。この時、比丘は遙かから聖者たちの姿を見て、身も心も悦(よろこ)び勇み崖から身を投じて降下した。比丘の清浄な心は仏のお言葉を心より信頼していたからである。比丘はまだ地面に達しない間に悟りを得た。世尊は、

「汝はこの瞬間のことをよく記憶すべきだ」

と比丘に告げられ、虚空に昇り神変を現わし、比丘の清浄な信心を表彰されたので、この塔を建て標記したのである。[注三]

注

一　提婆達多入定の石室　この石室は『法顕伝』に「旧城の北より出で東へ下ること三里にして、調達の石窟あり」とあるものである。

二　比丘自害の磐石　この巌石についても『法顕伝』の調達石窟に続き「此を離(さ)ること五十歩に大方黒石あり。昔、比丘あり、上に在りて経行し云云」と詳細な記事を載せる。

三　旧城北門近辺の石窟（洞窟）や石室（石崖に沿うか、洞窟の口かに、石を積んで作った僧房）は多数あったらしく、石室はすでに痕跡なきものも多いが、石窟はまだある。この石窟は、実は古代の金鉱の跡であるという［髙楠：同前書、解説二〇ページ］。

二・三　竹林精舎　山城の北門より行くこと一里余で迦蘭陀(カランダカ)竹園[注一]に至る。今に精舎があり、その石の基礎に煉瓦の家は東向きに戸を開けている。如来は在世中にここに居られることが多く、法を説き眼を開き、凡俗のものを教化済度された。今は如来の像の大きさ如来の体と同量のものが作ってある。初め、この城中に大長者の迦蘭陀(カランダカ)というものがおり、一代に富豪を讃えられていたが、大きな竹園を外道たちに寄進した。後に如来にお会いし、法を聞き篤(あつ)く信仰するに及び、竹園にあの外道たちを住まわせ、今、天人師（天界・人界両界のものの師）に住んでいただく家のないことを後悔した。この時、鬼神たち（諸天薬叉など）は長者の真心に感じ、外道を追い放って、

「長者迦蘭陀は今、竹園に仏の精舎を建てようとしている。汝らは速やかに立ち去るならば、災難を避けることができるだろう」

と告げた。外道は憤慨し、怒りを含んで立ち去った。長者はそこで精舎を建立し、事業が完成すると自ら出かけて仏をお招きした。如来はその時、長者の請いのままその布施を受けた。[注二]

注

一　迦蘭陀竹園　迦蘭陀は旧訳語巣である。Skt. Pa. *kalandaka*. 希麟撰『続一切経音義』一に「迦蘭多迦　上下皆蔣佉反（*ka*）。旧に迦蘭陀と云い、或いは迦蘭鐸迦と云うは 皆梵音の 訛転なり。正しくは 羯蘭馱迦 *kipt*. °*lân-d'â*°-。*ka* と云う」とある。羯蘭馱迦は正に Skt. *kalandaka* に対する。迦蘭多迦 。*ka*-。*lân*-。*tâ*-。*ka*：**kalantaka* は唐・般若訳（貞元四年—七八八訳）『大乗理趣六波羅蜜経』一に見える表記であり、西蔵仏伝の梵語（Rockhill：*The Life of the Buddha*, p. 43）に対し、迦蘭鐸迦 。*kâ*-。*lân*-。*d'â*-。*kâ*：**kalaṇḍka* は義浄の『説一切有部破僧事』八に見える表記である。竹林が迦蘭陀長者のもので、長者が釈尊に奉献したという話は『中本起経』上に見える。『有部破僧事』等には 頻毘娑羅王がこの園で羯蘭鐸迦鳥によって毒蛇の危害を免れたため、この園をこの鳥に与え、周囲に竹を植えたからこの名があるとし、また *Sutta-nipātha Atthakatha* にはこの竹林は栗鼠(りす) Kalanda を養い育てる（Nivāpa）所であるから Skt. *veṇuvana kalandakanivāpa*, Pa. *veḷuvana-kalandakanivāpa* と呼ばれていた。この樹神が栗鼠と化して王の難を救ったので、王は謝恩のため栗鼠を養餌させたという。諸種の説話が並行して存したものらしい。

二　竹林精舎の現状は、単に一平地に過ぎないが、発掘の前は多少髙低のある土地であり、発見された遺品も相当あったようである［髙楠：同前書、解説一八ページ］。今は記念碑が立っている［樋口：『インドの仏跡』第四七図はこの写真であり、第四九図はサーンチー彫刻に現われた竹林精

舎である」。

二・一四　仏舎利塔　迦蘭陀（カランダカ）竹園の東に窣堵波がある。阿闍多設咄（アジャータシャト）路王（原注　唐に未生怨と言う。旧に阿闍世（あじゃせ）と曰う。訛略なり）[注一]が建てたものである。如来の涅槃の後に、王たちがいっしょに舎利を分けた（巻六の四・一三参照）。未生怨王も手に入れて持って帰り、法の如く塔を建立し供養を修した。無憂（アショーカ）王が信心を発した時、塔を開いて舎利を取り出し窣堵波を建てた（巻八の二・三参照）[注二]が、なお残余があり、折につけて光を耀かすことがある。

注

一　阿闍多設咄路王（……）　阿闍多設咄路　˳â-˳ẑia-˳tâ-śiät˳-tuət˳-luo˳: Skt. *ajātaśatru*, Pa. *ajātasattu*. また阿闍多沙兜楼とも。阿闍多（Skt. *ajāta*「未生の」）設咄路（Skt. *śatru*「怨敵」）は頻毘娑羅王と韋提希夫人との間の子であるから、また阿闍世韋提希子・韋提希子阿闍世・阿闍世毗提希子などとも書かれる。Śaiśunāga 王朝第六世で、前五五四年ごろの即位［Smith : *Early History of India*, pp. 33 ff. : Raychaudhuri : *Political History of Ancient India*, pp. 210 ff. ; 中村 :『インド古代史』上、二七二ページ］。

二　阿闍世王の建てた舎利塔は、現在道の東側にある小高い所で、回教の墓地となっている所らしい［高楠 : 同前書、解説一八ページ］。

二・一五　阿難の半身舎利塔　未生怨王窣堵波の側にある窣堵波には、尊者阿難の半身の舎利が入っている。昔、尊者がまさに入滅しようとされるや、摩掲陀国を去り吠舎釐（ヴァイシャーリー）城に行こうとされた。両国は「尊者を迎えようとして」争いをはじめ、軍隊を動員しようとした。尊者はこれに心を傷（いた）め、我が身［の舎利］を両国に分けた（巻七の三・一六参照）。摩掲陀国王は［尊者の半身の舎利を］奉じて帰り供養し、この勝地で恭しく塔を建てたのである。その側には如来が散策された場所がある。これに並んで遠からざる所に窣堵波がある。これは舎利子（シャーリプトラ）と没特伽羅子（マウドガリヤーヤナ）（巻四の七・二参照）等が安居（あんご）した場所である。

二・一六　第一結集　竹林園より西南へ行くこと五、六里、南山[注一]の北の大竹林中に大きな石室がある。尊者摩訶迦葉波（マハーカーシャパ）[注二]がここで九百九十人の大阿羅漢[注三]と、如来が入涅槃された後に三蔵を結集した所である。前に古い［建物の］基礎がある。未生怨王が法蔵を集める大阿羅漢たちのためにこの建築物を建てた。初め大迦葉は山林に坐禅していたら、ふと光明が輝き、さらに大地が震動するのを見た。

「何のでき事でこんな変わったことがあるのだろうか」

と言い、天眼通で観察してみると、仏世尊が双樹の間で般涅槃に入られるのが見えた。急ぎ弟子に命じ拘尸（クシ）城（巻六の四参照）に出かけたところ、途中で梵志が手に天界の美しい花を持っているのに出逢った。迦葉が、

「あなた方は何所から来たのか。我々の大師は今何所に居られるか御存知か」

と問うと、梵志らは、

「私たちは今しもあの拘尸城からやって来ました。あなた方の大師が涅槃に入られると、天人や大衆がみなで供養を盛大に行ないました。私が持っている花はそこから手に入れたものです」

と答えた。迦葉は弟子たちに、

「慧日（えにち）（盲闇の世界を照らす智恵をもつ仏）が没し世界は暗闇となり、衆

生を善導される方は遠くこの世を棄てられ、衆生は堕落するであろう」

と言うと怠惰な比丘は喜び合って、

「如来が入滅されれば私たちは安楽になります。もし咎を犯すものがあっても、誰がこれを咎めだてすることがあろうか」

と言った。迦葉はこれを聞くと深い悲しみに沈み、仏の教えを集結し、仏の教えに準拠して咎を犯すものを取り締まろうと考えた。かくして双樹の所に行き仏を見たてまつり礼拝した。

すでに教法の王たる仏がこの世を去られ、人界・天界ともに指導者がなく、大阿羅漢たちも相継ぎ入滅していった。そこで大迦葉は仏の教えに順い法蔵を集めるべきであると考えるに至った。かくて蘇迷盧山（巻一の一参照）に登り大揵稚（巻八の三・三参照）を撃ち鳴らし、

「今、王舎城で仏の教えについての仕事を行なおうとしています。聖果を證した人々は直ちに集合されたい」

と、かくは唱えた。揵稚の音の中に迦葉の言葉を伝え、遍く三千大千世界に行きわたり、神通を得ている人々はこの声を聞きとり残らず会合に集まった。そこで迦葉は人々に、

「如来が寂滅されて世界は空虚になりましたので、法蔵を結集して仏恩に報い奉るべきです。今、仏の教えを結集するには、簡易にしてかつ静粛であるべきです。人数を頼みにするならばこの盛業は成功しますまい。そこで三明を具し六神通（巻二の四・六参照）を得て、仏の教えを聞き保持すること謬らず、弁才に滞りなき、このような上徳のある人々は結集に参加されたい。その他の阿羅漢果を得たるものと学習中のものとは、共にそれぞれ自分の住居に帰られたし」

と告げた。かくして九百九十九人を得た。阿難はなお学地（悟りの境に達するため学習中のもの）にあったが、その場に残った。そこで大迦葉は阿難を呼んで、

「汝はまだ煩悩を断ち切ってはいない。聖果を得た人々の所から出て行きなさい」

と言うと、阿難は、

「如来にお仕えして已に長い年月がたちましたが、教法についての会議のあるごとに一度として欠席したことはありません。今、仏の教えを結集されるにあたり排斥されれば、仏が寂滅された今日、私は依り所がなくなります」

と答えた。迦葉はさらに、

「心配しなさるな。汝は仏の近くにお仕えして誠に多く仏語は聞いているが、愛欲はまだ尽きず煩悩の気配はまだ無くなっていない」

と告げた。（注四）阿難は言葉に窮してそこから出て静寂な所に行き、さて無学（学ぶべきものなき悟りの境）の境地を会得しようと思い努力したが悟りを得なかった。はや疲れはてて仮眠しようと思った。まだ枕につかないうちに羅漢果を證した。そこで結集会場に出かけ、門をたたき到着を知らせた。迦葉は問うて、

「汝は煩悩を消滅したのか。もしそうなら、神通力を働かして門を通らずに入って来なさい」

と言った。阿難は命に順い鍵の隙間から入り、聖僧たちに挨拶をして末座に退き坐った。この時、安居の初十五日（即ち安居開始の前日、五月十五日。巻八の六・三参照）であった。

そこで迦葉は声を大にして、

「よく考え、はっきり聴かれたい。阿難が仏語をよく聴き保持したことは、如来も称讃されたことであるから、かれが素呾纜（原注　旧に修多羅と曰う。訛なり）蔵を結集し、鄔波釐は律を保持し克明に研究していることは、衆人の知ることであるから、かれが毗奈耶（原注

旧に毗那耶と曰う。訛なり）蔵を結集し、私、迦葉波は阿毗達磨蔵を結集しましょう[注五]」

と言った。雨季の三ヵ月間[注六]に三蔵をくまなく結集した。大迦葉が衆僧の中の上座の人であったから、この結集を上座部［の結集[注七]］と言う。

大迦葉波結集［石室］の西北に窣堵波がある。阿難が僧たちから叱責され結集に参加せず、ここまで来て坐禅をし羅漢果を證した所である。悟りを開いた後で始めて［結集に］参加した。

阿難證果窣堵波より西へ行くこと二十余里の所に窣堵波がある。無憂王が建てたものである。大衆部が結集をした処である。学習中のもの、證果を得たものなど数百千人の人々は、大迦葉の結集の仲間に参加せずにここまでやって来て、互いに、

「如来の在世中は同じように師として学んで来たのに、法王（如来）が入滅されると私たちは選から外されてしまった。しかし仏恩に報じようと思うならば、仏の教えを集大成すべきであろう」

と言いあった。そこで凡僧も聖僧も悉く会合し、愚者も智者もみな出席し、ここでも素呾纜蔵・毗奈耶蔵・阿毗達磨蔵・雑集蔵・禁呪蔵[注八]を集成し、別に五蔵とした。そしてこの結集は凡聖両衆が会同したので、これを大衆部［の結集[注九]］と言う。

注

一　南山　新王舎城（本巻の二・一八参照）の南にある故に南山 Skt. *dakṣiṇa-giri* と言う。今の Baibhāra 山である。ここにある結集石室は南方伝に七葉窟 Sutta-paṇṇa-guhā（Skt. *sapta-parṇa-guhā*）と称し、『法顕伝』には車帝石室（**chati*, Bengali *chatim*, 七葉樹）と言う。学名 Alstonia scholaris という高さ二、三丈の常緑の喬木で、その葉は概して七葉の星状をしているから七葉樹という。この樹が石室の前にあった故の室名であろう。

二　摩訶迦葉波　本巻一・三注三参照。

三　九百九十九人の大阿羅漢　仏典の第一結集に参集した僧衆の数については、玄奘は阿難を含めて一千人とする。これは恐らく『大智度論』二の所説に拠ったものであろう。しかし、その他の多くの経典は五百の阿羅漢によるとして、これを五百人結集とも呼んでいる。これについては古く松本文三郎：『仏典結集』四ページ以下に詳しく、また『四分律』五四、『五分律』三〇、『摩訶僧祇律』三二、『善見律』一、『有部毗奈耶雑事』、『阿育王伝』四、『阿育王経』六、『付法蔵因縁伝』一等参照。

四　阿難が迦葉に訶責されたことについては、『阿育王伝』巻三などに見える。即ち阿難の過失五ヵ条を挙げて責めたという話で、阿難はこの五ヵ条を必ずしも過失とは認めなかったが、迦葉の所説に従い教団の統一を図ったという。

五　素呾纜・毗奈耶・阿毗達磨　この三蔵については、この原注をも含めて本書の巻三の六・四に既出。注の重出は本書の全篇を通じて珍しい。

六　雨季の三ヵ月間　いわゆる雨安居で、五月十六日に始まり、八月十五日に終わる三ヵ月を指す。

七　上座部の結集　上座部はまた聖上座部とも言う。Skt. (*ārya-*)*sthāvirah*, Pa. *thera-vāda*. 後来の小乗根本分派の一である。Skt. 結集は Skt. Pa. *saṃgīti*「合誦・会誦」の訳語。

八　雑集蔵・禁呪蔵　雑集蔵 Skt. *saṃyukta-piṭaka* は種々の経典を収容する部門の意。禁呪蔵 Skt. *dhāraṇī-piṭaka*（或いは *vidyādhara-piṭaka*）は種々の陀羅尼を収容する部門、大衆部はこの五蔵を所持したと言うのであるが、この内容に関しては、今日伝来せぬため詳細は不明である。

九　大衆部の結集　大衆部は Skt. *mahāsaṅghika*, Pa. *mahāsaṅgika* の訳。小乗根本分派の一。隋・吉蔵撰：『三論玄義』に「如来は二月十五日涅槃に入り、諸の聖弟子は四月十五日、王舎城祇闍崛山の中に於て三蔵を結集す。爾の時、即ち二部の名字あり、一に上座部、……二に大衆部は即ち界外の大衆にして乃ち万数あり。婆師波 Skt. *vāṣpa*, Pa. *vappa* 羅漢を主とす。此に涙出と云う。常に苦の衆生を悲しみて涙堕つればなり。［釈迦出家時親侍せる］五比丘の中の一人にして、大迦葉よりも年あり」とある。玄奘はこの仏滅後直ちに上座・大衆の二部名が成立したという吉蔵の説に従っているが、通常は『異部宗輪論』の説、仏滅百余年に大天の五事を議する際、意見同じからずして二部に分裂したとする説

（巻三の六・三参照）が行なわれている。

二・一七　迦蘭陀池と石柱　竹林精舎より北へ行くこと二百余歩で迦蘭陀池に至る。如来が昔ここで多く説法された。水は清くもあり八功徳（巻一の一参照）も具えていたが、仏の涅槃の後に涸れて残りなくなってしまった。

迦蘭陀池より西北へ行くこと二、三里で、窣堵波がある。無憂王が建てたものである。高さは六十余尺。傍に石柱があり、窣堵波を建てた事跡が刻みつけてある。高さ五十余尺で、上に象の形が作りつけてある。（注一）

注

一　池と石柱　高楠：『印度仏跡実写』解説一八ページに「竹林より二百余歩にして迦蘭陀池に達す。是れ亦試掘せらる。土俗これを Manavasar（無熱悩池の名）と称す。池の西北二、三里の石柱は、多分今のベータルニゴーダンの近傍なるべく、祠辺に於て古塔の一部らしきものを見たり、但し池よりは二丁半の処に在り」とある。

二・一八　新王舎城（注一）の沿革　石柱より東北へ遠からずして、曷羅闍姞利呬城（原注　唐に王舎と言う（注二））に至る。外側の城壁はすでに壊れ跡形もない。内城は壊れてはいるが、基礎はまだ高く残っている。周囲二十余里で、その各面に一門がある。（注三）初め頻毘娑羅王の都は上茅宮城（本巻の二・四参照）にあった。住民の家が何度も火災に遭難し、一家は四散して隣近所も罹災した。防火に余裕もなく資産も尽き家業も廃止せねばならず、人々は怨嗟の声を高くし、安心して居られない状況であった。王は、

「私の不徳で人民は困難している。如何なる福徳を修めたならば、この患を払いのけることができるであろうか」

と言うと、家来たちは、

「大王はその徳化人々を和らげ、その政治は隅々までも見通して行なっておられます。しかるに今、人民たちは心を弛めこのような火災を起こしました。厳しい規則を定め今後の犯すものを取り締まり、もし火を出すものがあれば火元を究明し、その首犯を処罰して住居を寒林（注四）に移させましょう。寒林は屍体を棄てる所で、世間では不祥の地と言い、人は絶えて出かけることはありません。今そこへ移すことは屍体を棄てるのと同じことです。（注五）肩身狭く暮らすことを恥じましょうから、きっとめいめい謹むことになりましょう」

と申し上げた。王は、

「それは良い。住民に遍く布告をするように」

と言った。かくして暫くしたころ、王宮の中から先に火を出してしまった。王は家来たちに、

「私は［寒林に］移り住みましょう」

と言い、太子（後の阿闍世王）に後のことを取り締まるように命じ、国法を守らんがために居を移した。そのころ、吠舎釐王（巻七の三参照）は頻毘娑羅王が寒林に仮り住まいしていることを耳にし、軍隊を動員し不意を襲撃しようと思ったが、国境の物見が［太子に］その旨を注進したので、城を築き王をまずそこに住まわせた。それで王舎城と称するのである。官吏から軍人・庶民までも悉くここに家を移して来たのであった。或いは［一説に］未生怨王（阿闍世王）になってからこの城を築いたと言うことである。（注六）未生怨太子が王位を嗣ぐと、そのままここに都したのである。無憂王の時になって都を波吒釐城（巻八の二

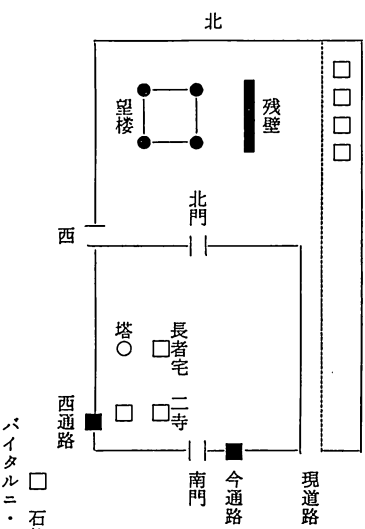
参照）に遷し、王舎城をば婆羅門に布施した。それで今も城中には平民はおらず、唯婆羅門だけが千軒足らず住居しているのである。

注

一　新王舎城　この近辺の関係位置については『法顕伝』に「此れ（那爛陀寺の東南二十余里にある那羅部落）より西行すること一由延にして王舎新城に至る。新城は是れ阿闍世王の造る所なり。中に二僧伽藍あり。城の西門より出ること三百歩に、阿闍世王仏の一分の舎利を得て塔を起つ。城高大厳麗なり。城を出て南すること四里、南向して谷に入り五山の裏に入る。五山（赤沼：『辞典』五二九ページ参照）の周囲は状城廓の若し。即ち蓱沙王（頻毗沙羅王）の旧城なり。城の東西五、六里ばかり、南北七、八里なり」と詳しい。

二　曷羅闍姞利呬城（……）　曷羅闍姞利呬　*ràt∘-∘lâ-∘źịa-g'ịĕt∘-lji°-χji°*：Skt. *rājagṛhi*（通常は Skt. *rājagṛha*, Pa. *rājagaha*）[M. Williams：*S.-E. Dict.*, p. 873 a]。羅字については諸本ともに異はないが、曷邏闍補羅国（巻三の八）・曷邏闍伐弾那（巻五の一・三）およびその他の用例と見合わせるならば、恐らく邏字の誤りであろうと推測される。旧訳に羅閲祇 *lâ-dịwäi-g'ịeg→∘lâ-ịwäi∘-∘g'jiḙ* はすでに音変して不適。訳して王舎城とされる。今ビハール Bihār の南南西約二十三キロ程にある Rajgir の平原中にその遺跡がある [Cunningham：*A.G.I.*, p.535, 721; Law：*H.G.A.I.*, p. 254；中村：『インド古代史』上二四九ページ]。王舎城の名称の由来については『大智度論』三に三説を出し、ここにあげる玄奘の説はその第二説にあたる［赤沼：『辞典』五二九ページ参照］。

三　新王舎城の遺跡　この遺跡の近状については、高楠：『印度仏跡実写』解説二四ページに「新王舎城は旧城北門外の正北、凡そ六丁余の地に在り。……新城は内城と外郭との別ありて、内城は殆ど方形に区劃せられ、城壁東西凡そ六丁十五間、南北略これに同じ。壁背幅一丈七尺五寸あり。……思うに、［玄奘往訪の］当時四門既に塞がれて城内は耕地と化したる後なりしならん。その間凡そ千三百年を隔つと雖も、今尚その趣を異にせず。四門は各両基の櫓台に狭まれたるものなるべく、南東北の三壁の中央には両櫓の跡を認め得るべし。玄奘は城の西南、石柱ありし故地、今のパイタルニ・ゴーダンより東北に進み、城の西南隅の通門より入りし如く、西南隅の二寺、殊底色迦長者の故宅、及びその塔を記せり。王宮は東南隅にありしものの如し。卒提希夫人の幽閉、阿闍世王の活躍亦この一隅に行われしものならん。玄奘の面に一門ありと謂うは、今の大道路を指すものなるべし。内城の北なる郭内には望楼台あり。残壁の残基あり。耆那教祠二所、民家尚多し」と述べる。同ページに見える略図を次に転載する。



四　寒林　『玄応音義』七に「屍陀林　正しくは尸多婆那（*∘śi-∘tâ-∘b'uâ-∘nâ*：Skt. *śītavana*）と言い、此れに寒林と名づく。其の林は幽邃にして寒く、因って以て名とす。王舎城の側に在り、死人は多く其の中に送る。今、総じて棄死の処を指して屍陀林と名づくるは、彼に取りて之に名づくるなり」とある。また尸陀林とも。『法顕伝』には「［竹林精舎の］北二、三里に尸摩賒那あり。尸摩賒那（Skt. *śmaśāna*）とは漢に死人を棄てる墓田を言う」とある。

五　寒林は……同じことです　この所の一文は寒林についての説明である。今は前後の文に照応するように訳したが、むしろ割注として挿入するを

適当とするものである。ただし、諸本共に割注とするものはない。

六　或いは……言うことである　この一文もむしろ割注としてある方が適当であるが、諸本共に地の文に作る。

二・一九　殊底色迦と羅怙羅　宮城の西南隅に二つの小伽藍がある。諸国より来る客僧の往来するものは、ここに止宿する。ここは仏が昔、日ごとに説法された所である。この近く西北に窣堵波がある。殊底色迦（原注　唐に星暦と言う。旧に樹提伽と曰う。訛なり）長者(注一)が生まれた故里である。

城の南門の外の道の左側に窣堵波がある。如来がここで説法をされたり、羅怙羅（巻四の七・二参照）を出家させられた。

注

一　殊底色迦（……）長者　殊底色迦 ${}_{\circ}$źiu-${}^{\circ}$tiei-śiək${}_{\circ}$-${}_{\circ}$ka : Skt. *jyotiṣka*, Pa. *jotika*. また樹提・殊提・樹提伽・樹提迦・樹提衢とも。火生・光明と訳す。原注の「星暦」は Skt. *jyotisika*「天文家」と一にしたものか。殊底色迦長者は王舎城の長者善賢の子供であったが、その出生・生長に奇跡あり、家督相続後は阿闍世王もかれの巨富を羨んだ。かれはその資産を救済事業と家族とに分かち、仏につき出家したと言う〔『南本大般涅槃経』二八、『説一切有部雑事』二、『光明童子因縁経』、『樹提伽経』など〕。

三　那爛陀付近の史跡

三・一　那爛陀の名称および位置　ここ〔「新王舎城」〕から北へ行くこと三十余里で、那爛陀（原注　唐に施無厭と言う）僧伽藍(注一)に至る。

古老の話によれば、

「この伽藍の南の菴没羅（巻二の一・一五参照）林中に池がある。そこに住む竜の名を那爛陀と言った。その傍に伽藍を建てたので、竜の名を取り寺号とした」

と言うことであるが、その真実の意義に従うならば(注二)次のようである。如来がその昔、菩薩行を修められ、大国王となって都をこの地に建てられ、衆生を哀れみ恵施することを楽しみとされた。それで当時、王の徳を讃美して「施無厭」と呼んだ。こういうわけで伽藍はその呼び名に因んで寺号としたものである。

注

一　那爛陀（……）僧伽藍　那爛陀 ${}_{\circ}$nâ-lân${}^{\circ}$-${}_{\circ}$d'â : *nālanda (Skt. *nālanda*, *nālandā*). また那難陀・那難大・那難・那羅犍陀とも。那爛陀という語は *na*+*alam*+*da* ("not giving enough" or "not having enough to give") とされている〔Beal : *Records*, II, p.167 (78)〕が、これで施無厭の意に十分であるとは言えないという意見もある〔Ghosh : *A Guide to Nālandā*, p.40, note 1〕。義浄は寺名を「室利那爛陀莫訶毗訶羅（Śrī-Nālandā-Mahāvihāra）、唐に訳して吉祥神竜大住処と云う」とする。那爛陀はパトナ Patna の南東約五十五マイル、Rājgir の北方七マイルの小村 Bargaon の付近にある。一八六一年に Cunningham が発見、少しく発掘した。一九一五年以後のインド考古局による発掘調査はなお継続している。遺跡は南北六百十メートル、東西二百十メートルもある広い地域に、東と南側に約十二の僧院、西側に仏塔と仏殿があった。この遺址のプランは逸見梅栄・高田修共著：『印度美術史』第六章挿図四；高田修：『印度・南海の仏教美術』九八ページに見え、第七号僧院址平面図は平凡社『世界美術全集』一一、三三ページに見える。出土の遺品は五世紀―十二、三世紀のもので、十三世紀以後にイスラムやヒンドゥー教徒によって焼かれた。玄奘はインドに並びなきこの学舎に約五年間、「諸部を鑽研し梵書を学ん」だ。当地については『慈恩伝』巻三に詳しい。また A. Ghosh : *A Guide to Nālandā*；高田修：「印度仏教美

術研究の成果」『仏教芸術』六、八四ページ：平凡社：『世界考古学大系』八、九九ページ：天沼俊一：『印度旅行記』三〇七ページ以下：高楠順次郎：『印度仏跡実写』第四六―五一図、および同解説等の諸書参照。

二　その真実の意義に従うならば　原文「その実義に従えば」は、『慈恩伝』に「又云う」と単に並列的に叙述する。

三・二　仏陀時代の那爛陀　その土地はもと菴没羅園(アームラ)であった。(注一)五百人の商人が十億の金銭を出して買い求め、仏に布施した。(注二)仏はここで三ヵ月の間説法され、商人たちもまた聖果を證した。

注

一　その土地は……であった　これに当たる『慈恩伝』の文は「地は本(もと)菴没羅長者の園なり」とある。

二　五百人の商人が……また聖果を證した　この文の事跡にあたるものは諸経典に見当たらない。那爛陀にある園林とすれば、パーリ文 *Majjhima-Nikāya*, 56 Upālis に、尼乾子(ニルグランタ)の徒の優波離(ウパーリ)が仏をこの波婆離捺園 Skt. *pāvarikāmravana*, Pa. *pāvarikambavana* に訪(と)い論難して破れたという場所であろう〔『中阿含経』優婆離経〕。菴没羅林とすれば、吠舎離の美女 Skt. *āmrapālī*, Pa. *ambapālī* がその所有の菴没羅林を仏の僧伽藍に献じ自らも比丘尼となったことが、パーリ文 *Therī-gāthā*〔『長老尼偈経』〕に見える。

三・三　那爛陀寺の沿革(注一)　仏の涅槃の後、まだ余り時がたたないころに、この国の先王の鑠迦羅阿逸多(シャクラーディティヤ)（原注　唐に帝日と言う）(注二)は一乗（成仏する唯一の教え。仏教）を篤(あつ)く信じ三宝を尊重し、りっぱな土地を選んでこの伽藍を建てた。最初、工事を始めるや竜の身に傷をつけてしまった。折しも占卜をよくする尼乾(ニルグランタ)外道(注三)がおり、このでき事を占って予言し、



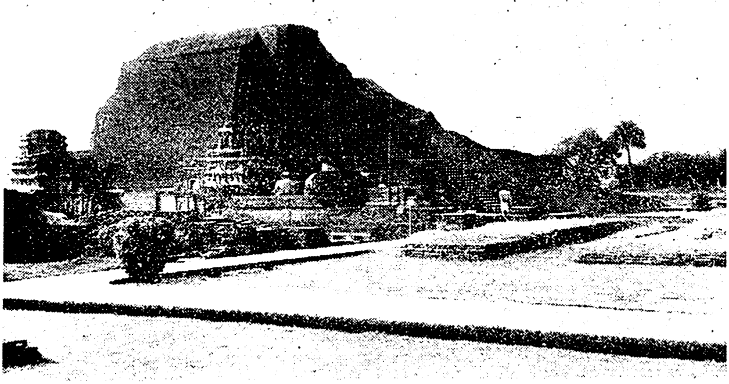
ジャイナ教祖師の像
マトゥラー地方出土

「ここは勝れた土地である。伽藍を建立すれば必ずや盛大になり、五印度の模範として千載を越えてもいよいよ栄えよう。後進の学者たちはここにつけば学業の成就に便を得よう。しかし血を吐くものが多かろうが、それは竜を傷つけたためである」

と言った。その子供である仏陀毱多王(ブッダグプタ)（原注　唐に覚護と言う）(注四)が王統を承け即位し先帝の崇仏を継続して、この寺の南に並んでまた伽藍を建てた。呾他掲多毱多王(タターガタグプタ)（原注　唐に如来護と言う）(注五)は代々の遺業たる仏教事業を手篤く行ない、この東に並んでまた伽藍を建てた。婆羅阿迭多(バーラーディティヤ)（原注　唐に幼日と言う）(注六)王が位を嗣ぐと、この東北に並んでまた伽藍を建てた。事業が竣工(しゅんこう)すると祝賀会を催し祝い、人の有名・無名を分かたずみなに真心を表わし、凡夫と聖者を区別せずに会に招待した。その会合たるや、五印度の僧たちは万里の遠きより雲のごとく集まった。人々の座がすでに定まってから、二人の僧が遅れて到着したので三階に案内した。ある人が、

「王が会を催されようとして第一番に凡聖ともに招待されましたが、大徳は何所から最後に来られましたか」

と問うと、
「私は至那(チーナ)国（巻五の一・四参照）から来ました。師僧が病気で食事のお世話をしております所へ、王の遠方よりの御招待を受けました。それで会に参集しました」



ナーランダー寺院址

と答えた。尋ねた人は驚いて急ぎ王に申し上げた。王は心中にこれは聖者に違いないと悟り、自ら挨拶に出かけた。そこで階上に登ると、二人の僧は何所へ行ってしまったか分からなかった。王は一層信心を深くし、国を捨てて出家した。出家したところがその階級は僧中の末席にいることになり、心は何時も不愉快で楽しい気持ちにはなれず、自分は昔は王であり尊貴は最上を占めていたのに、今は出家して階位の低きこと衆僧の末席にいると思っていた。そこで出かけて僧に話し、自分の心の内を述べた。こういうわけで衆僧は談合して、まだ受戒のすまない者は年齢で席次を定めることとした。それでこの伽藍だけ特別にこのような制度があるのである。この王の子の伐闍羅(ヴァジラ)（原注　唐に金剛(こんごう)と言う）(注七)は即位の後、信心は正しく固く、またこの西に伽藍を建てた。その後、中印度王(注八)はこの北にまたもや大きな伽藍を建てた。そこで周囲に垣を高くめぐらし、全伽藍を同一の門から出入りするようにした。歴代の君王が代々建築を盛んに行なったので、その諸種の彫刻の精巧なることは実に壮観である。(注九)ことに帝日王の大伽藍は今も仏像を安置し、衆僧中より日々四十人の僧を選び、この場所で食事を接待して施主（帝日王）の恩徳に報じているのである。(注一〇)

注

一　那爛陀寺の沿革　これについての新しい概観は、A. Ghosh : *A Short History of Nālandā*, appendix to *A Guide to Nālandā* に見える。

二　鑠迦羅阿逸多（……）　鑠迦羅阿逸多 *śịak*。-。*ka*-。*lâ*-。*'â-ịět*。（←**dịet*）-。*tâ* : **śakrāditta* (Skt. *śakrāditya*). 逸 **dịet→ịět*。は『西域記』の諸本ともにこの字を用い異はないが、『慈恩伝』巻三には迭字にしている。『西域記』の全巻中、音訳字として逸字が現われるのはこの一語だけである。誤字と断定しても差し支えないようであるが、語頭子音「喩」母 **d* の脱落時期の問題もからむこと故、原皆のままにしておく。Śakrāditya とはグプタ Gupta 王朝第四代のクマーラグプタ Kumāra Gupta 一世（四一五―四五五）のことである。当時の貨幣にはかれを Mahendrāditya と呼んでおり、Mahendra は Śakra と同じく印陀羅(インドラ)・帝釈の義である。従来は玄奘の想像上の人かと見られていたが、ナーランダ Nālandā 出土の印章銘文により、その実在人物たることが確かめられた［Raychaudhuri : *P.H.A.I.*, p.570 ; Ghosh : *A Guide to Nālandā*, p.41］。義浄の『西域求法高僧伝』上、慧輪法師の項には「大覚寺 Mahābodhi より東北に行くこと七駅許(ばか)りにして那爛陀寺に至る。乃ち是れ古王の室利鑠羯羅(シュリーシャクラー)

咀底 Sri-Sakrāditya が北天の苾芻の曷羅社槃社 Rājavaṃśa の為に造る所」とする。

二　尼乾外道　旧訳語集で、また尼揵・尼犍・尼乾陀とも。新訳に尼健連他・呢掲爛陀。Skt. *nirgrantha*, Pa. *niganṭha*. 露形外道のこと（巻一の三八注九参照）。

四　仏陀毱多王（……）　仏陀毱多 *b'i̯uət.-.d'â-g'i̯uk.-.tâ* : Skt. *buddha-gupta*. しかし、Buddha-gupta 王という名は当時の史上にはなく、恐らくクマーラグプタ二世（四七三年ごろの短い歳月在位）の後を受けたブダグプタ Budha-gupta（略四七七―九六）であろう［Smith : *E.H.I.*, p.330; Raychaudhuri : *P. H. A. I.*, p. 570 ; R. C. Majumdar & Altekar : *The Vākāṭaka Gupta Age*, pp. 186 ff.］。

五　咀他掲多毱多王（……）　咀他掲多毱多 *tât.-.t'â-g'i̯ɒt.-g'i̯uk.-.tâ* : Skt. *tathāgata-gupta*. この王については、その存在を示す資料は玄奘の記述以外何もないようである［Raychaudhuri : *P.H.A.I.*, pp. 595 ff.］。この王の唐訳を諸本共に「如来」とのみにするが、誤脱に相違なかろうから今「如来護」と補った。

六　婆羅阿迭多（……）王　婆羅阿迭多 *.b'uâ-.lâ-.·â-d'iet.-.tâ* : *bālāditta, Skt. *bālāditya*（巻四の一・三を参照）。婆羅阿迭多という名の王はこの前後に少なくとも二人ある。一人は Narasimha-gupta（略四七―三）で、これに擬する説［Smith : *E.H.I.*, pp. 329-30 ; Majumdar & Altekar : *The Vākāṭaka Gupta Age*, p. 192］と、Bālāditya II (Bhānu-gupta)（五一〇）とする説［Raychaudhuri : *ibid.*, p.588 (Note 4)］とがある。巻四の一に見える白フンの摩醯邏矩羅との交渉を考え合わせれば、Raychaudhuri の説が優るであろう。

七　伐闍羅（……）　伐闍羅 *b'i̯ɒt.-.źi̯a-.lâ* : Skt. *vajra*. 前注の婆羅阿迭多王が Bhānu-gupta であるとするならば、この伐闍羅はその子の Vakārākhya であろう［Raychaudhuri : *ibid.*, p.597 (N. 2)］。

八　中印度王　戒日王（巻五の一・三参照）のことであろう。この王は那爛陀寺およびその僧を敬すること篤く、本巻の三・七にも鍮石の精舎を建立する記事を出し、また『慈恩伝』四には那爛陀寺の戒賢法師に自ら「弟子」と称する書を致し、さらに曲女城の大会（巻五の一・五および『慈恩伝』巻五参照）には「那爛陀寺の千余僧」を招待したことを特記している。

九　その諸種の彫刻……壮観である　那爛陀寺の遺跡はほとんど基礎だけが残っている現状であり、その建造物の細部がどのようであったかは遺物からは知る手がかりはほとんどない。しかし、その基壇の周囲に施されている諸種の彫刻に見る限りでも、かつてのその上層建造部分の華麗さは十分に想像し得るものである［A.Ghosh : *A Guide to Nālandā*, pl. II ; 天沼 :『印度旅行記』三一八、三一九ページの基壇細部の写真参照］。

一〇　玄奘が掲出した那爛陀寺院の建立者は、帝日・覚護・如来護・幼日・金剛の五摩掲陀国王と中インド国王（戒日王か）の六人であり、那爛陀寺院はあたかも計六院のごとくである。唐・道宣撰『釈迦方志』下には「総じて七院有り」とし、義浄撰『西域求法高僧伝』上、慧輪法師の条には「……斯の如き等の類、乃ち八寺有り。……如し一寺を観なば、余の七は同然なり」と八寺ありとし、宋・賛寧等撰『宋高僧伝』三、唐・寂黙伝に「那爛陀寺は周囲四十八里、九寺一門あり。是れ九天王の所造なり」とし、宋・范成大撰『呉船録』上、継業西域行程には「寺の南北各々数十寺あり」としている（ただし、『法顕伝』には当地につき何も記していないのは解しかねることである）。これらの記事と今日の発掘による出土品と併せて見れば、概ね十三、四世紀ごろまで活動していた状が見られる。現在の発掘では、東と南側に約十二の僧院、西側に一つの仏塔・三つの仏殿が知られている。なお、当時における那爛陀寺の建造物の概況は、前引義浄の書に詳しい。なお本巻の三・一注一参照。

三・四　那爛陀寺の教学　僧徒は数千人おり、みな才能高く学殖ある人々である。徳は当代に重んぜられ名声を外国にまで馳せている人は、数百人以上もいる。戒行も清潔に守則作法も純粋である。僧には厳しい規制があり、人々はみな固く守っているので、印度の諸国は模範として仰いでいる。教義を研究するに日を尽くしてもなお足りず、朝に夕にお互いに誓め合い、若いものも年長者も互いに助け合っている。もし三蔵の幽玄な趣旨を口にしないようなものがあれば、自らが

自らを恥じることになる。かかる次第で異境の学者で声誉を馳せたいものは、悉くここへ来て疑義を質して始めて名声を讃えられるのである。それでここに留学したという虚偽の肩書で諸方に遊ぶとしても、何所でも丁重に礼遇されるのである。外国・異境の人でここの論義の列に入ろうとするものは、詰問され屈して本国に帰るものが多く、学殖が古今に深く達している人で始めて入門し得るのである。かくして留学してきた後進の人で学芸に詳しい人でも、退散するものはもちろん十中に七、八もある。残りの二、三の博識の人も、僧衆中で次々と問い詰められて、その鋒先を挫かれその名声を失墜しないものはない。(注一)

注

一 『慈恩伝』三に当時の那爛陀寺教学の状を「僧徒の主客常に万人有り、並びに大乗を学び十八部を兼ぬ。爰して俗典・吠陀等の書、因明・声明・医方・術数に至るまで、亦倶に研習す。凡そ経論二十部を解する者は一千余人、三十部の者は五百余人、五十部の者は法師(玄奘)を并せて十人。唯戒賢法師のみは一切を窮覧し、徳秀で年耆い衆の宗匠たり。寺内の講座は百余所、学徒修習して寸陰を棄つるなし。徳衆の居る所、自然に厳粛にして、建立以来七百余祀、未だ一人として譏過を犯せる者あらず。国王欽重して百余邑を捨てて其の供養に充つ。邑二百戸、日ごとに秔米・酥乳数百石を進む。是れに由り学人は端拱して求むる(乞食)ことなく、而して四事自足し学芸成就するは斯れその力なり」と述べている。

三・五 那爛陀の学者

学者にして才高く智博く、強識多能であり、かつ徳秀でた哲人ならば、光輝を放ち伝統を継ぐことになる。例えば護法(注一)や護月(注二)のような人は仏陀の遺教にりっぱな業績を挙げ、徳慧(注三)や堅慧(注四)のような人は名誉を当時に讃えられ、光友(注五)の清醇な論義や勝友(注六)の高雅な談論、さらに智月(注七)は見識明敏で戒賢(巻八の四・四参照)は高徳寂静というように、このような上人たちは何れも衆人によく知悉されていて、その徳は諸先達よりも高く、その学は過去の著述に通達し、経典の論釈を著作することそれぞれ十数部で、みな世間に流通し一代に珍重されている人々である。伽藍の四周には聖跡が百をもって数えるほどもある。そのうちの二、三を挙げて概略を述べることにする。

注

一 護法 梵名 Dharmapāla の訳。唯識十大論師の一。南インド達羅毗荼国建志補羅城の大臣の子。少壮にして夙に大名があった。年僅かに三十にして死す。西暦五百六十年ごろのことであろう。なお本書巻五の五・六―六・三、巻八の四・四、巻十の一四・三、同一六・二等を参照。

二 護月 梵名 Candra-gupta の訳。また月蔵とも言う。護法と同時代の人で、かつて『辯中辺論』の釈を造ったというが、今は伝わらない。その事跡は不詳。

三 徳慧 梵名 Guṇamati の訳。唯識十大論師の一。南インドの人で、五世紀後半より六世紀前半に生存した人。巻八の四・三、巻十一の八・四にも出る。

四 堅慧 梵名 Sāramati の訳。仏滅七百年中に中インドに生まれ、『究竟一乗宝性論』『法界無差別論』等を造ったと言う〔『法界無差別論疏』上〕。巻十一の八・四には堅慧は前注の徳慧と同時代とし、仏滅九百年出世と伝えられる世親(巻五の二・二参照)の後輩としている。同名異人なりや否や未詳。

五 光友 梵名 Prabhā-mitra の訳。事跡不詳。ビールは六二七年に東来し、興善寺に住して訳経にたずさわり、六三三年に勝光寺で卒した光智のこととする [*Records*, II, p. 171 (91)]。光智は中インドの人であり、那爛陀寺で戒賢に就いて学んだ人であるが、同時に住したとは見えず、玄奘の言う光友と同一人とは思えない。望月・『辞典』二〇二四ページ「親光 (Bandhu-prabha, or Prabhā-mitra)」の条に、「中印度摩掲陀国那爛陀寺の学匠にして、護法菩薩の門人と伝えられる。著す所、仏地経論あ

り。事歴詳ならず」とある人のことか。

六 勝友 梵名 Viśesa-mitra の訳。唯識十大論師の一。護法の門人。事跡未詳。

七 智月 梵名 Jñāna-candra の訳。唯識十大論師の一。護法の門人。

三・六 仏跡と観音の立像

伽藍の西(注一)遠からざる所に精舎がある。その昔、如来が三ヵ月間ここに止まられて、天界や人界のもののために大いに妙法を説かれた(注二)。その南百余歩の小窣堵波は、遠来の比丘が仏を見たてまつった処である。昔、ある比丘が遠方よりここまで来て如来のお弟子たちにばったりお会いし、心中に崇敬の気持ちを起こし五体を地に投じて、たちどころに転輪王の位を得るよう発願した。如来は御覧になりお弟子たちに、

「あの比丘はまことに哀れむべきものである。かれは福徳も広大で信心も堅固であり、もし成仏するよう求めるならば、久しからずしてきっと證果を得たであろう。しかるに、今かれは発願して転輪王となるよう求めたので、かれは来世において必ずやその願いは成就するであろう。かれの五体を投じた土地は、その地下の金輪のある所に至るまで、その間にある細塵の数は実に無量で、その一つ一つの細塵は一輪王の応報にあたり、無量の回数にわたり輪王となり得よう。しかし、すでに世俗の楽しみに耽るからには、聖果を得るには望み遠いであろう。」

と言われた(注三)。

その南には観自在菩薩の立像がある(注四)。時ありては[この立像が]香爐を手にして、仏の精舎へ出かけ右廻りに経回[り敬礼す]るのを見ることがある。観自在菩薩像の南にある窣堵波の中には、如来が三ヵ月の間に剃られた髮毛と剪られた爪とが収められている。疾病にかかっているものが経回[り敬礼す]ると治癒するものが多い。

その西の垣の外にある池の側の窣堵波は、外道が雀を手につかみここで仏に死生の大事を質問した所である(注五)。

その東南の垣の内、五十余歩の所に珍しい樹木がある。高さ八、九尺で、その幹は二方に枝を伸ばしている。その昔、如来が楊枝を嚙まれた後で地に棄てられたので、そこに根を生じたものである。年月久しく経っているが、[その大きさは]初めと増減がない(注六)。

その東の大きな精舎は高さ二百余尺ある。如来がその昔、ここで四ヵ月間諸種の妙法を説かれた。

その北、百余歩の所にある精舎の中には観自在菩薩の像がある。清浄な信仰をもつ人たちにして供養を盛んに行なうものは、その像を拝む場所が変われば像が立っていられる場所もきまった所とてなく、或いは門の側に[像が]立っていられることもあり、或いは庇の前に立っていられることもある。諸国の僧俗はみなここへ来て供養をしている(注七)。

注

一 伽藍の西 この伽藍は那爛陀のプランに見る東側に列なっている僧伽藍 Saṅghārāma (僧院 monastery) のことで、この西方には制底(制多・支提。Caitya. 玄奘の言う精舎)などが散在する。義浄・『西域求法高僧伝』上、慧輪の条に「寺の西面する大院の外に大窣覩波及び諸制底を方べ列ぬ。数は乃ち百に盈ち、聖跡相連なり、称げて記すべからず。金宝瑩飾実に希有と成す」と記すものに当たる。

二 如来三月説法所 義浄は同前書に「門の南の畔一十歩ばかりに窣堵波あり。高さ百尺許り。是れ世尊の昔日夏三月安居せる処なり。梵に慕攞健陀倶胝 Mūla-gandha-kuṭī と名づけ、唐に根本香殿と云う」とあるものであろう。

三 遠来の比丘についての話　この説話の出所も不明であり、その場所たる窣堵波についても義浄は触れていない。

四 その南には観自在菩薩の立像がある　これについても詳細は不明であるが、グプタ期には観音菩薩が広く信仰され、その像は諸所より出土している。那爛陀寺においても、第十二号塔院址の付近から五世紀ごろの高雅な像が発見されている〔高田修：『印度・南海の仏教美術』一〇四ページに写真あり〕。

五 その西の……質問した所である　義浄の同前書に「此れ（大窣堵波）に次びて西南に小制底あり、高さ一丈余。是れ婆羅門の雀を執えて請問せる処。唐に雀離浮図と云うは、此れ即ち是れなり」と言うもの。この説話の内容に関しては、堀：『解説』七三七ページに「昔外道が雀を捕え之を握りて仏陀の処に至り其の死生を問えり、仏陀若し生ありといえば直に之を圧して殺し、若し死せりといえば其儘に放たんと欲せり」とある。その出所については不明。

六 珍しい樹木がある……如来が楊枝を……　この樹木については、義浄の同前書に「根本殿の西に仏歯林あり。樹は是れ楊柳に非ず」と述べている。なお楊枝については巻一の三八・七参照。

七 現在発掘されている那爛陀寺の遺址と、この項および次下の諸寺についての玄奘・義浄の記述とを対照し、その方位・距離を参照すれば、或いはさらに詳細な事実も判明するかも知れない。実地を踏査された専家の指教を俟つ。

三・七 仏陀の旧跡と諸王寺

観自在菩薩精舎の北に大きな精舎がある。高さ三百余尺。婆羅阿迭（宋本等逸に作る）多王（幼日王）が建てたものである。[注一] 荘厳や大きさ、および中の仏像は菩提樹下の大精舎と同じである。

その東北の窣堵波は、その昔如来がここで七日間妙法を説かれた所である。

〔観自在菩薩精舎の〕西北には過去四仏の座所がある。その南の鍮石の精舎は戒日王が建立しているものである。作業は終了していないが、その計画している大きさは十丈で、今後完成させる予定である。

その東二百余歩、垣の外に銅の立仏像がある。高さ八十余尺。重閣を六層にもして、やっと覆うことができた。昔、満冑王（巻八の六・三参照）が作ったものである。

満冑王の銅仏像の北二、三里にある精舎の中には、多羅菩薩（巻八の四・一参照）の像がある。その大きさも背高く、霊験もあらたかである。毎年元日には盛んに供養を行ない、隣国の国王や大臣・豪族も綺麗な香や花を持参し、宝を散りばめた旛や蓋を手にもち、打楽器を鳴らし管弦を吹奏し、七日の間ここで法会を行なう。そこの垣の南門の内側には大きな井戸がある。昔、仏の在世時に、ある大商人たちが、熱くて咽喉が乾いてたまらず仏の所へやって来た。世尊はその土地が水を手に入れることができる所であることを指さし教えられた。大商人たちはそこで車軸で地面をついたら、地面には穴ができて水は泉のように涌き出た。商人たちは飲み終わると仏の説法を聞き、何れも聖果を悟った。

注

一 幼日王の建造物としては、義浄撰『西域求法高僧伝』上、慧輪の項に「(西）門の北の畔五十歩計に復大窣堵波あり、更に此れ（高さ百尺計りの根本香殿）より高し。是れ幼日王の造る所なり。皆並びに塼もて作り装飾精妙にして、金牀宝地、供養希有なり」とある。精舎と窣堵波の差はあるが、或いは同一物を指したものか。「菩提樹下の大精舎」とは、巻八の六・四に記すいわゆる「仏陀伽耶大塔」を言うものであろうが、その高さは百六、七十尺で、大きさは同じくはない。

三・八　目連の故郷とその帰仏　［那爛陀僧］伽藍より西南へ行くこと八、九里で拘理迦邑(注一)に至る。邑の中に窣堵波がある。無憂王が建てたものである。尊者没特伽羅子（目連、巻四の七・二参照）の生まれた故郷である。傍に窣堵波がある。尊者がここで無余涅槃（寂滅）に入った。その中には遺身舎利が収められている。尊者は名門の婆羅門の出であり、舎利子と若い時より親友であった。舎利子は明敏をもって世間に尊敬せられ、尊者は見識をもって名誉を得ていた。才智は互いに匹敵し行動は必ず共々にし、終始を共にすることを約し進退を同じくすることを誓い合い、揃って世俗を厭い出家することを願って、珊闍耶(注二)を師とした。舎利子が馬勝阿羅漢（本巻の二・六参照）に出会い法を聞いて聖理を悟り、帰って尊者のために聞いたことを話した。尊者は聞くや仏の教えを悟り、すぐに初果（四果の最下位。巻一の三二・一の四果参照）を證した。自分の弟子二百五十人のものといっしょに仏の所に行こうとした。世尊は遙かにかれらを御覧になり、人々に、

「あそこに来るものは私の弟子中で神足第一となるものです」

と教えられた。尊者たちが仏の所に至り弟子の中に入れていただくようにお願い(注三)すると、世尊は、

「ようこそ、比丘よ。梵行（清浄無欲の行）を修習するならば、生死の苦しみを離脱することができよう」

と告げられた。この言葉を耳にするや、尊者の鬚も髪も自然に落ち、世俗の衣裳も僧衣に変わった。戒律も清らかに威儀も作法どおりに行ない、七日が過ぎると煩悩が消滅し、羅漢果（四果の最上位）を證して神通力を得た。

注

一　拘理迦邑　拘理迦 ˳kiu-˚lji-˳ka : Skt. *kolika.* また拘離迦とも。『仏本行集経』四七に、目連を王舎城付近の拘離迦村の婆羅門の子で拘離多と呼ぶとある。『慧琳音義』六に「探寂子　目乾連は此れ仙種なり。亦倶利迦と名づけ、或いは拘隷多と名づけ、或いは倶律陀と云う。皆一人の号なり」とある。邑名と目連の名と同一であったのであろうか。

二　珊闍耶　珊闍耶 ˳sân-˳ʑia-˳ia : Skt. Pa. *sañjaya.* 完名は Skt. *sañjaya-vairaṭiputra,* Pa. *sañjaya-velaṭṭhiputta.* 釈尊当時の六師外道の一人で、王舎城に住む遊行者であった。目連・舎利弗の二人が師と仰いだが、両人仏弟子となるや珊闍耶にも帰仏を奨めた。珊闍耶は「自分は今師として弟子を指導しているのに、また他の弟子となるのは、瓶が瓶であると同時につるべとなるようなもので困難である」と言い拒絶したが、弟子がみな去って仏に走るのを見て吐血して果てた［*Dhammapada Aṭṭhakatha,* I. pp. 74 ff.］。

三　ようこそ　原文は「善来」であり、インドの人を歓迎する常語。『寄帰伝』三、二六客旧相遇の条に「昔大師在せし日、親しく教主となり、客苾芻（比丘）至れば、自ら善来と唱う。又復西方の寺衆多く制法となし、凡そ新来するものを見れば、客旧及び弟子・門人・旧人に論なく、即ち須く迎え前み　莎掲多 svāgata と唱うべし。訳して善来と曰う。客乃ち声を尋いで即ち窣莎掲多 susvāgata と云う。訳して極善来と曰う。如し説わざれば、一に寺制に違い、二に律に準じて犯有りとす。大小を問うなく、悉く皆是の如し」とある。

三・九　頻毘娑羅王の迎仏　没特伽羅子の故郷から東へ行くこと三、四里の所に窣堵波がある。頻毘娑羅王が仏を出迎えた処である。如来が初めて仏果を證されるや、摩掲陀国の人々がお迎えしたいと熱望していることを御承知になり、頻毘娑羅王の招待をお受けになった。朝早い時分に衣を着け鉢を手にし、千人の比丘に左右を囲繞せられた。この人々はみな高弟で、もとは螺髻をつけた婆羅門（巻二の一・六参照）であったが、仏法を慕って出家したものである。これらの人たちが仏の前後に従い王舎城に入った。この時、帝釈天王は身をば摩那婆(注一)に変

え頭には螺髻をつけ、左手には金瓶をもち右手には宝杖を手にし、足は虚空を歩むが地を離れること指四本ほどの間隔に、大衆の中で仏の前路を先導した。一方、摩掲陀国頻毘娑羅王は、その国の婆羅門・長者・居士たち百千万の群衆に前導後衛され、王舎城を出て仏の一行を奉迎したのであった。(注二)

注

一　摩那婆　旧訳の語彙。摩那婆。muâ-。na-。b'uâ. 摩那婆の音声に対応する梵語は māṇava である。māṇava は儒童と訳される。『慧琳音義』四八に「儒とは柔善、童とは幼少なり。旧に摩納と言い、或いは摩那婆と云う。訳して年少と云い、或いは年少静行近士と言う是れなり」とある。即ち釈尊が前世に菩薩行を修していた時の儒童菩薩という名称である［『太子瑞応本起経』上］。しかし、『西域記』のこの所に儒童菩薩を出すのはおかしい。ここに新訳で摩拏婆 māṇava ［『大日経疏』二］と書かれ、青年、特に婆羅門の青年を指す語と解すべきであろう。

二　頻毘娑羅王迎仏の説話は『説一切有部毗奈耶破僧事』七に見える。

三・一〇　舎利子の故郷とその帰仏　頻毘娑羅王迎仏［窣堵波］より東南へ行くこと二十余里で迦羅臂拏迦邑(注一)に至る。邑の中に窣堵波がある。無憂王が建てたものである。尊者舎利子（巻四の七・三参照）が生まれた故郷である。井戸が今もあり、傍に窣堵波がある。尊者はここで寂滅された。窣堵波の中には遺身舎利が収めてある。尊者は名門の婆羅門の生まれで、尊者の父は高才にして博識、見識のある精密な人で、典籍にして研究しないものとてはなかった。その妻が夢に心の動くことがあり、詳しく夫に、

「私は昨晩、夢に不思議な人を見ましたが、その人は身に甲冑を着け手には金剛［杵］をもち、山々を打ち砕いたあと、退いて一つの山の麓に立っていました」

　と話すと、夫は、

「その夢は良い夢だ。汝はきっと男を生むに違いなく、その子は学芸に達し一世に秀で、諸学者を論破しその所説を打ち破るであろうが、唯一人の人には及ばず、その人の弟子となろう」

　と言った。はたして妊娠するや母は忽ち聡明になり、りっぱな議論に盛んな談話と、その弁舌には少しも屈伏したり渋滞する所はなかった。尊者は年齢僅かに八歳にしてすでに名声は四方に高かった。尊者の性格は純朴で、その心根は慈悲深く、煩悩を打ち破り真実の理法を知る力を身につけた。没特伽羅子（目連）と幼い時より仲がよく、共にこの汚れた俗世を厭っていたが、まだ帰依する教法とてはもっていなかった。そこで没特伽羅子と共に珊闍耶（本巻の三・八参照）外道の所で修行をした。ところが互いに、

「この教えは最高の道理ではなく、生死の苦を窮め尽くすことはできない。それぞれがりっぱな指導者を求め、まずその精髄をこころみてから、きっとその甘露（如来の教法）を共にすることにしましょう」

　と話し合った。そのころ、大阿羅漢馬勝（本巻の二・六参照）が鉢を手にし町へ来て食を乞うていた。舎利子は馬勝の威儀が閑雅であるのを見て、すぐさま、

「あなたの師匠はどなたですか」

　と問うと、馬勝は、

「釈種の太子で世俗を厭い出家されて、一切の理法を知悉することを成就されました。この方が私の師です」

　と答えた。舎利子は、

「その方の説かれるのはどんな教えですか。伺うことができましょうか」

と言うと、馬勝は、
「私は教えを受け始めたばかりで、深い教義にはまだ達していません」
と答えたが、舎利子は、
「聞かれたことを話してくださるようお願いします」
と頼んだ。馬勝はそこで自分の聞き知ったことを話した。舎利子は聞き終わるや、早くも初果を證した。そこでその弟子二百五十人と共に仏の所に出かけた。世尊は遙かに御覧になり、お弟子たちに、
「あれは私の弟子の中で智恵第一となるものです」
と教えられた。尊者は仏の所につくと礼拝して、仏の教えに従うようお願いすると、世尊は、
「ようこそ、比丘よ」
と言われた。このお言葉を耳にするや、戒品(注二)が身に具わった。半月が過ぎた後、仏が長爪梵志(注三)のために説法されるのを聞いており、その後のさまざまな話を聞いた時に真理を感得し、そこで阿羅漢果を證悟した。その後阿難が、仏が入寂される時機を告げられるのを聞き、弟子たちは次々と伝えあってみな深い悲嘆にくれていた。舎利子も深く釈尊を恋い慕い、仏が般涅槃に入られるのを見るに忍びず、世尊にお先に入滅したいとお願いした。世尊は、
「今がその時であることを知るべきである」
と教えられた。舎利子は門人たちに別れを告げて、生まれ故郷に帰った。かれの侍者の沙弥は遍く城や邑に告げ知らせたので、未生怨王（本巻の二・一四参照）や国民たちは馳せ参じないものはなく、悉く雲のように集まって来た。舎利子は人々のために大いに説法を行ない、人は聞き終わると去って行った。夜半に、邪念なく心を集中し滅尽定(注四)に入り、定より出てから寂滅した。

迦羅臂拏邑から東南へ四、五里の所に窣堵波がある。尊者舎利子の門人が涅槃に入った処である。或いは迦葉波仏が世に居られる時に三拘胝（原注　拘胝とは唐に億を言う）（本巻の二・二参照）の大阿羅漢がこの地において同じく涅槃に入ったとも言う。

注

一　迦羅臂拏迦邑　迦羅臂拏迦 *˳ka-˳lâ-pji°-˳na-˳ka*. これを Kālapināka [Julien, Beal, Watters], Kalapināka [Cunningham], Kālapināka [赤沼:『辞典』] などと還元している。これに玄奘の用字法を考慮に入れれば **Kālapiṇāka* のような形が想定される。『法顕伝』には「那羅聚落は是れ舎利弗の本生の村なり」とある。那羅 Nāla の別名であろうとされる [堀:『解説』七四四ページ・赤沼:『辞典』四三八ページ]。

二　戒品　五戒・十戒などの戒の品類のことであるが、ここは仏教的な徳操のことを言う。

三　長爪梵志　長爪は Skt. *dirgha-nakha*, Pa. *digha-nakha* の訳。舎利子の叔父。『撰集百縁経』一〇、長爪梵志縁に「長爪は王舎城の人で、姉を舎利と言った。聡明で常に姉と論議して勝っていたが、舎利が妊娠するや勝つことができなくなった。胎子の福力によるものであった。そこで五印度の第一師とならずば爪を剪らぬと誓い修行した。姉の子は舎利弗（舎利子）で、やがて仏につき羅漢果を得たことを聞き、仏の所に至り世尊と論議したが勝つ能わず、遂に出家して仏弟子となり、阿羅漢果を得ることができた」と言う。

四　滅尽定　阿羅漢果以上の聖者が、仮りに暫時の間涅槃（止息）に入る定のこと。

三・二　帝釈窟山の聖跡　舎利子門人窣堵波から東へ行くこと三十余里で、因陀羅勢羅窶訶山（原注　唐に帝釈窟と言う）(注一)に至る。その山は巌多く谷も薄暗く、花咲く林は蓊蒼としている。山頂には二つ

の峰があり、ぐっと突き出ている。西峰の南側にある巌石の間に大きな石室がある。広くはあるが高くはない。その昔如来がここに止まられたことがあり、その時、帝釈天が四十二条の質問(注二)を石に書いてお尋ねし、仏が説明をされた。その字を書いた石の跡はなお残っている。今はその像を作って昔にあったことの模様を示している。中に入り礼拝するものは粛然として敬意を起こさないものはない。山の頂上には過去四仏の座所および散策された遺跡の所がある。東峰の頂上には伽藍がある。土地の言い伝えでは、そこの僧たちのあるものは夜間、遠く西峰の石室の仏像の前に何時も火がともり、常に明々としているのを見るものがあると言うことである。

注

一 因陀羅勢羅窶訶山（……） 因陀羅勢羅窶訶 ˳i̯ĕn-˳d'â-˳lâ-ṣi̯äi°-˳lâ-°g'i̯u-˳χâ : Skt. *indra-śaila-guhā.* この山は王舎城の近くの菴婆羅村 Ambasanda にあり、この窟前に Indasala 樹が生えているによりこの名があると言う。Rājgir より六マイルの所にある Giriyek (giri+eka 孤山の義) 山に比定されている [Cunningham : *A.G.I.*, p.539 ; Law : *H.G.A.I.*, p.222]。『法顕伝』に「此れ（巴連弗邑）より東南行すること九由延にして一小孤石山に至る。山頭に石室あり。石室は南に向かう。仏、其の中に坐し、天帝釈の天楽般遮（琴を弾じ歌う楽神）を将いて琴を弾じ仏を楽しましめし処なり。帝釈四十二事を以て問い、仏は一一指を以て石に画く。画跡故のごとく在り。此の中に亦僧伽藍あり」とする。

二 四十二条の質問 帝釈天が帝釈窟において仏陀に質問をしたという話は、『長阿含経』一〇等に見える。しかし、四十二事という数は見えない。この説話は仏教美術の画材としてもよく使われている［岩波写真文庫『仏陀の生涯』五九ページにカルカッタ博物館所蔵、ロリヤーン・タンガイ Loriyān-Tangai 出土の帝釈窟説法の彫刻を出す］。



帝釈窟説法図，ロリヤーン・タンガイ出土

三・三 雁塔 因陀羅勢羅窶訶山の東峰の伽藍の前に窣堵波がある。亘（原注 許贈反→χəng°）娑（原注 唐に雁と言う）(注一)と言っている。昔、この伽藍では小乗を学習していた。小乗は漸教である。それで三種の浄肉（巻一の五参照）を免除していた。この伽藍は小乗の教えに遵い、この習慣を失ってはいなかった。しかし、後々に三浄の肉は時には手に入らないこともあった。ある比丘が散策をしている時に、ふと雁の群れが飛んでいるのを見て、戯れに、

「今日は僧たちに食事は十分ではなかった。摩訶薩埵（巻三の四・五参照）は［もし雁に化現していられるならば、その肉を施される］今まさにその時であることを知られるべきである」

と言った。その声がまだ終わらないうちに一匹の雁が後戻りして、ちょうどその僧の前に身を投じて自殺してしまった。比丘はこれを見て詳しく僧たちに話した。この話を聞くものは悲しみ、みな互いに、

「如来は諸種の法門を設けて人々を機に臨み指導されましたのに、私たちは愚かにも漸教を遵奉していました。大乗は正理です。今までの習慣を改めて仏のみ教えに従うべきでしょう。この雁は教訓を垂れ、りっぱに指導をしてくれました。その厚徳を表彰しこの事跡を永久に伝えるべきでしょう」

と言いあった。そこで窣堵波を建ててその遺業を明記し、その死んだ雁を塔の下に埋めた。

注

一　亘娑（……）　亘娑 *xong°-.sâ* : Skt. *haṁsa.* 雁のこと。

三・一三　鴿伽藍　因陀羅勢羅窶訶山から東北へ行くこと百五、六十里で迦布徳迦（原注　唐に鴿と言う）伽藍に至る。(注一) 僧徒は二百余人、説一切有部を学んでいる。伽藍の東に窣堵波がある。無憂王が建てたものである。昔、仏はここで人々のために一夜の説法をされた。当時ある猟師がこの林中で鳥類を網で捕えていた。その日収獲がないまま、

「私は運が悪く、何時もつまらない目にあっている」

と言い、仏の所にやって来て大声で、

「今日如来はここで説法をして、私の網に獲物がないようにしてしまった。妻子は飢えているのに、一体どうしたらよいのか」

と言うと、如来は、

「火を起こしなさい。あなたに食物を与えましょう」

と教えられた。如来はそこで大きな鴿になり、火に身を投じて死んだ。猟師はその鴿を持って帰り、妻子といっしょに食べた。その後でもう一度、仏の所に行くと、如来は猟師の機に適した便法で教化された。猟師は教えを聞き、過を悔い自ら改め、出家修行して悟りを開いた。こういう次第でここに建てた寺院を名づけて鴿伽藍と言うのである。(注二)

注

一　迦布徳迦（……）伽藍　迦布徳迦 *.ka-puo°-tək.-.ka* : Skt. *kapotaka.* 小鳩の意［M. Williams : *S.-E. Dict.*, p.251 ; 荻原 :『梵和大辞典』三一五ページ］。宋本などに後の迦字を出さず、迦布徳とするを是とする説は、Skt. *kapotaka* が小鳩で原文の「大鴿」に合わぬため、Skt. *kapota* :（「鳩」の意）を採ろうとするもののようであるが、もし *kapota* であれば迦逋大（隋・闍那崛多訳『大威徳陀羅尼経』七）の如く語末子音のない文字を用いて然るべく、徳字を語末に用いるのは妥当ではない。従って、むしろ宋本などの方が、語末の迦字を誤って落としたと見るべきであろう。なお、この鴿伽藍の所在地は、原文の帝釈山より東北に「百五、六十里」とあるのを、「五、六十里」と訂正して、今のビハール Bihār であるとされている［Julien : *Mém.*, III. p.385 ; Cunningham : *A.G.I.*, p.542］。ビハールは、次項に見える観自在菩薩を祠る Vihāra（寺の意）からきた地名とする。

二　鴿が我が身を供して食せしめた説話は、『六度集経』六、『大智度論』一一等に見える。

三・一四　孤山の観音　迦布徳迦伽藍より南へ［行くこと］(注一) 二、三里で離れ山に至る。その山は嶮峻で樹木は鬱蒼としており、綺麗な花と清い水流が崖を被い谷に沿って流れている。山上には精舎や霊廟が多く、彫刻の精を極めている。真中の精舎には観自在菩薩の像(注二)がある。体長は小さいが威厳は粛然としている。手には蓮華をもち頭部には仏像を戴いている。常に数人の人が断食誓願して菩薩を見たてまつらんことを求め、七日・二七日から一と月にも及ぶ。感応のあるものは観

自在菩薩がりっぱなお姿に身を飾り威光赫々として、像の中より出て来られて、その人を教え諭されるのを見たてまつることがある。昔、南海の僧伽羅（巻十一の一参照）国王が朝早く鏡に顔を照らしたところが、自分の姿が見えず、なんと贍部洲の摩掲陀国の多羅林（注三）中の小山の上にこの菩薩の像があるのが見えた。王は深く喜び、像を図に画き探し求めた。この山に来てみると、全く瓜二つであった。そこで精舎を建てて盛んに供養を行なったのであった。その後の諸王も遺風を慕うがまま、その側に精舎や霊廟を建立し、香華に音楽と供養は絶えないのである。

注

一　南へ［行くこと］　原文諸本とも「南行」と行字を入れないが、『慈恩伝』に見るごとく玄奘自身が訪れた所である。この位置については前項の注参照。

二　観自在菩薩の像　『慈恩伝』三にこの像は「刻檀観自在菩薩像」とある。その参拝者の作法と玄奘自身が詣った時の状を次の如く記している。「其の供養の人、諸の来者の尊儀を坌汚するを恐れ、像を去る四面各々七歩許りに木の鉤闌を竪つ。人の来たりて礼拝するものは皆闌外に於てし、像に近づくを得ず。奉ずる所の香華亦並びに遙かに散ず。其の花、菩薩の手に住まり及び臂に掛くることを得ば、以て吉祥と為し以て願を得ると為す。法師往いて請を求めんと欲し、乃ち種々の華を買い、之を穿って鬘を為り、将って像の所に到り、至誠に礼讃し訖る。菩薩に向かい胡跪して三願を発す。『一には、此に於て学び已り本国に還帰するに、平安にして難なきを得んとならば、願わくば華の尊手に住まらんことを。二には、修する所の福慧もて、覩史多宮に生じ慈氏菩薩に事えんことを願わんに、若し意の如くならば、願わくば華の尊両臂に貫き掛からんことを。三には、聖教に〝衆生の界中に一分の仏性なき者あり〟と称す。玄奘今自ら疑いて有りや不やを知らず。若し仏性ありて、修行もて仏と成るべくんば、願わくば華の尊頸項に貫き掛からんことを』と。語訖り、華を以て遙かに散ずるに咸く言の如きを得たり。既にして求むる所を満たし喜歓無量なり。其の傍の同礼及び精舎を守る人、見已り弾指鳴足して言う、『未曾有なり。当来に若し道を成じなば、願わくば今日の因縁を憶い、先ず相度されんことを』と」。

三　多羅林　多羅 ṭā-ḷa : Skt. Pa. *tāla*. また哆羅とも。高竦樹と訳す。学名 Borassus flabelliformis. シュロ科に属する喬木。巻十一の二・二に「其の葉は長広、其の色は光潤なり。諸国書写に採用せざるはなし」とあるごとく、紙の代用とされていたほか、種々の細工の材料に供せられ、樹液より酒および砂糖を作り、種子・果実は食用にと、重宝される。

三・二五　仏陀説法の史跡

離れ山の観自在菩薩像から東南へ行くこと四十余里で一伽藍に至る（注一）。僧徒は五十余人、みな小乗の教えを学んでいる。伽藍の前に大きな窣堵波がある。霊験が多い。仏が昔ここで梵天王らのために七日間説法をされた。その側には過去三仏の座所および散策された遺跡の所がある。

伽藍より東北へ行くこと七十余里、殑伽河の南で大きな聚落に至る（注二）。住民は盛大で、幾つか天祠があり、どれも彫刻の妙を極めている。その東南遠からざる所に大きな窣堵波がある。仏が昔ここで一夜の説法をされた。ここから東して山林の中に入り、行くこと百余里で落般膩羅聚落（注三）に至る。そこの伽藍の前に大きな窣堵波がある。無憂王が建てたものである。仏が昔ここで三ヵ月の間説法をされた。この北二、三里に大きな池がある。周囲三十余里。四色の蓮華（注四）が四時にわたり花を開いている。

ここから東して大山林中に入り、行くこと二百余里で伊爛拏鉢伐多国（原注　中印度の境）に至る。

注

一　離れ山……東南へ行くこと四十余里で一伽藍に至る　ビハール Bihār より東南七マイル（即ち約四十里）の地点に Titarāwa の廃址がある。そこには寺院の廃墟と思われるものがあり、ここに比定された［Cunningham : *A.G.I.*, p.543］が、後に四十里を四里と訂し、Aphsar を当てている［Beal : *Records*, II. p.184 (134)］。

二　伽藍より東北へ行くこと七十余里……に至る　七十余里（約十二マイル）の地点には、玄奘の記すような遺跡に当たるものは何もなく、従って「百七十余里」と訂正し、ガンジス河より二十マイルの Shekhpur に比定する［*C.A.G.I.*, p.544］。

三　落般腻羅聚落　落般腻羅 *lâk.-.b'uân-ṇi°-.la.* 般字を元・明本に殷に作るため、ジュリアンはそれにより Rōhinila と当て、ワッターズは宋本等の般により Lavaṇanila かとしたが、何れも確実でない。ビールによれば、カニンガムは地理的に Rajjāna に比定したと言い、さらに十六世紀のアクバル大帝時のペルシア語資料 Ain-i-Akbari に見える地名 Rowbenny という形は漢字音に最も近い、とのことである［*Records*, II. p.184 (136)］。将来の検討を俟つ。

四　四色の蓮華　『大日経疏』一五に西方の蓮華に鉢頭摩 Padma、優鉢羅 Utpala、泥盧鉢羅 Nilōtpala、拘勿頭 Kumuda、芬荼利迦 Puṇḍarika の五種があるとする。鉢頭摩は紅蓮華と訳し、優鉢羅は青蓮華、泥盧鉢羅は同じく青蓮華、拘勿頭は黄蓮華、芬荼利迦は白蓮華と訳す。即ち、四色とは紅・青・黄・白の四である。

大唐西域記　巻第九

大唐西域記　巻第十　十七国

三蔵法師玄奘奉　詔訳
大捴持寺沙門辯機撰

伊爛拏鉢伐多国　瞻波国　羯朱嗢祇羅国　奔那伐弾那国　迦摩縷波国　三摩呾吒国　耽摩栗底国　羯羅拏蘇伐剌那国　烏荼国　恭御陀国　羯餕（力甑反）伽国　憍薩羅国　案達羅国　駄那羯磔迦国　珠利耶国　達羅毗荼国　秣羅矩吒国

一　伊爛拏鉢伐多国

一・一　**国勢の概観**　伊爛拏鉢伐多国[注一]は周囲三千余里ある。国の大都城[注二]は北が殑伽河に臨んでいて、周囲二十余里ある。農業は盛んで、花・果も豊富である。気候は温和で、風俗は純朴である。伽藍は十余ヵ所、僧徒は四千余人おり、多くは小乗正量部の法[注三]を学んでいる。天祠は二十余ヵ所、異道の人々が雑居している。最近に隣国のある王がこの国王を廃して、この大都城をそっくり僧徒に布施し、この城中に二つの伽藍を建てた[注四]。そこにはそれぞれ千人足らずの僧がおり、みな小乗の説一切有部を学んでいる。

注

一　伊爛拏鉢伐多国　伊爛拏鉢伐多 。i-lân°-。na-puât。-b'i̯uət。-。tâ : *irāṇyaparvata. この漢字に対応する原語として *hiraṇya-parvata*「金山」とする説 [Julien : *Mém.*, II. p. 65 ; Beal : *Records*, II. p. 186 (1) ; Cunningham : *A. G. I.*, p. 545 ; Law : *H. G. A. I.*, p. 222] と、*iraṇa-parvata*「沙山」とする説 [Watters : *On Y. Ch.*, II. p.179 ; Majumdar's Note, in *C.A.G.I.*, p.722] とがある。漢字音と字義からして、原音は **iraṇya-parvata* の如きものと考えられる (*iraṇya* は *iriṇya* と共に古書に見える [Turner : *C. D.*, p.27])。『慈恩伝』三に伊爛拏国とするのは略称であろう。

二　大都城　この首都は諸書共に今のモンギール Monghyr に当てている。古くは Modāgiri, Mudgala-giri と呼ばれていたものである [Beal : *ibid.* ; Law : *ibid.*]。

三　小乗正量部の法　『慈恩伝』巻三には「説一切有部義」とある。共に上座部に属するが、説一切有部は化地部に属し、正量部は犢子部に属し、教義を異にする [『異部宗輪論』および南方伝による]。今は何れを是とするか断じ難い。なお、玄奘の所伝によりインドの部派の分布を見れば、おおむね、説一切有部は西北インドより西域にかけて栄え、正量部は中インドより西部・南部インドに栄えていたようである。

四　最近に隣国のある王が……建てた　この隣国の仏教保護王は喜増王 Harṣa (巻五の一・三参照) のことであろう [R. S. Tripathi : *History of Kanauj*, p.101]。またこの隣国王が建てた二伽藍については『慈恩伝』巻三に「二大徳あり、一は怛他掲多毱多 (Tathāgata-gupta, 如来密) と名づけ、二は羼底僧訶 (Kṣānti-siṃha, 師子忍) と名づく。倶に薩婆多部 (Sarvāstivādin, 説一切有部) を善くす。[玄奘] 又停まること一年、就いて『毘婆沙』『順正理』等を読む」とある。

一・二　伊爛拏山　大城の側、殑伽河に臨み伊爛拏山(注一)がある。霞や煙を吐き出し、(注二)日月をも蔽うほどで、古来、仙人・聖人がつぎつぎとここで心を凝らしている。今も天祠があり、昔どおりのやり方に従っている。その昔、如来も一時ここに居られて、天界・人界の人たちのために妙法を説法されたことがある。大城の南に窣堵波がある。如来がここで三ヵ月の間、説法をされた。その側には過去三仏の座所および散策された遺跡のある所がある。

注

一　伊爛拏山　「大城の側」と言うのみで、方位・距離を示していない。現在のモンギール市の東方三マイルに Pirpahar と呼ぶ丘がある。風景もよく温泉もあり有名である。或いはこの丘のことか。

二　霞や煙を吐き出し　原文は「煙霞を含吐す」とある。これを火山活動の噴煙と見る説 [Julien, Cunningham, etc.] と、景色の形容であり火山ではあり得ないとする説 [Watters, 足立] と相容れない二説がある。この近辺には温泉も多く、近くは一九三四年一月に火山活動によると思われる大地震が起こり、この町も大きな損害を蒙っていることより見れば、前説に従って差し支えなく、「日月を蔽う」の語にも適しよう。

一・三　聞二百億の帰仏　三仏経行 [の遺跡] の西、遠からざる所に窣堵波がある。室縷多頻設底拘胝 (原注　唐に聞二百億と言う。旧訳に億耳と曰う。訛なり) 苾芻(注一)の生まれた処である。昔この町に長者がおり、巨万の富をもつ富豪であり、晩年に後嗣ができた。その時その由を知らせる者に直ちに金銭二百億を与えたので、その子を聞二百億と名づけたのであった。長ずるに及んでも、一度として地面を踏んだことがなかったので、その足の裏は毛が一尺余も伸び、光沢あり細く軟らかで色は黄金のようであった。この子を大変可愛がりいろいろな玩具を与え、自宅から雪山に至るまでの間は、宿場は軒を列ね召使は道に行き来し、必要な貴重薬は次々と伝えて折り返し与え、一度として間に合わないことがなかったほどで、その富豪ぶりはまずこのようであった。世尊は長者の子の宿善が今や現われようとしているこ

どを察知され、没特伽羅子（巻四の七・二、目連の項参照）に出かけて教化されるように命じられた。［目連は］長者の門まで行ったが、自由に入る方法もなかった。長者の家では日天[注二]を祠り、毎日夜明け方に東に向かって礼拝していた。そこで［目連］尊者は神通力で日輪の中から長者の子の前に降り立った。長者の子は日天であろうかと思った。そこで香飯[注三]を布施して帰らせた。ところがその飯の香気強く、王舎城の隅々にまで香りが行きわたった。時に頻毘娑羅王はその不思議な香りに驚き、家臣にくまなく訪ねさせたところが、竹林精舎（巻九の二一・三参照）の没特伽羅子が長者の家から持って来たものであった。それで長者の子がこの異相を具えていることを知り、召し出させた。長者は王命を承ったが、どういうふうにして安全に行かせようかと思案した。舟を浮かべて棹させば風波の危険があろうし、車に乗り象に騎れば躓き倒れる心配もあるというものである。そこで長者の自宅から王舎城まで、運河を掘り舟を通れるようにし芥子をいっぱいに流し［波が起たぬようにし］、舟に乗ってじっとしており長い大綱で引っぱらせた。［長者の子は］王舎城に行き、まず世尊を礼拝した。世尊は、

「頻毘娑羅王が使の者に命じて汝を召し出させたのは、足下の毛を見たいからに過ぎない。王が見ようとされたならば、脚を組んで坐りなさい。脚を伸ばして王に向かうならば、国法で死に当たることになる」

と教えられた。長者の子はお教えを受けて出かけ、朝廷に引き入れられて拝謁した。王は毛を見ようと思ったところ、脚を組んで坐った。王は長者の子の礼節あることを褒め、ことのほか覚えがめでたく、再び王宮から退ることができたので、仏の所まで戻った。如来はそこで説法をして教えられ、長者の子はそれを聞き心に感ずるがまま、直ちに出家した。そこで修行に励み證果を得ようとし、思索経行することを怠らず、足は血を流すほどであった。世尊は、

「善男子よ、在家の時期に鼓や琴をやったことがありますか」

と問われると、

「あります」

と答えた。世尊は、

「もしそうなら、それを喩えにしましょう。弦が急に過ぎれば音声が韻に合わなくなろうし、弦が緩に過ぎれば調子が正しい楽節に諧和しないことになろう。弦が急ならず緩ならずして始めて音声が諧和するのである。修行をする者もそのとおりである。急であれば身体は疲れ心は働かず、緩であれば気持ちがのんびりして志はそれてしまうことになろう」

と教えられた。仏のこの指教を承り、これを守り努力した。かくの如くすること久しからず、證果を得たのであった。[注四]

注

一　室縷多頻設底拘胝（……）苾蒭　室縷多頻設底拘胝 *śi̯ĕt*。-°*li̯u*-。*tâ*-。*b'i̯ĕn*-*śi̯ät*。-°*tiei*-。*ki̯u*-。*ĭi*：**śrota-viṃśati-koṭi*（Skt. *śrotra-viṃśati-koṭi*）. 通常仏典に Skt. *śroṇa-koṭi-viṃśa*, Pa. *soṇa-koḷi-visa* として現われ、首楼那二十億・室路拏二十倶底と梵・漢併挙され、また二十億耳・億耳等と訳される。*śrotra*（*śrota*, *śroṇa*）は聞、*viṃśati* は二十、*koṭi* は億（巻九の二一・二参照）なる故、聞二十億が当たっている。玄奘の聞二百億は、或いは *śrota-dveśate-koṭi* との混同であろうか。億耳は Skt. *śroṇa-koṭi-karṇa*, Pa. *soṇa-koṭi-kaṇṇa* の訳で、別人である。聞二十億は仏弟子中に精進第一と称せられた。また巻十一の二・二に見える。

二　日天　Skt. *sūrya*, Pa. *suriya* の訳。蘇利耶・蘇哩也・素利也・修利とも書き、日天子・日神とも訳す。太陽を擬人化した神で、金色の馬車に乗り七子（即ち七曜）を従えて天を周行すると言う。バーミヤーンの三十五メートル仏の頭上に画いた壁画は その状を示す［平凡社：『世界美

術全集』一一、八八ページ参照]。

三 香飯 巻八の一に見えるように、摩掲陀国には供大人米と称する特殊な上質米がとれた。この香飯もその類か。

四 聞二百億の帰仏説話は、『四分律』三八、『増一阿含経』一三等に見える。

一・四 小孤山の聖跡 この国の西境の殑伽河の南、小さな離れ山(注一)に至る。重なりあう嶺は嶮しい。昔、仏はここで三ヵ月の間安居をされ、薄句羅薬叉(注二)を降伏された。山の東南の巌石の下に大きな石があり、石上には仏が坐られた跡があり、石に一寸余くい込んでいる。長さ五尺二寸、広さ二尺一寸。その上には窣堵波が建ててある。その南の石の上には仏が捃稚迦(原注 即ち澡瓶なり。旧に軍持と曰う。訛略なり)(注三)を置かれた跡がある。深さ一寸余、八出の花文(注四)を作っている。仏が坐られた跡の東南遠からざる所に、薄句羅薬叉の脚跡がある。長さ一尺五、六寸、広さ七、八寸、深さ二寸足らず。薬叉の脚跡の後方に石仏の坐像の高さ六、七尺のものがある。その西遠からざる所に仏が散策された処がある。その山の頂上には薬叉がもと住んだ室がある。その北に仏の足跡がある。長さ一尺有八寸、広さ六寸余、深さ五分ばかり。その足跡の上に窣堵波がある。如来が昔、薬叉を降伏し、人を殺し肉を食べないようにされた。薬叉は謹んで仏の訓戒を受け、後に天に生ずることができた。この西方に温泉が六、七ヵ所ある。その湯は非常に熱い。この国の南境の大きな山林の中にはたくさん野象がいる。その体軀は巨大である。

ここから殑伽河の南岸に沿い、東へ行くこと三百余里で瞻波国(原注 中印度の境)に至る。

注

一 この国の西境の……小さな離れ山 この山は Waddel によれば、今のモンギール市の西南二十マイル、ガンジス河の現河畔より南七マイルにある Uren (<*irāṇya* ?) 山であり、そこには仏像・碑文・仏足石等を出す廃址があると言う [Majumdar's Note, in *C.A.G.I.*, p.722]。

二 薄句羅薬叉 薄句羅 *b'âk*。-。*kəu*-。*lâ* : Skt. *bakkula, bakula, vakkula, vakula, vatkula*, Pa. *bakkula, bākula, vakkula* [Edgerton : *B.H.S.D.*, p.397]。この薬叉名は『孔雀王咒経』Mahā-māyūrī に見え、王舎城に住めりと言う [S. Lévi : *Le Catalogue géographique des Yakṣa dans la Mahā-Māyūrī*, J.A. ; 馮承鈞訳:『大孔雀経薬叉名録輿地考』]。同名の仏弟子に関する記事は見えるが、この薬叉については他書に見えず、詳細不明。

三 捃稚迦(……) 捃稚迦 *kiuən*°-*d̑'i*°-。*ka* : Skt. *kuṇḍikā, kuṇḍika*. 水瓶・澡瓶・浄瓶・澡罐等と訳す。比丘十八物の一で、通常観世音菩薩・弥勒菩薩等の図像中に見るもの [岩波写真文庫:『仏像――イコノグラフィー』二〇ページの図参照]。その種類・用法等の詳細は『南海寄帰伝』一の「水有二瓶」の条に見える。

四 八出の花文 八つの花弁をもつ花の文様のことか。

二 瞻波国

二・一 国勢の概観 瞻波国(注一)は周囲四千余里ある。国の大都城(注二)は、その北は殑伽河を背にしており、周囲四十余里ある。土地は低湿で、農業は盛んである。気候は暑く、風俗は純朴である。伽藍は数十ヵ所、損壊しているものが多い。僧徒は二百余人、小乗の教えを学んでいる。天祠は二十余ヵ所、異道の人々が雑居している。

注

一　瞻波国　瞻波　ₒtśiäm-ₒpuâ : Skt. Pa. *campā*. また瞻蔔・瞻婆・闡蔔・闡波・栴波・占波等とも。無勝と訳す。瞻波河（今の Chāndan）とガンジス河に臨む。釈尊の時代にはインド十六大国の一たる鴦伽 Aṅga 国として繁栄した。インドシナ半島の占波はこの地より移住したものが、その出身地名をそのまま用いたもののようである［Cunningham : *A.G.I.*, p.546 ; Law : *H.G.A.I.*, p.214 ; 中村 :『インド古代史』上二四八ページ］。

二　国の大都城　モンギールの東南東、今のバガルプル Bhāgalpur の近くに Campanagara と Campapura という二つの村があり、それがこの首都の遺址である。釈尊の時代にはインドの六大都市の一であり、通商貿易の主要都市として繁栄した。

二・二　**建国の伝説**　その都城は煉瓦を積んだものでその高さ数丈、基礎は嶮しく堡塁は高い。(注一)その昔、天地開闢の初め、人類の祖は野に穴を作って居り、まだ住居を作ることを知らなかった。やがて天女が人間界に降下し、殑伽河に遊び自らあだめいた姿をし、霊に感じて妊娠し四人の子を生んだ。(注二)その四人を贍部洲に分居させそれぞれ境域を支配させて、都を建設し邑を構築し境界を定めさせた。この都城はその一人の子供の国都であって、贍部洲のあらゆる都城の最初のものである。(注三)

城の東方百四、五十里の殑伽河の南の所では、河水が離れ島をとり巻き、島の崖は嶮峻である。山の上には天祠があり、ここの神は霊験が多い。崖に穴を掘って室とし、流れを引き込み沼を作っている。花咲く林に珍しい樹木、巨大な巌石に高い峰、仁者・智者の居るにふさわしい美しい景観で、遊覧するものは帰るのを忘れるほどである。(注四)

国の南境の山林中には、野象や猛獣が何千と群遊している。(注五)

ここから東へ行くこと四百余里で羯朱嗢祇羅国（原注　かの俗に或いは羯蝿掲羅国と謂う。中印度の境）に至る。

注

一　その都城は……高い　瞻波国首都の望楼・城壁・城門等についての記述は、*Jātaka*, No. 539, Mahā-Janaka 王本生に見える。

二　やがて天女が……生んだ　『慈恩伝』四には「後天女あり、人中に下降し、殑伽河に遊んで浴す。水霊身に触れて四子を生む」とある。

三　天女の子が贍部洲を四分して割拠した説話は、何に基づくか詳かにしない。瞻波国の前身である鴦伽 Aṅga 国の名が最初に見える文献は *Atharva Veda*, V. 22. 14.（筑摩書房 :『世界古典文学全集』三、一〇六ページ）である。なお、この国の古典に見える状については、Raychaudhuri : *P.H.A.I.*, p.108 参照。

四　流れを引き池沼を作った美しい景観とは、瞻波国王妃 Gaggarā が掘らせたという Gaggarāpokkharaṇī のことであろうか［*Sumaṅgalavilāsinī*, I. p.279］。ここは釈尊が諸弟子と共に住して、諸種の経典を説いたと言われる所である［『長阿含経』一五］。

五　国の南境……群遊している　『慈恩伝』四には「国の南界数十由旬に大山林あり、幽茂連綿として二百余里。其の間に多く野象ありて数百、群れをなす。故に伊爛拏・瞻波の二国は象軍最も多し。毎に此の林において象師をして調捕せしめ、国の乗用に充つ。又豺・兕（野牛の類）・黒豹豊く、人の敢えて行くものなし」とある。

三　羯朱嗢祇羅国

羯朱嗢祇羅国(注一)は周囲二千余里ある。土地は湿潤で、農業は盛大である。気候は暖かく、風俗は素直である。才高き人を篤く尊び、学芸を尊重している。伽藍は六、七ヵ所、僧徒は三百余人。天祠は十ヵ所、

異道の人々が雑居している。ここ数百年来、王族は後嗣なく、隣国に隷属している。(注二)それで城郭は廃墟となっており、村落に住まうものが多い。このため戒日王(注三)(巻五の一・三参照)は東印度に出遊する際は、ここに御殿を築きあらゆる国務を処理するのであるが、ここへ来ると茅を葺いて建物を作り、ここを去る時には火を放って焼いてしまうのである。この国の南境には野象が多い。北境の殑伽河を去ること遠からざる所に大きな高台がある。煉瓦や石を積み上げて作られたものである。基礎の跡は広く高く、珍しい彫刻が施してあり、その各面には多くの聖者の像が刻んであるが、仏と天人の姿は区別して作ってある。(注四)

ここから東して殑伽河を渡り、行くこと六百余里で奔那伐弾那国(原注　中印度の境)に至る。

注

一　羯朱嗢祇羅国　羯朱嗢祇羅 *kịpt。-。tśịu-·uət。-。g'jię-。lâ*: **kacughira*. 従来の諸研究書は「嗢」を「𥁕・温」。*·uən* の如く読み、原音を *kajuṅghira, kajaṅghara, kajiṅghara* の如きものと考えた。「嗢」は宋版巻末の音義に「嗢　烏没反 → *·uət*。」、『慧琳音義』八三(『慈恩伝』四の条)に「嗢　温骨反 → *·uət*。」とするもの故、訳注者の再構したものに近い原音を考えるべきであろう。前項末の原注に俗称を羯蝇揭羅 *kịpt。-。iəng-g'ịɐt。-。lâ*: **kayaṅghara* と言うとあるは、恐らく、*Jātaka*, I. p.49; *Mahāvagga*, V. 13. 12 に見える中インドの東辺に在るという Kajaṅghara (>kayaṅghara) のことであろう。この位置は前項の瞻波国であるバガラプルより東南東約八十マイル、ガンジス河が大きく南折した所の西岸の Rajmahal (もとは Kānkjol と呼ばれた) であるとされる [Cunningham: A. G. I., p.548]。釈尊は一時ここに住まられたことがあるという [*Aṅguttara Nikāya*, V. 54; *Majjhima Nikāya*, III. 298]。

二　ここ数百年来……隣国に隷属している　玄奘往訪時は 喜増王 Harṣavardhana の領内にあったものであろう [R.S. Tripathi: *History of Kanauj*, p.101]。

三　戒日王は東印度に……ここに御殿を築き　注一に見える如く、往時はここが中インドの東端であり、これ以東の東インドは辺国とされていた。釈尊在世時、この地点では食糧も容易に入手し得たのである [Law: *H. G. A. I.*, p.224]。

四　この仏教寺院址と思われる高台が何所に当たるかは、諸書何れも記す所がない。後考を俟つ。

四　奔那伐弾那国

四・一　国勢の概観　奔那伐弾那国(注一)は周囲四千余里ある。国の大都城(注二)は周囲三十余里あり、住民は多い。池に臨む館と花咲く林とはしばしば交錯している。土地は低湿で、農業は盛大である。般桜娑果(巻二の一・一五参照)は多くもあり尊重されてもいる。その果実は大きさ冬瓜くらい、熟すと黄赤色になる。これを割ると中に数十個の小さな実が入っている。その大きさ鶴の卵くらい。またもやこれを割ると、その汁は黄赤色で、その味は甘美である。樹の枝になる時には、たくさんの果実がいっしょに実を結んだようであり、樹の根の所になる場合には、茯苓(球状のきのこの類)が土に生えているようである。気候は温和で、風俗は学芸を好む。伽藍は二十余ヵ所、僧徒は三千余人。大小の二乗を兼学し習修している。天祠は百ヵ所、異道の人々が雑居し、露形・尼乾(巻一の三八参照)の派の人々がその仲間最も多い。

注

一　奔那伐弾那国　奔那伐弾那 *。puən-。nâ-b'ịwɐt。-。d'ân-。nâ*: **punna-vardhana*. 『阿育王経』三にこの国を分那婆陀那とし、正増長と訳すより

見れば、パーリ語の *puṇṇavaddhana* (Skt. *puṇḍravardhana*) の形に近いものであろう。今の東パキスタンの Rajshahi, Bogra 近辺に当たる。

二　国の大都城　この首都の古址は、今の Bogra の町の八マイル北にある Mahāsthān (Mahāsthāngarh とも) に比定されている [Cunningham: A.G.I., p.550; Majumdar's Note, in C.A.G.I., p.724; Law: H.G.A.I., pp.246-8]。ここの考古学的調査の報告は最近出版された [N. Ahmed: *Mahasthan. A preliminary Report on the Recent Archaeological Excavations at Mahasthangarh*]。

四・二　跋始婆僧伽藍　城の西二十余里に跋始婆僧伽藍(注一)がある。庭園や建物は広々とし、楼閣は広壮である。僧徒は七百余人、みな大乗の教学を学習している。東印度の境の学深く有名な僧は、多くここに居る。その側、遠からざる所に窣堵波がある。無憂(アショーカ)王が建てたものである。(注二)昔、如来が三ヵ月間ここに居られて、天界・人界の人々のために説法された処である。斎日になると、時に光明が輝くことがある。その側には［過去］四仏の座所および散策された遺跡の場所がある。ここを去ること遠からざる所に、さらに精舎がある。中に観自在菩薩の像が作ってある。(注三)その神威は蔽(おお)われることなく、霊験はあらたかである。遠近の人々は穀物を絶って祈願している。

ここから東へ行くこと九百余里、大河を渡って迦摩縷波(カーマルーパ)国（原注　東印度の境）に至る。

注

一　跋始婆僧伽藍　跋始婆 *b'uât.-ʃi.-b'uâ.* この原音をジュリアンが疑問を持ちながらも *vāśibhā* かと考えて以後、これに従う人が多い。火の輝きの意と言う。L.Joshi が *bhasuā* (*bhāsura* の誤り、或いは転訛音か?) としているのも同義に解してのことであろう [*Studies in the Buddhistic Culture of India*, p.72]。第一音節の漢字に入声韻尾があるため、何れに従うにも躊躇(ちゅうちょ)を覚える（なお、「始」字は『慈恩伝』に「姑」に作る）。今は疑問として残す。この寺院址は現在 Mahāsthān の西北四マイル、Bihar と Vasu-Bihar の両村にわたり残っていて、グプタ期の遺物が多く発見されている。Vasu は跋始婆の遺影であろうし、Bihar は *vihāra* の転訛である [N. Ahmed: *Mahasthan*, p.62]。玄奘の記しているように広大な規模である。

二　阿育王塔　前注の寺院の北側の大きな煉瓦の堆址がこれと思われる。

三　観自在菩薩像のある精舎　前注阿育(アショーカ)王塔の西北に当たり、小さな寺院址があり、これに比定されている。像の遺物は何も発見されていない。

東印度境

＊　ここから「五印度」区分の東インド Prācya に入る。

五　迦摩縷波国

五・一　国勢の概観　迦摩縷波(カーマルーパ)国(注一)は周囲一万余里ある。国の大都城(注二)は周囲三十余里ある。土地は低湿で、農業は時に応じ適切に行なっている。般橠娑果(パナサ)（巻二の一・一五参照）・那羅鶏羅果(ナーリケーラ)(注三)はその樹木が多いけれども一層珍重されている。河川や湖沼は町や村を取り巻いている。気候は温和で、風俗は質朴である。人の形姿は小さく、容貌(ぼう)は黄黒い。言語は少しく中印度とは異なっている。(注四)性質は甚だ荒々しく、志向は勉学に熱心である。天神を尊び仕え、仏法を信じない。それ故に仏の出世より今日に至るまで、伽藍を建てたこともなく僧侶を招き集めたこともなく、信仰をもっている人があっても心ひそかに念じているだけである。天祠は数百、異道の人々は数万人いる。

注

一　迦摩縷波国　迦摩縷波 *。ka-。muâ-°lịu-。puâ* : Skt. *kāma-rūpa.* この位置をアッサム Assam の西部に当てる [Cunningham : *A. G. I.*, p. 572 ; Smith : *E.H.I.*, p.383 ; Law : *H.G.A.I.*, p.226]。前項末尾の「大河」をブラマプトラ Brahmaputra 河とする説と Tista 河とする説とがある。

二　国の大都城　カニンガムはカーマルーパ国の西部 Kāmrup（これから全 Kāmarūpa の名が取られた）の代表都市 Kamatipura であった、従って、「大河」は Tista 河であると言う。これに対し、通説では Purāṇa にも見える Prāgjyotiṣapura 即ち今のゴーハティ Gauhati が主都であり、ブラマプトラ河を「大河」とする。

三　那羅鶏羅果　那羅鶏羅 *。nâ-。lâ-。kiei-。lâ.* 巻二の一・一五には「那利薊羅 *。nâ-lji°-kiei°-。lâ*」と書き、巻十一の一・九には「那羅稽羅 *。nâ-。lâ-。kiei-。la*」と書く。玄奘の言う如き方言の差に当たるものであろうか。Skt. *nārikela*, Assam. *nārikal.*

四　言語は……異なっている　アッサム渓谷で話されるインド・ヨーロッパ語は Assamese と呼ばれ、この地帯にはインド文化に浴さないチベット・ビルマ語族もいる。西はベンガル語に接する。何れも東部方言に属する。Assamese については B. Kakati : *Assamese, its Formation and Development* 参照。前注の Skt. *nārikela*, Assam. *nārikal* は同書 §§ 150, 229.

五・二　拘摩羅王の招請　現在の王はもともと那羅延天(注一)の子孫で婆羅門の種族である。字は婆塞羯羅伐摩（原注　唐に日冑と言う）(注二)、号は拘摩羅（原注　唐に童子と言う）(注三)である。この境域に拠ってから代代君臨し、現在の王に至るまで千世を経ている。君主は学芸を好み、庶民はその化に従い、遠方の才能高き人々も、その風教を慕い遊学している。余り仏法を信じないけれども、学高き沙門は尊敬している。

初め至那国（巻九の三参照）の沙門が摩掲陀の那爛陀僧伽藍（巻九の三参照）にいるが、遠方からやって来て仏の甚深の妙法を学んでいるということを耳にし、丁重に招待の使者を往復させること再三であったが、なお招待に従わなかった。その折、尸羅跋陀羅論師（巻八の四・四参照）は、

「仏恩を報じようと思うならば、正法を弘めるべきです。あなたは行っていらっしゃい。遠方であるからとておやめなさるな。拘摩羅王は代々外道を信じておりますのに、今沙門を招待するとはこれは善事です。これを動機にその履む道を改めることができるならば、福徳の利益は弘遠でありましょう。あなたは先に大きな慈悲心を起こして弘い誓いと願いを発し、唯一人異境に遊学して求法のために一身を捨てておられます。衆生を救済するのは、自分の故国だけに限りなさるな。得失はお忘れなさい。名誉とか恥辱とかにこだわりなさるな。仏の教えを弘めて迷える人々を教導し、他を先にし自を後にし名誉を忘れて法を弘めるべきです」

と言った。そこで断わり切れぬがまま、使者と共に出かけて王に会見した。拘摩羅王は、

「私は非才ではありますが、常々りっぱな学者をお慕いしております。あなたがりっぱなお方であられることを耳にし、無理にお出でを願いました」

と言ったので、

「才能薄く智恵狭きこの身のことが、誤ってお耳に入りました」

と答えた。拘摩羅王は、

「りっぱなことであります。法を慕い学を好んで自身を浮き雲であるかのごとく軽く見なし、幾重もの嶮岨をのり越えて遠く異境に遊学されました。これこそは王の教化の故であり、国がらが学芸を尊ぶから

でありましょう。当今、印度の諸国に摩訶至那国の秦王破陣楽（巻五の一・四参照）を歌っているものがたくさん居ります。久しく耳にしておりますが、大徳のお国のことではありませんか」

と尋ねたので、

「そうです。この歌は我が君主の徳を讃美しているのです」

と答えた。拘摩羅王は、

「大徳がその国の方であるとは思いもよりませんでした。常々その風教を慕って東の方を望むこと已に久しいものがありますが、山や川が道を塞ぎ、出かけて行くすべもありませんでした」

と言うのに、

「我が君主はその徳遠く及び教化は遙かにあまねく、習俗を異にする外国の人々で、闕下に拝して臣と称するものはたくさんおります」

と答えた。拘摩羅王は、

「天子の恩徳がそのようであるならば、私も朝貢したく思います。現在、戒日王（巻五の一・三参照）は羯朱嗢祇羅国（本巻の三参照）で大施（食会）を催し福徳智恵の善根を植えようとしておられ、五印度の沙門や婆羅門の学績ある人々をみな召集しておられます。今、使をよこして御招待しようとしておりますから、どうか御いっしょにおいで願います」

と言った。そこでいっしょに出かけた。(注四)

注

一　那羅延天　Skt. *nārāyaṇa.* 天界の力士の名。或いは梵天王の異名と言う（巻二の四・一参照）。

二　字は婆塞羯羅伐摩（……）　婆塞羯羅伐摩　°*b'uâ-sək*°-*kịɒt*°-°*lâ-b'ịwɒt*°-°*muâ* : **bhāskara-varma*（Skt. *bhāskara-varman*）. 日冑と訳す。この王の名は Nidhanapur 出土の銅板銘に見える。戒日王はこの王と連合して設賞迦王（巻五の一・三参照）を滅ぼした（六一九－三七の間）。設賞迦王はもと羯羅拏蘇伐剌那（巻五の一・三および本巻の八参照）を領していたが、この銅板銘作製時には日冑王の所領となっていた［Smith : *E.H.I.*, p.370, 384 ; Raychaudhuri : *P.H.A.I.*, p.609］。

三　号は拘摩羅（……）　拘摩羅　°*kịu*-°*muâ*-°*la* : Skt. *kumāra.* 童子・少年・青年等と訳す。『慈恩伝』巻五には鳩摩羅　°*kịəu*-°*muâ*-°*la* と表記する。

四　この段の記事の詳細は、『慈恩伝』巻五に見える。

五・三　東境の地理

この国の東は山や岡が連なり、大きな都市もなく、境を西南夷に接している。(注一)それ故にそこに住む人々は蛮獠に類しているのである。(注二)土地の人に詳しく質問するに、二ヵ月程行くと蜀（四川省）の西南の境に入る。しかし山川は険阻であり、その毒気は烈しく、毒蛇や毒草は害となること甚だしいとのことである。

国の東南は野象が多い。それでこの国では象軍が特に盛んである。これより南へ行くこと千二、三百里で三摩呾吒国（原注　東印度の境）に至る。

注

一　この国の東は……いる　ビルマの北部から中国の四川・雲南・貴州省にかけての地帯で、西蔵族・泰族・苗族が住んでいる。

二　蛮獠　蛮は蛮子・蛮家とも呼ばれた古称で、また儸儸 Lo-lo とも言われた。今は彝族と公称されている。貴州・雲南・四川省からビルマ・タイにおよぶ地域に住む山地族。獠も同様な地域に住む未開民族で、人種・言語・文化についてもまだよく分からないもの。

六　三摩呾吒国

六・一　国勢の概観および仏跡　三摩呾吒（サマタタ）国[注一]は周囲三千余里ある。国の大都城[注二]は大海（ベンガル湾）に近いので、土地は低湿である。国の大都城は周囲二十余里ある。農業は盛大で、花・果は繁茂している。気候は穏やかに、風俗は素直である。人の性格は烈しく、姿は卑しく色は黒い。学芸を好み勤勉で、邪信・正法をともに信仰している。伽藍は三十余ヵ所、僧徒は二千余人、みな上座部の学を遵奉している。天祠は百ヵ所、異道の人々が雑居し、露形・尼乾（ニルグランタ）（巻一の三八参照）はその仲間が非常に多い。

城を去ること遠からざる所に窣堵波がある。無憂王が建てたものである[注三]。昔、如来が諸天人のために、ここで七日間甚深の妙法を説かれた[注四]。傍（かたわら）に四仏の座所および散策された遺跡の所がある。

ここを去ること遠からざる伽藍の中に青玉の仏像がある。その高さ八尺、相好は円満で、霊験が時に現われることがある。

注

一　三摩呾吒国　三摩呾吒　*ₒsâm-ₒmuâ-tât ₒ-ta*°：Skt. *samataṭa*（「呾」を『慈恩伝』には「怛」に作る）。国名の意味は「海浜国・平地国」の意とする［Beal：*Records*, II. p.199 (30)；Cunningham：*A.G.I.*, p.576］。この国名は Samudragupta 王の Allahabad 石柱碑銘に見える［*Corp. Inscr. Ind.*, III., No. 1］。グプタ王朝に属する東方諸国中最も重要なものの一つであったと言う。今の東パキスタン、ガンジス河河口の三角州地帯にあった。この国については義浄『西域求法高僧伝』下の僧哲の条にも見える。

二　国の大都城　以前は Jessore［Cunningham］, Sonargaon［Fergusson］, Faridpur［Watters］など異なった地点を種々想定されたが、最近はもとの Karmānta, 即ち Comilla の西十二マイルにある Bād-Kāmta とされている［Dey：*Geogr. Dict.*, p.175；Law：*H.G.A.I.*, p.257］。

三　無憂王の建てた窣堵波　阿育王塔についての最東端の記事である。

四　如来が……説かれた　釈尊はもとよりこの地方に来たことはなく、ここの記事のような伝説は仏教伝来以後の付会である。

六・二　東方の諸国　ここから東北の方、大海の海岸にある山の谷の中に室利差呾羅（シリークシャトラ）国[注一]がある。その東南の大海の際涯（はて）に迦摩浪迦（カーマランカ）国[注二]がある。その東に堕羅鉢底（ドヴァーラバティ）国[注三]がある。その東に伊賞那補羅（イーシャーナプラ）国[注四]がある。その東に摩訶瞻波（マハーチャンパー）国があり、これがこの方（唐のこと）で言う林邑（りんゆう）である[注五]。その西南に閻摩那洲（ヤマナ）国[注六]がある。凡（およ）そこの六国は山川が道を阻（はば）んでいるので、その境域には入らなかった。しかし、その風俗・境界は人の話で知り得る。三摩呾吒国より西へ行くこと九百余里で、躭摩栗底（タームラリプティー）国（原注　東印度の境）に至る。

注

一　室利差呾羅国　室利差呾羅　*śịĕt ₒ-lji*°*-ₒtṣ'a-tât ₒ-ₒla*：Skt. *śrī-kṣatra*. 『南海寄帰伝』一の室利察呾羅のことであろう。ビルマ史において、仏暦第六〇年（前四八四）に Mahāsambhava 王が Thare Khettara（即ち śri-ksatra）と言う町を作り、Prome 王朝を創めたと言う。この遺跡は今も現在のイラワディ Irāwādi 河畔の Prome の町の東方数マイルの地点にある［高楠順次郎：英訳『南海寄帰内法伝』、General Introd., p. li.］。ただしこの町とすれば三摩呾吒国の東南に当たる。玄奘が東北と記すのは伝聞の誤りか。

二　迦摩浪迦国　迦摩浪迦　*ₒka-ₒmuâ-lâng*°*-ₒka*：Skt. *kāma-laṅka*. 『梁書』

五四の狼牙脩、『寄帰伝』一、『西域求法高僧伝』上の郎迦戍(ランカス) Lankasu であろう。今の Pegu とイラワディ河河口のデルタ地帯に当たる［高楠：同前書九ページ］。

三　墮羅鉢底国　墮羅鉢底　°d'uâ-。lâ-puât。-°tiei : Skt. *dvārapati*.『寄帰伝』一の杜和鉢底、『旧唐書』の墮和羅、『新唐書』の独和羅。暹羅(シャム)の旧都アユタヤ Ayuthya or Ayudhya の梵名であると言う［Chavannes : *Les Religieux Éminents*（仏訳『求法高僧伝』）p.203］。

四　伊賞那補羅国　伊賞那補羅　。·i-。śiang-。nâ-°puo-。lâ : Skt. *iśānapura*.『唐書』二二二下、真臘国の条に「其の王刹利(クシャトリヤ) Kṣatriya 伊金那（伊奢(イシャー)那(ナ)の誤りならん)、貞観の初めに扶南を并(あわ)せ、其の地を有す」とある Iśānavarman 王の拠れる所。真臘はカンボディア Cambodja である［高楠：同前書、序の五一ページ］。なお、首都は今の Sambor Prei Kuk かと見られ、同地より七世紀初葉の真臘王 Iśānavarman の碑銘が出た。王は後に Vyādhapura に奠(てん)都したと言う［高田：『国訳伝』一〇〇ページ（16）］。

五　摩訶瞻波国……林邑である　摩訶瞻波　。muâ-。χâ-。tśiäm-。puâ : Skt. *mahā campā*. 占波［『寄帰伝』一］とも。林邑は臨邑とも。インドシナ半島の東南海岸。

六　閻摩那洲国　閻摩那　。iäm-。muâ-。nâ : Skt. *yamana*. 閻摩那洲は Skt. *yamana-dvipa*. 或いは *yavana-dvipa*, *yava-dvipa*, 即ち『法顕伝』の耶婆提、『高僧伝』三の闍婆、今のジャワ Java のことか。方位の「西南」を『慈恩伝』四には「南」に作る。

七　躭摩栗底国

躭摩栗底(タームラリプティー)(注一)国は周囲千四、五百里ある。国の大都城は周囲十余里ある。際涯は海岸に近く、土地は低湿である。農業は適時行ない、花・果は繁茂している。気候は暑く、風俗は荒々しい。人の性質は剛勇で、邪教・正法ともに信じている。伽藍は十余ヵ所、僧徒は千余人いる。(注二)天祠は五十余ヵ所、異道の人々が雑居している。国は海岸近く位置しているので水陸の道が出会い、珍しい宝の類がたくさんこの国に集まってくる。それでこの国の人はおおむね富裕である。城の側の窣堵波は無憂王が建てたものである。(注三)その傍には過去四仏の座所および散策の遺跡の所がある。

ここから西北へ行くこと七百余里で、羯羅拏蘇伐剌那(カルナスヴァルナ)国（原注　東印度の境）に至る。

注

一　躭摩栗底国　躭摩栗底　。tâm-。muâ-liět。-°tiei : *tāmalitti (Skt. *tāmraliptī*, Pa. *tāma-litti*). 古書には Tāmraliptā, Dāmaliptā, Tāmraliptikā などとも。ガンジス河河口における諸流の西端 Hooghly 河の西岸にあるタムルーク Tamlūk に比定されている（ベンガル州 Midnapur 県）。この都市は *Mahābhārata* にも見え、Ptolemy の地理書［vii. C. I. 73］には Tamalites と表記されている。*Daśakumāracarita* の著者、六世紀の文人ダンディン Daṇḍin によれば、Binduvāsini 寺院がここにあったと言う（法顕・玄奘も訪れたであろう）。この寺院は河川の氾濫(はんらん)により壊滅した。多摩梨帝［『法顕伝』］、耽摩立底［義浄：『寄帰伝』『求法高僧伝』上］とも。一九四〇年からのインド考古調査部の手によりこの廃市の発掘が行なわれ、多くの陶器が発見された。その年代は確かめ難いが、当地と中国・エジプトなどとの通商関係を示すものである［高桑駒吉：『大唐西域記に記せる東南印度諸国の研究』（以下『研究』と略称）五一―一四ページ ; Law : *H.G.A.I.*, p.263 ; Arch. Survey of Ind. : *Archaeological Remains, Monuments and Museums*, p.77］。

二　伽藍は……いる　『法顕伝』によれば「其の国二十四の僧伽藍ありて、尽(ことごと)く僧の住む有り、仏法も亦興(さか)んなり。法顕此(ここ)に住(とど)まること二年、経及び画像を写す」と玄奘当時より盛大なることを記す。

三　城の側の無憂王塔　この地に阿育王が仏塔を建てたという古記録もなく、それらしき遺跡も今日見得ないが、阿育王とセイロンとの交渉に当地が

しばしば通過地点として見えることより、当地に阿育王塔があったという玄奘の記事は誤りではなかったろう［高桑：『研究』九ページ］。

八　羯羅拏蘇伐刺那国

八・一　国勢の概観　羯羅拏蘇伐刺那国（注一）は周囲四千四、五百里ある。国の大都城は周囲二十余里ある。住民は数多く、家産は富裕である。土地は低湿で、農業は適時行なっており、多くの花は咲き茂り、珍しい果物が繁殖している。気候は温和に、風俗は純良である。学芸を愛好し、邪教・正法ともに信仰している。伽藍は十余ヵ所、僧徒は二千余人（『慈恩伝』には「三百余人」に作る）おり、小乗の正量部の教えを学習している。天祠は五十余ヵ所、異道の人々が非常に多い。別に三伽藍があり、乳酪を口にせず、提婆達多の遺訓（注二）を遵奉している。

注：

一　羯羅拏蘇伐刺那国　巻五の一・三に既出。Skt. *karṇasuvarṇa.* 金耳国の意。設賞迦王の拠った地。ガンジス河西岸 Murshidabad 県の Rāngāmāṭi に比定されている。そこは Bandel より九十四マイル、Chirati 駅の南東一マイル半の地点である。ここの土は赤くて硬く、次項の寺院名の依って来たるにふさわしい煉瓦の材料となるものである。ここからクシャン期およびグプタ期の貨幣や煉瓦の堆土が発見されている［Law : *H.G.A.I.*, p.225］。

二　提婆達多の遺訓　提婆達多は幼少のころより釈尊に対抗したが、長じて修行に励むうちに意志退転し、阿闍世太子の帰依を受けてより心傲り、徒衆を率いて釈尊の僧団を脱した。かくて仏の諫止をも聞かずに自ら五法を定め、遂に破僧伽の道を歩んだ。『有部毘奈耶破僧事』一〇に、この五法の一として「乳酪を食わず」の項がある。『法顕伝』にも「調達（提婆達多）にも亦衆の在るあり、常に過去三仏を供養し、唯釈迦文仏を供養せず」と提婆達多の派のものが存したことを記す。

八・二　赤泥寺　大城の側に絡多末知僧伽藍（原注　唐に赤泥と言う）（注一）がある。庭・建物は広大に、台閣は広壮である。国中の才高く学芸に達し、聡明の聞こえあるものはみなここに集まり、お互いに警めあい道徳を磨いている。初めこの国が仏法を信じないころ、南印度に一人の外道がいた。腹には銅の板を巻きつけ頭には明々とした火をのせ、杖をつき濶歩してこの町に入って来て、合図の太鼓を打ち鳴らし論議の相手を求めた。ある人が、

「あなたの頭や腹はどうして変わった様子をしているのですか」

と問うと、

「私は学芸多能であり、それを納めた腹がいっぱいで裂けるのを心配して腹を巻き、闇愚の人々を悲しみ明りをつけているのだ」

と答えた。さて旬日を経たが問答する人もなく、長老たちを訪問したが相手になる人とてもなかった。王は、

「領内にりっぱな学者がいないこともなかろうに。この異人の論議の相手をしなければ、国の大きな恥となろう。一層努力して隠れた学者たちを探し求めるよう」

と言うと、

「大林の中に変わった人がおります。その人は自ら沙門と称して勉強に励んでおります。今ひっそりと世間から離れて暮らし、すでに久しいことになります。法を身に体し徳に合致するのでなければ、どうしてこのようにできましょうか」

と言う人がいた。王はこの話を聞き自ら出かけて訪ねた。沙門は王に向かって、

「私は南印度の人間です。諸方を訪ねここに止まっております。学業浅薄で王の御信頼をおとすのではないかと懸念いたしますが、敢えて御意向を承り辞退はいたしません。もし論議に負けることがなかったなら、伽藍を建ててくださるようお願いします。僧徒を集めて仏法を宣教しましょう」

と答えた。王は、

「敬んで承りましょう。決して恩徳は忘れません」

と言った。沙門は王の請いを受け入れ論議の場に出かけた。外道はそこでその信ずる所を誦すること三万余言。その意味する所は遙遠に、その文は簡約であった。その論は目に見、耳に聞くものすべてを包含し、視聴を極め尽くしたものであった。沙門は一度聞くや、その論を十分に見きわめ文句も意味も誤ることなく、僅か数百言で弁別し解釈し、そこで外道にその宗義を問うた。外道は言葉につまり道理に窮し、口を閉ざして答えなかった。その名誉を損ねたので恥を負って退いた。王は深く沙門の徳を敬いこの伽藍を建てた。その時より以後、始めて仏の教えが弘まったのである。

伽藍の側、遠からざる所に窣堵波がある。無憂王が建てたものである。その昔、如来がここで七日間説法し、人々を導かれた。その側の精舎は過去四仏の座所と散策の遺跡の所である。窣堵波がいくつかあるが、それはみな如来が法を説かれた処であり、無憂王が建てたものである。

ここから西南へ行くこと七百余里で、烏荼国（原注　東印度の境）に至る。

注

一　絡多末知僧伽藍（……）　絡多末知 *lak.-.tâ-muât.-.tię* : Pkt. *rakta-maṭṭi* (Skt. *rakta-mṛttikā*, *rakta* は赤、*mṛttikā* は泥の意)。赤泥寺の意の俗語形である [Turner : *C.D.*, no. 10286]。前項注一に記したように、この地の土が赤いことから来た名であろう。当地の現在名 Rāngā-māṭi もこの古名に由来する。

九　烏荼国

九・一　**国勢の概観**　烏荼国(注一)は周囲七千余里ある。国の大都城(注二)は周囲二十余里ある。土地は肥沃に、農業は盛大である。凡そ果実の類は諸国のものよりもすこぶる大きい。変わった草やりっぱな花は一いち述べ難い。気候は暑く、風俗は荒々しい。形貌はたくましく、色は黄黒い。言語と調子は中印度に異なっている(注三)。学芸を好んで倦むことなく、多くのものは仏法を信じている。伽藍は百余ヵ所、僧徒は一万余人、みな大乗の教えを学習している(注四)。天祠は五十ヵ所、異道の人々が雑居している。窣堵波は凡そ十余ヵ所、どれも如来が説法された処であり、無憂王が建てたものである。

注

一　烏荼国　烏荼 *.uo-.d'a* : Skt. *uḍra*, *oḍra*, *oḍḍa* (ドラヴィダ語では Telugu *oḍhruḷu*, Kanarese *oḍḍaru*). 今のオリッサ Orissa 北部に当たろう (*orissa* < *oḍra desa*) [Law : *H. G. A. I.*, p.178 ; Turner : *C. D.*, no. 2549 ; 高桑 :『研究』一一、一五ページ]。

二　国の大都城　この比定には諸説がある。或いはカタック Cuttack [Cunningham]、或いは Midnapore [Fergusson]、或いはシャイプル Jajpur (ジャシプル Jajipur) [Beal]、或いは Yajapur [Watters] 等とされる。

またカタックの南十五マイルの Bhubaneswar に比定する説がある［高桑：『研究』一七ページ］。Dhauli 付近の丘上に阿育王の磨崖詔勅が現存し、この地は王がその王子を駐在させた Tosali (Ptolemy の Dosara) に比定されると言う。

三 風俗・言語 西部オリッサの住民には今もドラヴィダ族が多く、玄奘の記述に該当する［Cunningham : *A.G.I.*, p.586］。

四 烏荼の仏教 唐の徳宗の貞元十一年（七九五）、烏荼国の吉祥自在作清浄師子王は、自写の梵本『華厳経』を献じ、同十四年に般若 Prajña がこれを漢訳し四十巻とした。大乗教が栄えたことを知る。

九・二 補羅波祇釐僧伽藍 国の西南境の大きな山の中に補羅波祇釐僧伽藍(注一)がある。その石の窣堵波は霊験が非常に多い。或いは斎日になり、時に光明を輝かすことがある。それで清浄な信心をもつ人々は遠近より悉く集まり、綺麗な花の蓋を手にもち争って供養を行なう。承露盤（盤蓋或いは相輪とも言う）の下、覆鉢勢（塔の本体の土饅頭の部分）の上に花の蓋の竹の柄を置くと立つ様子は、まるで磁石が針を吸いつけるようである。この西北にある山(注二)の伽藍の中に窣堵波がある。普通のものと異なる状は前記のものと同じである。この二つの窣堵波は鬼神が建てたものである故、霊験奇跡がこのようであるのだ。

注

一 補羅波祇釐僧伽藍 補羅波祇釐 *°puo-ɕi̯ep-°puâ-°g'jie-°lji* : Skt. *puspa-giri*. 花の山の意。この大山はブバネスワル Bhubaneswar 市の西方約四マイル Khurdā にある Khandagiri に比定される。この山および次注の山には洞窟が多数ある［Cunningham : *A.G.I.*, p.587 ; *Archaeological Remains, Monum. and Museums*, p.122, 洞窟の写真は pl. XXXIV. ; 高桑：『研究』一八ページ以下］。

二 この西北にある山 これをウダヤギリ Udayagiri に比定する［前掲の書］。この両山の洞窟は、古きは前一世紀から紀元前後にわたるジャイナ教に属するものである。

九・三 折利呾羅城 国の東南境、大きな海岸に臨んで折利呾羅城（原注 唐に発行と言う）(注一)がある。周囲二十余里ある。渡海する商人や遠方からの旅客が往来し、止宿する要処である。その城は堅固に、いろいろな珍しい宝が多い。城外に次々と並び五つの伽藍がある。台閣は高く、尊像は麗しい。南の方、僧伽羅国（巻十一の一参照）を去ること二万余里であるが、静かな夜に遥か望めば、その国の仏牙窣堵波（巻十一の一・五参照）上の宝珠は光明鮮かに、明るい炬火が宙に輝くように見える。

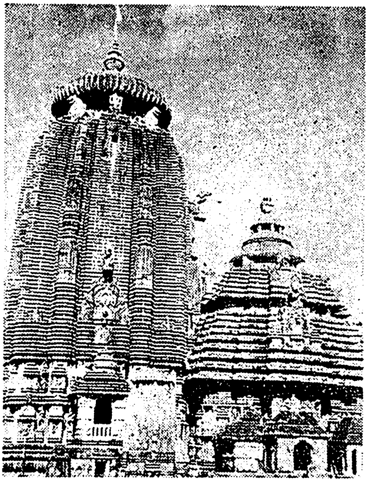
ここより西南へ大林中を行くこと千二百余里で恭御陀国（原注 東印度の境）に至る。

注

一 折利呾羅城（……） 折利呾羅 *tśi̯ät-°lji°-tât°-°lâ* : Skt. *caritra*. 出かけること、行くことの意。「発行」、出発の意に当たろう。今のプーリー Puri 市に当てる説［Cunningham : *A.G.I.*, p.584］と、今のマハナディ Mahānadi 河の沿岸、カタック市の下流十五マイルの地にある Nendra なりとする説［Waddel : *Proceedings of Asiatic Society of Bengal*, 1892, p. 185］とがある。Mahānadi の詩名を今も Chitropalā と呼ぶと言い、これに関係づける説がある［Majumdar's Note, in C.*A.G.I.*, p.733］。

一〇 恭御陀国

恭御陀国(注一)は周囲千余里ある。国の大都城(注二)は周囲二十余里ある。国





（上）　ジャイナ教石窟寺院，ウダヤギリ
（左）　リンガラージャ寺院，ブバネスワル

の際涯は海の入り込みに近く、山や丘は嶮しく聳えたっている。(注三) 土地は低湿で、農業は適時に行なっている。気候は暑熱で、風俗は勇烈である。その体格は大きく、その容貌は黒い。礼義はほぼそなわり、余り人を欺いたりはしない。文字の点では中印度に同じであるが、言語音調は非常に差がある。(注四) 外道を尊敬し、仏法を信じていない。天祠は百余ヵ所あり、異道の人たちは一万余人いる。境域の内に数十の小城があり、山嶺に接して構えたり、海岸に拠って築いている。城は堅峻で、兵も勇敢であり、隣国に雄を称え、敵する強国とてはない。国が海岸に臨んでいるので珍しい宝が多く、種々の貝や玉は貨幣として使っている。大きな青象を産出し、これに乗って遠方に出かける。

ここから西南して大荒野に入る。深林・巨木は空に聳え日を蔽うほどである。行くこと千四、五百里で羯餕（原注　力甑反→*lịng*°。）伽国（原注　南印度の境）に至る。

注

一　恭御陀国　恭御陀 *kịwong-ngịwo*°-*d'â*: Skt. *koṅgoda*. この地名は碑名にも見える［*Epigraphia Indica*, VI. 136］。今のオリッサのガンジャーム Ganjām 県に比定される［Law: *H.G.A.I.*, p.166］。設賞迦王に征服されていたが、喜増王 Harṣavardhana に征服された［『慈恩伝』四、五］。

二　国の大都城　チルカ Chilka 湖の東南端に近い今のガンジャーム市付近の Jaugaḍa に比定される［高桑・『研究』三三ページ］。

三　国の際涯は……聳えたっている　当地の地勢は東はベンガル湾に臨み、西は Eastern Ghats 山脈に迫る細長い海岸沿いの地で、丘陵が多い。「海の入り込み」（原文「海隅」）はチルカ湾を指すか。

四　文字の……差がある　文字は中インドに同じであるという玄奘の記述は、七世紀にはまだ政治・仏教がこの地方をも、同一の文化圏的な連帯関係にしていたことを意味しよう。言語音調の差の具体的説明はなく、詳細は判明しないが、現在はドラヴィダ語に属する Kui (Khand) 語を話す人たちが居住する。Telugu 語に類似する点があると言う。

南印度境

* これより「五印度」区分の南インド Dakṣiṇā-patha に入る。デカン Deccan 高原地帯である。

一一 羯𩜁伽国

一一・一 国勢の概観 羯𩜁伽（カリンガ）国(注一)は周囲五千余里ある。国の大都城(注二)は周囲二十余里ある。農業は適時に行ない、花・果は多種繁茂している。深林・藪沢（ジャングル）が連なり、数百里になるものもある。青い野象を産出し、隣国に珍しがられている。気候は暑熱で、風俗は粗暴である。性質は荒々しいが、心根は信義を重んずる。言語(注三)は軽く早口であるが、音調ははっきりして正しい。語辞・音声は中印度とはすこぶる異なっている。正法を信ずるものは少なく、外道を奉ずるものが多い。伽藍は十余ヵ所、僧徒は五百余人、大乗の上座部の教えを学習している。天祠は百余ヵ所、異道の人々が非常に多いが、多くのものは尼乾（ニルグランタ）の徒である。

注

一 羯𩜁伽国　羯𩜁伽 *kįɒt.-lįɒng°.-g'ia* : Skt. *kaliṅga*. 迦陵伽・迦陵誐・葛令葛・迦陵とも。通常は、北はマハナディ河より南はゴダヴァリ Godāvarī 河の間を指すが、ここはガンジャームより南を指す。この地帯は地理的にもそれ自体が一単位をなし、古代より独自の風習を形成していた [Law : *H.G.A.I.*, pp. 156-9 ; 当地の古代王朝については中村 :『インド古代史』下二八ページに詳しい]。

二 国の大都城　ガンジャーム地方には多くの古代羯𩜁伽首都の遺址があり、玄奘往訪時の首都についても諸説がある。ゴダヴァリ河下流の東岸にある Rājamahendri とする説 [Cunningham]、チルカ湖とゴダヴァリ河との中間の海岸にある Kaliṅgapatam なりとする説 [Fergusson]、今のガンジャーム地方の南部の Kaliṅganagara, 即ち現在の Mukhaliṅgam とする説 [Smith, Majumdar] などがあり、さらに Kaliṅgapatam の都に近い古えの Sārapalli 即ち今の Srikakulam (Chicacole) なりとする説もある [高桑 :『研究』四九ページ以降に詳細]。今は何れとも決定し難い。

三 言語　この地域は、現在は Telugu 語圏に属する。

一一・二 羯𩜁伽の盛衰 羯𩜁伽（カリンガ）国はその昔、人民多く、肩が互いに触れ車の轂（こしき）が互いにぶつかり、袂（たもと）を挙げると自（おのずか）ら帷（とばり）を成すほどであった。[ところが] 五種の神通力を具えた仙人が巌窟に住み、自然の性を養い修業していたところ、人の汚すものがあり神通力を失ってしまったので、人を詛（のろ）う咒術（まじない）で国民を惨殺してしまい、老いも若きも生き残るものもなく、賢人も愚者もみな亡くなった。人煙が跡絶えてより長年月がたち、ようやく人が移り住んできた(注一)がまだ充実はしない。それで今もこの国は人家がなお少ないのである。

城の南、遠からざる所に窣堵波がある。高さ百余尺、無憂王が建てたものである。傍に過去四仏の座所および散策の遺跡がある所がある。国境の北辺、大きな山(注二)の嶺の上に石の窣堵波がある。高さ百余尺。これは劫初（この世の初め）の時、人の寿命がなお無量寿の頃に独覚（縁覚）の人があり、ここで寂滅（じゃくめつ）に入った所である。

ここから西北に山林の中を行くこと千八百余里で、憍薩羅（コーサラ）国（原注 中印度の境）に至る。

注

一 羯𩜁伽国の盛衰　ここに「その昔」と言うのは何時の時代かは明確でない。この地方が中インドと早くから交渉をもったらしいことは、パーリ仏典（『阿含経』『本生経』類）に名が見えていることからも知られる。Pliny の『博物誌』VI. 22. によれば、前四世紀末のメガステネス Megasthenes が中インドに居たころ、カリンガ Calingae の王には六万の歩兵、千の騎兵、七百の象軍があり、その戦域の警戒監視に当たっていたという。人民も多数であったと思われる。前二六二年ごろに阿育王がこの国を征服し、十五万の捕虜、十万の戦死者、さらにその数倍の人が死

ぬのを見て仏教に帰したことは有名な話である。この時は確かに人口の減少を招いたであろうが、マウリヤ王朝の滅亡後、また独立国となり盛大となった。四世紀にはグプタ王朝の領となり、六四二年に喜増王 Harṣavardhana の討伐を受けたのである。このような概況から見て、ここに言う人口の減少を直ちに阿育王の征討による［足立：『研究』下八〇八ページ］とすることには疑問が残る。

二 国境の北辺、大きな山 Mahendragiri であろうとされる［Beal：*Records*, II. 209 (67)］。

一二 憍薩羅国

一二・一 国勢の概観 憍薩羅国(注一)は周囲六千余里ある。山岳が境域をとり巻き、林・藪(ジャングル)がひき続いている。国の大都城(注二)は周囲四十余里ある。土地は肥沃で、産物は多い。村里は互いに望み見得るほど密集し、人家は稠密している。その体格は大きく、色は黒い(注三)。風俗は猛しく、性質は勇敢である。邪教も正法も共に信仰し、学芸は盛んである。王は刹帝利(クシャトリヤ)である。仏の教えを尊敬し、仁慈の心は深く、かつ遠くに及ぶ。伽藍は百余ヵ所、僧徒は一万人足らず、みな大乗の教えを学習している。天祠は七十余ヵ所、異道の人々が雑居している。

注

一 憍薩羅国 憍薩羅 *。kiäu-sât-。lâ* : Skt. *kosala*. 通常、仏典等に憍薩羅と言うのは舎衛城、即ち本書に室羅伐悉底城を都とする室羅伐悉底国（巻六の一）のことである。ここに言う憍薩羅国を室羅伐悉底国と区別するために、『慈恩伝』四には「南憍薩羅国」Dakṣiṇa-kosala とする。中インドに属する内陸地方である。

二 国の大都城 憍薩羅国の領域の定め方の差により異説があった。古くはこの領域を古えの Vidarbha 即ち今のベラール Berār 地方なりとし、その首都をゴダヴァリ河の支流 Wardha 河の北岸にある今の Chanda (20° 00′ N., 79°30′ E.) なりとする説［Cunningham, 高桑］、これよりも東北に求め、今の Chattisgarh 地方なりとし、その首都を Wairagarh (20°30′ N., 80°10′ E.) とする説［Fergusson］があったが、近くはマハナディ河の上流、今の Bilaspur, ライプル Raipur, Sambalpur 等にわたる地域とし、その首都をライプルの北東三十七マイル、Arang より十五マイルの Sirpur とする説［Majumdar's Note, in *C.A.G.I.*, p. 735; Law : *H.G.A.I.*, p.330］がある。

三 その体格は大きく、色は黒い 言語については何も語らぬのは、中インドのことであり、もちろんインド・アーリヤ語を話す民族なるが故であろう。今は東部 Hindi 方言に属するものとして分類されている。

一二・二 引正王 城の南、遠からざる所に古い伽藍がある。傍に窣堵波がある。無憂王が建てたものである。昔、如来がここで大神通力を現わして、外道を説伏されたことがある。後に竜猛菩薩（竜樹のこと。巻八の三・三注三）がこの伽藍に止住された。当時、この国王は娑多婆訶（原注 唐に引正と言う）(注一)と号する人であったが、竜猛を尊崇してその住む廬の門を警護させていた。

注

一 娑多婆訶（……） 娑多婆訶 *。sâ-。tâ-。b'uâ-。χâ* : **sātavāha* (Skt. *sātavāhana, śātavāhana*)、『寄帰伝』四、三十二、讃詠之礼に「竜樹菩薩、詩を以て書に代え、名づけて蘇頡里離佉 suhṛd-lekha（訳して密友の書と為す）と為し、旧檀越の南方大国王の娑多婆漢那と号し、市寅得迦 Jetaka？と名づくるものに寄す」とする娑多婆漢那である。Sātavāhana の vāhana に牽引の義はあるが、「引正」の意とする所以は不明（sāta-

vāhana の語学的説明は、中村：『インド古代史』下二五に詳細）。Sata-vāhana とは案達羅 Āndhra 王朝の姓で、マウリヤ王朝衰微後にその勢力を急激に増大し、二世紀にはその領域をデカン高原全体に広げたが、二二五年に滅亡した [G. Yazdani, (ed. by) : *The Early History of the Deccan*, pp. 65 ff.; 中村：『インド古代史』下一八ページ以下および二一九ページ以下：高桑：『研究』七六ページ以下]。

一二・三 竜樹と提婆 そのころ、提婆菩薩は執師子国（僧伽羅国）よりやって来て論談することを願い、門番に、

「どうか通してお会わせください」

と言ったところ、門番は直ちに入り申し上げた。竜猛は以前から提婆の名を知っており、鉢に水を満たして弟子に、

「汝はこの水を持って行き、かの提婆に見せなさい」

と言いつけた。提婆は水を見て、黙って針を投げ入れた。弟子は鉢を手にし訝しく思いながら返った。竜猛は、

「どう言いましたか」

と尋ねると、

「黙って何も言わず、ただ針を水に投げ入れただけです」

と答えた。竜猛は、

「この人はまことに智者である。わずかな兆しを見抜くこと神のごとく、微細なことをも洞察すること聖人につぐ人である。このようにりっぱな人徳をもつ人は、どうか早速に入ってもらってください」

と言うと、

「どういうことなのでしょうか。無言の妙弁と言うことがありますが、これがそれなのでしょうか」

と言った。竜猛は、

「一体、水と言うものは器に随って四角にも円くもなり、混ぜる物に従って清くもなり濁りもする。いっぱいに満つると間隙がなくなり、澄みきると深浅を測りにくくなるものである。鉢いっぱいにして提婆に示したのは、私の学芸の智識が周密であることをなぞらえたのである。ところがかれは針を投げ入れて、その極底を窮めようとしました。これは常人ではありません。直ちにお入れしなさい」

と言った。ところで竜猛の風采は凛々しく厳かな人であって、対談する人はみなうつむいて首を垂れたものである。提婆はもとより竜猛のりっぱな声誉を聞き、長い間入門したいと願っていたのである。今や教えを受けようとするにあたり、まず機微神妙の才をほしいままにしようとしたが、やはり威厳をはばかり堂に登って隅に遠く坐り、玄奥な話を日ねもす談じ、言辞議論ともにりっぱであった。竜猛は、

「後学のあなたは実に世に冠たる方であり、その雄弁は前学たる私の目前をも照らすほどです。私は年老いてこのような俊才に遇いました。瓶から瀉ぎ移すようにそっくり寄託するならば、仏法の伝燈は絶えないでしょう。仏教の弘揚はあなたにこそ頼みましょう。どうかもっと席を進めて教義の蘊奥を語ってください」

と言った。提婆はこの言葉を聞き心に自惚れを生じ、まさに蓄積せる教義を開陳せんとするに当たりまず弁論を思いのままにしようとし、言葉の糸口を準備し竜猛の質問を仰ぎ覗った。すると忽ち威厳ある顔を目にし、言うべき言葉も忘れ口を閉ざしてしまった。座を退き詫びを言って、教えを受けるよう願った。竜猛は、

「座にお返りなさい。今あなたに至妙の真理、仏の真実の教えを伝えましょう」

と言った。提婆は五体投地の礼をし、心より帰依し、

「これより以後は謹んでお言いつけを承ります」

と言った。

一二・四　竜樹の死没　竜猛菩薩は薬学に甚だ詳しく、妙薬を服して生を養っていた。年寿数百歳であったが、気力容貌ともに衰えなかった。引正王も妙薬をかれから得ていたので、その年寿も数百であった。王には年若き子供があり、その子が母に、

「私は何時になったら王位を嗣ぐことができるのでしょうか」

と言ったので、母は、

「今の状況から見ますならば、まだ何時とも言えません。父王の年寿はすでに数百歳で、子孫の年老い死没するものもたくさんおります。この長寿は全く竜猛の福力の加護によるものであり、薬術のお蔭です。菩薩が亡くなれば、王も必ず崩御されるでしょう。竜猛菩薩と言う方は智恵は弘くかつ遠く、慈悲も深く厚い方で、衆生に周く供給し自分の身命さえも意としない方です。汝はそこへ行って、試みに菩薩の頭をいただきたいとお願いしてみなさい。もしこの希望が遂げられるなら、きっと王となりたいと言う願いは果たせましょう」

と答えた。王子は謹んで母の言葉を承り、竜猛のいる伽藍に出かけた。門番が恐懼しとがめなかったので入ることができた。折しも竜猛菩薩はまさに仏の徳を讃誦し散策していたが、ふと王子を目にし、立ち止まり、

「今夕は何の御用があって僧坊に御来臨になったのですか。危険が身に迫っているかのように、何かに恐れているかのように走って来られましたのは」

と尋ねると、王子は、

「私は母上のあれこれのお話を承っておりましたところ、話が喜捨の人に及びました。私は、人間は命を大事にするものであり、経典の文句にもまた世の格言にも、修行の功徳を具えたその身を軽々しく喜捨し、望んでいる人々に施すなどということはないと考えておりましたが、私の母は、

『そうではありません。十方の仏や三世の如来等の諸仏は、その昔発心して悟りを得るに至ると、仏の道に励み忍耐を修行されました。或いは身を投じて飢えた獣に食べさせ、或いは我が身を割いて鴿を救ったりされましたし、月光王は婆羅門に自らの頭を布施され（巻三の三・四参照）、慈力王は飢えた薬叉に自らの血を飲ませられました（巻三の一・二参照）。このような方々は一いち列挙し難いほどです。この例を先覚の方々の中に求めるならば、どんな時代にもその人なしとはいたしません』

と言われました。今、竜猛菩薩は諸仏と同じくりっぱな志をお持ちです。実は私は願う所あり、人の頭を求めております。募集すること数年になりますが、まだ喜捨するものがありません。乱暴を働き人を殺害するならば、罪過は最も重いでしょうし、罪なき人を虐殺するならば、徳を汚すこと明瞭です。菩薩は仏道を修行し、遠く仏果を期しておられ、人々に慈悲を垂れその恩恵は限りなく、身を軽んずること浮き雲の如く、身を賤しむこと朽ち木の如くされておられます。もし本願に相違がなければ、お願いしています所をお聞き入れください」

と言うと、竜猛は、

「よろしい。あなたの言われるとおりです。私は仏の聖果を求めております。私は仏の布施を学んでおります。この身は響きのようなものです。この身は泡のようなものです（無常を言う）。四生（巻三の六・四注一〇参照）を流転し、六趣（巻九の二・六注三参照）を往来しております（常住せざるを言う）。前世よりの大きな願いは生きとし生けるものの希望

に違わないと言うことでした。とは言いますものの、王子に一つの困ったことがあります。それをどうしたものでしょうか。それは我が身がもし命終いたしますならば、あなたの父王もまた亡くなられますことです。これを思いますと心がかりです。誰が父王を救い得ようか」

と言った。竜猛はあたりを徘徊し自らの命を絶つ所を探し求め、乾いた茅の葉で自らその頸を切ったところ、鋭利な剣で切ったように体と首とは処を異にしてしまった。王子はこれを目にすると驚いて走り去った。門番は上奏して詳しく一部始終を申し上げたところ、王は悲哀を感じ、はたして王も命を亡くしてしまった。

一二・五　黒蜂山　国の西南へ三百余里で跋邏末羅耆釐山（原注　唐に黒蜂と言う[注一]）に至る。高く聳え、峯や巌石は嶮峻であり、崖や谷がないので、さながら全部石でできているようである。引正王は竜猛菩薩のためにこの山を掘って伽藍を建立した。山を去る十数里にわたり大きな通路を掘開し、その山の下で上向けに掘り石を削った。その内部は長廊・歩廊・高台・重閣になっている。閣は五層で、各層に四院がある。みな精舎を建て、それぞれ金像を鋳て安置する。大きさは仏の身体と等量で、彫刻の妙を窮めている。その他の荘厳はただ金銀宝珠のみで飾っている。山の高い峯から水を引き泉とし、重閣の間を巡り流れ廊下や建物の周囲を繞っている。僧房には外へ窓穴をあけ、光線を部屋の中へ引いている。初め引正王がこの伽藍を建てるにあたり、人々は疲弊し国庫は空になってしまい、作業なお半ばに至らざるに心中甚だ憂慮した。竜猛は、

「大王は何故そんなに悩んでおられるのですか」

と尋ねると、王は、

「大きな覚悟をして無上の福徳を樹立し、遠い将来に期し慈氏菩薩の出世までもと考えましたが、功のいまだ竣成せざるうちに費用がもう尽きてしまいました。常々これを残念に思い、坐して夜の明けるのを待つばかりです」

と答えた。竜猛は、

「御心配あるな。無上の福徳・最勝の善事はその利益窮まらざるものがあります。大きな心願を興されたならば、完成しないことを心配なさいますな。本日御殿に御帰還になれば十分歓楽をお尽くしください。明朝御殿を出られたなら山野を遊覧された上で、ここにお着きになってから建造作業のことを御相談いたしましょう」

と言った。王は教えを受けたので、その言葉に従って行動した。竜猛菩薩は不思議な薬を大きな石にたらし、みな金に変えてしまった。王は出遊してこの金を目にし、心にも口でも喜びを表わし、乗り物を廻して竜猛の所に行き、

「今日出遊しましたところ、鬼神にまどわされたのか、山林の中にちょうど金が集まっているのを目にしました」

と言うと、竜猛は、

「鬼神にまどわされたのではありません。王の至誠に感ずる所あり、この金を得たのです。すぐさま使用してりっぱなお仕事を成就なさいますように」

と答えた。王は言葉のまま建造を行なったが、作業が竣功してもなお剰余があった。そこで五層の中の各室に四つの大きな金像を鋳造し、なお蓄えに余りがあったのでこれを維持の諸費用に当て、千人の僧を招き、この中で仏徳を礼讃させた。竜猛菩薩は釈迦仏が宣べられた教法、および諸菩薩が述べられた論書をよせ集め分類してその中に収蔵した。こういう訳で、最上階の第一層はただ仏像と諸経論を安置する

だけで、最下の第五層は在俗の浄人や資産什物を入れた。中間の三層には僧徒を住まわした。先達の話によると次のようである。引正王の建造作業が完了して、職人たちが食べた塩の値段を計算すると九拘胝（原注　拘胝は唐に億と言う）（本巻の一・三参照）の金銭を費消したことになる。その後に僧徒たちが争いを起こし、王に判定をしてもらった。その時、浄人たちはこもごも、

「僧徒に争いが起こるのは、言っていることに矛盾があるからだ」

と言いあった。悪人が隙を伺い伽藍を破壊しようとした。そこで重閣に防いで僧徒を退けた。これより以後は二度と僧衆の居るものはなくなった。遠くより山の巌石を眺めても、入って行く道も分からなかった。時おり、医方をよくするものを引き入れて病気を治療させたが、顔を覆って出入りさせたので、その通路も分からなかった、と言うことである。

この大きな林の中を南へ行くこと[注二]九百余里で案達羅国（原注　南印度の境）に至る。

注

一　跋邏末羅耆釐山（……）　跋邏末羅耆釐 b'uât。-lâ°-muât。-。lâ-。g'jï-。ljï: Skt. bhrāmara-giri. bhrāmara は「大きな黒い蜂」の意（bhrāmara は「蜜蜂」の意）。この山と伽藍については『法顕伝』に「此（拘睒弥 Kausambi, 巻五の五参照）より南行すること二百由延、国有り達嚫 Dakṣina と名づく。是れ過去迦葉仏の僧伽藍なり。大石山を穿ち之を作る。凡そ五重有り。最下重は象形を作り五百間の石室有り。第二層は師子形を作り四百間有り。第三層は馬形を作り三百間有り。第四層は牛形を作り二百間有り。第五層は鴿形を作り百間有り。最上に泉有り、水石室の前に循い房を繞りて流る。周囲回曲、是の如くして乃ち下重に至り、房に順いて流れ、戸より出づ。諸僧室中、処処に石を穿ち窓牖を作り明を通じ、室中朗然として都て幽闇なし。其の室の四角の頭には、石を穿って梯して蹬上する処を作る。今人は形小にして、梯に縁りて正に至るを得るも、昔人は一脚の躡む処たるのみ。此の寺を名づけて波羅越 Parvata（山の意）と為す。波羅越とは天竺には鴿（鳩は pārāvata. 混同したものか）を名づくるなり。其の寺中、常に羅漢の住む有り。此の土は丘荒にして、人民の居る無く、山を去る極めて遠方に村有り。皆是れ邪見にして仏法・沙門・婆羅門及び諸異学あるを識らず。彼の国の人民、常に人の飛び来たりて此の寺に入るを見る。時に諸国の道人の来たりて此の寺に礼せんと欲する者あれば、彼の村人は則ち、汝は何を以て飛ばざるや、我此の間の道人の皆飛ぶを見る、と言う。道人は方便して答えて、翅未だ成らざるのみ、と言う。達嚫国は幽嶮にして、道路は艱難、処を知り難し。往かんと欲する者は、要ず当に銭貨を齎して彼の国王に施すべし。王は然る後に人を遣わして送り、展転相付して其の逕路を示す。法顕は竟に往くを得ず、彼の土人の言を承けて、故に之を説くのみ」と詳細である。ここに見える寺名の波羅越 Parvata とは、西蔵伝に出る吉祥山 Śri-parvata［寺本婉雅訳：『印度仏教史』一二二ページ］のことであり、この寺名はまた Nāgārjunakoṇḍa（Nāgārjuna の丘の意）出土の碑名にも見える［高田：「印度仏教美術研究の成果」『仏教芸術』六所収：S. Dutt: *Buddhist Monks and Monasteries of India*, pp. 126 ff.］。Nāgārjunakoṇḍa は Kistna 河中流の右岸に位置する塔院の廃址である。玄奘の言う跋邏末羅耆釐山（黒蜂山）は法顕の波羅越寺であり、これは Nāgārjunakoṇḍa であろうとする説が出されている。現在もこの地方では、この山を Telugu 語で Malla-malai（黒い山の意）と呼んでいる。その廃址は近年ダム Nāgārjunakoṇḍa Sagar Dam 築造のため水没し、山の頂上が島となり、そこに一九四九年考古学博物館が作られた。

南へ行くこと『慈恩伝』四には「東南」に作る。憍薩羅国の中心部（首都）からするならば「東南」が正しかろう。

一三　案達羅国

一三・一　国勢の概観　案達羅(アーンドゥラ)国(注一)は周囲三千余里ある。国の大都城は周囲二十余里あり、瓶耆羅(ヴェーンギー)(注二)と号している。土地は肥沃で、農業は盛んである。気候は暑熱で、風俗は乱暴である。言語・語調は中印度と異なっているが、文字の点はその法則おおむね同じである。(注三) 伽藍は二十余ヵ所、僧徒は三千余人。(注四) 天祠は三十余ヵ所、異道の人々は非常に多い。

注

一　案達羅国　案達羅 *ʼȧn°-dʼȧt°-°lȧ*: Skt. *āndhra*. 現在はハイデラバード Hyderabad を中心とする地方をアンドラ Andhra と呼ぶが、古くはゴダヴァリ河とクリシュナ Krishna 河の間を指す。主としてドラヴィダ人が住む。案達羅国とその王朝については、高桑:『研究』一一三ページ以下;中村:『インド古代史』下一八ページ以下に詳しい。

二　瓶耆羅　瓶耆羅 *°bʼieng-°gʼji-°lȧ*: *vengira (Skt. *vengi*, *veigipura*, Telugu *veigiura*). 今のエロール Ellore (エルール Eluru) の西北六マイルにある Pedda (greater) vegi, Cinna (lesser) vegi 両村の付近に当たる。北は Mahendra 山、南は Manneru 山に挟まれる地域である [Cunningham: *A.G.I.*, p. 737; Law: *H.G.A.I.*, p. 200. 高桑:『研究』一四三ページ以下]。

三　言語・文字　今はドラヴィダ語系の Telugu 語に属し、南方インド系の古代カナラ文字 (Hala-kannara) とほとんど同じものを使用している。玄奘の記事は、七世紀においてはなお当地も中インドと文化的共通圏にあり、仏教文化の勢力が絶滅していない姿を指すものと言える。

四　案達羅国の仏教　メガステネス [Pliny:『博物誌』VI. 21-23.] によれば、当地は古く摩竭陀(マガダ)国に次ぐ強国であった如く、阿育王も重視し、大天 Mahādeva を布教に派した地である。大衆部が盛んに行なわれ、竜樹以後大乗が普及した。

一三・二　所行羅漢の伽藍　瓶耆羅(ヴェーンギー)城の側、遠からざる所に大きな伽藍がある。幾重もの閣、何層もの台はその製作、彫刻の妙を窮め、仏像の顔容、美わしさ人工の致を極めている。伽藍の前に石の窣堵波の高さ百尺のものがある。共に阿折羅(アーチャーラ)(原注　唐に所行と言う) 阿羅漢(注一)が建てたものである。

所行羅漢伽藍の西南、遠からざる所に窣堵波がある。無憂王が建てたものである。如来が昔ここで説法をし、大神通を現じ無量の衆生を済度された。(注二)

注

一　阿折羅 (……) 阿羅漢　阿折羅 *°ʼȧ-tśįät°-°lȧ*: Skt. *ācāra*. 所行・威儀と訳し、行為・慣習・作法の意。巻十一の三・三にアジャンター窟寺創始者の名として同一名が見えるが、同一人なりや否やについては不明である。

二　如来の遺跡　これはもちろん後世の付会であり、釈尊はこの地方に来遊した事実はない。

一三・三　陳那と因明　所行羅漢伽藍より西南へ、行くこと二十余里で離れ山に至る。山の嶺に石の窣堵波がある。陳那(ディンナ)(原注　唐に授と言う) 菩薩(注一)がここで因明(いんみょう)論を作られた。陳那菩薩は仏が世を去られた後に、その徳風を承け衣を染めた人である。大悲の弘願は広大に

智恵の力は堅固で、世の人々の依るべきものなきを愍れみ、仏の教えを弘めようと考えた。因明の論は言辞深く義理広く、学者は努力しても理解しにくいことを考え、そこで深山幽谷に隠れ禅定に入り、因明についての著述の利害得失を考え、文章義理の繁簡を審究した。その時、崖や谷は大音響を起こして山の様子が一変し、山神が菩薩を捧げ上げること数百尺、次のように言った。

「昔、仏世尊は方便を以て他を教導されましたが、慈悲心をもって因明論を説き、深妙の論理を総括し、微妙の言辞を深く究められました。如来が亡くなられてより因明の義理は中絶して分からなくなりました。今、陳那菩薩はその福徳智恵広大で、深く仏の教義に達しておられます。因明の論は再びこの日より弘まることでしょう」

と。菩薩は大きく光明を放ち、世の幽闇を照らされた。この国の王は深く尊敬の念を生じていたが、この光明の様子を見て菩薩が金剛定（金剛三昧）に入られたのではないかと思い、そこで菩薩に無生果（生死の輪廻より解脱する羅漢の位）を得られるようにとお願いした。陳那は、

「私が禅定に入り観察しておりますのは、甚深の聖教を解釈したいからです。心に真実の悟りを得ようと期しており、[小乗の極果の阿羅漢の]無生果を得ようと願ってではありません」

と言うと、王は、

「無生の果は聖者たちも尊敬されるもので、三界の欲を断ち切り三明智（巻二の四・(六)参照）に通達することは、これはまことにりっぱなことであります。どうか早くお悟りになりますよう」

と言った。陳那はその時、心に王の願いを心よく思い、無学の聖果（阿羅漢果のこと）を悟ろうと思った。この時、妙吉祥（文殊のこと）菩薩は陳那の気持ちを知り、惜しく感じ、注意を促そうと思い弾指して悟らせ、

「惜しいことです。どうして広大の心を捨てて狭小な心になられ、我が身一人よかれとする気持ちになり、利他の願いを棄てられるのですか。大利をなそうと思うならば、慈氏菩薩が作られた『瑜伽師地論』(注二)を広く世に伝えるべきです。後学を誘掖してその利は甚大です」

と忠告した。陳那菩薩はその指教を受け入れ、それを奉じて行動した。そこで深く研究して因明論を広めた。それでもやはり学者が因明論の文章微妙にして言辞簡約なるに困難するであろうと心配して、『因門論』(注三)を作製して後進の学者を指導した。それから以後は『瑜伽[師地論]』を大いに弘めた。そのりっぱな門人に、今の世にも知られている人がある。

ここから林や野原の中を、南へ行くこと千余里で駄那羯磔迦国（原注　亦、大案達邏国とも謂う。南印度の境なり）に至る。

注

一　陳那（……）菩薩　陳那 *d'ien-nâ* : Pa. *dinna*, Pkt. *dinna*, Skt. *datta* [Turner : *C.D.*, no. 6140]. 訳して「授」（与えられたるの意）。南宋・従義撰『法華三大部補注』に摩訶陳那伽とあるは Diṅnāga (Skt. *dig-nāga*) を表わし、*dig*（域）, *nāga*（竜）の意から、域竜・大域竜と訳す。因明学（巻二の一・七参照）の大論師で、竜樹・無著・世親の古因明に対し、新因明学の祖とされる。また文筆の才にも富み、戯曲 Kunda-*mālā* は師の創作と言う。五世紀の末から六世紀の前半にかけての人である［宇井伯寿『陳那著作の研究』］。

二　『瑜伽師地論』　梵名 Yogācāra-bhūmi. 弥勒菩薩造・唐・玄奘訳。百巻。瑜伽論とも略称。瑜伽観行者の諸問題を詳説した基本的論書で、唯識中道の理に悟入すべきことを説く（巻五の二・(四)注三参照）。

三　『因門論』　詳かには『因明正理門論』一巻。玄奘訳。古因明が帰納的傾向のものであるのに、演繹的な新風を導入し、因明の論理的意義に大きな改革を与えたものとして高く評価されている。

一四　駄那羯磔迦国

一四・一　国勢の概観　駄那羯磔迦国(注一)は周囲六千余里ある。国の大都城(注二)は周囲四十余里ある。土地は肥沃で、農業は盛大である。荒野は多く、村落は少ない。気候は暑熱で、人の肌は黄黒い。性質は烈しく、学芸を好む。伽藍は軒を並べて立っているが、荒れかたが甚だしい。今なおちゃんとしているものは二十余ヵ所、僧徒は千余人。多くのものは大衆部の教えを学習している。(注三)天祠は百余ヵ所、異道の人々は非常に多い。

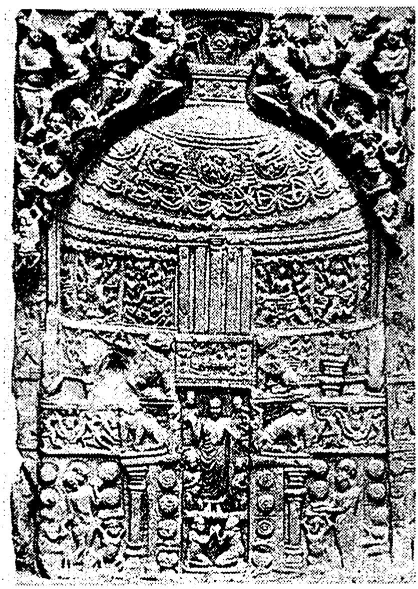
注

一　駄那羯磔迦国　駄那羯磔迦　*d'â°-ₒnâ-kịɒt.ₒ-îɒk.ₒ-ₒka : *dhānakaṭaka* (Skt. *dhānya-kaṭaka*. 穀物の町の意). アマラーヴァティー Amarāvati 出土のパーリ語碑銘には *dhaññakaṭaka*, Nāsik 出土のプラークリット語碑銘には *dhanakaṭaka* とある [Yazdani : *Early History of the Deccan*, p.56]。前項末原注の「大案達邏国」とは、瓶耆羅を国都とする案達羅国（本巻の一三）と区別するための名であろう。クリシュナ河の河口に近い沿岸にあった国。

二　国の大都城　この国都を、クリシュナ河南岸のアマラーヴァティー大塔の西一マイルにある Dhāraṇikoṭṭa の付近とする説 [Cunningham] と、北岸の Bezwada (Vijaya-wada) とする説 [Fergusson, Burgess, Sewell] とがある。今は次項以下に見える諸遺跡との関係位置より Dhāraṇikoṭṭa の付近の説をとる [Majumdar's Note, in *C.A.G.I.*, p.737 ; 高桑 :『研究』一五ページ以下]。この町は二世紀の Ptolemy によれば、Maisōlia の首都 Pityndra として知られていた [McCrindle : *Ptolemy's Ancient India*, Majumdar's Ed., p.187]。

三　駄那羯磔迦国の仏教　当地は以下に見る如く、阿育王の時に大天が布教してより以来、自由思想の大衆部が普及して、自然やがて大乗思想となる傾向のものであった。玄奘のこの国における行動を『慈恩伝』四には、「法師其の国に在って二僧に逢う。一は蘇部底 Subhūti と名づけ、二は蘇利耶 Sūrya と名づく。善く大衆部の三蔵を解す。法師、因って就いて停まること数月、大衆部の『根本阿毗達摩』等の論を学ぶ。彼も亦、法師に依って大乗の諸論を学び、遂に志を結び同行して聖迹を迎礼したり」と述べる。

一四・二　東山寺と西山寺　城の東には山に拠って弗婆勢羅（原注　唐に東山と言う）僧伽藍(注一)がある。城の西には山に拠り阿伐羅勢羅（原注　唐に西山と言う）僧伽藍(注二)がある。この国の先王が仏のために「寺を（明本）」建てたものである。川を奠り（明本は「鑿つ」とする）道を通じ、崖を削って閣を高く作っている。長廊・回廊は巌石を枕の



ストゥーパをあらわした浮彫パネル
アマラーヴァティー出土

ように嶺にとどくほど高い。山神が守護する霊山で、聖人賢士が憩う所である。仏が寂滅されてより千年の間は年毎に千人の凡夫僧（大衆部の僧）が共に安居に入り、安居を解く日にはみな羅漢果を證し、神通力で虚空を凌ぎ歩み立ち去った。千年より以後は凡僧と［上座部の］聖僧が同居していた。ここ百余年は僧侶の居るものもなく、それに山神も姿を変え或いは豺狼となり、或いは猿猴となって通行する人を驚かしたり恐れさしたりしている。そういう訳で荒れはて、ひっそりとして僧徒もいない。

注

一　弗婆勢羅（……）僧伽藍　弗婆勢羅 *pʻiuət.-.bʻuâ-śjäi°.la* : Skt. *pūrva-śaila*. 東山と訳す。アマラーヴァティー の西南にある有名な大塔の所在地に比定される。ただし、本書にも『慈恩伝』にもこの大塔について何も述べぬのは不審である。このため種々の苦しい説明がされている［高桑：『研究』一六四ページ］。

二　阿伐羅勢羅（……）僧伽藍　阿伐羅勢羅 *·â-bʻiwɐt.-.lâ-śjäi°.la* : Skt. *avara-śaila*. 西山の意。アマラーヴァティー西方一マイルの Dhāraṇikoṭṭa に比定される。この東西両寺院の中間に首都の位置を考える［高桑：『研究』一六五ページ］。

一四・三　清辯の旧跡　城の南、遠からざる所に大きな山がある。婆毗吠迦（原注　唐に清辯と言う）論師が阿素洛宮[注一]（阿修羅の住所、洞窟のこと。巻九の二・三参照）に止まり、慈氏菩薩が成仏されるのを待ち望んでいる処である。論師は度量大きく徳の深遠な方で、外見には僧佉（巻八の四・三参照）派の法服を身につけていたが、内心には竜猛（竜樹）の学問を受けて弘めていた。摩掲陀国の護法菩薩（本巻の一六・三参照）は仏法を弘め、学徒が数千人いるということを耳にし、談議したく思って杖をつき出かけた。波吒釐城（巻八の二・一参照）につくと護法菩薩は菩提樹の所にいることを知った。そこで論師は門人に、

「汝は菩提樹の護法菩薩の所に行き、

『菩薩は仏の遺教を弘め迷える人々を導いておられます。私はあなたの徳を心より尊敬すること、すでに久しいものがあります。しかし、かねての願いを果たすこともなく、今日までお目にかかる機会もありませんでした。菩提樹は空しくは見まい、見たならば必ず證果を得て天人師となろう、と誓っております』

と、私の言葉どおりに言いなさい」

と言いつけた。護法菩薩はその使に、

「人世は幻の如く、身命は浮かべるが如く無常である。日ねもす努力しており、談議する暇はありません」

と答えた。使が往復を重ねたが、ついに会えなかった。論師は本国に帰り静かに考え、

「慈氏が成仏しない限り誰に私の疑問が解決してもらえるだろうか」

と思い、観自在菩薩の像の前で『随心陀羅尼』[注二]を唱え、穀物を絶ち水を飲み三年が経った。やっと観自在菩薩は無比の色の身を現わして、論師に、

「何を願っているのか」

と尋ねられた。論師は、

「この身を世に残して、慈氏にお会いしたいと願っているのです」

と答えると、観自在菩薩は、

「人の命はもろく、世間は幻の如くはかないものである。あなたはりっぱな善行を修めて、覩史多天（弥勒常住の所、巻三の一・一六参照）に生まれることを願いなさい。そこでお会いするほうが、この世で出世をお待ちするよりきっと速いです」

と答えられた。論師は、

「私の志は動かし難く、私の心は変えられません」

と言うと、菩薩は、

「それならば、駄那羯磔迦国へ行きなさい。城南にある山の執金剛神(巻三の一・三参照)の所で、心をこめて『執金剛陀羅尼』(注三)を唱えたならば、必ずこの願いが遂げられよう」

と言われた。論師はそこで行って唱えた。三年の後に執金剛神が初めて、

「どういう願いごとがあって、このように努力するのか」

と尋ねると、論師は、

「我が身をこの世に留めて、慈氏の出世を待ち望みたいと願っておりましたところ、観自在菩薩がここへ来てお頼みするようにと教えられました。私の願いをかなえてくださいます方はあなたでしたか」

と言った。そこで執金剛神は秘法を授けて、

「この巌石の中に阿素洛宮があります。法のとおりに願を行なえば、石壁は開けるでしょう。開いたならば直ちに中に入り、[慈氏菩薩の出世を]待ちなさい」

と言うと、論師は、

「幽居して見ることがないのに、どうして[弥勒]仏が出世されることが分かりますか」

と尋ねると、執金剛は、

「慈氏が出世されたら、私が知らせましょう」

と言った。論師は指図を受けて懸命に秘法を誦持して、また三年経ったが、初めとは何の変わった考えもなかった。芥子に呪文をかけて(注四)石の巌壁を撃つと、豁然として大きく壁が開いた。この時、百千万の衆は見とれて返るのを忘れていた。論師は石室の戸を跨いで、人々に、

「私は久しく祈念して慈氏を待ち望みたく思っていました。神霊の加護により、この大願はここに遂げられることになりました。ここへ入り共々に仏の出世を見たてまつりましょう」

と言った。聞いた人々は恐れおののき、戸を履み入るものもなく、毒蛇の石窟であり恐らく身命をなくすだろうと言った。再三入るようにすすめると、ただ六人だけがついて入った。論師は人々を振り返り挨拶し、落ちついた態度で入った。入るや石壁は元の如く閉じた。人人はみな残念がり、前言が誤りであったと後悔した。

ここから西南へ行くこと千余里で珠利耶国(原注 南印度の境)に至る。

注

一 婆毘吠迦(……)論師 婆毘吠迦 *b'uâ-b'ji-b'iwei-ka* : Skt. *bhāviveka.* 清辯・明辯・分別明と訳す。ターラナータの『印度仏教史』[寺本訳、二〇五ページ]によれば、南インドの王族の出で、中インドで大乗の諸経典と竜樹の論議を聴き、再び南インドに至り教法を宣説し、『中論』の釈を造り、一千の門人を有したと言う。漢訳蔵経中に『大乗掌珍論』二巻、『般若燈論釈』十五巻を伝える。六世紀の出世である。

二 『随心陀羅尼』 梵名 Mahākāruṇikacitta-dhāraṇī. 千手千眼観世音大悲心陀羅尼が具名。

三 『執金剛陀羅尼』 文字どおりには Vajra-pāṇi-dhāraṇī であるが、漢訳中に存する『金剛場陀羅尼経』 Vajramantra-dhāraṇī のことか。

四 芥子に呪文をかけ 芥子は密教において諸難辟除のためによく使用される。唐・不空訳『金剛頂経義訣』によれば、竜猛は白芥子七粒をもって南天竺の鉄塔(これをアマラーヴァティーの大塔に比定している)を打ち、その門を開いたと言う。

一五　珠利耶国

一五・一　国勢の概観　珠利耶国（注一）は周囲二千四、五百里ある。国の大都城（注二）は周囲十余里ある。原野は広々と、薮や沢が多く、荒れはてている。住民は少なく、群れなす盗賊は横行している。気候は暑熱で、風俗は悪質である。人の性質は烈しく、外道を信仰している。伽藍は損壊しているが、やや僧徒がいる。天祠は数十ヵ所、多くは露形外道（尼乾）である。

注
一　珠利耶国　珠利耶 *。tśịu-lji̯ˢ°-。ia* : **culya* (Skt. *coḍa, coḷa, cola, choḷa*; Tamil. *śōḷa*). Coḷa, Śoḷa, Śora の名の起こりは分からないが、Ptolemy の地理書にも Sora の王国は Arkatos に支配されていると出ている [McCrindle : *Ancient India as described by Ptolemy*, Majumdar Ed., pp. 64-5, 185-6]。阿育王磨崖詔勅の第二・十三の両章にも Coḍa 種族の名を出す。いわゆる Coḷa 国 (Śoramaṇḍalam) は今の Pennel 河より Vellar 河に至る海岸地方で、その首都は南方の Uraiyūr (Skt. *uraga-pura*) であったが、玄奘当時は南方の Pallava 王朝に属したように、現在のネロール Nellore を中心とする Pennel 河の地域のようである [Law : *H.G.A.I.*, p.148；高桑：『研究』一八六ページ以下]。
二　国の大都城　諸種の異説があるが、今のネロールと考えるのが最も妥当であろう [前注の書参考]。

一五・二　提婆の旧跡　城の東南、遠からざる所に窣堵波がある。無憂王が建てたものである。如来がその昔、かつてここで大神通力を現わし甚深の妙法を説き、外道を説伏し天人たちを度された。

城の西、遠からざる所に古い伽藍がある。提婆菩薩（巻五の四・三、本巻の一一・三参照）が羅漢と論議された処である。初め提婆菩薩はこの伽藍に嗢呾羅（原注　唐に上と言う）阿羅漢（注一）が、六神通を得て八解脱を具しておられる（巻二の四・六参照）ということを聞いたので、遠くからやって来てその人となりを見ようとした。伽藍に着くと、羅漢の宿舎に身を投じた。羅漢は欲少なく足ることを知る人であり、ただ寝台一つが置いてあるだけであり、提婆が来ても坐る所もなかった。そこで落ち葉を集め、そこへ坐るように指図した。羅漢は禅定に入り、夜分になってやっと禅定から出た。提婆はそこで疑問を述べて解決を頼んだ。羅漢は質問に応じて解釈をし、提婆は羅漢の声に続けて質問を重ねた。第七の質問がすむと、口を閉ざして返事をせず、そっと神通力をもって覩史多天（三十三天。慈氏常住の所）に昇り、慈氏にお尋ねした。慈氏はその説明をし、それに因んで、

「あの提婆という人は、劫初より修行している方で、この現在賢劫中に仏の位を嗣がれる方です。汝の力にかなう方ではないから、深く尊敬すべきです」

と教えられた。弾指するほどのほんの僅かの間にもとの座に戻り、復もや仏の妙義を発揚し、微言を分析した。提婆は、

「これは慈氏菩薩の聖智による解釈でしょう。あなたが研究されたことではありますまい」

と問うと、羅漢は、

「そうです。実は如来のお考えです」

と答えた。ここにおいて羅漢は席を下がって詫びを言い、心より感嘆した。

ここから南して林野中に入り、行くこと千五、六百里で達羅毗茶国(原注 南印度の境)に至る。

注

一 嗢呾羅(……)阿羅漢 嗢呾羅 *'uat˳-tât˳-˳lâ* : Skt. *uttara*. 上・勝と訳し、優多羅・欝多羅とも。ただし、この『西域記』に伝える人物については他書に未見。

一六 達羅毗茶国

一六・一 国勢の概観 達羅毗茶国(注一)は周囲六千余里ある。国の大都城は建志補羅(注二)と号し、周囲三十余里ある。土地は肥沃で、農業は盛大である。花・果は多く、珠宝を産出する。気候は暑熱で、風俗は勇猛である。深く信義を重んじ、博識を尊敬する。そして言語・文字は、やや中印度に異なる。(注三) 伽藍は百余ヵ所、僧徒は一万余人、みな上座部の教えを学習している。天祠は八十余ヵ所、露形外道が多い。如来が在世中しばしばこの国に遊説されて法を説き、人々を度せられた。それで無憂王は諸方の聖跡に、みな窣堵波を建てた。(注四)

注

一 達羅毗茶国 達羅毗茶 *d'ât˳-˳lâ-˳b'ji-˳d'a* : Skt. *dravida*. 達羅鼻荼・達羅比吒とも。ドラヴィダ Dravida という語は、民族名にも言語名にも使われる。言語名としては南インドに広がる大語族の総称で、これには Tamil, Kanarese, Telugu, Malayālam, さらに Tuļu, Kodaga 等の語も含む。民族名としては古く五世紀の *Mahāvaṁsa*(『大史』)には Dāmiḷa となっているが、これから Tamil という語が出たとされ、また Dramiḍa という語も見える。一世紀ごろの『エリュトゥラー海案内記』[村川堅太郎訳本、二二三ページ]には Dymirikē (Damirikē 即ち「Tamil 族の国」の意)として現われる。狭義には今のマドラス Madras 市の西南一帯の地を指す。

二 建志補羅 建志補羅 *kiɒn°-tśi°-°puo-˳lâ* : Skt. *kāñci-pura* (<Drav. *kachchippeḍu, kāñcipeḍu*).『慈恩伝』四に「建志城は即ち印度南海の口にして、僧伽羅国に向かわば水路三日行にして到る」とある。今の Palar 河に面する Conjeeveram と言う。古くより大市として知られていた [Majumdar's Note, in *C.A.G.I.*, p. 739 ; Law : *H.G.A.I.*, p. 148. 161 ; 高桑 :『研究』二四〇ページ]。

三 言語・文字 現在の言語は Tamil 語である。玄奘の時代の土着民は恐らくこの系統のドラヴィダ族であろうが、「やや中印度に異なる」とするのは、当時における中インドとの政治・文化の交流を物語ろう。

四 如来が……建てた 釈尊はもちろんこの地方に来てはいない。阿育王塔も現在は見られない。

一六・二 護法の出家 建志補羅城は達磨波羅(原注 唐に護法と言う)菩薩(注一)の生誕された城である。菩薩はこの国の大臣の長男である。幼年にしてすでに器量あり、長じては度量大であった。二十歳になるや、王姫が降下し嫁となることになった。その婚礼の夕べ心欝々として楽しまず、仏像の前で一心に祈願した。(注二) 至誠の感ずる所か、神が菩薩を背に負うて遠くへ逃れた。ここから数百里も行き山中の伽藍につき、仏堂の中に坐らせた。僧が戸を開いたところこの少年がいるのを目にし、泥棒ではないかと思い何度も詰問した。菩薩は詳細にありようを述べて、出家させてもらうよう頼んだ。人々はみな驚いたが、その意向を聴き入れた。王は命を下して遠近にその身許を尋ねさせた。そこではじめて菩薩が神に負われて世塵を避けたことを知った。王は

このことを知るや、一層畏敬の念を深めた。菩薩は出家以後、学業に精励した。そのりっぱな評判や教化についての話はすでに前に記した。(注三)

注

一　達磨波羅（……）菩薩　達磨波羅 *d'ât˳-˳muâ-˳puâ-˳la*: Skt. *dharma-pāla.* 護法・法護と訳す。巻九の三・五注一参照。

二　その婚礼の……祈願した　『慈恩伝』四に「菩薩久しく離欲を修して心に愛染なく、将に成らんとするの夕べ特に愛煩を起こす」とある。

三　そのりっぱな……前に記した　巻五の五・六、巻八の四・四、巻九の三・五、本巻の一四・三等に見える。『慈恩伝』四には「爾の（出家の）後専ら正法を精しくし、遂に能く諸部に究通し著述を閑くす。乃ち『声明雑論』二万五千頌を造り、又『広百論』『唯識論』及び『因明』数十部を釈し、並びに盛んに宣行す。其の茂徳高才、別に自ら伝有り」とある。その伝は今伝わらない。

一六・三　**無憂王の仏塔**　城の南、遠からざる所に大きな伽藍がある。国中の聡明な人たちが類を以てここに集まって来ている。窣堵波の高さ百余尺のものがある。無憂王が建てたものである。如来がその昔ここで説法され、外道を説伏し人間や天人を済度された。その側には過去四仏の座所および散策された遺跡の場所がある。(注一)

ここより南へ行くこと三千余里で秣羅矩吒国（原注　亦、枳秣羅国とも謂う。南印度の境）に至る。

注

一　**建志補羅の仏跡**　当地に阿育王塔や仏跡があるという記事は、仏教流伝後の伝説により後世付会されたものであり、歴史的事実ではない。

一七　秣羅矩吒国

一七・一　**国勢の概観**　秣羅矩吒国(注一)は周囲五千余里ある。国の大都城(注二)は周囲四十余里ある。土地は瘠せており、産物は多くない。海産の珍宝(注三)がたくさんこの国に集まってくる。気候は炎暑で、人は黄黒いものが多い。性格は烈しく、邪教・正法ともに兼ね信じている。学芸を尊ばず、唯利を逐うことのみを努める。伽藍やその跡など廃址は非常に多いが、今に残るものとては少なく僧徒も僅かである。天祠(注四)は数百、外道の人々は非常に多く、露形に属する人が多い。

注

一　秣羅矩吒国　『慈恩伝』四に、「秣羅矩吒国ありと聞く」とある。伝聞国である。秣羅矩吒 *muât˳-˳lâ-°kiu-ta°*: **malakuṭa* (Tamil. *malaikoṭṭa,* or *malaikuṛṛam*). Tamil 語で *malai* は丘・山の意、*koṭṭa* は地方・地帯の意、*kuṛṛam* は区域の意 [Majumdar's Note, in *C.A.G.I.,* p.740; Law: *H.G.A.I.,* p.172]。前項末尾の注に「亦枳秣羅と謂う」とある。枳秣羅 *˳kjię-muât˳-˳lâ*: **kimāra.* インド半島の最南端のコモリン Comorin 岬近辺にある聖なる川とされるものは、Tamil 語で Kumāri, Kumārikā と呼ばれている。玄奘の矩秣羅はこれを意図したものと見られる [Beal: *Records,* II. p.231 (123); Law: *H.G.A.I.,* p.169]。『開元釈経録』九に摩頼耶国（訳して光明国）と言うのもこの国であろう。

二　国の大都城　現在のマドゥラ Madura（マドゥライ Madurai）とされる[高桑:『研究』三〇八ページ; Majumdar's Note, in *C.A.G.I.,* p.741]。

三　海産の珍宝　インド半島南端とセイロンに挟まれるマンナル Mannar 湾に産する真珠は古来甚だ珍重され、その最良のものは如意宝珠と名づけ無二の珍宝とされた。

四 天祠 この地方は今日もヒンドゥー教の大寺院が非常に多い。

一七・二 摩呬陀の旧跡 城の東、遠からざる所に古い伽藍がある。庭・建物は荒れはてているが、基礎は今も残っている。無憂王の弟の大帝(巻八の二・六、巻十一の一・四参照)が建てたものである。(注一) その東に窣堵波がある。基壇はすでに崩れているが、覆鉢はなお残っている。無憂王が建てたものである。その昔、如来がここで説法をし、大神通を現わして無数の人々を済度された。(注二) 聖跡を顕彰するためにこの標識を建てたのである。歳月久しくいよいよ霊妙に、祈願するもの或いは望みを遂げることがある。

注

一 無憂王の弟……建てたものである 阿育王の弟(或いは子と言う)の大天(マヘーンドラ)(摩醯因陀羅、旧訳に摩呬陀)はセイロンに布教した人であるから、その途次にこの地方に留錫したこともあろう。

二 如来が……済度された 釈尊が当地に来遊された史実はなく、ここに述べる説話は仏教流伝後の伝説であろう。

一七・三 秣剌耶山 この国の南方、海に面して秣剌耶(マラヤ)山(注一)がある。高い崖に峻しい嶺、洞穴のような谷に深い谷川がある。この山の中に白檀香樹(びゃくだん)や栴檀儞婆樹(チャンダネーヴァ)(注二)がある。樹の状は白檀に類しており、区別することはできない。ただ盛夏に高い所に登り遠望して、大蛇がまといついている木があればそれと分かる。その木の性が冷たく涼しく感じられるので、蛇がとぐろを巻くのである。遠くから見定めると、矢を射て記号としておき、蛇が冬眠に入った後にはじめて伐採するのである。羯布羅(カルプーラ)香樹(注三)は松のような幹に異なった葉をつけ、花も実も殊なっている。伐採したばかりの時には湿っているので、まだ香りはない。木が乾いた後に木目に従い切ると、その中に香りがある。その形状は雲母のようで、その色は氷雪のようである。これがいわゆる竜脳香である。

注

一 秣剌耶山 秣剌耶 *muât˳-lât˳-˳ia* : Skt. *malaya*. 西海岸に沿う Eastern Ghats 山脈の南部、今の Cardamon 山脈であろう。『慧琳音義』二六に「摩羅耶山 亦摩羅延とも云う。摩羅は此に垢(く)を云う。耶は除を云う。山は南天竺の境に在り。因って国は名となす。其の山は白栴檀香多く、入る者は香潔なり。故に除垢(く)と云う」とある。

二 栴檀儞婆樹 栴檀儞婆 *˳tśiän-˳d'ân-°ni-˳b'ua* : Skt. *candaneva*. また烏洛迦栴檀 uragasāra-candana(蛇衛栴檀)・uragahṛdaya-candana(蛇心栴檀)とも言う[高桑:『研究』三七四ページ以下]。

三 羯布羅香樹 羯布羅 *kiɐt˳-puo°-˳lâ* : Skt. *karpūra*. 樟脳のこと。また、劫布羅(Pa. *kappūra*)とも。五種香の一で、産額が少ないため、古来珍重された。

一七・四 布呾落迦山 秣剌耶(マラヤ)山の東に布呾落迦(ポータラカ)山(注一)がある。山道は危険で、巌谷は嶮峻である。山頂に池があり、鏡の如く澄んでいる。水は流れて大河となり、山をめぐり流れること二十周で南海に入る。池の側に石造りの天[人の]宮[殿](堂宇のこと)がある。観自在菩薩が往来し泊まられる所である。菩薩を見たてまつろうと願うものは、身命を顧みず河水を渡って山に登る。艱難(かん)をも物ともせず行きつくことのできるものは、大変に少ない。ところが、山下の住民でお姿を見たてまつろうと祈願すれば、[観自在菩薩は]時には自在天(シヴァ)(湿婆神)の姿となり、時には塗灰外道の姿となり、祈願する人を慰諭して望みを遂

げさせてやることがある。

この山から東北へ行くと、海岸に城がある。南海の僧伽羅国に行く通路である。(注二) 土地の言い伝えによれば、

「ここから海に入り、東南へ三千余里ほどで僧伽羅国（原注　唐に執師子と言う。印度の境に非ず）に至る」

と言うことである。

注

一　布呾落迦山　布呾落迦 *puoº-tâtₒ-lâkₒ-ₒka* : Skt. *potalaka.* また補怛洛迦・補陀落迦・普陀落とも。光明山・海島山・小花樹山などと訳す。伝説上の山かとも思うが、これを半島南端の Pāpanāśam 山に比定する説もある［高桑：『研究』三八四ページ以下］。

二　僧伽羅国に行く通路にある城　この城の名を玄奘は記していないため、諸種の比定が行なわれている。僧伽羅国（伝聞国）への里数も、親践したものでないからその当否は確かではない。『西域求法高僧伝』下、無行禅師の条に、「那伽鉢亶那より海に泛ぶこと二日にして師子洲に至る」との記事がある。那伽鉢亶那は Nāgapaṭṭanam である。セイロンへの渡海港の一であろう［高桑：『研究』三九四ページ以下］。

大唐西域記　巻第十

大唐西域記　巻第十一　二十三国

三蔵法師玄奘奉　詔訳

大捴持寺沙門辯機撰

僧伽羅国（原注　印度の国に非ざるも路次につき付出）　恭建那補羅国　摩訶剌侘国　跋禄羯呫（昌葉反）婆国　摩臘婆国　阿吒釐国　契吒国　伐臘毘国　阿難陀補羅国　蘇剌侘国　瞿折羅国　鄔闍衍那国　擲枳陀国　摩醯湿伐羅補羅国　信度国　茂羅三部盧国　鉢伐多国　阿点婆翅羅国　狼掲羅国　波剌斯国（原注　印度の国に非ざるも路次につき付出。旧に波斯と曰う）　臂多勢羅国　阿軬荼国　伐剌拏国

一　僧伽羅国

一・一　**国勢の概観**　僧伽羅国(注一)は周囲七千余里ある。国の大都城は周囲四十余里ある。(注二) 土地は肥沃で、気候は暑熱である。農業は適時に行ない、花・果は品数多い。人口は稠密で、資産は富裕である。人の体貌は黒く小さく、その性格は烈しい。(注三) 学芸を好み徳を尊び、善行を崇め福業を奨励する。

注

一　僧伽羅国　伝聞国。僧伽羅 ∘*səng*-∘*g'ia*-∘*la* : Pkt. *siṁghala*, Skt. *siṁhala*, Pa. *sihala*. 執師子国と訳し、師子国と略称する。古く Skt. *tāmraparṇi*, Pa. *tambapaṇṇi*（銅色国）と呼ばれ、この語からギリシア文献の Taprobanē が出たとされる [Strabo, XV. I. 14. ; Periplus（村川訳：『案内記』一二一・一三九ページ）; Pliny, VI. 22]。その他、Ratnadvipa（宝渚・宝洲）, Ojadvipa（堀闍洲）, Varadvipa（婆羅洲）, Maṇḍadvipa（挰陀洲）, Laṅkā（楞伽）等の異名がある [Cunningham : *A.G.I.*, p. 638 ; 高田：『国訳伝』一〇五ページ注（三）]。今日のセイロン島 Ceylon である。その古代史は四、五世紀の『島史』*Dipavaṃsa*,『大史』*Mahāvaṃsa* に詳しい。

二　国の大都城　島の北部丘陵裾野にある Anurādhapura（阿㝹羅陀城）である。城内にはブッダ・ガヤー Buddha-gayā より持ち来たれる菩提樹と Dantapura（仏牙城）より移した仏歯を祠る精舎とがあり、有名 [N. L. Dey : *Geogr. Dict.*, p. 9]。『法顕伝』に詳しい。

三　住民　島内住民の大部分はいわゆるアーリヤ系に属する Sinhalese であることより見て、玄奘の記述は前者に次ぐ住民数をもつドラヴィダ系の Tamil 族を指すものであろうか。本島の原住民族はいわゆる Veddahs であり、何系に属するか不明の未開民族である。現在は東南部のジャングルに他民族と交流をもつことなく僅かの数の人がいるのみである。

一・二　世俗の建国伝説

この国はもともと宝渚（ほうしょ）[と呼ばれた国]（注一）であった。珍しい宝が多く、鬼神が住んでいた。その後、南印度のある国王がその娘を隣国に嫁（とつ）がせることにし、吉日に嫁入りさせたところ、道で師子（獅子）（しし）に出遭った。護衛のものは娘をそのままにし避難した。娘は輿（こし）の中で命なきものと観念していた。ところが師子王は娘を背負って行き、深山に入り奥深い谷に住まわせ、鹿を捕え果実を採って適切に食物を与えた。歳月が経ち男女を生んだ。その顔貌（ぼう）は人間と同じであるが、性質は畜類に異ならなかった。男の子は次第に大きくなり、力は猛獣に匹敵するほどであった。年齢二十歳ほどになると人智も出てきて、その母に、

「私はどういうものでしょうか。父は野獣で母は人間です。同類でもないのに、どうして結婚したのですか」

と問うので、母は昔の話をしてその子に告げた。男の子は、

「人間と畜類とは生きる道を殊にしています。速く逃げましょう」

と言うと、母は、

「私は以前にも逃げましたが、一人で生活することはできませんでした」

と言った。その子は後日、師子の父の後を追って山に登り嶺を越えて行き、その行動をよく調べた結果、逃げおおせると思った。父が出かけたのを見て母と妹を肩に担（にな）い、人の住む里に下った。母は、

「それぞれみな慎重にして事の起こりを言わないように。もし人が知ったら、私たちを軽蔑しましょうから」

と言った。そこで母の父の本国に行ったが、その国はもう一族のものではなく、一族の祭祀もと絶えてしまっていたので、村人のもとに身を寄せた。村人はかれらに、

「あなたたちはどこの国の人ですか」

と尋ねると、

「私たちはもとこの国のものですが、外国を流れ歩き、親子共々に故郷に帰って来たのです」

と答えた。人々はみな哀れに思って、それぞれ食物を与えた。一方、師子王は還（かえ）って来たけれども家族は居らず、男女の子供たちを恋しがった。大いに怒りを発し直ちに山から出て来て、村里を行き来して大きな咆（ほ）え声をあげ、人間に害をし生き物を殺した。村人たちが出れば忽（たちま）ち殺してしまった。太鼓を鳴らし貝を吹き、弩（いしゆみ）をかつぎ矛（ほこ）を手に

し、部隊を組んで行く時だけは害を免れた。その国の王は自らの仁慈教化が十分ならざるかと心を痛め、猟師を山野に向かわせその師子を獲えさせようとした。王も親ら［象・騎・車・歩の］四兵を率い、その多きこと万を以て数え、林や藪も掩い山谷も埋めるほどであった。しかし師子が吼えたてると人も動物も縮みあがり、捕獲することができなかったので、再度の募集をし、師子を捕え国の難を除く者は、重い賞に与りその働きを表彰することにした。その子は王の布令を聞き、母に、

「飢えや寒さが甚だしいことでもありますから、募集に応じましょう。或いは目的を達して暮らしを立てることができることになりましょう」

と言うと、母は、

「そのようなことを言ってはいけません。あの師子は畜類ではありますが、やはり父です。暮らしが苦しいからと言って、親を殺すというようなことをしてよいでしょうか」

と言った。子は、

「人間と畜生とは類を異にし、その間に礼義なぞがありましょうか。あなたを奪うという非道をしているからには、順逆の配慮など必要ではありますまい」

と言い、小刀を袖中にし、出かけて募集に応じた。この度の王の軍は千衆万騎、雲霞の如き大軍であったが、師子が林中に踞っていると近づくものもなかった。その子が父の師子の前に近づくと、父師子はおとなしく身を伏せてしまった。かくて親愛の情から怒りを忘れ去ってしまい、子が刃を父の腹に突き刺しても、なお慈愛の念を懐き忿怒の念をもつことはなかった。腹を割き切るに及び、苦しみながら死んだ。王は、

「あれは一体なに人なのか。こんな不思議なことがあるのは」

と思い、或いは利益を以て誘い、或いは威力で脅すと、やっと一部始終を話し、事のありようを詳しく述べた。王は、

「父であるのに殺害するとは実に情理に悖ったことである。まして親子でないものにはどのようなことをするであろうか。畜生種のものは懐きにくく、暴悪の情は起こりやすいものである。国民の難儀を除いた点は功績が大である。しかし父の命を断ったその心は道理に悖っている。重賞でその功に酬い、遠くへ追放してその非道を罪しよう。そうすれば国法も曲げることなく、王の言葉にも嘘がなかったことになろう」

と言った。そこで二隻の大きな船を準備し、たくさんの糧食を載せさせた。母はその国に留めおき褒美を十分に与え、男女の子供をそれぞれ一隻ずつに乗せて波のまにまに漂流させた。その男の子の船は海にただよいこの宝渚に着いた。珍しい宝玉がたくさんあるのを見てここに留まった。その後、商人が宝を採りにこの浜にやって来たので、その商主を殺し、娘を留めおいた。かくして人数も殖え子孫も多くなったので、君臣の区別も立て上下の位もつくり、国都を建て村を築き疆域を保有した。その先祖が師子を執捕したので、その手柄を表彰して［執師子国と］国号を定めた。その女の子の船は流れて波剌斯（本巻の二〇参照）の西に着き、神鬼に魅入られて多くの女の子を産んだ。こういうわけで今の西大女国がこれなのである。それで執師子国の人はその体貌が黒く小さく、四角い顎に大きな額をし、性質烈しく平然と鴆毒も飲む。これも猛獣の種の遺伝である。かくてこの国の人には勇敢なものが多い。これが［建国伝説の］一説である。（注二）

注

一　宝渚［と呼ばれた国］　宝渚は Skt. *ratnadvipa*, Pa. *ratnadipa* の訳であろう。また宝洲・宝所とも訳される。閻浮提洲より海を越えて、人々がこの島に胡麻・米・豆・胡椒等の宝を求めに来ると言う［*Divyāvadāna*, p.5］。ただし、経典の宝洲・宝所はともに伝説的な面多く、地理的にセイロンであるという確証はない。九世紀のアラビア人はこの島を「宝の島」と呼んでいたと言う［Yule & Cordier: *Marco Polo*, II. p. 314, N. 2］。

二　この伝説に類似するものが *Dipavaṁsā*, IX; *Mahāvaṁsā*, VI-VII に見える。

一・三　仏典の建国伝説　仏教の言うところ（建国伝説）は次のようである。昔、この宝洲の大鉄城は、中に五百の羅刹女（魔女、Skt. *rākṣasī*）が住んでいた。城楼の上には二つの高い幢を立て吉凶の相を表わした。吉事があれば吉幢が動き、凶事があれば凶幢が動くのである。常に商人がこの宝洲にやって来るのを伺い美女に変装し、香花を手にし音楽を奏し、出迎えて慰問し鉄城に誘い入れ、宴会が終わると鉄牢の中に入れ、次第に取り出して食べていた。当時、贍部洲に大商主の僧伽（Pkt. *siṁgha*, Skt. *siṁha*）と言うものがいた。その子の僧伽羅と字するものは、父が年老いているので代わりに家務を統べていたが、五百人の商人と海に出て宝を採集していたところ、風波に流されて偶然に宝洲に着いた。その時、羅刹女は吉幢が動くのを見て、香花をもち音楽を奏し、みなで出迎え鉄城に誘い入れた。商主はそこで羅刹女王と配偶して楽しみの限りを尽くした。その他の商人もそれぞれ相手を求めた。何年か経ち、みな一子を生んだ。羅刹女たちは、情として古い相手は疎ましく思うようになり、この人たちを鉄牢に幽閉しようと考え商人たちの隙を伺った。その夜に僧伽羅は悪い夢を見て吉い兆ではないことを悟り、こっそり帰路を探し求めていたところ、ぱったり鉄牢に行き着いた。すると泣き叫ぶ声が聞こえるので、高い木に昇り、

「捕えられて悲しんでいるのは誰ですか」

と尋ねると、

「あなたは御存知ないのですか。城中の女たちはみな羅刹です。昔、私たちを誘い、城に入って楽しみました。あなた方がやって来るというので私たちを幽閉し、次第に食物とし、もう大半はいなくなりました。あなた方も間もなくこんな災難に遭われることでしょう」

と答えた。僧伽羅は、

「どうしたらこの危難を免れることができるのでしょうか」

と尋ねると、

「海岸に一匹の天馬がいますから、心をこめて祈ればきっと救ってくれると聞いています」

と答えた。僧伽羅はこれを聞き、こっそり商人たちに知らせ、共々に海岸を望んで懸命に救いを求めた。すると天馬がやって来て人々に、

「汝らは各自我が鬣を握って、振り返らなければ、私は汝らを救って海を越え難を免れさせ、贍部洲に行ってめでたく故郷に帰らせよう」

と言った。商人たちは指図を受け一心にその鬣につかまった。すると天馬は雲路を飛び走り海岸を越えた。羅刹女たちは忽ち夫が逃げ去ったことを悟り、互いに相談して行き先を別々にし、それぞれ幼児を連れて空を飛んで出かけた。商人たちが今しも海岸に出ようとしているのを知り、互いに呼び集め空を飛んでそこへ出かけた。瞬時にして商人たちに出会い、悲しみや喜びの気持ちのうちに涙を流した。みな涙を顔いっぱいにし、


セイロン建国伝説となった
雲馬王本生物語の図，マトゥラー

「私たちは運よく幸いに主人を得まして、家庭円満に恩愛は早や久しいものがあります。しかるに今遠く妻子を棄てられるならば、後に残された子供たちは哀れなものです。この気持ちは誰が忍び得ましょうか。どうか思い止まっていっしょに城にお帰りください」

と言った。商人たちの心はなかなかに帰ろうとの思いも起こさず、羅刹女たちは口説いても甲斐がないので、媚を呈しあらゆる嬌態を演じた。商人たちはいとしく思い情として耐え難く、心に何れにしたものかと迷いつつも、身は術中に堕ちてしまった。羅刹女たちは喜びあい、その商人たちと手を携えて帰って行った。僧伽羅は智恵も深く心に煩悩もなかったので、大海を飛び越えこの危難から免れることができた。それで羅刹の女王は空しく鉄城に帰って来た。女たちは女王に、

「あなたは智略もなく主人に棄てられてしまいました。身についた能も少ないことではあり、ここに居るべきではないでしょう」

と言った。そこで羅刹女王は自分の生んだ子を連れて僧伽羅の前に飛んで行き、媚態を尽くして帰るようにと誘惑した。僧伽羅は口に神呪を唱え手に利剣を執り、怒って、

「汝は羅刹であり、私は人間である。人と鬼とは各々路を異にし、連合となるべきものではない。もしどうでもと言いよるならば、汝の命を断つであろう」

と告げた。羅刹女は誘惑が成功しないことを知るや、空を飛んで出かけ、僧伽羅の家に行き、父の僧伽をだまして、

「私は某国の王女ですが、僧伽羅は私を娶って妻とし、一子を生みました。宝物を携え故郷に帰る途中、海で風に遭い船は沈んでしまいました。唯私たち母子と僧伽羅だけは、やっと助かることができましたが、山や川の道中は嶮岨に、寒さと飢えとには困難いたしました。あることで主人の意に逆らい、棄てられてしまいました。けしからぬと罵しられ、羅刹と謗られました。帰るにも故郷は遠く、止まるにも身寄りのない旅の空、進退窮まり思い切って在り様を申し上げます」

と言うと、僧伽は、

「あなたの言われるとおりならば、直ぐさまここへいらっしゃい」

と言った。ここへ住んで間もなく、僧伽羅が帰って来た。父はかれに、

「どうして財宝を重んじ、妻子を軽んずるのか」

と言うので、僧伽羅は、

「あの女は羅刹女です」

と言って先ごろのでき事を詳しく父母に話したので、家族・親戚のものみなが羅刹女を追放しようとした。そこで羅刹女は王に訴えた。王は僧伽羅を罪しようとした。僧伽羅は、

「羅刹の女には人を惑わすものが多いです」

と言ったが、王は真実とは思わなかった。のみならず、女の美貌が気に入り、僧伽羅に、

「どうでもこの女を棄てようと言うのなら、私はこの女を後宮に留めます」

と言った。僧伽羅は、

「恐らく災難が起こりましょう。羅刹ですから、食物は血と肉だけです」

と言った。王は僧伽羅の言葉を聴き入れずにその女を後宮に入れて妻とした。その後ある夜半、[羅刹の女王は]宝渚に飛び帰り、残りの五百の羅刹の鬼女を連れて共に王宮に戻り、毒咒術で宮中の人を惨殺し、あらゆる人畜の肉を食い血を飲み、余った屍体を持って宝渚に帰還した。朝方に群臣が王の門に朝礼に参集したが、門は閂をかけたままで開かなかった。待つこと久しかったが、人の話し声も聞こえない。そこで戸を押しあけ門を開き、固まって入って行き御殿の庭までやって来た。ひっそりと人影もなく、唯あるものは骸骨だけであった。群臣・胥吏は互いに顔を見合わせるばかりでなす術も知らず、大声に泣き号ぶばかりで、禍の原因を推測することもできなかった。僧伽羅は詳しく事の始末を語り、人々は禍は自ら招いたものであることに合点がいった。そこで輔弼の老臣や群官・老将たちは、明徳の人物をあまねく調べ徳高き人を推薦したところ、みなの人が僧伽羅の福徳智恵を渇仰した。さて相談して、

「一体、人君たるものは、軽々しく決めるものではない。第一に福徳智恵を具えている人、第二に聡明にして事理に通じている人でなければならない。福智の人でなければ王の大位を受けることはできないし、明哲の人でなければどうして枢機の政務を処理し得ようか。僧伽羅は誠にその人である。夢に禍の兆を察し天馬の心を動かし、忠誠な点では主君を諫め、智恵の点では一身を全うするに足るものを持った人である」

と言った。天運ここに定まり庶政一新して喜びを詠い、衆庶ともに悦んで推薦し僧伽羅を立てて王とした。僧伽羅は辞退したが許されず、中庸の道を執り、(注一)心をこめて群官に挨拶して王位に即いた。そこで前代の弊政を改革し賢良の人々を表彰し、命令を下して、

「私の先の商人仲間は羅刹国に居り、その死生も推測し難く善悪も判明しない。今この人々を救出しようとする。よろしく軍隊を整備すべし。憂患にあるものを救うのは、国家の福徳であり、珍宝を収蔵することは国家の利益である」

と述べた。そこで兵を整え海に泛んで出かけた。その時、鉄城の上の凶幢は事態に応じて動いた。羅刹女たちはこれを目にして恐れ戦き、媚態を尽くして出迎え誑かそうとした。王はもとよりその詐りであることを知っており、兵士たちに口には神咒を唱え身には武力を振るわした。羅刹女たちは事に失敗して退散し、あるものは孤島に逃げ隠れ、あるものは水に溺れ流されてしまった。そこで鉄城を取り壊し鉄牢を破壊し、商人たちを救けて多くの珍宝を捕獲した。人々を募集し宝洲に移住させ、都を建て村を築きここに国をたてた。そこで王の名を取って国号とした。僧伽羅と言うのは釈迦如来の前身のことである。(注二)

注

一　中庸の道を執り　王者の守るべき徳として誡めた語。『尚書』大禹謨の「人心惟れ危うく、道心惟れ微なり。惟れ精に惟れ一に、允に其の中を執れ」と堯が舜に位を譲る際に授けた語を踏まえている。

二　ここに記す本生譚は、*Jātaka*, No. 196, Valāhassa（雲馬本生）を最古とし、*Mahāvastu*, III. pp. 67–90；『雑阿含経』四五・一；『仏本行集経』四九；『方広大荘厳経』五；『六度集経』六；『中阿含経』三四；*Divyāvadāna*, 523-8 等にも見える。『法顕伝』の伝えるところによれば、「其の国には本人民無く、正に鬼神及び竜の之に居る有り、諸国の商人共に市易す。市易の時には鬼神は自らは身を現わさずして、但宝物を出だして其の価直を題す。商人は則ち価に依って直を置き物を取る。因って商人の来往し住する有り。故に諸国の人の其の土の楽を聞き、悉く亦復来たり、是に於て遂に大国と成れり」と。

一・四　僧伽羅国の仏教　僧伽羅国はその昔淫祠を祭るのみであったが、仏が世を去られて後の第一百年に、無憂王の弟の摩醯因陀羅（巻八の二・六参照）が愛欲を捨て去り聖果を得ようと志し、六神通を得て八解脱を具有し、虚空を足で歩いてこの国にやって来て、正法を弘め仏の遺教を流布した。（注一）これより以後に風俗は信心深くなった。伽藍は数百ヵ所（注二）で、僧徒は二万余人（注三）いる。大乗および上座部の教え（注四）を奉じている。仏教が来て以後二百年にして、それぞれが専門をほしいままにして二部に分派した。一を摩訶毗訶羅住部（注五）と言い、大乗を排斥して小乗を学習する。二を阿跋耶祇釐住部（注六）と言い、大小の二乗を兼学して、弘く［経律論の］三蔵を学習する。（注七）僧徒たちは戒行ともに清浄であり、禅定・智恵ともに明晰で、その威儀風采は手本とすべく誠にりっぱである。

注

一　摩醯因陀羅の師子国開教は、『善見律毗婆沙』二・三に見える。

二　伽藍は数百ヵ所　宋本は「百ヵ所」とし、『慈恩伝』四には「百余ヵ所」とする。

三　僧徒は二万余人　『慈恩伝』は「僧徒万人」とする。

四　大乗および上座部の教え　もと『西域記』は「大乗上座部の法」とするが、上座部は小乗の部派であり、意味をなさない。今は『慈恩伝』に従い「及」の字を補った。

五　摩訶毗訶羅住部　摩訶毗訶羅 *muâ-xâ-b'ji-xâ-lâ* : Skt. *mahā-vihāra*. 大寺住部 Mahā-vihāra-vāsin とも。『法顕伝』師子国の条によるに、「城南七里に一精舎有り、摩訶毗訶羅と名づけ、三千の僧の住する有り」とあるもの。即ち古都 Anurādhapura の南方で、前三〇六年ごろに天愛帝須王 Devanampiyatissa によって建てられた。今もその遺跡がある。

六　阿跋耶祇釐住部　阿跋耶祇釐 *'â-b'uât-ia-g'jię-lji* : Skt. *abhaya-giri*. 無畏山住部 Abhayagiri-vāsin とも。『法顕伝』師子国の条に「王は城北の跡の上に大塔の高さ四十丈なるを起つ。金銀荘校し衆宝合成す。塔辺に復一僧伽藍を起て、無畏山と名づく。五千僧有り」と言うものである。前八九年に王の Vaṭṭagāmani 一名無畏王 Abhaya が建てたと言う。

七　この二部派の抗争については、*Mahāvaṃsa*, 平松訳：『大史』第三六、三七の両章に詳細。

一・五　仏牙精舎　王宮の側に仏牙精舎（注一）がある。高さ数百尺。珠玉を鏤め宝石で飾ってある。精舎の上には標柱（注二）を建てて鉢曇摩羅伽大宝（注三）が安置してある。空に映える光は明々と、連なる光は照り輝いている。昼夜分かたず遠くから望み見ることができ、（注四）明星のように明るい。王は仏牙を日に三たび濯ぎ洗い、香水や香末で或いは濯いだり或いは香で薫じたりする。珍しいりっぱな宝物類をできるだけ使用して供養を

修するのである。(注五)

注

一 仏牙精舎 『法顕伝』には「仏歯精舎」とし、王が仏歯を奉じて無畏山精舎に移し供養する状を詳細に記す。多くの唐僧がこの仏歯を拝するためにセイロンを往訪したことは、『求法高僧伝』等に見える。この仏歯は今もセイロン中部第一の都会カンディ Kandy の仏歯寺に安置し、参拝する人が多い。

二 標柱 仏の所在を示す柱で、梵語 Kṣetra の訳。刹土・刹は音訳、刹竿・刹柱・表刹・金刹は音義併挙の語。

三 鉢曇摩羅伽大宝 鉢曇摩羅伽 *puât-d'âm-muâ-lâ-g'ia* : Skt. *padma-rāga.* 蓮華色をしたものの意。ルビー・紅玉。映紅・紅蓮華宝・紅鴉鶻などと訳す。セイロンの紅玉は古来アラビア人等にも有名である [Yule & Cordier : *Marco Polo,* II. p.315]。

四 昼夜分かたず……でき 原文は「昼夜遠望」となっているが、巻十の九・三には「静夜遙かに望見す」となり、『慈恩伝』にも「光曜空に映じ、静夜雲なければ万里と雖も同じく覩る」となっている。

五 明蔵系統の本にはこの文に続けて一葉半にわたり、僧伽羅国の歴史と明・永楽年間の鄭和の南海・インド遠征に関する記事を插入する。もちろん原文にはない。

一・六 俯首金仏像 仏牙精舎の側に小さな精舎がある。ここも多くの宝で飾っている。中に金の仏像がある。この国の先王が自分の身長と等量に鋳造されたものであり、肉髻は貴重な宝石で飾った。その後盗賊が隙を見て盗み取ろうと思ったが、門を幾重にもし柵を周らし護衛堅固であるので、盗賊は地下道を掘り精舎へこの地下道から入った。さて、宝を取ろうとすると像は次第に高くなった。盗賊は思いを果たすことができないので、しりぞきがっかりして、

「如来はその昔菩薩行を修し、広大の心を起こし弘遠な誓願を発され、上は如来自身の命から下は所有する国城までをも、四生(巻三の六・四参照)を哀れみ衆生に与えられました。今はどうでしょう、仏の姿を写すこの像が宝を惜しむとは。この場で静言されれば昔の行ないも分かったものではありません(注一)」

と言うと、像は、なんと、首を俯けて宝を授けた。盗賊は宝を手に入れると、すぐに手にして売ろうとした。見たことがあるものは、みなこの盗賊に、

「この宝は先王の金仏像の頂髻の宝だ。汝はどこから手に入れてここで売ろうと言うのか」

と言って捕え王に申し上げた。王がどこから手に入れたかと訊ねると、盗賊は、

「仏が自ら私に下さったものです。私は盗賊ではありません」

と答えた。王は真実とは思わず、使を験べるため見にやったら、像はやはり首を俯けていた。王は仏のみ心を眼のあたりにし、信心を固め、その人を処罰せずにその宝を高価で買い戻し、仏像の髻を荘厳し再び頭に安置した。仏像はこう言う訳で首を俯け今日に至っている。

注

一 この場で……ありません 原文は「静言於此不明昔行」であるが、よく読めない。今は『慈恩伝』の「此を以て之を思えば、恐らく往きの言実無からん」により仮りに訳した。「静言」とは「静かに言う」の意の他に「巧言令色」の「巧言」の意がある。

一・七 国王衆食を施す 王宮の側に大きな調理場が建ててあり、日ごとに一万八千僧の食事を行なっている。食事時になると僧徒は鉢

を手にし食物を受け、食べ終わるとそれぞれ各々の住居に帰る。仏教が流伝してよりこの方この供養を修しており、子孫は伝を受け行事を継続して今日に至っている。十数年この方、国内に政乱があり、まだ定まった君主もなくてこの事業は中止されている。(注一)

注

一 国王の施食については、『法顕伝』に「其の国人の云く、都て六万僧ばかりと。悉く衆食有り、王は別に城内に於て五、六千人の衆食を供す。須くる者は則ち大鉢を持ち往いて取り、器の容る所に随いて皆満たして還る」と言う。

一・八 宝渚　国の海岸の入り込みでは、その地に貴重な宝を産出する。王は自ら祭りを行ない、神は世にも稀な品物を下さるのである。町の人も男も女も出かけて採集しようとするが、自らのもつ福徳に応じて収穫は同じでない。手に入れた真珠はその課税に等級がある。(注一)

注

一 この地の真珠採取については『法顕伝』に次のように見える。「師子国に到る。彼の国の人の云く……其の国は本洲上に在り……皆大洲に統属せられ、多く珍宝珠璣を出だす。摩尼珠を出す地あり、方十里ばかり。王は人をして守護せしめ、若し採る者有らば十分に三を取る」と［巻十の一七・一注三参照］。

一・九 駿迦山と那羅稽羅洲　国の東南隅に駿（原注　勒鄧反↓ *lang°.*）迦山(注一)がある。山谷は幽邃で、神霊の住む所である。その昔に如来がここで駿迦経（原注　旧に楞伽経と曰う）(注二)を説かれた。

国の南方、海のかなた数千里で那羅稽羅洲(注三)に至る。この国の人は体が小さく、長さは三尺余で、体は人身に口は鳥の喙である。農産物がないので唯椰子だけを食べている。

那羅稽羅洲の西方、海のかなた数千里の離れ島の東崖に、石の仏像の高さ百余尺のものがある。東面して坐し、月愛珠(注四)をば肉髻としている。月が廻り照らす時になると水は滝となり、崖をどっと流れ落ちて谷に注ぐ。ある時、商人たちが暴風に遭難し、波のまにまに漂いこの離れ島にたどり着いた。海水は塩分があり飲むことができず、咽が乾くこと久しかった。この時は月の十五日であった。像の頂から水が流れ人々はみな救われ、真心が仏に通じみ心に救われたと思った。ここに留まり数日が経ったが、何時も月が高い山に隠れるとその水の流れは止まった。そこで商主は、

「私たちを救うために水を流されたわけではない。月愛珠は月の光が照らすと水を流し出すと聞いたことがある。仏像の頂上にこの宝珠があるに相違ない」

と言って、崖を登って調べた所、月愛珠を像の肉髻としていた。

［以上のように］その人を見たかの如くその一部始終の話を聞かせた。

国の西方、海のかなた数千里で大きな宝洲に至る。人の住むものもなく、唯神霊のみが住む所である。静夜に遙か望み見ると、光は山水に輝いている。商人の出かける者は多いが、みな何の収穫もない(注五)。

達羅毗茶国(注六)より北方へ林野中に入り、孤城を通り小村を過ぎる。悪人が仲間を作り、旅人に害をする。行くこと二千余里で恭建那補羅国（原注　南印度の境）に至る。

注

一 駿（……）迦山　駿迦 *lang°.ka* : Skt. *Laṅkā*. セイロン島を Laṅkādvīpa

とも言い、またセイロンの首府をも Laṅkā と言う。セイロン南部には八千フィート級の高山がある。

二 駿迦経（……） 駿迦経 Laṅkavatāra-sūtra. 漢訳に、劉宋・求那跋陀羅訳：『楞伽阿跋多羅宝経』四巻、元魏・菩提流支訳：『入楞伽経』十巻、唐・実叉難陀訳：『大乗入楞伽経』七巻の三訳がある。セイロンでこの経が説かれたとするが、通常は摩羅耶山（秣剌耶山、巻十の一七・三参照）の楞伽城（伝説上の城）で説くとする。

三 那羅稽羅洲 那羅稽羅 ◦nâ-◦lâ-◦kiei-◦lâ : Skt. *nārikela*. 巻二の一・一五「那利薊羅」、巻十の五・一「那羅鶏羅」を参照。那羅稽羅洲は Nārikela-dvīpa 即ち椰子島（Coco-nut Island）の意。伝聞国にして不詳。

四 月愛珠 Skt. *candra-kānta*. 漢訳は水晶 [*Mvy*. No. 8980]。また月長石とも言い、月光が凝結したもので、月光に照らされる時のみ輝き、かつ冷たい湿気を滲出すると言われる伝説上の珠玉 [荻原：『梵和』四五九ページ]。

五 離れ島も大宝洲も共に伝聞国である。

六 北方 『慈恩伝』四には、「達羅毗荼国より師子国の僧七十余人と与に西北のかたへ帰り、聖跡を観礼し、行くこと二千余里にして［恭］建那補羅国（南印度境）に至る」とある。

二 恭建那補羅国

二・一 国勢の概観 恭建那補羅国(注一)は周囲五千余里ある。国の大都城(注二)は周囲三十余里ある。土地は肥沃で、農業は盛んである。気候は暑く、風俗は烈しい。顔貌は黄黒く、気性は粗暴である。学業を好み、徳行を尊ぶ。伽藍は百余ヵ所、僧徒は一万余人。大小二乗を兼ねて学習している。天祠は数百ヵ所、異道の人々が雑居している。

注

一 恭建那補羅国 恭建那補羅 ◦*kiwong-kiən*°-◦*nâ*-°*puo*-◦*lâ* : Skt. *koṅkana-pura*. 前項末尾に「達羅毗荼国より北」するとあるが、玄奘の行程が西岸へ向かおうと言うのであるから、『慈恩伝』の如く「西北」に道を取ったと考えるべきであろう。その領土はクリシュナ河の上流の Tungabhadra 河、Varada 河流域地帯を含む海岸沿いの地であろう [Cunningham : *A.G.I.*, p.632, 745]。その住民は「形貌黧黒」と、玄奘が通常ドラヴィダ族を形容する語を用いているが、この地域の北部は現在インド・アーリヤ語の南部支派 Marāṭhī 語を話し、その最南部はその一方言たる Koṅkaṇī 語を話す。ドラヴィダ語族との接壌地帯である。なお、『釈迦方志』下には国名を恭達那補羅 ◦*kiwong-d'ât*◦-◦*nâ*-°*puo*-◦*lâ* とし、原語 Kuntalapura を想像させる。Myore の Shimoga Dist. には今も Kubattūr と呼ぶ所がある。ここは古くは Kuntala-nagara の名で有名であった所である [Yazdani : *Early History of the Deccan*, I, p.43]。

二 国の大都城 Tungabhadra 河北岸にある Annagundi であるとする。この地は古くより回教徒の侵入するまで繁栄を続けた所である [C. A. G. I., p.632]。

二・二 王城付近の寺院 王宮城の側に大伽藍がある。僧徒は三百余人いるが、みな俊才ばかりである。伽藍の大精舎は高さ百余尺あり、中に一切義成太子（巻七の一・一〇参照）の宝冠がある。高さ二尺足らずであり、宝物で飾り、宝物函に容れてある。斎日になるごとに出して高座に安置し、香花で供養するが、時に光明を放つことがある。

城側の大伽藍の中に精舎の高さ五十余尺のものがある。中に栴檀を彫刻した慈氏菩薩の像の高さ十余尺のものがある。斎日になると不思議な光を輝かすことがある。聞二百億羅漢（巻十の一・三参照）が造ったものである。

城の北、遠からざる所に多羅樹の林（巻九の三・一四参照）がある。周

囲三十余里。その葉は長くかつ広く、その色には光沢がある。諸国の書き物［の材料］に採用しないものはない。林中に窣堵波がある。過去四仏の座所および散策された遺跡の所である。その側には聞二百億羅漢の肉身舎利の窣堵波がある。

城の東、遠からざる所に窣堵波がある。基礎はすでに崩れ傾いているが、なお高さは三丈ある。先達の話によれば、「この中には如来の舎利があり、斎日になると時に不思議な光を輝かすことがある」とのことである。その昔に如来がここで説法をし、神通力を現わし衆生を済度された。

城の西、遠からざる所に窣堵波の高さ百余尺のものがある。無憂王が建てたものである。聞二百億羅漢がここで大神通力を現わし衆生を済度された。傍に伽藍があるが、基礎だけを残している。かの羅漢が建てたものである。

これより西北へ大林野に入る。猛獣が害をなし、群盗が凶暴を行なっている。行くこと二千四、五百里で摩訶剌侘国（原注　南印度の境）に至る。

三　摩訶剌侘国

三・一　国勢の概観　摩訶剌侘国(注一)は周囲六千余里ある。国の大都城(注二)は西は大河に臨み、周囲三十余里ある。土地は肥沃で、農業は盛んである。気候は暑く、風俗は素朴である。その身体は大きく、その性質は傲慢である。恩あれば必ず報い、怨みあれば必ず復す。人の辱しめられることとあれば、命を堵して仇を討つ。危急にある友人には、一身を忘れて救済する。怨みを復そうとする時には必ず先に通報し、それぞれ甲冑を着けた後に鉾を交える。戦闘に際しては逃げる者は追跡するが、降伏した者は殺さない。将卒の利なくして敗れる者は刑罰することなく、これに女の衣服を与えて憤激させ自殺させる。国は勇士を養成し、数百人も抱えており、まさに決戦しようとする時には何時も、酒を飲ませて十分に酔わし、一人にて敵の鉾先を挫き、万夫にて敵の精鋭を打ち破る。人に出会って乱暴をほしいままにしても、［この人人には］刑罰は加えない。常に王が外出をされる時には、［この人たちが］太鼓を打ち鳴らし前導する。また乱暴な象を飼い、数百頭もいる。戦闘しようとする時には、この象にもまず酒を飲ませ、群れをなして走らせ踏み蹴らせ、前に敵なき勢いである。この国の王はこのような人や象を心頼みにし、隣国を軽んじている。王は刹帝利の出であり、補羅稽舎と言う名である。(注三)その施政は遠大、その仁政は遠くに及び、臣下は王に仕えて忠を尽くしている。現在、戒日大王（巻五の一・一参照）は東に討征し西に征伐して遠国も来賓し、近国は粛然として臣従しているのに、この国民だけはただひとり臣伏しないので、しばしば五印度の軍兵や召集に応じた諸国の勇将たちを率いて、自ら討伐に出かけているが、なお勝利を得ることができなかった。(注四)その軍［の強大］たるやかくの如く、その風俗［の忠誠］たるやかくの如くである。この国の人々は学芸を好み、邪教・正法ともに信じている。伽藍は百余ヵ所、僧徒は五千余人で、大小の二乗を兼ねて学習している。天祠は百数ヵ所、異道の人々は非常に多い。

注

一　摩訶剌侘国　摩訶剌侘　。*muâ-χâ-lât.-.t'a* : Pkt. *maharaṭṭha*, Skt. *mahā-rāṣṭra* [Turner : *C. D.*, no. 9952]. また摩訶勒吒・摩訶頼吒とも。訳して大国と言う［『翻梵語』八］。その領域はゴダヴァリ河流域を


ペルシア王（？）の酒宴図，アジャンター第一号窟壁画

中心とする現在のマハーラーシトラ Mahārāṣṭra 州に当たる［Cunningham: *A.G.I.*, pp. 633 ff.］。古代においてデカン Deccan と同義であった時期がある。この国は阿育王法勅にある Mahāraṭhika であろう。南方伝による阿育王治下の第三結集の後に長老たる摩訶曇無徳（Skt. *mahā-dharmarakṣita*, Pa. *mahā-dhammarakkhita*）が布教した地方と言う。インド・アーリヤ語の南部支派たる Marāṭhi 語域。

二　国の大都城　国都の所在地については諸説がある。Chālukya 王朝の古都たる Kalyāṇi（ボンベイの東北約五十キロの Kalyan, Calliena［村川訳：『エリュトゥラー海案内記』五二、五三節］）とする説［C. A. G. I., p.634］、Nāsik（ボンベイの東北約百五十キロ、Nasika［Ptolemy, VII. 1,62］）とする説［Fleet: *Indian Antiquary*, Vol. 22, p.115］等がある。Nāsik は近辺に仏塔・石窟の跡があり、玄奘の説に一致すると言う。なお次注参照。

三　王は……補羅稽舎と言う……　補羅稽舎 °*puo*-。*lâ*-。*kiei*-°*śia*: **pulakeśa*（＜Skt. *pulakeśin*）. Chālukya 王朝の英主 Pulakeśin 二世（ほぼ六〇九―六四二）のことで、かれはナルマダー Narmadā 河以南に君臨し、六二五―六二六年にはペルシアの王 Khusru 二世と使節を交換している。アジャンター石窟の第一号窟にはこのペルシア使節を饗宴する図がある。祖父の Pulakeśin 一世（五五〇―六六）以来南方の Badami（Vatapipura, 15°55′ N., 75°45′ E.）に都していたが、Pulakeśin 二世の末期六四〇年ごろに東南沿岸に拠っていた Pahlava 王朝の Narasiṁhavarman 王にこの地を奪取された。恐らくこの前後のころより北方の Nāsik 付近に都を移していたのであろう（Pulakeśin 二世は六四二年に戦死している）。玄奘の記述はこの北方遷都後のことである［Smith: *E.H.I.*, p.441; Yazdani: *Early History of the Deccan*, I. p.218］。

四　戒日王との戦い　北方の雄たる戒日王 Harṣavardhana が Pulakeśin 二世と雌雄を決すべき戦闘を行なったのは六二〇年ころであったが、結局ナルマダー河以南に進出することはできなかった［Smith: *E.H.I.*, p. 353; Mookerji: *Harsha*, pp. 32 ff.］。

三・二　付近の旧跡　大城の内外に五つの窣堵波がある。並びに過去四仏の座所および散策の遺跡の所であり、無憂王が建てたものである。その他の石造り・煉瓦造りの窣堵波群は、その数甚だ多く一いち挙げることは困難である。

城の南、遠からざる所に古い伽藍がある。中に観自在菩薩の石像が

ある。霊験はひそかに至り、願い求める者は達せられることが多い。

三・三　**東境の窟寺（アジャンター石窟）**　国の東境に大きな山がある。(注一)幾重もの嶺に連なる高い山々、何れも奥深くまた嶮しい。ここに伽藍があり、深い谷に基礎を置いている。高い堂と奥行きある建物は崖を掘り峯に寄っており、重閣・層台は巌石を背にし渓谷に面している。阿折羅（原注　唐に所行と言う）阿羅漢(注二)（巻十の一三・二参照）が建てたものである。羅漢は西印度の人である。その母が亡くなったので何れの国土に転生したかを観察すると、この国に女人の身を受けていられるのが見えた。羅漢はそこで出かけてここへ来て、教化して機根に随って摂取しようと思い、村里に入り乞食して母の生家にまでやって来た。ある婦人が食物を手にして来て布施したところ、乳房が乳汁を流した。身内の者がこれを見て不吉な徴だと思った。羅漢が本来の因縁を説明したら、その婦人は悟りを開いた。羅漢は生育された恩に感じ、因縁の在り方を深く考えて、なみなみならぬ徳に報いようとこの伽藍を建てたのである。

　伽藍の大精舎の高さ百余尺ほどの中に、石の仏像の高さ七十余尺のものがある。その上に石の蓋の七重のものがあり、虚空に懸けて止めてない。蓋の距離は相去ることそれぞれ三尺余である。先達の話によれば、「これは羅漢の願力が支えているのだ」とも、或いは、「神通の力だ」とも、或いは「薬術の効験だ」とも言う。記録によって考えてみても、その詳細は分からない。(注三)精舎の四周は石壁を彫刻して、如来がその昔に菩薩行を修したこと、過去のそれぞれの時における仏道修行の位や、悟りを得られた吉祥、寂滅に入られる神霊の感応などを図し、細大漏らさず彫琢を尽くしている。伽藍の門の外の南北左右にはそれぞれ一つの石象がある。(注四)土俗の話では、「この象は時に大きな声で吼えることがあり、大地はそれで震動する」と言うことである。昔、陳那菩薩（巻十の一三・三参照）がしばしばこの伽藍に止まられた。

　ここから西北へ(注五)行くこと千余里、耐秣陀(注六)河を渡り、跋禄羯呫（原注　昌葉反→*tś'iäp*。）婆国（原注　南印度の境）に至る。

注

一　国の東境に大きな山がある　この箇所は有名なアジャンター Ajaṇṭā 石窟を述べたものと見られている。位置はオーランガーバード Auranga-bad の西北約六十マイル、Bhusaval の南約三十五マイルにあり、Wagh-ora 川が馬蹄形に曲がる所、高さ約七十六メートルにおよぶ玄武岩の断崖の裾に長さ約五百五十メートルにわたって掘られた大小二十九の石窟がある。川下から石窟の番号をつけている。前一世紀から後一世紀に開かれた古い群と、五世紀後半から七世紀前後に成った群とに大きく分類される。最古の窟を除き、絵画・装飾浮彫があり、インド美術史上数少ない貴重な資料とされている。この石窟および壁画は一八一九年ヨーロッパ人に発見されてから多くの紹介・研究が発表されている［この史的概観は高田：「印度仏教美術研究の成果」『仏教芸術』六、九一ページ参照。なお、J. Griffiths: *The Paintings in the Buddhist Cave-Temples at Ajaṇṭā*. 2 vols; G. Yazdani: *Ajanta*, 4 parts］。

二　阿折羅（……）阿羅漢　第二六窟所見の碑銘に、修道僧 muni たる Acala 上座 sthavira が造立した旨記している。この Acala を、玄奘は Ācāra（所行）と読んだものであろう。

三　七重の石蓋のある高さ七十余尺の仏像は、現在は見られない。規模は異なるが、「塔院第一九窟は形は小さいが（間口七米二一、奥行一四米一一、高さ七米四二）、豊富な彫刻によって注目される。……本尊の制多 caitya も古制の覆鉢塔から著しく変化し、基部が高大となって、正面に仏龕を設け、中に仏陀の立像を浮彫しており、また三重の傘蓋を彫り出し、上に宝瓶を載せている」（高田修：『印度・南海の仏教美術』一一八ページ）とあるものに類しよう。この図は J. Fergusson: *History of Indian and Eastern Architecture*, Vol. I p.153, pl. 75. および岩波

写真文庫『仏教美術』五七ページに見えるものであろう。七重の傘蓋をもつ小塔は東インドのビハール州において見られるとも記す。

四　伽藍の門の外の……石象がある　これは第一五窟の前の岩に彫刻されたものらしいが、今ではほとんど認め難くなっていると言う [Beal : *Records*, II. p.259 (51)]。

五　ここから西北へ　『西域記』には「西」に作り、『慈恩伝』に「西北」とする。地理上より『伝』に従う。

六　耐秣陀河　耐秣陀 *nậi°-muât.-.d'â* : Pa. *nammadā*? (Skt. *narmadā*). Ptolemy [VII. 1.] には Namados と記される。ヴィンディヤ Vindhya 山脈に発し、真東に流れてカンベイ Cambay 湾に注ぐ中インドおよび西インドの重要な河である。

四　跋禄羯呫婆国

跋禄羯呫婆国(バルカッチャパ)(注一)は周囲二千四、五百里ある。国の大都城は周囲二十余里ある。土地は塩分を含み、草木は疎らである。海水を煮て塩を作り、海を利用して業を立てている。気候は暑熱で、旋風が巻き起こる。土地の風俗は薄情で、人の性質は詐りが多い。学芸に関心なく、邪教・正法ともに信じている。伽藍は十余ヵ所、僧徒は三百余人で、大乗と[小乗の]上座部の教えを学習している。天祠は十余ヵ所あり、異道の人々が雑居している。

ここより西北へ行くこと二千余里で、摩臘婆国(マーラヴァ)(原注　即ち南羅羅国なり。南印度の境)に至る。

注

一　跋禄羯呫婆国　前項末尾に呫・昌葉反→*tś'iäp.* の注がある。跋禄羯呫婆 *b'uât.-luk.-kịpt.-tś'iäp.-.b'uâ* : Skt. *bharukacchapa.* 今のナルマダー河口に位置する港市 Bharoach, Broach である。古来西方諸国との交易港として有名で、ギリシア文献に Barygaza [Ptolemy, VII. 1. 62; Strabo, XV. 1.73 ; 村川訳:『エリュトゥラー海案内記』一九八ページ] として見える [Majumdar's Note, in *C.A.G.I.*, p.699 ; Law : *H.G.A.I.*, p.277]。首都の名と同名。

五　摩臘婆国

五・一　国勢の概観

摩臘婆国(マーラヴァ)(注一)は周囲六千余里ある。国の大都城は周囲三十余里あり、莫醯(マヒー)河の東南に依拠している。(注二)土地は肥沃で、農業は盛んである。草木は茂り、花・果は繁っている。特に宿麦(むぎ)がよくでき、多くは餅麨(バン)(巻二の一・一五参照)を食べている。人の性質は順良で、おおむね明敏である。言語(注三)は雅正で、学芸に優れている。五印度中で二国が学問を重んじている。即ち西南の摩臘婆国と東北の摩掲陀(マガダ)国(巻八、九)とである。徳を貴(たっと)び仁を敬い、道理に明るくよく勉強する。ところがこの国たるや邪教・正法ともに雑信している。伽藍は数百ヵ所(『慈恩伝』には「百余所」に作る)、僧徒は二万余人、小乗正量部の教え(巻四の一三参照)を学習している。天祠は数百、異道の人々は非常に多く、多くは塗灰外道(巻一の三八参照)の輩である。

注

一　摩臘婆国　摩臘婆 *.muâ-lâp.-.b'uâ* : Skt. *mālava.* この国の位置については異説がある。一は現今の Kaira およびアーマダバード、即ちグジャラート Gujarāt 地方中部に比定する [Smith : *E.H.I.*, pp. 341 ff.]。一は東方現在のマールワー Mālwā 即ちウッジャイニー Ujjayinī, Bhilsā

周辺の地域と見る説である［Majumdar's Note, in C. A. G. *I.*, p.728］。後説は伐臘毗 Valabhi（本巻の八参照）地方より出土した七世紀の碑文によっても証せられるとして有力であるが、この際には跋禄羯呫婆国より「東北にあり」と訂するを要しよう。なお、前項末尾の注に「即ち南羅羅国」とする異名の羅羅は、。*lâ*-。*lâ*：**lāla*（Skt. *lāṭa*, Pa. *lāḷa*），後出の伐臘毗国を「北羅羅国」と称するのに対したものである。Lāṭa と言う地名は、グジャラート中部、マヒー Mahi 河と Kim 河の間の地を指すものの如く、従ってもし前記のように摩臘婆国を今のマールワーの地域であるとするならば、伐臘毗国の位置の関係から、跋禄羯呫婆国より「東北にあり北羅羅国とも言う」と訂し、伐臘毗国を「南羅羅国」と改めなければならない。このような誤記倒錯とも見れるような曖昧な書き方からと、『慈恩伝』に「此れより西北へ二千余里にして摩臘婆国に至る」と「行く」を使用しない点を見合わせて、摩臘婆国は親践国ではなく伝聞国であるという見方もある［Beal：*Records*, II. p. 260 (55)］。しかし、『慈恩伝』に一項を立てている点からして、親践国に数えるのが自然であろう［Majumdar's Note, in *C.A.G.I.*, p. 728；Law：*H.G.A.I.*, p.287, 322］。なおLāḷa と言う語の最古の記録は Larike［Ptolemy, VII. 1. 62］であると言う。

二 国の大都城は……依拠している　摩臘婆国の領域を東のウッジャイン Ujjain 地区とする説では、ウッジャインの南南西八十キロにある当地方の古都 Dhār（古名 Dhāranagar，ここはマヒー河の上流に面すと言う）に比定［Cunningham：*A.G.I.*, p. 562］したり、或いはマヒー河の中流に注ぐ一支流に面する Dungarpur (Dongarpur) に比定［Beal：*Records*, II. p.260 (57)］したりして、なお定かでない。またこの領域を西のアーマダバードを中心とする説では、「莫醯 *mâk*。-。*xiei*：Skt. *mahi* 河」を宋・元・明本の「莫訶 mahā 河」とする説を採り「大河」の意としてSābarmati 河と解し、この首都をアーマダバード（古名は Asawal）とする［Smith：*E.H.I.*, p.342］。

三 言語　東方の Mālwāl の領域では、今のインド・アーリヤ語に属する Rājasthāni 方言の Mārwāri (Mālwāli, Mālvi) 語を話す。これは早くより文学語として顕われ、文献も豊富に存している。西方のアーマダバードを中心とする領域では、今の Gujarāti 方言を話す。この方言は古くは Malvi 語と判然たる区別もなく、同じく文学語として顕著である。この方言は中期インド・アーリヤ語の一種である Apabhraṁśa 語の発達に重要な寄与をしている。

五・二　戒日王　国の記録に次のように述べている。六十年前に尸羅阿迭多（原注　唐に戒日と言う）と号する王がいた。(注一) 機智識見あり、才能学殖も豊かで、四生（巻三の六・四参照）を愛撫し、三宝を崇敬していた。生誕より没年に至るまで、顔に怒れる色なく、手に殺生を行なうこともなく、象や馬が水を飲むにも漉してから与えた。水中にある生物の命を傷うことを懸念してである。その仁慈はかくの如くであった。在位五十余年、野獣も人に馴れ、国中の国民はみな殺生をすることがなくなった。宮城の側に精舎を建立したが、精巧を窮め荘飾を尽くし、中に［過去］七仏世尊の像を作った。毎年例として無遮大会を行ない、四方の僧徒を招集して、四事（飲食・衣服・臥具・湯薬の四）供養を修したり、或いは三衣（巻二の一・六参照）の具を施したり、或いは七宝の珍しいものを施したりする。代々受けつぎ、この美挙は廃されることがない。

注

一 六十年前に尸羅阿迭多（……）と号する王がいた　尸羅阿迭多と言う人名は巻五の一・三に既見、ただしここの人物とは同名異人。Maitraka 王朝第八代の王、Śīlāditya 一世で、Dharmāditya とも号した。この王の時に西インドの最強国となった。碑銘より見て五九五年より六一〇或いは六一五年まで統治した。玄奘はこの王を仏教信者と記しているが、碑銘から見れば湿婆教信者であったようである。Kidāra Kuṣāna 族であったらしい［Smith：*E. H. I.*, p. 343；Majumdar & Altekar：*The Vākāṭaka Gupta Age*, p.23］。


シヴァ神像，エレファンタ石窟寺院

五・三　賢愛の破邪　大城より西北へ二十余里にして婆羅門村(注一)に至る。傍に落ち込んだ穴がある。夏から秋への［雨季の］長雨でも水のたまること十日ほどで、多くの河流を受け入れてはいるが、水はたまったことがない。その傍にまた小さな窣堵波が建ててある。先達の話によれば次の如くである。その昔、大慢［心の］婆羅門が生きながら地獄に陥った処である。昔、この村に婆羅門がいた。生まれながらにして知識博く、学識は当時の英才中に冠たるものがあり、内外の典籍もその深奥を窮め、暦数・天文も手の平に見るが如くであり、その風儀は清らかに名声は遠くまで及んでいた。王は非常に尊重し国民も尊敬した。門人は千単位で数えるほどもおり、その説く道を実践し学風を敬った。常々、

「私は世人のためにこの世に生まれ、聖教を授け凡俗を導いています。先賢後哲も私とは比較になりません。あの大自在天（湿婆 Maheśvara）・婆藪天（毘湿奴 Vāsudeva）・那羅延天(Nārayāna)・仏世尊と言うような者に、世の人人はみな心を寄せてその説く道を受け継ぎ、図像を造って競って尊敬をしております。私は今や徳はかれらをしのぎ名声は一代に盛んであり、かれらと異なる所はありません。とすれば、どういうふうにしてこのことを世に示したらよかろうか」

と言っていたが、赤栴檀の木で大自在天・婆藪天・那羅延天・仏世尊の像を彫刻して椅子の四脚とし、行く所常に持ってついて来させた。その傲慢ぶりはこのようであった。その当時、西印度に苾芻（比丘）の跋陀羅縷支（原注　唐に賢愛と言う）(注二)と言う人がいた。非常に因明（論理）に詳しく種々の異論を極めていた。学風は純粋で戒律は清粛に、欲少なく足ることを知り物を求めることはなかった。この婆羅門のことを聞き、

「残念なことである、今日人物のいないと言うことは。あの愚物に悪徳をほしいままにさせているとは」

と嘆息した。そこで錫杖をつき遠くこの国に来遊して、かねての心の内を詳しく王に申し上げた。王はその粗末な衣服を見て敬意を懐かなかったが、その志をりっぱであると思い、たって礼遇した。そこで論座を設備して婆羅門に告げた。婆羅門はその話を聞いて、

「その人は一体なに人ですか。そのようにこんな志を持つとは」

と笑い、弟子たちに命じて論場に出かけた。数百千人もの人々が前後に議論を聴かんものと控えた。賢愛は古い粗末な衣服を身にまとい草を敷いて坐った。かの婆羅門は持参した椅子に坐り、正法を非難し自らの邪宗を陳述した。苾芻は弁舌流るるが如く、行きつ戻りつして論じた。婆羅門はややあって屈伏した。王はそこで、

「永らく虚名をほしいままにして上の目をくらまし人々を惑わした。古典に『論議に敗れれば、罪、死に当たる』と明記されている」

と言って、鑪の金具を熱してその上に坐らせようとした。婆羅門は困じはて、仏の教えに帰依し助けを求めた。賢愛は哀れに思って王に、

「大王の仁政は遠くに及び名声は道々に満ちておられる方です。慈悲

を行なって残酷なことはなさいませんように。至らぬ所をお宥しになり立ち去らせられますよう」

と請うた。王は驢馬に乗せて町々を触れて歩かせた。婆羅門は受けた侮辱を恥じて憤りの余り血を吐いた。苾芻はこのことを耳にし出かけて行って慰めて、

「あなたの学問は内・外典を兼ね統べ、名声は遠近に及んでいます。名誉とか恥辱とか言うことはあなたの進退で必ずはっきりしましょう。評判などと言うものは決して実体を表わすものではありません」

と言った。婆羅門は真底より怒り苾芻を大いに罵って、大乗を謗り先聖を軽蔑したところ、声のまだ静まらぬうちに地面は裂けて生きながら顚落してしまった。その遺跡がかくの如くあるのである。

ここから西南して海交(注三)に入り、西北へ行くこと二千四、五百里で阿吒釐国（原注　南印度の境）に至る。

注

一　婆羅門村　摩臘婆国の首都が確定しないので、この村の所在も判明しない。アレクサンドロス大王が進攻したインダス河口に近い「Brāhman の町」［Arrian : *Anabasis*, VI. 7］であると言う説［Beal : *Records*, II. p.262 (63)］は余りにも北に考え過ぎよう。

二　跋陀羅縷支（……）　跋陀羅縷支 *b'uât*。-。*d'â-*。*la-*°*lųu-*。*tsię* : Skt. *bhadraruci*. 賢愛と訳す。本書以外にこの人物についての記事は未見。足立：『研究』下八九六ページに「賢愛また善愛は鉢伐多国の人である」とするは、何に拠るのか不詳。

三　海交　この語未詳。行路より見るに、摩臘婆国より西南へ方角を取り、カンベイ湾岸に出て、それより西北方カティアワル Kathiawar 半島を横切ったものと思われる。ビールは「湾」と訳す［*Records*, II. p.264(66)］。

六　阿吒釐国

阿吒釐国(注一)は周囲六千余里ある。国の大都城は周囲二十余里ある。住民は盛大で、珍宝を蓄積している。農業は十分できるのであるが、商業を生業としている。土地は砂地で花・果は少ない。胡椒(注二)樹を産出するが、その樹葉は蜀椒(注三)のようである。薫陸(注四)香樹を産出するが、その樹葉は棠梨のようである。気候は暑く風塵が多い。人の性は薄情で、財物を貴び人徳を賤しむ。文字言語、威儀慣習はおおむね摩臘婆国と同じである。福業を信じないものが多く、よしんば信ずるものがあっても天神を信仰している。天神を祠る堂（天祠）は十余ヵ所、異道の人々が雑居している。

摩臘婆国より西北して行くこと三日(注五)にして契吒国（原注　南印度の境）に至る。

注

一　阿吒釐国　阿吒釐 。*'â-ta*°-。*lji* : **aṭali*. 阿吒釐国の原語、所在地の詳細等不明であるが、その行程より見ればカティアワル半島北岸であろうか。なお、本項末尾にある記事からすれば、阿吒釐国は親践国ではなく伝聞による記事の如くであるが、『慈恩伝』四に摩臘婆国に続けて当国を親践国として記事を列挙している。何れにしても不明瞭な点が多い。

二　胡椒樹　胡椒は古来インド西海岸南部の Malabar が良質のものを産し、『エリュトゥラー海案内記』第五六節には Mūziris（今の Cranganore, 10°14′ N., 76°11′ E.）港より西方へ輸出する記事を出すが、第四九節にも Barygaza（今の Broach, Bhroach）港より草本の胡椒ではない灌木の長胡椒 piper longum を輸出することを記す。

三　蜀椒　中国の蜀（四川省）に産する灌木の実で香料とする。巴椒・川椒とも言う。

四　薫陸香樹　薫陸は Skt. *kunduru.* 君杜嚕・君杜昝とも書く樹木。学名 Boswellia thurifera. 薫陸香はこの樹脂より製する香料で、Skt. *kunduruka,* Pkt. *kuṁdurukka.* この脂汁は滴(したた)って乳頭の如くなるため乳頭香・乳香とも称せられる。古来種々の香料と和合して焼香用に供し珍重される。乳香の詳細については、村川訳：『エリュトゥラー海案内記』一六三ページ以下参照。なお、薫陸香樹とは「薫陸香を採る樹」の意であることは言うまでもない [Turner : *C. D.,* no. 3298]。

五　三日　宋元明三本は「三百余里」に作る。『慈恩伝』は「三日」に作る。

七　契吒国

契吒国(注一)は周囲三千余里ある。国の大都城は周囲二十余里ある。民家は殷賑(いんしん)に、家々は富裕である。大君主はなく、摩臘婆(マーラヴァ)国に隷属している。風土物産はそれで摩臘婆国のありようと同じになっている。伽藍は十余ヵ所、僧徒は千余人、大・小二乗を兼ねて学習している。天祠は数十ヵ所、外道の人々は多い。

ここから北へ行くこと千余里で伐臘毗(ヴァラビ)国（原注　即ち北羅羅国なり。南印度の境）に至る。

注

一　契吒国　契吒 *k'iat。-ṭa°*：**kaṭṭa.* この原語および位置の比定には諸説がある。一は Skt. *kheḍa* と読み、今日のアーマダバードよりカンベイへの途中の Kaira（<*kheḍa* とする）であるとする。ただし「三日」を「三百余里」とする本を採り、これを「千三百里」と改読してのことである [Cunningham : *A.G.I.,* p.564]。二は今の Cutch（<**kaṭṭa* とする）であると言う [Julien & St. Martin, in *Mém.* II. p. 161, 404 ; Watters : *On Y. Ch.,* p.245, 341 ; Smith : *E.H.I.,* p.342 ; 堀：『解説』八九七ページ]。Cutch は半島の西南部の乾地を回る地に特異な大小の沼沢（Great & Little Rann of Cutch）があり、古来『西域記』に言う如き「人口殷盛・家屋富饒」の評が当たる地でもなく、また考古学的調査の点でもこの Cutch の地帯にはグプタ期の遺物は現在まで何も発見されていない [Majumdar & Altekar : *Vākāṭaka Gupta Age,* p.436]。この地に比定するにはやはり難点があろう。将来の検討を俟つ。

八　伐臘毗国

八・一　国勢の概観　伐臘毗(ヴァラビ)国(注一)は周囲六千余里ある。国の大都城(注二)は周囲三十余里ある。土地の産物、気候の具合、風俗性情などは摩臘婆(マーラヴァ)国と同じである。住民は殷賑、家々は富裕で、財を積むこと百億のものは百余室も「の家で」ある(注三)。遠方の珍奇な品物はこの国にたくさん集まって来る。伽藍は百余ヵ所、僧徒は六千余人、小乗正量部の教えを学んでいるものが多い(注四)。天祠は数百ヵ所、異道の人々が非常に多い。

注

一　伐臘毗国　伐臘毗 *b'i̯wɒt。-lâp。-。b'ji*: Skt. *valabhi, vallabhi.* 前項末尾の原注に「北羅羅国」とあるのは「南羅羅国」と訂すべきであろう（本巻の五・一注一参照）。なお、『西域記』に記す方向について、摩臘婆—(西北行三日)→契吒—(北行千余里)→伐臘毗国との記事は、摩臘婆＝マールワーとすれば伐臘毗国はよほど北方に位置することとなり、史上の Valabhi 国の位置に適しない。何れにしてもこの地帯の『記』の記述には不明瞭な点が多く、今後の検討を要しよう。史上の Valabhi（Vallabhi）国は今のカティアワル半島に当たり、Maitraka 王朝の西方分国であっ

た（その東方分国が摩臘婆国）。

二　国の大都城　当時の首都は半島の東岸のBhaunagarに近い古都Vala-bhipur（新市街Valaに当たる）である。ここは西方のローマにも比せられる古都であり、碑銘・封泥・彫刻等多くの遺物が発掘され、今多くのものがボンベイのPrince of Wales Museum of Western Indiaに保管されている。

三　財を積むこと……ある　『西域記』の「百余室有り」の文は、『釈迦方志』には「数百家有り」となっている。

四　伐臘毗国の仏教　当国における仏教教学が隆盛であった状況は、玄奘よりやや遅れるが義浄の『南海寄帰伝』四、西方学法の条に、諸学を修得した後に「然る後に函丈（師弟直接に）伝授し三、二年を経るもの、多くは那爛陀寺（中天なり）に、或いは跋臘毗国（西天なり）に在り。斯の両処は事、金馬・石渠・竜門・闕里（何れも中国における代表的な講学地）に等しく、英彦雲集し是非を商搉す」とある。インドにおける教学の二大中心地の一とするもので、当時の盛況は想像に余る。

八・二　付近の旧跡

如来の在世当時、しばしばこの国に遊行された。それで無憂王は仏が止まられた所に、何れも標旗を立て窣堵波を建立したのである。過去三仏の座所および散策・説法された処など遺跡は入りまじって存在している。（注一）

注

一　釈尊が在世中に当地に来遊した事実はなく、ここに記す仏跡等は仏教伝来流通後の付会に過ぎない。阿育王の塔については知る所がないが、有名なGirnarの磨崖碑文（Devanagari文字による十四章詔勅）は半島中部やや南寄りの同名の山の西麓にある。なお、この国の仏教については、L. Joshi : *Studies in the Buddhist Culture of India*, p. 50に詳しい。

八・三　常叡王とその崇仏

今の王は刹帝利種である。即ち昔の摩臘婆国の尸羅阿迭多王（戒日王、本巻の五・二参照）の姪で、今の羯若鞠闍国の尸羅阿迭多王（ハルシャ王、巻五の一・三参照）の娘婿であり、杜魯婆跋吒（原注　唐に常叡と言う）（注一）と号した。性質は落ちつきなく、智謀は浅薄な人であった。しかし篤く三宝を信じ、年ごとに「無遮」大会を七日間催し、この上ない御馳走を僧たちに供養し、三衣や医薬の費用、七宝や高貴の珍宝など、すべて布施してから値段を倍にして買い戻していた。徳者を貴び賢者を敬い、道を尊び学を重んじ、遠方の高僧には殊に敬意を表していた。

注

一　杜魯婆跋吒（……）　杜魯婆跋吒　°d'uo-°luo-₀b'uâ-b'uât₀-ṭa°: Skt. *dhruva-bhaṭṭa* (*dhruva-bhaṭa* とも)、『慈恩伝』四に「此に帝冑と言う」とあるのは「常冑」の誤りであろう。この王はMaitraka王朝第十一代Dhruva-sena二世と言い、Bālāditya とも号した。父のKharagraha一世は摩臘婆国のŚīlāditya一世と兄弟であったが、二分した。この二分国は七世紀の後半に伐臘毗系が滅んで再び統一し、ハルシャ王の帝国が瓦解すると共に、伐臘毗国として独立、勢威を振るった［Raychaudhuri : *P.H.A.I.*, pp. 629-30 ; Joshi : *Studies in the B. C.*, pp. 108-12］。

八・四　阿折羅建立の大寺

城を去ること遠からざる所に大伽藍がある。阿折羅阿羅漢（注一）（巻十の一三・二、巻十一の三・三参照）が建立したもので、徳慧（巻八の四・三参照）・堅慧（巻九の三・五参照）菩薩が留錫された所で、ここで論を作られた。ともに盛んに世に流布している。

ここから西北へ行くこと七百余里で阿難陀補羅国（原注　西印度の境）に至る。

注

一 阿折羅阿羅漢　Dharasena 二世の碑銘に、寺院建立者の梵名 Atharya が見える。玄奘の言う Skt. *ācāra* に当たろう［*Indian Antiquary*, Vol. IV. p.164 n. ; Vol. VI. p.9. ; Beal : *Records*, II. p.268 (75)］。

西印度境

* これより「五印度」区分の西インド Aparānta に入る。

九　阿難陀補羅国

阿難陀補羅国[注一]は周囲二千余里ある。国の大都城は周囲二十余里ある。人家は殷賑に、家々は富裕である。大君はなく、摩臘婆国に隷属している。産物気候、文字慣習は、それでここも［摩臘婆国と］同じとなっている。伽藍は十余ヵ所、僧徒は千人足らず、小乗正量部の教えを学習している。天祠は数十ヵ所、異道の人々が雑居している。

伐臘毘国より西へ行くこと五百余里で蘇刺侘国（原注　西印度の境）に至る。

注

一 阿難陀補羅国　阿難陀補羅。*ˆâ-ˌnân-ˌd'â-°puo-ˌlâ* : Skt. *ānanda-pura*. 以前の諸説ではアーマダバード付近に考えられた［St. Martin, Cunningham, Watters, 堀］が、今日ではより北方の Sidhpur の東南十七マイルの地点にある Vaḍnagar に比定されている［Dey : *G. D.*, p. 6 ; Law : *H.G.A.I.*, p.309 ; Murray's *Handbook*, p.167］。ここは今日もグジャラート地方の宗教都市として著名である。

一〇　蘇刺侘国

一〇・一　**国勢の概観**　蘇刺侘国[注一]は周囲四千余里ある。国の大都城[注二]は周囲三十余里ある。西は莫醯河に拠っている[注三]。住民は殷賑に、家々は富裕である。伐臘毘国に隷属している。土地は塩分あり、花・果は少ない。寒暖に差はないが、風強く騒がしい。人情は薄情で、性質は落ちつきがない。学芸を好まず、邪教・正法を兼ね信じている。伽藍は五十余ヵ所、僧徒は三千余人、多くは大乗［と小乗］上座部の教えを［兼ねて］学んでいる。天祠は百余ヵ所、異道の人々が雑居している。この国は西海[注四]への路に当たり、人々は何れも海の利により商業を生業とし、有無を交易している。

注

一 蘇刺侘国　蘇刺侘　*ˌsuo-lâtˌ-ˌt'a* : Pkt. *suraṭṭha* (Skt. *śurāṣṭra*) ［Turner : *C.D.*, no. 13504］。今のカティアワル半島の南半部に当たり、この半島に対するインド本土の地名 Surat はこの古名の名残りであると言う。古くより西洋諸国と交易し、『エリュトゥラー海案内記』第四一節にも Syrastrēnē の名が見える［村川訳、一九九ページの説明参照］。ただし、この半島の摩臘婆・阿吒釐・契吒・伐臘毘の諸国を「南印度境」とするに拘らず、方位・距離および地理・地名から見てこの半島南部に位置すると判断される当国を、「西印度境」と記す点は理解に苦しむ。

二 国の大都城　この首都は Girnar 山の西山裾にある Junāgaḍh, Junāgaṛh

(Jirnāgarh) である。ここは古えの Girinagara (Girnār) である。しかし、ここには十世紀以前の都市・寺院の遺跡は何も見られない [Majumdar's Note, in *C.A.G.I.*, p.697; Law: *H.G.A.I.*, p.283]。

三 西は莫醯河に拠っている　本書におけるこのような書き方は、通例よりすれば「大都城の西は莫醯 Mahi 河に拠る」即ち首都は河の東岸にありの意であるが、ここでこのように解するならば当を得ない。「西」を「国の東」の誤りと解し [Beal: *Records* II. p.268 (78)] ても、「四千余里」の直後に移すのでなければ意を通じ得ない。この地域一帯については不明確な記事が多い。

四 西海　アラビア・アフリカ・ローマを指す。注一参照。

一〇・二　郁鄯多山　城を去ること遠からざる所に郁鄯多山(注一)がある。山頂に伽藍がある。部屋や通廊は崖を掘ったものが多い。林樹は欝蒼と茂り、泉流は境内を巡って流れる。聖賢が錫を留め、仙人が集まる [ような霊妙な] 所である。(注二)

伐臘毗国より北へ行くこと千八百余里で瞿折羅国(原注　西印度の境)に至る。

注

一 郁鄯多山　郁鄯多 *ʼiuk-ʼźiän-tâ*: **ujjanta* (Skt. *ujjayanta*). 今日の Girnār (Pkt. *girnāra*, Skt. *girinagara*) 山の異名 (また Raivata とも言う)。旧都 Junāgadh の東方十マイルにある標高三千六百十六フィートの聖山。この山には石窟のみならず有名な阿育王の磨崖詔勅 (本巻の八・三注一参照) がある [Majumdar's Note, in *C.A.G.I.*, p.698; Law: *H.G.A.I.*, p.283, 300, Ūrjayat]。

二 山頂に伽藍がある……　Girnār 山は Junāgadh より登る道に沿って多くの石窟寺院があり、その古いものは阿育王当時にも遡り得るものがある [Murray's *Handbook*, pp. 189 ff.]。

一一　瞿折羅国

瞿折羅国(注一)は周囲五千余里ある。国の大都城は毗羅摩羅と言い(注二)、周囲三十余里ある。産物・風俗は蘇剌侘国と同じである。住民は殷賑に、家産は富裕である。外道に仕えるもの多く、仏法を信ずるものは少ない。伽藍は一ヵ所、僧は百余人、小乗の教えの説一切有部を学習している。天祠は数十ヵ所、異道の人々は雑居している。王は刹帝利種である。年は二十歳ほどで智勇の高遠な人であり、深く仏法を信じ優れた才能の人を尊敬している。(注三)

ここより東南へ行くこと二千八百余里で鄔闍衍那国(原注　南印度の境)に至る。

注

一 瞿折羅国　瞿折羅 *₀g'iu-źiät₀-₀lâ*: **gujala* (Pkt. *gujjara*, Pa. *gujar*, Skt. *gurjara* [Turner: *C.D.*, no. 4210]). 「折」字は阿折羅阿羅漢その他の時は「照母・薛韻」*tśiät.* の音である。しかし、ここで *gucara* の音を考えるのは如何であろうか。やはり、「禅母・薛韻」*źiät.* と見るべきであろう。とすれば、同一字を何の注記もなく二音に読み分けることとなり、本書では珍しい例となり、異様である。問題として残したい。この国へは、『慈恩伝』では「此れ (蘇剌侘国) より東北へ行くこと千八百里にして瞿折羅国に至る」と起点を異にしている。七世紀のグジャラートは今日のカティアワル半島に及ばず、ラジャスタン Rājasthān 南部をその領域としていた。その住民は遊牧民起源らしく、五世紀に侵入した白フンと関係があるようである [Smith: *E.H.I.*, p.340, 427]。

二 国の大都城は毗羅摩羅と言い　毗羅摩羅 *₀b'ji-₀lâ-₀muâ-₀lâ*: **bhillamāla*. この首都の比定に二説ある。一は Bārmer (25°48′N., 71°16′E.)

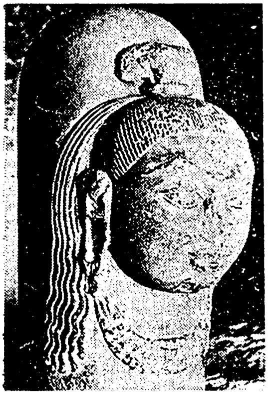
とする説 [St. Martin, Beal]、他は Bhinmāl (25°00′ N., 72°16′ E.) とする説 [Smith, Majumdar] である。後説の支持者が多い。

三 王は……尊敬している この王についてはなお知る所がない。

一二 鄔闍衍那国

鄔闍衍那国(ウッジャヤニー)[注一]は周囲六千余里ある。国の大都城[注二]は周囲三十余里ある。農産物・風俗は蘇剌侘(スラッタ)国と同じである。住民は殷賑に、家々は富裕である。伽藍は数十ヵ所あるが、倒壊しているものが多く、残っているものは三つ五つ。僧徒は三百余人、大・小二乗を兼ねて学習している。天祠は数十ヵ所、異道の人々が雑居している。王は婆羅門種である。邪教の書物に博く目を通し、正法を信仰していない。ここを去ること遠からざる所に窣堵波がある。無憂(アショーカ)王が地獄(監獄)を作った処である[注三]。

ここより東北へ行くこと千余里で擲枳陀国(原注 南印度の境)に至る。



シヴァ・リンガ,
ウダヤギリ第四窟

注

一 鄔闍衍那国 鄔闍衍那 ʔuo°-°ʑia-°jiän-°nâ: *ujjayana(Skt. ujjayani, ujjaini, Pa. ujjeni)、「鄔」字は『慈恩伝』麗本に「烏」(平声)に作る。或いは是か。また優禅耶尼・烏惹儞・鄔禅尼・鄔闍尼・嗢逝尼・漚祇尼・烏舍尼・鄔支に作る。古代十六大国の一で、文化大いに開け Kālidāsa の戯曲の完成地としても、また古代天文学家の子午線計測の起点でもあった。ギリシア文献 [Ptolemy, VII. 1.63;『エリュトゥラー海案内記』第四八節] に Ozēnē として見える都市で、Barygaza 港 (本巻の四参照) を通じ西方と交易する輸出入品の集散地であった [Majumdar's Note, in C.A.G.I., pp. 726 ff.; Law: H.G.A.I., p.332]。当地の考古学的調査の概略については、平凡社:『世界考古学大系』八、一〇〇ページ参照。

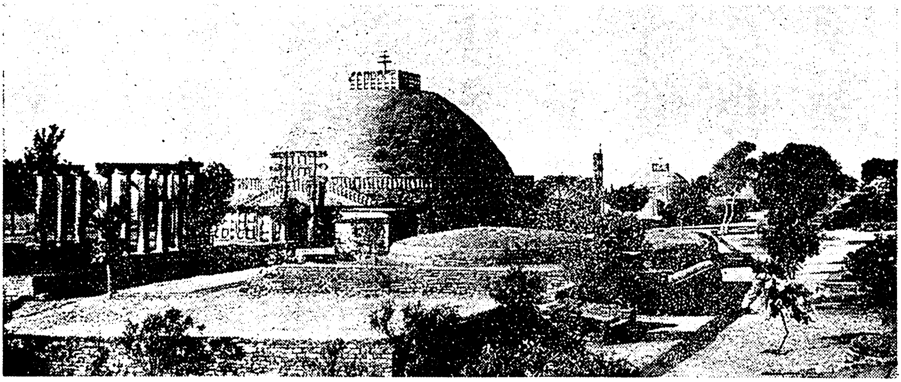
二 国の大都城 国名と同名の、今日の中央州のウッジャイン Ujjain に当たる。

三 無憂王が地獄を……である 阿育王が華氏城に牢獄を作り人民を苦しめた話は、巻八の二・二に見える。阿育王の王子時代に当地の総督であったことは事実と考えられるが、ここでもこのようなことをしたかどうかは不明である。

一三 擲枳陀国

擲枳陀国[注一]は周囲四千余里ある。国の大都城[注二]は周囲十五、六里ある。土地は肥沃と言われ、農業は盛大である。豆や麦が良く、花・果(なりもの)が多い。気候は順調温和で、人の性質は善良従順である。外道を信ずるもの多く、仏法を信ずるものは少ない。伽藍は数十ヵ所、少しく僧徒がいる。天祠は十余ヵ所、外道は千余人いる。王は婆羅門種である。篤く[仏法僧の]三宝を信じ有徳の人を尊重し、諸方の学芸に博く達している人々は多くこの国に集まって来る[注三]。

ここより北へ行くこと九百余里で摩醯湿伐羅補羅(マーヘーシヴァラプラ)国(原注 中印度の境)に至る。



サーンチーの遺跡

注

一 擲枳陀国　擲枳陀 *ḍi̯äk*。-。*ki̯ię*。*d'ā* は原音未詳。「擲」字の使用は本書においてこの一例のみ。同じく「澄母」*ḍ'i-* の頭子音の字では、烏仗那 *Uḍḍiyāna*（巻三の一）、憍陳如 *kauṇḍinya*（巻七の一・三）、捃稚迦 *kuṇḍikā*（巻十の一・四）等がある。「昔」韻の韻母の字では赤鄂衍那 *cagayāna* の例がある。この声韻両面から見て「擲」字は *ḍa* のような音に対応するものと言えよう。「枳」*ki*,「陀」*da*（何れも用例多し）。従って「擲枳陀」は **ḍakida* のような音を意図したものと推察されるが、これに対応するような古地名は今の所、見出だし得ない。古くは Jejā-bhukti, Jaja-bhukti（Skt. *jejā-kabhukti*）, 即ち今の Bundelkhand に当たる地域と考えた［Cunningham, Smith］。これに対し、これは余り遠く考え過ぎるとして、ウッジャインより北方にあたる Chitorgarh（Chitor を擲枳陀 Chih-chi-t'o の対音とする）に当たる地域とする説［Watters］がある。前説に賛同するものが多いが、今は何れとも断じ難い。

二 国の大都城　今の Bundelkhand の地域を当てる説では Khajurāho（Kharjurāha）を首都と考え、Chitor の地域の説では Chitor（ウッジャインより西北二百二十キロ）を考える。しかし、Chitor はさして古い都市ではなさそうである［Murray's *Handbook*, p.124］。

三 この国を Bundelkhand とする場合、ウッジャインより何れの道を通ったか不明であるが、もし、最短距離を取り Bhopal 経由を選んだとすれば、Bhopal より東北僅かの所に有名なサーンチー Sanchi がある。玄奘はこのサーンチーの仏塔について何の記述もしていない。

一四　摩醯湿伐羅補羅国

摩醯湿伐羅補羅国（マヘーシヴァラプラ）[注一]は周囲三千余里ある。国の大都城[注二]は周囲二十余里ある。農産物・風俗は鄔闍衍那国（ウッジャヤニー）と同じである。外道を崇敬して、仏法を信じない。天祠は数十ヵ所、多くは塗灰外道の仲間である。王は婆羅門種である。余り仏法を尊敬していない。

ここより瞿折羅国（グッジャラ）に帰還し、さらに北へ荒れた野原や危険な砂漠を行き、千九百余里を経て信度大河（インダス）（巻一の一参照）を渡り、信度国（シンドゥ）（原注　西印度の境）に至る。

注

一 摩醯湿伐羅補羅国　摩醯湿伐羅補羅 。*muâ*-。*xiei*-*śi̯əp*。-*b'i̯wɒt*。-。*lâ*-°*puo*-

。*la*：Skt. *maheśvarapura.* 前項末尾に「擲枳陀国より東へ」とあるが、『慈恩伝』には「東北へ」とする。この国の比定にも二説ある。一は前項の擲枳陀国を Bundelkhand として、その北方とすれば Kanoj の近辺となるため、恐らく「北」は「南」の誤りならんとして、ナルマダー河上流の Mandala (Mandla) に比定する。ここは Maheṣmatipura とも言われる古都で諸種の条件に適合すると言う [Cunningham：*A.G.I.*, p.559]。二は前説が「北」を「南」と改訂することに賛同せず、Bundelkhand よりやや西寄りの北にあるグワリオル Gwalior を中心とする地域に比定する [Smith, in *On Y. Ch.*, II. p.342]。後説を採るものが多い。擲枳陀国を Chitor とする説を採るものは、この国を今の何処とするかの比定をしない [Watters：*On Y. Ch.*, II. p.251]。

二　国の大都城　グワリオルを中心とする地域の説を取るものは、その首都をグワリオルとする。この町は碑文によれば古い神殿を建てた時代は Mihiragula (本書の摩醯邏矩羅、巻四の一・二参照) であると言う。今日においてはほとんどが回教寺院である [Murray's *Handbook*, p.144；天沼：『印度仏塔巡礼記』上一五八ページ以下]。なおこの首都の「周囲二十余里」は宋本に「三十余里」に作る。

一五　信度国

一五・一　国勢の概観

信度国[注一]は周囲七千余里ある。国の大都城は毗苫婆補羅と号し、周囲三十余里ある[注二]。農業に適し、宿麦が豊富である。金・銀・鍮石(巻一の三七・一参照)を産出し、牛・羊・駱駝・騾馬の類に適している。駱駝は小さく、瘤が唯一つである。赤塩(色は赤石のよう)[注三]・白塩・黒塩および白石塩等を産出する。外国や遠方ではこれを薬としている。人の性質は烈しくかつ真直であり、よく人と争い謗ることが多い。学芸は博いことを好まないが、深く仏法を信じている。伽藍は数百ヵ所、僧徒は一万余人、みな小乗の正量部の教えを学んでいる。おおむね怠惰で、その行ないは劣悪である。精勤にして善良なものは唯一人閑静な所に住み、姿を山林に遠ざけて、朝夕怠ることなく、聖果を證するものが多い。天祠は三十余ヵ所、異道の人々が雑居している。王は戍陀羅種(巻二の一・九参照)である。性質は淳朴で仏法を尊敬している。如来はその昔しばしばこの国に遊化されたことがある[注四]。それで無憂王は聖跡の地に窣堵波を建てること数十ヵ所に及んでいる。烏波毱多大阿羅漢(巻四の七・三参照)はしばしばこの国に遊化した。その説法指導し留錫された所には、みな遺跡を標示し、或いは僧伽藍を建てたり、或いは窣堵波を起てたりしている。これらのものが入りまじり立っており、その概略については述べることができる。

注

一　信度国　信度 *sjĕn°-d'uo°*：Skt. *sindhu.* 現在のパキスタン領内北部 Sind (Upper Sind) のスックル Sukkur 地区を中心とする地域に当たると見られている [Cunningham：*A.G.I.*, p.285]。『慈恩伝』巻四の記述による玄奘の行程は、本書に記す道筋とは異なる。『伝』によれば、摩醯湿伐羅補羅国―(西して)→蘇刺侘国(に還り)―(西行して)→阿点婆翅羅国―(西行二千余里)→狼掲羅国―(東北行七百余里)→臂多勢羅国―(東北行三百余里)→阿軬荼国―(東行七百余里)→信度国の順とする。この差異の由って来たる所を詳かにしない。通常『伝』の記述に従って玄奘の行路を定める。

二　国の大都城は毗苫婆補羅……ある　毗苫婆補羅 。*b'ji-*。*śjäm-*。*b'uâ-*°*puo-*。*lâ*：**viśambapura.* Vichavapura [Julien], Vichālapura [St. Martin], Bichwāpura [Cunningham], Vasmapura [Beal], Vijnapura [Majumdar] 等種々に再構成が考えられている。また、この地名は当時の一般名ではなくて雅名であろうとして、再構成を示さないものもある [Watters：*On Y. Ch.*, II. p.253]。地名の再構成は定かではないが、何れも現在の

パキスタン領、スックル地区にある Alor (Aror, Arore) に比定している。今の Alor の町の東方五マイルにある古跡は、Uch, ハイデラバード Hyderabad と共にアレクサンドロスによって創められた町と信じられている古都である [Murray's *Handbook*, p.473]。

三　（色は赤石のよう）　原文ではこの句を注とはしていない。前後の関係からも、『慈恩伝』にはこの句がないことからも併せて、注の文として取り扱った。なお、インドでは今日も海産の塩よりも陸産の塩の方が多く使われる。ラジャスタンの地区では、Alor の遙か東方、ジャイプルの西七十キロにある Sambar 湖の湖塩は有名である。

四　如来は……ある　如来遊化の伝記は仏教伝来以後に起こったものであろう。

一五・二　**外僧内俗の風習**　信度河の千余里にわたる沼沢の間には、数百千戸もの家がここに住まいをしている。その人々の性質は烈しく、生き物を殺すことだけを生業としており、牛を飼って自活し、所属する所とてはない。男であれ女であれ、貴となく賤となく、みな鬚も髪も剃り袈裟を身につけている。姿は苾芻（比丘）に類しているが、俗人の仕事を行なっている。ひたすら狭小な見解（小乗）をとり、大乗を排斥している。先達の話によれば次のようである。昔、この土地の人々は平気で残忍なことをし、残悪なことばかりをしていた。折しもある羅漢がその堕落を哀れみ、かれらを教化せんものと虚空を飛んでやって来て、大神通力を現わし世にも稀な事象を示し、人々を信服させて次第に言葉で指導した。人々は心より喜び指導を受けようと願った。羅漢は人々の心が素直になったことを察知し、かれらに三帰戒（仏法僧に帰依する戒）を授けて、その凶暴を止め殺生を完全にやめさせ、剃髪出家して恭んで仏の教えを行なわせた。年月次第に遠く世変わり時移り、善業は行なわなくなったが、その余風は尽きずに、法服を身につけているが戒を守ることは全くなく、子々孫々に習慣で風俗となっているのである、(注一)と。

ここより東へ行くこと九百余里、信度河を渡り、東岸［を行きて］茂羅三部盧国（原注　西印度の境）に至る。

注

一　信度河畔のこの伝説・風俗については、諸書に何の注解も見えない。

一六　茂羅三部盧国

茂羅三部盧国(注一)は周囲四千余里ある。国の大都城(注二)は周囲三十余里ある。住民は盛大に、家々は富裕である。磔迦国（巻四の一参照）に隷属している。田地はよく肥え、気候は順調である。風俗は質朴で、学芸を好み、徳行を尊ぶ。天神を奉ずるもの多く、仏法を信ずるものは少ない。伽藍は十余ヵ所、多くはすでに破壊しており、少しく僧徒はいるが、その学ぶ所に何を専攻すると言うこともない。天祠は八ヵ所、異道の人々が雑居している。日天（Sūrya. 巻十の一・三参照）の祠があり、その荘厳は甚だ麗しい。その日天の像は黄金で鋳造してあり、珍宝で飾ってある。その神の照覧はいたる所に通じ、その霊験は人知れず及ぶ。婦人による音楽は次々に演奏され、神前の燈火は日を継いで点ぜられる。香花の供養は最初より廃止されたことはない。(注三)五印度中の諸国の王族・豪族はみなここに珍宝を布施し福舎(注四)を建立し、飲食・医薬を貧民・病人に供給し救済している。諸国の人々でここへ来て願をかけるもの、常に千をもって数えるほどである。天祠の四周には池沼・

花林あり、賞で遊覧するに足る所である。
ここより東北へ行くこと七百余里で鉢伐多国（原注　北印度の境）に至る。

注

一　茂羅三部盧国　茂羅三部盧 *mḙu°-.lâ-.sâm-°b'uo-.luo*: **molasamburu*. この原音の推定には従来諸説があり、定まらない。Mulasambhura [Julien], Morasampuru, Molasampul [Watters] 等と推測し、何れも Skt. *mūlasthānapura* よりの転化と考える。インダス河の上流、Chenab 河と Sutlej 河の合流する三角州一帯、今のムルタン Multān 地域であるとする [Beal: *Records*, II. p.274 (85); Smith, in *On Y. Ch.*, II. p.342; Majumdar's Note, in *C.A.G.I.*, p.688; Law: *H.G.A.I.*, p.112]。

二　国の大都城　今のムルタンとする。ただし、この地域とこの町は何れも信度国より「東」ではなく、「東北」にある。

三　ムルタンの天神の偶像についてはイスラム文献の Istakhri（略九五〇）, Al-Beruni（略一〇三〇）に詳しい。それによれば、この像は商人たちの篤い信仰を受け、ルビーの眼、皮の衣、金冠を着ける。この像はしばしば破壊されたが、一六六六年の Thévenot の旅行記 [*Relations de divers Voyages Curieux*] にはなお存したことが記されている [Dey: *Geogr. Dict.*, p.133; Murray's *Handbook*, p.474; Sachau: *Alberuni's India*, I. p.116]。

四　福舎　Skt. *puṇyaśāla*. 巻四の一・一、巻十二の一八・五参照。

一七　鉢伐多国

鉢伐多国(注一)は周囲五千余里ある。国の大都城は周囲二十余里ある。住民は盛んで、磔迦国（巻四の一参照）に隷属している。早稲が多く、宿麦に適している。気候は快適で、風俗は質朴である。人の性質落ちつきなく、言語には田舎言葉が混じる。学芸は深くかつ博く、邪教・正法とともに雑信している。伽藍は十余ヵ所、僧徒は千余人、大小の二乗を兼ねて学習している。四つの窣堵波は無憂王が建てたものである。城側に大伽藍がある。僧徒は百余人、みな大乗教を学んでいる。ここはその昔、慎那弗呾羅（原注　唐に最勝子と言う）(注二)論師がここで『瑜伽師地釈論』(注三)を作られた所であり、また、賢愛論師（本巻の五・三参照）・徳光論師（巻四の一〇・三参照）が出家された処である(注四)。この大伽藍は天火に焼かれ、崩れ落ち荒廃している。

信度国より西南へ行くこと千五、六百里で阿点婆翅羅国（原注　西印度の境）に至る。

注

一　鉢伐多国　鉢伐多 *puât.-b'i̯wɐt.-.tâ*: Skt. *parvata*（山の意）。この国名は古くより著名で、Pāṇini: *Aṣṭādhyāyī* にはタクシャシラー Takṣaśilā (IV. 3. 93, 呾叉始羅国、巻三の三参照) に属する国として出ている (IV. 2. 143)。以前にはカシュミール南部のジャンム Jammū に当てられていた [Cunningham: *A.G.I.*, p.233; Beal: *Records*, II. p.275 (87); Watters: *On Y. Ch.*, II. p.255, 342] が、茂羅三部盧国（今のムルタン）より七百里とするには実距離が余りにあり過ぎるために（約二百五十マイル）、今日はモンゴメリー Montgomery 地区のハラッパー Harapa (Harappa, Harapāda) 一帯の地域に比定され、首都もこの町とされる [Majumdar's Note, in *C.A.G.I.*, p.687]。ハラッパーはモヘンジョダロ Mohenjodaro と共に先史時代の遺跡として有名である。ここも丘陵である。

二　慎那弗呾羅（……）論師　慎那弗呾羅 *ʑi̯ěn°-.nâ-.pi̯uət.-tât.-.lâ*: Skt. *jina-putra*. また辰那弗多羅とも。最勝子・仏子・最勝真子と訳される。唯識十大論師の一で、護法（巻十の一六・三参照）の弟子。

三　『瑜伽師地釈論』　今に伝わる『瑜伽師地論釈』 Yogācāryabhūmiśāstra-kārikā（最勝子等造、唐・玄奘訳）一巻のことである。
四　鉢伐多国の仏教　『慈恩伝』四に、「又其の国に二、三の大徳あり、並びに学業遵(したが)うべし。法師因って停まること二年、就いて正量部の『根本阿毗達摩』及び『摂正法論』『教実論』等を学ぶ」とある。

一八　阿点婆翅羅国

阿点婆翅羅国(注一)は周囲五千余里ある。国の大都城は揭齰湿伐羅と言い(注二)、周囲三十余里ある。西境に偏在し、信度(インダス)河に臨み、大海の海岸に接している。家屋は装飾し、珍しい宝が多い。最近は［自らの］君主をもたず、信度(シンドゥ)国に統轄されている。土地は卑湿で、土質は塩分を含んでいる。雑草が生い茂り、畑は少しく耕されている。穀物は十分であるが、宿麦(むぎ)が特に豊富である。気候は少しく寒く、旋風が強烈である。牛・羊・駱駝(らくだ)・騾馬(らば)の類［の畜養］に適している。人の性質は粗暴で、学問を好まない。言語はやや中印度に異なっている(注三)。風俗は純朴で、三宝を篤く敬う。伽藍は八十余ヵ所(注四)、僧徒は五千余人、多くは小乗の正量部の教えを学んでいる。天祠は十ヵ所、多くは塗灰外道の住居となっている。城中に大自在天（湿婆神）の祠がある。祠堂は彫刻の装飾があり、神像は霊験あらたかである。その昔、如来はしばしばこの国に遊化され、法を説き人を済度し、凡俗を化導利益された。それ故、無憂王は聖跡の地に六つの窣堵波を建てたのである。

ここより西へ行くこと二千里たらずで狼揭羅国（原注　西印度の境）に至る。

注

一　阿点婆翅羅国　阿点婆翅羅 ˳*ʾâ-ˀtiem-˳bʻuâ-śię̯ˀ-˳lâ* : **atembaśila.* この国名の原音推定に異説がある。Adhyavakila, Atyanvakela [Julien], Audumbatira, Audumbara [Cunningham], Atyanabakela [Beal], Ādinavachila [Watters]. Audumbara とはインダス河口のカッチ Kacch に住む民族の名であり、Pliny の『博物誌』[VI. 23] に見える Odomboeroe であると言う [Cunningham : *A.G.I.*, p.347]。玄奘の耳にしたのは、何れ転訛した音であろうが、その対音も原梵語も将来の問題とせざるを得ない。なお、この間の道筋については、本巻の一五・一注一参照。

二　大都城は……と言い　揭齰湿伐羅 *kʻįät˳-dẓʻïei̯ˀ-śįəp˳-bʻi̯wnt˳-˳lâ* : **kajeśvara.* この漢字の対音推定にも異説がある。Khajiśvara [Julien], Kacchesvara [Lassen], Koṭiśvara [Cunningham]. 玄奘の表記は Kacche-śvara の転訛した音であろうか。今のカラチ Karāchi に当たるとされる。

三　言語　シンド地方の言語はインド・アーリヤ語の西北支派中の Sindhi 語で、これには五つの方言がある。カラチ地方はこのうち Lari (Lower Sind) 方言と言われるものを話す。粗雑な荒々しい言葉であるが、西北方言特有の種々の古風な特色を保持している [Grierson : *On the Modern Indo-Aryan Vernaculars*, p.18]。

四　伽藍　シンド地方には従来見過ごされて来た多くの塔や仏教遺跡があると言うが、近来の発掘調査については詳かにしない [Smith : *E. H. I.*, p. 368]。

一九　狼揭羅国

狼揭羅国(注一)は東西・南北それぞれ数千里ある。国の大都城は周囲三十余里あり、窣莵黎湿伐羅と言う(注二)。土地肥沃に、農業は盛んである。気候・風俗は阿点婆翅羅国（前節参照）と同じである。住民は盛大で、珍しい宝の類が多い。大海の海岸に臨み、西女国（本巻の二〇・二参照）に

入る道筋である。大君主はなく川を拠点にして自立し、命令は受けないが波剌斯国(次節参照)に隷属している。文字はおおむね印度と同じであるが、言語は少しく異なっている。(注三) 邪教・正法共に信じている。伽藍は百余ヵ所、僧徒は六千余人、大・小の二乗を兼ねて学習している。天祠は数百ヵ所、塗灰外道はその仲間が非常に多い。城中に大自在天祠がある。壮麗に荘厳し、塗灰外道が信奉している。

ここより西北すると、波剌斯国(原注 印度の国ではないが、路次につき付見す。旧に波斯と曰うは略なり)に至る。

注

一 狼掲羅国 狼掲羅 ˳lâng-g'i̯ɒt˳-˳lâ: *laṅgala. 従来は Langala [Julien], Langa [St. Martin], Longhir [Beal], Lankar [Watters] と諸種の推定をされている。対音の推定はともかく、位置は今の Mekran の東部バルチスタン Balūchistān の東南部に比定される。

二 国の大都城は……と言う 窣莵黎湿伐羅 suət˳-t'uo°-˳liei-śi̯əp˳-b'i̯ʷɒt˳-˳lâ: *stūreśvara. 従来の推定には、Sūnuriśvara [Julien, Beal], Sambhurisvara (well-known title of Siva as the "lord of divine beings", or the "god of gods") [Cunningham], Striśvara (=stri-iśvara, "Woman Paramount") [Watters] の諸説がある。この位置は Khozdar と Kilāt の間の Lākoriān の大きな廃都に比定される。その規模・威容・構造等はかつての国都たるにふさわしい。地図上には単に Lakūra と記されるが、この音も狼掲羅に似ていると言う [Cunningham: *A.G.I.*, p. 355]。

三 文字と言語 文字については、今日はペルシア文字を改変したものである。言語はイラン語に属する西部 Balōchi 語を話す。インドの西北方言とペルシア語に挟まれた地域で、古来混淆が激しい。

二〇 波剌斯国

二〇・一 国勢の概観 波剌斯国(注一)は周囲数万里ある。国の大都城は蘇剌薩儻那と言い、(注二) 周囲四十余里ある。川も多く気候も異なっているが、おおむね温暖である。水を引いて田を作り、人家は富裕である。金・鍮石・頗胝(巻一の一参照)・水精など世にも珍しい宝を産出し、大錦・細褐・氍毹(注三)の類を上手に織る。良い馬・駱駝が多く、貨幣は大銀銭を使用する。人の性質は粗暴で、その習いとして礼儀がない。文字・言語は諸国に異なっている。学芸はなく、工芸に巧みであり、その造る品々は隣国に重んぜられている。婚姻は乱れ、(注四) 死ぬと屍体を棄ててしまう場合が多い。(注五) 体軀は大きく、頭髪を整え露頭(冠をかぶらぬ)にし、[身分低きものは] 皮衣を身につけ [高きものは] 錦・氈を着る。家ごとに税金を課し、一人あたり四銀銭を取る。(注六) 天祠は非常に多く、提那跋(注七)外道の徒が信奉している。伽藍は二、三ヵ所、僧徒は数百人、みな小乗教の説一切有部の教えを学習している。釈迦仏の仏鉢は今この王宮にある。(注八) 国の東の境に鶻秣城(注九)がある。内城は広くないが、外廓は周囲六十余里ある。住人は多く、家産は豊かである。

注

一 波剌斯国 伝聞国である。波剌斯 ˳puâ-lât˳-˳sie̯: *pārasi, pārsi (Old Iran. *pārsa*) [Persepolis の Darius 碑文]。ペルシア即ち今日のイランである。玄奘の訪印はペルシアが正に回教徒の手に落ちんとする薩珊 Sāsān 朝の最末期であったから、玄奘の記述はこの王朝期のものと解してよかろう。

二 国の大都城は……と言い 蘇剌薩儻那 ˳suo-lât˳-sât˳-t'âng°-˳nâ: Skt.


「祭壇上の火の神」ササン朝凹刻宝石

sura-sthāna (「神の居所」の意)。この梵名が如何なる原語によるものかは不明であるが、ササン朝の国都はペルセポリス Persepolis (回教徒侵入後の Iṣṭakhr) である。この近くには鉱山があった。なお、シラズ Shirāz は回教徒の手により後に大きくなった町である [Minorsky : *Ḥ.-ʿĀ.*, p.126, 376 ; Le Strange : *The Lands of the Eastern Caliphate*, p.249, 275]。

三 大錦・細褐・氍毹　大錦とは単に大きな錦、いわゆるペルシア錦のことであろうか。細褐は細い毛織物、氍毹は毛氈のこと。ペルシアの産物については、『魏書』波斯伝に詳しく、玄奘の記述を補うに足るものがある。

四 婚姻は乱れ　『魏書』に「多くは姉妹を以て妻妾となし、自余の雑婚は亦尊卑を択(えら)ばず」とある。

五 死ぬと……多い　屍体を山上に遺棄することは、ペルシアの国教ゾロアスター Zarathushtra 教の教えによる。

六 家ごとに……取る　税制については『魏書』に「賦税は則ち地に準じて銀銭を輸(いた)す」と、玄奘の記述とやや異なる。

七 提那跋外道　提那跋 *ₒd'iei-ₒnâ-b'uâtₒ* : **dinabat* (＜Skt. *dinapati* 太陽の意) [Beal : *Records*, II. p.278 (93)]、ゾロアスター教では、太陽は神の目と認められ、火と共に重要な崇拝の対象であった。この提那跋外道 (太陽崇拝信徒) はかれらを指すものであろうか。

八 伽藍は……仏鉢は今この王宮にある　ペルシアに寺院があり僧徒がおり、小乗教を伝え仏鉢を奉持していると言う記事は他書に見ない。その何れについても真偽・詳細は不明である。

九 鶴秣城　鶴秣 *γâkₒ-muâtₒ*. 従来はビールが Ormus ? [*Records*, II. p.278] と疑問ながら比定した一例以外、他の試みを見ない。「波剌斯国の東境」にあるとの記事よりして、ペルシア湾口のミナブ Mināb 付近に古くあった港町ホルムズ Hormuz のことであろう。この港は Urmūz [Ibn Khurdādbih (八四六)], Hormuz [Iṣṭakhrī (九五一)], Hurmūz [*Ḥ.-ʿĀ.* (九八二)], Urmūṣ [Mustawfī (一三四〇)] と、イスラム文献に表わされている。この港の古今の歴史については、Le Strange : *The Lands*, pp. 318 ff. に見える。

二〇・二　西方の諸国　［波剌斯国の］西北は払懍(フルム)国(注一)に接している。土地・風俗は波剌斯国に同様であるが、容貌・言語はやや異なっている。珍宝が多く、この国も富裕である。払懍国の西南の島に西女国(注二)がある。みな女子ばかりで、ほとんど男子がいない。いろいろな珍しい品々が多い。払懍に服しているので、払懍王は毎年男子をやって配(めあわ)せている。その俗(ならい)として男を生めば、みな育てない。

阿点婆翅羅国より北して、行くこと七百余里で臂多勢羅(ピータシャイラ)国（原注　西印度の境）に至る。

注

一 払懍国　伝聞国である。払懍 *p'i̯uətₒ-°li̯əm* : **prum*. イラン語族がシリア・パレスティナ等の東ローマを指す語で、中世ペルシア語・ソグド語等の文献に表われる From, Hrom, Hrum, Porum (ローマ Rum を訛った語) に対する漢字。普嵐［『魏書』］・伏盧尼［『魏書』『北史』］・払菻［『隋書』］等とも［白鳥庫吉：「払菻問題の新解釈」『全集』第七巻所収；榎一雄：「唐代の払菻国に関する一問題」『北亜細亜学報』二 (昭和十八年) 所収］。

二 西女国　本巻の一・二に見える「西大女国」のことであろう。*Marco Polo* [Yule & Cordier, II. p.404] にも、この近辺に男子のみの島と女子のみの島がある伝説をのせる。何れの島であるかの比定は恐らく実りのない努力に終わるであろうが、古来の試みを同書の注に挙げている。

二一 臂多勢羅国

臂多勢羅国(注一)は周囲三千余里ある。国の大都城(注二)は周囲二十余里ある。住民は盛大である。大君主はなく、信度国に隷属している。土地は塩っぽい砂地で、寒風が強烈である。宿麦が多く、花・果は少ない。それで風俗は粗暴に、言語は中印度に異なっている(注三)。学芸は好まないが、信仰することは心得ている。伽藍は五十余ヵ所、僧徒は三千余人、みな小乗の正量部の教えを学んでいる。天祠は二十余ヵ所、みな塗灰外道である。城の北十五、六里の大林の中に窣堵波がある。高さ数百尺、無憂王が建てたものである。中に舎利があり、時に光明を放つことがある。如来が昔、仙人となり国王に殺害された処である(注四)。この東、遠からざる所に古い伽藍がある。昔、大迦多延那大阿羅漢(巻四の二一・三参照)が建立したものである。その傍には過去四仏の座所および散策の遺跡の場所がある。窣堵波を建てて標記としている(注五)。

ここより東北へ行くこと三百余里で阿軬荼国(原注 西印度の境)に至る。

注

一 臂多勢羅国 『慈恩伝』には「又、狼掲羅国より東北へ行くこと七百余里、臂多勢羅国に至る」と行路に異がある。臂多勢羅 *pjię°-°ta-śiäi°-°la* : Skt. *pitaśaila* (「黄白い山」の意)。現在のハイデラバード付近に比定される [Cunningham : *A.G.I.*, p.323, 692 ; Watters : *On Y. Ch.*, II. p.258 ; Dey : *Geogr. Dict.*, p.151]。

二 国の大都城 前注によってハイデラバードに比定される。この町は平坦な丘の上に作られている [Murray's *Handbook*, p.471]。

三 言語は中印度に異なっている 今日のハイデラバードは Sindhi 語(本巻の一八注三参照)中の Vicoli 方言を話す。この方言は Sindhi 語中の標準的なものとされている。

四 如来が……ある 如来が仙人となり、国王に殺されたと言う説話は、如何なる本生譚に該当するか未詳。

五 迦多延那建立伝説と仏跡 何れも後世の仏教流布後の付会である。

二二 阿軬荼国

二二・一 国勢の概観 阿軬荼国(注一)は周囲二千四、五百里ある。大君主はなく、信度国に隷属している。国の大都城(注二)は周囲二十余里ある。土地は稼業に適し、宿麦が特に豊富である。花・果は少なく、草木もまばらである。気候は風寒く、人の性質は烈しい。言葉は質朴で、学業を尊重しない。しかし[仏法僧の]三宝は信ずること篤い。伽藍は二十余ヵ所、僧徒は二千余人、多くは小乗の正量部の教えを学んでいる。天祠は五ヵ所、みな塗灰外道の人々である。

注

一 阿軬荼国 阿軬荼 °*ʼâ-°bʻi̯wɒn-°dʼa* : **avaṇḍa*. 今日の Brāhmaṇabād 或いは Khairpur 付近に比定される [Cunningham : *A. G. I.*, p. 310 ; Watters : *On Y. Ch.*, II. p.259]。『慧琳音義』八一に「阿軬荼 梵語なり。字義を求めず」とある。

二 国の大都城 前注の Brāhmaṇabād 或いは Khairpur と考えられているが、確たる歴史的徴証は示されていない。

二二・二 戒律の特例 城の東北、遠からざる大きな竹林中の伽藍

の廃址は、如来が昔ここで苾芻たちが亟縛屣（原注　唐に靴と言う）(注一)を着用することを許された所である。傍に窣堵波がある。無憂王が建てたものである。基は傾き崩れているが、なお高さ百余尺ある。無憂王が建てたものである。その傍の精舎に青石の仏の立像がある。斎日になると神々しい光を放つことがある。その南八百余歩の所の林中に窣堵波がある。無憂王が建てたものである。如来が昔ここに止宿されたところ、夜寒かったので三衣（巻二の一・六参照）を重ねて上にかけられ、翌朝に苾芻たちが納衣（巻三の六・四参照）を重ねることを許された。(注二)この林の中に仏が散策された処がある。また窣堵波群があり、次々と並んでいる。みな過去四仏の座処である。その窣堵波の中には如来の髪・爪が入っている。斎日になると光明を放つことが多い。

ここより東北へ行くこと九百余里で伐刺拏国（原注　西印度の境）に至る。

注

一　亟縛屣（……）　原注に「唐言云々」とある点より見れば、本書の通例よりして梵語の如くであるが、従来これは漢語と考えられている。屣は草履のように足にひっかけ容易に脱げる履物であり、岩石荊棘に脚を傷めることが多い。このため脚部にしっかりと結縛し保護する必要がある。「亟」は「急」に通じ、「亟縛」は「急縛」即ち「きつく結びつける」の意であろう。仏陀が王舎城におられた時、阿槃提 Avanti の億耳 Soṇa-koṭi-kaṇṇa 比丘が、大迦栴延及びその他の比丘の山地の往来に脚を傷めるのを見て、厚い皮の靴を使用する特例を仏陀に請い、許されたことがある［『四分律』三九、『五分律』二一、『十誦律』二五、『僧祇律』二三、*Mahāvagga* 5, 13］。この阿槃提 Avanti は中インドのナルマダー河畔の地とも、西インドの Surāṣṭra とも言う［Law : *H. G. A. I.*, p.305］。玄奘はこの阿槃提 Avanti と阿斄茶 *Avaṇḍa を混同したものであろうか。

二　如来が三衣重覆を許された　仏陀が吠舎釐城におられた時、気温が急に下がったため、比丘たちに衣服を重ねて着用することを許されたと言う［『五分律』二〇、『僧祇律』二三、*Mahāvagga* 8, 13］。これも阿斄茶国でのことではない。

二三　伐刺拏国

二三・一　**国勢の概観**　伐刺拏国(注一)は周囲四千余里ある。国の大都城(注二)は周囲二十余里ある。住民は盛大で、迦畢試国（巻一の三八）に隷属している。土地は山林が多く、農業は適時に行なっている。気候はやや寒く、風俗は荒々しい。性格は短気で、心は卑しい。言語は少しく中印度と同じである。(注三)邪教・正法兼ねて信じ、学芸を好まない。伽藍は数十ヵ所、荒廃しているものが多い。僧徒は三百余人、みな大乗の教えを学んでいる。天祠は五ヵ所、多くは塗灰外道である。城の南、遠からざる所に古い伽藍がある。如来がその昔ここで説法をし、善悪を教え法利を以て人の心を喜ばして、衆生の眼を開いた。その側に過去四仏の座所および散策の遺跡の処がある。(注四)

注

一　伐刺拏国　『慈恩伝』五に見える玄奘の帰途は、中インドより西北に行くこと一月余日で闍爛達羅国（巻四の三）に、さらに二十余日にして僧訶補羅国（巻三の四）に至り、それより更に二十余日にして呾叉始羅国（巻三の三）を過ぎインダス河を渡り、更に西北に道をとること一月余日で藍波国（巻二の二）を過ぎ、これより西南行すること十五日で伐刺拏国に至る順序である（ただし、この方位・道順は実際の地理に考え合わせ、多少疑問がある）。伐刺拏 *b'i̯wɒt.-lâp.-.na* : **varaṇa, varṇa*. Pāṇini [IV. 2, 103 ; IV. 3, 93] には Varṇu と言う名で、今のガズニ

Ghazni の東南にあるバンヌ Bannu（＜Varṇu？）地方が挙げられている。Bannu 渓谷は Kurram 河が流れ、やがてインダス河に注ぐ［V.S. Agrawala : *India as known to Pāṇini*, p.44］。この伐刺拏は『法顕伝』に跋那と言う国に当たるものであろう。

二　国の大都城　恐らく今のバンヌであろう。同市は東北のペシャワルから西南へ Kohat, Waziristan を通りクエッタ Quetta へ通ずる幹線上の要衝である。

三　言語　今日この地域はイラン語の東端と見られる Pushto 語が話され、このすぐ東はインド・アーリヤ語の西北方言に接する。ここに「中印度と少しく同じ語を話す」と言う記事は、玄奘の当時においては、西北方言系の言語が今よりも西に伸びていたことを示すものであろうか。

四　如来が……遺跡の処がある　如来・過去四仏等の遺跡はもちろん仏教渡来後の付会である。

二三・二　**稽畺那国についての伝聞**　俗間の話によれば次のとおりである。この国の西は稽畺那国(コーカンカナ)（注一）に接している。大山の間に位置し、川筋ごとに別に君主を立てており、大君主はいない。羊・馬が多い。良い馬はその体軀は美しく大きく、諸国に稀に見る品種で、近隣の国々は宝としている、と。

さらにここより西北して、大きな山を越え広い川を渡り、小さな城や村を経て行くこと二千余里すると、印度の境を出て漕矩吒国(ジャーグダ)（原注　亦、漕利国と謂う）に至る。

注

一　稽畺那国　稽畺那　ₒ*kiei*-ₒ*kiang*-ₒ*nâ* : **kekaṅna*（Skt. *kokankana* [Kūrmavibhāga]）. バンヌの西方の Waziristan に比定された［Stein, in C. *A.G.I.*, p.679］。パキスタンのアフガニスタンに接する山中にあり、玄奘の記述の如き地勢である。

大唐西域記　巻第十二　二十二国

三蔵法師玄奘奉　詔訳
大捴持寺沙門辯機撰

漕矩吒国　弗栗恃薩儻那国　安呾羅縛国　闊悉多国　活国　瞢健国　阿利尼国　曷邏胡国　訖栗瑟摩国　鉢利曷国　呬摩呾羅国　鉢鐸創那国　淫薄健国　屈（原注　居勿反）浪拏国　達摩悉鉄帝国　尸棄尼国　商弥国　朅盤陀国　烏鎩国　佉沙国　斫句迦国　瞿薩旦那国

一　漕矩吒国

一・一　国勢の概観　漕矩吒国(注一)は周囲七千余里ある。国の大都城は鶴悉那と言い(注二)、周囲三十余里ある。或いは鶴薩羅城(注三)に都することがある。この城は周囲三十余里ある。ともに険峻な所にあり堅固である。山も川も高く、田畑は高燥な所にある。穀作を適時に行ない、宿麦が豊富である。草木は枝を伸ばし、花・果は繁茂している。欝金香に適し、興瞿草(注四)を産出する。この草は羅摩印度川(注五)に生える。鶴薩羅城中では湧き水が枝をなして流れ、人々はこの水を利用して田を灌漑している。気候は寒気烈しく、霜雪が極めて多い。人の性質は軽率で、心に詐りが多い。学芸を好み、技術に多能である。よく耳を傾けるけれども道理には暗く、日ごとに数万言の文句を暗誦する。文字や言語(注六)は諸国に異なっている。言葉を飾ることが多く、内容のあることは少ない。種々の神を祀るが、［仏法僧の］三宝をも信仰している。伽藍は数百ヵ所、僧徒は一万余人、共にみな大乗の教えを学習している。現在の王は信心篤く代々の後を継ぎ、慈善を行なうことに務め、明敏な人で学芸を好んでいる。無憂王が建立した窣堵波が十余ヵ所ある。天祠は数十ヵ所、異道の人々が雑居している。



現在のガズニ風景

注

一　漕矩吒国　漕矩吒 *dz'âu°-°kiu-ta°* : **jaukuṭā* (Skt. *jāguḍa*, Saffran. Skt. *kuṅkuma* の異名、欝金香 [M. Williams : *S.-E. Dict.*, p.416 c])。本漕矩吒『唐書』西域伝、謝颶国の条に「謝颶は吐火羅の西南に居る。本漕矩吒と曰い、或いは漕矩と曰い、顕慶の時に訶達羅支 (Arab. *arroχadj* ＜ Greek. *arachosia*) と謂い、武后今の号に改む。東は罽賓（迦畢試国、巻一の三八参照）を距て、東北は帆延 Bāmiyān にして皆四百里なり、南は婆羅門（インド）、西は波斯、北は護時健（胡寔健国、巻一の三四参照）なり」とあるより見れば、今のザブリスタン Zaburistan に当たる

らしい。浥怛吒の国名はもと嚈噠人 Ephtalites が五世紀の末に大月氏を滅ぼし、その領土のカーブル Kābul 河の流域及びカンダハル Kandahar 一帯の地を占領して、これを Jabula (Jawuda) と総称したのがもとで、玄奘の記すこの国の別称「漕利」や「謝颶」、『慧超伝』の社護羅薩他那 Jawulasthana は共にこれに当たると言われる［白鳥：「罽賓国考」『西域史研究』上四四六ページ］。このザブリスタンにおける考古学的調査研究は、最近イタリアの調査隊によって行なわれている［水野：「ヒンドゥ・クシュ南北の仏教遺跡」『文明の十字路』一四〇ページ］。『慈恩伝』によれば、伐剌拏国より阿薄健国（本書不載）を経て当地へ来ている。

二 国の大都城は鶴悉那と言い 鶴悉那 *rậk*。-*siĕt*。-。*nâ*：**ghasna* [Iran. *ghaznah, ghaznayn* [Le Strange：*The Lands*, p. 348]。今のガズニ Ghazni（カーブルからカンダハルに至る幹線上の要地）である。

三 鶴薩羅城 鶴薩羅 *rậk*。-*sât*。-。*lâ*：**ghasala*. 今のヘルムンド Helmund 河流域の主要都市 Guzar (Ghazoor, Guzuristan) に比定される［Cunningham：*A.G.I.*, p.46］。ヘルムンド河流域は支流細泉多く、玄奘の記述によく当たる。この川（Yakūt は「千流の河」と呼んでいる）の流域については、Le Strange：*The Lands*, p.338 参照。

四 興瞿草 興瞿 。*xiəng-kịu*。：**hinku* (Skt. *hingu*). 五辛（比丘の食すべからざる五種の辛菜。五葷とも）の一。『玄応音義』一八に「興渠 此の言訛なり。応に興旧・興宜と言うべし。借音なり。……闍烏荼娑佗那国 Jawudasthana に出づ。彼の土の人の常に食する所のものなり。此の方に相伝えて蕓薹と為すは非なり」。また二十六巻本同音義一九には、「此の樹の汁は桃膠に似て、西国に食を作すに皆之を著く。今時の阿魏薬是なり」と加文している。『宋高僧伝』二九、慧日伝に「興渠……正しくは形具 hingu と云う。余国には見ず。回りて于闐に至りて方に見ることを得。根は粗にして細蔓菁の如く、而も白く、其の臭は蒜の如し。彼の国人は種えて根を取りて食う」とある。

五 羅摩印度川 羅摩印度 。*lâ*-。*muâ*-*ʔiĕn*-*d'uo*。：**rāmaindu*. 古くは Rāmēndu? [Julien] とし、今のアフガニスタン東部を流れるヘルムンド河とされた。地理的に見て恐らくそのとおりであろう。ヘルムンド河はギリシア文献に Etymandros, Erymanthus と表わされ、イスラム文献には Hindmand, Hidmand, Hirmand, Hirmid 等と記されている［Le Strange：*The Lands*, p. 339］が、玄奘の表記と関係ありと思われるものは見出だされない。或いは Rāmid と呼ばれる河 (Kāfir-nihān-darjā) と混同しているのであろうか。

六 文字や言語 この地方は後漢時代より長く大月氏 Kuṣāṇa の所領であったが、五世紀後半に嚈噠 Ephtalites が北方より侵入し、カーブル河の全領域及びカンダハルに至るまでその版図に入った。しかし、この嚈噠も五六五年には崩壊をはじめ、西突厥族の支配が始まった。『唐書』西域伝によれば謝颶は「突厥・罽賓・吐火羅人雑居す」とあり、『慧超伝』には「土人は是れ胡にして、王及び兵馬は但是れ突厥なり」と記している。玄奘の当時はまさに突厥族南下中のころであったろうし、ここに言う言語・文字は貴霜 Kuṣāṇa 系のものを指すものであろうか。

一・二 稠那天の崇拝 異道の人々のうちで外道 (Tirthaka) の人が多く、その徒の勢いは極めて盛んである。稠（原注 錫荀反→*siu*。）那天(注一)を奉じている。その天神は昔、迦畢試国の阿路猱山（巻一の三八・三参照）からこの国の南界の稠那呬羅山（巻一の三八・三参照）に移り住み、威厳を示し福徳を与えたり、或いは乱暴をし悪行をしたりした。信仰するものは願いを遂げ、軽蔑するものは災を招いた。それ故、遠近の人々はみな信仰し、上下共に畏敬した。隣国の風俗を異にする君臣百官は、毎年良き日に期せずして集まり、或いは金銀珍宝をもたらし、或いは牛馬家畜をば争って献納し、みな真心を表わした。それで金銀は地面いっぱいに羊馬は谷に満ちたが、それを盗み取ろうとするものもなく、ひたすら奉納に努めた。天神に仕える外道は一心に苦行をした。天神はかれらに咒術を伝授し、外道はその術を施行して効果多く、病気を治療し全快するものが多かった。(注二)

これより北へ行くこと五百余里で弗栗恃薩儻那国に至る。



ヒンドゥークシュの険峻な山並み

注

一　稍（……）那天　稍は巻一に士句反→$dz̆iu$。と注し、ここの音注と清濁を異にする。*śūna (Skt. śunā). 今後の検討を要しよう。

二　阿路猱山と稍那呬羅山とにかかわる説話は巻一の三八・三に出る。

二　弗栗恃薩儻那国

弗栗恃薩儻那国(注一)は東西二千余里、南北千余里ある。国の大都城は護苾那と称し、(注二)周囲二十余里ある。産物・風俗は漕矩吒国と同じであるが、言語には差異がある。(注三)気候は寒さ酷しく、人の性質は烈しい。王は突厥種である。深く三宝を信じ、学芸を尊重し、徳者の言をよく聞いた。

この国より東北して山を越え川を渡り、迦畢試国（巻一の三八参照）の辺境の小村を経ること凡そ数十ヵ所で、大雪山の婆羅犀那大嶺(注四)に至る。山の嶺は極めて高く、危険な登り道は傾斜が激しい。谷道は曲がりくねり、巌嶺は廻りめぐり、或いは深い谷に入り或いは高い崖へと上っている。盛夏も凍結し、氷を割って進んで行く。このようにして行くこと三日を過ぎて、始めて頂上に至るのである。寒風は凄じく、積雪は谷に満ち、旅人はここを通るのに足を止める所とてもない。隼は高く飛び上がっても飛び越えることができず、足で歩いてから飛び降りて行く。下の方の山々を見渡すと小さな塚を見るようである。贍部洲ではこの嶺は特に高く、その山嶺には樹木はなく唯石の峰ばかりが多くて、叢り立つさまはこんもりした林のようである。さらに三日進んで始めて嶺を下ることができて、安呾羅縛国(注五)に至るのである。

注

一　弗栗恃薩儻那国　弗栗恃薩儻那　*piuət₀-lịĕt₀-°źi-sât₀-t'âng°-₀na* : Skt. *vṛjisthāna* [Julien : *Mém.*, II. 109]. *vṛji* (Pa. *vajji*) は釈尊時代にヴ

ンジス河の北に国を立てていた民族名で、放浪者 *vrajin* に由来する語と言われる［中村：『インド古代史』上二五五ページ］が、その名がアフガニスタンの民族・国名とどのように関係するのか不明。別の解釈に、弗栗恃薩儻那は Portasthana（高所の義）の対音で、これは Strabon [XI.; XV], Ptolemy [VI. 18.5] に見える古地名 Ortostana, 梵語の Urddhasthana（高所）に当たるとする説［白鳥：『西域史研究』上四三九ページ］がある。『唐書』二二一下には、謝颶国すなわち漕矩吒国の北に護時健 *ruo°-*°*źi-gi̯ɒn*° があるとする。この護時の音は弗栗恃に似るから同国とする説［高田：『国訳伝』一三三ページ注九：水野：「ヒンドゥ・クシュ南北の仏教遺跡」『文明の十字路』一四〇ページ］がある。何れにしても、この国はカーブル河流域にあった国である（Ortostana は今のカーブルを指すとされる［W. Smith: *Dict. of Greek & Roman Geogr.*, II. p.497]）。しかし、『西域記』『慈恩伝』共にカーブルについては記す所がない。いっそうの検討を要しよう。

二 国の大都城は護苾那と称し 護苾那 *ruo°-b'i̯et*°-°*nâ* : **hūbina*（護苾衍那 (*hubiyāna*? [Cunningham: *A. G. I.*, p.40])、今の Hupiān, Opian（カーブルの北方の Charikar よりやや北）であるとする [Beal: *Records*, II. p.285 (9)]。

三 王は突厥種である この段の記述については、本巻の一・一注六参照。

四 婆羅犀那大嶺 婆羅犀那 °*b'uâ-*°*lâ-*°*siei-*°*nâ* : **varasena* [Julien]. 今の Khawak 峠 (35°40′ N., 69°50′ E.) であろう。標高三千五百メートル。

五 『慈恩伝』五には弗栗恃薩儻那国より迦畢試国を過ぎて大雪山を渡り、安呾羅縛国に至る状を詳細に叙述している。

覩貨邏故地

* 安呾羅縛国より達摩悉鉄帝国に至るまでの十二ヵ国は、往時の覩貨邏国（巻一の二〇・二参照）の旧領であり、玄奘はこの点を特に注記している。

三 安呾羅縛国

安呾羅縛国(注一)は覩貨邏国の旧領であり、周囲は三千余里ある。国の大都城は周囲十四、五里ある。大君主はなく、突厥に隷属している。山や丘は連続し、川や田は狭隘である。気候は寒さ酷しく、風雪が凄じい。農業は盛んで、花・果に適している。(注二)人の性質は粗暴で、風俗には規律がない。罪［には苦報あり］福［には楽果あること］を知らず、学芸を習うことを尊ばない。ただ神の祠を祀り、仏法を信ずることは少ない。伽藍は三ヵ所、僧徒は数十人だけ。しかしみな大衆部の教えを学習している。一基の窣堵波がある。無憂王が建てたものである。(注三)

ここから西北して、谷に入り嶺を越え多くの小さな城を過ぎて、行くこと四百四里で闊悉多国に至る。

注

一 安呾羅縛国 安呾羅縛 °*ân-tât*°-°*lâ-b'i̯uâ*° : **antarāva* (Iran. *andarāba* と貨幣の刻銘あり [Barthold: *Turkestan down to the Mongol Invasion*, p.67]). 地図上では、Khawak 峠より西進して Doshi 河に沿う地域で、今日も Andarāb と呼んでいる。その首都の Andarāb は十世紀に Ṭukhāristān 第三の都市に数えられていた [Minorsky: *Ḥ.-'Ā.*, p. 109, 341]。

二 当地は穀物の収穫多く、また銀の産出でも有名であり、今日もなお採っている [Barthold: *ibid.*; Minorsky: *ibid.*]。

三 当地の仏教遺跡の発掘調査の報告については、今なお聞知しない。

四　闊悉多国

闊悉多国（注一）は覩貨邏国の旧領である。周囲は千里足らずである。国の大都城は周囲十余里ある。大君主はなく、突厥に隷属している。山は多く川は狭く、風が吹く上に寒い。穀作は豊かに花・果は多い。人の性は粗暴で、人々の間には法律もない。伽藍は三ヵ所、僧徒は少ない。

ここより西北して、山を越え谷を渡り多くの城邑を過ぎて、行くこと三百余里で活国に至る。

注

一　闊悉多国　闊悉多 *k'uât。-siĕt。-。tâ* : **khasta.* 今の Khost. オクサス Oxus 河に注ぐ一上流の Khost 河流域であろう［Yule & Cordier : *Marco Polo*, I. p.178 (Map)；Minorsky : *Ḥ.-'Ā.*, p.338 (Map)］。

五　活国

活国（注一）は覩貨邏国の旧領である。周囲は二千余里ある。国の大都城は周囲二十余里ある。自らの君主はなく、突厥に隷属している。土地は平坦で、穀作は適時に行なっている。草木は繁茂し、花・果は十分になる。気候は順調で、風俗は純朴である。人の性質は烈しく、衣服は氈（フェルト）や褐（けおり）である。三宝を信ずるもの多く、雑多な神を信ずるものは少ない。伽藍は十余ヵ所（注二）、僧徒は数百人、大・小の二乗を兼ねて学習している。その王は突厥である。鉄門より南の諸小国を管轄している。（注三）鳥の如く諸方に移り住み、その住所を一定にしない。

ここより東して葱嶺（パミール）（注四）に入る。葱嶺は贍部洲の中央に位置し、南は大雪山（ヒマラヤ）に接し、北は熱海（巻一の七・二参照）・千泉（同七・五参照）に至り、西は活国に至り、東は烏鎩国（本巻の一九参照）に至る。東西・南北それぞれ数千里ある。崖なす嶺は数百重となり、深い谷は峻峡である。年中氷雪を載き、寒風は烈しい。多く葱（ねぎ）を産出するから葱嶺（そうれい）と言い、また山の崖が青々としているので名としたのである。東して行くこと百余里で瞢健国に至る。

注

一　活国　活 *ɣuât*。: Iran. **ɣwar.* 従来は Ghūr (Ghōr) の音訳としていた［Julien : *Mém.*, II. p.418］が、地名としての Ghūr (Ghōr) はバーミヤーンより西方に当たり［Minorsky : *Ḥ.-'Ā.*, p.329 (Map)］、ここには適しない。今日は当地を指すアルメニア文献に見える語 Waričan, アラビア文献の語 Warwālīz, al Wālīǧa の語頭 War (Iran. **ɣwar*) に対すると見られている［Markwart : *Wehrot*, s. 44］。『旧唐書』の遏換、『新唐書』の阿緩は何れもこの Iran. **ɣwar*, **awar* に当たろう。今のオクサス河（アム・ダリヤ）に近いクンドゥズ Kunduz (Kuhan-diz「要塞」の意) のことである。

二　伽藍は十余ヵ所　当地の仏教寺院遺跡は、近年京都大学の調査隊により発掘調査され、その報告書も刊行された［『ドゥルマン・テペとラルマ』；『チャカラク・テペ』］。概要は水野：「ヒンドゥ・クシュ南北の仏教遺跡」『文明の十字路』一三九ページ参照。

三　鉄門より……管轄している　玄奘より以後のことであるが、唐の顕慶年中（六五六―六〇）に、ここに月氏都督府を置き小城二十四州を管せしめたと言う。

四　葱嶺　「世界の屋根」と言われるこの山系をパミール Pamir の名で呼ぶのは、ここを流れる同名の河（波謎羅川、本巻の一七・二参照）に由来するようである。堅い葱（ねぎ）が多く野生しているのは事実である。

六　瞢健国

瞢健国(注一)は覩貨邏国の旧領（原文は故地）である。周囲は四百余里ある。国の大都城は周囲十五、六里ある。産物・風俗は大体活国に同じである。大君主はなく、突厥に隷属している。北すれば阿利尼国に至る。

注

一　瞢健国　瞢健 ˳məng-gʻi̯ən˳ : *mungān (*mungăn, munǰān). 活国より「東行百余里」と言うから、何れ Taliqan (Talaqan, Marco Polo の Taican) までの地域、恐らく Khanabad の近辺に当たろうが、この辺りには玄奘の表わす地名に該当するものは見出だせない。バダクシャーン Badakhshān の南部、クンドゥズより東南約二百キロの地に Munjān (Minjān) と言う所があるが、これは距離がありすぎよう [Beal : *Records*, I. p.42 (144)]。これだけの資料では比定しにくい [Yule & Cordier : *Marco Polo*, I. p. 153, 178 (Map) ; Minorsky : *Ḥ.-'Ā.*, p. 368, 339 (Map) ; Markwart : *Wehrot*, s. 47]。

七　阿利尼国

阿利尼国(注一)は覩貨邏国の旧領である。縛芻河（オクサス）（アム・ダリヤ）の両岸にわたり、周囲三百余里ある。国の大都城は周囲十五、六里ある。産物・風俗は大体活国に同じである。東すれば曷邏胡国（ラーグ）に至る。

注

一　阿利尼国　『慈恩伝』五によれば、「商侶と共に東行すること二日にして瞢健国に至る。其の傍にまた阿利尼国・曷邏胡国・訖栗瑟摩国・鉢利曷国有り。皆覩貨邏の故地なり。瞢健より復（また）東行して山に入りて三百余里、呬摩怛羅国に至る」とあり、この四国が伝聞国であることは確実である。阿利尼 ˳ʼâ-lji̯i˚-˳ni̯i : *alini (*arini). クンドゥズの北方二十六マイルの地のオクサス河をさし挟む所は古えの Ārhang (Ārhan, Ahreng) 渡しのある所である。今日の Hazrad Imām (Ḥaḍrat-Imām-Ṣāḥib) の近辺であるとする [Barthold : *Turkestan down &c.*, p.69, n. 7 ; Le Strange : *The Lands*, p.435 ; Minorsky : *Ḥ.-'Ā.*, p.359 ; Beal : *Records*, I. p.42 (143)]。

八　曷邏胡国

曷邏胡国（ラーク）(注一)は覩貨邏国の旧領である。北は縛芻河に臨み、周囲二百余里ある。国の大都城は周囲十四、五里ある。産物・風俗は大体活国に同じである。

瞢健国より東して峻嶺を越え幽谷を渡り、多くの川沿いの城を通り(注二)、行くこと三百余里で訖栗瑟摩国に至る。(注三)

注

一　曷邏胡国　伝聞国である。曷邏胡 γât˳-lâ˚-˳γuo : Iran. rāgh. 今日のバダクシャーンの首都ファイザバード Faizābād の北方に Rāgh と言う台地がある [Minorsky : *Ḥ.-'Ā.*, p.339 (Map) ; T.E. Gordon・田中一呂訳 :『世界の屋根』付図参照]。オクサス河が大きく彎（わん）曲する地で、玄奘の記述の如く北をオクサス河に接する所である。

二　多くの川沿いの城を通り　原文は「歴数川城」とある。今は地理を考え

訳文の如くした。明蔵には「川」を「州」に改め、守山閣叢書本は「案ずるに原本州を川に譌る。別本に据りて改む」と割注している。

三　行くこと三百余里で……に至る　この記述法はあたかも親践国の如くであるが、本巻の七注一に注したように伝聞国である。

九　訖栗瑟摩国

訖栗瑟摩国(注一)は覩貨邏国の旧領である。東西千余里、南北三百余里ある。国の大都城は周囲十五、六里ある。産物・風俗は大体瞢健国に同じであるが、ただ人の性質が非道な点に差がある。北すれば鉢利曷国に至る。

注

一　訖栗瑟摩国　伝聞国である。訖栗瑟摩 *kiət-liĕt-ṣiĕt-muâ* : **kṛṣma.* 現在の Kishm (Kashm)、即ち Taliqan とファイザバードの間にあり、Kokcha 河に沿う村である。現在のクンドゥズ―バダクシャーンの通路からは外れているが、この地方の最も暖い所で、果実も多くしかも一ヵ月も早く熟すと言う [Yule & Cordier : *Marco Polo*, I. p.155, N. 4, 178 (Map)]。

一〇　鉢利曷国

鉢利曷国(注一)は覩貨邏国の旧領である。東西百余里、南北三百余里ある。国の大都城は周囲二十余里ある。産物・風俗は大体訖栗瑟摩国と同じである。

訖栗瑟摩国より東して山を越え谷を渡り、行くこと三百余里で呬摩呾羅国(注二)に至る。

注

一　鉢利曷国　伝聞国である。鉢利曷 *puât-ljiᵉ-γât* : **parighar.* 従前は Bolor, Parika の如き地名とし Kokcha 河近辺に求めた [Beal : *Records*, I. p.42 (140)]。しかし訖栗瑟摩 Kishm より北、オクサス河より南（巻一の二八参照）の地点にはそれらしきものを今見出だし得ない。地図上では、Taliqan の正北オクサス河北岸と、オクサス河屈曲部最北端に近い所との二ヵ所に共に Parkhar の名をもつ地あり、さらに Taliqan の東南、Kishm の西南に当たる地点に Farkhar なる地がある。しかし、この何れも玄奘の指す所のものとは思えない。専家の指教を俟つこととし、疑問として残す。

二　訖栗瑟摩国より東して……呬摩呾羅国に至る　『慈恩伝』の文（本巻の七注一参照）によれば、ここに言うような行程ではなく、「瞢健より復東行して山に入りて三百余里、呬摩怛羅国に至る」と明示している。『慈恩伝』に依るべきであろう。

一一　呬摩呾羅国

呬摩呾羅国(注一)は覩貨邏国の旧領である。周囲三千余里ある。山・川が相連なり、土地は肥沃である。穀作に適し、宿麦が多い。百花繁茂し、果実は多い。気候は寒さ烈しい。人の性質は荒々しく、罪報福果の理（本巻の三参照）をわきまえない。顔形は卑しいが、動作には礼儀があ

る。衣服は氈(フエルト)・皮・褐(けおり)で、全く突厥と同じである。婦人の頭には木の角のある高さ三尺余のものを冠る。その前部には二本の枝があり、主人の父母を表わしている。上の枝は父を表わし、下の枝は母を表わす。先に亡くなるにつれて、一枝ずつ取り去る。舅(しゅうと)・姑(しゅうとめ)が二人とも亡くなると、角のある冠を全くやめてしまうのである。(注二)この国の祖先は強国であり、王は釈種であった。葱嶺(パミール)の西の国々は臣伏するもの多く、突厥と境を接したので突厥の風俗に染まったのである。その上他国に侵入攻掠して自らその境域を守った。こう言うわけでこの国の人は異境に離れ住み、数十の堅城にそれぞれ別の君主を立てている。穹廬(テント)に毳(けおり)の幕で、諸方に移動している。西は訖栗瑟摩国に接している。(注三)

東へ行くこと二百余里で鉢鐸創那国に至る。

注

一　呬摩呾羅国　呬摩呾羅 *χji°.-muâ-tât.-.lâ* : Skt. *himatala.* 雪山下（巻三の六・五参照）の意。現在の Kwaja Muhammad 山塊の北端近辺であろう。この地の村の Darāim (Darah-i-im, 雪の谷の意) は玄奘の示す梵語名に近い。

二　婦人の角冠　この風習は嚈噠 Ephtalites のものであろう。『魏書』一〇二、嚈噠伝に「嚈噠国は大月氏の種なり……其の王抜底延城（クンドゥズの上流）に都す……風俗は突厥と略(ほぼ)同じ。其の俗は兄弟一妻を共にし、兄弟無き者は其の妻一角帽を戴く。若し兄弟ある者は其の多少の数に依り更に角を加う」とあり、また『洛陽伽藍(らくようがらん)記』五の『宋雲行紀』にも「嚈噠国の王妃は……頭には一角の長さ八尺、奇（頭飾の一）の長さ三尺なるを戴き、玫瑰(まいかい)（宝石の一）五色を以て其の上を装飾す」とある。

三　西は……に接している　隣国との位置関係をこのような文末に出す例は本書中、他に例を見ない。或いは後人の注の竄(ざん)入か。

一二　鉢鐸創那国

鉢鐸創那国(注一)は覩貨邏国の旧領である。周囲は二千余里ある。国の大都城は山の崖の上に位置して、周囲六、七里ある。(注二)山や川が連なり、砂や石がいっぱいである。(注三)土地は菽(まめ)や麦に適し、葡萄(ぶどう)・胡桃(くるみ)・梨(なし)・柰(からなし)等の果実が多い。気候は寒さ烈しく、人の性質は剛勇である。俗(ならい)として礼儀作法もなく、学芸も心得ない。その顔貌は卑しく、氈・褐を着るものが多い。伽藍は三、四ヵ所、(注四)僧徒は少ない。王は性質純朴で、深く三宝を信じている。

これより東南へ山谷中を、行くこと二百余里で淫薄健国に至る。

注

一　鉢鐸創那国　鉢鐸創那 *puât.-d'âk.-tṣ'iang°.-.nâ* : **badakṣāna.* 『高僧伝』には波多叉拏 *——*na* とする。現在のバダクシャーンに当たる。西蔵(チベット)との通商の窓口とも言うべき地方である [Minorsky : *H.-'Ā.*, p. 112]。マルコ・ポーロもここを通った。

二　国の大都城は……ある　この首都は今日もバダクシャーンの政庁があるファイザバードであろう。その地勢は玄奘の記述によく合する。

三　土地は……が多い　玄奘は当地の産物として農産物を挙げるが、諸書にはむしろ鉱産物（金・銀・柘榴(ざくろ)石・瑠璃(るり)・ラピスーラズリ等）を特産として挙げる [Le Strange : *The Lands*, p.436 ; Barthold : *Turkestan down &c.*, p.66 ; Minorsky : *H.-'Ā.*, p.112]。

四　伽藍は三、四ヵ所　当地の仏教遺跡の調査は寡聞にして知る所がない。恐らく今なお調査されていないのではなかろうか。

一三　淫薄健国

淫薄健国[注一]は覩貨邏国の旧領である。周囲千余里ある。国の大都城は周囲十余里ある。山丘相連なり、川や田は狭隘である。土地の産物[注二]、気候の具合、住民の性格の差異は鉢鐸創那国と同様であるが、ただ言語[注三]はやや異なっている。王は性質苛酷で、事の善悪について知る所がない。

これより東南へ嶺を越え谷を渡り、谷道の危険な所を行くこと三百余里で屈（原注　居勿反→kịuət。）浪拏国に至る。

注

一　淫薄健国　淫薄健 ◦iəm-b'âk◦-◦g'ịɒn°：*Yambagān. 今日の Kokcha 河の流域で Jurm (Jarm, Jerm) より上流に旧名が Yamgān, Hamakān (俗に Hamah-Kan "All-mines" とする）と呼ぶ地方がそれであると言う [Beal : *Records*, I. p. 42 (137) ; Le Strange : *The Lands*, p. 437 ; Markwart : *Wehrot*, s. 47 ; Minorsky : *Ḥ.-'Ā.*, p.368 ; Yule & Cordier : *Marco Polo*, I. p.162, n.3]。

二　土地の産物　ここも農産物より鉱産物、特にルビーの産出が古書に記されている [注一の諸書、特に Le Strange の書を参照]。

三　言語　現在アフガニスタン東北部で使用される言語は、東部イラン語と総称され、他のイラン諸語よりも古相を多く保持していると言われる。その内、前項の鉢鐸創那国一帯の言語をバダクシャーン方言と呼び、この淫薄健国のある Kokcha 河流域は Shahr-i-Munji を中心とする Munji 方言を話す [この地域一帯の言語特徴の粗描は G. Morgenstierne : *Report on a linguistic Mission to North-Western India*, pp. 70 ff. ; その詳細は do : *Indo-Iranian Frontier Languages*, Vol. II., Yidgha-Munji の項参照]。

一四　屈浪拏国

屈浪拏国[注一]は覩貨邏国の旧領である。周囲二千余里ある。土地・山川、気候・気節は淫薄健国と同じである。人々の間には法律もなく、人の性質は粗暴である。福業（修善）を行なわないもの多く、仏法を信ずるものは少ない。人々の容貌は醜悪で、氈・褐を着ているものが多い。山の巌窟からたくさんに金精（純金か）を出す所がある[注二]。その石を打ち割って、これを手に入れるのである。伽藍は少ないから、僧徒も少ない。ここの王は純朴で、三宝を敬信している。

これより東北して山に登り谷に入り、道筋の困難な所を行くこと五百余里で、達摩悉鉄帝国（原注　亦鑊侃と名づけ、また護蜜と謂う）に至る。

注

一　屈浪拏国　屈浪拏 kịuət◦-lang°-◦na：*kurāṇna. 『新唐書』二二一下に倶蘭・倶羅弩・倶爛那と書く。今の Kokcha 河の上流 Kuran (Karan) 河の流域。

二　鉱産物　金銀の産出は当地より次節の Wakhan 地方にかけて古来有名であり、ラピスーラズリの産出も多い [Le Strange : *The Lands*, p. 437 ; Minorsky : *Ḥ.-'Ā.*, p.339 (Map)]。

一五 達摩悉鉄帝国

一五・一 国勢の概観 達摩悉鉄帝国(注一)は二つの山の間にあり(注二)、覩貨邏国の旧領である。東西千五、六百余里、南北の広さは四、五里で、狭い所は一里を越えない。縛芻河に臨み、曲がりくねっている。小高い丘が或いは高く或いは低く、砂や石が一面である。寒風は凄じく、ただ麦や豆だけを植えている。樹林は少なく、花・果に乏しい(注三)。多く良馬を産する。馬の形は小さいけれども、山地を馳渉するに耐える(注四)。人々の間には礼儀なく、人の性質は乱暴である。姿形は卑しく(注五)、衣服は氈や褐である。眼は碧緑である点が諸国に異なっている。伽藍は十余ヵ所、僧徒は少ない。

注

一 達摩悉鉄帝国 達摩悉鉄帝 *d'ât。-。muâ-sįĕt。-t'iet。-tiei°* : Skt. *dharma sthiti.* 梵語 *dharma* は法、*sthiti* は位置、国名は訳して法位ともすべきか。ただし、当地はイラン語圏ではあり、仏教も余り盛んでないとする玄奘の記述よりして、この国名は雅語として用いたものと見られよう。Wakhan の南渓谷中、Chitral の東北約九十キロの地点にあるこの地方の要衝 Mastūj に入る門戸に、Darah-i-Mastūj (Mastūj の門) なる土地がある。達摩悉鉄帝はこの Darah-i-Mastūj を写したものであると言う [Markwart : *Ērānšahr,* s. 225. 今は白鳥：『西域史研究』上一三二ページによる]。一応傾聴すべき説であるが、この地方の首都は次節に見える昏駄多城であるに拘わらず、国名を昏駄多国とはせずに、他の地名を当てる説明に欠ける点に不安が残る。今適解がないまま、先人の説を挙げるに止める。当地の異名の鑊侃 *ɣwâ。-k'ân°* : Iran. *wakhan* は、当地および住民を表わす現代語の *wuš* (<**waxšu,* 烏滸) と明瞭な関係をもつ [Morgenstierne : *Indo-Iranian Frontier Languages,* II. p. 433. ここには当地の歴史・地理の概略と参考書を指示する。なお、住民と言語については、Yule & Cordier : *Marco Polo,* I. p.160, n.1 にも略記し、同書一七三ページには地方の概況を述べる]。護蜜 *ɣuo°-mįĕt。* は村落名の *yamit* (<**hamit ?*) に基づくだろうとのことである [Morgenstierne 所著の同ページ]。

二 二つの山の間にあり この地帯の北側には Wakhan 山脈が、南側にはヒンドゥークシュ山脈の東端が、東高西低に東北から西南へと六千メートル以上の高さで横たわり、両山麓はその間を流れるオクサス河（このあたりの呼称は Ab-i-Pānj）の河畔まで迫り、河畔では断崖をなしている所が多い。

三 Wakhan の農産物 最近でも玄奘の記述と大差はないようである。その詳細は T.E. Gordon・田中一呂訳：『世界の屋根』一五六ページに見える。

四 馬 最近も「この地方の馬は小柄で頑丈な上、よく育つ」と報告されている [前記『世界の屋根』一五六ページ]。

五 姿形は卑しく……眼は碧緑で…… 玄奘より遥か後世であるが、ここの住民について報告した西洋人の観察評価は、玄奘とは異なっている。「ワハンでは……歴然とした特徴を持つホモ・アルピニス（アルプス人種）型を保持していた。すでに一六〇二年、《カセイ》の地を求めてワハンを通り過ぎて行った、あの観察力の鋭いジェズィット会士の旅行者ベネディクト・ゴエスも、ワハン族の金髪碧眼に強い印象を受け、フランダーズ人によく似ていることを書き記している」[A. Stein・沢崎順之助訳：『中央アジア踏査記』二八八ページ]。「ワカーン人は、民族としては、すぐれた容貌をしており、大抵のものの顔つきは、非常に均整がとれていた。金髪碧眼が珍しくはない。特殊な土語のほかに、ペルシャ語を誰も彼も話す」[前記『世界の屋根』一五六ページ]。

一五・二 昏駄多城の旧跡 昏駄多城(注一)は国の都である。中に伽藍が

ある。(注二)この国の先王が建てたもので、崖を掘り谷を鎮(しず)めて堂宇を建てた。この国の昔、まだ仏教が流布しない時にはただ邪神に奉事していたが、数百年前に初めて仏教が弘(ひろ)まった。その当初、この国の王の愛子が病気にかかり、ひたすら医術を極めて治療を加えたが治らなかった。王はそこで自ら天祠に出かけて助けを求めた。その時、その祠の住職（原文は祠主）が神の［のり移った］様子をして神旨を下し、

「必ず治るであろう。たえて心配に及ばず」

と言った。王はこれを聞いて安堵(ど)し、乗り物を引き返し帰ってきた。途中で沙門に出会ったところ、その挙措進退はりっぱであった。その身なりに驚き、何所へ行くのかを問うた。この沙門はすでに悟りを證し、仏法を弘めようと思っていたので、このようにりっぱな態度であったのである。そこで王に、

「私は如来の弟子で、世に言う苾芻(ビクシュ)（比丘）です」

と告げた。王は心に心配事があるので、第一に、

「私の子供は病気にかかり、生き死にも分からない状態です［が、治りましょうか］」

と尋ねると、沙門は、

「王の先祖の霊を死より再起させることができても、あなたの愛子は助け難いでしょう」

と言った。王は、

「天神は死ぬことはないと言った」と告げると、沙門は、

「必ず亡くなりましょう。人々を詐る人の言葉をどうして信用できましょうや」

と言った。ところが宮中に着くと、愛子はすでに死んでいた。死を隠し喪を発しないで、再び神主に問うたところ、やはり、

「死ぬことはありません。病気はきっと治りましょう」

と言ったので、王は怒りを発し、神主を縛り上げて追及し、

「汝らは仲間を組んで悪行をたくましくし、妄(みだ)りに威力でおどしたり恩を着せたりしている。私の子供はすでに死んだのに、なお治ると言っている。このように人を誑(たぶらか)すとは、どうして耐えることができようか。神主を処刑し霊廟を破壊すべきである」

と言った。そこで神主を殺し神像を取り除き、縛芻河に投げ棄て乗り物を引き返し帰り、また沙門に遇った。姿を見て喜び挨拶して礼を言い、

「従来はりっぱな指導も得られず誤った道に止まっていました。悪風は長期ではありましたが、ここに改革することになりました。どうかお目をかけられ、部屋においでください」

と言った。沙門は請いを容れ王について奥御殿へ来た。子の葬儀を終了すると王は沙門に、

「人の世はあざなえる糸の乱れる如く、生死は輪廻(りんね)して窮まりありません。私の子供は病にかかりその生死を問うたところ、神と言いながら妄りに必ず治ると言いました。先般御指教を受けましたが、はたしてお言葉のとおりでした。かくてはその教えは信奉すべきでありましょう。どうか哀れみを垂れてこの迷えるものたちをお導きください」

と言った。そこで沙門に依頼し伽藍を計画し、その基準に従って直ちに建立した。これより以後仏教は始めて興隆した。こう言うわけで、伽藍の中の精舎(しょうじゃ)はこの羅漢(らかん)のために建てたものである。

伽藍の大精舎の中に石の仏像がある。像の上には金銅の円蓋(がい)をつるし、たくさんの宝で荘厳(しょうごん)してある。人がその仏像の周囲を旋繞(せんにょう)するとこの円蓋もそれにつれて廻り、人が止まると円蓋も止まる。かく霊験は測り知れず、故老の話によれば、

「聖人の願力で維持しているのだとも、或いは機関(からくり)の秘術がかくはす

るのだと言う人もある」とのことである。その堂宇をよく観察するに、石壁は堅牢にできていて「からくりとも思えず」、人のあれこれの話を考えてもその実際は知り得ない。(注三)

この国の大山を越えて、北すれば尸棄尼国に至る。

注

一　昏駄多城　昏駄多 *˳xuən-d'ā˚-˳tâ* : **khandāta.* 従来はこれを『唐書』二二一下の塞迦審城即ちワハン Wakhan 渓谷の入口にある Ishkashim であると諸書共に考えていた。昏駄多はワハン渓谷中の Āb-i-Panja 河の南岸即ちアフガニスタン側にある部落、今日も Khandūd [*χandut, kanduḍ*] と呼ばれるワハン渓谷最大の部落であり、その対岸のソヴェト領に Yamg の部落がある [Morgenstierne の前掲書巻末の折込み地図に出ている。他の地図には見えない]。十世紀の書物(次注)にもこの地名が見える。

二　中に伽藍がある　十世紀の *Ḥ.-'Ā.* [§26.15] に、「Khamdādh ワハン人(Vakhis) の偶像寺院がある所である。少数のチベット人も見られる。左岸(ソヴェト領)にはチベット人が占拠している砦がある」と述べて、当時なおこの寺院が存在したことを記す[この遺跡については、A. Stein : *Serindia,* I. pp. 60-71 ; do : *Innermost Asia,* p.866]。

三　伽藍建立の伝説　『慈恩伝』五の当国の条の末尾に、この寺院のことを述べた後に、「寺を建つるの因縁は広く別伝の如し」と記す。この「別伝」とは本書のことであろうか。

一六　尸棄尼国

尸棄尼国(注一)は周囲二千余里ある。国の大都城(注二)は周囲五、六里ある。山・川は相連なり、砂や石が野を覆っている。宿麦が多く、穀作は少ない。林樹はまばらで、花・果は少ない。気候は寒さ烈しく、風俗は勇猛である。殺戮を平然と行ない、窃盗を仕事にしている。礼義をわきまえず、事の善悪を知らない。未来の禍福に心を迷わし、現世の災厄を懼れている。姿・貌は卑しく、皮・褐を衣服としている。(注三)文字は覩貨邏国と同じであるが、言語(注四)には差異がある。

達摩悉鉄帝国の大山の南に向かえば商弥国に至る。

注

一　尸棄尼国　伝聞国である。尸棄尼 *˳śi-k'ji˚-˳ṇi* : **śikini, śikni.*『新唐書』二二一下に「識匿 *śiək˳-ṇiək˳*, 或いは尸棄尼と曰い、瑟匿 *ṣiĕt˳-ṇiək˳* と曰う」とある。現在のワハン渓谷以北のソヴェト領パミール高原西南斜面一帯の地で、今も Shighnān, Shughnān と呼ばれている。

二　国の大都城　その位置未詳。ただし『唐書』二二一下には「識匿……初め苦汗城に治し、後山谷に散居す」とあり、後の首都を記さない。一方、ワハンを記す護蜜伝にはその首都を塞迦審城とする。塞迦審は Ishkashim であり、玄奘の時代の昏駄多城 Khandut より移したものとみえる。Ishkashim は元来地理的に Shighnān に属する地であることより考えれば、唐書の苦汗城(Kurghan 城砦の義と言う[藤田豊八:『慧超伝箋釈』])およびここに玄奘の言う「尸棄尼国の首都」は塞迦審 Ishkashim のことを指すのではなかろうか。

三　尸棄尼の住民　近代の観察としては、A. Stein・沢崎順之助訳:『中央アジア踏査記』二九三ページ以下に詳しい。

四　言語　現在 Shighnān 一帯で話される言語は、東部イラン語中のパミール方言と言われるものの一つ Ghalcha 方言に属するとされ、住民の移動も古来少ない言語島のような地理的状況もあり、古相を多く残すと言われている[その特徴の概略は G. Morgenstierne : *Report on a Linguistic Mission to Afghanistan,* p.14 (Shughni) に見え、やや詳細な資料と報告は W. Lentz : *Pamir-Dialecte,* Vol. I. *Materialien zur Kenntnis der Schugni Gruppe* ; H. Sköld : *Materialien zu den Iran-*

ischen Pamirsprachen に見える]。玄奘の言う覩貨邏の言語（今世紀初めに東トルキスタンで発見されたいわゆるトカラ語ではない）もイラン語系のものであったと推定されている。

一七　商弥国

一七・一　**国勢の概観**　商弥国(注一)は周囲二千五、六百里で、山や川が入りまじり、小高い丘が或いは高く或いは低く連なっている。穀作は十分に備わり、菽・麦が豊富である。葡萄が多く、雌黄(注二)を産出する。[雌黄は] 崖を掘り石を割って後に手に入れる。山神は暴悪で、しばしば災害を起こすので、山神を祭った後に山に入れば平安に往来でき、もし祈祷しない時には風や雹が荒れまくる。気候は寒く、風俗は性急である。人の性質は純朴で、人々の間には礼儀がなく、智恵少なく見識狭く、技能も浅薄である。文字は覩貨邏国と同じであるが、言語(注三)には差異がある。氈や褐を着ているものが多い。その王は釈種である。仏法を尊重している。国民は教化され、信仰しないものはない。伽藍は二ヵ所、僧徒は少ない。

注

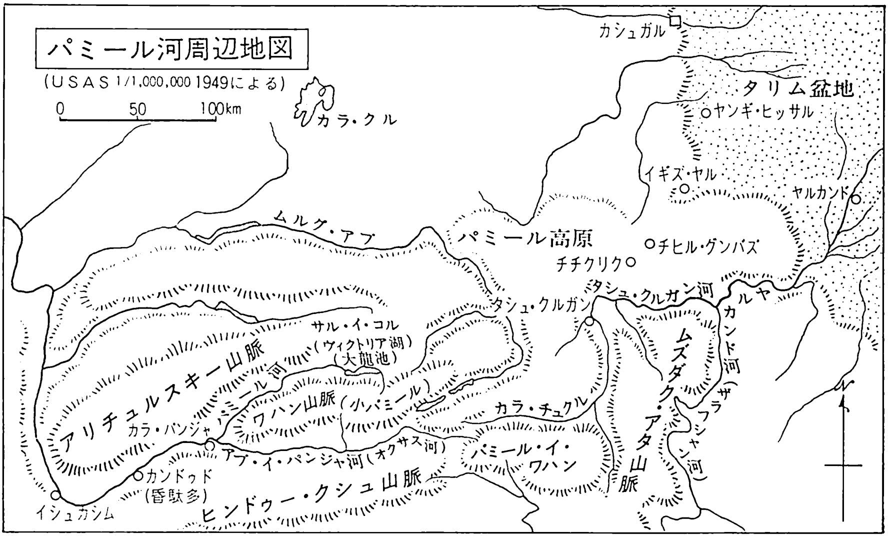
一　商弥国　伝聞国である。商弥 °*śiang-₀mjię* : **šami*.『前漢書』に雙靡、『宋雲行紀』に除弥、『魏書』に舎弥に作る。今のチトラル Chitral および Mastūj の地域を指す [白鳥 :『西域史研究』上 一三四ページ ; Markwart : *Wehrot*, s. 105]。

二　雌黄　硫黄と砒素との化合物で、天産のものは黄色の結晶体をなす。

三　言語　チトラル および Mastūj を含むこの地域はダルディスタン Dardistan と総称され、その言語を Dardic 語と呼ぶ。この言語はイラン語とインド・アーリヤ語との接壌地帯にあり、両系統の特徴を保有し独自の存在を維持して来た。今日ではインド・アーリヤ語の一支派と見なされている [G. Morgenstierne : *Report on a linguistic Mission to Afghanistan*]。Dardic 語はさらに Kafir 語 (Kafiristan), Khowar 語 (Chitral), Shina 語（ギルギト）, Kashmiri 語（カシミール）に分けられている。

一七・二　**波謎羅川**　[商弥国の] 国境より東北へ山を越え谷を渡り、危険な道を通って行くこと七百余里で、波謎羅川 [の流域] に至る(注一)。東西千余里、南北百余里。狭隘な所は十里を越えない [ほど狭い]。二つの雪山の間に位置しているので寒風は凄じく、春夏も雪を飛ばし、昼夜も風を吹きつのらしている。土地は塩分を含み石ころ多く、種を植えてもならず、草木も稀である。それ故、荒れはてて住みつく人とても全くない。

波謎羅川の中に大きな竜池(注二)がある。東西三百余里、南北五十余里、大葱嶺の中に位置し、贍部洲の中でその土地は最も高い。水は清澄なること鏡の如く、その深さは測り知れない。色は青黒く、味は甚だ甘美である。水中に住むは鮫螭（角なき竜）・魚竜・黿鼉（青海亀と鰐）・亀鼈の類、水に浮游するは鴛鴦・鴻鴈・鴐鵝（雁の一種）・鷫鴇（共に雁の属）の類である。大きな鳥の卵はその殻を荒野に、或いは草原の中に、或いは水際にすててある。池の西からは一つの大きな水流を派出し、西へ流れて達摩悉鉄帝国の東境に至り、縛芻河と合して西へ流れる。それ故これより右（西）は水がみな西流する(注三)。池の東からも一つの大きな水流を派出し、東北へ流れて佉沙国（本巻の二〇参照）の西境に至り、徙多河（巻一の一参照）と合して東へ流れる。それ故こ



れより左（東）は水がみな東流するのである。（注四）

波謎羅川より南して山を越えると鉢露羅国（注五）（バルティスタン、巻三の二参照）がある。金・銀が多く、その金の色は火のようである。

この［波謎羅］川中より東南して山に登り危険な道を行く。途中に人里なく、唯氷雪のみ多い。行くこと五百余里で朅盤陀国に至る。

注

一 波謎羅川［の流域］に至る　波謎羅 *ₒpuâ-mieiᵒ-ₒlâ* : **pamiēr*. パミールと言う語の意味は「荒野」であるらしい。人間が住むこともできるのであるが、人も住まず棄てて顧みられない土地のことである。ペルシア語では *Bam-i-dunya*「世界の屋根」と言う［Yule & Cordier : *Marco Polo*, I. pp. 170 ff. ここにはパミール探険の歴史も詳しい。また Gordon・田中訳：『世界の屋根』一四〇ページ以下にもこの地の地理的景観その他を詳説する］。パミール川の流域は、東西に伸びる二つの山嶺、即ち北側の Alichur (Shakhdarinskiy) 山脈（高所は五千五百メートルに及ぶ）と南側のワハン山脈（高所は六千五百メートル）に挟まれた狭隘な地域である。

二 大きな竜池　今日のヴィクトリア湖（大パミール湖・Ozero Zor-Kul'・Sar-i-Köl とも）のことである。玄奘がここに述べる景観は、近代でも変わりないらしい［Gordon・田中訳：同前書、一七八ページ］。

三 池の西から……みな西流する　ヴィクトリア湖（標高四千百三十七メートル）の西からパミール川が西南へ流れ、Qala Panja のやや上流で、小パミール地方の湖水より流れて来た Āb-i-Panja (Oxus) と合流して西へ流れている。合流してから以後の河名は Āb-i-Panja 即ちオクサス（縛芻河）と称している。

四 池の東から……東流するのである　ここの玄奘の記述には一部誤りがある。即ち佉沙国（カシュガル）の西境へ流れ、ヤルカンド河と合流する河と言うのは、恐らく今日の Tashkurghan 河を指すのであろうが、この河の西の上流の一である Kara Chukur 川の河源は Pamir-i-Wakhan の山中にあり、ヴィクトリア湖に発するものではない。

五 山を越えると　この地帯よりバルティスタン方面へ行く道のうち、玄奘

がここで念頭においたものは、恐らく古来著名な Darkot Pass ではなかったろうか。

一八　朅盤陀国

一八・一　国勢の概観　朅盤陀国（注一）は周囲二千余里ある。国の大都城は大きな岩山に基礎を置き、徙多河を背にしており、周囲二十余里ある。山々が連なり、川原は狭隘で、穀作は僅かで、菽・麦が豊富である。樹木は稀で、花・果は少ない。丘も野も荒れはて、城や村も住民は少ない。俗として礼儀なく、人々には学芸も乏しい。性質は荒々しく、武力の点でも驍勇である。容貌は醜く、氈や褐を身に着けている。文字・言語は、おおむね佉沙国と同じである。さりながら信仰は心得て、仏法を尊崇している。伽藍は十余ヵ所、僧徒は五百余人、小乗教の説一切有部を学習している。

注

一　朅盤陀国　朅盤陀 *k'i̯ät-b'uân-dâ* : **kharbanda* (Iran. **γarpand*「山道」の義)。今日のタシュクルガン Tashkurghan (Türk 語「山城」の義)。位置は 75°10′ E., 37°45′ N.)。『慧超伝』には「外人呼びて渴飯檀と云う」とある。『漢書』に蒲犂国。この地方を Sarikol (「黄谷」の義) と言う［漢・唐間の詳細は白鳥・『西域史研究』上一六六ページ以下］。

一八・二　建国の伝説　今の王は純朴な人で三宝を尊重し、身じまいは上品で熱心に学問を励んでいる。建国よりこの方、年数を多く経ている。王は自ら至那提婆瞿呾羅（原注　唐に漢日天種と言う）（注二）であると称している。この国の先祖は葱嶺中の荒原にいた。その昔、波剌斯国（巻十一の二〇参照）の王がその妻を漢土から娶り、迎えて帰途にここまでやって来た。折しも兵乱に遭い、東西する交通路を絶たれてしまった。そこで王女を離れ山に隠した。その山は極めて嶮しく、崖に桟道をかけて上る所であり、その下には警護のもので囲ませ、昼夜にわたり警備していた。やがて三月ほど経ち賊軍も平定せられ、帰路につこうとしたところ女は妊娠していた。使臣は驚き恐れ、供のものたちに、

「王命で夫人を出迎える途中でこの兵乱に遭遇し、荒原に野宿し朝な夕などうなるかも分からなかった。我が王の徳の感化により動乱も治まり、今や国に帰ろうとすれば、王の夫人となる人は妊娠している。これを考えると心配で、どうなることか分からない。首犯をさがし出し、場合によってはそれから処罰しよう」

と言い、ことやかましく訊問したが事実は判明しなかった。その時、女についていた侍童が使臣に、

「咎めだてはなさいますな。これは神と相会されたのです。毎日正午に一人の偉丈夫が、日輪の中から馬に乗って来て、ここで会われたのです」

と言った。使臣は、

「もし然りとすればどうして罪の疑いをはらすことができようか。帰国しても必ず誅罰されようし、ここに留まっていても兵をよこして討伐されよう。進退何れもかくときまれば、何所へ行ったらよいものであろうか」

と言うと、みなのものは、

「このでき事は些細なことではありませんが、誰が処刑を受けると言うものでもありません。国外で処罰の知らせを待ち、暫くの間日を過

ごしましょう」

と答えた。そこで岩山の上に御殿を築き宿舎を建てた(注二)。周囲三百余歩のもので、御殿の回(まわ)りに城を築き、女を擁立して主君とし、官を設け法を制した。産期に至り男子を出産したが、見目麗(うるわ)しい子であった。母は摂政となり政務を執り、子供は王の尊号を称した。その子は虚空を飛行し風や雲を操御し、その威徳は遙かな地をも被(おお)い教化は遠方にまで行きわたり、隣境の諸外国はみな臣従した。その王の寿命が尽きるとこの城の東南百余里の大きな山の石窟中に葬った。その屍体は乾腊(けんせき)(ミイラ)し、今も損壊しておらず、その状は痩(や)せた人がまるで眠っているようである。時おりその衣服を取り換え、常に香花を供え、子孫代々今日に及んでいる。その先祖の人は、母は漢土の人であり、父は日天(巻十の一・三参照)の種族である故、自ら漢日天種と称しているのである。しかし、その王族の容貌は中国と同じで、頭には「中国人のような」方冠をかぶっているが、身には胡人の服を著(つ)けている。後継者は力が衰微し、強国に圧迫されている(注三)。

注

一　至那提婆瞿呾羅(……)　至那提婆瞿呾羅 *tśi°-ₒnâ-ₒd'iei-ₒb'uâ-ₒg'iu-tât-ₒlâ*: Skt. *cīna-deva-gotra.*『慈恩伝』五には脂那提婆瞿怛羅に作る(『西域記』には脂字の用例なし。怛は呾と同音)。『梁書』にはその王の姓を葛沙氏とし、『唐書』には王はもと疎勒の人とする。

二　岩山の上の城　タシュクルガンにおけるこの岩山の要塞の跡は今日も残っている。Taghdumbash-Pamir の谷を中国側へ下る途中、河岸に孤立して突き出している岩山の上には、廃墟とはなっているが、中国辺塞における長城風の構築法による城壁が、今なおはっきりと確認することができ、土地の人はこれを Qiz-qurghan (王女の塔) と呼んでいる [A. Stein: *On Ancient Central-Asian Tracks*, p.47 (沢崎順之助訳:『中央アジア踏査記』五二ページ)]。

三　朅盤陀国の建国伝説　日天(スーリヤ Sūrya)の子にまつわる建国伝説は Bolor (鉢露羅国、巻三の二参照) にもあり [Minorsky: *Ḥ.-'Ā.*, p. 121 (§ 26.19), 369]、その他イラン諸地方にあるらしい [Beal: *Records*, II. p.301 (49)]。

一八・三　童受論師

［この国の］無憂(アショーカ)王(注一)は一世に傑出した人で、その宮中に窣堵波を建てた。その王は後に宮中の東北隅に居を移し、もとの宮殿を尊者童受論師(注二)のために僧伽藍として建造した。楼台・殿閣は高くもあり広くもあり、仏像は威厳に満ちていた。尊者は呾叉始羅(タクシャシラー)国(巻三の三・五参照)の人である。幼い時より明敏で早年より俗世界を離れ、心を典籍に専らにし仏教の奥旨を研究し、日々三万二千言を暗誦し、さらに三万二千字を書いた。それでその学は当時の俊才中に冠たるものであり、その名は一代に高く、正法を宣揚し邪見を打ち破り、高邁(こうまい)な議論をりっぱに弁じ如何なる論難にも応酬しないことはなかったので、五印度の国々では人みなこの尊者を推重した。作製した論部の書は凡(すべ)て数十部もあり、みな世に行なわれて学習しないものはない。即ち経部の本師である人である(注三)。この当時、東には馬鳴(めみょう)(巻八の三・四参照)あり、南には提婆(デーヴァ)(巻十の一二・三参照)あり、西には竜猛(りゅうみょう)(巻八の三・三参照)あり、北に童受あり、世間では「四日世を照らす」と称していた。それでこの国王は尊者のりっぱな徳を聞き軍隊を動員し、呾叉始羅国を攻撃し脅迫して尊者を手に入れ、この伽藍を建立して敬仰の意を表わしたのである。

注

一　無憂王　この無憂王 Aśoka は前三世紀孔雀王朝の阿育王のことではな

く、同名異人。年代・伝記ともに不明であるが、童受論師と同時代とすれば後三世紀ごろの人であろうか。次注参照。

二　童受論師　巻三の三・五に拘摩羅邏多 Kumāralāta とある人で、付法蔵の第十八祖（或いは第十九祖）。著書数十部ありと言われているが伝わらなかった。近年ドイツの Le Coq 探険隊が新疆省の庫車地方で得た『大荘厳経論』の梵本断片を整理研究した結果、一九二六年にこの論は従来は馬鳴の作と伝えられていたが、実はこの童受のものであったとしたため学界に論争を惹き起こし、今日なお結論は得ていない［H. Lüders : *Bruchstücke der Kalpanāmaṇḍitikā des Kumāralāta* : 山田龍城：『梵語仏典の諸文献』七一ページ：なお望月：『辞典』一、七一七ページ参照］。

三　経部の本師　経量部（小乗十八部の一で、仏滅後四百年の初めに説一切有部より別派となったもので、単に経部とも言う）を専ら受授する師の意。しかしまた薩婆多部即ち有部の論師とする説もある。

一八・四　二石室の羅漢　城より東南へ行くこと三百余里で大きな石崖に至る。そこに二つの石室があり、それぞれ一人の羅漢が中で滅尽定に入り、端然と坐り動かし難い様子をしている。その形姿は痩せた人のようで、その屍骸は損朽していない。すでに七百余年を経過しているが、その鬚や頭髪は常に伸びている。それ故、僧たちは毎年、この羅漢の髪を剃り衣服を取り換えている。（注一）

注

一　『慈恩伝』にはこの二羅漢を述べる条に続けて、「法師その国に在って停まること二十余日」と記す。

一八・五　奔穣舎羅（福舎）　大崖（注一）より東北へ嶺を越え険阻な道を進み、行くこと二百余里で奔（原注　逋論反→puan）穣舎羅（原注　唐に福舎と言う）（注二）に至る。葱嶺の東端の岡にあり、四方が山のその真中にある。土地は百余頃（約百アール余り）四方で、真中は低くなっている。冬も夏も積雪があり、風は寒くて強く吹く。田畑は砂礫多く、農業は盛んではない。樹木もなくて唯小さな草があるだけである。時に暑い日があっても風や雪は多い。人々がこの境に入るや雲や霧が立ち起こり、商人たちが往来するにはこの難儀に苦しむのである。故老の話によれば次のようである。昔ある商人がその供一万余人、駱駝数千頭を率い、財貨を運び利益を追って来たところ、風雪に遭遇して人畜もろ共に失ってしまった。折しも朅盤陀国にいた大羅漢が、遙かにこのでき事を観察してその危難を哀れに思い、神通力を運らしてこの災難を救おうとし、ここへやって来たところが商人はすでに死んでしまっていた。そこで商人の宝物をまとめ財産をとり集めて、宿舎を建て資材を準備し、隣国に土地を買い片田舎の町に店を出させて、往来する人々に施しをした。それで今日の旅人や商人も悉くその給与を受けているのである。

ここより東して葱嶺の東端の岡を下るが、危険な嶺に登り深い谷を渡って行くのである。谷の道は険阻で、風や雪が引き続く。行くこと八百余里で葱嶺を出て烏鎩国に至る。

注

一　大崖　旧来の諸家はこの大崖を朅盤陀国の首都、即ち「大石嶺上の城」タシュクルガン（石城）と考えて、そこより東北二百里に奔穣舎羅を求め、これを今の Chichiklik に比定した［A. Stein : *Ancient Khotan*, p. 42］。これに対して、この大崖は首都を指すに非ずして前項の「大石崖」即ち首都より東南三百余里の地を指すものとし、そこより東北へ二百余里に奔穣舎羅が あるとする 説がある［白鳥：『西域史研究』上一九八ペ

ージ」。この説は『慈恩伝』五に「城の東南三百余里にして大石壁に至る。二石室有り……法師其の国に在って停まること二十余日。復東北に行くこと五日、群賊に逢う。商侶恐怖して山に登り、象は逐われて水に溺れて死す。賊の過ぎてより後、商人と漸く進んで東に下れり。寒を冒し嶮を履んで行くこと八百余里、葱嶺を出でて烏鎩国に至る」とある記事にも符節しよう。とすれば、この奔穰舎羅は「首都 ⟶ 東南三百余里 ⟶ 東北二百余里」にあり、従って首都タシュクルガンより東南の方向に求むべく、確言はできないが「今の Kandar Punin 山を以て之に擬するを穏当とす」る［白鳥：同前書、一九九ページ、なお同書下四六ページ以下の文および Gordon・田中訳：『世界の屋根』付図参照］。『西域記』の文に依れば白鳥説に従うを是としよう。

二　奔穰舎羅（……）　奔穰舎羅 ${}_{\circ}$*puən-${}_{\circ}$ńźiang-${}^{\circ}$śįa-${}_{\circ}$lâ* : **pu* (*m*) *ñaśala* (Skt. *puṇyaśāla* のインド西北方音の語型としては極めて自然なもの)［S. Sen : *Comparative Grammar of Middle Indo-Aryan*, p. 31 ; S. Konow : *Saka Studies*, p. 172 a ; do : *Primer of Khotanese Saka*, p. 113 ; H. W. Bailey : *The Khotan Dharmapada*, BSOAS, 11, pp. 488 ff. ; 拙稿：「唐代における中国語語頭鼻音の Denasalization 進行過程」『東洋学報』三九号、二三ページ］。意味は慈善事業をなす館舎、即ち福舎である（巻四の一・一注七参照）。

一九　烏鎩国

一九・一　**国勢の概観**　烏鎩国[注一]は周囲千余里ある。国の大都城は周囲十余里あり、南は徙多河に臨んでいる。土地は肥沃で、農業は盛大である。林樹は蓊蓊とし、花・果は繁茂している。さまざまの玉を多く産出する。則ち白玉・黳玉（黒い玉）・青玉などがある。[注二]気候は温和で、風雨は順調である。人々の間には礼義は少なく、性質は荒々しい。詐りが多く、恥を知ることが少ない。容貌は醜悪で、衣服は皮や褐である。文字・言語は佉沙国（カシュガル）と少しく同じ点がある。しかし、信仰はわきまえ、仏法を信奉している。伽藍は十余ヵ所、僧徒は千人足らずで、小乗教の説一切有部を学習している。数百年この方、王族は跡絶え、自らの君主はなく朅盤陀国に隷属している。

注

一　烏鎩国　烏鎩 ${}_{\circ}$*'uo-ṣaï*${}^{\circ}$: **uṣā*. 『慧琳音義』七七に「烏鎩国　師戒反↓ṣaï${}^{\circ}$」とある。この位置の比定は諸説があり定まらない。或いはカシュガルの南方にあたる英吉沙 Yangi Hissar (76°10′ E., 38°55′ N.) であるとし［Cunningham］、或いは朅盤陀国（タシュクルガン）の東北にあたる Chihil Gumbaz (75°50′ E., 38°10′ N.) であるとし［Yule, Hedin］、或いは Yangi Hissar の南にある Ighiz Yar (76°10′ E., 38°40′ N.) であるとする［高田：『国訳伝』］。何れも朅盤陀国より佉沙国（カシュガル）に至る道筋の途中に求めている。しかし、この何れの地点も玄奘の言う「国の大都城の南は徙多河に臨む」の記述に当たらず、説明に苦しんでいる。これに対して、前項の奔穰舎羅を朅盤陀国の東南にありとし、烏鎩国を奔穰舎羅の東方八百里に求めこれをヤルカンド (77°16′ E., 38°24′ N.) とする説［白鳥：『西域史研究』上一九ページ］がある。ヤルカンド莱爾羌は漢代の莎車、『魏書』西域伝の渠莎にあたり、清代・民国には莎車と旧名に復した所である。その南に近くヤルカンド河が流れ、東南の于闐 Khotan（本巻一〇の佉沙国）と西北の疏附 Kashgar（本巻一二の瞿薩旦那国）を結ぶ幹線路上の要地である。このヤルカンド説は次下に見える当地の産物を考え合わせるならば、他の諸説よりも依るに足ろう。確実には定め難くも、ヤルカンド或いはその上流の何所かに求めるのを適当としよう。

二　烏鎩国の産物　ヤルカンドとすれば、その灌漑面積も広く、新疆省南部における著名な農産地であり、小麦・大麦・玉蜀黍・高粱・葡萄・桃・杏及び綿花等を産し、養蚕・牧畜も盛んであり、その羊毛は絨毯の材料となっている［『新修支那省別全誌』八、三二九ページ］。また玉については「現今は和闐 Khotan 河の上流最も多産するも、以前は主として

葉爾羌河の上源地方より採取せられ……葉爾羌河に属する葉城 Karghalik・莎車 Yarkand の産は黄・白・黒各色の玉を産するも質佳良でない。但し雪白・翠青・蠟黄・丹赤・墨黒のものは上品にて珍重せらる」[同上書、四五七ページ]とある。古く『漢書』西域伝莎車国の条に「鉄山有り、青玉を出す」と見え、清・椿園七十一撰‥『西域聞見録』二、葉爾羌の条に「土は米穀瓜果を産し回地に甲たり。其の地に河有り、玉石子を産す。大なる者は盤の如く斗の如く、小なる者は拳の如く栗の如く、重さ三、四百觔なる者有り。各々色同じからず、雪の白・翠の青・蠟の黄・丹の赤・墨の黒の如き者は皆上品にして、一種羊脂朱斑あるもの、一種碧きこと波斯菜の如くにして金片透逕なる者は尤も得難し。河底の大小の石の錯落して平鋪なるとき、玉子其の間に雑生す」と詳細であり、玄奘の記事を補証し得よう。

一九・二　羅漢入定の山岳　城の西方二百余里で大きな山に至る。(注一)山は高く靄を帯び、石をついて雲が巻き起こってくる。崖は嶮しく、今にも崩れ落ちて来そうである。その頂上の窣堵波は大きく珍しい作りである。土地の言い伝えによると次のようである。数百年前に山の崖が崩れ落ちたところ、中に苾芻が瞑目して坐っていた。体つきは大きく姿は枯れきっており、鬚や髪は長く垂れ肩を被い顔を隠すほどであった。猟師が見つけて王に申し上げると、王は自ら会いに出かけられ、都の人々も呼びもしないのにみなやって来て、香を焚き花を撒き、争って供養を行なった。王は、

「これはどなたなのだろう。こんなりっぱな方は」

　と言うと、ある苾芻が、

「この鬚や髪を長く垂れて袈裟を身につけておられる姿は、滅心定（滅尽定）に入られた阿羅漢です。滅心定に入るには初めに期限があり、或いは揵稚（巻八の二・三参照）の音を聞くとか、或いは日光が照らすのを待つとかします。この合図があると［禅］定より起ち上がります。もし合図がなければ静かにして少しも動くことがありません。しかし、定の力で身を維持して、身が崩れ壊れると言うことはありません。段食(注二)をしている身体は定より［突然に］出ると死んでしまいますから、蘇油(注三)を注ぎかけて、体に潤いをつけて後に、揵稚を鳴らして定に入っている心に合図しましょう」

　と答えた。王は、

「よろしい」

　と言った。［そのようにして］揵稚を打った。その音が鳴るやいなや、この羅漢はパッと目を開き、暫くして、

「汝は何者なのか。人柄卑しきに袈裟をまとっているとは」

　と尋ねると、

「私は苾芻であります」

　と答えた。

「とすれば、私の師である迦葉波如来（過去七仏の第六、現在賢劫の第三仏、巻一の三二・二参照）は今いずこに居られますか」

　と問うたので、

「大涅槃に入られてこの方、すでに久しいものがあります」

　と答えた。これを聞くや目を閉じ、如何にも残念げに考えこんでいるようであった。次いで再び、

「釈迦如来はもう世に出られましたか」

　と問うと、

「すでに出られ世を導き、はや寂滅されました」

　と答えた。これを聞くや、またも頭を伏せていたが、やや暫くすると起ち上がり虚空に昇天し神変を現わし、化火（火光定、巻三の六・九参照）し身を焼き遺骸が地に落ちてきた。王はその骨を収納してこの窣

堵波を建てたのである。

これより北して山地や野原を行くこと五百余里で、佉沙国（原注　旧に疏勒と謂えるは乃ち其の城号を称するなり。正音には宜しく室利訖栗多底と云うべし。疏勒の言たる猶訛たるごとし）に至る。

注

一　城の西方二百余里で大きな山に至る　この大山を、烏鎩国の首都を英吉沙 Yangi Hissar とする人々は、首都の西にあたり南北に伸びる Muztag Ata Range の主峯 Muztag Ata（標高七千五百六十九メートル）と考える。この山にしても、またこの山よりは北にあるこの山脈の北端の Kongur 山（標高七千七百十九メートル、Yangi Hissar より西方二百余里としてはむしろこの山が適当ならん）にしても、共に万年雪を戴く山であり、玄奘の語例によれば大山と言うより雪山に当たろう。烏鎩国の首都をヤルカンドとすれば、その西方約五十キロにパミール山塊の東端 Khan Kul（三千四百五十九メートル）がある。この方が大山と呼ぶに適しよう。

二　段食　人々の常用する食物のことで、旧訳に摶食、或いは団食と言う。

三　蘇油　牛乳を煮沸して作った油（ghee <Skt. *ghṛta*）で、食用としたり体に塗ったりする。『慈恩伝』五には酥乳に作る。

二〇　佉沙国

佉沙国[注一]は周囲五千余里ある。砂漠が多く土壌は少ない。農業は盛大で、花・果は繁茂している。細い氈や褐を産出し、細い氈や氍毹（巻十一の二〇・一参照）を巧みに織る。[注二]気候は和やかで、風雨は順調である。人の性質は乱暴で、俗として詭りが多く、礼義は薄く学芸は平凡である。その風俗として子を生むと頭を押えて扁平にする（巻一の六参照）。容貌は卑しく、文身をし碧眼である。[注三]使用する文字は印度に手本を取っており、省略・改変はあるがよく印度の様式筆法を保存している。[注四]言語の語彙・音調は諸国とは異なっている。[注五]篤く仏法を信じ、福徳利益の行に精励している。伽藍は数百ヵ所、僧徒は一万余人、小乗教の説一切有部を学習している。その理論は研究することなく、多くはその文句を暗誦するのみである。それ故［経律論の］三蔵や毗婆沙（広解）をすっかり暗誦しているものが多い。[注六]

これより東南へ行くこと五百余里、徙多河を渡り大きな砂山を越えて斫句迦国（原注　旧に沮渠と曰う）に至る。

注

一　佉沙国　佉沙 *ₒk'ia-ₒṣa* : Skt. *khāṣa.* 今のタクラマカン Taklamakan 砂漠（塔里木 Tārim 盆地）西端の要地カシュガル（*kaš'ar, kašqar, kašqa* [G. Jarring : *An Eastern Turki-English Dialect Dictionary,* p.165]）を指すことは明らかであるが、佉沙の原音の比定にはやや考慮を要する。「Kashgar は漢代より隋代に亘りて専ら疏勒・沙勒の名にて漢人に知られしが、唐代に及んでその名始めて記録に現出せり。慧琳の音義に迦師佶黎とあり、慧超の往五天竺国伝に伽師祇離とあるは、正しく Kashgar の対音にて、玄奘が西域記の佉沙、唐書西域伝の伽師はその略称なり」とし、カシュガルの原音を Iran. *kāsh*（玉の意）と *ghar*（市の意）の合成語かとし、さらに——gar は Wakhan 語などの *ghar*（山岳の意）より転じたものかとの説［白鳥：『西域史研究』上一九四ページ］がある。また『新修支那省別全誌』八の三一七ページには当地の「土名を喀什噶爾と称し、喀什とは各色、噶爾とは磚房を意味す、即ち各種の家屋あるを示」すとする説もある（Yule & Cordier : *Marco Polo,* I. p.183 Note にも同義の解を載せる。共に『西域聞見録』二の「喀什とは各色を謂い、噶爾とは磚房を謂う。地、各色の磚房多く、故に名づく。」亦其の富庶の意を言うのみ」の文に依ろう。『西域同文志』三にもほぼ同文が見える）。さて、前引の慧琳の迦師佶黎、慧超の伽師祇離は *kāshgiri* に、『唐書』の伽師は *kāsh* に当たることに異論はあるまい（そ

の語源は今論じない）が、玄奘の佉沙はその韻尾の母音が—a なる点よりしてもやや趣を異にする。梁・僧伽婆羅訳：『孔雀王咒経』上（五〇二—二〇間の訳）に「揵摩波羅 Dharmapāla と言う薬叉が迦舎国 Skt. khāsa (khāṣa) に住む」と言う文の国名を、唐・義浄および不空の両異訳には共に「疎勒国」に作っている。また隋・闍那崛多訳：『仏本行集経』一一の諸種の書を載せる中に「珂沙書 Skt. khāṣya-lipi」を挙げ、原注に「疏勒」としている（ただし、Skt. khāsa, khāṣa の原義は北インドの山地諸国 Darada 等一帯を指す語であり、直ちにカシュガルを意味するものではない [M.W.: Skt.-Eng. Dict., p. 338 c, 339 c；荻原：『梵和』四〇六ページ]。従って玄奘以前に佉沙の同形語に疏勒と原注のある例を注意しない人や、尾母音—a と—i の相違に意を払わない人たちは、玄奘の佉沙をこの梵語に当てることを否定する [Stein: Rājat., I. p.47, II. p.433]）。これらの六朝期の用例を顧慮すれば、玄奘の佉沙は恐らくこの伝統的な古語を使用したものと推定するのが適切であろう。次に当地の旧称たる疏勒・疎勒・沙勒の語源については、「漢書の西域伝によれば、今の Kashgar を漢代に疏勒といえり。Turk 語にては水を su といい、水の存するを suluk という。Kashgar の地たる水草美好なるが故に此の名を得たるものなるべし（Watters: On Y. Ch., II, p.291）」[白鳥：同前書二四四ページ：suluɣ juicy, in Jarring: ibid., p.280] とある他には適解を見ない。チベット文献中にカシュガルを šu-lig, šu-lik として表記するのはこの疏勒に当たるものとされるが、このチベット表記も漢語より学んだものであろうとされている [F. W. Thomas: Tibetan Literary Texts and Documents, III, p. 12]。玄奘が「旧に疏勒と謂うは乃ち其の城号を称するなり」とするのは、『漢書』西域伝に「疏勒国王は疏勒城に治す」とあるに同じく、城名が国号の由来とするものである。正音の 室利訖栗多底 śi̯ĕt.-lji°-ki̯ət.-li̯ĕt.-.tâ-°tiei: *śri-kritati. 室利（吉祥・勝・徳・首等と訳す。巻九の二・七に室利毱多、注に唐に勝密と言うとあり）と訖栗多底の合成語であろうが、訖栗多底 *kritati の語は辞書にも見えぬ。注者の誤った比定であろうとされる [Watters: On Y. Ch., II, p.291]。『慧苑音義』下によるに「疏勒国　正しくは佉路数怛勒と名づく。古来此の方には略を存して呼びて疏勒と為し、又数の音を訛りて疏となす。然るに此の名は乃ち是れ彼の国の一山の号なり、因て其の称を立つ。又或いは翻じて悪性国と為す。其の国人は性多く獷戻なるを以ての故なり」とする。ここに言う正梵語の佉路数怛勒 °k'i̯a-luo°-.°ṣi̯u-tât.-lək. とは *kharuṣottara(ka) のようなものであろうか (Stein: Ancient Khotan, I, p.49 参照)。疏勒と言う名称が訛略であるとすることは、玄奘・慧苑ともに一致している。

二　佉沙国の農業・牧畜・氍毹などは今日も盛大であり、玄奘の記述と差異はない [『新修支那省別全誌』八、三一九、三二一ページ以下]。

三　容貌は卑しく、文身をし碧眼である　この記述は従来理解に苦しんだようである [Beal: Records, II. p.307 (52)]。天山南麓の住民の血統はすこぶる複雑で、「太古より Arya 人は葱嶺より東進し、Turk 人は天山より南下して、共にこの地に於いて混合融和」した結果による現象であると言う [白鳥：『西域史研究』上二四九ページ]。

四　文字　当地の仏教時代の遺跡から、一九〇六年P・ペリオによりブラーフミー文字の断片が発見された。恐らく当時は、中央アジアの他の多くの地域と同様にこの文字が使われていたのであろう [平凡社：『世界考古学大系』九、一〇四ページ：J.A. Dabbs: History of the Discovery and Exploration of Chinese Turkestan, p.131]。

五　言語　玄奘往訪当時の状況についてはこの記事以外に具体的なものは見当たらないが、十一世紀に当地で生まれたトルコ人 Maḥmūd al-Kašɣarī はその著のトルコ・アラビア語辞典 Dīvān lughāt atturk に、当地ではウイグル文字が使われ (I. 10)、カシュガル郊外では Känjäki 語が話され、町の中では Khāqānī のトルコ語（カラ・ハン朝の語）を話す (I. 31)、と述べている (Känjäki 語は非トルコ語とも言われ [Minorsky: Ḥ.-'Ā., p.280]、Käncäk=Türkstamm ともされる [C. Brockelmann: Mitteltürkischer Wortschatz, s. 245])。今日も城内は漢人多く、城外は纏商（イスラム系トルコ人）が集まっている [『新修支那省別全誌』八、三二一ページ]。

六　仏教　巻一の三八・一に見える河西の質子が、『後漢書』西域伝の疏勒国王安国の舅たる臣磐のことであり、かれがこの国へ迦畢試国の仏教を伝えたとすれば、疏勒の仏教は二世紀に伝来したものであり、小乗教であったわけである。それ以後、五世紀の『法顕伝』、八世紀の『慧超伝』を通じて小乗国であるが、後書には「寺有り僧有り小乗の法を行なうも、

肉及び葱(ねぎ)・韭(にら)を喫(くら)う」と小乗教としては特異な風習があることを記す。当地より有名な Petrovski 収集の古代書写『法華経』梵本断簡も発見されていることより見れば、大乗経典も伝来した如くであるが、布教には成功しなかった模様である［羽溪：『西域之仏教』三九一ページ以下］(ただし、この梵本をコータン出土とする説もあり、もし然りとすれば話は別である)。当地の遺跡の概要は、平凡社：『世界考古学大系』九、一〇四ページ参照。

二一 斫句迦国

二一・一 国勢の概観 斫句迦国(注一)は周囲千余里ある。国の大都城は周囲十余里ある。嶮峻で守備は険固、人家は盛大である。山や丘は引き続き、石ころの地が広がっている。二つの河(注二)に臨みとり巻かれ、農耕が盛んである。葡萄・梨・柰(からなし)があり、その果実は豊富である(注三)。冬季の風は寒く、人々は粗暴である。人々の間は嘘いつわりのみで、大ぴらに盗みを行なっている。文字は瞿薩旦那国と同じであるが、言語には差異がある(注四)。礼儀は薄く、学芸は浅い。篤く三宝を信じ、好んで福徳利益(慈善)を楽しんで行なっている。伽藍は数十、損壊したものが多い。僧徒は百余人で、大乗教を学習している(注五)。

注

一 斫句迦国 斫句迦 *tśiak。-。kəu-。ka* : **cakuka*. 当地は『魏書』『北史』に朱居・朱居半・朱駒波、『宋雲行紀』に朱俱波、隋・費長房撰『歴代三宝記』に遮拘迦・遮居迦として現われ、中央アジア出土の古文献には Kharoṣṭhi Doc. *cugupan, cugopa*, Buddh. Skt. *cakoka*, Tib. *bcu-gon-pan, cu-chu-pam, kha-ga-pan* として見える。この波・半・槃、*-pan, -pam* の音節は「道」を意味するものらしい［F. W. Thomas : *Tibetan Literary Texts and Documents*, II. p.256 ; P.C. Bagchi : *India and Central Asia*, p.48］。前項末原注中の旧名「沮渠」については、唐・道世撰『法苑珠林(ほうえんじゅりん)』三〇に「于闐国の南二千里沮渠国に三無学羅漢あり」(次項参照)と見えるのはその一例であり、この国名は「朱居」等の地名と「一音の転」ともされる［黄文弼：『塔里木盆地考古記』五六ページ］が、或いは河西の張掖(ちょうえき)に拠った沮渠氏(匈奴の官名を氏とした羯(かつ)族の一［姚薇元：『北朝胡姓考』三六四ページ］)の亡国後移住したものともされる［望月：『辞典』二一四三ページ］。玄奘の記す佉沙国カシュガルよりの距離・方位・地勢を按じ、今の葉城、即ち哈爾噶里克 Karghalik (*qarɣaliq*「烏の群れる町」の意、77°26′ E., 37°53′ N.) であるとされる［『西域同文志』巻三の二五 ; Stein : *Ancient Khotan*, p. 89 ; Jarring : *An Eastern Turki-English Dialect Dictionary*, p.240］。

二 二つの河 カルガリク地域一帯の北部を西南のパミール山塊より東北へ流れるヤルカンド河と、その南のカルガリク近辺を同方向に流れて砂漠中に消える提孜那甫河 Tiznaf との二を指そう。この二河の間には多くの小流があり、この地方を豊かに潤している。

三 農業 この地方は今日も農業・牧畜・養蚕共に盛んである［『新修支那省別全誌』八、三三五ページ］。

四 文字・言語 玄奘は当地の文字・言語を共に于闐(コータン)のそれと比較しているが、コータンのそれはその辺より多数出土した文書から、その文字はインドに行なわれるブラーフミー文字にやや地方的な修飾を加えたものであること、その言語は当初は "Unknown Language" とされ、今日は東イラン語派に属する語であることが判明し、コータン語 (Khotanese or Saka Khotanese) と呼ばれている［Stein : *Ancient Khotan*, p. 90 ; S. Konow : *Primer of Khotanese Saka*］。玄奘はカルガリクの言語に差異を認めているが、ここからは今日までなおまとまった文書の出土もなく、その差異の詳細は判明しない(コータン語にはカシュガルの東方、砂漠中の Maralbashi で使用された方言があることを認められている［Konow : *ibid.*, p.7］が、それとの異同も不明)。『宋雲行紀』にも当地の「風俗言音は于闐と相似て、文字は婆羅門と同じ」としている。

五 仏教 当地の大乗教については、本項の三「大乗経典」の条に詳しい。

二一・二　南境の霊跡　この国の南の境に大きな山がある。峯々は嶮しく山々は重なり連なって、草木は冬の寒気をしのいで春秋僅かに生じ、渓谷の早瀬はしぶきを四方に飛び散らしている。崖の洞穴や石室は山林中に点々と散らばり、印度の證果を得た人々は多数神通力を運らし、身軽に遠遊してここに住んでいる。阿羅漢たちで入寂したものも多く、こう言うわけで多数窣堵波がある。今日もなお三人の阿羅漢が巌窟の中で滅尽定（巻九の三・一〇参照）に入っている。その姿は瘠せた人のようで、鬚や髪は常に伸びている。それ故、沙門たちは時折出かけて剃っている。(注一)

注

一　この大山の伝説については、『歴代三宝記』一二の『新合大集経』の条に「此の国（遮拘迦国）の東南二十余里、山有り甚だ険なり。其の内に大集・華厳・方等・宝積・楞伽・方広・舎利弗陀羅尼・華聚陀羅尼・都薩羅蔵・摩訶般若・八部般若・大雲経等、凡て十二部、皆十万偈なるを安置す。国法として相伝え、防護守視し、兼ねて云う、三滅定の羅漢ありて彼の山の窟に在り、寂禅冥衛す。半月、一月に或いは僧の山に往きて羅漢の為に浄髪するものありと」と見えている。この山についてはスタインも玄奘の耳にした伝説として記すのみで、その比定は試みずはいるが、玄奘のこの文に当たる場所の比定は行なっていない［『塔里木盆地考古記』五六―七ページ］。黄文弼もカルガリク南辺に仏教遺跡を探って［*Ancient Khotan*, p.91］、

二一・三　大乗経典　それにこの国にある大乗経典は部数が最も多く、仏法の至る処でここより盛んな所はない。十万頌で一部をなす経典は全部で十数経もあり、これ以下のものは流布は誠に広汎である。(注一)

ここから東して嶺を越え谷を渡り、行くこと八百余里(注二)で瞿薩旦那国（原注　唐に地乳と言う。即ち其の俗の雅言なり。俗語にこれを渙那と謂い、匈奴はこれを于遁と謂い、諸胡はこれを豁旦と謂い、印度はこれを屈丹と謂う。旧に于闐と曰うは訛なり）に至る。

注

一　大乗経典　当地に大乗教が盛んであったことは、『歴代三宝記』一二の『新合大集経』六〇巻の条に隋・闍那崛多の言葉として「于闐の東南二千余里、遮拘迦国有り。彼の王は純信、大乗を敬重し、諸国の名僧の其の境に入る者は並びに皆試練し、若し小乗の学ならば即ち遣りて留めず。摩訶衍（Mahāyāna 大乗）の人ならば請じ停めて供養す。王宮には自ら摩訶般若・大集・華厳の三部の大経の並びに十万偈なるを有ち、王躬ら受持し、親しく鍵鑰を執り、転読するときには則ち開きて香華もて供養す。又道場内には種種の荘厳・衆宝備さに具わり、兼ねて諸の雑華、時・非時の果を懸け、諸小王を誘いて入りて礼拝せしむ」と記している（『続高僧伝』二、闍那崛多伝にも同文が見える。なおこの引文の後に前項注一中の『歴代三宝記』の文が「彼の土に又称すらく」として続く）。

二　ここから東して……八百余里　カルガリクよりコータンに至る間の詳細は Stein : *Ancient Khotan*, pp. 94-122, Chapt. V に見える。

二二　瞿薩旦那国

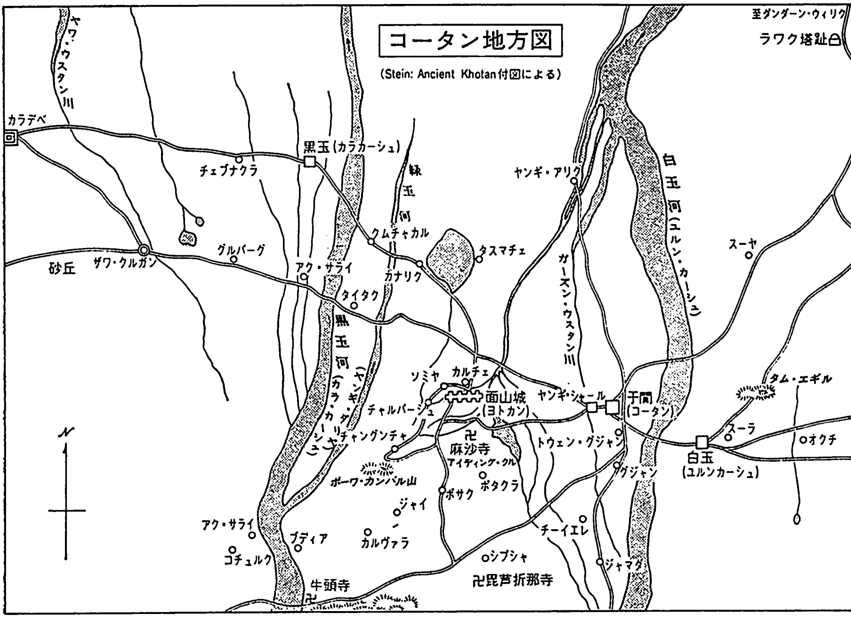
二二・一　国勢の概観　瞿薩旦那国(注一)は周囲四千余里ある。(注二)砂や石ころが大半で、土壌の所は狭隘である。穀作に適し、いろいろな果実が多い。氍毹（毛織）・細氈（細糸の毛織）を産出し、糸を紡ぎ絁紬（つむ

ぎ織）に巧みである。また白玉や瑿玉を産する。[注三] 気候は和順であるが、旋風がまい土埃を飛ばす。俗として礼儀をわきまえ性格は温順で、学芸を習うを好み博く技芸に達している。人々は富裕で、家々は業に安んじている。国がらとして音楽を尊び、人は歌舞を好む。[注四] 毛織物や皮衣を着るもの少なく、絁紬・白氎を身につけるものが多い。容儀には礼節あり、慣習には紀律がある。文字・法則は印度のあり方に従っているが、少しく字体・筆勢を改め、やや変化がある。言語は諸国に異なっている。[注五] 篤く仏法を尊んでおり、伽藍は百余ヵ所、僧徒は五千余人、みな大乗の教えを学習している。[注六] 王は甚だ勇武で、篤く仏法を信じ、自ら毗沙門天の後裔であると言っている。[注七]

注

一　瞿薩旦那国　今日の和闐（一九六六年北京発行『中国地図冊』には「和田」とする）コータンのこと。瞿薩旦那 ₒg'ïu-sât₀-tân°-₀na：*gostāna. チベット文献には当地の名を Tib. *sa-nu-ma* (*sa-las-nu-ma-nu*) としている。Tib. *sa*=Skt. *ku, go* (M. W.：*Skt.-Eng. Dict.*, p.286 c, 363 c「地・大地」の意), Tib. *nu-ma*=Skt. *stana*（「乳房」の意）[W.W. Rockhill：*The Life of the Buddha*, p.234；Thomas：*Tibetan Literary Texts and Documents*, I. p.18, 99：寺本婉雅：『于闐国史』一七・七五ページ]。ニヤ Niya の古址から発見したカロシュティー文書にも *kustana, kustanaka* の語が見えている [Stein：*Ancient Khotan*, p. 154]（ただし、玄奘の用字から見るにかれの意図したものは gostāna であったとするのが適切であろう）。次に玄奘が俗語として挙げる涣那 *χuân°*-₀*nâ*：*χuānnaは、恐らく当地コータンの土語を指そう。とすれば、于闐国を意味するコータン語形は *hvamna* (*hvam, hvamni, hvamnya*) であり、正に玄奘の表記に対応するものである [F. W. Thomas & S. Konow：*Two Medieval Documents from Tun-Huang*, p. 140；S. Konow：*Saka Studies*, p. 145]。玄奘が匈奴の称呼として挙げる于遁 *giwo-d'wən→₀jiu-°d'uənは、『唐書』于闐伝に北狄の称呼として挙げている。何れもその原音が如何なるものであったかを推測する資料は未検出である（八世紀の『悟空入竺記』には于遁を于闐の単なる別称として割注で「亦曰く」とするのみである）。後記するチベット人の称呼を参照。諸胡の称呼として挙げる豁旦 *χuât₀-tân°*：*χuatān の形は、当時の胡人の語は未詳であるが、後のトルコ人やアラビア人の χotan に近く、Gardizi（略一〇四八）、Marvazi（略一一二〇）、Maḥmūd al-Kashghari（略一〇八〇）に見える [Barthold：*Turkestan down &c.*；Minorsky：*Sharaf al-Zamān Tāhir Marvazi on China, the Turks and India*；C. Brockelmann：*Mitteltürkischer Wortschatz*]。この χotan は恐らく Niya 文献に見える Khot. *hvatamna* (*hvatan*), Kharoṣṭhi *khotamna* の形に来源しようし、玄奘の挙げる語形は正にこれに当たる。インドの称呼として挙げる屈丹 *kįuət₀-₀tân*：*kutan は恐らく Skt.*ịkustana* に来由するものであろうが、その用例を実見しない。『梵語雑名』には「于闐　矯引隟多二合簸 *kōrttana*」とする。玄奘が訛とする旧称の于闐 *giwo-d'ien→₀jiu-d'ien°：*judēn or udēn の語は両漢以来の呼称であり、恐らく古くは guden 或いは語頭子音の軟化した γuden の如き音であったと思われる（この語源に種々の推測はなされているが、なお不明確である）[白鳥：『西域史研究』上二六一ページ：寺本：『于闐国史』七五ページ以下]。チベット語の *hu-ten, hu-then, hu-den* 等は何れも漢語の音訳であろう [Thomas：*Tibetan Literary Texts & Documents*, IV. p.74] し、先述の匈奴の称呼と言うのもこの類のものと思われる。チベット語では当地のことを *li, li-yul* と称している。今日は和闐は Khotan, 于闐は東方の Keriya を表わす。

二　瞿薩旦那国の大都城については、次項の建国伝説中にやや触れるのみであるから、ここで説明する。和闐地方は崑崙山系のチベット高原から北流する東の玉隴喀什河 Yurung Kash Darya（白玉河）との西の哈拉喀什河 Kara Kash Darya（黒玉河）に挟まれた肥沃な地域である（両河はやがて砂漠中で合流し和闐河と呼ばれる）。現在の和闐の町は白玉河に近い地点（79°56′ E., 37°07′ N.）に東の回城と西の漢城よりなっている。往時の和闐の町は今の漢城 Yangi Hissar（新城の意）の西門より約五マイルの地にある Yōtkan と呼ばれる小部落が散在する廃墟の所に当たる [Stein：*Ancient Khotan*, pp. 190 ff.；スタイン・沢崎訳：『中央



コータン地方図
(Stein: Ancient Khotan付図による)

アジア踏査記』六一ページ]。

三　産業　現在の当地も玄奘の記述の如く盛大で、農業は玉蜀黍・小麦・米・綿花を産し、さらに桑樹の生育に適する所から南疆地方の主要な養蚕地で製糸業も発達している。牧畜では羊毛を産し、絨毯の製造は全省第一位である。また鉱産物にも富み、金・銀・銅・硝石・玉を産する。このような各種の物産に富む上に、住民は古来工芸に長じていたために概して裕福である［『新修支那省別全誌』八、三四一ページ］。

四　歌舞・音楽　和闐の住民の現状も、玄奘の時代と同じである［『新修支那省別全誌』八、三四〇ページ；大谷探検隊：『シルクロード探検』（白水社版）三四一五ページ］。なお『慈恩伝』には「俗は礼儀を知り学を尚び音韻を好む」とある。

五　文字・言語　和闐の東北東、砂漠中の遺跡ダンダーン・ウイリク Dandān-Uiliq（'the houses with ivory'；81°07′E., 37°45′N.）から発見された文書中のインド文字はブラーフミー文字であり、ほぼ八世紀のものとされている［Stein：*Ancient Khotan*, pp. 256 ff.；スタイン・沢崎訳：『中央アジア踏査記』六八ページ以下］。言語は東イラン語に属するコータン語である（本巻の二一・一注㊂参照）。コータンの主として地理的条件より来たる言語・文字の特殊性については、古いチベット文献にも現われている［Rockhill：*The Life of the Buddha*, p. 236；Thomas：*Tibetan Literary Texts & Documents*, I. p. 102；寺本：『于闐国史』二〇ページ］。巻末補注参照。

六　仏教　当地の仏教については次下の諸項にも出てくるが、まとまった研究文献としては、羽溪：「于闐国の仏教」『西域之仏教』所収；寺本：「于闐国仏教史の研究」『于闐国史』所収等、何れも古いものより見当たらない。五世紀初頭の様子を伝える『法顕伝』は「衆僧乃ち数万人」と当時の盛況を記す。

七　王は……自ら毗沙門天の後裔であると言う　毗沙門天（巻一の三二・一参照）Khot. *vaiśramaṇa*, Skt. *vaiśravaṇa*, Pkt. *vesamaṇa* は、多聞天とも称し、古くは施福の神であり、仏教では四天王の一で北方護持に任ずる夜叉である。コータン語文献には和闐王の名を *viśa' vāham*, *viśa'-saṃbhata* 等として、その姓を viśa' と称したことが知り得る［Konow：*Saka Studies*, p.195；do：*Primer of Khotanese Saka*, p. 123］。漢文

献では『隋書』西域伝の卑示、『唐書』の尉遅・伏闍・伏師をその姓とするが、これは何れも Khot. *viśa'* に対するものである。チベット文献では *vijaya-Bohan-chen-po, vijaya-sambhava* 等多数のコータン王の名が見え、その姓を Skt. *vijaya* (毗舎耶・毗社耶と書き、無勝・無極無勝と訳す語) と解していたことが分かる [Thomas: *Tibetan Literary Texts &c.*, IV. pp. 35ff.]。しかし、コータン国ではその自らの王姓 Khot. *viśa'* を梵語の毗沙門と関係づけて解していたものと見え、唐朝もこれを認めての故か、高宗の時に当地に置いた付近十州を管轄する役所を毗沙都督府と称した。玄奘が当地を往訪した時の王は親唐政策に努めた伏闍信 (チベット文献の Vijaya-siṃha) であったと思われる。なお、玄奘は当地から、便を求めて「還帰することを得て于闐に到れるを陳ぶ」る表文を長安に送った。その文は『慈恩伝』五、『全唐文』九〇六に見える。

二二・二　建国の伝説　その昔この国は広々と住む人とてもなく、毗沙門天がここに住居していた。無憂王の太子が呾叉始羅国で目を抉り取られた(巻三の三・六参照)時、無憂王は怒ってその輔佐の臣を罰しその豪族たちを流して、雪山の北方に追放し荒れた谷の間におらせた(注1)。流人たちは獣を追い求めつつこの西境にやって来て、重だったものを推挙し立てて王とした。この当時、東方の国の帝王の子も譴責を受けて流され東境のここに住みつき、随うものたちの勧めにより、これまた自ら王と称していた。歳月はたったが、両王の徳風教化は相手に通ずることもなかった。その両王が狩猟に出かけたところ荒野でぱったり出会い、互いに家系をたずね合い、それがもとで自らの優れたことを言い争い、怒った態度で言葉を交し、あわや兵火を交えそうになった。ある人が、

「今どうして慌てて戦いをされるのか。猟に出て来たままで決戦したところで、両軍の総力を尽くしたことにはなりますまい。国に帰り軍を整備し日を期して集まったらよろしかろう」

と諫めた。そこで乗り物を引き返しそれぞれ自国に帰還し、兵馬を訓練し士卒を督励した。期日となって軍を会し旗鼓堂々と相対した。夜が明けるや合戦をしたが、西方の君主は利あらず、敗れ逃げるのを追われてその首を斬られた。東方の君主は勝ちに乗じて国を失った西の人々を集め安堵させ、都を中央に遷し城郭を築こうとしたが、適当な土地なく成功し難いのではないかと心配し、遠近に地理に精通しているものはないかと布告させた。その時、ある塗灰外道の大きな瓢に水をいっぱいにして背負ったものが、進み出て、

「私が地理を承知しております」

と名乗り出た。そこでその水を流したところ、川跡にそい折れ曲がりその地を取り巻き、復元のように流れた。それで疾駆して水を追いかけたが、忽ちに見えなくなってしまった。その水の跡に従って城郭の基礎を高く築いたので竣功させることができ、ここに国を治めることになった。現在の王はここに都しているのである。城は嶮峻ではないが、攻撃しても陥し難く、その昔よりこの方、勝利を得たものはない。その王は都をここへ遷し町を作り、国を創め人々を安堵させ、功績すでに完成し年齢も老いたが、まだ後継者を得ず家系が絶えるのではないかと心配した。そこで毗沙門天神の所へ行き後嗣を得られるようにと祈願したところ、神像の額の上が割れて赤子が出てきた。抱きかかえて帰って来ると国中の人々は慶賀を表した。しかし、乳を飲まないので長生きしないのではないかと心配し、再び毗沙門天の神祠に詣り重ねて育つようにと請願すると、神前の大地が突然に隆起した。その様子はちょうど乳房のようで、神童はこれを飲み、やがて成人するまでになった。智勇は前人に比なく、徳風教化は遠方にまで及んだ。そこで神祠を営造し、祖先を祀った。これより以後代々継承して、国

を受け伝え君臨し、その系統を中絶させることはなかった。それで今もこの神廟は[注二]諸の珍宝も多く、その祭祀も一度として廃止されることはなかった。大地の乳房で育てられたので、[注三][地乳（瞿薩旦那 gostāna, 大地の乳房）を]国号としたのである。

注

一　無憂王は怒ってその輔佐の臣を罰し……　本書には無憂王の王子拘那羅を輔佐した臣下がコータンに流されたことになっているが、『慈恩伝』五には「[瞿薩旦那国の]王の先祖は即ち無憂王の太子なり。怛叉始羅国に在り、後謫せられて雪山の北に出で、養牧して水草を逐い、此に至って都を建つ」と、放逐された人を拘那羅その人としている。

二　毗沙門天の神廟　『慧琳音義』一一の「于闐」の語の注中に「彼の城中に毗沙門天の神廟あり。七層木楼、神は楼上に居り、甚だ霊験有り。其の国界に牛頭山有り、天神時に来たりて此の山に棲宅す」とある。

三　瞿薩旦那国の建国伝説　この国の建国伝説は本書に伝うるものの他にチベット所伝のものがある[Rockhill : *The Life of the Buddha*, Chapt. VIII. (The Early History of Li-Yul (Khoten) ; 寺本 :『于闐国史』第三章 ; Thomas : *Tibetan Literary Texts & Documents*, § 3. The Annals of the Li Country]が、東西より来たれる異民族の衝突・混淆と言う点で、大筋において大差はなく、恐らく古い時期の史実の一側を伝えるものと解してよかろうか。現代における当地の民族学的研究からも、玄奘当時以後にかれの記述を大きく変更する要なき結果が報告されている[Stein : *Ancient Khotan*, pp. 136-48]。

二二・三　仏教渡来の伝説　王城の南十余里の所に大きな伽藍がある。この国の先王が毗盧折那（原注　唐に遍照と言う）阿羅漢のために建てたものである。[注一]昔この国に仏教がまだ行なわれない時に、阿羅漢は迦湿弥羅国（巻三の六参照）からこの林の中に来て坐して禅定に勤めていた。その折、これを見るものあり、その容貌服装に驚き詳しくその様子を王に申し上げた。王はそこで自ら出かけてその挙動をよく見て、

「汝は何人なのか。唯一人この幽林に居るとは」

と言うと、羅漢は、

「私は如来の弟子で閑静な所で禅定を行なっているものです。王はどうか福徳を行ない仏教を弘め、伽藍を建立して僧たちを集めてください」

と答えた。王は、

「如来とはどのような徳があり、どのような神の故に、汝は林中に住んで苦行をし教えを奉じているのか」

と問うと、

「如来は四生（巻三の六・四参照）に慈悲を垂れ三界（巻二の四・六参照）を指導し、或いは顕に或いは隠に生滅流転の理を示されました。その教えに帰依するものは生死の境を出離できますし、その教えを信じないものは愛欲の絆にとらわれて脱し得ません」

と答えた。王は、

「真実話のとおりであれば、事は言葉よりもりっぱなことです。大聖と言うからには、私のために姿を現わしてほしい。もし仰ぎ見ることができるならば、必ず伽藍を建立し、心をこめて帰依し仏の教えを弘めましょう」

と言った。羅漢は、

「王が伽藍を建立され、竣功したならば感応があるでしょう」

と答えた。王は心から信じたわけではないが、その請願に従い僧伽藍を建て、遠近の人々悉く集まり法会を行ない慶讃しようとしたところが、まだ人々を集めるために叩く揵稚（巻八の三・三参照）がなかった。王は羅漢に、

「伽藍はでき上がりましたが、仏は何所におられますか」
と問うた。羅漢は、
「心をこめてなされば、やがて現われられるでしょう」
と答えた。王はそこで仏の光来を礼請するや、と見ると空中から仏像が降下して来て王に揵稚を授けた。そこで直ちに真心をもって仏教を弘めたのである。

注

一　王城の南……毗盧折那（……）阿羅漢のために建てたものである　毗盧折那 ˳b'ji˳luo-tśjät˳-˳na : Buddh. Skt. *virocana*, Skt. *vairocana*, Pa. *verocana* [*BHSD.*, p.512 a]. 毗盧遮那・毗盧舎・徴盧者那とも。普照・遍照と訳す。『魏書』于闐伝に「城の南五十里に賛摩寺有り、即ち昔羅漢比丘比盧旃の其の王のために覆盆浮図（覆鉢窣堵波）を造りし所なり。石上に辟支仏の趺処有り、双跡猶存す」とある寺院（賛摩 **tsân-muâ* ←*tsân°-˳muâ*）で、『于闐国史』その他のチベット文献に現われる Vijayasaṁbhava 王の時に建てたと言う *tsar-ma, tshar-ma, tsar-ma-ljo*（下の教区、下の教区の寺院の意）に当たるものであろう [Thomas : *Tibetan Literary Texts &c.*, I. p.104, II. p.169, 182]。今の Yotkan 南南東十三マイルの Chalma-kazān の廃址がこの寺院跡であろう（Chalma＜Tsar-ma）とされている [Stein : *Ancient Khotan*, pp. 231-5]。

二二・四　牛角山精舎

王城の西南二十余里の所に瞿室餧伽山（原注　唐に牛角と言う）がある。(注一) 山には二つの峯が聳え四方は絶壁であり崖の間に一つの伽藍が建ててある。(注二) その中の仏像は、時に光明を輝かすことがある。昔、如来がある時ここへ来られて天人たちのために教えの要点を略説され、この土地は必ず国家を建設し、仏の遺法を信仰し大乗を伝習するであろうと予言された。(注三)

牛角山の巌壁には大きな石室がある。(注四) 中に阿羅漢が居り、滅心定（巻九の三・一〇注四参照）に入り慈氏仏（弥勒菩薩）が出世されるのを待っている。数百年間もこの阿羅漢を供養することに変わりはなかった。近ごろに崖が崩れ門へ行く道が塞がれてしまった。国王は軍隊を動員して崩れ落ちた石を取り除こうとすると、黒い蜂が群れをなして飛んで来て人々を毒針で刺した。そう言う訳で今に至るまで石の門は開かないのである。

注

一　王城の……瞿室餧伽山(……)がある　瞿室餧伽 ˳g'iu-śiet˳-˳liang-˳g'ia: Skt. *go-śṛṅga* (Pa.-*siṅga*, Pkt. -*siṁga*, -*saṁga*). 牛の角の意。チベット文献にも *ri-Glaṅ-ru* と同義の語を出す [Thomas : *Tibetan Literary Texts & Documents*, I. p.90 n. 6]。Yotkan の南南西十一マイル、和闐オアシスの西南端、黒玉河の東岸にある Kohmāri Hill に比定されている。この山に土地の人が聖地として崇拝する石窟があり、ここから一八九二年に一、二世紀ごろに書写されたと思われるカロシュティー文字によるインド俗語の『法句経』*Dhammapada* が発見された [J. Brough : *The Gāndhārī Dharmapada*]。

二　山には二つの峯が聳え……一つの伽藍が建ててある　地理的情景を主とするならば、「この山は鋭い傾斜の尖った二つの峯がある。この山を二つに分離している谷間には一つの伽藍が建てられている」と解すべきであると言う [Stein : *Ancient Khotan*, p.185]。

三　牛角山における仏陀の予言　この予言はチベット文で見ることができる。『牛角山懸記』*Ri-Glaṅ-ru-luṅ-bstan-pa*・『僧伽伐弾那懸記』*Dgra-bcom-pa-Dge-ḥdun-ḥphel-gyi-luṅ-bstan-pa*・『于闐国懸記』*Liḥi-yul-gyi-luṅ-bstan-pa*・『于闐国史』*Li-yul-gyi-lo-rgyus* 等があり、この何れも Thomas : *Tibetan Literary Texts & Documents*, I. に英訳があり、『于闐国懸記』の初めの一部分は唐・法成訳 :『釈迦牟尼如来像法滅尽因縁』一巻の写本が敦煌より発見され、『大正大蔵経』五一に収録されている。この第三の書は Rockhill : *The Life of the Buddha*, p. 230 以下に英

訳され、また第二の書以外は寺本：『于闐国史』中に日本語訳されている。何れもコータン史研究の根本資料とされている。

四　牛角山の石窟　この山には注一に記した今日世界最古の写本仏典とされる『法句経』が発見された石窟と言われるものがある（Stein: *Ancient Khotan*, p.188 ではこの石窟の年代から、ここから発見されたものかどうかを疑っている）が、これが玄奘の記す阿羅漢入定の石窟と同じか否かは不明である。

二二・五　地迦婆縛那伽藍(注一)　王城の西南十余里の所に地迦婆縛那伽藍がある。中に夾紵(注二)の立仏像がある。もと屈支国（巻一の六参照）から来て、ここに停まったものである。昔この国に、譴責を受け、屈支に流寓し常にこの像を礼拝していた臣下があった。後に国に帰還させられても、心をこめて遙かに拝んでいたところ、夜半過ぎに像は突然自らここへ来た。その人は自宅を喜捨して、この伽藍を建てたのであった。

注

一　王城の西南……地迦婆縛那伽藍がある　地迦婆縛那 *d'i°.ka-°b'uâ-b'uâ°.nâ*. この対応原語は *Dirghabhāvana* [Julien], *Tikabhāvāna* [Watters] と推測されている。スタインは *dirghabhavana*（長い聖居の意）と訂正した語に傾きつつも、地迦の二字で Skt. *dirgha* を表わした例証を知らないとして躊躇している [*Ancient Khotan*, p. 225, n. 14]。京大本の『考異』によれば、醍醐三宝院蔵の建保二年写本には、何による校訂かを詳かにしないが、地伽 *d'i°.g'ia* に作るとのことである。また『孔雀王咒経』下に「地珂 *d'i°.k'a* 梁に長と言う」とある。この二例よりすれば、迦字は或いは伽なるやも知れずとの考慮も含め、その原語を **dikabhavana, dighabhavana* (Skt. *dirghabhavana*, Pa. *digha°*, Pkt. *diggha°, diha°*) と考えることも理なしとはしなかろう。この伽藍の位置は Yotkan の西南約四マイルの地点、Bōwa-Kambar の古址に比定されている [Stein: *Ancient Khotan*, p.225]。

二　夾紵　いわゆる「乾漆法」に当たる唐代の用語であるが、明・嘉興蔵本には「夾山（注者の名か）攷うるに、夾紵とは今の脱沙と称するものなり」と注する。脱沙とは原型の塑土（沙）を後に脱き出すいわゆる「脱乾漆法」に当たる明代の用語らしい。

二二・六　勃伽夷城　王城より西へ行くこと三百余里で勃伽夷城(注一)に至る。城中には仏の坐像の高さ七尺余のものがある。相好円満で、威厳粛然とし、頭には宝冠を戴き光明を時に輝かすことがある。土地の言い伝えによれば次のようである。この像はもと迦湿弥羅国（巻三の六参照）にあったが、ここへ請来したのである。昔ある羅漢がいた。その弟子の沙弥が死ぬ間際に酢米餅(注二)を欲しがった。羅漢は天眼でよく観察してみると、瞿薩旦那国にこの珍味があることが分かった。神通力によりここへ来て手に入れた。沙弥は食べおわり、この珍味のある国に生まれることを願った。その願いどおりに［瞿薩旦那国に生まれて］王子となることができた。王位を継ぐや、その武威は遠近を恐れさせ、遂に雪山を越えて迦湿弥羅国を討つことになった。迦湿弥羅国王は兵馬を整備し、辺境の難を防ごうとした。その時、阿羅漢は王に、兵を戦わせないでください、私が退却させましょうと言って諫めた。ついで瞿薩旦那王のために種々の仏の教えの要点を説いた。王は最初まだ教えを信ずることなく、なお軍隊を動かそうとした。羅漢はそこで、この王が前世に沙弥である時に身につけていた衣を取り出して、王に示した。王はその衣を見たので宿命智（前世よりの命運を知る知恵）を悟り、迦湿弥羅王にその咎を謝り交わりを結び、軍を釈き引き返した。その際、沙弥であった時に供養していた仏像を奉じ、軍隊と共に将来

したところ、像がこの土地まで来ると運搬することができなくなった。そこで像を取り巻いて伽藍を建て僧侶を招き、宝冠を喜捨して仏像の頭上に安置した。今冠っているのが、即ち先王が寄進したものである。(注三)

注

一 勃伽夷城　勃伽夷 *b'uət.-g'ia.-i.* この対応原語を、或いは Bhagai [Julien, Beal]、或いは Bhāgya [Watters] 等と推測するも確証はない。また『唐書』四三地理志下の「賈耽入四夷路」の第五安西入西域道に「于闐の西五十里に葦関あり、又西して渤海の西北を経て、繋館河を渡り、六百二十里にして郅支満城に至る」とある記事中の渤海と同一地であると見る試みもある [Stein : *Ancient Khotan*, p.117]。何れにしてもコータンより西進する幹線路上の帕爾漫 Piālma 付近であろうとされる [Stein : *ibid.*, p.117]。『慈恩伝』五によるに、玄奘は当地に停まること七日、コータン王自ら来たって迎謁し、大歓迎の裏にコータンに練り込んだと言う。

二 酢米餅　餅は出家の口にすべき五正食（一飯・二麦豆飯・三麨・四肉・五餅）の一であり、『摩訶僧祇律』二九「餅法」の条に「餅とは、大麦餅・麨麦餅・小麦餅・米餅・豆餅・油餅・酥餅・摩睺羅餅・鉢波㪍餅・牛耳餅・波利斯餅・㲉徒餅・曼坻羅餅・歓喜丸・肉餅、是の如きの比を一切皆餅と名づく」と列挙する中にも出て来ない。『説文』酢の条の段注に「凡そ味の酸なる者は、皆之を酢と謂う」とあり、従来の訳注には「酸っぱく醗酵した米の菓子」の意に直訳している [Julien : *Mém.*, II. p.231 ; Beal : *Records*, II. p.314]。この地方を自ら精査したスタインも、諸訳を列挙した後に「何か Khotan の特殊な嗜好品に違いない」と記すのみである [*Ancient Khotan*, p.118, n. 6]。

三 この伝説は、于闐国（古えのコータン）と葱嶺の彼方のカシミールにおけるガンダーラ仏教美術との交渉を物語る文証として注意される [Stein : *ibid.* p.118]。

二二・七　鼠墳の伝説

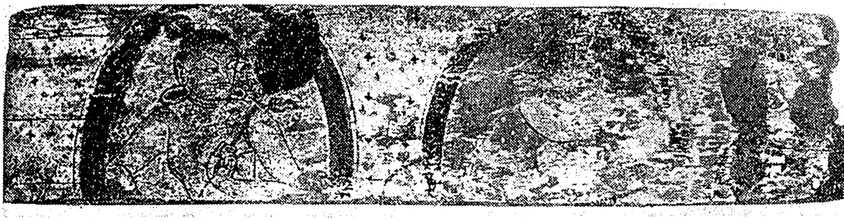
王城の西百五、六十里の所、大砂漠の道の真中に小高い岡がある。これは鼠が掘り出した土でできた塚である。(注一)土地の言い伝えによれば次のようである。この砂漠の中の鼠は大きさ針鼠の如く、その毛は金色・銀色など珍しい色をしている。この鼠群の首長となっているものが穴から出て歩く時は、常にこの鼠の群れが付き随っている。その昔、匈奴が数十万の軍勢を率い辺地の城を襲撃掠奪し、この鼠塚の側で軍を駐めたことがあった。この時、瞿薩旦那王は僅か数万の兵を率いるだけで、兵力が到底敵するに足らざるを恐れていた。王はこの砂漠の鼠は珍しいものではあるが、神力をもったものではないと思いこんでいた。賊軍が襲来するにおよび援助を求める先もなく、君臣ともに恐れおののきどうしてよいかも分からず、半信半疑で祭典を行ない香を焚き、鼠に、

「神霊あらば、少しく軍に力を加えられるように」

と祈願した。その夜、瞿薩旦那王は大きな鼠が、

「恭んで御援助申し上げましょう。どうか早く軍を整えてください。明朝合戦されるならば、必ず勝利を得られるでしょう」

と言う夢を見た。それで瞿薩旦那王は神佑のあることを知り、急ぎ兵馬を整備し将兵に命令し、夜明け前に出発し長駆して襲撃した。匈奴はこれを聞くや、震え上がらないものはなく、馬に乗り鎧を着けようとしたところ、馬の鞍・人の衣服・弓の弦・甲冑の綴り糸など、およそ使用してある糸はみな鼠が嚙み切ってしまっていた。敵軍はすでに至り、戦うところもなく縛られて殺害を受けた。瞿薩旦那王はかくて匈奴の将を殺し兵を虜にしたのであった。匈奴は恐れ震え上がり、神霊が援助したものであると思った。瞿薩旦那王は鼠の恩義に感じ祠



聖鼠伝説をあらわす板絵，ダンダーン・ウイリク出土

を建て祭りを行ない、代々尊崇し世にも珍しいことであるとの感を深くしていた。それ故、上は君主より下は庶民に至るまで、悉く祭祀を行ない神助のあらんことを願った。その穴の所を通りかかると乗り物より降りて歩き、心をこめて拝し福を授かりますようにと祭り、或いは衣服・弓矢を、或いは香花・珍味を供えた。何時も真心をこめてすれば福利を得ることが多く、もし供え物や祭りをすることがなければ災難に出会う、とのことである。[注二]

注

一　王城の西百五、六十里……塚である　玄奘の言うこの鼠墳の位置は、ピアールマより東へ十六マイルの Kum-rabāt-Pādshāhim Mazār（「砂漠の宿駅の君主の冢墓」の意、79°28′ E., 37° 12′ N.）に比定される。二十フィートにも及ぶ高さの半月型の砂丘が連続している。そこには現在一般に Kaptār-Mazār（「鳩の冢墓」の意）と呼ばれる祠があり、参詣者の供え物で生きている鳩が群棲している。かつての「聖鼠」が、イスラム時代に「聖鳩」に変形されたが、今日もなお古い伝説の俤を存続させている聖地である [Stein : *Ancient Khotan*, pp. 119 ff.]。

二　この聖鼠伝説の状況を描いた板絵の奉納額（六、七世紀のもの）が、ダンダーン・ウイリクの古址より発見された。上図がそれで鼠の頭をした神の姿が見られる [Stein : *ibid.*, p. 121 & Pl. LXIII；平凡社・『世界考古学大系』九、八八ページ]。

二二・八　娑摩若僧伽藍　王城の西方五、六里の所に娑摩若僧伽藍[注一]がある。中に窣堵波の高さ百余尺のものがある。甚だ霊瑞多く、時に神々しい光を放つことがある。その昔、ある一人の羅漢が遠方からやって来てこの林の中に止まり、神通力で大きな光を放ったことがあった。その折、王は夜分に重閣に居り、林の中に光明が照り輝くのを遙かに目にした。そこでみなに尋ねると、悉くの者が、

「ある沙門が遠方から来て、林の中で坐禅を組み神通力を現わしているのです」

と答えた。それで王は乗り物の支度をさせ、自ら出かけてよく見てみた。賢明な人物であることが分かったので心に尊敬の念を生じ、その人柄を慕うあまり宮中に来られるようにと願ったところ、沙門は、

「物にはそれぞれ適した場所があり、志にはそれぞれ向かう場所があります。深林・沼沢も私の心に適う所ですが、大廈高堂と言うような場所は私の好む所ではありません」

と答えた。王は一層尊敬の念を益し、尊重する心を深くして、沙門のために伽藍を建立し窣堵波を築いた。沙門は王の請いを受け入れて、その伽藍に住むこととした。かくすること暫くしたある時、王は仏力の感応により舎利数百粒を手に入れ非常に喜んだが、ひそかに、

「舎利の感応し手に入ることが、どうしてこんなに遅かったのか、誠に残念である。もっと早く入手して窣堵波の下に蔵置することができたならば、一層りっぱなことだったろうに」

と考え、急ぎ伽藍を訪ねて詳しく仔細を沙門に話をした。羅漢は、

「王は御心配なさいますな、私が安置して差し上げましょう。どうか金・銀・銅・鉄・大石函などに、この順序に入れてください」

と言った。王は職人に命じ作らせたところ、日ならずしてでき上がったので、りっぱな車に載せて伽藍に送り届けた。この時の状たるや、王族や高官は舎利に扈従し、百官庶民の舎利を見送るものは万をもって数えるほどであった。羅漢は、なんと、右手で窣堵波を持ち上げこれを掌中に載せて、王に、

「舎利を蔵ってください」

と言った。そこで地に穴を掘り函を安置したが、その作業が終わるや始めて窣堵波を地に降したところ、損傷する所は少しもなかった。これを目のあたりにした人々は未曽有のでき事であると感嘆し、仏を信ずる心はいよいよ厚く、法を敬う心は一層堅くなった。王は役人たちに、

「私はかねて次のように聞いている。仏の力は思量し難く神通は究知し難いほどであり、ある場合にはその身を百億にも分かつことができ、ある場合にはその姿を人界天上に化現することもある。世界を掌中に取り上げても、衆生は動揺の感もなく、教えの本質を一音で説いても、衆生はそれぞれの機類によって悟りを得ることができる。これはつまり仏の神力は比類なきものであり、その智恵は言語を絶したほどのものだからである。その身はすでにこの世から隠れ入滅されたが、その教えは今なお伝わっている。それ故、松の実を食い沢の水を飲む[注二]と言うように熱心に修行に励み、仏の道をよく味わいその境を慕うならば、今日でもなおその精神を把握し大いにその御加護を受けることができる、と言うことである。努めようではないか、人々よ。深く尊敬すべきである。仏の教えは深遠ではあるが、かくすれば必ず明らかとなろう」

と言った。

注

一　娑摩若僧伽藍　娑摩若 ˳sâ-˳muâ-˳n̂ia (later -ńźia)：Tib. *so-ma-ña* [Thomas：*Tibetan Literary Texts & Documents*, II. p.183], *sum-ña* [Thomas：*ibid.*, I. p. 118]. この原語は Skt. *samājñā* であろうとする説 [Julien：*Mém.*, II. p. 235] はこの地方における当時の言語状況からして妥当である [T.Burrow：*The Language of the Kharoṣṭhi Documents*, § 44；J. Hackin：*Formulaire Sanscrit-Tibétain du Xe Siècle*, p. 92, 99；水谷：「唐代における中国語語頭鼻音の Denasalization 進行過程」『東洋学報』三九（一九五七・三）、二二ページ]。チベット所伝の『于闐国史』によれば、コータン国王 Vijaya-Virya が楼城より眺望していた時、城外に金銀の光明を視た。それを訪ね求めると Ḫgum-stir の迦葉仏の舎利を納めた塔が建っている所であった。そこに Buddhadūta 羅漢等の指導によって Ḫgum-stir 寺を建てたと言う [Rockhill：*The Lifeo f the Buddha*, p.238；寺本：『于闐国史』二五ページ；Thomas：*Tibetan Literary Texts &c.*, I. p.108]。この文が玄奘の所伝の記事に相当しよう。また『法顕伝』に「其の（于闐）城の西のかた七、八里に僧伽藍あり。王新寺と名づく。作ってよりこのかた八十年、三王を経て方に成る。高さ二十五丈ばかり。彫文刻鏤、金銀もて上を覆い、衆宝もて合成す。塔の後には仏堂を作る。荘厳妙高にして、梁柱・戸扇・窓牖、皆金薄を以てす。別に僧房を作る。亦厳麗整飾なること、言にて尽くす可きに非ず。嶺東の六国の諸王、所有の上価の宝物もて多く供養を作すも、人の用うる者少なし」とある王新寺が、玄奘の言う娑摩若僧伽藍に当たろう。今の Yōtkan（古えの于闐首都）の西方約一マイルの地点にある村落 Somiya（<So-ma-ña）に比定され、そこには遠国より来て止住した聖人の霊跡と伝えられる塚がある [Stein：*Ancient Khotan*, pp. 223-5]。

二　松の実を食い沢の水を飲む　諸本何れも「餐和飲沢」に作るが、「和」は「松」の誤写であろうことは、巻頭「敬播序」注一九で述べた。



桑蚕伝説をあらわす板絵，ダンダーン・ウイリク出土

二二・九　**麻射僧伽藍**　王城の東南方五、六里の所に、麻射(マザ)僧伽藍(注一)がある。この国の先王の妃が建立したものである。その昔、この国では桑や蚕のことを知らず、東方の国にはあると言うことを聞き、使者に命じて求めさせた。ところが、東国の君主はこれを秘密にして与えず、関所に桑や蚕の種子を出さないように厳命した。瞿薩旦那王はそこで辞を低くしてへり下り、東国に婚姻を申し込んだ。東国の君主は遠国を懐柔する意志をもっていたので、その請いを聞き入れた。瞿薩旦那王は使者に嫁を迎えに行くように言いつけ、

「汝は東国の主君の娘に『我が国には元来絹糸や桑・蚕の種子がないので、持って来て自ら衣服を作るように』と伝えよ」

と注意した。娘はその言葉を聞いてこっそりと桑と蚕の種子を手に入れ、その種子を帽子の綿の中に入れた。関所へやって来ると役人はあまねく検索したが、王女の帽子だけは調べる非礼をしなかった。それで種子を携えたまま瞿薩旦那国に入り、麻射伽藍のある地に止まり、儀礼を整え迎えられて王宮に入った。桑と蚕の種子をこの地に留めておき、春が来るとその桑を植え、蚕月(陰暦四月)になると再びここへ来て桑の葉を採り養蚕を行なった。最初来た時は、なおいろいろな葉を混ぜて養蚕をしたが、それ以後は桑の樹も木蔭を連ねるほどになった。そこで王妃は石に、

「殺傷するを禁ず。蛾(が)となり飛び去りて後、初めて繭を処理すべし。違犯するものあらば、神霊の加護もなかるべし」

と禁制を刻ませ、さらに先の蚕のためにこの伽藍を建立した。数株の枯れた桑の木があるが、これが最初の樹であると言う。このような次第で今もこの国では蚕は殺さない習慣があり、ひそかに糸を取るもの(注二)があれば、次の年は必ず蚕によくないとのことである。

注

一　麻射僧伽藍　麻射 *ma-dźia*°：Tib. *ma-ża* [Thomas：*Tibetan Literary Texts & Documents*, I. p.110]. チベット所伝の『于闐国史』によれば、娑摩若僧伽藍を建てた Vijaya-Virya 王より二代は伽藍の建立なく、その後の Vijaya-jaya 王の代に中国より Pu-ñe-śvar (Skt. *puṇya-iśvara*?, 福徳自在の意か) と言う名の王女を娶(めと)った。その王女が嫁する時に蚕種を秘(ひそ)かに移入し、Ma-ża と呼ぶ地で飼育した、とある。[Thomas：*ibid*., p.110]。コータンの旧都 Yōtkan の東南約一マイルの地に Kum-i-Shahidān と呼ぶ土祠があり、これに当たると言う [Stein：*Ancient Khotan*, p.230]。

二　この蚕種移入伝説を描いたと思われる板絵が、ダンダーン・ウイリクの寺院址より発見された [Stein：*Ancient Khotan*, p.230；同・沢崎訳：『中央アジア踏査記』六八ページ・平凡社：『世界考古学大系』九、八八ページ]。(上図参照)

二二・一〇　竜鼓池の伝説　［王］城の東南百余里の所に、大きな河があり西北に流れている。（注一）この国の人はこの河を役だてて、田に灌漑していた。ある時、流れが跡絶えたので、王は甚だいぶかしく思った。そこで乗り物を命じて出かけ、ある羅漢僧に、

「大河の水は国民が利用していたものですが、今突然流れが跡絶えましたのは、その罪が何処にあるからでしょうか。施政に不公平があるからでしょうか。仁徳に及ばない点があるからでしょうか。さもなければ咎めだてがどうしてこんなに重いことがあるでしょうか」



竜女伝説をあらわす板絵，ダンダーン・ウイリク出土

と問うた。羅漢は、

「大王の統治は、政教行きわたり国は穏やかです。河の水が流れを跡絶えさせたのは、竜の仕業です。早速に竜を祭って祈願されれば、必ず再び元の利益を取り戻されることでしょう」

と答えた。王はそこで乗り物を引き返し河の竜を祭ったところ、突然一人の女が波を乗り越えてやって来て、

「私の夫は早く亡くなり、従うべき指図をしてくれるものはありません。それで河の水は跡絶え、農民は利を失うことになりました。王は国中でりっぱな家臣一人を選び、私に夫としてくださるならば水の流れは元のようになりましょう」

と言った。王は、

「恭んで承ります。あなたの望まれるようにいたしましょう」

と答えたので、竜は国の大臣が気に入ったような目付きで見た。王は帰城すると群臣に、

「大臣は国の重鎮であり、農民は人々の食物を生産するものである。国が鎮護するものを失えば危険であり、人が食物を絶やせば死ぬであろう。危険と死亡の重大事、何れを採るべきであろうか」

と相談した。すると大臣は席より進み出て跪き、

「すでに久しき期間にわたり拙き身をもち誤って重責に当たっておりました。常々報国の念を持っておりましたが、今日までその機に出会えませんでした。今日この御選択に参り何とかして重責を塞ぎたく存じます。万民に利益があるとならば、どうして一家臣を惜しまれることがありましょうや。臣は国の輔佐に当たるものであり、人は国の根本であります。願わくば大王はこれ以上お考えくださいますことのなきよう。もし幸いに福を修していただくのであるならば、どうか僧伽藍をお建てください」

と返答した。王はその願いを聞き入れ、日ならずして竣功した。その大臣は早く竜宮へ行くことを許されるようまたもや願い出た。そこで国中の官民ともに音楽を催し安全を祈り酒盛りをした。さてその大臣は素服（色を染めない衣服）を身につけ白馬に乗り、王に別れの言葉を述べ国民に挨拶した。馬を駆け河に入り水を渡るも溺ることなく、

中流にまで進み鞭を振るって水に線を引くや、水は二つに開きそれから姿が見えなくなった。しばらくすると白馬は水面に浮かび出て来た。栴檀の大鼓一つを背負い、一通の手紙が封をしてあった。その手紙の大要は、

「大王は取るに足らないこの私をも棄て賜わず、謬ってお選びいただきました。願わくば福業に努められ国を利し臣を多くなされますよう。この大鼓を城の東南に懸けておいてください。もし外敵が襲うことあれば、大鼓はその前に鳴り響きましょう」

とあった。河の水は今までどおり流れ、今日まで利用している。歳月すでに遠く、竜鼓は無くなってより久しい。もと懸けた場所には、(注二)今ももとのように「後代に作った代わりの」鼓がある。池の側の伽藍は荒れはてて僧も居ない。(注三)

注

一 [王] 城の東南百余里……流れている　この河は今 Yurung-kāsh (Türk. *ürüng-qaš* 白い玉の意)、漢名で白玉河と呼ばれるものである。

二 池　ここに何の説明もなく突然「池」と言う語が出現するのは異様である。従って原文を「旧と懸けし処には、今仍鼓池有り」と読む案 [足立:『研究』下一〇一九ページ] も出て来るわけであるが、それでは「仍」字 (「もとの如く」の意) が不安定となる。やはり、この文章は不審は残りながらも「歳月浸遠、竜鼓久無。旧懸之処、今仍有鼓。池側伽藍、荒圮無僧」と句読を切り、訳文の如く解すべきであろう (堀:『解説』一〇四四ページ : Beal : *Records*, II. p.322 は共に曖昧であり、Watters: *On Y. Ch.*, II. p.297 は大意のみを記す)。

三 古えのコータンの旧都 Yōtkan の東南に Aiding-kul と呼ばれる池沼 (Stein : *Ancient Khotan*, p. 226 に初出するこの語には訳語が見えず、堀:『解説』一〇四四ページには「今尚ほ 鼓池と号す」とあるも、その「号す」とする所以は未詳。この池沼名は Türk. *ajding-köl* 即ち「月光池 (湖)」の意であろう) があり、その東南で白玉河より水を分入し、東北遠く同河に再び流入している。その間多くの運河あり、灌漑に利用されている。この池の東南岸に接し、古えの城壁の一部と思われる所に Naghara-khāna (*nayara-χa:ne* 即ち「(半球形の) 大鼓の家」と呼ばれる高い堆土がある。この廃址が、ここに言う「池側の伽藍」に比定されている [Stein : *Ancient Khotan*, p. 227]。なおチベット伝の『于闐国史』には、有徳の僧が竜に変化し、体から水を出して伽藍の不時に備えたが、この伽藍 (Phru-ño と呼ぶ寺) はなお存し、白玉河より水を引いていると、やや似通った伝説を載せている [寺本:『于闐国史』三五ページ : Thomas : *T.L.T.D.*, I. p.119]。また隋・那連提耶舎訳:『大方等大集経』四五にも于闐における諸河断水の伝説を載せる。

二二・二　古戦場

王城より東へ三百余里、大きな荒れた湿地の中の数十頃 (数十ヘクタール) の土地は、全く草木はなく土が赤黒い。故老の話によれば戦いに敗れた場所であると言う。その昔、東国の軍隊百万が西に攻めて来た。この時、瞿薩旦那王も兵馬数十万の軍勢を整備し、東して強敵を迎え討った。この土地まで来ると両軍が相遇したので、すぐさま合戦したが西軍は勝利を失した。東軍は勝ちに乗じて惨殺を行ない、王を捕虜にし大将を殺した。士卒もみな殺しに誰一人生き残るものはなかった。その流した血は地を染め、その痕跡が今もこのような有様で残っているのである。(注一)

注

一 古戦場が今の何処に当たるかの比定は行なわれていない。ただ、次項の文頭に「戦地より東へ行くこと三十余里、媲摩城に至る」とある文より、玄奘の言う位置の概略は知り得る [Stein : *A. Kh.*, pp. 454-5]。

二二・三　媲摩城

戦地より東へ行くこと三十余里で媲摩城に至る。(注一)

栴檀を彫刻した立仏の像の高さ二丈余りのものがある。甚だ霊験あらたかで、時に光明を輝かすことがある。疾病のあるものは誰でもその痛む場所に随い、金箔を像にはるとすぐに快復するが、専心祈願するものも願いを聞き届けられることが多い。土地の言い伝えによれば次の如くである。この像はその昔、仏の在世中に、憍賞弥（コーシャーンビー）国（巻五の五参照）の鄔陀衍那（ウダヤナ）王（巻五の五・二参照）が作ったものである。(注二) 仏が世を去られた後に、そこから空を飛んで、この国の北の曷労落迦（ラウラカ）(注三)城中にやって来た。来た最初のころは、この町の人は富裕で安楽に暮らしていたが、深く邪見に執着して仏を尊敬しなかった。ここへ来た由来を伝えても、不思議なことだと思いはしたが敬意は払わなかった。その後、この像を礼拝している羅漢がいた。この国の人は驚き、その容貌服装を珍しく思い王に馳（は）せ知らせた。すると王は、砂土をこの見なれない人にかけるようにと命令を下した。それで阿羅漢は体に砂土をかけられ、口に入れる食糧も絶たれてしまった。当時、ある慈悲深い人がいて、常々この像を尊敬礼拝していたが、羅漢を見るにおよび密（ひそか）に食物を供した。羅漢はここを立ち去ろうとしてその人に、

「今後七日間砂土が雨のように降り、この城を埋め尽くし何も残らないでしょう。あなたはこのことをよく弁（わきま）えて、至急にここから出る計画をなさい。私に砂土をふりかけた人々はこの災難を受けるでしょう」

と告げ、語り終わると立ち去り忽（こつ）然として見えなくなった。その人は城に入り詳細に親戚縁故に知らせたが、この話を聞く者はみな嘲笑（あざわら）わないものはなかった。二日目になると大風が突然起こり、汚れた土を吹き飛ばし、さまざまな宝物を街路いっぱいに雨ふらせた。人々は盛んに忠告した人を罵（ののし）ったが、その人は必ず話のとおりになると信じ、こっそりと抜け穴を掘り城外に出て穴に入っていた。七日目の夜半過ぎには、降った砂土は城いっぱいになった。この人は穴の抜け道から外に出て、東してこの国に至り媲摩城に止まった。この人が来るや、その像もやって来たので、ここで供養を行ない、もう場所を変えようとはしなかった。古い記録に「釈迦の教えが尽きると、仏像は竜宮に入る」とあると言う。今は曷労落迦城は「砂土に埋もれ」大きな丘陵になっている。諸国の君主や諸方の豪族たちは、発掘してその宝物を手に入れようとするものが多いが、うまくその側に行きつくや猛風が吹き荒れ、煙雲四方に立ち起こり道を見失ってしまう。

注

一 媲摩城 媲摩 *p'iei°-ₒmuâ* : **phēma* (Khot. *phimmāṃna* [F.W. Thomas and S. Konow : *Two Medieval Documents from Tun-Huang*, p.142 ; S. Konow : *Saka Studies*, p.169], Tib. *phye-ma*, *bye-ma* [F.W. Thomas : *T.L.T.D.*, I. p.24, II. 309]. この媲摩 **phēma* の語源に二説がある。一は梵語 *Bhimā*（チベット所伝にコータン地方で尊崇された Śri-Mahādevi 大自在天女）より来た語とする説 [Watters : *On Y. Ch.*, II. p.303 ; 堀 :『解説』一〇四八ページ ; 羽溪 :『西域之仏教』三三四ページ以下]、二はチベット語 *bye-ma*（砂の意）より来た語とする説 [白鳥 :『西域史研究』上二五九ページ ; Yule & Cordier : *Marco Polo*, I. pp. 192-3 ; Stein : *A. Kh.*, pp. 285, 462 ; do : *Serindia*, pp. 1255, 1263 ; Thomas : *T.L.T.D.*, ibid.]。音声的にも後説をより妥当としょう（巻二の四・一七に「毗摩」天女の表記があるのを参照。「媲」字の用例は本書にこの一のみ）。方位・旅次・距離からみて『史記』の扜罙、『前漢書』の扜弥、『後漢書』の拘弥、『宋雲行紀』の捍麼、『新唐書』の干弥、およびマルコ・ポーロの言う Pein [Yule & Cordier : *Marco Polo*, I. p.191] に当たるとされ、現在の和闐 Khotan と于闐（克里雅（ケリヤ）Keriya）の中間にある策勒 Chira Bazar の北方の砂漠中、Uzun-Tati と Ulūgh-Ziārat の地域 (80°50′ E., 37°15′ N.) に比定される（次注参照）。

二 栴檀を彫刻した立仏の像の …… 作ったものである 『宋雲行紀』に「末城より西行すること二十二里、捍麼城に至る。[城] 南十五里に一大寺

有り、三百余の僧衆あり。金像一軀、挙高丈六なる有り、儀容超絶、相好炳然、面は恒に東して立ち、肯て西顧せず。父老の伝えて言う、此の像は本南方より空を騰りて来たる、于闐国王親しく見て、像を載せて帰るとき、中路に夜宿するに、忽然として見えず、人を遣わして之を尋ねしむるに、本処に還来せり。王即ち塔を起て、四百戸を封じて以て灑掃に供す。戸人の患むもの有らば、金箔を以て像の患める処に貼らば、即ち陰癒を得」とあるものに当たろう。ここにこの仏像のある寺は捍麽城の南方十五里とあり、同一城廓中にあるものではないことを意味するものと解し得よう。現在の Ulūgh-Ziārat は、Uzun-Tati の南方三マイルの地にあり、ほぼ宋雲の距離に当たる [Stein : *A. Kh.*, p.463]。とすれば、Uzun-Tati を玄奘の媲摩、マルコ・ポーロの Pein に当て、Ulūgh-Ziārat を宋雲の捍麽に当てる推定 [Stein : *A. Kh.*, p.462 ; H. Cordier : *Ser Marco Polo*, p.45] はむしろ逆であり、Uzun-Tati が漢以来の旧城市即ち宋雲の捍麽に当たり、Ulūgh-Ziārat が媲摩・Pein に当たると解すべきであろう。

三　曷労落迦城　曷労落迦 rât。-lâu°-lwâk。-。ka : *rauraka (Khot. *raurata* の梵語形。*Krora*, *Kroraina* 即ち楼蘭を指す [Thomas & Konow : *Two Medieval Documents from Tun-Huang*, p. 147 n. 6 ; Konow : *Saka Studies*, p.147 a ; 水谷 :「暁匣両声母の対音」『東洋学報』四〇、六六ページ ; 長沢和俊 :『楼蘭王国』二二三ページ])。この曷労落迦城滅亡に類するものは、唐・義浄訳 :『根本説一切有部毘奈耶』四六 (即ち梵本 *Divyāvadāna* 37. Rudrāyaṇāvadāna に当たる) に見える。そこでは、迦多演那 Kātyāyana 尊者が勝音 Roruka 城に赴いた時、王は悪心を起こし、「諸兵士に勅して各々土一把を以て苾芻の上に散ぜ」しめたところ、利益・除患と言う二忠臣がその非を悟って土を取り去り、このために「何の報をか受くべき」と尋ねた。尊者は「七日を斉りてより、当に塵土を雨ふらして所有る城郭は填圧して遺るなからん」と答えた。その日になると天は珍宝を雨ふらし、六日に至るまで続いた。二人は珍宝を船に盛満して城を出て逃げた。尊者は第七日にこの城中に塵土を雨ふらせるのを見て、これは業力で救済し難いことを知った、とある。この勝音 Roruka 城は、趙宋・施護訳 :『大堅固婆羅門縁起経』下には「労嚕迦城」と表記するものと同じである。

二二・一三　**尼攘城**　媲摩川(注一)より東して砂漠に入り、行くこと二百余里で尼攘城(注二)に至る。周囲三、四里で大きな沢地の中にある。沢地は温度・湿度共に高く渡渉は困難で、蘆が生い茂り道とてはなく、ただ城への道をたどることにより通行できるだけである。それ故に往来するものはこの城を経由しないものはなく、そこで瞿薩旦那はここをその東境の関所としているのである。

注

一　媲摩川　古えの媲摩の廃址である Ulūgh-Ziārat, Uzun-Tati には、かつての渠 (灌漑水路) の跡がある。チベット山塊より北流する Kara-su, Panak Akin, Yangi-Akin 等多くの河川から分出する細流は、この水路により媲摩近辺を潤していたばかりではなく、さらに北方の砂漠中にあったダンダーン・ウイリク (81°07′ E., 37°45′ N.) の生活条件を充たす程にまで利用されていた。この砂漠中の各オアシスを結ぶ古代路線が使用されなくなったのは、自然条件の変化と住民の維持努力の衰退により、この灌漑水路が廃棄されて居住地域が次第に山麓近くへと後退南下した結果によるものと推測されている。

二　尼攘城　尼攘 。ńźi-。ńźiang (later 。ńźiang) : *niña, *ninya. この語は、Khar. Insc. *nina* [Doc. no. 518] > *niña, *ninya > now *niya* の変化を歩んだとするのが自然であり、従って玄奘の表記は、カロシュティー文書の時代(ほぼ二、三世紀ころ)と現代の称呼との中間の様相を示すものと見られよう [Stein : *A. Kh.*, p. 311 ; A. M. Boyer, E. J. Rapson, E. Senart and P. S. Noble : *Kharoṣṭhi Inscriptions, Discovered by Sir Aurel Stein in Chinese Turkestan*, p.353 ; S. Konow : *Primer of Khotanese Saka*, p. 31 ; H. W. Bailey : *Hvatanica IV*, BSOAS, 10 (1942), p.920 ; 水谷 : Denasalization,『東洋学報』三九 (一九五七) 二四ページ]。現在の尼雅 Niya Bazar (中国名は民豊) の北方六十五マイルの砂漠中にあるニヤ Niya 古址のことで、媲摩よりは東北方に当たる。当

地は、A・スタインの一九〇一年に始まる三回の調査が行なわれた古えの西域南道中の重要地点で、南北二十五キロ、東西七キロにわたる広汎な廃址である（玄奘往訪時の町は余程小さなものである）。ここから約七百点のカロシュティー文書が発見されている［簡単には長沢和俊・『楼蘭王国』第四章参照］。この文書にしばしば現われる Cad'ota という語はこのニヤ遺址の原名、或いはその内の一であること、またこのニヤ遺址が『漢書』西域伝の精絶 **ts'i̯ĕng-dz'i̯wät* 国に当たること等が知られた［Stein: *Serindia*, p.219; Rapson & Others: *Kharoṣṭhi Inscriptions*, pp. 324-5］。このニヤの原名 Cad'ota と漢名の精絶の間には、恐らく何の関係もないであろうと言う見方［Rapson & Others: *ibid.*, p.325］と、この漢名は原名の音訳であろうと言う説とがある。玄奘は当地がコータン国の東境であると記すが、ニヤ出土の文献は二、三世紀のころは東方の鄯善国（楼蘭を首都とする）の治下にあった［長沢・『楼蘭王国』参照］。

二二・一四 大流沙 これ（尼壌城）より東行して大流沙に入る。砂は流れただよい、集まるも散るも風のままで、人は通っても足跡は残らずそのまま道に迷ってしまうものが多い。四方見渡す限り茫々として、目指す方を知るよしもない。かくて往来するには、遺骸を集めて目印とするのである。水草は乏しく熱風は頻繁に起こる。風が吹き始めると人畜共に目がくらみ迷い病気となり、時には歌声を聞いたり或いは泣き叫ぶ声を聞き、聴きとれている間に何所に来たのかも分からなくなる。このようにしてしばしば命をなくしてしまうものがあるのも、つまりは化物の仕業である。(注一)

注

一 流沙を渡る困難な状況は近代に至るまで数多く伝えられているが、中にも『法顕伝』の「沙河中には多く悪鬼・熱風有り、遇えば則ち皆死し、一として全き者無し。上に飛鳥無く、下に走獣無し。遍く望み目を極め、度る処を求めんと欲するも、則ち擬する所を知る莫し。唯死人の枯骨を以て標識と為すのみ」の文は古来有名である。

二二・一五 覩貨邏の旧地 ［大流沙を］行くこと四百余里、覩貨邏（巻一の二〇・三参照）の故地（旧領）に至る。(注一) この国は久しく人の住むこともなく、城は全く荒れはてている。

注

一 玄奘の見たこの廃址は、前項の尼壌城と次項の折摩駄那（今の Cherchen）との方位・距離の関係からみて、今日の Endere (83°53′E., 37°50′N.) に比定されている。ここにある廃址は輪状の城壁があり、城壁の一部分はカロシュティー文書を含む塵芥の層を基礎とし、その城内の住居址からは開元七年（七一九）の紀年文書が発見され、さらに城内の寺院からはブラーフミー・チベット・漢文の文書類が発見されている。この状況から見て当地は、かつて紀元後二、三世紀のころはカロシュティー文字を使用する玄奘の言う覩貨邏の住民が居たが、やがてニヤと前後して廃墟となり、玄奘の通過以後八世紀初葉には漢土唐朝の西域経営の進展によりその政治下に入り、安史の乱（七五五）直後には吐蕃の掌中に入ったものと見得よう［Stein: *A. Kh.*, pp. 417 ff.; do: *Serindia*; 平凡社・『世界考古学大系』九、一〇二ページ］。

二二・一六 折摩駄那の旧地 ここ（覩貨邏の故地、今の Endere）より東へ行くこと六百余里、折摩駄那の故地に至る。即ち［古えの］沮末国である。(注一) 城郭は高く聳えているが、人煙は跡絶えている。

注

一　折摩駄那の故国……沮末国である　折摩駄那 *tśi̯ät*。-。*muâ-d'â*°-。*nâ* : **calmadāna* (Khar. Insc. *calmadana* [Doc. no. 246, 296]). 玄奘の挙げる沮末 **tsi̯ag-mwât* は、『漢書』の且末、『宋雲行紀』の左末等と同じく *calmad[ana]* を表わしたものであろう。今の Charchan Bazar (Cherchen とも。現代中国名も且末、85°32′ E., 38°08′ N.) である。当地は Charchan 河に沿った地域であるが、農業・牧畜共に盛んではなく、僅かに崑崙山麓に多く棲息する野獣を狩猟して得る皮革の仕事は鉱産に並ぶ大きな産業である（当地の古名 *calma* も、或いは Skt. *carma*「獣皮・皮革」と関係があろうか）。当地の西南にある古城址は、唐の貞観九年（六三五）に吐谷渾を破って置いた播仙鎮の跡であると言う。マルコ・ポーロもここを通った記事を載せている [Stein : *A. Kh.*, pp. 311, 435 ; Yule & Cordier : *Marco Polo*, I. p.194]。

二二・一七　納縛波の旧地　さらにここ（折摩駄那、今の Charchan）より東北へ行くこと千余里、納縛波の故国に至る。即ち楼蘭の地である。(注一)

注

一　納縛波の故国……楼蘭の地である　納縛波 *nâp*。-*b'uâ*°-。*puâ* : **navapa*. この語については説明がないが、もし梵語とするならば、納縛 *nava*（巻一の三二・一参照）-*pura* 即ち「新都」の意とする説 [Beal : *Records*, II. p.325 (76)] がある。また当地方が唐初に窣利 Sughd 人と深い関係にあった点を参考して、Sughd. *na'w*°+*âp*° 即ち「新しい水」と解し、チベット人の Nob と言うこの地方の呼称をその転訛とする説［松田寿男：『中央亜細亜史』三三ページ］がある。A・スタインがミーラーン Mirān の古城址で発掘したチベット語文書によれば、Tib. *nob* と言う地名は、Nob-ched-po（大 Nob；ミーラーンのこと、88°53′ E., 39°13′ N.）・Nob-chuṅ（小 Nob；Charkhlik のこと、88°00′ E., 39°03′ N.）を含む

三或いは四の町を包む広汎な地域を示す語で、今日の Lop (-nor) の語と同じである [Stein : *A. Kh.*, p.435; do : *Serindia*, I. pp. 318 ff. ; Thomas : *T.L.T.D.*, II. pp. 119 ff.]。漢以来の楼蘭に治都を置いた鄯善国のことであるが、五世紀には青



ミーラーン寺院址より
発見された天使像

海省に次第に強大となった吐谷渾に滅ぼされた。隋朝は吐谷渾を倒し鄯善郡を置き、唐初その勢力未だ西域に伸びざる貞観初年には、康国ソグディアナの大首領康艶典が胡人を従えて東来しこの地に植民地を作っている。このような時期に玄奘が当地を通過していることより見れば、かれが納縛波の故国の語を用いたのは、西北インドに源流をもつカロシュティー文字を使用する過去の国を指すものと考えるのが妥当であろう（都貨邏の故地、折摩駄那の故地を参照）し、従って納縛波の故地も *navapa*（< Skt. *nava-pura* ?）と古い語に源流を求めるべきであろう［黄文弼：『羅布淖爾考古記』二二ページ以下；長沢和俊：『楼蘭王国』］。当地はすでに「自境」（唐土）に属するため、玄奘はここでコータン王が随行せしめた従者および駄馬をコータンに帰らせ、沙州（敦煌）に向かってこの大旅行の最終に近い道筋をとったのである［『慈恩伝』五］。

跋

諸国の山川を推測しその境域を考定し、さらにその国俗(くにぶり)の剛柔を詳説してその自然環境をも併記しようとしましたが、行動に定めがあったわけでもなく、取捨選択も不同でありました。事情を見窮め難い場合でもついて教えを受けることもできず、自然、遊歴する場所のままにその梗概(こうがい)を略記し、見聞を列挙して王化を慕う国々を記述したまでであります。これはもとより印度よりこの方は悉く大唐の恩恵に浴し、徳化の及ぶ所はみな聖徳を欣仰していて、天下は混然と同化し一つの家の如くであるからであります。お蔭をもちまして、単身王化の及ばざる外国に使いし万里の遠きに至る、と言うような困難なものではありませんでした。

讃

記の讃に曰う。如来がこの世に出られたと言うことは実に偉大なことであります。その霊妙な感化は知らず識(し)らずのうちに各所に及び、その神妙な教法は隅々にまで通じ、かくてその肉体はこの世から尽き、その行動は塵界から跡を絶たれました。肉体が尽きた後に機に応じてこの世に出られながらも、肉体をもつ身としては生まれられず、行動は跡を絶ち寂滅を示されたとは言うものの、その精神は滅することはありません。どうして迦維（劫比羅伐窣堵国(カピラヴァストゥ)、巻六の二参照）に生を受け、娑羅(サーラ)（娑羅林、巻六の四・三参照）に入滅されるまでの間に止まりましょうか。言うまでもなく如来は衆生の機根に応じて霊力を現じ、因縁に感じて出世された方で、刹利種(クシャトリヤ)（巻二の一・九参照）の血を受け継ぎ釈迦族の継承者として、人界の尊位を継ぐ身でありながら出家の道に専心された方であります。かくて金輪王（国王）の地位を捨てて法界の王者として臨まれ、白毫(びゃくごう)より光明をさし伸べて衆生を撫育されました。その教法は十方に洽(あまね)く、その智恵は万物に行きわたり、見聞し得る範囲外のものであってもその視聴に入る能力を具えられ、法輪を大千世界に三転され(注一)、仏陀本来の一音で衆生に弁を振るわれ［たが、衆生はその機根に応じて悟りを開き］、八万の法門を区別し十二部の経法に要約され(注二)ました。かくて仏の感化の被う範囲は福林にまでも及び、その教化の盛行する地域は寿域(注三)にまでも馳せるほどでありました。まことに聖人賢者として業績は充実し、天人の師たる意義は完全であ

ります。しかしながら、堅固の林（娑羅林）に入滅し、幻の如きこの現世を去られてからは、人界に後継者もなく、みな空の教えを究めるものもありませんでした。迦葉尊者が優れた阿羅漢を選び、仏恩に報じようとして仏陀の遺法を結集し、［雑一・中・長・雑の］四阿含に教法の源流を総べ、［経律論の］三蔵にその要義を包括されてより、［小乗二十部の］部執異見が興ったとは言え、仏の正法は今も現存しております。釈尊の生誕より寂滅に至るまで、その聖跡は至る所に及び、その霊瑞はさまざまでありました。不滅の教法はますます盛大となり、無為の教えはいよいよ革新されて行き、この間のことは経典に詳細に保存され、記伝に詳実に記載されております。それでもなお、多くの意見が乱れ飛び、異論が対立流行しています。その説の始終を仔細に見ますと、正確な説はほとんどありません。具体的な実録でさえ、なお多くの議論がこのさまであります。まして仏の正法は幽玄、その至理は深遠であり、奥義を研究するにも文献に欠ける所多いとならば、なおさらのことであります。こういうわけで学徳ある先輩は逸失した経典の学を伝え、俊秀の後進は闕逸した文書を受け継いだがために、その大義は隠れて解明されず、精微な言葉も闕文のため人に問うこともできませんでした。

さて、仏教が中国に伝来してより多年を経ており、漢代よりこの聖代に至るまで、伝訳の業は盛んに行なわれ、りっぱな成果を収めてきましたが、幽幻な教理はなお十分には弘まらず、真実の教法はなおよく理解されてはいません。これは聖教が世に行なわれる時と、世から蔵れる時とがあるためではなく、言うまでもなく天子の徳化が然らしめたのでありました。我が大唐帝国は天下を統治し海外の諸国を心服せしめ、聖人の遺訓を明らかにし先王の旧典を正し、この仏教を闡明して大いなる教えとして盛んに努めておられます。道はそれを究める人があってこそ世に行なわれるものであり、道が弘まるのは天子の明徳にこそよるのであります。かくて三乗（注四）の奥義は千載の後の現代に盛んであり、十力（仏、巻七の三・一四参照）の遺法は万里の外のこの国に慎み伝承されています。霊妙自然な道は融通無碍であり、仏の教えはこれを寄り所としております。縁あって始めて顕わると言いますが、この言葉は真実であります。

いったい、玄奘と言う方は、その清らかな家系を上古の舜に通じ、その大もとを嬀姓より出した［陳氏であります］（注五）。その人柄はりっぱな徳の祥瑞を身に体し、中正な純粋さを身に蓄えた人であります。その行ないは徳にかない、身の守り方には節操があります。その福徳は前世に因縁をもち、その命運は隆世に巡り合わせる良さでありました。俗塵より出離し学舎に精励していましたが、師僧の教訓を奉じ前賢の美徳を渇仰して、笈を負い遊学して諸方に教えを請いました。燕（河北省）・趙（山西省）の地を巡遊し、魯（山東省）・衛（河南省）を巡覧して、三河（河南・河東・河内の三地、即ち長安付近）を背にして秦中（陝西省）に入り、三蜀（蜀郡・広漢・犍為、四川省の地）を歩いて会稽（浙江省紹興）に達しました。学問に通達した俊秀にはあまねく教えを請う努力を尽くし、世に名高い賢者にはしばしば求法の志を申し述べ、種々の議論にも耳を傾けてその学問を検討しましたが、何れもみな専門の教義に仲間を組み、共に他の教義の学を嫌悪するところから、仏教の根本義を明らかにしたいと言う気持ちを起こし、より詳細な研究をしようと志すことになりました。折よく四海平穏に、辺境の治安も保たれていた際でもありますので、貞観三年（六二九）八月一日の朝、裳をからげて出発し、杖を曳いて遙かなる旅にのぼったのであります。天子の徳化のお蔭で道を問い、神仏の冥助によって一人旅を続け、鉄門（巻一の二〇・一参照）・石門（注六）の難所を通り抜け、凌山（巻一の七・一参照）

・雪山（巻一の三六参照）の険路を登り越え、幾度か季節の変化をくり返した後に印度に達し、我が国風を外国に宣揚し、大きな教化を外国に与えました。そして自ら梵学を学び賢者に教えを請うたところ、多年の疑問は原文に眼を通すことにより解明し、教義の奥旨は高学の人に博く問い質しました。心眼を開いて教理を究め、精神を広くして道を体得し、かくて未だ耳にすることのできなかった事柄を聞き、会得できなかった内容も理解できたのでありました。まことに道を学ぶ場の良き仲間であり、法門の指導者たる人であります。さればこそ、法師の人柄も顕著に、徳行もいよいよ高く、学を積むこと三年にして名声は万里に馳せたのでありました。印度の学者は悉く法師の高徳を敬仰し、或いは経笥(注七)と名づけたり、或いは法将とも言ったりして、小乗の学徒は木叉提婆（原注　唐に解脱天と言う）(注八)と呼び、大乗の法衆は摩訶耶那提婆（原注　唐に大乗天と言う）(注九)と名づけましたが、これこそ法師の学徳に敬意を表して美称を伝え、人柄を尊敬して嘉名を口にしたものであります。三輪の奥義、三請の微言(注一〇)のようなことに至っては、その根本理論を深く究め、枝葉にわたるまでりっぱに調べて、明確に心に納得し十分に理解が行き届くようになりました。法師の質疑の内容は別録(注一一)に詳しく記してあります。すでに奥義に精通し、徳風は評判高くなりました。法師の学がすでに博通したのであり、徳もすでに盛大となったのであります。そこで山川を歴覧し都市を巡遊することにして、茅城（上茅宮城、巻九の二・四参照）を出て鹿苑（巻七の一・二参照）に入り、杖林（巻九の二・二参照）に遊び鶏園（巻八の三参照）に憩い、迦維の国（劫比羅伐窣堵国）を廻遊し拘尸の都（巻六の四参照）を見物しましたが、降誕の遺跡は河原と同じく草が生え茂り、入滅の旧址は町はずれの丘の上に荒れはてていました。仏跡を目にしては懐古の念を増し、徳風を仰いではしばしば嘆息しましたが、それは殷の箕子が麦秀の歌に殷の滅亡を悲しみ(注一二)、周の詩人が黍離の歌に周室の衰微を痛んだ(注一三)と言うその思い以上のものでありました。こう言うわけで、釈迦の故事を詳しく書き留め、印度の史実を列挙し、さらに少しく風土のことも採り上げ、異説をも記録に留めたのであります。歳月は速く過ぎ去り、夏冬が何度か遷り変わりましたが、安楽な故国が懐かしく、望郷の念を忘れ去ることとてはありませんでした。そこで如来の肉舎利百五十粒、金仏像一軀――これは光座を通じて高さ一尺六寸、摩掲陀国の前正覚山の竜窟（巻八の五・三参照）に仏影を留めた像を模したもの、金仏像一軀――これは光座を通じて高さ三尺三寸、婆羅痆斯国鹿野苑の初転法輪像を模したもの、栴檀を彫刻した仏像一軀――これは光座を通じて高さ一尺五寸、憍賞弥国の出愛王が如来を思慕して栴檀を刻し真影を写した像（巻五の五・二参照）を模したもの、栴檀を彫刻した仏像一軀――これは光座を通じて高さ二尺九寸、劫比他国で如来が天宮より宝階を降りて来られる像（巻四の一五・二参照）を模したもの、銀仏像一軀――これは光座を通じて高さ四尺、摩掲陀国の鷲峯山で『法華』等の経を説かれる（巻九の二・一〇参照）像を模したもの、金仏像一軀――これは光座を通じて高さ三尺五寸、那掲羅曷国で毒竜を降伏させて影を留められた（巻二の三・三参照）像を模したもの、栴檀を彫刻した仏像一軀――これは光座を通じて高さ一尺三寸、吠舎釐国（巻七の三参照）で城を巡り教化される像を模したもの。大乗経二百二十四部、大乗論一百九十部、上座部（巻九の二・一六参照）の経律論十四部、大衆部（巻九の二・一六参照）の経律論十五部、三弥底部(注一四)の経律論十五部、弥沙塞部(注一五)の経律論二十二部、迦葉臂耶部(注一六)の経律論十七部、法密部(注一七)の経律論四十二部、説一切有部（巻一の五参照）の経律論六十七部、因［明］論三十六部、声［明］論十三部、凡て五百二十夾(篋)、総て六百五十七部を請い求めて、無上の教法を弘め

るべく険阻な道を通り、故国を目指して帰途を急ぎました。舎衛城の故都を出発し仏陀伽耶の旧郊を背にして、葱嶺の急坂を越え砂漠の険路を渡り、貞観十九年（六四五）春正月、京邑（長安）に帰着し、洛陽で天子に拝謁したのでありました。

　さて、謹んで詔勅を拝し訳経の命を受け、学者を召集し共にこの大業を行なうことになりました。仏法は雲の如く再び中国を覆い、仏智の広大なること重ねて明らかとなり、宮殿には説法が行なわれ、漢土には仏法が弘められて、仏教の興隆はまことに盛大となりました。玄奘法師は梵学に精通しているので甚深の妙経を解明するに当たり、新しい文に接してもすでに見なれたものの如く、音を翻ずるにも響きに応ずるが如くで、経典の趣旨を素直に尊重して文飾を加えることなく、訳語を当てても意のそぐわぬ方言は梵語をそのまま使うなど、努めて原典の趣を残して経典の語辞を正しく伝えるようにしました。これを推察しますに、原典の記載とくいちがうことを恐れてのことでありましょう。ある身分の高い人が顔色を改め厳しい態度で進み出て、

「そもそも印度と言う国は聖人が降誕された所、賢者が生育された所であり、文字は天書と称せられ、言葉は天語と言われています。その文辞は緻密で音韻は語と語の間に連続し、或いは一語で多義を包括したり、或いは一義が多くの語で表わされたり、音声には抑揚があり、清濁で分類しています。梵文は意味深くて翻訳は碩学の手によらねばならず、経旨は玄奥なので意義は盛徳の人によらねばなりません。その際に、訳文を修飾したり音律を整えたりするならば、まことにそぐわぬことであり、決して正論ではありません。経典の深遠な趣旨を伝えるには、理解に容易であることに努めるべきであり、原典の論旨に違えていないならばそれで善しとすべきです。文飾が過ぎれば華美となり、質直が過ぎれば粗野となりましょう。内容を正確に伝えて文飾が過ぎず、意味を尽くして質直が過度にならなければ、まずは大過なしと言えましょう。かくてこそ始めて翻訳について共に語ることができると言うものです。李老（老子）は『言を美にするものは則ち信あらず、言を信にするものは則ち美ならず』(注一〇)と言い、韓［非］子は『理の正しき者は其の言を直にし、言の飾れる者は其の理に昧し』(注一一)と言っています。つまり、教訓を垂れて模範を示す場合には、道理として自己を主張してはならないのです。どうか人々の蒙を啓いて、利益をもって導き仏を讃嘆し喜悦するようになさってください。原典に背いて文飾を加えるならば本旨を害することいよいよ甚だしく、原文に忠実であることこそ如来の最上の勧誡であります」

　と言いました。僧侶も俗人も悉く、

「そのとおりです」

　と言いましたが、この言葉は正しい意見であります。その昔、孔子は在官中に裁判を担当しましたが、その文書は人と共同で書き、かれ一人で書いたものはありませんでした。『春秋』を編纂するに至って、記録すべきは記録し、削除すべきは削除し、子游・子夏をはじめ孔門中の文学をもって名ある人達が、一語も手を入れることができぬほどのものとしました。法師の訳経も、またこれと同じであります。童寿（倶摩羅什）が長安の逍遙園に訳経をした時、生・肇・融・叡(注一二)の筆のままに任ねたのとは同一ではありません。まして今日は四角いものも円く角を取る時世であり、装飾を取り去り質朴にする時代でありますから、どうして教旨を増損したり経文を修飾したりしてよいものでしょうか。

　ところで、辯機(注一三)は遠くは隠遁者の血筋を受け嗣ぎ、若いころより高蹈の人生を送ろうと志し、年十五で世を捨て服を変え、大摠持寺に住する薩婆多部の道岳法師(注一四)の弟子となったのでした。かの古えの名

工の匠石(注2)でさえ手こずる朽ち木の身でありながら、幸いにも仏門に入ることができ、清貧に安んじてはいたものの、飽食して日を送り、見聞も広めずに年を過ごして来ました。ところが幸いに時の巡り合わせによってこの幸運に会し、燕雀の身にも拘らず鴻鵠の末席にまじわり、ここに凡庸の才を尽くしてこの方志を撰述することになりました。学問が淵博であるわけでもなく、麗しい文章が書けるわけでもありませんが、愚鈍の身を励まし寡才の身を鼓舞して、恭んで玄奘法師の志記(注3)を引き受けて文章を次第し、尚書省より紙筆を賜わって撰録いたしました。浅学非才のこと故、闕漏する所も多くありましょうし、不要の文句の削除もれもありましょう。昔、司馬遷は優れた歴史家としての才能をもっておりました。かれは『史記』を書き上げて漸く父子二代の業を完成しましたが、書中に名のみを記して字を書かない例や、県名のみを記して郡名を書かない例が見られます。それ故、如何に一人が精密を心がけようとも、思考が多岐にわたり文章が厖大となれば、細部にまで吟味を加える余裕がなくなるのだ、と言われています。ましてや下愚の私のこと、すべてに遺漏なき仕事はなし得べくもありません。

さて、西域各地の風土習俗の差異、境域物産の記録や、国民性の分類、四季の気候の寒暖などについては、詳しく優劣のさまを描写し、事実を審かに記録しました。胡・戎等の異民族の姓氏・種族についてはいささかその国柄を記しましたが、印度の風俗教化は清濁さまざまであり、その概略のみの記述であることについては前序（巻一の序参照）に示されたとおりであります。国家の儀典・礼式や戸口・軍備などの点については、出家の身の詳記することでもありません。しかし、仏は神通力により万物に接し、霊妙の化導により教えを垂れ給うのであり、それ故にこそ、その不可思議な力は玄妙であって、その理法は人間界を超越しており、その霊妙な教化が隠顕するのも、事は人智の外に由来するのであると言われています。こう言うわけで、諸仏が来降された場所や仏陀が教化を垂れ給うた遺址などは、その霊跡を大略列挙し説明を概略注記いたしました。また道路は屈曲多く国境線も入りくんでいるので、路程は書いておきましたものの、順序立てて整理はされていません。それ故、印度の諸国は国境を分かつことはせず、それぞれの国の末尾に領域のあらましを記しただけであります。「行……」と書いたのは法師が自ら旅行したものであり、「至……」と記したものは伝聞による記述であります。事実を直書した場合もあり、文章を婉曲にした場所もあるなど、柔らげることもあり、つくろわぬこともありましたが、要は実録に忠実に、誠意を天子に捧げることにありました。二十年（六四六）の秋七月に擱筆して書物は完成しましたが、天子のお目を汚すほどのものであって、到底聖意にかなうものではありません。しかしながら、遙遠の地を窮め得たのも大唐の徳化によるものであり、奇異のことどもを蒐め得たのも実に天子のお蔭によるものであったわけで、もはや、太陽を地の涯に追いかけるにも夸父の力を我がものとしなくてもよいし(注4)、西域への千里の道を拓き進むにも張騫の功績は過去のものとして聞くばかりでよくなりました。今や、霊鷲山を中国に移し、鹿野苑を外苑に包むこと、あたかも千載の昔を彷彿と目撃するが如く、万里の彼方を眺めること親しく遊覧するが如くにし得るのであります。これは上古より未聞のことであり、如何なる古書にも未載のことであります。天子の至徳が四方を覆って諸外国からも来朝し、徳風が遠方にまで盛んで地の涯にまで及んでいるからこそであります。

この地志が『山海経』の闕を補い、史官の参考として頒布され、渉外の便覧として備えられることを切に望む次第であります。

注

一　法輪を大千世界に三転され　仏が鹿野苑で苦集滅道の四諦を説く際に、四諦の在り方を示し、修行を勧め、仏自らを證とされた。この示・勧・證を三転と言い、この説法を三転法輪と言う。

二　八万の法門……十二部の経法……　衆生に八万四千の煩悩ある故、これを退治するために説かれた仏の法も八万四千あったと言い、『一切経』を文体を主にして分類し、十二に分かつ時の名称を『十二部経』と言う。

三　福林……寿域　福林は福徳の樹林、寿域は長寿の地域の意。ここは天界(六趣の一)のことか。

四　三乗　ここは大乗に言う三乗で、一に声聞乗即ち小乗、二に縁覚乗、三に菩薩乗即ち大乗の三を指す。

五　その清らかな家系を……陳氏　原文は「清流を雷沢に疏し、洪源を嬀川に派つ」。雷沢は山東省濮県の東南にある沢の名で、舜が漁をした所と伝えられる。舜の後裔が嬀姓を名のり、嬀姓より分出した氏の中に玄奘の俗姓の陳氏がある〔『通志』氏族略二〕。

六　石門　『記』の本文中にはこの語は見えない。巻二の六の迦湿弥羅国の入口の名。『慈恩伝』二に「法師初めてその境（迦湿弥羅国）に入り石門に至る、彼の国の西門なり」とあり、本書巻三の「山は極めて峭峻にして、門径有りと雖も復隘狭なり。古えより隣敵も能く攻伐する無し」とある難関。

七　経笥　経典を入れる箱のこと。ここは博学通達の人を呼ぶ綽名。

八　木叉提婆（……）　木叉提婆 *mukₒ-ₒtṣʼa-ₒdʼiei-ₒbʼuâ* : Skt. *mokṣa-deva.* 解脱天と訳す（この天は、自在・最勝の意）。

九　摩訶耶那提婆（……）　摩訶耶那提婆 *ₒmuâ-ₒxâ-ₒia-ₒnâ-ₒdʼiei-ₒbʼuâ* : Skt. *mahāyāna-deva.* 大乗天と訳す。

一〇　三輪の奥義・三諦の微言　三輪の奥義とは仏の身・口・意三業のそれを言う。仏はこの三業で衆生の惑業を破摧したから、かく名づける。三諦の微言とは、仏が舎利弗の三度の請願により『法華経』の要義を説いたと言う故事による語〔『法華経』方便品〕。

一一　別録　何書なるか不明。『西域記』『慈恩伝』を編纂する際の資料が幾つかあったようであるが、今日ではすでに明らかでない。解説参照。

一二　殷の箕子が……滅亡を悲しみ　昔年の宮殿がすでに化して草原となった状を悲しみ、箕子が「麦秋漸漸たり、禾黍油油たり、彼の狡僮（殷の紂王を指す）我と好からず」と歌ったので、殷の民はみな涕を流したと言う故事〔『史記』宋微子世家〕。

一三　周の詩人が……衰微を痛んだ　東周の大夫が旧都鎬京を過ぎた時、宗廟宮室が壊廃し黍畑となっているのを目にして嘆いたと言う故事。その歌は『詩経』の王風・黍離。

一四　三弥底部　三弥底 *ₒsâm-ₒmjię-°tiei* : Pa. *sammiti* (*sammitiya*, Skt. *sammatiya, sammitiya*). 小乗二十部中の正量部のこと。

一五　弥沙塞部　弥沙塞 *ₒmjię-ₒṣa-sək°* : **misasak* (Skt. *mahiśāsaka*, Pa. *mahiṃsāsaka*). 小乗二十部中の化地部のこと。

一六　迦葉臂耶部　迦葉臂耶 *ₒka-śįäp°-pjię°-ₒia* : **kaśyapiya* (Skt. *kāśyapiya*, Pa. *kassapiya*). 小乗二十部中の飲光部のこと。

一七　法密部　また法蔵部・曇無徳部とも。Skt. *dharmaguptaka*, Pa. *dhammagutta.* 小乗二十部の一。

一八　老子は『……』『老子』第八一に「信言は美ならず、美言は信あらず」とある句を指そう。

一九　韓非子は『……』『大唐西域記』に引用したのと同文の語句は『韓非子』一書中に見当たらなかったし、語を異にする同様な意味あいの対句も見出だし得なかった。専家の示教を俟つ。

二〇　生・肇・融・叡　道生・僧肇・道融・僧叡の四人のことであろう。この四人は何れも羅什門下の高足であり、共に羅什の訳場に活躍した人たちである。

二一　辯機　次注および解説参照。

二二　薩婆多部の道岳法師　薩婆多 *sât°-ₒbʼuâ-ₒtâ* : **sabbata* (Skt. *sarvāstivāda*, Pa. *sabbathivāda*). 説一切有部のこと。道岳法師は俗姓を孟氏と言い、河南省洛陽の人。十五にして出家し、隋・大業八年（六一二）に大総持寺に住し（年三十四）、唐・貞観八年（六三四）に普光寺に転じている〔『続高僧伝』一三〕。辯機はこの間（六二一―六三四）に年十五歳で法師の弟子となったわけである。

二三　古えの名工の匠石　匠石の名は石、字は伯。鼻を傷つけずに郢人の鼻端の堊を削り取ったと言う故事〔『荘子』徐無鬼〕により、物を切るに寸

分誤たざる名工に喩える。

三四 玄奘法師の志記 『大唐西域記』撰述の際の原資料或いはメモ等を総称する語であろう。

三五 太陽を地の涯に……夸父の力を…… 『列子』湯問に「夸父力を量らず、日影を追わんと欲し、之を隅谷の際に逐う。渇して飲むを得んと欲し、赴いて河・渭に飲む。河・渭足らず、将に北に走りて大沢に飲まんとす。未だ至らざるに、道に渇して死す」とある伝説中の故事を用いた文。

大唐西域記 巻第十二

補注

一　使用した地図について

『西域記』記載のほぼ全地域を覆うものとしては次のものが便利であった。

Bartholomew's World Series: *India, Pakistan and Ceylon.* J Bartholomew & Son Ltd., Edinburgh. Scale 1/4,000,000.

この地図はタリム盆地のカシュガル Kashgar, コータン Khotan 以南、インド半島の南端までを含む地域を鮮明な一枚に描き出し、普及もし安価でもあり、最も得易いものである。この図に欠けるソ領トルキスタンは、

Central Asian Research Centre: *Map of Soviet Central Asia & Kazakhstan.* 2nd Rev. Ed. 1962, London. 1/3,750,000.

この図で補った。図は鮮明で見易いが、地名の記入はやや不足気味であった。

個々の地域の詳細を知るには、GSGS, AMS の百万分の一の地図に拠った。地域により新旧さまざまの刊年であり、新しいものは甚だ優秀であった。新版の入手できない地域は古いもので間に合わせたり、場所によっては航空図等を混え用いざるを得なかった。『西域記』記載の全地域を覆うとなれば、六、七十枚の分量ともなり、常用には高価でもあり不便である。

二　『西域記』の「一里」の長さ

従来の『西域記』関係の書物を見るに、玄奘の言う一里を、現在の尺度に換算した場合の数値はさまざまである。堀謙徳氏は玄奘の五里を約一マイルとする（即ち一里は約三百二十メートル）〔『解説』一九四ページの記事より換算〕。足立喜六氏は四百五十三メートルとする〔『研究』下、後編八〇ページ〕。戦後の書でも前嶋信次氏の「五十余里（里数はすべてシナ里、約一粁半）」〔『玄奘三蔵』一三ページ〕は、約一キロ半が、五十余里に当たるのか一里に当たるのか不明であるが、何れにしても何かの誤りとしか思えない。金子秀利氏は四百五十四メートルとする〔『玄奘三蔵』五二ページ〕。

里数を計る基礎となる唐尺の現存するものは多数あるが、その長さには少差があり、従って一定の公認された数値としては今日なさそうである。その大略について言えば、唐代には大小二種の尺度がある（日本の曲尺と鯨尺のもと）。

大程　一里＝三百六十歩、一歩＝大尺五尺。
　　大尺の一尺は概ね三十センチ前後。
小程　一里＝三百歩、一歩＝小尺六尺。
　　小尺の一尺は概ね二十三センチ前後。

唐代には一般になお小程が用いられていたから、玄奘の言う一里はほぼ四百—四百四十メートルほどと見てよかろう〔森鹿三：「漢唐一里の長さ」『東洋史研究』第五巻第六号（一九四〇）、また『東洋学研究——歴史地理篇』（一九七〇、京都）所収。森氏は唐の一里を四百四十一メートル

ルとする。なお、足立喜六：『長安史蹟の研究』(一九三三、東京) 第二章；楊寛：『中国歴代尺度考』(一九三七、上海) 第七節；藪内清編：『中国中世技術史の研究』(一九六三、東京) 一九〇ページ；藪田嘉一郎編訳注：『中国古尺集説』(一九六九、京都) 等参照。

三 『西域記』に見える大・小乗の分布

『西域記』中には諸所の僧衆の就いて学ぶ学派を記しているものも多い。これを左に簡単に検索の用に備えて掲出する（伽藍・僧徒の数は省略する）。

大乗仏教
　西域
　　迦畢試国　巻一の三八
　　漕矩吒国　巻十二の一・一
　　斫句迦国　巻十二の二一・一、二一・三
　　瞿薩旦那国　巻十二の二二・一
　北印度境
　　濫波国　巻二の二
　　健駄邏国　巻二の四・一四、四・一六
　　烏仗那国　巻三の一・一
　　呾叉始羅国　巻三の三
　　僧訶補羅国　巻三の四・七
　　烏剌尸国　巻三の五
　　迦湿弥羅国　巻三の六・八
　　屈露多国　巻四の四
　中印度境
　　毗羅刪拏国　巻四の一四
　　戦主国　巻七の二・三
　　吠舎釐国　巻七の三・一五
　　摩掲陀国　巻八の一、四・一、四・三
　　奔那伐弾那国　巻十の四・二
　東印度境
　　烏茶国　巻十の九・一
　南印度境
　　憍薩羅国　巻十の一二・一
　西印度境
　　鉢伐多国　巻十一の一七
　　伐剌拏国　巻十一の二三・一

大・小二乗兼学
　西域
　　活国　巻十二の五
　北印度境
　　闍爛達羅国　巻四の三
　中印度境
　　秣菟羅国　巻四の七・一
　　羯若鞠闍国　巻五の一・一
　　阿踰陀国　巻五の二・一
　　弗栗恃国　巻七の四・一

尼波羅国　巻七の五
奔那伐弾那国　巻十の四・一
南印度境
僧伽羅国　巻十一の一・四
恭建那補羅国　巻十一の二・一
摩訶刺侘国　巻十一の三・一
契吒国　巻十一の七
鄔闍衍那国　巻十一の一二
西印度境
鉢伐多国　巻十一の一七
狼掲羅国　巻十一の一九

小乗仏教
説一切有部
西域
阿耆尼国　巻一の五
屈支国　巻一の六
跋禄迦国　巻一の七
掲職国　巻一の三六
波刺斯国　巻十一の二〇・一
朅盤陀国　巻十二の一八・一
烏鎩国　巻十二の一九・一
佉沙国　巻十二の二〇
北印度境
至那僕底国　巻四の二・三
中印度境
秣底補羅国　巻四の一〇・一
羯若鞠闍国　巻五の一・一
摩掲陀国　巻九の三・三
伊爛拏鉢伐多国　巻十の一・一
西印度境
瞿折羅国　巻十一の一一

正量部
中印度境
堊醯掣呾羅国　巻四の一三
劫比多国　巻四の一五・一、一五・二
阿耶穆佉国　巻五の三
鞞索迦国　巻五の六・一
室羅伐悉底国　巻六の一・一
劫比羅伐窣堵国　巻六の二・一
婆羅痆斯国　巻七の一・一、一・二
吠舍釐国　巻七の三・二
伊爛拏鉢伐多国　巻十の一・一（ただし『慈恩伝』には「説一切有部義」に作る）
東印度境
羯羅拏蘇伐刺那国　巻十の八・一
南印度境
摩臘婆国　巻十一の五・一
伐臘毘国　巻十一の八・一
西印度境
阿難陀補羅国　巻十一の九
信度国　巻十一の一五・一

阿点婆翅羅国　巻十一の一八
臂多勢羅国　巻十一の二二
阿軬荼国　巻十一の二二・一

上座部

東印度境
三摩呾吒国　巻十の六・一
南印度境
達羅毗荼国　巻十の一六・一

大乗上座部

中印度境
摩掲陀国　巻八の六・三〇
南印度境
羯餕伽国　巻十の一一・一
僧伽羅国　巻十一の一・四
西印度境
跋禄羯呫婆国　巻十一の四
蘇剌侘国　巻十一の一〇・一

大衆部

西域
安呾羅縛国　巻十二の三
北印度境
迦湿弥羅国　巻三の六・二
南印度境
馱那羯磔迦国　巻十の一四・一

説出世部

西域
梵衍那国　巻一の三七

部派を記せざるもの

西域
縛喝国　巻一の三二
迦畢試国　巻一の三八・一
北印度境
健駄邏国　巻二の四・六、四・一〇、四・一四
磔迦国　巻四の一・四
中印度境
波理夜呾羅国　巻四の六
薩他泥湿伐羅国　巻四の八・一
窣禄勤那国　巻四の九・一
秣底補羅国　巻四の一〇・三
瞿毗霜那国　巻四の一二
鉢羅耶伽国　巻五の四・一
憍賞弥国　巻五の五・一
戦主国　巻七の二・一
摩掲陀国　巻九の三・一五
瞻波国　巻十の二・一

ただし、僧伽羅国は便宜上南印度に入れた。
以上をまとめれば次ページの表の如くなる。
〔堀謙徳：「玄奘時代西域宗教の状勢」『解説西域記』一〇六六ページ以下；金山正好：『東亜仏教史』（一九四二、東京）、一六六ページ以下；E. Lamotte: *Histoire du Buddhisme indien*. 1958, Louvain, pp. 597 ff.; 平川彰：『初期大乗仏教の研究』（一九六八、東京）、七〇四ページ以下等参照〕。

地域＼部派	大乗仏教	大小兼学	小乗仏教 説一切有部	正量部	上座部	大乗上座部	大衆部	説出世部	不記部派	合計
西域	五	一	八				一	一	二	一八
北印	九	一	一				一		四	一六
中印	七	六	四	一一		一			一〇	三九
東印	一			一	一					三
南印	一	五		二	一	三	一			一三
西印	二	二	一	五		一				一一
合計	二五	一五	一四	一九	二	五	三	一	一六	一〇〇

四　経典の結集と小乗部派の系統

『西域記』中諸所に散見する経典の結集および小乗の部派については、その初出の所に簡注を付したが、ここに便宜上一括して略記する。

仏滅直後に**第一結集**（巻九の二・一六参照）が行なわれたが、さらに仏滅後百年のころに戒律についての紛争（十事の非法）が起こり、これがため**第二結集**（七百結集とも。巻七の三・一四参照）が行なわれた。この際、保守的な態度をとった上座の長老たち（上座部）と、これに承服しかねた進歩派の人たち（大衆部）とは分裂を生じた（これを根本分裂と言う）。その後の約百年の間にこの上座・大衆の両部はさらに内部分裂し（これを枝末分裂と言う）、仏滅二百十余年後の阿育王のころまでに小乗十八部派はすべて分裂し了っていたという（南伝）。南伝によれば上座部系に帰依していたと思われる阿育王は、その灌頂即位十六年に、華子城において**第三結集**を行なったとする（これについては法顕・玄奘共に記する所なく、今日歴史的には否定されている）。さらに紀元後二世紀、迦膩色迦王の治下に迦湿弥羅国で小乗仏教の網羅的経論たる『大毘婆沙論』が編纂されたとし、これを**第四結集**（また、婆沙会とも。巻三の六・四参照）と呼ぶ（これもこの『論』を迦膩色迦王に結びつけて権威あらしめんとする後世の迦湿弥羅国有部の僧団による伝説とされる）。

小乗部派分裂の年代・系統に関しては諸種の異説あり、一致しない点も甚だ多い。部派による所伝を異にしたが故である。この伝説を大別すれば、南方伝（『島史』『大史』『論事』等）と北方伝（『異部宗輪論』およびその異訳二種・『舎利弗問経』『文殊問経』『出三蔵記集』『ターラナータ

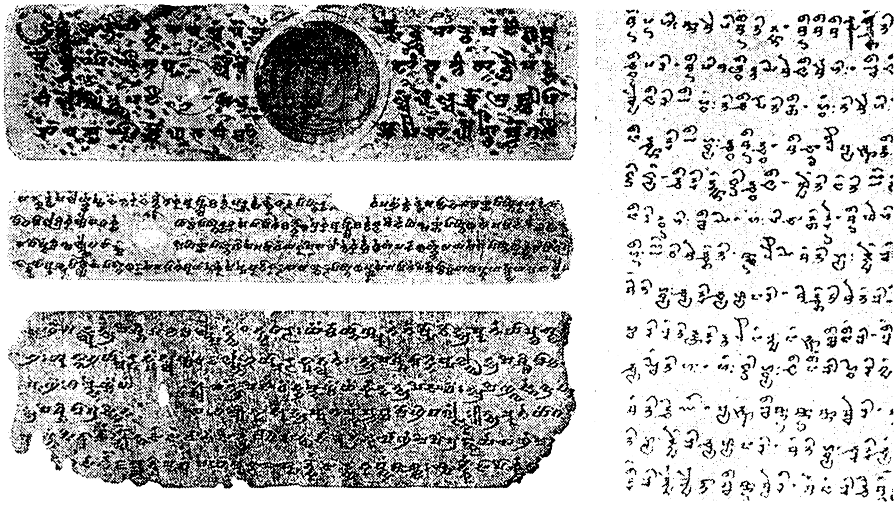
印度仏教史』等）の両系に分かち得よう。その分裂の系統を南伝（『島史』）では左の如くする。

- Mahāsaṅghika 大衆部
  - 1 Gokulika 牛家部（雞胤部）
    - 3 Bahusuttaka 多聞部
    - 4 Paññattivāda 説仮部
  - 2 Ekavyohārika 一説部
  - 5 Ceityavāda（Andhaka）制多山部（安達羅派）（仏滅百年―二百年）
- （仏滅百年）
- Theravāda 上座部
  - 1 Mahiṃsāsaka 化地部
    - 7 Sabbatthivāda 説一切有部
      - 9 Kassapiya 飲光部
        - 10 Saṁkantika 説転部
          - 11 Suttavāda 経量部
    - 8 Dhammagutta 法蔵部（曇無徳部）
  - 2 Vajjiputtaka 跋闍子部（北伝・犢子部）
    - 3 Dhammuttarika 法上部
    - 4 Bhaddhayānika 賢胄部（賢乗部）
    - 5 Channāgarika 密林山部（六城部・善歳部）
    - 6 Sammitī 正量部

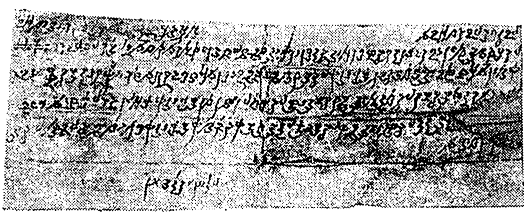
北伝（玄奘訳…『異部宗輪論』）では下段の如くする。

- Mahāsaṅghika 大衆部（仏滅百年―二百年）
  - 1 Ekavyavahārika 一説部
  - 2 Lokottaravādin 説出世部（世間部）
  - 3 Kaukkuṭika 雞胤部（灰山住部・窟居部）
  - 4 Bahuśrutīya 多聞部（得多聞部）
  - 5 Prajñaptivādin 説仮部（分別説部・施設部）
  - （仏滅二百年以後）
    - 6 Caityaśaila 制多山部（支提山部・遊地部）
    - 7 Aparaśaila 西山住部（阿羅説部）
    - 8 Uttaraśaila 北山住部（鬱多羅施羅部）
- （仏滅百年）
- Ārya-sthavira 上座部
  - 1 Sarvastivāda 説一切有部（仏滅二百年―三百年）
    - 3 Vātsīputrīya 犢子部
      - 4 Dharmottarīya 法上部（達磨鬱多梨部）
      - 5 Bhadrayāniya 賢胄部（跋陀羅耶尼部）
      - 6 Sammatīya 正量部（三弥底部）
      - 7 Saṇṇagārika 密林山部（六城部）
    - 8 Mahīśāsaka 化地部（弥沙部）
      - 9 Dharmaguptaka 法蔵部（曇無徳部）
    - 10 Kāśyapīya 飲光部（迦葉維部・善歳部）
    - 11 Sautrāntika 経量部（説経部・僧伽蘭多部）
    - （仏滅三百年以後）
  - 2 Haimavata 雪山部（根本上座部）

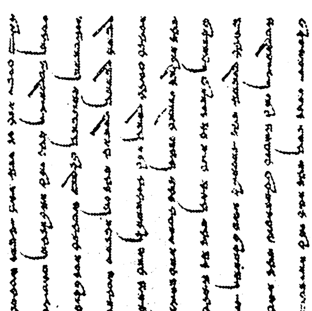
［木村泰賢…「結集史分派史考」『国訳大蔵経』論部一三（一九二一、東京）所収…深浦正文…「異部宗輪論述記解題」『国訳一切経』論疏部一〇（一九三六、東京）所収］。



グプタ文字
左上　正体（コータン語），左中　斜体（トカラ語B），左下斜体（トカラ語A），右　草体（漢語音の転写）



カロシュティー文字



ソグド語

五　『西域記』における文字・言語の分布

玄奘は『西域記』中の諸地において、かれの注意を向けた文字・言語の特色を、すこぶる簡単かつ印象的な表現で、注記している。その記事は断片的なものでもあるがため、それぞれの土地における言語様相を、たとえ概略にしても、再構成するほどに役立つ資料となり得ないものであることは言うまでもないが、この面の総括的記述にほとんど恵まれない当時のものとしては、やはり珍重すべき資料であろう。『西域記』に見える記事と、残存文献および現在の言語分布から得た知識とを対比して、その極めて簡単な素描を試みてみよう。

玄奘の言う当時の婆羅門書・梵書とはブラーフミー文字 Brāhmi-lipi のことである。さらに詳しくは四世紀にグプタ王朝のころより始まったいわゆるグプタ文字を指す。これにももちろん地方的差異が認められ、玄奘もしばしばこれを指摘しているが、かれの文章のみからはその具体的様相は知り得ない。また、

南インドの境にはカナラ文字その他の異系古文字も使用されていたと思われるが、それらについても玄奘は具体的注記は一切施しておらず、詳細は判明しない［インド文字については、G. Bühler : *Indische Palaeographie* (*mit 17 Tafeln in Mappe*). 1898, Strassburg ; 同上書の英訳、*Indian Palaeography. Indian Antiquary*, 1904, Appendix. 英訳の方は戦後の単行複印本もあり入手し易い（刊年不詳）… A. H. Dānī : *Indian Palaeography.* 1963, Oxford ; R. Pandey : *Indian Palaeography.* Vol. I. Varanasi, 1957²; A.C. Burnell : *Elements of South Indian Palaeography.* 1878, Manglore（複印本が一九六八年に出た）等を参照］。

つぎに言語について、玄奘の記述に従って地域区分を行なう。

一 東トルキスタン

西域北道地区

○阿耆尼国（巻一の五）「文字は則を印度に取り、微しく増損あり」
○屈支国（巻一の六）「文字は則を印度に取り、粗改変あり」
○跋禄迦国（巻一の七）「文字法則は屈支国に同じく、語言少しく異なる」

阿耆尼国と屈支国の記述の言葉はほとんど変わりがないにもかかわらず、この両者の関係については述べていない。屈支国と跋禄迦国との間には言語に少差あるも、両者が近縁関係にあることを知り得る。

この西域北道の地域は、今世紀初頭に再発見されたインド・ヨーロッパ語族に属するトカラ語と称する言語が、往昔行なわれていた地域である。出土資料から知り得た結果は、

A方言　高昌 Turfan・阿耆尼 Kara-šahr の両地区からだけ発見され、仏典のみに用いられている。往昔の Agni 国の通用語であったらしく、正しくはアグニ語 Agnean と呼ぶべきものである。

B方言　北道諸国の広い範囲に用いられたもので、往時の屈支国の通用語であったらしく、仏典以外の日用語としても使われた。正しくはクチャ語 Kuchean と呼ぶべきものである。

このA・B両方言は、音韻組織には大差なく、語彙・文法等の点に差が認められる。共に使用する文字はいわゆる「斜体グプタ文字」である（四三ページ図参照）。

玄奘の記述において、阿耆尼国と屈支国との間にほとんど同様なことを述べながら、近似を注記しない点は、このA・B両方言の差と対応するものと言えよう。跋禄迦国の事情は、今日における出土資料からは知り得ず、屈支国との異同についてもなお不明であるが、玄奘の指摘は当時B方言中にもさらに下位方言的少差があったことを知らせるものと言えよう［概要は、E. Schwentner : *Tocharisch.* Geschichte der idg. Sprachwiss., II, 5 Band, Lieferung 2, Berlin & Leipzig, 1935 ; 辻直四郎…「トカラ語研究の近況」『東洋学報』第三五巻第三・四号（一九五三）、一〇一—一二一ページ…W.Krause : *Tocharisch.* Handbuch der Orientalistik, 4 Band : Iranistik, 3 Abschnitt, Leiden & Köln, 1955 ; 文法書としては、A方言に E. Sieg, W. Siegling & W. Schulze : *Tocharische Grammatik.* Göttingen, 1931 ; B方言に W. Krause : *Westtocharische Grammatik.* Band I, Das Verbum, Heiderberg, 1952 ; 辞書には A. J. van Windekens : *Léxique Étymologique des Dialectes Tokhariens.* Louvain, 1941］。

西域南道地区

○瞿薩旦那国（巻十二の二二）「文字憲章は印度に聿べ遵い、微しく

体勢を改む。粗沿革有り、語は諸国に異なる」

○斫句迦国（巻十二の二一）「文字は瞿薩旦那国に同じく、言語は異有り」

コータン近辺の当時の言語は、今日コータン語 Saka Khotanese と呼ばれる中期東イラン語の一種である。その残存文献は七、八世紀のものが多く、文字はいわゆる「正体グプタ文字」（草体のものもあり、日用文書に多い。四三ページ図参照）と言われるものが使用されている。文献の出土する地域は、北はコータン河の下流、砂漠中の Tumšuq に、東はニヤを越えて Endere におよぶ。西界は明瞭でないが、皮山 Guma 近辺までその政治勢力は及んでいたようである。斫句迦国が Karghalik なりとすれば、当地はコータンとは政治的にはもちろん、言語の面でも別群に属したものの如くである。その詳細は『西域記』の文のみからは判明しないが、恐らく次項の葱嶺(パミール)東麓地区の言語と同様、コータン語と密接な関係にある中期東部イラン語に属するものであったろう。

葱嶺東麓地区

○佉沙国（巻十二の二〇）「其の文字は則を印度に取り、刪訛(さんか)有りと雖も、頗る其の体勢を存す。語言辞調は諸国に異なる」

○烏鎩国（巻十二の一九）「文字語言は少しく佉沙国に同じ。……朅盤陀国に役属す」

○朅盤陀国（巻十二の一八）「文字語言は大いに佉沙国に同じ」

カシュガル以西、パミール東麓の古代語の状況は、今日その遺文も発見されることなく、悉皆(しっかい)判明しない。ただし、隋・宋間においてカシュガル治下に付した Maral-baši（カシュガルの東方、Kashgar-darya に沿う部落、中国名は巴楚）から出土した文献より、Maral-baši の往時の言語はコータン語に属する一方言（Maral-baši 方言と呼ぶ）とされている。これらの諸点より考え合わせるならば、朅盤陀国・烏鎩国・佉沙国は Maral-baši と同一方言区を形成し、コータン方言・斫句迦方言と、それぞれの間に少差をもつ極めて緊密な関係にあった言語群であると見なすことが、最も理にかなった解釈であろう。

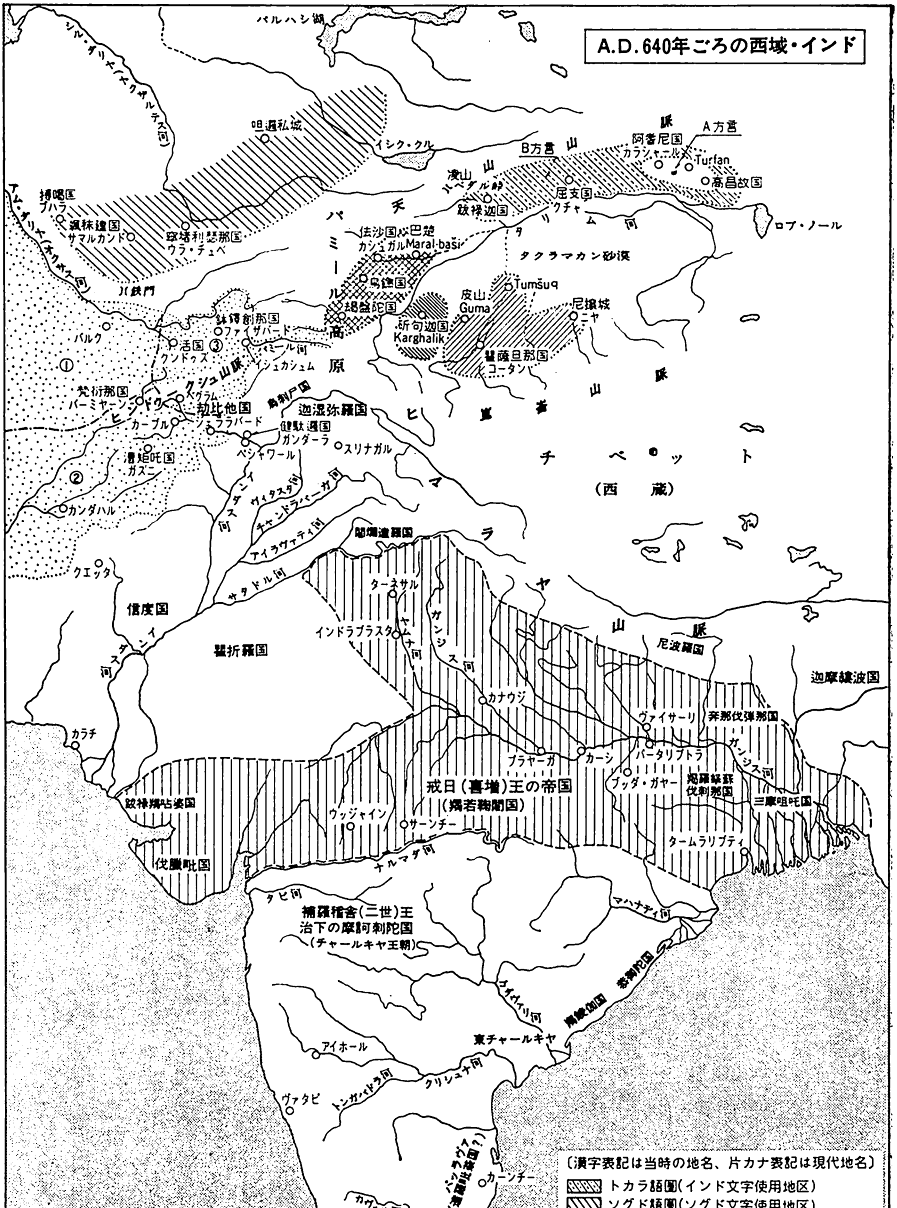
コータン語は、語彙やその他の点からも、今日のパミール山塊中のイラン語と近似することが指摘されている言語である。今日はその中間に位置するカシュガル近辺の往時の言語の詳細は全く知り得ず、コータン語のみがひとり東方に遊離した状態に見えているが、玄奘の記述はこのかけ離れた東西を結ぶ脈絡を示す貴重な証跡と見られよう。なお、朅盤陀国の言語が、佉沙国のそれと大いに近い関係にありながら、この両地の中間に位置する烏鎩国の言語が、かえって佉沙国に余り近い関係にないという玄奘の指摘は、或いは烏鎩国がこの佉沙国——朅盤陀国間の当時の主要路線上になかったことを意味しようか［コータン語の概況は、H. W. Bailey: *Languages of Saka.* Handbuch der Orientalistik, Band IV: Iranistik, I. Abschnitt: Linguistik. 1958; その文法・例文・語彙については、本文中の注に見える S. Konow の書を参照］。

二　西トルキスタン

窣利地区

○窣利（巻一の七・四）「素葉城より羯霜那国に至るまで、地は窣利と名づけ、人も亦しか謂(い)う。文字・語言は即ち随(したが)って称す。字源は簡略にして本(もと)二十余言。転じて相生じ、其の流れ浸(よう)く広し。粗書記有り、竪(たて)に其の文を読む。逓(たが)いに相伝授し、師資替えること無し」

窣利 Soghd 語も中期東部イラン語に属する言語である（やや詳しく


A.D.640年ごろの西域・インド
バルハシ湖
シル・ダリヤ(ヤクサルテス河)
アム・ダリヤ(オクサス河)
呾邏私城
イシク・クル
捕喝国
ブハラ
颯秣建国
サマルカンド
窣堵利瑟那国
ウラ・チュベ
鉄門
バルク
活国
クンドゥズ
鉢鐸創那国
ファイザバード
イシュカシュム
梵衍那国
バーミヤーン
劫比他国
カーブル
健駄邏国
ガンダーラ
ペシャワール
漕矩吒国
ガズニ
カンダハル
クエッタ
信度国
インダス河
カラチ
スリナガル
迦湿弥羅国
天山山脈
パミール高原
佉沙国
カシュガル
巴楚
Maral-bashi
烏鎩国
朅盤陀国
斫句迦国
Karghalik
皮山
Guma
Tumšuq
瞿薩旦那国
コータン
尼壌城
ニヤ
タクラマカン砂漠
タリム河
ロブ・ノール
跋禄迦国
屈支国
クチャ
阿耆尼国
カラシャール
Turfan
高昌故国
A方言
B方言
ヒマラヤ山脈
チベット
(西蔵)
闍爛達羅国
ターネサル
インドラプラスタ
ヤムナ河
ガンジス河
瞿折羅国
カナウジ
ヴァイサーリ
尼波羅国
迦摩縷波国
奔那伐弾那国
プラヤーガ
カーシ
パータリプトラ
ブッダ・ガヤー
摩羯陀国
三摩呾吒国
戒日(喜増)王の帝国
(羯若鞠闍国)
ウッジャイン
サーンチー
タームラリプティ
跋禄羯呫婆国
伐臘毗国
ナルマダ河
タピ河
補羅稽舍(二世)王
治下の摩訶剌陀国
(チャールキヤ王朝)
マハナディ河
ゴダヴァリ河
東チャールキヤ
アイホール
クリシュナ河
トンガバドラ河
ヴァタピ
パッラヴァ
カーンチー
カヴェリ河
珠利耶国
チェーラ
パーンディヤ
僧伽羅国
〔漢字表記は当時の地名、片カナ表記は現代地名〕
トカラ語圏(インド文字使用地区)
ソグド語圏(ソグド文字使用地区)
イラン語圏(ギリシアその他の文字使用地区)
①.トカラ人②.類トカラ人③.トカラ故地人
コータン語圏(インド文字使用地区)
斫句迦国方言圏(インド文字使用地区)
葱嶺東麓方言圏(インド文字使用地区)
0 200 400 600km

は巻一の本文注参照)。鉄門(巻一の二〇・一)以北のソグド語圏の中心は颯秣建国(巻一の一二)であり、『西域記』によれば、弭秣賀国以下羯霜那国に至る七国がその軍事力・政治力下にあり、「土宜風俗は颯秣建国に同じ」という状況であった。ただ、やや東に離れた怖捍国(巻一の一〇、伝聞国)は「人性豪勇、語は諸国に異なり」独立した存在であったようである。また、この窣利語圏に、

○貨利習弥伽国(巻一の一九、伝聞国)「土宜風俗は伐地国に同じ。語言は少しく異なる」

と記すこの地は、アラル海近くアム・ダリヤ沿いにあり、その言語は今日 χvārizm 語の名で、サマルカンドを中心とするソグド語およびコータン語と並んで、中期東部イラン語の一支派に分類されるものである。

この窣利地域の民族は、古代よりかれら特有の商業活動により中央アジアの各地に進出し、ソグド語は国際語として諸国に用いられ、九世紀にはその最盛を誇っていたものである。しかし、この地域も早くは七世紀後半より始まるアラブ・イスラム民族の侵入、さらには十三世紀のチンギス・ハンの蹂躙によって、その民族・言語は全く壊滅し消息を絶ったと思われていた。幸いに近年パミールの西北、ザラフシャン Zarafšan 河の支流、ヤグノーブ Yagnōb 渓谷の地方に、往昔異民族の侵入から避難したこの民族の残存するものが発見され、かれらの話すヤグノーブ語 Yagnōbi は往時のソグド語の直裔であると認められ、「新ソグド語」と呼ばれることになった。一方、今世紀初頭より敦煌を主とする東トルキスタンの諸地方から書籍・碑文等多数発見され(八―十一世紀に属するもの)、さらに近年西トルキスタン、ザラフシャン河上流のピャンジケント Piandzhikent 都城址やサマルカンド近郊のアフラシャブ Afrasiab 古城址から多くの遺物が発見された結果、この民族・言語の諸特質が急速に明らかにされてきている。また、貨利習弥伽国 χvārizm の地においても、近年クシャン期(一―三世紀)の遺跡としてはアム・ダリヤのやや上流 Koy-krylgan-kala や Toprak-kala の廃墟、中世(四―九世紀)のものとしてはアラル海近きデルタ地帯の Kuyuk-kala や Tok-kala の廃址が発見・発掘され、その過去の状況も次第に判明してきている。この窣利・貨利習弥伽両地方の研究報告は何れも戦後の新知識であり、近年我が国にも逐次紹介の努力がされてきているものである〔全般的状況を知るものとしては、A. L. Mongait: *Archaeology in the U. S. S. R.* London, 1961 (Pelican Books, A. 495);香山陽坪:『砂漠と草原の遺宝——中央アジアの文化と歴史——』一九六三年、東京(角川新書一七七);T. T. Rice: *Ancient Arts of Central Asia.* London, 1965; A. Belenitsky (transl. by J. Hogarth): *The Ancient Civilization of Central Asia.* London, 1959; ヤクボーフスキー他著、加藤九祚訳:『西域の秘宝を求めて——スキタイとソグドとホレズム——』一九六九年、東京;V・マッソン著、加藤九祚訳:『埋もれたシルクロード』一九七〇年、東京(岩波新書七六九);G. Frumkin: *Archaeology in Soviet Central Asia.* Handbuch der Orientalistik, 7 Abteilung: Kunst & Archaeologie, III Band: Innerasien, I Abschnitt, 1970, Leiden & Köln;言語の概況は、W. B. Henning: *Mitteliranisch.* Handbuch d. Or., IV Band: Iranistik, 1 Abschnitt: Linguistik, 1958¹, 1967²;文法書については本文の注(巻一の七・四注三)参照〕。

「覩貨邏国」地区

○覩貨邏国(巻一の二〇・二)「鉄門を出でて覩貨邏国に至る。其の地は南北千余里、東西三千余里。東は葱嶺を阨し、西は波剌斯に接し、南は大雪山、北は鉄門に拠る。縛芻の大河、中境を西流

す。数百年このかた王族嗣を絶ち、酋豪力競し各々君長を擅いままにし、川に依り険に拠り分かちて二十七国と為す。野を画し区分すと雖も総じて突厥に役属す。……語言去就は稍諸国に異なる。字源は二十五言、転じて相生じ之を用いて物に備う。書は以て横読し左より右に向かう。文記は漸く多く逾に窣利より広し。多く氎を衣て褐を服ること少なし。貨は金・銀等の銭を用い、模様は諸国に異なる」

以下、巻一の二一「呾蜜国」より三六「掲職国」に至る十六国がこの「覩貨邏国」に属する（この内、親践したもの僅かに縛喝・鋭秣陁・胡寔健の三国のみ。他の十三国はすべて伝聞国）。この諸国を含む地域は、ギリシア人のバクトリア王国（前三二九年より前一四〇—前一三〇年ごろまで続く）を倒した大月氏の中核種族たるトカラ族（ギリシア・ローマ史料に見える種族名）が占拠した地の意から、後に Ṭukhāristān と呼ばれることになった（中国史料の大夏は、このトカラの音訳との説もある）。玄奘の言う「覩貨邏国」はこの地域に当たる。この諸国については本文の注参照。

「覩貨邏国故地」地区

『西域記』巻十二の安呾羅縛国以下、達摩悉鉄帝国に至る十三国（即ちヒンドゥークシュ以北、クンドゥズ以東、パミールに至る地域）は、「覩貨邏国故地」の名を冠し通称しているが、「覩貨邏国故地」の義については、何の説明も施していない。その地域より考えるに、大月氏治下にあったイラン系民族の五翕侯、即ち休密（Wakhan 東部）・貴霜（Wakhan 西部）・雙靡（Mastuj）・肸頓（Badakhšān）・高附（Jamgān）の所領にほぼ当たろう。とすれば、この通称は、後にその宗主国たる大月氏に代わり、その旧領「覩貨邏国」に拠ったクシャン王朝 Kušāna（これも月氏・大月氏と呼ばれている）の発祥地を含む、周囲のイラン系民族の故領の意であろうか（巻十二の二二・二三の「覩貨邏故国」を、かつてのクシャン王朝全盛期における最東端にあった旧領の意と解すれば最も理解し易いことと符を合する）。この「覩貨邏国故地」の文字・言語については、玄奘は記すことがない。しかし、さらに東方に位置する尸棄尼国（巻十二の一六）・商弥国（巻十二の一七）には、共に同じく「文字は覩貨邏国と同じく、語言は異有り」とすることと、現今における言語分布の状況とを考え合わせるならば、中間地帯のこの「覩貨邏国故地」は、前項の「覩貨邏国」の言語と大差なきものであったと見てよかろう。

「類トカラ」(注二) 諸国地区

○梵衍那国（巻一の三七）「文字・風教、貨幣の用は、覩貨邏国に同じ。語言は少しく異なるも、儀貌は大いに同じ」

○迦畢試国（巻一の三八）「文字は大いに覩貨邏国に同じきも、習俗・語言・風教は頗る異なる。……貨は金銭・銀銭及び小銅銭を用い、規矩模様は諸国に異なる」

この両国の言語には差を認め、さらに南の、

○弗栗恃薩儻那国（巻十二の二）「土宜風俗は漕矩吒国に同じきも、語言は異有り」

○漕矩吒国（巻十二の一）「文字・言辞は諸国に異なる」

このヒンドゥークシュ山間部よりイラン高原最東端部の地域に出た両国は、地理的景観はもとより、歴史的にも文化的にも大きな変化を見せてくる。

玄奘が挙げるヒンドゥークシュ南麓以南のこの四国は、紀元前後にはクシャン王朝の治下に入ったが、三世紀以後はササン朝ペルシアやヒンドゥークシュ以北の勢力（Ephthalites, Kidāra）の下にあった。しかし、五世紀より七世紀の間には、カーブル Kabul 渓谷には土着の Ratbil 小王朝が交代していたものの、さらに南のガズニ Ghazni 近

辺には西より迫るササン朝ペルシアに隷属していた小王がいた。この複雑な状況下にあった後の二国に使われていたという「隣国に相違した文字・言語」とは、はたして如何なるものを指すのか確かには分からない。(注二)

注

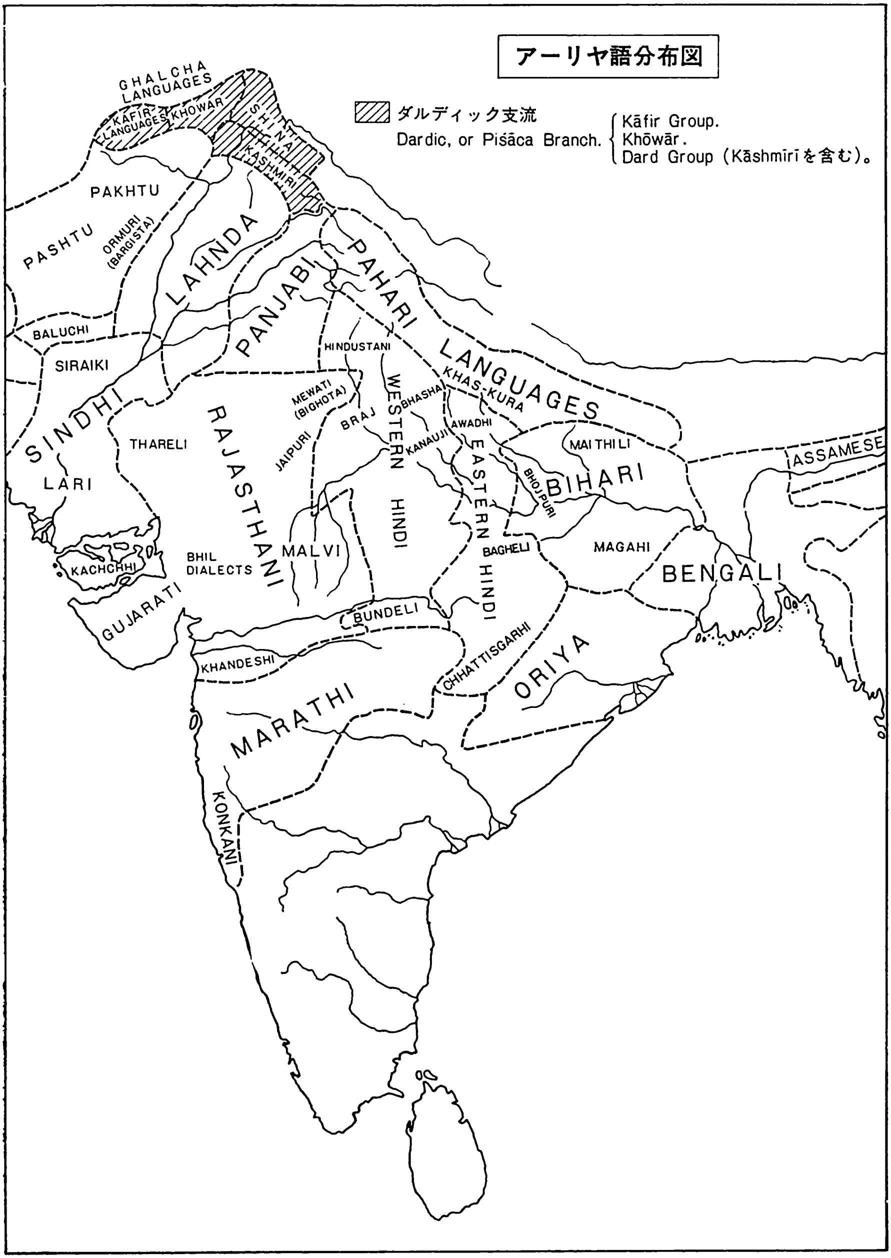
一　「類トカラ」「類トカラ人」とは、水野清一：「ヒンドゥ・クシュ南北の仏教遺跡」に見える用語である。この地区を表わすのに便利であるので借用した。

二　漕矩吒国近辺の状況について『慈恩伝』五には、伐剌拏国と漕矩吒国の間に「阿薄健国」と名づける国が見える（『西域記』には不見）。阿薄健。*ʼa-bʻâk-gʻi̯ɒn*°：**abagān*. アフガン人・アフガン人の国の意を表わす語の、最も早く見えるものは、インドの天文学者 Varāha-mihira (505-87) の著 *Bṛhat-saṃhitā* に見える *avagana* の語であり、次いでこの『慈恩伝』の「阿薄健」、さらに後れて *Ḥ.-ʻĀ.* の *afghānān* [p.30, 91], *ayghān* <**abghān* [p.349] などであり、Beruni は「インドの西方国境地帯の山中にはアフガン人の多くの種族が住み、Sindh 渓谷の近隣にまで拡がっている」[*Alberuni's India*, I. p.208] と述べている。Pushtu 語を話す現在のアフガン人、Pathan (<pl. form of *pushtun* : *pushtana*) の祖と見られる種族の結成・存在は、玄奘の時期にはすでに明瞭であったと認めてよかろう。

［この「覩貨邏」の三地区の言語は、イラン語圏のものと言う意味で、W. Geiger & E. Kuhn: *Grundriss der Iranischen Philologie*. 1895-1905, Strassburg. 特に I. Abschnitt: Sprachgeschichte および前記の W. Henning: *Mitteliranisch*. Handb. d. Or. 参照。バクトリアの言語についての新しい研究には、H. Humbach: *Bactrische Sprachdenkmaler*. 1967, Wiesbaden がある］。

三　インド

玄奘のインドにおける文字・言語の観察は、かれの紀行図を一見しても知られる如く、北・中インドのそれが面的な綿密さであるとすれば、他の三境はいわば線的なものであり、その間自ら密度に濃淡がある。ここにはかれの記述を抽出し配列するだけに止める［現代インド語の分布図は、A. Meillet et M. Cohen: *Les Langues du Monde*. Nouvelle Éd. Paris, 1952 の付図：C. C. Davies: *An Historical Atlas of the Indian Peninsula*. Oxford, 1949 の中の二葉：福島（辻）直四郎：「印度言語の系統」『東洋思潮』（一九三五年、岩波書店）所収の一葉。最後の書に見える参考書目は精選された便利なものであり、少し古いが今なお有益な書である。インドおよび近隣・関連の諸言語についての詳細な記述は、G.A. Grierson (Ed. by): *Linguistic Survey of India*. 11 Vols. in 19 Parts. Calcutta, 1903-28. 1967-8² (Delhi); *On the Modern Indo-Aryan Vernaculars* (An Unfinished Study). 1933. (Reprinted from *The Indian Antiquary*), Bombay; インド・アーリヤ語史としては、J. Bloch: *L'Indo-aryan du Veda aus Temps Modernes*. Paris, 1934. 英訳は、*Indo-Aryan from the Vedas to Modern Times*. (Rev. by the author & transl. by A. Master). Paris, 1965; インド・アーリヤ語の比較辞典としては、R.L. Turner: *A Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages*. 1966., Indexes (Compiled by D.R. Turner). 1969., *Phonetic Analysis* (by R.L. & D.R. Turner). 1971, Oxford; インド・アーリヤ語の上古・中古・近代のそれぞれの参考書は省略する。上記諸書の書目を参照されたい；ドラヴィダ語とムンダー語については、*Linguistic Survey of India*,


アーリヤ語分布図
ダルディック支流
Dardic, or Piśāca Branch.
Kāfir Group.
Khōwār.
Dard Group (Kāshmīrīを含む)。
GHALCHA LANGUAGES
KAFIR LANGUAGES
KHOWAR
SHINA
KASHMIRI
PAKHTU
PASHTU
ORMURI (BARGISTA)
LAHNDA
PANJABI
PAHARI LANGUAGES
BALUCHI
SIRAIKI
SINDHI
LARI
THARELI
RAJASTHANI
HINDUSTANI
MEWATI (BIGHOTA)
BRAJ
JAIPURI
WESTERN HINDI
BHASHA
KHAS-KURA
AWADHI
KANAUJI
EASTERN HINDI
BHOJPURI
MAITHILI
BIHARI
ASSAMESE
MAGAHI
BENGALI
BAGHELI
MALVI
BHIL DIALECTS
KACHCHHI
GUJARATI
BUNDELI
KHANDESHI
CHHATTISGARHI
ORIYA
MARATHI
KONKANI

Vol. IV : *Muṇḍā and Dravidian Languages* ; 比較文典に, R.Caldwell : *A Comparative Grammar of the Dravidian or South-Indian Family of Languages.* London, 1865 (3rd Ed. Repr., Madras, 1965) ; ドラヴィダ語の辞典に, T. Burrow & M. B. Emeneau : *A Dravidian Etymological Dictionary.* 1961, Supplement. 1968, Oxford 等の書を参照]。

北印度境

『西域記』の記述によれば、さらに次の二群五地区に分かち得よう。

(一)　西北語群

○曷邏闍補羅国（巻三の八）「濫波国（巻二の二）より此の土に至るまで、形貌麁弊にして情性獷暴、語言庸鄙にして礼義軽薄。印度の正境に非ずして、乃ち辺裔の曲俗なり」

玄奘がこのように総括する区域は、さらに次の三地区に分かち得る。

(1)　役属迦畢試国地区

○濫波国（巻二の二）「近ごろ迦畢試国に附属す」

○那掲羅曷国（巻二の三）「迦畢試国に役属す」

○健駄邏国（巻二の四）「迦畢試国に役属す」

○伐剌拏国（巻十一の二三、西印度境）「迦畢試国に役属す。語言少しく中印度に同じ」

この四国のうち、前二国は今日のアフガニスタン西境 Pushtu 語域中に位置し、後の二国はインド・アーリヤ語の西北部支派の Lahndā 語域に入ろう。

(2)　役属迦湿弥羅国地区

○呾叉始羅国（巻三の三）「往者（さきごろ）は迦畢試国に属し、近ごろ又迦湿弥羅国に附庸す」

○僧訶補羅国（巻三の四）「迦湿弥羅国に役属す」

○烏剌尸国（巻三の五）「迦湿弥羅国に役属す」

○迦湿弥羅国（巻三の六）

○半笯嵯国（巻三の七）「迦湿弥羅国に役属す」

○曷邏闍補羅国（巻三の八）「迦湿弥羅国に役属す」

この六国は現在の Dardic 語域と Lahndā 語域、一部は Panjabī 語域に入ろうか。

(3)　西北辺境国地区

○烏仗那国（巻三の一）「語言は異なると雖も、大いに印度に同じ。文字・礼儀は頗る相参預す」

○鉢露羅国（巻三の二）「文字は大いに印度に同じ。語言は諸国に異なる」

前者は現在の Swāt Kohistan 地域であり、Dardic 支派に属する。後者はカシミール北部の Baltistān で、現在は西蔵語族に属する Baltī 語と、北部では Dardic 支派に属する Gilgit 方言の Ṣiṇā 語が用いられている。

以上三地区を含む西北語群の拡がりは、現在の Dardic・西北部 (Lahndā, Sindhī) 両支派の語域よりもやや狭い。玄奘が指摘する概括的特徴は、かの中古インド語の一種の、屍肉を食う悪魔の称をもつ野蛮な Paiśācī 語と符合する感があることは注目に値いする。

(二)　北方語群

この語群は次の二地区に分けられよう。

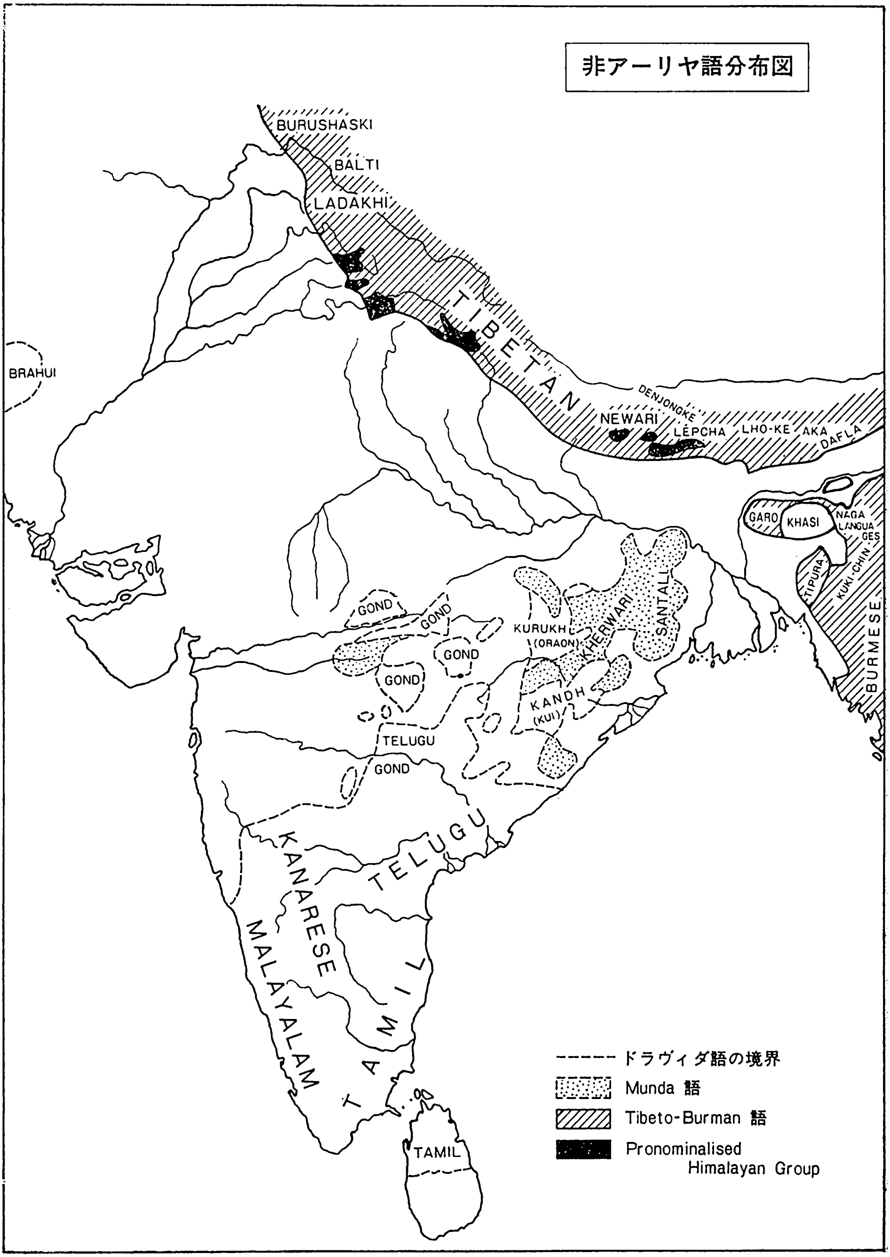
(1)　役属磔迦国地区

○磔迦国（巻四の一）「風俗暴悪、言辞鄙褻なり」

○鉢伐多国（巻十一の一七）「磔迦国に役属す」

○茂羅三部盧国（巻十一の一六、西印度境）「磔迦国に役属す」

この三国は共に Lahndā 語域に属するらしく、西北部支派の方言


非アーリヤ語分布図
BURUSHASKI
BALTI
LADAKHI
TIBETAN
DENJONGKE
NEWARI
LEPCHA
LHO-KE
AKA
DAFLA
BRAHUI
GARO
KHASI
NAGA LANGUAGES
TIPURA
KUKI-CHIN
BURMESE
GOND
KURUKH (ORAON)
KHERWARI
SANTALI
KANDH (KUI)
TELUGU
KANARESE
MALAYALAM
TAMIL
ドラヴィダ語の境界
Munda 語
Tibeto-Burman 語
Pronominalised Himalayan Group

区域のものである。磔迦国に対する玄奘の批評の激しさにもかかわらず、前項西北語群の「辺裔の曲俗」に入れられていない。恐らくインダス河を以て文化圏の境界としたものであろう。

(2)　北印語地区

○至那僕底国（巻四の二）
○闍爛達羅国（巻四の三）
○屈露多国（巻四の四）
○設多図盧国（巻四の五）

この四ヵ国は、今日の Panjabi の東部、West Hindi の北部 Hindusthāni の語域に入る地域のものである。その言語について、何の注記もしていないことは、次下に続く中インドの「正梵語」と区別しなければならぬほどの差異を認めていない故である、と解して差し支えなかろう。

中印度境

玄奘の言う「中印度境」は、波理夜呾羅国（巻四の六）より［南］憍薩羅国（巻十の一二）に至る間の地域である。それは、おおむね、今日の東・西 Hindi 語、Bihāri 語、Pahāri 語等の流布する中部・北部を主とし、Rājasthāni 語の東部、Marāthi 語の東部等の語域を含む広大な区域である。かれはこの間の諸国の文字・言語の異同は論じていない。思うに、「印度総記」の「言語・文字」の項（巻二の一・七）に「中印度［の語］は特に詳正たり」と称揚する「正梵音」と認める範囲内のものであったが故であろう。かれはこの「正梵音」を伝承する中心殿堂たる那爛陀寺において、「是の如く諸部を研鑽し、及び梵書を学んで凡そ五歳を経」（『慈恩伝』三）たと伝されるほどの勉学を続けたのであった。インドの諸言語に対するかれの造詣・自信の程も窺われよう。

東印度境

○迦摩縷波国（巻十の五）「人形は卑少にして容貌は黧黒なり。語は少しく中印度に異なる」
○三摩呾吒国（巻十の六）「形は卑しく色は黒し」
○躭摩栗底国（巻十の七）
○羯羅拏蘇伐剌那国（巻十の八）
○烏荼国（巻十の九）「人貌は魁梧にして容色は黧黮なり。言辞・風調は中印度に異なる」
○恭御陀国（巻十の一〇）「文字に至りては中印度に同じきも、語言・風調は頗る異なる」

迦摩縷波国は現在の Assamese 語域。人形・容貌は Tibeto-Burman 系の住民に対する語なるを思わせる。第二・三・四の三ヵ国は今日の Bengali 語域に当たる。この内、ガンジス河のデルタ地帯と思われる三摩呾吒国の住民が「形卑・色黒」の語を以て評せられるのは、後出のドラヴィダ族の概評と類似するが、地域より考えれば、現在はビハール Bihār やオリッサ Orissa に散在するが、古くはさらに広範に居住したであろうと推定されている Munda 族の、海辺に圧迫されたものの残姿と見るべきであろうか。烏荼国は今日の Oriyā 語域と考えられるが、人貌容色の概評はドラヴィダ族に近く、言語も「中印度に異なる」と述べていることは、ドラヴィダ族にして北方の Bengali と混淆したものの存在を思わせる。最後の恭御陀国から南は、今日もドラヴィダ語域であり、当地はその中の Telugu 語が話される地域である。文字は「中印度に同じ」くブラーフミー系文字であったらしい（今日この地は南方インド系文字を使用する）。

南印度境

○羯餕伽国（巻十の一一）「言辞軽捷にして音調質正。辞旨・風則は

頗る中印度と異なる」
○案達羅国（巻十の一三）「語言・辞調は中印度に異なる。文字に至りては軌則大いに同じ」
○馱那羯礫迦国（巻十の一四）「亦大案達羅国と謂う」
○珠利耶国（巻十の一五）
以上四国は今日の Telugu 語域である。羯餕伽国は往時、国威盛大であったが、玄奘往訪時は人口も稀薄、昔日の面影はなかったという。案達羅国と馱那羯礫迦国とは、往時の Āndhra 王朝の東部と南部の二大都市であり、昔時はその宮廷語として Mārāṣṭrī Prākrit が使用されたとのことであるが、玄奘の言とどのように関係するかは未詳である。珠利耶国も住民少なく荒廃していた。
○達羅毗茶国（巻十の一六）「語言・文字は、少しく中印度に異なる」
○秣羅矩吒国（巻十の一七、『伝』には伝閦国に作る）
以上二国は今日の Tamil 語域である。言語・文字が中インドと大差なき指摘は、北インド文化の摂取に努力し、梵語を公用語とした Pallava 王朝の状況を指すものであろうか。
○恭建那補羅国（巻十一の二）「形貌黧黒」
今日の Kanarese 語域に属する国。ドラヴィダ族の外見を示す語であろう。
○摩訶剌侘国（巻十一の三）「其の形は偉大なり」
○跋禄羯呫婆国（巻十一の四）
この二国はすでにドラヴィダ語域を出て、インド・アーリヤ語の Marāṭhī 語の区域に入って以後のことである。
○摩臘婆国（巻十一の五）「言辞は雅量にして学芸は優深なり。五印度の境に両国学を重んず。西南は摩臘婆国、東北は摩掲陀国なり」
○阿吒釐国（巻十一の六）「文字・語言、儀形・法則は大いに摩臘婆国に同じ」
○契吒国（巻十一の七）「摩臘婆国に役属す」
○阿難陀補羅国（巻十一の九、西印度境）「摩臘婆国に役属す。土宜・気序、文字・法則は遂に亦同じ」
○伐臘毗国（巻十一の八）「土地の所産、気序・所宜、風俗・人性、摩臘婆国に同じ」
○蘇剌侘国（巻十一の一〇、西印度境）「伐臘毗国に役属す」
○瞿折羅国（巻十一の一一、西印度境）「土宜・風俗は蘇剌侘国に同じ」
○烏闍衍那国（巻十一の一二）「土宜・風俗は蘇剌侘国に同じ」
以上の諸国は今日の Gujarātī 語域に入るものであり、北方の Mārwārī 語と密接な関係がある。
○擲枳陀国（巻十一の一三）
南印度境とは言いながら、インド中央部に近く、今日の西 Hindī 語域に属する。玄奘がここで言語・文字について注記しないのは、当然中インドの正梵音を使用するとの意であるのか、または前に続く今日の Gujarātī 語と密接な関係のある Rājasthānī を同一視して、その区域に属するものと見たのか、何れとも断定しかねるが、恐らく正梵音と解したものであろうと想像する。

西印度境

○信度国（巻十一の一五）
○臂多勢羅国（巻十一の二一）「信度国に役属す。語は中印度と異なる」
○阿点婆翅羅国（巻十一の一八）「語言は微しく中印度と異なる」
○阿軬荼国（巻十一の二二）「言辞朴質」
以上四国はインダス河岸に沿う都市で、今日の Sindhi 語域であり、

Lahndā 語と並んでインド・アーリヤ語の西北部支派に属するものである。

○狼掲羅国（巻十一の一九）「波刺斯国に役属す。文字は大いに印度と同じく、語言は少しく異なる」

この国は今のパキスタン領 Baluchistān 南部の Balōčī 語域であるが、当時はササン朝ペルシアの治下に入っていたわけである。

以上、インドの部の概略を抽出配列したわけであるが、当時における公用語・学術語としての梵語の拡がり、周辺部との異同の有無はあらまし知り得よう。

『西域記』中に散見する言語・文字の記事は決して豊富ではない。しかし、もし専家の手により今日知り得る関係資料を補足されるならば、七世紀における西域・インドの貴重な断代的資料ともなり得よう。将来の研究の一助にもと思い摘記したまでである。

六　『西域記』の敦煌本について

敦煌出土本中に存する『大唐西域記』の残巻は、今日まで三本紹介されている。

敦煌本『西域記』の存在とその解説を最も早く報じたものは、成書としては、王重民：『巴黎敦煌残巻叙録』第二輯（一九四一年北京刊）ではなかろうか。その巻二史部に、氏が一九三八年一月に調査した「ペリオ文書三八一四」に関する解説と校記が見える。『西域記』巻二の健駄邏国より同巻末の原巻後題まで、全百七十二行の残巻。その解説には「書法は遒邁、盛唐の写本なり」と称し、京大本と対比、二十一条の校記を載せる。さらにこの文に続き、同氏が同年四月に英京において調査した「スタイン文書二六五九」『西域記』の解説と校記がある。巻一の巻端緒論残闕と、阿耆尼国に始まり原巻後題に至る西域三十四国が完存する。「書法は佳ならず、間々脱字有り」、ペリオ文書より遜色あるも、なお唐末五代の古鈔と判じ、京大本と対照、八十四条の校記を録する［この二本の解説と校記は、同著：『敦煌古籍叙録』（一九五八年北京刊）に全同の形で再録。なお、蘇瑩輝：『敦煌学概要』（一九六四年台北刊）三一ページ；同著：『敦煌論集』（一九六九年台北刊）三一八ページに見える敦煌本『西域記』に関する語は、王氏の文の範囲を出ない］。この残巻二本の校記より見れば、本邦所伝の古鈔本と彼此相合う条々甚だ多く、新しく「校訂本」を作製するとなれば採用必須のものである。その地名・人名等の名辞に至っては、従来の伝本の用字範囲を出るもの甚だ少ない。最も顕著なものは、巻一の二〇・三末尾「呾蜜国」の下に「唐言笠国」の四字を注する点、他本未見の注語である。

なお他に、「スタイン文書〇九五八」は、『西域記』巻三の一「烏仗那国」の文の一部に当たると言うが、その校記は未だ報ぜられてはいないようである［商務印書館編：『敦煌遺書総目索引』（一九六二年北京刊）一一八ページ右］。

『大唐西域記』　解　説

一　『大唐西域記』の概要

『大唐西域記』一部十二巻の書は唐僧玄奘法師が、太宗・貞観三年（六二九）八月渡印のため長安を出発してより、十九年（六四五）正月長安に帰朝するまで、実に前後十有七年の間に、自ら体験し見聞した西域・インドの季候・風土・民族・習俗・言語・境域・物産・伝説等、諸般の事項を記したかれの「志記」（記録）に基づいて編纂された「地志」（地誌）である。

自らの体験・見聞に基づく稀有のこの書は、従って、七世紀前葉におけるインド・西域諸地域の諸面にわたる概括的知識として、当時雄大な対外経略を企図していた唐朝にとって、その基礎的な指針となる詳実にして最新の書であったろうことはもちろんであるが、それはまた今日においても、闕逸した多くの同類の書の中で、完存する詳細な記録としては、唐土においてのみならずこの書の覆う全地域における唯一無二のものであり、それ故にこそ、多方面の諸学者がこの書を依然、重要資料として貴重視しているのである。仏家の手に成る「仏国」の記なるに拘らず、唐土の著録の中では、『四庫全書』に法顕の『仏国記』一巻と共に子部釈家類には入れられず、史部地理類外紀之属に併入され、最近の代表的支那学必備書を網羅すると称する叢書『四部叢刊』にも、史部に『水経注』と並べ収められているのも、本書が単にインド仏教の概況を示す書、或いは仏跡の案内書たるに止まらない特殊性によるが故であろうし、この『中国古典文学大系』の一として計画された所以も、あながち当今流行のノン・フィクションとしての興味からばかりではあるまい。

もし玄奘法師の行実の躍如たるを求むるならば、本書よりはむしろかれの入寂より四半世紀後の則天武后・垂拱四年（六八八）に撰述された『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』十巻をこそ選ぶべきであろう。それはまさに法師の生誕より歳月を追い、行動の逐一を備さに述べるのみならず、劇的插話を許多加え、壮麗なる詔勅表啓の数多くを帖して、死後の葬事にまで及んで詳細、その文彩また甚だ典雅である。

今、法師の渡印前後における漢土を中心に周辺の概観を行ない、その旅行の背景を見てみよう。

まず漢土においては、後漢の明帝のころ仏教を導入してより、西域・インドの僧の渡来するもの次第に多く、その訳経も漸次増大して行き、やがて漢土からも西域・インドに自ら求法捜経するものが現われ、三世紀より十一世紀の終わりまでに約百八十人の求法僧を数えるが、その内で法顕の渡天に刺激されてか、五世紀前半のみでも約九十人の多きを数える盛況であった。訳経の面においても、五世紀初頭の羅什より七世紀中葉の玄奘に至るまで、訳業に従事するもの四十七名を算し、梁・武帝の天監十四年（五一五）華林園中に釈氏の経典を総集し、僧紹の『華林殿衆経目録』四巻を撰するや、凡て五千四百巻に達したという。然るに六世紀後半、北周・武帝の廃仏に遭うや、経・像・仏寺・僧尼共に除かれ一大打撃は受けはしたが、その臣の楊堅は隋朝を興して仏法の復興に努めた結果、国都長安は北魏期に上廻る仏教の盛大を来たした。『隋書』経籍志四には仏経の総数「一千九百五十部、

六千一百九十八巻」の大きな数字を掲げ、周武の廃仏も意外に実質的打撃の少なかったことを物語っている。その隋も専政皇帝の下、外征内乱相継ぎ、搾取と戦乱とで衰微荒廃したまま、唐に天下を譲ることとなった（六一八）。李唐の初代たる高祖、その創業を輔佐した二代太宗（六二六即位）の最初の事業は、内には疲弊した国土を回復し、散亡減少した国民を安堵復興することにあり、外には西北より迫る最大の外患たる東突厥に対処することにあった。玄奘の密行渡天する貞観三年は、まさに太宗即位後間もなきこの東突厥平定作戦の真最中であり、翌四年には名将李靖が見事に戡定したのであった。

一方、西域では西突厥が六世紀の中葉、鉄門 Derbent Pass 以北はもとよりソグディアナ Soghdiana を手中に収め、嚈噠 Ephtalites を討ってソグディアナ Soghdiana を手中に収め、

一方、西域では西突厥が六世紀の中葉、嚈噠 Ephtalites を討ってソグディアナ Soghdiana を手中に収め、鉄門 Derbent Pass 以北はもとより、次第に南下して迦畢試国より漸く西北インドの健駄邏に至らんとするほどの強大な勢力となって来たが、太宗の東突厥を壊滅するや（六三〇）、その連鎖反応として、まず突厥支配下にあった伊州（哈密）のソグド人首領が帰服したのを手はじめに、唐の勢力次第に西に伸び、貞観十四年（六四〇）には漢人の植民国家として長い歴史をもった高昌も帰属し、ここに天山以北・葱嶺以西にまでも及ぶ唐朝の強大な威武を示すシルク・ロード支配の機会を得たのであった。

また、西蔵は唐初に強力な統一国家を創り、西北の青海地方や北方の西域南道一帯に侵入する勢いにあったが、太宗・貞観八年（六三四）入貢し、貞観十五年（六四一）には文成公主が西蔵国王 Sroṅ-bstan sgam-po（『唐書』の棄宗弄讃）に嫁して入蕃するほどの親好関係が成立していた。

目を遙か彼方のインドに転ずれば、三二〇年に波吒釐子城 Pāṭaliputra に基いを築いたグプタ Gupta 王朝は着々と北方インドを征服し、三七五年に即位したチャンドラグプタ二世 Candragupta II（Vikramaditya）の治世にはナルマダ Narmada 河以北の全北インドをその手に収め、マウリヤ Maurya 王朝・アショーカ Aśoka 王以来のインド統一を行ない、西北インドに勢力を保ったクシャン朝 Kuṣāna もインダス Indus 河以北に駆逐された。六世紀にはまたも中央アジアより侵入した白フン（Hūṇa, 嚈噠）は暴虐の限りを尽くしたが、グプタ朝の軍隊はよくこれを防ぎ（五二八）、ために侵入王ミヒラクラ Mihirakula（摩醯邏矩羅）は退いて迦湿弥羅に拠って、健駄邏の仏教を破壊し僧を虐殺する挙を行なった。北魏の時、敦煌の人たる宋雲がここに嚈噠王を訪ねたのは孝明帝の正光元年（五二〇）四月のことであった［『洛陽伽藍記』五の『宋雲行紀』］。この白フンをよく圧えた Balāditya（婆羅阿迭多）王を最後としてグプタ王朝の全インド支配も終わり、インドはまたもや小国に分裂して互いにグプタ朝を継承しようと競いあったが、Puṣyabhūti 朝の Harṣa-vardhana（戒日王、六〇六即位、六四七死）によって再び統一され、六三三年には玄奘を引見厚遇している。この戒日王は太宗・貞観十五年（六四一）に遣唐使節を送り（この年文成公主入蕃）、その翌々年太宗の答礼使として正使に李義表、副使に王玄策が選ばれて赴印し、玄奘帰朝の翌年の貞観二十年（六四六）に使命を果たして帰国した。ついで二十一年に再び王玄策が正使となってインドを訪れた時には、戒日王はすでに死して北インドは混乱に陥り、その余波を受けて王玄策は入国を拒まれた。そこでかれは友好国の西蔵や北インドのネパール Nepal に兵を募り、インドで戦って勝利を収め、二十二年（六四八）に帰国した。かれは高宗・顕慶三年（六五八）より五年の間にも第三回の訪印をしている。

かくの如く、玄奘の出発の時期は唐朝草創期の北辺急を告ぐるころであったが、滞印中に唐朝の威武早くも四方に伸び、帰国時の国都長安はまさに世界最高最大の文化都市とならんとする勢いであった［この間のことは一般の概説書の他、高田修・「聖地巡行記」一九三四年

『仏教大学講座』所収：馮承鈞：『歴代求法翻経録』一九三一年上海刊：Bagchi, P.C.: *India and China, a Thousand Years of Cultural Relations*, 1951², New York; do: *India and Central Asia*, 1955. Calcutta; 釈東初：『中印仏教交通史』一九六八年台北刊等の書参照」。

二　玄奘法師の略歴

玄奘法師、俗姓は陳、名は禕（音依）、河南省陳留の人。その先は後漢の河南省太丘県の長となった陳寔、字は仲弓（『後漢書』九二）であると言う。法師の祖父康は学を以て北斉に仕え国子博士に任ぜられ、父慧は経術に長じ令名があったが、隋末政治の衰微を慨き、致仕して古書に専念した。身の丈八尺に及ぶ眉目秀麗の人であったと言う。四男あり、法師はその第四子であった。

法師は幼年にして穎悟抜群、常に童幼の党に交わることなく、百戯の閭巷に叫歌して人々馳せて観る時もその門を出ず、古典に親しみ聖哲の風を習うばかりであった。ところが、先に出家していた法師の第二兄、洛陽浄土寺に住む長捷（名は素）は、法師が伝法者としての器たることを察し、連れ帰り経業を誦習させていた。折しも、洛陽で特旨により少数の僧を度する勅が下りた時、法師の幼少なるにも拘らず、使者の大理卿鄭善果はその風骨を惜しみ特にその選に入れた。以後、浄土寺で景法師に『涅槃経』を、厳法師に『摂大乗論』を学んだところ、一聞にしてほとんど了解、再覧の後は悉皆記憶し、衆を驚嘆させたのが十三の時であった。隋室滅び唐朝興るに及んで、武徳元年（六一八）、兄弟共に長安に来たが、天下の名僧多くは蜀（四川省）に逃れて、長安には未だ講席は開かれていなかった。そこで兄弟はさらに、漢川（陝西省）より蜀の成都に至り、そこで『摂大乗論』『阿毘曇論』『八犍度論』（『発智論』の旧訳）等を聴き、精励して怠る所がなかったため、二、三年の間にして諸部に通達し、法師自身も講経を行ない、その講座の下には常に数百人の僧がいた。

武徳五年（六二二）、法師満二十歳となり、ここ成都に具足戒を受けた（この受具の年は諸説一致し、法師年寿算定の基礎となる）。当時、すでに唐の天下統治は表面上漸く定まったので、法師は長安に帰ろうとしたが果たさず、そこで兄と別れ法師は単身舟に乗り、江を下って荊州（湖北省江陵県）に到った。ここに留まり講ずること暫くにして、復北遊して相州（河南省彰徳府）に質疑を問い、趙州（河北省趙県）に『成実論』を学び、漸くにして長安に入り、大覚寺に止まって『倶舎論』を学んだ。時に長安には法常・僧辯の二大徳（共に『続高僧伝』一五に見える）あり、衆経に達する中に殊に『摂大乗論』を専ら講じていたが、共に法師の学徳に深く嗟嘆して、「汝は釈門千里の駒と謂うべし。其の再び慧日（仏教）を明らかにするは、当に爾が躬に在るべし。恨むらくは吾が輩老朽にして恐らくは見ざらんことを」と言い、これより学徒はみな法師を改めて観、その声誉は京邑に満ちたと言う。

法師はかくの如く多くの師に謁し、備さに教えを請うたが、諸師の説はその解釈もさまざまに、経典に照らすも不明確にして就く所を知らずという状況であった。かくて、親ら渡印し所惑を問い、併せて大・小二乗の仏教思想研究の宝庫たる『十七地論』（陳・真諦訳、五巻。今は散逸す。本書は後の玄奘訳『瑜伽師地論』*Yogācārya-bhūmi* の部分訳である）の完本を得て群疑を解決するの他なしと決意した。常・辯の二大徳も大いに法師の渡印研究を勧めた。

法師は同志と共にインド歴遊を請願したが、詔あり辺境事多きを理

由としこれを許さず。同志の人は悉く断念したが法師一人のみは屈することなく、禁令を犯しても断乎として孤遊潜行を実現したのであった。時に太宗・貞観三年（六二九）秋八月、法師年歯二十八歳であった。その遊歴見聞する所は『大唐西域記』に詳しい。

貞観十九年（六四五）春正月帰朝、三月より訳経準備にかかり、夏六月訳経開始、越えて二十年七月『大唐西域記』完成。爾後十七年間訳経に精励、高宗の麟徳元年（六六四）、長安の玉華寺に入寂。その訳す経典大小併せて一千三百四十巻、実に五日に一巻の割合である。

法師の風貌は、「形長七尺余、身は赤白色にして眉目疎朗、端厳なること塑の如く、美麗なること画の如し。音詞清遠にして、言談雅亮、聴く者厭うものある無し」［『慈恩伝』一〇］とある。

玄奘法師の伝記は、その偉大にして著名なるに拘らず、年次の点において必ずしも諸伝一致しない。次に大別略記する。

一は、唐・高祖・武徳五年（六二二）、法師二十一歳（満二十）にして成都に受具せる点に諸説異論なく一致せるを根拠として計算し、

隋・文帝・仁寿　二年（六〇二）生誕
唐・太宗・貞観　三年（六二九）八月一日首塗（二十八歳）
　　　貞観十九年（六四五）正月二十四日帰朝（四十四歳）
　高宗・麟徳　元年（六六四）二月五日遷化（六十三歳）

とする説である［松本文三郎…「玄奘の研究」『東洋文化の研究』一九二六年、岩波書店刊所収；高田修…『国訳慈恩伝』解題］。この説最も依拠ありとし、採るものが多い。

二は、道宣の『続高僧伝』（本書は貞観十九年撰なるも、玄奘の伝はそれ以後の死没年までも記す。追加増補せるものならん）に「麟徳元年、翻経僧及び門人に告げて曰く、『有為の法は必ず磨滅に帰す、泡幻の形質何ぞ久しく停まることを得んや。行年六十五たり、必ず玉華に卒らん。経論に疑い有る者、速やかに問う可し』と。……二月四日に至り、右脇して足を累ね右手にて頭を支え、……五日の中夜に至りて、弟子の問いて曰く、『和上定めて弥勒の前に生ずる不』と。答えて曰く、『決定して生ずるを得ん』と。言已り気絶え神逝く」とあるに拠り、

隋・文帝・開皇二十年（六〇〇）生誕
唐・太宗・貞観　三年（六二九）首塗（三十歳）
　　　貞観十九年（六四五）帰朝（四十六歳）
　高宗・麟徳　元年（六六四）遷化（六十五歳）

とする説である。

三は、第一説に従いながらも、法師の西遊の年を『慈恩伝』に「年二十六」とあるに拠り、

隋・文帝・仁寿　二年（六〇二）生誕
唐・太宗・貞観　元年（六二七）首塗（二十六歳）
　　　貞観十九年（六四五）帰朝（四十四歳）
　高宗・麟徳　元年（六六四）遷化（六十三歳）

と、在外期間を二年延長する説である［劉汝霖…「唐玄奘法師年譜」『女師大学術季刊』第一巻第三期・第二巻第一期、一九三〇—三一年、北京］。劉氏の書は法師の行実を詳細に考定し年譜にまとめた力作であるが、首塗の年次を「貞観元年、年二十六歳」とする点は、論証大いに努めるも、従い難い。この点を修正し、第一説に従い年次を再考配次するならば、この書は最も便利なものとなろう。

その他にも数種の説があるが、何れも従い難く、ここには省く。

三 『大唐西域記』の成立

玄奘法師が遠く笈を負い、幾多の艱険に堪えて渡印した主目的は、かの土の大徳に就いて疑義を質すこと、中土に闕漏する梵本――なかんずく『瑜伽師地論』の完本を請来すること、併せて聖地を巡拝することにあった。従って、かれが渡印の目的を果たして無事帰朝するや、爾後の努力が専ら訳経に向けられたことは当然であった。

しかし、当時の唐朝は、林邑・新羅等東方諸国も入貢し、吐蕃との関係も好転して文成公主を嫁せしめ、突厥を平定し高昌を討伐する等、四方に威武を伸展していたころとて、この西域諸地域についての最新情報の提供者たり得る法師を、唯訳経にのみ専従させて満足するはずはなかった。

法師帰朝の翌月、二月に洛陽の儀鸞殿に謁した際、帝は「雪嶺より以西、印度の境の玉燭・和気・物産・風俗・八王の故迹・四仏の遺蹤は、並びに博望（張騫）の伝えざる所、班馬（班固と司馬遷、即ち『漢書』と『史記』）の得て載するなき」所の事どもを問い、因って「仏国遐遠にして、霊跡法教は前史に委詳すること能わず。師既に親しく観る、宜しく一伝を修して以て未聞に示すべし」との詔命ありたるのみならず、「帝、又法師が公輔の寄に堪うるを察し、因って帰俗して俗務を助乗せんことを勧」めたが、「願わくば身を畢うるまで道を行じ以て国恩に報ずるを得ば、玄奘の幸甚なり」とこの還俗の一事のみは固辞し、ようやく事止みとなった。かく愛顧の啻ならざるものがあったのは、法師の才識が衆を抜けることに因るはもちろんであったが、西域・インドの情報提供者としての法師に執着してのことであったろうことは推測に難くない。

翌月の三月、法師洛陽より長安に還って弘福寺に止まり、官司の公給資什の下に訳場開設の準備に着手し、早くも夏六月には、時輩の推す綴文（『仏祖統紀』四四に、この役を「文字を回綴し、句義を成さしむ」とある）の大徳九人、字学の大徳一人、証梵語梵文の大徳一人、その他雑務を司る人々を得た。『大唐西域記』の「撰」者たる辯機、および『続高僧伝』『釈迦方志』の撰者たる道宣は綴文の任に、二十五巻本『一切経音義』の撰者たる玄応は唯一の字学に当たるものとしてその中にあった。

大小の経典を次第に訳出する間にあって、前に洛陽に勅命のあったインド・西域に関する書は、その翌年、貞観二十年七月十三日完成、『大唐西域記』と称し一部十二巻に編次して闕下に奏した。命を受けてより僅かに一年七ヵ月のことであった。その書は、法師の親践するもの一百一十国、伝聞するもの二十八国〔敬播「序」〕、その区別は「行と書くは親しく遊践するもの、至と挙ぐるは伝聞の記なり」〔「讃」〕と本文中に書き分けた。

『大唐西域記』の各巻頭には、「三蔵法師玄奘奉詔訳、大捴持寺沙門辯機撰」と両行に記す。玄奘の夥しい訳経中このような特異な書き方のものは他に例を見ない。本書に対してのこの両者の関わり方について、学者の論議のある所である。

本書成立の実情は、巻末「讃」の終わり近く辯機自らのことを述べた文中に、「爰に庸才に命じて斯の方志を撰ぶ……恭んで志記を承けて其の文を倫次す」とある。ここに言う「志記」とは、恐らく玄奘自らの旅行記録とか、インド撰述の書物も含む類のものであったろうと

推察される『廻記』（巻一の二八、「遊至する所に随って略梗概を記す」と言うような記録類か）の他、文中に散見する『先志』（巻一の三八・三、巻八の六・六等）、『先記』（巻十二の二二・二三）、『印度記』（巻七の二・三、三・三、巻八の二・七等）、『国志』（巻十一の五・三）等のものを指そう。また道宣の『続高僧伝』四「玄奘伝」の条に、「又『西域傳』一十二巻を出だす。」沙門辯機親しく時事を受け、前後を連紕す」とも見える。これら当時の文より考えれば、辯機は関係諸資料（原文が外国語のものもあったろう）を法師より手渡され、法師指導の下にこれを配比連綴、編次したと推定するのが最も穏当であろう。従って、その記事配列の順序も、「地志」と称しながらも、ほぼ法師の旅程に従って叙述されたものであろう。

法師自身は、訳場創設早々にも拘らずこの一年七ヵ月の間に、すでに『大菩薩蔵経』二十巻、『仏地経』一巻、『六門陀羅尼経』一巻、『顕揚聖教論』二十巻、『大乗雑集阿毗達磨論』十六巻、計五十八巻の訳出を了え、さらに懸案の『瑜伽師地論』百巻の翻訳にとりかかっていたのであった。その繁忙想像するに余りあり、従って『大唐西域記』撰述に辯機の役割が甚だ大きかったろうことは推察に難くない。

ところで、この「玄奘訳、辯機撰」とする異様な併記は、後人の手による誤りであるとする説がある［陳垣：「大唐西域記撰人辯機」；賀昌羣：「大唐西域記之訳与撰」、なお柳飜：『玄奘和他的弟子辯機』一九五六年香港刊にも二氏の説を略記紹介する］。その説を要約紹介しよう。

玄奘法師の訳場で綴文の任に当たった一人の道宣の撰になる著録『大唐内典録』（麟徳元年成）巻五に、法師の「訳経」を列挙せる条の最後尾に、

大唐西域伝一部十二巻

とあり、また巻一〇に、

皇朝坊州玉華宮寺沙門釈玄奘撰大唐西域伝一部一十二巻

とある。

また、唐・智昇撰『開元釈教録』（開元十八年成）巻八の、玄奘伝の前に列する法師の訳経中に、

大唐西域記十二巻見内典録、貞観二十年奉勅於弘福寺翻経院撰、沙門辯機承旨綴緝、秋七月絶筆。

とあり、また同書巻一三、一八の両所に、

大唐西域記十二巻大唐三蔵玄奘撰

とも掲出する。

また、唐・圓照撰『貞元新定釈経目録』（貞元十六年成）巻二三、二八の両所に、

大唐西域記十二巻大唐三蔵玄奘撰

と掲出している。

［解説者補記］　唐・慧琳撰『一切経音義』（元和二年成）八二所収「大唐西域記」の項にも「三蔵沙門玄奘奉　勅撰」と記している。唐代の著録には、何れも本書を「玄奘撰」としていることを知る。

次いで宋代の著録、『崇文総目』巻二、『郡斎読書志』巻七、程大昌撰『攷古編』巻八、『仏祖統紀』巻三九、『旧唐書』巻一九一玄奘伝等にも、みな本書を「玄奘撰」とするも辯機には言及していない。

ところが、『新唐書』芸文志（本書には玄奘伝はない）には、

玄奘大唐西域記十二巻姓陳氏緱氏人

辯機西域記十二巻

と別書であるかの如く連記し、『通志』芸文略六六も『新唐書』を承けて二書とする。

かくて宋・陳振孫撰『直斎書録解題』八に至って始めて、

大唐西域記十二巻
　唐三蔵法師玄奘訳　大総持寺僧辯機撰

とするに至った。

『大唐西域記』の原本はもとより、唐鈔本の今日残存するものなく、敦煌出土品中にも見ない。我が国に伝来した唐代の旧帙より伝鈔したと考えられる現存の古鈔本を始め、高麗蔵・宋蔵以下の各蔵経所収の本書は、何れもみな「玄奘訳・辯機撰」とするものばかりである。その「玄奘訳」と誤る所以は、『内典録』に法師の訳経に並列して本書を挙げたことより、竟に「訳」書とするに至ったものであろう、と説明する（敦煌本については補注六参照）。

なお、辯機は年二十六、七歳の若蹕の身にして、玄奘法師の訳場に列するほどの才能を認められた学僧でありながら、房玄齢の次子の遺愛に嫁した高陽公主と通じ、事現われて誅戮されたのは貞観二十二、三年のころ、年僅かに三十前後のことであった。事の仔細は陳垣・賀昌羣・柳籬等諸氏の論攷に詳しい。

四　『大唐西域記』の伝本

『大唐西域記』の原本はもちろん存在しないが、残巻は若干ある（補注六参照）。しかし、唐鈔本に基づくと思われる本邦古鈔本は、法隆寺蔵の延暦四年（七八五）書写の残闕本以下、その存在を報告されているもの十指に余る多きに昇る。その何れも全容は未だ複製されず、部分写真の他は容易には見得ない。

版本には蔵経本と蔵外本とがある。

蔵経本の諸板を列挙することは省略するが、注意すべきことが一つある。世に流布している明蔵の中には、その巻十一に、明・成祖・永楽年間（一四〇三―二四）に宦官の鄭和が西洋（西南アジア）に使いした時、僧伽羅国で行なった戦闘の記事を主とした一葉余の新加挿入文があることである（明蔵の諸板を普く調べた訳でもない故、総ての版本について言うものではない。永楽以前の、例えば金陵版の南蔵等には当然新加文はなかったろうと思われるが、補刻ということもあるから断言はできない）。

蔵外本中、海彼の刊本に古本はなく、叢書所収のものでは、

　『墨海金壺』所収本
　『守山閣叢書』所収本
　『四部叢刊』所収本

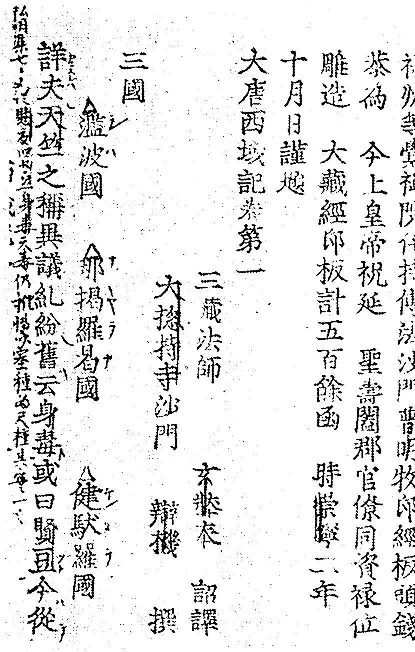
等のものがある。第一・第二のものは同系統のもので、概して校訂良く読み易い。第二の書は最近台湾で複印した洋装二冊本がある。第三の書は一部補写のある宋版蔵経本を複印したもの。単刊本には、

　常州天寧寺刊本
　南京支那内学院刊本

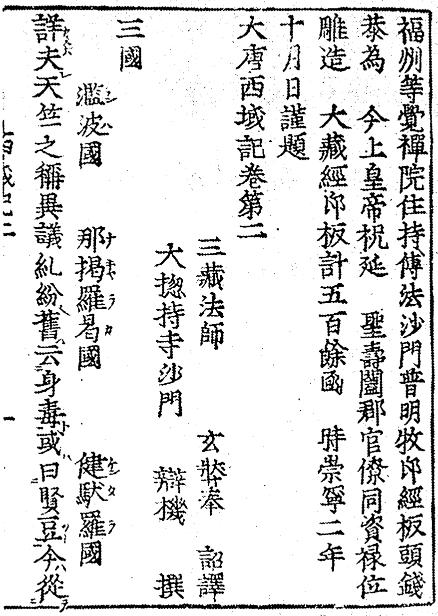
の木刻本がある。前者は新加挿入文のある明蔵系統のものである。後者は校訂の行き届いたものと言われるが未見。叢書とは言え、単刊本として扱われるものに、

　『国学基本叢書』所収鉛印本

一九三四年上海商務印書館刊行のものであるが、これも明蔵の鄭和西征の新加挿入があるばかりでなく、巻首に錯簡があり、当該個所を全く意の通じないものにしている。依拠した明蔵の原本の錯簡（単なる一、二葉の入れ違い）を改綴せざるまま無批判に活字に組んだ故であ


福州等覺禪院住持傳法沙門普明牧印經板頭錢
恭爲　今上皇帝祝延　聖壽閩郡官僚同資祿位
雕造　大藏經印板計五百餘函　時崇寧二年
十月日謹題
大唐西域記卷第一
三藏法師　玄奘奉　詔譯
大揔持寺沙門　辯機　撰
三國
濫波國　那揭羅曷國　健馱邏國
詳夫天竺之稱異議糺紛舊云身毒或曰賢豆今從

古活字本　巻第二　傍線・△印は朱，句読点・送りガナ・振りガナ及び小口（左端）の文字は墨による書き込み。


福州等覺禪院住持傳法沙門普明牧印經板頭錢
恭爲　今上皇帝祝延　聖壽閩郡官僚同資祿位
雕造　大藏經印板計五百餘函　時崇寧二年
十月日謹題
大唐西域記卷第二
三藏法師　玄奘奉　詔譯
大揔持寺沙門　辯機　撰
三國
濫波國　那揭羅曷國　健馱邏國
詳夫天竺之稱異議糺紛舊云身毒或曰賢豆今從

寛永二十年刊本　巻第二　句読点・送りガナ・振りガナ等すべては整版印刷。

る。近刊の中文出版社刊本はこの本の複印で最も入手し易いものであるが、最劣の原本の影印だけに使用者は注意を要する。

文学古籍刊行社刊本

一九五五年、北京、同社刊。本書は明・嘉興蔵本を影印洋装一冊本とした複印本。巻末に陳垣：「大唐西域記撰人辯機」（もと『桑原博士還暦記念東洋史論叢』所収）、賀昌羣：「大唐西域記之訳与撰」（もと『海潮音』一七ノ一二、および『図書季刊』三ノ三所収）の二論文を転載付録する。その説に従ってか、本書の背文字・扉書・奥付共に「玄奘辯機 撰」と併記する。なお、この他に最近、台湾印経所刊本があるらしいが未見。

日本刊本には次の如きものがある。

古活字本　無辺無界、一行二十字、半葉十行、無刊記、六冊本

何れ慶長・元和の間の刊行であろうと思われる稀覯の書。第二、第八両巻首にある刻蔵題記から、本書の底本は北宋・徽宗の崇寧二年（一一〇三）刻の福州閩県易俗里の白馬山東禅等覚院（等覚禅院とも略称する）版であることを知る（原本は毎行十七字の折本）。千字文による分類は転・疑の両部にわたる。活字を組む時の過失からか、割注の文字が上下・左右に組み誤まれている部分がある。

寛永二十年刊本

巻末に「庄大夫板本」の刊記あり。前記古活字本の誤植を訂し、有辺・付訓本としたもの。字体・配置まで全く古活版に拠っている。今日ではこの書も見ること稀となった。

承応二年刊本

寛永版の求板再印かと思われる全同のもの。巻末刊記に中野五郎左衛門印行とある。この手のものに寛文年間の刊行のものもあるらしいが、未見。また刊記を取り去り、別葉に京都の貝葉書院の奥付を入れた新刷りの書もある。板木は同書院に伝存し、近く再刷の由。

京大本卅考異索引

「京都帝国大学文科大学叢書第一」として明治四十四年に刊行された二冊本。今回の訳注の底本。本書は高麗蔵経本に拠り、宋蔵本・明蔵本および本邦旧鈔の数本と、『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』・高麗板『大方広仏花厳経随疏演義鈔』所引の文、後晋・可洪撰『新集蔵経音義随函録』（九四〇撰）所収の「西域記音義」等の諸書を校訂資料とし、その異文を詳しく別冊『考異索引』中の「考異」の部に挙げている。誤読・句読の切り誤り・訂正漏れ等は別として、今日から見るならば『随函録』所収の「西域記音義」を「此れ実に此書の最初の音義」と称し、それ以前に早く慧琳の『一切経音義』（七八四作成開始、八〇七成）第八二巻に「西域記音義」のあることに言及せぬ点、『釈迦方志』『法苑珠林』等の直接活用なきことなど不満もあり、再度の精校を要しようが、現在なお最も依拠すべき書たることに変わりはない。『考異索引』の「索引」の部は、人名・地名を五十音順とＡＢＣ順に並べたもので、後者はビール Beal, ワッターズ Watters, ジュリアン Julien 三氏の考定した原語を対照表示する。因みに、本書刊行直後の明治四十五年二月から大正二年九月に至る間、雑誌『宗教界』を足場とする東京の梵語学者荻原雲来氏と、京大発行『藝文』を拠り所とする「新刊西域記校訂委員」との間に交わされた五度にわたる厳しく激しい論争は、今日においてもなお本書の研究者に甚だ益がある（荻原氏の文のみは『荻原雲来文集』に再録されている）。

『大唐西域記』の「序」は、張説のものと敬播のものと、二つある。通行する多くの本は張説のもののみ載せて、敬播のものはない。高麗蔵本（従って京大本も）は敬播のもののみあり、張説のものは載せない。これが『慧琳音義』八二の「西域記音義」には敬播の序のみを引く。恐らく古い姿かと考え、今回は敬播の序のみを訳した。我が国で、張説の序に訓点をつけたものや読み下し文にしたものは幾つかあるが、敬播のものは全く手をつけられていないことも、その理由の一つである。

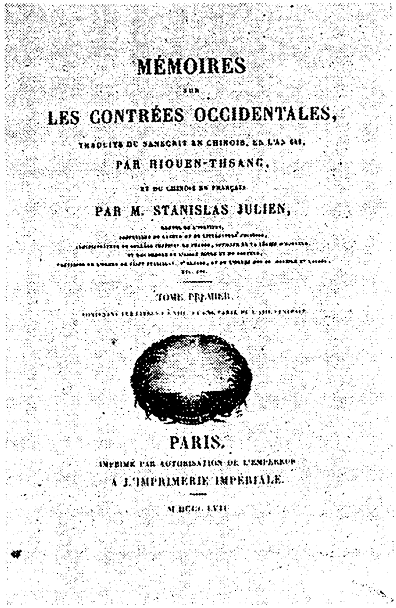
なお、京大本の巻頭には、法師の「進西域記表」という文が載せられている。この文は本来『大唐西域記』一書には見えず、『慈恩伝』巻六および天平写本『大唐三蔵玄奘法師表啓』『寺沙門玄奘上表記』に見えるものである。この「表」は「序」「讃」と共に、構文・配韻等の語学上の問題、引拠出典等の文献学的な検討を含めた注解の用意はしたが、今回は僅かに「序」「讃」の訳文のみを載せ、「表」の訳文はこれら三者全部の注解と共に割愛した。本『大系』の性質と紙数の関係を考慮する編集部の希望があったからである。

五　『大唐西域記』の翻訳

『大唐西域記』の翻訳の専書は意外に少ない。ここには翻訳書と、本文の叙述に沿って行なった研究書とを併せて概観する。

本書の価値を逸早く見出し、これを翻訳したのは西欧人である。

Julien, S.: *Mémoires sur les contrées occidentales, traduits du Sanscrit en Chinois, en l'An 648, par Hiouen-Thsang, et*



Julien : *Mém.*（東洋文庫蔵）

du Chinois en Français. 2 tomes, 1857-8, Paris.

今回の訳注で Julien : *Mém.* と略記する書。下巻に Vivien de St.-Martin : *Mémoire Analytique sur la Carte de l'Asie Centrale et de l'Inde* を付載する。本書は何分古いもの故、種々の問題を含みはするが、今日なお最良の翻訳とされ、下巻付録の St.-Martin の地理考定も有益である。すでに甚だ稀覯に属する。なお、後の記事参照。

Beal, S. : *Si-yu-ki. Buddhists Records of the Western World, translated from the Chinese of Hiuen Tsiang (A.D. 629).* 2 Vols. 1884, London.

本書は前記ジュリアンの書を参照しつつも、諸所に訂正を行なっている。文体の把握、訳語の適否についてはなお問題とされているが、直訳に近いほど原文に密接に沿った姿勢で取り組む翻訳は、原文を資料とする西欧人には最も好適な故か、今日においても欧米の多くの研究者が本書を頻繁に活用するのも当然であろうし、一冊本の再版が絶えず刊行されていて最も得易いばかりが理由ではあるまい。脚注も親切ではあるが、すでに時代離れしたものも多いのは止むを得まい。

Watters, Th. : *On Yuan Chwang's Travels in India (629-645 A.D.)*, edited after his death, by T.W. Rhys Davids and S.W Bushell. 2 Vols. 1904-5. London.

下巻に Smith, V.A. : *The Itinerary of Yuan-Chwang* を付載する。本書は前記ビールの書に比較すると漢籍・仏書および新研究書を参照すること多く、研究面には大きな進歩は見受けられるが、原文との関係と言う点より見るならば、翻訳と言わんよりは大意を伝える書と言う方が適当である。我が国ではビールの書よりも高く評価されている。本書には一九三六年北京複印本もあり、最近も台湾でまた複製されているようである。

小野玄妙訳：『大唐西域記』『国訳一切経』史伝部一六。一九三六年、大東出版社刊

本書は翻訳書に入れてよいか疑問であるが、多能多忙な氏が「一往の書流として……ザット読過した程度にして居いた」と書くほどの書の故か、いわゆる書き流し文とは言いながら納得し難い点も少なくなく、脚注もさほど役に立たない。「序」は敬播・張説の何れも載せぬ。戦後の再版本も刊行されている。

翻訳に研究を併せた書としては次のようなものがある。

堀謙徳：『解説西域記』一九一二年、東京、前川文栄閣刊

索引を含めて千二百ページ余の大冊。原文を掲げ、解釈・考証を続ける。解釈は大意を伝えるのみ。敬播・張説二者の「序」および「讃」共に載せぬ。全体の骨組みはほとんどワッターズの書を踏襲し、ジュ

リアン、ビール等の書も直接には参照していないようである。唯、重要な諸所における漢籍・仏典・インド原典の引証は詳細、この面の価値は今日においても甚だ有益である。付録の「玄奘の入竺行程」はSmith: *Itinerary*（ワッターズの書の付録）に依り、「玄奘時代西域宗教の状勢」は著者の手による統計表、「西域記研究資料」は㈠漢文書類、㈡梵欧文書類単行本、㈢欧語論文雑誌掲載に分かち、当時までにおける関係書を網羅する。「索引」も漢字・欧字による人名・地名・件名の六種あり、親切である。最近国書刊行会より複刻が刊行された。

足立喜六：『大唐西域記の研究』二冊。一九四二―三年、法蔵館刊

著者は従来の研究に慊らずとして、本書撰述の「要は大唐西域記の原義を簡明正確に直解して、特にその地理的関係を考え、以って玄奘の旅行の真相を闡明にしようとする」ことを意図した、諸論攷の後編と併せ千百ページに及ぶ大冊。記述の様式は原文を掲げ、読み下し文を続け、地理的考証を詳説する。読み下しの方法は折に人目を驚かす新解あり、考証における原語考定や位置の比定も、説明不足の故か、飛躍が目立って追随し難い。刊行当初よりとかくの批判があった。

六　『大唐西域記』の研究資料と研究書

『大唐西域記』を読むに当たり、同時資料として彼此参照の要ある最も有用な書は、

『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』十巻

略して『慈恩伝』の一書である。玄奘法師入滅後二十四年、則天武后・垂拱四年（六八八、則ち中宗・嗣聖五年）三月十五日「釈玄悰述」の序あり、巻頭に「沙門慧立本、釈玄悰箋」とするのは、慧立撰述の五巻本伝記を玄悰が整理増補して十巻本とした、の意と概言し得よう［宇都宮清吉：「慈恩伝の成立に就て」『史林』一七ノ四：高田修：『国訳慈恩伝』解題］。この書の前半第五巻までは、法師の西域・インド旅行を歳月・道程を追って記述し、もし『西域記』と参照閲覧するならば、発明する所が多い。後半第六巻より第十巻に至るまでは、主として法師の訳経生活および公事との関わりの文書が中心となっている。ただし、後半は干支の誤りが多く、注意を要する。

本書の伝本には次の如きものがある。

興福寺所蔵延久三年（一〇七一）鈔本

この書が完存、最古のもの。一九六五年三月、東京大学出版会より、築島裕：『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究』訳文篇として全巻を一冊に複製されている（築島裕：同上書、索引篇は一九六六年三月、研究篇は一九六七年三月刊）。

享保四年刊本

京都中野宗左衛門刊本。明蔵の付訓単刊の町版らしい。

京都東方文化研究所刊本 附考異索引　一九三二年刊　一帙四冊

この書は高麗本を第一・二冊に無訓点のまま影印、第三冊に宋・明蔵本および興福寺蔵古鈔本をはじめ諸本を参照した考異を、第四冊に地名・人名・書名・年号その他の「名辞」の五十音順・ABC順二種の索引を収める。今日における最良の刊本。

支那内学院刊本 附玄奘西域行迹図　一九二三年刊　三冊

本書は諸種の資料を参照、その異文を傍注したもので、校勘も比較的行き届き、通読用には最も便利。最近台湾の洋装複製本がある。

なお、以上の他に海彼の常州天寧寺版があるらしいが未見。

『慈恩伝』の翻訳を最初に行なったのは、『西域記』と同じく西欧人

である。

Julien, S.: *Histoire de la Vie de Hiouen-Thsang et de ses Voyages dans l'Inde depuis l'An 629 jusqu'en 645, par Hoei-li et Yen-Thsong: suive de Documents et d'Eclaircissements Geographiques tires de la Relation Originale de Hiouen-Thsang*, 1853, Paris. rep. 1968, London.

本書も名著の誉れ高きものながら、五巻までは全訳、六巻以下は摘訳するのみ。稀覯に属する古典。

Beal, S.: *The Life of Hiuen-Tsiang, by the Shaman Hwui Li*. 1888, London. (Rev. Ed., in 1911).

五巻までの翻訳。『西域記』の訳注に比するに注も少なく、余り参考にならない。

Li Yung-hsi (translated by): *The Life of Hsuan-tsang, the Tripitaka-Master of the Great Tzu En Monastery, compiled by Monk Hui-li, translated under the Auspices of the San Shih Buddhist Institute*. 1959, Peking.

この書も前五巻は全訳、後五巻は詔勅・奉啓・論賛等の文を省略したもの。

高田修訳：『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』『国訳一切経』史伝部十二所収　一九四〇年、大東出版社刊

巻頭の解題も限られた紙幅の中に、能く詳細に問題を指摘説明する。本文の読み下し文は従前の書に比するに格段に正確、脚注また新研究の成果を採り入れることに努力、今日に至るも最良の書。唯、序文や巻六以後の叙述の主体をなす詔勅・表啓・論賛等を含む全体の文章上の調査は、この叢書の性格上当然のことながら、十分には盛りこまれてはいない。

長沢和俊訳：『玄奘法師西域紀行』『東西交渉旅行記全集』第六巻　一九六五年、桃源社刊

『慈恩伝』に平明な現代語訳を与え、読み物風にした書。「但し玄奘の表啓の類はあえて現代語訳せず、読み下し文のままとした」とある。その表啓の類は高田修：『国訳慈恩伝』のそれにやや手を入れたもの。

同時資料であり、かつ『西域記』の「方志」的性格と類を同じくし参考になるものに、

唐・道宣撰：『釈迦方志』二巻　永徽元年（六五〇）撰

道宣は玄奘法師の訳場に綴文の任で参加した一人。『西域記』に基づく書であり、その記事は当然『西域記』を考えるのに役立つものである。なお、智證大師将来の、道宣が夢中に天人の誦経を抄記したと言う『中天竺舎衛国祇園寺図経』二巻（乾封二年成。『大正蔵経』第四巻所収。今図逸す）等も、法師との接触によって成ったものであろう。

この他、『新唐書』二二一、西域伝のインドに関する記事も本書に依った点多く、また玄奘法師のその他の伝記・行状や僧伝等も参考になるものも多いが、それらについてはこの解説の他の所で触れたものもあり、一切省略する。高田修：『国訳慈恩伝』解題を参照されたい。

次下に『西域記』を中心にした周辺的な研究書・要約書・紹介書等のうち、主だったものを挙げる。

十九世紀後半にジュリアンの仏訳『西域記』『慈恩伝』等が公刊せられるころになると、西欧人の東洋学に対する関心も増大し、玄奘の書はなかんずく東洋の古代歴史地理を研究する最良の指針となった。

Cunningham, A.: *The Ancient Geography of India*. Vol. I. *The Buddhist Period, including the Campaigns of Alexander,*

and the Travels of Hwen-Thsang. 1871, London.

本書は、アリアン Arrian, メガステネス Megasthenes, プトレミー Ptolemy 等ギリシア・ローマの古典と共に『西域記』(ジュリアンの書を依用)を基本資料として、インドの地理・考古学に対して大きな貢献をした。

S. Majumdar Sastri: *Cunningham's Ancient Geography of India, with Introduction and Notes.* 1924, Calcutta.

この書は前書にその後の研究成果を補注とした増補版。一九六三年には再版された。近くは、Law, B.C.: *Historical Geography of Ancient India.* 1924, Paris? (Published by Société Asiatique de Paris). においても玄奘の書はその資料中に重要な地位を占めている。本書もその後増補新版が出たらしいが未見。

高桑駒吉:『大唐西域記に示せる東南印度諸国の研究』一九二六年、森江書店刊

本書は『西域記』巻十の東南インド十国について、欧米・インド等刊行の多数の参考書を使用し詳細な研究を行なったもの。耳を傾けるべき説も多々ある。

史書なきインドの古代史研究の分野では、

Smith, V. A.: *The Early History of India, from 600 B.C. to the Muhammadan Conquest, including the Invasion of Alexander the Great.* 1914, Oxford.

本書の中で、玄奘の書を特に紀年の問題に大いに活用し、インド古代史研究の基礎を築いたと言われる。この書は一九二四年に S. M. Edwardes の増補第四版が出され、その利用重視は今日に及んでいる。

中央アジアにおけるスタイン Stein, ペリオ Pelliot らの考古学的調査においても、玄奘の書がその主たる案内書として活用されたことは有名であるが、特に一九三二年以来のアフガニスタンにおけるフランス考古学調査派遣団の報告書の一たる、

Foucher, A.: *La Vieille Route de l'Inde de Bactres a Taxila.* 2 Vols. 1942, 47. (*Mémoire de la Délégation archéologique Française en Afghanistan*, Tome I.)

この書はバクトリアよりタクシラに至るまでの仏跡を研究比定し、古代交通路を求めて行く作業をしたものであるが、それは一に『西域記』を指針として行なわれたものであった。その第一冊は地理的景観と考古学的遺跡にあて、第二冊は当該地方の政治・宗教・芸術上の問題に向けている。

次に、語学の面で『西域記』が起こした波紋の若干を見てみよう。ジュリアンは『西域記』『慈恩伝』の仏訳に当たり、単音節の漢字が結合した音訳漢字から多音節の梵語を還元する方法に苦心すると同時に、さらにその文体、殊に特有の仏教語彙・成語を基盤とした張説の序には大きな配慮を払った。この第一の音訳漢字の研究は、その後の経験をも踏まえて、

Julien, S.: *Méthode pour Déchiffrer et Transcrire les Nom Sanscrits, qui se recontrent dans le Livres Chinois.* 1861, Paris.

この書を出版し、以後の漢字音訳語彙を扱う東洋学研究者、殊に古代漢字音を考える学者に大きな便宜と影響を与え、今日に至るもなお一部に重用されている。この書の方法を受け嗣いで次の書が出た。

Schlegel, G.: *The Secret of the Chinese Method of Transcribing Foreign Sounds.* T'oung-Pao, (Leiden), Series II, Vol. I (1900). 同時に目次をつけた抜刷単行本が出された。

著者は T'oung-Pao (『通報』) の主編者で、オランダの著名な学者

である。この書は対象とする時代・言語共にジュリアンよりもさらに拡大し、広く漢字が外国語音を表記する際の機能を研究したものである。しかし、その基礎とする漢字音の研究が未開拓の時代のものであったから、やがて漢字音研究の専門家からは酷評を受けた〔例えばカールグレン Karlgren の『中国音韻学研究』華訳本五ページ〕が、その直接の目的が漢字の古音研究にあるのではなく、結合した漢字の転写法則探求にあったため、広い範囲の東洋学者には便利な指針の役割りを果たした。このような方法を踏まえて、

Staël-Holstein, A. von : *Kien-ch'ui-fan-tsan* (犍稚梵讃), *Gaṇḍistotragāthā*. 1913, St.-Pétersburg. (*Bibliotheca Buddhica*, XV.)

この書においては、現在梵文が失われて漢字音写と西蔵語訳だけしか残っていないものから、梵語に還元する作業を実施したものであった。さらに、先のシュレーゲル Schlegel の書を酷評した古代漢字音研究の専家からも、

Karlgren, B. : *Prononciation ancienne de Caractères Chinois figurant dans les Transcription Bouddhique*. T'oung-Pao, 1920, pp. 104-21.

この論文が寄せられ、ここにジュリアン以来の方法が古代漢字音研究の面からも、確実な基礎の裏付けがされたのであった。

第二の問題、張説の四六文による序の文章研究では、ベルギーの学者 A. Gueluy は、ジュリアンが施した『西域記』巻頭「張〃序〃」の訳に慊らずとして新訳を試みた〔*A propos d'une Préface*, Museon, Tome XIII, 1894〕が、この二訳に対してさらに新しい検討として、

Schlegel, G. : *La Loi du Parallélisme en Style Chinois, démontrée par la Préface du Si-yü Ki, la Traduction de cette Préface par feu Stanislas Julien, défendue contre la nouvelle Traduction du Père A. Gueluy*. 1896, Leiden

この書が出された。本書は努力した苦心の解説をしてはいるが、一語一句ほとんど総て古典を踏まえた漢語特有の美文たる四六文は、単に字面の解義のみでは処理解明できるものではなく、端無くも本書が当時の西欧研究者のこの面における限界を示すものとなったのは遺憾であった。

『西域記』『慈恩伝』を中心に記述した要約或いは紹介書は、小説風の翻案ものないしは論文を除いた単行書に限れば、この有名なものにも拘らず意外に少ない。

佐伯良謙著：『慈恩大師伝』　一九二五年刊

古くこの書があるとのことであるが未見。

前嶋信次著：『玄奘三蔵——史実西遊記——』　一九五二年、岩波書店刊（岩波新書、青版一〇五）

小冊子に法師の時代・生い立ちから、西域・インド旅行より訳経に至る、ほとんど全生涯を流暢な文章で簡述した書。

St.-Hilaire, J. B. : *Hiouen-Thsang in India*, translated from the French by Laura Ensor. 1952, 1965^2, Calcutta.

著者の *Buddhism in India* と言う書よりの抜粋と言う。その故か、全体三章より成るこの書は小冊子にも拘らず、中国僧のインド旅行の史的概観からその経歴を述べる第一章、『西域記』の成立や記述様式からインド旅行を述べる第二章、当時のインド仏教を述べる第三章等、内容は相当しっかりしたものである。

Thick, Minh Chau : *Hsuan Tsang, the Pilgrim and Scholar*. 1963, published by Vietnam Buddhist Institute, Nha-trang,

Vietnam.

著者は刊行時ナーランダに居た僧とのこと。玄奘の生い立ちより、巡礼者・学者・布教家・論者・訳者・著者・神秘家（密教者）としての法師のそれぞれの働きを述べ、入寂に至るまでを概述する。

金子秀利著：『玄奘三蔵』 一九六七年、人物往来社刊 （『中国人物叢書』第三巻）

平易な文章で玄奘の伝記を紹介した書。仏教に対しても的確な理解と平明な解説を施すよう努力している点に安心感をもてる。

[追記]

『西域記』『慈恩伝』を基礎資料の一として行なったインド仏教に関する新書、

Joshi, L.: *Studies in the Buddhistic Culture of India, during the 7th and 8th Centuries A.D.*, 1967, Delhi.

広範な資料・参考文献を使用した全編十二章・五補論の五百余ページに及ぶ詳細な研究。玄奘渡天時のかの土における時代背景を知る手引きとなろう。

その他、『西域記』『慈恩伝』が果たしたインド・西域の考古学・美術史等への寄与については、訳注者は専門的知識もなく、一方近来我が国でも多くの書が刊行されていることでもあり、ここには省略する。

七　今回の訳注

誰かの手で、今日の学問的要求に応じ得る『大唐西域記』の新しい研究書を出してもらえないかな——という希望は、常々本書を使用する私にとっては長い間の切実なものであった。しかし、長年親しんでいるものだけに、これは大変に面倒な作業であることも同時に理解し、当分の間到底望めないことと観念していた。何故ならば、『大唐西域記』という書物は、分類こそ「地誌」に入れられているものではあるが、その文体は魏・晋以来の仏典に見慣れる四字句を主とするものながら、六朝の四六文の流れに沿う初唐の亜流とも言えるもので、四字句が二句で一組に、その組が二つで一切れになる——その組み合わせは多様である——と言う調子の運びのものであり、その間には助字も少なく、従って文の進行・連接関係も余り明確ではない姿である。それにまして四六に沿うとは言いながら、決して楽しめる表現と言うような美文ではないこともある。語彙はと言えば、仏教特有のものが頻繁に自明のものとして、しかも文体上の制約から不完全な形で出て来るものが多い。さらに題材は、インドの部における本来興趣豊かな仏伝・本生譚の挿入——それさえ甚だ簡略で、今日の一般の読者には説明不足の憾みがある——を除けば、全く単調な景観的叙述の繰り返しで読みづらい、それ故に通読に耐えなかった、との苦情をよく耳にする。しかも最も困難なことは、この書の包含する内容の範囲である。それは歴史・地理・政治・社会・宗教・言語・芸術等、ほとんど七世紀前半のインド・西域に関するあらゆる問題を抱える広範なものであり——そこに本書の不朽の価値がある——、それ故にこそその関連する諸々の事項を説き尽くすことは、一人にしてはほとんど不可能に近いことだからである。

この書の新しい研究書の成立は、従って一人の手によってなされ得べき安易なものではなく、必ずや諸面の専門家が、それぞれの知識を持ち寄り傾けあって始めて今日の需要に応じ得るものとなる、とかね

がね考えていたし、今もそのように私は信じている。『大唐西域記』の外国語を表わす漢字については久しい間考えもし、小論も書いて来たものだけに、専門の諸家と共同作業で何時の日にかそのような新しい書を編したいと人にも話し、自らも多少の計画をしたこともあった。そのような考えを持っているものが、今回計らずも単独で訳注をしたわけであるだけに、まことに内心忸怩たるものがあるのは当然である。

何時のことであったか久しい以前、名大での会議終了後、研究室に戻る階段を昇りながら、突然に「平凡社の『中国古典文学全集』の新版に『大唐西域記』を」との入矢教授の短い言葉を受けたのは、恐らく教授が、以前同社の『東洋文庫』刊行計画時に「『大唐西域記』の語学的な注釈ならしてみたいものですね」と口に出した私の言葉を記憶されてのことだったろう。その教授の言葉に、咄嗟には返答できなかったことを覚えている。思い浮かぶ旧版の全集の書名に並べて、本書の如き性質の書物が何所に入り得る余地があるのか。唐土の書とは言いながら、事は西域・インドに関する地誌である。『水滸』『紅楼夢』等、狭義の文学を主とする「全集」には入り得ない、と言う思いからであった。やがて忘れたころ、『中国古典文学大系』と名を唱った書目が送られて来た。旧版に比して量も幅も広められ、『水経注』『洛陽伽藍記』のような史部地理類の書名も見える。しかし、同じ地理類の書とは言え、『水経注』には范文瀾:『水経注写景文鈔』(一九二九年、北京刊)と言う小冊の名文集が作られているほど、その文章には定評がある。『洛陽伽藍記』にしても寺塔の記事ながら、読者をして書を措かざらしむる底の美文の誉れ高き興趣豊かな書物である。しかも、共に漢土の記事が主である。それに比して『大唐西域記』はどうであろうか。舞台は中国のことではさらになく、話の筋が面白いとの言葉を耳にしたこともなし、文章の見事さを賞め称える声も聞いたこともない。文学専攻の人で本書を通読したとの話も一向聞き及ばぬ。躊躇は増すばかりであった。平凡社から人の来訪を受けた時も、この点を繰り返し説明、文学を主とする枚数の限られた『大系』中の一書としては至難であることを強調し、然るべき人あらば訳者の変更をとも話した。

しかし、真実当惑していると同時に、未練と誘惑もあった。総合的な研究書となれば大冊・高価・小部数の悪条件で誰の手にもと言うわけには行かぬのが今日の一般情勢、この期を逃せばこの種の書は近い将来世に出される期待は余りありそうもない。史学の専門家ではないものながら、個人の興味を中心としてではあるが、多少の準備があったこと、等々の理由からである。何度かの折衝で、ついにこの『大系』中における本書の水と油とのような特異な関係と性質――私にはそう思える――を例の如く強調した上、翻訳を主とする『大系』ではあろうが、本書は単なる翻訳では、今日的な需要にも余り応じ得ず、意味も理解し難い不十分な書となろうし、読者層も恐らく『大系』中の他の巻とは相当異なろうから、この書に限っては注釈に重点を置くことなど二、三の注文をつけ、ついに実行に踏み切ったのであった。しかし、一人の手によらば自ら偏向は避け得ず、私の興味の中心である「言葉」に傾くであろうが、限られた紙幅の中ででき得べくんば堀謙徳:『解説西域記』の補注的存在たり得るほどの幅を持ち得るならば幸いである、と言うのが当初の希望でもあり、方針でもあった。

『大唐西域記』に深い関係をもったそもそもの初めは、二十五巻本『一切経音義』(六六一―六六三成)の著者の玄応が、玄奘法師の訳場に列した「字学の大徳」であり、道宣の『続高僧伝』三〇に「字学の富を以て皂素(僧俗)の推す所、経音に通達して甚だ科拠あり」と称されてい

る人であったからである。『玄応音義』を調べているものは、『西域記』も同次元に扱ってよかろうと考えてのことであった。『玄応音義』の漢字が示す音韻体系は『切韻』(六〇一撰)のそれとほとんど変わりがない[周法高:「玄応反切考」『集刊』二〇本上、一九四八年刊]。ところが仏典の音義書中に見える梵語やその他の言語を表わす漢字に付された反切は、漢語中の反切とは一風変わった特別のものが多く、漢字音を考える反切系聯法を行なう場合等には通常除外されるのが例である。もし漢語中の反切のみならず、音義や『大唐西域記』のような諸種の漢籍に見えながら、一般に除外される音訳漢字およびその反切をも、適当な方法により同一の場に引き出し使用し得るならば、事態は従前よりもよほど明瞭となり便利を得よう。適当な方法とは、音訳漢字の素性を十分に洗い出し検討することである。辞典の標準的な語形・語音に直ちに対応させて漢字音を考えようとする方法は手軽ではあろうが、もはや今日では不十分である。音訳漢字の時代・場所等の環境を十分に吟味して、それが基づいたであろう原語を可能な限り検索し、最も妥当な語形・音形を見出だした後に、始めて両者の対比を行なうという方法を考えねばなるまい。これは甚だ手数のかかる困難な作業ではあろうが、少しく目を拡げて見渡すならば、今世紀に入ってからの中央アジア・インド等、塞外のその面の研究も漢語の研究と同様に著しく進歩しているので、このような作業に役立つ大小の著作は非常に多くなっていることを知り、従ってそこから諸種の便宜を得ることができるわけである。このようにするならば、時には漢字表記の方から逆に原語の語形・語音が特殊なものであったことを指摘できる場合もあり、相互に利が大きいことは既に諸家の論攷で実証済みのことである。これが年来にわたる私の興味の一つであり、かくして西域はもとより、インドにも足を踏み入れたこともないものが、専らその面を説くこの『西域記』をはじめ諸種の遊歴伝に親しむ「机上の旅行家」となったのであった。

訳文を作るに当たり、殊更に生硬なるを厭わず、可能な限り原文に沿って直訳に近くすることに努めた。場所によっては原文に還元することも容易なほどに極端にした。その理由の一つは、本書の特性を考えてのことである。この種の書を見ようとする人は、単に読み物として手にすることは少なく、何らかの参考として見る場合や、原文と対照して読むことも多かろうと思惟してのことである。理由の第二は、本書は経典ではないが、「讃」にも見える玄奘の翻訳方針をそのまま当てて行なうべき底の書であると考えてのことである。

注解中の地名・人名等の漢字音表記は、ややずれはあるが、世間に最も普及しているカールグレン氏の再構成した中古音におおむね拠り、便宜簡略化を行なった(玄奘の漢字音は本書等から逆に考定せねばならない)。簡略化の最たるものは舌音の二等(これに属する字は『西域記』の音訳字中に、吒・磔・侘・絮・拏・痆・擇・荼の八字のみ)と三等(これも多くはない)の字に特別の記号をつけず、共に一・四等と同じくt・d等とした場合が多いことである。理由の一つは、この二・三等ともほとんど例外なく梵語のソリ舌音(Cerebrals)に対応し、混同の虞れは余りないからである[水谷:「梵語の"ソリ舌"母音を表わす漢字」『言語研究』三七(一九六〇)所収参照]。なお、去声漢字音は梵語の長音に対応する傾向顕著であるため、時によっては逆に漢字音から梵語を推定したこともある(この一例を挙げれば、布刺拏 *puo°-lat。-°na*: Skt. *pūrṇa*, not *purāṇa*. 荻原:『梵和』七九五ページ右に「*purāṇa*……布刺拏」と『玄応音義』より掲出とする語が見えるが、これは『玄応音義』二四の『俱舎論』一七に見える「布刺拏……満と訳す……」即ち *pūrṇa* を誤り掲入したもので

ある。僧訶補羅 *song-ɣa-pʻuo-la*: Skt. *siṁha-pura* を参照）〔水谷:「梵語音を表わす漢字における声調の機能」『名古屋大学文学部二十周年記念論集』(一九六八) 所収参照〕。

さて、以上のような大まかな方針で作業を始め、漸くにして第一巻の訳稿が終了し第二巻にかかっているころ、編集担当の方から重大な通知を受けた。この第一巻の分量の割合で行くならば、全十二巻の訳稿は尨大な分量となり、他書との比較上如何にしても困る、もっと縮小されたいとのことであった。やむなく、第三巻より次第に大鉈を振るうことになったが、これがため諸種の面に不様で不均衡かつ不十分な注解の掲出となった。また、ルビに関して、訳者としては原語を表わす漢字にルビをふることは無意味であると強硬に主張したが、平凡社側では『大系』の方針として読者への約束を守ろうとし、その妥協の結果ついに凡例に見る如き折衷方式をとらざるを得なくなった。以上二点については、まことに不本意で読者諸氏には申し訳なく遺憾に思っている。

凡そ、本書のような書物に対する訳注の典型たるものは、Minorsky, V.: *Hudūd al-ʻĀlam*, "*The Regions of the World*". 1937, London の如きものなるべし、と私はかねて考えている。その訳文についての定評あるは言うまでもなかろうが、その注解は簡明の中に引拠の正確はもちろん、視野の広博、射程の遠大、しかも依って進むべき的確な道程を示すこと懇切に、説いて余さざる感あるは、もとより訳注者の学識の非凡に由来することではあろうが、地名・人名・書名・事項等の諸種を含む索引に至るまで具備するは、ひとえに書を著わすものの良心的配慮の現われであり、この種の書の以て範となすに足るものであろう。不朽の名著『大唐西域記』を課せられたる当初、竊にその流れを歪がんことを志した。訳し了えて顧みるに、その及ばざること遠きは、まさに人の及ばざることに因るを悟り、慚愧に耐えない。

未曽有の困難な時期に旧痾に悩みながらも、どうにか訳了し得たのは、多くの方々の理解と援助があったからである。倉石・入矢の両先生を初めとする監修の諸先生には、その恩顧に報いるには余りにも粗笨な内容になったことを申し訳なく思っている。山田英雄氏（名大中文助手）には序と讃の整文を、塩見邦彦氏（名大大学院、中文専攻）には筆耕を、宮治昭氏（名大大学院、仏教美術専攻）には写真の整備をお願いした。研究繁忙中終始快く援助されたことに深謝している。山本敬太郎氏は稀世の珍書「古活字版大唐西域記」入手を逸速く通知、写真までも贈られたことは時期が時期だけに氏の寄せられた好意は忘れることができない。

見知らぬ国の事どもの記事ばかりのこととて、思わぬ大失策をしているやもしれぬ。訳者の無知から、折角の理解と援助を寄せられた方方の好意を無にする結果にならないことを、唯々祈るばかりである。

一九七一年八月六日

水谷真成

主要参考文献一覧

日本の書籍と雑誌論文

平　凡　社　アジア歴史事典、一九五九―六二、平凡社
A・フシェ著 日仏会館編（フシェ：註解）　アフガニスタンに於ける玄奘三蔵旅程の註解（『仏教美術研究』）、一九二八、大雄閣
水野清一他　アフガニスタンの古代美術、一九六四、日本経済新聞社
中村　元　インド古代史、上・下、一九六三、一九六六、春秋社
金倉圓照　印度古代精神史、一九三九、岩波書店
大谷光瑞　印度地誌、一九四三、有光社
宇井伯寿　印度哲学研究 IV、一九六四、岩波書店
高田　修　印度・南海の仏教美術、一九四三、創藝社
尾高鮮之助　印度日記、一九三九、刀江書院
K・M・カパディア著 山折哲雄訳　インドの婚姻と家族、一九六九、未来社
樋口隆康　インドの仏跡、一九六八、朝日新聞社
高田　修　インドの仏塔と舎利安置法（『仏教芸術』一一、『仏教美術史論考』）、一九五一、中央公論美術出版社
逸見梅栄・高田　修共著　印度美術史、一九四四、創藝社
赤沼智善（赤沼：辞典）　印度仏教固有名詞辞典、一九三一、破塵閣
ターラナータ著 寺本婉雅訳　印度仏教史、一九二八、丙午出版社
高田　修　印度仏教美術研究の成果（『仏教芸術』一、六〇）、一九四八、一九五〇、毎日新聞社
逸見梅栄　印度仏教美術考・建築篇、一九二八、甲子社書房
静谷正雄　インド仏教碑銘目録――グプタ時代以前の仏教碑銘――一九六五、平安学院
高楠順次郎　印度仏跡実写、一九二七、巧藝社
天沼俊一　印度仏塔巡礼記、上、一九四四、秋田屋
岩本　裕　印度文化史の課題（歴史新書、四）、一九四七、雄山閣
天沼俊一　印度旅行記、一九三一、奈良・飛鳥園
辻　直四郎編　ヴェーダ・アヴェスター（『世界古典文学全集』三）、一九六七、筑摩書房
羽溪了諦　于闐国の仏教（『西域之仏教』）、一九一四、法林館
寺本婉雅　于闐国仏教史の研究（『于闐国史』）、一九三一、丁字屋書店
村川堅太郎訳（村川：案内記）　エリュトゥラー海案内記、一九四六、生活社
竜村　謙　大谷探検隊将来の古代錦綾類（『西域文化研究』六）、一九六三、法蔵館
荻原博士記念会　荻原雲来文集、一九三八、同記念会
堀　謙徳（堀：解説）　解説西域記、一九一二、前川文栄閣
山本智教　犍陀羅考古学旅行記（『仏教研究』四）、一九四〇、東京仏教研究会
本田義英　観音古名考（『仏典の内相と外相』）、一九三四、弘文堂
本田義英　観音訳語考（『仏典の内相と外相』）、一九三四、弘文堂
荻原雲来（荻原：梵和）　漢訳対照梵和大辞典、一九四〇、第六冊まで同刊行会、第七冊より鈴木学術財団、第十三冊まで刊行
水谷真成　暁匣両声母の対音（『東洋学報』四〇）、一九五八、東洋学

術協会
白鳥庫吉　罽賓国考（『西域史研究』上）、一九四一、岩波書店
小杉一雄　行像――ベゼクリクの行像壁画？（『仏教芸術』一九）、一九五三、毎日新聞社
高田　修編（高田：国訳伝）　国訳慈恩伝（『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』）一九四〇、大東出版社
樋口隆康　コーサームビー国都考（『東西学術研究所論叢』三六）一九六〇、関西大学
佐藤　長　古代チベット史研究、上、京都大学東洋史研究会
V.A. Shyshkin著　加藤九祚訳　古代文化の宝蔵――アフラシャブ（『西域の秘宝を求めて』）、一九六九、新時代社
ボリス・ジューコフ著　加藤九祚訳　湖底に消えた都、一九六四、角川書店
香山陽平　砂漠と草原の遺宝、一九六三、角川書店
干潟龍祥　ジャータカ概観、一九六一、鈴木学術財団
大谷探検隊　シルクロード探検、一九六六、白水社
白鳥庫吉　西域史上の新研究（『西域史研究』上）、一九四一、岩波書店
ヤクボーフスキー著　加藤九祚訳　西域の秘宝を求めて、一九六九、新時代社
羽溪了諦　西域之仏教、一九一四、法林館
平　凡　社　世界考古学大系、八、九、一九六一、一九六二、平凡社
T.E. Gordon著　田中一呂訳　世界の屋根、一九四三、生活社
平　凡　社　世界美術全集、一一、一九五三、平凡社
S・Pトルストフ著　大串純夫・梶川温彦訳　ソヴェト領中央アジアの古代壁画――トプラク・カラ発掘について（『仏教芸術』二〇）、一九五三、毎日新聞社
白鳥庫吉　粟特国考（『西域史研究』下）、一九四四、岩波書店
白鳥庫吉　大宛国考（『西域史研究』上）、一九四一、岩波書店
桑原隲蔵　大宛国の貳山城に就いて（『東西交通史論叢』）、一九三三、弘文堂
宮本正尊　大乗と小乗、一九四四、第一書房
京都帝国大学文科大学（考異）　大唐西域記考異索引、一九一一、大日本図書株式会社
高桑駒吉　大唐西域記に記せる東南印度諸国の研究、一九二六、森江書店
足立喜六（足立：研究）　大唐西域記の研究、一九四二―四三、法蔵館
クラヴィーホ著　山田信夫訳　チムール帝国紀行、一九六七、桃源社
水野清一編　チャカラク・テペ――北部アフガニスタンにおける城塞遺跡の発掘、一九六四―六七―七〇、（『京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査報告』五）、京都大学
A・スタイン著　沢崎順之助訳　中央アジア踏査記、一九六六、白水社
宇井伯寿　陳那著作の研究、一九五八、岩波書店
杉本直次郎　天竺二名中国伝来経路考（『東南アジア史研究』一）、一九五六、日本学術振興会
水谷真成　唐代における中国語語頭鼻音の Denasalization 進行過程（『東洋学報』三九）、一九五七、東洋学術協会
榎　一雄　唐代の拂菻国に関する一問題（『北亜細亜学報』二）、一九四三、亜細亜研究所

水野清一編 ドゥルマン・テペとラルマ——アフガニスタンにおける仏教遺跡の調査、一九六三—六五—六八（『京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査報告』三）、京都大学
小野川秀美 突厥碑文訳註（『満蒙史論叢』四）、一九四三、日満文化協会
水野弘元（南伝索引） 南伝大蔵経索引、第一部上、一九五九、第一部下、一九六〇、第二部、一九六一、日本学術振興会
竜村平蔵 錦とボロの話、一九六七、学生社
樋口隆康（樋口：研究） バクトラよりタキシラまで——インド古代交通路の研究——（『仏教芸術』一五）、一九五二、毎日新聞社
佐藤良純 パータリプトラのイメージ（『都市形態の研究——インドにおける文化変化と都市のかたち』）（SD、一九六九年二月、臨時増刊号）
丸山次雄 パータリプトラの都市形態
B. Rowland 著 笹口 玲訳 ハッダ（『アフガニスタンの古代美術』）、一九六四、日本経済新聞社
J. Hackin 著 吉川逸治訳 ハッダの仏教彫刻（『美術研究』一五）、一九三三、美術研究所
水野清一（水野：仏教遺跡） ヒンドゥ・クシュ南北の仏教遺跡（『文明の十字路』）、一九六二、平凡社
小野玄妙 仏教神話（『仏教思想大系』一四）、一九三三、大東出版社
望月信亨（望月：辞典） 仏教大辞典、一九三一—三六、仏教大辞典発行所
小野玄妙 仏教美術、一九二六、甲子社
岩波書店 仏教美術——印度彫刻——（岩波写真文庫一四二）、一九五五、岩波書店
小野玄妙 仏教美術概論、一九一七、丙午出版社
小野玄妙 仏教美術講話、一九二九、大東出版社
高田 修 仏教美術史論考、一九六九、中央公論美術出版社
長谷川伝次郎 仏蹟、一九四二、目黒書店
岩波書店 仏像——イコノグラフィー——（岩波写真文庫四二）、一九五一、岩波書店
高田 修 仏像の起源に就いて（『仏教芸術』七）、一九五〇、毎日新聞社
岩波書店 仏陀の生涯（岩波写真文庫一八一）、一九五六、岩波書店
平等通昭訳 仏陀の生涯（仏所行讃）（冨山房百科文庫九一）、一九三九、冨山房
白鳥庫吉 拂菻問題の新解釈（『西域史研究』下、『白鳥庫吉全集』）
松平千秋訳 ヘロドトス、一九六七、筑摩書房
中野義照 法制思想（『東洋思潮』）、一九三四、岩波書店
本田義英 法華経論、一九四四、弘文堂
荻原雲来 梵漢対訳仏教辞典、一九二七、丙午出版社
山田龍城 梵語仏典の諸文献、一九五九、平楽寺書店
干潟龍祥 本生経類の思想史的研究（『東洋文庫論叢』三五）、一九五五、東洋文庫
榊亮三郎（*Mvy.*） 翻訳名義大集 *Mahā-Vyutpatti*, 一九一六、京都
田辺繁子訳 マヌの法典（岩波文庫）、一九五三、岩波書店
平松友嗣訳 マハー・ヴァンサ（大史）（冨山房百科文庫一一四）、一九四〇、冨山房
水野清一編 メハサンダ——パキスタンにおける仏教寺院の調査、一九六二—六七—六九、（『京大イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査報告』四）、一九六九、京都大学

秀村欣二　ローマ帝国とインド（『古代史講座』一三）、一九六六、学生社

中国の書籍

張星烺　中西交通資料滙篇（全六冊）、一九三〇、北京
姚薇元　北朝胡姓考、一九五八、北京
羅常培　唐五代西北方音、一九三三、北京
黄文弼　塔里木盆地考古記、一九五八、北京
馮承鈞訳　大孔雀経薬叉名録輿地考、一九三三、上海
馮承鈞訳　宋雲行紀箋注（『西域南海史地考証訳叢』六）、一九五六、北京
藤田豊八（慧超伝箋釈）慧超往五天竺国伝箋釈、一九三一、北京
王　忠　新唐書吐蕃伝箋證、一九五八
黄文弼　羅布淖爾考古記、一九四八、北京
（欽定）西域同文志、三冊、研究篇一冊、一九六一―六四、東洋文庫
岑仲勉　西突厥史料補闕及考證、一九五八、北京
周振鶴　青海、一九三八、長沙

（漢文諸史籍および漢訳仏典・僧伝・遊歴伝・音義書等の仏教書の類はすべてここには省略した）

雑誌と地図

東洋学報　東洋学術協会（東洋文庫内）
美術研究　美術研究所
仏教芸術　仏教芸術学会（毎日新聞社刊）
仏教研究　東京仏教学会
新修支那省別全誌、八、一九四四、東西同文会
中国地図冊、一九六六、北京

欧米の書籍（雑誌論文を除く）

J. Markwart	*A Catalogue*	*A Catalogue of the Provincial Capitals of Ērānshahr*, 1931, Rome
R. L. Turner	*C. D.*	*A Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages*, 1966, Oxford
G. Watt		*A Dictionary of the Economic Products of India.* 6 vols., 1889-93, London
I. Gershevitch	*A Gram. of Mani. Sogdian*	*A Grammar of Manichean Sogdian*, 1954, Oxford
A. Ghosh		*A Guide to Nālandā*, 1939, 1946², Delhi
N. B. Majumdar		*A Guide to Sārnāth*, 1937, Delhi
J. Marshall		*A Guide to Taxila*, 1960¹, Cambridge
D. Faccena	*A Guide*	*A Guide to the Excavation in Swat (Pakistan) 1956-62*, 1964, Rome
G. Yazdani		*Ajanta.* 4 vols., 1930-55, Oxford Univ. Pr.
Sachau		*Alberuni's India.* 2 vols., 1910, London
T. T. Rice	*Ancient Arts*	*Ancient Arts of Central Asia*, 1965, London
A. Cunningham	*A. G. I.*	*Ancient Geography of India.* Rev. by Majumdar, 1924, Calcutta
McCrindle	*Ptolemy*	*Ancient India as described by Ptolemy*, 1927, Calcutta
江　実		*An Eastern Tibetan Dictionary*, 1954, 岡山
G. Jarring		*An Eastern Turki-English Dialect Dictionary*, 1964, Lund
G. Morgenstierne		*An Etymological Vocabulary of Pashto*, 1927, Oslo
L. D. Barnett		*Antiquities of India*, 1913, London
D. R. Sahni		*Archaeological Remains and Excavations at Bairāt*, 1937, Jaipur States
Government of India		*Arcaeological Remains, Monuments and Museums*, 1964, New Delhi
A. L. Mongait	*Archaeology*	*Archaeology in the U. S. S. R.* (Pelican Books), 1961, Harmondsworth
H. H. Wilson		*Ariana Antiqua, a descriptive Account of the Antiquities and Coins of Afghanistan*, 1841, London
V. Smith		*Asoka*, 1909, London
R. K. Mookerji		*Asoka*, 1962³, Delhi

M. A. Mehendale		*Aśokan Inscriptions in India, a Linguistic Study, together with an exhaustive Bibliography,* 1948, Bombay
A. C. Woolner		*Aśoka, Text and Glossary,* 1924, Oxford
B. Kakati		*Assamese, its Formation and Development,* 1941, Gauhati
H. Humbach		*Baktrische Sprachdenkmäler.* 2 Bds., 1966-67, Wiesbaden
A. F. C. Read		*Balti Grammar,* 1934, London
H. Lüders		*Bruchstücke der Kalpanāmaṇḍitikā des Kumāralāta,* 1926, Leipzig
F. Edgerton	*B. H. S. D*	*Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary,* 1953, Yale Univ. Pr.
S. Dutt		*Buddhist Monks and Monasteries of India,* 1962, London
E. J. Rapson	*C. H. I.* Ind. Ed.	*Cambridge History of India.* Vol. 1 Ancient India, Ind. Ed. 1968, New Delhi
D. R. Sahni and J. Ph. Vogel		*Catalogue of the Museum of Archaeology at Sarnath,* 1914, Calcutta
W. Tomaschek		*Centralasiatische Studien.* 1. Sogdiana, 1877, Wien
M. Wheeler		*Charsada. A Metropolis of the North-West Frontier, being a Report of the Excavation of 1958,* 1962, Oxford
B. N. Puri		*Cities of Ancient India,* 1966, Delhi
M. Wheeler		*Civilization of the Indus Valley and beyond,* 1966, London
J. Dowson		*Classical Dictionary of Hindu Mythology,* 1961^{10}, London
S. Sen		*Comparative Grammar of Middle Indo-Aryan,* 1951, Calcutta
W. Smith		*Dictionary of Greeks and Roman Geography.* 2 vols., 1873, London
E. Chavannes	*Documents*	*Documents sur les T'ou-Kiue (Turcs) occidentaux,* 1903, St. Petersburg
N. N. Ghosh		*Early History of Kauśambī,* 1935, Allahabad
J. Markwart	*Ērānšahr*	*Ērānšahr, nach der Geographie des Ps. Moses Xorenac'i,* 1901, Berlin
R. Gauthiot et E. Benveniste		*Essai de Grammaire Sogdienne,* 1914-29, Paris
J. A. Baines		*Ethnography, Castes and Tribes,* 1912, Strassburg
G. R. Sharma		*Excavation at Kauśāmbī,* 1960, Allahabad
O. Prakash		*Food and Drinks in Ancient India,* 1961, Delhi
J. Hackin		*Formulaire Sanscrit-Tibetain du Xe Siècle,* 1924, Paris
H. Ingholt		*Gandharan Art in Pakistan,* 1957, New York

B. C. Law		*Geographical Essays*, I, 1937, London
Ptolemy	*Geog.*	*Geography*
Strabo	*Geog.*	*Geography*
R. Pischel	*Pkt. Gr.*	*Grammatik der Prakrit-Sprachen*, 1900, Strassburg
Murray	*Handbook*	*Handbook for Travellers in India, Pakistan, Burma and Ceylon*, 1965^{20}, London
E. J. Eitel	*Handbook*	*Handbook of Chinese Buddhism*. Rev. by Takakuwa, 1904, Tokyo
R. K. Mookerji		*Harsha*, 1926, Oxford, 1965^{3}, Delhi
B. Walker		*Hindu World, An Encyclopedic Survey of Hinduism*. 2 vols., 1968, London
S. Julien		*Histoire de la Vie de Hiouen-Thsang et de ses Voyages dans l'Ind depuis l'An 629 jusqu'en 645, par Hoei-li et Yen-Thsong; suive de Documents et d'Eclaircissements Geographiques tires de la Relation Originale de Hiouen-Thsang*, 1853, Paris
B. C. Law	*H. G. A. I.*	*Historical Geography of Ancient India*, 1954, Calcutta and Paris
G. V. Tagare		*Historical Grammar of Apabhraṁśa*, 1948, Poona
M. A. Mehendale	*Hist. Gr. of Insc. Pkt.*	*Historical Grammar of Inscriptional Prakrits*, 1948, Poona
Arrian	*Anab.*	*History of Alexander and Indica*
R. N. Frye		*History of Buchara*, 1954, Cambridge, Mass.
J. A. Dabbs		*History of the Discovery and Exploration of Chinese Turkestan*, 1963, Hague
J. Fergusson	*Hist. of Ind. and East. Arch.*	*History of Indian and Eastern Architecture*, Rev. Ed. 1910, London
S. Tripathi		*History of Kanauj*, 1964^{2}, Delhi
V. Pathak		*History of Kosala*, 1963, Delhi
D. Wright		*History of Nepal*, 1877
Yule and Burnell	*Hobson-Jobson*	*Hobson-Jobson, A Glossary of Colloquial Anglo-Indian Words and Phrases, and of kindred Terms, Etymological, Historical, Geographical and Discursive*, 1903, London
V. Minorsky	*Ḥ.-'Ā*	*Ḥudūd al-'Ālam, "The Regions of the World"*, 1937, London
P. C. Bagchi		*India and Central Asia*, 1955, Calcutta
V. S. Agrawala		*India as known to Pāṇini*, 1963^{2}, Varanasi
E. J. Rapson		*Indian Coins*, 1897, Strassburg
G. Bühler		*Indische Palaeographie*, 1896, Strassburg

G. Morgenstierne		*Indo-Iranian Frontier Languages.* Vol. II, 1938, Oslo
L H Gray	*Indo-Iranian Phonology*	*Indo-Iranian Phonology, with special Reference to the Middle and New Indo-Iranian Languages*, 1902, Columbia Univ. Pr
A. Stein		*Innermost Asia.* 4 vols., 1928, Oxford
E. Hultzsch		*Inscriptions of Aśoka (Corpus Inscriptionum Indicarum.* Vol. I), 1925, Oxford
H. G. Rawlinson		*Intercourse between India and the Western World*, 1926, Cambridge
M. A. Stein		*Kalhana's Rājataraṅgiṇī, A Chronicle of the Kings of Kashmīr.* 2 vols., 1900, Westminster
G. J. Ramstead	*Kalmück. Wörterb.*	*Kalmückisches Wörterbuch*, 1935, Helsinki
A. M. Boyer, E. J. Rapson, E. Senart and P. S. Noble		*Kharoṣṭhī Inscriptions, Discovered by Sir Aurel Stein in Chinese Turkestan*, 1920-29, Oxford Univ. Pr.
S. Konow		*Kharoṣṭhī Inscriptions, with the Exceptions of those of Asoka (Corp. Inscr. Ind.* Vol. II, Pt. I), 1929, Calcutta
J. Barthoux		*Les Fouilles de Haḍḍa I*, 1930-33, Paris
A. Cunningham		*Mahābodhi, or the Great Buddhist Temple at Buddhagayā*, 1892, London
N. Ahmed	*Mahasthan*	*Mahasthan. A Preliminary Report on the Recent Archaeological Excavations at Mahasthangarh*, 1964, Karachi
H. Yule and H. Cordier		*Marco Polo*, Vol. I, II, 1903, London, Vol. III, 1920, London
H. Sköld		*Materialen zu den Iranischen Pamirsprachen*, 1936, Lund
E. Bretschneider	*Med. Res*	*Mediaeval Researches from Eastern Asiastic Sources.* 2 vols., 1910, London
C. Brockelmann		*Mitteltürkischer Wortschatz*, 1928, Budapest
S. Julien	*Mém.*	*Mémoires sur les contrées occidentales, traduits du Sanscrit en Chinois, en l'An 648, par Hioun-Thsang, et du Chinois en Français*, 1857-58, Paris
A. Führer		*Monumental Antiquities and Inscriptions in the North-Western Provinces and Oudh*, 1891, Allahabad
Pliny	*N. H.*	*Natural History*『博物誌』
L. Petech		*Northern India according to the Shui-Ching-Chu*, 1950, Rome
R. G. Kent	*Old Pers. Gram.*	*Old Persian Grammar, Texts and Lexicon*, 1950, New Haven
A. Stein		*On Alexander's Track to the Indus*, 1929, London

A. Stein		*On Ancient Central Asian Tracks*, 1933, London
G. A. Grierson		*On the Modern Indo-Aryan Vernaculars Reprinted from the Indian Antiquary*, 1931, Bombay
T. Watters	*On Y. Ch.*	*On Yuan Chwang's Travels in India, 629-645 A. D.*. 2 vols., 1904-05, London
		Oxford Classical Dictionary, 1949, Oxford
W. Lentz		*Pamir-Dialekte*, vol. I. *Materialien zur Kenntnis der Schugni-Gruppe*, 1933, Göttingen
A. L. Basham (Ed. by)		*Papers on the Date of Kaniṣka*, 1968, Leiden
H. Hübschmann		*Persische Studien*, 1895, Strassburg
W. S. Allen		*Phonetics in Ancient India*, 1953, Oxford
S. Konow	*P. S. K.*	*Primer of Khotanese Saka*, 1949, Oslo
McCrindle		*Ptolemy's Ancient India*, Majumdar's Ed., 1927, Calcutta
A. H. Dani		*Pushkalavathi, the Lotus City*, 1963, Peshawar
G. Morgenstierne		*Report on a linguistic Mission to Afghanistan*, 1926, Norway
G. Morgenstierne		*Report on a linguistic Mission to North-Western India*, 1932, Norway
S. Konow		*Saka Studies*, 1932, Oslo
M. Monier-Williams	*Skt.-Eng. Dict.*	*Sanskrit-English Dictionary*, 1899, Oxford
A. Stein		*Serindia*. 5 vols., 1921, Oxford
A. H. Dani		*Shahbaz Garhi* (Univ. of Peshawar, Archaeological Guide Series), 1964, Peshawar
V. Minorsky		*Sharaf al-Zamān Tāhir Marvazī on China, the Turks and India*, 1942, London
B. Laufer		*Sino-Iranica*, 1919, Chicago
S. Beal	*Records*	*Si-yu-ki, Buddhist Records of the Western World*. 2 vols., 1884, London
V. Upadhyay		*Socio-religious Condition of North India (700—1200 A. D.)*, 1964, Varanasi
B. C. Law		*Some Ksatriya Tribes*, 1924, Calcutta
J. Joshi		*Studies in the Buddhistic Culture of India, during the 7th and 8th Centuries A. D.*, 1967, Calcutta
D. C. Sircar		*Studies in the Geography of Ancient and Medieval India*, 1960, Delhi
J. Marshall		*Taxila*, 3 vols., 1951, Cambridge
A. Foucher		*The Beginings of Buddhist Art*, 1917, London and Paris
G. Merzbacher		*The Central Tien-shan Mountains*, 1905, London

P. H. L. Eggermont *The Chronology of the Reign of Asoka Mouriya*, 1956, Leiden
R. C. Majumdar *The Classical Accounts of India*, 1960, Calcutta
G. Watt *The Commercial Products of India*, 1908, rep. 1966, London
E. Balfour *The Cyclopaedia of India and of Eastern and Southern Asia*, 1885[3], rep. 1968, London
B. P. Sinha *The Decline of the Kingdom of Magadha*, 1954, Patna
V. A. Smith *E. H. I.* *The Eary History of India from 600 B. C. to the Muhamadan Conquest*, 1924[4], Oxford
G. Yazdani (Ed. by) *The Eary History of the Deccan*, 1960, Oxford Univ. Pr.
N. L. Dey *The Geographical Dictionary of Ancient and Medieval India*, 1927[2], London
S. M. Ali *The Geography of the Purāṇas*, 1966, New Delhi
J. N. Samaddar *The Glories of Magadha*, 1922, Patna
W. W. Tarn *The Greeks in Bactria and India*, 1951[2], Cambridge
E. B. Cowell and F. W. Thomas (Transl. by) *The Harṣa-Carita of Bāṇa*, 1897, London, 1961[2], Delhi
P. V. Kane *The Harṣacarita of Bāṇabhaṭṭa*, 1965[2], Delhi
U. Thakur *The Hūṇas in India*, 1967, Varanasi
A. K. Narain *The Indo-Greeks*, 1957, Oxford
T. Burrow *The Language of the Kharoṣṭhī Documents*, 1937, Cambridge
S. Le Stange *The Lands* *The Lands of the Eastern Caliphate*, 1930[2], Cambridge
W. W. Rockhill *The Life of the Buddha* *The Life of the Buddha and the Early History of his Order*, 1884, London
G. A. Grierson *The Linguistic Survey of India*. 11 vols., 1903-28, Calcutta
J. Griffiths *The Paintings in the Buddhist Cave-Temples of Ajantā*. 2 vols., 1896-97, London
T. W. Rys Davids and W. Stede *P. T. S. D.* *The Pali Text Society's Pali-English Dictionary*, 1925, London
H. Raychaudhuri *P. H. A. I.* *The Political History of Ancient India*, 1953[6], Calcutta
H. A. Giles *The Travels of Fa-hsien*, 1923, Cambridge
R. C. Majumdar and A. S. Altekar *The Vākātaka Gupta Age*, 1967, Delhi
A. L. Basham *The Wonder that was India*, 1967[3], London
F. W. Thomas *T. L. T. D.* *Tibetan Literary Texts and Documents concerning Chinese Turkestan*. 4 vols., 1935-63, London
Sieg, Siegling und Schulze *Toch. Gram.* *Tocharische Grammatik*, 1931, Göttingen
G. A. Grierson *Tōrwālī* *Tōrwālī, an Account of a Dardic Language of the Swat Kohistan, based on Materials*

		collected by Sir Aurel Stein, 1929, London
B. Srivastava		*Trade and Commerce in Ancient India*, 1968, Varanasi
W. Barthold	*Turkestan down &c.*	*Turkestan down to the Mongol Invasion*, 1928, London
F. W. Thomas and S. Konow		*Two Medieval Documents from Tun-Huang*, 1929, Oslo
P. Pelliot		*Un fragment du Suvarnaprabhāsasutra en Iranien Oriental* (*Étude Linguistique*, IV), 1913, Paris
K. Deva and V. Mishra		*Vaishali Excavations : 1950*, 1960, Vaiśali
J. Markwart	*Wehrot*	*Wehrot und Arang*, 1938, Leiden
F. Lüders		*Zur Geschichte und Geographie Ostturkestans*, 1922, Berlin

雑 誌 と 地 図

ASI	*Archaeological Survey of India*, Calcutta
BEFEO	*Bulletin de l'Ecole Français d'Extrême-Orient*, Paris and Hanoi
BSOAS	*Bulletin of the School of Oriental (and African) Studies*, Univ. of London
	Epigraphia Indica, and Record of the Archaeological Survey of India, Calcutta
G. J.	*Geographical Journal*, London
JA	*Journal Asiatique*, Paris
JRAS	*Journal of the Royal Asiatic Society*, London
SPAW	*Sitzungsberichte der Preussischen Akademie der Wissenschaft*, Berlin
	Transaction of the Royal Institute of British Architects, London
	T'oung-Pao『通報』, Leiden
ZDMG	*Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, Leipzig
AMS	United States Army Map Service, 1/1,000,000, Washington D. C.
GSGS	Geographical Section, General Staff, Published by War Office, 1/1,000,000
	Bartholomew's World Series, India, Pakistan and Ceylon, 1/4,000,000



『大唐西域記』玄奘紀行図
漢字表記は『西域記』の地名
片カナ表記は現地名
0 200 400 600km

索　　引

この索引は，注の項目から主として仏教用語・有名な固有名詞を拾い，漢字の音読の順に配列した。該当の本文・注ともに参照されたい。なお他の地名・人名は目次により検索されたい。ローマ数字は巻数を，アラビア数字は章・節を示す。

ア　行

カ　行

タ　行

ナ　行

ハ　行

マ　　行

ヤ　　行

ラ　　行

訳 者 紹 介

水谷真成（みずたにしんじょう）　大正6年朝鮮元山生。京都大学文学部卒。専攻　中国語学。名古屋大学文学部教授。主要論文「慧苑音義音韻考—資料の分析」『大谷大学年報』第11輯，「上中古の間における音韻史上の諸問題」『中国文化叢書』1（大修館），「梵語音を表わす漢字における声調の機能」『名古屋大学文学部二十周年記念論集』。現住所　京都市上京区智恵光院通り一条上ル

中国古典文学大系　全60巻

大唐西域記　第22巻

昭和46年11月27日　初版発行

定価 1600 円

訳者との申合せにより検印を省略いたします

訳　者　水　谷　真　成

東京都千代田区四番町4番地
発行者　下　中　邦　彦

発行所　郵便番号 102　東京都千代田区四番町4番地　振替・東京29639　株式会社　平　凡　社

落丁・乱丁本はお取替えいたします

印刷　東洋印刷株式会社
製本　株式会社石津製本所

0398-312220-7600

中国古典文学大系

全六十巻

既刊は巻数を白ぬきにしてあります

① 書経 易経(抄) 赤塚忠訳

❷ 春秋左氏伝 竹内照夫訳

❸ 論語 木村英一・鈴木喜一訳
孟子 藤堂明保・福島中郎訳
荀子 日原利国・竹岡八雄訳
礼記(抄) 竹内照夫訳

④ 老子 金谷治訳
荘子 倉石武四郎・関正郎訳
列子 福永光司訳
孫子 呉子 金谷治訳

❺ 韓非子 柿村峻訳
墨子(抄) 薮内清訳

⑥ 淮南子 沢谷昭次・戸川芳郎・木山英雄訳
説苑(抄) 飯倉照平訳

⑦ 戦国策 常石茂訳
国語(抄) 論衡(抄) 大滝一雄訳

❽ 抱朴子 本田済訳
列仙伝 神仙伝 沢田瑞穂訳
山海経 高馬三良訳

❾ 世説新語 森三樹三郎訳
顔氏家訓 宇都宮清吉訳

❿ 史記 上 野口定男・近藤光男・頼惟勤・吉田光邦訳
⓫ 中
⓬ 下 野口定男訳

⓭ 漢書・後漢書・三国志列伝選 本田済編訳

⓮ 資治通鑑選 頼惟勤・石川忠久編訳

⓯ 詩経・楚辞 目加田誠訳

⑯ 漢・魏・六朝詩集 伊藤正文編訳

⓱ 唐代詩集 上 田中克己・小野忍・小山正孝編訳
⓲ 下 前野直彬編訳

⑲ 宋・元・明・清詩集 前野直彬編訳

⓴ 宋代詞集 倉石武四郎編 倉石武四郎・須田禎一・田中謙二訳

㉑ 洛陽伽藍記 入矢義高訳
水経注(抄) 森鹿三・日比野丈夫訳

㉒ 大唐西域記 水谷真成訳

㉓ 漢・魏・六朝・唐・宋散文選 伊藤正文・一海知義編訳

- ㉔ 六朝・唐・宋小説選　前野直彬編訳
- ㉕ 宋・元・明通俗小説選　松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫訳
- ㉖㉗ 三国志演義 上 下　立間祥介訳
- ㉘㉙㉚ 水滸伝 上 中 下　駒田信二訳
- ㉛㉜ 西遊記 上 下　太田辰夫・鳥居久靖訳
- ㉝㉞㉟ 金瓶梅 上 中 下　小野忍・千田九一訳
- ㊱ 平妖伝　太田辰夫訳
- ㊲ 今古奇観 上　千田九一・駒田信二訳
- ㊳ 今古奇観 下　駒田信二訳
  (付)嬌紅記　伊藤漱平訳

- ㊴ 剪燈新話　剪燈余話　飯塚朗訳
  西湖佳話(抄)　内田道夫訳
  棠陰比事　駒田信二訳
- ㊵㊶ 聊斎志異 上 下　増田渉・松枝茂夫・常石茂訳
- ㊷ 閲微草堂筆記(抄)　子不語(抄)他　前野直彬訳
- ㊸ 儒林外史　稲田孝訳
- ㊹㊺㊻ 紅楼夢 上 中 下　伊藤漱平訳
- ㊼ 児女英雄伝(抄)　立間祥介訳
- ㊽ 三侠五義(抄)　鳥居久靖訳
- ㊾ 海上花列伝　太田辰夫訳

- ㊿ 官場現形記 上　入矢義高・石川賢作訳
- 51 官場現形記 下　入矢義高・石川賢作訳
  老残遊記　岡崎俊夫訳
  老残遊記続集　飯塚朗訳
- 52 53 戯曲集 上 下　田中謙二編
- 54 文学芸術論集　目加田誠編
- 55 近世随筆集　入矢義高編
- 56 記録文学集　松枝茂夫編
- 57 明末清初政治評論集　後藤基巳・山井湧編訳
- 58 清末民国初政治評論集　西順蔵・島田虔次編訳
- 59 歴代笑話選　松枝茂夫編訳
- 60 仏教文学集　入矢義高編